德川公繼宗七十年
祝賀記念

# 近世日本の儒學



徳川家達公爵照影

# 序

靜岳德川公は明治の初、特に　聖旨を奉じて德川宗家を繼承せられ、常に華冑界の首位に在りて、よく範を垂れ、又明治三十六年、貴族院議長に任ぜられ、三十年の久しき、明治・大正・昭和三代の間に於ける立法議政の事を主宰し、以て國家の隆運に貢獻せられ、或は日本赤十字社社長となり、或は恩賜財團濟生會會長となり、其の他諸種の育英救濟事業を董督し、世道人心を匡救啓導せらる。　而して吾が財團法人斯文會に對しては、早く會長の任に就かれ、孔夫子二

千四百年祭の擧行の如き、聖堂復興の事業の如き、將又儒道大會の開催の如き、孰れも皆公の力に是れ頼る。本會の今日ある、實に公の庇護提撕の賜と謂ふべし。是を以て曩に公の繼宗七十年を迎へらるゝや、本會は公と關係淺からざる松平頼壽伯、澁澤敬三子、犬橋新太郎氏、植村澄三郎氏、矢野恒太氏等諸賢と謀り、會員に於て「近世日本の儒學」なる一書を編纂撰述し、以て海嶽の恩眷に酬いんとす。蓋し德川氏三百年間、その昌平を致せる基礎は、實に當時教育思想の根幹たりし儒學に在り。而して之を闡明紹述することは、公の祖宗の功績を顯彰する所以なると共に、又實に現代日本の礎地を明確にする所以なるを信じたればなり。

今や編述漸く成り、剞劂功を急ぐ。近く將に之を公に獻ぜんとす。乃ち一言を題して所懷を敍べ、序と爲すと云爾。

昭和十四年孟夏

財團法人斯文會副會長　男爵　阪谷芳郎

# 徳川公爵と斯文會

服部宇之吉

吾が財團法人斯文會は社團法人斯文學會の事業を繼承し之を發展せしめたものである。抑〻斯文學會は明治十三年二月右大臣岩倉具視公が儒教に依つて堅實なる思想を養成し以て國基を鞏固ならしむるに資せんとて陸軍中將谷干城・文學博士重野安繹氏等に勸めて組織されたものである（日本儒學年表參照）。

當時　明治天皇五箇條の　御誓文に「智識ヲ世界ニ求メ」とあり又「舊來ノ陋習ヲ破リ」と仰せられた御趣意を穿き違へたものが有り、外國のものは何でも皆宜しい、日本のものは皆舊弊頑固であるといふので、舊弊頑固を一掃し文明開化を樹立しようとした。所謂舊弊頑固の中には確かに舊弊頑固のものもあつたが、國體を明徴にすべきものも亦た少くなかつた。又所謂文明開化の中には我が國體と相容れない、國民道德と一致しないものがあり、此等は嚴密なる檢討を經て然る後に取捨を決すべ

きものであつた。然るに左様なる檢討を行はずして一概に取捨せんとして我が國固有の道德も之を視ること猶弊履を捨つるが如く、名教將に地に拂はんとするを慨し、岩倉右大臣が谷・重野氏等に意を示し、其の意を奉じて時の學者其の他諸方面の人士を翕合して組織したものが斯文學會である。創立に際し、朝廷に於ても之に重きを置かせられ、翌十四年五月一品宮熾仁親王を會長に仰ぎ奉ることを許され、又學舍を經營することを聞こし召されて十ヶ年間毎年金二千四百圓餘を下賜せられたる外、麴町寳田町所在の官營建物を貸下げられ、發會式に當つては特別の御思召を以て別に資金として金一千圓を下附せられたる等、上の御保護の厚きものがあつた。

斯文學會は斯くの如く學校を經營し、人材を養成し、以て　聖恩に奉答せんと期して居つたが、耆宿年と共に凋落したるも後繼者養成の法も講じ難く、且多年の問題なりし名教に關する大題目は教育に關する　勅語の渙發と共に解決せられた。玆に人心稍〻緊張を缺くと同時に一方には不平等條約打破、治外法權の撤去等の問題に對し、我が國も歐米と同一の程度迄進み風俗習慣も一變したことを示さんとして鹿鳴館舞踏・假装行列・バザー等の流行となり、歐米心醉の風從前よりも却つて激しきを

加へた。此の間に處して斯文學會の老先生は實に孤軍奮鬪されたのである。
然し、後繼者を養成せざる斯文學會は其の運命風前の燈の如くであつた。此の際澁澤榮一氏は文部省に對し、聖堂を物置同然にして置くことは不都合であると責められたことがあつた。其れは多分明治二十四五年の頃と記憶する、或る會合の席上で、澁澤子は時の文部次官牧野伸顯氏に向つて云はれたことであつた。ところが文部省は澁澤氏に對し、財政の關係上手を付け難し、君の手に依つて若干の資金を調達し得るならば聖堂の保管を斯文學會に委託するも可なり、との言質を與へた。澁澤翁は退いて斯文學會の諸老に謀つたが、何等成案を得るところなく、事は其の儘停頓した。明治四十三四年の頃に至つて、斯文學會幹部に於て、斯文學會の財産を擧げて東京帝國大學に寄附し、文科大學内に儒學科の設定を請はんとするの議起り、斯文學會關係者及澁澤翁・金子子爵等を招き相談をしたところ、話が一向纏らずして散會し、寄附問題は自然消滅となつた。其の際に斯文學會と略ゞ目的を同じうする一つの新しき會を組織し、斯文學會の財産（神田區錦町所在の地所・同地上造營物及有價證券等）を擧げて之に寄附し、更に規模の擴張を圖り、大いに雄飛せんことを畫策した。右畫策に與り

たる者は主として東京在住の學者にして寄附行爲の改正案の作成等著々準備をした。主として此の畫策に參じたのは工藤一記・市村瓚次郎・安井小太郎・島田鈞一の諸君と余及他の有志諸氏であつた。之に關して第一に起つたのは會長選任の問題であつたが、中々選定難で久しく停滯の形に在つた。

大正五年、余が米國より歸朝して後であつた、長い間熟考協議した結果として、前文部大臣樞府顧問官小松原英太郎翁に新に創立さるべき斯文會會長の白羽の矢が立つた。人物といひ、學識といひ、更新すべき斯文會の會長として最も適當であると衆議一決し、將來斯文會の幹部たるべき主なるものは同氏を訪問して懇願したところ、快く引受けられたので、一同は安心して著々斯文會創立の準備に掛つた。其れには先づ第一に社團法人斯文學會の解散を決行せねばならぬ。然る處、誰が會員であるかすらも分らぬ狀態なので、止むを得ず新聞に廣告して總會を開催したが、二三人の出席があつたばかりで、解散は法の如く決行された。其處で斯文學會を中核とし更に東亞學術研究會・漢文學會・研經會をも併せて新しい財團法人斯文會が設立され、小松原氏會長と爲り、斯文學會の事業及財産を繼承して、活動を開始した。時に大正七年九月である。小松原會長は熱心に事に當り、三井・岩崎兩家

等へは自ら出掛けられて後援を懇望された。かやうにして斯文會は基礎漸次固くなり、翌八年二月始めて機關誌として斯文が發刊され更に其の九月には孔子祭典會を併せて斯文會祭典部と爲した。現に斯文會の中堅や幹部として活動してゐられる人々には此のやうな淺からぬ關係を持つ人が少くない（斯文六十年史參照）。而して、小松原氏は斯文會所有の地所家屋等を合算して委囑資金二十萬圓に達すると共に文部省より聖堂保管の委託を受けようと決心された際、翌八年十二月病の爲めに不歸の客となられたのは洵に惜しむべきことである。

此れは、後年に知り得たことであるが、小松原氏が熱心に事に當られたのには自ら別に理由があつたのである。それは曾つて余が國學院大學長在任中のときの事であつた。或日皇典講究所長江木千之氏等と會談の際、江木氏から樞密院内三四の同僚と話し合つた結果、今日の如く思想混亂・暴論跋扈の時に在つて深く且固く東洋固有の道德に立脚した思想を確立し以て世道人心を匡正せねばならぬ、それには皇典講究所及斯文會の如きものを確と掌握維持することが必要である、我々は此れに據つて國を救はねばならぬとかねて申し合せて居るといふ話があつた。余は之を聞いて小松原氏の斯文會に

對する熱誠も斯様な信念に本づくものであるかといふことを知つた。爾來此の事は誰にも話した事がないが、今此に始めて發表する。

斯くの如くして斯文會は折角得た名會長を失ひ、會員一同大いに憂慮した。會長後任を色々物色して見たが一長一短、中々其の人を得難い。殊に從來本會に關係の薄い方に急に賴んだのでは假令承諾を得るにしても果して熱心に事に當られるや否や、氣遣はれる。又、久しい關係を持つて居られる方は何れも忙しい方々で容易に承諾を得られさうにもない、此様に色々と苦心協議した結果、齒・德及本會に對する關係の上から樞密顧問官子爵清浦奎吾氏に御願しようといふことになつた、更に、もう一人別に此の方ならば最上と衆論一致して居る方があつたが、到底御引受けがあるまいといふので、清浦子爵に交渉することに決めた。そこで直ちに、余は斯文會會長問題について終始心配せられた男爵澁澤榮一翁の熱誠をこめた懇篤なる紹介狀を携へて斯文會を代表して（或は工藤一記氏と同行したやうにも思ふ）清浦子爵を訪問して懇願したところ、子爵は樞密顧問官として專心御上の爲め御奉公せねばならぬので、一切の會と關係することは出來ない、自分が今一つ丈け甚だ心苦しい乍ら引受け

て居る會があるが、自分がやめると會が潰れるといふので適當な人が見付かる迄引受けて居るやうな次第で、折角のこと乍ら御斷りする外はないといふことで謝絶された。其處で余は又澁澤男爵に相談を持込んだが、男爵も判斷に苦しまれ、暫く待つて呉れといふことであつた。ところが遂に徳川家達公を煩すことにしようといふことになり、澁澤翁から紹介狀を渡された。此の御方は前にもう一人これならば最上といふ方があるといつた其の御方である。徳川家との關係並々ならぬ澁澤男爵の紹介のことであるから徳川公爵は必ず御引受け下さるであらうと思つて喜び勇んで余は斯文會を代表して澁澤男爵の紹介狀を携へて御尋ねした。徳川公は我々の願を聽きとられ、澁澤男爵の紹介狀を御覽になつた。さて如何なる御返事があるかと氣が氣でなかつた。御待ち申して居ると、徳川公爵は口を開かれ、御趣意はよく分りました、早速御返事するとよいのだが何分最近に海外へ出張すべき爲め用務多端であるので、速答致し兼ねる、何れ海外出張から歸つた上で御返事をしますからそれ迄御待ち下さいといふ御返事であつた。我々は竊かに此の御返事ならば御歸りの後に御斷りになることはあるまいと信じて、喜んで引下つた。其の後余が華族會館で御目にかかつた時、余の方からは何も申さないの

に公爵閣下の方から先日のことは歸つたら確かと御返事しますと念を押された。我々はよき御返事を期待しつゝ待ち申上げたのであつた。軈て御歸朝になるや余を御呼びになつて先般約束の斯文會長を御引受けするとの御返事を賜つた。余等は感喜して引下り早速法の如く手續をして此に大正十一年三月徳川公爵は斯文會會長に御就任になつた。

公爵は蓋し父祖の大業を繼承し東洋道徳を宣明し以て皇運を扶翼し奉らんが爲め斯文會の精神と事業とに特に重きを置かれ我々の懇請を容れられたのである。爾來十數年會長として熱心に事を視られ、大正十二年關東大震火災に聖堂が炎上したのを衷心より痛み惜しまれ、之が復舊の爲めに心を勞せられたこと甚大であつた。其の功空しからずして聖堂も立派に復舊した。聖堂の復興は直接には復興期成會が之に當つたのであるが、然し、徳川公の聲望微りせば、復舊も中々困難であつたらう。公爵が復舊せられたる聖堂を中心として熱心に名教振作に御精勵になつて居られることは吾等をして感奮興起せしめ、人をして身を以て數千の會員を統制せられる威力を仰がしめずには措かぬ。余は斯文會創立以來近時迄十數年間に亙つて斯文會總務として徳川公爵閣下を御援け申上げたが、公の十年一

日の如き御精勵には事に當つて感佩を禁じ得なかつた。徳川公爵閣下が會長に就任されてより斯文會の遂行した事業は決して少いものでないが就中、過ぐる昭和十年、東京に日滿支其他諸國の學者名士を會聚せしめ、湯島聖堂落成を期して儒教大會を開いたことは徳川公の徳に依るものであり世道人心に益したること至大であつた。今や吾が斯文會は提くも、伏見宮殿下を總裁に推戴し奉り、徳川家達公爵閣下を會長に、徳川圀順公を副會長に仰ぎ會運彌〻盛ならんとするは國家のため慶賀すべきことでなければならぬ。吾等斯文會員たるもの、益〻其の國家社會に對する責務の重大なるの自覺に徹し、以て先人の功を發揚すべきである。

此の秋に當り徳川會長閣下が繼宗七十年を迎へられるに際し、公爵閣下の我が斯文會に對する深くして久しき御關係を述べて、會長閣下の御功業を拜し併せて御健勝を賀することとする。

# 例言

一　本書は斯文會會長德川家達公爵の繼宗七十年を祝賀せんが爲めに編纂せるものなり。

一　本書に收載せる論文は、主として斯文會會員の起草する所に係る。

一　本書の題簽は、斯文會副會長公爵德川圀順閣下の揮毫に係るものなり。

一　本書に挿入せる寫眞は、各執筆者の指定せるものの外、東京帝國大學史料編纂所及び文學博士高野辰之氏所藏のものを撮影せるものにして、之が選擇に就きては高野博士・史料編纂官補森克己氏の斡旋に負ふ所多し。附記して史料編纂所並びに兩氏に謝意を表す。

一　本書には別に「近世日本儒學史概說」並びに「儒學年表」を添ゆる豫定なりしも、總頁數意外に超過せる爲め、右二項目の揭載を見合はすることとせり。其他執筆者の都合に依り、一二項目を變更し又は割愛せるもの有り。讀者諒焉。

# 目次

## 諸家の學風・特色

## 江戸儒學の諸問題

# 總說

# 總論

井上哲次郎

## 一

徳川時代は我が日本に於いて儒教全盛の時代であつた。これは主として家康の政策にも依るけれども、併し餘り長い間佛教の勢力が非常に旺盛であつた反動も與つて居るやうに思はれる。恐らくは今後も徳川時代ほど儒教の旺盛となることはなからう。

徳川時代に勃興した儒教は舊儒教ではなくして、主として新儒教であつた。併し新儒教であつても、其の日本的色彩のなか〳〵濃厚であつたことを注意すべきである。それから尚ほ新儒教に就いて注意すべきことは、徳川時代以前約三百年間は新儒教の潜伏時代であつた。それから王政維新より今日に至るまでは儒教研究時代となつて、徳川時代とは餘程趣を異にして居るのである。それで儒教全

盛時代は德川十五代の期間で、嚴密に之れを云へば、二百六十五年間であつた。

## 二

儒敎は歷史的に古來いろ〳〵に區分されて居るけれども、之れを新・舊二派に分つて考察するのも一つの有力な見方であると思ふ。

儒敎が應神天皇十六年に百濟より輸入されて、政治・敎育・制度・文物其の他百般の事に影響するところがあつた。而して其れは少くも平安朝末期に至るまで繼續したのである。尤も或る程度までは鎌倉時代・南北朝時代まで其の餘勢はあつたであらうけれども、次第に微弱になつたやうに思はれる。此の千年以上に亙つて行はれた儒敎は舊儒敎であつた。何うも舊儒敎は精神的に佛敎ほど振はなかつた。推古帝の時代からずつと奈良朝・平安朝・鎌倉時代・室町時代を經て戰國時代に至るまで、佛敎の方が精神的にずつと優勢であつた。何うも舊儒敎は訓詁的となり、形式的となつて、佛敎に對抗し得るほど潑剌たる精神・氣力に於いて缺くるところがあつた。

ところが、鎌倉時代からして新儒敎が輸入された。新儒敎は主として內外の禪僧に依つて輸入された。我が國から入宋した名僧としては、先づ榮西・道元・聖一・能忍・紹明・俊芿等であつた。尤も

此の中俊芿は律宗の僧であつたが、禪を兼ねて學んで來た人である。それから支那の方から我が國に來朝した禪僧としては、先づ道隆・祖元・正念・楚俊・兀菴（ゴッタン）・一山等であつた。此の中兀菴は我が國に二十年間滯在して後支那に歸つたのであるけれども、其の他は皆な我が國に於いて他界したのである。此の外にも幾多の禪僧があるけれども、其れ等は一々此所に擧げないけれども、兎に角斯ういふ禪僧の中に宋學を修めて居つた者もあり、亦宋學の文獻を將來した者もあつて、次第次第に宋學が輸入された。宋學は卽ち新儒教である。尤も禪僧の中に、宋學を非難攻擊した人もあるけれども、亦大に宋學を喜び、之れを講じて居つた人もある。

さういふことで、段々宋學が賑々として約三百年間禪僧の間に傳はつて居つた。禪僧は固より佛教徒であるけれども、餘程儒者に接近したところがあつた。中には禪と儒と半々ぐらゐの人もあつたのである。之れを禪儒と云ふのである。此の禪僧の間に傳はつて居つた宋學が德川時代に大に發達するやうになつたので、德川時代の新儒教の淵源を辿つて行けば、何うしても鎌倉時代まで遡らなければならない。さういふわけであるからして、自分も嘗て「日本朱子學派之哲學」を著した際に、其の最後に附錄として其の概要を纒めて揭載した次第である。

三

舊儒教と新儒教との區別に就いて一言茲に辯じて置く必要がある。舊儒教といふものが元來精神的に振はないといふやうなものではなかつた。儒教の淵源に遡れば、孔子・曾子・子思・孟子といふやうな人に依つて起つたのであるから、なか／＼當時精神的に一異彩を放つて、而して永く後世に影響を及ぼし、而して今日に至つて居るやうな次第である。然しながら、漢・唐の時代に於いては、儒者は兎角先秦の根本儒教の經典を訓詁的に解釋し、其の意義を了解することを以て主となし、精神的に振はなくなつたのである。其のやうな儒教が初め日本に入つて來た。奈良朝・平安朝時代に於いて大學の教科書として採用したのは皆な漢・魏の古注であつた。それで其の學問は訓詁學であるがために、自ら形式的とならざるを得なかつた。

ところが佛教は後漢の明帝永平七年を以て支那に入つた。それより以前に支那に入つたといふ說はあるけれども、本式に入つたのは矢張り永平七年か八年か、まあ其の頃であつたと見るのが妥當であらう。ところが佛教はなか／＼偉大なる宗教で、而して又、それには哲學もある。殊に大乘佛教の哲學に至つては儒教の側に之れに匹敵するものが無い。それであるから、佛教渡來後約一千年間、之れ

を批判する者が無かつた。而して支那の有力な思索家はどちらかと云ふと佛教の側に嶄然頭角を現して來た。さういふやうなわけであるから、佛教の支那思想界に於ける影響の偉大なることは想像に餘りあるであらう。何うしても其れは其の儘で終るべきではない。其處で佛教思想を吸收し、それにまた、幾分道教思想も採用して、儒教の立場から哲理的に考察して、而して新なる學問の系統を開いたのが宋學であつた。其の代表者は五人で、周濂溪・程明道・程伊川・張横渠、それから最後に朱子、此の五人である。それから是れと學派は違つて居るけれども、朱子と同時代に現れた陸象山を忘れてはならない。

それで、周濂溪、二程子卽ち程明道・程伊川、それから朱子、陸象山、皆な佛教の影響を受けて居ることは前述の通りであるが、邵康節だの、張横渠も多分さうであらう。此の外司馬温公・蘇老泉・蘇東坡・蘇穎濱・王安石・歐陽修・胡安國・楊龜山・游定夫・張南軒・葉水心・眞西山、それから詩人の黄山谷・林和靖・劉後村・陸放翁も皆な佛教に對して理解ある者であつた。陸象山と同じ思想の系統に屬する明代の名儒王陽明も亦多大に佛教の影響を受けた人であつた。明代の學問を併せて云ふ時には之れを「宋明之理學」と稱するのである。元代は短くして學者も少ないから略するのであるが之れを加ふれば「宋元明之理學」と謂ふべきである。新儒教は總て其れ等を籠めて云ふのである。

新儒教は主として佛教の影響を受けて起つて來たがために、漢・唐の訓詁學に比べると、ずつと哲學的、思索的で、幾らか宗教的色彩も無いではない。之れを要するに新儒教は精神的に旺盛で、優に佛教に對抗するに足るのみならず、政治・經濟・教育等の點に於いては逈に佛教を淩駕するところがあつた。徳川時代に全盛を極めた儒教は主として此の新儒教であつたが、然し唯〻そのやうな輸入された新儒教に止つたわけではないのである。

四

徳川時代に勃興した儒教は新儒教であつた。卽ち宋・明の哲學であつた。尤も是れに刺戟されて起つた別系統の儒教もあつたけれども、まあ新儒教が其の大部分を占めて居つた。徳川時代の儒教が新儒教であつたからして、精神的になか〳〵旺盛となり、昔から日本に行はれて居つた訓詁學的の舊儒教とは此の點に於いて比較にならないと云つてよからう。而して玆に注意を怠つてならないのは、徳川時代の儒教は佛教徒、殊に禪僧が其の初めを爲して居ることである。前にも云つたやうに、禪僧が過去三百年間も宋學を兼修して來て居つた。禪僧であるから、佛教を主として居ることは云ふまでもないけれども、併し中には餘程儒教化して、儒者のやうな態度を執つて居つた者も少くない。徳川時

代の初め、京都に於いて先づ禪宗から儒教に轉向し、僧服を脫いで朱子學を講じたのは卽ち藤原惺窩であつた。あの人が京學の鼻祖となつた。惺窩の系統も大系統をなしたが、其の他、土佐から起つた南學も大系統をなした。南學の遠祖は南村梅軒であるけれども、普通谷時中を以て鼻祖となして居るが、谷時中は眞宗の僧であつた。然れども時中は天室といふ禪僧から朱子學を教はつたもので、而して時中自身も禪學を修めて居つたやうである。眞宗の僧としては慈沖と云つたけれども、僧服を脫いで儒者となつてから時中と稱することになつた。まあ德川時代の儒教の中で最も勢力のあつたのは朱子學であるが、其の朱子學は京學と南學との區別に拘らず、何れも僧侶（特に禪僧）の唱道によつて起つたものである。

時中の門より出でた山崎闇齋は初め比叡山に往つて居つたのであるが、後、何ういふわけか妙心寺に往き、薙髮して絕藏主と稱し、專ら禪學を修めて居つたからして彼も確かに禪林の出身である。

それから、德川時代の國學を開拓した有力な人物は契沖であつたが、契沖は大阪の圓珠菴に居つた眞言密教の僧であつた。然れども、契沖は最後まで僧服を脫がなかつたからして、國學の鼻祖とは云へないけれども、然し實際は鼻祖とも云ふべき地位に居つたのである。

さういふやうに、德川時代の儒教、其の他國學に至るまで餘程佛教との關係が深かつたけれども、

一旦儒教が勃興するや否や、佛教より一層優勢となり、殊に倫理・政治・經濟・教育其の他諸種の點に於いて最も深大なる影響を及ぼし、幾ど三百年の久しきに亙つて國民精神を鎔鑄陶冶し、而して餘程現實的方面に進展することを可能ならしめたことを疑はない。長い間佛教の勢力は儒教よりも旺盛で、而して其の影響するところ多大であつたが、併し稍〻厭世悲觀の情調を來した弊害も無いではなかつた。さういふ弊害を一掃して、我が國民をして積極的に健全なる立場より人生を考察せしめるやうに導いたのは儒教が與つて多大に力があつたのである。

## 五

德川時代の儒教の分派は何うなつて居つたかと云へば、先づ朱子學派が最も勢力を有して居つた。是れは幕府が林羅山を用ひて、而して其の羅山の子孫が最後まで文教の權を握り、殊に三代目の鳳岡から最後の學齋に至るまで凡そ十代引續いて大學頭であつた。而して林家は固より朱子學であり、而して幕府の創立した昌平黌は朱子學を標榜して居つた。（尤も幕末に至つて旗幟不鮮明となつたけれども。）そのために、各藩の學校中朱子學を奉ずるものが多かつた。であるから、朱子學は德川時代を通じて全國を風靡したと云つても差支へない。

朱子學の外、陽明學が江西から起つたけれども、是れに屬する學者は數に於いて迚も朱子學に比較することは出來なかつた。然しながら、割合に錚々たる人物の輩出したのは看過することが出來ない。或は壓迫された反動に出でた結果によるかも分らない。

朱子學及び陽明學に對して獨自の立場を執つて起つて來たのが古學派である。古學派の巨頭は三人であつた。山鹿素行・伊藤仁齋・荻生徂徠、此の三人であつたが、各〻其の特色があつた。素行は素行學派ともいふべき一派をなし、日本的色彩が最も濃厚であつた。仁齋の一派は仁齋學派とも云ふが、又、古義學派とも云ふ。素行より稍〻後れて起つたもので、而して素行とは又別系統をなして廣く學界の注目するところとなつた。徂徠は仁齋に刺戟されて起つたのであるが、併し仁齋と違つて、古文辭學を唱道し、盛んに仁齋を攻擊し、功利主義の一派をなし、經學文章を以て勝れて居つた。古學は淸朝の考證學によつて起つたのでなくして、全く日本固有の學派で、三派各〻特色があるけれども、三派共に活動主義であつて、宋學の寂靜主義と正反對になつて居る。

斯ういふ朱子學派、陽明學派、古學派が爭ひ起つた結果、折衷學派が發生して來た。折衷學派は何所にでもあるものであるが、德川時代に於いても各學派の長處を採つて其の立場とするといふやうなエクレクティックの一派である。併し折衷學派には二通りある。儒教內の折衷學派と、儒教外の折衷學

派と是れである。併し茲では姑く儒教内の折衷學派のみに限定して置かう。

それから稍〻德川時代の末期に際して考證學派が起つた。是れは主として淸朝の考證學に影響されたのであるけれども、併し徂徠學派の人だの、折衷學派の人だの、又間々朱子學派の人が大分考證學派と同じ傾向を有して居つたことを見逃してはならない。

それから又、獨立學派とも云ふべきものも確かに存在して居つた。これは前に擧げた學派に屬しないで、全く獨自の立場を執つて居つたものである。三浦梅園とか帆足萬里とか安藤昌益とか大原幽學とかいふやうな人々である。

それから少數ではあるけれども、幾らか老莊學派に屬する人々もあつたのである。別段道教といふやうな宗教が德川時代にあつたのではないけれども、只學問として老莊を喜び、老莊を以て終始した人が少數あつたことを忘るべきではない。

まあ德川時代の儒教の分派は大體如上のものに過ぎないと云つてよからう。

## 六

國學の一派の起つて來たのも德川時代であつた。其の鼻祖とも云ふべきは荷田春滿で、此れは其の

有名な「ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡をみるのみ人の道かは」といふ一首の歌によつて其の精神が窺はれるやうに、儒教だの佛教以外に國學の一派を開いたのである。德川時代に至るまで、長い間佛教が非常な勢力を有して居つたところが、德川時代になつては、是れに代つて儒教が海內を風靡するやうになつて來た。ところが、國學を研究する學校といふのは何所にも無いからして、何うしても日本に於いては日本の學問を攻究し、子弟を敎養しなければならぬといふ考を起し、京都にさういふ專門の國學研究の學校（卽ち今日の國學院大學の如きもの）を創立しようと努力したのであるけれども、幕府の許可を得ることが出來ないで、不遇に終つた人である。が併し其の門下から賀茂眞淵が出で、眞淵の門下から本居宣長が出で、其の又門下から平田篤胤が出で、平田篤胤の門下から多勢學者が出たけれども、篤胤の精神を最も能く承け繼いだのは大國隆正であつた。斯ういふ人々は德川時代に於いて、前述の如く國學の一派を爲した。併し是れは唯〻國學の一派といふのではなくして、又復古神道の一派であつた。復古神道の一派は我が日本の古典を研究し、日本精神を闡明し、皇國の道を高揚することに於いて多大の功績があつた。復古神道の一派は儒敎を排擊し、又批判し、それから佛教を攻擊することに於いて最も有力であつた。日本の思想界が餘り印度若しくは支那の思想に壓倒されることを遺憾として、復古神道の起つて來たのはなか〳〵意義あることであつた。復古神道のこ

とを詳しく述べる遑が無いからして、唯〻玆にはさういふ一派が徳川時代に勃興したことを述べて、其の儒・佛二教との關係を明かにして置きたいのである。

## 七

前述の復古神道一派は國民意識の覺醒と日本精神の發揚のために起つたと云つてよからう。ところが、そのやうな日本精神は儒教の中にも鬱然として勃興したことを見逃してはならない。換言すれば、儒教の日本化的傾向の非常に顯著であつたことを注意すべきである。

先づ第一に山鹿素行一派は儒教を離れはしないけれども、併し凡ゆる儒教學派の中に於いて日本精神の最も旺盛なもので、寧ろ日本精神の方が全體的には主要なるものとなつて居つた形跡があるのである。ところが其のやうな日本精神は山崎闇齋の一派にも多大にあつた。殊に其の垂加神道なるものは大系統を爲して、一種の宗教的影響を及ぼした。闇齋は朱子學を離れないけれども、併し單なる朱子學者ではなかつた。朱子學と神道とを結び付け敬及び理を以て神道を解釋したのであるが、是れ亦日本精神を以て第一義と爲したやうな形跡が看取せらるゝのである。

それから又、水戸學派といふものは朱子學を以て羽翼と爲し、日本精神を以て神髓骨子と爲して起

つて來たもので、之れを水戸神道と云つても差支へない。其の他蒲生君平であるとか、高山彥九郎であるとか、賴山陽であるとか、あゝいふやうな人々は皆な日本精神の持主であつた。

朱子學ばかりでなく陽明學派も餘程日本化したもので、支那の陽明學と同じやうに見てはならない。中江藤樹は夭折したので、未だ十分神道に傾倒しては居なかつたけれども、餘程其の傾向を有して居つた。熊澤蕃山・三輪執齋・川田雄琴などは深く神道に興味を抱き、神道と陽明學とを調和して說いたのである。

儒家神道は實は林羅山より始つて居るやうな次第で、德川時代の儒教の諸派は大部分日本化したものである。ところが元來朱子學だの陽明學だの、皆な多大に佛教の影響を受けて出來たものである。それに神道が加はつて、もう德川時代に於て此の三者は餘程融合調和して、一種特色ある東洋文化を產出した。是れがあつたからして、明治以後西洋文化を攝り入れて、此の東洋文化と融合調和し、打つて一丸と爲すことが出來るやうになつた次第である。斯ういふ點から考へてみるといふと、德川時代の儒教は文化史上極めて重大なる役割を演じ、隨つて又重大なる意義を有するもので、今後學者の決して研究を怠るべからざるものと思ふ。

## 八

最後に、明治以後の學者の執るべき態度に就いて一言附け加へて置きたい。

明治以後は西洋文化が輸入され、歐米の學術が研究されて、時勢一變して來たので、德川時代の學者の遣り方を其の儘受け繼ぐことが出來ない。德川時代の學者も若し明治以後に生れたならば、必ず其の研究の仕方を變へたであらう。幕末の學者の中に於いては斯ういふ考があつた。道德は東洋の道德が勝れて居る。併し物理、機械の學問は何うしても西洋に據らなければならない。殊に佐久間象山だの横井小楠だの、さういふ代表的學者の見解は其處にあつた。さういふ考は全然間違つて居るのではなくして、今日に至つても餘程さういふ所があるのである。然しながら、あの人等は皆な西洋の哲學を知らなかつた。カントだのヘーゲルだの、あゝいふ人の說いた倫理は決して低級なものではなかつた。佐久間象山だの横井小楠がもう二十年も生きて居つたならば、大分西洋の哲學思想を採り入れることが出來たであらうが、何うも未だ其處まで行かないうちに（象山は元治元年、小楠は明治二年）に刺客の爲めに殺されてしまつた。然しながら大體西洋の長ずる所は自然科學、功利主義等廣く云へば物質文化である。それで、東洋の文化と西洋の文化とを融合調和して、打つて一丸と爲すこと

は明治以後の學者に課せられたる自然の任務である。

徳川時代の學者の中には或る程度まで歐米の學術を修めた人もあつたけれども、明治以後の學者の研究範圍はずつと擴大されて、英佛獨伊等現代の言語文章に精通し、更に希臘羅甸等の古文獻にも及ばなければならない。それ故に研究の困難もなか／＼多い。然しながら廣く世界の衆知識を集めて、日本精神を以て之れを總合し、之れを統制し、最高最上の結論を抽出し、前古未曾有の新文化を創造することに參加するやうになつて居るのは又此上無い日本の學者の光榮と云はなければならない。ところが、世の學者の大部分は徳川時代の儒教を割合に研究するの熱心を有して居らないやうである。是れは非常な間違で、徳川時代の儒教は貴重なる先哲の精神的遺産と云つてよからう。そのやうな貴重な先哲の精神的遺産を度外視して何うして東西文化の融合調和が出來ようか、思はざるの甚しきものである。然し唯〻徳川時代の儒教のみを研究して、歐米の學術を度外視する者は時勢の變化を知らざるもので頑冥固陋と謂ふより外ない。けれども又先哲の精神的遺産を放棄して顧みないといふやうな、取返しの付かない大なる過失を爲すのは支那の國民黨の如きものである。

之れを要するに、先哲の精神的遺産を受け繼いで、而して之れを西洋文化と融合調和せしめ、更に一層超上して、之れより以上の高度の文化を創造しなければならない。今や、さういふ重大なる千古

未曾有の非常時機に際會して居るのであるから、最後に此の事を力說して廣く世の學者の注意を喚起したいと思ふ次第である。

（昭和一三、八、二九）

# 徳川幕府と儒學



家康天海對座之圖（寛永寺塔頭青龍院藏）

觀用教戒

釋迦孔子之道專慈悲要仁愛勸善懲惡眞若車兩輪最可篤恭敬者也然學佛道者泥經錄之說離君遺親出家遁世而欲得其道如此則世將至悉亂五倫是可恐之甚也學儒道者泥經傳之言祭或常食用禽獸是以不厭害萬物之生如此則世將至悉不仁而如夷狄之風俗是可恐之甚也學儒佛者不可失其本矣

内大臣綱吉

德川綱吉筆蹟

門積德之基學者之先務也凡十六章

子曰學而時習之不亦說乎

說悅

同

學之爲言效也人性皆善而

常憲院本論語

# 家康と儒學

山口察常

## 一

我が國に儒教が傳はつたのは、言ふまでもなく、應神天皇十五年百濟の阿直岐が來朝し、皇太子菟道稚郎子が之を師として經典を學びたまふことに始まつて居るが、それ以來王仁・段楊爾等の來朝があり、次いで推古天皇の時、直接隋に使を遣はされ、彼我往來の端を啓き、續いて遣唐使・留學生等の入唐により、諸般の文物と共に儒教の書籍が傳來せられ、學校の組織學官の制定となり、隨つて幾多の碩學・詞家を出し、駸々として文運の進展を見た。しかしながら概して之を言へば、儒教の學問的の發達ではなく、多くは詩賦文章の盛行であつた。是れ全く彼の隋唐の趨向に倣つたゆゑで、當時彼にあつても、經義・經說の上には、特に著しいものもなく、獨り詩文のみが持囃されたのであ

る。那波魯堂の學問源流に、

その頃の學問は、專ら詩文のことのみ行はれて、たま〳〵行事の上に就て稱すべきことと見ゆるも、大抵は其の人の資質の宜しき故にして、學問工夫の上より成就したるにもあらず。唯專ら詩賦文章行はれたり。經學と云ふも、或は唐孔頴達の疏十三經のみ。又或は皇侃の疏の類なり云云。

とあるは事實と見るべきである。而してこの學問文章に從ふ者は、公卿大夫の流で、而も多くは專ら文藝を好み、經學の方面は菅・江・中・淸等諸家の專業となり、武人士庶の如きは絕えて之に與らなかつたのである。是等專家に於ても唯漢唐訓詁を墨守して之を傳授するのみで、深く經義を探り、實踐に之を著はすが如きことは、極めて稀であつた。

政權一たび武門に落ち、また文事の見るべきもの少く、その政道の上に質實剛健の風は絕無ではなかつたが、それが儒敎本來の意義から出たものではなく、却て佛敎殊に禪に負ふ所が多い有樣であつた。適ま我が國へ流傳せられた程朱性理の學も、專ら禪刹の間に攻究せられ、更に武門爭奪を事とする世となつては、海內文學の業を擧げて、全く緇林に委せざることとなつた。勿論斯かる間に於ても、武人にして尙よく學問敎育の事に心を傾けた者も無いではない。例へば北條實時の金澤文庫を建て、上杉憲實の足利學校を再興せるが如き、又足利義滿が屢〻四書新註を講ぜしめたこと、或

は大内義隆が多く經書を印行したことなどである。

## 二

德川家康はこの戰亂の眞最中、天文十一年を以て三河岡崎に生れたのである。而もその爭奪の犧牲として、僅に三歳にして生母と別れ、六歳にして父廣忠の許を去つて、今川氏に身を寄せることとなつた。斯くて十幾年を駿府に送つたのであるが、この間に如何なる修養を積んだものか明らかには知り難い。本多忠勝聞書に、

大君御意に、我若年の時駿河にありし時、物語坊主の三哲と云ふ者が言ひたるを聞つるに、三要三切といふことあり。(中略)我幼き心に銘して聞覺えたり。(德川實紀引)

とあれば、是等の僧徒がお相手として、道藝を敎へたものであらう。又元來今川氏は、その中興たる了俊が文武兼備の人であつた爲、一藩の風儀が自ら他と異なる所があつたといへば、家康が不知不識この美風良俗に感化を受けたものであらう。併しながら家康と儒學との關係に就いては、殆んど知ることが出來ない。卜齋記に、

君御若年の程より軍陣の間に人と成らせたまひ、櫛風沐雨の勞をかさね、大小の戰幾度といふこ

とを知らざれば、讀書講文の暇などおはしますべきにあらず。またく馬上をもて天下を得たまひしこと、もとより生知神聖の御性質なれば、馬上をもて治むべからざるの道理を、とくより御會得ましく〳〵て、常に聖賢の道を御尊信ありて、おほよそ天下國家を治め、人の人たる道を行はんとならば、この外に道あるべからずとありて、御治世のはじめより、しば〳〵文道の御世話共ありける云云。（徳川實紀引）

とある如く、固より生得のすぐれて居た爲でもあらうが、又既に幼少の時から、その隨從者の中に然るべき具眼の士があつて、よく之を啓沃したものと思はれる。

その好學の事實の文獻に見えて居るのは、文祿二年家康五十二歳の時からである。卽ち彼が當時宋學を治め、只管實踐に力めて世に知られた藤原惺窩を江戶に招き、貞觀政要を講述せしめたことである。これからその七十五歳の薨去まで、二十餘年の間絕えず自ら道を求めると共に、廣く政事の上に之を應用するに努め、よく文治の實を擧げ得たのである。徳川氏三百年昌平の基は、實にこの家康の好學心に本づいて居るといふも過言ではない。今その好學の事實に就き、聊か類を分けて敍述してみよう。

家康好學の事實は、之を分けて、一、自らの講學　二、儒者の起用　三、學問の奬勵　四、書籍の印行　五、古書の書寫等とすることが出來る。

先づ自らの講學に就いては、既に述べた如く、まだ關東の一諸侯たる時に、藤原惺窩を迎へて講義を聞いたことを始め、その後折にふれて之を怠らなかつた。例へば慶長九年舟橋秀賢に新古兩注の異同を問ひしが如き、同十年林羅山を召して、光武等のことを諮ひしが如き、同十七年羅山と湯武放伐の事を論じたるが如き、同十八年以後常に羅山をして論語を講ぜしめたるが如き、一々枚擧し難いがその道を求むるに汲々たりし有樣を知ることが出來る。然して彼は眞に道を求める爲に講學に從ひ、政事に過なからしめんが爲に書籍に親しんだので、その講義せしめた書目、愛好した典籍を見ても、その意が那邊にあつたかを知らしめる。その愛好の書物としては、論語・中庸・史記・漢書・六韜三略・貞觀政要・延喜式・東鑑等であつたことは、又卜齋記に見えて居る所である。隨つて詩歌文章の如きは、殆んど之を好まなかつた。後藤由緒附錄に、

詩歌などの末技は、もとより御好もおはしまさねば、ことさら作り出でたまふべくもあらず（德

川實紀引）

とあり、學問の上でも概して浮華を退け、實學を旨としたのである。是れ固よりその資質と幼時の習慣との然らしめたものであらうが、また早く宋學に志した影響であらう。

次に儒者の起用に就いては、當時文筆を以て諸侯に事へ、その用を便じたものは、大概緇林の徒であつて、家康も亦多く之を召用した。卽ち承兌・三要・天海・梵舜等がそれである。然るに藤原惺窩、林羅山に道を問ひ、遂に羅山を起用して、獨り學問の上のみならず、幕政の機務に與らしめたことは、漸く學事を緇林の手から切り放して、所謂儒者たる獨自の面目を明らかにしたものである。羅山の孫林信篤に至り、初めて蓄髮したが、その萌芽は既に惺窩、羅山にあつたのである。藤原惺窩は初め佛門に入り相國寺の塔中林光院の主となつたが、後その非を悟つて儒に歸し、專ら宋學を以て人を導き、王朝時代の學風を一變した。荻生徂徠の言に、

有₂惺窩氏₁而後人人言、則稱₂天語₁聖。（與都三近書、先哲叢談引）

とあるのは、蓋し當つて居る。家康は夙に惺窩の學識を知り、或は之を江戶に迎へ、或は之を伏見に招いて、詳に道を聞いた。後更に之を重用しようとしたが、遂に果されなかつた。

林羅山が初めて家康に謁したのは、慶長十四年のことで、家康六十四歲、羅山二十三歲の時であ

る。これから頗る重用せられ、家康の晩年まで、概ねその左右に侍して顧問に答へた。江戸幕府の初めに當り、諸制度諸儀式の制定最も愼重を要するものがあつたが、羅山は殆んど常に之に參畫して居た。次いで羅山の弟永喜も亦家康に見え、又學問博洽を以て聞えたが、羅山に先立つて歿した。

惟ふにこの羅山を起用したことは、かの源賴朝が大江廣元を信任したことに比すべく、又漢の文帝の賈誼を用ひ、武帝の董仲舒に任じたことにも比すべきもので、而も是等の何れよりも後代への影響が著しいと見られるのである。先づその一としては幕政三百年、我が國の學問なり敎育なりの基礎が茲に築かれ、時に消長はあつたとしても、從來の宋學が所謂官學として終始したことである。その一としては羅山の後繼者が大學頭に任ぜられ、學事を總攬する地位に上り、寺門僧格を離れて、學者としての獨自の體面を保ち得たことである。隨つて諸藩に於ても學者を擢用したので、諸方面から漸次碩學鴻儒が輩出するに至つたことである。故にこの羅山起用の意義は、獨り林家一統の榮たるのみではなかつたのである。

四

家康が自ら學問を怠らず、又學者を重用したことが一般に向學の氣風を作つたことは爭はれない事

實であるが、又機會ある毎に學事を奬勵し、又學校設立のことにも心を用ひたものである。本多忠勝聞書に見えたる、

われ儒生をして經籍を讀ましめて聞くに、おほよそ天下の主たらんものは、四書の理に通ぜねばかなはぬことなり。もし全部知ることかなはずば、よく〳〵孟子の一書を味ひ知るべきなり。（德川實紀引）

とあるは、諸侯に對して講書の要を說いたものとも思はれる。されば慶長十七年には、廣く公卿に沙汰して學文に向はしめたことが言諸卿記に見え、又從來五山塔頭に給して居た知行を增減して、學者に學文料を給したことが本光國師日記に見えて居る。

又かの由緖深き足利學校が、關白秀次の爲に舊藏の珍籍多く京都に移されたことを遺憾とし、悉く之を復舊せしめて、學校の再興に力を盡したこと、慶長六年伏見に初めて學校を設け、僧三要を以てその敎授となしたこと、又同じく十九年に林羅山等が京師に學校創設の議を建つるや、直に之を允許し、羅山をしてその敎授たらしめんとしたこと等數へ來れば學事奬勵の事實も亦決して少くない。後年德川義直が聖堂を設けたのも、實は家康の遺志を繼いだものと謂はれる。近藤正齋が、その右文故事の中に、

此に由て是を見れば、神君以來崇文の一事、倶に宗藩に旁通して、遂に文明の洪基を贊成せられ、後來闔國學校を興し、經傳を刊布して、天下の人をして君に忠に親に孝ある道を講明せしめ、文明熙皡の輿を蒙る事を得るものは、これ皆神範聖模の馴致する處なり。豈に感發せざるべけんや。

と述べて居るのは、必ずしも溢美の言ではない。

## 五

次に又學問の奬勵と共に、その普及に就いて盡力したことは、多くの圖書の刊行を命じた事實によつても知られるのである。當時文祿の役に於て朝鮮から得た所の木活字があり、之に刺戟されて、我が國でも所謂一字版なるものが漸く盛んになり、又銅字活版も行はれたので、圖書刊行の上には、少からぬ便宜があつたのである。家康の命により刊行せられた書目は、大約次の如きものである。

一、孔子家語四冊（木活字、三要の跋あり）

一、三略一冊（同上）

一、六韜二冊（同上）

一、東鑑五十一冊（木活字、承兌の跋あり）

一、周易（王弼住、陸徳明音義）六册（同上）

一、帝鑑圖説六册（同上）

一、武經七書（木活字、三要の跋あり）

一、群書治要（銅活字、崇傳主として之に與る）

是等の開板に就いては、家康自ら最も心を用ひて之が完成に努めしめたもので、殊に群書治要の刊行については、元和二年即ちその薨去の年の正月、その計畫を命じ、その二月病中にも拘らず、校舍には五山の僧を用ふべきを自ら指圖し、いよ〳〵印刷に着手することとなるや、特にその爲の法度五箇條を定め、本多上野介等を總裁に任じ、その事を督せしめたのである。近藤正齋が

この群書治要板行等のことは、御病中の御世話なり。尋常好書の者と雖も、企て及ぶべからざる處に、神君の典籍に御心を盡させたまひし御事、感歎に餘りあり、後學最も欽仰すべし。（右文故事）

と讃稱して居るのは當然なことで、學者が終焉まで自著の稿本に筆を加へる心境に比すべきものと思ふ。唯惜しいことには、この刊行を見たのが同年五月下旬で、家康薨去に後るゝこと一箇月餘であつたことである。

上述の圖書刊行事業と共に、家康が最も心を用ひたのは、古書の蒐集並に書寫のことである。駿府

記に

應仁よりこのかた百餘年騷亂打つゞき、天下の書籍こと〴〵く散佚せしを御歎きあつて、遍く古書を購求せしめらる。(德川實紀引)

といひ、當時各方面から家康に獻じた書目を陳ねて居る。そのうち特に儒學なり漢文なりに關するものを拾へば、金地院崇傳の本朝文粹、相國寺良西堂の左氏傳・齊民要術、圓光寺閑室(卽ち三要)遺物として黃氏日抄等がある。又圖書の抄寫に就いては、群書治要の開板以前、之が謄寫を鎌倉五山の僧徒に命じたことが、本光國師日記に見え、又駿府記にも仙洞御所御藏の古書を始め、公卿諸家に傳ふる古記錄を抄寫せしめたことが見えて居る。卽ち羅山及び崇傳をその總裁となし、五山能書の僧十人に命じ、京都南禪寺に於て寫書の事に從はしめたのである。この時抄寫した書籍は、舊事記・古事記・日本後記を始め、本朝續文粹・菅家文集等數十種の多きに上つて居る。この古書謄寫の事業に就いても、頗る意を用ひたことは、薨去の前々年卽ち慶長十九年十月に初めて之を命じ、その翌元和元年正月、更にその速成を促したことに由つても知られるのである。同年三月その完成の報告を得て居るが、本邦古記錄の今に傳はるに就いては、極めて重要な事業であつたことはいふまでもない。駿府記に、

これ等の書籍その頃までは、家々にひめ置くのみにて、世の人書名をだに記すものなかりしが、この時新寫ありしにより、公武の規法もこれ等に根據し撰定せられ、後々には世上にもうつし傳へ、今の世に至りても國書をよむもの、本邦古今の治亂盛衰を考へ、制度典章の沿革せしさまを伺ひ知る便を得しは、全く當時好文の御餘澤による所なり。かしこみてもなほ餘ある御事にぞ。

(徳川實紀引)

と記して居る。

然して是等の圖書を襲藏する爲に、早く江戸城内に文庫を建設した。卽ち慶長七年富士見の亭に建てられた富士見文庫がそれである。後紅葉山に移して之を紅葉山文庫と稱した。その所藏の圖書は、漢籍を主とし、經史子集附存の五部に分ち、次々に增益したものであるが、その數實に六萬六千八百二十一册の多きに及んだと謂はれて居る。今の內閣文庫がその後である。

## 六

古來國を治め人を導くのに文武兩道相待つの要あることは、內外史實の證明する所で、その何れかに偏した場合には、必ず平和を保ち得ない。家康はもとよりの智謀遠略の名將であつたと共に、又文

治經綸の偉材であつた。たとへその晩年まで全く干戈を戢めて、雍和昌平の世を見るに至らなかつたとはいへ、後の三百年海内静謐の基は、實に此に固められたのである。彼が遠く我が邦の典禮制度を汲むと同時に、厚く孔孟教學の精神を取つて、治道の本と爲したことは、實に德川氏全時代を通じてその施政の根柢となつたものである。殊に家康が宋學を用ひ、その學者を擧用したことが極めて堅固な基礎を置いたものと見られる。いふまでもなく孔孟の精神は、漢唐の經學により幾分か歪んだ嫌があつたが、周張程朱諸子の出現によつて、その復活是正を見ることが出來たのである。而してそれが我が國に傳はり、五山僧徒の許に在つて、研究もされ實踐もされたのであるが、藤原惺窩が斷然佛門を出で、斯の學を以て立つこととなり、漸く緇林の手を離れる前提となり、家康が之を採用した所から、獨り宋學のみならず、學問全般が僧徒から獨立することとなり、士人教養の上に大なる變化をなしたのである。

家康自身の人となりが、最も宋學の趣旨と合致して居た故でもあらうが、また程朱の說いた所、行つた所が、家康其人に薫化を及ぼしたことも決して少くはなかつた。かの有名な遺訓なるものを見ても、それが全く儒教の精神から迸り出たものであることは、何人も否定し難い所である。卽ちその遺訓は

人の一生は重荷を負ふて遠き路を行くが如し、急ぐべからず。不自由を常とおもへば不足なし。心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基。怒は敵とおもへ。勝つ事ばかり知りて負くることを知らざれば害其の身に至る。おのれを責めて人をせむるな。及ばざるは過ぎたるに勝れり。

といふので、慶長八年正月十五日に書かれて居る。この遺訓を讀めば、一句一句が謙虚自ら持し、易に居て命を俟ち、堅忍持久、道を樂しむ底の儒士の言である。これ蓋し彼自らの體驗から發した言葉であると共に、如何に孔孟の精神を咀嚼玩味した上に、初めて言はるべき訓誡である。

聞く所によれば往年この遺訓を和田垣博士が英譯されたのが、一和蘭婦人の手に入り、譯者たる同博士に遙々感謝の辭を寄せ、且つ曰く。

全く高尙なる思想は、世界到る處に歡迎せらるものなること、至善は山を越え、海を渡りて、如何なる地にも達し申すべく、又人は偉人と交るに於ては、假令その爲人に親炙せずとも、相感應するものなるを示す證左に有之候。

とまで激賞したとのことである。吾人は家康の人となりを思ふと共に、この遺訓を想ひ、この遺訓を誦すると共に、穩健中正なる儒敎思想を思ふものである。

# 綱吉と儒學

加藤虎之亮

## 一

徳川五代將軍綱吉は、三代將軍家光の第四子で、四代將軍家綱の異母弟である。母は本庄宗正の女、從一位桂昌院殿と呼ぶ。正保三年（皇紀二三〇六）正月八日江戸城に生る。幼名は徳松丸。慶安四年（二三一一）四月、美濃・近江・信濃・駿河・甲斐・上野等の地十五萬石を賜はる。承應二年（二三一三）元服。正三位・右近衞中將に任ぜらる。寛文元年（二三二一）十萬石を增し、上州館林を居城とし、十二月參議に任ぜられ、右中將は元のまゝである。延寶八年（二三四〇）五月六日、家綱が大病に罹り、子がなかつたので、俄に迎へられて世嗣となり、七日從二位に敍し、權大納言に任ぜらる。翌日家綱薨じ、八月二十三日、征夷大將軍に拜せられ、内大臣に任じ、右近衞大將・右馬寮御監を兼ね、正二位に敍し、淳和・奬學

兩院の別當・源氏の長者に補せられ、牛車を聽され、隨身兵仗を賜はつた。寶永五年（二三六八）麻疹を病み、六年正月九日疾は癒えたが、十日暴かに正寢で薨じた。年六十四。二十八日寛永寺に葬る。二月十六日勅して常憲院殿と謚し、正一位太政大臣を贈られた。將軍職に在ること二十八年、其の政績に就いては、議すべき點がないでもないが、其の儒學を奬勵されたる功績は特筆大書せらるべきである。

## 二

公の生れたる正保三年は、元和偃武（二二七五）より三十一年後である。家康の奬勵したる文教は漸く全國的に普及し來り、朝廷に於かせられては、後光明天皇學問を好み、漢唐の古注を用ゐたる先蹤を破り、程朱の新注を採用せられ、毎日午・未の時（午前十一時頃―午後三時頃）論語を復習なされた。幕府に在つては、家光が林信勝をして四書を講ぜしめ、近臣に聽講させるなど、儒學に力を注ぎ、執政井伊直孝・酒井忠勝・阿部忠秋等は皆儒臣を重用し、道を問ひ教を請うた。諸侯に在つては、尾州侯義直は堀正意を登用し、紀州侯頼宣は那波道圓を、水戸侯頼房は人見卜幽を重用して共に儒學を崇び、會津の保科正之・備前の池田光政・加賀の前田綱紀等は、共に儒風を扇いで一藩の教化に努めた。京都には江村專

齋・三宅寄齋・松永昌三等あり、或は至尊に進講し、或は搢紳に教授した。土佐には谷時中あり、南學を開いて、野中兼山・小倉三省・山崎闇齋等を薫陶し、近江には中江藤樹あり、熊澤伯繼を育成した。其の他山鹿素行・木下順庵・宇都宮遯庵・貝原益軒等の諸儒は、或は口に或は筆に、斯文を宣揚した。此の如く奎運漸く盛ならんとした時に、常憲公は生誕せられたのである。而して自身は如何なる教養を積まれたるか。

## 三

公六歳の時父家光を喪つたが、生母桂昌院殿は家光の遺教を遵奉して、義方を訓へた。常憲院殿御實紀卷一に、

さても此公いまだ御幼年にて、御父君の御膝下におはしけるほど、公達の中にすぐれて聰敏のきざしおはしければ、大猷院殿（○家光の謚）御めのとだちへ仰られしは、この子夙慧衆人にすぐれたり、よくせずば才名のために生涯の禍を引出すべし。あやまちてもさし過たることとして、兒達に禮を失ひ、にくみを受しむべからず。何事も謙遜をむねと輔導すべしと常々沙汰し給ひ、またある時は、御母桂昌院殿にむかはせ給ひ、吾幼年より武藝をこのみ、かつ少壯より大任をうけて、讀書

のいとまなかりければ、文藝に於ては力をもいれず、今にいたりまゝ悔る事あり。この兒いとさとく、生先心にくくみゆ。善師をえらび、今より書籍を學ばせ、聖賢の道に心を用ひしめば、ゆく〳〵ものゝ用に立たん物ぞ。汝かまへて心いれ、文よませよと宣ひしかば、母君も涙うかめてかしこみ給ひ、御幼稚のほどより、何事よりも先文よむ道をすゝめ給ひしかば、御心を經典にはげまし給ひ、ふかく伊洛の書に御精神をそめ給ひ、御病臥といへども書卷をはなち給はず、儒臣を接近し聖道を討論し給ふ事はさらにもいはず。御みづからも經書を講演し、内外の臣等に拜聽せしめらる。其度々には、御上下をめし、御劒をも遠くさけ給ひ、先聖を敬禮し給ふ。

とあるので其の一斑が知られる。

## 四

公は將軍職に就いてからも、益〻經學を奬勵された。大命を拜してから僅四十八日にして、儒臣林信篤・人見宜卿を招き經書を討論させ、爾後恆例として毎月兩三度づつ行はしめた。延寶八年九月十一日の事である。同十七日には、信篤に大學を進講せしめ、これも常例として毎月兩三度づつ行ふこととした。翌々年天和二年（二三四二）正月元日始めて讀書初の式を行ひ、柳澤保明に大學三綱領を講ぜし

め、年々の常規と定められた。七月加賀藩の儒士木下順庵を聘して初見の禮を執つた。貞享二年（二三四五）四月信篤に詩經を進講せしめ、爾後毎月三四次常例とした。元祿元年（二三四八）十一月信篤の邸に臨み孔廟を拜し、信篤をして尙書の堯典篇を進講させた。三年十月には、信篤に論語を講ぜしめ、ありあふ輩に陪聽をゆるし、また書經をも講ぜしめた。四年正月には、林大學頭信篤の講筵初があつた。此等は公自身が聽聞する常例又は臨時に於ける進講の一端を擧げたのであるが、更に諸臣にも學問を奬勵した。即ち三年九月二十一日、高家・寺社奉行・奏者番・鴈間詰・三番頭並に布衣以上諸有司を招き、文武並用するは政道の定理なれば、今後益々文道に志し、學問を勵むべき旨を面命し、信篤をして講筵を開かしむる故、一同に聽聞すべしと命令し、信篤に論語を講ぜしめ、老臣以下盡く聽講させた。これが月次講釋の始である。又火消役・持筒先手頭・大番・納戶の組頭に令して、信篤の講義を聽かしめた類で全貌を推すことが出來よう。公は又親らも講義をして人々に聽かせた。三年九月公は牧野成貞の邸に臨み、大學を講じて老臣等に聽かしめ、聽講の輩には御板四書を賜ひ、爾後毎月一回恆例とした。是が將軍講書の始である。五年六月十六日に、先日より近臣の爲に講ぜられし大學の竟宴行はれ、二十一日に、中庸の竟宴行はれたことが御實紀に見えてをるから、前とは別に學・庸を講義されたものと見える。同年三月には西本願寺門跡光常・新門跡光澄に大學の三綱領を講說された。

是が僧徒の爲の將軍講書の始である。六月には請はるゝまゝに、尾張の光友・綱誠・紀伊の光貞・綱敎・甲府の綱豐・水戶の綱條・加賀の綱紀等のために大學を講ぜられた。是が親藩に對する將軍講書の始である。又井伊直該はじめ、譜第・高家の爲に論語の學而篇を講ぜられた。是が譜第・高家に對する將軍講書の始である。六年二月には兼ねての願により、國持はじめ諸大名百五十一人のために中庸を講じた。是が國主・城主のための將軍講書の始である。三月參向の敕使柳原前大納言資廉卿外三人のために大學の三綱領を講じた。是が公卿に對する將軍講書の始である。其の他孔廟・寬永寺・增上寺を始め執政・諸藩の邸に臨むこと頻繁なりしが、其の都度必ず講義を聽かせた。殊に常憲院殿御實紀附錄卷中に載せたる、

御みづからの御講書は、四子の書はじめ、とり〳〵なりしうちに、周易は元祿六年四月廿一日より講筵開かれ、月每に六囘と定められ、日光門主はじめ、家門・國持・譜第の諸大名・旗本、その他參向の公卿及び諸寺の高僧・碩德・社人・山伏、または陪臣のともがらまで、いさゝか好學の志ある者は、皆ねがひのまゝに拜聽せしめられ、八年をへて、十三年の十一月廿一日まで、二百四十座にて御卒業あり。その日には竟宴行はれ、老臣はじめその事にあづかりし儒臣等賞賜行はれ、林大學頭信篤は殊に加秩給はりけり。其頃のことかきしものゝうちに、博士はむかしより

貧しきもの丶ためしにおもひたるに、今の世には、かうやうの者の時を得たるは、かしこき御代のほどあらはれぬとか。げに此年頃盛著祁寒の折からといへども、いさゝか怠らせ給ふ事なく、講じはてさせたまひしは、その職のものといへども、企て及びがたき御事にて、篤學の御志かぎりなくましませしは、古今にその類まれなるにぞ。（日記、松蔭日記）

を觀ば、公が學に對して如何に熱意があつたかが判らう。元祿八年三月の講義は、萬石以上の諸侯竝に嫡子、諸番頭・物頭・布衣以上四百十四人に聽かせた。總じて學問に對しては、貴賤尊卑等は餘り吟味しなかつた樣である。されば柳澤の邸などでは公の講義が濟むと、吉保に進講を命じ、更に吉保の家臣にも命じた。元祿四年三月始めて柳澤邸に臨んだ時は、親ら大學を講じて柳澤の一族老臣以下然るべき輩まで皆聽かせ、吉保（○當時は保明といふ）に命じて八條目を講じさせ、又家人の文學ある者に命じてそれ／＼進講させた。十六年（二三六三）二月柳澤邸にて家臣に詩經を講じさせ、又唐音にて大學を講じ、唐音を以て問答させた。寶永二年（二三六五）の如きは、二月吉保邸に臨み、親ら論語の泰伯篇を講じ、吉保・の長子吉里に憲問篇を、吉保の臣辻正典に禮記を講ぜしめ、家臣等に書中の字を唐音で論議させ、九月再び臨み、親ら陽貨篇を講じ、吉里に子路篇を講ぜしめ、吉里の弟安通・時睦に學而篇を素讀させ、十二月四日・九日・十八日にも臨み、講書・進講例の如く、殊に十八日には三浦竹溪に孟子を講ぜし

め、吉保の小婢には詩經を講ぜしめ、又絶句を賦せしめた。其の他徳川光圀・前田綱紀等の親藩大諸侯にも進講させてをる。

## 五

經書の講義は上述にて一斑を推すことが出來るが、更に附記すべきは、經義の研究討議にも力を用ゐたことである。大將軍になつた匆々、林信篤と人見宜卿とに經義を討論させ、毎月兩三次行はせたことは前に述べたが、講釋の後など折々之を試みられた。元祿九年（二三五六）九月柳澤邸に於ける講義の後、吉保の家臣二十三人に司馬溫公の疑孟の論議を命じ、志村楨幹に結語を下させ、又信篤に孟子浩然の章の一節を講じさせ、家臣十三人に問難せしめ、終つて二十三人に時服二づつを賜はつた。好書故事巻九に見えてをるのでも、同年十一月本丸にて「性」の一字を、同十年二月吉保邸にて宋史・道學傳の人物を、同九月同邸にて（以下皆柳澤邸にて行はる）易の道理を、十二年二月大學の明徳は心か性かを、寶永二年二月「中」の字を唐音にて、同月「仁」を、九月「心」を、五年十月「太極」の義を各〻問答せしめ、又親ら孟子の「枉レ尺直レ尋」に答ふると、「好レ貨好レ色」に答ふると、其の語の不同なるを問ひて徂來に答へしめたこと等がある。而して之に參與した者は皆拜領物があつたので、人々光榮に感じ

て經義の闡明に日頃から注意したに相違ない。講經には殊に講論が必要で、これなくば學問が徹底もせず又實にもつかぬ。孔子・孟子も弟子達に難疑答問させ、後漢の明帝が辟雍に臨んで諸儒に經を問難させたことも有名の話である。これは經義の透徹を期したのであるが、經義を體得して實行に移すには、諷誦して涵泳するのが大切である。されば徂來と問答の後に、親ら大學の序を請講された。憲廟實錄にも、聖經を讀誦せらるゝこと絕えず、機務の繁劇の際も病の折も卷を釋かれず、孝經・大學の二書は殊に慣熟し、注文を併せ背誦流るゝが如くであつた。又宗廟を祭る前夕は假寐もせず、孝經を誦せらるゝが常であつた（大意括說）といつてをる。洵に眞劍な態度である。殊に多とすべきは經書の實行に重きを置かれたことである。御實紀附錄卷中に憲廟實錄を引き、

いつの頃にや、近臣等が御講書承りし後に、御辨の雄英におはしますと、義理の詳晰なるとは、並々の儒者等が、おさ〳〵及ぶ所にあらずと評し奉るを聞しめして、汝等儒學を何と心得たるや。いにしへの堯・舜・禹・湯・文・武などいひし聖人たちは皆儒者なり。今の如く讀書をもて業とする者のみを儒といふは後世の事にて、大なる誤なり。是は務めて聖人の道を狹隘にするなりと仰られけり。このこと傳へ承りしもの、その御論の高確なるに感じ奉りけり。又世に傳へしは、いつも御講書の終には、此上は各〻の心得にある事なりと仰られしことと、常例のごとくにてあり

しといふは、是も人々に躬行實踐の道をしらしめんとての御事なるべし。

とあるので判る。又同卷に、經典を繙くにも收めるにも必ず拜戴せられ、講義の時には御刀・御指添ともに、遙に座を離れて置かれた。これ經籍に臨めば先聖に對すると思はれたので、かく崇敬されたのだといつてをるが、如何にもと思はれる。

六

公は又經籍を刊行して社寺に納め、諸侯及び聽講の人々に賜はつた。右文故事卷六に左の如く見えてをる。

四書直解　廿册　此本匡郭縱七寸、横五寸五分、十三行廿三字、按ニ憲廟實錄ニ元祿元年十一月朔日四書直解ヲ新刊セシメ、一部宛伊勢・日光・山王・鶴岡・上野・增上寺ニ納メ玉フト見ユ。云云。（虎云、此の書東洋文庫に藏す。大學一、中庸二、論語十、孟子七、計二十本。罕覯の美本である。）

四書集註　小本　廿六册　同　中本　廿六册　世ニ御版四書ト云フ。小本ハ匡郭縱四寸四分、横三寸五分。中本ハ縱六寸五分、横四寸八分。倶ニ四周單邊五行十二字、開板ノ歲月序跋ナシ。御講釋ノ時ニ拜聽ノ者ヘ恩賜アリテ、殿中ヘ持參セル本ナリト云フ。或云、御版ハ御講筵ノ日、諸ノ

有司其本職ヲ勤ルノ間ハ、夾帒中ニ置ニ便ナラムカ爲ニ、新ニ巾箱本ニ命ゼラレシナルベシト。按ニ憲廟實錄ニ、延寶九年二月林春常命ヲ奉シテ、四書・五經・小學・近思錄ノ訓點ヲ正スト見ユ。然レバ其點本ヲ以テ入梓アリシナルヘシ。故ニ外題ニ林家改正點トアリ。」云々（虎云、小本は內閣文庫、東洋文庫に藏す。大學一、中庸一、論語十、孟子十四、計二十六本。中本は宮內省圖書寮・東洋文庫及び前田侯爵家尊經閣に藏す。匡郭縱六寸乃至二分、横四寸六七分である。小・中本共に外題に林家改正點の五字なし。正齋の誤記ならん。）

周易本義　小本八册　同　中本八册　世ニ御版周易ト云フ。小本ハ匡郭縱四寸五分、横三寸四分半、中本ハ縱□寸□分、横□寸□分、倶ニ四周單邊、五行十四字。開版ノ歲月序跋ナシ。是モ御講筵ニ用ヒラレシ御本也。」云々。（虎云、內閣文庫・東洋文庫及び永山近彰氏小本を藏す。外題周易本義の下に林家改正點の五字がある。中本は未見。）

天和元年（二三四一）信篤に命じて、四書・五經・小學・近思錄の訓點を正させた。御版の經書は皆それに據つて訓點を付してをる。當時刻書が盛に行はれ玉石混淆であつたので、貞享元年（二三四四）布令を出し、官許を經ずして書物を出板するを禁じた。四年熊澤伯繼は大學或問を著し、公の上旨に忤ひ禁錮された。風俗を害し思想を惑亂すると信じたものは取締を嚴にした。學問を尊重した結果、人々の贈遺に書籍を以てする風が起つた。朝廷から幕府に書物を下賜せられ、將軍から天朝に奉獻したこと

もある。公が紀州侯・水戸侯・甲府侯に五經大全を賜ひ、水野勝長に四書大全を賜ひ、長崎奉行牛込蔭鎮が孝經・四書大全備考を獻じ（延寳八年）、同宮城和光が四書日講解義を獻じ（天和二年）、同川口源左衛門が小學・近思錄等を獻じたることなどがそれである。

公は又學者を優遇した。公が征夷大將軍に任ぜられた前々月に、林家第二代の鵞峯は歿したので、其の子信篤（鳳岡と號す）を用ひ、翌天和元年大藏卿法印とした。（右文故事）二年木下順庵を儒員に登用した。貞享四年（二三四七）信篤を法印に敍し弘文院學士と稱せしめた。（御實記）元祿二年信篤の門人大河内良資を儒員とした。四年正月信篤に束髪を命じ、從五位下に敍し大學頭と改稱し、其の席次を典藥頭の上と定めた。御實紀に評して

抑本邦中頃兵革打つゞきしより、學政荒廢しければ、室町將軍の頃、文學五山緇流の手に落しより、儒をもて業とするものみな剃髪し、釋徒に同じ姿となりし弊習、數百年をへてあらたむる事を得ざりしに、當代聖人の道を尊崇あつく、しきりに學政を振起したまふあまり、御英斷ありてかくぞ仰出されける。これより舊年の弊風一時に改り、官儒は更にもいはず、諸侯の門下に經をよこたへ、郷黨に冊を挾む輩まで、みな汙俗を變じ、四海の内、儒者の道は卽ち王侯士大夫の道にして、かの道釋の徒とは、涇渭の別明らかにしることゝなりぬ。誠に希代の盛擧といひつべし。

と言つたのは尤である。儒員大河內良資・和田長重も束髮した。元祿六年順庵の子寅亮束髮し、九年近藤玄壽・桂山義樹儒員となり、十一年人見元浩儒員となり、皆優遇された。

以上は公が儒學を尊崇し、之を奬勵顯揚せられた一斑を述べたのであるが、更に特筆すべきことは大成殿を湯島に遷して、崇祀を修めたことである。

## 七

聖堂に關しては昌平志・聖堂略志等に詳記してあるから、今はその大略を敍することにする。德川家光は寬永七年（二二九〇）林道春に、其の別墅として上野忍岡に五千餘坪の地を與へ、別に金二百兩を給して塾舍・書庫を建てさせた。忍岡は上野公園內、下谷市街に接する高地一帶の稱で、林氏の賜地は其の南端に在つた。九年冬德川義直が先聖殿を道春の賜地に經營して、孔子及び顏・曾・思・孟四子の坐像を安置し、祭器を寄與し、又親ら先聖殿の三字を書して揭げしめた。殿は林氏邸內に一區を劃して其の中央に建てられ、西面して其の正門は塾舍と書庫との中間にあつた。數百金を投じたので輪奐の美を盡したが、殿舍一宇に過ぎなかつた。殿中には聖賢畫像二十一幅を製置した。畫は狩野山雪の手に成り、贊語は道春が撰び、朝鮮人金世濂に書かせた。

寛永十年二月十日、道春初めて釋奠を先聖殿で擧行した。四月十七日家光上野東照廟參詣の次、先聖殿に臨みて孔子以下の諸像を拜し、道春に命じて書經の堯典篇を講ぜしめた。十二年二月の釋奠に道春は論語の首章を講じた。先聖殿の釋奠に講經の始である。

慶安四年（二三一一）家光薨じて家綱繼ぎ、明暦三年（二三一七）道春歿して第三子春齋（鵞峯）が襲いだ。春齋は將軍の侍讀となり、治部卿法印に敍し、弘文院學士の號を授けられた。萬治三年（二三二〇）幕府は春齋の請により、金五百兩を與へて先聖殿を修造させ、翌年竣工した。舊廟よりは規制を擴張し、正殿は南面し左右兩廡あり、正門左右の廊は正殿と相對し、正門を杏壇門、外門を入德門と稱して各〻扁額を掲ぐ。寛文四年（二三二四）京都の伶人狛近元、公事にて江戸に下れるを二月の丁祭に招請した。近元は伶人數輩を率ゐ釋奠の儀場に列し、箏・笙・笛・篳を合奏した。之が先聖殿に於ける釋奠奏樂の始である。春齋は先聖殿の東西に寮を營み、諸生を收容して人材敎育に力めたが、延寶八年（二三四〇）五月歿し、七月綱吉が將軍となつた。春齋の第二子信篤は父祖の業を紹ぎ林家三代の名を成し、加之綱吉の寵遇厚かつたので林家の隆盛其の極に達した。

元祿元年（二三四八）二月信篤初めて釋奠の胙を將軍に進獻した。十一月二十一日（聖誕日）公は忍岡先聖殿に詣し、莊嚴なる參拜の式を擧げ、更に書院に臨み信篤に堯典を進講させ、終つて宴を張り信篤等に物

を賜つた。これより殆ど毎年の例となつた。

同三年七月九日、公は信篤を招き、忍岡の聖堂は上野境内に在り、且最初徳川義直の建立にて公の意思に相應せぬ故、公儀より新規に聖堂を神田臺に建立することに決したる旨を告げ、即日總奉行松平輝貞・御手傳蜂須賀隆重を任命し、十一月二十一日「大成殿」三大字の額字を揮毫し、十二月二十二日上棟式を行つた。これは忍岡の孔廟は寛永寺に接近せると、尾州侯の創設にて幕府の造營でないことと、其の規模の狹小にして公の豪懷を滿たすに足らなかつたためであらう。神田臺は本郷湯島のことで、現存の大成殿の在る所、臺地であるので新に阪路を開き、孔子生誕地に因んで昌平阪と呼ぶことに定め（元祿三年十一月十六日）其の東にある橋を昌平橋と稱することにした。

工事の總奉行は上述したが、大工棟梁は依田盛直と申した。其の構造は舊廟に比すれば規模宏大雄壯なるが、其の形式は全く舊廟に倣うたのである。構造の大略を申せば、正殿は南向、中間間口五間五尺、奥行三丈七尺五寸、高四丈三尺三寸、兩廡各横三間、奥行一丈九尺五寸、屋根は銅瓦葺、殿内北壁の中央に高五尺八寸、奥行六尺五寸の室を構へて神座とし、兩廡の北壁には高二尺五寸の棚を設け、殿の外部、斗拱・肘木・蛙股等は雲形彫刻を施し、柱・梁等は皆朱漆で東と南に圭頭牖を設け、殿の正面には「大成殿」の扁額を掲ぐ。綱吉の書で黒漆金字である。西廡より西に廊下を通じ神廚に

至る。廟は東向、閒口六閒、奥行一丈九尺五寸、東西の廊は杏壇門を夾んで北向し、各閒口六閒奥行九尺八寸、柱楹墻壁は朱漆で、牖の格子は彩繪し青綠に塗る。杏壇門は唐門で六柱、門の闊さ一丈三尺、門扉は雲紋を彫刻し朱塗を施した。杏壇の扁額は入徳・仰高二門と同じく、樋口榮清の書である。杏壇門の傍に杏數株を植ゑ、門内四周墻を設け、門より殿に至る閒中央石を甃み、他は黑い細石を布き、右側に水盤二基を置いた。入徳門は略々杏壇門に同じく、共に平常は開かず。入徳門の側に小門を設けて出入に便した。入徳門内四周磚垣を廻らして廟庭を限り、杏壇・入徳兩門の閒石を甃み、入徳門外は板石を敷き東西垣を以て限り、石砌盡きて石磴となり、中央に廣き一段を設け將軍降輿の處とす。石階を下り仰高門に至る、其の閒左右に屋舍あり、東舍は釋奠の時更衣の所とす。後平日講書せしため講堂ともいふ。西舍は看守の詰所とす。仰高門は大さ入徳門に同じけれど粧飾なし。門傍に番所・馬房・供待等を設く。祭器・圖書の諸庫三棟が神廚の西北に在つた。

神座の正位は文宣王を中にし、左右に四配顏・思（東）曾・孟（西）の神龕を安置し、其の前左右に十哲の神主を置く。東西兩廡に七十二賢及び先儒の畫像扁額を揭げた。

元祿四年二月十一日、新廟に於て初めて釋奠を擧行した。公孔廟に謁し禮拜燒香し幣を神前に納め飮福の禮を行ひ、終つて杏壇門内に設けたる假閣に臨み釋奠の禮を覽た。式終り公は新廟竣工・祭儀

完備につき滿足に思ふ旨を信篤に告げ、今後祭祀の費用と看守の給料とに充つるため堂領一千石を寄附した。六年二月公又釋奠を覽、八月又釋奠を擧行し諸侯に任意其の式を觀させた。春祭は公が臨觀し諸侯に觀さすことが出來ぬから、秋祭を公行することにし常例とした。但秋祭は其の儀式を稍〻略したといふ。七年九月公は生母と與に聖廟に謁した。十一年忍岡の舊廟は林氏の莊宅と共に火災に罹り、爾後廢滅に歸し、其の地は寬永寺に附屬せしめた。十六年十一月の大火に新建の大成殿も類燒した。翌寶永元年(二三六四)二月公は聖堂再建を命じ、伊達宗贇をして工役を助けしめ、五月起工、十一月上棟、十二月竣工した。其の規制は舊に依つて大差なかつた。二年三月公は新廟に謁した。これが公最後の廟參となつた。公は孔廟に謁すること前後十六度に及んだ。それで聖學尊崇の一端が窺はれる。

## 八

公が將軍職を繼いだのは元和櫜鞬後六十五年、文恬武熙、上下太平を樂んでゐた時である。公の在職二十八年間は所謂元祿時代を中心としてをる。凡主が上に在つても文運は興隆すべき時である。況や公が儒を崇び學を倡へたことは上に述べた樣であるから、諸侯之に和し士民之に應ずるは當然の事

である。元祿三年會津藩は稽古堂を講所と改め、四年前橋藩は好古堂を創立し、八年柏原藩は又新館を創立し後崇廣館と改稱し、九年芝村藩は遷喬館を創立し、十年米澤藩は聖堂を建て、學校を附設し、十二年廣瀨藩は誠意館を創立し、佐賀藩國老多久氏は多久學校を作り、十三年佐賀藩は聖堂を城外に移建して諸人の參拜に便し、十五年岩村藩は文武所を創立し後知新館と改め、高松藩は講堂を建て後講道館と改め、十六年郡山藩は文武場を藩邸内に創立し、寶永元年佐伯藩は學習所を創立し、三年赤穗藩は博文館を創立し、五年多久氏は聖廟を創建し、佐賀藩は學問所を聖堂內に創設した。此等は公の在職中に藩學の開かれたる大體である。水戸藩の彰考館に於ける修史事業などは特筆すべきものである。

士人の學に嚮つた者は極めて多く、林家の學風は牢乎として抜くべからざる者があり、新井白石・祇園南海等木門の士も漸く頭を擡げ出し、荻生徂徠も柳澤氏に拔擢され、行々蘐園學を建てんとし、仁齋・東涯父子の堀河學は旣に成立し、崎門派の淺見絅齋・佐藤直方等亦活躍するなど、多士濟々で一々は擧げ切れぬ。これ等の學者は各〻撰述著作があり、それが年々上木せられ、俚諺抄の如く通俗的なるものも多く見えてをる。貞享元年に官許を經ずして書物を出板することを禁ぜられた。これは內容を主としたものであるが、亦以て出板界の盛であつたことが察せられると思ふ。

# 吉宗と儒學

平野彦次郎

吉宗は貞享元年和歌山に生れ、寶永二年、二十二歳にて紀州家を繼ぎ、享保元年、推されて八代將軍と爲つた。時に年三十三。其の後延享二年、六十二歳にて職を其の子家重に讓り、寶暦元年、六十八歳を以て薨去した。吉宗身長六尺、膂力拔群にして、天性武勇に勝れて居たので、少壯の頃には、學問に心を用ふる人とは思はれなかつた。然し有徳院殿御實紀附錄に、

初の程は、唯御武勇の勝れ給へるとのみ、人皆思ひ居たるに、一とせ參覲し給ふとて、封内に殘る藩士の子弟等に、文學を講習し、行を勵むべきよしを示され、學問所などをも建てられければ、さては文學をも棄てさせ給はぬよと、人々彌々感歎せり。

とある通り、敢て一方に偏することなく、其の一代の德政は、實に儒教に負ふ所が多大であつた。因りて先づ吉宗好學の狀を左に述べる。

## 一　吉宗の好學

吉宗は初め紀州侯として職に在ること十二年。逼迫せる藩の財政を整理し、大に治績を擧げた。其の間常に學問に熱心であつた事は、御實紀附錄に

　文學は御弱齡の時、深く學ばせ給はざりしとて、御壯年の後、紀邸に於て林大內記信篤（鳳岡）、木下平三郎寅亮（菊潭）等の儒生を召して、經義を聞し召すことしば〳〵なり。

といひ、又論孟の大意を知らんとて、藩の儒役高瀨學山及び榊原篁洲に命じて、國字にて論語抄、孟子抄を作らしめたる事もあつた。將軍となつた後は、此の好學の心益〻强く、享保元年五月十日、卽ち將軍職に就いて僅かに九日目に、旣に林大學頭を召して講義を聞いた。就職匆々諸事多端の際に、特に講義を聽くことは、餘程學問に熱心でなければ爲し難い所である。之に關して室鳩巢は、同年五月十四日の書簡に左の如く書して居る。

　此十日、林大學被ㇾ爲ㇾ召候て、講釋御聞被ㇾ遊候由申候。此節早速及二此儀一候事、天下に學風御勸被ㇾ遊候半との思召にも候やと奉ㇾ存候。

其の後林一家の御前講義は毎月行はれ、其の間に木下一家なる木下菊潭（順庵の子）、室鳩巢、服部寛

齋、土肥霞洲等を召して講義せしめ、其の他成島錦江は、常に御側近くに在りて侍講を爲し、或は山本作左衞門といふ賤吏が篤行あるを聞きて、特に召して論語を講ぜしめた事もある。而も是等の進講に對しては、常に熱心に聽聞し、講じ終りて退出せんとするを、今少しとて引き留め、更に講義せしめる事も度々であつた。

吉宗は斯く學問に熱心であつたが、其の學問に對する態度は、之を以て政事の用に資し、風教刷新の具に供せんとしたのである。故に儒道を以て治國平天下の要具とせば、吉宗は頗る能く其の道を得た者である。然し訓詁を論じ、義理を究め、詩賦文章を作るを以て儒道の本領の如く心得たる學者に在りては、吉宗の態度に不滿足の點があつたに相違ない。鳩巢の享保六年正月十四日の書簡に、

此度急度御目見抔被仰付、講釋被仰付候も、第一高倉聽衆有之樣に被成度、又は私共油斷不仕候樣に被成度との思召と奉存候。聖賢の道を御好被成、御自身に御聞被遊度との御事には無之樣に相見え申候。

とあるは、此の間の消息が窺はれる。

## 二　吉宗の儒學奬勵

吉宗は以上の如く儒學に熱心であつたが、更に衆人に道を知らしめ、士風を一新せんが爲めに、大に之れが奬勵に務めた。

ある時仰に、凡そ人として物學びせねば、倫理をだに辨ふる事を得ず。あやまてば禽獸に等しき行も出でくるぞかし。況して士たるものは、擧げ用ひらるゝ時は、朝政にも與るものなれば、こと更文學に志すべきなり。我常に思ふ、今の世學問なきものは、人前に出づるも、面なきやうに思ふ風俗になしたきものなりと。

是れは、小納戸浦上直方が、有り難き尊諭なりとて、人に語つた所である。此の事は將軍就職後の事であるが、斯く學問を普及せしめて、一般人士の徳性を涵養せんとの考は、紀州侯當時より抱持した所で、種々の方面に著はれて居るが、今左に其の一二を記す。

吉宗の紀藩在職中、學事に關する施設の主なる者は學校建設である。紀藩には、元和以來殆んど百年の間、僅かに儒官の家塾にて教育して居た。吉宗は其の人材を養ふに十分ならざるを察し、英斷を以て正徳三年に藩立學校を興し、講釋所と稱して、蔭山東門、祇園南海をして督學せしめた。是れが後の藩學學習館である。

又其の訓諭として特に注意すべきは、紀州政事草一卷及び紀州政事鏡二卷である。前者は正徳四年

四月十一日の日附、後者は同年八月三日の日附で、何れも紀伊中納言吉宗と自署し、宛名を紀伊宰相殿とした跋文が附いて居る。其の跋文によれば、子孫の爲めに訓諭する事を記してあるが、一般藩士等に對しても敎訓となるべき事である。其の內容は、政治上の心得及び諸般の事に亙つて居るが、儒學に關する點を摘記すると、紀州政事草には、

學文は孔子の道計にも不レ限、數の書物を見るべし。其上繪草紙類迄一見すべし。是等も能き學問となるなり。片事に孔子の道計學ぶ時は、自然と究屈になり、片仕心の者も有レ之、學問なき者にも劣り、人の爲にも不レ成、彼等は獨學とも言ふべし。師範の者は格別なり。惣て學文いたすもの、一心の愼第一なり。他人の不レ知者には可レ敎。自慢をせず、人を嘲る事有間敷なり。

とあり。これは吉宗が學問を以て實用の具とし、躬行を重んじて、所謂學者の學者臭きを好まなかつた樣子を察することが出來る。又紀州政事鏡に、

家中年若の者共、諸稽古出精は相知候事に候。學文出精可レ致。武士たるもの文盲にては非道の儀可レ有レ之候。講談も度々可レ承候。孔子の道は萬道へ通る事、日月の如くに可レ有レ之候へ共、片事に心得候者も可レ有レ之哉、依て一ヶ月兩度の會日を立置候て、軍談物を可レ承候。左候はゞ、先年の事共善惡相知れ、物毎に心得にも可二相成一儀なり。

とあるのも、右と同樣の趣旨で、學問の必要なると、之を活用すべき事とを說いて居る。又御實紀附錄に、左の如き記事がある。

其の頃又藩士に仰下されし諭書の言長ければ、ここに其の大意をあぐ。今より後我も汝等と共に、惡を去り善に進み、禮讓を本とし、武藝を怠るまじ。文學は身を飾る具に非ず。悉く平日の行事に引かけて學ぶべし抔、古今を引き、和漢を考へ給ひて、丁寧の御敎訓どもなりき。

これも前の政事草及び政事鏡と同一の趣旨である。

其の後將軍職を繼ぐに至りては、更に儒學の奬勵に力を注いだ。其の實行方法としては、第一に林家の講義を一般に聽かしめる事とし、林鳳岡父子を始め、凡そ林家の徒弟は、皆昌平坂の學問所に於て書を講ぜしめ、庶人も之を聞く事を許した。是れは享保三年五月初の事で、其の講釋の模樣は、同年五月二十九日の室鳩巢の書簡にて、其の大要を察することが出來る。

聖堂にて每日兩度づゝ講釋有レ之候。四書の內と、近思錄、孝經、小學にて候。長の日は直參、半の日は貴賤入込承候へとの御事にて候。先日初日に直參の人七人有レ之候由に候。其後も半の日共に聽衆僅の數と申候。

斯く少數の聽講者にては、到底吉宗の滿足を得ることは出來ぬ。故に其の後一年餘を經て、更に高倉

屋敷にても講義を行ふ事とし、木下菊潭、室鳩巣、土肥霞洲、服部寛齋等、即ち木下順庵門下をして之を擔當せしめた。此の高倉屋敷開講は享保四年十一月二日で、其の書物は、大學中庸を菊潭、論語を鳩巣、孟子を霞洲及び寛齋が講じた。

然るに昌平坂學問所と同樣、聽衆が甚だ振はなかつたので、吉宗は痛く心を碎いた。其の後享保六年正月十四日に菊潭、鳩巣、霞洲、寛齋が進講せし時、吉宗は特に聲を大にして、高倉屋敷の聽衆の多少を問ひ、更に「一人も多く參る樣にあらせたき者なり。汝等が教導の仕樣にて、多くもなるべき事なり。心を入れて教授を勵むべし。」と言つた。之に對して室鳩巣は、正月十八日の書簡に、左の如く感想を陳べて居る。

儒學流行致し候樣に被レ成度被二思召一候段、御直に御意承、欣幸成事とも可レ申、此度急度御目見抔被二仰付一、講釋被二仰付一候も、第一高倉聽衆有レ之樣に被レ成度、又は私共油斷不レ仕候樣に被レ成度との思召と奉レ存候。

吉宗は斯く種々苦心したる結果、遂に少老石川總茂に命じて、鳩巣菊潭等の意見を徴せしめた。是れは、鳩巣の書簡によれば、享保六年の正月末頃の事で、其の答申の要旨は、

是迄の如く心の儘に講席に出る樣にては、人々怠りて奮發する者少かるべし。因りて旗本中に學

問する様命令を下し、又諸大名諸役人へも、上の思召により出席せよと、御老中より命令を下されなば、已むを得ず出席して生徒も增し、其の內には自然に會得して、眞實に學に志す者も出で來ぬべし。

といふのである。又他の一方では、林大學頭も、己が學問所に入學の徒の增す樣に、嚴命を下されたしと願ひ出た事もある。然し命令によりて聽講せしめんとするのは、儒教の精神に合しない。吉宗は固より之に不滿であつた。そこで小納戶浦上直方を內々木下菊潭の宅に遣はして、其の眞意を問はしめた。然るに菊潭は前陳の意見を繰り返して、上より嚴命を下さるゝより外考ふる所なしと答へたので、直方は其の意見は決して御採用になるまじとて、

林大學頭より聖堂講釋の儀につき、上より御命令を下され度旨、度々御願申上げたるも、上には御採用なかりき。凡そ學問なる者は、威命によりて爲す時は、其末遂げぬ者なり。常憲院樣御代(綱吉の時代)、深く儒學を好ませ給ひ、群臣に命じて學問を仰付けられたる爲め、一同殊の外難儀致し、今に至るまで懲り居る次第なり。兎角上より押して命ずるに及ばず、人々の心より向ふ樣になし給はんとの盛慮なり。各々其の心にて議し申さるべし。

と述べた。右の言中の吉宗の意見は、實に堂々たる卓見である。所謂之を道びくに政を以てするの結

果は、「免而無恥」に至るを察し、之を道びくに德を以てして、「有恥且格」の效果を得んとする者で、眞に儒教の精神を會得して居る。かくて命令說は御採用にならぬ事が分つたので、菊潭は更に尊師說を出した。

道を尙ばんとせば先づ師を敬せよ。と申す事古より之れあり。今の儒臣等皆位低く微祿にして、自ら人の尊敬も薄ければ、先づこれを寵待して衆に示し給はば、人皆儒を敬ふの心を生じ、學に志すべきか。

是れには誰も異議の有る筈はないが、實行が容易でない。又酒井忠音の儒臣松田善三郎も、篤實の士なればとて、少老石川總茂の宅に招きて、其の意見を求められた。其の答は

人々眞實に學に向ふの志を興し給はんとならば、先づ宿老少老の方々を初め、御志を興し給へかし。されば下之に傚ひて文學を嗜む者も出で來ぬべし。今當路の方々を見るに、文學を忌み嫌ひ給ふにはあるまじけれども、眞實に御尊敬ある人は、未だ一人も覺え奉らず。されば世に實學を興さんには、先づ顯職の方々より、御志を興し給ふより外の術は候ふまじ。

といふので、これには石川總茂も深く感じて、「我々が身の上にまでも能く敎戒し給はり、歡喜の至りなり」と答へたといふ。又荻生徂徠も、之に對する意見を其の著政談に書いて居る

學文の上の事、御世話にて昌平坂高倉屋敷にて、儒者講釋するとも、御旗本の武士に聽人絶えて無し。只家中の士、醫者、町人など少々も參る。此輩が爲に計り御世話遊ばさるゝは詮なき事なり。是仕形不㆑宜故、上の思召と相違すると見えたり。

とて、左の三點を擧げて居るのは、如何にも徂徠らしき見識である。

第一に、師は公役の人を用ひず、親切に教を受くる人を師とすべし。已が信仰する師なれば、謝禮に物を納れても稽古するは、人情の自然なりといひ、第二に、講釋所へ出て役目に講釋することなれば、師の方に權なし。是又道理に背く故、教の益無き也といひ、第三に、昌平坂高倉屋敷は場所惡し。儒者を江戸中所々に配り置、人々勝手次第に參る樣に有度こと也。學問は公儀の勤とは違ひて、畢竟内證ごとなれば、勝手よくあらねば成らぬこと也と言つた。

又木下菊潭は、學校を設立し、書籍を貯へ置き、生徒に研究の便を與ふべしとの意見をも述べた。此の學校設立の事は、吉宗も其の考があつたと見え、建設の敷地を調査し、學校の堂舍門戸庭園等に就きても、唐土の式を調査して言上する樣、木下菊潭に命じ、且つ鳩巣及び霞洲、寛齋等とも相談せよとの事であつた。是れは享保六年四月十三日の鳩巣の書簡に見えて居る。かくて敷地の選定は略ぼ決したが、遂に實現するに至らなかつた。それにつきて御實紀附錄には、

學校の事は、縦ひ所々に造立ありても、入學の生徒、學に向ふもの乏しき時は、詮あるまじと支へ申す者もありて、其の事行はれずなりしとぞ。

と記してある。ところが其の反對者の主なる者は、意外にも室鳩巣であつた。享保七年六月晦日の書簡に、

旗本中風俗悪敷罷成候間、是は學校建立いたし急度教を立候はゞ可ㇾ宜旨頻に申候。此儀は如何存候哉。御尋に付、乍ㇾ憚學校の儀は御無用に可ㇾ被ㇾ遊候。（中略）。近年御旗本中衣食に足不ㇾ申候故、教の所へは參候儀にて無ㇾ御座ㇾ候。然處今の時學校等の御沙汰御座候はゞ、一圓心服は不ㇾ仕候。（下略）

此の反對意見は、果して時宜に適して居たか否かは別問題として、兎に角學校建設は、かくして沙汰止みとなつたのである。

## 三　民衆讀本

吉宗は右の如く講義の普及に就きて種々苦心したが、一方に於ては民衆讀本ともいふべき教訓の書を刊行して、風教釐正の具に供せんとした。而して先づ目を着けたのが明君家訓である。此の書は假

名交り文にて書し、明君が家臣を教訓する體に擬した者で、室鳩巣の著である。正徳五年に始めて出板したが顧みる人もなかつた。享保六年の春頃、近習の一人が其の縁者より此の書を贈られ、宿直の時持參して居たのが、圖らず吉宗の目に觸れた。慧眼なる吉宗は、之を其の儘放置する筈はない。直ちに近習の人々に其の購讀を奬勵した。其の爲め其の書大に行はれて、書肆は思はぬ利益を得たとの事である。享保六年六月廿日の鳩巣の書簡に、

此書(明君家訓)板行は、十年餘りにも可ㇾ罷成ㇾ候。只今迄しかと見申候者も無ㇾ之候處、ふと御近習に取はやし候故、俄に江戸中流布いたし候。兎角萬事時節と申事有ㇾ之候と奉ㇾ存候。

とあるが、吉宗の學を勸むる用意の周到なるは、實に敬服に堪へぬ。右に次いで六諭衍義及び六諭衍義大意を出板した。六諭衍義は、清の康熙帝が人民化導の爲に、孝順父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、毋作非爲、の六條の詔諭を垂れ、會稽の范鋐が其の義を衍して、俗語にて解釋した者である。それが琉球に傳はり、琉球の學士程順則といふ者が印行したのを、薩摩侯島津吉貴より幕府に獻上した者である。

民衆讀本の必要を痛感して居た吉宗は、早速之に着眼し、享保六年閏七月十三日に、木下菊潭、室鳩巣兩人を召して、六諭衍義の原本を示し、之を和解するに就きての意見を問ひ、其の結果之を假名

文に直すことを鳩巢に命じた。鳩巢は之を上中下三冊に書いて提出したるに、吉宗は之を近習等に讀み聞かせなどしたる後、今少しく短くする樣にと命じた。其れより一二度上意を伺ひたる後、九月二十七日に至り、全部改作して提出した。

此の間鳩巢は、改作に反對で不平がましい事も述べて居るが、要するに鳩巢は、能く文意の通る樣に詳に書かんとし、吉宗は、大衆が簡單に理解し得る樣に、成るべく短くせんとし、其の爲め度々修正を命じたのである。吉宗がかくまで自說を通さんとしたのも、畢竟は其の敎化の上に如何に熱心なりしかを證明する者である。

かくて假名文の六諭衍義大意は、大體其の草案が出來たが、吉宗は更に原文の儘に、訓點を施して出板せんことを企てた。そこで有馬氏倫を以て鳩巢に相談せしめると、鳩巢は、六諭衍義の原文には、支那の俗語が混じ居る故、俗語を知れる人に依賴せねばならぬ。それには久しく長崎に居たる岡島冠山が可ならん。冠山は荻生徂徠の門人にて、其の關係にて徂徠も冠山より俗語を學んで居る旨答へた。そこで享保六年九月十五日に、徂徠に訓點を命ぜられ、徂徠は九月二十二日に之を成就し、十月十一日の序を添へて、十一月吉日に刊行された。

然るに鳩巢の六諭衍義大意は、其れより以前卽ち七月十三日に命を受けて、九月二十七日に提出し

た儘、暫く消息を絶ち、空しく徂徠の訓點本の完成を眺めて居たのであるが、翌享保七年になりて更に修正を命ぜられ、二月末日の序跋を添へて、四月吉日刊行された。吉宗は更に府下八百の手習師匠に命じて、此の六諭衍義大意を習字の手本となして、兒童に讀誦せしめ、又遠國邊陲までも遍く賣り廣めさせたので、其の風化の及ぶ所、實に洪大なる者があつた。

其の次に五常名義及び五倫名義がある。享保八年九月四日、吉宗は俄に鳩巣を召し寄せ、五常五倫を假名にて解釋する事を命じた。因りて九月九日に五常の和解を獻上したるに、九月晦日に至り、五倫も此の通りに解せよとの意を受け、十一月十六日に跋を書いた。

## 四　書籍の保護

吉宗は風敎に意を用ひて、以上の如く民衆讀本の板行を企てたが、古書にも、深く意を用ひて、和漢の古書古記錄を蒐集整頓せしめ、紅葉山文庫の如きは、常に書目の增補を要する程であつた。隨つて足利學校等の古書にも意を加へたが、吉宗の書籍に關する事業中、獨り我が國のみならず、支那の學界にまで大なる裨益を與へたるは、七經孟子考文補遺の出板である。

初め山井崑崙は、其の友根本武夷と共に足利學校に行き、同校所藏の五經及び論語孝經孟子の八書

に就き、日夜校讎して七經孟子考文を作り、享保十一年に徂徠は其の序を書き、西條侯は其の書を謄寫して幕府に獻じた。吉宗は享保十三年七月に、幕府の儒官たる荻生北溪（徂徠の弟）に命じて更に校讎せしめ、翌十四年三月二日に至りて成功した。是れが七經孟子考文補遺で、北溪は十五年三月に序文を書き、十六年六月に出板された。而して出板に先だつ半歳、十五年十二月十七日に、此の書完成の功により、北溪には金、補助せし門人三人には各〻銀を賞賜された。かく幕府より費用を給せられて、此の名著の出板を見るを得たるも、實に吉宗の學事に熱心なりし賜である。

かく書籍を重んじたので、支那より舶來の書は務めて購入したが、專ら政道を助け、治具に備ふべき書を主として、詩賦文章の類は餘り求めなかつた。又唐商が圖書集成の端本を賣り込まんとしたる時、雍正帝の序文を證として、其の奸手段を看破し、それによりて完本を紅葉山文庫に收むるを得たといふ逸話もある。

## 五　吉宗時代の儒者

飜つて吉宗時代の學界を一瞥せんに、貞享元祿時代の儒者たる木下順庵、伊藤仁齋、貝原益軒等は、吉宗が將軍職を繼ぐ以前に皆凋謝し、京都にては、仁齋の子東涯が箕裘を繼ぎて名聲を揚げ、江

戸にては、林大學頭の一家は、羅山の孫なる鳳岡が、其の子榴岡等と共に御用學者を務め、木下順庵門下は、家宣家繼時代に勢威を振ひたる新井白石尙ほ存し、室鳩巣は順庵の子菊潭と共に、高倉屋敷に講義して林家と對抗し、別に荻生徂徠は、大宰春臺以下有名なる門人を擁して、大に門戸を張つて居た。

吉宗は十三歲まで紀州に居て、其の後は多く江戸に居たので、紀州に於ける學者の影響は餘り多く無かつたであらうが、元來紀州は京都に近き關係上、堀川派の流を汲む學者が相當にあつて、享保十六年には、東涯の弟の蘭嵎が紀州に仕へた程である。隨つて東涯自身も、儒役として幕府に召し出されはせぬかとは、吉宗が將軍就職の後僅かに十日ばかりで、已に室鳩巣等の心配の種となつて居る。卽ち享保元年五月十四日の鳩巣の書簡に、左の如き文句がある。

よき師儒無之ては、學文はやり候ても、人主の耳目をひき可申樣も無之候。荒川景元と申候て、只今紀州儒臣にて御座候。此人は仁齋が弟子にて、其故かねてより、上にも仁齋御聞被成、源藏（東涯）可被召出など申沙汰も有之候。此人など出候て、仁齋が學派抔發向仕候哉、無心許候。

然し紀州には、仁齋門下のみならず、木下門下の榊原篁洲や祇園南海も仕へ、又林門下の高瀨學山も

仕へて居た。

吉宗の儒者に對する考は、儒者が彝倫道德を知り、古今の事蹟に通じて居るので、其の智識を攝取して政治に利用せんとするのである。所謂我が藥籠中の物とするに在るので、學派などには一切頓着しなかつた。伊藤仁齋に關しては、鳩巢が吉宗の問を受けて、「人物は正しいが、學問は正しくない」と答へた事があるが、其の時仁齋は已に物故して居た。東涯が若し江戶に居たら、之を引見したに相違あるまい。新井白石は、行政上の意見に相違ある爲め、自ら隱退して居たのであるが、吉宗は機會を得ば、決して白石を棄てなかつたであらう。

林鳳岡が進講した事は前にも述べたが、鳳岡は綱吉時代に眷遇を蒙りたる事があり、世故に通じて居るといふので、侍講の外に顧問として屢〻召し出された。其の際鳳岡は、隨分思ひ切つた事を述べた事が、御實紀附錄に見えて居る。

公の天祐をもて大統を受け給へども、紀邸におはせし程も、かの國の艱困にあたられ、今の御上にても財用虛しき後を承け給ひ、御苦勞の絕えさせ給はぬは、いかさま果報つたなくましますとも申すべし。あはれよき輔臣ありて、御憂を分ちまゐらせたき事ながら、今見渡す中には、其の器にあたりしと思ふ人も見えず。と慷慨して申しければ、侍臣等其の憚りなき直言に驚きしとぞ。

若し是れが事實とせば、それは吉宗の德容が、鳳岡をして、自然に此の直言を發せしめたのであらう。

室鳩巢は尤も信任せられて、爲政上百般の事に意見を陳べて居る。獻可錄は實に其の意見を集めた者である。されば鳩巢を召さるゝ時には、何時も時間が長くなるとて、豫め其の準備をして居たとの事である。

この頃節儉の命を出さるゝに就きても、直淸を召して思ふ處を詢ひ諮らせ給ふこと屢々なりき。有馬兵庫頭氏倫、加納遠江守久通のみ御側に侍座し、其の他昵近の臣をも遠ざけらる。直淸常の如く兩手をつきて御答申せしに、長き物語の間、氣をつめて堪へ難かるべし。手をあげて物申せなど、ねもごろなる仰ありしとぞ。（御實紀附錄）

其の機密に參畫したる狀が察せられる。

公かさねて、さきざきより誰彼顯職の者共を呼びて討論すと雖も、唯我が言ふことを善しとのみ言ひて、更に推し返し申す者なきを、常に本意なく思ひしに、汝は思ふ所を包まず申すにより、我が助となること多し。さればこそ斯く屢々呼び出すなれ。と仰ありければ、直淸感涙を流して退きしとなり。（同書）

實に君臣水魚の感を深うする次第である。又鳩巢或る時「某常に恩遇の厚さに乘じて、忌み憚ることもなく、思ふことども言上し、かしこまりに堪へず」と申したるに、吉宗は笑ひて、「用捨は我にこそあれ。汝は思慮の及ぶかぎりを申すべし。」と言ひたる事もあつた。

荻生徂徠は、其の主柳澤吉保の取りなしで、既に將軍綱吉に知られて居た。吉宗は固より徂徠の名聲を看過する筈はない。果して諸書の訓點又は訓譯を命ぜられ、或は法律制度其の他の政務に就きて意見を徵せられた。政談及び太平策は、其の意見を集めたものである。由來經世上の研究は、徂徠の常に意を用ひた所であるから、御實紀附錄に、

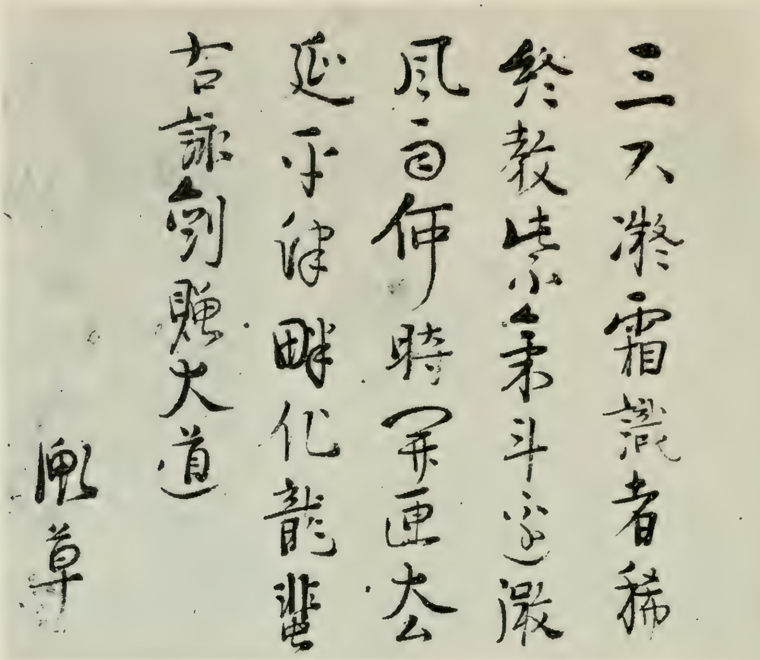
凡て儒臣に物問はせ給ふこと數多ありしに、一度二度は御答を申すと雖も、遂には言葉窮まるもの多かりしが、茂卿に於ては、政刑、兵農を初め雜事に至るまで、いつも速に答へ奉り、聊か滯ることなかりしとなむ。

と言へる通り、大に吉宗の意に叶うたに相違ない。其の結果、陪臣は私謁を得ざる常例を破つて、享保十二年四月朔日に、陪臣の徂徠に謁見を賜はつた。自然は御家人に加へんとの意向もあつたが、徂徠は翌年正月に死去した。

徂徠の弟北溪は、却て徂徠より以前から用ひられ、木下門下の鳩巢菊潭等と共に、高倉屋敷の講義

にも出て居る。故に享保六年十月二十四日の鳩巣の書簡には、「兄をさし置、弟を被二召出一候事、如何の儀にや不レ存候。」といつて居る。

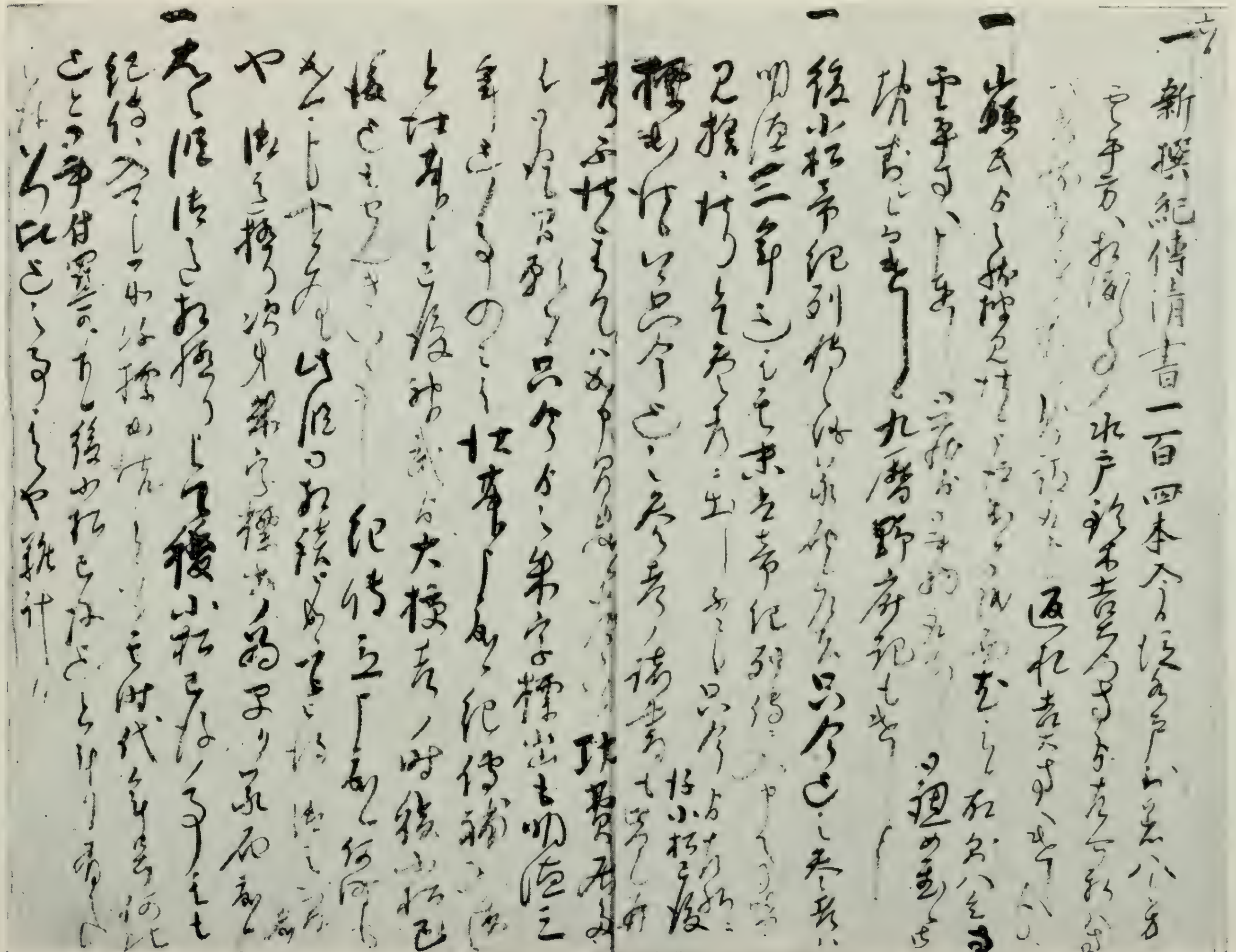
要するに吉宗は、聰明にして剛健、一代の英主としての素質を、天稟に具備して居た。然し元祿以來奢靡風を成して綱紀大に紊れ、幕府の勢威將に地に墜ちんとするに當り、能く諸政を釐革して中興の偉業を成したるは、其の天稟の美質に對して、能く之を修飾し、能く之を潤色することを怠らなかつたからである。而して其の主要なる點は、實に之を儒學に歸せざるを得ない。吉宗は彼の詩賦文章を樂しみ、或は自ら講義の押し賣りを爲すが如きは、敢て之を好まなかつた。而して己を修め人を治め以て國政を燮理するには、儒教に依るのが、最も適切であり有效である事を確信して居た。故に常に名儒碩學を延きて諮詢し、獨り學術敎化上の事に止まらず、法律制度より米價の調節、俸祿の增減等、一般の政務に至るまで、能く其の意見を聽取參酌して居る。吉宗の如きは、能く儒道を活用したる者と謂ふべきである。



林述齋筆蹟（河田烈氏藏）



林述齋肖像（河田烈氏藏）



江戸史館雜事

# 林家と文教

中山久四郎

## 一　序説

近世日本の江戸幕府時代、約三百年間を通じて幕府最高の儒官となり、其文教興隆につきて連綿不斷の功績ありし者は、林家である。約三百年の久しき、常に天下の儒宗となりし者は、林家である。足利氏の季世以來天下戰爭相次ぎて起り、國民は既に久しく干戈擾攘、銃聲矢さけびに厭きて、讀書咿唔の聲を渴望せる時、右文の治を輔け、家讀戶誦の文運開始につきて最も功績ありし者は林氏である。

慶長元和以來の文物、其最初に最盛に、光彩を放ちし者は、儒教漢學である、而して此儒教漢學復興の先進となり先導となり、以て一代の文運を開きし者は林氏である。あゝ偉なる哉、林氏の功。大

なる哉、林家の績といふべきである。

## 二　第一世林羅山先生

林家第一世は羅山先生である。先生、名は信勝、字は子信、一名は忠、通稱は又三郎、羅山は其號で文敏と私謚した。其先は加賀の人、後紀伊に徙り、父信時に及び平安に住した。羅山は天正十一年――賤ヶ岳の役、豐公秀吉大阪に城くの年――に生れた。石川丈山も此年に生れた。藤原惺窩の生年を距ること二十二年である。

羅山生れて天稟あり。甲斐徳本、父信時を過訪し、太平記を讀むや、羅山側に在りて傾聽し、數十枚を諳記した。徳本の驚嘆も無理もない。時に年甫めて八歳であつた。稍〻長じて東山の僧舍に讀書し、學力益〻進歩した。十八歳に至り、朱子集註を讀み、始めて程朱學あるを知り、遂に學徒を集めて講說した。博士清原秀賢議して曰く、「古より勅許なき者は講書することを得ず。朝紳すら尙然り。況んや處士にして敢て新註を講ず。罪せざるべからざる也。」と。徳川家康公其議を黜け、羅山の人物學識に感じた。時に藤原惺窩性理學を唱へ、名望あり。羅山乃ち之に師事して、遂に弟子の禮を執ることとなつた。惺窩人に謂つて曰く、「我が門下、經學史才、其人に乏しからず。然れども各一方に

偏す。林子は則ち之を兼有し、獨り博文無比なるのみならず、天性聰敏、精力絶倫、固に餘子の及ぶ所に非ず。」と。

羅山嘗て春秋傳を講じた。惺窩之に告ぐるに、宋の羅從彦、羅浮山中に在りて春秋を讀みしことを以てした。因りて遂に羅山を以て號とした。慶長十年、家康公二條城にあり、始めて羅山を召した。羅山入りて謁す。博士秀賢、僧承兌等侍坐した。公問ふに支那の史實及び文學を以てした。一座能く應對するものなし。羅山應對流るゝが如し。公之を激賞した。時に年二十三であつた。時に天下新に定まり、綱紀未だ立たず。羅山駿府に在り、其典籍を掌つた。凡て朝儀を興し律令を定め、即位改元、行幸入朝の禮、宗廟祭祀の儀、及び四方外交の事、與に參議せざるなく、幕府の公文書、多く其手に出づといふ精勤であつた。

大阪の變起るや、軍中猶論語を侍講し、又旨を奉じて古書舊記を採輯し、以て之を江戸と駿府に藏した。信任已に深く、日夜公に侍して、六經、三略、漢高祖紀等を進講し、古今を參考し、得失を陳辨し、江戸初期の幕政を企畫して、功績頗る大きかつた。公の左右或は其能を忌む者あり。公之を憂ひ、惺窩の例に倣ひ、命じて薙髮せしめ、道春と改稱し、民部卿法印に敍した。羅山悅ばず。力辭して去らんことを請ひしも、許さず。かくて外不用を示して、之を遇すること益々厚かつた。

元和二年、公薨ず。羅山遺命を奉じて江戸に至つた。二代將軍秀忠公之を待遇すること亦厚かつた。

## 三　先聖殿（孔子廟）の創始

寛永七年、三代將軍家光は、羅山に其別墅として江戸城北上野忍岡に於て、約一千四百坪を與へ、別に金二百兩を給して、塾舎書庫を建てしめた。七年は今昭和十四年を距ること、實に三百九年である。是より先き、慶長年中、羅山家塾を興さんことを請ひしも、幕府創業の際、未だ其志を成すことを得ずして、空しく十數年を經たるが、是に至りて始めて宿志を遂ぐることを得た。羅山、時に年四十八である。

忍岡は、現今上野公園內、下谷市街に接する高地一帶の稱にして、林家の賜地は其南端にありて、今の清水觀音堂所在の地より南及び東の懸崖に及んだ。此地、後羅山が多く櫻樹を植ゑしより櫻が岡とよばれた。

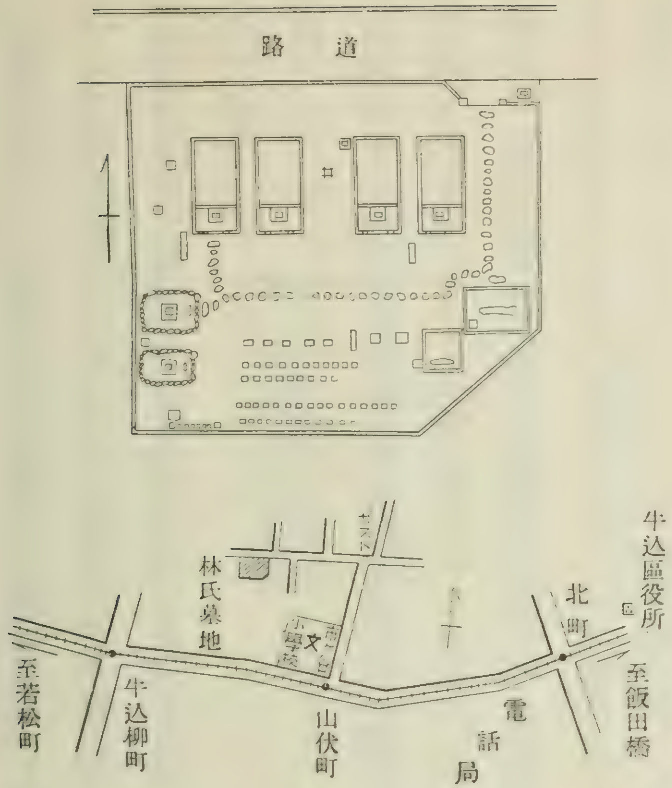
寛永九年、尾張大納言徳川義直、先聖殿を羅山の賜地に經營し、孔子及び顏、曾、思、孟四子の坐像を安置し、又親ら先聖殿の三大字を書きて揭げしめた。義直は家康公の第九子、尾州家の始祖であ

る。學を好み儒を重んじ、文教の振興に努力した。而して世人多くは先聖殿を忍岡の孔子の堂と稱呼した。

寛永十年二月、羅山初めて釋奠を先聖殿に擧行した。ついで四月十七日、家光公上野東照宮參詣の次、先聖殿に臨みて、孔子等の諸像を拜し、羅山に命じて、書經の堯典を講ぜしめた。是に於て林家の學大に天下に顯著し、當時儒教の經典を講ずる者、率ね皆其門に出づるやうになつた。

## 四 羅山先生終焉

明暦元年、幕府特に銅瓦庫を賜ひて以て書を藏せしめた。羅山大に喜び、火も亦燒くこと能はずと思つた。同三年正月十八、九の兩日、江戸市中大火あり、所謂明暦の大火である。羅山の本邸、神田に在り、亦災に罹りたれば、羅山火を避けて忍岡の別墅に徙つた。而して本邸の罹災とともに、銅瓦書庫も亦火災を免れず、數萬の圖書一時に灰燼となりしことを聞き、大息して曰く、「多年の精力一時に盡く、嗚呼、命なり。」と。是より氣息鬱結し、病床に在ること五日にして、遂に起たず。時に年七十五。列侯大夫より士庶人に至るまで、知ると識らざると、痛惜せざるものなく、實に哀悼すべきことであつた。而して明治四十三年十一月十六日、先生は贈正四位の恩榮を拜受されました。




林氏墓地平面圖

## 林氏墓地沿革

位置　牛込區山伏町十六番地

交通　市電、山伏町停留所下車

此處は徳川幕府の儒官林氏累代の塋域で開祖羅山以下十二世、支族春徳以下八世其他一族を儒葬した處であります。初め上野忍ケ岡の別邸内にありましたが元祿十一年三世鳳岡の時替地を此處に賜ひ墓地も亦移轉改葬しました。此地は城北の一高丘を占め遠く富士秩父の連山を望み老樹鬱蒼として幽邃の勝區でありましたが、明治維新後漸次縮小して現在の地域となりました。大正十三年二月には史蹟名勝天然紀念物保存法に依つて東京府知事より史蹟として假指定を受け、尚大正十五年十月内務大臣より指定せられ、次で昭和三年二月内務大臣より東京市を其管理者に指定されましたので昭和六年三月市は遺族と相諮つて墓域を修築し永久保存の施設を了しました。

## 五　羅山先生の學風及び楠公傳の先著

羅山は幕府四代に歴仕し、恭謙勤恪。其學和漢を通貫し、古今を網羅し、餘力の及ぶ所は稗史小說と雖ども、通ぜざる所なく、四書、七經（五經に周禮と儀禮を加ふ）皆解釋を施した。

儒學に就きては、博文約禮の敎を奉じ、篤く朱子學を信じた。しかもまた曰く、「新注を治めんと欲せば、須らく先づ古義を明にすべし。古は今の師なり。」と。又曰く、「祖考の精神は卽ち是れ自家の精神。」と。以て其學風を窺ふことが出來る。

其說、公平明切、特に力を實踐に用ひ、謂へらく、人道は廣大、體あり。用あり。――凡て理法の行事に現はるゝ者、之を用といひ、其の自ら包含する所の原理を體といふ。――本心の德は是れ體にして、孝悌は是れ用なりと。

羅山また謂ふ。周子の主靜、程明道の定性、程伊川の持敬、朱子の究理、張南軒の義利、皆其の體認する所なり。學者若し體認の實なくんば、果して何の益あらんやと。

又曰く「道は肩の如く人は手の如し。手能く肩を搖かす。肩如何ぞ能く手を搖さん」と。これは卽ち「人能弘ㇾ道、非ㇾ道弘ㇾ人。」の言について述べたるものである。

更に又曰く、「我朝神國也、神道乃王道也。」と。而して羅山は所謂三部神道（宗源神道、兩部習合神道、及び本迹縁起神道）の外、別に理當心地の神道あることを篤信した。

羅山の國史に通じ、且つ神道を信ぜしことは、「神道傳授抄」、「神祇寶典序」、「神社考序」（二篇）の作ありしことによりても、之を窺ひ知られる。其愛國的日本精神に富みしことは「倭賦」によつて之を知るべく、又特に「楠正成傳」「藤原藤房傳」の作あるを觀れば、其精神深く究めずして明である。羅山の楠公傳は蓋し江戸時代楠公諸傳の最初であらう。此點特に注意すべきである。

## 六　羅山先生の日本儒道

次に羅山の日本本位主義にして、日本的儒者たりしことは、左記の如き櫻花の詩によつて之を知ることが出來る。

南殿櫻（禁中抄云在紫宸殿東南隅）

天上春風吹レ物時。白櫻移レ影映二丹墀一。
殿前一朶向レ陽處。桃李興僮北二面之一。

山櫻詩

山櫻朶々直還斜。　紛白連レ雲繞二日華一。
褒谷薪爲二湊洧贍一。　芳名不レ及二我朝花一。

大成殿前櫻

草木欣榮遶二聖宮一。　白櫻獨秀一春中。
中華禮華樂花遍。　元氣吹噓日本風。

三首いづれも皆發しては萬朶の櫻となれる本朝の花によつて、日本國體の優秀尊貴を詠じたものである。而して羅山の櫻を好み、其忍岡の賜地に植ゑて櫻岡の別名あらしむるに至りしことは、既にのべし所である。

## 七　羅山先生の忠孝觀

次に羅山が支那の史實を日本的に觀察して、支那人の見て以て孝子と爲す所の人物に不滿の意を表せしことは、左記によりて之を窺ひ知るべきである。

李密陳情表、臣少事二僞朝一、歷二職郎署一、按密本蜀人也、蜀亡、晉武帝徵レ之、不レ就、於レ是、上二此表一、夫先主帝室之裔、紹二漢正統一、信非二曹操漢賊之比一也、密已以レ孝稱、然稱二舊君一爲二僞朝一、

豈忠臣孝子之所レ忍哉、奈何。（羅山文集）巻六十七隨筆三

羅山はまた「答叔勝問」の一篇に於て、「戰陣勇なければ、則ち苟も免れて生を偸むと雖ども、此心の義既に亡ぶ。行屍視肉と以て之に異なる無し。奈何ぞ羞恥なからんや。若し羞恥なくんば、則ち不義なり、不孝なり、不忠なり。云々。」（羅山文集 巻三十二）といひて、日本武士的精神を發揮した。文史の大儒たるとともに、日本武士の面目を兼備し、眞に「文事ある者は必ず武備あり。」の言に負かざる者といふべきである。

## 八　羅山先生の著述

羅山の著述は甚だ多い。其外前後旨を奉じて撰著する所、其大要を擧ぐるも左の如し。

群書治要補 巻二　東鑑綱要 巻一　四書五經要語抄 巻三　孫子及三略諺解 各一巻　陳法抄 巻一　儒門思問錄 巻三

倭漢法制 巻三　荒政恤民錄 巻二　無極太極說 巻一　聖蹟圖諺解 巻一　老子抄 巻二　大學抄 巻一

聖賢及愚惡王談 各一巻　貞觀政要抄 巻十　歷代三十六名臣圖贊 巻一

若し夫れ經典の解釋、或は國字を以て之を記し、其私撰する所を合すれば、總計一百四十七種、八百四十餘巻、詩文集一百五十巻。其他訓點本の世に行はるゝ者、卽ち「道春點」の漢籍類も亦少くな

い。著述注釋の多きこと、實に宋の朱子を聯想せしめるのである。

## 九　二百餘年天下の儒宗

之を要するに、江戸時代文教開創の元勳たるとともに、大禮大典、法制律令、及び四方外國交際の事に至るまで、一々參與せざるなく、而して公撰私著の盛なること、江戸時代諸儒第一といひてよろしい。先生の如きは、實に七十餘年聰敏の力を以て、幕府三代の顧問に應じ、儒學を以て政治を賛し、教化を奬め、以て二百餘年の太平を開き、子孫相繼ぎて、世々文權を握り、蔚として天下の儒宗となる。盛なりといふべきである。

## 一〇　林家第二世鵞峯先生

羅山先生四男あり、長、次二男早く歿し、三男春勝家學と家職とを繼ぐ。春勝、字は子和。一名は恕、字は之道、薙髮して春齋と稱し、鵞峯と號す。

鵞峯勤勉力學、能く家聲を墜さず、父名を汚さず。特に歷朝の史實に精通し、能く諸家の系譜に通じた。其幕府に登用さるゝや、父とともに禮制を議し、或は五經を講義し、或は訟獄に參與し、叙爵

は治部卿法印に進み、更に弘文院學士を授かつた。

旨を奉して編著する所、甚だ多きこと亦父の如し。其卷帙浩瀚なるものは、卽ち

寛永諸家系圖傳三百七十卷　本朝通鑑三百十卷

にして、前者には三年を要し、後者は七年にして成つた。編修局を忍岡の別墅に設け、國史館とい ひ、諸儒を集めて、分科編纂し、鵞峯之を總裁した。近世日本國史官撰の先を爲し、且つ修史報國の 誠を盡したる者といふべきである。

又其著述には、「鵞峯文集百二十卷」がある。

二子あり。長は春信、勉亭、又梅洞と號し、次は春常、共に才學あり。春信尤も夙成、祖父羅山期 するに千里駒を以てした。「本朝通鑑」の撰、與りて力あり。鵞峯、常に二子を戒め、羅山、東舟（羅 山の弟、鵞峯の叔父）の兄弟、共に有名なりしことによりて、兄弟共に名を揚ぐべきことを以てした。 時に鵞峯の弟、讀耕も亦才學あり。林家父子兄弟、文教を以て著はるゝこと、恰も宋の三蘇（蘇洵及 び蘇軾、蘇轍の二子）のやうである。世人因つて三林と稱した。而して今鵞峯の二子も亦才學あり。 天の林家に惠み、而して江戸時代初期の文教翼贊に有功ならしめたこと大なりといふべきである。

- 林信時
  - 羅山(一)（信勝）
    - 叔勝
    - 長吉
      - 梅洞（春信）
    - 鵞峯(二)
      - 鳳岡(三)（春常）
    - 讀耕
  - 東舟（信澄）

之を要するに、羅山林家創業の力最も大にして、鵞峯守成の功亦小ならずといふべきである。鵞峯はたゞ家學を繼紹するのみならず、其の「本朝通鑑」修史の功は、六史以後の大事業である。其體裁水戸藩の修史の嚴整に及ばずと雖ども、首唱先擧の功、決して之を輕視することが出來ない。

鵞峯の時、忍岡先聖殿は改築せられ、祭祀の典禮も具備し、學寮も發達し、特に先聖殿の廟殿益〻尊嚴を加へたれば、諸侯士庶の參拜益〻多く、孔子廟中心の文教いよ〳〵盛となつた。

## 二　林家第三世鳳岡先生

羅山の開創、鵞峯の守成二代を經て、林家は第三代鳳岡先生の時となつた。先生、初名は春常、一名は信篤、字は直民、鳳岡と號し、又整宇と號した。初め兄春信穎敏絶倫、名一時を傾く。鳳岡は常に謙默して、痴者の如し。既にして家を嗣ぐや、風采煥發、事に處すること流るゝが如し。人始めて

其弘量に服した。蓋し名聲兄に越ゆるを欲しなかつたのである。

時に五代將軍綱吉公學を好み儒を崇び、親しく書を殿中に講じ、群臣に諭すに文武不岐を以てし、鳳岡に命じて其講を續けしめた。鳳岡乃ち毎月開講、閣老以下列坐聽講した。

元祿元年、公將に忍岡の孔子廟に詣らんとし、鳳岡を召して曰く、「乃祖羅山孔廟を創め、先將軍大猷公〇三代將軍家光親祭の儀あり。我亦其典を擧げんと欲す。汝宜しく吉日を擇ぶべし。」と。鳳岡命を拜し、乃ち孔子誕辰十一月二十一日を以て吉日と決定した。期に至り、公肅拜禮を行ひ、鳳岡は尙書堯典を進講した。講畢り、宴を張り樂を設け、將軍も自ら起ちて舞ひ以て興を添へた。是より綱吉公孔廟に詣ること、殆んど毎年の例とした。

後ち二年、命じて孔廟を湯島臺に移す。今の本鄕區湯島聖堂の所在地にして、斯文會の事務所は、聖堂構内に在る。當時の總地積は六千餘坪ありしと云ふ。而して新建の孔廟は昌平坂聖堂とも呼ばれた。

新聖堂は、正殿を主として、杏壇門、入德門、仰高門並に圖書祭器の諸庫あり。忍岡孔廟に比して規模更に宏麗を加へ、公は大成殿の三字を書きて額とした。新築功成るや、綱吉公孔廟に詣りて、釋奠の禮に臨んだ。時に元祿四年二月十一日である。これより春秋の二奠、台駕親臨、率ね虛歲なし。

而して鳳岡は四年正月束髮改服を命ぜられ、特旨を以て、大學頭に任じ、從五位下に敍せられた。中世以來、士大夫多く筆を投じて干戈を執り、斯文は之を僧徒に委し、元和偃武、儒者輩出の時に及びても、猶薙髮して僧侶の如し。鳳岡慨然としていふ、「儒道は卽ち人道なり。何ぞ僧侶の風に倣はんや。」と。時に綱吉公亦大に儒學を崇ぶ。故に束髮、改服、仕官等の事があつたのである。これより都鄙の諸儒、皆一般士人の名に改め以て士林に入れり。かくて數百年の陋習、一時に改新し、儒教が世務と實用と文教とを主することを公認さるゝこと、益〻盛大となりしは、實に鳳岡の功である。

鳳岡は五代、六代、七代、八代の將軍に仕へ、八十九歲を以て歿す。常に經筵に侍し、且つ官爵、系譜、祭喪等の幕府の機務に參與し、門下の諸儒も亦其推薦によつて、或は幕府に或は列藩に、各儒員となつて、以て文教の發達に參贊した。

あゝ、德川幕府、第三代に至りて、其武運いよ〱盛なり。林家の文運も亦第三代に至りて益〻隆し。日本近世の文教學問の盛なる、實に林家三代の功績である。今試みに林家三代の學統門弟を列擧すれば左の如し。

┌林　鵞峯
└山鹿　素行

林羅山
- 永田善齋
- 人見竹洞
  - 梁田蛻巖
- 林讀耕齋
- 向井靈蘭
- 菊池耕齋
- 田中止邱
- 辻晩庵
- 一井鳳梧
- 那波木庵
- 宮本春意

林(二)鵞峯
- 人見懋齋
- 黒澤雉岡
- (三)松浦交翠
- 林鳳岡
  - 關松窓
  - 篠崎東海
  - 井上蘭臺
    - 井上金峩
  - 上田貞休
  - 德力有隣
  - 秋山玉山
    - 千葉芸閣
  - 岡島冠山

- 菊池　鵬溪
- 中村　顧言

- 莊　恬逸
- 岡　林竹
- 林(四)　榴岡(信充)
  - 林(五)　鳳谷(信言)
  - 後藤　芝山――柴野栗山
  - 多湖　松江
  - 澁井　太室――林(八)　述齋
- 小倉　尚齋
- 多湖　栢山
- 名越　南溪
- 桂山　彩巖
- 高瀬　學山

## 三　一盛一衰

一盛一衰は世態の常である。林家も第三代に至るまでは、隆又盛の文運に遇ひ、名實共に天下の文權を握りしが、其後數世はやゝ衰頽し、大學頭の學職家名は之を繼續すといへども、教學の實力は之に伴はず。第四代信充、第五代信言、第六代信徴、第七代の信敬の在職七十年の林家は、衰頽期といはざるべからざるの否運となつた。然れども、信言が湯島聖堂の修理に功を奏し、又享保二年初めて聖堂仰高門東舍に開かれたる日講を繼續して、士庶民衆の教化に補益したる林家代々の功勞は、決し

て小なる者でない。

## 一三　中興の大儒述齋先生

林家第七代の錦峯（信敬）早世して子なく、羅山の血統が絶えた。かくて寛政五年、美濃の岩村の城主松平乘蘊の第二子、幕府の命によつて林家を相續し、大學頭に任じ、衡と稱した。時に年二十六にして、述齋と號した。述齋は天性英明、學を好み、林門の名儒澁井太室に師事して令名があつた。學職を繼ぎ、林家第八代となるや、能く時勢を察して、祖業を更新し、國家文教の興隆に貢獻する所甚だ大きかつた。

述齋、學職相續の年、聖堂に於て素讀吟味の制を開いた。卽ち諸士の子弟十五歲以下の少年について、其學業を試驗し、以て其修學を奬勵した者で、每年擧行せられ、文運振作に裨する所が多大であつた。

寛政九年に至り、大に學制を改め、聖堂學舍を學問所と稱し、專ら御家人の子弟を敎育する所とした。かくて從來林家の私學たりし者は、遂に幕府の公學となり、改めて幕府旗下の諸士を養成するを以て、其目的となすに至つたので、其經費も自ら府庫の支出する所となり、林氏の家祿も一躍して三

千石となつた。而して述齋就職の前後、柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲の所謂寛政の三博士が、聖堂の儒官となり、林家を輔けて、學政の振興、文教の發達に盡力したる功績は、特にこゝに併せ記すべきである。

更に又述齋在職中、湯島聖堂の大改築成功し、寛政十一年聖堂大成殿新築落成し、規模宏壯、用材堅實、建築精緻、輪奐たる者ありしが、大正十二年の關東大震災の爲め烏有に歸したるは、眞に惜しいことであつた。寛政の改築後、實に一百二十五年である。然るに大正十五年、聖堂復興期成會起り、斯文會會長徳川公爵閣下其會長となり、天恩洪大の恩賜金を拜し、且つ諸方面の義捐金によつて、復興工事も完成し、昭和十年に至り、新聖堂に於ける第一回孔子祭を擧行するに至りしは、徳川會長の功績特に偉大である。

述齋は又文化八年、對馬に至り、朝鮮通信使の來聘に應接し、韓使接待の新儀を創め、文教の翼贊とともに、外交の功績亦大なりしこと、恰も林家第一世の羅山先生のやうである。

述齋、奉職凡そ四十九年、其信任を被ること、終始變ぜず、家秩もと千五百石なりしが、述齋に至り、前後增秩、三千五百石となり、歳給合せて一千二百兩、班秩は遙に家祖數世の上に出で、林家中興の大儒と稱せらるゝは偶然でない。其學統は左記の如くなるを見ても、其の近世日本の儒教漢學的

文教に貢獻せし功績の大なるを窮ひ知るべきである。

- 林　述齋
  - 佐藤　一齋
    - 安積　艮齋
      - 重野　成齋
      - 岡　千仭
    - 竹村　悔齋
    - 佐久間象山
    - 吉村　秋陽
    - 河田　迪齋
    - 大橋　訥庵
    - 山田　方谷
  - 松崎　慊堂
    - 鹽谷　宕陰
    - 安井　息軒
    - 木下　犀潭
  - 西島　蘭溪

## 一四　有終の美、儒職と外交

述齋の天保十二年、七十四歳を以て歿したる後、第九代檉宇、第十代壯軒、第十一代復齋、第十二代學齋、相次ぎて家職を嗣ぎしが、世運の變遷とともに、林家の學運亦や、振はず。然れども皆家聲

を墜さず、天下の文權を握りしことは依然たる狀態である。しかのみならず、佐藤一齋、安積艮齋、鹽谷宕陰、安井息軒、芳野金陵の諸名儒相次いで、幕府の儒員となり、林家中心の文教振興に補益し、世態變遷の間に在つても、斯文地に墜ちず、教學常に世道人心を導きたるにつきては、決して林家の傳統的存在の權威を輕視することが出來ない。

且つ又幕末亞米利加使節の來るや、初めは第十代の壯軒、次いで第十一代の復齋、之に應接し、和親條約の締結に努力し、成功小ならず。而して復齋は安政六年に歿し、第十二代の學齋之に嗣ぎ、以て明治維新に至つた。

あゝ、林氏の學祖羅山先生、文教振興とともに四方外交の事に當つて功あり。而して其後裔亦名儒たるとともに、外交の功多し。能く始めあり、又有終の美ある者といふべきである。

〔附　錄〕

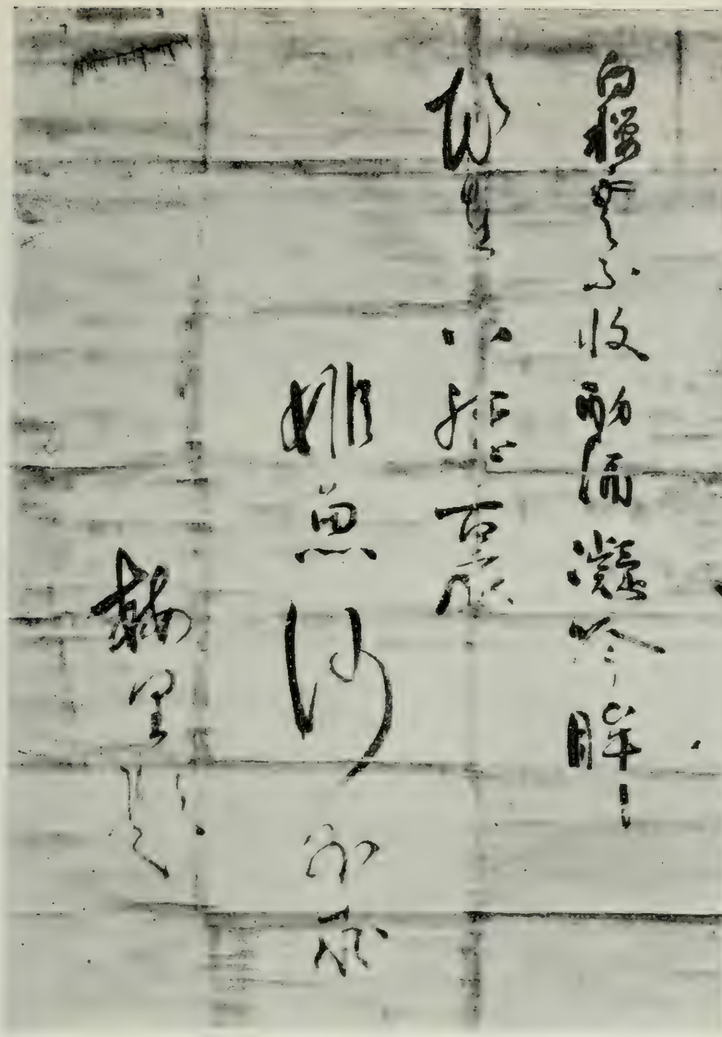
○林家世譜

| | (號) | (名) | (諡) |
|---|---|---|---|
| 一、 | 羅　山(道春) | 信　勝 | 文　敏 |
| 二、 | 鵞　峯(春齋) | 春　勝 | 文　穆 |
| 三、 | 鳳　岡(春常) | 信　篤 | 正　獻 |

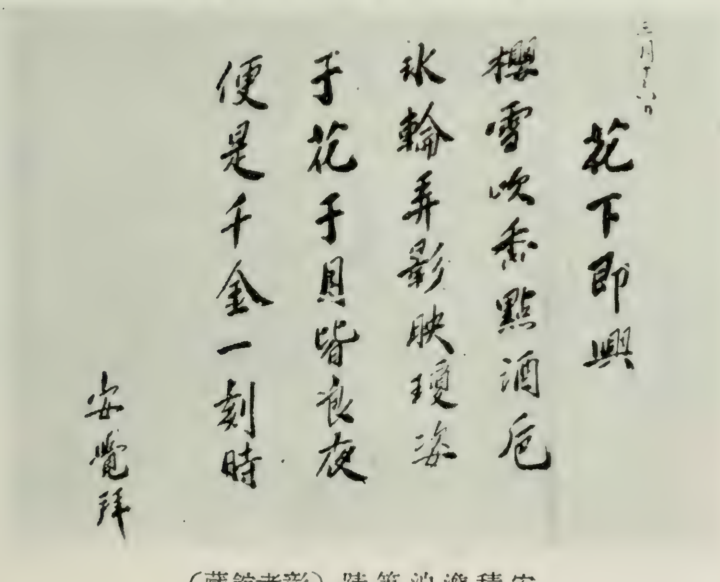
四、榴岡　信充　正懿
五、鳳谷　信言　正貞
六、鳳潭　信徵　正良
七、錦峯　信敬　簡順
八、述齋　衡　快烈
九、檉宇　皝　恭恪
十、壯軒　健　昭肅
十一、復齋　耀　文毅
十二、學齋　昇



徳川光圀肖像（彰考館藏）



徳川光圀筆蹟（彰考館藏）




安積澹泊筆蹟（彰考館藏）

# 水戶學（初期）

## ——大日本史の紀傳編纂に就いて

德川慶光

大日本史が諸種の歷史書の中に最も光彩を放つものの一である事は言をまたぬ。その影響の甚大なるを見ても分明である。たゞその影響にも學術的なものと政治的な影響とを概念的に區別して置く必要がある。但し光圀の意が奈邊にあつたかは一考を要する。

大日本史の目的に就いては對外的日本文化宣揚と、對內的な理由の二に大別する事が出來る。對外的としては大日本史が漢文で書かれて居る點がその主なる理由であるけれども、對內的理由は更に複雜な目的を有する。恐らく大日本史が史記の體裁を取つた事がその目的の奈邊にあるかを推測せしむる理由となる。それは紀傳體を取つたことであつて、自ら春秋三傳の編年體と異なる所以である。從來大日本史が神皇正統記と比較されるけれども、紀傳體と編年體に根本的な態度の相異が認められる

し、又その環境・目的が非常に異なつて居る事も認められる。

神皇正統記の親房に於ける環境は、大日本史に比して非常に惡かつた。史料はわづかに年表一つと親房の教養なり、記憶のみである。而も身を以て常陸の小田城に籠城しながら書いたのであるから、むしろ南朝を立てんとしてもがいた悲痛な血の記錄であると見られる。此の點史實に間違ひのあるのも當然であり、又神皇正統記に對して史實の誤脫を指摘するのも間違つて居るので、親房の意のある所は、唯南朝の正統を歷史によつて證明するにあつたからである。大日本史は此の點に於いて惠まれた環境にあつたと云つてよい。平和な江戶時代の文化的潮流に乘り、時間と史料と財力とに惠まれて居たから、光圀の史觀は廣く、且つ高く批判力に富んで居たと見てよい。むしろ兩者を比すれば、前者は理想主義的であり、後者は現實主義的であつたとも見られる。で、親房は何故に編年體を取つたかと云ふと、宋學の影響を受けて居たからと思はれる。南北朝以前に於いて宋學が日本に輸入されて來たと見るのが從來の定說である。もし之を信ずれば資治通鑑の影響を當然受けて居るのであつて、編年體を取つた理由は、古代よりの帝王の血統を重ずる皇室制度尊重が通鑑に共通であるとすれば、親房の氣持は春秋三傳に遡つて然るべきである。大日本史が編年體を取らないで紀傳體を取つたと云ふ事は、この間基礎的な目的・態度の相異を表明するものである。

次に修史事業を起す光圀の動機については從來伯夷傳を讀んで修史の志を起したと言はれて居る。此の事は大日本史の綱條（肅公・光圀の嗣子）の序にも書いてある事である。亦、親房が神皇正統記を書いたのが常陸の小田城であるからそれに刺戟されたのだといふ說がある。史料的根據はないが、一應尤もである。併し前述の事で修史事業の本質も異なるし、根據がないから遽かに信じられない。もう一つの動機としては林家の本朝通鑑に對抗してやつたと云ふのである。此の話は年山紀聞に出て居る。幕府が林家に命じて本朝通鑑を撰せしめた。そして出版せんとして之を三家に見せた。ところが紀尾二公は書を見て贊成したが、光圀は最後に本朝通鑑を始めから眺めて居たが、本朝天子を吳太伯の後として居たので、その出版を止まらせた。そして之が大日本史編纂の重要な動機となつて居ると云ふのがその根據である。先づ伯夷傳に就いては少し疑問を有する。光圀が史局を開いたのは三十歳であるが、伯夷傳を讀んで感奮したと云ふのは十八歳である。修史事業を起す迄には少し間がありすぎるので調べて見ると、光圀は伯夷傳を讀んで他の事を感じて居る。それ迄は光圀は手に負へぬ腕白であつた。そして三男であつた。そして、兄を越して水戸の跡目と定まつて居たので、伯夷傳を讀んで始めて義に感じ、兄を立てて水戸に嗣たらしめんと父に乞うたが許されず、止むを得ずして兄の子の綱條を自分の跡繼に直したと云ふのが本筋のやうである。而して此の時から光圀は勉學を大に勵

んだやうである。伯夷傳は修史事業には直接の關係はないと思はれるが、光圀自身の人生觀には大きな變化を來したやうであつた。もし修史事業に關係ありとせば、史記全體が光圀に感化を及ぼしたと見るべきであらう。

第二の小田城に刺戟されたといふのは、全然根據がない。本朝通鑑の事に關しては議論のある所である。第一幕府が通鑑を見せたと稱するのが寛文十年であつて、光圀が修史事業を起してから十餘年を經過して居る。それから幕府は本朝通鑑を三家には見せて居ない。もう一つは內閣文庫本の本朝通鑑には本朝の天子を吳太伯の後等と云ふ事は書いて居ない。であるから年山紀聞の此の記事は全く誤りであると見られる。但し本朝通鑑には書いてなくても林家の定說として日本の皇統が支那より渡來して居るとは考へて居たらしい。但し內閣文庫本が林家より幕府に獻納された原本であるか否かは尙一考の餘地がある。要するに今まで定說とされて居た修史事業の動機と稱するものは當てにならないので、やはり光圀の大歷史觀が然らしめたと云つてよいだらう。

併し江戶初期に於いては文化の向上・國民的自覺が外面的な一の要素をなして居ると思はれる。一般の傾向が文化を熱望して居たと見てよからう。そして之に對して種々の文化事業が興つて來た。光圀の大日本史もその一つではあるけれども、他の諸種の編纂事業とは種類がちがつて居たと云ふこと

が出來よう。

大日本史の編纂事業の副産物として出たのが普通水戸學なる名稱によつて現されて居る一思想である。普通は水戸學の思想が大日本史を致さしめたと云はれて居るが、之は間違ひである。あくまでも大日本史の編纂事業が水戸學の基調をなして居る。修史事業の起きる以前に水戸學なる思想的な一つの不文律（何故かと云ふと何も史料がないからである、）があつたのでなくして、大日本史の事業が次第に成熟して行つて水戸學なる思潮を出したと云へる。もしその內容を問はれるならば、光圀の思想が根本的要素をなして居ると云へよう。そして光圀の思想が大日本史の編纂事業となつて表現されたと見るのが至當であらう。而して大日本史の編纂事業も初期と江戸末期とを比すると內容も相當變化を來たして居る。それと共に水戸學も光圀の時代と齊昭の時代とを比すると、非常な推移を來たして居る。主として光圀と齊昭のイデオロギー的相異が斯くあらしめたと見てよいだらう。もし光圀の如き穩健思想を江戸末期迄堅持し得たならば、外國文化の攝取にも大に役立つたであらうと思はれる。

＊

此の小論文に於いては大體前期を主として書いた。そして前半の紀傳の編纂が最も重要と思はれる

からして主として記錄に就いて書く事にする。で編纂事業も長期にわたる所から變化を見せて居るので時代區分を次の通りにした。

第一期　明暦三年――天和三年
第二期　天和三年――元祿十三年
第三期　元祿十三年――寶永七年
第四期　寶永七年――享保五年
第五期　享保五年――文化七年

第一期は明暦三年史局が開かれてから第一回の草稿本が中途で打切られた時迄である。第一回の草稿本は編纂の當時は新撰紀傳と呼ばれてゐたが、天和三年打切られてより數年後に舊紀傳と呼ばれた。之に關する直接の史料としては修史條例、新撰列傳目錄、假名紀傳義、假名鎌足傳、舊紀傳目錄、等を餘すのみで、稿本としては新撰列傳目錄一册のみで、本文は殘つて居らぬ。わづかに假名鎌足傳が本文の書下しとして推測するに足る唯一の史料である。之に對して間接の史料としては御意覺書、往復書案、修史始末、文苑雜纂、耆舊得聞、等がある。

舊紀傳に關しては前に藤田幽谷、小宮山楓軒、後に三浦周行博士が各々往復書案の一片を引用し德富蘇峰氏は楓軒の耆舊得聞に據りて紹介されて居るにすぎない。

明暦三年史局を駒込に置いてより直ちに史料の蒐集とその抄錄を始めて居る。而して舊紀傳の編纂に手が附けられたのは、恐らく數年後であらうと思はれる。舊紀傳撰者考附錄の脩撰人名目錄は起草者の略歴を附して居るが、その中に辻了的が居る、彼は寛文八年に死んで居り、相當多くの草稿を書いて居るからして、恐らくは寛文二・三年頃に起草されたと思はれる。無論起草されてからも史料の蒐集に勉めた事は、御意覺書、往復書案等によつても明らかである。

天和三年に至り舊紀傳は光圀の意に滿たず、打切られるに至つたが、その主要なる原因として史料の蒐集が大に進んだ事があげられる。天和三年以後に編纂起草されたのが現存稿本である。此の打切られた年月は明瞭にはわからぬが、天和三年十一月以前である事は確實である。往復書案中の江戸史館日次記に、

天和三年十一月六日、新撰紀傳清書一百四本今日從水戸到着八兵衛方ゟ平方へ相渡候事

とあり、この一百四本は舊紀傳目錄に一百四卷とあるのと一致するので、此の時に打切つてしまつて居た事は事實である　この記事は舊紀傳目錄にも引用朱書してあり、修史始末にも漢文に直されて引

用してある。而して迄られて來たのは清書本であるので、天和三年以前何時打切られたかは知らぬが、天和二年以後、恐らくは天和三年になつて間もなく打切られたと思はれる。

修史を何時代で終らしめるか、志類の編纂をするかどうか、等と云ふやうな問題も既に舊紀傳の時代に議論が出て居る。文苑雜纂中に收められて居る田中止丘の開彰考館記には次の如く出て居る。

命諸儒臣、廣稽載籍、上自神武、下訖今世、作紀立傳、做班馬之遺風、以撰倭史、有年於玆云々

併しこの開彰考館記によつて直ちに光圀の時代迄作る積りだつたと見るのは早計であるが、一應考へる必要がある。史料蒐集にもその用意があつたらしく御意覺書の天和三年には增補信長記等の名が出て居り、往復書案の史料蒐集の狀況を見ても、光圀の時代迄作る積りであつたことは理解出來よう。但し、新撰列傳目錄は大體北條時代を區切りとし七十卷で終つて居る。そして北條泰時が最後である。尤も新撰列傳目錄が天和三年より少しく以前に出來たものらしいので、從つて列傳の最後の區切りも少し時代が下つた所迄書かれたかと思はれる。それは舊紀傳目錄を見ると本紀が後醍醐天皇迄書いて居り、卷數目錄に次の如く朱書して居るので、大體列傳も後醍醐天皇迄書かれたのではないかと思はれる。

本紀二十一　神功ハマダ本紀ニ立ツ、大友本紀、後醍醐マデニテ終ル。

舊紀傳目錄は天和三年より數年後に書かれた事は明らかであつて、舊紀傳に關する目錄としては完全であり、洩らして居らぬ事も明瞭である。

要するに、紀傳を光圀迄作る意志が始めあつたにしても、新撰列傳目錄及び舊紀傳目錄が各〻永久並びに後醍醐で打切られて居る事は、何等かの指標を示すものであらう。唯御意覺書には天和三年十一月五日に次の如く出て居る。

後小松迄ニテ絶筆と兼而被　仰出候得共思召御座候間後小松以後ノ事ニ而も紀傳ニ入可申所ヲハ

右之通表題朱點可仕候事

之は一寸疑問の持てる文であるが、天和三年十一月五日の記事であるから當然第二回稿本たる現存稿本に關する記事である。由つて舊紀傳に關しては不明であるけれども、現存稿本に於いては後小松迄と始めから規定したものであつて、「後小松以後ノ事ニ而も」云々は、たとへ後小松天皇の崩御迄と區劃しても史料に於いてはその後迄を見る必要があつた爲と思惟される。

舊紀傳の內容體裁に關しては、新撰列傳目錄、舊紀傳目錄、修史條例、假名紀傳義、假名鎌足傳、等が史料として擧げられるが、何れも傍系の史料であつて、直接の稿本としては新撰列傳目錄一冊を餘すのみである。本文は假名鎌足傳が和譯乍ら本文を推測する上に唯一の史料である。之等の史料を

集約して舊紀傳を推測して見ると、本紀二十一卷、皇后紀五卷、諸女列傳二卷、皇子傳五卷、雜士列傳一卷、列傳七十卷となつて居る。皇后は現存稿本に於いても流布本に於いても、列傳中に入つて居るが、舊紀傳には本紀に入つて居る。新撰列傳目錄中には列傳七十卷を、歌人・叛臣・文藝・儒林・義烈・方伎・循吏・賢人・孝子・烈女の各部分を立ててゐる。但し、列傳は七十卷の完成を見ずして打切られてしまつて居る。この列傳の部分は、舊紀傳目錄、修史條例、新撰列傳目錄が各〻異なつて居るので、恐らくは部分の判然たる決定を見ずして打切られたものと思はれる。

次に志類の編纂は舊紀傳時代にも種々の論議がされて居る。天和三年以前には無論稿本は出來て居ない。唯史料の蒐集は心がけて居るので、延寶八年の往復書案に次の如く出て居る。

竹內御門跡ニ音樂之書御座候由御才覺可被成之旨御意被成候南都ニも樂書多御座候由御聞及被遊候何とそ一乘院御才覺ニて相調申候樣ニ可仕旨被仰出候惣而此方紀傳之音樂志ノ便ニ成申候樂書御才覺可被成申被仰出候

八月十三日　　右　平

理　介

介三郎□□　　左　助

之によると修志は舊紀傳時代には既に決定を見て史料蒐集に乘出して居り、光圀もその意志を固めて居つたのである。天和三年になると光圀の意志は明瞭になつて來て居る。御意覺書の天和三年十一月二十七日には次の如くある。

一、中臣祓ノ書傳授之事藝文志・神祇志・經籍志之内可然方へ無失念可入旨御意也、

又左衞門　左介　介三郎　新八　奉行也

但し光圀薨去後に志表の編纂をするか、しないかで大問題を起して居るけれども、遂に此の御意覺書の記事が理由となり、編纂を起す事になつた。

さて大體に於いて第一期の天和三年十一月迄の經緯を書いたが、此の時代は大日本史としては黎明期であると共に彰考館の基礎を置いた最重要期であると見てよい。第二期の元祿十年迄は實に彰考館として最も充實し、水戸學的イデオロギーの大發展を見た時代である。天和三年八月には安積澹泊が彰考館に入り、人員も充足し、史料も整ひ、思想的にも大に進展したときである。第二期に入る前に舊紀傳に與つた人々の名を記して置かう。

辻了的、松田如閑、吉弘元常、板垣宗憺、辻興庵、藤井紋太夫、中村顧言、小宅生順、人見傳、今

井新平、田中理介、鵜飼練齋、岡部忠平、佐々宗淳。

以上十四名の人々は皆舊紀傳の起草に筆を取つた人々ばかりである。

第二期は現存稿本の筆を起してより百王本紀が出來た時迄を云ふ。此の間元祿三年には光圀が隱居して綱條が襲封し、翌四年には光圀が西山に移つて修史に專念する事となつた。

現存稿本が手を附けられた年月は分明しない。江戸史館雜事記には新撰紀傳の淸書本が天和三年十一月に江戸に到着して管庫に收められた事を載せて居るし、又總裁を始めて彰考館に置いたのが同月である所から、恐らく天和三年十一月以後であらうと思はれる。現存稿本の見返しには諸種の事が書いてあり、起草の年月、校合者の人名等があるが、天和三年の撰と明記したものがなくて、翌貞享元年の干支が最古である。本紀に於いては白河・堀河・近衞・六條・順德・後伏見・花園等の初稿本は貞享元年に原典と對照したことが見返しに出て來る。之等の外に比較的早く起草されたと思はれるのは、淳仁天皇紀（廢帝）の初稿で、山縣元纜（三左衞門）の校合が見返しに出て居る。而も元纜は貞享三年に歿して居るので、當然その前に作られてゐる。又列傳では平城・嵯峨兩帝の皇子傳と村上より後三條の皇女傳が比較的早い。何れも卯十二月、臘月の十二支が見えて居る。中に大串平五郎（雪瀾）の名が見えて居るので、彼の歿年から推して此の卯年は貞享四年丁卯と認められる。

是等から推して天和三年十一月以後に於いて大體起草されたと思はれる。元祿十年には百王本紀の草稿が出來上り、十二年には后妃・皇子・皇女の三傳が出來上り、十三年には群臣列傳も草稿略〻終るも校訂が未だ畢らず（何れも往復書案）と云ふ風に元祿十三年十二月六日、光圀の歿前に大部分は完成に近附いて居た程、第二期は成績をあげた。此の間種々の問題はあるけれども、他の機會に讓り、此の稿に於いては大體を述べよう。かく第二期の光圀の存命中には諸員よく修史を完成に近からしめたが、光圀の薨後この勢を續ける事の出來なかつたのは遺憾である。併し此の基礎あればこそ二百數十年にわたる事業も遂行されたと云へよう。で第二期には水戶學イデオロギーの發展期にあつた事である。彰考館員の手によつて諸種の書籍が出來上つた。

唯この間に於いて問題となつて居るのは、光圀が稿本に直接筆を入れたかどうかの問題がある。日を通した事は確實であるが、筆を入れた事に關しては、三浦周行氏並びに菊池謙二郎氏の間に論戰を展開して居られる所である。三浦氏は書入說であり菊池氏は否定說であるが、何れも問題となつて居るのは伊東祐親傳（四枚）と曾我時致傳（十枚）の合册で彰考館に現存して居る。此の十四枚の一册に附箋が二十六枚附してあり、附箋が問題となつて居る。

尙第二期に於ける見るべき事業としては彰考館總目錄の編纂がある。彰考館總目錄は大串元善等の

輯錄にかゝり、元祿四年の撰である。大日本史編纂事業に取つて史料關係を調査するには必須のものである。從來大日本史には史實の誤りが往々ありとの批難があるが、史料の少い當時にあつては亦止むを得ぬ事であつて、史料と史實から出た結果との關係をも調査すべきであらう。その點から云つて元祿四年の目錄はよい資料である。

第三期（元祿十三年——寳永七年）は初稿の完成と校正の時代である。列傳の初稿が完成したのが、寳永七年であるから、之を一期とした。修史始末には、紀傳の完成を寳永六年にして居るが、一應此の時に出來上つたので、列傳の初稿の書直しを一部したので、寳永七年に及んで居る。此の間、安積澹泊が本紀を再檢し終る等重要な事が相當あるが、むしろ初稿の進行が第二期に比して遲々たるものであつた。而して第三期はむしろ校正時代に入つたと見てよからう。唯注意すべきは、寳永六年より七年にかけて紀傳の成るを以て諸種の議論が出て來た。或は志表を附するか否かの問題であるとか、或は續編の議（後小松以後の紀傳）であるとか、果ては彰考館並びに大日本史の本質論等重要なる多くの問題が起つた。續編の議は遂に止んだが、志類の編纂に關しては議論が多かつた。併し寳永七年には禮樂・天文・五行・食貨・地理・災祥・刑法等の稿本十數卷が出來て居た事は事實である。

（往復書案、修史始末所引）

次に第四期であるが、之は享保五年紀傳一應完成して幕府に獻ぜし迄を云ふ。此の間重要な事としては紀傳を命名して大日本史とした事、（正德五年四月）大井廣が肅公に代つて大日本史序を作つた事、（同十一月）紀傳が一應脱稿して肅公に呈覽した事、（同十二月）安積澹泊が紀傳の論贊を作つた事、（享保元年）綱條の薨去、（享保二年九月）等重要な事項が多い。而して遂に享保五年一應の完成を遂げて幕府に獻じた。之を享保本と稱して居る。享保本は本紀七十三卷、列傳一百七十卷、序目修史例引用書目各一卷等總計二百五十卷であり、論贊の附してある事が最大特徵である。

これで一應紀傳は完成したわけであるが、尙愼重を期して校正を何遍かやつて居る。無論內容の檢討も同時に行つて居る。卽ち紀傳に就いては、最後の純粹の校合時代である。五代良公に至り、享保十九年四月には安積澹泊に命ずるに全書を檢閱するを以てした。而して澹泊は元文二年之が檢閱の功なり、直ちに繕寫上梓し得るに至つた。次いで澹泊は十二月十日水戶の自宅に終つた。

寬延二年には澹泊の檢閱せる紀傳を淨寫再校し、寬政元年十二月には塙保己一をして大日本史を校せしめた。更に寬政八年には高橋廣備が水戶史館に於いて本紀の校正をして居る。實に第五期は紀傳の校正時代とも云ふべく、而も之等の校正は皆相當成績があがつて居る。更に此の寬政頃は六代治保（文公）の時代であり、彰考館の再興時代とも云ふべきであつた。治保は屢〻館員をして紀傳を侍讀

せしめて居る。寛政十一年には更に紀傳の淨寫をして居り、享和三年には亦紀傳の校正を令して居るが、蓋し此の校正は最後の校正であつた。而して之等幾度かの校合刪正の間、遂に論賛は除去されて、澹泊の努力も一部は載せられぬ事となつた。而していよ／＼文化六年には紀傳も版を起して七年十一月完成し、京都に進獻するに至つた。貞享元年再稿を起してより一百二十七年を經過して居る。尙此の第五期に於いて重要な二・三の事がある。一は青山延于等の撰になる東藩文献志であり、二は藤田幽谷の編になる往復書案であるが、之は參考書解題に述べる。

是迄で紀傳の編纂事業の經過の大略を述べたのであるが、尙盡くさざる所が多い。最後に志類に就いて述べる。最古の記錄は、延寶八年の往復書案であつて、必ずしも編纂が確定したわけではないが、編纂の用意をやつて居た事が知られる。

竹内御門跡ニ音樂之書御座候由御才覺可被成旨御意被成候南都ニも樂書多御座候由（後略）

八月十三日　　右平

理介

左助

介三郎□□　　宗憺

次に出て來る史料は御意覺書であつて、天和三年十一月十四日には

一、中臣祓ノ書傳授之事藝文志・神祇志・經籍志之中可然方へ無失念可入旨御意也、

又左衛門　左介　介三郎　新八　奉行也

天和三年十一月は舊紀傳が打切られて現存稿本に推移しつゝあつた時代であるから、此の頃に大體編纂が決定を見、內容に關する檢討がなされたと見るべきである。御意覺書には更に貞享元年八月に禮儀志の名が出て來るし、同じく元祿九年には佛敎志に關する記事がある。其他修史始末、對讀隨筆、十竹遺稿、文苑雜纂を集計して見ると、元祿十年迄に出て來る志類の名目は次の十一である。

音樂志、藝文志、神祇志、經籍志、禮儀志、五行志、天文志、佛敎志、氏族志、兵馬志、百官志

要するに志類をはじめ如何なる體裁でやる積りだつたかわからぬ。志類の編纂の進行と共に、十四志になつた事もあり、十三志になつたり、種々改廢がある。現在の決定版は十志である。而して寶永七年には禮樂志等の抄錄十數卷を旣に書いて居た事が修史始末に見えて居り、寬保元年に五志を完成した事も見えるが、その速力は遲々たるものであつた。そこで寬保元年には分擔者を定めて進行を計つて居るが、此の時の志目は十四になつて居る。併し乍ら之等の志稿は、天明七年の彰考館の火災にかゝり半數以上を燒失した事は惜むべきである。

そこで再び志類を數人に分屬して第二回の稿を起して居り、かへつて火災が刺戟となつて稿も進んだ。けれども文化二年六代文公の死によつて一頓挫を來したが、文政十二年九代烈公の襲封があり、之と共に豐田天功を得て大に進行した。而して澹泊の紀傳に於けるが如く、志表に於ける天功の努力は最も與つて力があつたと云はねばならぬ。

以上に於いて紀傳並びに志類の文化までの大體の進行狀況を述べたつもりである。併し尚調査頗る不十分である。京都帝大所藏の往復書案に關しても、亦彰考館に蒐集されて居る諸資料に就いても、未だ研究の開拓すべき範圍は頗る廣い。將來の研究に待つべきである。尚重要なる二三の書に就いて解題して見よう。

## 一　修史例

彰考館に現存せるもの七種を數へ、文獻上に現れて現存せぬもの三個を數へられる。次にその重要なるもの數種をあげよう。

1　修史條例　彰考館藏

一枚、相當大きな紙に書かれて居る。修史始末にはなく、作成年月は不明である。皇后を本紀に編

入して居るから舊紀傳に關するものである事は間違ひない。舊紀傳の編纂が始まつたのが寛文二・三年頃と推定されるから、此の修史條例は寛文五・六年頃の作と思はれる。編者は不明である。特徴は皇后を本紀に入れて居る事、神功皇后を皇后として天皇の本紀に立てて居る事等である。

2　修史義例

「澹泊文集」「書重修紀傳義例後」に出て來るが現物は發見されない。安積覺等の編であるが、現存稿本を編纂し始めてより最初の修史例であるから殘存して居れば重要である。而して元祿二年の撰である。

3　重修紀傳義例　　彰考館藏

元祿九年、安積澹泊、佐々宗淳、中村顧言の三人の編である、八十四ケ條より成る。修史義例との間、數回補正されて居る。第一回の補正は元祿三年であるが、之も如何なる補正か內容が不明である。次は元祿四年に編修規約なるものが出來て居り、之は彰考館に現存して居り、前者の修史義例を四ケ條增補して居る。次は元祿八年澹泊等が本紀書法數條を規定したと修史始末にあるので、補正として重要であるが、內容がわからぬ。かくて重修紀傳義例となるので、現存するものとしては最重要である。

4　修大日本史例　　東大圖書館藏

正徳五年編、東大圖書館所藏の享保本大日本史に附してある。次に書く元文元年頃(?)の修史例と重修紀傳義例との中間内容を有する。修史始末には正徳五年十一月に、「是月更名修史義例曰修大日本史例、頗有所附益」とあるのが此の修史例である。丁度此の少し後に紀傳の淨書が出來て居るのでその爲の修史例と見られる。

5　修史例　　彰考館藏

一冊、編者は不明、元文元年頃と推定される。最後の延享元年の改正修史例から見ると一・二條少い。栗田寛の書狀を序文代りに載せて居る。此の書狀は非常に不合理な手紙で或は他からまぎれ込んだのではないかと思はれる。

6　改正修史例　　彰考館藏

第一頁に「宜以此本爲正延享甲子識」となつて居る。編者不明。數ヶ所直してあるから必ずしも最後的なものではないであらうが最後に近いものらしい。紀傳の版を起したのが文化七年であるから改正修史例との間六十五年を經て居るので或は此の修史例も部分的には直されたのではないか。唯此の修史例は内容が今までのと比し最後的であり、完備して居る事は事實である。六十九條よりな

つて居る。

以上の六個で重要なる修史例を一應説明した積りである。他に三・四ないではないが部分的なものであるから省略した。

## 一　往復書案　　京大圖書館藏

二百四十九册、京大圖書館には目錄共二百四十九册であるが、目錄によると七百册であるから三分の一强が京大に入つた事になる。往復書案は寛政八年藤田幽谷が修史始末を作る爲に彰考館にありし書簡案を編纂したものである。大きなものであるから必ずしも幽谷のみが編したとは云へぬかも知れぬ。内容も大體寛政八年迄である。試みにその目錄、並びに册數を記さう。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 目錄 | 一册 | 御隱去後御附屆留 | 一册 |
| 往復書案 | 五二二册 | 西山書籍出納卷帖 | 一册 |
| 江戸史館雜事記 | 一册 | 京都往來書籍印券 | 一册 |
| 水戸史館雜事記 | 四八册 | 京都御許借本證印 | 一册 |
| 兩京日記 | 一册 | 一條樣ヨリ大嘗會之書御借被成度由來書目 | 一册 |

御書御許借御賜贈留　一册
公儀御記錄御用始末　二册
所藏記錄考御用留　一册
御書物賜贈記事（諸判形帖）　一册
館本新寫諸方へ被遣書目　一册
禮儀類典草稿目錄　一册
類典御許借控　一册
類典書寫例　一册
類典編次書目　二册
類典年月抄出御用始末　一册
類典編次書目伊呂波寄　一册
類典書法事例　一册
類典記錄異同考　一册
類典校正義　一册
類聚淸書目錄　一册
類典進献記事　二册
類典用具卷書　二册
常山文集鏤板記事　一册
常山文集刻板數目　一册
常山文集賜贈目錄　一册
常山文集賜贈卷帳　一册
御文集板行錄　一册
拾葉集記事　一册
拾葉集板行目錄　一册
拾葉集賜贈劵書　二册
日本史盛衰記書寫姓名　一册
盛衰記御用始末　一册
盛衰記刪定記事　一册
開彫新議　一册
管庫職掌　一册

| | | | |
|---|---|---|---|
| 管庫筆記 | 一冊 | 手形留 | 一冊 |
| 御講記 | 一冊 | 表紙屋手間銀留 | 一冊 |
| 忘備錄 | 一冊 | 寛政八年献納書目 | 二冊 |
| 寛政乙卯石川久徵日記 | 一冊 | 諸品諸取元帖 | 一冊 |
| 館務擧要 | 三冊 | 文恭祠堂開聽名簿 | 一冊 |
| 館務雜事類抄 | 五冊 | 史局日記 | 一九冊 |
| 館務謹書出控 | 二冊 | 史館日次記書拔 | 一冊 |
| 館中賜饗券文 | 一冊 | 御川留 藤田庸手抄 | 一冊 |
| 吉田藥王院仕立書附 | 一冊 | 富田理介筆記 | 一冊 |
| 御書物表紙屋相渡控 | 一冊 | | |
| 晒書御用書送 | 一冊 | 南溪手簡 | 二一冊 |
| 表紙屋手形留 | 一冊 | 館生選擧議 | 二二冊 |
| 書劵 | 一冊 | | |
| 日本史進獻經師手間手形元帳 | 一冊 | 詮選 | 一冊 |

但し此の目錄と現存本との對照は未濟である。

尙右の目錄は京大名譽敎授新村出博士に依囑したものである。その御厚意を深謝す。尙三浦周行博士の「日本史の研究第二輯」中に大日本史の史料採訪と題して京都の往復書案を基礎とした研究があり、參考になる點が少くない。

**一　東藩文獻志**　無窮會神習文庫並上野圖書館藏

三十六卷、青山延于の建言により、藩命を以て彰考館員の撰する所である。主として努力したのは延于であつたが、延于の子延光も與つて力があり、八代哀公の死後一時中止し、九代烈公に至つて再び力を致し、杉山忠亮、岡崎正忠等が編纂の任に當つたが不幸にして中止された。而して內容が六代文公に筆を絕つて居るのは惜むべき事である。

本書は流傳極めて少く、紹介も福井久藏博士の「諸大名の學術と文藝の硏究」等にわづかになされて居るに過ぎぬ。

三十六卷の完本は無窮會神習文庫と上野圖書館にある。無窮會本は織田確齋氏が筆寫せしめて歿後無窮會に入つたもので、原本は不明である。併しそれ以前に無窮會には淸水正健氏の寄贈にかゝる缺本がある。上野圖書館本は栗田寬氏の後序と內藤耻叟氏の跋がある。完本であり、大體織田本とテキ

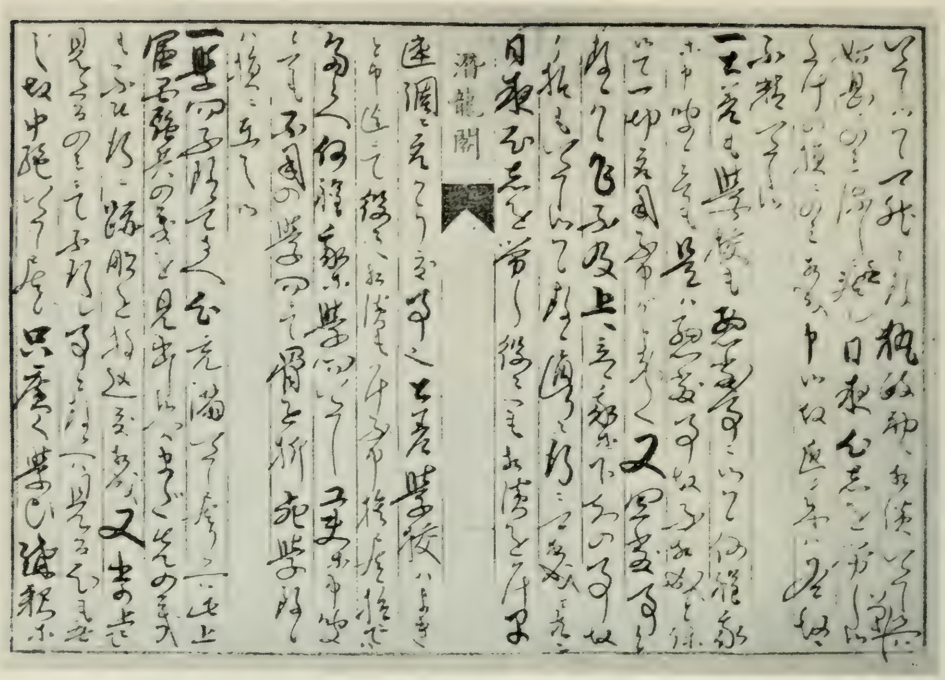
ストは同系統である。「松平氏藏書記」の印があり、來歷は不明である。唯上野本には青山延壽記なる欄外の書入れがある。上野本織田本共に齊昭の重修であるらしい。

併し原本が不明であるにせよ、上野本、織田本共に殆ど完備したものであるから、水戸藩志としては據るに足るものである。目錄を次にあげると、

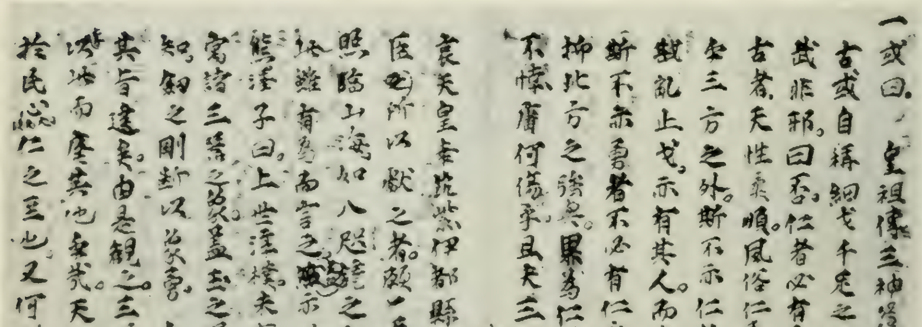
| | | | |
|---|---|---|---|
| 初代威公——六代文公世家 | 七卷 | 烈女列傳 | 一卷 |
| 家人列傳 | 二卷 | 循吏列傳 | 一卷 |
| 列傳 | 一七卷 | 藝術列傳 | 一卷 |
| 儒林列傳 | 三卷 | 方伎列傳 | 一卷 |
| 歌人列傳 | 一卷 | 姦臣列傳 | 一卷 |
| 孝子列傳 | 一卷 | | |

本文には一々典據をあげ水戸中葉迄の歷史を調べるには必讀の書と云ふべきである。又學者の傳を調べるには儒林傳三卷が簡にして要を得て居る。

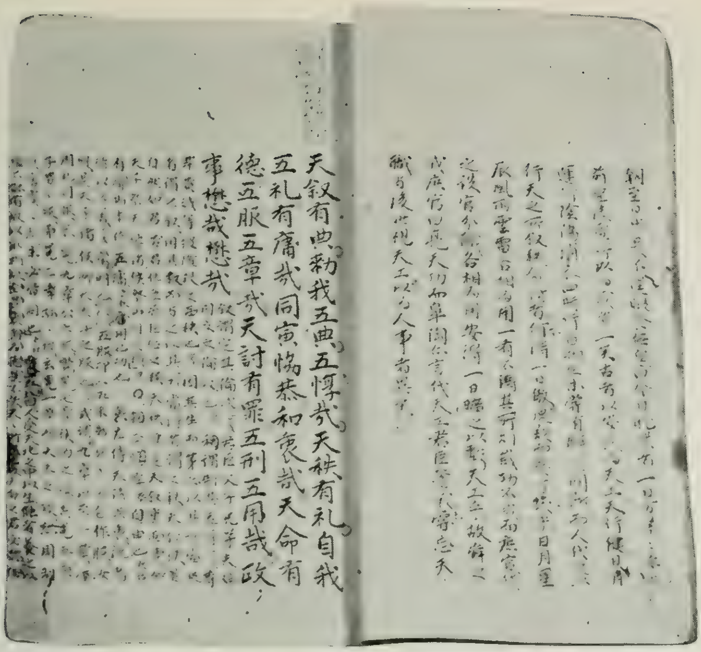
昭和一三、八、一九、稿了　輕井澤にて




烈公親書。學校設立に關して執政藤田主書（貞正）等を督促せる一節にして天保四年頃と推定さる。 潛龍閣は烈公書院の號なり。（水戸坂本家藏）

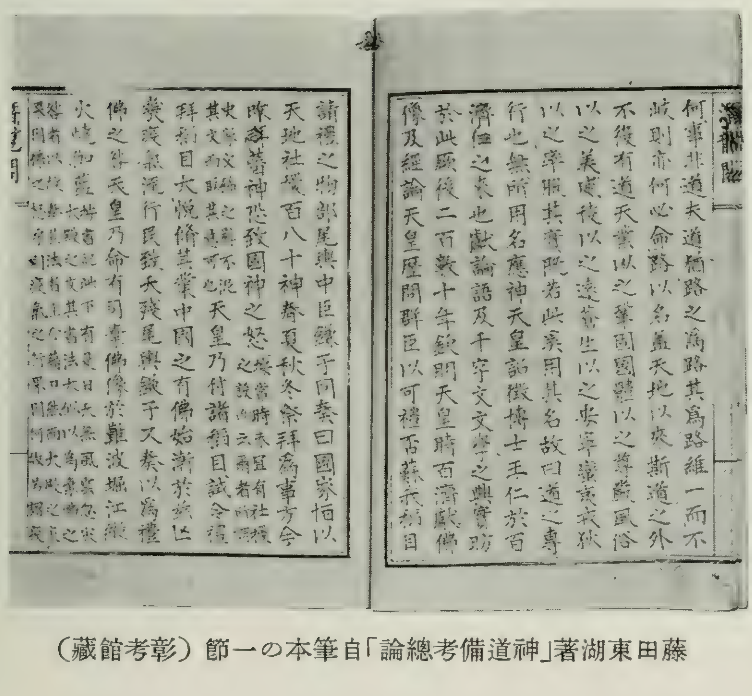


藤田幽谷筆「幽谷隨筆」の一節。三種神器論にして寛政三年十八歲「正名論」述作時代の筆蹟。 裏面は十五歲史館下走時代の文稿なり。（水戸坂本家藏）



天叙有典勅我五典五惇哉天秩有礼自我五礼有庸哉同寅協恭和衷哉天命有徳五服五章哉天討有罪五刑五用哉政事懋哉懋哉

會澤正志齋自筆稿本「典謨述義」下皐陶謨述義の一節にして寺門先行編「會澤先生略譜」天保十一年五十八歳の條下に「先是稿典謨述義　至是成」と見ゆ。（會澤家藏）



何事非道夫道猶路之爲路其爲路維一而不岐則亦何必命路以名蓋天地以來斯道之外不復有道天業以之肇國體以之尊嚴風俗以之美遠祖以之遂蒼生以之安夷蠻戎狄以之率服其實既若此矣用其名故曰道之尊行也無所用名應神天皇詔徵博士王仁於百濟仁之來也獻論語及千字文文學之興實昉於此厥後二百數十年欽明天皇時百濟獻佛像及經論天皇歷問群臣以可禮否蘇我稻目

請禮之物部尾輿中臣鎌子同奏曰國家恒以天地社稷百八十神春夏秋冬祭拜爲事方今改拜蕃神恐致國神之怒天皇乃付諸稻目試令禮拜稻目大悅修其業中國之有佛始漸於斯已而疫氣流行民致夭殘尾輿鎌子又奏以爲禮佛之咎天皇乃命有司棄佛像於難波堀江縱火燒伽藍

藤田東湖著「神道備考總論」自筆本の一節（彰考館藏）

# 水戸學（後期）

## ——その中心思想の一考察

藤澤誠

### 一 序説

水戸學は二百五十年間に亙つて水藩君臣一體の上に發達したる一大思想體系であつて、その目的とするところは吾大和民族の理想たる皇道を開顯して國民的自覺を促し、その使命を達成せしめんとするに在り、その學問的方法に於ては儒教——主として春秋・宋學の正名主義の軌道を藉りて展開した實學であるのである。而してこの實學はその體系に於て時代相に卽して一大轉化を生じたる爲、觀る人說明の便宜上區劃を設け、その（二代）義公を中心とする時代を初期史學時代とし、（六代）文公より（九代）烈公の時代を一括して後期精神學時代とし、水戸學としての特殊性はこの後期に在ると見るのである。然し初期に在つても精神學の要素が基本であつたことは勿論であり、その後期に於ても

史學が絶えたのではなく寧ろ發展させ、完成せしめたことは人の知るところで、かの大日本史を水戸學の經とするならばこの精神學は正しく其の緯であると云へる。

却說然らばこの後期水戸學とは如何、之を要約して云へば義公精神の時代的再檢討から生れた皇道の闡明と實踐がこれである。更に稍〻具體的に云へば文公時代に蔚起した正名思想から國體論が生まれ、これを礎石として烈公時代に及んで國民道德に發展したもので、先づ藩學の歸向を定め、幕末の思想界に投じた啓蒙の一大巨彈が實に水戸精神學であるのである。かくてこの精神學の學問的組織を一括して云へばその中心思想は神儒一致に在り、儒の文に憑つて我固有之道卽ち神道の本質を啓示し、之を信奉し、之を指導原理として國家政治に國民道德敎育に活用したものである。されば初期に比して大なる相違を指摘すればこの指導原理の理論的組織確立であるが、その後期に於てこの確立に當つて常に威・義二公にその基點を置くところに水戸學全般に亙つて、その經のみならず、その緯たる精神學に於ても一貫の立場を認むることが出來るであらう。

## 二　本　論

この緯たる後期水戸學の結晶が烈公の「弘道館記」に在ることは天下周知の事に屬する。その博大

中正の道を道破せること江戸幕府時代隨一の大文字であると稱せられてゐる。

以下この「館記」を中心にして神儒一致の思想から皇道の意義が如何に說明され、如何にしてかく展開されて來たかを窺つて見ることとする。因みに藩黌としての弘道館は「知人撰人には學校の外無之、君は一人の君にして士民は數萬なれば、君一人の學問にて持張らんとするは無理なり」(烈公御直田中書)の意見から史館を發展せしめたもので、かの岡山の閑谷黌に暗示を得て獨創的に施設し、その文武百般大々的に竣工整備されたのは天保十二年で、開館式の擧げられたのは安政四年五月である(水藩史料上篇卷十六附錄下參照)。而してこの「館記」は已に天保九年三月烈公の主義と名の下に會澤正志・青山拙齋・佐藤一齋等の意見潤色を徵し、藤田東湖の手によつてその博大なる教義と確乎たる信條が綴られたのであるが、字數わづかに四百九十一、行文簡にして意義多端、實に記文の體以て詳悉すべからざるものがあるのである(退食間話序烈公之語)。故にこの「館記」の思想を把握するにはその經に對する傳とも稱すべき「弘道館記述義」「退食間話」の思想を玩味しなければならない。「述義」は東湖が半生の心血を注いで述作したものであり、「間話」は會澤正志が「青山延于等と議り、俚俗の語を以て初學童蒙に其の梗概を知らしめよ」(間話序)との仰を蒙つて述作した問答體假名交り文で、その名著「新論」・「下學邇言」の姉妹篇である。

「館記」の中心思想は道の意義に在る。正志は之を解して「天經に出で、民彝に存す」と云ひ、東

湖は「純一」「固有之道」と云ひ、而して豐田天功は述義に序して「神聖一源之大道」と名づけてその內容を簡單に左の如く說明してゐる。

(一) 一源大道之所二自來一――蓋自下天祖之以二鏡劍一傳二天孫一、降中臨下土上神明之象見焉。君臣之分定焉。父子之倫立焉。統二御萬方一之道行焉。

(二) 文レ之以二周公之禮樂一――至二神武崇神一、神明威靈尊嚴淳素之道愈彰焉。及二應神天智一資二周孔之敎一以黼二黻皇猷一、禮樂典章燦然大備矣。

(三) 整二頓振三攝之一、――其將臣世々效二其武一以戡二定禍亂一、其相臣世々修二其職一以經二綸密勿一。其國造縣主世々率二其民一以服二皇家之事一。世風以レ是淳朴、人臣以レ是敦龐、皇靈赫々、遠被二于八洲之表一、自二蠻夷戎狄一莫三敢不二來王一。

(一)は道の淵源を述べたもので「統御萬方之道」は神道である。(二)はその實證され、儒敎に資つて以て發展した迹を述べたもので、その「淳素之道」とは神皇一致の道、神儒一致の道である。(三)はその道の實踐で、臣道を說いたものであつて、神聖一源之大道とは以上を一括した稱呼であつて、三宅觀瀾が已にその名著「中興鑑言」に說いた皇道(論德修身)の具體的說明語に外ならない。而して之によつて「館記」の道の意義は大體盡されてゐると云つてよいが、更にこの道に對して正志・東湖の所說の一

端を述べて道の輪廓内容を明かにして見よう。

正志の問話所記によれば中庸に所謂率性の道と「弘道」の道とは截然區別され、この區別が皇道の基本概念となつてゐる事は看過出來ない點である。乃ち正志は中庸の道を「道の立たる本」とし、弘道の道を「道の本」とする。「道の本」とは天地自然の道「天經」で五品・五教自然に具有すると見る。故にこの道が闡明さるる時衆人往反滯ることなく、多岐に迷はず、中庸の道亦立つ所以と推論し(人能弘道の段取意)、天經は卽ち天祖の道、人倫五典は紀・記・拾遺に說かざるも已に天祖・諸神の御行事にあつて皇道の淵源をなすとし、引いては神皇一致の道より忠孝一致の道を抽繹して寶祚無窮、國體尊嚴を說き來り說き去つて餘蘊なく頗る平易簡明である(上古神聖の段、寶祚無窮の段參照)。かの「閑聖漫錄」に於て神州と漢土との建國の體を比較して「神州は萬民を以て一君を仰ぎ奉り、漢土は一人を以て萬民を治むるを本とす」(堯舜禪讓の條)と述べてあるのはこの天經論の歸結で蓋し名言である。只問話に於てはこの「天經」自然の道と神聖の道、天地と神聖との表現歸一の關係に迄說き及ぼしてをらないのは初學童蒙を對象とした爲であらう。

次に東湖が「館記述義」に於て述べたる道の意義は之を問話の所說に比較すると用語の相違あり、多少內容の相違を認めることが出來るが大體に於ては同じである。只東湖には不拔の信念からその說

が割出されたところに自ら用語と內容に相違を來たしたものと思はれる。乃ち述義には問話の所說に百尺竿頭一步を進めて天地と天神發生の先後問題を提起して次の如く說く、

天神、生民之本。天地、萬物之始。然則生民之道原二於天地一、而本二天神一也。（弘道章）

而して齋部廣成の「古語拾遺」、源親房卿の「神皇正統記」の所說を載せ、拾遺に所謂「取レ信實難」、正統記に所謂「神先降而生二其物一歟、抑物完成而神依レ之歟、神代之事固不レ易レ測」を味ある言として、館記に中庸の「天地位焉、萬物育焉」を假りて神聖經綸の迹を讃せる烈公の卓識を稱嘆して兩者に過ぐとなし、扨曰く、

徒視以爲下形二容功化一之辭上則不可也。抑亦穿鑿臆度、謂二天地何如而剖判、萬物何如而生育一則又恐非二公之意一也。（天地位焉章）

と。これ烈公の把握せる道の本體に對する信念を述べたもので、この信念は又東湖の信念で、この信念を以て道の觀念を割出し、この道の觀念から皇道の本質を抽出實證したのがその所說である。かくてこの述義は問話と同じく吾民族の特殊道として皇道を說き、皇道の淵源を、天祖の御遺訓に求めるのであつて、この點が後期水戶精神の根幹であると共に一元的國家統治の原則を道破したものと云へる。

惟ふに初期史學に於てはこの皇道の淵源を上述の如き立場から論究し説明したものではない。東湖は述義に於て「義公之修ㇾ史、始二橿原朝一掲二神代大要於卷首一以明二皇統之所一ㇾ本」（弘道之館記）と述べてゐるのであるが、この神代の大要なるものは「神武天皇紀」の初頭にあつて約十行に過ぎない、而も之が青山延于の加筆せるものと云へば史學に於ては神代の説明は無いのであつて、皇統問題に於て有名な三大義が神器中心に論爭されたと云つても以上後期に於て論ぜられた樣な説明であつたのではない、茲に後期の特色があると考へられる。

却説この特色を形成せしめた系統源委は種々なる方面から考察されるが、その主因に大體二つあるかと想ふ。その一は尊皇論の歸結としての國體論、志・表繼續事業の中「神祇志」編纂からであり、その二は外患に對して擡頭した攘夷論と攘夷上國民思想統一の必要からであると信ずる。然し乍らこの分否は之を要するに正名思想の時代的展開の然らしめたるところで一にして二、二にして一、兩々相因相俟つてゐることは論ずるまでもないであらう。

因て遡つてこの正名思想の時代的展開に就いて概述し、これが又如何なる立場に於てこゝに神儒一致の教義をとり入れてゐるかを討ねて行くこととする。

八代將軍吉宗の中興によつて幕府の威信を繼ぎ得た善政も家重家治將軍にかけ所謂田沼時代を現出し、その綱紀弛緩と共に封建制崩壞の兆を萌した事は史家の論ずるが如くである。廼ち外より刺戟せるものに英あり、露あり、又米あつて邊海漸く多事、玆に擡頭したる民族的進取の氣象は自ら殼を破つて進出せんとしたことは遂に鎖國制に甘ぜざるに至り、内已に家康公の文治主義に胚胎し、その復古思想より發した國體認識の萌芽は尊皇の莖を伸ばし、對朝問題に關係し、引いて又この對外問題と呼應照應して潛運默移天下の歸向を促し、その莖を長養してその花を開かんとした。

蓋し水戶學初期の精神と事業はこの國體認識の尤も大なる種子の一であつて、又發芽の主動力であつたことは云ふ迄もない。卽ち義公の紀傳の編纂は國體認識に當つてその本質的部分に確實性を與へたもので所謂復古の指南であつたのである。然るに（三代）肅公の薨後成・良二公に及びこの修史の固滯から思想の沈滯期を將來し、殊に成公の末年より良公を經たる五十年は修史其人を得ず爲に分屬あつても修撰せず、有名無實に墮入つた事は「修史始末」・「水藩修史事略」に明らかに記載されてゐる。けれどもかゝる時勢に遭逢して若し其人あればこの傳統精神が復活しない筈がなかつたのである。されば幕府に於て弊政を改革し、朝幕關係に於てその睽離を融合したのは老中の松平定信で、その施政は封建の命脈を長からしむるに與つて力あつたものであるが、水藩に於て義公の精神を再檢討

し、紹述の孝を全うせんとしたのは實に文公であり、再び天下を指導せんとして玆に蹶起したのが史臣の國體論である。

（六代）文公の襲封したのは明和元年で、安永六年長久保赤水を登用拔擢して侍講とし、史館總裁の事を攝せしめた頃より紹述の第一步を蹈出し、次いでこの赤水の推轂によつて立原翠軒が任用され、總裁として編修を專管するに及んで史學の復興となつたもので、岡崎正忠はその「修史復古紀略」に述べて「立原先生寶曆十三年入レ館、天明六年爲二總裁一、在レ館凡四十一年、可レ不レ謂レ勤乎。其振二起固滯一、洗二釋陋習一、非二先生一誰其能レ之」と云つてゐるが翠軒が如何なる目的を以て終始したかはその寬政元年の建議に徵して明らかにされる。

從前史臣皆云、修志々々沒年窮年不レ能レ脫レ稿、徒以二志之未一レ成故一、使二紀傳之既成者倂秘一於府庫一、義公經世之志、百年而未レ公二於天下一、甚可レ嘆、夫義公之志、專在二紀傳一、今宜二精細校訂一、速布二諸人間一、如二修志一則特其餘事耳。（修史始末、寬政元年條下）

これに因れば翠軒の目的は紀・傳梓行に在り、梓行を急ぐ爲修志を廢せんとしたことが明らかである。かゝる動機は義公精神の解釋から來たもので、義公は紀・傳・志・表完全なる史典を作らんとする學者的良心より着手されたのではなく、寧ろ皇道の陵夷を慨き、武門の驕僭を防がんとするに在つ

たと思考したことになる。尤もこれは幽谷が已に指摘せる如く爲にするところあつて發したもので、紀・傳あれば志・表あるは史體上當然の事で、この點を知らなかつたのではない（同上條下）。藩學衰微に當り而も義公百年遠忌を控へ、紀・傳・志・表整備せる史籍を速成することの不可能なるを早くも察知し、文公紹述の孝を達成せしめん爲一時の權宜上に出でたる建議であつたとするも穴穿ち無理な推測ではないであらう（友部氏、立原兩先生傳）。かくてこの建議は容れられ、その校正補修督勵の功を奏し、遂に寛政十三年十二月義公百年遠忌に際して紀傳淨寫本八十卷がその廟に獻ぜられたのである。さてこの事業進展に伴ひ、曾て義公時代本紀編纂に當つて三大義が史臣の間に爭論された如く、此處には史全體の體裁から三大議論を捲起すこととなつた。而して義公時代には之が義公の典型によつて裁決統制され、この時代には之を契機として悽慘なる黨禍を而も師弟反目の上から惹起した事は寔に遺憾であつた。然し此の如きも之を要するに正名主義の蔚起に對する副産物であり、又學者の初期に比して氣象を異にせるところに起りたる感情の衝突に由來したのであつて、この黨禍の延長に於て藩學そのものが政治的色彩を濃厚にし、遂には義公の尊皇敬幕主義が破綻に導かれ、而も之が幕府の封建制崩壞に關係を有つた事は後期水戸藩學を考察する上に於てはもとより、王政維新を考察するに當つても看過すべからざる點であると想ふ。

この正名主義の蔚起に於て、その新生面を端的に高調し、藩學の動向を指導するに與つて尤も力あつたものは藤田幽谷で、その畢生の綱領を開示した代表的論文は「正名論」である。

寛政紀元、從二立原先生一遊二江戸一（中略）居月餘歸レ家、亡レ何幕府執政白河源公聞二君之名一、欲レ觀二其文辭一（中略）廼著二正名論一述二君臣之大義一以應レ之。（東湖、先考行狀）

（先生）十八歳著二正名論一言二君臣之大義一、其敎二子弟一以二忠孝一者本二於此一也。（正志、及門遺範）

以上に因つてその述作の顚末と影響の一端を知ることが出來る。幽谷の江戸行は十六歳の時で、先考行狀の「亡何」から推して正志の十八歳說に疑問がないでもない、乃ちこの述作を十六歳とする（近世國民史、幕府實力失墜時代篇第十六章、幽谷正名論）。何れにしても「正名論」述作には時勢の大きな刺戟があり、この刺戟の尤も濃厚に與へられたのはこの江戸行に於てであつて、就中高山仲繩との面接はその尤も大きなものであつたらうと想像される。仲繩の「江戸日記」、幽谷の「祭高山處士文」には雄辯に此間の消息を物語られてゐるが、その兩者の關係が結ばれたのは已に幽谷十三歳、赤水より其爲人を聞き詩を贈つて魯仲連に比したるに始まる（幽谷全集詩纂參照）。而してこの友交は寬政二年仲繩の北遊行に深められ、藤樹・蕃山學の思想がその衰世興復の志と共に注入されたことが石川桃溪の記事に見えてゐる（得高山彥九郞之書紀事）。「想二像倜儻之高節一、激二昂奇偉之盛論一」（前揭祭文）した幽谷には已にその使用語を其儘に揭ぐれば尊王賤覇（同上）の時代的先覺

の思想が植付けられ、それが水藩の特殊的傳統精神から再考されたところに「正名論」の主張が生れたのではあるまいかと考へられる。かくて「正名論」に於ては國體の尊嚴性がその主要目として高調されてゐる事は勿論、名分の立場から臣子の道が啓示され、對朝問題に及んで幕府の僭上を諷し、當路の施政上の方針に對してその尋省を促したものである事は許多の水戶學研究書に縷述されてあるから一々に就いては述べないが、只その國體觀と名分說の動向に就いては一言論述する必要があるかと思ふ。幽谷が國體の尊嚴を以て皇統の悠遠・寶祚の長久に在りとし、その獨自性の淵源を皇祖に置き、これを儒教の三才論より論斷定義した點は近世初頭に於ける日本學の開拓者山鹿素行の「武家事紀」の所說に一步を進めた概がある。

此の如く闡明された民族的統一國家の意識は必然的に覇府に對して「幕府攝二天子之政一亦其勢爾」と痛棒を加へ、水藩傳統精神から「幕府尊二皇室一則諸侯崇二幕府一」と諷諫せざるを得なかつたのである。こゝにその傳統精神とは義公修史の精神である。義公の修史は水藩の公（對朝廷）私（對宗家）兩面の根本的解決から生れた忠（尊皇）孝（敬幕）兩全の道であつて、この道を以て國民思想の涵養に資せんとしたのがその精神である。然るに幽谷の時代に至つてはこの忠孝兩全の道に於て世の趨勢は忠の本義、大義に向つて動向を開始した事は上述の如くである。こゝに時勢の推移があり、正名論の文

底に抑覇の意圖が自ら動く所以でもある。更にこの事は次の點からも説明し得られる。即ち義公の一家言としての特見は朱子の綱目思想に類似したるのみならず、その事業に當つて相當これに憑據したのである。然るに紀傳の主要部分の脱稿によつて、國體認識に資するに至つて、茲に一家の特見は天下の公見となり、而して朝幕の對立より統一へ動いたところに綱目思想が通鑑思想に移る動向を示したことはこの正名論に於ても明らかに看取される、即ち王覇の辯を結ぶに當つて通鑑の序を引き「日本自レ古稱二君子禮義之國一、禮莫レ大二於分一、分莫レ大二於名一、不レ可レ不レ愼也」と述べたのがこれである。禮は紀綱であり、名は公卿大夫、分は君臣の分であるから通鑑の正名は一元的統一國家の體制上の原則である。名は君臣の名、分は上下の分とする綱目の正名はこの體制樹立の法則である。尤も初期の史臣中にも、例へば安積澹泊の如きは通鑑を愛し、相當重を爲してゐたのであるから、幽谷に至つて始めて引用されたと云ふのではないが、時勢が已に綱目精神に憑つてつくられ、名分論から國體認識の推移に伴つて通鑑思想が力說され、古學復興氣運と共にこれが水戶藩學に織込まるゝに至つたところに初期に比して特徴あらしめ、內容に於て自ら闇齋學に近接したと云へるであらう。

次に正名の主張が藩學に對して其の鋒鋩を現はしたのは上述翠軒の史學復興に對する義公精神の再三檢討で、これは大日本史の體裁問題に關して起つた。即ち書名改定の議はその一、論贊删除の論は

その二、志・表繼續事業はその三である。〝その一〟は「大日本史の題號不穩當にして宜しく史稿と改むべし」とせるもので、寛政九年八月幽谷によつて提起されたもので、その背景に外に下野の蒲生君平があり、内赤水門下に高橋坦室あつて已に寛政初年協議されたものであると云はれる(栗田勤、水藩修史事略卷二參照)。この蒲生との交渉(栗田寛、蒲生君藏事蹟考)は前述高山との交渉と共に注意すべき點であると想ふ。而してこの改定は七年後の享和三年に至つて江都史館に於て達成した。〝その二〟は「論纂は濳泊一人の胸臆に出で、義公を誣ふるもの」とするもので、享和三年高橋坦室より提起されたのであるが、其意は文公に出で、林大學頭に質し、幽谷と協議し、遂に青山延于等の贊成を得たもので(同上事略二卷)茲に論纂は刪除されて「大日本史贊叢」と變つた。〝その三〟は翠軒の寛政三年の建議(上掲)を中心とし、紀傳校勘獻廟後その史館閉鎖の議によつて捲起つた問題で、初め小宮山楓軒によつて唱へられ、後には幽谷、坦室に再燃し、遂に以上二大議論と同じく享和三年繼續補修に決定され、次で翠軒の致仕となつた。此の如く、その學説を中心に師弟の反目は感情問題と關聯して遂に水藩朋黨の因をなし、朋黨の發展は正名思潮動向の裏書となつて武公・哀公を經、遂に烈公に至つて天下に其の重を爲すに至つたものである。さればこの幽谷は後期水戸學開拓の主役であり、從つてその「正名論」の國體論は幽谷學説の根幹であつて内は藩學の指導原理となり、外は攘夷論の基調となつたことは、門人會澤正志の「及門遺範」に

詳らかに述べられてゐる。

次にこの正名主張の二顯現を二つの文獻を中心にして窺つて見よう。その(一)は尊王攘夷論の聖典と稱せられる正志の「新論」に述べられたる國體論の基點から、その(二)は神儒一致の歸結としての東湖の「神道備考總論」に現はれたる固有之道からである。

その(一)――「新論」の述作されたのは文政八年で、幽谷の歿する前年に當る。その所説を概括すれば幽谷の文公に開陳したる對外問題に關する備豫の計とその國體論を敷衍祖述したもので、國體・形勢・虜情・守禦・長計の五論よりなり、毎篇國體論の基點たる皇道を前提とし、又歸結として反覆してゐるところに構想上の特徴があるのであつて、その根本主張は皇道の闡明によつて國民にその自覺を喚起せしめてその長計を建てしめんとするのである。乃ち正志は吾國建國の基本精神を忠孝におき、この忠孝は吾民族に於ては自然の徳操で、これによつて建てられた國體は萬方無比であり、天皇は實にその元首に御座すを以て、天皇の御理想は引いて以て臣民の理想となると推論し、この理想と忠孝觀念の根本的說明を儒教倫理によつて試みたのである。卽ち

帝王之所下恃以保二四海一而久安長治天下不中動搖上者、非下畏二服萬民一把二持一世一之謂上而億兆一レ心皆親二其上一而不レ忍レ離之實誠可レ恃也。（國體篇上）

に於て「其上」は天、「四海」は地、「億兆」は人である以上この論理は儒教三才合一の理法に據つてその理想を解說し來つたものであつて、この「億兆一心」以て「不レ忍レ離之實」を把持するといふところに國家統治の眼目があり、忠孝の融合一致の理論的說明も立つものと斷定する爲に引次いで忠の觀念を天地自然の道から、孝の觀念を天下の道から左の如く抽繹說明する。

夫君臣之義、天地之大義也。父子之親、天下之至恩也。義之大者、與二恩之至者一、並二立天地之間一、漸漬積累、洽二浹人心一、久遠而不レ變、此帝王之所下以經二緯天地一綱中紀億兆上之大資也。（同上）

斯くてこの「大資」の說明を三才論より轉じて儒教天人合一の理法に資り、「天人大道其文可レ變、其義不レ可レ易」の自信を以て皇道の淵源を天祖に求め、天祖祭祀孝敬の義の敬天事祖の皇道となりたるところを基點として忠孝一本の觀念を見出し、更に義は君臣、情は父子の立場から君臣一體、皇道臣道歸一關係を紬繹して「不レ忍レ離之實」を理論づけて史實に徵し、さて「神聖以二忠孝一建レ國、而遺風餘烈之猶在レ人者如レ此、則天日之胤、與二天壤一終始而不レ易者、蓋有下以致中之而然上也」（同上）と述べて國民的自覺を促し、時勢之變、邪說之害を指摘して更張作新の法を樹て、兵法に所謂「伐謀」の策を以て攘夷の實を擧げんとしたところに正志の卓見がある。其師幽谷の國體論はこの正志に至つて其內容を充實し得たといふべきである。以上國體論の基調としての皇道の論理的說明を以て上述「退食間

話」の所說に比する時その「天經」の內容又明々了々たるべく、引いて神儒一致を基本とする「館記」敎義の由來も亦以て了解されるであらう。重ねていふ、この「新論」は文政八年の述作である。

その(二)——最近水戸學研究上漸く世人に注目されて來た著述の一は東湖の「神道備考總論」といふものである。元來三卷なるべきを（東湖全集例言、水戸文籍考）もと豐田家藏本（現彰考館藏本）も又德川家藏本もその上卷の一部九葉に過ぎない（前田家傳來寫本は十一葉ありと）、「神道之名上世蔑聞焉」に起筆し、神道の展開を史的に敍述し、對儒對佛關係を評判して「固有之道」神道の暝合分岐を指摘せるもので、「世之學二儒敎一者亦或眩二於異邦之文一忘二我固有之道一於」に斷たれてゐるが、この評判には正名主義から生れた信念が頗る明快に幾箇所にも提示されてゐると思ふ、乃ち神道の上世に於ける實現の意義を述べて

當時特無二其名一耳、其實則何物非レ神、何事非レ道、夫道猶二路之爲一レ路、其爲レ路維一而不レ岐。

と云ひ、その專行實證の迹を述べて

天業以レ之鞏固、國體以レ之尊嚴、風俗以レ之美、威稜以レ之遠、蒼生以レ之安寧、蠻夷戎狄以レ之率服。

と云ひ、却說神儒暝合の立場を明示して

夫儒之爲レ敎、名數節目不レ可二勝言一、然其大要在レ明二人倫一、所謂父子・君臣・夫婦・朋友者皆我所二固有一、抑豈啻固有之云レ爾哉、凡天日所レ照、宇內萬國未下嘗有中及二神州之尊一者上、則各國固有之

道豈有下復出二乎斯道之右一者上耶。

と述べ、西上の教に資るはこの「固有之道」に光陰を益す所以とし、應神帝を讃じ奉りて「應神天皇所ニ以徴レ儒、蓋廣取ニ於人一爲レ善之意、固不レ在ニ捨レ此從ニ彼也」と記し、この「固有之道」の分岐を三寶を奉じ、我君父を無する佛教西來にありとし、その「神道」名稱の起原を述べて、

至ニ用明天皇一而大行、天地以來固有之道於レ是一變矣、然則儒教之來斯道未ニ曾岐一、佛法之行、斯道始岐、道而名起、固不レ足レ怪也。

と云ふ。これ「總論」に述べられたる道の大體である。さてこの述作の年代は明らかでないが恐らく天保五年乃至六年と推定される（東湖書翰集、復某書參照）。蓋し東湖をして此の如く神道に關心を有たしたのは實に烈公で、その神道崇拜は水藩の傳統精神の祖述である。乃ち初代威公は吉田流の唯一宗源の旨を傳受し（「常陸帶古秘書」、威公春秋」、「桃源雜話」引史館舊話、源威公始末」、「羅山年譜」慶安三年條等參照）、義公は之を繼述し（「泰山集」叢著、春海先生實記」、桃源遺事」寛文七年條等參照）、遂に「神道修成」十二卷の編纂となつたのである。文公に至つて、更に之を「神祇志」に紹述發展せしめ、青山延彝延于によつてその草稿は享保三年に出來た（水藩修史事略卷二）。けれども以上義公、文公はこの神道に對しては寧ろ之を客觀視したのであつて、之を紹述した烈公はこれに反して主觀視したことは「常陸帶」に明らかであつて、この精神は「神祇志」を改定し、更に「神道集成」を補修發展せしめて日本啓示に向けるに至つたも

ので正名主義の尤も大きな時代的顯現と念はれる。東湖はこの烈公の下命によつて天保三年已に神書取調を開始した。されぱこの「神道備考總論」は正にその副産物であつて、又實に「弘道館記」並に「述義」の副本で、體裁の類似、語句の同一なるは云はずもがな、上述「述義」に現はれた信念はこの特有なる神道による國本啓示に胚胎すると云ふべきである。

以上正名主張の二顯現についてであるが、こゝに神儒一致に對する兩者の推論を比較すれば正志は儒を以て神を解き、東湖は神を以て儒を資つた。一は理論を以てし、一は信念を以てしたと云へる。

## 三　結　語

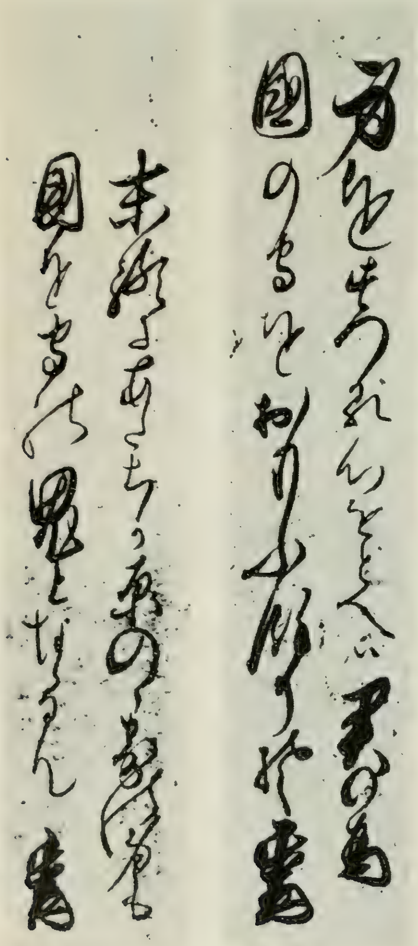
以上正名主義から神儒一致の道が如何にして「弘道館記」に迄發展したかを概說したのであるが、この「館記」は實に烈公の主義に生れて東湖の信念に成つたものであり、烈公は又實に十七年に亙る正志の輔導に立つた一代の名君であつた。されば正志・東湖の正名を基調とせる道の理論と信念は「館記」の中心思想を經緯するもので、東湖の所謂「神州の道を本に固有の道を以て之をたすけ」(東湖封事)はこの思想の端的な表明である。かくてこの「固有の道」に於ける神儒一致の理論は博大な國民道德原理を提示して、曾て幕末の思想界を啓蒙したのみでなく、又以て今日又將來の日本學の指針で

あり、門戸であると信ずる。（完）

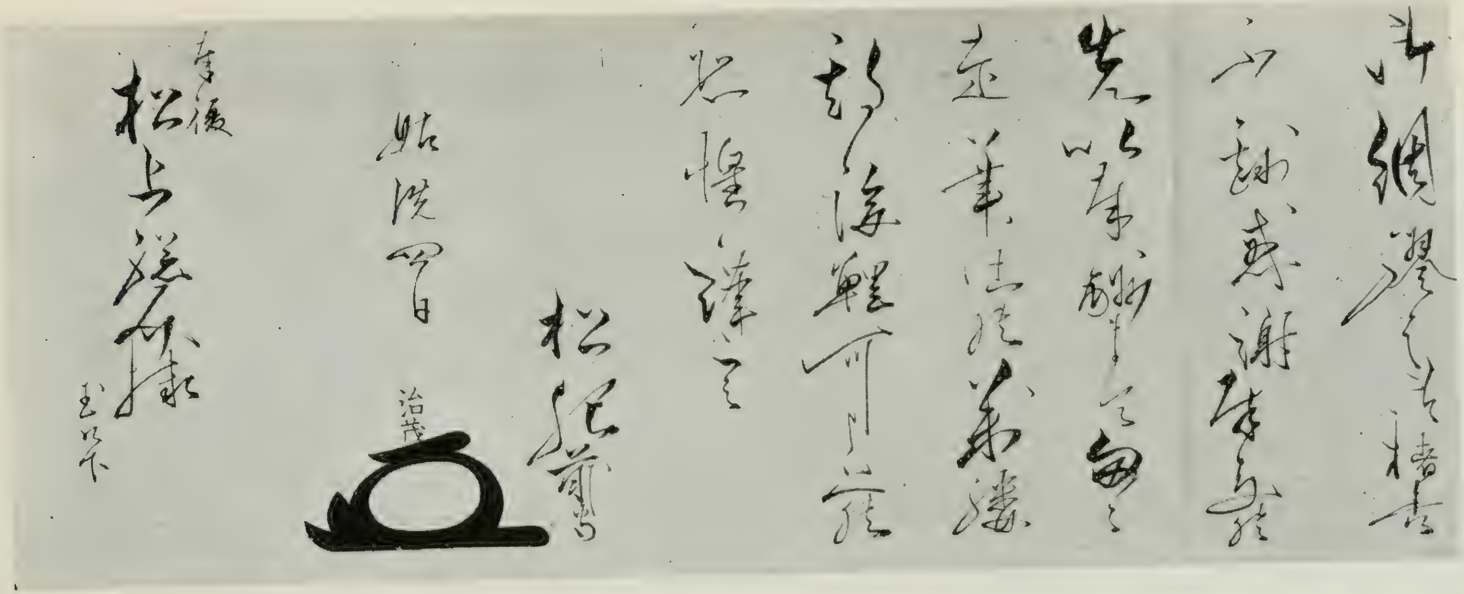
（昭和十三年八月三十日稿）



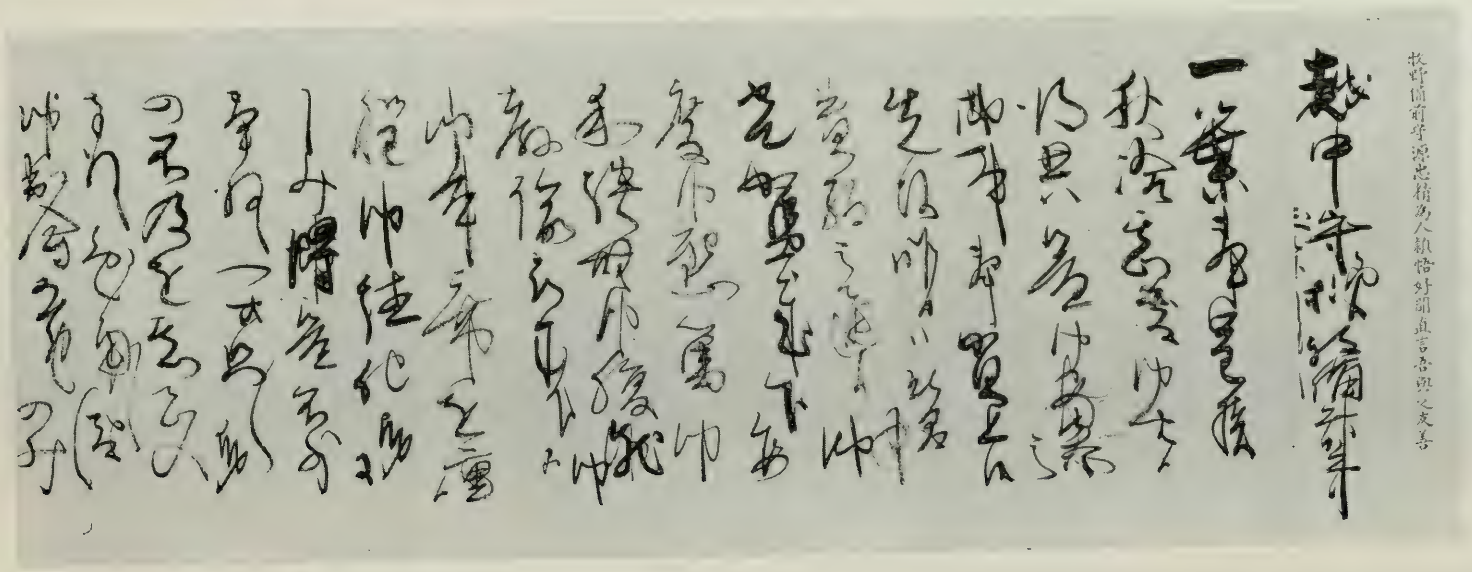

松平定信自畫像（子爵松平定晴氏藏）



松平定信筆蹟（子爵松平定晴氏藏）



鍋島肥前守治茂書状（子爵松平定晴氏蔵）



牧野備前守忠精書状（子爵松平定晴氏蔵）

# 松平定信を中心とする諸侯の教養

## ——雙鯉集を中心として

松平定光

松平定信は、天明七年より寛政五年に至る足かけ七年の間、その首班として幕閣に參し、所謂寛政の改革を斷行したのであるが、その文教政策には、或は寛政異學の禁、或は昌平黌の刷新等、近世日本儒學史上から云つても、重要なる幾つかの問題を包含してゐるのである。而してこれ等の諸問題に就ては、既に一通りの學問的檢討を經てゐるやうであるが、實は未だ幾多の再檢討を要する事項を殘してゐるやうに思はれる。蓋し闡明し盡されてゐるやうに見えて、實は最も判然としてゐないのは即ち江戸時代史である。もとより優れた研究述作の皆無であるといふのではない。又もとよりあり餘る程の文獻を存してゐる。しかも比較的に近い時代であるにもかゝはらず、往々その研究に隔靴搔痒の憾を免れないのは一體どういふわけであらうか。その理由は凡そ二つあると思ふ。即ち學界に提供されてゐる史料がなほ不充分にして、良心的な學徒は之に依つて問題の斷案を下すに、あまりに用心深

いことから來る物足りなさがその一つ、今一つは氣鋭な學徒の研究發表には自己自身の生活體驗の不足から來る獨斷的な危ふさがあるためではなからうか。思ふに史的研究に當つて缺くべからざるは、その取扱ふ時代理念を確實に把握すること、その取扱ふ人物については、その生活環境に對する深き理解をもつこと、縱の時間的繫りに於ても、横の空間的繫りに於ても、之を有機的に渾然たる生活體として認識することである。この意味に於て松平定信を取扱ふにも、彼の生長過程と彼の生活環境とに對して、深い理解が要求されて然るべきであらう。

この小篇は、云はば予の「松平定信の文敎政策」の研究の方法論的一試案にして、未だ世に公にされたことのない家の史料「雙鯉集」を紹介すると共に、併せて松平定信を繞る諸侯の敎養を取り上ぐるのは、とりもなほさず上に述べた、時代と人とを有機的に把握せんとする意企に外ならないのである。

雙鯉集（三卷、別卷一卷）は、その名の示すが如くに書簡集であり、定信の許に到來した書簡を丹念に整理編輯し、各書簡（全部ではないが、）の冒頭に、その筆者の人物評並びに定信との交友事情等を極めて簡單なる漢文で記してあるものである。例へば松平彈正大弼勝當（尾張中納言宗睦の舍弟、後出でて高須藩主松平攝津守義裕の嗣となる。）の書簡冒頭には、「松平彈正大弼寛大長者、堂堂一諸

侯也。與レ余甚相信愛。公學ニ柔道一、已至ニ佳境一矣。」とあり、細川越中守重賢の書の冒頭には、「細川越中守重賢、爲レ人寛仁而容レ衆、功業日新、名聲冠ニ于世一。同レ時紀公亦有ニ盛名一、故世人論ニ諸侯一者、必稱ニ紀越一。後患ニ中風一、不レ能レ操レ毫。此書亦口占使ニ人筆一レ之者也。」とあるが如くである。これらの書簡の年代に就ては、本集に添附してある、家臣をして記さしめたる譯書に、左の通りの記載がある。

一此雙鯉集四卷之御卷物御文通者、御部屋住之内より御家督後天明七未五月まで、御役以前御取替し之御文通にて候事。

此段書付にいたし、御箱に入置候樣に被ニ仰付一候に付記置候事。

寛政元年四月」

この部屋住とは、安永三年台命により生家田安家より出でて、白河藩主松平越中守定邦の養子となりし十七歳の時より天明三年父定邦、老の故を以て致仕し、定信その封を襲つて越中守に任ぜらるゝ二十六歳まで、御役とは、天明七年六月十九日老中就任の時（定信年三十歳）をいふのである。卽ち年代を以ていふならば、此等の書簡は定信の青年時代、幕政に與る迄の準備時代のものである譯である。從つて此等の書簡の內容によつて、その時代の定信自身の教養、並に之と交渉のあつた諸侯の教養の一端を窺ふことが出來、推して以て當代の大名の教養一般を知ることも强ち不可能ではないので

ある。本集編纂の年代に就ては、先に擧げた譯書には寛政元年四月と記してあるが、恐らくは之は別卷完成の年代である。その體裁、內容等より考へて、別卷は、はじめの三卷の完成後に成つてゐると思はれるから、はじめの三卷の完成はそれよりは稍〻前のやうである。

雙鯉集所收の書簡は總計一百二十四通で、之を分類してみるならば、諸侯（その家族を含む）七十七人、一百九通、公卿六人、八通、幕臣四人、五通、其他二人、二通となる。其他とは柔道の師鈴木淸兵衞邦敎と、松平家菩提寺靈岸寺住職智堂和尙である。之を以て見れば、卽ちほゞその九割が諸侯のものである。

當時の諸侯の總數約二百六十家乃至二百七十家（慶應二年現在二百六十六家）とすれば、雙鯉集は約その三割を含むものである。これに就ては、定信と交友關係ありし諸侯にして、本集に漏れてゐるものも當然考へらるべきであり、又年齡關係等により當然交友關係の考へられぬものもある筈であるから、これらを斟酌して考へれば、この三割といふ數字は、當時の大名階級を代表する意味に於ては、もつと多く評價して然るべきものである。その七十七諸侯について、その家格、石高等を調べて見ると、當主十萬石以上が二十二、以下が四十、家族十五となる。天明五年當時の大名に就て數ふるならば、十萬石以上の大名四十七家（天明五年武鑑による）にして、殘る二百餘家は皆十萬石以下である

から、定信の交友關係はその比例から云へば十萬石以上に於て著しく多數を示してゐる譯であり、當時の松平家の石高十一萬石と照合すれば、當時の諸大名の交友關係は、多くその石高によつて結ばれてゐたことが知られる。江戸城中詰所に依る家格からいふならば、大廣間九、大廊下三、溜間五、帝鑑間三十五、雁間六、柳間七、菊間三となる。譜代大名は溜間、大廣間、帝鑑間、雁間、菊間に席を有しそのうち帝鑑間のものが最も多いのであるが、此處に於ても松平家と格を同じうする帝鑑間の諸侯との交友の著しく多いことを見ることが出來る。次にこれ等の諸侯の質に就て考へる爲に、後に幕閣の要路に立つた人人を此の中から求めると、老中五人、若年寄七人を數へ、その他多士濟々の有樣である。卽ち老中には松平和泉守乘完、松平伊豆守信明、本多彈正大弼忠籌（老中格）、戸田采女正氏敎、牧野備前守忠精あり、若年寄には、本多彈正大弼忠籌、京極備前守高久、立花出雲守種周、植村駿河守家長、水野壹岐守忠韶、小笠原近江守貞温の人人がある。その外大坂城代には、牧野備前守忠精、御側用人には、松平伊豆守信明、本多彈正大弼忠籌、戸田采女正氏敎、寺社奉行には松平和泉守乘完、牧野備前守忠精、松平紀伊守信道、板倉左近將監勝政、戸田采女正氏敎、脇坂淡路守安董、立花出雲守種周、植村駿河守家長、堀田豐前守正穀、有馬左兵衛佐譽純等を擧げることが出來る。之に就ては、定信と之等諸侯との斯くの如き交友關係と、これら諸侯の幕府の要路就任との間には、多か

れ少なかれ何等かの因果關係を考へてよいとは思ふけれども、然し乍らそれはそれとして、これらの諸侯が決して凡庸の諸侯ではなく、皆この時代の代表的な諸侯であつたことは、その事蹟等によつて自ら明かである。この外肥後の細川重賢、米澤の上杉治憲は當時名君の聞え高き諸侯、島津重豪、眞田幸弘、酒井忠以等の諸侯は、或は學術上に、或は文藝方面に不朽の名を遺した諸侯である。その他この七十七諸侯は當時の知識階級たる大名階級の中でも、その代表として恥かしからぬ人人と云つてよい。從つてこの雙鯉集四卷こそは、吾々に當時の代表的大名の教養、氣品、氣魄をその自筆を通じて傳へてくれる好資料であるのである。

以上雙鯉集の外廓一般を概觀することを得たと思ふから、續つてその內容を檢討して見たい。

これらの書簡の中には、單なる儀禮上の往復、(例へば年賀の書、往訪の禮書等)又は物品贈答の添書等に屬するものも數多く見られるが、それらは今本論の圈外に置き、その教養に關するもののみを抄出して論ずることとする。

諸侯の教養として最も切實なる問題は、こゝに擧げる迄もなく各自の藩政に關する問題である。從つてこれらの書簡の中には、之に關する述懐や批語等が散見する。例へば定信の國政に對する批語としては、上杉鷹山の書に

（前略）再啓冷氣御自愛專要奉ㇾ存候。御入國以來庶政被ㇾ盡ニ御心一、御德化御行渡、御封内欣戴仕候段、追々承知無ニ此上一御事奉ㇾ存候。云云。

とあるものとか、國政に就ての述懷としては、松平紀伊守信道の書の

（前略）其節も政事等の咄合可ㇾ仕と奉ㇾ存候。先日も申上候通り、不才の所は是非に不ㇾ及義に御座候へ共、可ㇾ成たけは修業仕、國政之心掛懈怠不ㇾ仕心得罷在候。私などわづか猫の額程の政事に候へども、不才にては中々治り不ㇾ申義心痛仕候。何も其中拜顔に萬々可ニ申上一候。

の如きが見える。次に藩政以外に就ての諸侯の一般教養を見る爲に、この集に出て來る資料を左に分類して示さう。

一、書物貸借及び著述に關するもの二十五。
　イ　書名明かのもの　二十一
　ロ　書名明かならざるもの　四
二、詩歌贈答　七
三、調査報告及び序文贈呈　各一
四、蒐古地理書道繪畫等に關するもの　十二

三

五、學者文人に關するもの

この中、二、三、四、は諸侯の趣味生活の一端を知り得る資料となるものであるが、今は暫く之を措いて、諸侯修養上の重要なる一部面を形作るものであり、その讀書範圍を想定するに足る、一のイに屬するものを、左に分類列擧する。

| | |
|---|---|
| 松平紀伊守信道 | 年中勤事(1) |
| 松平唯之進頼徳 | 白河藩職規(2) |
| 小笠原近江守貞温 | 有徳院様御意書(3) |
| 堀田豐前守正毅 | 求言錄(4) |
| 黒田筑前守治之 | 黒田家先祖一代の事を記せる本 |
| 酒井修理大夫忠貫 | 仰景錄(5) |
| 鍋島肥前守治茂 | 四庫全集、資治新書、唐朝六典 |
| 本多雄之進忠雄 | 大學衍義 |
| 本多肥後守忠可 | 翁問答 |
| 加納備中守久周 | 駿臺雜話、宇佐問答 |
| 松平隱岐守定靜 | 紀行の一帖 |

毛利和泉守高標　　玉海

柳澤伊勢守信有　　公用錄

大岡越前守忠與　　留書目錄

小笠原伊豫守忠苗　　常事

伊達遠江守村候　　隨語

堀田豐前守正穀　　疑史(6)

註(1) 年中勤事　今、勤例類彙（十八册）常時勤例（三册）不時勤例（四册）古格勤例（一册）として家藏す。守國公傳記附錄著述目錄に

「帝鑑間御席の大概先例をことごとくかき集め給ひて、御奉仕の事はもれしことなし。常時勤例は元日二日の拜賀、三日御謡初、十一日御具足開より五節句、八朔月次御登城等、年中定りたる御出仕を書かせたまふ也。古格勤例は御老體の御方より聞及び給ひし、御席の古格委しく記し置給ふ也。有徳公御直ニ仰せきとされし御箇條、享保年中御老中方愼勤質素等被ニ仰合一し事なども書添へ給ひて、御譜代席と唱ふる大切の御心得を書かせ給ひぬ。不時勤例は年中月次の外臨時の御勤を書かせ給ひし也。類彙は御登場の刻限、御禮勤、御轉任、御兼任、将軍宣下、御元服、御前髪被レ爲レ執、若君様御誕生、姫君様御誕生、大手御門通心得、延享享保、寶暦朝鮮人登城次第、寛延中山王使者登城之次第、寶暦二年中山王代替ニ付使者登城之次第、廻状帶隼、日光御名代等、凡そかゝること多く集めたまひし也」

(2) 白河藩職規　今諸役心得として寫本家藏。内容左の如し。

一、武者大將（月番老分）　一、士大將
一、武者奉行　一、奉行
一、大目附　一、横目
一、使番　一、用人
一、側役　一、籏奉行
一、陣場奉行（大普請奉行）　一、長柄奉行
一、鐵炮奉行　一、徒頭

(3)　今明諸と箱書ある一卷を家藏す。享保六年九月將軍吉宗譜代大名を集めて訓諭せしものを定信自書せるものなり。

(4)　定信自著にして七卷、今版本あり。家藏す。前掲著述目錄に、「人君となりては、臣下の諫をいるゝ事を專務とすべき事なれば、直言を求め給はんがために、經史より諫爭の事を抄出し、門部を分ちたまひぬ。云云」

序　宇和島侯　伊達遠江守村候
　宮川侯　堀田豐前守正穀
自序　安永八年正月
跋　大塚孝綽　天明元年十二月

(5)　仰景錄上下二册は、伯爵酒井忠克氏之を藏せらる。酒井忠勝の臣山口翠巖、忠勝に關する佳事逸話を、その子庄右衞門に語り傳へ、庄右衞門更に之をその子治兵衞に語りて之を書記せしめしものなり。

(6)　疑史　堀田豐前守正穀の書に、求言錄と並んで記してあり、定信の自著なることを明記せるも、今疑史なるものを知らず。但し別に古史逸なるものあり。定信自傳宇下人言に、求言錄と並んで記しあり。その題號より推して或は疑史とは古史逸の假名な

りしには非ざるやと疑はる。

因みに學者文人に關するものの中に、松平唯之進賴德（紀伊中納言宗將の九男、後出でて桑名藩主松平下總守忠功の養子となり忠和と改む）の書は彼が定信と共に蘭醫にして蘭學者たる桂川甫周との親交ありし事を知り得、また本多肥後守忠可の書は、彼と中澤道二との親交を窺知することが出來る。

之を以て之を見るに、(1)(3)に就てはこれら諸侯の、譜代大名としての特殊な立場からの缺く可からざる教養、(5)に就ては定信が先輩の事蹟の研究に努めて、以て自らの修養に資せんとしたあとを見ることが出來る。(4)に就ては當時の諸侯の漢學の素養の一端を窺ふことを得るが、殊に大學衍義に就ての本多雄之進忠雄の書は、定信の儒教的な教養を知る好個の資料である。

以二手紙一致二啓上一候。逐日暖和相催候。愈御安全被レ成二御勤一奉二恭賀一候。然者舊冬奉二恩借一候大學衍義、得と拜覽仕候所、扨々齊家治國其外金言共にて、照鑑とも相成申候御書物、千萬忝仕合御至情之段難レ申義に奉レ存候。則返進候。御落手可レ被レ下候。猶拜顏之節御禮可二申上一候。

これらに依つて見るに、定信はじめ當代の諸侯の抱懷してゐた指導原理は、何處までも儒教的な實踐倫理であつた事が、今事新しく申す迄の事ではないが、これらの書簡を通じて如實に窺ふことが出來るのである。一例として戶田釆女正氏教の封地より定信に寄せた一書を左に示さう。

領内に奇特之孝行なる者有レ之候。両親は最早居不レ申、父は名主相勤候ものにて、父代に無レ據事有レ之、つぶれ申候。その節村方へ辨米かけ申候。餘程の儀に御座候。然處父死候時右孝行人要吉十八にて御座候よし、何ともいたし右辨米をかへし候樣申付候よし、三十年來段々かせぎ、朝も人並より早く起き、夜も作いたし候くらいに付、此度右辛勞の功つもり皆々返濟、且當時居不レ申、子孫も無レ之ものへは、其もの丶寺へ米返米致し候よし、夫故此度褒美遣し申候。昨日右村へ參り、召出樣子尋候處、私初、家來共迄右之辛勞且父之命を守り候處承り、落涙仕候。又候少々褒美遣罷歸候。夫へ化せられ同村之うち一人、ことの外相改候もの御座候に付、是又ほめ可レ申つもりに御座候。何ぞめづらしき儀、かねて申上候樣御約束故申上候。云云。

なほこの戸田氏教はじめ十數人の諸侯は、定信と最も肝膽相照し、互に各自の邸に參會して、切磋琢磨の功を積んだことは、定信の自敍傳「宇下人言」に散見するところである。卽ち天明元年頃より定信は俄にその交友が增加し、殊に天明三年封を襲つて封國に歸り、彼の天明大飢饉に善處して天明五年六月朔日江戸に入つてからは、在京の心ある諸侯競つてその門に集ひ、或は藩政に關し、或は自己の修養について、互に長をのばし短を補ふ集りが自然と成立したのであつた。それらの諸侯を「宇下人言」から數ふれば次の十五人である。卽ち、陸奥泉侯本多彈正大弼忠籌、播磨山崎侯本多肥後守忠

可、美濃大垣侯戸田采女正氏教、豊前中津侯奥平大膳大夫昌男、近江宮川侯堀田豊前守正穀、出羽上ノ山侯松平山城守信亨、丹波亀山侯松平紀伊守信道、三河吉田侯松平伊豆守信明、美作津山侯松平越後守康致、伊勢八田侯加納備中守久周、越後長岡侯牧野備前守忠精、丹後田邊侯牧野佐渡守宣成、伊豫今治侯松平河内守定奉、攝津尼ヶ崎侯松平大膳亮忠賓、越前丸岡侯有馬左兵衛佐譽純の十五諸侯である。これらの諸侯の眞摯な修養態度は、此等諸侯の手簡中に屢々之を窺ふことが出來るのであるが、今その一般を示す爲に、松平山城守信亨の書、及び本多彈正大弼忠籌の書の一部を抄出する。松平山城守信亨の書は下の如くである。

(前略)手綱と鞭をはなさず、賞罰その所を得候はば、よりて能をあらはし候まゝ、しめすぎゆるめすぎ候所被二仰下一、誠に誠に私心腹に落入忝御座候。しめずゆるめず、中道を行所肝要と奉レ存候。御レ衆以レ寛の心にて可レ然哉と奉レ存候。呉々も私當時此所のみ苦み何とぞ忠孝の度に叶、又は會稽の恥を是非清め申度心中に候へば、此後とても小さきことにても御心添奉レ願候。(云云)

これは定信より信亨に異見を述べたことに對する返書であるが、本多彈正大弼の分は、忠籌が定信の畏友であり、最も信友であつた關係から、これは定信への異見である。

(前略)貴君には御壯健に鎗劍御之術不レ絶被レ遊候由珍重奉レ存候。御息合あしく御難儀被レ成候

に付、御馬先の御功名は御心計に思召絶候由、御尤には奉ㇾ存候へども、北條高時の臣島津四郎が如きは、日比の壯勇は物きはにて降參、何の役にも立不ㇾ申候。（中略）又源義家公之臣秦四郎は臆病之者に候處、金澤の柵初度に軍に大耻をかき、二度之軍には存つめ打死仕候へば、首の切口より飯出候よし、朝之食事も腹へ入らぬ程の臆病にてよくは打死仕候、義を存たる士と奉ㇾ存候。勇者の打死よりも難義は甚しき事に奉ㇾ存候。臆病は性質にも候へば無ニ是非一候へども能くは義を守り候。治平には勝負に御そんも可ㇾ有ㇾ之候へども、勇者と見え候も事に臨てうろたへ候時は、兼てのはたらきの出かぬるものと見え申し候。左候へば御功名御心計りと思召絶候程には有ㇾ之間敷候。勇氣も有ㇾ之、身も、壯實に候へばそれ程の事は無ㇾ之候へども、私などは一體病身に候處、當年などは別して年より候故か息切候、業大儀にてらち明き不ㇾ申候。必御羨しく被ニ思召一間敷候。貴公には未御年若に御座被ㇾ成、貴公常に御心かけ被ㇾ成候へば、次第に御なれ被ㇾ成候所より、いつとなく御息合もなほり可ㇾ申候。（下略）

以上によつて、定信及び之を廻る諸侯の一般教養の大概を見たが、特に此處に注意すべきは、此の時代に定信の讀書範圍が、概ね經書史書を中心としてゐた前の時代から蟬脫して、我國の儒者の著述を涉獵しはじめたことである。今先に擧げた十五諸侯の一人、伊勢八田侯加納備中守久周の書を見る

に

尙々駿臺雜話此節三册熟覽仕候。扨〻感心のみに御座候。唐の事よりも和の事、別而身に染相覺候。且又宇佐問答と申書、此間御覽被ㇾ爲ㇾ成候由、おもしろきものに被㆓思召㆒候由、私義も追て拜見可㆓相願㆒候。云云。

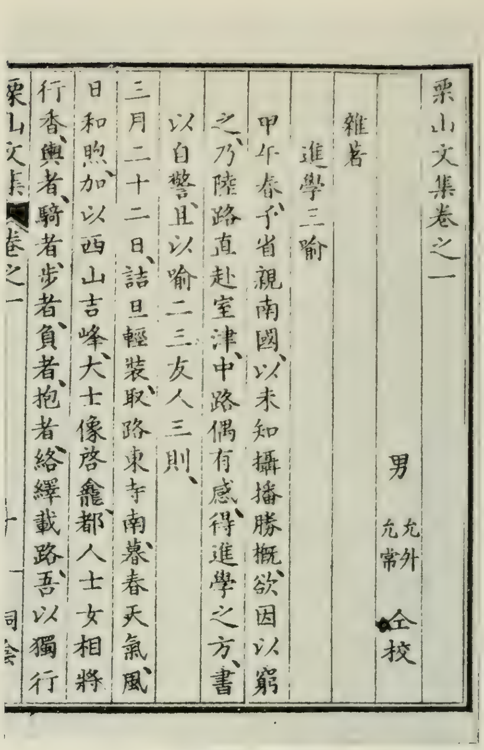
とある。又本多肥後守忠可の書は定信が藤樹の翁問答を繙いてゐることを示してゐる。

安永九年定信二十三歲の時に讀書功課錄といふ著述がある。これはこの時代の勉學の記錄とでもいふ可きものであつて、内容を檢討分類して見ると、即ち安永七、八、九の三年間に於て定信の讀書は、經書においては、詩經二回、同集註、書經、易經、左氏傳、同註疏、同林堯叟註、大學、大學解各一回、大學衍義補三回、大學衍義、中庸、中庸解、孟子、論語、禮記、大戴禮、春秋各一回、史書に於ては、前後漢書一回、通鑑、史記二回、宋史紀事本末、國語、通鑑綱目、宋元通鑑、唐書、戰國策、五代史、明史紀事本末、各一回をそれぞれ讀破しその他各方面に亙り、百五十部程の書名を擧げてゐる。然し乍らその大部を占めるものは經書史書であり、それによつて定信の教養一般は窺はれるのであるが、且つ本集により、藤樹の翁問答、蕃山の宇佐問答、鳩巢の駿臺雜話等を讀んだことが判明し、その靑年時代の儒學的教養が、必ずしも朱子學的なもののみに限定されてゐ

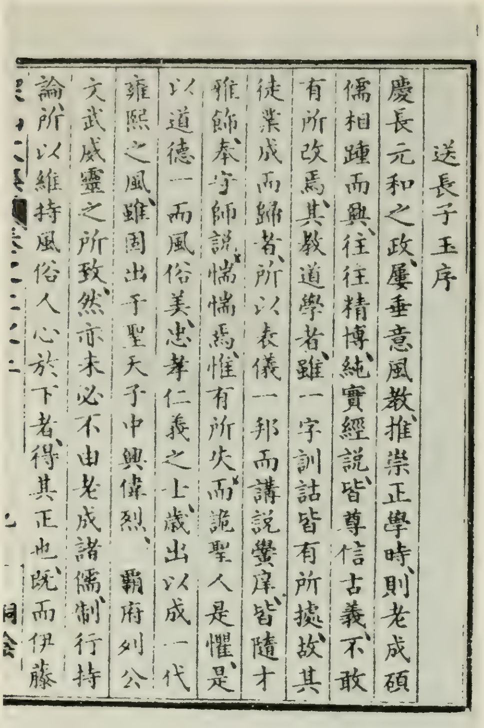
なかつたことが知られ、後世幕閣に參與してから斷行した異學の禁等の彼の文教政策を考察するに當り、この雙鯉集時代の教養が意味深き示唆を吾々に投げかける。

終に莅み、本稿は東照宮三百記念會の學術研究費補助による「松平定信の文教政策研究」の一部をなすものであることを記して、同記念會に對し深厚なる謝意を表する。

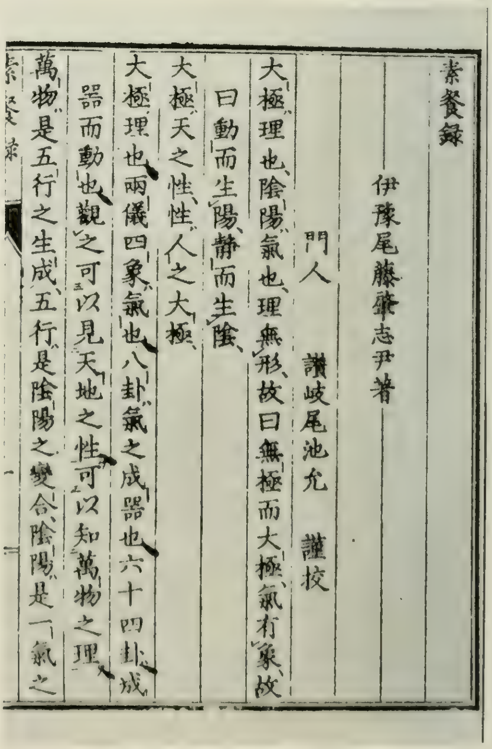
（昭和十三年八月廿日岳麓山莊に於て稿を了す。）


栗山文集卷之一
雜著　男　允外 允常 仝校
進學三喩
甲午春予省覲南國以未知播播勝概欲因以窮
之乃陸路直赴室津中路偶有感得進學之方書
以自警且以喩二三友人三則
三月二十二日詰旦輕裝取路東寺南暮春天氣風
日和煦加以西山吉峰大士像啓龕都人士女相將
行香輿者騎者歩者負者抱者絡繹載路吾以獨行
栗山文集卷之一

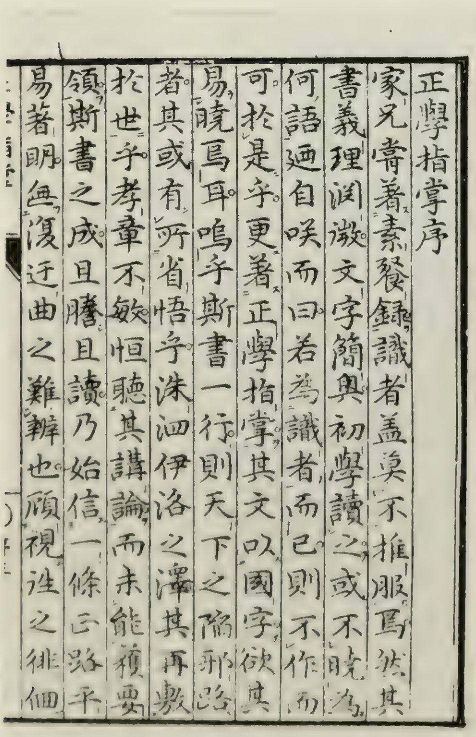
栗山文集


送長子玉序
慶長元和之政屢垂意風敎推崇正學時則老成碩
儒相踵而興往往精博純實經説皆尊信古義不敢
有所改焉其敎道學者雖一字訓詁皆有所據故其
徒業成而歸者所以表儀一邦而講説黌庠皆隨才
雅飭奉守師説惴惴焉惟有所失而詭聖人是懼是
以道德一而風俗美忠孝仁義之上歳出以成一代
雍熙之風雖因出乎聖天子中興偉烈覇府列公
文武威靈之所致然亦未必不由老成諸儒制行持
論所以維持風俗人心於下者得其正也既而伊藤

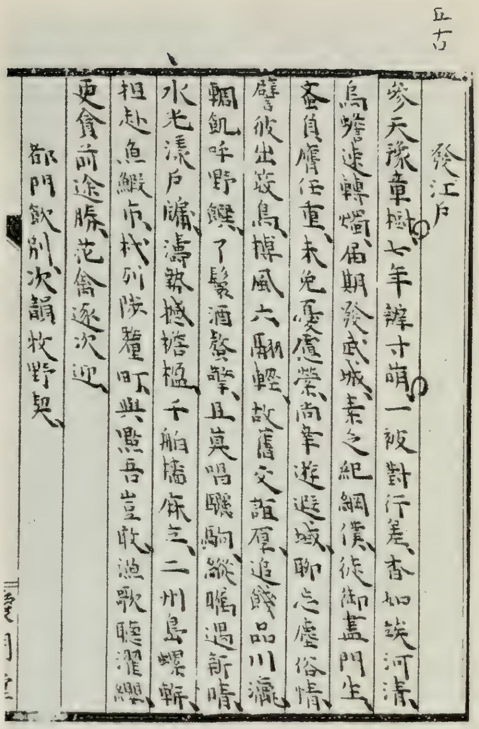
同右


素餐錄
伊豫尾藤肇志尹著
門人　讃岐尾池允　謹校
大極理也陰陽氣也理無形故曰無極而大極氣有象故
曰動而生陽靜而生陰
大極天之性性人之大極
大極理也兩儀四象氣也八卦氣之成器也六十四卦成
器而動也觀之可以見天地之性可以知萬物之理
萬物是五行之生成五行是陰陽之變合陰陽是一氣之

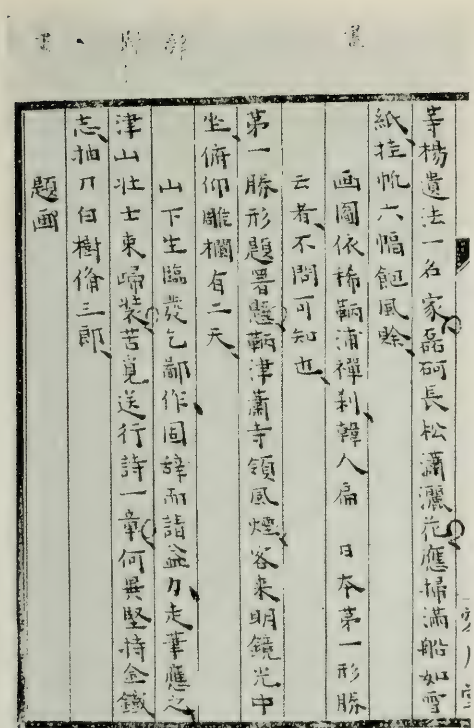
尾藤二洲著素餐錄


正學指掌序
家兄嘗著素餐錄識者蓋莫不推服焉然其
書義理淵微文字簡奥初學讀之或不曉為
何語迺自咲而曰若為識者而已則不作而
可於是乎更著正學指掌其文以國字欲其
易曉焉耳嗚乎斯書一行則天下之陥邪詭
者其或有所省悟乎洙泗伊洛之澤其再數
於世乎孝章不敏恒聽其講論而未能積要
領斯書之成且謄且讀乃始信一條正路乎
易著明無復迂曲之難辨也顧視往之徘佪

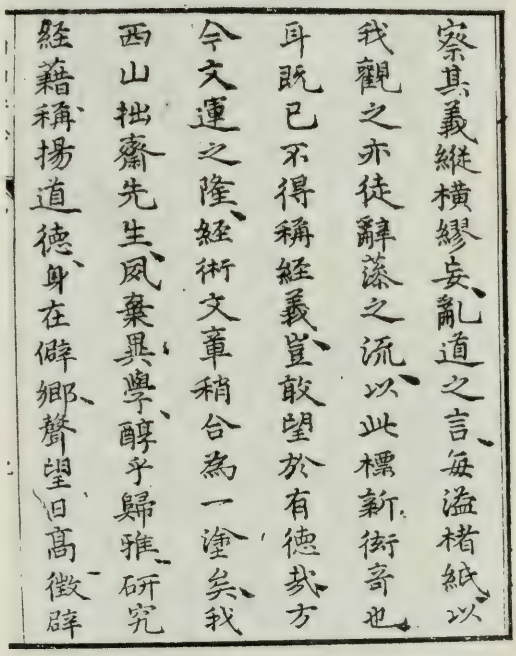
正學指掌序


發江戸
參天豫章樹七年辞寸萌一被對行差杳如俟河清
烏鵲進轉燭届期發武城素之紀綱僕從御盖門生
奮負膺任重未免憂慮營尚牽遊遨聊忘塵俗情
譬彼出籠鳥悼風六翮輕故舊交誼厚追餞品川瀛
輙飢呼野饌了髮酒發聲且莫唱驪駒縱嚆遇新晴
水光漾戸牖濤勢撼檐楹千舶擴席之二州島螺鮮
相赴魚蝦市杖列陜鶩町興憑吾豈敢漁歌聽濯纓
更貪前途勝花舍逐次迎
郡門飲別次韻牧野契

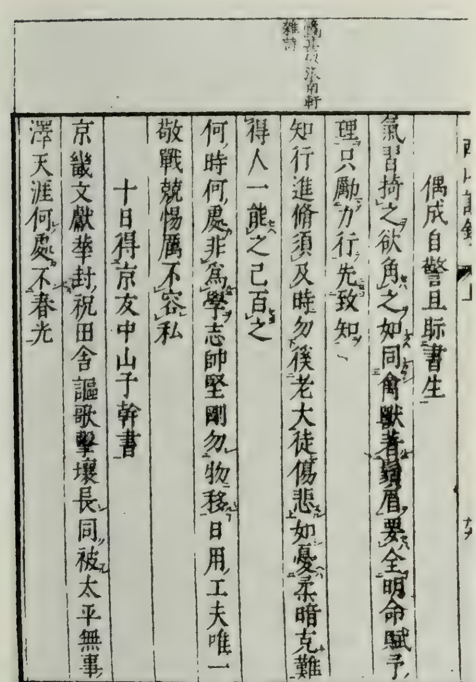
古賀精里詩藁


寺楊遺法一名家磊砢長松蕭灑花應掃滿船如雪
紙拄帆六幅飽風輪
画圖依稀輞浦禪刹韓人扁　日本第一形勝
云者不問可知也
第一勝形題署懸輞津蕭寺領風煙客來明鏡光中
坐俯仰雕欄有二天
山下生臨發乞鄙作固辞而請益力走筆應之
津山壯士東歸裝苦覓送行詩一章何異堅持金鐵
志柚刀臼樹倫三郎
題画

右同


察其義縱横繆妄亂道之言每溢楮紙以
我觀之亦徒辭藻之流以此標新衒奇也
耳既已不得稱経義豈敢望於有德哉方
今文運之隆經術文章稍合為一塗矣我
西山拙齋先生夙棄異學醇乎歸雅研究
經籍稱揚道德身在僻郷聲望日高徵辟

拙齋西山先生詩鈔序


偶成自警且眎書生
氣習拘之欲為之如同禽獸著頭眉要全明命賦予
理只勵力行先致知
知行進脩須及時勿俟老大徒傷悲如憂柔暗克難
得人一能之己百之
何時何處非為學志帥堅剛勿物移日用工夫唯一
敬戰兢惕厲不容私
十日得京友中山子幹書
京畿文献華封祝田舍謳歌擊壤長同被太平無事
澤天涯何處不春光

拙齋西山先生詩鈔

# 寛政異學の禁

諸橋轍次

## 一

寛政異學の禁とは寛政二年五月二十四日幕府の命令を以て朱子學以外の學派を禁絶するといふ事實を指すのである。當時大學頭は林信敬であつたが、此の大學頭に對して幕府から大體次のやうな意味の「被仰渡御書附」(一)と云ふものが下された。それは

徳川幕府に於ては慶長以來朱子學を以て家學と信頼して來て居つた。隨つて大學頭は此の正學を勵んで門人達を取立つべき筈である。ところが近頃世間に色々新奇の説を爲す者があつて、異學が流行し、風俗を破る者が澤山ある。是は正學の衰へた爲であつて洵に相濟まぬ譯である。其方林家の門人中にも學術の純正でない者が時折あるとの噂を聞いて居る。そこで今後學堂の取締

を嚴重にする爲に特に柴野彦助、岡田淸助などに御用を仰せ付けることにしたから、其方の門人共は勿論、外の人の門にも堅く異學を禁じて、正學を攻究して人材を取立てるやうにせよ。

といふのであつた。此の御書附を受取つた林大學頭は、直ちに其の命令を守つて、己の門人に對して大體次のやうな「示諭」(二)を發したのである。

從來德川家が開國の始から宋學を取立て、又聖堂を御取立てになつたといふことは、全く之に依つて風俗を正し、人材を成就する爲といふ御考であつた。然るに近來色々の新奇の學問が流行して、我が林家の門人中にも其に染んでゐる者があるといふ噂が聞えてゐるのは、洵に恐入つて面目もない。今後は門人一同正學に出精して、人柄を相愼むやうに堅く心得へるが宜しい。

といふのであつた。詰り幕府の命令に對して之に恭順の意味を表明したのである。

右の異學の禁令といふのは勿論全部の學校、總ての人に向つて發布されたものではない。唯幕府の學校に命令をし、且つ官吏登用の試驗に正學で行ふといふ極めて小範圍のものであつたのである。併しながら當時の幕府の學校といふものは、言はば今日の官立大學に相當するもので、其の風潮は自然諸藩の學校に及ぶことは當然の結果である。斯の如くにして一度幕令が出て來ると、地方の藩學といふものも皆一様に之に倣つて、總て朱子學を以て正學となし、然らざる者を禁絶するといふ勢になつ

て來た。例へば米澤の興讓館、仙臺の養賢堂、佐倉の成德書院、名古屋の明倫堂、岡山の學館、萩の明倫館、佐倉の弘道館、熊本の時習館、鹿兒島の造士館の如きは皆之に倣つたのである。殊に後にも說明する如く、此の異學の禁は白河の城主松平定信に依つて主として計畫せられた關係上、白河藩では此の幕令が發布せられた翌月、直ちに藩全體に命令を下して、「努めて守るべきは程朱の學にて候。斯樣に申し候ては狹きことと存じ候へども、見る所是有り候間申入れ候」と一般に布告した。同藩では他日立敎館を建てて其の令條を書いたが、其の中には「經義に於ては自己の見を爲すべからず、彌〻永永程朱の說を守るべき事」といふ條項を揭げて、徹底的に異學を禁ずる態度を執つたのである。(此の令條の樂翁公直筆の謄寫版が先年靑淵子爵によつて世に傳へられてゐる。)尤も定信は幕令の出る以前から既に異學を禁ずる考があつた。そこで天明四年には町布令と稱するものを出して出版物に付ての抑壓を加へて居る。それは

書物類は昔からあるもので十分である。是から新規に作り出すことは相成らぬ。若し據んどころなかつたならば奉行所へ相談して指圖を受けるが宜い。又總て作者の分らない書物があつた場合は商賣をしてはいけない。

といふのであつた。斯ういふ形勢であつたから、今度幕令の布かれた機會に益〻其の說を强調したも

のと見える。

(一)朱學の儀は慶長以來、御代々御信用の御事にて、即其方家代々右學風維持の事被付置候儀に候得ば、無油斷正學相勵、門人共取立可申筈に候、然處近頃世上種々新規の說を唱へ、異學流行風俗を破る類有之、全正學衰微に候哉、甚不相濟事に候、其方門人共の內にも、右體學術純正ならざるも折節有之樣相聞え候如何に候哉。此度聖堂御取締り、嚴重に被仰付、柴野彥助、岡田淸助右御用被仰付候事に候得ば、能々此旨申談、急度門人共異學相禁、猶又不限自門他門申合正學硏究致、人材取立候樣相心得可申事(被仰渡御書付)

(二)御當家開學の初、宋學御建立之候儀、全風俗正敷相成人材致熟成候樣有之御美意に有之候。然處近來種々新奇の學流起、我等門人にも右體の學致候者有之樣相聞、今度蒙御察度候段、於我等恐入尖面目候仕合に候、此度より門人一統致正學、人柄相愼候樣、急度相心得可申儀に存候。修業方の儀は追追可申聞候

五月　林大學頭(示諭)

## 二

偖て右異學の禁を調べて見ると、其の內容は大體二點に存するといふことに先づ氣が付くであらう。一つは新奇の說が不可であるといふことであり、二つは風俗を紊すことが不可であるといふことである。然らば具體的に其の異學なるものは果して何ものを指したのであらうか。言ひ換へれば、當時は果して如何なる異學が存在したのであらうか。是に於て吾々は暫く當年の學界に一瞥を與へなけ

ればならぬ。

徳川幕府は先述の如く家康時代から主として朱子學を奉じて來たのである。ところが一つは此の官學を支へて來た林家の消長盛衰に依つて、又他の一つは學界自然の趨向に依つて、時勢の變轉と共に、いつかしら朱子學以外の學派が起つて來た。其は既に寛政以前からの事であつた。而して其の代表的の學派は一つは古學派であり、二つは折衷派であつた。さて此の二つの學派は、各〻に於ては其々の特色を持つてゐたが、在來の朱子學に對して不滿を感じ、別に學的の根據を求めようとした點に於ては共通であつた。朱子學と言へば言ふ迄もなく宋學である。宋學は極めて廣い範圍に亙つた學問であるが、唯濂洛關閩を中心とした所謂宋の理學なるものは、動もすれば空理に走せ、空論に流れ、其の極動もすれば實行と相渉らざる點がないでもない。又學問の研究方法に於ても門戶の見のみ徒らに堅く、道統を守るの念のみいやが上にも强かつた爲に、一方に於ては極めて偏狹固陋の譏を免れなかつた。古學派と折衷派とが先づ當年の朱子學に不滿を感じたのは實に此の二點であつた。古學派の人々に言はせると、孔孟の道を修めんとするならば、宋儒の如き後代の人の說を辿るに先立つて、更に其の根本に遡らなければならない。古に返れよ。一度古に返れば宋學の空疎から脫することが出來るであらうといふ。是が其の主張である。又折衷派の人々に言はせると、學問を爲す目的は、終局孝悌忠

信、仁義禮樂、治國安民の要道を得るに在る。玆に至らんとする途中の經路は、東よりするも可、西よりするも差支へないではないか。學問研究の方法に自由を與へよ、然らば活潑潑地に活きた研究を成し遂げることが出來るであらうと。是が其の主張であつた。

古學折衷二派の目指す所は大體上述の通りだが、尙ほ詳しく論じて行くと當年の古學派の中にも更に三つの分派があつた。其の一つは荻生徂徠に依つて代表せられて居る蘐園學派であり、他の一つは伊藤仁齋に依つて代表せられて居る堀河學派であり、他の一つは山鹿素行に依つて代表せられて居る山鹿派であつた。此の三者は何れも異學の禁の發布せらるゝ以前に存在した學派であつて、而して共に幕府の奉ずる朱子學に對して反對の立場を執つて居つたものである。而かも其の主張する所はそれぞれの特色を具へて居る。先づ徂徠に依つて代表せられて居る蘐園學派の主張を調べて見ると、結局學問は天下國家を治める道を言ふのである。「兎角は天下國家を治め候道と申し候が、聖人の道の趣意にて御座候」（答問書上）といふ徂徠の言葉が之を代表して居る。當年の朱子學は專ら性命理氣の抽象論に馳せて居つて、學問を實用に供するといふことを忘れ勝ちであつた。南學の野中兼山、貝原益軒、或は其の後の中井竹山、新井白石の如き少數の人々は例外として、大勢を言ふならば國家の經綸を考へる人々は少かつたのである、其の點に不滿を感じて、徂徠の學派は先づ之を攻擊した。そこで教育

に付ては個人の特性を尊重して、之を自由な空氣の中に發達せしめ、學問終局の目的を經綸に置いた。斯くて其の門下からは太宰春臺、海保靑陵の如き多數の經濟學者をすら出したのである。

次に仁齋に依つて代表せられた堀河學派は又別の立場から朱子學に反對した。一言にして言へば、堀河學派は專ら德行を尊べよ。是が聖人の學問の眞面目である。其の眞面目の古に返ることが今日の時弊を救ふ所以であるといふのである。此の立場から當時の朱子學を見ると、當時の朱子學は多く實踐を忘れて空理に馳せ、卑近を捨てて徒に高遠に走る嫌ひがあつた。是に於て仁齋は「俗外道なく道外俗なし」（童子問中）とも言ひ、或はまた「道德盛んなれば卽ち議論卑し、道德衰ふれば卽ち議論高し」（童子問上）とも言つて居るのである。最後に素行に依つて代表せられて居る山鹿流の朱子學に就ての攻擊點は前述堀河學派の主張と略〻相一致して居る。素行は曾て「宋朝に至りて道學、心學の沙汰初りて學文高尙に至り、日用の實知日々に昧し」（謫居童問、學問上）と言つて、宋儒の空疎を詰り、斯くて日用の實知に最も重きを置いたのである。若しそれ我國に於ける日用の實知と云へば、それは云ふまでもなく日本の國民としての眞の精神といふことに思ひ及ばざるを得ない。そこで日用の實地を尊んだ素行は、我國の歷史を通じて、我國の國民性を發揮せしむるといふ所に着眼した譯である。彼の中朝事實を著はして國民精神を發揚したのも、實は其の主張からであつた。素行の此の立場から考

へて見ると、當時行はれて居つた朱子學は、幾度か繰返したが如く性命理氣の探究に沒頭し、高きに失して卑きを忘れ、更に本を忘れて末に走つて居つた。斯くては其の末は我國の根本精神を忘れて、徒に德教を他に求めんとすることにもならう、其は本末轉倒であるといふのが山鹿派の攻擊點であつた。古學派は大體以上述べた三つの方向に分れ、三つの主張を持つて居たのであるが、但此等三派の間に通じて共通なことは、聖人の學問の眞の意味は、今日行はれて居る宋學の主張とは全然異なるものであるといふ點であつた。

## 三

右に述べた古學派の主張とは別に、折衷學派は又他の方面から朱子學に對して攻擊を加へて來た。當時折衷學派として世に立つて居つた人々には、或は井上金峨、或は片山兼山等があるが、是等の人人は何れも口を揃へて云ふ。儒學を修むるものは終局の目的さへ聖人の旨を失はなければ宜いではないか。其の途中の區別、卽ち學派の區別などは必ずしも問ふ所ではない。從來幕府が唯專ら朱子學のみに賴らうとしたのは固陋の誤である。もつと自由な立場から自由の研究に進まなければならぬと云つて朱子學を攻擊したのである。片山兼山は嘗て「苟も聖人の道を學ぶ者は心を潛めて熟玩し、……

先輩未發の義を心づかば、是れ聖人の一字一處の忠なれば杜預に畏るることもなく、世學に憚ることもなく、誠一に心を用ひて讀み得べきことなり」（山子垂統、前下）と言つて居り、また井上金峨は、「今日學者の患は雷同より甚しきはなし」（匡正錄、譯文）と言つて、自由研究の尊ぶべきことを主張して居る。要するに折衷派は一つの學派を固執せずに有らゆるものの長所を取れよといふのが其の主張であつた。從つて學問の自由研究といふことが其の生命であり、宋學を攻撃するのも亦其の點に於て試みられたのである。是等の人々は言はば研究法の上に付て朱子學を攻撃したのである。古學派が內容の上から朱子學を攻撃したのとは行き方を異にして居る。若し內容を言ふならば、折衷學派の人々も同じく古學派の人々の中に合流せらるべきものであらう。

以上述べたことが實に學禁以前に行はれて居つた異學の內容であり、又異學の主張であつた。然らば寛政異學の禁に依つて禁壓を加へられた當時の所謂異學者と云ふものには果して如何なる人々があつたであらうか。先づ第一當時異學の五鬼といふ名稱があつた。其の五鬼とは龜田鵬齋であり、山本北山であり、市川鶴鳴であり、豐島豐州であり、更に他の一人は冢田大峯であつた。此の五人の人々が異學者として最も其の名を馳せて居つたものである。それ以外此の異學者の範圍の中に入る人々は、多少時代的には前後の別もあるが、伊藤藍田、戸崎淡園、皆川淇園、細井平洲、吉田篁墩、赤松

滄洲、村瀬栲亭、曻垣龍溪、伊藤東虛、佐野山陰、龜井南溟、篠崎郁州、中井竹山及び其の弟履軒等であつた。是等の人々が此の寛政異學の禁に對して如何なる活動をなしたかは後段に於て述べることとするが、要するにそれ等の人々の努力活動にも拘らず、此の禁令を界として、一様に異學は衰頽に向つた。當時五鬼の頭と呼ばれて居る龜田鵬齋の如きは旗本の士千人を集めて教育して居つたのであるが、此の禁令の出て後は、一人去り、二人去り、遂に總ての書生が袂を連ねて去つたので、門前雀羅を張つて、遂に塾を閉ぢなければならない勢を示したといふことである。又同じ異學者の一人赤松滄洲と冢田大峯との間に異學の衰頽に關する書面の往復があるが、滄洲は「近年漢儒及び伊物二家に從事する學者は往々化して宋學と爲る」と云ひ、大峯は之に對して「關東には此の徒最も多し」と言つて、互に己の學派の衰へて來たことを嘆じて居る。此等に依つても、異學の禁が如何に大なる力を當年の學界に持つたかが推察せらるゝであらう。

## 四

徳川の初めは林家の全盛の期であり、また朱子學勃興の期であつた。家康は文教を振起する爲に先づ羅山を登用したが、羅山は家康の知遇の外、別に尾張大納言義直などの援助を得て、玆に朱子學を

幕府の正學となし、他面孔子廟を上野忍ヶ岡の尾張公の自邸に建てて益々正學の眞價を發揮したのである。其の後元祿時代に於ても林家の勢力はなほ隆々として盛に、羅山の孫鳳岡の如きは特に五代將軍綱吉の寵遇を受けて、從來の僧風を改めて茲に束髪して名を信篤と改め、從五位大學頭に就任せらるゝといふ狀態であつた。然るに鳳岡の後に至ると、林家に於ても必ずしも世々に人材の輩出を見ることが出來ず、其と關聯して朱子學も漸次衰運に傾かざるを得なかつたことは蓋し已むを得ざる時運の變改であらう。併しながら朱子學者の立場に立つて考へて見れば、兎にも角にも永らくの間幕府の正學として其の權威を恣にして居つたものを、一朝にして此の權威を一擲するといふことは到底人情の忍び得ざる所である。是に於て自派の衰頹に憤慨して奮起する考の起るのは蓋し當然であらう。其の奮起の具體的現れが卽ち題下の寬政異學の禁令となつたのである。當時の朱子學者は色々の理由を齎して時流と抗爭した。或者は公然學說の上から、當時流行の異端の學が學說として許すべからざる者であることを主張した人もある。彼の尾藤二洲が始め徂徠の蘐園隨筆を讀み、其の學說の誤れることに先づ疑を懷き、其の後其の師片山北海に指導を仰いで、孟子、中庸更に遡つて周易を熟讀するに至つて益々徂徠の學說の誤れることを痛感し、かくて藤村合田の二翁に書を寄せて異學を禁ぜんことを勸說したが如きは是である。而して其のことは安永元年であるから、寬政の學禁に先だつ十八年前

である。或者は當時の異端學者殊に徂徠派の人々の墮落に憤慨して、是の排撃を考へた人もある。由來徂徠學派は個人の個性を尊重するといふ立場を主張して居るから、自然自由主義に傾く傾向があつた。折衷派も亦學問研究の自由を尊重することから、動もすれば轉じて自由思想の傾向を持つ者もあつた。此等自由思想の傾向が、若し一歩道を誤つて己の欲する所に進めば、必ず修行上に於ても不規律且つ放縱な生活に流れ易いものである、果然當時の蘐園學派などには多分に此の弊害があつたのである。樂翁公は元來學問に對しては極めて公平にして且つ廣い立場に立つて居つた人である。隨て彼此に對して偏見がない。然るに尙ほ且つ其の積善集の中に於ては「徂徠、仁齋などといふ者、如何にも豪雄の氣性とも言ふべきが、其徒又弊を生じて聖人の學に禍すること少なからず」と述べて、當時の異端學者の末流の徒の弊を痛惜して居る。況んや朱子學者から見れば、此等異學者の放縱は見るに忍びなかつたものであらう。栗山は「學弊を論ず」といふ文章の中に、「轉々反復日に新に月に異なる。怪妄詭誕、論語の解二十餘家あるに至る。道術絕無の甚だしき。之を言へば心を痛ましむ。(原漢文)」と痛歎してゐる。斯くの如く、或は學說の上から或は修行の上から、朱子學者の異學排撃を企てたのも少くは無いが、さりながら學禁を起すまでに朱子學者の奮起した最大の原因は、實は田沼時代以來世間の人心が朱子學の嚴格なる學風を喜ばず、之に對して寧ろ輕蔑の眼を以て向つて來た、其の一般

の風潮に對する憤激の結果であると見るのが適當であらう。田沼時代と言へば明和、安永の時代である。此の時代は一般頽蕩の氣風の漲つて居つた結果でもあらうが、朱子學に對して殊に輕蔑の眼を以て向つて居つた。甲子夜話(一)(卷四)の中に寶暦年間の出來事として、當時の朱子學者たりし中井深藏が、當時の若き納戸衆から痛く輕蔑嘲弄せられて居る話を載せて居る。其は此等の納戸衆が、此の奥儒者に對して、孔子の奥方御容儀は美なりしや醜なりしや云々と云つて嘲弄したといふのである。同書には又明安の頃、作事奉行から、昌平の聖堂は第一無用の長物だから取崩したらどうかと建言したことや、幕府の取次衆が、聖堂に安置して居るのは神か佛かと質問した話などを載せてゐる。斯かることが幾多存在したから、幕府創立以來傳統的に權威を保つて居つた朱子學者、殊に林家の人々から見れば、餘りにも甚だしい時俗の侮辱であると感じたに違ひない。斯くて過去の自尊心は塵芥の如く蹂躪せられた姿である。之に對して反撃的に奮起し遂に異學の禁絶にまで進むといふことは寧ろ當然の勢と見なければならない。

(一)中江深藏 諱明遠號蘭林 寶暦頃の奥儒者たりしとき、誰一人敬禮するものもなく、當直に出れば若き納戸衆など、孔子の奥方御容儀は美なりしや醜なりしやなど問て嘲弄しけるとぞ。餘りに甚しきことならずや。明安の頃節儉の政令嚴刻なりしとき、其旨を希ひし作事奉行より、昌平の聖堂は第一無用の長物なれば取崩し然るべしと建言せしを、國用掌れる老職水野羽州聞届て、既に高聽

に達せんとて御用御取次衆へ申けるに、取次衆聖堂と云もの何なることを知らず、奥右筆組頭大前孫兵衛に聖堂に安置あるは神か佛かと尋しかば、大前たしか本尊は孔子とか云ふことに候と答ければ、取次衆其孔子と云は何なりやと又尋ければ、大前論語とか申書物出候人と承り候と答けるに、取次衆打うなづき、嗚呼それにて分りたり、道理で聖堂崩しの沙汰を聞て、林大學頭が唐へ聞へても御外聞がわるゐと申たりと聞及びぬ。さらば先暫見合せ置方なるべしとて、高聽に達せず。

## 五

當年の實情は上述の通りであつたが、併しながら當時林家の宗主であつた信敬は必ずしも此の學禁を喜ばなかつた。樂翁公が學禁を發する下心から、柴野栗山を登用し、之を信敬に押付けて、「彥助は其許家の舊門人、其上老儒の儀、其許年若にも有之候間、學問筋の儀彥助承り申すべく候」（林大學頭信敬申上書引）と云つた命令に對しては、勿論信敬も服從せざるを得なかつたのであるが、併し彼自身はどちらかと言へば朱子學の嫡流とは申しながら、學問研究に於ては今少しの自由を考へ、隨て栗山一派の排他的の學風に對しては慊らず感じて居つたのである。其にも拘らず、遂に學禁にまで開展するに至つたのは、林家の嫡流の主張といふよりは、寧ろ之を惹起した他の有力者があつたのである。

當時の異學の禁を起した最も有力なる人々は、民間に於ては柴野栗山であり、幕府に於ては白河樂

翁である、栗山を慫慂して此の擧に出でしめた者は西山拙齋であり、後には尾藤二洲であり、白河樂翁をして此の擧を起さしむるやうに慫慂した者は主として賴春水である。而して是等の人々は概ね師弟關係若くは交友關係に於て、互に相連絡するところがあつたのである、拙齋と春水とは友人として最も親密であつた。春水は拙齋の死せる後、西山士雅を祀るの文といふものを書いて居るが、中に於て「道義を以て相許す」といふ文字を用ひて居る、而して此の二人は共に京都の那波魯堂の門に於て相知つたのであるが、其の時代に於て尾藤二洲と相許す交際を得たのである。且つ又此の二人は義兄弟の關係でもあつた。卽ち春水の妻梅颸と二洲の妻とは共に大阪の儒醫飯岡義齋の娘であつたのである。隨て此等の關係上、其の交際は一層頻繁を加へたものと想像されるのである。斯の如く互に因緣知交を重ねて居つたのであるから、是等の人々の結束は極めて固かつた。以下是等の人々の學禁に於ける活動の狀態を略述することとしよう。

栗山の異學禁を發せんとする下心は、學弊を論ず（文集卷一）の一文に表れて居る。是は專ら古學派の墮落を論じたものであるが、此の文は樂翁公に提示せられて遂に樂翁公の改革決意を促す素因を爲した。而して栗山をして此の論をなさしむるに至つた原因は拙齋に負ふ所が多い。拙齋は「客問に答ふ」の一文を書いて居るが、此には明かに異學を嚴禁し邪說を峻絕すべきことを主張してゐる。以上

の經緯によつて、栗山は樂翁公の信任を得、樂翁公は栗山を登用することとなつたが、志を得た栗山は極力異學を禁ずるに力を用ひ、更に朱子學の城壁を墨守するに最大の力を用ひた。其がため幾分偏狹に墮した傾はないでもない。當時林家の塾に於て教へた學科は專ら小學近思錄或は四書五經等に限るといふことに定められた。寛政四年九月聖堂學問所に於てやつた學科を見ると（日本教育資料所載）初日には小學、二日目には四書、三日目には五經、四日目には歴史、五日目には論作となつて居る。林家の此の制定は言ふまでもなく栗山の提案に係つたものである、以て栗山の學風と其の主張とを知ることが出來るであらう。

## 六

賴春水も亦熱心なる學禁の主張者であつた。彼は天明四年に「白河城主源君を送り奉るの敍」といふものを書いて居るが、其の中に樂翁公の事業を賞讃して、「異學の源委を辨晰す」と言つて居る。天明四年は定信が老中に就任する三年前のことであるから、春水の此の考が遂に樂翁公をして事を決せしむることに至つた素因であつたことは想像するに難くない。元來藝州藩は昔から學問を尊重し、學者を優遇し且つ之を養成した所である。初代、二代の時には藤原惺窩を尊崇し、三代の時代に於ては

堀杏庵、石川丈山を抜擢し、六代に於ては植田艮背等を登用して居る。而して其の傾向は九代重晟の時代に至つて更に全盛を極めた。賴春水等は實に其の時代に遭遇して活動したのである。當時藝州に於ても朱子學派と徂徠學派との間に攻爭が行はれた。そこで春水は專ら朱子學の爲に力を用ひて遂に藝藩の學をして朱子學に定めしめたのである。天明五年に彼は自己の信ずる所を學黨論の一篇に現はして居る。中に言ふ。「獨り程朱を取り、斷然其の他を退けて可なり。天道に本づき人倫を主とす、本末兼備、之を備へて弊なきものは、唯程朱の學を然りとなす」（原漢文）と。春水には弟杏坪がある。杏坪も亦其の著原古篇の中に於て、「程朱の學統は眞に古學なり、彼の所謂古學の如きものは吾人を以て之を觀れば新の又新なるものなり」（原漢文）と唱へて居る。斯くて春水兄弟は又共に異學排擊に力を盡したのである。

以上栗山並に春水等の異學禁に働いた事實の大要を述べたが、何と言つても此の學禁を起した當面の責任者は松平定信である。由來定信は極めて卓越なる天才を持ち、圓滿なる知識を持つて居つた人である。隨て自ら學問を修むる上に於ては決して偏狹な考は持たなかつた。公の著した修身錄の中に「學文の流儀は何にても宜く候、何の流儀も良きこととあり又惡しきこととあり候云々……」と云ひ、又「何の流と申すことは決して〳〵無之ことなり云々……」と述べて居ることによつて其の消息を知る

ることが出來る。是が恐らくは定信の學に對する眞の主張であつたであらう。然るに此の學風に關する一般傾向に關せず、異學の禁といふが如き、學說を一定せんとする稍〻窮屈な方策を奉ずるに至つたのは抑も何の爲であるか。要するに此は學問研究とは別に、民心を一定し政治を統制する爲には、學問を一定する必要がある。而して其の學問を一定するならば、比較的弊害の少い朱子學が最も適當であると信じたからであらう。花月双紙の中に「彼の桝に量り車に積むべき輩、樣々の說を言ひ罵り、湯の涌くが如く糸の亂れたるが如くになりたらば、誰か此の學を維持すべき」と論じて居るのは、正に其の主張を示すものである。實際家であつた樂翁公は、また學問に於ての傳統の力を無視するものではない。彼の退閑雜記の中に、「程朱の學を學びしにぞ今に變はることなし……年月多く此流派に一定したると、良き人の多く尊信したると、尊信したる人の多きとを以て考へぬれば、程朱の說を信ずるは誤少しと言ふべからんか」と云ふのが是である。此の言葉から考へて見れば、定信の異學禁に贊成した理由は、實に弊害少く傳統あるものを取らんとする考があつたからであらう。斯の如く幕府に於ては樂翁公、野に於ては栗山、春水、拙齋、二洲の諸學者が奮起した爲に、遂に寬政異學の禁は大成したのである。

## 七

從來世間の嘲笑冷眼視を受けて居つた朱子學が再び幕府の正學として確認せられ、而してその學敵とする異學が全然禁絶せられたものであるから、朱子學者の喜び勇んだことは固より當然のことである。拙齋の栗山に送つた手紙の中に「學政振興の御様子、洵に天下同慶の御事と、草澤にある儕輩まで懽りながら恐悦の至りに存じ候。今よりして後、異學邪說者、悚然として變質し、昔日の魑魅に返り申すべく、愉快又少なからず存じ奉り候」と言つて居るのが見えるが、此の述懷は恐らく當年朱子學者一般の考であつたらう。併し斯の如くにして一面の彈壓を加へると、之に對して反駁論の起り來ることは又當然である。而して此等の反駁論者の驍將中、其の一人は冢田大峯であり、他の一人は赤松滄洲であつた。大峯は滄洲に對しては後輩の位置であり、常に其の學德に傾倒して居つたものである。「虎の先生(赤松滄洲)に於ける、父兒と言ふも可なり」と云ふ書面の文によつて其の消息は伺はれると思ふ。此の滄洲が先づ最初に柴野栗山に對して異學の禁の不當なることを攻擊した。其の主張する所は大體、學問の研究には自由を許せ、孝悌忠信、仁義禮樂の根本精神をさへ失はなければ宜いではないかといふことであつた。「それ人心の同じからざるは其の面の如しとは、古人旣に之を言へ、

り。書を讀み道を學ぶ、見る所各異なり。而して其の尊信する所は亦仲尼の敎にして、孝悌忠信仁義禮樂治國安民の外に出でず、卽ち必ずしも唯宋學にのみ是據らんや」（與柴野栗山書、原漢文）といふのが是である。此の烈々たる滄洲の手紙に對して、栗山は別に答ふる所がなかつた。蓋し道同じからざればば相共に謀らずといふ主張に立つたのであらうか。或は又年來の交誼に對して寧ろ論爭を事とするに忍びなかつたのであらうか。其の間の消息は知るに由ないのである。

栗山に代つて西山拙齋は「赤松滄洲に與へて學を論ずるの書」の一文を草して答へて居る。論旨は多岐に亙つて居るが、要する所「設し敎學をして方を失ひ、正邪をして辨せざらしむれば、何ぞ能く民を化し俗を爲すことを是なさん」（原漢文）といふのが其の主なる主張であつた。而して當年の異學を濁水、假金に譬へ、朱子學を以て淸水、眞金なりと論じて居るのである。

滄洲が異學の禁に反對を唱へたと同時に、冢田大峯も亦樂翁公に對して極めて嚴重なる抗議を申出て居る。大峯は當時江戶の五鬼と稱された筆頭の異學者である。禁令の發布せらるゝや、早くも意見書なるものを公に奉つて「人は其氣質の近き所に依りて各好む所同じものに無之御座候へば……」「學問も必ずしも程朱の學問に御座なく候とも、人々の好みに任せて——修業致さすものと存じ奉り候」と述べて居る。更に彼は其の意見を述ぶる外に、古學の學問所增設請願書といふものを書いて、宋學

以外の學問所を造つた方が寧ろ學問の爲にならうといふ意見書を出して居る。「古學の學問所を仰せ付けられて、朱子不信仰の輩は右の場所にて稽古仕り候樣御下知御座候はゞ、却てお互の勵みに罷成り候て云々」と言つて居る。かくの如く滄洲大峯等の主張が出たのであるが、それにも拘らず、幕府の實權を握つて居る白河公の實力と共に、此の學禁は實行せらるゝに至つた。旣に學禁が實行せられれば、是より幕府の學問は又以前の如く朱子學一點張りとなり、玆に聖堂の官學化をなすに至つたのである。林家は信敬が死んだ後、後繼者がなく羅山の系統はそこに絕えたが、樂翁公は松平能登守乘薀の子、衡をして林家を相續せしめた。是が林述齋である。儒官としては寬政三年に尾藤二洲、八年に古賀精里が任ぜられて、此の二人が前の柴野栗山と相並んで所謂寬政三博士の全盛時代を現はし、斯くて聖堂の學が又昔の姿に立返つたのである。

## 八

異學の禁は嘗て支那にもあつた。併し其は朱子學を禁ずるの意味であつた。然るに同じ名の異學の禁が我が國に於ては寧ろ朱子學の庇護となり保護となつたのは一奇である。往年の朱子は異學者と訓られ、剰へ僞學者と貶せられ、日常の進退に故障のあつたは勿論のこと、生命にさへ幾度か危險に襲

來した。然るに此の間に處して猶且つ敢然として所信に邁進し、道統の命脈を保つた。時權の壓迫は必ずしも道を左右するの力を有たないのである。之に對して寛政の學禁は果して永遠に朱子學の發達を我國に促したか。是に於て吾々は靜に制度の力と人の力とに就て反省するところが無ければならぬと思ふ。

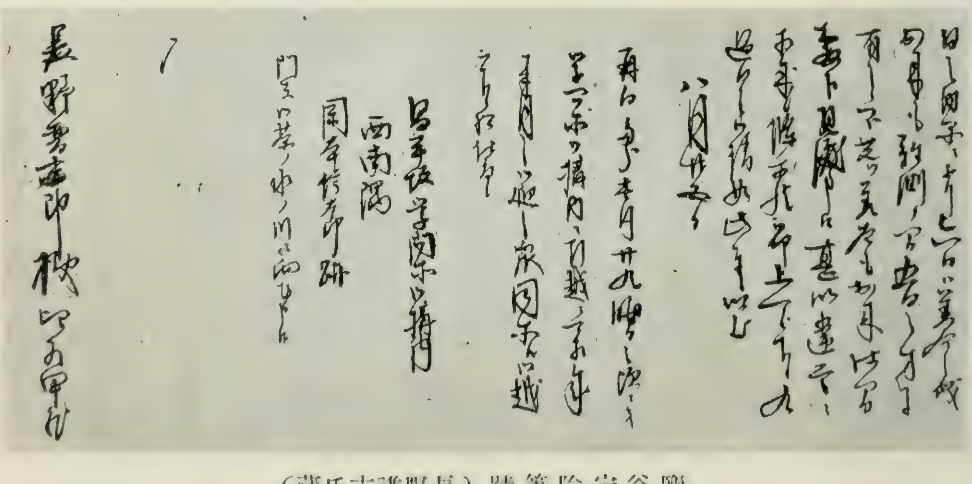
（昭和十三年八月）



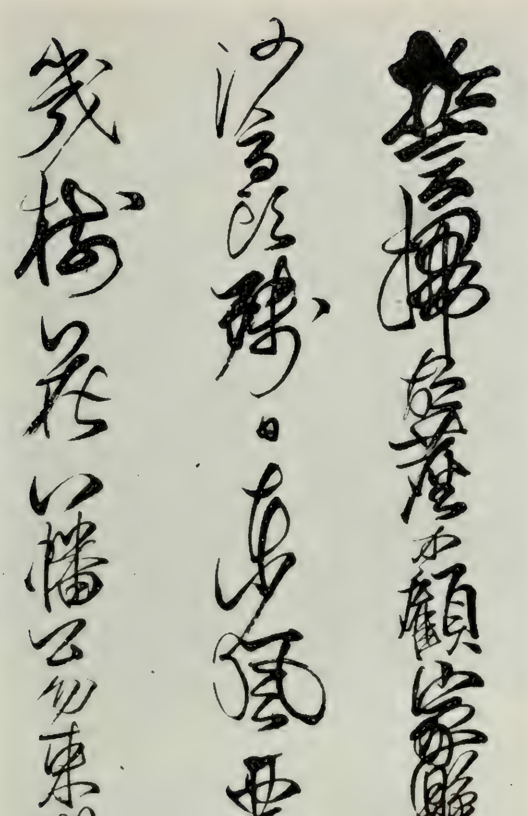
芳野金陵肖像（芳野幹一氏藏）



安井息軒肖像（安井三郎氏藏）



鹽谷岩陰筆蹟（長野謙吉氏藏）



藤森天山筆蹟（高野辰之氏藏）

# 幕末の儒學

芳野幹一

異學の禁はその弊の及ぶ所、思想の自由を拘束して學問の進歩を妨げたが、よく篤實の風を養ひ、名分を辨へ、氣節を尙び、尊王精神の勃興を促して遂に王政維新の基を開く結果を將來するに至つた。然ればこの異學の禁こそは、家康以來奬勵し來つた朱子學に因つて全く夢想だにせざりし結果となつたものである。されば國體明徵と云ふことは決して今日叫ばれた事でないことを銘記しなければならぬ。今當時に於ける主なる者を擧ぐれば文久の三博士と云はれた安井息軒・鹽谷宕陰・芳野金陵や藤森天山・會澤正志・藤田東湖・林鶴梁・羽倉簡堂等の如き是れである。

## 一 安井息軒

諱は衡、字は仲平、始め足軒と號したが後息軒に改めた。又別に半九陳人・淸瀧・葵心子とも號し

た。寛政十一年己未正月元旦、日向國宮崎郡淸武村（飫肥藩）に生れた。實に此年江戸に聖堂が再建されたのも奇緣である。その先は出羽の人、安東貞朝といふ者あり、上野介となり、其采地安井村に徙る、因つて更めて氏とした。七傳して家朝に至り日向に徙り飫肥侯に事ふ。家朝十六世の孫を朝完といひ、字は子全、滄洲と號し學行を以て當時に聞えた。息軒は實にその次子である。人となり長五尺に滿たず狀貌寢陋なれども識見は明、色溫なれど氣は剛であつた。飫肥の地九州の西南に僻在するため、士風は樸陋、文事を喜ばない、息軒獨り發憤して讀書し矻々懈らず、曰く、吾六經を治めて物を開いて務を成さんと欲す、不幸吾道行はれずば之を文字に托して知己を天下後世に求むべきのみ、若し夫れ區々たる毀譽以て齒牙に置くに足らずと。年甫めて冠を踰ゆるや大阪に遊んで篠崎小竹に會うた。小竹語りてその才學に驚き詩を賦して贈つた。後江戸に至り昌平校に入り贄を松崎慊堂の門に執つた。慊堂は一世の碩儒、人に於て許可をつゝしんだ。其徒に語つて曰く、安井生は古人なり、豈弟子を以て視る可けんやと。歎息せしむるに至つた。その石經を考訂する時多く息軒に詢つたといふ。以て知る可しだ。文政九年、飫肥侯東勤するや息軒を擧げて侍讀とした。翌年藩學を創建して助教に遷り、九州を巡覽して觀風抄一卷を撰び之を上つた。侯その用ふ可きを知り、引いて謀議に參せしめたが權要の阻格にあひその議行はれず。天保六年父を失ひ、服終るや辭職して東行し再び昌平黌に學

ぶ。寺で増上寺の僧寮に寓し戶を閉して苦學し聖賢の出處進退の旨を究め禮樂兵刑古今沿革の事を考へ、大に得る所があつた。その徒を集めて業を授くるや四方の俊秀其門に集まる。先に息軒を忌みたる者も前後世を去り、全藩翕然として望を屬するに至つた。よつて侯擢んでて參政に補し祿百石を給した。嘉永六年米艦來りて互市を求むるや、諸侯邊防を修めた。時に息軒謂へらく、羊質にして虎皮を蒙るこれ敗を取らざるもの幾んど稀なりとて、海防私議一卷を著し、製艦鑄砲築堡蓄穀の方を論じた。水戶烈公聞きて善とし、その臣藤田東湖をして就て時務を詢はしめ且つ足食足兵民信之の七字を手書して贈つたといふ。是に於て息軒の聲望益々隆く、その他搢紳の見えん事を乞ふ者多かつたが皆辭して往かなかつた。幕府召して祿二百苞職俸十五口を給した。幕府もと林氏學政を掌りその經を說くに專ら朱註を用ひ儒官は大概その門から出た。然るに息軒古學を尊信して此の選に膺つたのは蓋し異數である。慶應四年彥根侯業を息軒に受く、よつて請うてその別業に館せしめ禮待これつとめた。その跡は今の明治神宮の菖蒲池畔であつたと思ふ。然れども舊君を思うてやまず、籍を飫肥に復さんと欲した。飫肥侯乃ち延いて世子の師とした。或人朝に薦むる者があつたが、老耄の故を以て辭した。某親王召して經を講ぜしめんとしたが西方の鄙人禮節に嫺はずと辭して往かなかつた。晚に白河の代官に任ぜられたが赴任に先だつて村民之を聞き奢侈の風俄かに改まつたと云ふ。是に於て老を告げて

致仕し著述を事とした。清國江蘇按察使應寶時は息軒の管子纂詁・左傳輯釋を讀んでその精核を稱し爲に序文を製した。又朝鮮の禮曹參議金綺秀は來聘して人に告げて、吾聞く日本に安井先生あるも恨らくは歸期已に迫り相見るを得ずとて乃ち息軒の二字を書して贈つたと云ふ。外人に推服されし事此の如くなれば海內の欽仰や知る可しである。息軒の學はその師慊堂と相似て篤く信じて古を好み、六經を硏精し、旁ら子史を治め、尤も力を漢唐の注疏に用ひ參するに衆說を以てし、考據精確、必ず之を至當に歸したので、先儒未發の卓見も多かつた。平生交る所の鹽谷宕陰・芳野金陵・藤田東湖・羽倉簡堂・藤森天山等と文社を結び斯文を振作するを以て己が任とした。而してその文、法を唐宋に取り秦漢に溯り、雋偉雄健、その爲人に類するものがあつて、世の推重を受け泰斗と仰がれた。而して旁ら算數に明かであつた。嘗て曰く、聖門六藝數はその一に居る。經國行軍よらざるなし。近世の學者性命を談ずるも曾て二五の十たるを知らず云々と。著す所、管子纂詁十二卷、左傳輯釋二十一卷、論語集說六卷、息軒文鈔六卷、書說摘要四卷、孟子定本六卷、戰國策補正二卷、讀書餘適二卷、江山餘情一卷、睡餘漫筆三卷、北潛日抄二卷、世に梓行す。その他靖海問答一卷、料夷問答一卷、外寇問答一卷、軍政或問一卷、忍草一卷あり、その他三禮毛詩諸書未脫稿のもの若干卷あり、並に家に藏すといふ。明治九年九月二十三日東京麴町土手三番丁の僑居で歿した。享年七十八。駒込養源寺に葬る。

歿後四十年大正四年十一月十日大正天皇御卽位禮を擧げさせ給うや特旨を以て從四位を贈られた。川添氏を娶りて二男を生んだ。長を朝隆、次を謙助と云ひ共に先だつて歿した。謙助の遺孤千菊後を承く。四女あり、長女須磨子は宏陰の媒酌で肥前北有馬村の人中村貞太郎（勤王家北有馬太郎）に嫁ぎ小太郎を生む。餘は皆早く亡つた。千菊の死後息軒の外孫小太郎が繼いだ。安政五年麴町三番丁の息軒の家に生れた。字は朝康、朴堂と號し性溫和寡默なれど毅然たる氣魄を藏してゐた。島田重禮の門に學び其女琴子を娶り四男、五女あり。その學その文共に鬱として一家をなし泰斗であつた。明治二十五年學習院教授となり、同三十五年招かれて北京大學堂の教授となつたが、歸朝して第一高等學校、大東文化學院に教鞭を執り、昭和七年一月五日、御進講の光榮を得た。昭和十三年四月二日歿す、享年八十一、朝廷その功を嘉せられ旭日小綬章を授けらる。著す所、本邦儒學史、大學中庸論語莊子講義、日本朱子學派學統表、漢學門徑、小村壽太郎侯略傳、論語講義、曳尾集、その他論文解題等多し。

## 二　鹽谷宕陰

諱は世弘、字は毅侯、通稱は甲藏、宕陰はその號で又悔軒・九里香園・晩香廬の別號があつた。文化

六年四月十七日、江戸愛宕山麓に生れた。四歳父桃蹊に孝經を授けられ朗誦したといふ。文政二年十一歳よく手づから中庸を寫し且つ諳記した。十六歳始めて昌平黌に學び書生寮に入り書堂記を作りてその志を述べた。同九年十八歳、同學の安井仲平、佐田修平等と戰國策尙書を會講し、書經存疑一卷を作る。同十年日光に游ぶ。平生國史野乘稗史を嗜んだ。此行は蓋し他年修史の基をなすに至つたものであらう。同十一年五月松崎慊堂の門に入る。慊堂宕陰を愛すること子の如く宕陰之に事ふること父の如くであつたといふ。同十二年畿甸に游び、京阪の學士と議論を上下し、樂翁芳烈二公の治蹟を訪ひ、古戰場を過ぎ、圖記を案し地形を規す等大に得る所があつた。天保元年三月京師に再遊し、頼山陽の塾に寓す。山陽宕陰を奇とし敢へて弟子を以て待たず、宕陰と外史を對校し、時に樓上に置酒して英雄の事蹟を縱談した由である。此年蒲生氏鄕傳成る。同二年父桃蹊歿す。宕陰哀毀禮にすぎ晨夕墓に謁し百餘日を踰えたといふ。藩公その貧を憫み文學に補し俸十五口を給した。これ一つに松崎慊堂の薦めによる。同三年命を受けて藩學を定め貞觀政要を進講した。宕陰の忠直なる、講に當つては前夕室を閉ぢて靜坐し反覆構思し、文義の外參ゆるに時事を以て諷諭したと云ふ。九月鞭駘錄を作つた。同五年視志緒言成る。同六年十東氏を娶る、性貞淑、好みて書を讀み大義に通ぜりといふ。同七年清水赤城に就き長沼氏兵法を學ぶ、八年吐納法を習ひ、毎朝調息三十、槍を揮ふこと三百を以て常

課とした。三月長男生れ夭す。同九年藩公の命に因りて丙丁烱戒錄を輯む。六月鐵砲洲邸に移る。同十年藩公加封の慶あるや上書して之を賀し規戒を進む。公大に之を嘉し、信任を加へた。弘化元年四月松崎慊堂歿す、安井仲平、海野豫介と謀り後事を經紀し、その行實を撰した。宕陰夙に慊堂に從ひ深く其學德を欽び之に事ふること父の如く、後年その手簡を裝して一卷となし忌日ごとに展して之を祭つたといふ。同二年長沼澹齋傳成る。同三年露人長崎に抵る。憂念し措かず邊防を講究し籌海私議十篇を著す。時人爭つて之を誦した。當時慷慨事を論ずる者多く拘禁の厄に遭ふ、或人宕陰を警め韜晦をすゝめたところ慨然として、當今の世正議將に熄まんとす、吾正を守つて斃るゝも辭する所に非ずと答へて齒牙にも掛けなかつた。同四年清國に阿片之亂あり、因つて阿芙蓉彙聞七卷を著す。諸藩人を遣し爭つて鈔寫し鑑戒とした。嘉永四年正月大統歌の作あり。これ皇統を歷史唱歌體に咏じ幼童の諷誦に便ならしめ自ら尊嚴を知らしめんとの主意に出たものである。當時薩長等之を刊行して士氣を鼓舞した由である。同五年十東氏歿す、同六年四月、繼配鈴木氏を娶る。六月米艦浦賀に抵る。防禦策を草し又軍艦銅鈔を造る等の事を上書をしのでその名一世に高く、烈公は東湖をして守禦の方を問はしむる等、憂國士人の來る虛日なき樣であつた。時に四十五。安政元年屢々橫濱橫須賀の間を往來して外人の動靜を窺ひ探邊聊報二卷を作つた。海國圖志の有用の書たるを知り箕作阮甫と梓に付し

た。同二年十月江戸大震あり、烏森の宅倒壞し麹町三軒町に移る。開measure茅議成る。同四年六藝論、隔轉論を作る。翌年越前公召して當今の急務を問はれたので儲君を建て宰輔を擇ぶべきを對へた、禦夷策を草して酒井・彦根・福井・一橋侯に上つた。而して用人に任ぜられ祿二百石となつた。翌六年芝新堀に移る。萬延元年三月櫻田の變あり、上書して水戸浪士の處置及び老公の無罪を論ず。文久元年年五十三。四月朔幕府徵命あり、大將軍に晉謁す。同二年十二月幕府徵して儒官となし昌平黌教授に任じて二百苞十五口俸を賜つた。嘗て書を將軍の前に講ず。音吐朗暢、講義明晳、將軍甚だ之を稱したといふ。翌三年弟誠（簣山と號す）を養子となす。簣山亦儒官補に任ぜられ父子共に昌平黌に直るの名譽を得た。三月本郷弓町に移り、八月昌平黌官宅に徙り督試官となる。元治元年五十六歲。夙に修史に志ありしも時局紛擾し編述の暇なし。因つて二月上書して江戸幕府史を修めんことを乞ひ、允を得た。台徳公より創め五卷を成した。慶應元年、鈴木氏歿し、黑河内氏を娶る、皆子がない。大猷公記三卷を編す。同二年簣山甲府の徽典館學頭となる。中風症に罹るも病を力めて校に臨む。六月大猷公記五卷成る。昭代記十卷は卽ちこれである。十二月官宅出火し簣山の下谷の家に移る。同三年簣山歸り徒士町に遷る。五月將軍統繼の賀詩を上り縐紗二卷を賜る。八月十七日發病し二十八日遂に歿す。年五十九。歿後四十九年、大正四年十一月十日大正天皇卽位禮を擧げさせ給ふや特旨を以て正五

位を贈られた。資性寛厚、身を律する甚だ儉、人の窮厄を見るや囊を傾けて少しも吝まず、尤も人倫に篤く、賢愚少長となく至誠を以て之に接した。山田方谷・木下犀潭・藤森弘庵・藤田東湖・芳野金陵・安井息軒等と交最も久しく、その尤も畏敬する所は安井息軒であつて、その交は兄弟の如くであつた。息軒は軀幹矮小、宕陰は堂々たる體軀であつた故に時人戯れに「鹽谷一丈雲横腰、安井三尺草埋頭」と云うた。その誌に「不レ願死入二儒林傳一、輕甲一聯藏在レ家」とある如く所謂儒者を以て遇せらるゝを嫌うた。幕儒ではあつたが大義に於ては幕儒と見る所を異にしてゐた。その學は實用を主とし漢唐の注疏と洛閩の說とを併せ取りて之を折衷したがその長ずる所は文にあつた。その文雄健縱横、東西名家の長を取り之を運らすに自家の機杼を以し、奕々たる光彩は一篇の出づる毎に人爭うて傳誦したといふ。六藝論の如きその尤なるものである。文集十卷宕陰存稿といふ。その他著す所、丙丁烱戒錄二卷、丕揚錄九卷、阿芙蓉彙聞七卷、籌海私議一卷、隔鞾論一卷、大統歌一卷、鞭駘論一卷、視志緒言二卷、學制彙集二卷、日乘若干卷、昭代記十卷、享保叢書若干卷があつた。

簣山は父桃蹊の業を繼がんとして醫を學んだが、その志でなく儒者となつたが、父歿してその命に違ひしを悔い再び醫を志した。年二十九で掛川藩の文學となり、更に幕府の召に應じて徽典館の學政を督し、明治維新後に大學助教となり、歲餘にして明治七年九月に歿した。年六十二。簣山文鈔あ

り。簣山の子時敏、青山と號し、文名一世に高く青山文鈔あり。長子溫氏、節山と號し、文學博士と爲り現に大學教授たり、箕裘四世、堂構の業を隆さざるは累葉積德の致す所と云ふべきである。

## 三　芳野金陵

諱は世育、字は叔果、金陵はその號、匏宇は晚年の號である。通稱は立藏、初め愿三郞とも稱した。下總國葛飾郡松ヶ崎村の人である。考諱は彝、字は彛卿、南山と號し醫を業とした。妣は齋藤氏。享和二年十二月二十日外家下總相馬郡小文間村齋藤秀政の家に生れた、金陵は第二子である。文化九年年十一の時南山の友我孫子驛大光寺に寓して習字を學ぶ。文化十二年年十四、父南山が江戶豐島町にト居したので從ひ移つて自ら薪水の勞を執り、初めて論語の句讀を受け、日夕誦讀して怠らず。後蒙求の講義を聞くこと半卷、既に書を解することを得、復講義を聽かなかつた。これより史記漢書を涉獵し、且つ綴文賦詩の法を受け、父の筆削を請うた。初め南山文學を以て家を興さんと欲し刻苦書を讀んだが既にして謂へらく、鄕里良醫に乏し、急なるは醫に在りと、遂に醫を業とするに至つた。是に於て喜んで予の初志汝に因つて達することを得べしと云ひ、後松ヶ崎に歸居した。文政三年父の學友片岡純德翁病みて侍養する者なし、父命じて往いて看護せしむ、用意懇切至らざるなし、翁之を

喜び養ひて子とせんとしたが獨立の志あるを以て固辭した。同六年二十二歳江戸に游學せんことを乞ふ。父曰く、師はその徳を師とするなり、故に其人を擇ばざる可からず。方今門を開き儒と稱する者少しとせず、然れども氣品高く學術正しき者龜田鵬齋翁に若くものなし、汝宜しく從學すべしと、至れば翁已に老い金杉村に隱居し一切の生徒を謝してゐた。其子綾瀨翁よく家學を紹述するを聞き遂に贄を執つて入門した。翁朱硯を賜ひ己に代りて弟子の詩文を添削せしめた。同九年年二十五。淺草福井町に卜居し帷を下して生徒に教授した。同十一年年二十七。十月日本橋數寄屋町に徙り清水氏を娶つた。十二年年二十八、春災に罹り檜物町に徙つた。天保五年。春又災に罹り八丁堀茅場町に移る弘化二年年四十四。正月又災に罹り新居を茅場町菅公祠側に築く。同四年四十六。八月四日田中藩主本多侯の召に應じ儒官となり、俸十五人口を賜はり給人格に班した。もと家貧しく加ふるに屢〻災に罹り窮益〻甚し、友人閔み薦擧する者あるも皆辭して受けず、田中侯の召に及んで、吾が桑梓の領主なり、以て仕ふべしとて始めて褐を釋いた。

嘉永三年年四十九。九月十七日侯封に就いた。命を受けて扈從し、且つ監察の事を攝し、歸路伊豆修禪寺溫泉に浴して歸る。東歸念日記が出來た。同六年正月十一日取次格に進み、六月米艦の浦賀に來るや海外の形勢を審かにするを急務とし、知友と謀り支那新報、和蘭口單等を捜索閲覽して、開鎖

の得失、防禦の利害等を講究した。是に於て竊かに浦賀に往き虜情を探察し同志と畫策する所があつた。時に閣老久世侯（大和守廣周）の侍臣寺田勘十郎が門人であつたので自ら意見書を草して之に託し侯に致さしめた。侯も亦寺田をして諮問せしめた。而して當時の志士金陵に因りその志を通ずる者往々あつたとの事である。

安政元年年五十三。正月米艦再航遂に條約を締結した。謂へらく非常の事を處するは非常の人を以て任ぜざる可からず、舊例故格を墨守すべき時に非ず、水戸前中納言・一橋中納言及び越前中將は衆望の歸する所である、因つて水戸老侯を將軍の後見職とし、越前中將を擧げて補佐とし一橋中將を儲貳の位に卽かしむれば必ずや國是を定め、時局を濟ひ得べしと久世侯に建議した。同二年年五十四。十月久世侯より時務の諮問あり、因つて時弊を陳べ革新の本を論じて之に答へた。同五年二月又災に罹り三月下谷徒士町に移つた。此年大老井伊直弼國權を擅にし宸勅に違ひ衆論に背いて外國と條約を定む。因つて竊かに同志と計畫周旋する所があつた。やがて事洩れ縛せらるゝ者相踵いだ。一日櫻任藏來つて、禍旣に門牆に迫る、何ぞ潛匿して後圖を爲さざる。予今去らんとす、故に來りて別を告ぐと。金陵曰く、吾君主のある有り以て進退を私すべからず、安じて命を待たんのみと云つて竊かに後事を規畫してゐた。金陵幕吏の指目する所となつた。家人禍の及ばんことを憂ひ、且つ藤森天山の獄

中に在りて金無きに因つて獄吏の困辱を受けしことを聞き、竊かに衣服を典して金を借り、その衣襟に縫着して不虞に備へたといふは此の時の事であつた。金陵は平生危言せず、爲にこの禍を免るゝを得たのであらう。

萬延元年年五十九。十一月藩新知百石を賜ひ物頭に進む。嚮に本多敬得年已に老い嫡嗣なく一女子あるのみ。上下爲に之を憂へた。弟正訥賢にして好學、一藩望を屬した。然るに小人その聰明を忌み他より養子し女公子に配せんとし、物情騷然たるものがあつた。因つて金陵は藩中の熊澤西郷等と謀つて意見を草して上疏したが沮格するものが有つて達せず。乃ち藩公の親戚に迫り幕府の顯要に託し百方盡力、遂に目的を達し正訥が封を嗣ぐに至つた。時に太平の久しき奢侈風をなし藩の歳入常に足らず負債數萬圓に達した。正訥、乃ち鋭意治を圖り諸政を改革せんとして金陵を舉げて勝手頭取となし專ら事に當らしめた。嚮に勝手奉行たりし者は概ね無學理財の才なく帑藏匱乏すれば金を商賈に仰ぎ、或は士卒の祿を減じて一時の急を濟ふので、負債は年に增して士卒は日に疲弊した。因つて入を計つて出を爲すは財を用ふるの道で困窮此の如きは出入度なく基本立たざるに由るとなし、是れより計簿を檢し、冗費を除き、不急を廢し、文武を奬勵する等宿弊を除き新政を布きたる結果は翕然として治に向つた。

文久二年年六十一。櫻田の變後、幕府は金陵辱知の越前中將を擧げて政事總裁職に補したので、屢々意見を述べ可否を獻替したが祕して傳はらない。又知友と謀り人材を推薦し爲に閣老參政に至りし者もあつた。將軍上洛の議決するに及んで大義を明かにし名分を匡すは此時にありとして、山陵の荒廢を修め、供御の歳額を增し皇族の剃髮を停むる等の建議をしたのも此年であつた。十二月十二日幕府に召されて儒官となり廩米二百苞を賜つた。同三年年六十二。朔俸十五人口を加へられた。八月湯島中坂下に移る。學政更張の議起るや、先づ府下に小學十數所を建て麾下の士をして就學せしむべしとてその方法等を當路に建白したが、發令に先だつて中止となつた。後儒官（中村敬輔 鹽谷良平）に命じ本邦學士の文章を編纂せしめた。此の時本邦先儒の經籍に注する充棟も啻ならず、其の萃を拔き一部の經解を編輯せば後學を裨益する所あらん、若し允を得ば請ふ其任に膺らんと建白したが聽かれなかつたので識者は之を惜んだ。昌平黌官舍に徙り書生寮の監督となつたのも此年の事である。

明治元年年六十七。五月骸骨を乞ひ田中藩に復籍せんことを幕府に乞ひ允を得た。十月練塀小路に轉居す。十二月十一日徵士に擧げられ昌平黌二等教授を命ぜられた。同二年又災に罹り昌平黌官舍に移る、育英を以て自ら任じ循々誘導し疑を質す者常に席に充ちたといふ。二月二十五日百官に詔して施政を諮詢するの命あり。封事を上り外交を固うし條約を改正すべきを論じ、併せて紙幣の害に及ん

だ。七月二日少博士に任ぜられ正七位に敍せられ、十月二十三日中博士に進んだ、同三年三月從六位に敍せらる。大學を廢するに至つて官を免し位記を奉還した。十二月職務に勉勵せるを賞せられ直垂一領を賜はる。八月神田末廣町に移る、生徒の塾に寓する者數十百人、藩知事の敎を請ふ者亦日に戶に滿ちたといふ。六年。時事一變す、士已に常職を解けり、これ歸耕の時なりと、乃ち小石川大塚に廢地三萬坪を購ひ役夫を募り開墾に從事した。時に年七十二。同七年八月居を大塚に移す。閑に就き生徒を敎へ暇あれば筆を執る。同十一年去冬より飮食常ならず、三月鄕里松ヶ崎に展墓し歸れば病大に漸し八月五日遂に逝く。歿するの前三日息世經を膝下に召し後事を遺命し且つ曰く、吾多年經義を研究し得る所なしとせず、一書を著し子孫に傳へんと欲すれども公事に鞅掌して果さず、閒を得るに及べば旣に氣力衰弱して欠伸止むこと多し、僅に大學中庸を畢りて論語の半に至る、然れども其說未定改めんと欲する所猶多し、未だ以て人に示す可からず、宜しく篋底に藏すべしと、業の未だ畢らざるを以て遺憾とするの狀色に現はれたと云ふ。金陵遺稿四卷、譚故書餘二卷、譚經書餘二卷あり。歿後三十五年、大正四年十一月十日大正天皇御卽位の御儀を擧げ給ひ特旨を以て從五位を追贈せられた。

金陵五男三女あり、長諱は長毅、字は伯任、復堂と號し、復堂遺稿二卷あり、次は郁藏、次は世行、

字は實甫、櫻陰と號し息軒の門に學ぶ。贈從五位、遺稿三卷あり。次は世經、字は公權、適亭と號す、家學を紹述し、明治十一年逢原學校を開校し子弟を薫陶し、衆議院議員、府會議長、東京府教育會長等に選ばれた、公共事務勤勉により藍綬褒章を賜はる、昭和二年六月二十日歿、年七十九。贈從五位、詩文稿三卷あり。次は艮八郎夭す、皆清水氏の出である。金陵幼にして温和、曾て父母の叱咤を受けしことなし、その父母の喪に居る、哀毀禮に踰え衰麻を褻して其制を終へたといふ。已に江戸に卜居しその郷里を去ること八里、而も母氏を省する未だ一月を曠うすることなく、母生魚を嗜むを以て至るや必ず携へ珍を談じ稗史を讀みて慰めたといふ。某侯幕府の譴に遇ひ蟄居を命ぜられた。侯臣幕府に阿り其居を閉ぢ環らすに屏風を以てした。時恰も極暑一點の風を容れず、其臣某之を憂ひ金陵に就きその閉を寛うせん事を謀つたので盡力之を救つたといふ。又橋本左内と舊あり、左内の投獄せらるるや差入物の禁あり、門人の請によつて奔走供給乏しからざるを得たといふ。金陵泛交を務めず、終始相交る者は安井息軒・鹽谷宕陰・藤森弘庵・藤田東湖・羽倉簡堂等數人に過ぎなかつたが、交を納るものあれば亦津涯を設けず、然も其の人に非ざれば之と交ることはなかつた。その故舊に接する情誼極めて厚く窮乏を救ひ災難を恤んだ。その師綾瀨に事ふる甚だ厚く、一家の事皆之を擔任し事あれば必ず召して之を謀られた。その子弟を敎ふるに徳行を先にし實踐を宗とした。要は國家有用の器を

成すにあつた。當時漢籍を讀む者支那音に通ぜざるを憂へて、昌平黌に在る日長崎の譯官を召して語學を教へしめたといふ。晩年眼病に罹つたが業を廢せず子弟の詩文を添削する極めて詳密であつた。

## 四　藤森天山

諱は大雅（ひろまさ）、字は淳風、通稱は恭助、弘庵と號し、晩年に天山と更めた。齋名は如不及齋又は春雨樓といつた。別號に葵園・鐵研・青阿等がある。江戸の人である。父諱は義正、小野藩主一柳侯に仕へた。母は堀越氏である。寛政十一年三月十一日に生れた。天山少時より好學、下位に在るも天下の憂を忘れず、累進して世子の侍讀に進み、直諫して納れられず遂に致仕した。天保五年土浦侯延いて賓師となす。居ること十餘年、文教を興し吏務を革むる等の功があつたが、俗士に喜ばれず事を以て遂に去る。弘化四年江戸に移り帷を下して徒に授く、名づけて穀塾といふ。弟子益〻多く諸侯や諸藩の執政等の就いて國事を詢ふ者も多かつた。嘉永六年米艦來りて互市を乞ふや、有司疑懼して頗る凌壓を受けた。天山憤激して海防備論二卷を著はして、外は國力の充實をはかり、内には内政の改革を試み和戰兩樣の態度で臨み、もし聽かずんば干戈に訴へると云ふのがその要領である。次いで水戸烈公の求めに應じて意見書を上つた。卽ち芻言六卷である。これ天山の時務策でその内容は綱

紀粛正、風俗匡正、教育、國防、蝦夷開拓、金銀米穀等の問題に及べるを以て、その思想、抱負、識見を知る上に於て重要なる資料である。その議論は明快で時弊に切であつたので烈公も嘉奬したと云ふ。此時天山の名海内に播き、厚祿もて招く者が多かつたが皆固辭した。これ二君に事ふるを欲しない爲である。安政戊午の獄興るや罪を獲る者數十百人、天山亦その言論文章人心を鼓動せしむるに足るとの故を以て惡む所となつて捕へられたが、その實なく、赦されて江戸に歸り、越えて三日、文久二年十月八日を以て歿した。享年六十四。麻布曹溪寺に葬る。池田氏を娶り、後三阪氏を娶る。三男一女あり。長は遜、後を承く。次は連、出でて尾江川氏を嗣ぎ、並に幕府に仕へた。次は建夭す。女あり、前園氏に適く。著す所、如不及齋文鈔三卷、(一に弘庵文集と云ふ)春雨樓詩鈔三卷、課兒詩一卷、如不及齋叢書四卷がある。天山性直にして溫、四方の士欽慕してその門に集る。然れども中心確乎不拔の節があつた。天山博覽洽聞、書に於て窺はざるなきも、その學經世を主とし訓詁に屑々たらず氣節文章を以て自ら許してゐた。その學は初め古賀穀堂侗庵に受けたれども後長野豐山に師事し、その硬教育によりて學問上の指導は勿論精神上の感化を多分に受けた。その學問も所謂實用の學、即ち活學問であつた。天山が如不及齋叢書中に水戸の會澤正志の廸彝編を加へてゐること、及びその子脩藏を會澤塾に入門せしめた事から考へると、水戸學の影響も多々あるべきを想像し得る。その文法

度森嚴にして語言の流暢、氣格の淵雅なるは蓋し唐宋八家の旨を得てゐたものであらう、而して詩は歴代を參酌してその長を取り鬱として古色あり尤も五言古風に妙であつた、而も官府の忌諱にふれて板木の一部を削られて居る。又書を善くし自ら一家の風を成してゐる。

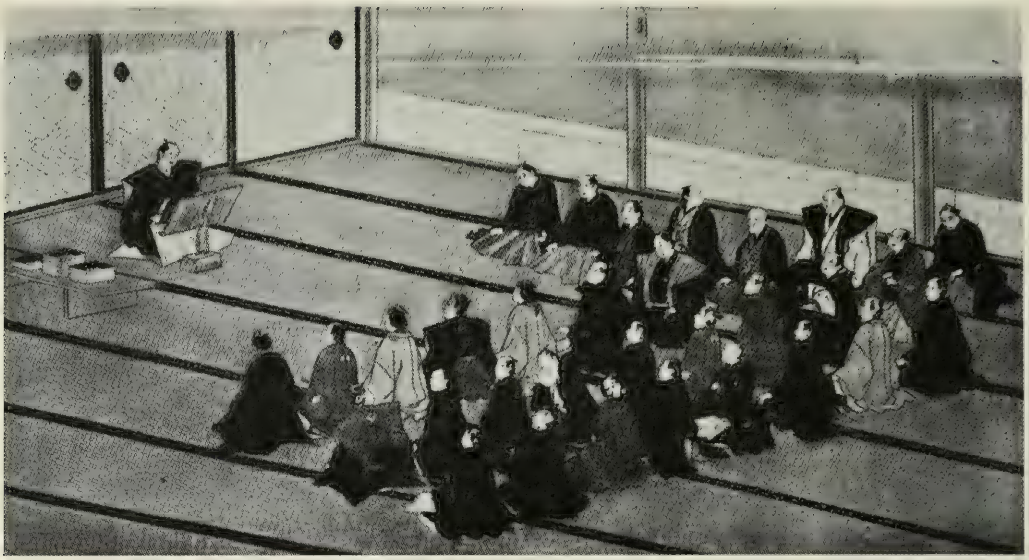
天山の交友は多かつたが就中安井息軒・鹽谷宕陰・芳野金陵・林鶴梁・羽倉簡堂・藤田東湖・田口文藏等とは特に親交があつた。

## 補遺

(一)息軒は天保十年、麴町上二番丁に居をトし三計塾を開き徒に授けた。時に息軒四十一歳であつた。塾の二階を斑竹山房と名づけたが、これは息軒が飫肥から江戸に移つた際に、郷里から虎斑竹を一株移植して思ひ出の郷里の記念とした由だ。

(二)宕陰の藩公は濱松の水野侯である。

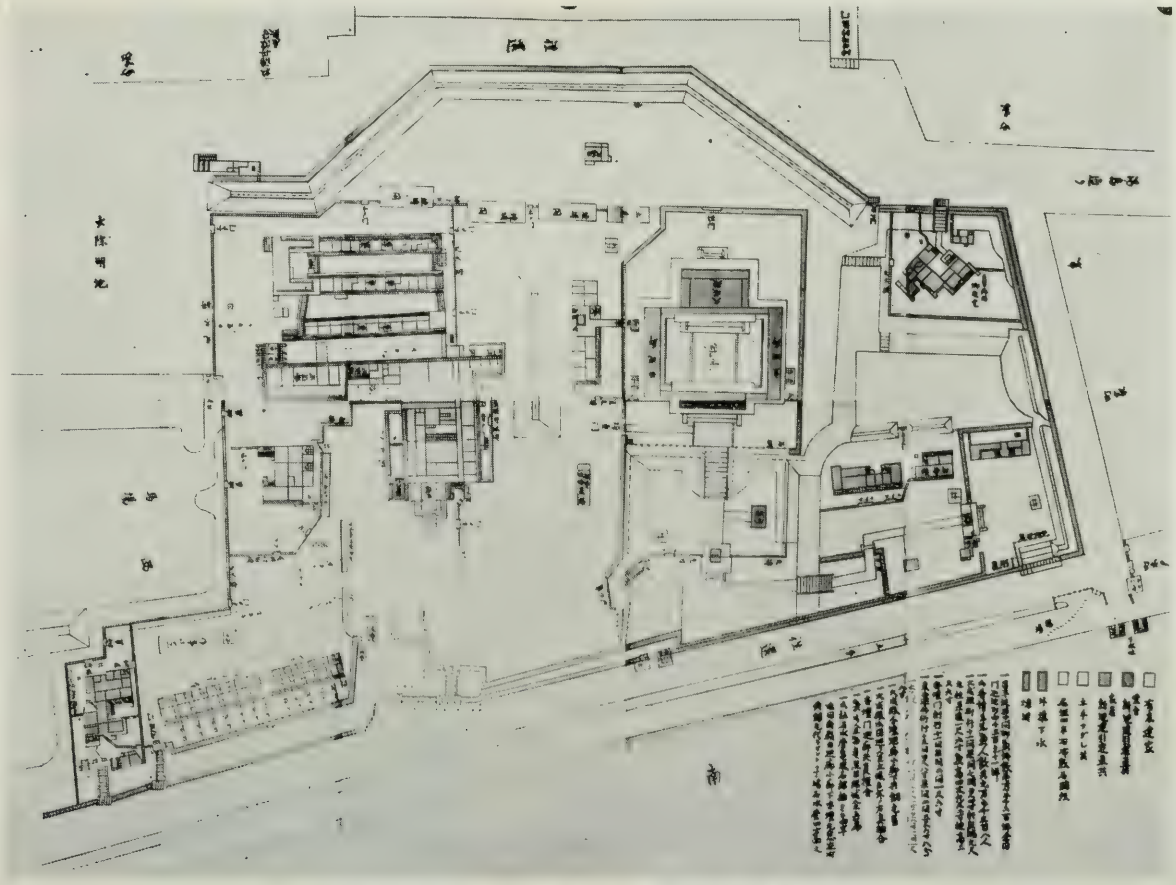
(淺學菲才到底「幕末の儒學」と云ふが如き問題を取扱ふ可き自分ではないが、命に依つて辭するを得ず、先輩の所說に基づき僅かにその責を免るのみ。たゞ餘りに傳記に傾き過ぎたことを遺憾とする。)



舊聖堂儒者講釋圖　其一



其二




聖堂圖 古賀精里尾藤二洲役宅附記

# 聖堂と昌平坂學問所

近藤正治

文武天皇の大寶元年二月丁巳、大學寮で孔子を祀り釋菜奠幣の禮を行つた。これは我が國で釋奠の史に見えた初で、今から凡そ一千二百餘年前である。大寶令には釋奠の條項があり、爾來毎年春秋二仲に之を行つて來たが、戰國時代になつて廢絶した。徳川氏が江戸幕府を開くに及び文教再び興り、釋奠の禮も行はれるやうになつた。今、寛永七年林道春の忍岡私邸に塾舍書庫を建てて昌平校の起因を爲し、九年先聖殿が建てられてから、明治四年七月、昌平校が廢絶するに至る迄二百四十二年間の聖堂と昌平坂學問所との隆替を略述して之を六期に分ち、更に明治以後の概略を附說しよう。○第一創建期。寛永七年林道春の忍岡別墅に塾舍書庫を建て、九年先聖殿を建ててから、明暦三年道春の卒するに至る迄凡そ廿七年間。○第二漸興期。明暦三年林道春の第三子春齋家を襲ぎ守成の業を完うし、延寶八年卒するに至る迄凡そ廿五年間。○第三隆盛期。延寶八年林春齋の第二子春常家を襲い

で、綱吉の命により元祿三年大成殿を昌平坂に移建し、釋奠は幕府の公事となる。十六年大成殿・學寮の罹災、寳永元年再建、六年綱吉の薨去迄凡そ三十年間。○第四衰頽期。寳永六年將軍家宣嗣ぎ新井君美の意見を用ひた。享保八年林春常の第三子信充學職を繼ぎ、三十餘年間遺業を守る。安永元年大成殿類燒、三年再建、天明六年大成殿・學舍類燒、七年再建。此の間凡そ八十年。○第五革新期。天明七年將軍家齊嗣ぎ老中松平定信學政を振興した。寛政五年林衡學職を繼ぐ。九年學制改正、學問所は幕府の公學となる。十一年大成殿改造。天保九年衡職を皝に讓る。此の間凡そ五十年。○第六終末期。天保十二年佐藤捨藏儒官となる。弘化三年學寮類燒し再建。文久二年學政振興。明治元年新政府の所管となり、四年七月昌平校廢絶。此の間凡そ三十年。

## 第一　創建期

寛永七年十二月三代將軍家光、民部卿法印林道春に別墅として江戸城北上野忍岡に五千三百五十三坪の地を與へ、別に金二百兩を給して塾舍書庫を建てしめた。これ昌平校の起因である。越えて九年十二月家康の第九子尾張大納言徳川義直が道春のために賜邸の中央に先聖殿を建てた。これ湯島聖堂の起因である。道春は初名又三郎信勝、羅山と號し、博聞强記、藤原惺窩に從つて朱子學を唱へ、慶長

十年二條城で家康の招きに應じ、家康・秀忠の爲に經を講じ政を佐けた。十九年學校を建てんことを幕府に請うて許されたが、兵革によつて果さず、それより十七年の後寛永七年家光の代になつて宿志を遂げる機運に際會したのである。時に四十八歳。忍岡は今の上野公園の下谷市街に接する高地一帶の稱、林氏の賜地は其の南端で、今の清水觀音堂の地から南及び東の懸崖に及んでゐる。又櫻が岡ともいふのは羅山が櫻樹を植ゑたからである。林氏の塾舍は其の西南隅に、書庫は東北觀音堂後邊の地に建てられた。先聖殿は一區を劃して邸の中央に西面し、正門は塾舍と書庫との中間に在り、今の彰義隊碑の邊で、殿宇の造營には數百金を費し、輪奐綵緻ではあつたが、規模は大ならず殿舍一宇のみであつた。孔子及び顏曾思孟の坐像を安置し、義直親ら先聖殿と書し、黑漆金字に鐫作して扁額として揭げしめた。世人は忍岡の孔子堂と呼んだ。孔子四子像の彫工は明かでない。歷代尊崇厚く其の守護に努めたから數次の火災を免れたが、大正十二年九月關東地方大震火災に灰燼に歸した。寛永十年二月十日道春初めて釋奠を先聖殿で擧げた。四月十七日將軍家光は上野東照廟參拜の途次、先聖殿に臨んで孔子以下の諸像を拜し、道春に堯典を講ぜしめた。これ將軍聖廟參拜の初である。十二年二月の釋奠に道春は論語の首章を講じた。先聖殿釋奠講經の初である。明曆三年正月の江戸の大火に道春の神田の本邸も罹災したので、道春は輿中讀みかけの梁書一冊を携へて忍岡の別墅に火を避けた。神

田の本邸には明暦元年に賜はつた堅牢なる銅瓦庫あり、和漢の圖書を納めておいたが、此の書庫亦災に罹り數萬の祕册珍典一時に灰燼となり、殘るは彼の一册の梁書のみである。道春書庫燒失の報を聞き、「多年の精力一時に盡く。」と歎息して鬱々懌ばず病床に在ること五日にして起たず、年七十五。

## 第二　漸興期

道春の第三子は春齋、初名は又三郎春勝、又恕といひ、鵞峰と號した。寛永十八年以來文學を以て幕府に仕へ大議に參與してゐたが、明暦三年正月家を襲いだ。是より先慶安四年家光薨じ、其の子家綱職を襲ぎ道春の輔導を受け、道春歿後は春齋が侍讀となつてゐた。萬治三年十二月春齋幕府に請うて先聖殿を改築した。幕府金五百兩を與へて修造せしめ、翌寛文元年六月竣工した。舊廟に比して擴張增設する所多く規制漸く備はつた。從來西面であつたのを南面にし、正門を南に移して門の左右に廊を建て外門を設け、下谷の市街から斷崖を切つて新路を開き、石磴を築いて外門に至らしめ、正門を杏壇、外門を入德と稱し各々扁額を揭げた。三年十二月春齋が五經進講を終へたのを賞して弘文院の稱號を許し、弘文院學士の號を授けられた。同年春齋本朝通鑑續修の命を受け、居を忍岡に移し、官費を以て編輯館・書庫を建てて國史館と稱し、春齋及び二子春信・信篤、姪勝澄等三十餘人分擔

し、十年六月通鑑三百十卷を完成した。春齋は其の功により家祿二百石を加賜せられ千百二十石となり、且從來國史館に給せられた編輯書生の月俸九十五人扶持は、其の儒學生敎育の料として給與せられ、國史館は更めて學寮とすべき命あり、是より林氏の家塾に官費の學生を置くこととなつた。十二年先聖殿の東に學寮を造營して東寮と稱し、前の國史館を西寮と稱して共に諸生を收容し人才の敎育に努めた。春齋は延寶八年二月病を以て致仕し、職を第二子春常に讓り五月卒した、享年六十三。春齋性溫良敏達、特に聖廟の擴張に力を致し、典禮漸く具はり、諸侯士庶の參觀年々多く忍岡孔子堂の名彌々高く、能く家業守成の功を完うした。

## 第三　隆盛期

春常名は又四郎信篤、又戇といひ鳳岡又整宇と號した。延寶八年家を嗣いだ。資性英明篤學勵精、將軍綱吉の殊遇を受け、父祖の業を興し林家三代隆盛の名をなした。綱吉は家光の第四子、館林に封ぜられたが、家綱子なく入つて軍職を繼いだ。時に延寶八年五月年三十五。綱吉聰慧文學を好み、略〻經書にも通じ儒風を宣揚したが、資性磊落、拘泥する所なく、一面僧徒をも寵遇して寺院を建立し、嚴明果斷の治績と共に放縱嬖幸のこともあつた。春常は綱吉就職の始から侍讀となり、貞享四年弘文

院學士の號を繼いだ。元祿元年十一月綱吉忍岡先聖殿に謁し春常の邸に臨んだ。これより綱吉が聖廟に謁するは殆ど每年の例となつた。綱吉は忍岡先聖殿が寬永寺の境域に接近してゐること、尾張家の創設で規模が狹小なること等、其の豪懷を滿すに足らなかつたので、新に大成殿を經營する志を起し、元祿三年七月九日春常を召して、神田昌平坂の地に新廟經營の命を傳へ、卽日松平右京輝貞を總奉行とし、蜂須賀飛驒守隆重を御手傳として工を起し、十一月二十一日親ら大成殿の三字を書して殿廡に揭げしめ、四年正月落成した。正月十三日春常に命じて蓄髮し敍爵任官して從五位下大學頭林信篤と稱し聖堂の祭主たらしめ、二月十一日新廟で始めての釋奠を擧げた。綱吉は齋戒三日聖廟に謁し釋奠に列した。信言の事實記に正月十三日春常が綱吉に召された時の事を記して、「上意の趣は今般昌平坂聖堂新規御建立に付其方を開基に遊ばさるべく云々」とある。開基の文字で幕府が聖堂を寺院と同格に取扱つたことが分る。これより林氏は子孫相承けて大學頭に任じ聖堂の祭主となり、從來忍岡の聖廟は林氏の私祭であつたが、是に至つて幕府の公事、林氏の公職となり、林氏の家職は道春以來の侍讀と外國事務、法制起稿との外に聖廟の祭祀を加へることになつた。新廟經營の地神田臺は、本鄕とも湯島とも云つた。神田臺とは神田神社所在の高地の汎稱で、神社の鳥居前から直に南を指して堀端に出る道あり、其の中途より南の坂路の西の隙地が新廟の地で、總地積凡そ六千餘坪であつ

た。昌平坂の名は孔子生誕地の郷に擬して名づけ、元祿三年十一月十六日に布告せられたもので、一つの坂の名ではなく、廟殿所在地を泛稱したもののやうである。それ故公にも昌平坂聖堂・昌平坂學問所などと云つてゐる。四年二月には相生橋を昌平橋と稱するやうに定められた。新廟は今の聖堂と略〻同一の位置に在つて其の構造の形式は忍岡の舊廟に倣つたものであるが、規模は雄偉宏壯、輪奐の美、精緻の巧を備へた。其の西に空地を隔てて御成御殿・饗座敷・役所・學寮等の屋宇二十餘棟を列ね建て、又仰高門を始めて設け、入德門と仰高門との左右の屋舍、其の東舍は平日講書に用ひ、之を講堂とも云つた。是歳春常經を此の講堂に講じ、聽者三百餘人、堂内に入る能はざる者は席を地上に敷いて聽講した。春常退いて人に語つて曰ふ、「我れ講說年あれども聽衆の多き今日の如きを見ず、實に文教の致す所なり。」と。これ仰高門講經の始である。これより諸侯の釋奠に列する者も多くなり、同六年から釋奠は春秋二擧の例となつた。七年九月綱吉は生母桂昌院尼と與に聖廟に謁した。十一年九月中堂の火事で忍岡の先聖殿・林氏の莊宅は類燒した。寛永七年道春が別墅を營んでから六十八年である。十六年十一月廿二日江戸地大に震ひ、廿九日大風大火あり、所謂地震火事である。大成殿・御成御殿・學寮等悉く災に罹つた。聖像及び四配の神龕・殿額は之を守護して火を避け、十二月假殿に安置した。寶永元年二月幕府再建を命じ伊達遠江守宗贇をして工役を助けしめ、五月起工十二

月竣工した。殿宇の構造位置は舊に依つて大差はないが、但殿の高さは前に比して三尺減じ、御成御殿のみは再築せられなかつた。此の役人夫を發すること延人員五十萬、新に五百株の樹木を栽ゑた。今存する老樹は蓋し其の遺存するものであらう。二年三月將軍新廟に謁した。これが綱吉最後の參廟で、其の參廟は前後十六回に及んだ。三年持明院基輔に請うて杏壇・入徳・仰高三門の扁額を改書した。今存する入徳の扁額はこれである。

## 第四　衰頽期

寶永六年正月將軍綱吉薨じて家宣嗣ぐ。家宣は新井君美を侍讀とし大事は常に其の意見を徴した。されば春常は學職に在つても其の議多く用ひられず勢力漸く失墜した。君美釋奠儀注を上り釋奠の禮を改める所が多く、我が國神拜の式を用ひた。家宣在職四年で薨じ、家繼嗣ぎ亦三年で夭折し、享保元年徳川吉宗紀伊家から入つて軍職を繼ぐや、家宣が君美の意見に依つて改めた諸制度を復舊すること多く、春常は再び將軍の眷顧を受けて勢力を回復した。吉宗は諸事實用を尚び學問も亦實用を主とし、儒者は專ら一般士民の教育に從事すべきものとし春常を督勵して力を敎育に致さしめた。享保二年七月始めて春常の門生をして日々仰高門内の東舍、卽ち講堂で四書を講ぜしめ、士庶農商を問はず

聽講を許し、月末に聽講者の姓名を記して幕府に差出さしめる制を定めた。これ仰高門日講の起原で爾後絶えず行はれた。抑々家康が講書の禁を除いてから人稍々書を讀むことを知り、綱吉の好學、士大夫彬々として學を知るに至つたが、幕府の關渉する所は唯士人以上に止まり民間には及ばなかつた。其の民間に及んだのは吉宗の時である。三年九月幕府は林信如・人見行充・木下寅亮・荻生觀に聖堂學舍の講師を命じた。聖堂學舍に林門以外の講師の始である。吉宗は綱吉以來財政紊亂の後を承け、之が救濟に意を用ひたから、聖堂に關しても冗費を省き、七年には春常に諭して虛費を節し、祭典の費用は堂領の收入で支辦せしめ、府庫の補助を停止した。八年二月春常致仕し第三子信充學職を繼ぎ、寶暦四年十二月信充致仕し長子信言大學頭に任じた。信充は在職三十餘年間唯父祖の遺業を守つただけで、一事の記すべきなく漸次衰頽に向ひ、將軍の恩顧も世人の尊崇も昔日の觀なく、大成殿も寶永以來五十餘年を經過し頗る廢頽した。信言は此の衰運を挽回せんとし、寶暦七年聖廟興造の顚末と歷代崇敬の事蹟とを上書して修補を懇願すること數次、十年始めて其の請ひ容れられ、十月起工翌十一年二月竣工した。明和八年申請して元祿の例によつて諸侯に金品を獻ぜしめて祭費の補助とする等、信言の功は多とすべきものがある。然るに安永元年二月二十九日目黑行人坂の火事で三十日拂曉大成殿は類燒した。神龕諸額は之を守護して火を避け入德門・東西舍・學寮は災を免れた。六月再建

の命もあり翌二年九月起工、三年五月竣工したが、工費を節約したため、新廟は只形式ばかりで舊廟に比すれば狹小卑低、柱梁は材を擇ばず彫刻を施さず丹雘を加へず粗樸なものであつた。其の後十三年を經て天明六年正月廿二日湯島から出火し、大成殿・學舍は類燒したが、神龕及び殿門の諸額は之を守護して火を避けた。七年正月廟宇再造の役を興し九月竣工。殿舍の制は安永に比して更に粗樸卑隘、學舍に至つては僅に舊舍の四分の一、其の狹窄甚しいので翌年少しく增築した。林家は安永二年十一月信言卒し、其の子信愛先つて歿したから、其の孫信徵家を嗣いだが十三歲の少童であつたから、支族林百助信有代つて事を執つた。天明五年信徵大學頭となり、翌年聖廟・學舍類燒、七年正月再建を見ないで病歿した。信徵子なく、富田能登守明親の二男信敬を養子として家を繼がしめた。

## 第五　革新期

天明六年將軍家治薨じ、家齊一橋より入つて統を繼ぎ七年將軍に任じた。時に年十五。白河城主松平定信を擧げて老中上座として政務を總攬せしめた。定信は祖父吉宗の享保の治績を慕ひ、躬行實踐大に綱紀を振作し文武を奬勵した。蜀山人が當時「世の中にかほどうるさきものはなしぶんぶ〱と夜も寢られず」と詠んだのでも一時の風潮を察することが出來る。定信は最も意を教育に用ひ着々學

政の革新を行つた。先づ昌平校の内容充實に力を用ひ、遍く有徳碩學を全國に求め、天明八年正月には栗山柴野彥輔、翌寛政元年九月には寒泉岡田清助を擧げて聖堂の儒官とし、二年五月廿四日林信敬に令して朱子學以外の異學を禁ぜしめ、栗山・寒泉をして信敬を助けて朱子學振興、學制改革のことに當らしめた。これ寛政異學の禁である。三年聖堂學生に給與してゐた學問料を增して百人扶持とし、信敬に三十人扶持を與へて塾生の料に充てしめた。學舍增築の議あり、同年四月定信廟宇を巡視して八月改築の議を決し十月起工した。九月二洲尾藤良佐を擧げて儒官とし、四年八月學舍・吏房等四百餘坪の增築成り、又始めて教官住宅を置き二洲をして之に居らしめた。幕府は信敬・栗山・寒泉・二洲をして學舍に講ぜしめ、諸侯大夫士や藩臣・處士をして聽講せしめた。九月又一般士人の學問吟味を始め、小學・四書・五經・歷史・策問の諸科を設けて學力を試驗し、甲乙科及第者には物を授けて之を賞した。此の時二百八十人の應試者があつた。五年三月信敬卒して嗣子なく道春の血統は再絕し、林氏の勢力も信敬に至つて益々衰へ、聖堂の學事は一に定信信任の聖堂附儒者の意見によつて決する有樣であつた。五年四月美濃岩村藩主松平能登守乘薀の第二子熊藏幕命辭し難く入つて學職を繼ぎ林家八代となり、十二月大學頭に任じた。これ固より定信の意に出でたものである。熊藏名は衡、號は述齋又は蕉隱といひ、識見高邁非凡の大才である。時に年二十六、定信の明鑑に違はず寄託

の重任に堪へて昌平校の綱紀を振肅し、林家の祖業を更革し國家の文運に貢獻した。同年九月素讀吟味を始め、諸士の子弟年十五以下の者について學業を試驗し修學を督勵し、以後毎年行つた。六年二月學問吟味の規則を改めて三年に一回とし是年の應試者二百三十七人、受賞者十九人。八年六月精里古賀彌助を拔擢して儒官とした。九年十二月大に學制を改め、聖堂學舍を學問所と稱し專ら御目見以上以下の旗本御家人の子弟を教育する所とした。かくて林家の私學は幕府の公學となり、改めて旗下の士を養成するを目的とするに至つたから其の經費も府庫から支出することになり、從來林家の食祿・聖堂領等公私の區別明かでなかつたのを改めて、林家には家祿三千石を與へ、聖堂領一千石の收入は祭祀費・學問所費とし、先に與へた家塾料三十人扶持は學問料百人扶持を併せて學問料とし、共に勘定所の管理に移した。抑〻學制の改革は定信の夙に志した所で、寛政二年五月大學頭林信敬に命じたのであるが、信敬は栗山・寒泉等と議合はず、改革は遲々として進まなかつた。是に至つて改正せられ昌平坂學問所には大學頭以下有爲の儒官並び立ち制度は確立し教風は刷新するに至つた。寛政八年十月將軍家齊が聖廟に詣でたのは家宣以後中絕した詣廟の儀を再興したものである。此時家齊は廟舍巡覽の結果大成殿改築の議起り、林衡に命じて新廟の規制を撰定せしめた。衡は諸儒と審議して明人朱舜水が嘗て德川光圀の爲に作つた孔廟の木造雛形が水戸に有つたのを取寄せて之に遵據するこ

とゝし、十年二月議決定し、老中松平伊豆守信明總奉行の下に三月起工、翌十一年十月落成した。即ち大正十二年大震火災の時迄嚴存した聖堂である。用材は堅實、結構は精緻、全部黒漆を施して丹青を用ひず却つて神々しい。廟域地は四千餘坪を增して一萬一千六百餘坪となつた。翌十二年二月新廟初めての釋奠を擧げ、其の儀式は延喜式によつて唐制を取り虛文を廢し釐革する所が多かつた。學問所は寬政四年の建造を更に增築したが、其の著しいものは講堂と一棟の學舍とで、學舍は併せて三棟となり又新に教官住宅を二個所に設けた。是に於て昌平坂學問所には大成殿(聖堂)廳堂(座敷)講堂(稽古所)學舍(寮)儒員の官宅・馬場・矢場等があつて其の制大に備つた。學制の一斑を記せば、歲費定額は一千石三十人扶持である。林氏は總教であるが唯總轄するまでで、講義輪講等のことは儒者と教授方出役とが之に當つた。儒者は四五人で二百俵の世祿と十五人扶持とを給せられ、教授方出役は別に本務があつて教授を兼ねる者である。又助講とて生徒の增加につれて學才ある藩士が出講した。生徒には通學生と寄宿生とがあり束脩謝儀はない。通學生は幕臣たる者毎日稽古所にて教授方出役等から小學・四書・五經の句讀を受ける。又寄宿寮の南樓に通學する者があつて毎日輪講會讀がある。寄宿寮の二棟は旗本、一棟は家人の寓する所で併せて三十室三十人であつたが、天保以後增築して四十八人を收容した。寮生は官費で日食炭油から醫藥までも與へられた。其の入學に當つては旗本

は四書五經の素讀、家人は四書の講義を試驗し、入寮後は讀書の餘暇に武藝は學んでもよいが横文字は讀むことを禁じた。此の外に書生寮あり、諸藩士と處士との宿舍である。初め尾藤良佐の舊役宅を用ひてゐたが、享和八年の申請によつて幕府は之を增築し、七八十人の入寮を許し諸藩から俊秀なる者が來學した。此の寮生は立校の主意でないから食料は自費で、其の他の費用は官費で補助した。是等の生徒を敎授するのは稽古所であるが、此の外に昌平學問所の事業として講義があり、仰高門日講があり、試驗がある。稽古所では定日に經書の講義と輪講とあり、會頭は儒員で寄宿寮・書生寮・南樓の生徒は皆出席する。また寄宿寮の北樓では定日に經史の講義あり、幕臣三千石以上の者が聽講する。其の日又座敷の講義あり旗本家人が列席する。書生寮の生徒は每月三回儒員の役宅で講義會讀の席に列するを例とし、又稽古所には一年二回の詩會、四回の文會があつて寄宿寮・南樓・書生寮の生徒が出席した。仰高門日講は享保二年の制に從つた。試驗は三八の日の寄宿寮生の小試と、春秋の寄宿寮生・南樓通學生の大試とあり、書生寮生は試驗は無く同志切磋を旨とした。此の外一般の幕臣に對して三年一回の學問吟味と每年一回の素讀吟味とには目付が臨場した。素讀吟味は寬政九年に十七歲より十九歲の者と改め、小學・四書・五經を試み、成績は甲乙丙落の四等とし甲乙科には賞を與へた。學問吟味は初場より五場まで五日に亙つて行ひ、初場より三場までは經義の筆解で之を辨書とい

ひ、四場は左國史漢・資治通鑑・通鑑綱目等の歴史、五場は論策で甲乙二科には賞を與へた。寛政六年學問吟味の規則改正以來、慶應元年まで及第者七百八人、寛政の甲科に蜀山人太田南畝、慶應の甲科に島田篁村等がある。以上學制の一斑である。天保九年衡は職を其の子戩に讓り、十二年七月卒す、年七十四。衡は英明の資を以て殆ど半世紀の間、將軍賢相の信任と良儒の補佐とを得て學界の牛耳を執り、其の名聲は道春・春常の盛時にも劣らなかつた。

## 第六　終末期

林衡の卒するや幕府は其の高弟一齋佐藤捨藏を擧げて儒官とし教官役宅に居らしめた。一齋時に七十歳、決然として後進誘掖の任に當つた。天下之を仰いで山斗とし其の門に入る者三千に達した。林戩は大學頭たる九年で弘化三年卒し、男健嗣ぎ亦八年で卒し、戩の弟韑嗣ぐ。安政六年韑卒し男昇嗣いで明治維新に至つた。一齋も亦韑と同年に八十八歳で官舍に歿した。其の儒職に在ること十九年、昌平坂學問所をして天下に重きをなさしめたのは其の盛名による。嘉永三年一齋の高弟艮齋安積祐助儒職に登用せられ、名聲一齋に次いだが一齋に後れること二年文久元年歿し、年七十一。是より先天保十四年八月十二日幕府は世人が昌平坂學問所を聖堂と稱へてゐるのは誤であるから今後昌平坂學問

所と稱へよと令した。初め元祿中綱吉が昌平坂に建てたのは大成殿で、之に林氏の家塾も附屬してゐたから聖堂と總稱したが、寛政改革以後林氏の家塾は幕府の公學となりて學問所と改稱し、國學として重要なる位置を占め、大成殿は學問所内に在る聖堂といふべく、本末主從の關係自ら轉倒したから此の令が出たのである。弘化三年正月十五日小石川よりの出火に大成殿は災を免れ、學寮は類燒したが、之を再建した。文久二年十一月十四日幕府は學政の振興を圖り新に學問所奉行を置いて大學頭の上に位せしめ、本多伯耆守正訥・秋月右京亮種樹を此の職に任じ、又宕陰鹽谷甲藏・息軒安井仲平・金陵芳野立藏等の名儒を拔擢して儒職に任じた。これ學問所改革の最後であつて、世の形勢は漸く騷亂に赴き、慶應三年十月將軍徳川慶喜大政を奉還して幕府は終を告げ、明治元年四月昌平坂學問所は大總督の所管となり、八月二日東京府に屬して復興の令は下されたが釋奠は遂に之を廢した。二年六月十五日昌平校を改めて大學と稱し、四年七月十八日大學を廢して文部省を置くに及んで、林道春創學以來二百四十二年の歴史を有せる昌平校は廢絶の運命に逢著し、茲に西歐物質文明全盛の時代となつた。

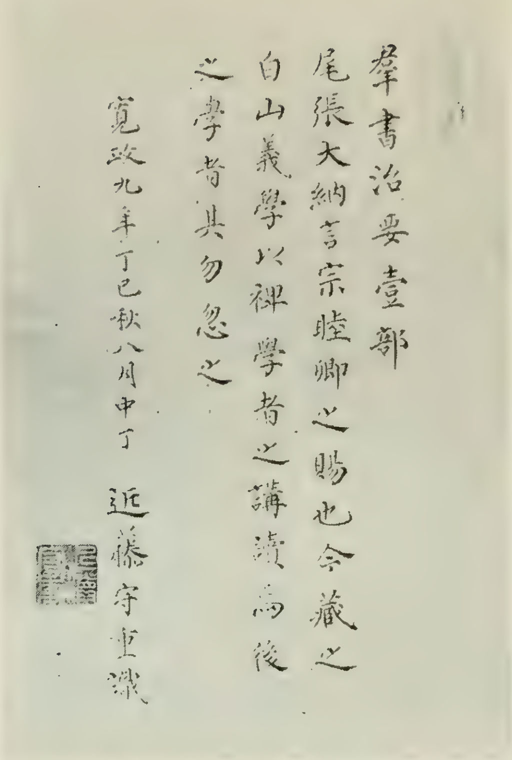
## 附説　明治維新後

維新後朝野擧げて洋學の移植に汲々として斯文は地に墜ち、固有の徳教は舊弊として一掃し去られんとする世態となつた。大成殿は保存せらるるも釋奠は廢絶し孔子及び四配の像は開扉することも稀に、殿堂は地方長官會議場・圖書館・博物館等に利用せられ、東京高等師範學校の保管に屬してゐたが、明治三十九年同校職員中の有志者は之を慨み孔子祭典會を創立することとし、四十年一月十六日發起人會を開き、嘉納治五郎之が委員長となり、四月二十八日男爵細川潤次郎祭主となつて、第一回孔子祭典を大成殿に擧げた。爾後毎年四月第四日曜日に祭典を行ひ年と共に盛大に赴いた。大正七年斯文學會が漢學關係諸會を打つて一團とし斯文會を組織するや孔子祭典會も之に合併し、祭典は八年九月以後は斯文會祭典部の事業となつた。當時小松原英太郎會長に任じ、十一年三月公爵徳川家達會長の任に就き、十月二十九日孔夫子卒後二千四百年祭を聖堂に擧行した。十二年九月一日關東地方大震火災に聖堂・斯文會事務所共に燒失し、寛政十一年改築の聖堂は入徳門と水屋とを殘せるのみで、孔子及び四配の像も灰燼となつた。斯文會は舊址に假聖堂を造營するに當り、安置すべき聖像に苦慮したが、事天聽に達し、十三年三月二十八日、朱舜水が將來し、故あつて宮中祕府に歸してゐた孔子像を下賜奉祀せしめ給うた。此の恩命に接し斯文會は愈々聖堂復興の急務を感じ、十五年五月朝野有力者の發起贊同にて徳川家達を會長として聖堂復興期成會が成立した。昭和四年斯文會は創立五十周

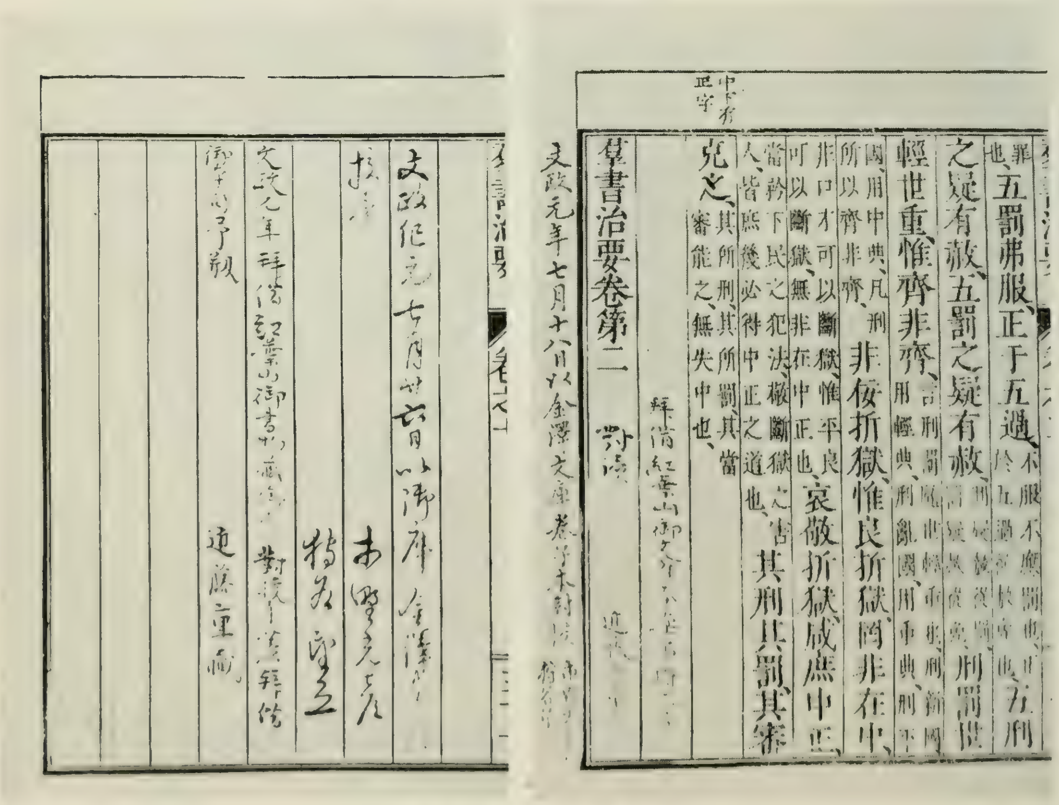
年に達し、新に、伏見宮博恭王殿下を總裁に迎へまつり、四月廿七日奉戴式を擧げ併せて創立五十年記念式を行つた。五年三月廿四日帝都復興祭に當り、車駕親しく市內御巡幸の際、湯島聖堂の復興につき御陪乘の鈴木侍從長に御下問ありたることを傳承し、優渥なる聖旨に感激し、聖堂復興の機運は頓に揚つた。六年は忍岡聖廟創建三百年に當るので四月廿六日斯文會第廿五回祭典擧行の後、假聖堂前庭で之が記念式を擧げた。是より先期成會組織の初に當り、事上聞に達し御內帑金下賜の恩命を拜し、天恩に感激して勸募に盡した結果義捐金は五十餘萬圓に達したので復興工事に著手し、七年八月廿一日起工、九年十二月大體の工事成り、十年四月四日聖堂竣功式孔夫子像鎭齋式を擧行した。附屬の斯文會講堂も落成した。此の聖堂及び講堂は之を文部省に獻納して其の所管に屬し、斯文會は更めて之を無償使用することとなつた。四月十三日我が國御訪問の滿洲帝國皇帝陛下は聖堂に臨御親しく拜禮を行はせられた。これ新聖堂を飾る最初の光榮である。越えて四月廿八日より數日間に亙り新聖堂第一回の孔子祭典と共に儒道大會を開催した。此の大會は聖堂の復興を記念するため、儒道に關する內外碩學鴻儒を會し、東亞同文民族の親睦を圖るにある。孔昭潤は曲阜の孔家を代表し、復聖顏子の裔孫顏振鴻は之に扈從し、支那各地の儒林代表、滿洲帝國の代表使節も參會し、在留西歐の學者まで加はりたるは、實に曠古の大會、未曾有の奎運といふべきである。友邦元首の參拜、孔家顏家代表

の來會、湯島の丘に巍然端然たる聖堂の出現は東亞民族の融合に一契機を與へたものである。斯文會は今や方に東洋精神文化の研究に講義に講演に教化に邁進してゐる。十二年七月七日蘆溝橋一發の銃聲は空前の支那事變を惹起した。吾人は平和克復・日支提携・東亞融合の源泉が斯道の宣揚にあることを信ずる者である。

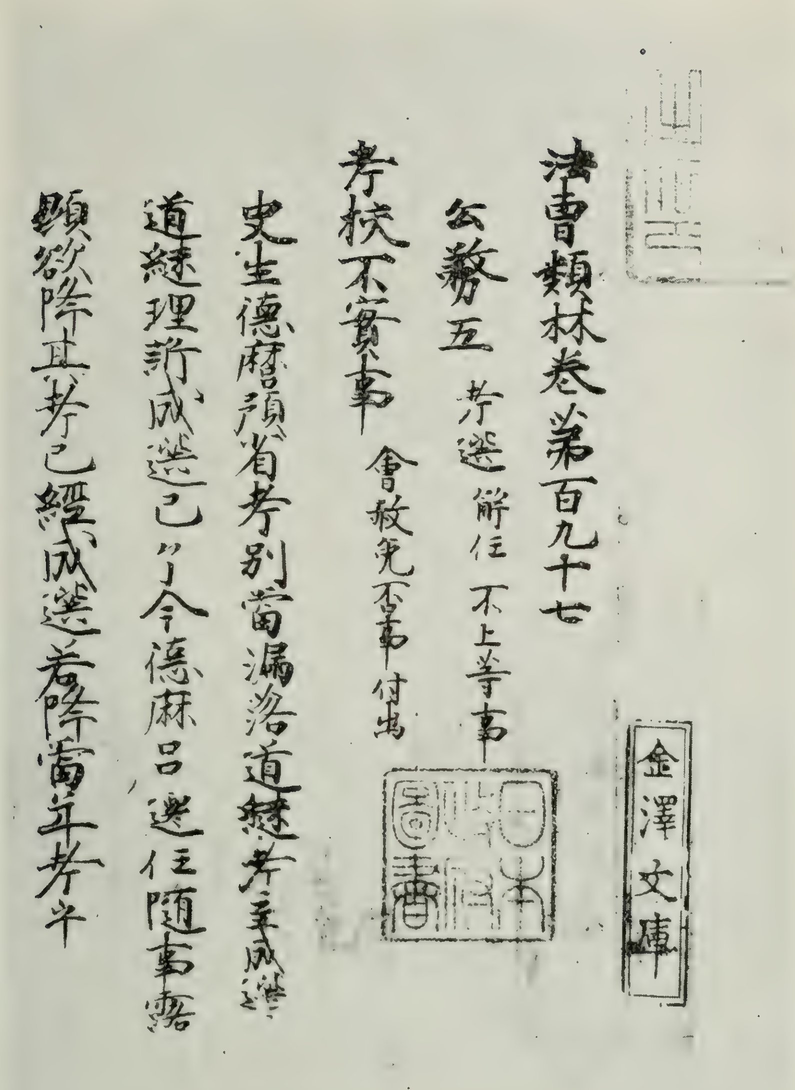
本篇は主として犬塚遜の昌平志と斯文會の聖堂略志とに據つた。明治以降のことは極めて梗概に止めた。これは斯文六十年史・儒道大會誌・聖堂復興略志等に其の詳を讓る。


羣書治要壹部
尾張大納言宗睦卿之賜也令藏之
白山義學以裨學者之講讀爲後
之學者其勿忽之
寛政九年丁巳秋八月中丁　近藤守重識

近藤正齋筆蹟（靜嘉堂藏）


羣書治要卷第二

羣書治要（靜嘉堂藏）


法曹類林巻第百九十七

公務五 考選 辭任 不上等事

考挍不實事 會赦免不免事 付出

史生德麿預省考別當漏落道繼考并成選之

道繼理訴成選已了令德麻呂選任隨事露

顯欲除其考已經成選若除當年考々



紅葉山文庫本法曹類林

# 紅葉山文庫の沿革

濱野知三郎

一

書籍は文化の表徴にして智識の源泉である。政治も經濟も產業も醫術も皆こゝから湧出する。若し此の書籍が兵燹水火の厄に罹らんか、文化は玆に絕えて、人智昧く、世は暗黑と化せん。古人が金匱石室に藏したるは故ありと謂ふべく、書籍を保護するは卽ち文化を愛好する所以である。されどよく腐蠧の災を防ぎ、またよく散逸の憂なからしむるは頗る困難の事に屬する。

寬平年間、藤原佐世の撰した日本國見在書目は我が國に於ける漢籍目錄の最も古いもので、これに登錄してある數は實に千五百七十九部、一萬六千七百九十卷に上つてゐるが、今日に於ては旣に其の過半が散逸してゐる。ただに我が國に現存しないといふのみではなく、彼の國に於ても夙に亡佚し、

彼の國の佚書が却つて我が國に傳存してゐるものも尠なくない。林述齋の刊行した佚存叢書や、清國公使黎庶昌の輯めた古逸叢書が明白に之を證明してゐる。

「好レ之者未ニ必能聚一、聚レ之者未ニ必能讀一。」は古來人世の一大恨事とするところで、大槻磐溪は「得ニ其人一傳、不レ必ニ子孫一。」といつてゐる。蒐書の努力は容易でないが、保存の苦心も亦容易ではない。紅葉山文庫の圖書が今なほ儼然として保存されてゐるは、國家の大なる誇りである。ただに學者の研究に資するといふのみではない。

徳川家康は右文左武、干戈搶攘の際に於てもなほ能く意を文事に注ぎ、特に儒學の奬勵に力を用ゐた。文祿二年冬藤原惺窩を江戶に召して貞觀政要の講義を聽き、慶長六年九月學校を山城國伏見に創立して、僧閑室を其の教授に任じ、また古書舊記の蒐集保存に努め、夙に文庫を駿府に置いた。しかし其の創設の年代は詳には分らない。

駿府御文庫の權輿得て詳にせずと雖も、文祿三年禮記正義の類に至までも既に能御貯藏あり。慶長六年圓光寺三要へ賜の事あり。七年江戶富士見の亭へ御文庫御建立ありしを覩れば、其駿府御文庫の舊しき見べし。（好書故事第八十五）

慶長十三年林羅山は文庫預を命ぜられた。羅山先生年譜に、

慶長十三年戊申、先生二十六歲、赴二駿府一、讀二論語三略等一、且掌二御書庫管鑰一、縱二觀官本一。

と見え、また羅山の詩に「駿河文庫」と題するのがある。

餘烈遠遺聖賢風。能令二術業有二專攻一。誰言馬上治二天下一。只聽爐前讀二雪中一。寒水月明千歲意。
日星道行六經功。請君更勿レ問二他事一。人是儒門五尺童。

此の詩は丙辰紀行に收めてあるが、丙辰は卽ち元和二年で、家康薨去の歲である。

## 二

紅葉山文庫は江戸城内に設けた德川家の圖書を藏弃した處で、普通に御文庫と稱へ、其の創立は慶長七年六月で、富士見の亭に置き、富士見御寶藏とも御冊子藏とも呼んだ。慶長年錄に、

七年六月江戸御城之南富士見之亭に金澤文庫を御移被成、御文庫を御建立也。

と見え、また好書故事第八十四に、

慶長七年六月江戸御城の南富士見の亭に御文庫を建られ、廿四日金澤文庫の本其他の圖書を收儲せらる、是江戸御文庫の始なり。

と見えてゐる。

同十九年七月廿七日駿府文庫から左記の三十部を將軍秀忠に贈與された。何れも未だ江戸の文庫に收藏されて無かつたものである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 晋書 | 五十冊 | 玉海 | 八十冊 |
| ×西山文章 | 十五冊 | 朱子大全 | 六十二冊 |
| 朱子語類 | 七十四冊 但一冊缺 | ×周禮 | 七冊 |
| 二程全書 | 十六冊 | ×唐音 | 十冊 |
| ×大學衍義 | 十五冊 | ×牧隱集 | 六冊 |
| ×文章辨體 | 廿二冊 | ×樊川集 | 四冊 |
| ○靖節集 | 二冊 | ×東萊博議 | 十冊 |
| ×南軒集 | 十冊 | ○戰國策 | 三冊 |
| ○文山集 | 十五冊 | ○李白集 | 十五冊 |
| ○陸宣公集 | 四冊 | ×紫陽文集 | 十冊 |
| 唐書衍義 | 三冊 | 文章正宗 | 十三冊 |
| ×湖隱集 | 八冊 | ×自警編 | 五冊 |
| ×皇華集 | 五冊 | ×讀杜愚得 | 十五冊 |
| ×理學類編 | 二冊 | ×楚辭 | 三冊 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 淮南子 | 二冊 | ×家禮儀節 | 四冊 |

（×印は朝鮮版、○印は明版）

元和二年四月家康薨じ、同年十一月羅山遺命を奉じて駿府に赴き、駿府文庫の書籍中、日本の舊記と希世の古本とを江戸の文庫に、其の他を尾張、紀伊、水戸の三家へ分譲の事に當つた。江戸に寄贈されたものは左の通りである。

御本日記

| | | | |
|---|---|---|---|
| 先代舊事記 | 五冊 | 古事記 | 三冊 |
| 釋日本紀 | 廿九冊 | 明月記 | 六十三冊 |
| 三代實錄 | 二十冊 | 續日本後紀 | 十冊 |
| 文德實錄 | 五冊 | 西宮記 | 廿二冊 |
| 山槐記 | 十五冊 | 菅家文藻 | 七冊 |
| 日本紀類 | 十九冊 | 類聚國史 | 二冊 |
| 類聚三代格 | 六冊 | 北山抄 | 五冊 |
| 新儀式 | 一冊 | 內裡式 | 二冊 |
| 聖德太子傳曆 | 二冊 | 姓名錄 | 一冊 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 江次第 | 二十冊 | 日次記 | 二百廿冊 |
| 類聚國史 | 二十冊 | 朝野群載 | 十九冊 |
| 革命 | 七冊 | 扶桑集 | 六冊 |
| 懐風藻 | 一冊 | 經國集 | 六冊 |
| 都氏文集 | 三冊 | 雜言奉和 | 一冊 |
| 江吏部集 | 二冊 | 江談抄 | 三冊 |
| 文華秀麗集 | 一冊 | 李嶠百詠 | 二冊 |
| 律 | 二冊 | 令內集解十卷 | 十七冊 |
| 續文粹 | 廿三卷 | 本朝文粹 | 十三冊 |
| 史記 | 四十三冊 | 史記抄 | 十四冊 |
| 文選 | 六十一冊 | 太平御覽 | 二箱 |
| 左傳 | 三十卷 | 續日本紀 | 二十冊 |
| 卷本之謠抄 | | 黃氏日抄 | |
| 君臣圖像 | | 公卿補任 | 一箱 |

道春預りの內

| | | | |
|---|---|---|---|
| 卷本群書治要 | 四十七卷 | 前後漢書 | 七十冊 |

文獻通考　　　　百卅九冊　　　唐書　　　卅二冊
大明一統志　　　廿五冊

本丸御さうし藏へ入候て內藤主馬殿に渡し申候上田善次帳に付被ㇾ申候
元和二年辰十一月八日

尾張へ讓與されたものは尾張宮庫駿河御讓書目に、經類三十九部、雜類百七十部、集類百十部、和書五十七部と見えてゐる。(書名は省略に從ふ)。
寬永十年十二月二十日始めて書物奉行を置き、關兵三郞正成、星合猪左衞門具枚、三雲內記成賢、西尾嘉右衞門正保を奉行に任命した。

御目見以上
御書物奉行四人
若年寄支配　燒火間　貳百俵高　御役扶持七人扶持　同心二十一人（吏徵上卷）

寬永十六年七月八日花畠番本多次郞右衞門信吉を奉行として紅葉山御書物藏の建設が出來た。爾來紅葉山文庫と稱へ、また楓山文庫、楓山祕閣とも稱へた。慶長七年六月富士見の亭に創建せられてより實に三十八年である。

寶永七年文庫を改修した。これ卽ち東文庫で、正德元年新に一庫を造り、これより東西御文庫と稱し、同三年五月四日新庫落成して新御文庫と稱へた。此の年五月櫻田文庫の書籍を紅葉山に移し、天保元年十二月二十日また新庫落成して一の御庫と稱へた。同二年四月十六日文庫の稱號を一二三四と改定する事となつた。

同十四年二月二十三日書物奉行の請により、文庫に重複せるものを昌平坂學問所及び甲府學校徽典館に、同八月また重複の書を醫學館、昌平坂學問所及び和學講談所に移した。

慶應二年十一月十七日書物奉行渥美豐次郎忠篤、鹽野谷善次景朝、榊原藤一郎好行、山田萬助安增、石川次左衞門政勝等五人の役を免じ、書物奉行の職を廢し、書物方同心は學問所の支配とした。寛永十年書物奉行を創置してより是に至るまで二百三十四年である。

奉行は前後九十人であつたが、其の中には淺井左衞門奉政（享保十七年五月二日就職、享保十九年六月五日歿、三十八歲、分類國史綱の著者）、桂山三郎左衞門義樹（享保十九年三月十三日就職、寛延二年三月二十三日歿、七十一歲、號彩巖）、近藤源次郎舜政（寛保三年三月十日就職、寛延三年十二月七日歿、六十三歲、專守老氏之學）、青木文藏敦書（明和四年二月十六日就職、明和六年十月十二日歿、七十二歲、甘諸先生）、近藤重藏守重（文化三年二月晦就職、文政十二年六月九日（表向十六日）

歿、五十九歳、號正齋)、鈴木岩次郎成恭(文化九年十一月二十四日就職、嘉永四年十二月六日歿、八十四歳、號白藤)、高橋作左衛門景保(文化十一年二月三日就職、文政十二年二月十六日歿、四十五歳、天文方)、林韑(文政七年十一月二十五日就職、安政六年九月十七日歿、六十歳、大學頭)等がある。殊に近藤正齋は書籍考、右文故事、好書故事等幾多の好著を遺してゐる。

三

維新の後、全部の圖書は大學の所管となつたが、明治三年大史局に、同四年八月式部寮に、同五年十月歷史課に移り、後ち修史局より修史館の所管となり、同十七年一月二十四日太政官文庫となり、三條太政大臣より太政官第十一號を以て左の通り達せられた。

太政官ニ於テ文庫ヲ設立シ各官廳所藏ノ書籍一切同文庫へ蒐集管理候條此旨相達候事

明治十七年一月二十四日　　太政大臣　三　條　實　美

同十八年十二月二十二日太政官廢せられて、内閣となるに及び、内閣文庫の所管に屬し、内和書七百七十六册、百三十三卷、五十五帖、十七枚、三十二軸、八幅。漢書一萬八千三百八十四册、百十五卷、一萬五千六百六十八帖、三十二軸、五幅は宮内省圖書寮に移管された。

## 四

書籍採訪のことは好書故事第五十八に「是に於て縉紳家より陪臣及び名山石室に至るまで、凡そ藏書の所盡く採訪して遺すことなし」と見えてゐるので推知すべきであるが、尚一二の例を擧ぐれば、林家先祖書に、

寛文四年八月編年錄（後號二本朝通鑑一）御用に付、諸國之寺社持傳候舊記類可二書出一旨、被レ仰二出之一。

と見え、享保七年正月には佚書採訪の御觸書が出で、有徳院殿御實紀附錄に左の記事が見えてゐる。

公（吉宗）の御時、ことさらに御沙汰ありて、御側をはじめ、小姓小納戸等常にまゐりて、捜索の事などうけつかふまつり、夏月書を曝すの頃は、わきて仰事ありて、近臣等折ふし行かよひ、所のさまを言上しければ、奉行等もつとめて怠る事あたはず。さきに本邦の古書は、令を下されて、求めさせ玉ひ、また唐商等もたらし來るたぐひも、まづ書目を御覽ありて、就中有用の書をえらばる。それも詩賦文章の類は、あながちもとめたまはず、政道を輔け、治具にも備ふべきの書をもつはらにつのられけるに、唐士の府州縣志類等、すべて記すにいとまあらず、つひにみく

らの書、舊きに倍せり。

また青木文藏敦書が書籍採訪に出張した事實は青木家譜に、

元文五申年八月十七日甲信二州江罷越、古書幷古書物等尋出差上可㆑申旨、同年九月朔日出立甲州江計罷越。

寛保元年四月九日武州多摩郡秩父郡へ罷越、古書物共取集め差出候樣、同二戌年四月六日武州金澤、相州鎌倉、小田原邊、豆州、遠州、參州御用、同五月十一日出立、七月十六日歸府。

と見えてゐる。

## 五

書籍目錄は文庫の設置と共に編纂されてゐたであらうが、其の記錄が無い。憲廟實錄卷之第一に、

延寶八年庚申十月十六日林春常、人見友元御文庫を點檢し、目錄を作りて上る。

と見え、また林鳳岡年譜にも、

八年（延寶）癸卯（先生三十七歲）閏八月二日、依㆓台命㆒入㆓御文庫㆒、改㆓正書目㆒、携㆓男吉松㆒、（時十一歲）及一二門弟從行、訂㆓書目㆒、與㆓池田勘兵衞㆒（御書物奉行）日日參會而相議。

と見えてゐる。年譜に「改正書目」とあれば、是より前に書目の出來てゐたことは、云ふまでもない。爾後凡そ四十餘年間は改訂の事なく、享保五年三月書目改正の議起り、林七三郎信充、同百助信智等其の事に從ひ、九月朔日新書目七冊を呈進した。同八年五月再び書目改修の議あり、林大學頭信充、同百助信智等、奉行と協力し、十一月十日稿成りて之を呈進せしが、再訂の議起り、十二月十七日再訂目錄を呈進した。同十八年四月二日改正書目正副二本成り、二十九日之を呈進した。享保は即ち吉宗時代の年號である。吉宗は文庫の事業に就いても特に盡すところが多かつたことは、有德院殿御實紀附錄に見えてゐる。

次で明和三年七月二十三日目錄改正の議起り、四年十一月十四日草稿出來、五年九月二十日改正書目正副二本を呈進した。

寛政三年二月八日書物奉行荻生義堅、書籍小目錄を編輯せんことを進言し、五年十二月竣成した。

文化二年十二月四日新訂書目成り、四通を繕寫して之を呈進した。この四通については、元治本始末記に、

新訂御書目錄なる。繕寫四通功畢りて攝津守へ呈す、一通は御前に留められ、二通は御庫に置れ、一通は林大學頭に授らる。

と見えてゐる。

文化十一年八月十五日重訂書目編纂の命があつた。元治本始末記に、

文化十一年九月十三日御書籍題號ならびに部類の允當ならざるは校正し、なほ林大學頭(衡)と議すべき旨周防守(京極高備)達せり。是れよりしば〳〵大學頭と會議して論定す。

とあるによりて、當時の編纂が如何に愼重に行はれたかが窺はれる。それより二十二年を經、天保七年十二月八日重訂書目四十二册の稿成り、之を重訂御書籍目錄と題し、五部を呈覽した。卽ち一部は將軍の座右に、一部は副本とし、二部は文庫に備へ、一部は林大學頭へ授けられた。此の目錄は書物奉行林韑、篠田隆懋、中山利紀等の編纂にかゝり、頗る完備したもので、漢書の分類はすべて乾隆四庫全書總目に準據してゐる。

後また新收の書籍を増し、元治增補御書籍目錄四十三册が竣成した。此の增補に從事したるは書物奉行渥美忠篤、鹽野谷景朝、榊原好行、山田安增、石川政勝の五人である。天保重訂目錄と元治增補目錄とを對照すれば左の通りの增加である。

| | 天保重訂御書籍目錄 | 元治增補御書籍目錄 |
|---|---|---|
| 卷一經部一 | | |

| | | |
|---|---|---|
| 易類 | 五十七部 | 五十九部 |
| 書類 | 二十五部 | 二十八部 |
| 詩類 | 二十七部 | 三十部 |
| 禮類 | 五十六部 | 五十八部 |
| 樂類 | 十部 | 十部 |
| 春秋類 | 四十二部 | 四十五部 |
| 孝經類 | 七部 | 六部 |
| 卷二經部二 | | |
| 經總類 | 三十九部 | 四十七部 |
| 四書類 | 五十三部 | 五十八部 |
| 小學類 訓詁、韻書、小學 | 百二部 | 百八部 |
| 卷三史部一 | | |
| 正史類 | 三十六部 | 三十九部 |
| 編年類 | 四十三部 | 四十三部 |
| 紀事本末類 | 十五部 | 十六部 |
| 別史類 | 三十部 | 三十三部 |

| | | |
|---|---|---|
| 雜史類 | 五十部 | 四十八部 |
| 詔奏類 總類 別類 | 五十七部 | 五十八部 |
| 實錄類 | 八部 | 八部 |
| 卷四史部二 | | |
| 傳記類 | 百九部 | 百十三部 |
| 譜牒類 | 九部 | 九部 |
| 史鈔類 | 三十二部 | 三十二部 |
| 載記類 | 六部 | 六部 |
| 時令類 | 十一部 | 十一部 |
| 職官類 | 十五部 | 十九部 |
| 政書類 | 七十部 | 七十六部 |
| 吏務類 | 六十五部 | 六十六部 |
| 目錄類 | 二十三部 | 二十六部 |
| 史評類 | 二十部 | 三十一部 |
| 卷五史部三 | | |
| 地理類上 | 二百五十八部 | 二百六十部 |

| | | |
|---|---|---|
| 卷六史部四 | | |
| 地理類下 | 五百八十九部 | 五百九十四部 |
| 卷七子部一 | | |
| 儒家類 | 百二十九部 | 百三十五部 |
| 兵家類 | 百三十二部 | 百三十五部 |
| 法家類 | 十七部 | 十七部 |
| 農家類 | 十部 | 十部 |
| 卷八子部二 | | |
| 醫家類 | 四百二十九部 | 四百六十部 |
| 卷九子部三 | | |
| 天文算法類 | 三十四部 | 三十五部 |
| 術數類 | 六十六部 | 六十六部 |
| 藝術類 | 九十一部 | 九十二部 |
| 譜錄類 | 二十部 | 二十三部 |
| 雜家類 | 二百四十三部 | 二百五十九部 |
| 卷十子部四 | | |

| | | |
|---|---|---|
| 類書類 | 百十二部 | 百十二部 |
| 小說類 | 七十一部 | 七十二部 |
| 釋家類 | 百十五部 | 百十五部 |
| 道家類 | 七十六部 | 七十六部 |
| 卷十一集部一 | | |
| 楚辭類 | 七　部 | 七　部 |
| 別集類上 | （次卷と合す） | （次卷と合す） |
| 卷十二集部二 | | |
| 別集類下 | 七百十八部 | 七百三十六部 |
| 餘集類 | 二十九部 | 三　十　部 |
| 卷十三集部三 | | |
| 總集類 | 二百三十二部 | 二百四十一部 |
| 閏集類 | 二十八部 | 二十九部 |
| 制科藝類 | 十　二　部 | 十　二　部 |
| 賦類 | 七　部 | 七　部 |
| 詩文評類 | 三十四部 | 三十三部 |

| | | |
|---|---|---|
| 詞曲類 | 十六部 | 十六部 |
| 四六類 | 九部 | 九部 |
| 尺牘啓箋類 | 二十七部 | 二十七部 |
| 卷十四附存部 | | |
| 演義類 | 三十部 | 三十一部 |
| 雜記類 | 三十部 | 三十一部 |
| 雜劇類 | 二十四部 | 二十四部 |
| 韓人著撰類 | 五十五部 | 五十五部 |
| 滿文類 | 十一部 | 二十四部 |
| 鑾書類 | 四十七部 | |

また元治増補御書籍御家部二卷ありて、これに收錄する所は、通計百四十七部、三千二百六卷（内百十七部無卷數）、凡二萬五千八百七十册、五帖、三十五軸、六百九十五張、二百九十六通である。次に元治増補御書籍國書部二卷、收錄部數は、

卷之上

| | | | |
|---|---|---|---|
| 神書類 | 十七部 | 帝紀類 | 八十六部 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 家紀類 | 七十部 | 公事類 | 四十八部 |
| 律令類 | 二十五部 | 官位類 | 十部 |
| 氏族類 | 二十一部 | 天文類 | 四十三部 |
| 地理類 | 三十四部 | 詩文類 | 三十部 |

卷之下

| | | | |
|---|---|---|---|
| 和歌類 | 百八十九部 | 假名類 | 四十二部 |
| 管絃類 | 十部 | 謡曲類 | 五部 |
| 武家類 | 三十五部 | 軍記類 | 六十一部 |
| 醫書類 | 四十一部 | 佛書類 | 十七部 |
| 雜類 | 八十五部 | | |

附錄

| | | | |
|---|---|---|---|
| 經類 | 二十二部 | 史類 | 十六部 |
| 子類 | 三十二部 | 集類 | 四部 |

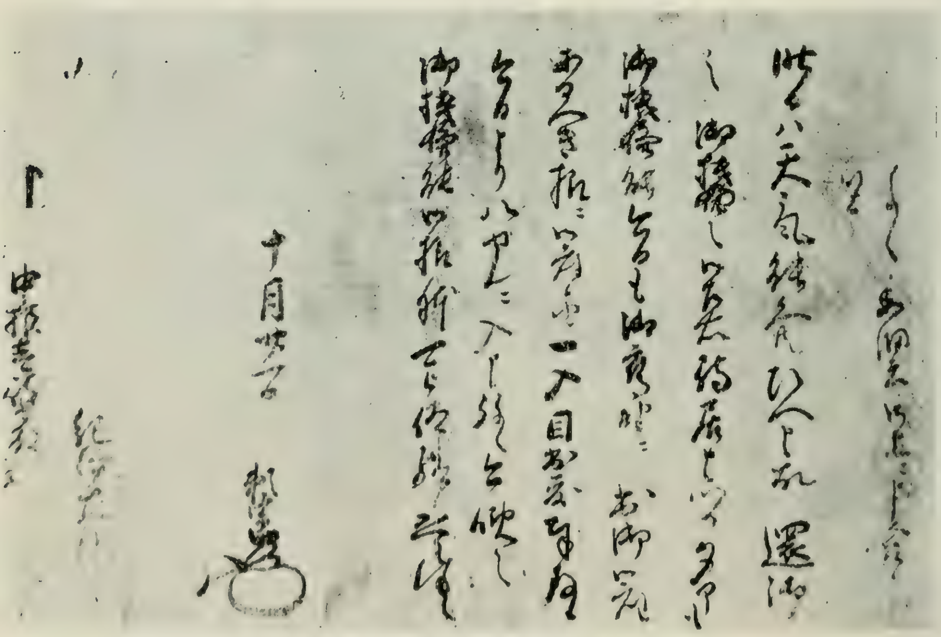
通計九百四十三部、一萬八百七卷（内四百八十八部無卷數）凡一萬二千十五冊、百九十六軸、二十九帖、五張である。

## 六

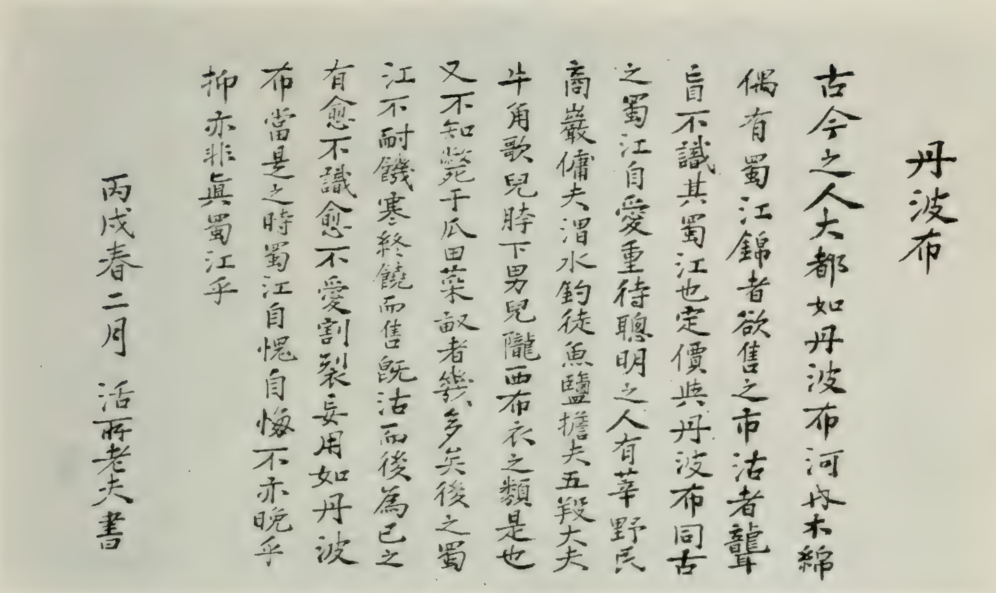
徳川家康の好學は奎運の興隆を促進し、蒐書の事業は慶元以降、幾多同好の士を出し、一戸よく萬卷の書を擁する者も尠なくなかつた。前田松雲、脇坂安元、水野忠央、曲直瀨養安院、野間三竹、望月三英、木村巽齋、小山田松屋等は其の尤なる者である。殊に宋元版の尊重すべきを倡道し、誤本を化して善本とすることに畢生の努力を致した吉田篁墩、狩谷棭齋の功績は決して忘れることは出來ない。しかし此等藏書家の圖書中には既に幾度か其の主を換へ、希世の珍籍も亦其の所在の分明ならざるに至つたものさへある。祕閣の書籍が三百有餘年、何等毀損の憂ひなく襲藏されてゐるは國家の爲洵に慶賀に堪へない。



德川義直木像（清涼庵藏）



德川賴宣筆蹟（侯爵德川賴貞氏藏）

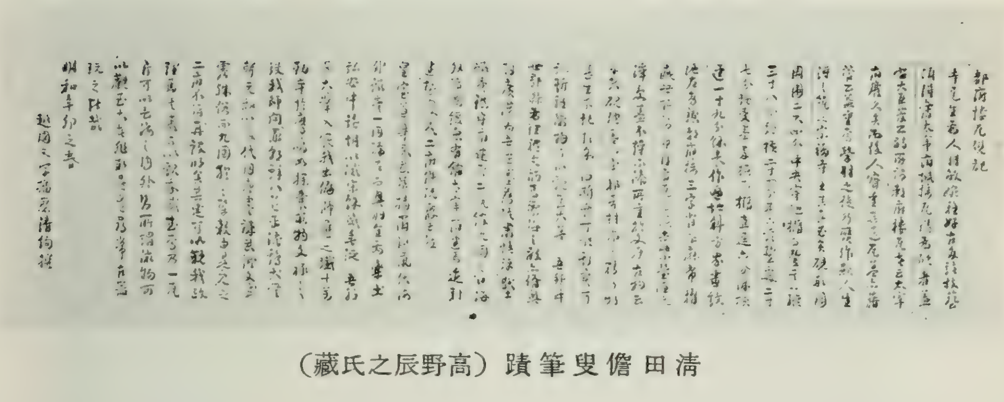


丹波布

古今之人大都如丹波布河内木綿
偶有蜀江錦者欲售之市沽者聾
盲不識其蜀江也定價與丹波布同古
之蜀江自愛重待聰明之人有莘野氏
商巌傭夫渭水釣徒魚鹽擔夫五羖大夫
牛角歌兒跨下男兒隴西布衣之類是也
又不知斃于瓜田菜畝者幾多矣後之蜀
江不耐饑寒終饒而售既沽而後爲己之
有愈不識愈不愛割裂妄用如丹波
布當是之時蜀江自愧自悔不亦晩乎
抑亦非眞蜀江乎

丙戌春二月　活所老夫書

那波活所筆蹟（高野辰之氏藏）



清田儋叟筆蹟（高野辰之氏藏）

# 諸藩の文教一般

大江文城

## 一

江戸二百七十年間、文教の盛事は、その當初將軍家康が、學問奬勵の結果によつたものであらう。家康は、慶長の初年には、幾多儒書刊行を命じ、更に藤原惺窩・林羅山等の儒士を庇護した。此に久しきにわたる、桑門の學は變じて儒林の學となり、僧侶弄翰の時代は去つて儒士横經の時代となつた。元和元年七月に定められた「武家法度」には、「文武弓馬之道、可二相嗜一事。」と規定され、また「家康百ケ條」には、「治國平天下ノ本、聖門ヨリ出ツ、云々。」とある。「右文左武」は、幕府の方針であるばかりではなく、天下諸藩を指導する法度であつた。平安末に萌芽した我が武士道精神は、鎌倉では、主として佛教によつて培養されてゐたが、江戸では、嚴肅な儒教によつて鍛錬されるやうにな

つた。儒教精神の下に、儒教政治が行はれたことは注目すべきである。

江戸時代の儒學は、之を大別して前後二期として觀ることが出來る。前期は、慶元以降正享に至る約百四十年間、この期は、京都を中心として興起した民間私塾の學が、一般に及んだのである。後期は、元寛から元慶に至る約百三十年間、この期は、幕府を中心として統一を企てられ、諸藩の學問も、追々發達して來て、藩學を剏立し、人材の養成につとめたのである。しかし儒者重厚の氣分も失はれ、異説萌起し、思想界の無統一無秩序を醸さんとした。幕府も事の容易ならざるを察し、寛政初年には、「異學禁」の內命を祭酒林家に諭達し、以つて諸藩の異學を取締らんとしたのである。

前期において京都を中心として興つた學問といふのは、藤原惺窩の京學を始めとし、門下の林羅山の林家學、松下尺五の松門學、更に中江藤樹の江西學、門下の熊澤蕃山の事功派、淵岡山の充養派、また更に山崎闇齋の崎門學などで、その取捨の上には、異同はあるが、程朱もしくは陸王に依據したといふ點は同一である。處がその後を承けて、伊藤仁齋は在來の程朱陸王の學に疑を挾み、寛文中には獨立してその所謂古義學を唱道した。門下には子東涯を主盟とする篤信派、並河天民を主班とする取捨派の二派と分れたが、その在來の學を排去したことは同一である。これ儒者獨立主張の門を啓いて、江戸における荻生徂徠を喚起する因となつた。仁齋と時を同じうして、京都には中村惕齋・米川

操軒などいふ人々がゐた。京學崎門の外に立つて、平正な程朱學を講授してゐた。後年の懷徳堂は、此等の影響を受けて起つたものであらう。木下順庵は松門から出て、所謂木門の一派を立てたのである。その東下により、門下の室鳩巢・新井白石は、幕儒に擢用され、林家と對立した。荻生徂徠は、獨立江戸に起り、その所謂古文辭學は、程朱陸王のみならず、曾てその私淑したところの古義學を排斥した。奇才卓犖縱横、一世を籠蓋するの槩があつた。天下は齊しくその風采を仰ぎ、學問の傾向も、全く一變した。久しく京都を中心としてゐた學問は、此に江戸に移つた。京儒が、堅く尊道重己の精神を持してゐたに比して、江戸儒は著しく弄才衒學の風があつた。こゝに群儒萌起の端をひらき、寛政の頃には、關西には、皆川淇園・岩垣龍溪・村瀨栲亭・佐野山陰の所謂古學四大家あり、關東には、伊東藍田・市川鶴鳴・冢田大峰・戸崎淡園・豐嶋豐洲の所謂異學五大家の獨立となり、その他校勘學、考證學、注疏學となり、調和派、折衷派などもその間にあらはれた爲め、此に所謂「異學禁止の諭達」となつてあらはれたのである。

## 二

諸藩中、藩主の學問を好み、自ら編述を企てたものがあり、また名儒の註解本、もしくは詩文稿を

刊行表彰したものもあつた。藩主の編述として、百代に誇るべきものが二部ある。一は名古屋義直の「神祇寶典」十卷、一は水戸光圀の「大日本史」二百四十三卷であらう。義直の神祇寶典序の末節には、

嗚呼神意人心、本是一理、以レ器而言レ之、劍璽鏡也、以レ道言レ之、勇信知也、璽鏡者文也、劍者武也、是日神之所三以授二皇孫一而累世帝王禪繼卽位之時、所二以取一レ則者、不レ在レ茲乎、云々。

とある。神意を敬ひ、神道を崇び、且つ之を儒敎に結付けて、熱烈な敬神崇儒の信念を述べてゐる。光圀の「大日本史」に至つては、正義明分に立脚し、國史の光輝を發揚し、國體の尊嚴を明示したものである。「大日本史」は、幾多の障碍を經て、遂に文化七年進奏の望もかなひ、公刊の運にまで進んだが、「神祇寶典」は、永久に尾陽文庫に祕藏され、公刊の機會に接しないのは惜しいことである。その他會津の保科正之の「玉山講義附錄」三卷、「三子傳心錄」三卷、「二程治敎錄」二卷の如きは、程朱を信奉したためであり、守山の松平賴寬が「論語徵集覽」二十一卷の如きは、徂徠を承奉したためである。桑名の松平定信の「集古十種」四十二卷、安中の板倉勝明の「甘雨亭叢書」四十八冊は、考古の資料を傳へたものである。更に光圀の「常山文集」二十五卷、神戸の本多忠統の「猗蘭臺集」三十六卷の如きは、列國藩主の家集中、出色のものである。また儒臣もしくは名儒の經解類を、藩で

補助刊行し、藩人學問の指標としたものには、名古屋における冢田大峰の「冢注六記」、「冢注論語」、「孟子斷」、「冢注周易」、「補注尚書」、「冢注毛傳」等のごとき、和歌山における山本樂所の「孝經集傳」、「論語補解」、「新定三禮圖考」の如き、福岡における貝原益軒の「小學備考」、「近思錄備考」等の如き、德嶋における中村惕齋の「四書鈔說」、「孝經刋誤集解」、「周易本義筆記」、「書集傳筆記」、「詩集傳筆記」、「近思錄鈔」、「周易啓蒙筆記」等の如き、平戶における皆川淇園の「四書繹解」、「周易繹解」、「書經繹解」、「詩經繹解」、「儀禮繹解」等の如き、蓮池における岡白駒の「孟子解」、「詩經毛傳補義」等の如き、姫路における佐藤直方の「四書便講」、「大學全蒙釋言」等の如きものがある。遺稿もしくは詩文稿に關するものには、和歌山において那波活所の「活所遺稿」、同木菴の「木菴集」、水戶において藤原惺窩の「惺窩先生文集」、朱舜水の「舜水先生文集」、福井において清田儋叟の「孔雀樓文集」、加賀において木下順庵の「恭靖先生文集」、守山において平野金華の「金華稿刪」、赤石において梁田蛻巖の「蛻巖集」、「同後集」、熊本において秋山玉山の「玉山詩集」、藪孤山の「孤山遺稿」、岡山において室鳩巢の「鳩巢文集」、「同後篇」、「同補遺」、湯淺常山の「常山樓文集」、萩において山縣周南の「周南文集」、瀧鶴臺の「鶴臺遺稿」、山根華陽の「華陽文集」、和智東郊の「東郊文集」、米澤において細井平洲の「嚶鳴館遺稿」、彥根において澤村琴所の「琴所稿刪」、龍草廬の「草廬詩集」、郡

山において荻生徂徠の「徂徠集」、濱松において餘熊耳の「熊耳文集」、「同詩集」、龜山において松崎觀海の「觀海集」の如きものがある。此等は諸藩において儒學を崇尙し、儒者を優待するの意に出たことは勿論である。

なほ此に一言附加すべきは、諸藩藩學のことである。江戸前期には、京儒もしくはその門人を招聘して、學事に當らせてゐるが、それもその私塾において、好學の人のみが、就いて學ぶ位のことである。たま〳〵學校の栤立があつても、極めて小規模のもので、その名稱もたゞ學校とか、學問所とか、稽古所とか、講釋所とか唱へてゐたのである。ところが寛政以降になると、一齊に學校の完成を見るに至つた。教科學則も定まり、名稱も、儒教道德を發揮すべき嘉名を、經語の中から選び用ひたのであつた。例へば、名古屋・金澤の明倫堂、山口・上田の明倫館、和歌山・佐土原の學習館、水戸・弘前・福山・佐賀の弘道館、仙臺の養賢堂、米澤の興讓館、福岡の脩猷館、淀の明親館、芝村の遷喬館、岸和田の講習館、津の有造館、桑名の立教館、神戸の進德館、彥根の稽古館、大溝の修身堂、會津・西大路の日新館、岩村の知新館、山ノ上の明新館、小濱の順造館、新發田の道學堂、村上の克從館、長岡の崇德館、鳥取の尙德館、龍野の敬樂館、小野の歸正館、大洲の止善書院、日出の致道館、龜山の邁訓堂、唐津の傳習館、古河の盈科堂、土浦の郁文館、姬路の好古堂、福井の明善堂、秋田の

日知館、大聖寺の廣德館、平戶の維新館、高松の講道館、熊本の時習館、佐肥の振德館、鹿嶋の造士館と呼ぶが如き類である。名によつて實を探るに、當時の學校敎育は、全然儒敎主義によつてゐることを察することが出來る。從つて學問敎科の如きも、經史はその主なるものであつた。

三

今諸藩文敎といふも、大小二百八十餘藩の中、いづれを選ぶべきかは、相當困難な問題であるが、假りに親藩の中からは名和水、並に會津の四藩を標出し、親藩以外の中からは薩長土及び備前・加賀の五藩を標出することにした。しかし此外にも、文敎上異彩あるものがない譯ではない。例へば大洲熊本などにおける江西陽明學の如き、仙臺・小濱・新發田・鶴田・日出・佐土原・佐賀などにおける崎門朱子學の如き、芝村・高槻・大溝・上田・長岡などにおける仁齋古義學の如き、熊本・久留里・神戶・守山・村上・長岡・鳥取などにおける徂徠古文辭學の如き、南部・高松・德嶋・佐賀などにおける中村惕齋の程朱學の如き、廣嶋における堀氏學、米澤における細井學、福岡における貝原益軒の貝原學、龜井南溟の龜井學などは、それが一時的のものであつたにせよ、儒學史上やゝ注目すべきものであつた。

諸藩中、率先興學に從事したのは、名古屋徳川義直、和歌山徳川賴宣、水戸徳川賴房の子光圀の三家であつた。義直・賴宣・賴房は、家康の三子で、秀忠の弟である。上述の如く、家康は「武家法度」において、右文左武の大方針を示したのであるが、三家はよくその遺志を繼承したものである。「羅山年譜」によると、此等三家は、羅山を師友として、その敬神崇儒の思想を植ゑつけられたものである。家康は、遺命して駿府藏置の古書中、多くの國書は義直に、漢書は賴宣に、神書は賴房に分贈されたと傳へてゐる。三家の好學には、かゝる諸種の原因があつたのである。また秀忠の子家光の弟である正之は、保科正光の嗣となり、會津を領するに及んで、學問を愛好し、士道を督勵するところがあつた。此等三家並に會津は、他の諸藩に先んじて學問を興して、よく父祖の志をついだものである。

名古屋義直は、元和中藤原惺窩の徒堀杏菴を禮招し、その後更に明人陳元贇、及び杏菴門下の深田正室・並河自晦・新開宗菴・綺玄廓・熊谷活水等を招致して、學事に當らしめた。殊に正室は、命をうけて學問所を剏せしめ、その子明峰、その孫愼齋と相つゞいて士人の教育に從事した。これ藩學明倫堂の前身である。藩は、幕府と同じく京學派の人々を登庸した。義直は、それのみならず、寛永中には、幕儒羅山の爲に孔廟を建て、先聖殿の扁額を寄贈してゐる。此等は天下諸藩のために、崇聖の念を扶植したものである。慶安三年の薨去によりて、藩の儒學も中衰に向つた。他の一方、和歌山に

おいては、藩祖賴宣は、寛永中惺窩の徒、那波活所を禮聘し、更に活所の子木菴、羅山の徒永田善齋、並に子格菴・順齋・平菴、朝鮮人李善直等を招き、儒學普及の道を啓いた。此等は、名古屋と同じく京學の流を酌むものをもて、その職に任じ、藩學興隆の先鞭をつけたものである。

名古屋には藩祖薨去後九十年、延享五年第八代宗勝の時には、崎門なる三宅尙齋の徒蟹養齋が來て、學問所を再興し、講堂を城西に構へた。爲に明倫堂の扁額を附與した。門下からは、中村厚齋・同習齋・宮崎欽齋・磯野員純等が出た。別に崎門なる淺見絅齋の徒、小出侗齋・須賀精齋等がゐた。藩の學風は、京學から一轉して崎門に移つたやうである。宗勝の子第九代宗睦は奬學の志があつく、天明二年、新に學堂を經營し、細井平洲をあげて總裁とした。平洲は、藩老竹越氏の儒臣で、中西淡淵の古學を奉承したものである。學制も定まり、學生の數も數百人に上つた。また孔廟を營み、藩祖義直が林家の爲に贈つた「先聖殿」の眞蹟をかゝげ、春秋二丁の釋菜をもあげた。平洲についで、岡田新川・石川香山等が督學の任に當つたが、文化八年第十代齊朝の時、冢田大峰が督學となつた。大峰は「寛政異學禁」の後をうけながら、敢然その所謂冢注學を立てて、これをもて「闕里正風」と斷言した。藩にても、その所謂冢注九經の出版をたすけ、その書をもて敎科に當てしめた。大藩の學風は、必しも幕府に追隨するものではなかつた。他方和歌山においても、正德三年第五代吉宗は、藩校

を設けて講釋所と呼び、學問の普及をはかつた。この前後に招致されたものには、仁齋の古義學を學んだ荒川天散・蔭山東門・木村鳳梧、及び仁齋の末子蘭嵎、並に木下順庵の木門に學んだ榊原篁洲・祇園南海等の人々である。學風は、不統一のやうであつた。寛政三年第十代治寶は、學校の規模を擴張し、學習館と名づけ、學問の振興をはかつた。當時京都を中心として、一時古注學が復興した。明經博士清原宣條の門下に、岩垣龍溪・佐野山陰・村瀬栲亭が出た。皆川淇園を加へて、古學四大家と呼ばれてゐた。此時藩儒山本樂所の「論語補解」、志賀南岡の「補解辨證」が、藩の補助によつて出版され、古注學は藩の學問となつた。名古屋で、大峰が冢注學主張に比して、勢焔はあがらなかつたが、また「異學禁」の後をうけて、なほも古注學を堅持してゐたものである。

水戸には、藩祖頼房の後をうけ、第二代光圀の修史傾倒は、會津藩祖保科正之の崎門傾倒と並んで、殆んど宗教的に動いて來たものである。光圀は、明暦三年修史の志を立て、その後寛文五年明の遺儒朱舜水を禮待し、その正義明分の說に心醉し、寛文十二年彰考館を江戸小石川藩邸に開いて、いよいよ本格的に修史にとりかゝつた。之に關與した學者には、舜水の徒である安積老牛を始めとし、林家の徒、人見卜幽・子懋齋・佐々十竹・中村篁溪・子浩然窩、崎門の流を酌める鵜飼錬齋・弟稱齋・三宅觀瀾・栗山潜鋒、その他古義學の大井松隣、木門の大串雪瀾等、其他數十人であつた。學派の異

同は、問ふところではない、たゞ忠實にその義分の精神を辨へ、調査研究に從事するものであれば善いのであつた。編修のためには、藩入の三分の一を費したといはれてゐる。光圀は、正義明分の上から、過去一切の史實を批判し、「春秋」「綱目」「正統記」などの精神を發揮せんことをつとめた。かの所謂三大特筆は、國史に最後の斷案を下したものである。他の一方、會津正之は、山崎闇齋を禮聘して道學に傾倒した有様は、光圀の修史に讓らない。正之の聘に應じて、闇齋の進謁したのは寛文五年である。「山崎先生行實」に、

源公〇正之自レ見二先生一、始讀二小學一、知二大學之基一、焚二向前所レ讀老佛之書一、專治二濂洛關閩之學一、用二力於敬一、功夫日新、云々。

とある。正之はまた、吉川惟足を延いて、卜部家相傳の神道を聽き、神儒一理を信じ、崎門なる友松友興・大森固菴等之を鼓盪した。寛文中正之は、闇齋と心をあはせ、「二程治教錄」「伊洛淵源錄」「玉講附錄」等を編したことなどは、その傾倒尊信を察することが出來る。家康の孫に當る光圀と正之とは、時を同じくして一は修史に、一は道學に心を傾けたのであつた。

水戸の修史は、元祿十年百王本紀の稿成り、十三年光圀薨去した時には、群臣列傳の稿もほゞ出來てゐた。享保五年宗堯の時、之を幕府に獻じた。十六年宗翰の時、之を朝廷に獻上しようとしたが、

障があつて行はれず、文化七年治紀の時に至り、漸く望がかなつたのである。享保十六年から、八十年後のことである。治紀の孫齊昭の時には、時代の動きにふれ、正義明分の傳統的思想は、尊攘忠孝の活問題としてあらはれて來た。齊昭が「弘道館記」並に「告志篇」となり、此に水戸學風を樹立した。會澤正志の「新論」「迪彝篇」「退食閒話」、藤田東湖の「弘道館記述義」「回天詩史」、豊田天功の「中興新書」は、その前後に出たもので、嘉安の際、諸藩尊王論に指導を與へたものである。他方會津では、正之以來敬幕をもつて藩是として來た。寛文十五年の「家訓」にも、

大君之儀、一心大切可レ存二忠勤一、不レ可下以二列國之例一自處上焉、若懷二二心一、則非二我子孫一、面々決不レ可レ從。

とある。正之の子正經、正經の子正容は、相傳へて闇齋並に惟足の學を、篤實に信奉して墜さなかつた。元祿中正容は、學料を支給し、學問を奬勵し、また嘗て闇齋が傳へたところの聖像を奉じて、聖廟を建立した。つゞいて容頌は、古文學が天下に盛行し、風俗紊亂の兆あるを觀て、大に之を憂へ、天明八年黌舍を擴張して、傳來の道學を固守し、享和三年には、家臣に命じて朱子の小學に傚ひ、「日新館童子訓」を撰ばしめて、藩教育の方針を示した。古屋十次郎を聘し、また藩士安部井辨次郎・高津平藏・牧原只次郎・松本來藏を選拔し、昌平黌に學ばしめた。安部井は宋元二十四家の説を蒐め、

「四書輯疏」二十九卷を編し、且つ「小學」「近思錄」「孝經」「四書」の點を定めて、藩から出版し、藩祖編するところの「二程治教錄」等の書とあはせて、眞摯に神儒の學を守つた。水戶は、史學に傾倒せるに對し、會津は、道學に沒頭し、水戶は、尊王を稱道せるに對し、會津は、敬幕に終始した。その熱烈な宗教的態度の下に、その學ぶところを信じて之を實行した點は同一であるといはねばならぬ。

四

飜つて外樣諸藩においての學事は、いかゞであるか。室町末から、夙に地方文化の萌芽を見たのは、薩長土三地方であらう。

薩の儒學は、桂菴入薩の時に始まつてゐる。桂菴は、五山新注學の傳を受け、且つ入明して、彼地新注學風に得るところがあつた人である。その入薩は、文明十年二月である。新注書讀方において、所謂桂菴家點といふものを傳へ、江戶初期には、三傳の徒文之が出た。文之は京學の祖藤原惺窩と時を同じうして、その徒如竹と、桂菴學術の殿後で、十七代家久から十九代光久の際に生榮してゐたのである。光久中央文化を慕ひ、藩士兒玉圖南・愛甲季平・郡山原與等を江戶に遊學せしめ、京學の系

を引いてゐる室鳩巢門下に學ばしめ、山田君豹をして鳩巢門なる河口靜齋に學ばしめた。君豹の門から山本正誼・赤崎元禮が出た。安永二年二十五代重豪の時、藩學造士館並に聖廟は造營され、正誼を督學とし、元禮を教授とした。山赤二氏の後、黑田兼山・上原尚賢・石塚鶴高は、幕儒古賀精里に學び、藩學に貢獻するところがあつた。藩の學風は、光久以降は、常に幕府に依據して、程朱の範圍を出ることを許さなかつた。歷代藩主は、文武不岐をもて敎育の方針と定めてゐたが、嘉安の際になつては、時代の動きにふれて來た。安政四年十月學生への「訓諭」に、「義理ヲ明ニシ、名分ヲ正スコトヲ學問ノ第一義トシ、孔子ノ道、別シテ天照大神ノ御神慮ニ副フヘキコト」を高唱したのは、やがて尊王討幕に轉向すべき用意としられる。

長防の地は、嘗て大內氏の所領で、大內氏は京都文化をその居城山口に移入せんとつとめたのであつた。天文中、義隆は、明經博士淸原枝賢並に小槻伊治等を招いて、家學の傳を受け、新古注本の輪講をなし、更に書翰を朝鮮に送つて、「五經新注」並に「正義」の送進を要請した。毛利元就その故地を領し、長門萩に據り、文學に志を有してゐたが、何分騷亂の際とて、傳ふべき功績もなかつた。元就の子小早川隆景が、その立花城中に學校を設け、聖廟を營んだことは、當時稀有の美擧である。毛利氏は、そのはじめは林門である愚齋周哲・奥平勘右衞門・古家權右衞門・佐々木源六等をして、學

事を司らしめた。また小倉尙齋・山田原欽は、江村專齋の子伊藤坦菴の徒である。享保三年吉元の時、藩學明倫館を設け、聖廟を營むに及んで、尙齋をあげて祭酒に任じた。專齋の學は、惺窩の京學を傳へたものであるから、尙齋・原欽は、倶に程朱を宗としてゐるものである。つゞいて山縣周南が徂徠の古文辭學をうけて歸り、元文二年祭酒を襲つた。周南は、他の同學に似ず、謹厚篤實の人であつて、幾多の俊才を育成した。津田士雅・小倉鹿門・山根華陽・林東溟・瀧鶴臺等は、十哲の稱があつた。此に一藩は、全く古文辭學となつた。かくて消長斷續の間に、廢藩の際に及んでゐる。「文武ハ、士道ノ根源、云々」の「訓諭」は、學校剏立以來、時々發せられてゐるが、時代に對し、思想の流に深入することを避けた形迹のあるのは、薩藩とともに、外様大名の遠慮によつたものであらう。ところが安政中、吉田松陰が時代の動に激して、松下村塾の講習に尊攘の大旆をかゝげた時には、一藩翕然として之に應じ、明倫堂には隻影なしといはれるに至つては、薩藩とともに、二百年來鬱結した士心の勃興であらう。

土の山内氏が、高知に據り、長曾我部氏の岡豐文化、吉良氏の弘岡文化の後をうけて、南學の培養地として後世の思想に多大の影響を與へたことは、特筆すべきである。天文中には、南村梅軒といふ人、弘岡城下にあらはれ、城主吉良宣經のために、朱子新注學を講說したが、如淵・忍性・天質等

が、その後を繼承してゐる。天質門下から、谷時中が出た。時中が高知城下で、嚴厲な純程朱學を講說してゐたのは、藩祖山内一豐が受封の際であつた。野中兼山・小倉三省・山崎闇齋等はその門下から出た。闇齋は、上洛して所謂崎門の一派を樹立して、天下にその羽翼を張つたものである。而して兼山・三省二人は、藩の重職にあつて、二代忠義、三代忠豐を啓沃し、藩政に參劃した。三省は、特に教育に心を盡したので、門下からは長澤潛軒・谷一齋・町定靜等を出した。兼山・三省が、相ついで下世したので、藩の學事も甚しく振はなくなつた。その後藩人馬場一梯・宮田定則・美代廿代は、崎門なる淺見絅齋に學び、尾池敬績は、同じく崎門なる佐藤直方・三宅尙齋門に出入し、各〻その學を傳へて歸藩した。此に南學は、正しく逆輸入の態である。外に絅齋の徒谷重遠は、治下に敎授し、子に垣守、門人に藩人入江正雅、齊實純がゐる。原山の門からは箕浦行直・直彝・正路の兄弟、並に植田桂南が出た。藩老山内重規は、定則敬績並に重遠の敎を受け、藩主六代豐隆、七代豐常の二代に仕へ、その子豐敷は、享保十年豐常卒去の後をうけて、第八代の藩主となつた。寶暦十年、學校を開設し、十四年朱子學振興の「揭示」をその學校にかゝげた。その略に、「夫孔孟之後、接二道統一者、程朱也、故謹守二程朱之說一爲レ要、若不レ然而他求、則非二正學一也、云々」といひ、而して仁齋徂徠の學に對しては、極力之を排斥してゐる。その後天保十五年第十三代豐熙の時に、重ねて「諭達」を出

してゐる。十五代豐信は、嘉安の際に當り、「兎角國家ノ興廢、政治ノ得失ニ目ヲ付ケテ、修養致度事ニ候、云々」との「直諭」を下した。海南傳來の程朱尊攘の學風は、時勢にふれて一藩士風の躍動を促して來た。

思ふに名和水三藩が、三親藩として幕府の藩屏たるにかゝはらず、兎もすれば高く尊王の理想をかかげてゐるに對し、薩長土の諸藩が、時代に關する主張を差控へ、表面は忠良な幕府の支持者としての教育指導を取つてゐたのは、藩の立場としての深慮によつたものであらうとおもはれる。

## 五

なほ大藩諸侯中、その學風に異彩のあつたものは、備前の池田氏、加賀の前田氏であらう。池田氏が、その當初中江藤樹の江西學を學び、その門人を招致したことは、前田氏が松永尺五の京學を尙び、尺五並にその門人を招致したことと似通つたものがある。

備前藩祖池田光政は、もと程朱學を喜んでゐた人である。寛永九年、因伯から備前に移り、その翌々年熊澤蕃山を用ひて政務に當らせた。蕃山は、その後感ずる所があつて近江に至り、中江藤樹に謁して學を修めることになつた。藤樹は間もなく陽明致良知の學に向ひ、あげて之を蕃山に傳へた。蕃山

は、正保三年歸藩したが、異數の拔擢を蒙り、國政の樞機に參じ、且つ一藩士民の教育に預ることになつた。寛文二年、花畠教場を城西に移し、學問を奬勵した。光政は兼ねてから藤樹を尊信してゐたので、藤樹の三子虎之助・藤之丞・彌三郎、並に門人としては蕃山の弟泉仲愛、及び中川權左衞門・加世八兵衞・一尾伊織・中村叔貫・谷川儀左衞門・淸水季祐等を召致した。江西學風は、一時その盛を極めた。「花園會約」によりて、その學風教則の一斑をしることが出來る。その中に「今諸子ノ會約、致良知ヲ以テ宗トス、云々」とか、「夫良知ノ愛敬ハ、萬物ヲ以テ一體トス、云々」とかいふ語があつて、他の藩には見ることが出來ない江西の陽明學をもつて、學問の本旨としてゐるのである。然るにこれより先、萬治元年京儒三宅可三を招いて、學事に與らせた。可三は道乙の子で、道乙は菅玄同の徒であるから、京學派中の人である。かゝる次第で、江西學以外に京學の侵入を見た。可三の同志に、市浦惟直・小原大丈軒、及びその徒篠岡利貞・窪田重中等がゐた。蕃山等の拔擢は舊臣故老達の嫉惡を買ひ、他方學派の對立を現して來た。

加賀藩祖前田利家が、天正中、國を開いた時には、戰亂中のこととて、まだ學問に從事するものもなかつた。二代利長、三代利常を經て、四代光高の時には、國內も漸く治つて來たので、寛永十七年惺窩の徒である松永尺五を聘した。五代綱紀は、儒佛の道を好み、萬治以來連りに當代の碩儒高僧を

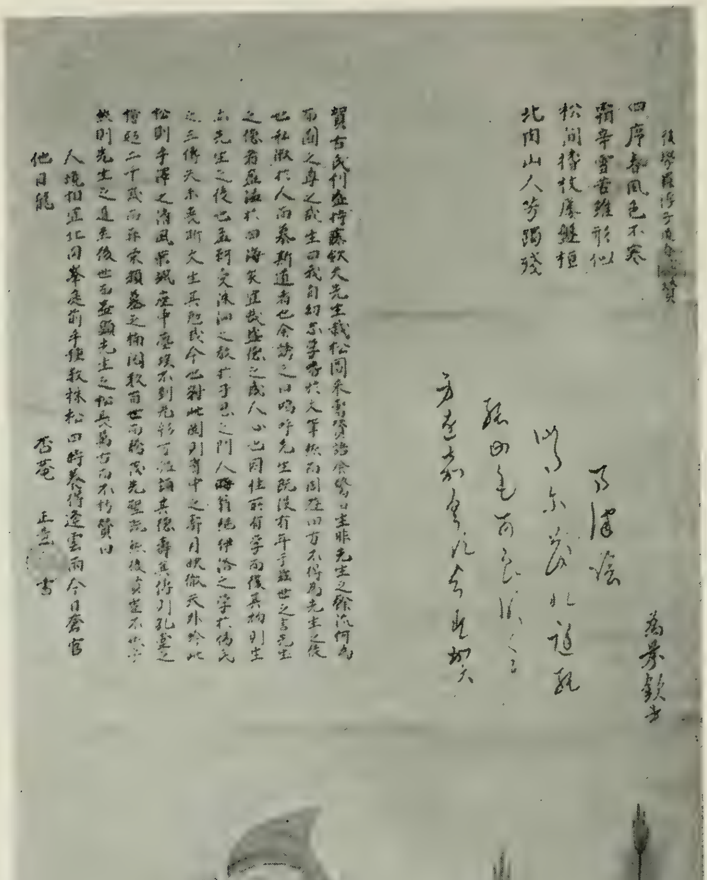
禮招した。また藩からも、多くの偉材が出た。寛文五年、尺五の門人木下順庵・平岩仙桂・澤田宗堅等を招き、また順庵の門下なる室鳩巣・五十川剛伯・小瀬文四郎・藤田意三・岡嶋忠四郎・兒嶋景範等を登庸した。藩の執政、本多政敏・奥村庸禮・同悳輝・村井親長、參政今枝近義・本多政冬・津田孟昭・前田知頼・同誠明、その他奥村修運・同忠順・青地齊賢・同禮幹・小寺遵路・小谷繼成・山根直廉・葛巻昌興・原元寅・山本本庸・淺加久敬・九里正長等も皆好學の人であつた。庸禮・悳輝の二人は、朱舜水に學んだ人で、修運・忠順・齊賢・禮幹・遵路・繼成・直廉は、鳩巣に學んだ人で、室門七子といはれてゐる。また崎門の羽黑成美、松永昌益の徒伊藤由定等も、來て城下に講授してゐた。成美は、師說を傳へて純朱子學を主張し、居然一州の木鐸をもつて自任してゐた。備前において、主として江西陽明學の人を重用してゐた時に、加賀には京學程朱學の尺五及びその流の人を重用してゐたのであつた。第十一代治脩の時に至り、伊藤融・長谷川尙・大嶋繼直を選拔し、また鴇田忠厚・新井祐登を聘し、寛政四年藩學明倫堂を開設し、祐登を學頭とした。祐登は崎門三宅尙齋の徒なる菅野兼山に學んだ人で、程朱を宗としてゐる。「白鹿洞書院揭示」を揭げて學者の指針とし、また「大學生學約」を頒つて、「臣節當務」を縷說してゐる。享和三年十二代齊廣の時、「明倫堂學制」を修補し、大田元貞を聘して教授に當らせ、他に津田鳳卿・富田景周を登庸して、學事を督勵させた。學問興隆

の兆はあらはれて來たが、學風はやゝ多岐に流れた。

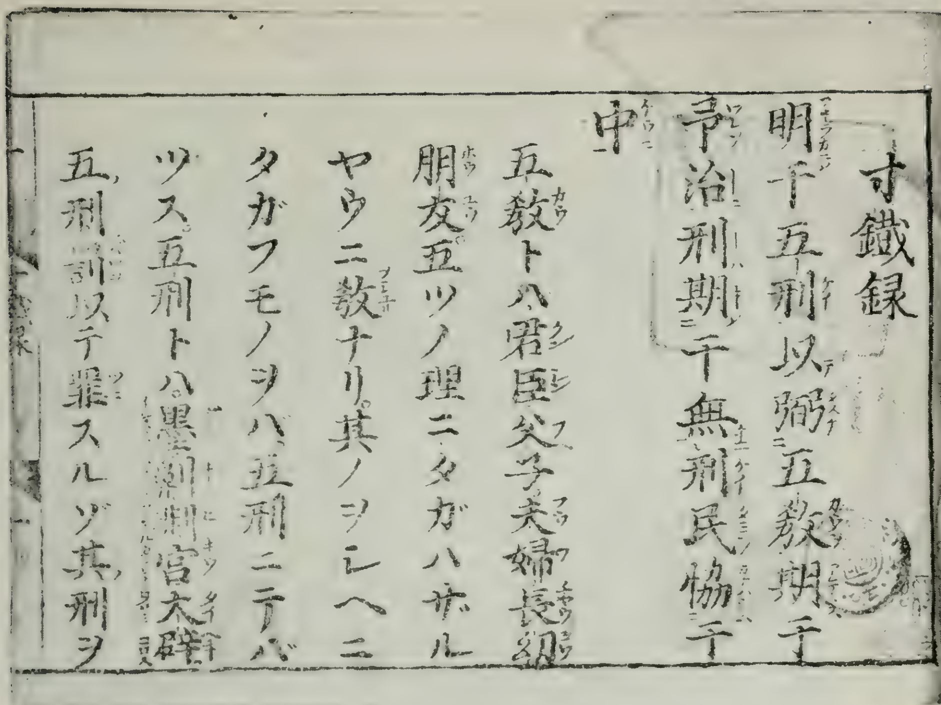
要之諸藩文敎の普及して來たのは、その當初家康の施設その宜しきを得た爲であらう。諸藩の幕府の右文左武の方針に從ひ、京都を中心として興起した學者もしくはその徒を禮招し、各藩各樣の異彩を放つたものがあつたが、所謂江戸後期に至つては、幕府が學風上の穿鑿も漸く嚴密になり、殊に寛政以後に、昌平黌に諸藩の學生を收容して、學風の統一を計らんとしたことは、必要なる政策ではあつたが、諸藩の中からも相當の學者があらはれ、獨立自説を主張するものも現れて、博引旁搜考證に專念するものあらはれ、或は調和を說くもの、或は折衷を說くものなども、その間に出て、異學紛興の代となり、殊に嘉安以降、時事問題と錯綜し、收拾すべからざる狀態を醸して、江戸の終をつげた。

（昭和十三、八、二〇記）

# 諸家の學風・特色

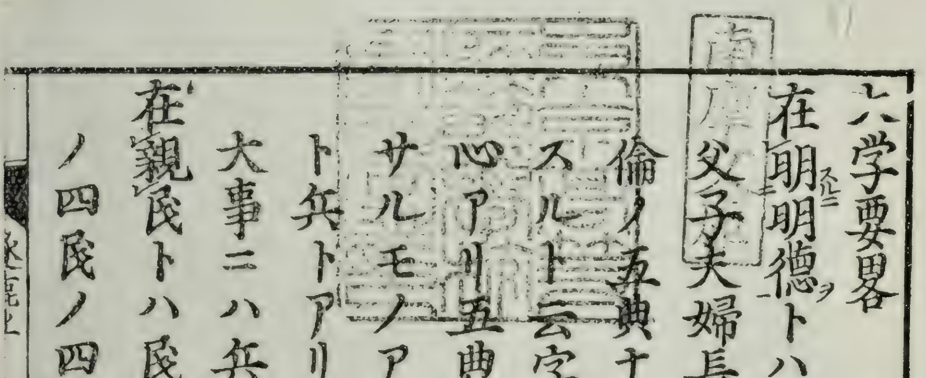


藤原惺窩肖像（宇留島篤弘氏藏）


寸鐵録

明于五刑以弼五教期于
予治刑期于無刑民協于
中
五教トハ君臣父子夫婦長幼
朋友五ツノ理ニタガハザル
ヤウニ教ナリ其ノヲシヘニ
タガフモノヲバ五刑ニテバ
ツス五刑トハ墨劓剕宮大辟
五刑ヲ以テ罪スルゾ其刑ヲ

寸鐵錄（帝國圖書館藏）


大学要畧　逐鹿評上

在明明德トハ明德ハ君臣父子夫婦長幼朋友ノ五
倫ノ五典ナリ上ノ明ニ
スルト云字明發教導ノ
心アリ五典ニシタカハ
サルモノアルニヨリ刑
ト兵トアリ小事ニハ刑
大事ニハ兵ナリ
在親民トハ民ハ士農工商
ノ四民ノ四業也親ト云

逐鹿評（東京文理科大學附屬圖書館藏）

# 藤原惺窩の學的態度

太田兵三郎

藤原惺窩（名は肅、字は斂夫、惺窩は其の號なり、他に柴立子、北肉山人、昨木山人、妙壽院等の號あり、永祿四年（皇紀二二二一）生、元和五年（二二七九）卒、享年五十九）が近世日本儒學の大宗であり、其の兩翼に徳川三百年の文運を支配せる朱子學派の樞軸としての林・松永の二家を出し、宛然本邦朱子學派の開祖たるの觀を呈してゐることは、既に人の知る所である。併しながら惺窩は其の後繼者の或者が往々にして陷れるが如き固陋一偏なる朱子學者ではなく、汎くあらゆるものに學んで之を自己の學的體系の一礎石たらしめんとした。其の學的態度は中世的傳統に束縛せられることなく、經書に直面してたゞちに天人一貫の理を闡明せんとしたので、茲に期せずして近世文藝復興の機運を麾くの概があつた。以下惺窩學術の實際に就いて、其の學的態度の特徴を考へよう。

惺窩云、學問之道、分二別義理一、以二理一分殊一爲レ本、萬物一理、物我無レ間、則必入二於理一、

流二釋氏平等利益、墨子兼愛一而已、專以二分殊一見レ之、則必流二於楊子爲我一矣、兩未レ得二其善一、故讀二聖賢之書一、曉二聖賢之心一、則可下專以二理一分殊一爲上レ宗、則無レ弊矣。（杏陰稿卷四）

惺窩に據れば、學問の根本は理一分殊を體得するにあつた。理一の理は事象の本體、若しくは宋儒の所謂「然る所以の理法」であり、萬物をして萬物たらしめる究極原理である。分殊は本體たる一理の現はれとしての雜多なる事象である。理に至つて初めて雜多なる事象（差別）の世界は統一を得て、こゝに其の全き意義を完結する。然も理（體）は事象（用）を離れて無く、事象は理を措いて無い。程伊川の所謂事理一致、體用一源たる所以である。惺窩が釋氏・墨子乃至は楊子を排斥するのも、彼に據れば全く彼等が理一乃至は分殊の一面に偏するが爲であつたので、この思想が程伊川の「西銘理一而分殊、墨氏則愛合而無レ分、分殊之蔽、私勝而失レ仁、無分之罪、兼愛而無レ義、分立而推二理一一、以止二私勝之流一、仁之方也、無レ別而迷二兼愛一、至二於無レ父之極一、義斯亡也。」（二程粹言、論書篇）と言へるものに得たであらうことは、ほゞ疑なからう。究極原理としての理を追求することは、學の根柢を確立し、學を深化する所以ではあるが、この一面のみを强調することは、とかく空疎の弊に陷り易いのであつて、飽くまで分殊の一面を疎にせぬ所に、實際を重んずる儒敎本來の立場がある。この理一分殊の思想が張横渠（西銘）に發し、程伊川・楊龜山を經、朱子に至つて確立された宋儒固有

の思想であることは、言ふ迄もない所である。

究極原理としての一理が萬物の上に遍滿してゐる所よりいへば、究極原理は卽ち普遍原理である。この側面よりすれば、萬物は一根であり、天人は合一すべきであつて、こゝに於ては理（天道）は直ちに性（人心）となる。

夫天道者理也、此理在レ天、未レ賦ニ於物一曰ニ天道一、此理具ニ於人心一、未レ應ニ於事一曰レ性、性亦理也、蓋仁義禮智之性、與ニ夫元亨利貞之天道一、異レ名而其實一也、凡人順レ理、則天道在ニ其中一、而天人如レ一者也。（惺窩先生文集卷九、五事之難）

かくして理を明かにすることは、其儘我が性を究めることとなるのであつて、茲に至つて學は自己の修養の爲のものとなるのである。

先生謂レ余曰、汝謂ニ何以爲レ學、若求レ名思レ利、非ニ爲レ己者一也、若又以レ此欲レ售ニ於世一、不レ若ニ不レ學之愈一也。（惺窩問答、羅山林先生文集卷三十二所收）

また物しりと人にいはれんとおもふも人心なり、たゞ心をみかかんための學問なり。（一）（假名性理）

朝鮮役の捕虜にして惺窩の學問に尠からぬ影響を與へた姜沆が惺窩の「文章達德綱領」に序して、惺窩の博學を讃へた後、「一切以下擴ニ天理一收中放念上、爲ニ學問根本一。」といつてゐるのも、こゝを云ふ

のである。

然らば所謂天理を擴げ放念を收むべき學問の方法は如何。

書之所レ存者、賢聖之所レ存也、上臨旁質、斯師在レ此、斯友在レ此、其時其地亦在レ此。（惺窩先生文集卷八、欹案銘　應二玄同之求一）

こゝに道の表現としての經籍そのものを師とする惺窩の立場があるので、是はやがて明經家（主として清原家）の訓點傳授を超えて、近世儒學を率ゐる惺窩の學術を生み來る所以でもあつた。惺窩が壯年（慶長元年、年三十六）當世に善師無きを憂へ、決然渡明を企て、風濤に遭うて果さず、聖人常師無きを悟り、「吾求二之六經一足矣」（惺窩先生行狀、惺窩先生文集首卷所收）としたのも、その根柢にかゝる自覺があつたことを思はねばならぬ。從つて惺窩は書そのものに就いて着實に研究せんとするのであるが、それは飽くまで字句の末に捉はるゝことなく、精神そのものに肉迫するものでなければならなかつた。「宋儒之高明、誠吾道之日月也、漢唐訓詁之儒、僅釋二一二句一、費二百千萬言一、然淺近如レ此。」（惺窩先生文集卷十一、與二林道春一）てふ漢唐訓詁學に對する評言も、惺窩のかゝる態度を表明するものに外ならぬ。然し彼は事物の一面を以て輕々に其の全體を律し去る人ではなかつたので、他面に於て、「漢唐訓詁之學、亦不レ可レ不二一涉獵一者也、其器物名數典刑、雖レ曰二程朱一、依レ焉而不レ改者夥矣、讓

焉而不㆑注者數矣、所謂十三經疏云者、魚亦所㆑欲也耶。」（惺窩先生文集卷十一、與㆓林道春㆒）「同（惺窩）云、凡讀㆑書講㆓義理㆒者、必有㆓先儒訓解㆒、講㆓聖賢之經㆒、先於㆓注上㆒分㆓義理㆒。」（杏陰稿卷四）といつて訓詁を全然廢棄するものではなかつた。

讀㆓聖賢之經書㆒、以㆓經書㆒證㆓我心㆒、以㆓我心㆒證㆓經書㆒、經書與㆓我心㆒通融可也。（惺窩問答）

畢竟形迹を超えて精神に分け入り、道の表現としての經書と我心との冥會を庶幾するのであつて、この立場は書物に拘泥することを排すると同時に、又主觀（小我）の騰逸を警戒するものであつた。

惺窩の學的態度の根本は大體以上の如きものであるが、彼が爲學の順序としての知行の關係を如何に見たかは惺窩の學風を知る上に參考となる所が尠くないので、次に彼の知行論に就て一言しよう。

先生嘗問曰、大學之要何先、道春對曰、誠意乎、曰、誠意雖㆑爲㆓大學之要㆒、然在㆓學者㆒只格物窮理爲㆑先、是急務也。（惺窩問答）

其學者ノ工夫ノ爲ニハ、下ノ文ノ格物ヨリ工夫ヲナ〆入ルヘキソ。（逐鹿評上）(二)

シラズハ、ムマレツキヨクトモイカヾヲコナハンヤ、マヅシルヘキナリ、タヾシ、シラヌモノハ、シリタラバ、行コトモアランノタノミモ、ノコレリ、知ルモノヽ、行ナハザルハ、シラザルヨリ、ヲトレルハ必定ナリ。(三)（寸鐵錄一卷、非㆓知之艱㆒、行之惟艱、書說命篇の項）

是等の立場は蓋し朱子の「苟徒知而不レ行、誠與レ不レ學無レ異、然欲レ行而未レ明ニ於理一、則所ニ踐履一者又未レ知ニ其果何事一也、故大學之道、雖下以ニ誠意正心一爲上レ本、而必以ニ格物致知一爲レ先。」（朱子文集卷五十九、答ニ曹元可一）の說を奉ずるもので、謂はば先知後行說であるといへよう。然しこれは爲學の順序より言つたものであつて、「學者之訪論稽レ古也、以ニ嘉言一學レ窮ニ其理一、以ニ善行一學レ實ニ其事一、是爲レ稽レ古、蓋言行不レ二、雖レ學ニ空言一、治レ己治レ人、施及レ物、則實行也、非ニ空言一矣、雖レ學ニ實行一、口言レ之心不レ知レ之、心知レ之身不レ踐レ之、則又空言也、非ニ實行一矣、可レ謂言行一也、二レ之、則非レ稽レ古、非ニ學者一矣。」（惺窩先生文集卷七、古今醫案序）と言ふ所に徵するも、彼が言行不二、知行合一を以て學の理想としたことは明かであつて、畢竟彼は程伊川等の如く、先知後行を以て知行合一に達する階梯とするものと見るべきであらう。而して茲に注意すべきは、これらの立場を以て學者の態度として特記してゐることである。前引の古今醫案序の文に續けて、「雖レ然初學者徒然守ニ空言一、則臨レ事變、藐然不レ知ニ所ニ以處一レ之、故不レ如レ見ニ行事之實驗一矣。」といつてゐる所に至つて、惺窩の眞意は愈々明瞭になるのであつて、初學者に在つては知よりも寧ろ實際の行事を强調してゐることは注目されねばならぬ。假名性理に於て、「五常五倫を行て、そのひまあらは學問すへし、此しよさをつとめすしてかくもんする人も人欲なり。」と言つてゐるのも、この書の性質上、初學者乃至は一般人を對象とするものと

見るべきである。こゝに惺窩の教育者としての一面を窺ふべきであつて、彼が所謂理障に陷らず、能く實際に門弟を薫育指導し得たのも、かゝる態度が與つて力があつたであらう。奴輩の手落ちを恕し、之を己に求めて、「奴輩往往有ニ如レ此者一、莫ニ深罪一焉、如レ所レ言吾人不敬之所レ至此而已、自一提醒、則是亦日用學中之一事也。」（惺窩先生文集卷十一、與ニ林道春一）といふ所にも、教育者としての惺窩の風光を遺憾無く顯はしてゐるのであつて、畢竟彼の本領は學究者乃至理論家たるよりも、寧ろ實際的教育者たる所にあつたといふべきであらう。其の意味に於て學者としての態度と教育者としての立場を區別する彼の知行論は、理論としては稍〻徹底を缺く憾無しとせぬが、惺窩の學風を知る上には見逃すべからざるものである。

かゝる傾向は惺窩學術の一般に通じても言ひ得るのであつて、理論家としての彼は、宇宙論、理氣論、心性論等に於て、羅山記する所の惺窩問答等に見るも、大體宋儒の理論を傳へるに止まり、特に之に加ふるものを示してはゐない。併し彼が(四)汎くあらゆるものに學び、而もそれに拘泥することなく、その要點を捉へて、之を自己の學的組織の中に攝取するだけの見識を備へてゐたことは疑のない所であつて、こゝに文藝復興期の源頭に立つて、近世儒學を興起して來る惺窩の大さがあつた。畢竟惺窩の價値は、學理の確立に在つたのではなく、爲學の態度の決定にあつたといふべきであらう。こ

のことは惺窩の陸王、佛老、神道觀に於て一層闡明されるので、以下是等に就いて略述する。

惺窩の陸王観は「答㆓林秀才㆒代㆓田玄之㆒」（惺窩先生文集卷十）に最も明瞭である。是は羅山の「寄㆓田玄之㆒」書に於ける朱學尊信、陸王排斥の見解に對して、朱陸幷取の立場を顯示したものであつた。[(五)]

如㆓朱夫子㆒者、繼㆓往聖㆒開㆓來學㆒、得㆓道統之傳㆒者也、後生區區置㆓異論㆒哉、如㆓陸文安㆒者、有㆓信而最學㆑之者㆒、有㆓疑而未㆑決㆑之者㆒、有㆓排而斥㆑之者㆒、信者排者、置不㆑論焉、以㆓其疑者㆒言㆑之、在㆓同時㆒者、張斂夫・呂伯恭、於㆓紫陽㆒（朱子）爲㆓丈人行㆒、而共發㆓揮我道㆒爲㆓己任㆒者也、然亦以㆓文安㆒不㆑爲㆓全非㆒、……在㆓皇明㆒者、儒門一代巨擘、皆有㆓寃㆑陸之疑㆒、故余亦疑㆓其所㆒㆑疑㆑之而已、非㆓信而學㆒、唯見㆓羅整庵・霍渭厓・陳淸瀾等、黨同伐異、排陸之諸編㆒、未㆑見㆓金谿（象山）家乘文集、語錄年譜、及門人故舊之手錄㆒、故曰非㆓敢信者㆒、疑而未㆑決者、足下辨㆑陸不㆑遺㆓餘力㆒、……余姑以㆓疑者㆒論㆑之、則鹽梅相濟、瑕瑜不㆑掩、亦復有㆓此理㆒、微箕比干周武伯夷所㆑爲、各如㆑不㆑同、而所㆑欲亦如㆑不㆑異、故仲尼兼稱幷取、不㆓偏廢㆒、……紫陽質實而好㆓邃密㆒、後學不㆑免㆑有㆓支離之弊㆒、金谿質高明而好㆓簡易㆒、後學不㆑免㆑有㆓怪誕之弊㆒、是爲㆑異者也、人見㆓其異㆒、不㆑見㆓其同㆒、同者何哉、同是㆓堯舜㆒、同非㆓桀紂㆒、同尊㆓孔孟㆒、同排㆓釋老㆒、同天理爲㆑公、同人欲爲㆑私。

すなはち惺窩は「姑以㆓疑者㆒論㆑之」と謙遜しつつも、堂々朱陸の特色並びに同異を論じ、共に儒學

に於て學ぶべく採るべきを示してゐる所にも、既に德川初期に臨んだ新注學の黎明を見る。而も彼が權威に壓服されず、よくその長短を見究め、信ずべきを信じ疑ふべきを疑ふとする態度は、正しく中世思想を脫却して、德川初頭の文藝復興の精神を率ゐるものといふべきである。又陽明に對しても、惺窩は時に寧ろ之を擁護する所があるので、致知格物に就いて羅山が程朱の說を稱揚し、陽明の意見如何と問ひたるに對し、惺窩は「此處未レ易レ言也、汝唯熟讀玩味、涵泳從容可也、要在ニ默而識一レ之也、至ニ一旦豁然貫通一、則諸儒之同異定ニ于一一。」（惺窩問答）といひ、大學の三綱領の一たる新民のうちに民を親愛するの意あるかとの或人の問に對し、惺窩は「親民之內亦有ニ新民之意在一。」（羅山林先生文集卷七十五、隨筆十一所引）といつて、寧ろ朱說を採らず、王（陽明）說を取る如き口吻を洩らし、陽明の詩を評しては、「洒落可レ愛」（惺窩先生文集卷十一、與ニ林道春一）と言ふ如き、以て惺窩の陽明に對する態度を窺ふに足る。畢竟惺窩は漢唐の注疏の學に對して宋明の性理學を喜んだので、性理學の中では朱子の穩健着實なる學說に推服したが、さればといつて惺窩を以て直ちに所謂朱子學者なりと斷定することは、惺窩學術の眞相を誤りなく言ひ當てたものではない。朱子學者としての林羅山乃至松永尺五の師として、將又本邦朱子學派の中核たる林・松二門の母胎として、之を本邦朱子學派の有力なる源泉となすことにはもとより異論は無いが、

惺窩は所謂朱子學者と呼ばれる後繼者の如く、爾かく特に意識して朱子學を唯一絶對のものとして信奉したものではない。從つて朱子に沈醉し、其の他の學說に眼を覆ふやうなことはなかつた。大學の注解書たる「逐鹿評」に於て、その本文が朱子の章句本に據らず、禮記所載の古本を用ゐ、その注が明の三教一致論者たる林兆恩の四書標摘正義の說に依據し、時に朱說に對して不滿の意を仄してゐる如きは、その著しい例である。寧ろ折衷的乃至綜合的態度を持してゐたのが惺窩であつたので、惺窩問答に「又問、說卦曰二窮理一、大學曰二格物一、其立言不レ同何、曰、聖賢千言萬語只要二人理會得一、故所レ宗不レ同、所レ入卽一也、且古人各〻自有二入頭處一、如二周子之主靜、程子之持敬、朱子之窮理、象山之易簡、白砂之靜圓、陽明之良知一、其言似レ異而入處不レ別。」といふものは、之を物語つてゐる。是れ惺窩學術の特長であると同時に、或る一派のものよりして學に「醇乎ならず」との酷評を免れぬ所以である。

次に儒教の以て異端となす所の佛老並びに神道に對する惺窩の見解を尋ねよう。惺窩は七八歲の頃佛に入り、京都相國寺一山派に屬する播州龍野在の景雲寺に入つて禪を學び、十八歲の時相國寺に移り、三十歲迄は確實に僧形であつたのであるが、而立の齡を過ぐる頃より漸く心の內奧に醞釀しつゝあつた佛教に對する疑問、就中當時の墮落僧に對する反感は、彼を驅つて儒教特に宋學に向はしめ、

三十五歳より四十歳の間に於て儒者としての立場を確立したのである。從つて儒に歸してよりの彼が佛教を如何に看たかは、頗る興味ある問題たるを失はぬ。

先生以爲、我久從ニ事於釋氏一、然有レ疑ニ于心一、讀ニ聖賢書一、信而不レ疑、道果在レ玆、豈人倫外哉、釋氏既絶ニ仁種一、又滅ニ義理一、是所ニ以爲ニ異端一也。（惺窩先生行狀）

是は人間としての道が人倫關係てふ嚴たる一大事實と不可分であることを說いたもので、惺窩によれば人倫關係（仁義の起る所以）こそ眞の人間の道であり、之を度外視するものは總べて虛僞であり異端なりとする。慶長五年家康の入洛に際して召されて謁見し、承兌・靈三の二僧と問答を行つた時に、二僧が惺窩の佛を捨てて儒に歸せるを責めたのに對し、「以レ我觀レ之、則人倫皆眞也、未レ聞下呼ニ君子ニ爲上レ俗也、我恐僧徒乃是俗也、聖人何廢ニ人間世一哉。」（惺窩先生行狀）といへるも、全くこの故に外ならぬ。惺窩問答の「先生曰、當世天下困窮、人民罷敝、蓋由ニ遊手者衆多一也、食レ粟之家有レ餘、力レ農之夫不レ足、所謂長安百物皆貴、蓋此故也、‥‥余（羅山）以爲遊手者十、而爲ニ浮屠一者五六。」（尙寸鐵錄二卷並に逐鹿評下の「生レ財有ニ大道一、生レ之者衆、食レ之者寡、爲レ之者疾、用レ之者舒、則財恆足矣。」の項參考）に表はれてゐる僧侶攻擊論も、結局これに關聯して考へられねばならぬ。

我儒如ニ明鏡一、物來卽應、釋氏如ニ暗鏡一、却棄ニ絶物一、鏡中本來固有之明、而欲レ暗レ之、是害レ理也。

（惺窩問答）

これは惺窩が佛教の修養法を以て絶欲作爲的なりとしたことを示すものであつて、この立場は又無念無想を嘲り（逐鹿評上、物格而后知至云々の項）、全く喜怒哀樂の感情を殺すことを排する（逐鹿評下、身有レ所二忿懥一則不レ得二其正一云々の項）態度とも通ずる。佛教（就中大乘佛教）の眞意が果して絶欲を主張し、無念無想を强請するものなりや否やは別として、茲に無心よりも私心、無欲よりも節欲を主張する儒教の傳統思想の繼承を見得る。

をろかにも西とはかりはたのむかな穢土に淨土はありける物を（惺窩先生倭謌集卷四雜部）

釋迦佛一切經のうちに心は有物なり、極樂地獄も有ものなりとときたる所もおほし、また心もなし、極樂地獄もなしととかれたる所もおほし、しかれは心はなき物そと云は落着たり、心あるものならは、かりそめにもこゝろはなき物そとはときたまふへからす、しからは後生はなき物に落着なり。（假名性理）

茲には人生の理想を彼岸に求むることなく、未來を追はず、常に現實を念頭に置く儒教の實際主義的立場が明瞭に觀取される。この宗教を去つて道徳規範としての儒教への大きな轉換の背後に、已に近世思想の曙光が射し込んでゐるのであつて、惺窩の近世思想の先達たる所以も亦こゝにあつた。以上

は惺窩の佛教觀とも見るべきものであるが、彼は意識すると否とを問はず、あまり佛教思想について云々することを好まなかつたので、彼は寧ろ之に就いては敬遠主義を採つたと思はれる節がある。

上有二治統之君一、下有二道統之師一、則渠（佛者）何妨レ我、若其無則奈レ渠何、且如レ佘者、堅白未レ足、而妄試二磨涅一、還爲二渠所一レ議、可レ愧莫レ甚焉、唯自警自勤而已。（惺窩先生文集卷十、答二林秀才一代二田玄之一）

茲に堅白未足とあるのは寧ろ謙辭と見るべきであらうが、ともかく彼は理論の幽玄なる點に於ては佛教に讓り、專ら人倫の上より之を駁撃せんとしたのであつて、この態度は所謂開物成務を念とする實際的教說としての儒教本來の立場に立つものであると共に、尤も直接には程明道の佛教觀を祖述したものと言へよう。然し彼はその前半生の閲歷に見ても、決して佛書を讀まずして徒に之を攻撃する者ではなかつたので、異端の書を讀む心得を次の如く說いてゐる。

異書者、先哲所レ戒、然亦知二彼崖略一、則不レ墮二其術中一、……凡見二異中之同處一、見二同中之異處一、然後知二異之實對一、然先於二氣象一全適別、是能見者也。（惺窩先生文集卷十一、與二林道春一）

儒先有レ曰、學者於二吾書一有レ所レ見、見地堅定然後看二異書一、亦宜二他日不一レ墮二渠術中一。（惺窩先生文集卷十二、與二順知一、是とほゞ同意見「惺窩問答」中にも見ゆ）

蓋し是等の言說は惺窩永年の體驗より出でたものであり、志學者の參考に資する所が尠くない。然し

ながら人生の尤も感受性に富む青少年期の情熱を五山學術の海に投じた惺窩の骨髓より竟に佛教思想の臭味は牢固として拔け得べくもなかつたので、惺窩學術の處々に佛教思想の影響の隱見するのも亦已むを得なかつた。特に惺窩の信奉せる宋學が由來禪學と密接なる關係にあつたことを思はねばならぬ。今試みにその一例を擧げるならば、折々の字句の近似の如きは玆には問はぬとしても、惺窩がその逐鹿評に於て林子(兆恩)の見解に從つて、格物を物欲を去るの意に解する如き、五事之難(惺窩先生文集卷九)のうち「因果」を說いて語句は儒家に採るも佛家思想に得る所ある如き、假名性理に於て「天にそむきたるものはしそんほろひ、後の世に此心るろふして、天に歸らす、鳥けたものとなるなり。」といつて轉生を說く如き、之を佛家思想の影響と見るべきであらう。

老莊派に就いては、體質(多病であつた)、性格等よりして遂に一生布衣として終つた惺窩その人の隱君子的風格は、之と一脈相通ずるものを思はしめ、事實彼は「題二扇面一」(惺窩先生文集卷八)「樂活撮要序」(同卷七)等に於て老莊派への或る程度の共感を示してゐるのであるが、然しそれは飽くまで趣味として、將又悠々不羈の風懷として老莊的なるものの一面を愛したものであつた。「凡遊二方之外一者、寓二道乎末技一、同二波乎庸愚一、而韜二晦世之闊達一者、往往在レ焉、古所謂醫卜之中、多有二賢者出者一、寔有レ以哉。」と言つて、方外者流に一應の理解を表しつゝも、之に直ぐ續けて、「方今宇內搶攘、

非ニ獨無ニ醫レ人之術一、又能無ニ醫レ國之才一、時時徒吟下四海無ニ遠志一、一谿甘ニ遂心一之句上耳、吁已矣哉。」（樂活撮要序）と叫ばずにはゐられなかつた所に、單なる獨淸的隱遁者流に滿足せず、醫國的遠志を翹望する儒教的政治思想を否定し得ない。「安民爲政之外、無ニ詩書禮義一、詩書禮義之外、無ニ安民爲政一。」（惺窩先生文集卷九、致ニ書安南國一代人）といふものは、蓋し修己に始まり治人に終る儒教本來の立場を顯示するものでなければならぬ。寸鐵錄、逐鹿評等に徴するも、彼は政治思想に對して相當の關心を示してゐるのであつて、縱令是等の著述が主として人主の爲に作られたものであり、惺窩其の人の行實と多少の矛盾を免れなかつたとはいへ、惺窩と政治思想とは全然無緣のものではなかつた。

終に惺窩の神道觀は如何。惺窩の神道思想を窺ふべきものは甚だ少いのであるが、假名性理に、「日本の神道も我心を正して、萬民をあはれみ慈悲を施を極意とし、堯舜の道も極意とするなり、もろこしにては儒道と云、日本にては神道といふ、名はかはり、心は一なり、神武天皇のすへ欽明天皇の時に、天竺の佛法日本へわたりて、ふしき神變なる事をとき聞するによりて、人是に心をよせて神道おとろへたり。」といつて、佛を排し、神儒一致を唱道してゐることが注目せられる。神儒一致思想は既に南北朝時代に於て、度會家行、北畠親房、忌部正通等に其の萌芽を見、次いで室町時代に至つて一條兼良、吉田兼倶等によつて形成されたとはいへ、彼等は同時に神佛乃至神儒一致思想を抱懷

してゐたのであつて、惺窩がかくも明白に神儒一致を道破したことは注目に値する。然して是れは又直接には羅山、藤樹、蕃山、素行、益軒等の徳川期儒者の神儒一致思想を惹き起すものとして注意せられる。殊に神道の極意が我心を正し、萬民をあはれむにあるとしてゐるのは、神道を儒教的に解釋したものであるが、茲に神道を宗教的に取扱はず、生活規範として倫理的道徳的に取扱つてゐることは、徳川期以後の神道が倫理化的傾向を辿つたことと考へ併せる時、頗る興味ある事實である。尚惺窩の神道觀に就いては、惺窩が吉田神道の宗家吉田兼見の猶子であつたこと（兼見卿記天正十一年閏正月二十九日の條參照）をも考慮に入れるべきであらう。尚惺窩が儒に溺れず、徇くまで日本人としての立場に依據して、儒道を我國惟神の大道に攝取融合せんとした態度は、支那文化に心醉するの餘り、ともすれば日本人としての立場を忘れんとする傾向があつた徳川時代の一部漢學者とは大に趣を異にするのであつて、こゝにもとより元亨釋書（虎關師錬）神皇正統記（北畠親房）等に啓發せられ、國體觀念に目覺めつゝあつた時代思潮の影響を否定し得ないにしても、彼が中世歌學の泰斗藤原定家の後胤として生れ、一面に於て國學和歌にも通じ、古典に沈潛する人であつたことを忘れてはならぬ。

要之藤原惺窩は幼時佛に入り、壯時其の非を悟つて儒に歸し、その濟々たる門流によつて竟に近世儒學就中朱子學派の開山たるの榮譽を贏ち得たのであるが、彼は一般に考へられてゐる如くに純乎た

る朱子學者ではなく、漢唐注疏學に對しては、宋明性理の學を標榜したことに誤りはないとしても、必ずしも陸王をも捨てず、もとより幾多の朱子學的要素を藏しつゝも、寧ろ汎宋學的立場に在つたものといふべきであらう。從つて後世の朱子學派の或者に見る如き固陋偏執に陷ることなく、國學はもとより、老莊家の思想の如きも一概に排斥せず、詩歌吟詠をも廢せず、總べてを打つて一丸として自己の學的組織の中に融合せんとする觀があつた。近世儒學史上に於ける惺窩の意義は、中世的傳統を打破して、文藝復興期の源流をなした點に在るが、彼は學理の確立者としてよりは寧ろ學的態度の決定者として、この榮譽に與つてゐるものと言へよう。その學風の特長は汎く且捉はれぬ所にあつたが、その反面幾分廣淺粗雜の觀なしとしない。併しかゝる傾向は常に啓蒙期に於ける先達に免れぬ所であつて、却つてこの故にこそ德川時代文運の各分野に亙つて清新なる先驅的役割を果したことを思はねばならぬ。尙惺窩の學風は羅山よりも寧ろ松永尺五に傳へられ、この系統からは篤實穩健なる教育家的人材が輩出したことを附言して置く。

註(一) 假名性理が惺窩の著であることに就いては從來誰も疑はなかつたがその序並に跋と認められる部分を除いた本文とほゞ同一内容をもつ一書、而もその書の刊行の方が現存の假名性理の最初の版（元祿四年）よりも古い一書（慶安三年刊）が撰者名を缺いた儘「心學五倫書」の標題下に傳へられてゐる。心學五倫書に就いては、熊澤蕃山の集義外書卷三に據れば、嘗て蕃山の作に擬せられたことがあり、蕃山自身その事實に非ざることを辯明してゐるのである。この事實は假名性理が果して惺窩の著なりや否やに關

して尠からぬ疑問を投げかけるものである。筆者はまだ之に對して確定的論斷を下し得ぬのを遺憾とするが、今は唯假名性理に關しては疑問のある點を報告するに止める。詳細は國民精神文化研究所刊行の藤原惺窩集卷下解題の項を參照され度い。倚千代茂登草と稱する一書は後人の改題にかゝり、內容は全く假名性理と同一である。

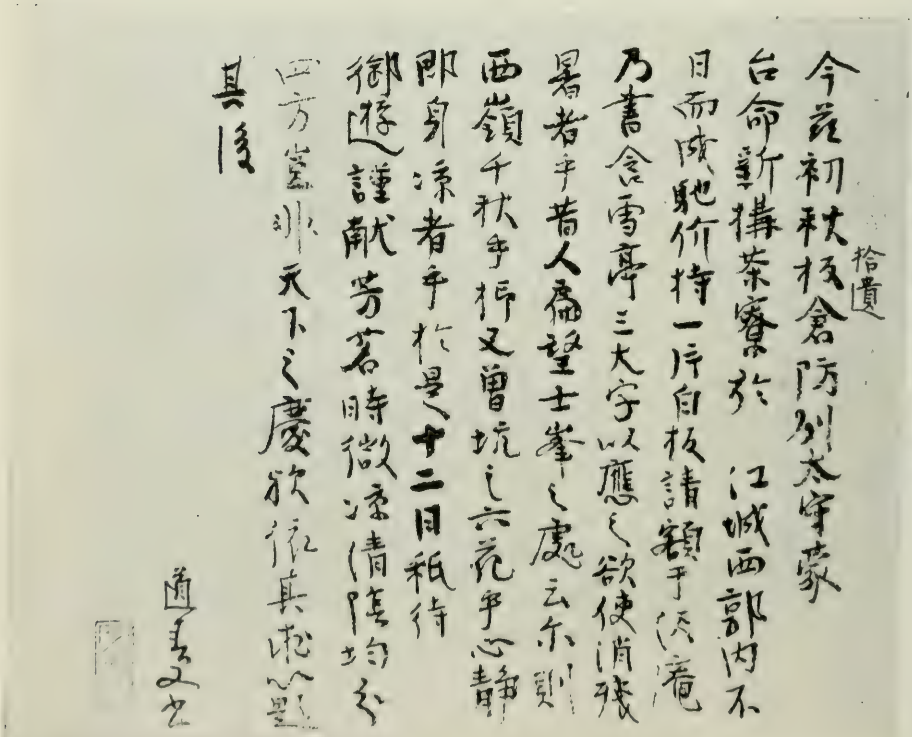
(二)(三)　惺窩の編著に逐鹿評、寸鐵錄なる書があつたことは、惺窩の高弟菅得菴の續惺窩文集序に「顧寸鐵錄・逐鹿抄若干紙、爲二初學蒙昧一而發揮、別行二于俗間一。」とあるのを初め、林羅山著と傳へられる梅村載筆（人卷）に「惺窩經書の語を三十餘條ぬきて、假名の注をして小册子となし、寸鐵錄と名づけり、……又大學の假名抄をして逐鹿評と名づく、云々」（村井量令編群書備考にも是とほゞ同一記事見ゆ）とあるによつても知られる所であるが、實物はこれ迄不明の儘殘されてゐた。然るに寛永七年刊の逐鹿評二卷（東京文理科大學附屬圖書館所藏）並に寛永五年刊の寸鐵錄二卷（帝國圖書館、內閣文庫等所藏）は、梅村載筆の記事と全く符合するので、この二書を以て惺窩の同名の著書と認めて差支へないと考へる。詳細は前記藤原惺窩集卷上の本文並に解題の項を參照されたい。

(四)　惺窩が博學の士であつたことに關しては、羅山の「(惺窩)出二入於釋老一、閱二歷于諸家一、兼二習日本紀萬葉集歷代倭歌詩文等一、其間讀二聖賢書一、而後棄二異學一醇如也。」（惺窩先生行狀）林東舟の「惺窩先生……九流七略、六藝百家、洎我國史家乘、及西域迦維之書、南蠻耶蘇之法、無二書之不一レ讀、無二義之不一レ通、無二理之不一レ窮、博聞强記、無下天下抗二其衡一者上也耶。」（惺窩文集跋）姜沆の「其爲レ學也、不レ局二小道一、不レ因二師傳一、因二千載之遺經一、繹二千載之絕緖一、深造獨詣、旁搜遠紹、自二結繩所一レ替、龍馬所レ載、神龜所レ負、孔壁所レ藏、迄二濂・洛・關・閩・紫陽・金谿・北許・南吳・敬軒・敬齋・白砂・陽明等性理諸書一、靡レ不二貫穿馳騁洞念曉析一、一切以下擴二天理一收中放念上爲二學問根本一。」（文章達德綱領序）といふ評言を參考すべきである。

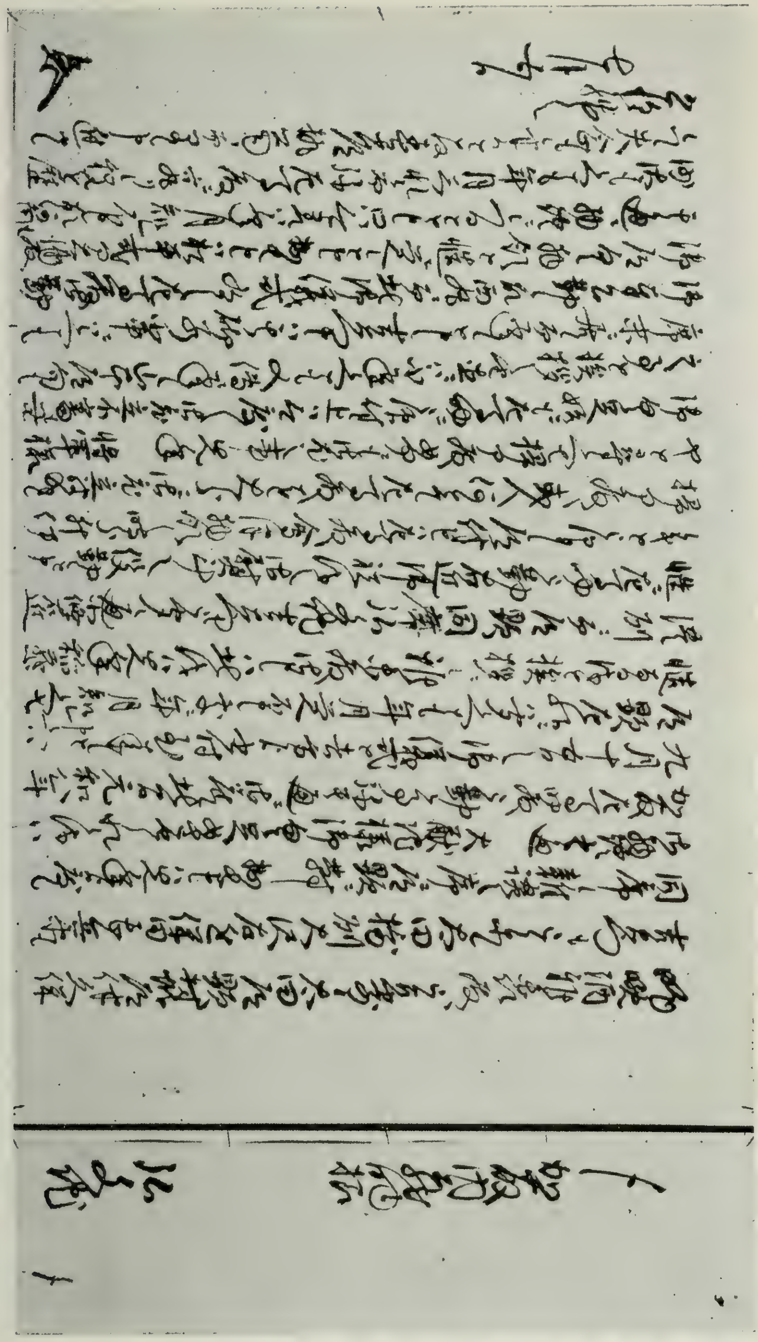
(五)　羅山林先生文集卷二所載、羅山が惺窩に知を求めんとして、惺窩の門人吉田玄之（素菴）に所見を寄せて、間接に惺窩の敎示を得んとしたもの。




林　羅山肖像（林　暐氏藏）


今茲初秋板倉防州太守家
台命新搆茶寮於　江城西郭内不
日而成馳价特一片白板請額于[illegible]
乃書含雪亭三大字以應之欲使消殘
暑者乎昔人爲望士峯之處云爾則
西嶺千秋乎[illegible]又曾坑之六花乎心靜
即身涼者乎於是八月十二日祇待
御遊謹獻芳茗時微涼清陰均於
四方寔非天下之慶[illegible]
其後

林　羅山筆蹟（濱野知三郎氏藏）



林春齋書狀（子爵加藤克明氏藏）

# 林羅山と本朝通鑑

平野彦次郎

林羅山、名は忠、一に信勝といひ、字は子信、通稱は又三郎、後薙髪して道春と稱した。天正十一年八月京都に生れ、明暦三年一月二十三日江戸に卒した。年七十五。羅山天資聰敏にして、十三歳の時既に唐宋の詩文を讀み、東坡全集を市に求めて、其の全部に自ら朱點を加へたといふ。

其の學は洛閩を主とすれども、漢唐の舊注より旁ら陸王に及び、其の他諸子百家渉獵精通せざるはなく、殊に我が國の典籍を究め、文學傳記より有職故實に及ぶまで、能く之に通曉し、强記博覽、古今稀に見る所である。随つて文を作り詩を賦するに當りても、筆翰流るゝが如く、千言立ちどころに成つた。

其の書を講ずるや、音吐朗爽能く文義を明晰にし、人の疑を質す者あれば、多忙匆卒の際であつても、諄々詳悉して倦む所を知らなかつた。殊に著述豐富にして、經史子集に關する者、即ち所謂儒者

の領域に屬する者は申すに及ばず、我が國學に關する者に在りても、或は神道、或は有職の類より、文學書の解釋に及び、更に國史又は系譜の編纂等、其の數實に百七十餘種に達して居る。

羅山は實に學者として一代の英傑で、能く江戸三百年儒學の基源を開き、子孫長く其の文權を掌握したのであるが、それには頗る好運に惠まれた點を見逃すことは出來ぬ。

第一は時運に際會したことである。彼の藤原惺窩は、實に羅山の恩師で、其の功績の著大なることは、物徂徠が「世々學宮に尸祝すと雖も可なり。」と稱讃した通りで、德川時代最初の學者としては、必ず惺窩を推さねばならぬ。然し惺窩は、大阪夏の役を距ること僅に四年、元和五年を以て五十九歲にて歿した。隨つて其の一生は、主として風塵未だ收まらず、人心動搖の際に在つて、學を好むの諸侯士大夫と雖も、未だ安んじて力を文事に專にするの餘裕は無かつた。

然るに羅山は之に後るゝこと三十八年で、明曆三年まで生存して居た。馬上を以て天下を取るも、馬上を以て天下を治むべからず。德川氏の諸侯を鎭撫し、民庶を懷來するには、文教の力に待つべきは當然で、家康も秀忠も此の點には大に其の意を用ひた。而して羅山は和漢兼該の學を以て、恰も此の文運興隆の時機に際會したのである。而も七十五歲の長壽を保ち、家康秀忠より家光家綱に至る四代に歷事し、或は朝儀を創し、或は律令を定め、或は外國文書を草する等、文筆學事に關する貢獻は

言ふに及ばず、或は老中と共に將軍の座側に召されて樞機に參する事もあつた。かくして遂に牢乎として拔くべからざる地位聲望を得たのである。

第二は一門に俊才を出したことである。伊藤仁齋の子に東涯あり蘭嵎ありて、能く堀川學の流派を開いたが、羅山の門は更に盛んであつた。

先づ羅山の弟東舟（名は信澄、通稱は弘一郎）は、羅山と同じく惺窩の門に遊び、博學洽聞、和漢の書を獵涉し、兼ねて和歌を善くし、家康及び秀忠に仕へて、諮詢ある每に補裨する所があつた。羅山に先ち五十四歳にして歿したが、林鵞峯は之を程明道程伊川の兄弟に比して居る。而も明道は年五十四で東舟と壽を同じくし、伊川は七十五歳で羅山と壽を同じくして居るのも、誠に奇緣といふべきである。

羅山の子四人、長子名は叔勝、幼にして穎悟、羅山大に望を屬したが、十七歳で夭折した。次子も亦早く殤した。第三子は卽ち鵞峯（名は恕、春勝と稱し、春齋とも號した）で、豪材博識善く箕裘を繼いだ。第四子讀耕齋（名は靖、春德と稱した）も亦博學にして著作多く、大に聲譽があつた。

鵞峯の子二人、長子の梅洞（名は懿、春信と稱した）も亦才學があつた。因りて陳元贇は之を稱美して、

父子齊㆑名、古來稀也、林家三代、秀才相繼、可㆑謂㆓日域美談㆒也。

といつた。父の鵞峯を助けて、本朝通鑑の編纂にも力があつたが、不幸二十三歳にして卒した。其の弟鳳岡（名は戇、初め春常と稱し、後信篤といつた）家學を繼ぎ、豪俊雄邁、一代の碩儒であつた。石川丈山は、梅洞の死せし時左の如く曰つた。

林家多㆓凶事㆒、然命也、頃來門下稍榮、且春常稟性、文章可㆑亞㆓其兄㆒、可㆑謂㆔林家有㆓餘慶㆒、可㆑喜。

以上の如く羅山の一門は、子孫相繼ぎて碩學を出し、而も元和偃武の後、文運興隆の際に在りて、何れも德川將軍の眷遇を得た事は、到底他の學者の企及すべからざる所であつた。且つ其の上野の私邸に奉祀せし孔夫子の像は、遂に變遷して德川將軍親祭の聖廟となるに至り、學問といへば林家の獨占する所なるが如き觀を呈するに至つた。

喬木は風多し。天下の文權を壟斷して勢威が盛んになれば、他よりの非難も自ら加はるのは、蓋し已むを得ぬ次第で、羅山に對しても兎角の批評がある。是等の批評や、羅山の學說事業等に就きて十分の記述を爲すことは、到底僅少の紙數の盡す所ではない。因りて林家にて最も大著述に屬する本朝通鑑に關し、姑く余の疑問とする所を記して、識者の高教を仰ぐことにする。

寛文十年本朝通鑑成ル。水戸光圀卿之を閲シ、朝廷ノ祖ハ呉太伯ニ出ルト云フニ至リテ、卿大ニ愕キ、之ヲ論ズルコト痛切、諸老皆其議ニ服シ、乃チ命ジテ之ヲ削除ス。（内藤耻叟著江戸文學志略）

と、此の說は諸書に散見する所であるが、呉太伯の事は本朝通鑑の如何なる處に記述されて居たか。既に義公の注意によりて之を削除したとせば、今日の本朝通鑑に記載されて居ないのは當然の樣にも思はれるが、朝廷の御始祖に關する記事は、我が國の歷史としては重大なる問題である。かゝる重大なる記事は、縱ひ一部分を削除したとしても、其の痕跡は自ら存すべき筈である。現存の本朝通鑑に就きて虛心に考察せば、或は思ひ半ばに過ぎる者が有るであらう。今左に余の疑問とする所を記述すれば、

**第一、水戸義公が辨駁されたといふ傳說は、如何なる書に基くか。** 安藤年山の年山打聞に曰く

巖有公の御治世、年月忘れたり。慥に聞き合すべし。（本朝通鑑は、寛文十年庚戌成就、此年西山公四十三。）西山公宰相中將にものし玉ひける頃、尾州公光友卿紀州侯光貞卿と共に、朔日年號可ㇾ尋御登城まし〳〵、御對面御悅び申終りて、御息所に退き給ひたるとき、執政の面々本朝通鑑全部をもたせ參らせて、此書成功し侍るまゝ、梓行の命を下すべき由の御事に付て、各位へ知らせ奉るべきとの上意に候と申されければ、各〻珍重のよし御しきたひ有けり。とばかりして西山公、一二卷電覽まし〳〵たれ

ば、本朝の始祖は、吳太伯の胤なるよし書きたるに驚き給ひて、そも〳〵是はいかなる狂惑の所爲ぞや。後漢書以下日本を姫姓の由にしるしたるは、往古吾國亡命の者あるは文盲の輩など、かしこに渡りて杜撰の物語せしを、彼方の者は實にさならんと心得て書傳へたる也。吾國にはおのづから日本紀古事記等の正史あり。夫に背きて外策妄傳によりて、
神皇の統を穢さんとす。甚だ悲しむべし。むかし後醍醐帝の御宇にや、魔僧ありて此流の說を書しをも、制禁まし〳〵て其書を焚すてられしとかや承り、彼厩戸皇子の頃は、學問未熟にありしすら、日出處天子、日沒處皇帝と書て同輩に抗衡せられしぞかし。吳の太伯の裔といはゞ、神州の大寶、永く外國の附庸を免れがたからん。されば此書は吾國の醜を萬代に殘すと云べし。はやく林氏に命じて、此魔說を削りて正史のまゝに改正せらるべし。さは侍らぬかと宣へば、尾紀の兩君もうなづかせ給ひ、執政の人々も、西山公の御確論に伏せられて、梓行をとゞめられ侍りぬ。

年山は義公に仕へて、禮儀類典の編纂等にも與つた人である。されば義公の直話を記した者かとも思はれるが、文中に「年月忘れたり、慥に聞き合すべし。」又は「年號可レ尋。」など曰へるより察すれば、義公に聞いた者とは考へられない。此の文は其の後立原翠軒の西山遺聞にも其の儘引用され、翠軒門下の小宮山楓軒の水戸義公年譜にも之を記して、共に書名を年山紀聞として居る。

年山紀聞は、年山歿後八十八年を經て、文化元年に、橘經亮なる人が刊行した者で、水戸の小宮山昌秀の序文には、「取二年山手書原本一、謄二寫一通一、以贈二橘君一。」といひ、又、其の書に就きては、「其書因屬二一時隨筆一、語渉二疑似一者亦不レ少、皆存二其舊一、不二輙改一レ之云々。」ともあつて、年山手書の原本によりて、疑はしき點があつても皆其の儘寫したと曰つて居る。然るに其の年山紀聞には、本朝通鑑に關する記事は全く見えない。其の記事の見えて居るのは、年山打聞といふ寫本であるが、それにも關せず、引用せし諸書に、皆年山紀聞と書して居るのは如何なる次第であるか。甚だ不審に堪へない。

年山打聞と年山紀聞とは、其の記事に多少の相違があつて、打聞の方は分量も少ない。因りて思ふに、最初「打聞」として書き集め、後に其の不確實なる者は削除し、また新に得たる材料を增補して「紀聞」と改題した者ではあるまいか。されば橘經亮の年山紀聞の跋に、「年山紀聞は世にいふ年山打聞の元本にて流布せしに云々。」とあるは恐らく錯誤にて、日本隨筆大成の年山紀聞の解題に、「もと年山打聞と題し、坊間に流布せしが、佚したるものありしかば、今の書名に改め、云々。」とあるのが正しい樣に思はれる。

さて「打聞」の方は量も少なき故、佚したるを補ひて「紀聞」としたのは、さもあるべき事である

が、其の打聞に記したる本朝通鑑の事が、增補されたる紀聞に漏れて見えないのは、果して如何なる次第であらうか。年山自身が、「只筆のまゝに寫して、老のもの忘れに備へ侍るなり。」といへる如く、本朝通鑑の條は不確實なる點ありて、自身も侍らば、取捨して淸書せまほしくなん。若し餘りの齡に取捨したのではあるまいか。

又湯淺常山の文會雜記には、南郭老の說なりとて、左の如き文がある。

水戶ノ義公ノ、唐ヲ外夷傳ニ立テラレタルハ、誠ノ一見識ト云ベキナリ。スベテ日本ニ唐ヨリ增シタルコト、イクホドモアリ。ソレヲ學者ノ知ラヌモ口惜キコトナラズヤ。百王一姓ヲ中國ニテモ驚タルコトアリト覺ユ。シカルニ春齋ノ本朝通鑑ヲ編レシニ、吳ノ太伯ノ後ナリトイフ說ヲ載セラレタルノ由、刊行ニナルベキトテ京師ヘ見セニユキタル時、公家衆ヨリサツトアリテ、刊行ニモナラズト也。本朝通鑑ハ、其時ノ御老中酒井雅樂頭殿ナドノ世話ニテ、撰シタラバ然ルベシトテ、諸生ヲアツメテ公儀ヨリ二百口ノ俸米下サレ、今其ノ俸米林家ニ殘ルト也。通鑑ハ綱ヲ立、目ヘハ假名ノ書ヲモソレナリニ書出シテアリ。ト聞タルト語ラレキ。

是れも吳太伯の問題ではあるが、非難した人が水戶義公でなくて、京都の公家衆である。これと年山打聞の記事とは、如何なる關係があるかは分らぬが、非難した人が區々になつて居る事は、愼重に考

察すべき點である。元來吳太伯の問題は、當時熊澤蕃山や木下順庵等にも說かれて居たが、羅山の說は、既に出版された其の文集等にも載つて居るので、若し林家を非難せんとせば、それが問題になるといふ事は有りさうにも思はれる。右の文中の「今其ノ俸米林家ニ殘ルト也。」といへるを見るに、編輯の爲め幕府より年々多額の費用を給せられ、更に其の功勞によりて、林家に二百石の加增を賜はりたるが如きは、學者の間には羨望の種にならぬとも限らぬ。それが何かの形にて發露するといふことも、有り得ないのではない。また「目ヘハ假名ノ書ヲモソレナリニ書出シテアリ。」といふが如きは、全く本朝通鑑を見た事のない人の臆測である。尤も同書は完成と共に幕府に藏せられて、一般人が見なかつたのは當然である。隨つて安藤年山も固より見た事はない。通鑑を見れば、果して太伯說が書かれて居たか否か、其の邊の判斷も着くべきであるが、全く書物を見ない爲めに、種々の臆測が行はれたのかも知れない。

**第二、羅山の太伯說は如何なる者か。**　太伯說は南北朝の時、東山の僧圓月之を唱へ、德川時代の初めには之を信ずる學者が少くなかつた。羅山も之に共鳴しては居たが、實は半信半疑である。故に其の神武天皇論に於ては、圓月の說に基きて太伯渡來のことを說き、「其牽合附會雖レ如レ此、而似レ有ニ其理ニ。」といつて居る。既に「牽合附會」と考へながら、又「似レ有ニ其理ニ」といひて、斷然否定も爲し

得なかつた。畢竟兩端を持して居るのである。其の結果國家の公事に關する場合と、個人の研究に資する場合とを區別した。

雖レ然論二于門一者、論二于朝廷一者、古之人行レ之、孔子之作二春秋一、記用二周正一、其告二顏子一、則以レ行二夏之時一、有レ公有レ私、道並行而不二相悖一也、若使三余讀二日本紀一、何必敢爲哉。

卽ち孔子は、個人的に門人と談ずる時は夏正を便とし、天下の爲めに春秋を作る時は周正を用ひて居る。かく公私の區別を立て、兩者相悖らざる樣にすべきで、余も若し日本紀を讀む場合には、決して太伯說は出さぬといふのである。故に神祇寶典序には、

夫本朝者、神靈之所二挺生而棲舍一也、故推稱二神國一、其寶號二神器一、守二其大寶一、則曰二神皇一、其征伐則曰二神兵一、其所二由行一、則曰二神道一。

といひ、我が國體の尊嚴なるを十分に認識して居る。尤も此の文は尾張侯德川義直の爲めの代作であるが、己の意見に反する事を書く筈はない。故に其の神社考序にも、「夫本朝者神國也、云々。」とて同樣の意見を書いて居る。かゝる次第なれば、幕命によりて編纂し、日本書紀を基礎としたる本朝通鑑（羅山の時には本朝編年錄と稱した）に、太伯說を載するとは思はれない。其の上羅山文集には左の文がある。

聞太伯可レ謂ニ至德一、則仲尼之語也、後世執レ簡者、以ニ本邦一爲ニ其苗裔一、俗所レ稱東海姫氏國之類、何其誕哉、本邦元是靈神之國也、何故妄取レ彼而爲レ祖乎、嘗有下一沙門修ニ日本紀一、以ニ太伯一爲ニ我祖神一者上、時天子怒ニ其背ニ朝儀一、遂火ニ其書一、實乎否乎。

誠に當然の論である。是れは其の子鵞峯と讀耕齋とに課した擬對策の問題である。鵞峯擬答の文は鵞峯文集に在るが、最初に圓月の太伯東渡說を理ありとし、最後に「或曰」として之を駁し、

我國開闢以來一姓也、非ニ至治之國一乎、彼勾呉至ニ夫差一、而無ニ噍類一、則太伯不ニ血食一、縱雖レ爲ニ至德一、雖レ爲ニ文王伯父一、不レ及ニ我皇統之久遠一、所ニ以宋太宗稱ニ歎之一也、由レ是觀レ之、我邦上古靈神、實自有レ在焉、何取レ彼哉、古云、君請擇ニ斯二者一、惟君所レ行也。

といつて居る。末尾は孟子の筆法を學んだのであるが、要するに羅山と同じく兩端の說を持して居る。隨つて官命によつて編する本朝通鑑に在りては、其の前編の跋文に、「若夫少康泰伯之事、則異域之所ニ傳稱一、今不レ取焉。」と曰へるは當然の事である。

**第三、本朝通鑑とは如何なる書か。** 本朝通鑑は内部が數種に分れ、最初の神武天皇より宇多天皇まで四十卷を、本朝通鑑と題し、醍醐天皇より後陽成天皇に至る二百三十卷を、續本朝通鑑と題し、之に本朝通鑑前編として神代紀三卷を添へ、又一覽に便する爲め提要三十卷を編し、其の他目錄等合して

三百十巻である。

最初の四十巻は、初め本朝編年錄と稱し、正保元年羅山が六十二歳の時、幕命によつて編し、同年十月十四日に先づ數巻を獻じ、其の後成るに隨ひて捧呈し、年を經て宇多天皇に至り、史料の關係上一時中止した者である。羅山の二子鵞峯と讀耕齋とが之に參與した。其の編纂方針は、羅山の跋に

據㆓舍人皇子紀㆒、提㆓其綱㆒、纂㆓其要㆒、參㆓之舊事古事記㆒、且三書所㆑漏之事蹟、多々雜㆓出於凡家乘別錄稗官野史倭歌之說、方外之書㆒、加㆑之、中華歷代之史書、亦載㆓我國事㆒者間有㆑之、今涉獵搜索、以記㆓於某年某月之下㆒、其所㆓援引㆒者、都七十部也。

とある通り、先づ日本書紀より鈔出して大綱を揭げ、他書を其の下に細注した。

それより二十年後寬文四年七月二十八日に至り、鵞峯が幕命を受けて之を續補することになり、永井伊賀守尚庸を奉行として、十月に標題を本朝通鑑と改めた。其の後七年を經て寬文十年六月十二日に幕府に獻上した。未だ淨寫しない部分が殘つて居たが、奉行の永井伊賀守が京都に轉任する爲め、幕命にて未完の儘獻上したのである。而して同年十月十八日に至つて、殘部の淨寫完成したので、執政久世大和守によつて獻納した。

其の內太伯問題に觸れさうに思はれるのは、前編たる神代紀三巻であるが、其の神代紀は、神武天

皇以下と同じく、日本書紀を其の儘鈔出し、日本書紀に附したる「一書曰」の說其の他諸說を注記してある。而して寬文己酉（九年）之冬（卽ち淨寫完成の前年）、鵞峯の書いた跋文に、左の如くいつて居る。

本朝通鑑前編三卷、以㆓日本書紀㆒爲㆑正、而參㆓校舊事記古事記㆒、辨㆓同異㆒、刪㆓繁冗㆒、以低㆓書之㆒、粗加㆓倭姫世紀、古語拾遺、元元集於其間㆒、聊傚㆓劉氏外紀、金氏前編之例㆒、而附㆓神武紀之首㆒、以尊㆓神國之宗源㆒、崇㆓皇胤之正統㆒、若夫少康泰伯之事、則異域之所㆓傳稱㆒、今不㆑取焉。

此の泰伯說を取らずと明言して居る事は、注意すべき點である。

**第四、本朝通鑑の編纂と水戸義公との關係如何。** 本朝通鑑の編纂に就きては、義公は最初より種々注意を與へられ、鵞峯も亦深く義公の意見を尊重して居る。寬文四年十一月二十八日の國史館日錄には、鵞峯が水戸邸に行きて義公に謁し、種々問答したことが詳細に記してある。今其の二三を摘記すると、義公は先づ通鑑編輯の喜を述べ、更に編輯の趣旨如何を問はれ、鵞峯は之に對して縷々陳述して居る。

義公は更に安德天皇及び後醍醐天皇の事等に就きて、何れを正統とするかを問はれた。是れは實に修史上の大問題で、鵞峯は左の如く答へた。

此是本朝之大事、先父（羅山を指す）嘗於₂大友天武事₁、亦有ᴸ所ᴸ思、然上覽之書、非ᴸ無₂遠慮₁、（中略）馬子弑逆、廐戸不ᴸ逃₂其罪₁、先父想ᴸ可ᴸ記₂廐戸弑₂天皇₁、然於₂上覽之書₁、則不ᴸ能ᴸ如ᴸ意、今於ᴸ某亦然、（中略）今所ᴸ修妄以₂當時帝王之祖₁爲ᴸ僭、以₂南朝₁爲ᴸ正、則書出之後、未ᴸ知₂朝議以爲₂奈何₁、是非₂公命₁、則所ᴸ難₂私議₁也。（下略）

是れは學者として見識に乏しい感があるが、又一方よりは、「個人の著書でないから勝手に自家の意見を加へない。」といふ愼重な態度とも見られる。隨つて其の私見たる太伯說の如きは、固より用ふる筈はない。鵞峯は又

若夫國老執政、如₂君侯₁（義公を指す）、知₂倭漢先例₁、則余亦可ᴸ開ᴸ口、今以₂如ᴸ此事₁、妄與₂權臣₁議、則此度編修半途廢、亦不ᴸ可ᴸ知也。

於₂筆誅謹嚴之事₁、則未ᴸ能₂太快₁、然書成而如₂君侯₁（義公を指す）之人見ᴸ之、則或夫知₂某所ᴸ有₂微意₁乎。

の如き事情も考へたのである。又

と述べたるに、義公は莞爾とせられ、更に「我も本朝の史記を修せんと欲す。請ふ道設生順等をして、時々國史館に往きて通鑑編修の趣を見しめん。」と言はれた。それは義公は五年前の明暦三年に既

に撰史所を置きて國史の撰修に着手して居られたからである。其の後も度々面謁して意見を交換し、又八年四月九日には、義公の撰史所を參觀した事もあつた。かく微細なる注意を受くる間に、當時一般に知られたる太伯說には、遂に全く觸れなかつたであらうか。

兎に角前述の如き次第なれば、寛文五年十月六日の日錄に、

今世無ニ着眼之人一、此書成之日、讀レ之可ニ評論一者、水戸相公而已、雖レ不レ通ニ文字一、纔知ニ此書所一以爲ニ重寶一者、姫路拾遺而已、其餘頗雖ニ好レ學之人一、替ニ于國事一、唯是想レ爲ニ重寶一而已、況於ニ不レ好レ學之人一乎、呵々。

といひて大に義公に期待し、本朝通鑑を評論すべきは義公一人のみと考へて居た。然るに其の最も信頼せし義公によつて、最後に致命的の大痛撃を受けたとは、如何のものであらうか。

**第五、若し義公が非難されたとせば、如何なる時に爲されたか。** 羅山が神武天皇紀以下四十卷を獻上したのは、正保元年より翌年にかけての事であるが、正保元年は義公僅に十七歳なれば、固より此の時ではない。されば其れより二十六年後、寛文十年（義公時に四十三歳）に鵞峯が本朝通鑑全部を獻上した時でなければならぬ。卽ち同年六月十二日に大部分を將軍の上覽に供へ、十月十八日に殘編を獻納したのであるが、義公は同年九月初めに水戸に歸られた。そは國史館日錄九月三日の條に、「春常與

春東一、赴二水戸邸一、賀二歸國之暇一。」といひ、五日の條に、「述二歸國之賀一。」とあるので知れる。（彰考館にて撰述せし義公行實に依れば、「十年庚戌、八月就レ藩、十一年辛亥、二月參府。」とありて、一ヶ月の差があるが、嚴有院殿御實紀に、「寛文十年九月朔日、水戸宰相光圀卿、御就封の辭見せられる。」とあるを見れば、國史館日錄の方が正しい。何れにしても九月中旬には江戸に居られなかつた。）さすれば義公の江戸滯在中、卽ち六月十二日より九月初めまでの間に非難されたのでなければならぬ。又非難されて其の爲め出版を差し止められたとすれば、本朝通鑑は元來幕府の事業ともいふべき者で、幕府の重臣が奉行となり、七年間巨額の費用を投じて居た事とて、幕府の編纂關係者及び林家一同に取りても、責任上重大問題で、相當の動搖が無ければならぬ。然るに其の獻納以後の日錄には、少しも動搖の樣が見えないばかりでなく、却て大に得意の狀が滿ちて居る。

同年六月十九日には、「通鑑編輯、累年の勞苦、旣に功を成さんと欲す。怡悦の至なり。是に依りて采地二百石を加賜す。」といふ恩賞の台諭を受け、同日に水戸義公より祝賀の酒肴を賜はつて居る。

而して其の翌廿日には、尾張中將、紀伊黄門（此の兩侯は、安藤年山の打聞によれば、義公が非難されたる時同席せし人々）より賀使が來り、七月十一日には、加賀羽林より賀詞を贈られ、廿五日に

は毛利大膳大夫、細川越中守の賀詞が來て居る。

九月十三日卽ち義公の水戶に歸られた後には、前橋少將來りて、「本朝通鑑成就す。本朝無雙之大部なり。公儀の餘光に非ざれば則ち成す能はず。然れども弘文院（鵞峯のこと）に非ざれば則ち之を作る能はず。云々」の賀詞を述べられた。

又十月十八日卽ち全部完納の日には、

久世大和守告レ余曰、官本淸書、中書、旣備二御覽一了、云々、中書留二御前一、淸書附二御文庫吏三雲氏、淸羽氏一、而納二文庫一了。

とて書籍の始末もつき、又

今日會津中將、歸レ自二會津一、始拜二謁於御前一、及二本朝通鑑事一、云々。

とて、最初より編纂に關係の深かつた會津中將と、本朝通鑑の事を談じて居る。

二十八日には、國史館にて、群僚諸生殆んど三十人が皆集まり、本朝通鑑の竟宴を張り、各詩を作つて祝意を表し、鵞峯は二十首を作り、且つ本朝通鑑竟宴詩序を作り、大に幕府修史の大業を頌揚して居る。

**第六、結語。**　要するに本朝通鑑は、其の着手の初めより義公と詳細なる打合せを爲し、編纂中七

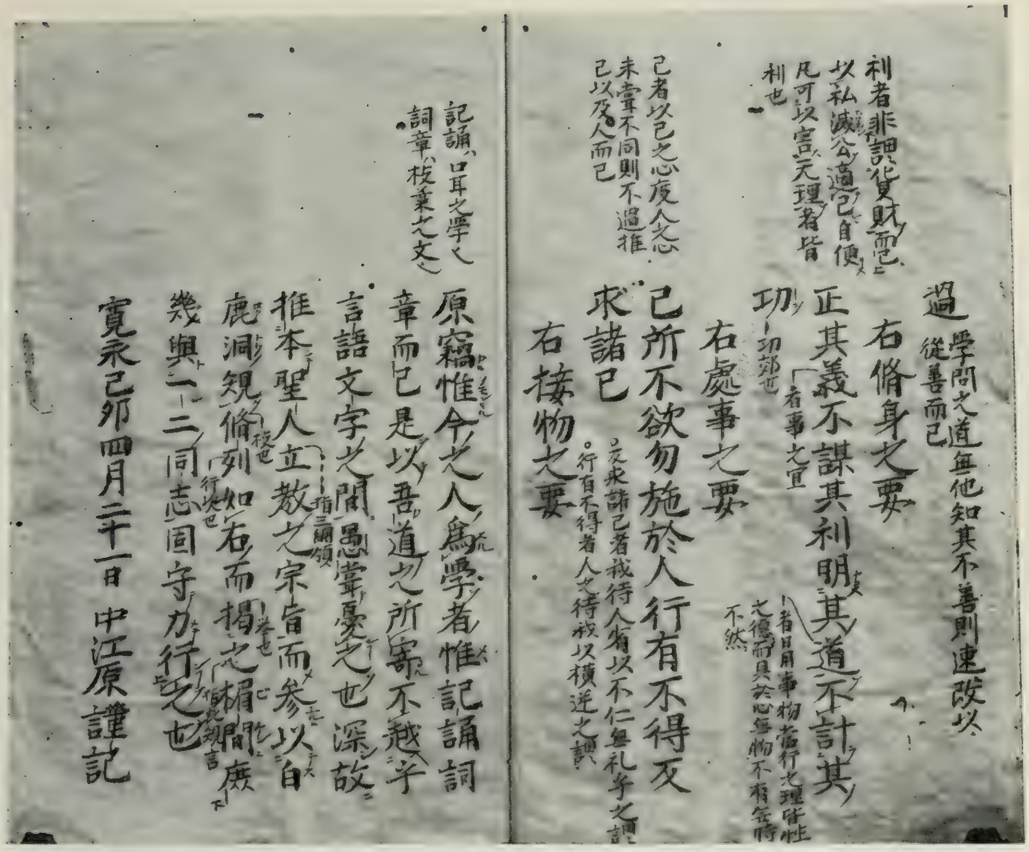
年の間も、度々面會して意見の交換を爲して居る。されば完成の上之を繙閲して、太伯渡來の記事に驚かれたりとの傳説は、甚だ合點が行かぬ。殊に安藤年山が最初「打聞」に記したる義公の事が、整理されたる「紀聞」には却て削除せられて居るのも、益〻合點の行かぬ次第である。

又湯淺常山の文會雜記には、非難者を京都の公家衆として居る。かく話が區々になつて居るのは、此の傳説に確實性を失はしめる者であるが、由來義公といひ、京都の公家衆といひ、當時學者の間に行はれたる太伯説に就きては、必ず不滿であつたに相違ない。隨つて何か事につけて太伯説を攻撃する語が出なかつたとは云へない。然しそれを直ちに本朝通鑑に結び付けずとも濟む筈である。

それに羅山も鵞峯も、縱ひ太伯説に就きて共鳴する所があつたとしても、旣に公私の別を立て、公命の國史には之を採用せぬ事を明言して居る。且つ現存の本朝通鑑に、太伯説の書かれてあつた痕跡が見えぬとすれば、强ひて不確實なる傳説を基礎として、之に非難を加へるのも如何のものにや。



中江藤樹肖像（大洲明倫堂藏）



過學問之道無他知其不善則速改以從善而已

右脩身之要

正其義不謀其利明其道不計其功

右處事之要

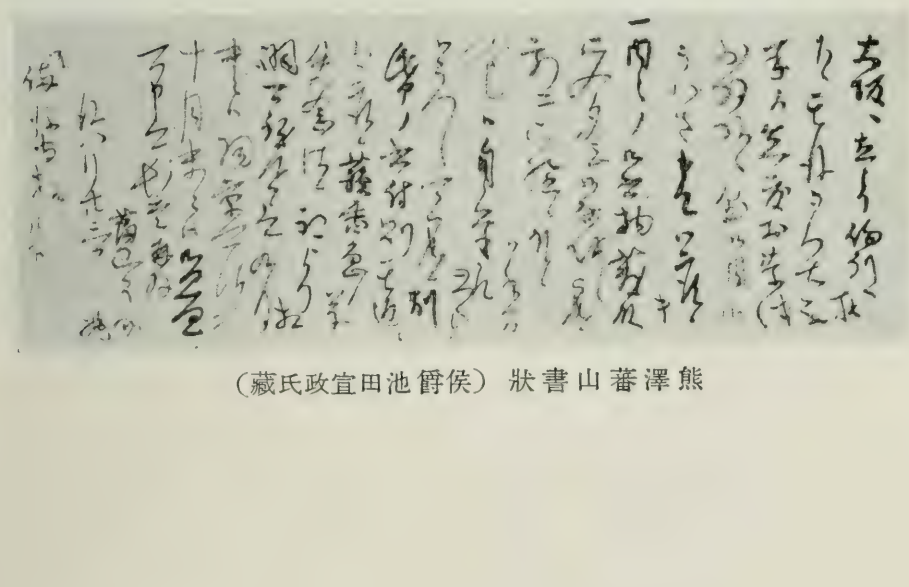
己所不欲勿施於人行有不得反求諸己

右接物之要

原竊惟今之人爲學者惟記誦詞章而已是以吾道之所寄不越乎言語文字之間愚竊憂之也深故推本聖人立教之宗旨而參以白鹿洞規條列如右而揭之楣間庶幾與一二同志固守力行之也

寛永己卯四月二十一日　中江原謹記

中江藤樹筆蹟（萬木氏藏）



熊澤蕃山書狀（侯爵池田宣政氏藏）

# 藤樹と蕃山

柴田甚五郎

## 一　緒言

藤樹と蕃山とは、有名なる師弟關係にある先哲なることは世人周知の事である。併し此の師弟關係を結ぶに至つた事情は、馬子の美談に基くものとして知られて居るが、近頃熊貝遺事（著者不明、寫本）を見るに、

夫よりまづ武士の當務なれは馬に乘鐙を握り劍を試すの術を始として、軍旅の法を學ひしか大道を知らすしては益なからんと思ひ經書の講席を求めて是を聞く。然るに世上師友の教る所學處皆文學言句のみにして己に益なき事を憂ひ或日諸生去りたる跡に殘りて心術の取入を示し給はん事を請ぬ。其の上思ふ處を擧て訂（タヽ）しよまん事を欲するの旨を告く。講師の曰吾子初めて來るよりし

て其容貌志氣常人ならすと思ひしに今日果して其志を知れり。今の問處誠に肝要事也。されとも我は只文字訓詁を學とし其の說の是非を論して明らかならんを欲するのみ。心術徳行の工夫においては甚疎也。されは此問に當つて答へる所を辨へず。蓋し世を褊（サミ）するに似たれども何れの席に臨みたまふとも大かた我にひとしかるへし。爰に中江氏といふ人あり。其學如何といふ事を知らすされとも心術を主とすと云ふ。吾子の望む所に當らん者は此外に在やと近江の小川といふ處に居處士なりと答ふ。さらは其元へ參り侍らんとて小川に至り藤樹の高弟中川權左衛門に便り相見して業を受くると也。

とある。この事は蕃山が二十歳の時、備前侯の近習を辭して、近江の桐原で二三年文武兩道の修業をして居た時代である。其の此の塾師と蕃山との眞面目なる態度は誠に敬服の至りである。私は先年近江國蒲生郡桐原村の蕃山苦學の地を調査した事があるが、其の當時、此の地に五山の僧の別莊があつて高僧が居られた樣で、蕃山はこれに就いて勉强されたとの傳說がある。これ等が前記の消息を物語つて居るのではあるまいか。馬子の美談と相俟つて紹介する次第である。蕃山が藤樹に入門したのは寛永十八年で、藤樹三十四歳、蕃山二十四歳の時である。蕃山は集義和書に、

廿四の七月高島に行て、中江氏に逢て、うたがはしき事をとふ。歸て又九月に高島に行て、來年

四月まで居て孝經・大學・中庸を學ひき。

と記して居る。蕃山が藤樹の許に直接學んだのは僅か八箇月間で、其の間主として、孝經・大學・中庸を學んだのである。藤樹は其の後も書翰等にて熱心に蕃山を教育して居た。蕃山も又、藤樹を尊敬して藤樹の心傳を受け、藤樹の歿後も三年の心喪を實行し、毎年墓參して、藤樹の遺族を救助し、藤樹の心傳を後進に傳へた。今此の兩者の書翰等の記錄を見れば、其の師弟の情誼が如何に親密であつたかが察せらるゝのである。藤樹と蕃山との師弟の情誼は全く精神上の親子である。洵に天下後世に傳ふべき師弟道の模範であると思ふ。扨て此の藤樹と蕃山との師弟が相俟つて我國文化に貢獻した功績は實に偉大なるものである。其の學は、陽明學を信奉してゐたので、當時德川幕府からは異學者として取扱はれ、爲政者より政治的壓迫を受けた事もあるが、其の學德は內面的に全國各階的に普及して居た事は、今日發見された資料によつて明瞭なことである。此の學を世人は心學・陽明學・王學・實學又は江西の學などといつて居る。其の學徒は藤樹の學を「藤樹學」、蕃山の學を「蕃山學」と呼んで居るが、この藤樹學も蕃山學も我國獨特の日本學であると信ずる。今藤樹と蕃山の題下に於て其の學德の一端を紹介しようと思ふ。

## 二　中江藤樹

### (一)　小　傳

中江藤樹、幼名は原藏。諱は原。字は惟命。通稱は與右衞門。默軒又は顧軒と號した。學を藤樹の下に講じたから世人は藤樹先生と稱し、後近江聖人と尊稱した。慶長十三年（皇紀二二六八後陽成天皇、德川秀忠將軍の時）三月七日近江高島郡小川村（今の青柳村上小川）に生れた。父は中江吉次、母は北川氏、名を市といつた。九歲の時祖父吉長に從つて伯州米子に行き、翌年豫州に移り、十一歲の時、大學を讀み感奮して聖人たらんとする志を立てた。

これより和・漢・儒・佛・道等の書を讀み、十五歲の時、大洲侯に仕へ益〻文武を兼修した。二十七歲の時、母の爲めに致仕して故鄕に歸り、孝養の傍ら學を講じて學徒に授け村民を敎化した。其の學始めは朱子學を主としたが、後、王學を學び、一家の見を以て子弟を敎育した。其の學德遠近を感化し、近江聖人と尊稱せらるゝやうになつた。慶安元年八月廿五日病を以て歿した。年は四十一。村民は深く哀悼して小川村玉林寺の側に葬つた。其の後、門人村民等相謀り家塾藤樹書院に祠堂を設け、年々祭祀を營み、同志の參拜が頗る多かつた。寛永九年、光格天皇より特に「德本堂」の號を賜ひ、

明治四十年九月二十三日正四位を贈られ、大正十一年五月四日縣社に列し、藤樹神社と稱して朝野の崇敬が甚だ厚い。門人には、熊澤了介・淵岡山・中川貞良など多數あつた。而して其の道統は近江・京都・大阪・伊勢・江戸・會津・岡山・熊本・石見・伊豫等殆んど全國に及び、我國文化史上特筆すべき功績がある。著書には、大學補拙・孝經啓蒙・翁問答・大學解・中庸解・大學考・論語解・鄕黨啓蒙翼傳・鑑草・文錄・書翰・捷徑醫筌・神方奇術・詠草・古本大學全解・古本大學旁訓・首經考・孝經考・四書考・讀四書法・大學序說・圖說・中庸續解等がある。これは大體藤樹先生全集に收めてある。尙ほ最近に至つて、後生物語・藤樹先生議論覺書・書翰等の著作が發見された。

(二) 學說

中江藤樹の學說は、聖人たらんとする理想を實現するために唱道せられたもので、其の時代を反映したる藤樹の人格の顯現である。其の學說の淵源はもとより藤樹の遺傳的天性と其の自然的社會的環境であるが、其の師傳及び讀書等によりて得たる思想と其の生活そのものより得たる體驗とにより漸次發達したものである。而して其の發達の過程は幾多の變遷を經て居るが之を其の事蹟及び其の思想の上より大體左の四期に分けることが出來る。

(1) 家訓時代　此の時代は出生より十歲位まで、藤樹が父母、及び祖父母等の家訓を受け、其の感

化によりて活動せられた時代である。

(2)　朱子學時代　此の時代は十一歳から三十二歳位迄、和・漢・佛・道等の百科の學を修め、主として朱子學的儒教の思想によりて活動せられた時代である。

(3)　陽明學時代　此の時代は三十三歳より三十八歳位迄、主として陽明學的儒教の思想にて活動せられた時代である。

(4)　藤樹學時代　此の時代は四十歳より四十一歳の臨終まで、陽明學的儒教の思想より更に進んで日本精神を以て儒・佛・道等の思想を調和統一し、藤樹獨特の思想信念を以て活動せられた時代である。

以上は便宜上、大體の思想發展の過程を述べたのであるが、要するに初め家訓及び朱子學的なる他律的、格法的、宗教的な學風であつたが、中頃陽明學的なる自律的、自由的、哲學的の學風となり、最後に哲學的根柢に基く宗教的、日本的な藤樹獨特の學風となられた。これが藤樹學の思想發展の概要である。

藤樹の學は聖人となる目的を達成する爲めに唱道せられたものであるから、其の全體が廣義の道德說となるのである。故に宗教哲學の思想は道德の基礎となるためで、教育・政治・經濟・文武・醫學

の諸思想は其の應用と見てよい。まづ藤樹が學問につき如何なる見解を持つて居たかといふに、其の文集に學と題して、

學者覺也、不レ學則迷睡昏々、學則明覺惺々、若學而不レ悟則與二不學者一、何以異哉。

といつて居る。尚更に進んで、

在レ我無盡藏、自有二無價珍一、號レ之曰二明德一、通二天地與一レ神、其爲二至寶一也、天下更無レ倫、學在レ明二明德一、天下第一事、眞樂於レ此得、人間第一義、天下學多端、人不レ知二此理一、至寶與二眞樂一、人之大欲存、如識二得此意一、必可二學而掄一、擧レ世有二此惑一、辨レ之有二師友一、辨レ惑以立レ志、趣向必不レ謬、切磋無二間斷一、下愚得二大知一、克積二百倍功一、不肯躋二聖地一、況中人之資、奚爲暴棄安。

といつて居る。要するに藤樹の學問は人たるの自覺を得ることで、人間天賦の明德を明かにするにある。これが天下第一等、人間第一義である。併しこれを實現するにはまづ聖人たる志を立て勤勉切磋するにあるとするのである。故に藤樹は學問をする第一歩として立志の必要を說いて居る。これは學問の目的を人格の實現にありとし、人格教育を主張するもので其の當を得たものであると思ふ。以下藤樹の思想の發展をたどり、晩年に於ける藤樹の根本思想の一端を紹介しよう。

藤樹は初め人間の生きて行く眞の道を求めようとしたのである。その熱烈なる求道心は内面的に精

神的に生命がけの勇猛心を以て進んだのである。藤樹が斯くする所以は藤樹自身の天性と當時の社會的環境の動きから來たものである事とを考察せねばならない。藤樹は幼少の時、實父母・養父母の家訓の下に武士になることが人の目的であると考へて武藝を始め、讀書も勉强したのであつたが、種々なる體驗を積むうちに、この目的に大なる疑問を持つやうになつた。藤樹十一歳の時、大學を讀み、

自₂天子₁以至₂於庶人₁、壹是皆以ᴸ修ᴸ身爲ᴸ本。

といふ句に至つて大いに感悟し、人の目的は聖人になることであると自覺し、此處に聖人たらんとする志を立てたのである。

卽ち藤樹は、人は人の行ふべき道を行つて眞に幸福に生きること、卽ち聖人となつて生活して行く事が、眞の幸福であると云ふ悟りの端緒を得たのである。

次に藤樹の念頭に浮んだ問題は、然らば聖人とは如何なるものか、聖人となる目的を達するには如何にすべきかと云ふことであつた。藤樹はこれが爲め苦心煩悶、刻苦勉勵して之を解決しようと務めた。そしてそれが爲め、和・漢・佛・道等の百科の學を修め、種々なる體驗を經たのである。斯くて幾多の難行苦行、幾多の變遷を經て人生の目的を悟つたのであるが、その思想信念の進路を察するに、始め先づ朧氣ながら吾の觀念より出發し、吾の本は親である。親の本は天である。天が親を生み、親

が吾を生んだものとして「天」と「親」と「吾」とは渾然一體のものと考へ、こゝに道德の基本を宗教的、哲學的なる高遠なる思想信念に求むるやうになつたのである。故に藤樹の道德説は、宗教的、哲學的、道德説と稱すべきものである。故に藤樹の學説に於ては、其の所謂天（神・皇上帝・太乙神・太虛等は天と同意義）孝（親・愛敬孝と同意義）良知（吾・眞吾・明德・中・誠――等は良知と同意義）とが根本思想である。この天・孝・良知は三位一體の關係にあるも、其の所説を便宜上、天・孝・良知に分けて、其の思想信念の一端を紹介することとする。

(1) **天命説**　藤樹は先哲の説に因みて自己の信念を顯はして天を主宰的天とし、神・皇上帝等と稱し、此を天地萬物の主宰者であると信じて居られた。併し主として天の名稱を用ひて居たから天に關する主要なる文獻を紹介しよう。

○おのつから　なるをなすへき　ことわさの　中にそなはる　天津ことわり（天）
○たまものは　人の勞ひ（ワヅラ）かしこくて　人の道なき人の行するゑ（恐ニ天命ニ）
○おのつから　四つの海　我身なれは　一向好み問ふ天つ道
○常なれや　常の心の　月すみて　くもれははらふ　太虛（オホソラ）の風
○あそひゐて　心ひとつに　かちぬとも　かちてかたれぬ　天津理（コトワ）り。

と述べて天の廣大莊嚴、玄妙神聖にして天人合一、四海同胞、天地運行の意を示して道徳の實行を教へてゐる。

又欽二崇天道一と題して「遠而天地之外、近而一身之中、隱微幽獨中、細微之事、無レ不レ有二天道一、天道者造二我形一、與二我性一、與二我衣食一者也、民之父母也、君也、以下事二君親一之道上事レ之、則此之謂二欽崇一、欽崇之道、無レ他、止二於至善一而已、欽崇則降二六極一、惟影響、可レ畏、々レ々。」と述べて天道と父母と我との關係の一體的なる意義及び天道を崇敬すべきを教へて、道徳の實行を促してゐる。

藤樹書院の學則である藤樹規の中に「畏二天命一尊二徳性一」といふ一項がある。是れは藤樹の學派を示したのである。

又藤樹の號たる顧軒は「書經」太甲篇及び「大學」の顧諟天之明命より出で、諱の惟命は「大學」の「康誥曰、惟命不レ于レ常」に基いてゐる。又藤樹は毎朝天拜せられたことが傳はつて居る。また藤樹の文獻を見ると、天則・天機・天眞・天道・天徳・天君・天命・天學・天錄・天教・天性・天事・天職・天君・天年・天光・天神・天爵・天祐等を述べて居られる。これらは藤樹が天の思想信仰に厚かつたかと云ふ事が窺はれるのである。

(2) **孝徳説**　次に親を孝と結びつけ、孝又は、大孝、小孝、敬愛等と稱して居るが、主として「孝」

と稱して居られるから、この名稱のもとに主要なる文獻を紹介しよう。

其の文集中に、「孝是三才一貫之端的只在二孝者裡一、而唯以レ事レ親一事一噫。」とある。又翁問答の中に、「人は天地の德、萬物の靈なる故に、人の心と身に、孝の全體皆そなはりたる故により身を立て道を行ふが孝の全體なり。」と述べて居る。又

此の孝をよく行ひ、誠ある人は天道これを助け、惠玉ふゆゑに、人もこれを感敬す。百福のあつまる所にして子孫これによつて繁昌す。（鑑草）

等と述べ、其の親子の親しき關係を具體的、道德的に生きるものとして、實際的に自然的なる親子の愛敬の人情より說いて居るのは、實に適切眞實なる教說である。尚ほ藤樹は進んで孝と題して

鈞是順レ親養レ親、或爲二大孝一、或爲二小孝一何也、人之一身有二大體一、有二小體一、以二大體一順レ親養レ親、爲二大孝一、順レ親養レ親、爲二小孝一、蓋身體髮膚、此小體也、仁義禮智、此大體也、身體德性皆受二之父母一、而非二己所一レ私有一、本皆父母也、故以二情愛一謹レ身、則順レ親亦以二德性一、所レ謂順二靈明之父母一者也、是以孝經以二嚴父配天一爲二大孝一、中庸以二明善誠身一爲二順レ親之道一、曰、嚴父配天、曰、明善誠身、只是在レ明二明德一而已矣、明德之愛敬、寂然不レ動、感而遂通二天下之故一、無レ以二卑凡一餘缺上、不下以二窮達一加損上、但爲二氣習情欲一所レ蔽、則不三啻不レ通二天下之故一、於二其親一亦不レ能

レ通、然幸其本體之明、有下未二嘗息一者上、學者必可下知二其止一、而芟二除舊習之葛藤一、消二化情欲之邪火一、以復中本體之明上、此之謂二大孝一焉、此乃天下第一等事、學問第一義也。

と述べて、大孝小孝の意義を明にし、孝は天下第一等の事、學問の第一義なることを說いて居る。

又藤樹は、

愛敬順時百事公、驕爭除後萬殊通、立レ身行レ道配レ天敬、正與二神明一同二此中一。（送二横山子一書）

孝德以レ中爲二身體一、无レ偏无レ倚至誠神、一毫意必三千罪、努力戒懼不顯眞。（送二中川子一（謙叔）書）

と述べて、孝の哲學的・宗教的意義を說いて孝道は眞の人間生活の生命なることを明にしてゐる。

(3) **良知說**　次に吾を眞吾と稱し、眞吾は良知・明德であるとし、又獨・中・誠等と稱して居るが、主として良知と稱して居るから、この名稱のもとに、文獻中の主要なるものを紹介しよう。

文集の中に、

心之良知、斯之謂レ聖、當下自在、聖凡一性。

天上無心生二泰陽一、人間有意嘉二新政一、人間天上本無レ異、日用良知是至誠。

外にねかふ百の思案を打捨てよ、良知の外に利も德もなし。

と述べて、良知の聖凡一性、天人合一の意義は良知以外に賴るべきことなきを敎へて居る。

藤樹は「獨」の殊稱に於て、良知の貴重なることを次の如く述べて居る。

蓋獨者良知之殊稱、千聖之學脈也、獨字之義有多端焉、萬物之一原、故謂之獨、其尊無對、故謂之獨、大虛寥廓、更無別物、而三才一貫、故謂之獨、在我自己一人之所知、而人所不知、故謂之獨、貌言視聽思接物應事一於此、而無別路、無別事、故謂之獨、卓然獨立而無所倚、故謂之獨、由己而不由人、故謂之獨、眞實而不二不三、故謂之獨、以萬物爲一體、故謂之獨、不間物我而無二心、故謂之獨、動靜語默喜怒哀樂、一樣景象而無以異、故謂之獨、聖凡一體、生死不息、故謂之獨、貧富貴賤禍福利害毀譽得喪、處之一、故謂之獨。(送國領子之一部)

と述べて最も哲學的の意義を發揮して居るのである。

藤樹は又

○蓋初學の士良知を安身立命の地と定め、嚴に志を立、勇猛に己に克ちて一毫も艱難苦勞を憚るべからず。己に克に當ては、其身命を顧惜すべからず。況其他の小利をや。所謂殺身成仁の義なり。眞志立て良知を安身立命の地と定れば氣に帥有て昏倦懶惰の病なし。(送岡村子書簡の一節)

「學に志す者良知を明にするを以て、主意頭腦とすること簡要の由に候、良知を明にするを以て主

意頭腦と仕る時は工夫を仕候も立居も食を食するも、主親に事ふるも朋に交るも其外應事接物皆往として良知を明にするに非ずといふことなく候。（與二某氏一）

○良知卽善也。良知に致れば善當に心の主たり——良知を心の本體として良知にそむくを惡の本色とする精義をよく御辨へ可レ被レ成候。（答二尾子一）

と述べて、良知を安心立命の地と定め、安心立命によりて眞意を立て、決死の勇猛心を以て、主親に事ふるを始めとし、衣食住應事接物等、日常生活の實際に於て良知を明にし、良知に致りて善なる道德生活を營むべきことを敎へて居る。藤樹は知止歌を、

萬欲紛擾中、止體常寂然、小人揜二不善一、良知不レ滅レ玄、或閑室靜座、或對レ境接レ人、反二求吾心裏一、時常擇二此眞一、如未レ有レ所レ得、先致二其良知一、良知發見時、愼二思明二辨之一、氣機雖二發動一、仁卽定靜安、時習而不レ罷、遂必有レ所レ觀、見レ之常無レ離、此謂二必有一レ事、不レ用二纖毫力一、存二養眞實義一、學者之通病、氣象與二意味一、毫釐千里誤、其機全在レ此、欛柄已入レ手、須臾不レ可レ離、天君自レ茲立、意念不レ作レ祟、識習漸消化、必復二孩提誠一、誠者聖人本、天地亦此貞、人皆可レ爲レ堯、學脈甚分明、聖神之功化、悉由二此止一生、眞樂常惺々、萬境咸元亨。

を作り、良知を體用一源論の立場より所謂致良知の實際を述べて其の人間生活に肝要なる所以、其の

眞樂を得る義を說いてゐる。これは藤樹の學風を觀るに必要であるから伊勢の藤樹學派の學徒石河定源は知止小解を作りて後學を指導してゐる。これもまた參考にすべきものである。又「良知とは何を岩間のこけむしろきけんのよきにしくものはなし」と述べて、良知生活は簡易なもので、人情の自然に基いて機嫌よく暮すことであることを示して居られる。

以上述べた天・孝・良知の思想は、藤樹の文獻中には時・處・位に應じて、廣狹・深淺・臨機應變に述べて居られる。こゝでは今これを系統的に說明する餘白なきを遺憾とする。

さて藤樹の根本思想である天・孝・良知は渾然一體のものである。卽ち「天」の中に孝・良知の意義が含まれ、「中」には天・良知の意義が含まれ、良知の中に天・孝の意義が含まれて、所謂萬物一體、天人合一の大我の生きた意義を表してゐるのである。是れは藤樹の所謂黙識、神通體驗、體得で悟るべき處である。併し藤樹の晩年の學德より言へば結局良知に歸するのである。良知は天より親が稟け、親より吾が稟けたもので、何人でも、この良知を固有して、この良知でよいと思ふ事を行ふ事が道である。これに反することが道に反することで惡であるとするのである。故に良知は宗教哲學の根底となつてゐる道德の標準である。藤樹は、

良知卽善也。良知に致れは善常に心の主たり云々。良知を善の本體として良知にそむくを惡の本

とする精義をよく御辨へ可レ被レ成候云々。（答二門人一尾子一の一節）

とある。又「能く我本心を明めて良知の好惡にしたがへは心則快にして仰で天に不レ愧、俯して人に不レ恥、福錄隨レ之、衆邪遠レ之。」とある。

又田邊子に與へられたる書中に、

善惡の實體は心上に有て事跡にあらず、一念良知致るを善として一念道に離るゝを惡とす云々。

と敎へてゐる。要するに良知を標準として良知に合する道を行へば善であると共に、眞樂を得、福錄これに隨ふといふのであるから、因果應報福德一致を信じて居られたもので、其の信念は實に熱烈なるものであつた。それは鑑草・詩歌弁に師弟問答・藤樹先生敎化狀等にあらはれて居る。

(4) **當下一念說**　藤樹はこの致良知の卽明明德の思想を更に一歩を進めて「當下（トウゲ）一念（イチネン）」といふ特別の語を以て門弟を敎化して居られる。これは藤樹獨特の晚年の道德的信念で致良知、知行合一等、簡易直截の道德的意義を一括して最も切實に示されたものである。藤樹は當下の句を解して、「とうげ」と云ふ事見在の心を述べて居るが、これは我々の持つて居る瞬間の現在の良知の一念を實行する意味で、卽ちこの現在の良知の一念を實行する中に、天・孝・良知を一體的に實現すること卽ち時間的に過去・現在・未來の三世を通じ、空間的に社會・國家・世界・六合を一體とする大我の本性を實現す

る思想信念である。藤樹はこれを道歌に詠んで、

世の中は一念ならでなかりけり前念はすき後念きたらず。

くやむなよありし昔は是非もなし只管たゝせ當下一念。

ともいつて居る。尚又、

世界唯是當下一念、前念不ㇾ續、後念不ㇾ來、當下良知便是吾人安心立命之地也、一念自己安樂國、一念墮落成二苦海一。（文集）

と述べて居る。これ等は當下一念・當下良知の悟道を說かれたもので、これが藤樹學が最も發達した る思想信念であると思ふ。近江・京坂・伊勢・江戶・會津等の藤樹學派の學徒には多大の感化を與へて居る。此の點は特に肝要な處で、藤樹の所謂、嘿識・心通・體得・嘿證・嘿悟によりて悟るべきもので、言葉や文字であらはす事の出來ない藤樹的學の眞諦である。これは固より天地萬物の實相、人間眞性の要求を述べたのであるが、これを現代的に云へば、天の中にも孝の中にも良知の中にも、宗敎的・哲學的・倫理的の意義があつて、しかも永久的・活動的・一體的の本質がある。普徧卽ち天地萬物・國家社會が日々新に、時々に新に、刻々に新に、永久に進步發展する思想があるのである。人生觀は樂天觀を持つて居た。人生は大安樂であると云ふ事を、文集等に述べて居る。前述の當下一念

の實現の中に大安樂を得るとの精神があるのである。（第一圖參照）

(5) **日本精神說**　以上述べた藤樹の根本思想は元より藤樹の有する國民性の顯現であつて、其の中に自ら日本精神が含まれてゐる事は勿論であるが、藤樹の思想の成熟と共に更に一層日本的になつて來て、敬神の念の切實なるものがあつた。藤樹三十四歳の時卽ち寬永十八年の夏、二三の門弟と共に嘗て伊勢大廟へ參詣せられた其の際に祝詞に準じて作られた詩が藤樹先生遺稿に、

參二拜　太神宮一準二祝詞一

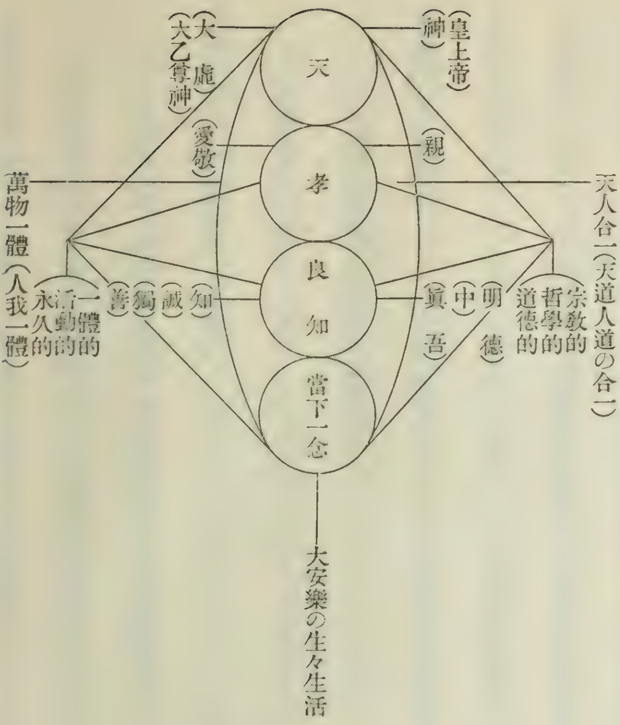
辛巳之歳夏之中、參二拜　太神宮一、以綴二野詩一抒二卑志一。誠恐誠惶謹述二卑懷一、以準二祝詞一云レ爾。

光華孝德續無レ窮。　正與二犧皇一業亦同。

默禱聖人神道教。　照二臨六合一　太神宮。

と見えてゐる。其の眞面目にして敬虔なる態度と、

第一圖　藤樹の根本問題



其の深遠にして熱誠なる敬神思想とは、實に、日本國民の模範とすべきものである。吾人は玆に信念の閃きは萬卷の書にも優るものあるを念はしむるものがあると思ふ。

此の詩の中に　天壤無窮の神勅と八紘一宇の聖勅の御精神を述べられ、殊に其の眞筆の草稿（近江高島郡青柳村萬木家藏）にも、皇太神宮に對して無上の誠敬を捧げられたことが切實にあらはれて居る。此の詩の序に、太神宮の太の字の上を空白にし、詩の結句に太神宮の文字を特に別行に改めて謹書せられたる敬神の心境は實に感激に堪へぬものがある。しかも此の詩の意味が日本書紀の卷一の「此子光華明彩照ニ徹於六合之内一」と相通じて居る點がある。

又藤樹は、其の鄕里、近江國小川邑卽ち今の滋賀縣高島郡青柳村上小川にある日枝神社へは幼少より晩年に至る迄、例年季節毎に親しく參拜せられた事が傳はつて居る。殊に、晩年の事蹟として伊勢の藤樹學派の學徒の著作に係る席上一珍に、

先師曾テ小川ノ邑ノ神明ニ詣ジテ、

天下太平。大道興隆。大道興隆。時和年豐。民安物阜。家皆孝子。國皆忠臣。

ト願ヒ玉ヒテ更ニ門戶ヲ立ルニ意ナシ。只世界中ノ人ノ善ニ向ヲ志願トセリ云々

と記してある。こゝに先師とあるは藤樹の事であつて、藤樹は斯くの如く敬神の念深く且つ天下國家

の安寧幸福を祈願せられたのである。この思想信念は全く我國の八紘一宇の理想を實現する日本精神であつて、其の祈願の言文が如何にも我國固有の道に基く雄大なる平和主義を遺憾なく表現したものである。

忠孝につきては藤樹は忠孝一本の思想で、すべての道徳を說いてある。

君の恩は親の恩に等しくして廣大なる思想なり。忠臣は必ず孝子の門より出つるものなれは孝徳の明かなるものには必す戰陣に於て武邊を勵み武功を立つるものなり。（翁問答）

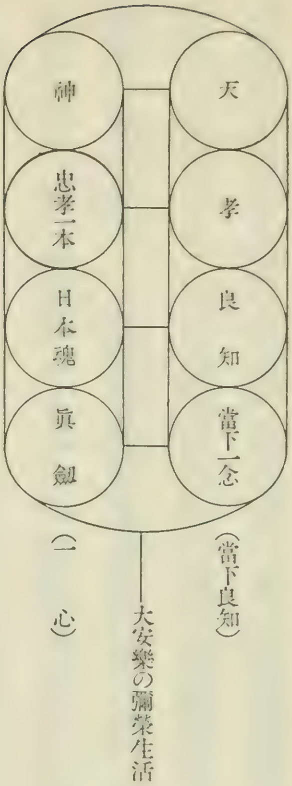
と記してある。孝の方面から忠の方面を見て居るので忠も孝も一體と見て居る思想が窺はれる。尙藤樹は誠意を以て神を敬し祖先を崇ひ君父に奉事すべきことを述べてゐる。

要するに日本の敬神崇祖・忠孝一本・日本魂・誠心の道念は、藤樹の天・孝・良知の思想信念と結合するものであるから、我が祖先敎たる神道及び國民道徳とは全く一致するものである。これは大切なる點であると思ふ。（第二圖參照）

尙終りに申添へて置きたいことは、藤樹は天・孝・良知の信念を無言の宗といひ、これを實現するために自反愼獨・致中和・致其良知・誠其意・愼獨・明明徳・止於至善・致知・取廻し・明良知・樹道・和卽道・吾心卽道・合天理等と臨機應變に自由自在に藤樹の所謂心學の大道を述べ、又實踐道徳

としては立志・勇・謙・忍・忠・孝・勉・權道等を說いて居られるが、其の眞意は、卽ち眞我の本性を實現する活動を爲すことを以て人間生活の眞諦であることを教へたものである。これ等の思想信念を考察すれば、藤樹の學風を窺ふ事が出來る。要するに藤樹の學說を現代的に云へば、主として、宗教的・哲學的・道德說であつて、宗教上には天神の信仰、哲學上では唯心的一元論・理氣一體說・體用一源說で、倫理學上では動機論・良心說・人格實現說・活動說・直覺說、人生觀では樂天觀の立場で、人格の尊重・人類の平等・世界平和を說いて日本人としては日本精神であるべきことを說いて居る。故に藤樹は一面普遍的理論を說いて居るが、他の一面に於ては特殊的に實際を說いて、普遍卽特殊の道德的原理を學德の上

第二圖　藤樹の普遍的なる根本思想が特殊的なる日本精神となり晩年普遍卽特殊の思想となつたことを考案したる圖解。




に實現してゐるのである。

以上は藤樹學の根本思想の概要を述べたのであるが、尚ほ藤樹學の應用としての教育說に於ては人格教育卽道德教育、女子教育、家庭教育、個性教育、情操教育(音樂教育)、勤勞教育、性教育、衞生

敎育等を尊重せしこと、經濟說に於ては明德は第一の寶、金、銀は第二の寶といつて道德的に財寶を運用すべきこと、職業は何人たりとも其の境遇と分に應じて勤勞すべきこと、國產の愛用を勸め、政治說に於ては德治主義の政治を主張し、道德的國家の建設を理想としたること、文武說に於ては文武は一德で、文は武の根、武は文の根、文道を行はん爲めの武道にて、文は車の兩輪の如き關係なれば人は文武の道を兼修すべきこと、醫藥說に於ては著作の、捷徑醫筌、神方奇術等に於て唐宋元明等の醫家の說を參考して醫藥、醫術を說き、婦人科、中風症等を研究して、心身一體の立場より養生の方法を說かれたること、修養論に於ては自己獨特の見解を以て立志、自反―愼獨、意を誠にする工夫、日新の工夫、苦樂、損益、對等法（苦樂利害の計算を以て修養する法）等を述べしこと等である。これらは詳述することが出來ないから遺憾ながら割愛することにする。

## 三　熊澤蕃山

### (一) 小　傳

熊澤蕃山、姓は野尻、後熊澤、又蕃山（シゲヤマ）、諱は伯繼、字は了介、（諸書に良介、了芥、了海と記してある）小字は治郎八、後又助右衞門と稱し、自ら息游軒と號す。世人推尊して蕃山先生又は息游先生と

呼んだ。蕃山は釆地の名で又姓としたことがある。世人兩姓を合して熊澤蕃山と傳へてゐる。元和五年（皇紀二二七九）後水尾天皇徳川秀忠將軍の時京師五條の客舍に生れた。八歳の時水戸に行き熊澤家に養はる。十六歳の時、岡山藩信芳烈公に仕へ、傍ら文武を兼修し二十歳仕を辭し近江桐原に歸りて苦學した。二十四歳の時中江藤樹（藤樹三十四歳）に學び、二十七歳の時備前の池田光政公に仕へ公を助けてよく治國の實を擧げ、名聲海內に知られた。三十九歳の時致仕して、和氣郡蕃山村に隱居し後、京都、大和の吉野、矢田山、山城の鹿背山、播磨の明石の大山寺、下野の古河などに轉住し、到る處講學と著作に努め、晚年幕府の嫌疑にふれ、幽囚中、元祿四年八月十七日病を以て古河城中賴政丸に歿した。年七十三。大提村鮭延寺に葬る。明治四十三年十一月十六日正四位を贈られた。門人は中院通茂、淸水谷實業、北小路俊光、久我右附廣道卿、板倉內膳正重矩、久世大和守廣之、松平金彌生吉、中根次常、山本簡齋等頗る多かつた。

著書は、集義和書、集義外書、古學小解、論語小解、易經小解、三輪物語、女子訓、大學或問、孝經外傳或問、宇佐問答、夜會記、孝經小解、中庸小解、孟子小解、神道大義、二十四孝評、三社詫解、源氏物語外傳等がある。池田侯爵家には世に知られない眞蹟、著作が所藏されてゐる。

## (二)　學　說

熊澤蕃山の學說は本より其の特異の天性と環境とにより、頗る困苦をなめて體驗的に文武を兼修し學は神儒佛道耶等を學んだが、彼は終生眞の君子的の武士となることを理想とし、一家の見を以て一世の師表となつた偉人である。其の普遍的なる思想を述べたものは、天道說、人道說、良知說等で、特殊的思想を述べたのは、日本精神說、政治經濟說等である。其の特色と稱すべきは所謂大道の實義を時處位に活用して日本の道德政治經濟等を說いて之を實行した處にある。故に識者は其學の風を事功派と稱してゐる。而して蕃山は學問を

よく學ぶ者は元來ありつる才知もかくれてなきがことし、何ぞ學問によりて才知を生せんや、學は己が明德を明かにせんと也、才智ありて德をそこなふ者は多し、德の助けとなる者は稀也、學は天眞のたのしみを求めんとす、才知は己の心をわづらはしめ己が身をくるしましむ、學は齊家治國平天下の道也、云々。（集義和書十三）

と述べて學は明德を明にして天眞の樂しみを求むるもので、治國平天下の道であるとして日本の水土に適するやう之を活用したのである。

(1)　**天道說**　蕃山の天道說は元より易の哲學に基くものであるが更に程朱の思想を承け而も之に多

少自家の思案を加へたものである。

□は寂然不動の象なり。○は流行活動の象なり。□は理を圖し、○は氣を圖す。大虛は理氣のみ。天道は至誠無息なり。故に誠字を中に書す。誠は天の道なればなり。其中おのづから元亨利貞の條理あり。是を天の四德といふ。四德もと一理にして無方の神なれども、天地開け形象あらはれ




天道

て後、木は東方に位す。木氣の神を元とす。故に左に書す。火は南方に位す。火氣の神を亨とす。故に前に書す。金は西方に位す。金氣の神を利とす。故に右に書す。水は北方に位す。水氣の神を貞とす。故に背に書す。元理感じ、木氣流行して、萬物生ずるを春とす。亨理感じ、火氣流行して、萬物長ずるを夏とす。利理を感じ、金氣流行して、萬物收まるを秋とす。土は中央に位す、土氣の神を誠とす。しかれども土用は四季に應ずるが故に、四隅に書す。相生ずるの理は序は、木火土金水なり、火は土の母なれば、土は未申を盛位とす。是天神鬼神の造化をなして無盡藏なる道理なり。（集義和書十一）

と述べて居る。卽ち大虛は理氣の動靜によりて成るもので、其の本質は至誠無息であるから、天道は誠である。其の誠の中に元亨利貞の條理がある。これは天の關係であるとし、これを本として萬物造

化の道理を說いて居るのである。併し其の表出する文字より言へば不明瞭なるを免れず、然れども其の後、漸次發展し道の概念に於て

理をいへば氣をのこし、氣といへば理をのこす、理氣ははなれざれども言のこすところあり。ただ道といふ時はのこすことなし、理氣一體の名也。其大に付ては空虛といひ、その小に付ては隱微といひ其妙用に付ては鬼神といふ。天地位し月日明に四時行はれ萬物生ず。みな道よりなれり。其眞は寂然不動無レ聲無レ臭也。これを未發の中といふ天下の大本なり。（作書）

と述べ理氣一體道の妙用を說いてゐる。而して又蕃山は「敬」につき深甚の意義を說いて天道の受用を教へてゐる。これはまた注意すべき思想である。

(2)　**人道說**　蕃山の人道說は其の天道說を繼承して天人合一の立場より論じて居る。其の集義和書六に、

惟此無極の理、二五の精妙合して人となり、明德そなはる、是を性といふ。性中おのつから仁、義、禮、智、信の條理あり。天の元の人にあるを仁といふ。天の亨の人にあるを禮といふ。天の利の人にあるを義といふ。天の貞の人にあるを智といふ。天の至誠無息の眞の人にあるを信といふ。たとへば同じ水のながれあれども、所により川の名のかはるが如し。仁、義、禮、智、信、




| | | | |
|---|---|---|---|
| 父 | 慈 | 子 | 孝 |
| 君 | 仁 | 臣 | 忠 |
| 夫 | 義 | 婦 | 聽 |
| 兄 | 良 | 弟 | 悌 |
| 朋 | 友 | 交 | 信 |

は天理未發の中なり。故に□に書す。喜、怒、哀、樂、は氣の靈覺なり。故に○に書す。惻隱、羞惡、辭讓、是非は仁義禮智の端などいへども、氣に感して聲色にあらはる、故に○に書す。（和書六卷）

と述べて居る。卽ち人は天より明德を禀けて生まれて居る。これは各人の性である。其の性中に仁義禮智信の條理があるとしこれを基として天道より人道の要目を說いて居る。これ又文字の上より見れば不明瞭なるを免がれずと雖も、其の後其の思想漸次發達し、孝の心法に於て更に天人合一の思想を孝道に活用して、

孝は天地未畫の前になり太虛の神道なり、天地人萬物みな孝より生せり。春夏秋冬風雷雨露孝にあらさるはなし、仁義禮智は孝の條理なり、五典十義は孝の時なり、神理の含蓄のところを孝とす、其親を愛するの心は天下にをゐてにくむへきものなし、其親を敬するの心は天下におひて慢

りかろしむへきものなし。愛敬親につかふる一心の上に盡して天地同根萬物一體の性命明かなり。よく一日も私欲亡て天理存する時は其大をたつぬるに外なく其小を見るに內なし、纔に初て仁をいふへし、義は孝の勇なり、禮は孝の品節なり、智は孝の神明也、信は孝の實也、赤子孩提の時孝の理初て親を愛するに發出す、云々。

と述べて孝の宗教的哲學的意義を發揮して居る。其六意殆ど藤樹の孝德說と一致して居る。これ又藤樹の心傳を受けたる事の顯著なるを見るべきである。尙ほこゝに注意すべきは天道說人道說を一貫して信を根本として道を說いて居る事である。これは主として、中庸の思想を受けたものであるが、藤樹の思想とも共通の點を發見する。

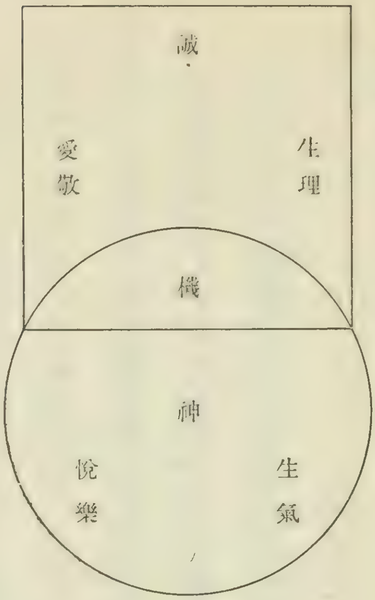
(3) **良知說**　蕃山の良知說は天人合一、理氣合一、體用一源の立場より論じて、最も其の眞面目を發揮して居る。池田光政公自筆寫本に、次の如く述べてある。

愛敬卽生理也。悅樂卽生氣也。生理生氣以二天道一而言レ之。愛敬悅樂以二人道一而言レ之。此天命性道合一之圖也。天人合一理氣合一謂二之機一。機者心之天理而人間是非之鑑也。靜虛而動直、至誠而明達者也。故機以レ誠爲レ背、以レ神爲二耳目手足一矣。體用一源顯微無レ隔。然則機良知乎。良知無レ心、以二愛敬一爲レ心、良知無レ體、以二無欲一爲レ體、良知無レ知、以二無知一爲レ知、愛敬者慈悲無我

之眞、無欲者圓神不倚之中、無知者謙虚神明之靈也。嗚呼愛敬無欲無知者夫靈人乎。心之聖人此謂二之聖人一。此謂二之良知一。故致二其良知一則聖茲得焉。（熊二）

これは池田侯爵家所藏の池田光政公眞蹟の寫本にある蕃山の著作を掲載したものである。蕃山が良知致良知の本質を要領よく示して居る。恐らく蕃山の發達したる根本思想と觀てよからう。この思想は主として藤樹の心傳に多少自己の思索を加へて一家の見を立てたもので、前に述べた天道人道の說を

聖學




天人合一・理氣合一・至誠無息の良知に歸一せしめ、其の良知を道德の標準とし、良知的活動を以て道德生活其の物とし、聖人の境涯を得、天人合一・萬物一體の眞我を實現して永久の生命を得、安樂なる生活を營むものなることを述べたものである。この本文は先年岡山の池田侯爵家で拜見したものであるが、光政公の寫本中にあるもので、光政公もこの思想の影響を受けて居られるものと察せられる。

(4) **日本精神**　蕃山は普遍的なる學說を特殊的なる時・處・位に活用して、日本精神を說いて大道の實行化を教へて居る。蕃山は、神・儒・佛三教併合、朱王調和の態度を取り、眞の大道は自然にし

て、倚らざる中庸の道にあるとし、日本に於ては神道を取るべしとして、

我は聖學をすれども儒に着せず俗學のいやしきをも見たり、朱學、王學等の費へもしれり、すべて取べきと思ふ學なし、天地の神道を大道といふ、我國には日本の水火によるの神道あり、大道は名なけれども我國の道なれはやむことを得ずしてとらば神道をとるべし。（集義和書第六）

と述べ、三種の神器を神の教へ給ひし神道の神書として、中庸の智・仁・勇の三德に當てはめて武とす。

天照大神の皇孫天津彦火瓊々杵尊を此國の主となし奉りて下し給ふ時三種の象を讓給ひて此鏡を見ふ事常に天神を見奉り給ふが如くし玉へとの神勅也、是日本の書の始也。（三輪物語卷六）

と說いて居る。蕃山は更に、我が國體を論じ、萬世一系の皇統の尊重すべきを述べ勤王を主張し、公武調和の道、王政復古の暗示等を次の如く述べてゐる。

大荒の時日本の地主の人は禽獸に近ししかる所に天照皇の神靈の德を以て此國の人の靈質によりて教をなし給ひてより初て人道明かなり天照皇は地主におわしまさす神武帝其御子孫にして天統をつき玉へり云々。

天下をとりて（將軍）帝王の號を得事不叶三種の神器を身にそへ奉りて天津ひつきをふまん事は天照皇の恐多く且天威のゆるさぬ所あり日本のあらんかきりはかくのごとくなるべし他の國には

なき例なれ共日本にては必然の理也云々。

問時有て公家の天下にかへる事も可有か云中〳〵かへるましく候此方よりあたへ及ぶ共末つゝき申ましく候昔は武家より御氣けも有べき事なるが今は何の御用心もなき御事也是をもつていよいよ位を位に立て尊敬し及ぶが日本の爲にて又將軍家御冥加のため也問日本の國の爲とは如何なる道理候や御冥加の儀は尤に候云もろこしよりも日本をは君子國とほめたり共故はもろこしの外には日本ほど禮樂の道正しく風流なる國は東西南北になき事それは禁中をはしますゆへにて候云云。

公家なくて幾度もかわりなば二三百年の内には天竺南蠻にかわらぬあらゑびすと成侍べし禁中をはしますゆへに天下治て後にはかならず將軍家參内をとげられ諸大名あつまり及び束帶衣冠の禮儀を見て初て人の則ある事を知御遊の體管絃のゆたか成を聞く初て太平のおもひをなせり云々。

然れ共王者は天神の御子孫にして地生にあらすことに日本にをゐて廣大の功徳をはしますゆへ天下の權勢をはさり給ひてやわらかにして上におはしませはいつまても日本の主にてをはします道理にて侍り武家もたとひ天威のゆるし有ともみつから王と成てはむつかしき事也臣として攝政なとの心にて天下を知及ふは心易き事也何たる無分別の人有て王とは成玉ふべからん云々

武家の人の帝位に上り給はんと王の天下をとり給はんとは共に無分別たるべき也然れども一つの道あり將軍家に賢君出をはしまして三十年も用意あり家を作ることく地形よりくみ立末代までの法をまうけて奉り給はば人しちも何もいうて又五百年も風波なく世中ゆたかなるべし後世にはかくのことの人出及ぶべきもはかりがたく候云々。（集義和書三）

德川幕府の全盛時代に於て斯くの如き勤王論を公明正大に主張せられたことは國民精神を作興し、其の行くべき道を示されたもので實に忠臣の業蹟である。これは元より時代の動きと環境の影響もあるが、又其の人物の卓識と氣節とを想見すべきである。

(5)　**政治經濟說**　蕃山は其の水土論に基きて大道を日本の時・處・位に活用して日本の政治經濟の實際に卽した活法を說いて居る。これは今の所謂皇道經濟政策、皇道政治の先驅をなしたものであるが、この獨特の政治經濟思想は主として大學或問、集義外書等に述べて居る。

大學或問一に「或問。人君の天職は何ぞや　云、人民の父母たる仁心あつて仁政を行ふを天職とす。一國の君には一國の父母たる天命あり。天下の君には天下の父母たる天命あり云々。」といつて人君は天下國家の父母たる天命を帶して仁政を施すべきを說き、又更に、

政とは何ぞやの問ひに對し富有也。世間の富有は、己を利すれば人を損じ、己よろこべば人うら

む。國君富有なれば國中うらみ、大君富有なれば天下恨む。小富有なればなり、大道の富有は、國君富有なれば一國悦び、大君富有なれば天下悦ぶ。大富有なれば也。天長地久にして子孫福祿を受、令名後世に傳へて、身安く心樂みあり。武家の代となりて五百餘歳このかた、其器にあたり給へる大樹出給へども、其言を聞給はざりし事を惜む也。

と述べて德治主義の政治經濟策を主張して居る。又富は公寶として「たゞわれらこときもののみにあらず、主君といへども一國の物を上より賴りなされ候、たゞ國郡の主のみならず、大樹といへども天の物を預り給ひて天下の爲めに所持なされ候。」（集義和書）と述べて居る。其の他蕃山の政治經濟に關する識見の要項を述ぶれば、

一、人材を採用し、言路を通じ人情を察して政治を行ふこと。

二、治水、殖林の道を開きしこと。

三、產業、勤勞を奬勵せしこと。

四、農兵の制を主張せしこと。

五、神道の興隆を圖りしこと。

六、國防兵糧の用意をなすべきこと。

七、學校の教育を尊重せしこと。

八、國家の米價平準策を圖りしこと。

等である。其の識見の卓越せる現代の日本に於ても參考となるべきものが多いと思ふ。

以上述べた蕃山の事蹟と學說は其の一斑に過ぎない。要するに蕃山は「我心則大虛なり天地四海も我心中にあり云々」（集義和書一）といつて、純然たる唯心的一元論の立場より天人合一・萬物一體・體用一源・理氣一體を論じ且つ其水土の論に基きて時・處・位の變通を以て宗教・哲學・政治・經濟・文武・文藝等を論じて居る。日本國を中心とし、日本國の地理的・歷史的事實を考慮して論じたる點は實に卓見にして敬服の至りである。

## 四　結　論

以上藤樹・蕃山の事蹟、學說につき其の概要を述べたが終りに兩先哲の關係又び所感の一端を述べよう。藤樹と蕃山とは師弟關係を結びし以來何れも生涯親密なる師弟の情誼を盡したのみならず、精神的には永久に師弟の情誼が存續して居る。藤樹が蕃山に與へた書翰に、「かりそめにも中和の心法御失念なき樣に御體認御尤に存候。何にても好格套を心に守り候も倚にて御座候。無ㇾ意無ㇾ心無ㇾ固無

レ我は中和の本にて御座候。」（與二熊澤伯繼一）と述べ、又「仕途紛擾の中御受用底如何陰陽超脫のみを底に徹し中庸を御離し不レ被レ成樣に日用第一義に候云々。」（與二熊澤子一）とある。藤樹は何時も蕃山に中庸の道を敎へてゐる。思ふに蕃山は英才にして行き過ぎる傾向があつたので藤樹がこれを心配して敎訓したのであらう。藤樹の懇切なる敎育的態度と蕃山の人物が窺はれる。又藤樹は蕃山の事を江戸の門弟一尾伊織に、「熊澤岡村二子御面談摩勵之益御座候旨幸甚々々。就レ中熊澤子同志中之巨擘に御座候まま指南御望御尤に奉レ存候。」（答二一尾子一）と述べて蕃山を推擧して居る。蕃山は確に藤樹門下の高弟である。これに對し蕃山は集義和書に「其比（寛永二十年蕃山二十五歲）中江氏王子の書を見て良知の旨をよろこび予にも亦さとされき。これによりて大に心法の力を得たり。朝夕一所にをる傍輩にも學問したることをしられず。書を見ずして心法を得ること三年なり。」云々と藤樹より王學を受け其の心法の力を得た事を述べて居る。又藤樹の學德を評して「中江氏は生付て氣質に君子の風あり。德業を備へたる所ある人なりき。學は未熟にて異學のついゑもありき。五年命のびたらましかは學も至る所に至るべき所ありしなり。」（集義外書六）と述べて、藤樹の人物に心服しながら學問には聊か滿足せざる意を表して居る。併し大道の實義は正しく藤樹の心傳を受けたものである。唯其の活用の點に於て蕃山獨特の學風をなしたのである。蕃山自ら其の事實を「余と中江氏との關係は實義同しくして又日新

の工夫あり。予が先師にうけてたがはさるものは實義なり。學術言行の未熟なると時所位に應ずることは時をかさねて熟し時に當て變遷すべし。予が後の人も又予が學の未熟を補ひ予が言行の後の時に不叶をはあらたむべし。大道の實義においては先師と予と一毛もたがふ事あたはず。」（集義和書十三）といつて居る。前に述べた藤樹と蕃山との消息を見れば最も眞實に兩先哲の學德と其の師弟間の情誼の篤かつたことが分る。要するに藤樹の根本思想である天・孝・良知の思想は蕃山の天道・人道・良知（明德・誠・忠孝・敬・義）思想と大體に於て一致して居る。これを蕃山が大道の實義に於ては先師と予と一毫もたがふ事なしと明言してゐるのである。蕃山は藤樹に比し日本精神と政治經濟の實際を詳細に述べて居る。これが蕃山の特色である。併しこれは藤樹が「權の外に道なし道の外に權なし權の外に學なく學の外に權なし。」（翁問答）といつた權道思想を受け、其の水土論により更にこれを擴充して、日本の時處位に活用し、所謂活法として述べた實學である。故に藤樹と蕃山とは正に精神的親子であるといつてよい。日本の現代に於ては藤樹蕃山の人物學說を活用して我國文化の發展に資することが必要であると思ふ。尚色々述べたいことがあるがこれは遺憾ながら割愛して終りに藤樹と蕃山の特色ある詩歌を紹介しよう。

○藤樹の詩

觸レ波不レ散碧潭月。就レ手漸馴朱蹄駒。經二歷人間多少險一。老來始得レ出二天衢一。

○蕃山の今様

雲のかゝるは月の爲、風の散らすは花の爲、雲と風とのありてこそ、月と花とはたふとけれ。

# 山崎闇齋と其の教育

阿部吉雄

山崎闇齋は名を嘉、初名を柯、字を敬義、通稱を嘉右衞門（又加右衞門とも自書す）と稱した。闇齋といふのは其の號で、又垂加と號した。元和四年十二月九日京都の一浪士（針醫を業とす）の子として生まれた。幼少の時から豪放不屈な氣象をもち、手の付けられぬ腕白者であつた爲めに比叡山に遣られて稚子となり、十五歳の頃妙心寺に入り十九歳の頃土佐の吸江寺に移つて禪僧となつた。土佐では其の頃、僧慈沖卽ち谷時中や國の若い家老、野中兼山、小倉三省等が相集まつて程朱學を研究してゐた。闇齋も此等の人々と一團となつて之を講究し二十五歳の時斷乎として僧服を擲ち、當時の新興思想たる朱子學に沒頭するに至つた。遂に明曆元年三十八歳にして初めて京都に塾を公開したが、闇齋は此の頃既に神道をも修め神儒合一說を唱へてゐた。闇齋も他の偉大なる思想家と同樣、長い思想的苦悶呻吟の後、結局は祖國の精神に立ち返つたのである。そして其の學說の大綱を樹立し得たの

は四十歳前後であつた。萬治元年（四十歳）、初めて江戸に來て井上正利侯・加藤泰義侯等の賓師となつた。これより半年は江戸に居つて諸侯の賓師となり、半年は京都に居つて門人の教育に力めた。此の間にあつて名望四海を壓してゐた幕府の懿親、會津侯保科正之の師となつたことは、闇齋の勢力を一層大ならしめることとなつた許りではなく、闇齋の社會教育に關する抱負、經綸の一部は侯を通して會津の地に實現せられる機緣となり、又其の神道に關する研究も侯の力に依つて益〻進むことが出來た。寛文十一年正之の死後は再び關東の地を踏まず、專ら著述と教育に當り天和二年六十五歳を以て歿した。

崎門の三傑と稱される佐藤直方、淺見絅齋、三宅尙齋はいづれも晩年の門人であり、皆其の儒學の方面を紹述した。特に絅齋は最も其の正統を繼いだものと云はれてゐる。闇齋の門に遊ぶ者は六千人を數へ、幾多の人材を輩出した點で木下順庵と比較されるが、その學風と教育には硬派と軟派とも稱すべき相違があつた。闇齋の門派は各地方に分布して愈〻盛大を極め、特に我國尊王運動の一大源流となつたことは日本史上に萬古の光を放つものである。卽ち水戸學派に多大の影響を及ぼし、山縣大貳・竹內式部・賴山陽・平田篤胤・梅田雲濱・有馬新七・藤森弘庵・橋本景岳等の勤王家を續々と輩出してゐる。闇齋は自ら言つてゐるやうに常師とてはなかつたが、土佐の南學の統をうけたものであ

る。朱子を以て直ちに先生と呼び、元明以後の儒者の如きは僅に數人を尊んだに過ぎない。其の中彼の學風に影響を與へてゐると思はれるものは明の薛敬軒・胡敬齋及び朝鮮の李退溪である。其の神道説は吉川惟足よりうけた所が最も大であり、其の他保科正之・大中臣精長・出口延佳・石手帶刀・梨木祐之・土御門泰福・望月某・出雲路信直・大山爲起・交部某等より承け諸説を集大成したと云はれてゐる。舍人親王には最も崇敬してやまなかつた。著書は無慮數十種あり、最近全集が出版されてゐるが、其の思想を觀るに特に重要なものは垂加草三十卷附錄二卷・垂加文集七卷續集三卷附錄一卷拾遺三卷の外、文會筆錄・大和小學・風水草・風葉集等である。其の他は大抵朱子及び數人の儒者の説を表章し編次したものであつて一册の本に簡擇したものが多い。

闇齋の學は神儒兼修の學であつて、神道に於いても朱子學に於いても一派をなしたものである。其の學問も教育も朱子學を基礎とし其の基礎に立つて神道を修め又國史の編纂に志したのであるが、其の學問の大眼目とする所は我國に綱常の道を扶植し、大義名分の何たるかを教へ以て我國體の尊嚴なることを顯揚するに在つた。卽ち其の志より云へば我國の道を明かにせむが爲めに朱子學を以て學問の羽翼となしたのである。此の大眼目を立てた所に闇齋の學者としての大見識があり闇齋學の重要な歴史的意義がある。凡そ儒學史上に其の名を殘す程の人物ならば或は道德、或は政治、或は文藝等夫

夫の方面に於て我國文化の向上に少なからず貢獻した者で夫々尊敬せらるべきであるが、わけて我國のよつて立つべき基礎とも云ふべき國體の顯揚と國民的自覺の喚起に努力した學者はそれだけ歷史的重要意義を持つことは云ふまでもない。闇齋及び其の學派の人々は逸早く之を書齋に於いて獅子吼しただけではない。時到れば之を行動にあらはし、前者斃れて後者續き百難屈せず、前後心を同じうして國事に盡瘁し、遂に維新の大業を成就せしめる一大源流となつた。我國近世史上これ程壯觀を呈した學派は學派としては決して他に見られない所であり、其の影響の大なることは想像以上に出づるものがある。

然らば何故にこの樣に偉大な影響を與へたかと言へば、これは決して單純には說明し盡されぬが、其の大本は朱子學に對する徹底的な研究と更に神道や國史に對する深遠な研究より出てゐることを忘れてはならない。學者の深い研究より湧き出た思想でなければこれ程までに永續的に影響を與へることはあり得ない筈である。闇齋の深い學問研究は彼の偉大なる人格と結び付いて熱烈なる信念となり一の烈々たる精神氣魄を生んだ。この氣魄あつてこそ學問も强大な迫力を持つ。而も此の學問と氣魄とは彼の嚴烈なる教育法によつて脈々として門流に傳へられたことを想はねばならぬ。

さて闇齋の朱子學は純粹に朱子を信奉し絕對に佛學や陸王學等の他說を混へない立場である。其の

神道說も佛說を混說することを排し「異國の道は習合附會せしむべからざること」を以て神文の一條となすものである。卽ち純粹なる朱子學、純粹なる神道を修めることを志した闇齋は絕對に他說を排しながらこの神儒二道のみは妙契するものがあると信じたのであつた。洪範全書の序に「蓋し宇宙は唯一理なれば神聖の生まるる、日出處日沒處の異なると雖、然れども其道自ら妙契するものありて存す。是れ我邦人の當に敬んで以て思を致すべき所なり。」と論じてゐる。宇宙萬物流轉する現象の中に其の存在根據とも云ふべき不易の一理があり、この理によつて立つ道に二致あるべき筈はないとするのであつて朱子の理氣說に本づくとはいへ當時にあつては確に卓見であり、後世一部の神道家の如く徒らに儒道を排するのとは雲泥の相違がある。卽ち闇齋に於いては朱子學なるが故に、或は神道なるが故に信ずるのではなく宇宙の理なるが故に信ずるのである。從つて闇齋の神道說は其の意識せるとせざるとに拘らず朱子學化され、其の朱子學は日本化されてゐることも亦當然である。垂加神道は宋儒の理氣說を以て神道を解釋したものでこの點は如何に强辯するとも蔽ふことが出來ない。

然らば次に神儒孰れを敎育の基礎としたかと云ふに、三宅尙齋の雜談錄に「往年山崎先生ニ我等モ神書ヲキクベキカトアリタレバ、坦然明白ノ道理ヲ吟味スルウチハイラヌ事、ソレヲ吟味シヲ、セテ年熟シテ後キクベシトアリ、又此間モイネテヰテフト思ヒ出シタリ、コレラモヨクキ、覺エテヰルベ

キコト也。」とあり、又其の書討論筆記後にも「闇齋の門人には神儒を並び學ぶ者が多かつたが、儒道の門人をしては必ずしも神道を學ばしめなかつたのに反して、神道の門人に對しては神官と雖、必ず先づ儒道を學ばしめた。」と云つてゐる。其の他二三の資料を併せ考へれば闇齋は門人の希望に從つて神儒孰れかに就かしめたばかりでなく門人の個性素養等をも考へ之を學ばしめたと云ひ得よう。卽ち理想とする所は神儒の兼修であつたが基本を儒道に置き先づ道理義理の究明をなさしめ然る後我が惟神の道を學ばしめたと云ふべきであらう。「近頃は本邦にても儒者はからの故事に精を出し、からの詩文に思を入れて和書にはくらし、歌人は和語をばきゝふるれども、からの書にわたらぬゆへ文盲にて日本紀などはえよまざるなり、かくあさましき次第なれば他邦の人はとがむべからず、あまさへ儒者は姬氏國の言をとりて太伯を誣ひつけ、佛者は大日孁の名によりて大日をひきあはす云々。」と自ら大和小學に云つてゐる通り和漢の學に亙り神儒を兼修して以て國體を顯揚することが其の目指す所であつたが、敎育の出發點を合理主義、理性主義に立脚する儒學に置いたことを忘れてはならぬ。

闇齋學派に於いては「學問の筋」「人の大格大準」と云ふことを力說する。大格大準と云ふのは淺見絅齋の好んで用ひた言葉であるが、日本人としての大本足下を忘れぬことを謂ふ。儒書を讀んで儒書

の讀みぞこなひをすれば儒書は讀まざるがよく、我國に生まれ我國を宿屋の如く思ふは古今第一のひが事である。顏子陋巷の樂などと云つてもこの大本を辨へねば非人の日向ぼつこと變る所がないと云ふのが其の大準大格說である。そしてこの精神はとりもなほさず其の師闇齋よりうけついだものに外ならない。闇齋が常に門人に向ひ「唐ヨリ日本ヲ從ヘントセバ、軍ナラバ堯舜文武ガ大將ニテ來ルトモ、石火矢ニテ打潰スガ大義也。禮義德化ヲ以テ從ヘントスルトモ臣下ト不レ成ガヨシ。是則春秋之道也。我ガ天下之道也。」（淺見絅齋靖獻遺言講義）と敎へたと云ふことは人のあまねく知る所であらう。當時は文敎の興隆と共に支那崇拜思想がいちじるしく流行し、支那は中華の國であり、日本は夷狄の國であると云ふ考が學者の頭腦を支配し皇祖太伯說、皇祖大日如來說等が唱へられて顧みられなかつた。闇齋は此等の外國崇拜者流に一大鐵槌を加へ大義名分論よりして國體の本義を明らかにし之を以て敎學の大根本となしたのである。それで「我國寶祚天壤無窮の神勅、萬々歷々たるが若きは則ち六合の間、載籍の傳はる、譯說の通ずる未だ嘗て見聞せざる所なり。且つ中國の名は各國自ら言へば我は是れ中にして四外は夷なり。是故に我は豐葦原の中つ國と曰ふも亦我の得て私するあるに非ざるなり。程子天地を論じて曰く、地形高下あり、適くとして中ならざるは無しと。實に至極の言也。」（文會筆錄）と云ひ、また大義名分を國史の上に徵せむとし倭鑑の編纂に志した。倭鑑は其の目錄だけが

傳はつてゐるが、水戸の大日本史の四大特色と完全に一致してゐる許りでなく其の編纂の實行に著手した年も偶然に一致してゐる。闇齋の倭鑑編述の精神は朱子の通鑑綱目に倣ふものであつて、歸する所建國の精神を明らかにし國體の比類なきを表章し、中外を分ち君父を尊んで忠孝の大義を顯揚し、正統を崇び名節を褒する所に在つたのである。闇齋の學問の根本をなすものは朱子の大義名分論である。「學問他なし忠と孝と」とは自ら嘗て詩に詠ぜる所である。而も其の忠孝は日本人としての忠孝である。忠孝を離れて學問があれば畢竟其の學は無用の學であり、其の人は無用の人であるとするのである。闇齋が湯武の放伐を斥け、韓愈の作つた拘幽操を表章したのも結局君臣の大義を我國民に徹底せしめむとしたからである。卽ち闇齋は忠孝國體を以て教育の基本となしたと云ふべきであらう。

闇齋の云ふ學問の筋とは眞正の學問と云ふ意味であつてそれは訓詁詞章の學ではなく又博聞洽見を務むる學ではなく、勿論名譽や就職の爲めの學ではない。義理道德の學であり、自己の德を修め自己を完成する學であり、忠孝を實踐する易簡直截な實學を謂ふ。闇齋は佛敎や陸王學を異端邪說と云ひ元明以後の朱子學や京學諸家の朱子學を雜學俗學と云つた。私は嘗て闇齋學の朱子學史上に於ける地位特色を論じて抽象的な言葉ではあるが、闇齋學は元明以後益〻煩瑣に流れた朱子學とそれをうけついだ京學一派の朱子學を、純粹化し簡易化し內面化し又日本化して、而も熱烈なる宗教的情熱と眞摯

なる道德的信念を以て之を嚴肅に實踐躬行した所にあると結論したことがあるが、要するに直ちに朱子の精髓をとつて之を身に驗すると云ふ風であり、かくてこそ學問の筋を得たものであるとするのである。

闇齋の學問は朱子の說に就いて精しく取舍選擇し而も日本人としての自主的精神に立脚してゐるのである。併し其の教育の理想本質方法等に關する理論は何等朱子の說の範圍を出づるものではない。闇齋に於いては學と云ふのは人の人たる道、聖賢に至るの道を修め自己を完成することを謂ふ。既に人の人たる道を身に修めるのであるから生死も貧苦も問題ではない。絅齋が闇齋を見て泊然として世用に意を絕つたのもこれが爲めである。崎門の先達が多く道に殉じたのも之が爲めである。さてこの學の仕方、卽ち爲學法は如何と云ふに闇齋は朱子の白鹿洞揭示を表章して敎學の法を示すものとし、敬齋箴を以て存養の要とし之を門人に授けた。又知と行と敬の三者を爲學の標準として示したことも其の特色と云へよう。「學の道は致知力行にあり、而して存養は此二を貫くものなり。漢唐の間知者なきにあらざるなり、行者なきにあらざるなり。但未だ曾て存養の道を聞かざれば其の知る所の分域、行ふ所の氣象、終に聖人の徒にあらざるなり。」と云ひ、「夫れ天命の性は人心に具はる。故に心を存し性を養ふは天に事ふる所以にして存養の要他なし、敬のみ。」と云ひ、又「夫れ聖人の敎、小大の序

ありて而して一以て之を貫くものは敬なり。」と云つてゐる。敬と云ふのは知らむとする心、行はむとする心を自己より失はざる樣に守り養ひ、知行の根本主宰とすることを云ふ。卽ち敬はツツシムと訓じ、油斷なく心をひきしめ、讀書する時は讀書するなりに精神を集注して物事に全精力をうちこむことを第一義とする。そして其の爲めには常に整齋嚴肅に起居動作をつゝしむこと、或は靜坐することなども肝要であると說かれるが、敬齋箴は卽ちこの敬の工夫に就いて述べたものである。意ふに敬と云ふのはどんな人でも畏れ謹む時には自然に緊張して放埒に流れぬと云ふ人間心理を把へて之を修養上に應用したもので行住坐臥、この敬を持して知行を並進すれば自己の向上に格段の進步發展があることは當然であらう。かくて闇齋は敬を以て我身を修め我內界を正直にする要法として道德の本源としたが、我身修まれば更に自我を社會に實現しなければならない。此に於て我外界を方正にする規準を義に求め、敬義內外を合して自我の完成せらるべきことを說いた。これが彼の敬義內外說であつて闇齋の學問の大骨頂をなすものである。卽ち程子が周易文言傳に本づいて「敬以て內を直うし義以て外を方にするは內外を合するの道なり。」と云へるに據つて內とは我身を云ひ外とは家・國・天下の事を云ふとしたのである。この內外を闇齋の如くに解釋するのは果して程朱の意を得たものであるかどうか疑問であつて、門下に非常な論爭を起したのも故あることであるが、闇齋は右のやうに解釋し

て教學の標的となしたのである。要するに闇齋は知行敬を以て教學の要目として、白鹿洞掲示・敬齋箴を以て教學の綱領とし、敬義を以て教學の標的標語となしたとも云へるであらう。

闇齋の知と云ふのは廣く知識を謂ふのではない。時處位によつて千變萬化すべき父子の親君臣の義等を、其の時處位に應じて本然の義理善惡差はざる樣に究明することを謂ふのである。即ち朱子が宇宙心性に向つて窮理盡性を說いたのを範圍を狹め、特に義理道德の世界に考察の中心を置いた。そしてこの知を致す要法としての讀書に就いても頗る範圍を限定するものがあつた。明曆元年、闇齋は初めて講筵を開いた時、小學・近思錄・大學・論語・孟子・中庸・易程傳の順序に從つて講義し二箇年を以て終つてゐる。この讀書或は講義の順序は朱子の說に從つたのであるが、唯易に程傳を用ひてゐるのは初年未定說に從つたので間も無く改めて朱子本義を用ひた。この講義の順序と課目は歿年に至るまで變る所がなく唯晩年にはこの外に洪範全書を講じてゐるだけである（批垂加行實、木齋紀年錄）。林家の教育は經學科・讀書科・詩科・文科・和學科の五科を立て、朱子學の一偏にかたよらず、廣く古人の說を學んで所謂御用を辨じ御役に立つことを目的となした。從つて課目も廣く經史子集にわたり、講義の方法も所謂專門的であり、訓詁を重んずる風があつた。然るに闇齋の講義は易本義までの講義であつて而も元明儒者の注釋を末書と稱して顧みず直ちに朱子の眞精神を把握せんとしたもので、林

家の所謂講釋下手に對して血あり肉あり生命ある講釋をなしたものであつた。詩文をとらず、又訓詁を意に介しなかつたのも直ちに道の本源を究めむとしたからである。

闇齋の實地に用ひた教育法、教育の態度には頗る特色がある。そしてそれは闇齋の異色ある人格より發現するものが多い。闇齋は體軀矮小で顏色怒るが如く、眼光は人を射て向ひ近附くべからず、其聲は雷の如くであつて人を畏怖せしめたと云ふ。年少の頃は病弱であつたが神力は極めて旺盛で、氣節豪邁、泰山巖々の氣象を有し、其の性は極めて急、氣鋒の鋭い怒氣の多い豪傑であつた。又頗る强記の人であつた許りでなく刻苦力行し、或は病中に洪範全書を編し「頭痛ノ時ハ後ノ柱ヘ頭ヲ結付ケ几案ニ向テ吟味ヲ聞キ」「死ンデモ學問シ死ナレレバ苦シカラズト云ヒ」初學の時は夜遂に帶をといた事も無かつたと云ふ（韞藏錄拾遺）。かう云ふ剛强な人であつた爲めに其の教育は嚴烈を極め、又よく師道を尊嚴にして門人に對しても苦學力行せしめることが出來たのである。淺見絅齋が吐血しても猶ほ學業を休まず「側デ氣毒ガリ嘉右衞門ヘ休息セラレヨト云フ、ソレハ重次郎（絅齋）ガ賴デ云タカト云ヘリ、イヤ賴デハナシ、アマリ見テモ氣毒ユヘト云フ、賴ミデナクテハイラザルコト也、學者ノ上ハ其方共ノ知ル事ニ非ズト」云ひ道の爲め學の爲めには死すとも苦しからず死ねば本望なりと信じ、殆ど一死を覺悟して絅齋等が苦學したのも闇齋自らが道の爲めには斃れて後已むの至高なる信念を有

してゐたからではなからうか。崎門に於いては誠に生命をかけての學問であり而も闇齋自らが其の範を示したものである。闇齋のかゝる教育法は其の人格の反映せるものであると同時に其の道に對する信念の篤いことより發現する。單に刻薄と評し去るべきものではない。佐藤直方・淺見絅齋等の門人が平日闇齋の怒罵を喫し精力つき殆ど死にさうに思ひながらも、今海内にこの人を措いて他に師あらむやと相勵まし刻苦勉學したと云ふことも傳へられてゐる。人師としての學德が具はらなければどうして彼の如く門下に人材を集めることが出來よう。門人の上達するのを見ては落涙する程の情熱家でもあり、直方をして總體は仁者ぞと批評せしめた程の德を具へてゐたのである。闇齋の人格は剛强に過ぎるが故に常に毀譽相半ばしたが、又其の爲めにこそ嚴師としてよく門人を鍛へ、他流の企圖し得ざる偉大な感化を與へることが出來たのである。

遊佐木齋（字は好生、通稱次郎助）は初め闇齋のとかくの評判を聞き入門を躊躇した者であるが遂に意を決して闇齋の門を叩いた。其の時の體驗を記した貴重な資料が今に殘つてゐる。

是に於いて先生に見ゆ。先生容貌飾らず、言辭要切、一禮し了りて退く。其の翌日往いて見ゆるを得たるの禮謝をのぶ。入浴して逢はず。其の後往くに淺見順良（十次郎安正）坐に在り。先生順良にいひて曰く、次郎助は何學の合點も未だこれあらざる也と。好生曰く、僕の意には合點ありと。先生曰く如何。答へて曰く、學は人たる所以の道

を學びて以て人たるのみ、所謂聖人に至るの道なりと。先生遽に曰く、此は是れ志なり、其の學の道を知らずと。曰く、居敬窮理、是れ乃ち學の方なりと。先生曰く、先づ其の敬を知らずと。好生是に於いて謙して必ず敎へらるゝの故あらんを思ひ、乃ち答へて曰く、知る能はざる也と。先生曰く夫れ然り、唯能く來りて之を學べと。順良を呼びて曰く、次郎助合點なり、善く此の如く之を言ふ、亦奇特なりと。旣にして入りたまふ。順良曰く某等こゝに在り每々劇論多しと。好生曰く然るべしと。而して辭去す。間二日ありて、また詣り論語泰伯の章を懷中より出し問ひ奉りて曰く、此の處諸儒朱註をいひて多く舊見未定の說となし、紛々の論說あり、畢竟如何と。先生曰く、緊要の處なり、汝能く集註を誦んずるか。好生曰く、稍誦んずるも未だ熟せず。先生曰く、大全に某は朱註に從ひ某は朱註を非とす、一々能く記し得たるや。答へて曰く能はず。曰く末書孰れか從ひ孰れか非とする、能く記するか。曰く記せず。曰く通鑑前編に胡氏の論あり、記するか。曰く記せず。讀書錄に數說あり、記するか。記せず。曰く然らば則ち何を以て汝に告げんや、汝實に此の處を問はんと欲せば一々能く分辨記し得て其の疑ふ所を疑ひて而して後にもて來れと。好生畏諾して退き、數書類聚、朱註に從ふを一冊となし、朱註を疑ふを一冊となし、熟讀して大意を記し得て進んで請ふて曰く（中略）、先生曰く善かな、以て學をなすべき也、此の處は天下の大經、萬世の臣極、輒ち之を說き難し、某嘗て拘幽操一冊をつくる、書肆武村に在り、行き去りて持ち來り講習せよと。好生乃ち退いて直ちに書肆にゆき、拘幽操を懷にして歸り熟看して了り翌日進んで問ふ。自ら讀んで此は是れ君父を無みするの處に至るや、先生曰く如何。答へて曰く、天下の大戒なり天地の間に逃るゝ所

なきなり、此の處かいなかと。曰く然り、汝能く文字を看るなりと。一篇讀了の後、先生丁寧に說き去り至要を開示したまふ。此の後頭を他に振るに遑あらず一心に入門して學ぶ。（木齋紀年錄）

闇齋が門客を遇するに神氣豪放であり、容易に入門を許さず、入門後も憤せざれば啓せざるの教育法を以て嚴重に訓練した有様が顏前に髣髴しうるではないか。其の學の精到と大義を說くに當つての熱烈な氣魄も語氣の間に窺ひ得て人の心を打つものがある。闇齋が容易に入門を許さず入門の際には直ちに試問して發憤せしめると云ふ方法は佐藤直方も試みられた所である。又門人が論語等の重要な一章を徹上徹下精密に考察し之を論文として提出し、師の批判を請ふと云ふ方法も闇齋及び其の流に於いて常用されたものである。淺見絅齋が入門の當時、論語の一章に就いて何等修辭按排に意を用ふることなく朴訥な俗語を以て深い哲學的考察と切實なる體驗とを一文に書き綴り闇齋の批評を請うたものが今に傳はつてゐる。

闇齋が直接に門人を指導するに際しては頗る精微に學の蘊奥を開示したが通常の講筵に於いては大筋をとらへ大端を開くと云ふ仕方であつた。これは今に殘る二三の講義筆記を見ても知ることが出來る。併し其の講釋の態度に至つては峻嚴其のもので、手に一棒を握り疊を扣いて講釋し中々面もむけられぬすさまじいものがあつたと云ふ。闇齋が拘幽操を講釋する時には思はず刀の下緒（サゲヲ）に手がかゝり

身を竦てたと云ふ事も傳へられてゐる。かう云ふ見幕で講釋するのであるから、之を聽く門下生は我知らず烈しい感動をうけ、心の底から大義名分を尊び逆臣を悪むの情を起すに違ひない。人を動かさむとするには先づ己れが動かねばならぬ。闇齋の思想は信仰となり情熱となつて强い迫力を以て門人を率ゐるものがあつた。猶ほ闇齋の講筵に就いて、「山崎先生嘗テ講釋ナサレシ時ハ四ツギリデ、ソレヨリハ門ノクロロヲオロシテ一人モ入レ玉ハズ甚嚴シキ事ナリ。浮屠ハ一人モ入レラレズ、聞タク思フモノハ格子ニ立聞シタリ。大音聲ニテ三間ヲコエテ格子ヘキコエシトナリ。（中略）論語ハ四枚、孟子ハ六枚ヅツ講解ナサレテ大筋ヲヒツトツテ說キ玉ヘリ。其後トニ筆錄（文會筆錄）ヲモヨメリ。」と三宅尙齋の雜談錄に述べてゐる。師弟の間は儼として君臣の如く講義中少しでも禮に缺ける所があり、或は業を惰る者があれば痛責して許さず、往々にして絕交するに至つてゐる。この態度は貴卿大名に對しても決して變ることがなく、井上正利侯が嘗て彼を聘しようとしたとき、師として往きて教ふるの禮あるを聞かずと云つて之を斥け、菓子を喰ひながら經義を問ふは何の禮ぞと叱責してゐるのである。當時は儒者は醫者坊子と倂び稱され極めて社會的地位がひくかつたことを想ひ合せなければならない。

闇齋の嚴烈な教育法と師道尊嚴主義を物語る逸話は數限りなく存してゐるが、要するにそれは彼の

性格・環境・學統及び學說より必然的に釀成せられたものである。併し其の根本には道に對する信念がある。闇齋に於いては己れが尊いのは道が尊いからである。我の重んじなければならないのは我は斯の道を代表してゐるからである。斯の道は之を得れば夕に死すとも可なるの道である。世間の儒者が徒らに權門に阿ねり時好に投じ或は半熟な敎育法を用ひてゐるのは、道の尊いことを自覺せず、又道に任ずるの氣概がないからであるとしたのである。卽ち孟子の說いた尊道重己の主張、或は朱子近思錄の出處論等に基いて大いに師道を尊嚴にし、以て儒者の斯の道に任ずる氣概の養成と其の社會的地位の向上とを期せむとしたのではなからうか。闇齋は諸侯に對しては其の賓師となつたが、斷々乎として仕官せず終生浪人として終始したことは歷々徵すべきものがある。闇齋が毅然として斯の道に任じ世に阿ねらず、最も師道を尊嚴にし出處を愼んだと云ふ一事は永く門流の倣ふ所となり崎門の特色となつた。

闇齋は門人を敎育するに當つて、林家の樣に博學であり訓詁詞章に堪能であり、「御役にたつ」門人を養成せんことを期したのではない。斯の道を代表するに足る眞の人師を陶冶せんとしたのである。嘗て一大守が講官を求めに來た時滿座の弟子を見渡して、佐藤直方・淺見絅齋以外は擢用するに足らずと云ひ、然らばこれより弊邑の二三子を從學せしめ後漸く之を用ふる樣にしては如何と問はれたの

に答へて、儒生の成るのは葡匏の生ずるのと異ると云ひ（先達遺事）又會津侯が大規模の學校を江戸に建てようと相談した時、師がないと云ふ一言を以て應へたと傳へられてゐる（尙齊雜談錄）。

闇齋に於いては圓滿を氣取る僞善者を最も惡み、寧ろ極端に云へば理想に狂進する氣骨ある志士を養成せんことを期したものと思ふ。習齋所錄の强齋先生雜話に「山崎先生ノ顏子狐ヤ明道狐ト被仰タガ至極ノ御詞ゾ。」とあり、幸田先生語錄にも一世ノ中ノ對句ニ山崎先生ノ云レシ明道狐ト直方先生ノ犬會點ホドハナイゾ。」と云ひ、而も其の何の意味であるかを說明してゐない。併し私はこの數語に依つて闇齋の志した敎育方針の一斑を窺ひ得ると思ふ。蓋し顏子明道は春生の如く孟子伊川は秋殺の如しと云はれてゐる。世間の學者が顏子明道の風格を見て一見學び易いやうに思ひ、而も確に俗人の目を眩して圓滿なる君子人であると云ふ虛名を博する事が出來るので競うて其の風を模倣し、其の爲めに却つて人を感化するの力がなく、徒らに姑息に流れて人を敎導するに誤る事が多いのを深く惡んだのではあるまいか。卽ち孔子が鄕原は德の賊なりと云ひ又紫を惡み莠を惡んだのと同一の心境からして、世に野狐禪なる語の流行してゐるのをかりて、世儒の圓滿を氣取る者を譏つて明道狐顏子狐と云つたのであると思ふ。「士は以て弘毅ならざるべからず、任重くして道遠し」とは論語の言葉である。朱子はわけて弘毅の德のなければならぬ所以を力說する所があつた。然らば闇齋の門流に氣骨あり氣

魄あり識見高邁の志士を出し、唯理のある所に從つて行動し敢て死を怖れず斷々乎として時勢に抗し時勢を導いたのも故あることと云はねばならない。

以上、述べた所、多岐にわたつたが要するに、闇齋は物の輕重本末に就いてよく價値判斷を下した偉大なる學者である。だからこそ却つて一學究として自ら任ずることなく、一世の師表、天下の木鐸を以て自任した。若し闇齋の學說上に格別の創見も大系もないと云ふ一點のみから見れば、偉大なる學者と云ふのは過奬の樣にも思はれようが、能く內外本末の價値判斷をなし得たと云ふ點から見れば彼こそ東洋的哲人の名にふさはしい。忠孝を以て敎學の對象とし、之を學ぶの道は先づ個人の修養より出發せしめる。而して其の修養に當つては一息一念の間も最も緊張して嚴重に知と行の工夫鍛錬をなす。徹上徹下義理を究明し、其の知より出發して躬行に入り、躬行より歸つて再び義理の究明に入る、知行は並進すべきであるが先にすべきは知であり、重んずべきは行である。かくて一旦義なりと信ずれば斷乎として行ふ。この鍛錬は半熟な微溫的なものではなく生命をかけてのものであり、武者修行者の眞劍勝負に異らない。戰々兢々薄冰をふむが如く細心の注意を拂つて義理を究明し身を修める一方、對社會的には義のある所百難屈せず死をも顧みざるの敎育――これが敬義の敎育の精神であると私は思ふ。闇齋の重んじた敬齋箴を讀めば、如何にも活動的氣象に乏しく消極的であり形式に泥

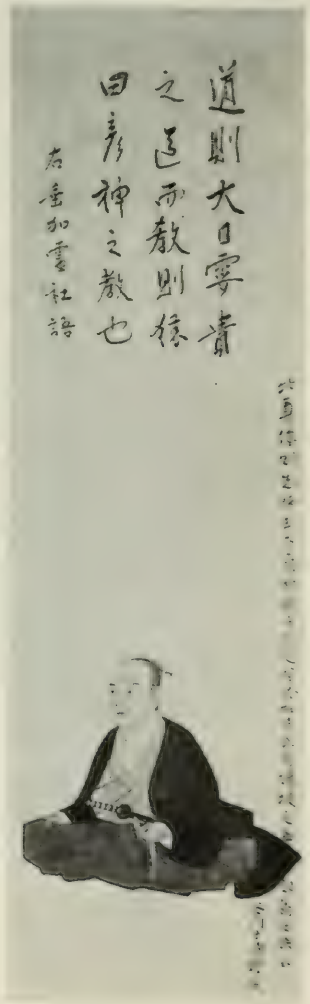
む様に思はれるが、これは寧ろ積極的に活動せむが爲めの消極的修養であつて之を以て直ちに朱子の教育說や闇齋の敬義說をば消極的退嬰的なりとすることは出來ない。これは何より闇齋學派が如何に國家社會に活動的態度に出たか其の事歷を見て知ることが出來よう。併しながら他面觀點を變へれば伊藤仁齋が「敬義は行を制するに足るも德を成すに足らず。」と云へる如く、克己制慾、行を制するより入つて德を成す立場、卽ち最も卑近に言へば惡を懲すことによつて本來の善を發揮すると云ふ立場の外に、直接的に積極的に善を長養扶育することによつて惡を斥け以て德を成すと云ふ立場も亦あることと思ふ。この點より觀れば朱子說は少くとも形式上は消極的退嬰的なりと評せざるを得ない。從つて又別言すれば宋儒や闇齋の教育は正善の教育に偏するものであつて孔子の教へる善美調和の教育ではないと謂ふことも出來よう。だがよく正善の教育に徹したる爲めにこそ却つて撥亂反正の力を發揮し優に偉大な事業を成し得た所以を深く想はねばならぬ。我々は單に學說の形式表面のみを見て安價に批評し去つてはならぬ。把握すべきは學說の奥に潛む其の精神である。

猶ほ最後に闇齋の教育の特色、教育史上に於ける地位に就いて一言しよう。一體日本は武力を以て推進力とし、詩情に生きるの心を以て日常性となして來たとの說があるが、この說は日本人の義理道義を以て生活を規定し武力の原動力となして來たと云ふ重大な事實を見逃してゐると思ふ。さて詩情

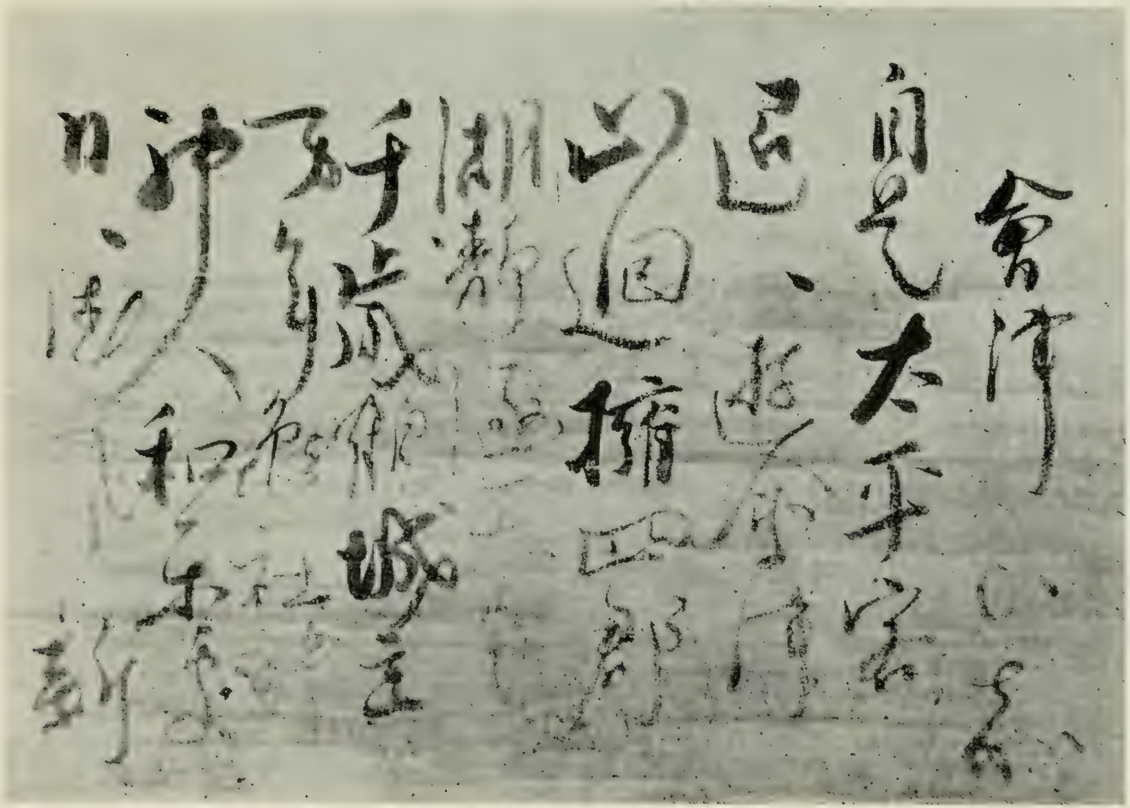
人情の美は國學者の和歌文章による教育及び其の陰にひそむ佛教徒の教育に依つて長養されて來たと思ふが、正義義理に生きるの教育は漢學者の力による事は云ふまでもあるまい。漢學者の中でも闇齋の教育の如きは別して士人の生活に卽した教育を施せるものとも云ふべきもので、勿論机上の學理を理論として教へると云ふ風ではなく、直接に士人の日常生活に心の糧を與へ精神的活力を供すると云ふ風であつた。この風は道德を我國民生活の中に一層深く又廣く喰入らせ傳播せしめるに與つて力があつたことと思ふ。乃ちこの學風や教育法は先づ學界を動かしたことは實證出來ることであり、又やがて興隆すべき庶民教育の先蹤をなしたと思はれる一面がある。荻生徂徠が「總て儒者の學問、世上とも只今は大形嘉右衞門流のごとくなりゆき候。」と云ひ、又「道春・春齋のはゞ廣く學ばせ候家法變じて、唯今は別の流儀の樣に相見え候。唯今の樣子は朱子學ばかりの狹き學問を致し、講釋を第一に仕り嘉右衞門流のごとく相見え候。(中略) 世上にて林家は代々講釋下手と申儀に候。嘉右衞門流は四書・近思錄・小學と立分候分にて易本義までの學問にて、廣く學候を雜學と申嫌ひ候。師より講釋を習ひ候へば、不學にても事濟義に候。講釋のいたし方、白人の耳に入候を第一にいたし、林家の流儀とは、うらはら違ひたる儀にて候。然る處林家の學問嘉右衞門流のごとく成行候。」(學寮了簡書) と云つてゐる如く、講義の一般化、生活化と講義課目の簡擇化の主張は先づ林家の教育法に影響し一世を

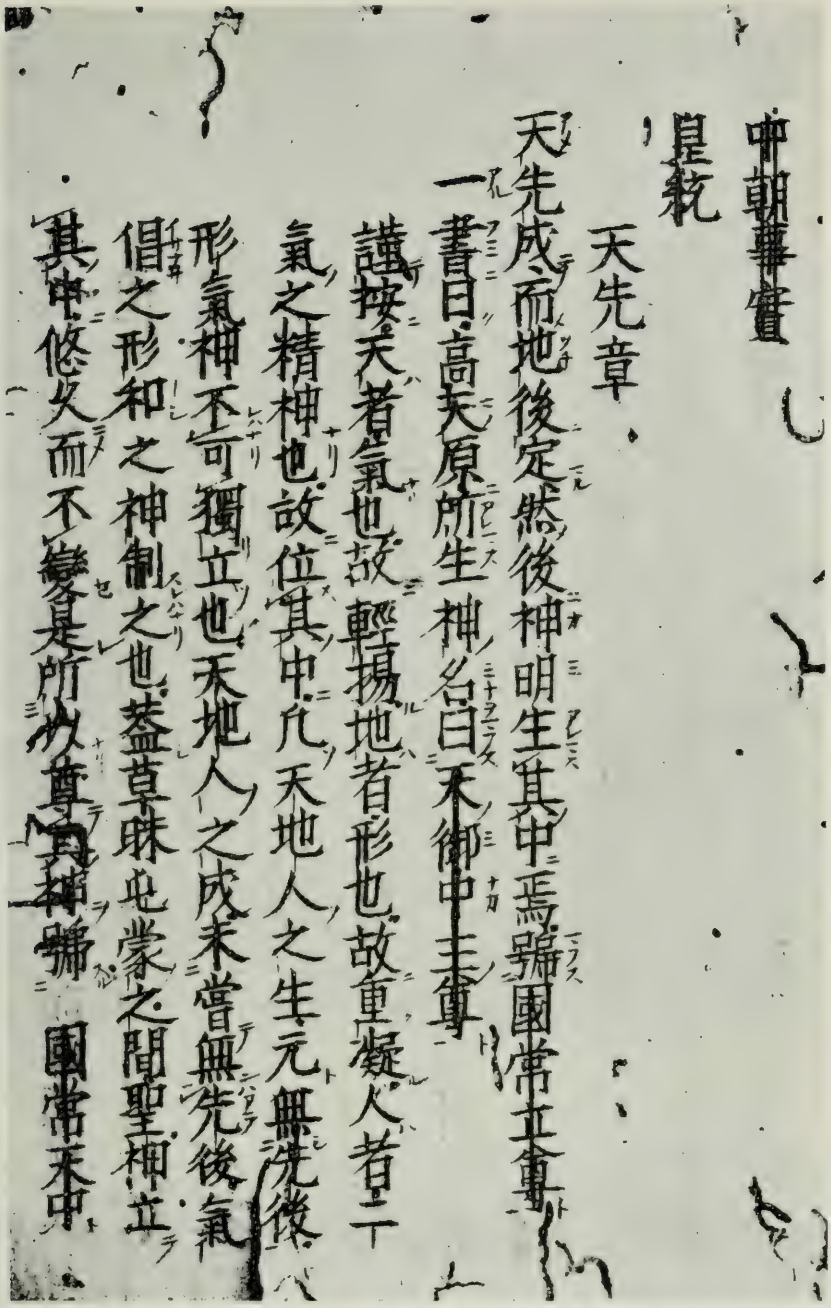
風靡するに至つてゐる。闇齋學派に於いては一般士人と雖も深く感動せざるを得ないやうな講義をなしたが、それは餘程の學識と體驗がなければなし難いことである。この外、詩文による情操教育を輕んじ義理道德による意志訓練を重んじたこと、師道を尊嚴にしたこと、又道を尊ぶが故に道を述べた師の講義を筆記して秘傳とする風があつたこと等崎門に於ける教育の特色を擧げ得るが、要するに佛教に代つて指導的地位を得た儒教の教育を更に、外國崇拜の教育より自主的教育へ、折衷的な微溫的な教育より徹底的な嚴肅な教育へ、專門的より一般的へ、知識より實踐へ、机上より生活へと轉換せしめむとした所に闇齋の教育史上に於ける地位がある。若しそれ國體や忠孝や節義や名分や出處等の實際の活問題に對しては毅然として屈せず常に活動的態度に出で、死は鴻毛より輕く義は泰山よりも重しと云ふやうな我國獨得の士風を養成せる點に思を致せば闇齋の史上に於ける地位は愈〻其の光をます。かくて我々は崎門の人々の言行を通じ、儒教の眞精神の一端にふれ日本儒教の進むべき道に就いて暗示を得ると共に現代教育の諸〻の弊害に就いて深い反省の眼をそゝがざるを得ない。

以上紙數の關係上意を盡せなかつた所が多い。拙稿「闇齋學の成立過程」（斯文第十五篇一・二號）「山崎闇齋の著書に就いて」（漢學會雜誌第一卷一・二號）「近世儒學史上に於ける闇齋學の地位」（漢文學講座第二卷）等を參照願へれば幸甚である。



山崎闇齋肖像（幸田成友氏藏）


山崎闇齋筆蹟（友枝高彦氏藏）



中朝事實

皇統

天先章

天先成而地後定然後神明生其中焉謂國常立尊

一書曰高天原所生神名曰天御中主尊

謹按天者氣也故輕揚地者形也故重凝人者上下

氣之精神也故位其中凡天地人之生元無先後

形氣神不可獨立也天地人之成未嘗無先後氣

倡之形和之神制之也蓋草昧屯蒙之間聖神立

其中悠久而不變是所以尊其神號國常立中

山鹿素行自筆中朝事實（伯爵松浦陞氏藏）

# 山鹿素行の一面

## ——夢想、佛老二氏、原源發機

小柳司氣太

山鹿素行の學問が儒學の上、國體學の上、また兵學の上に於て、燦然たる光彩を放ち、今日の所謂日本學の萌芽ともいはるべきことは、學海の公論にして、事新しく論評するまでもなし。されば余が茲に論ぜんとする事は、今まで世人から看過せられたことがらである。

元來素行は四書の一なる大學を以て、聖教の中心思想と認め、格物致知を入學の手段となして、どこまでも實學實理を主張し、聖教要錄卷下に、「周子作二太極圖一、尤足レ起二後學之惑一、是不レ知二聖人之道一。」といひ、宋學を以て性心を弄する者となして、痛く之を排斥したるにも拘らず、一方より觀れば、迷信にも近き所作あることは、甚だ自分の了解に苦しむ所である。そは他の事でない、夢を信仰したることである。

山鹿素行先生日記を通覽するに、實に夢に關する事非常に多し、今年代に隨つて之を摘錄せん。其

の（第一）は寛文四年（四十三歳）の七月二十日夜、「夢見レ超二出龍門三級浪一」とある。是れは素行自身が夢に鯉となつて龍門の激浪を突破したことであらう。（第二）寛文七年（四十六歳）二月九日「瑞夢、兩社壇中間社人衣冠立、奏二三番三一、告レ予以二愼守一、云梅保二百日之香一爲二名木一、晃冠雖二正物一、終日難レ冠レ之、聖人雖レ正、人難レ知、故汝今罹二此憂一、夢中甚信レ之、其神如二住吉伊勢八幡一。」と。當時は赤穂配流中のことなれば「汝今罹二此憂一」は之を指した者であらう。（第三）寛文九年（四十八歳）八月十二日「夜夢二曹禮二字一」とあるが其の意味は不明。（第四）寛文十年（四十九歳）八月十九日「夢二八句詩一、僅記二後二句一、柳楊嫋々隨レ風轉、松柏亭々經レ歲新。」（第五）寛文十二年（五十一歳）十二月二十日「夢想、春風ニ葵ヲ仰グ朝哉。」（第六）延寶六年（五十七歳）の六月二十五日には「小集數傳レ觴ト云章句夢想」とあり。十二月十七日「夜來夢二蚯蚓一」とあり。同月二十六日夕「夢二松平主殿頭一、著二禮服一、對レ予云、開闢以來之物語記レ之書、發機ト云フモノヲトリ出タリト云々。」この發機は原源發機をいふ。（第七）延寶七年（五十八歳）の八月十日「今曉靈夢。サヱカヘルヨノヒカリウレシサ。」十六日の記事に、「今朝啓二神夢一祝レ之。（私かに案ずるに吉夢をみたる時には、ある時日の間秘して、人に知らしめざるを、常法とするらしい。）八郎左衛門、十介等各入レ輿、去九日之夜、十日之曉神夢、夢云、著禮服之神人、烏帽子大文直垂。舞踏而收レ袖、愼而稽首、仰看云、院御所樣之御前云々、則添一首之歌、甚悅而退去。さゑかへる世のひかりめてたさ。上句失念、則起而書レ之、今日七日而開レ之祝レ之、今日者予之誕生之

日也。」とある。前記の如く目でたき歌を夢想したれば、誕生日に之を友人に示し、且夢中の様子など」詳かに說き聞かせ、自ら祝したわけである。又同年の九月十日「此夕☰☶見此卦、九二者流入㆓加越能州㆒、變爻☰☶天之下㆓有㆑山也且又見㆓上字㆒。」とあるが、此夕☰☶見㆓此卦㆒とあれば、實際に易占をなした者とも思はるゝが、また夢想かも知れない、何れにしても此の意味は不明。（第八）延寶八年（五十九歲）の七月朔日「朝晴晚雨、奉㆑拜㆓兩神主㆒、且燒香、拜㆓三神及稻荷大明神㆒、依㆓靈夢之告㆒也。」とあり。同月「二十四日夜夢想、（常に持つ神に祈をなすときは、心の願かなはぬはなし）故賀㆑之之所、二十六日到㆓松浦太守亭㆒、談㆓一封之義㆒終、二十七日書㆑之、二十九日於㆓松浦壹州吉野櫻書院㆒談㆑之渡㆑之、（是又有㆓夢瑞㆒）故予封㆓願文幷夢想之神詠㆒、奉㆑備㆓神覽㆒、自㆓今日㆒到㆓七日㆒、心齋禁㆓他火㆒、待㆓七日㆒而將㆑開㆑之。」とある。この三神とは、伊勢大峯諏訪の三神をいふ。同年八月十日「今朝賜㆓饗應於家僕等㆒、是去年今曉因㆓瑞夢之告有㆑之也、予從㆓昨夜㆒齋戒、今曉野荊有㆓瑞夢㆒。（鷹を夢みたること）」は、第七の條下に記せる如く、延寶七年八月十日サヱカヘルヨノヒカリウレシサの夢想ありたれば、滿一年後の當月當日、更に之を祝して、召仕に御馳走をなしたこと。又其の曉には夫人までが、吉夢を得たることをいふ。更に同月の十六日の條下に、「凡自㆓九日㆒予感㆓夢想㆒（去歲所夢想之神詠）齋戒到㆓今日㆒、今朝饗㆓家僕等㆒、凡自㆓十日㆒到㆓今日㆒、毎日有㆓吉祥㆒、所謂人人相會祝。」とあり。更に十八日の條下

に、「凡去年依二夢想之告一、自二十日一迄二十六日一、待二吉祥一之處、十八日石谷市右衛門告二堀田備中守事一、今日又堀田氏任二侍從一、且予又獻二肴於淺野主一、殆有二吉祥一之兆也、淺野主今年十四歳、故無二官位之望一、俄有二此仰一、甚恐悦云々。」とある。此の淺野主とは淺野長矩にして、當時十四歳なるが、俄に任官の御沙汰を拜したるを以て、かくいふ。又同月九日「今夕吉夢、松浦公亦夢二一畫中藏山之五字一云云。」「十日晴、今朝祝吉夢之告」とあり。「二十四日昨夜松浦太守夢想隨陪二字、今朝夙書レ之賜レ予。」とある。九月朔日の條に、「今曉予有二夢想一、ヨロコビモ知識モアリヤコノイヘニ、此句甚有レ感故、書二是於一紙一與二萬介一云、予家無二知識一而有レ慶、則不レ爲レ喜也、家之嘆也、有二知識一而從有レ慶、可二以祝一也。」と。「十月十五日、今曉之夢、忽洗二塵裡纓一云々。」とありて、其の翌日には之を祝し、召仕に御馳走を與へ、なほ同月の二十四日にも、「夢觀二丹羽玉峯一送二櫻一枝書簡一。」とあり、而して此櫻をば更衣と名づけた、それ櫻は纓と字形相類似すれば、忽洗塵裡纓は卽ち更衣にして、脱二舊衣一著二新纓一、卽是家門之大吉事也とある。十一月八日の記事に、「昨七日得二夢想之名句一、久堅の雲のうへ人かよふらし。」と。其の翌日之が爲に家僕等を饗應す。其の十一日には、「喜多村監物女共有二瑞夢之告一、饋二里（鯉か）魚二頭一。」とあり。二十一日には、「當月十六日祝二瑞夢一而享二家僕一。」とあり。其の翌日には、「今夜夢見二春夏秋冬是心根本之一句一。」とある。十二月十二日に瑞夢ありたれば、十八日は「今朝覗二

享燕於家僕二(是十一日因二嘉夢健骨之相之一曲一也)。」とある。(第九)延寶九年即ち天和元年(六十歳)の正月三日「今夕甚有二瑞夢一別書レ之、十一日朝賀祝二靈夢之告一、享二家僕一、去三日之夜、自二公方家一賜下色紙之題レ梅之御製歌(歌忘)併被レ題二惜日二字一之御繪上、謹而頂戴、故今祝レ之。」とある。將軍家より三日の夜歌及び繪を賜はりたると夢みたりとて、祝賀の宴を開いたことで、十七日にも、「今朝到二淺草寺一、朝賀二十一日之占瑞一、大享二家僕一。」とある。三月五日の記事に、「正月三日之夜有二惜日之瑞夢一、今日所レ拜之御親筆歲暮之二句、甚協二惜日之意一、奇甚奇甚。」とあるが、これは五日に素行が松浦太守を拜訪したる時、太守より將軍自筆の「風雲易下向二人前一暮上、歲月難下從二老底一還上。」の朗詠を示されたるをいふ。五月廿一日「今曉有二瑞夢一、初於二途中一得二扇子一、後牧野備後守以二扇子二本一與二松浦公一、公賜二一本於予一、此扇中有二五言四句詩一、將軍家之親筆也、其句中唯醒二(記の誤か)得一字一、彌字也、見二字書一滿也、是予心願滿足之義、甚有二瑞吉一云々。」とありて、廿七日は、例の如く之を開いて、家僕を享應した。十月十九日「昨夜夢二鷲鷹十數連一。」とあり、十二月三日「此曉靈夢、二日之夜、三日之曉所レ見也、甚奇、金ノカメ金ノ太刀ヲモチテ來テ我ニアタフル末廣ノ松(案金龜者印綬也、金太刀是又官人所レ帶也)。」とある。(第十)天和二年(六十一歳)の正月十五日に、「今夕夢二松平備前守奏者一、號曰二知樂一。」とあり、二月晦日「今夕夢、五層天守大屋瓦葺上有レ龍、其尾在二屋上一、其頭在二予前一、於二行路一見レ之。」

とあり、三月七日に之を開示した。五月廿四日「今曉有㆓奇夢㆒、有㆓台命㆒、令㆔僕爲㆓檜垣能㆒、僕答云、檜垣名亦不㆑知㆑之、況其能乎、然台命不㆑可㆓默止㆒、畏承㆑之、則今日ヨリ可㆑習㆑之、此時予上下禮服而答㆑之、夢覺之後、問㆓檜垣之能㆒、此能謠家四座共ニ爲㆓大事㆒、三老女之一也、云々。」とありて、三月朔日に之を開き家僕を饗應す。同月三日及び二十一日の記事には、昨年五月二十一日扇子を得たることの夢が、事實となりて實現したることを記す。八月一日の夕には、源頼朝が盃を迎ふる爲に、百神を送迎したることを夢み、八日の夕には、宇津宮大神宮及び二荒明神參詣を夢みたるため、翌曉家僕を饗したること。其の十三日には、高山の神社に詣りしに、輿中より自分の姓名を問ふ者ありたれば、之に答へたることを夢み、二十二日の夕には、稻葉美濃守から聖賢の差別を質問せられたることを夢み、九月十五日の曉には、黑色の直垂きたる大福神の舞を夢み、十七日には、神殿の屋根に上りたることを夢み、二十日の曉には、堀田筑前守が素行の著書を稱美して、「是非㆓人間作㆒、抑神作乎、云々。」の手紙を遣はしたるを夢み（按ずるに著書の名を擧げざれども恐くは原源發機ならん。）、十一月二十八日、澤庵和尚富士歌を記したる扇子に「知者ナラハ修業ニヤセン富士ノ山（此下句忘之）」を書き加へたることを夢みて、翌十二月の四日に之を開示す。其の二十四日の曉には、「夢太閤家與㆓天下於予㆒、告㆓之督遂㆒、云々、督遂ハ父ノ義也ト云ヘリ、予所謂是非㆓吉夢㆒、我非㆓其器㆒、又非㆓其事㆒、甚可㆑怖㆓畏之㆒也、廿四日夙起、書㆓之於反古紙㆒。」

とあり、豐臣太閤から天下を貰つたといふことは、實に奇拔の夢と謂はねばならぬ。(第十一)天和三年(六十二歳)の十一月七日に、「夢二奎瀛字一」とあり、十二月二十六日松浦太守から、孫六の刀及び碾茶壺を贈られ、又アケビノ木を夢みたることを記し、「凡一睡之間數多甚奇」とあり。(第十二)天和四年(六十三歳)の四月二十四日に、本阿彌が素行の短刀を鑑賞し、「是天下之名刀也、其値雖二何千枚一不レ可レ得レ之。」といふことを夢み、五月九日には之を開示して家僕を享す。七月二十六日には、茶屋神四郎といふ者來りて、大神君(徳川家康)が駿河より着御の由を知らしたことを夢み、二十七日には戸田公から石帶を賜はつたことを夢み、八月五日には大夜衣を着したことを夢み、九月十一日の夢には千手觀音を拜し、十月三日には「よいの雲間に月出て」を夢みたるが、そは先年の秋に夢占したる「サエカヘル夜ノ光ウレシサ」と相合して、一首となるといひ、九日に之を祝して金圓及び酒食を家僕に與ふ。(第十三)貞享二年(六十四歳)の三月二十八日に三葵紋小袖を着したることを夢む。

以上を統計するに(第一)寛文四年(四十三歳)に一回、(第二)寛文七年(四十六歳)に一回、(第三)寛文九年(四十八歳)に一回、(第四)寛文十年(四十九歳)に一回、(第五)寛文十二年(五十一歳)に一回なるも、(第六)延寶六年(五十七歳)には二回、(第七)延寶七年(五十八歳)に二回、(第八)延寶八年(五十九歳)には十一回、(第九)延寶九年即ち天和元年(六十歳)には四回、(第十)天和二年(六十一歳)には十三回、(第十一)天和三年(六十二歳)には二回、(第十二)天和

四年卽ち貞享元年（六十三歳）に七回、（第十三）貞享二年（六十四歳）には一回、前後通じて約四十五六回の多きに及ぶ。前賢の日記多きも、恐らくは夢を記すること此の如く多き者あらざるべし。實學實理を尙ぶこと素行の如き人が、何故に捕風捉影の如き事に、かくまで意を注ぎ、一々之を記したるか、實に怪むべきの至りである。素行の人たるを知らず、卒然として此の日記を讀みたらんには、何人も其の癡を笑はざる者あらざるべし。之に關して寛文八年四十七歳の時著はしたる謫居童問中本に、夢を解釋して以爲へらく、心性は活物なれば感通知識して、暫くも留らず、故に形態は睡るも心性は睡らず、平日の閑思雜慮是に夢となりて見はる、故に平生の志ほどに夢をも見るべし、夢中に我心の實、必ず見はる、古人も夢裡の工夫を論ず、されば夢中の事と雖も、我工夫の位を出でざれば、夢裡の惑を以て平日の惑を知り修むべしと。此の「古人も夢裡の工夫」云々は近思錄卷四に、程伊川の「人於二夢寐間一、亦可三以卜二自家所學之淺深一、如二夢寐顚倒一、卽是心志不レ定、操存不レ固。」とあり、又晉の陶侃が八翼を生じて九重の天門に飛び上り、八重までは至りしが、最後の一重に至り、左翼を折かれて地に墜ちたることを夢み、自ら窺窬の志を抑止したといふやうな話もある（晉書六六）。此等の點から素行の夢を論評するときは、其の大部分は、落々たる雄心、已みがたき功名心の現れた者、又一日も早く赦免せられて、赤穗から歸りたいといふやうな事柄が、大部分を占めてをるといつてもよろしい。例すれば（第

一）龍門の激浪を突破したること、（第九）將軍より色紙を賜りたること、（第十）台命によりて檜垣能を練習したること、堀田筑前守が素行の著述を評して「是非二人間作一抑神作乎」と激賞したること、又（第十三）葵紋の小袖を着したること、特に（第十一）の豐太閤から天下を讓られたること、本阿彌から自己の佩刀が千金にも換へがたき名劍なることを聞き、之を周禮と聯想したることなど其の一例である。

また延寶六年（五十七歲）の十月三十日には、「藥師院空賢爲レ予修二孔雀經一、七日斷食淬水、故予今朝精進潔齋。」とあり、延寶九年（六十歲）の正月十一日の元三大師の御鬮（オミクヂ）に「災轗時々退、名顯四方揚、政ノ故重乘祿、昇レ高福自昌。」を得たるを以て、十七日には家僕を會して祝宴を開き、天和二年（六十一歲）の八月朔日に於ける諏訪祭に當り、醴酒强飯等を供へて七難の卽滅を祈り、又十月晦日の記事によれば、朝夕の神拜に、咒文（恐らくは陀羅尼の類か）を誦したること見ゆ。此等の事も、素行以外の人ならむには、怪力亂神に近きことと評せられむ、實に意外の事といはねばならぬ。

然しながら素行の經歷を考ふるときは、此の疑問を解決する鍵を、發見することが出來る。素行は寬永十六年（十八歲）兩部神道を、高野山の按察（アゼチ）院光宥に相承し、尋いで忌部神道を廣田坦齋に受く。又兵學は孫子以來、陰陽道と密切の關係あり、十三篇の始計第一に、「天者陰陽寒暑時制也。」とあり、又

漢書藝文志にも兵家の中に陰陽家を掲ぐ。孤虚旺相刑德等は、兵家の常に注意する所にして、本邦の兵學も亦其の流を承けたる者なれば、素行も天象に留意したることは、日記に散見す。承應元年(三十一歳)三月五日の記事に、「亥刻西有ニ赤光一大如レ盆。」又寛永十二年(五十一歳)の十一月二十六日に、當日の日光の有様を詳細に圖解してをる。又三十五歳の時著した兵法奥義卷四秘傳目錄に「天時」と題して、大星之大事、日四季傳、十氣並ニ察氣之極意、(右出察氣篇)極意破軍破、北斗星事、理之大星事、天時日用事の六箇條を掲げ、兵法奥義講錄には之を詳說す。而して其の秘傳の一たる大星傳は、神武天皇が東征の時、日光を負うて敵に打ち勝ち給ひし事と、大なる關係を有する者にして、秘傳の第二たる乙中傳は、易の地天泰に本づく。且又當時の神道また兵學は、皆な秘傳密授で、其の間にいろ〳〵の嚴肅なる規則あり、決して今日の如く公開的の者に非ず。是れは元來其の學なり道なりを尊敬信する心から起つたことである、されば左府頼長の台記を見るに、易經を講讀する時の心得を詳かに記してをる、また古人敬虔の狀を知るに足る。前記の大星傳は、何人か之を創始したかは不明であるが、文獻上では北條氏長の、大星傳口訣を以て嚆矢となす。自分が之を知ることの出來たのは、全く有馬成甫氏の名著「北條氏長と其の兵學」による。同書の百三十五頁に曰く「兵家相承天理ノ大事大星ニ止レリ、星象雲氣ノ類、天官家ノ說甚多シト雖モ、其實ハ拘ルベカラズ、只此傳ノミ天理ノ宗、人君ノ表

ニシテ至德至尊、詞ヲ以テ盡スベカラズ、仰クベシ祟ムベシ、鄙人ノ齒牙ニカクルモ恐レ多キ事ナリ、故ニ前哲尊信シ奉リ、清淨潔齋シテ室ヲ清メ香ヲタキ、三社ノ尊號ヲ掛ケ奉リ、神前ニ於テ敬テ之ヲ傳ヘ來レリ、若シ輕易ニセバ神明ノ冥罰ヲ蒙ルコト疑アルベカラズ、實ニ懼レテ敬スベキ義也。」とある。氏長は之を素行に傳へ、素行亦た之を其の門人に傳へたることは、日記に散見す。此等の點より見るときは、或は孔雀經嚴修の爲に精進潔齋をなし、或は七難の卽滅を祈り、或は朝夕の禮拜に咒文を誦することも、あながち素行として不似合のことではない。(尙ほ大星傳のことは、拙著「續東洋思想研究」の一九〇頁を見よ)

且つ素行は、實學實理實證を尙びたれども、決して佛老二氏と水火相容れざる者に非ず。正保三年(二十五歲)の老子を講じたる時、武田道安は之を聽きて、惺窩以來の名講と評し、慶安三年(二十九歲)には、丹羽光重の爲に莊子の齊物論を講ず、其の翌年の十一月十四日にも、板倉重矩等の爲に、同樣の講義を行ふ。所謂「英雄同首卽神仙」ともいふべきか。又幼少の頃から祖心尼の撫育を受けたため、知らず知らず佛教に薰習せられたことは疑ひない。祖心尼は勢州田丸の城主牧村利貞の子にして、本名は阿能といふ、初め同姓對馬守へ嫁したるも、故ありて離緣、更に町野幸和の父幸仍の妻となり、老後澤庵禪師に歸依す。其の證道の歌に云ふ、「分けまよふ、山路を出て、ふる鄕へ、かへり來れば、しのの一むら。」當時大奥に有力なる春日局の近親なるのみならず、三代將軍家光の寵妾おふりの方の祖母で

ある。加之に其の人となり才徳兼備、老莊學にも通じたれば、自ら大奥に勢力を有し、且つ當時の老中の敬信を博したるために、素行を家光に推薦したほどである。故松浦伯爵著「山鹿甚五左衛門」によれば、此の祖心尼は、牛込濟松寺の開基にして、今日なほ同寺には禪尼木像二軀の外に、擧一明三（家光、澤庵、祖心三人の問答を記錄せるもの）及び自著の聖德太子十七憲法假名譯、及び假名法語を藏すといふ。自分は前記三書の中、最後の假名法語をば、國書刊行會發行の近世佛教集說によりて一讀したが、其の大旨は、禪學の明心見性を說いた者である。其の中に、聖人無夢といふことにつき「覺てこそ夢とはおもへ、けふの日に、あはずばいかで、人にかたらん。」と歌よむ。莊子の所謂「大夢ありて然後大覺あり。」といふの意であらう。素行は、此の祖心尼を非常に尊敬したることは、日記に明かである。又萬治元年（三十七歲）の十月十六日、松浦鎭信と與に、黃檗山第一世隱元禪師と天澤寺に面會す。日記に「問云、相㆓見大功德㆒、寔千歲之希遇也、（弟子）無㆓一法之可㆑問、伏乞㆓和尚垂示㆒、師云、無㆓可㆑問者㆒、是何物、……師云、以㆓佛法㆒勿㆑爲㆓戲事㆒、予起拜遂退、師再喚云、莫㆑拋㆓擲此事㆒、予起拜退。」とある。又萬治三年（三十九歲）の日記によるに、第二世木庵禪師とも親交あり、そは堤氏のために太公望の肖像に「一竿有㆓萬奇㆒、獨往獨來時、八百開㆓基業㆒、溢流渭水涯。」の五絕を賛し、更に同禪師よりも「周世雖㆓脫落㆒、寧免㆓弄術氣㆒。」といふ贊を得たることである。其の他僧侶には釋澄、釋惠、釋幽巖、鐵心和尚、大善院、また

居士遁世の前田源心、石谷士入、同三空、曾我覺齋等と時々來往して、交を締ぶ。

治國平天下を以て聖學の標的となし、禮樂を重んじたる素行其の人が、佛老二氏と此の如き交渉あることは、抑も何の故ぞ。鄙見は、かく解釋す。乃ち儒學の本質は餘りに簡易明白にして、人の知識欲を滿足せしめがたし、隨つて何かもつと奥深い深遠微妙な背景を求めたくなる。又儒學の實踐道德は、五倫また三綱五常といふやうな類、乃至は曲禮内則等に示さるゝ嚴正な規則である。一張一弛は文武の道なりといふこともあるわけで、人といふ者は、朝から晩までキチンとした、生活ではやりきれない。衣冠束帶も必要なるが、三尺一筋で箕踞することも許容せらるべきであらう。素行は禮を重んじたるも、宋學の持敬卽主一靜坐に反對したることは、聖敎要錄卷中「敬恭」の條にも明かに記さる。素行が方外に交を結びしも、恐らくは此の如き心もちから來た者でなからうか。且つ又武士道は、古來から禪學と大關係あることは、何人も知る所にして、素行の兵學も、或點より觀察する時は、老子の「吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而退尺。」(第六十九章)と一味共通の思想なきにあらず。其の三十歲の時著した兵法奥義卷一陰陽兵源に曰く「夫萬物不出天地、天地之本陰陽也、陰陽之本一而已、故一生二、二生三、三生萬物是也、一之本無物也、無物之間、無聲無臭、而萬物之始也、老子曰、無名天地之始是也、‥‥於明德本體、一念未萌、七情未發之地、無名無物而混沌焉、更無

相對之物一、若意發動、而喜怒哀樂已發、謂二之陰陽已判一、善惡相分之機、於レ是相對之物出生、相對之問、若離二其道一、則爲二外物一、內心苦而起二妄迷之想一、是一心之主人爲二敵之所一侵掠也、云々。」と。更に素行の師たる北條氏長の士鑑用法は、此の心法を佛說もて說明す。曰く「天地未開以前ヲ空劫ト云、天地出來初ルトコロヲ成劫ト云、ステニ現在シテ唯今ノトコロヲ住劫ト云、亦年數ツキテ天地モヤフル丶時節アルトコロヲ壞劫ト云、空劫ヨリ生シテ壞劫ニ死、亦モトノ空劫トナル、シカレハ成住壞ノ三段ハ假ニ動クトコロニシテ其本體ハ空劫也、此空劫ヨリ天地生シ萬物モ出來ル、一理ヨリ生シテ一理ニ歸スト云此故也、サレハ空劫ハ天地ノ心ナリ。」と述べて、兵法の神髓は、此の天地の心卽一切皆空を主とすべきことをいふ。

顏眞卿の忠節は何人も知る所なるが、顏魯公文集を觀れば、道敎の信仰家である。耶律楚材の經國濟民また一代の政治家たるに恥ぢざるが、湛然文集には、佛敎に關すること頗る多し。朱子は如何、五十八歲の時、陰符經及び參同契を注釋したるに非ざるか。水戶の義公は如何、常山文集を見れば、佛徒との贈答頗る多し。特に心越禪師に對しては傾倒尤も太甚しく、禪師遷化の後、親しく其の墳墓に展し、偈を唱うて曰く、「謹詣越師墳墓前、叫天打地欲レ驚レ眠、一朝挑起法燈火、照破東方萬八千。」と。（案ずるに此偈は常山文集になし、東皐全集による）嗚呼道は大なり虛なり、心は深し遠し、山鹿語類卷三十三聖學一の「論異端」、

及び聖學三の「道家者流」を讀みて、前述の行事と相對照するときは、何人も素行の矛盾に驚くであらう、然しながら素行の經歷と學問とを參照する時は、思半ばに過ぐる者あらんか。

素行の著書を通覽するに、三十五六歲頃までは、大略兵法及び武士道に關する者多く、四十四歲には聖教要錄成り、四十六歲には四書句讀大全の筆功畢り、四十八歲には中朝事實成る。以上の書物は、大部分すでに世上に流布したるが、輓近國民精神文化研究所より發行せられたる山鹿素行集二卷（引きつゞき刊行の豫定）の第一卷目に、收錄せられたる原源發機三卷、及び其の諺解三卷と、高弟長嶋元長撰發機諺解中圖說私言一卷は、始めて公にせられたる者である。此の書は何時頃著はされたる者であるかは不明なるも、發機卷下の奧書には延寶六年（五十七歲）の夏五月に批點し畢り、九月九日に、津輕信政侯が之を寫したことが記されてゐる。又諺解の上の終には、同侯が天和二年（六十一歲）の二月に拜授筆寫したること、中卷には同年正月、下卷には二月同侯の筆寫にかゝることを記し、更に「貞享元甲子曆三月九日應大君之仰に批點爲奉之云、積悳堂」といふ文ありて、素行軒及び藤原高祐といふ二顆の押印あるを見る。されば此の書は素行晩年の著述にして、或は未定稿なるやも知れず、隨つて他の書の如く廣く世に示さざる者と思ふ。故に日記にも、前に記せるごとく延寶六年（五十七歲）の十二月二十六日の夕、夢中に松平主殿頭と此の事を談じたることを以て始めとなす。其の翌年八月二十一日に、「今日於津輕公談發

機一。」とあるのみ。

之を要するに、本書は、素行が晩年圓熟せる思想もて、自己の學問思想の淵源を示したる者にしてその思索的方面は、主として易及び中庸に本づき、經綸の大策は之を大學に取る、其の意味深遠にして、且つ周易の如く象數を用ゐたる者なれば、印刷も容易ならず、故に今は唯だ其の上卷を摘錄すること、左の如し。

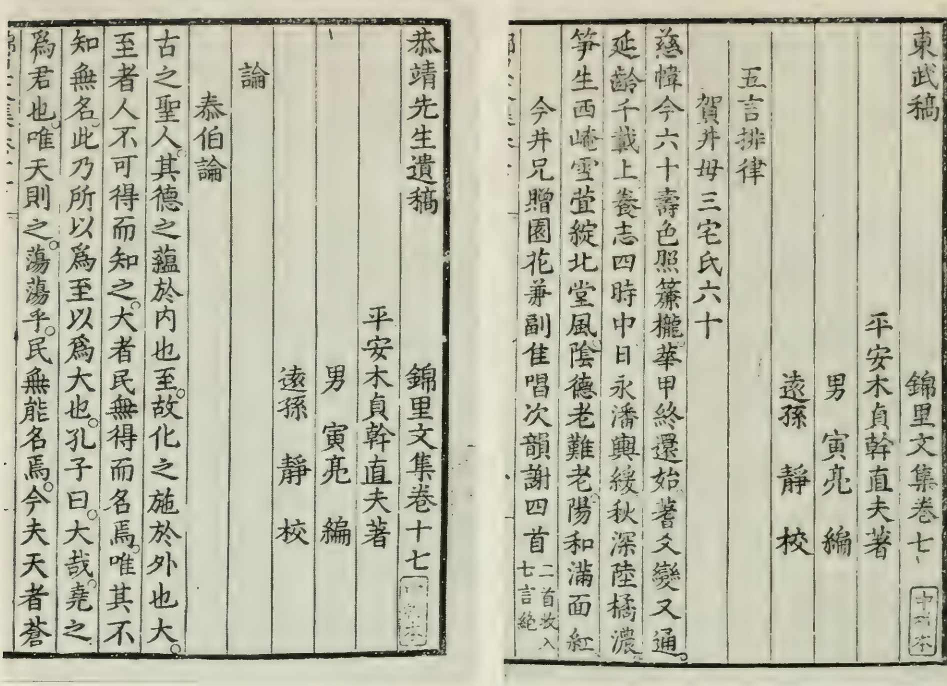
上天下地、物在二其中一、天動而無レ息、故長久也、地普而無レ息、故厚重也、人物互根、故無窮也、人由レ道而行、道因レ禮而立、須下亙二萬古一、明二今日一、施中後世上也。

天圓也、故君子之變無レ疆(キハマリ)矣、故君子立レ政設レ法矣、可レ動而動、可レ靜而靜者聖人也、故足三能成二萬物一矣、或動或靜、從レ己而放爲(ホシイマヽニ)二直行一而無レ教者物也、或剛强或柔弱、待レ人而成者器也、故物者卑、而器者不レ貴矣。

天地長久也、何以長久、不レ得レ已也、人物綿々也、何以綿々、無二造作一也、何以無二造作一、不レ得レ已也。

不レ識者必言、吾此象準二擬易一、天機之妙、不レ如レ斯不レ亙二古今一、象數大異二于易一、而其用表二裏于易一。

今日より之を觀れば、易に擬したること、或は過高用奇の嫌を免れざるべきか。元來易は、未だ文字あらざる時代の製作、隨つて其の始め象數のみ、今の經文は唯だ之を說明したる者、象數は本にして、經文は末なり。然るに揚雄の太玄、司馬溫公の潛虛、みな說明の文章ありて、然る後に象數を設く。素行もまた同樣である。自分より見れば、文章もて十分に發機の思想を現はすこと、格別の難事と思はれない。然しながら、そはまだ素行の微妙なる思想を、看破すること能はざる妄評かも知れない。實理實學を主張する素行が、如此き神秘的な象徵的な發表法で、其の思想を見はし、然かも前に記せる如く松平主殿頭よりは、開闢以來の物語なりと評せられたることを夢み、更に堀田筑前守よりも、是は人間の作でない、鬼神の作であると激賞せられたることを夢みたるほど、自負したることは、一寸不可解の事と思はるゝも、其の夢想を信じ、兩部神道の傳授を受け、老莊及び釋氏に出入したることを知る時は、此の疑問も、或は氷解に庶幾からんか。



東武稿

錦里文集卷七

平安木貞幹直夫著

男　寅亮　編

遠孫　靜　校

五言排律

賀井母三宅氏六十

慈幃今六十壽色照簾櫳華甲終還始蓍爻變又通延齡千載上養志四時中日永潘輿緩秋深陸橘濃筝生西崦雪萱綻北堂風陰德老難老陽和滿面紅

今井兄贈園花兼副佳唱次韻謝四首 二首收入七言絶

恭靖先生遺稿

錦里文集卷十七

平安木貞幹直夫著

男　寅亮　編

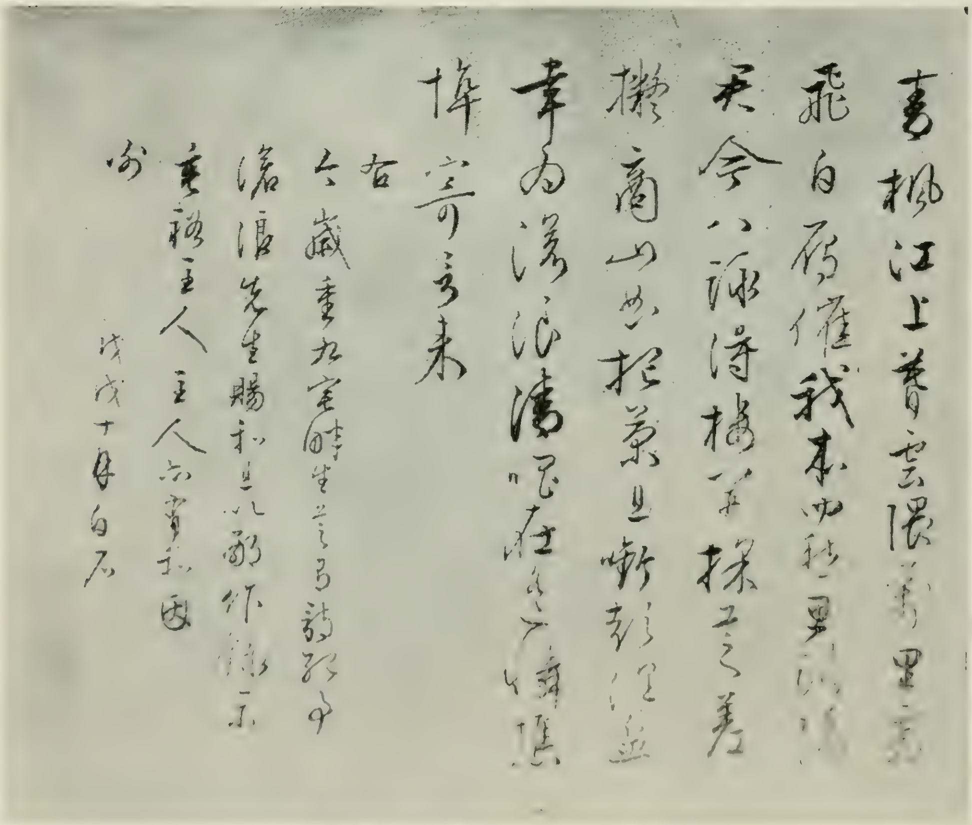
遠孫　靜　校

論

泰伯論

古之聖人。其德之蘊於內也至。故化之施於外也大。至者人不可得而知之。大者民無得而名焉。唯其不知無名。此乃所以爲至以爲大也。孔子曰。大哉堯之爲君也。唯天則之。蕩蕩乎。民無能名焉。今夫天者蒼

錦里文集（靜嘉堂藏）



新井白石筆蹟（萩野端氏藏）



新井白石肖像（狩野亭吉氏舊藏）

# 木下順庵と新井白石

澤田總清

德川時代の儒者の中、その門下より幾多の俊才が輩出し、教育者として名を成した者で、木下順庵の右に出づる者はあるまい。彼は朱子學を繼承し、趣味廣く且つ博學であつた爲に、その門下からは經學・詩文・歷史・律學等諸方面の大家が續出した。世に之を木門と稱して、當時に於ける一種の登龍門の如き觀があつて、實に桃李門に滿ちてゐた。而して新井白石の如きも亦その門下の俊秀である。順庵（二二八一――二三五八）名は定幹（さだとも）、字は直夫、通稱は平之丞、號は順庵・錦里・敏慎齋・薔薇洞などと云つた。恭靖は歿後門人の私諡である。その先は平家の忠臣彌平兵衛宗清の裔である。子孫は世々伊賀に居つて栢植を氏としたが、四世の祖が、故あつて京師に移り木下氏と改めた。彼は木下意春の次子で京都に生れた。幼にして岐嶷、五六歲の頃、善く書を讀み字を學んだ。聰明卓犖、常兒と異なる所があつたので、鄕里では既に神童との評があつた。よく詩文を作り、題詠の如き頗る多かつ

た。僧天海は一見之を奇として法嗣としようとしたが彼は肯んじなかつた。年十三の時、太平頌を作つて世人を驚かした。世人はその詞旨の淳正なるを以て、之を國瑞とした。

## 太平頌

皇帝陛下、卽祚以來、物無二違拒一、朝廷清明、無レ有二欺蔽一、光二被四表一、格二于上下一、克明二峻德一、以親二九族一、九族既睦、平二章百姓一、省二刑罰一、薄二稅斂一、深耕易レ耨、耕父推レ畔、漁豎讓レ陸、是以四海之內、學校如レ林、庠序盈レ門、遙集二乎文雅之囿一、翺二翔乎禮樂之場一、國家殷富、上下交足、卿士庶人、黃童白叟、踊躍歡呀、或慶二於庭一、或歌二於市一、或抃二於野一、太平之期、適當二此時一、皇帝神聖、通二達先古一、聽聰視明、惟精惟一、天錫二皇帝一、寵臣碩輔、博問遐觀、以置二左右一、億載萬年、下民無二敢侮一、天錫二皇帝一、與レ天齊壽、登二玆太平一、無怠永久、億載萬年、爲レ父爲レ母、而後既傳二位今上一、移二殿內園一、其基レ德也、隆二於姬公之處一レ岐、其垂レ仁也、富二乎有殷之在一レ亳、澤至二四海一、配二天光宅一、冠二道德一、履二純仁一、被二六藝一、佩二禮文一、含淳咏德之聲盈レ耳、登降揖讓之禮極レ目、其宮室也、體二象乎天地一、經二緯乎陰陽一、據二坤靈之正位一、倣二大紫之圓方一、張二千門一而立二萬戶一、順二陰陽一以開闔、其中有二靈囿一、草則藿蒳豆蔻、萋葉非レ一、江離之屬、海苔之類、布二白蔕一、御二朱蕤一、光色玄晃芬馥、木則楓柙豫章、栟櫚枸榔、緜杭杶櫨、松梓椅桐、擢レ本千尋、垂

レ陰萬畝、攢レ柯挐レ莖、垂葩掩葉、故鳳凰巣二其樹一、麒麟臻二其囿一、神爵栖二其林一、甘露零二其庭一、春見二椿花一、開二八千壽一、夏和二薫風一、彈二舜五絃一、秋因二菊花一、延二百歳齡一、冬因二尺雪一、知二豐年瑞一、其靈沼黄龍遊二其淵一、醴泉流二其塘一、於牣魚躍、鳥則玄鶴白鷺、黄鵠鵁鶄、鶺鴒鴉鴟、鳧鷖鴻雁、沈二浮汎三濫乎其上一、孟子所謂賢者而後樂レ此、可レ謂レ是也、臣生二於窮巷之中一、童蒙無知、雖レ然遭二斯清世一、敢不三略陳二其愚衷一。

之を大納言烏丸公に獻ずると、公は之を後光明帝の上覽に供した。帝覽て大いに稱賞し給うた。その時、烏丸公は七絶一首を賦して順庵に賜ふと、彼も亦一首を賦して之を奉謝した。

甲戌殘臘、烏丸亞相辱惠二詩一首一、句句聯珠、字字綉錦、於レ余爲二一世之華袞一、謹塵二高韻一奉レ謝。

賢臣常攤百家篇。聖主施仁民被レ憐。佳什恰如二杜工部一。古今出入幾千年。

その後、松永尺五の門に入つて、勤苦碎勵、學大いに進んだ。尺五は藤原惺窩の門人であるから、彼はこゝで程朱性理の學を修め得たであらう。彼は一頭地を拔んでてゐたので先生から大いに賞賛された。同門の友に貝原益軒・安東省庵・宇都宮遯庵の如きが居つたが、皆彼を推重して措かなかつたといふ。如何にその俊逸であつたかが知れよう。

長ずるに及んで、但馬守柳生宗矩のお伴をして江戸にやつて來た。或人が之を家光將軍に推薦したのであつたが、會〻讒者のために阻まれて果さなかつた。そこで京都に歸り、東山に屛居して書を讀み子弟を敎授すること殆ど二十餘年であつた。是に於て聲名天下を動かした。加賀侯その名を聞いて幣を厚うして彼を招聘しようとしたが、彼は固辭していふに、「先師松永先生の子某、家學を繼承して未だに仕途に就かない。爲に家道屢〻空しいから、どうか彼を用ゐてその宿望を得しめて下さい。」と。侯之を聞いてその義に感じ、以て古人の風があると嘆じ、遂に松永氏と一緒に之を招聘したといふことである。彼、侯に仕ふるや、或は江戸に或は京師に陪して、往來絡繹、氈席暖まる暇がなかつた。嘗て侯に從つて江戸の邸に在つた時、會〻會津侯は山崎闇齋を聘し、備前侯は熊澤蕃山を用ゐて二人皆江戸に居つて名聲相匹敵してゐた。順庵此の間に在つて少しも遜色なく、名聲二人と軒輊してゐた。之によつてもその學識德望の深かつたことが知れる。

天和二年、將軍綱吉は彼を召して幕府の學職に補し、命じて國史を修めさせた。時に年六十二であつた。古人が仕官にあせらなかつたことはこれでもわかる。綱吉自ら周易を講ずるや、彼、命を奉じて經筵に侍した。

恭聞₂御講₁紀一首

淸時多二暇豫一。　御講演二乾坤一。　瀾辯如レ流レ地。　玉音欲レ徹レ天。

儒風通二四表一。　聖澤被二無邊一。　利レ見二大人德一。　仁聲入二舜絃一。

はその時の詩である。嘗て侯命を受けて中庸を講じた。その年既に老いたるが爲に近臣をして之を勞らはせた。然し彼は恩に報ずるの日の淺きを以て侍奉を怠らなかつた。至誠以てよく仕へ、終日整齊嚴肅であつた。また家に在るや、常に盛服端坐してゐたので、人之を望むこと神の如くであつた。天資至孝、よく父母に事へ、兄弟に宜かつた。嘗て父母の歿するや、三年の喪禮を實行した。その榮達するに及ぶや、先塋に遠ざかるを恨み、歳時の祭祀には未だ嘗てその盛敬を盡さないことはなかつた。元祿十一年十二月二十三日、七十八歳で歿した。池上の本門寺傍にその墓があつたのを、大正三年一月に大塚の先儒墓地に改葬した。また京都永觀堂にもその墓がある。明治四十二年九月、正四位を贈られた。著す所に錦里文集、十九卷（十冊）がある。詩文集であつて、その歿後、天明七年十二月に子孫が上梓したものである。寛政元年に再刻されてゐる。その中、西京稿五卷、東武稿五卷、北海稿一卷、對韓稿二卷、于役稿一卷、和歌題一卷は主として詩であり、恭靖先生遺稿三卷は主として文であり、附錄一卷は追悼詩祭文である。この恭靖先生遺稿三卷、附錄一卷は續々群書類從に收載されてある。（班荊集一卷が順庵の著だとしてある書もあるが、之は順庵の著ではなくて、その子寅亮

の著である。）三宅澹庵の女を娶つたが先に歿し、後再び娶らなかつた。二子を擧げた。長、敬簡は先に歿し、次、寅亮（汝弼）家を嗣いだ。その葬時、遺言を以て孝經一卷を棺中に藏めた。彼の門下からは名士が輩出した。

木下順庵
- 新井白石（木門の五先生・木門の十哲）
- 室鳩巣（木門の五先生・木門の十哲）
- 雨森芳洲（木門の五先生・木門の十哲）
- 祇園南海（木門の五先生・木門の十哲）
- 榊原篁洲（木門の五先生・木門の十哲）
- 南部南山（二妙・木門の十哲）
- 松浦霞沼（二妙・木門の十哲）
- 三宅觀瀾（木門の十哲）
- 服部寛齋（木門の十哲）
- 向井滄洲（木門の十哲）
- 柳川震澤
- 木下汝弼（號、菊潭）

安東省庵
西山西山（健甫）
岡島石梁
青木東庵
岡田竹圃
堀　山輔（順之）
板倉復軒
圓田雲鵬（宗叔）
石原鼎庵
陶山鈍翁

順庵は詩文集の外には著述がないので、その學説として見るべきものはない。然しその教育家として成功したのを見ると、その高潔なる人格者であつて、所謂道學者であつたことが知れる。その子寅亮の小傳に「後不再娶、孤枕獨衾如野僧然、平生一無嗜欲、食必淡泊、服必黄白。」とあることや、又、室鳩巣の祭文に、「嗚呼先生、徳業之崇、文章之懿、不獨天資之使然、亦由學術之自致、故

其行之篤也、在レ家則事レ親而孝、事レ兄而弟、以及二室家宗族之類一、恩義之厚、無レ所レ不レ至、在レ國則事レ君以レ忠、雖二身服レ勞不一レ避、待レ衆以レ誠。」とあるに見ても、その徳行家であつて、身を以て子弟を感孚せしめたもののやうに思はれる。

彼は程朱の學を奉じた。

述懷

滔滔儒流天地始。發レ源太極少二人窺一。羲黄堯舜百王祖。孔孟程朱萬世師。敬直義方宜レ守レ靜。博文約禮豈求レ奇。東夷小子空勤苦。佛法千年涵二四維一。

朱子

遺經千歳決二群疑一。義理精微抽二繭絲一。仰止鵞湖論二舊學一。確乎鹿洞定二新規一。百王著鑑編二綱目一。四子階梯錄二近思一。頓悟金谿何足レ貴。泗源嫡派舍レ君誰。

これによつても彼が程朱を尊信したことが知れる。然し彼は經學に於ては古註を併せ取つた。先哲叢談に、「先生恆言、非レ熟二讀十三經注疏一、則不レ可レ謂レ通レ經矣。由レ此觀レ之、所謂古學亦先生爲二之開祖一。」とあつて、十三經注疏の熟讀の必要を論ずると共に程朱を奉じた所を見ると、彼は寧ろ折衷派の開祖であると謂ふべきである。かの榊原篁洲の如き折衷的態度を取つた人がその門下から出たのも

怪しむに足らぬことである。かくの如くその學風の偏狹でなかつたことが、彼をして偉ならしめた所であらうし、またその門下に英俊が輩出して、有用の才たらしめた所でもあらう。

順庵の辭藻の美は、また一代の冠たるに足るものがある。

元祿紀元仲冬庚寅、大駕謁二大成殿一、親行二拜禮一、恭紀二一律一、呈二弘文學士一。

大駕親臨典禮成。儒林榮茂氣崢嶸。周時俎豆觀二文廟一。魯國絃歌聞二武城一。德配二乾坤一漸被遠。道輝二今古一日星明。黃鐘吹起陽春化。四海仁風頌二太平一。

は將軍綱吉が元祿元年十一月に先聖殿に詣でた時の作である。

聖廟落成

新廟嶄焉峙二碧空一。昌平佳號古今同。雲章煥赫大成殿。天運循環三代風。玄聖無爲星拱レ北。素王餘澤水流レ東。祇今四海光輝遍。瞻仰扶桑瑞日紅。

これは元祿三年に聖廟が神田臺に新成した時の作である。また師友門人との交際上に於ける作も多く見られる。

次二新井白石席上所レ示韻一

詞林文會共忘レ機。終日談論玉屑霏。白石詩名無二異論一。井丹學術有二餘輝一。已看藻思參差發。更識英聲次第飛。慚愧郢歌容易唱。陽春振古和人稀。

書齋梅依二白石韻一

窗梅紅與レ白。二妙在二同臺一。醉向二瑤池一去。清從二姑射一來。黃眉臨レ卷展。春眼入レ簾開。多謝慇懃意。老興爲レ君催。

夏日從二尺五先生一遊二省庵安東君之亭一、明日君詩以見レ謝、先生有レ和、余亦效レ之。

千里從レ師炊二桂玉一。三年學レ道見二羹墻一、術兼二兪扁一功常夥。詩逐二曹劉一名益彰。避レ俗獨耽黃卷樂。懷レ親時向白雲望。青藜昨夜來相訪。吹出文章萬丈光。

秋日扈二從栗別館一應レ教

華館高樓倚二曲碕一。畫船浮處望無レ涯。滄溟鵬擊三千里。白嶺龍蟠億萬基。大網橫波白魚躍。雙橋映レ水彩虹垂。賢侯遊豫非二何事一。正是秋成省斂時。

これらによってその一斑は窺知されよう。江村北海は日本詩史で、左の一心三世と老樹名花の二聯の巧警を激賞してゐる。

楠公

獨木支ニ天下一。有レ誰攀ニ厥喬一。一心存ニ北闕一。三世護ニ南朝一。遺愛借ニ河内一。餘寃激ニ浙潮一。忠魂儼如レ在。楚些不レ須レ招。

遊ニ自性精舍一。

松杉蕭寺靜。涼氣滿ニ簾櫳一。老樹千年綠。名花百日紅。鳩呼午天雨。蘭馥暮檐風。方外交如レ水。洗心眼自融。

次の鄴臺驪岫と峥嶸宛轉の二聯の如きは、更に一層の精彩あるものである。久保天隨博士が、「大曆十才子の後に陷らず」と評したのも尤なことであらう。

豐臣廟感懷、奉レ和ニ尺五先生韻一

松下行厨豐廟邊。登臨轉感艷陽天。鄴臺人去荊蓁合。驪岫雲還陵谷遷。殘樹空榮荒逕裏。餘香晴度晩風前。年年惟有花時節。醉無ニ狂歌一翠幕連。

斸雲江公賜和ニ元日鄙作一再依ニ前韻一奉レ謝

空中百尺揭ニ虹竿一。更見高人地步寬。北海鵬程搏ニ萬里一。丹山鳳采照ニ長安一。峥嶸意氣劍衝レ斗。宛轉文詞珠走レ盤。未レ償平生望霓願。先將レ詩兩洗ニ酸寒一。

物徂徠は、「錦里先生者出、而搏桑之詩皆唐矣。」といひ、服部南郭は、「錦里先生實爲㆓文運之嚆矢㆒、雖㆔其詩不㆓甚工㆒首㆓唱唐㆒。」と云つたのに見て、その才藻の勝れてゐることがわかる。彼の詩には題詠が多く、また詠史も多い。

順庵の文は醇正である。その罵燈文の如きは構想も僻句も甚だ面白い。書には朱舜水との應答のものが頗る多い。室鳩巣が堀正修に答へた書に、

恭靖先生在㆑京時、酷愛㆓韓文㆒無㆓日不㆑讀、毎㆑出輒以㆓韓文㆒自隨、及㆓晩節東遷後㆒、又愛㆓王守仁之文㆒、常以㆓其集㆒置㆑傍、有㆑暇頻頻讀㆑之、一日語㆑僕曰、舜水朱子甚敬㆓守仁㆒、得㆓其文㆒必改㆑容稱嘆。

とある。その見識の公正なことが知れる。彼は實に經學詩文共に元祿時代の倡首であつた。

新井白石（二三一七――二三八五）は木門の俊英であつて、獨り儒者たるのみならず、政治家、地理學者、史學者、言語學者たるの點に於て異彩を放つてゐる者である。名は君美、初名は璵、字は在中・濟美、號は白石、また紫陽・錦屏山人・天爵堂・勿齋等である。通稱は與五郎、次に傳藏、次に勘解由と云つた。家はもと新田氏の系統であるが、先祖が上州新居に居たので、それから新井を姓とする

やうになつた。父は與次右衞門正濟で、江戸に出て久留里侯土屋利直に仕へた。明暦三年に侯邸燒けて父は侯の姻戚内藤右近大夫政親の柳原邸に居つた。白石は此處で生れたので侯は戲に火兒と呼んだ。白石、生れて穎悟、三歳、字を寫し、六歳、書を誦し、神童の稱があつた。幼時の苦學の狀は、「折りたく柴の記」によつて知れる。延暦三年、十九歳の時、父は主家を辭したので白石も窮乏の裡に置かれたが、勉學は倦まなかつた。「大丈夫生不レ得二封侯一、死當レ爲二閻羅一。」と彼の云つたのは有名な語である。都下の富人河村瑞軒が婿としようとしたが拒絶したことや、後又、師の順庵が彼を加賀侯に推薦しようとした時にも、學友加賀の人岡島仲通（名、達）を代りにすゝめて自分は行かなかつたことは、共に有名な美談として語り傳へられてゐる。天和二年二十六歳の春、大老堀田正俊に仕へ、貞享三年三十歳の時、木下順庵の門に入つてその敎を受けた。元祿四年三十五歳の時、堀田家を辭して、淺草で書を講じて僅かに生活を支へてゐたが、同六年の暮、師の推擧によつて甲府侯德川家宣（當時は綱豐）に仕へ、待遇日に渥きに至つた。命を受けて藩翰譜を書いたのは十四年である。家宣が六代將軍となるに及んで、祿五百石を賜はり、文學を以て仕へ、政務に參與し、獻替する所が頗る多かつた。正德元年冬十月、朝鮮の使者が來聘した時、從五位下に敍せられ筑後守に任ぜられてその事を掌つた。且、五百石加增されて千石となつた。これは儒者中、稀に見るの榮進だつた。然るに家

宣は正徳二年に薨じたので、そこで彼は政治上から退隱して、餘生を專ら讀書と著述とに送つた。享保十年五月九日歿、年六十九、淺草報恩寺に葬られたが墓石は今は、中野區昭和通一丁目高徳寺に移されてある。明治四十年十一月十五日、正四位を贈られた。

白石は人と爲りが傲岸で、徳量の少かつた憾がある。從つて容貌も眼光が鋭くて、いかめしかつた人であつたらしい。

自題㆓肖像㆒詩

蒼顏如㆑鐵鬢如㆑銀。紫石稜稜電射㆑人。五尺小身渾是膽。明時何用畫㆓麒麟㆒。

これによつてもその容貌はほゞ想像されよう。また先哲叢談に、

初仕㆓堀田侯㆒時、寮友有㆓小瀧某者㆒、毎謂㆓白石㆒曰、余少時受㆓兵法于由井正雪㆒、今觀㆓子之面容㆒、正與㆓正雪㆒絕相類。

とあつて正雪の面貌に酷似してゐたことがわかる。

彼は門弟が少かつた。從つてその學は傳はらないが、著書の多いことは近世稀に見る程で、凡そ三百餘種ある。その學問の卓越せること亦他に比類なき程である。その學は主として實用功利であつて、特に制度經濟に長じてゐた。著書は「新井白石全集」に收められてあるが、その中の主なるもの

について述べると、藩翰譜・折たく柴の記・讀史餘論・古史通の如きその雄なるものである。また言語學の著としては東雅がある。采覽異言・西洋紀聞の如きは蘭學の開祖をなせものである。以てその學の洽博なるを知るに足りよう。當時の學者の著書は多くは漢文であるが、彼は國文を以て書いたものが多い。此點に於ては貝原益軒に似た所がある。而も雅俗折衷文の模範とするに足るものが多く、今日に至るまで世に傳誦されてゐる。

先哲叢談に「白石仕六年、遭レ災、爲賜二五十金一、白石謂、都下數有レ火、今以二此賜一治二屋宇一、亦必當三一朝灰二洪恩一、豈可レ不三別有上所レ用乎、乃以二賜金一命二函人一、制二甲冑一領一、其意欲三一旦綏急擐以殉下節也、居五年果復遭レ災、家什蕩盡、獨以二其甲冑一隨レ身得レ無レ恙矣。」とあつて鳩巣文集後編卷十に「朝散大夫源君美鎧記」と題する文のあるのは是である。

十六歲の時、作る所の詩、百首あつて、之を朝鮮人に示して評正を乞うたことがある。然し彼は詩を能事とする者でなく、たゞ詞章を以て遊戲となしてゐた位で、單に興を遣り懷を述ぶるに過ぎなかつたのである。故にさほど刻苦する所もなく、その才藻の慧穎が自ら發して詩となつたものである。然しその詩は格調高雅、語句よく精練されてゐる。「白石詩草」「白石先生餘稿」によつて之を見ることが出來る。先づ順庵先生を悼む詩が十數首ある。

挽㆓恭靖木先生㆒

星軺徵聘擁㆓蒲輪㆒。君昔歸來北海濱。一世共推天下老。百年空化墓中人。遺書何用求㆓封禪㆒。前席誰因問㆓鬼神㆒。惆悵九原無㆓起日㆒。寒烟荒草欲㆑生㆑春。

春日追㆓軺恭靖先生㆒詩

文釆風流自一家。才名自㆑小動㆓京華㆒。朱門客對金罍酒。白社僧烹石鼎茶。鷲嶺月明尋㆓桂子㆒。龍門浪暖問㆓桃花㆒。舊游題處皆陳跡。誰拂㆓紅塵㆒護㆓碧紗㆒。

その師を思ふの情の厚きを知るに足りる。

陪㆓錦里先生㆒會㆓祇秀才宅㆒和㆓主人韻㆒

南州稱㆓竹箭㆒。材美舊倶聞、鄴下思㆓曹植㆒。吳中想㆓陸雲㆒。庭蘭連㆓玉樹㆒。野鶴出㆓鷄群㆒。自作㆓登龍客㆒。通家許妙文。

室鳩巢と唱和の詩は頗る多い。

九月四日答㆓北藩室直清㆒和㆓中秋韻㆒

玉露凋㆓梧葉㆒。秋風墜㆓井欄㆒。劍鳴龍氣冷。書斷雁聲寒。北塞浮雲隔。西牕落月殘。黃花催㆓節序㆒。爭耐㆓異鄉看㆒。書劍遙留滯。聊茲及㆓勝遊㆒。金風吹㆑雨斷。素月隔㆑雲流。瑤席澄㆓秋思㆒。蘭樽緩㆓夜

愁㆒。佳期多易㆑失。空倚㆓武昌樓㆒。

重和㆔室直清次㆓春初韻㆒

春來梅發似㆓楊州㆒。醉裏彷徨疑㆓夢遊㆒。四野風雲開㆓獄色㆒。萬家烟樹抱㆓江流㆒。遙思孺子滄浪水。獨立仙人白石樓。謝椽旌旆復莫㆑問。浮生非㆔是爲㆓封侯㆒。

當時の儒者は、或は宋學を奉じ、或は明學を守り、各〻標榜する所があつて論難攻撃を事としてゐた。然し白石は斯かる時流に墮せず、別に一見識を持つてゐた。「孔子の教は論語の一書に盡きる故、此書を守らば結構であつて他に求むる所はない。」と、かうした見解と、また一面には當時の儒者のやうに專ら支那崇拜にのみ陷らずに、本朝の事に意を用ゐたのであつた。この點は眞の日本人たるの自覺の鮮かであつた爲で、吾人の學ぶべき精神であらう。たとへ儒者だと云つても、徒らに支那崇拜に陷るのは考へものである。やはり日本精神の確把は吾人の忘れてならぬことである。それが彼の學問となり、多くの著書に現はれてゐることは嬉しい。

菅神廟

殿宇崢嶸按㆓帝畿㆒。松間蒼翠靄㆓餘輝㆒。天鐘㆓河嶽㆒英靈降。星折㆓雲霄㆒霹靂飛。紫鳳空啣五色詔㆒。袞龍纔補兩朝衣。無緣更有㆓東山賦㆒。環珮還隨㆓夜月㆒歸。

己巳秋到二信夫郡一奉二家兄一

遠送二朱輪一出二武城一。清秋孤劍賦二東征一。故園丘墓松楸冷。長路關山鴻雁驚。芳草池塘他日夢。夜牀風雨此時情。登レ樓相望浮雲隔。空寄二愁心一對二月明一。

節義を重んじ雄壯を好むは、日本精神の粹である。卽ち次の如き詠がある。

諸葛武侯畫像歌

太華山裂失二赤符一。神龍潛伏海將レ枯。誰知時務在二俊傑一。此間足レ數鳳之雛。關張不レ悅魚水合。君臣奇遇絕代無。立談既定三分業。顧託不レ負六尺孤。王佐從來見二伊呂一。兵謀何必事二孫吳一。葛巾羽扇清渭曲。中原赤子徯二來蘇一。萬古精靈長不レ死。豈唯當年魏人趨。桓溫素有二雄心在一。只識常山蛇勢圖。

易水別

燕臺荊卿悲歌客。說劍爭傳人不レ惜。意氣一過太子宮。精誠貫レ日虹彩白。老驥伏櫪志何衰。餓虎當レ蹊肉可レ糜。於期敢後田光死。荊卿有レ待客歸遲。千金盛得函中首。十三殺レ人眞黃口。鵰鶚光淬短蛇鱗。秦王命懸燕使手。素冠來送咸陽道。擊筑歌急東方曉。朔風蕭蕭易水寒。行人不レ顧車聲小。

その詩は多く殘つてゐない。それによつて見ると所謂詩人の詩ではない。故にその詩は緒餘ともいふべきものであるが、然し流韻風雅なものの多く見られるのは偉とするに足る。

賦㆓新荷㆒

芙蓉洲渚彩雲飛。荷葉團團露未㆑晞。青鏡龍蟠江底出。翠盤鮫泣海中歸。吳姬初採香迎㆑棹。楚客新裁綠染㆑衣。況値㆓紅亭春酒熟㆒。碧筩傳飲莫㆓相違㆒。

白牡丹

奇葩出㆓洛陽㆒。素艷皎如㆑霜。羅幙春光澹。珠簾午影長。梨花留㆓月色㆒。桂子借㆓天香㆒。十五盧家婦。憑㆑欄愧㆓靚粧㆒。

その清新に富み、暢麗の致、想ふに足りる。江村北海は日本詩史に彼の詩を評して、

余按、白石天受敏妙、獨㆓歩藝苑㆒、所謂錦心繡腸、咳唾成㆑珠、囈語諧㆑韻者、索㆓諸異邦古詩人中㆒、未㆑可㆓多得㆒者、……雨芳洲所㆑著橘窻茶話曰、韓人索㆓白石詩草㆒者、陸續不㆑已、可㆑見異邦人猶且玉㆑之。

これによつてもその詩才の凡ならざるを知るに足りる。先哲叢談に、

入貢琉球人、得㆓白石詩草㆒歸、遂致㆓之淸㆒、淸翰林鄭任鑰、自寫作㆓之序㆒、此本復經㆓琉球㆒至㆓日

本一、終落二白石手一、白石珍二藏之一、而序中指二白石一、昔二新堪一、此勘堪音相近。蓋誤二傳新井勘解由一
而略二稱之一云。

白石詩才亦爲二天縱一、其精工當世無レ敵、雖三一時出二遊戯一、有下足三以見二其敏警一者上、嘗過二某許一、
主人書二容奇二字一索レ詩、輙援レ筆立就。

曾下二瓊鉾一初試レ雪。紛紛五節舞容閑。一痕明月茅渟里。幾片落花滋賀山。提レ劍膳臣尋二虎跡一。
捲レ簾清氏對二龍顏一。盆梅剪盡能留レ客。濟得隆冬無レ限艱。

この容奇は雪の字の國訓である。ところが白石はこの七律一篇中に本朝の故事を詠み込んでしまつたのである。これによつてもその才藻は想ひ知れるであらう。室鳩巣の「朝散大夫筑後守新井源公碑銘」に、

最善二唐詩一、其詩豐腴馴雅、直與二開元諸名家一相頡頏、由レ是四方爭傳、以逮二海外之國一、而公之
詩名擅二天下一。

とあるによつて、その如何が想察される。また頼山陽の論詩絶句に、

正徳諸公盡出群。駭鷄雄雉各爭レ文。翻空千仭求二威鳳一。當レ屬二筑州源使君一。

とある。斯くの如く、白石の詩に對する聲價は頗る大なるものがあつたのである。

白石は和文の著が多くて漢文は至つて少ない。その漢文集「白石先生遺文」の中には史論が多く、また、序跋等も十數篇ある。「遺文拾遺」にも數十篇の漢文がある。

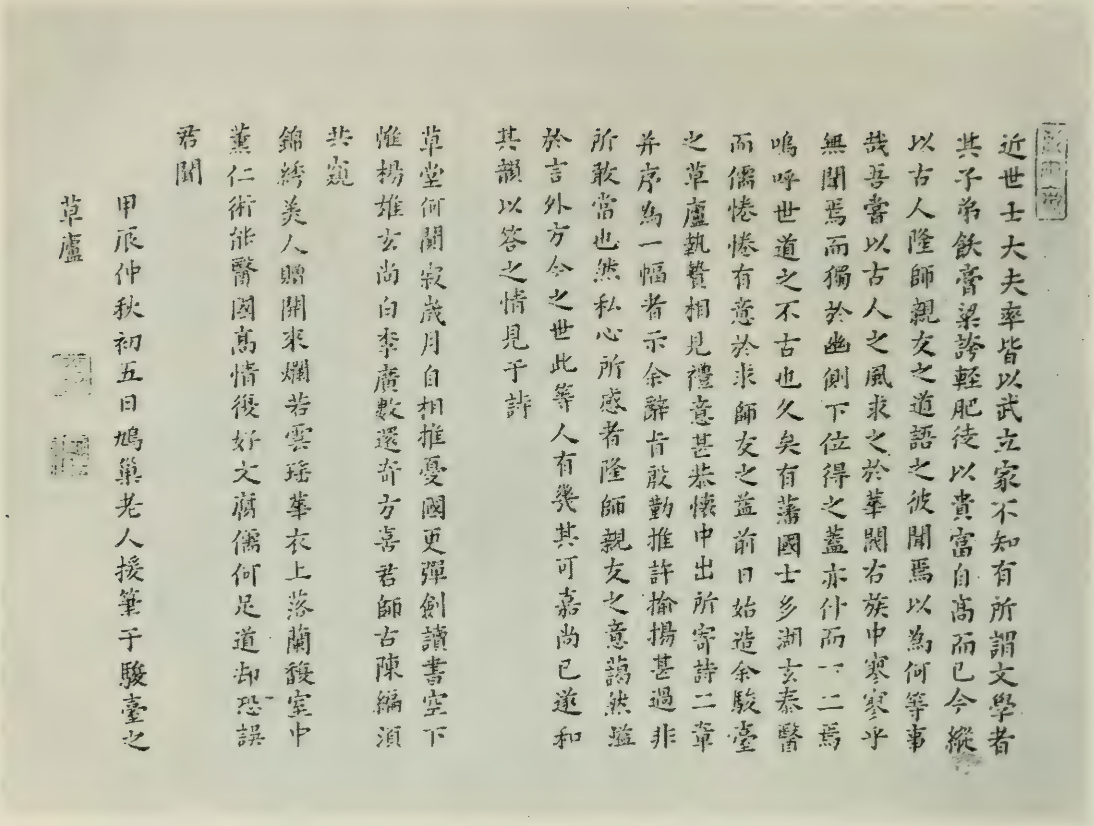
要するに彼は文よりも詩に於て長じてゐる。その詩は唐詩を學んでよく之を得たものといふべきである。

白石のことを書いたものに、足立栗園の「新井白石」、上田萬年の「新井白石」、伊豆公夫の「新井白石」、羽仁五郎の「新井白石」（岩波講座世界思潮）等があるから、その傳記、思想、功績を知らうとするものは是等の書を參照するとよい。

### 新井白石年譜略

明暦 三 年（二三一七）（一 歳） 二月十日出生。
延寶 六 年（二三三八）（二十二歳） 母坂井氏歿。
天和 二 年（二三四二）（二十六歳） 父正濟歿。八十二。古河侯堀田正俊に仕ふ。
貞享 三 年（二三四六）（三 十 歳） 木下順庵の門に入る。
元祿 六 年（二三五三）（三十七歳） 木下順庵の推擧により甲府藩邸に出仕。大學進講。
七 年（二三五四）（三十八歳） 詩經進講。俳人芭蕉歿。

元祿八年（一三五五）（三十九歳）書經・通鑑綱目進講。
九年（一三五六）（四十歳）春秋進講。十四年に終講。
十一年（一三五八）（四十二歳）木下順庵歿。
寶永五年（一三六八）（五十二歳）五百石を賜はる。
正德元年（一三七一）（五十五歳）從五位上筑後守任官。五百石加増。
正德三年（一三七三）（五十七歳）采覽異言を著す。
正德五年（一三七五）（五十九歳）集古圖說成る。
享保元年（一三七六）（六十歳）折たく柴の記執筆。
二年（一三七七）（六十一歳）小川町の屋敷を召上げられ、深川に借宅。停雲集を編み、東雅を著す。
四年（一三七九）（六十三歳）方策合編、東音譜、南島志成る。
五年（一三八〇）（六十四歳）蝦夷志成る。
七年（一三八二）（六十六歳）孫武兵法擇成る。
十年（一三八五）（六十九歳）五月十九日歿。

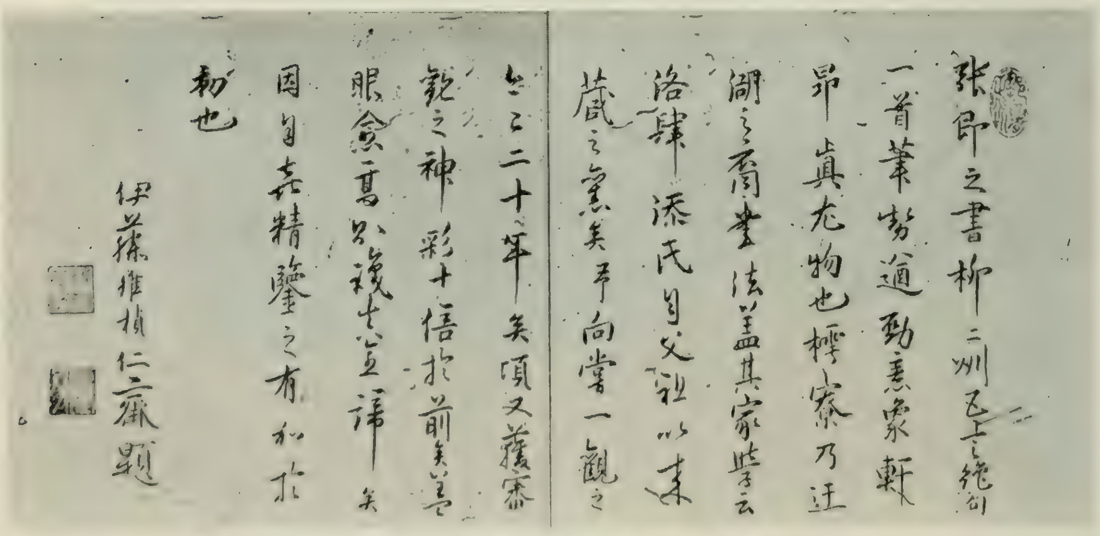

近世士大夫率皆以武立家不知有所謂文學者
其子弟飫膏粱誇輕肥徒以貴富自高而已今縱
以古人隆師親友之道語之彼聞焉以為何等事
哉吾嘗以古人之風求之於華閥右族中寥寥乎
無聞焉而獨於幽側下位得之蓋亦什而一二焉
嗚呼世道之不古也久矣有藩國士彡湖玄泰醫
而儒惓惓有意於求師友之益前日始造余駿臺
之草廬執贄相見禮意甚恭懐中出所寄詩二章
并序為一幅者示余辭旨殷勤推許揄揚甚過非
所敢當也然私心所感者隆師親友之意藹然溢
於言外方今之世此等人有幾其可嘉尚已遂和
其韻以答之情見于詩

草堂何闃寂歳月自相推憂國更彈劍讀書空下
帷揚雄玄尚白李廣數還奇方喜君師古陳編須
共窺

錦綉美人贈開來爛若雲瑤華衣上落蘭馥室中
薫仁術能醫國高情役好文腐儒何足道却恐誤
君聞

甲辰仲秋初五日鳩巣老人援筆于駿臺之
草廬

室　鳩巣筆蹟（高野辰之氏藏）


張郎之書柳二州五七言絶句
一首筆勢遒勁意象軒
昂真尤物也椰寮乃迂
闕之商業法蓋其家學云
洛肆添氏自父祖以來
藏之蓋矣予向嘗一觀之
今二十年矣頃又獲審
觀之神彩十倍於前矣蓋
眼愈高則識愈進矣
因自喜精鑒之有加於
初也

伊藤維楨仁齋題

伊藤仁齋筆蹟（伊藤孝彦氏藏）



伊藤仁齋肖像（伊藤孝彦氏藏）

# 伊藤仁齋の一考察

宇野哲人

伊藤仁齋、名は維楨、字は源佐、仁齋・古義堂・棠陰或は櫻陰とも號し、寛永四年七月二十日材木商長澤屋七右衞門を父として京都堀河の寓に生れた。母は里村氏、仁齋は其の長男である。時恰も德川太平の世に際し勃然として擡頭した實證的自由復古精神の先驅者として、精神的にも又物質的にも苦鬪に滿ちた生涯を續け、終に宋學陸王の學を排斥し孔孟への復歸を高唱して古義學を樹立、儒敎日本化の大業を完成し寶永二年二月十五日七十九歳を以て歿した。其の奮鬪の生涯は通じて宋學信奉と古學唱導の二期に分けられ、其の間二十數年の沈潛時代が精神的過渡期として總ゆる物質的不幸と共に介在する。

始め仁齋の主とする所は宋學であつた。深沈人と競はぬ性を以て十一歳師に就き、大學を學んでより五年、後、儒を以て身を立てんと決意し反對を退けて聖賢の道に志してからは、時の風潮のまゝに

宋學を修め人生への懷疑を宋學で解かんとした。十九歳延平答問を紙の破れるほど耽讀したと云はれる。近思錄大全朱子語類を尊信しては晝夜も舍かず研磨精進を續け、居室に誠脩と命名しては自ら戒め、二十七歳既に深奧に達し一家の見を以て(行狀記)太極論敬齋記を、翌年(或は翌翌年)性善論心學原論を著すに至つた。然し此等は其の蘊奧を得然も宋儒未發の所見也と信じたにも拘らず、實理に求めて合はぬ所あり、心爲に安んずるを得ず、更に陽明龍溪の學にも厭き足らず、或は從ひ或は違ひ終に思想的混亂の中に低迷した。其の間教を佛老に求めても得ず、加ふるに羸疾に罹り家計の困難に逢着し、沈吟寵居すること約十年、漸く三十七八歳(行狀には三十六歳讀孫舊稿による)論孟二書の明白端的實理に於て缺くる所ないことを悟り、此處に宋學を揚棄して略〻所信の確定を得、堀河に古義堂塾を開くと共に、同志會を組織して、相互の研鑽に資せんとした。かくして學終に一變し「大學非孔子遺書」「理氣說非聖人之旨」を高唱し、翌年「中庸發揮」「論孟古義」を著して古學を標榜した。然し其の見解は未だ定論ではなく僅に宋學を脫したに止り或は陸王の餘說と毀られる所以であつた。然し仁齋は世の毀譽には恬然として一路所信確立への熱烈な努力を續けた。其の間の苦惱は單に精神的に止らず經濟的側面に於て更に大であつた。毅然として道を求める仁齋と家人との意見の齟齬は中弟に家を讓つて松下巷に隱退を餘儀なくされ、三十六歳京都の地震に逢つて家に再歸した。白骨觀の法を修めたのも此の時である。然も仁

齋の勞苦は尙絶えず延寶三年京都の大火に古義一巻を携へて京極報恩寺に避難し、更に同年侍養の爲に肥後細川侯の聘をも辭した母の死にあひ、悲嘆の中翌年父また歿した。仁齋相繼いで怙恃の喪に遭ひ、鬱々として日を送り文を作らず、除服の年から孜々として論孟を講じ、易・大學・近思錄にも及び、遂に學成つて天和三年定論として、語孟字義を著して稻葉正休に贈り、翌々年門人長澤純平の爲に「大學定本」を著した。かくして仁齋の盛名は日に旺に一代の儒宗として縉紳庶人を問はず道要を叩問疑難を質し虛往實歸、嘆服せぬものとして無く、其の學は堀川學・古義學或は仁齋派と稱して一世を風靡し、時を同じうして江戶に古學を唱へた物徂徠と相對し天下の學風を二分するに至つた。元祿の末には其の名天聽に達し、勅して文を徵したまふの榮に浴した。かく服喪の五十歲を期として晩年の定論が確立し二十七八歲迄の宋學信奉時代と對立する。其の間の二十數年は宋學への不滿と萌え出でる古義學への希望との相爭へる過渡の時期で、經濟的苦痛も亦極度に達した。新年、餅を强請む東涯の頑是なさに泣く母に、沈默のまゝ外衣を脫ぎ與へたのも此の時であつた。其の間毫も屈せず只管に道を求めて精勵した其の努力は赫々として人の耳目に在り、永く學人を敎へるものがある。然も其の態度は歿年迄變らず盛名世に傳はり貴紳門に到るも淸貧に甘んじ驕色聊も生じなかつた。

仁齋を偉大にした所以は、子東涯に負ふ所が多い、仁齋は寬文十年緒方氏との間に原藏（名長胤 號東涯）を儲

け、其の歿後瀨崎氏と再婚、重藏（名長英號梅宇）正藏（名長衡號介亭）平藏（名長準號竹里）才藏（名長堅號蘭嵎）の五男があつた、此の五人は伊藤の五藏として皆才學有つて家聲を落さず、殊に東涯蘭嵎は最もすぐれ首尾藏と稱せられた。東涯は父の學説を辯護唱導することに專心し、終身仕へず古義學の發展に盡し、春臺をして子東涯ある仁齋に及ばずと嘆ぜしめるに至つた。是れ一に仁齋の庭訓によるもので、人の福は賢子弟あつて讀書曉通父祖の志を繼ぐに窮まるとした仁齋の意を全うするものであつた。

仁齋の著書は論語古義十卷・孟子古義七卷・大學定本・中庸發揮各一卷・語孟字義二卷・童子問三卷・古學先生文集六卷・詩集二卷・和歌集・仁齋日札・周易乾坤古義各一卷・春秋經傳通解二卷・太極論・讀近思錄・秉燭譚等がある。

仁齋古義學の目的は仁義禮智の道德の認識實踐にあり、其の特徵は宋儒の謬を正し宇宙人道を活動的に見る所にあつた。而して其の歸する所は孟子を通じて孔子に合するにあり、孔子は天地と比敵する最上至極宇宙第一聖人、從つて論語は最上至極宇宙第一書として最も尊ばれ、且其の義疏たる孟子は其への津筏として論語に次で尊重せられた。其の學は古來明の吳廷翰蘇原の吉齋漫錄に基くとも稱せられるが、確證はない。

仁齋は天地が萬物を生じ生々窮まらざる所からして、宇宙は或は陽或は陰となつて往來感應盈虛消

長して止息しない一元氣であると考へ、萬物は此の陰陽の活動交替に於て現はれると見た。從つて天地は生々發展し活動して息まない活物であつて開闢及終止なく、萬古無窮のものであり、又萬物には生・動に對する死・靜はなく、聚・善に對する散・惡はあり得ない。現實の死・散の現象は、父祖の死が契機となつて子孫の生命が生れ且永遠に續く如く、生・動をより强める爲の否定的契機に過ぎない、聚・善に對する散・惡も亦同じ、從つて死は生の終、靜は動の止、散は聚の盡、惡は善の變として存する。かくして天地の間に存するものは元氣であり宋儒の言ふ如く陰陽する所以の理ではない。理は仁齋にあつては氣中の條理に過ぎず、一元の氣が本となつて理が其の中に生ずるので、あく迄も氣は先、理は後である。理は元來道の活動的（以流行言）なのに反し靜止的（以所存言）である爲に死字であつて、此を宋儒の如く萬化の樞紐とすることは天地を靜的に見死物視することで、當然虛無に陷ると共に生々發展する事實に反する。更に此の天地の生々發展は、人に對しては天命として現はれる、人としては唯人の道を盡すべきに止り、其の結果は天地流動の一齣として與へられるまゝを甘受せざるを得ない、此が卽ち天命である。然も又天地には惡は存しない爲に其の間にあるものは總て善として樂天的傾向をもち性善說と對應する。

天道に陰陽あり、陽が陰を統べるとのかかる天道觀に基いて、仁齋は人道は仁義であり仁は義を統

べるとした。かくして道は仁義であり仁義を外にしては人道なく、且活動的なものとして、道は路であり常に經由せざるを得ず、從つて仁義は道の本體、仁は大道の大本衆善の總要で、孔門の要旨は此の二字に包括せられるとした。他面仁齋は人間の人倫的存在性に注目し人を人倫の關係に於て把握した。人とは君臣父子夫婦昆弟朋友であつて人は存在する限り、人倫關係を荷ひ此を離れて人は存在し得ないと考へた。而して人の此の人倫關係を物（人）のあるべき樣卽理（有條而不紊之謂）也とすると、其に對して應ずべき樣卽義（有誼而相通之謂）が對應する筈で、義親別敍信が卽夫れであり、此等の義は理念的には愛を根本とする仁義に總括せられる、卽德である。かくして道・德共に仁義に外ならないが、德は流行を以て云ふ働としての道に對しては却つて存する所を以て云ふ體として現はれ、謂はば人間に具はる德としての道德的價値の意味をもつ。而して仁義とは廣く仁義禮智の總稱であるが、禮智は仁義を節文し之を知つて之を去らないのが其の實で、むしろ仁義から發し仁義に包括せられる。而して仁と義とは相補つて全く義のない仁・仁のない義は眞の仁義でなく、時に仁を單稱しても義は自ら豫想されてゐる。かくして仁義の德は人倫關係に基き人倫に徹する爲に、一人の所有ではなく又人の有無には關せず時處を超越して天下に遍滿するもので、當然人の性からは獨立し天地に充滿し古今を貫徹し然も磨滅しない至理として一箇の普遍的價値と考へられる。然るに人に具

はる個人的な性には欲である情と心思運用智慮である心との兩面があり、其の天道觀に基いては性は自ら善、欲は其を强める否定的契機であつて、謂はば人に含まれる個體性と全體性との兩側面に外ならない。從つて人は心によつて全體的人倫關係に基く普遍的價値卽德に通ずる道が開かれる、卽ち良知良能或は本然の善である四端の心で、此の心を通して人は德卽仁義に達し得る、卽ち心に固有な四端の心は假令微であるとも此を擴充すればよく天下の大德である仁義禮智をなしうるので、擴充が德への手段である。四端の心をもつ限り人は德に至る可能性があるので、德の實現は唯良知良能の四端の心の擴充をまつのみで、擴充は德に至る關鍵である。從つて其は明かに自らのもつ本善の德を盡すに過ぎず、決して修爲して外から獲得するものではない。明かに仁義は道德の名で性の名ではあり得ないと共に、仁義は性に固有のものである、其の意味で仁義は我性・我性は仁義也とは稱しうるが、然し其は擴充を媒介とする爲に、擴充を離れて仁義を其のまゝ性中の名也と稱することは許されない。從つて仁義を以て性とし理とすることは誤である。此處に說く仁義と性との關係は自らも云ふ如く極めて微妙であつて、仁齋の見た人倫關係を考へない限り疑義を生じ易く、古來異論のある說である。此の意味に於て仁齋は孟子の四端を端本と解し、四端は四體の如く萬人に具はり、ただ擴充するを知つて後始めて德に至ると考へ且此が孟子の眞意であるとした。道は須臾も離れ得ない爲に道を外

にしては學問はあり得ず、學問は當然仁義を離れて存在しない、道德と學問とが分立することは聖人の要旨を誤解し又無知であることから起る。而して學は效法と覺悟の二義を兼ねて居る爲に、學問は仁義の領悟及實踐の知行二者を兼ねるべきである。更に敍上の性善に基く性と道との關係から學問は自然擴充であり、從つて學問は古今を貫徹する無窮の仁義を有限の性が窮めうる唯一の道である大功をもつてゐる。而して學問には本體・修爲・資の三が考へられる、本體とは對象で仁義をさして云ふことは勿論であり、修爲とは實踐の方法で、忠信敬恕の類等があげられる。蓋し若し忠信が無ければ禮文中り儀刑正しくとも皆僞貌飾情に過ぎず、從つて道は必ず此を基とすべきであるからである。而して此の忠信敬恕の四者を貫く精神は實に誠の一字である故に、修爲卽實踐の上では誠が道に至る宗本となり、誠こそ學の宗・道の全體として、聖學の頭腦學者の標的とならざるを得ない、かくして聖人の道は誠のみと見られ、誠は實踐の側での道の全體となり、道の實踐を重視する限り誠は本體の仁義と同樣に重視され、實行の精神とも云ふべきものとなる。更に資は道の認識に關する知的側面で、四端が良知良能である爲に其の擴充の學問に知の加はることは當然であつて見聞が其に當る。見聞は（必ずしも書冊或は講義にのみ依る譯ではないが、）多くは聖賢の書に據つて得られ、其には聖賢道統之旨たる血脈と意味を知る二法に岐れる。此の二法によつて聖賢の道を認識し、誠を基として其を實

行し、以て本體たる道に合する、是れ仁齋の云ふ學問に外ならない。而して道は活きた道理であり、心は活物である爲に、心を以て道を修める學問は當然活物であるべきであつて、學問の方法には躍動的な生氣と永遠の進歩、不斷の發展が不可缺であり、從つて修爲に於ては消極的な無過よりも改めることを尊ぶ積極的態度が取られ、見聞に於ては主として傳授の側から師道として活きた教授、人を見て法を説く人材長育の法が主張せられる。此の學問の性質から、凡そ道徳を離れたものは、假學として、學問としては認められず、文は道を傳へる意味に於て學であるに對し、詩は單に藝中の雅翫として輕視せられる。又經濟の如きも道徳の本元に迂闊となる爲に排斥せられ、人倫日用に無益、天下國家に無補のものは邪説妄行として退けられる、明かに仁齋は道徳政治の一致を期してゐたのであつた。

　學問の對象である仁義の道は元來彝倫に基く人の道である爲に、其の實行も人が人の道を行ふので極めて知り易く行ひ易く、又至正明白極めて卑近で、領悟の人のみ解し得る樣な高遠難解なものではない、此の卑近な道こそ聖賢の遺説で不可離のものであるが、古今の通弊として人には崇古好奇の癖があり卑近平正を卑んで高遠奇僻を尊ぶ傾向があるので、此の平易な人倫の道を賤んで唯高遠な理を悦び、爲に空理を説く佛老空虚説や宋儒無聲無臭論が尊ばれるに至つた。而して其等はすべて聖學の至道を嫌ひ更に高遠な理論を別に立ててゐるが、聖人の宗旨は人倫に基き此の道は平常不易中庸の極

である爲に此を外にして高低何れに失するも共に誤れるもので、高ければ佛老の如く虛無に走り低ければ申韓商鞅の如く功利に陷ち、何れも共に異端たるを免れない。此等は總て仁義の道を棄て人事を廢して修めず天下を蔑して顧みず以て聖人の道に反し人の正道を失するもので、此に趨ることは恰も卑近の故を以て日常不可缺の五穀の常膳をすて新奇の故に珍羞異味を好むに異ならず、誤れるの甚しきものである。元來道は活物であり道德は空虛な理論ではない、從つて道德盛んであれば議論卑まれ議論の盛行は夫れだけ道德の衰退で、兩者正しく逆比例する。然るに後人は其が益〻道德と去ること遠きを悟らずに、唯議論の高遠を悦び實理を忘れ空理を說くに至つた、佛老の說宋儒の說は此に他ならぬとして佛老及宋儒が活學をすてて觀念論に走つたことを極力排擊した。而して宋儒の理も佛老の空虛も共に人間の現實に卽せずただ空理に陷るに止り、人の修むべく務むべきは人事人倫であり、天下に仁義無ければ親まず行はれず、故に人倫を外にして道なく又教はない、寸時も離れ得ぬ爲に仁に居り義に由れば、坐禪面壁せずとも自ら修身齊家治國平天下、行くとして不可はない、假令心は明鏡止水の如く一毫の人欲の私なくとも、其は人道に無益である、として宋儒を全面的に否定し、孔孟の古義に則つて人倫の道仁義を主とすべきことを强調した。かく仁齋の說は宋學の缺點を正し短所を補ふものとして展開させたものである爲に所說の總てが宋學と相違し又相反してゐる。

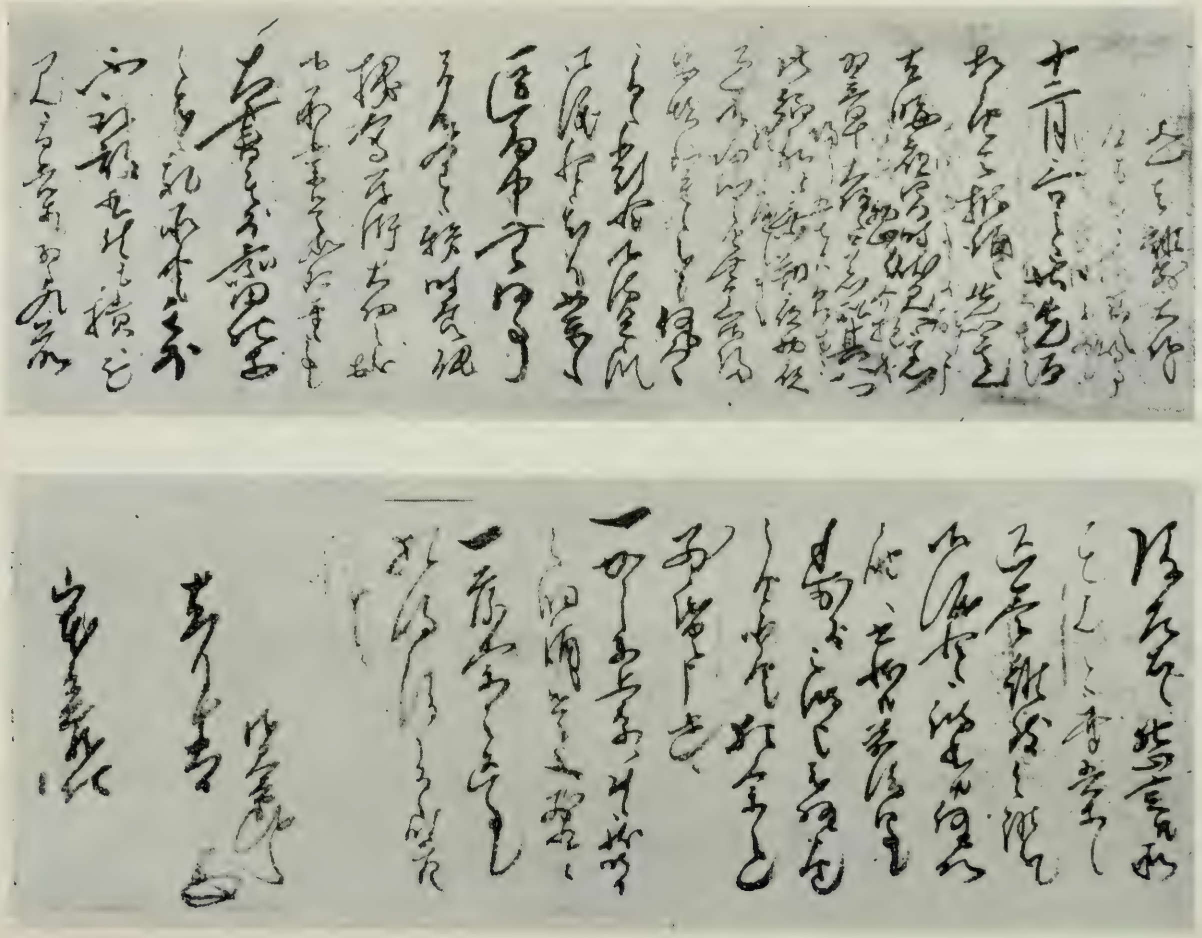
以上仁齋の學の大要は宋學に求めて安からず或は陸王に索め佛老に尋ねて得ず、日夜勉勵研鑽の末、孔孟に於て眞に是也と會得して獲た其の世界觀人生觀の總體であり、從つて其は力を孔孟に借るものではなく孔孟に於て見出し得た自己の道德主義であり、あく迄も自らの體驗と精緻な論理的思索とから構成せられたものであつた。從つて其の新說に對しては賛否交々あり、或は事を構へて誹謗せんとする者もあつたけれども、仁齋は此等に何等介意する事なく唯自らの信ずる道に專心したのであつた。當時の學者が爭つて俗を離れることを得々とした中に、仁齋のみ一人官にも仕へず又物にも標異せず、義井を共に浚へ夜廻りに出る等自ら町人百姓と進んで行動を共にした事は、總て道は人倫の間にあり卑近にあるとの信念から出た仁齋の學問であり、ただ道の實踐を求めての行爲に他ならなかつた。かくして自ら信ずる道の實踐に終世專心邁進して息まなかつた仁齋の行爲は、眞の道德主義として欽仰すべきである。徂徠が仁齋の道德、蕃山の英才と自己の學術とを集めば方に聖人たらんと稱したのも尤もである。




淺見絅齋筆蹟（絅齋書院藏）



淺見絅齋肖像（西依孝通氏藏）



淺見絅齋書狀（内田周平氏藏）

# 淺見絅齋の大義名分論

坂井喚三

闇齋の衣鉢を傳へ、闇齋學の眞骨頂を發揮したものは淺見絅齋である。名は安正、通稱は重次郎、滋賀縣高島郡新儀村太田の人である。祖先は新羅三郎義光に出づと云ふ。祖父俊政は豐臣氏に仕へたが大阪落城後遁れて高島に隱るゝことになつた。父は俊盈、通稱は安右衞門、道齋と號し、醫を業とした。故に絅齋も初は京都に出で醫を學んだ。姓名を變じて高島良順と云つたのは其の頃である。闇齋の高弟永田養庵と親交して居る間に其の紹介により遂に闇齋の門に入ることになつたが、年齡は既に二十七歳か八歳になつて居る。而して絅齋三十一歳の時は闇齋が歿して居るから、其の闇齋に師事したのは僅かに四、五年に過ぎないのである。而も「祗行植節、社中ソノ右ニ出ヅル者ナシ」（先哲叢談）と稱せられて居る點より察すれば、其の困學力行の程を窺ふことが出來る。先達遺事に「（安正）嘗テ吐血ヲ患ウテ連日愈エズ。翁（闇齋）尚ホ之ヲシテ苦學セシム。槙元眞、之ガ爲ニ翁ニ諷シテ云フ、彼

レ病狀已ニ此ノ如シ。且ラク業ヲ廢シテ以テ將息セシメント。翁キカズ。安正疾ヲ力メ强ヒテ業ニ就クコト常ノ如シ。未ダ幾バクナラズシテ故ニ復セリ」とあるのは必ずしも誇張の言ではないであらう。

學成るや京都錦小路高倉西入る處に錦陌講堂なるものを建て帷を下して道を講ずることになつた。曰く「去レ此一歩、非ニ死所一矣」（宋末忠臣陳宜中之言）と。乃ち竊かに　天皇の臣として一生京都に踏み止まり、諸侯に祿仕せざるは言はずもがな、江戸の地を踏むさへ屑しとしなかつた。若林子語錄に

此方（强齋）ナド打チヨツタトキ（絅齋）ノハナシニ自分ガ學問ト云ヘバ嘉右衛門殿ノ落穗ヲヒラウテ其說ヲ取失ハヌヤウニスルヨリ上ノコトハナシ。德行トテハ皆ガシラレタ通リ如斯カラウトシタ者也。何一ツトル處ナイガ只出處ノ一事ハ生涯毫末モハヅカシイコトハナイ。

とある。此に師匠の闇齋を引合ひに出して、然る後に出處の事を述べたのは意味深長である。乃ち學問德行は兎に角として出處の一事のみは師にも讓らぬと云ふ萬丈の氣炎があり〳〵と見える。蓋し闇齋の如き豪傑を以てしても尙ほ幕府の大番頭保科正之の賓師として長年に亙つて敎を說いて居る。之は絅齋に取つて確かに意に滿たない所であつたであらう。又若林子語錄によると佐藤直方が或る時絅齋に向つて「仕ヘテコソ出處ト云フモノナレ、其元ノ樣ニ引キコンデ計リ居テハ出處デハナイ。」と

云ふに對して絅齋は「出テ可レ仕シテ出ルモ本ヨリ出處、出テ不レ可レ仕シテ出ヌモ又出處デヤ。出ルバカリガ出處デハナイ。」と云つて居る。崎門の雙璧と稱せられた兩人の面目が躍如としてあらはれて居る。直方は大義に拘らぬ極めての自由主義者である。湯武放伐を是認し楠公を尊崇せず、四十七士を罵倒して居る。これ等の點に於て絅齋は全然反對である。それは兎まれ絅齋にありては出處の一事は飽くまで嚴正で、それが爲に永年の親友であつた直方とも義絶し、祕藏の弟子三宅觀瀾が水戸侯に仕へたと云ふので破門して居る。かくて絅齋は三十二歲（推定）より六十歲の卒年に至るまで實に三十年間、かの錦陌講堂に於て書を講じ道を說いた。而も其の淸貧なることは實に洗ふが如しであつた。その消息はよく强齋雜話（山口春水所錄）の中に傳へられて居る。

（絅齋ハ）殊ノ外、淸貧デ一年ドウモイケヌコトガアツテ自分抔モ同ジク貧乏ニアツタレドモドウモ處置ガナサニ母ガシテクレタ正月衣ヲ代ニカヘテ進ゼタコトナドモアリ、オカシイコトサマザマナリ。……先生ハ大男デヨク肥エタル人ニテ候ガ屋根ガモル故自分ヲ相手ニシテヤネヘ上ガラルレバ踏マルル處ガヌケル或ハ講座ノネダガ落チルト先生ノ木ヤリデ自分ガイツデモ其相手ニナツタ事ニテ候。夫程淸貧ニアツタレドモ先生ニハ其ノナリニ安ンジテツヒニ富貴利達ヲ求メラルル心ナク世ニ手ダシナサルルト云フコトハカツフツ無カツタコトニテ候。

又同書に

或時奴茶屋ノアナタニドウハレト云フ餅ガ有ツテソレヲ絅齋ヘミヤゲニ進ゼタレバ日頃大食デ餅ズキニテ候ヒシガフサ〳〵ト喰ヒ乍ラソチモ此餅ヲ買フ餘計ガアレバマダヨイハトアルコトデ笑ハレ申候。

とある。絅齋の清貧を寫して妙であると共に二百年の後猶ほ師弟の情誼の麗はしさが手に取るやうである。

清貧に晏如として獨り文を講ずるのみならず兼ねて武を練つた。其の「赤心報國」の刀を所持して居たこと、又大薙刀を以て毎朝東に向つて打振つた話は餘りにも有名である。且つ其の說く所を綜合するに絅齋は中心たしかに深く期する所のものがあつた。然るに當時は幕府の全盛期で而も由井正雪の亂があり、山鹿素行や熊澤蕃山も思想過にかゝりて幽閉或は隱退せしめられた直後のことであるので、幕府が最も反幕的言動に警戒して居た時代である。故に其の蔚勃たる勤王精神も之を施すに途がなかつたのである。此に於て絅齋は其の不朽の名著「靖獻遺言」を撰し、其の精神を後に傳へんとしたのである。若林强齋の靖獻遺言附講によると

絅齋先生遺言ヲ編集ナサレタル意ハ今天下平ニシテ百姓ハ田ヲ作テ天下ノ御用ニ立チ武士ハ奉公

ヲ勤メテモトヨリ君ヘソレ〳〵ノ職ヲイタスコト也。浪人シテ居テハ忠義ノ書ヲ集テ天下全體ノ御奉公ニスルトアルコト。又嘗テ仰ラルルハコノ書ヲ能ク見ル程ノ侍ハ恐ラクハ亂世デモウロタヘテ不忠ノ働ハイタスマイ。猶ホ其外深キ意味アルトノコト也。

又同書に

遺言ハ忠ノ字ノ吟味ヲ盡シタル書也。

とある。述作の微意が那邊にあつたかがよく判かる。

其の他著述は實に數十種に上るが一として學の爲の學を說いて居るものはない。皆これ大義を明かにし、名分を正すことに終始して居る。誠に淳乎として淳なるもので、絅齋學の特色は實に此に在るのである。故に其の學の影響する所は深く且つ廣く一々枚擧に遑がない。後光明天皇承應元年（紀元二三一二）八月十三日に生れ、中御門天皇正德元年（紀元二三七一）十二月一日に六十歲を以て錦小路の邸に於て多くの門弟子に圍まれて安らかに終つて居る。

絅齋の學は言ふまでもなく闇齋に承くる所であるが、之を闇齋に比すれば更に狹くして且つ其の深きを加へて居る。換言すれば孔子に始まり朱子に大成した大義名分の思想を口に說き、書に著はし、

身に行つたと云ふのが絅齋學である。孔子は春秋を著はして、大義を明かにし名分を正さんとした。蓋し孔子の最も意を用ひられた所である。孟子は之を評して「孔子、春秋を成して亂臣賊子懼る」孟子滕文公下と云つて居るし、孔子自身も「我を知る者は其れ惟〻春秋か」孟子滕文公下と云つて居る。朱子は通鑑綱目を著はして孔子春秋の意を祖述大成して居る。亦朱子の最も力を用ひた所である。闇齋は土佐の吸江寺に在りて其の大檀那野中兼山より朝鮮版の四書集注を始めとして朱子の遺著を借り、寢食を忘れて讀破し、朱子の眞精神を體得した。此に闇齋學が生れたのである。後京都に出でて學を講ずるや益〻大義名分を明かにし三綱五常を力說した。之が當時京都にあつて諸家に出入して未だ常師を得なかつた絅齋をして贄を採りて門に入らしめたのみならず、「今海內此ノ外ニ豈ニ師アランヤ」先哲遺事と歎ぜしめた所以である。云ふまでもなく闇齋學の主張は孔子朱子相傳の大義名分の思想を深化し徹底せしめ、之に依つて我が國體を闡明にし皇國精神を作興せんとするにある。而して此の主張は絅齋に至つて愈〻强調せられたのである。劄錄門弟所錄絅齋學話によれば

古今記錄ヲ讀ニ纔ニ義ノ一字明ニ三綱大義ノ大カネニ合點サヘアラバ、楠バカリニ忠義ノ名ヲ得サスマジキ人ガライクラトモ擧テ不可數。其故予遺言ヲ編ル、存養省察ノ精察練熟ノ意ヲ可言ト云ニ非ズ。先何ニテモアレ爲レ人者ノ大土臺礎ノ大カネヲ辨サセテ、治亂ヲ貫キ常變ヲ徹シテ、己

一生ノ第一等ノ守ル所ヲ使レ不レ失ント欲スル故ナリ。サレド存養省察モ只此心ヲ存養シ、只此心ヲ省察スルナリノ習ヨリ外無之。近代儒者トテ歴々ニ祿ヲ得、俗學ノ外經學ヲ以名乘人多ケレド、全ク三綱五常ヲ主トシテ、説者不レ見。左アル故經書モ皆殊勝ナル書ノアシライ、左無レバ文字言句ノ翫ビバカリニシテ、ヨフ〳〵ト民ヲ愛スルノ仁政ヲ施スダケヲ云テ、夫ノ張良諸葛亮ナドノ樣ナルコトハ外邊ニノセズ、又其ハ史傳デノ沙汰ト覺ヘテ居ル。孟子ニモ中庸ニモ、五倫ヲ主トシテアルハ何ノ爲ゾヤ。

又同書に

集義和書ト云ル心學者ノ書ニ、楠正成ハ北條ガ臣ナレド天子ノ爲ニ働バ關東ニ叛クモ苦シカラザル由ヲ書リ。扨モ名分ノ學ヲシラザレバアサマシキ議論也。天ニ二ノ日ナク土ニ二ノ王ナシ。普天ノ下王臣ニ非ルナシ。如レ此天子ノ正統目出タク都ニアリ〳〵ト御座アルニ、賴朝ガ世ナド、思ヘルコト甚以スベナキコト也。其上賴朝ハ本總追補使ニ命ゼラレタレバ文王ノ西伯ナドト云ルモノニ略似タリ。賴朝天子ヨリ拜領ノ國ノ外ニ我家來タル者アルベキコトナシ。賴朝次第ニ天子ノ權ヲ竊ミ天下ヲ不レ覺不レ知天下ノ權ヲ竊ム樣ニシタル、伯術詐謀ヨリ加樣ニナリハテヽ、天下ノ諸士ヲ下知スル樣ニナリタルコトヲ、スグニ賴朝ガ臣タルト思ヘルコトサヘアサマシキコトナ

ルニ、況ヤ北條ハ賴朝ガ舅ニテ家來也。是賴朝ガ權ヲ次第ニ窃ミ賴朝ガ子孫ヲ絕シ、都ヨリ三將軍ヲ迎ヘ、年タケヌ內ニ逐ノボセ、終ニ北條ガ天下ノ權ヲ窃ム樣ニシタル、別シテ亂臣賊子ノ又亂臣賊子也。然レバ天子ヨリミレバ賴朝ハ天子ノ權ヲ窃ミタルモノナレバ、凡天下ノ諸士、天子ノ爲罰スベキモノ也。賴朝ヨリミレバ北條ハ別シテ賴朝ガ家ヲ絕シタルモノナレバ、賴朝ヲ主人ト思モノハ猶以罰スベキモノ也。加樣ノ拔根塞源ギンミヲ不㆑知、加樣ニヒタト人ガ窃ムヲ主人トシ、根本ノギンミセヌト、遺言ニ云ル如ク世ヲトリサヘスレバ、君ノ義ト思フ、盜人ニ家ヲ盜マレテソレヲ主人ト仰グモノト、七卷メニ書タルハソノ爲也、恐レアルコトナレド只今トテモ天子ヲ崇マヘ、天子ノ御名代トシテ天下ヲ東ヨリ御下知アルハ、古西伯ノ事体ノナリニテ、上下如㆑此穩ナレバ十分古王代ノ時ノ樣ニ天子ノ權コソナケレ、賴朝ガ何トナク窃タル体トハ拔群違フテ正シキコト也。是ヨリサキハ今日猶敢言所ニ非ズ。學者各自察シテギンミシ得テ可也。

とある。「是ヨリサキハ今日猶敢言所ニ非ズ。學者各自察シテギンミシ得テ可也。」とは最も意味深長な所である。要するに絅齋に從へば三綱五常の學が學の全體であるが、就中彼は君臣の大義を明かにすることに最も力を用ひて居る。靖獻遺言講義によれば、

人ガ大ノ字ヲ合點ヲ得見付ケタ故、大義大義トハ云ヘド動モスレバ惑フ……皆此大義ノ二字ヲ見

抜ク様ニスルコト尤學者ノ大工夫ト可謂。

と云つて居る。これ畢竟幕府や諸侯に仕ふるは義なれども大義ではない。大義と云ふ可きは　天皇に仕へ奉るより外にないと云ふのが絅齋の主張である。是れ彼が「去レ此一歩、非二死所一矣」と云つて斷じて諸侯の聘に應じなかつた所以であり、又其の靖獻遺言に載する八人の忠臣烈士の中に二人までも處士を加へた理由が首肯される。

かくの如く絅齋は大義を明かにし名分を正すに努めたから此の大義名分を實踐し其の權化とも云ふべき楠氏一門を最も崇拜し事毎に楠氏を引合ひに出して大義の鑑として居る。劄錄に

唐ノ張巡睢陽ノ戰ニ自害セザルモ後レタルニ非ズ、文山ノ執ヘラルヽマデ戰ヒタルモ主ヲ思ヒ宋ヲ存シタキノ一念ノ忠義ノ實ナリ。近代武士ノ義ノ吟味ハ只後レヲ不レ取ノ名ヲ汚サヌノトイフマデニテ、ツマル處小サキ一分ノ意氣ヅクヨリサキナルコト。大準ニ當テイフベキコトナキハ皆此誤ナリ。楠ナドハ斯樣ノ名ニ拘ハリ意氣マデノ人間ニテハ無レド、公家衆ハ全体マヽクヲノ樣ナル体ニテ何事ヲ云テモ迚モ用ヒラレズ。高氏ハ西國ヲ驅催シテ來ル。其禦クベキ道ヲ云ヘド、坊門宰相如キタワケヲ盡ス故、最早生キテ天子ノ御難儀ニナリ玉フベキヲミルニ忍ビズ、總並ニ泥ニマブレテ居ラレズ。世中今ハ是迄ト存シ切タル心其感慨不レ忍ノ歎、千載忠義ノ人ノ涙ヲコボ

スニ勝サル親切ノ忠臣ナリ。左レバ此世中今ハ是迄ナリト思テト書ル段コソ、記錄ノ能得タル楠ガ眞言ナルベシ。此モ此楠ガ忠義ノ心ヲ不知者ハ最早是キリニテ吾モヨイ。死デ取タカマシトアグミ果テ思棄タル樣ニ取レバ、大ニ楠ヲ不レ知ト云ベシ。惓々惻怛忠徹二日月一ノ心誠ニ此一言ニアリ。扨又殘念ナル處モ此一言ニアリ。此上乍ラ七十騎ニテモカケ拔ケテイツ迄モ七代生レカハリテモ朝敵ヲ亡シタキト云詞ノ存念ヲ遂ケバ、楠ガ材略ニテ大和河内ニ引込デ其時ヲ俟バ、不レ成ハイツ迄モ天命勿論不レ及レ言、何樣ノ義モ可二爲出一コトナリ。此卽屈原ガ宗國ノ亡タルミルニ不レ忍シテ汨羅ニ身ヲ沈メラレシ心ト事ハカハリテ同日ノ談ニシテ忠ニシテ過ルト議セラルヽモ此ニアリ。又千載ノ一人ト稱セラルヽモ此ニアリ。嗚呼君臣ノ義ノギンミ不レ精シテハ扨々ナリ難キコト加樣ノコトニシテシルベシ。

とあるは其の一例である。言簡なれども楠公の心事を言ひ盡して餘りがある。最も有名なものとしては「楠公櫻井驛訣別之歌」の作がある。

其時正成はだの守りをとり出し
これは一とせ都攻のありし時
下したまへる綸旨なり

世はこれまでと思ふにぞ
汝にこれをゆづるなり
我ともかくもなるならば
世は尊氏の世となりて
芳野の山の奥深く
叡慮を悩ませたまはんは
鏡にかけて見る如し
さはさりながら正行よ
しばしの難をのがれんと
弓張月の影くらく
家名を汚すことなかれ
父が子なれば流石にも
忠義の道はかねて知る
討ちもらされし郎黨を

哀れみ扶持し隱れ家の
吉野の川の水清く
流れ絶えせぬ菊水の
旗を再びなびかして
敵を千里に退けて
叡慮をやすめ奉れ
叡慮をやすめ奉れ

絅齋門下には此の歌が一枚摺として頒たれ觀世某に作曲させて齊唱して居たと云ふことである。此の歌は後世勤王の志士の間に吟誦せられ、殊に水戸藩士の最も愛誦せる所であつたので遂に烈公の作とまで訛傳されるに至つた。絅齋文集には楠公父子畫像の贊が見ゆる。

維父維子　家風傳芳　忠貫日月　義烈雪霜
菊水之旗　天誅惟揚　櫻井之書　世綱惟光

楠氏を崇拜することは今日では三歳の童子と雖も承知して居るが當時に在つては決して左樣ではなかつた。水戸義公を以てしても其の「嗚呼忠臣楠子之墓」を建つるに、ひそかに之を建つと云ふ有樣

であつた。かゝる時代に於て夙に之を絶賛し之を表章したことは偉とすべきである。これやがて絅齋の心印を傳へた若林强齋が京都に望楠軒を建て勤王主義を鼓吹し其の門流より楠公七生の一人とも稱すべき頼山陽が菊水の文旆を高く揭げて現はれた遠因でもある。

大義名分を明かにするを以て學の全體と爲す絅齋學に於て南北朝正閏論が取り上げられ而して其の所謂大準（おほかね）に照して南朝を以て正統と論斷するは蓋し當然であらう。南北朝正閏の論は當時の學界に在りては未だ定論がなかつた。幕府の臣に跡部良顯（一に賢に作る）なるものあり、通稱は宮內、光海翁と稱し、神道を正親町公通に問ひ、儒學を佐藤直方等に質し、又しばしば問目を絅齋に上つて居る。その中に南北正閏について問へるものがある。即ち

吾朝後醍醐天皇ヲ北條高時隱岐國へ流シ奉リ光嚴院ヲ即位シ奉ル。其後吉野へ臨幸ノ時足利尊氏ガハカラヒデ光嚴院ノ御弟光明院ヲ即位ス。吉野ノ皇居ハ南朝南帝ト稱ス。後村上院南朝ニテ即位三種ノ神器ハ南朝ニ傳ル。北朝ノ帝ニハ不レ傳。後村上院ノ御子凞成王即位ノ後和睦有テ北朝後小松院ノ時南帝入レ洛三種神器北朝ノ禁中へ納ル。凞成王ハ太上皇帝ト稱シ崩後後龜山院ト號ス。是何レヲ正統トセンヤ。通鑑綱目ノ意ヲ以考ルコト愚生ガ如キ未熟ノ見如レ此大義分明ニ定メガタシ。愚生累年是ヲ疑ヒ世ニ鳴ルノ儒者ニコレヲ問ト云ヘドモ分明ニ辯ズルモノナシ。詳ニ示シ

玉へ。（絅齋先生答問書）

絅齋が之に對して答書を送つて居る。

自二後醍醐天皇一至二後龜山院未レ禪レ位之前一。則南朝正統也。禪レ位以後則天下無二南北之分一。則王統之系。自在二後小松院一耳。其間尊氏所レ立北朝光嚴光明院則皆爲レ非二正統一也。親房之神皇正統記爲レ此而著者。此一節尤君臣大義所レ關。春秋綱目所二爲作一也。然今觀二世上所レ傳王代編年之類一。率有下以二北朝一爲二本統一者上、有下分二南北一爲二兩京一仍主二北朝一者上。何所レ考之疎耶。故曰。不レ明二主賊邪正之分一。則欲レ不レ失二君臣之義一難矣。通鑑綱目凡例正統之部詳具二其說一。而綱目中天子播越流離之間。賊帥往往奉二王子王孫一。以假レ號攘レ位者。朱子皆黜二書之一。而至レ於二天子一。則雖二微弱一必以二正統一歸レ之、皆可レ見。（同上）

論斷極めて明快である。絅齋の南朝正統論は、三宅觀瀾の主張となつて現はれ、觀瀾が水戸義公に仕へ、大日本史の編纂に關り、特に其の擔當せる南北朝史の記述に當つて其の指導精神となつたのである。されば大日本史が南朝を以て正統と斷じたのは、もとより神皇正統記に基くのではあるが、其の直接の力を有したものは絅齋の所論亦多きに居ると謂はねばならぬ。其の他味池修居の南狩錄、跡部良顯の南山編年錄等は皆絅齋の主張を傳唱するものである。

絅齋の主張中最も特筆大書すべきものは、中國夷狄の論である。大義名分の思想が深化し徹底して行く時は、獨り國内問題卽ち朝廷對幕府に關する問題のみに止まらず、之を進展して國外問題卽ち日本對外國（當時は支那）の問題に及ぶは蓋し當然であらう。卽ち絅齋の所謂中國夷狄論も其の根本觀念は大義名分の思想より導き出されたものである。抑〻中國夷狄の論は當時山鹿素行及び國學者の一派によつて主張せられ、崎門に在りては闇齋に端を發し、絅齋に至つて强調せられ、强齋以下門流に傳へられた所のものである。然れども之を詳かに檢討するに論ずるところ或は排他に流れ或は牽强に失するものが少くない。蓋し支那思想を謳歌し之に心酔せる當時の弊風を打破せんとするのに餘り焦つた爲であらう。獨り其の中にあつて條理に叶ひ公正を得て居るものは絅齋の所論である　靖獻遺言講義に

唐ノ書ニ日本ヲモ夷狄ト云置ヲ見テ、トボケタ學者ガアラ口惜ヤ耻カシヤ我ハ夷狄ニ生タゲナトテ、我ト作リ病ヲシテ嘆クガ、扨モ淺間敷見識ゾ。我ガ生レタ國程大事ノ中國ガドコニアラフゾ。國ハ小サクト何ガ違ハフト、同ジ日月ヲ唐人ノ指圖ヲ受モセズニ戴テ居ル國ニ、唐人ガ夷狄ト書テ置タ程ニトテ、最早ハゲヌ樣ニ覺テ居ルハ、人ニ唾ヲカケラレテ、得拭ハズニ泣テヰルト同ジコトゾ。ソレデモ聖人モ夷狄ト云タモノト云ハフケレドモ、ソレハ唐人ノ聖人ハ唐カラハサフ云

筈、日本ノ聖人ハ又此方ヲ中國ニシテアチヲ夷狄ト云筈ゾ、ソレデハスレアフガト云ヘバソレガ義理ト云モノゾ。大義ヲ知ラヌ者ハソコデ迷フ、ヤスイコト人ニモ親ガアリ我ニモ親ガアル。人ノ親ノ頭ハハラル、トモ、我親ノ頭ハハラレヌ様ニスルガ子タル者ノ義理ゾ、スグニ其ノアチノ親トイフ親ノ子モ、又面々ニ我親ノ頭ヲバハラセヌ様ニト思ゾ。是ガスレアフ様ナレドモ、ソレデ義理ハ立タ者ゾ。ソレデモ日本ハ小國ジヤト云、ソレナラバ身代ノヨイ者ノ親ヲ見テ、手前ノソレヨリ輕キ身代ノ親ナラバ、役ニ立ヌ親父ヨトドコヘゾ捨フカ。是一ツデ合點ノイタコトゾ。或人曰、ソレデモ日本ヨリ、昔ハ遣唐使ヲ使ハサレテ、此方ヨリ貢物ヲ遣ラレタカラハ、日本ハ手下デハナイカ、ソレハ無作トシタコトゾ、中比大義ヲ辨ヘヌト云モノニテ、ソレハ大義ヲ辨ヘヌ誤ゾ。我國ハ天地開闢以來餘所ノ國ノ蔭ニテ立タル國ニテナシ。神代以來正統ニ少モ紛レナシ。唐ノ書ヲ讀デナジメバ、ドコトモナク唐人形氣ニ成テ、日本ハ旅屋ノ様ニ覺テ居ル、古今第一ノ僻者也。書物故義理ヲ破ルトハ加様ノコト也。（中略）畢竟中國夷狄ノ字儒書ニ在カラシテ加様ニ惑フ。儒書ヲ不レ讀時ハ其惑ナシ。大凡儒書ヲ學ンデ却テ害ヲ招クコト湯武ノ君ヲ伐コト不レ苦ト云ヒ柔弱ノ風ヲ溫和ト云様ナルコト幾箇モ有リ、皆非二儒書之罪一學二儒書一者ノ讀ゾコナイ、義理ノ究メソコナイ也。聖賢天地ノ道ヲ闡キ萬世ニ示セバ儒書ノ様ナル結構ナル義理ハ云ニ及バザレ

ドモ學ビソコナヘバ加樣ナ弊アリ、能々省ミ窮ムベキコトナラズヤ。

と云へるは其の一例であるが、其の他劄錄、答問書等に論ずるところ極めて詳かである。絅齋は其の師闇齋と同じく孔子朱子を尊崇し、其の思想を遵奉せる淳乎たる儒學の徒である。今日の所謂外國思想の熱心なる研究者であり又其の遵奉者である。而も當時の學界思想界の弊風に染まず、日本人たる自覺を失はず、毅然として我が教學の樹立に精進した態度は啻に後生の永く取つて以て範とするに足るのみならず、其の眞に我が名教に功ある偉大なりと謂はねばならぬ。

其の著はす所は極めて多く、而も殆んど寫本を以て傳はつて居る。其の重なるものを擧ぐれば、靖獻遺言八卷・同講義・易本義講義六卷・易學啓蒙講義三卷・繫辭傳參伍考證一卷・洪範師說一卷・六經編考一卷・大學講義五卷・大學或問敬說講義一卷・大學明德說一卷・大學物說一卷・批大學辨斷一卷・辨大學非孔氏之遺書辨一卷・中庸師說六卷・論語師說十六卷・孟子師說十五卷・小學師說七卷・近思錄講義五卷・楚辭師說五卷・大極圖說筆記一卷・感興詩講義一卷・西銘講義一卷・拘幽操講義一卷・白鹿洞揭示講義一卷・聖學圖講義一卷・敬義內外說一卷・氏族辨證一卷・忠孝類說附稱呼辨一卷・劄錄一卷・絅齋先生答問書一卷・同常話劄記一卷・同夜話一卷・同仁義問答一卷・同文集等である。

# 室鳩巣と朱子學

鈴木直治

室鳩巣、諱は直清、字は師禮、又の字汝玉、鳩巣と號し、又滄浪と號し、其の齋を靜儉といふ。其の家系行實の大略は、其の外甥大地奚疑の鳩巣室先生行狀（翁草卷四十二）、門人伊藤濟齋の鳩巣文集前編敍、板倉節山の鳩巣室先生傳（甘雨亭叢書）、野史の儒林傳、鳩巣先生年譜（室淳氏藏、鳩巣の自撰）等に據つて知ることが出來、互に詳略小異がある。其の先は熊谷次郎直實に出で、備中英賀（アガ）郡（今阿哲郡に屬す）中津井村の豪族であり、父は、諱は玄樸、草庵と號し、醫を業とし、始めて武州に徙り、萬治元年二月二十六日、鳩巣を武州の谷中村に生む。幼名を孫太郎といひ、幼にして穎悟、文籍を耽嗜し、總角已に成人の如く、寛文十二年、年甫めて十五の時、出でて加賀侯に仕へ、順祥と稱す。一日侯の命によりて大學を講じて侯の嘉歎を得、命によりて京師に遊學し、業を木下順庵に受け、神童と稱せらる。天和三年二十六歳の時、江戸の藩邸に在りて父の憂に丁り、居喪三年の後、貞享三年母を奉じて加賀に

遷り、此の年新介と改稱す。（一に新助に作る。鳩巣自身兩用せるものの如し。）元祿十年四十歳の時、母の死に遇ひ、以後常に加賀に在り、或は加賀侯に講說し、或は後學を誘進し、藩士の矜式する所となる。元祿十五年大學新疏を作り、又赤穗浪士復仇の事に感じ、赤穗義人錄を作る。正德元年五十四歳の時、新井白石の薦により召されて幕府の儒員に擧げられ、享保四年、木下菊潭・服部寬齋等と共に高倉書院にて講書することを命ぜられ、七年三月殿中侍講を授けられ、十年十二月西城侍講に遷る。其の間命によつて六諭衍義大意・五倫五常名義を作る。十二年末疾を患ひ、久しうして癒えず、疾痛甚しく、屢々解職を乞ふも允されず、乃ち職名を帶びて家居し、頤養を事とす。時に異學方に盛にして、程朱を妄議し、淳風日に衰ふ。鳩巣生徒を謝絕して家居自ら守り、篤志のもの來り請へば、諄々と指敎す。駿臺雜話五卷は其の間の講論の一端を輯錄したものであり、末學の流弊・世道の荒廢を憂ふる念に滿ちて居る。又太極圖述を著して、朱子性理學の精微を弘闡せんとし、其の淨書中に歿す。時に享保十九年八月十二日、行年七十七である。門人聚つて後事を謀り、大塚筑波山の後に葬る。是より後官儒多く此處に葬地を賜り、今に儒者の捨場と稱せられて居る。

　鳩巣二男四女あり、男諱は洪讃、字は孔彰、通稱は忠三郎、勿軒と號し、繼いで幕府に仕へしも、三十四歳にして歿す。女某は幕府の士高階經道に嫁し、先立つて歿し、他は皆夭折す。

鳩巣は幼にして神童と稱せられて居るのであるが、其の性格は所謂天才肌の豪放不羈のものではなく、實に忠厚自守の人である。此の事は木下順庵が常に其の忠信篤敬を稱して居つたことによつても（錦里文集卷八參照）、又延寶九年二十四歳の時、京師北野の菅公神廟に詣で、其の庇護を祈願し、「每朝卯前可ㇾ起」・「每夜子前後可ㇾ臥」等の自警條目十餘條を神前に陳ねて之を操守しようとしたことによつても十分に推知することが出來る。（補遺鳩巣文集卷十、祈菅神自誓文參照）且つ是は獨り其の少壯時代のみならず、鳩巣の一生を通じて言ひ得ることであり、晩年家學の要訣として父の恩・君の恩・聖人の恩の三者を掲げ、

今人家の子弟を見るに、多くは我身の樂をのみ思うて、君父の恩を思ひしる心なきよりして、言行に愼みなく、放逸に流れ侍る。又老子傾學と稱する人も、聖人の恩を身におもひしらざるが故に、自から高ぶり、名聞を務て、篤實なる方は露のこり侍らず。もし此翁が家の要訣を授て内省せしめば、陽浮の氣を降伏して、誠實にすゝむの媒ともなりぬべし。（駿臺雜話卷一、釋寂室の秘訣）

と論じて居る。又此の忠厚自守の性格は、更に何事も七八分にし、萬事舊慣に從はんとする其の消極的制止的の一面を示すものである。

すべて物は十分につくすを嫌ふ也。なに事をするにも七八分にして、前をのこして盡さぬをよし

とす。もし心ゆくまゝに、一旦に殘らず盡しぬれば、必後に悔みある物也。（同上卷四、運慶が口傳）其外なに事によらず、たゞありふりたるやうにすれば、やすらかにして事ゆきぬるを、よろしき仕かたこそあれとて、あたらしく仕出しぬれば、ことおほくむづかしくなりつゝ、かねてのよういとちがふ物なり。（同上、鷦鷯のふみ）

其の新井白石の剛鋭果敢を諫むるの書を見ても、よく其の爲人を窺ふことが出來、（三十輯所收、正德二年壬辰冬鳩巢先生與白石大人諫書參照）鳩巢は畢竟守成の人であつて、改新の人ではない。

鳩巢は自守守成の人ではあるが、其の舊學に對する信念は實に牢固なるものがあり、異學紛起の間に敢然程朱の孤壘を守り、仁齋徂徠を始め當時東西兩都の儒者は殆ど其の眼中になく、又朱子の太極圖說解を贊して、

自レ古聖賢語二天道一、未レ有下如二此一節之簡易明白一者上、而朱子又解レ之、命レ辭屬レ意、大出二人意之表一、亦非四宋元以來諸儒、可三得而窺二其閫域一焉。（太極圖述卷下）

と述べて居り、其の自信の强大なるを見るべきであり、而も此の自信は、其の自守の性格と相待つて、鳩巢の學風を顯然たるものたらしめず、鬱然たるものたらしめて居ることは、吾人の注目を要する點である。其の陶淵明の飮酒の詩に和せる作は、能く此の趣を語る。

富貴如二浮雲一、　遑遑欲二安之一、　苟合我所レ恥、　直道非二其時一、
偃息南窓下、　樽酒復在レ茲、　人生會有レ盡、　知レ命貴レ不レ疑、
先民貽二高矩一、　百年可二自持一、
異端竊二吾道一、　微言反亂レ眞、　舉世競二浮靡一、　澆風孰使レ淳、
如何談レ經士、　相師皆務レ新、　寧獨罪二楊墨一、　且無レ論二儀秦一、
曰余秉二微尚一、　中路落二世塵一、　舊聞幸未レ失、　溫習固已勤、
惟道無二隱顯一、　居レ敬道自親、　求レ道不レ由レ茲、　茫洋如レ迷レ津、
恐我醉失レ儀、　嚮レ晦整二衣巾一、　斯言邇可レ遠、　敢諗同志人。（前編鳩巣文集卷一）

又駿臺雜話の中に其の志を述べて、

されど翁が心は、知己を一世にもとむるにも候はず。昔より邪僻妄誕にして、根もなき事のさかんに世に行れて、あなかしがましくきこゆるは、女郎花の一時とや申すべき。大かたはつゞかぬものにこそ。世を經て正道へかへらぬはなし。しかるを心短くして、早く其驗を見むと思ふは未練のことゝいふべし。（卷一、愚公が山）

と語つて、自ら列子に出でたる愚公が山を移すに譬ふるが如き、異學跳梁の際にありて否亭の道を守

り、鬱然一家をなして、其の親近するものを教導せる鳩巣の學風を窺ひ知ることが出來る。

鳩巣が如何に程朱を尊信せるかは、世に已に定評のある所であり、余の縷說を要しない。駿臺雜話開卷第一の老學自敍の條を見ても、其の深且つ厚なることを知り得る。

ある日講はてゝ、宋儒以來學術の異同におよぶ。座中に程朱の學に疑を貽す人ありしに、翁のいふやう、某もわかゝりしとき、俗儒に習て記誦詞章を學びて、多くの年月を曠うせしが、或時忽往日の非を悟て、始て古人己が爲にするの學に志ありしかど、不幸にして良師友もなかりしかば、諸儒紛紛の說に眩惑して、程朱をも半信じ半疑ひつゝ定見なかりし程に、とかくして又むなしく歲月を經にけり。年四十にちかきころにもあらん、ふかく程朱の學つひに易べからざる事をさとりて、それより日夜程朱の書をよみて、心を潛め思を覃うする事今に三十年、仰げばいよ〳〵高く、きればいよ〳〵堅く、高遠に過ず、卑近におちず、聖人復出とも、必其言に從はん事疑なし。されば天地の道は堯舜の道なり、堯舜の道は孔孟の道なり、孔孟の道は程朱の道なり。程朱の道を捨て、孔孟の道に至るべからず、孔孟の道をすてゝ、堯舜の道に至るべからず、堯舜の道をすてゝ、天地の道に至るべからず。老學もとより信ずるに足らぬ事には侍れども、是ばかりは實見ありて申事にて侍る。もし實見なくしてさもなきことを申ならば、翁が身忽天地の罰を蒙るべし

と誓ひけるにぞ、座中も聽を改むる氣色なり。

鳩巣の程朱に對する此の如き信念は、何處より得來れるものなるか。前述の着實謹愿なる性格より推しても、專ら文辭に流れて道學を事とせざる蘐園一派に與せざるは勿論、簡易直截に致良知を主とする王學よりも、讀書窮理を主とし、循序而漸進を重んずる程朱に歸すべきことと思はれるが、其の中心程朱を奉ずるに至つたのは、前記自敍の文に據れば、四十歲頃の自悟に發端し、其の後程朱の遺書に於て自得せるものにして、師友の點化にはあらずといふ。是は大いに論議のある所と思はれる。鳩巣は幼少より順庵の門に學び、順庵の鳩巣を見ること常人に異なり、鳩巣もまた多年其の敎誨を受け、之を尊崇することは決して尋常師弟の間を以て見るべきではない。其の羽黑養潛に答ふる書を見るに、「於二文辭一、則必經二木翁之品題一、以自信。」と述べて居るが、(前編鳩巣文集卷十)鳩巣は固より一文辭の師として順庵に服事せるものではなく、義理に於ても順庵に得る所多大であつたと思はれ、其の大學新疏の中に順庵の「聖人之學、務レ實而已、云々。」の言を引き、其の說を推して象山・白沙・陽明の學を駁して居ることによつても、其の一端を知るべく、又其の順庵に奉寄せる蒲桃歌を見ても、(前編鳩巣文集卷一參照)如何に鳩巣が順庵の人格に傾倒して居つたかを知ることが出來る。又鳩巣の師事せる人に前記羽黑養潛がある。養潛は近江の人、諱は成實、字は養潛、牧野老人と號し、字を以て行

はれて居る。天資質樸、學術を以て世に顯はるゝことを欲せず、專ら躬行實踐を主とし、もと山崎闇齋に學び、闇齋歿く其の爲人を稱して置かず、佐藤直方・桑名松雪・淺見絅齋等、皆之を畏敬せりといはれ、始め彥根侯に仕へ、中年志を得ざるを以て致仕し、加賀に遊んで金澤に寓居し、專ら性理を唱へ、從學するものが多かつた。（先哲叢談續編卷三參照）鳩巢は始め京師にて會見して、其の趣向造詣の曲學淺識の徒に非ざることを見、其の金澤に寓處するや、岡石梁等と共に之に學び、前後十七年に涉つて其の教督を受け、自ら其の答書に、「於㆓義理㆒、則必得㆓高明之許可㆒、以自信。」と述べ、順庵と共に天下の知己となして居り、（前編鳩巢文集卷十）其の之を畏敬することは、順庵に比して決して輕からざるものがあり、先哲叢談所引の祭文（補遺鳩巢文集卷十一）答遊佐木齋書（前編鳩巢文集卷八）等は、之を證して餘りある。且つ先哲叢談續編には左の注目すべき一條がある。

養潛臥㆑病在㆑蓐、聞㆓赤穗遺臣大石良雄等之擧㆒、嘆息曰、嗚呼、士風之不㆑振也久矣、獨有㆓此等輩㆒、同決㆓死國難㆒、義烈凜凜、足㆔以激㆓頽風㆒矣、遂稱㆑之以㆓義人㆒、所㆔以室鳩巢有㆓義人錄之作㆒也。

士風の作振は正學の開明と共に、鳩巢一生の念願とする所であり、其の義人錄の作は、未だ必ずしも養潛の影響なりとすることは出來ないのであるが、此によつても養潛の爲人を知るべく、又鳩巢が養潛に負ふ所は、決して僅少に非ざることを推知することが出來る。前述の如く鳩巢の順庵養潛に得る

所は極めて大である。然るに駿臺雜話には自ら其の學の由來を敍して、良師友もなく、自悟自修せるものなりといふ。是は一見正に矛盾するものの如く、良師友なしとは語弊あるものの如く思はれる。併し是は鳩巢が老餘自負の言と見るべきものではなく、順庵の圓滿なる人格、養潛の毅然たる風格に薫化せられ陶冶せられた所は固より多かつたのであるが、其の確乎として朱子學的信念の上に立脚するに至つたのは、決して他の點化によるものではなく、自己内面に沈潛し、多年積習の極、其の所謂自悟によるものであると思はれ、其の良師友なしとの言も、此の見地から解すべきものであると思はれる。

鳩巢の程朱の學に對する信念は、其の自悟自修に本づき、其は實に牢固なるものであり、其の異學を惡むことは實に激烈である。併し其の自守の性格からして、顯然異學者流と論爭することなく、超然として迹を掃うて自ら守り、其の信ずる所に安んじて居るのであるが、其の之を惡む念は骨脈に徹し、内に鬱積して時には烈火の如き言を發して居る。

若有二王者起一、必聚二海内之籍一、悉取二其叢雜無用之書一而火レ之、然後詔二天下之學者一、專務二體察踐行一、不レ事二空言一、抑二虛文一、剗二浮華一、正二人心一、距二邪說一、如レ是數年、則天下靡然復二歸於正一矣。

（答遊佐次郎左衞門第二書、前編鳩巢文集卷八）

恭惟　神祖修二明初政一、首開二正學之路一、而　烈宗相繼、莫二之敢易一、至レ今天下學士書生皆受二其賜一、以爲二吾儒之大幸一、而世以二師儒一自居者、或信二古注一、而不レ依二朱子之注一、（荻生茂卿之徒如此。）或恣二大言一、以爲レ塞二伊洛之源一、（伊藤維楨輩碣云爾。）夫程朱之說、　神祖之所レ取、而今之學者棄レ之、伊洛之源、　祖宗之所レ開、而今之學者塞レ之、倍二敎令一、擾二國紀一、亦　祖宗之罪人也、斯義也、吾將下表而出レ之、以爲二赤幟一、而揭中之天下上、雖二世之滔滔者一、亦庶有レ所二畏愼一、而知レ嚮二於正一邪、亦足下以倡二正學一、而距中邪說上矣。（書安積老牛子筆記　神祖遺事後、鳩巢遺稿）

鳩巢が、程朱を墨守し偏狹固陋なりとの譏を受けるのは、此の如き思想によるものである。鳩巢が其の好む所に僻して居ることは認めざるを得ない。併し當時蘐園の說天下に囂囂として、相率ゐて道義を蔑視せしを回顧すれば、鳩巢の此の論は亦一笑に附すべからざるものであると思はれる。

鳩巢が異學として觝排する所は、文集・駿臺雜話等によつて考ふるに、闇齋學派・陽明學派・堀河學派・蘐園學派の四者であり、其の特に難ずる所は、卽ち仁齋・徂徠である。今其の大略を論ずるに、先づ山崎闇齋に對しては、其の爲人の倨傲嚴厲なることを論じて左の如く述べて居り、

若下山崎氏逃レ佛而歸レ儒、尊二朱氏一而黜二百家一、嚴二師道一而誘二後生一、其有上レ裨二於斯道一、有二不レ可レ誣者一、亦近世豪傑之士也、足下選二於諸儒一而師レ之、亦宜哉、然聞山崎氏自處太高、待レ人太嚴、

少二含弘之度一、不レ容二人過失一、其授受之間、無三能平レ心虛レ懷、從容委曲、以盡二彼我之情一、此其所レ短也。

（答遊佐次郎左衞門第二書、前編鳩巢文集卷八）

其の學術を論じては、

僕嚮者以爲山崎氏之學、專二於理一一、而略二於分殊一者、知レ有二君臣之大義一、不レ知下湯武放伐、與二君臣之義一、並行而不中相悖上、知二敬義有二內外之分一、而不レ知レ不レ可下以二修身以上一爲二敬以直一レ內、以二齊家以下一爲中義以方上レ外、此其大者也、其他所レ見、多執二定一理一、而不レ察二分殊一、所三以流二於神道一也、然今而思レ之、其理一者、守二義理之一隅一也、於二本原一理處一、所レ見未レ徹、故往往有レ所二窒礙一、而欲下以二其所レ見一上レ之、是其略二於分殊一者、暗二於理一一故也、賢明之論當矣、然山崎氏之徒、固二守師說一、不レ可二與語一。（答鈴木貞齋書、後編鳩巢文集卷八）

と述べて居る。其の湯武放伐論に就いては、駿臺雜話の中にも、

神道とはいへど、其說をきくに、我國に荷擔し、湯武叛逆の類といへば、其いはゆる神道は、仁義の外に有にやあらむ。（卷一、異說まち〳〵）

と論じて居るが、鳩巢の論は孟子の湯武放伐論に依據するものに外ならず、吾人よりすれば固より此を以て闇齋を難ずることは出來ない。其の敬義內外の說を駁する點は、朱子の意を得たるものと思は

れる。朱子が敬義夾持を說くは、闇齋の言ふ所とは異なり、其は居敬窮理並べ進むるの謂であり、大學の脩身以上を敬、齊家以下を義となすものではない。

次に陽明學派に對しては、其の人を明言して居らぬが、藤樹・蕃山を始め當時の陽明學者を指すものと思はれる。すなはち駿臺雜話に良知の學を難じて、

良知といへど、其說をきくに、佛性を明德と竝べ稱し、武藏坊辨慶を智仁勇の士といへば、其いはゆる良知は、是非の心にあらざるにやあらん。（卷一、異說まち〳〵）

と述べて居り、其の武藏坊辨慶云々の事は蕃山の集義和書卷一に見ゆる所である。又三輪執齋が正德二年に傳習錄を飜刻して、王學の振興に力を致せるが如きは、固より鳩巢の快しとせざる所であつたと思はれる。然れども王學は全然取るべき所なしとするものではなく、駿臺雜話卷一にも陽明が當時朱子學の弊を見、專ら內省を務めしめたのは、其の意は善なりといふべきであるが、枉れるを矯めて直きを過ぐるものなりと論じ、

陽明は傑出の人なり。朱子の學を毀て支離とするも、少しいはれなきにもあらず。當時朱學の弊、多は文字言語にもとめて、內省の工夫やゝすくなきを見て、朱子格物の說を義外とする程に、良知を標的として、一向に內省につとめしむ。これ其意よからざるにはあらず。然れども朱子格物

の說、良知を外にするにあらず、事物に卽て良知を致すなり。（中略）今朱學の弊を改んとて格物窮理を廢するは、朱子の意をしらざるのみにあらず、矯レ枉過レ直といふべし。（扁鵲藥匙をすつ）

其の大學新疏の著は、其の序文を案ずるに、此の陽明學の勃興に對して朱子章句の眞意を發揮講明せんとするものに外ならず、其の朱子學信奉の一端を窺ひ知ることが出來る。

自二象山陽明白沙之後一、世之儒者、率皆於二脩身之事一、忽焉不レ加二之意一、好爲二明心頓悟之說一、以遂二高簡疎略之志一、凡如レ此者、其所二成就一、亦非レ無レ可レ觀者一、然徒見三涵養之素、著二於言論氣象一、而不レ見三道德事業、有下以成レ己成上レ物、則其所レ得二於道一者、特影響爾、亦由二其學不下本二於脩身一也、孟子曰、服二堯之服一、言二堯之言一、行二堯之行一、是堯而已矣、其言雖下爲二曹交一發上、然實學者如レ此、不レ然、其不下陷二於異端一、而得中罪於聖門上者、幾希矣。（大學新疏卷上）

又駿臺雜話の中にも陽明の說を駁して左の如く述べて居る。

朝省昏定やうの事は、およそ事レ親の人誰かしらざるべきなれども、其さへ田舍農家の民などは、愛レ親の心なきにはあらねど、朝に省むべく昏に定むべき事ともしらざるぞかし。況や親を養ふは誰も養へども、口體を養ふと志を養ふの異同あり。親を敬ふは誰もうやまへども、嚴威儼恪は事レ親の道にあらず。其外父母の前にては恆言不レ稱レ老、叱咤の聲犬馬に及ばずといふの類に至

まで、すべて事ㇾ親の事なり。もし其事に卽て各其當然をきはめずして、わが愛ㇾ親の心にもとむれば、おのづから事々つくすにたりぬといはゞ、聖人の上にはさもありなん、學者の及ぶべき所にあらず。おそらくは孝の道をつくさぬのみにてもなく、又心ならず不孝の事もありぬべし。かくいへばとて、事ㇾ親をやめて是等の事を講ぜよといふにもあらず、又是等の理をのこらず究めねば事ㇾ親べからずといふにもあらず、たゞ事ㇾ親の上にて其事の當否をきはめ明にし、又は讀書の上にても聖人孝を論じ給ふにあはゞ、反覆して其理趣を味ひ、其本末をきはむべし。もろ〳〵の事是をもて例して知るべし。是則格物の學なり。かくしつゝ久しうすれば、やうやく道理純熟して、後はわが愛ㇾ親の心ひとつをもて親につかふるに、其道をつくさずといふ事なし。是程朱格物の學の妙處なり。かねて功をこゝに用る人にあらずば、其味をしるべからず。孟子の不ㇾ學してしるは良知なりといへるは、人に孝弟の心學びずしてあり、是を本として學んで其量をつくせとの事なり。不ㇾ學してもそれにてたれりといふにはあらず。（卷一、扁鵲藥匙をすつ）

此等陽明學に對する駁論は、未だ必ずしも陽明學の精微を窮めたるものとは稱することは出來ないが、よく朱子格物窮理の學の本質を把握せるものと思はれる。

次に堀河蘐園兩派に對する非難は最も熾烈を極め、其の人品を酷評して驕惰なり剽輕なりと論じ、

當代東西兩都の儒を見るに、もとより人によりて一概には論じがたけれども、多くは異論を好み、名譽を要するは同事にして、其病根は又異なるべし。大抵洛陽の儒は驕惰の弊あり、東都の儒は剽輕の弊あり。洛陽は風氣和し土地狹し。この故に近き比まで其の土の宿儒おほくは溫厚柔謹にして、制行正しく、威重ありて人望を失はざりき。然るに近年溫柔變じて惰弱となり、威重變じて驕泰となる。空談を尙び文史を玩び、是をもて自から尊大にして、曾て遜志時敏する事をしらず。されば良工用意の勞をいかでしるべきなれば、たゞ道を容易なる事に意得る程に、はては先賢を慢り、程朱を毀りてやみぬ。（中略）東都の儒は又是に異なり。關東は風氣薄く土地濶し。それに武人俗吏其地に逼居て、其風おのづから儒者にも移れば、昔は文飾なく質直なるかたありて取べかりしが、今は質直變じて麤惡となりぬる程に、放蕩輕薄、德義を銷刻し、浮辭怪說、文字を造作す。

（駿臺雜話卷一、矯輕警惰）

仁齋が大學を孔子の遺書に非ずとし、其の送浮屠道香師序に孔釋の道二つなしとするを難じ、（同上、異說まち〳〵參照）又其の天地の間一氣のみと說き、理氣體用の說は孔孟の言はざる所なりとして朱子を非議するを駁論して居る。（同上、扁鵲藥匙をすつ參照）此が詳論は姑く置き、

道理においてたがふ事なくば、何ぞ必しも規々として古人の言を蹈襲すべき。（同上）

と論ぜるは、固より正當の論と稱すべきものであらう。又徂徠を難じては、ある儒者の說とて、耳を驚かす事をこそ承候へ。「道は天地に出るものにあらず、聖人の作り給へる事なり」。又いふ、「道は事物當然の理にあらず、文雅風流のものなり」。又いふ、「五倫の內に夫婦のしたしみばかり天性なり。其外君をたつとび父母をうやまふの類は、人の性にあらず、聖人の作り出せる道なり。其作者聖人なる故に、古今に行はれて變ずる事なし」とぞ。古より邪說多しといへど、是ほど乖戾りぬる事は承らず。（同上、心のめしひ）

と述べ、此を以て心のめしひとなし、取り上げて論ずる要もなく、喪心の人を相手とするが如きものにて、（同上參照）扁鵲も藥匙をすてて驚き走るべきものなりと論じ、又其の古文辭に對しては、韓柳歐蘇の文の必ず義理に根據するを稱揚し、徂徠の尊崇する李滄溟・王鳳州の爲人を考ふるに、夢にも義理を知りたる人に非ず、病ㇾ狂喪ㇾ心の人に似たりとなし、明朝の學は二王に變ず、義理の學は陽明に變じ、文章の學は鳳州に變ずと論じ、（同上卷五、曇陽大師參照）更に

鳳州は晚節に及て文友と文を論じ、やゝ後悔して平正にかへる志ありしかども及ばざりけるよし、錢謙益が列朝詩集に見えしと覺え侍る。しかるに今文章をもて自から許す人の王氏が棄餘を拾て彼が四部稿を師祖とすと見れば、また鳳州が心にたがひて、反つて韓歐を毀るこそ、いと意得が

たけれ。定めてふかき意もあるにかあらん。翁などが小見にてしるべき所にあらず。

（同上、文章の盛衰）

と述べて居り、其の徂徠を嫌惡することの如何に甚しかりしかを見ることが出來る。

鳩巣は前述の如く異學を斥け、朱子學を天地の道なりとするものであり、隨つて其の學說も、一に朱子を祖述せんとするものであり、鳩巣獨自のものとして特筆大書すべきものはない。其の大學中庸新疏・大學或問新疏・太極圖述・西銘詳義等の書を見るに、孰れもよく朱子の注文を守り、之を疏通し、反復縷說して、脈絡貫通、條理明白ならしめんとするものに外ならない。然れども朱子の書は、其の著作文集語類等頗る浩瀚であり、其の間に前後矛盾背馳するものも亦少からず、前後通觀し、爬羅剔抉して其の眞を把握することは決して容易の業ではない。朱子以後其の說を奉ずるものの間に異說の絕えないのは、此處に其の一因を有するものと思はれる。然らば鳩巣の論ずる所も果して朱子の眞を得たるものなりや、是れ吾人の看過すべからざる所である。次に鳩巣の說は果して朱子の說を以て一貫せるか、又鳩巣は朱子の說を如何に實踐せるか、是れ亦吾人の大いに論ずべき所である。次に其の一端を論ずることとする。

第一に朱子の理氣論に對する鳩巣の說を見るに、其の說は其の太極圖述に備はる。理氣論は朱子に

於て最も難解なるものであり、隨つて古來論議已まざるものであるが、鳩巢の此に對する自信は前述の如く極めて大なるものである。思ふに濂溪の太極圖說に對する朱子の說は、其の文集語類に見ゆるところ實に區々たるものあり、其の圖說解は果して朱子の圖解に對する定論と目すべきものなりや否やは大いに論議すべきものであり、既に鳩巢の當時伊藤東涯は圖說解の濂溪の意を得ざることを論難し、肯綮に中る所がある。今鳩巢の太極圖述を見るに、難解なる圖說解の文を疏通明白ならしめたる功は認めざるを得ないのであるが、畢竟圖說解を以て朱子の定論となすものに外ならず、隨つて其の論も亦朱子の眞を得たるものと速斷することは出來ない。且つ朱子が太極圖最上の一圈を論じて、

○此所謂無極而太極也、所二以動而陽、靜而陰一之本體也。

と述ぶるを解して、

○此最上之圈、所謂無極而太極之象也、太極不レ過レ爲下所二以動而陽陰而靜一之理上、而今復添二本體二字一者、此○居二最上一、實爲二無極而太極之象一、則又太極之所三以爲二太極一者、是挑二出太極之本體一在レ上也。（太極圖述卷上）

と論じ、更に下卷通論に於て之を力說して、

蓋太極以爲レ所三以爲二陰陽一、則太極實陰陽之本體也、無極以爲レ所三以爲二太極一、則無極又太極之本

體也。

と論ずるが如きは、斷じて朱子の意を得たるものではない。無極を以て太極の本體とすれば、無極は太極よりより高次なる存在となる。然れども朱子に於ては無極の二字は太極の意義を補成するものに外ならず、圖解の本體の語は實體を意味するものであり、既に村士玉水の論ずるが如く、太極圖最上の一圈は鳩巢の所謂太極の本體を挑出せるものではなく、（續日本儒林叢書所收の太極圖述欄外の標記參照）鳩巢の此の論は朱解の文に拘泥し、之を誤解せる所に基因するものと思はれる。是は固より其の一端を論ぜるものに過ぎないが、鳩巢の理氣論は未だ朱子の眞を盡すものとすることは出來ない。

次に其の居敬窮理の說を見るに、主一無適を論じて、

程子曰、主ㇾ一之謂ㇾ敬、無ㇾ適之謂ㇾ一、今此合而言ㇾ之、主者、守而不ㇾ失之意、一卽此心之湛然在ㇾ是而無二他適一者也、無ㇾ適、言身之所ㇾ在、心卽在焉、而無二一息之離一、事之所ㇾ在、心卽在焉、而無二一念之雜一、是也、主一無適之謂ㇾ敬、猶ㇾ言二守ㇾ一而能一之謂一ㇾ敬。（大學或問新疏）

と述べ、又邦語にて敬の義を敷衍し、駿臺雜話に、

敬は心のむきを眞直にして、わきへゆかぬやうに、心のもとをたばねて、末のちらぬやうに、身の番人となるやうに、事の目つけとなるやうに、是にて敬はのこりなくこそ候へ。（中略）各是を身

に驗て見給はゞ、主一無適も、常惺々法も、この外になき事としり給ふべし。（巻二、敬の工夫）

と述ぶるが如き、大略朱説を得たるものと思はれる。其の窮理の說は、前述せるが如くよく朱子の意を得たるものと思はれるが、此に就いて論ずべきは、鳩巣が駿臺雜話の中に於て、用兵治世を始め何事に於ても、拙速をよしとして巧遲を得たりとせず、徒に義理の僉議に流るゝを非として居る事である。

後數日ありて諸客來會せしが、前日兵の拙速を貴ぶ事を承候てより、自分にも考へ見候に、兵に限らず、大かたは何事も不調法にして速なるがよく候。然るをあまり思案過候て、仕方のよきやうにとこしらへ候へば、多くは文に拘り實を失ひ候故、やゝもすれば機會におくれ候て、後悔する事も出來候。是巧にして久しきの害にて候といへば、翁きゝて、さにてこそ候へ。但其の速なるに本源あり。たゞ常に心ゆるまず、氣たるまざるを本源とす。心ゆるまず氣たるまざれば、事物に奪はれぬ程に、おのづから落著候て、緩やかなる物にて候。さればすみやかなるは緩やかなるより生ずると思ひ給ふべし。（巻四、不レ忘レ向レ君）

翁かねておもふ事にて候。今の學者、聖賢の書を讀て、なまじひに義理の僉議をいたし候へども、大かたは僉議に日を暮し、何にてもひとつ取とめて身に得たる事は侍らず。是も巧にして久しき

と申べし。然るに武臣たる人は、不學にして一己の見付たる所によりて覺悟を決して、直に行ひ出し候故、端的に其驗を見せ申にて候。學術なく候へば、理に當らぬ事もあるべく候へども、其得たる所おのづから聖賢の教にもかなひ候。いはゆる拙而速なるに候はずや。（同上、大敵外になし）

此の如き思想は、實に陽明致良知の說の由つて起る所であり、徒に朱子の知先行後を墨守するものの論ではない。然れども鳩巢の平日說く所は、固より朱子の說であり、

孔門の教は、博文を約禮に先んじ、大學の法は、致知を誠意正心に先んず。（同上卷二、義は心のきれ）

と論ずるが如きを見ても、其の一端を知ることが出來、是は鳩巢が吾人爲學の常道を論ずるものであり、此を以て遽に前述の論と矛盾するものとすることは出來ない。然れども常道を執るものの其の弊に流れて却て得ること少く、不學にして其の心に見付けたる所によりて行ふものの、おのづから聖賢の教にかなふこと多きを見れば、其の以て常道となす所も多少の變更を要すべく、其の王學觀も多少の變更を要すべきものと思はれる。

鳩巢が名教の保持に力を致せることは特筆大書すべきことであり、其の吉宗の命によりて撰述せる五常名義・五倫名義・六諭衍義大意が、如何に當時の社會風教に貢獻せしかは推測に難くなく、其の五倫五常名義・大學和歌の如きは、習字の教本にも用ひられ、廣く行はれたもののやうである。其の

他、赤穗義人錄・明君家訓・士說等の著を見ても、鳩巢が如何に士風の振作に意を用ひて居つたかを知ることが出來、其の明君家訓は吉宗の嘗て愛讀せる所と傳へられて居る。鳩巢がかく士道を力說し、世敎を補翼せんとせるは、正に朱子が義利公私の辨を嚴にして、社會風化を裨補せんとせる餘意を繼承して實踐せるものと稱することが出來る。特に其の赤穗義人錄は最も有名であり、當時太宰春臺・佐藤直方を始め世論囂々たる中にあつて、慨然流涙して復讐の擧に感じ、其の行事を顯揚し、之を義人と稱せるは、卓拔の見と稱すべきであり、其の義士切腹の狀を記する一節、大石主稅の事を記する一節の如きは、讀者をして不覺眼底熱からしむるものがある。また其の駿臺雜話を見ても、鎌倉以來の幾多の士人を論じて之を褒貶し、忠臣義士烈女の事を收錄するもの略其の半を占めて居り、其の毀譽する所は必ずしも悉く中正の論と稱することは出來ないが、鳩巢が一代風敎の維持を以て自ら任ぜるを見ることが出來、其の異學を牴排したのも、此の名敎保持の念が其の主要なる一因をなして居つたものと思はれる。（駿臺雜話卷五、壬子詞筆の詞參照）然れども鳩巢の此の名敎維持の精神は、單に一般世敎を補翼せんとするに止まり、國體の尊嚴に留意し、大義名分を明かにするの事に至つては、毫も之を論じて居らないのは、吾人の大いに遺憾とする所である。其の義人錄後語を見るに、奧村天遊は義人錄を贊して朱子綱目の微意を寓するものと論じて居るが、其の義人錄中に幕府を稱して朝廷となし、

又國喪正議中に將軍を王と稱せるが如きは、斷じて朱子綱目の微意を得たるものではないと思はれる。又其の楠正成論は世に定評のある所であり、正成を忠義の人として稱揚するも、畢竟孔明の比に非ずとなし、

然るに世の尙論する人、推尊で諸葛孔明に比するは、兩人いづれも兵略をつとめ、興復を謀り、父子國事に死するも同じければなり。それはさる事なれども、孔明は臥龍なり。道德を懷抱し、功名を遺外し、草廬にて一生を終んとせしに、はからざるに蜀の先主の三顧に遇て、不レ得レ已して出仕へしが、一朝關雎が上に立て、君臣魚水のごとく成し、されば其の出處、伊尹・呂望に近しとなん古人の論もあるぞかし。正成はもと功名科中の人なり。後醍醐帝笠置に臨幸の時、近國の名士を徵れし間、正成も召に應じて參じけり。是その出處孔明とは大きに異なる上、恢復の後も尊氏義貞の下に列して、專ら任用せらるゝ事をきかず。孔明をもて擬せば、恐らくは其倫にあらじ。（中略）正成かくのごとく絕倫の材をもて、聖賢の道を學びずして、孫吳が術をのみ崇びしは、遺恨といふべし。湊川にて自殺するとて、弟正季と最後の一念を語る事、はなはだ陋し。

（駿臺雜話卷四、楠正成）

と論ずるが如きは、畢竟彼我國體の相違を解せざるに因るものであり、又其の忠孝を論じて、

父母天性之親、雖二國事之重一、亦莫二之奪一也。（赤穗義人錄、大高忠雄傳評）

と述ぶるが如きも、亦是れ其の儘我が國に行はしむべき思想ではない。

上論の如く鳩巢は未だ完全に朱子學の眞を把握し、此を以て一貫し、之を實踐せるものと稱することは出來ないが、其の朱子學を信ずることは實に深く、忠實に朱子を祖述せんとせる意圖は、其の著述の中に明瞭に窺ふことが出來る。而して其の學術は徂徠・東涯と相並んで當代一流の地歩を占め、異學殷盛の際に當つて鬱然として程朱の傳統を保持せる功は大なりと稱すべきである。然れども其の嗣子勿軒は父業を繼ぐの才なく、且つ早世し、仁齋の子孫の綿々として家學を繼承保持せるが如くならず、又其の門下には大地奚疑・中村蘭林の如きものあれども、寶暦中相次いで歿し、其の門流は鳩巢の歿後幾許もなく殆ど隕落し盡し、（鳩巢文集前編叙・刊太極圖述序參照）蘐園の一派が徂徠の歿後數十年に渉つて隆盛を極めたるに比すべくもなく、朱子學は衰退の一路を辿るに至つたのであるが、後寛政の間に至り、異學の禁に活躍せる柴野栗山は、異學の弊を論じて、鳩巢の「如下與二醉人一言上、不レ可二與辨一レ是也。」との言を引いて之を難じて居り、（栗山文集、論學弊）又尾藤二洲は駿臺雜話を讀んで感憤興起せりといはれて居り、鳩巢の異學觝排の思想が後學に與へたる影響は、少からざるものであると思はれ、我が國朱子學史上に於ける鳩巢の地位は實に大なるものであると言はなければならない。

鳩巣の著述は、刊行せるもの少く、且つ享保二年正月江戸大火の際に其の草稿を類燒せる爲に、今日坊間に傳はるものは未定稿のもの多く、寫本として各處に散在する爲に、正確に之を論ずることは出來ないのであるが、此の小論をなすに際して見聞せるものに就いて、便宜上左の如く分類して之を擧げ、以て大方の指教を乞ふ。尙ほ鳩巣の宗家に當る備中中津井村の室家の後裔たる室淳氏の厚意により諸種の刊本寫本を見ることを得、又多年調査の跡を聞くことを得たことを深く感謝する。

○文集類　前編鳩巣文集十四卷　後編鳩巣文集二十一卷　補遺鳩巣文集十一卷　鳩巣集外纂寫本二卷。舊東京帝國大學圖書館所藏。今同館所藏の鳩巣遺稿一冊は下卷の一部を收む。　兼山麗澤祕策寫本、卷數區々。一名、鳩巣手簡・鳩巣錄。　鳩巣小說寫本、卷數區々。又異本あり。一名、駿臺逸話・可觀小說。　書批雜錄三卷。甘雨亭叢書收載。　鳩巣書牘靜嘉堂文庫所藏懷之好音（寫本一卷）之を收む。　論土屋主稅處置甘雨亭叢書・鳩巣小說收載。　鳩巣與白石諫書三十幅・白石全集・兼山麗澤祕策收載。　朝鮮客館詩文稿一卷。七家唱和集にも收載す。　鳩巣百韻詩寫本一卷。前編鳩巣文集卷六にも收載す。

○解說類　周易講義寫本七卷　大學新疏二卷　大學或問新疏寫本一卷　中庸新疏三卷。中庸廣義と題する寫本あり、同じ。　中庸講義寫本一卷　論語集注廣義寫本若干卷　孟子講義寫本三冊　太極圖述二卷　西銘詳義一卷　西銘講說寫本一卷　近思錄詳義寫本若干卷　孫子記聞寫本一卷

尙ほ、伊藤澹齋の編輯せる鳩巣先生經解類と題せる寫本あり、處々に散在す。岡山縣立圖書館所藏本は中庸講義三冊・大學或問新疏一冊・孟子講義七冊・論語二冊・太極圖述二冊を收むといふ。其の他、左傳辨疑二卷（鳩巣室先生行狀）・詩廣義（刻西銘詳義序）・周禮新疏十（慶長以來諸家著述目錄）ありといふ。未だ其の所在を知らず。

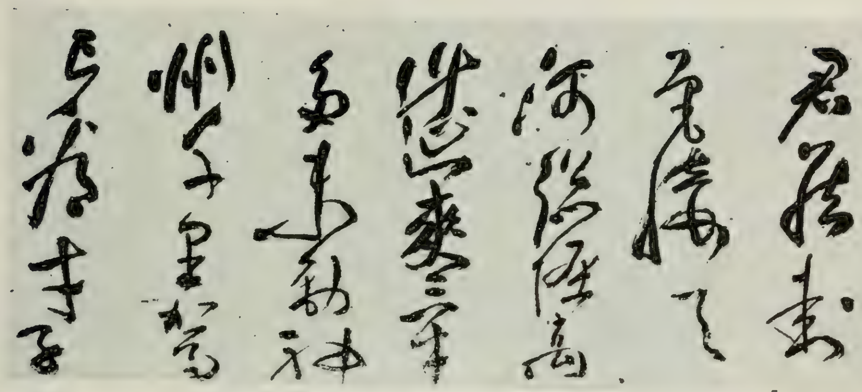
○教訓類　六諭衍義大意一卷　五倫五常名義一卷。獻可錄上卷中にも收載す。　明君家訓一卷。原名、假說補正成諸士教。　士說一卷。文集後編卷十二にも收載す。

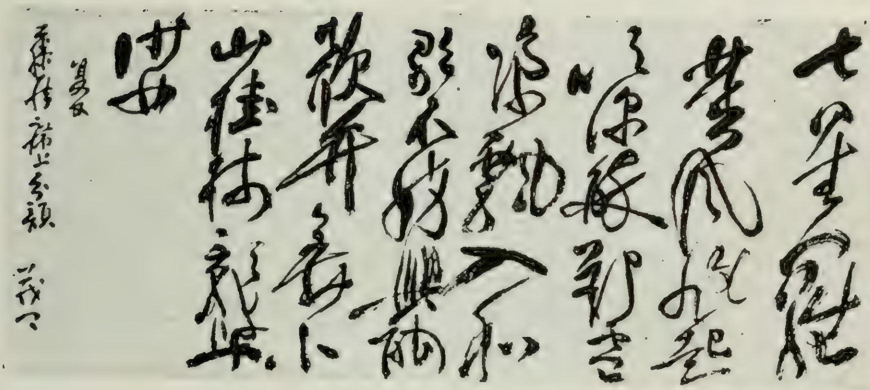
○其の他　駿臺雜話五卷　駿臺隨筆寫本五卷　鳩巣雜記寫本二冊　駿臺翁遺訓寫本一卷　不亡抄寫本四卷　歸嬰俗解寫本二卷　天

下天下論 甘雨亭叢書・國朝舊章錄收載。駿臺雜話卷三、天下は天下の天下の條に出づ。　病中須佐美一卷。甘雨亭叢書・帝國圖書館所藏十七册本可觀小說收載。　赤穗義人錄二卷。甘雨亭叢書にも收載す。　太平推国記寫本一卷。鳩巢集外纂にも收載す。　獻可錄寫本三卷。一名、駿臺祕書・政要祕談・東崟閣祕錄・鳩巢先生祕錄・室家祕錄・鳩巢中慮・鳩巢上言錄・室新助上書・室直清進言・續駿臺雜話。分卷區々。　國喪正議寫本一卷。鳩巢集外纂にも收載す。　文公家禮通考一卷。甘雨亭叢書收載。　大學和歌一卷。甘雨亭叢書・國朝舊章錄にも收載す。　任筆錄寫本一册　仁說並敬說寫本一册　神儒問答一卷　鳩巢先生年譜寫本一卷




荻生徂徠肖像（帝室博物館藏）





荻生徂徠筆蹟（伯爵柳澤保承氏藏）

# 荻生徂徠に關する二三の考察

鹽谷　溫

荻生徂徠は江戸時代の大儒である。その學殖の淵博にして識見の高邁なるばかりでなく、その門下に濟濟たる多士を輩出し、徂徠學なる一派を創立したる點に於て、學者としてはた教育家として、實に傑出せる人物である。かゝる大先生を論ずることは固より限られた頁數で出來ることでなく、又世に徂徠の學說に關する成書も二三出て居るから、玆には從來あまり知られて居ない「蘐園學派と韓使との交渉」・「徂徠の漢文直讀論」に就て二三の考察を述べることにした。支那語教育の提唱される今日に於て、徂徠の先見の明を知るに足るであらう。因みにその朝鮮に關する史料は、前京城大學豫科教授多田學士の提供に係る。附記して謝意を表す。

## 一　總　說

荻生徂徠、名は雙松、字は茂卿、通稱總右衛門。方庵（名は篤、字は玄甫）の第二子で、徂徠、蘐

園、赤城翁等の號あり、本姓の物部たるを以て、また物徂徠とも稱する。幼にして岐嶷、五歲學を識り、十歲能く文を屬し、延寶元年、父に從つて上總に蟄居し、居ること十二年、赦に逢うて父と共に江戶に歸るや、帷を芝浦に下して、徒に授け自ら給する中、柳澤吉保その聲名を聞き、徵して俸十五人扶持を給し、尋で累進して五百石に至り、番頭格に進んだ。是より先、伊藤仁齋、古學を平安に唱へ、力めて程朱を排するや、徂徠卽ち護園隨筆を著して、程朱を辯護したが、後李王の書を讀むに及び、忽ち感發する所あり、悉く舊學を廢して古文辭を修め、之を復古學と稱し、名聲藉甚、一世を震撼し、扶桑の文藝爲に一新を來した。徂徠人となり、英氣高邁、卓犖不羈、其の學また汪洋浩博、雅樂象胥より軍旅法律に至るまで、精通せざるはなく、文を作るに縱橫馳騁、間々詭奇に渉ることありと雖も、豪放佚蕩、一世に冠となり、時勢を論じ、法令を議することも亦多かつた。五代將軍德川綱吉の柳澤邸に臨むや、徂徠は擇ばれて經書を進講すること多く、後ち享保六年には、八代將軍吉宗の命を奉じて、六諭衍義を和譯し、同十三年正月十九日江戶に歿し、三田長松寺に葬る。享年六十三。門下に、太宰春臺、服部南郭、安藤東野、山縣周南、平野金華等俊秀の士が多かつた。

斯くて、護園の文章は、元祿から享保にかけて、我國の文章を統宰したるかの盛觀を呈し、居然として東國の重鎭たるのみならず、その經學に於ても亦、徂徠は仁齋と東西に相對立し、辯道、辯名の如

きは實に千古の卓見である。加之論語徵の一書が、清朝の考證學者と相頡頏するに足るものあるは、夙に、兪樾の春在堂隨筆に推す所であるばかりか、蘐園隨筆も亦其言頗る平實にして理に近く、論ずる所の陰陽、理氣、性質、教民、六經、佛老の旨に至るまで、皆特識ありとは、又李慈銘の稱する所である。徂徠の弟觀は、山井鼎の七經孟子考文補遺一百九十七卷を完成して、清の四庫全書に著錄せられたるのみならず、阮元の校勘記を著すや、また之を利用する所が多かつたことは、世間の著聞に屬する。若し夫れ、蘐園一派と、朝鮮通信使及びその文學との交渉に至つては、その交渉眞に緊密なるものがあり、宋學是非の論爭は、彼と我との最も注目する所、而して江山三千里、知己を箕子の舊國に得たるも、亦實に我が蘐園派の獨擅場であつたのである。

## 二　朝鮮通信使と蘐園

蘐園の學徒にして、最初に朝鮮の學人と接觸したのは、我が正德辛卯（朝鮮肅宗三十七年）第六代將軍德川家宣の襲職を賀せんが爲に、趙泰億を正使とする第八回朝鮮通信使一行が、下關に立寄つた同年八月二十九日のことであつた。この夜四更、蘐園の羽翼たる長州藩の山縣周南は、同藩の佐々木貞雅・佐々木縮往・草場居敬等と倶に、一行の客館を訪れ、先づ、

奉ㇾ呈二龍湖嚴公案下一　周南

赤目關西玉樹秋　長風吹送木蘭舟　誰知海上蓬壺月　總入二詩人脾裏一流（問槎畸賞卷上）

の一詩を、書記なる龍湖嚴漢重に贈り、

奉ㇾ和二周南示韻一　龍湖

橘樹楓林海上秋　滄洲斜日住二歸舟一　仙區到處窮二探勝一　歷盡驚濤似二穩流一

の和詩を得、五更に至つて散じ歸るまで、周南には筆語六條が傳はり、詩は後日に及んで、舟中の韓客に贈つたものを合せて、三十四首の多きに上り、他に書牘三篇と、對馬藩の書記雨森芳洲、松浦霞沼が周南に贈つた詩十首とを綴つて、その歲十一月、江戶に在る蘐園一派の白楡社同人に寄せてゐる。當時の周南は、年齒纔かに二十五ではあつたが、既に十九歲にして江戶に赴き、安藤東野と與に徂徠に師事し、螢雪の功成つて歸國した後のこととて、その朝鮮製述官李礥、及び書記洪舜衍、嚴漢重、南聖重の四氏と相對するや、應酬敏速、文才儁逸、大に韓客の稱贊を博した。故を以て、雨森芳洲も亦韓客に擯して座間周南と交歡するや、周南を目するに海內無雙を以てしたので、周南の聲名は嘖々として藝苑に著聞し、爲に蘐園の名をして、先づ雞林に高からしめたのであつた。

次いで九月十五日、韓使一行の船の攝州兵庫に到着するや、此歲新しく白楡社同人に加はつた入江

若水が、李東郭<sub>礥の別號</sub>等四人と唱和の詩を傳へ、十月、一行を江戸に迎へてからは、安藤東野、秋元澹園、味木立軒等の白楡社同人が、江戸の本願寺に於て、韓客と詩文の應酬をなし、太宰春臺も亦、その客館を訪れたものの、之は門禁が嚴重であつた爲に、刺を通ずるを得なかつた。その他蘐園に屬する詞客としては、京都に於て寺田臨川が詩を贈り、伊豫守本多忠統が、遙に律詩一首を大阪滯在中の韓客に寄せてをり、その歸船が下關に立寄つた翌壬辰年正月二十一日、及び二十三、二十六の三日間には、山縣周南が、一行に再會して、筆語と詩文の唱酬とをなすや、三使は特に格を破つて周南に謁見を許し、趙正使が瓶梅を出し示して、梅、開、盃三字を韻として一詩を賦さんことを乞うた時、周南は卽ち聲に應じて、

赤水橋頭一樹梅　却從瓶裏趁春開　分明認得東君意　要照嘉賓夜宴盃

と吟誦したので、正使は之を劇賞して、「卽席詠梅之作、尤淸警有味、眞不易得之才子也。」といひ、更に

春日維舟碧海隈　逢君一笑愛君才　淸新席上梅花句　直透詩家妙境來

の一詩を贈つて、三歎之を久しうしたのであつた。

飜つて、當時の蘐園派の形勢を回顧するに、正德辛卯の年には、荻生徂徠の齡正に四十六。柳澤吉

保の藩邸を出でて、日本橋茅場町にその居をトし、寶井其角をして、「梅が香や、隣は荻生惣右衛門」と、その全盛を謳はせたのも亦當時の口碑に存し、隨つて、その門下には、藩邸時代からの弟子服部南郭、安藤東野、三浦竹溪等を始めとして、新たに、山縣周南、太宰春臺、入江若水等の駿足も、亦その傘下に馳せ參じた頃とて、白楡社の文章が漸く世上に喧傳せられんとするの時代に屬すると與に、その文章論に於ても亦、唐の韓柳と、明の李王とを以て四家と稱し、わけても、達意を主とする韓柳の文章よりは、寧ろ修辭を旨とする李王の辭藻を貴び、韓柳の議論體よりは、却つて李王の敍事體を以て、一層緊要なりとする所の古文辭學派の主張も、既にその定見を確立し得た時の事とて、山縣周南は、下關に來着した韓客との筆語中に、李東郭に對してその主張を明らかにし、且つ、

六經古史而降、歷代之文、先儒具有評論、唐宋之間、文學益盛、良工巨匠、比跡輩出、其中詩有李杜蘇黄、文有八大家、學者資成方圓、猶日月之於衆星、皆承餘光、迄至明時、有四傑者出焉、專以古文爲號、四傑王李爲盛、風格體裁、非復四子八家之舊、而英發超邁、巍然卓出、又袁中郎、鍾伯敬之徒、自撰規矩、別建一家、以不踐前古之跡爲美、爾後文章家、有二三派、貴國文章之隆、（中略）不知、今之盛者、在唐宋耶、在明諸子耶。（問槎畸賞卷上）

と質す所があつたにも拘らず、東郭の之に對する答は得られなかつた。之に次いで、安藤東野も亦、

再寄二龍湖一書（閒續時賞卷上）に於て、此意を反覆し、その師徂徠の言なりとて、文章の道を以て山を築くに譬へ、

夫四家也者、會二典誥而還、荀孟賈馬仲舒子雲一、而芟鋤版築、今乃步二驟四家一、猶下之拾二人吞暢之遺一、實中諸版幹上、假使三能九仞一、不レ脆何待、子欲三善學二四家一、盍三少高二之、詩以修レ辭、書以達レ意、南華沖虛、魯盲湘纍、以逮二乎蕭統氏所レ纂、斑如粲如、我無レ隱二乎爾一、而後四家者言、自在二其中一也

と說き、更に、東野自らが、「古昔には獨り議論敍事の兩體のみ有り、序記論贊箴銘誄誌と區して別つものは、何れか古に有る。」と質したるに對し、徂徠より、「子必ず其體の備はる者を欲せば、明に在りては李王七子、古に先づ覺りし者なり。」と敎へられたるに基づき、李王七子の書を讀み、始めて、乾坤の際、いはゆる古文辭なるものの存する有るを知り、力を之に專らにして、山縣周南と共に、徂徠を盟主と仰ぎ、當時の日本文壇に於て、新たに古文辭學一派の旗幟を樹立するに至りし經過を述べてゐるものの、是も亦、周南の李東郭に於けると同じく、その答を得られなかつた。

乍併、韓客が蘐園派の文章論に對して、忽卒の間には、贊否何れの意志をも表示し得なかつたことは、寧ろ當然のことに屬し、當時の朝鮮文壇には、岡島冠山が嚴龍湖との筆談に於て、

吾國諸生、專覽二八大家文章一、就中最貴二韓柳一、貴國亦如レ此否。（鷄林唱和集卷三）

と問へるに對し、龍湖が答寫して、

韓柳之文、人々貴レ之、我國亦然。（同書）

と述べてゐるやうに、唐宋八大家、就中韓柳兩子の勢力が、壓倒的に盛行してゐたのは勿論であつたが、さりとて李王古文辭の潛勢力も亦、決して侮り難きものがあり、次の第九回朝鮮通信使の書記申靑泉が、我が木下蘭皐に答へた語中に、八道の文運を敍し、

我國高麗之世、專當二宋元一、至二我國朝一、而群才亦起、或曰二班馬一、或曰二韓柳蘇一、而原二其體一、以二儒道一爲レ宗、故其文體裁、牽二緣宋習一、間有二一二章句險順平澁之殊一而已、皇明諸子中、李何王李、允爲二大方家一、其文之始來傳也、亦不レ無二向レ風之思一、而其專攻二王李之文一者、十無二一二一、卽今我國中操觚之士、大都言曰、宜下先讀二八大家一、吾文既熟、蹊逕平坦、然後皇明諸子、亦可中時々披閱、以佐上其采、如レ此云云。（客館璀粲集）

といひ、又、小倉尙齋との問答に於ても、靑泉が、

自レ唐以下、世人皆溺二於宋一、余嘗謂、白雪樓諸公、雖レ未レ至二於唐一、要不レ作二宋元人語一。（兩關唱和集）

といひて、李王の爲に辯護せるが如くに、當時の朝鮮文壇には、李王古文辭の流を汲む擬古文派と、

その末弊を矯めようとする唐宋八大家派との對立が判然と分れ、就中、科場の文章には、動もすれば、擬古剪裁の文章が、その頭を擡げようとするの時運に當つてゐるのであつた。そして、第八回朝鮮通信使が來朝した當時は、我邦の學界に於ては、林家や木門の勢力が幕府の中に根强く、就中新井白石及びその一派の人々が、接遇の中心になつてゐたので、林家、木門の首領株の人々が進んで韓客に接近したのに對し、徂徠と伊藤東涯とは、之を敢てせず、山縣周南が、南泛叟（申東の別號）に呈する古詩中に於て、

詩禮繽紛趨二庭前一（家翁長白、現爲二本藩講官一） 辛勤多少十餘年 羽翼稍成當二翺翔一 忽搦二孤矢一遊二八埏一 東都搢紳荻先生（徴師荻生茂卿、東都人。） 一揖諄々期二玉成一

といひ、又、李洪巖南四君に奉る書中には、

人在、在二東都一。荻生茂卿者、吾師也。安藤東壁者、吾友也。大旆入レ都、或當二來見一。

ともいつて、その師の紹介を大に努めてゐたにも拘らず、遂に、その事の實現を見なかつたのは、殘念な次第であつた。由來德川幕府は、綱吉將軍の逝去につれ官場の樣子が忽ち一變し、從來さしも權勢並び無かつた柳澤吉保も、俄かにその勢力を失ひ、遂に寶永六年には、老を以て致仕して染井の六義園に退棲し、その翌年には、徂徠の論敵である新井白石や室鳩巣等が、幕府に登庸せられ、剰へ、

正德辛卯年間の朝鮮通信使接待には、白石がその首班に列してゐたので、徂徠は飽くまでも、其事を冷眼視し、問槎畸賞（巻上）、徠翁答江生書には、「去年來、一國人如狂、吾不知其何爲而然也。」といつて、之を嘲つてさへゐるのであつた。

## 三　宋學是非の論爭

享保己亥（朝鮮肅宗四十五年）年間、第八代將軍德川吉宗の襲職を賀せんが爲に、洪致中を正使とする第九回朝鮮通信使が來朝した時には、德川幕府の官場も更に一變し、新井白石は既にその職を退き、林鳳岡が再び天下の文權を握り、徂徠の齡も五十四に達して、蘐園の勢力は江戶よりして各地を風靡し、その學說に於ても、單に文章論としての古文辭學を主張するに止まらず、その哲學說に於ても亦、仁齋學の排擊から、更に一步を進めて、宋學の否定にまで突入してゐた時であつたから、小宋朝を以て自ら任ずる朝鮮の學徒との間に、華々しい哲學上の論爭の展開せらるべき機運は、正に熟し來つたのである。そして此度の朝鮮使行に對し、蘐園を代表して、詩酒の間に徵逐した者に、先づ尾張藩の朝日奈玄洲と木下蘭皐とがあり、玄洲には蓬島遺珠、蘭皐には客館璀粲集の著が傳はつて居る。

朝日奈玄洲は、朝鮮書記姜耕牧子の

公能解二文字一、何以學レ之耶。

と問へるに對し、

東都有下物茂卿、號二徂徠一者上。余師二事之一有レ年矣。

と答へた外には、深く徂徠學の主張に觸れる所は無かつたものの、木下蘭皐は、說く所最も詳かに、稟二申狀元座前一書に於て、

東都有二徂徠先生云者一、夙務二古文辭之學一、非二姫公文宣之書一、不レ涉二於目一。非二左馬班揚之策一、不レ發二于筒一。非二騷選李杜之篇一、不レ歷二于思一。蓋齊二功於明李獻吉一矣。

といひ、次に、徂徠の文章論に及び、

先生嘗謂、文章之道、達意修辭二派。發レ自二聖言一、其實二者相須。非二修辭一、則意不レ得レ達。故三代時、二派未二嘗分別一也。東京偏二修辭一、達意一派寥々。六朝浮靡、至レ唐而極矣。故韓柳以二達意一振レ之、宇宙一新。至二歐蘇一又衰。降迨二元明一、再極矣。時有レ出二李于鱗、王元美者一、專以二修辭一振レ之。一以レ古爲レ則。可レ謂二大豪傑一矣。故評二隲西京以下文人一、唐取二韓柳一、明取二王李一、爲レ是故也。余遊二其門一、受二其書一、讀レ之甚驩。今者執簡之士、莫レ不下趨レ風而宗上レ之矣。

とて、紹介大に努め、端を更めて、朝鮮の操觚家の、宋元の舊を守るか、或はまた明世諸家に則るや

と質せるに對し、申靑泉は、徂徠の古文達意修辭に關する議論の、大に人をして躍然快と稱せしめるに足るを稱せる後、自らも、弱冠以前に在りては、秦漢の古書を讀むに意有りて、枝葉を唐宋の末に攻むるを欲せざりし事を敍し、朝鮮の文壇も、李王の古文辭が將來せられた最初には、一時半島を風靡するかの觀もあつたが、現今はその熱意も冷却し、概ね先づ唐宋八大家の文章を讀み、我文旣に熟し、蹊逕も亦平坦なるの後、皇明諸子の文章も亦、時々披閲、以てその采を佐くべしとなすと、答へるに過ぎなかつた。元來、徂徠が、古文辭を尊崇したのは、その文章が、決して最終の目的ではなく、古文辭を以て、經學の階梯とせんとするのが、その眞意であり、山縣周南も、作文初問の中に於て、この旨を明らかにし、

徂徠先生專ラ李王ヲ推シシハ、徒ニ文章ヲ高シトスルニ非ズ。經學ノ楷梯ナレバナリ。

と述べてゐる。

正德辛卯年間、卽ち徂徠が四十六歳の頃は、その哲學說も旣に程朱の域を脫せんとするの萌しはあつたものの、先づ伊藤仁齋の古學に對して最も慊らず、その著なる蘐園隨筆によつて、一面、程朱學者としての立場から、鋭い攻擊の矢を放つと與に、一面、その獨自の立場から古文辭學の硏究に入りかけた、謂はば懷疑彷徨の時代に在つたので、山縣周南は、哲學說に於ける宋學、卽ち程朱學の取扱

ひ方に關しては、韓使一行の歸程に於て、李東郭に對し、

聖遠道湮、諸儒斷斷。漢唐之間、縉紳先生、其言落々乎不レ合乎。及二宋興程朱諸先生出一、而其說始定。然象山陸子、以二當世豪杰一、儼然不レ肯二其學一、學者更有二異說一。至二王陽明、陳白沙之徒一、益以抵牾。（問槎畸賞卷下）

と述べたる後、朝鮮の儒學に及び、

不レ知、今之學者、一二於程朱一耶。或有二異同一。先生視二陸王一如何。（同書）

と質したるに對し、東郭は飽くまでも單一朱子學者としての立場から、

宋興、群仗輩出、闡二明吾道一。洙泗餘派、復通二於濂洛一。程朱之學、卓乎無二以議爲一。其間若而人之立二私見一悖二聖道一者、何足三以累二尊レ聖尙レ道之治一乎。（同書）

とて、力強く程朱學を擁護し、最後に、自國朝鮮の學問に論及して、

陸王之學、自學二其學一、非二吾儒之學一。則元非下儒者所レ可二尊信一者上。我國五尺之童、亦知二其去就之分一矣。（同書）

と答へたるに對し、周南は、

國家設二學校一教二學士一、亦皆莫レ不レ宗二朱夫子一。近有二一仗師一、別開二門戸一、自建二學問一。其言或有二

不下與二程朱之說一合上者。論レ性以レ教、論二仁義一以レ德。而以二孟子所謂性善者一、爲レ在二氣質之上一、與二夫程朱本性之說一、相背馳矣。僕頃受二讀其書一、翕然而有二說意一。是所三以致二問先生一。（同書）

とも述べてあつた。

然るに、享保己亥朝鮮通信使の來るや、太宰春臺は、最も力强く古文辭學派の學說を强調し、送二朝鮮張書記一序（紫芝園前稿巻三）に於て、

若二吾一二兄弟一、業皆以二古人一自期、其所レ修、動不レ屑二東漢以降一。卽五尺童子、恥レ稱二宋儒一。

とて、矛を朝鮮學人の牙城なる宋學に向けたが、惜しい哉、之に對する張書記の答は得られなかつた。

次に、寬延戊辰（朝鮮英祖三十四年）年間、第九代將軍家重の襲職を賀せんが爲に、洪啓禧を正使とする第十回朝鮮通信使が來朝した頃には、蘐園の我が文壇に於ける勢力は、正にその絕頂に達し、徂徠の孫弟子に當る秀才も多く世に現はれてゐた。先づ、下關に於て、韓客を迎へたのは、山縣周南の弟子にして、徂徠の孫弟子なる小田村鄜山であつた。鄜山は、朝鮮の朱敬行（矩軒と號す）が、

貴國文章、固已聞二靑泉一。而其間又三十年。未レ知、近來鳴二國之盛一者、誰當レ主二牛耳一耶。（長門戊辰問槎）

と質したるに對し、

此邦文學之盛、四十年前、有二徂徠先生者一、以二復古之學一、獨二步海內一。從遊如レ雲。嚆二矢其間一

者、東都有二南郭一、春臺一、我藩有二周南一。皆經學文章、窺二其蘊奥一。（同書）

とて、蘐園の爲に先づ大に氣を吐き、尋いで服部南郭の高弟なる宮瀨龍門は、江戸の客館に於て、朝鮮書記李命啓に會し、重ねて同派の主張を明らかにする等、日本の新興文壇に雄飛する蘐園、卽ち古文辭學の一派と、單一朱子學を信奉する朝鮮通信使一行との間に釀し出された論爭は、正德辛卯以來、回を重ねる每に眞劍味を帶び來つたのは、それだけ、日本に於ける徂徠學派の勢力が、社會的に蔓延して來た結果であり、そして古文辭學が、文章論を離れ、古文辭を修めるの致を、先王の道を明らかにし、以てその德を成さんとするに歸するや、韓客の中には、勿論その思孟程朱を酷信する道學者としての立場から、蘐園の人々が、往々にして詞章を以て家を成し、實學無きを誹るの聲が高まつて來るに對し、菅沼東郭の如きは、堂々と論旨を進め、

大東文運之盛也、秦漢以來、莫レ盛二於今一焉。盖七十子之後、先王道降、爲二儒家者流一。我大東三河物先生、有レ見二于此一、大創二古學一。曰、道也者、古先聖王、所下以治二天下一、安中兆民上之方也。大而詩書禮樂刑制禁令、小而射御書數、以至二醫巫醞造之微一、莫レ非レ道焉。

と冒頭したる後、

蓋能讀二古文辭一、而後可レ知二聖人之道一。若不レ識二古文辭一、則不レ能レ讀二古書一、焉知二古先聖王之道一

哉。（和韓唱和附錄）

とさへ道破してゐるのであつた。

### 四　知己を海外に得る者

飜つて、朝鮮通信使一行の祖國たる半島の文壇を瞥見するに、高麗一代の詩文は專ら宋を模し、就中、蘇東坡の勢力が斷然之を風靡してゐた。李朝に入り、世宗の時に集賢殿が復活せられ、湖堂の制度が創始せられるに及び、當初はなほ、蘇黃の文學を專ら尊信して居たが、明朝に於ける唐詩漢文の風氣は早くも東漸し、李忘軒・金冲庵の如きは、既に唐詩の先倡をなし、李王の學風が半島を吹き捲くる頃には、唐詩に倣つて三唐の名を得たる李達、白光勳、崔慶昌を初とし、盧守愼、車天輅の如きも亦、專ら範を先秦の古文に取り、高麗朝以來の氣習を一洗して、その至れるものは、宛然王弇州を讀むかの感あり、遂に朝鮮文壇の宿習たる平衍緜弱冗漫を破つて、簡潔となり古勁となり、金根壽、許筠、金尚憲はみな之を以て秀で、許穆が一生先秦兩漢以後の書を讀まずと稱せるが如きは、その最も著しいものであつた。然れども、その學識卑賤なる者にして、なほ且つ徒に擬古に走る者が多かつた爲に、その文章は恰も錦繡の襤褸を綴り合せたるが如くに、遂にその體を成さざるものあり、朝鮮

の文體は、之が爲に却つて大に亂れた。されば朝鮮に於ても、識者は夙にその弊を認め、之を是正するに、唐宋八大家の文を以てせんとし、二派の對立は、明らかに半島文壇を兩分し、士流の先達が概ね、下は王愼中、唐順之、歸有光より、上は唐宋八大家を遵奉せるに對し、少壯の士流及び兩班以下の間には、なほ新樣を逐うて範を明文に取り、或は李何、李王の擬古に趨き、或は古語古句を剪裁して澁晦詰屈なるか、或は老莊縱横の辭、又は小說稗史の句を模して、俚語をさへ之に交へんとする者あるに至つた。但しその秀でたるものに至つては、頗る淸新にして掬すべく、申靑泉が庶流を以て專ら秦漢の古文を誦し、李王に倣つて大に文名を博し、許通の恩典にさへ浴して、增廣大科に及第せるが如きも、亦この一面の風氣を代表せるものであつた。

されば、明和甲申（朝鮮英祖四十年）年間、第十一代將軍德川家治の襲職を賀せんが爲、趙曮を正使とせる第十一回朝鮮通信使が來朝せる時には、從來の朝鮮使行の海槎錄とは、大に其趣を異にし、趙曮の海槎日記や、成大中の日本錄には、日本文學に關する記述も詳細を極め、就中、伊藤仁齋や、荻生徂徠の學問に對しても、從來とはその態度を改めて、充分なる敬意を表する者さへ現はれ、この使行に對しても、詩文の應酬全盛を極め、龜井南冥、瀧鶴臺、釋大典を始め、韓客にその名を慕はれた釋大潮、永富獨嘯庵等が、期せずして、蘐園の流を汲む人々であつたことも奇緣と稱すべきであつた、それは兎

も角、朝鮮の譯官なる李彥瑱は、その文章を以て朝鮮文壇に一生面を開拓せる、李王古文辭の信奉者であり、偶〻江戸に於て、同じく古文辭派なる今井松庵と相會するや、埍篪頗る相和し、兩者の筆談には誠に興味深いものが多く、南川維遷の金鷄雜話に、「押物通事李彥瑱號曇寰なるもの、吾國徂徠の著述を見ていへるは、海内の豪傑なり、云々」とあるのも、亦之に基づくが故であつた。かくて蘐園の學風は一時海内を風靡せるばかりでなく、徂徠の盛名は遠く海外にまで轟き、知己を鷄林禹域に得たことは、實に文學を以て、國威を海外に輝かしたものとも謂へ得よう。

## 五　漢文直讀論に就て

正德辛卯の朝鮮使行は、日本各派の學者に接觸すると共に、經學文章は謂ふまでもなく、醫學博物學の方面に對しても、その意見を交換する所があつたが、就中、その異色なるは、我が岡島冠山（名は璞、字は玉成、冠山または明敬と號す）が、彼の李學士及び洪・嚴・南三書記に會して、詩作の應酬を兼ね、唐話に關する意見を鬪はしたことであつた。これ當時日本に於て、長崎に於ける通譯以外の學者の間にも、亦漸く支那語に對する關心が生じつゝあつたことを物語るものである。

徂徠は柳澤公に仕へて以後、當時新たに江戸に上つて來た岡島冠山を聘して、同志と共に「譯社」

を設け、（時に正徳元年十月）唐話卽ち支那語研究に熱心であつたことは有名な事實である。徂徠はまたその外、黃檗僧徒との交際が繁く、隨つて、その唐話に親しむ機會は可成り多かつた。その結果、從來の漢文訓讀法を廢し、これに替へるに唐音直讀法を用ふべしと主張するに至つた。旣に壯年の作たる譯文筌蹄の中にも、多く之に關する意見が見られるのである。卽ち同書の題言中に「爲レ學之法」として、次の如く言つてゐる。

故予嘗爲ニ蒙生一、定ニ學問之法一。先爲ニ崎陽之學一、敎以ニ俗語一、誦以ニ華音一、譯以ニ此方俚語一、絕不レ作ニ和訓廻環之讀一。

崎陽の學とは唐話である。卽ち子弟敎育には先づ語學から入り、漢文を誦するに華音を以てし、之を譯するに國語の俚語を以てせしめ、從來の和訓顚倒の讀法を取らせまいとしてゐるのであつた。この漢文直讀の意見は、徂徠文集や、蘐園隨筆の中にも散見する所である。

抑〻徂徠の漢文直讀論は、如何なる根據に據るかを觀ずると、ざつと次の三ケ條を擧げることが出來る。

イ　漢文の字義を眞に理解する爲め。

ロ　漢文を作る際の必要上から。

ハ　中華崇拜の思想から。

以下簡單に之を說明して見よう。

(イ)　漢文の字義を眞に理解する爲め

徂徠の考によれば、漢文に訓點をつけて讀むことは、宛も皮膜を隔てて理解する樣なものであり、到底漢文の眞義を知悉することが出來ない。且又、漢文を訓讀で理解すれば、字義が粗略になり、本當の意味が理解されないといふのである。この意見は譯文筌蹄序に縷々述べられてゐる。

但此方自有二此方言語一、中華自有二中華言語一、體質本殊、由レ何脗合。是以和訓廻環之讀、雖レ若レ可レ通、實爲二牽强一。而世人不レ省、讀書作文、一唯和訓是葬。即(タトヒ)其識稱二淹通一、學極二宏博一、倘(モシ)訪下其所三以解二古人之語一者上、皆似三隔レ靴搔二痒。

さて然らば何故に訓讀によつては字義が充分に理解されないかといふに、それは國語の古今の相違である。卽ち和訓は、古昔搢紳が諷誦に適する樣に作つたもので、つとめて鄙俚の語を避けてある。故に當時に於てすら旣に充分意が傳へられない憾があつた。然るを況んや、言語の道益々闢け、詳細な俚俗の言が多くなつてゐる現今では、寧ろ今日の俗語を以て譯しなほすべきであるといふのである。そこで、漢文を倭語に譯す方法には、直譯意譯の二つありとして次の如く述べてゐる。

譯文ニ直翻義翻ノ二ツアリ。直翻ハ一々メノコ算用ニ唐ノ文字ニ日本ノ詞ヲ付ルナリ、義翻トハ倭漢風土ノ異アルユヘ、語脈モソレニツレテカハルコトアリ、故ニ直翻ニナラヌ處ヲハ一句ノ義ヲ以テ譯スルヲ義翻トスルナリ。（訓譯示蒙）

これは直譯と意譯との區別である。直翻とは一々の文字に日本語をつけて譯すること、義翻とは意味の内容を取つて言語上の言ひ廻しを變へて譯すことである。同じく國語に於てすら地方により方言の言ひ廻しに相違がある。況んや華語と倭訓との間には、語脈の相違が甚しく、從つて義翻卽ち意譯をなして意味を明瞭にする必要が多いといふのである。

（ロ）　漢文を作る際の必要上から

漢文を理解する上から、直讀論を說いた趣旨は、大體以上の如くであるが、漢文を作る方面から直讀論の必要を論じた徂徠の意見を考へると、また次の如くに言つてゐる。

今時大儒トヨバルヽモノ書タル文（中略）ニ誤リ多キハ、皆唐人詞ヲ合點セズ、笑シク心得ルユヘナリ。此譯文ヲ學ハズシテ、書籍ヲ見テ理ノ高妙ヲ談ジ、詩ヲ作リ巧ミナランコトヲ欲スルハ、タトヘバ倭語ヲ知ラヌ唐人ガ倭ノ雙紙ヲ學ビ、歌ヲ上手ニナラント云ガゴトシ。（訓譯示蒙）

これ詩文章を作る際に於ける支那語の必要を說いたものである。「蓋書皆文字、文字卽華人語言」と

いつて、漢文は卽ち華人の語言にすぎない。この華人の言語を知らずして、漢文を作らんとするは、宛も日本語を知らぬ唐人が日本の雙紙を學び、日本の歌を上手にならうとするが如く、無謀なことであるといつて居る。故に先づ唐音によつて漢文を學び、而る後に始めて支那の詩文を作ることが、可能であるといふ意見である。

(ハ)　中華崇拜の思想から

徂徠の唐話が中華崇拜の思想と關係あることは一應考へられる。「譯社約」の最後に、

凡會之譯。其要在ニ以レ夏變ヒ夷也。不レ許ニ以レ俗亂ヒ雅也。（徂徠集十八）

とあり、又訓譯示蒙の中には次の如き語が見える。

中國ノ詞ハ文ナリ、夷ハ質ナリ。中國ノ詞ハ密ナリ、夷ハ疎ナリ。キヨシト三言ニイフ處ハ疎ナルナリ。チント一言ニイフ處ハ密ナリ、唐人ハ同ジチンノ内ニ、平上去入輕重淸濁ノ品ミノ呼ワケノアル處ハ文ナリ。日本ハチンナレバチント云只一ツナル處ハ質ナリ。唐土ヲ文物國ト名ヅケ、又文華ノ義理ニテ中華ト名付タルモ此道理ナリ。又唐土ハ聖人ト云モノ出タルモ、サヤウニ細密ナル國ユヘナリ。（訓譯示蒙）

これは日本語と支那語との相違を論じた一部であるが、この中でも日本語より支那語を精密な語と

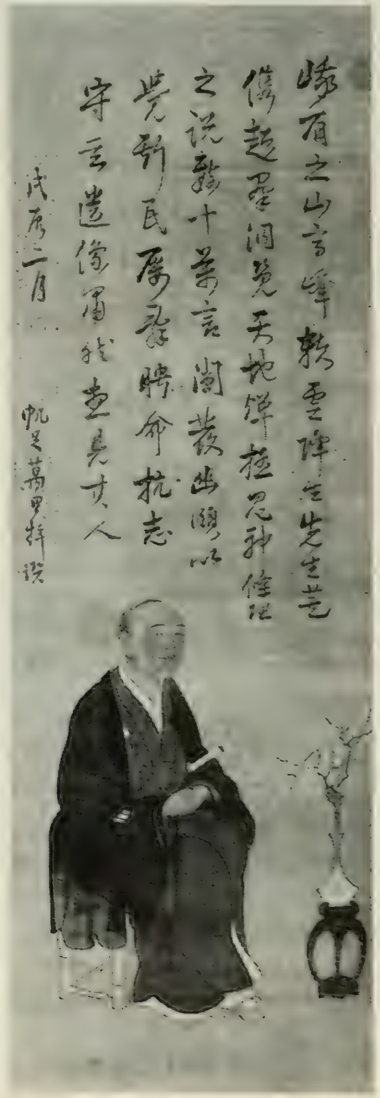
して居り、唐土を文物國と名付け、中華崇拜の思想があることが解る。乍併、徂徠の意見に於ては、支那語を尊んで日本語を排斥しようとする樣な、極端な論は見當らない。否、徂徠の唐音崇拜は、寧ろ日本語は國語として之を尊重し、唐音は華音である故に、先づ唐音にて漢文を讀み、而る後これを純粹な日本語に直すことこそ、本當の學問としてゐる。

假使ニ聖人生ニ於此方一、豈能外ニ此方言一、別爲ニ深奧難レ解語一哉。道雖ニ高深一、語唯是語言。如ニ其高深之道一、則存ニ乎其人一焉。

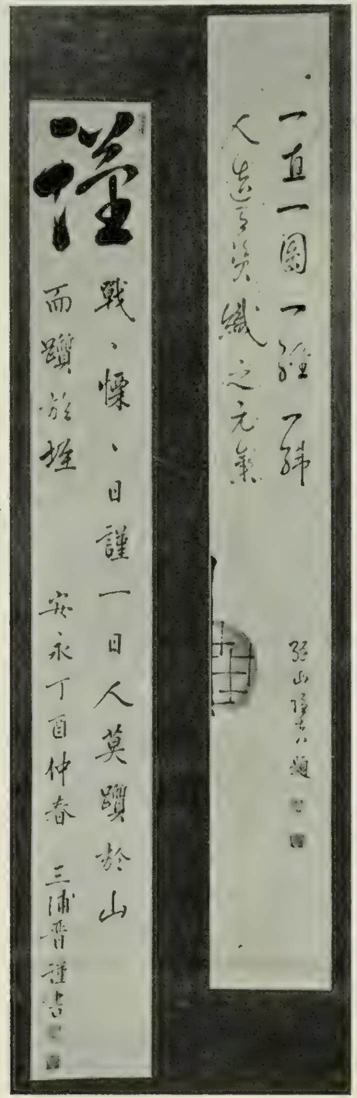
卽ち高遠なる道はその人に在つて、その言語に在るのではないとさへ言つてゐる。斯の如く、徂徠は支那の言語文章を純粹なる日本語に譯し、日本化することこそ本當の學問であるとして、國語をあくまで尊重してゐるのである。世には徂徠が孔子の畫像に題した「日本國夷人物茂卿」の語を以て、國體を誤まるものとして非難の聲があるが、必しもさうではない。伊藤仁齊の如きも亦論語「子欲レ居ニ九夷一」を日本と解して居る。漢文直讀論に於ける唐話崇拜も、決して日本語を賤しむ意味ではなく、むしろ支那聖賢の語を我國に醇化せしめようとする進取的氣性に本づいてゐることを附言して置く。

以上は徂徠の漢文直讀論の根據と意見とを、極めて大體的に考察したに過ぎないのであるが、要之

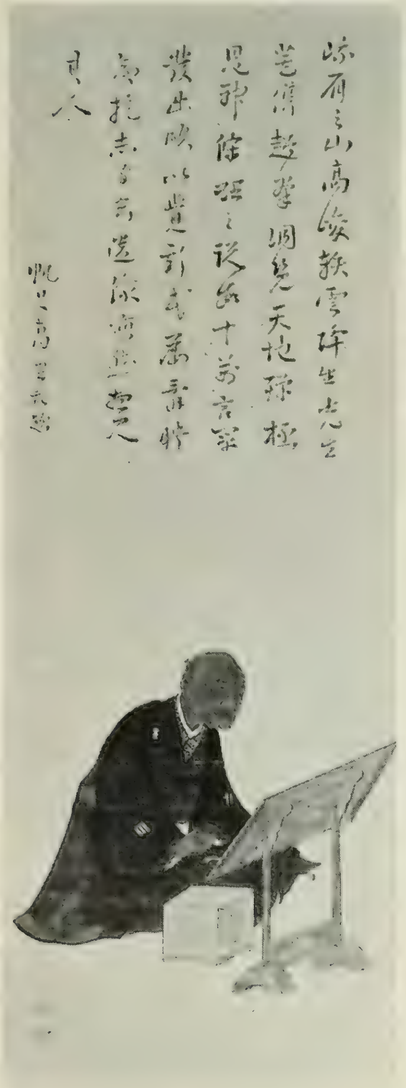
直讀論の眼目は、漢文を眞に理解し、聖賢の語を眞に體得するにあるのである。漢文を作る方面からの必要は、漢文を理解する方面から派生的に生れたもので、寧ろ第二義的である。而して最後の中華崇拜の思想は、全く餘論で、その根本原因にはなつてゐない。斯かる瑣末な問題を捕へて大儒大文豪を誹謗するよりも、むしろ鎖國時代に於て、徂徠が活眼を開いて唐話直讀を提唱した先見の明を稱し、我が漢學界引いては國語學界に貢獻した偉大なる功績をこそ顯彰すべきではあるまいか。徂徠に後るること二百年、昭和の聖代に於て、興亞の大旆を揭げて邁進する我が學界が支那語に對する認識の不充分なるを顧みて、誠に感慨に勝へない。時艱にして英雄を思ふ。徂徠は實に學界の人傑である。



三浦梅園肖像（佐野サワ氏藏）

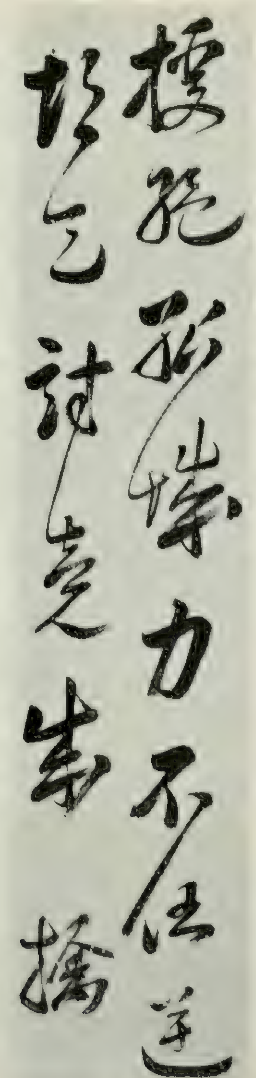



三浦梅園筆蹟（高田眞治氏藏）

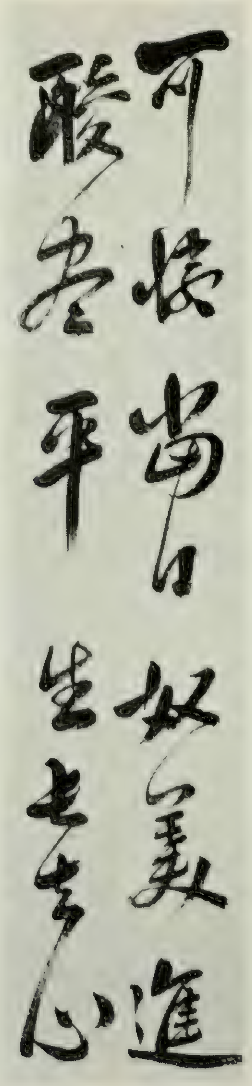


三浦梅園肖像（後藤秀雄氏藏）

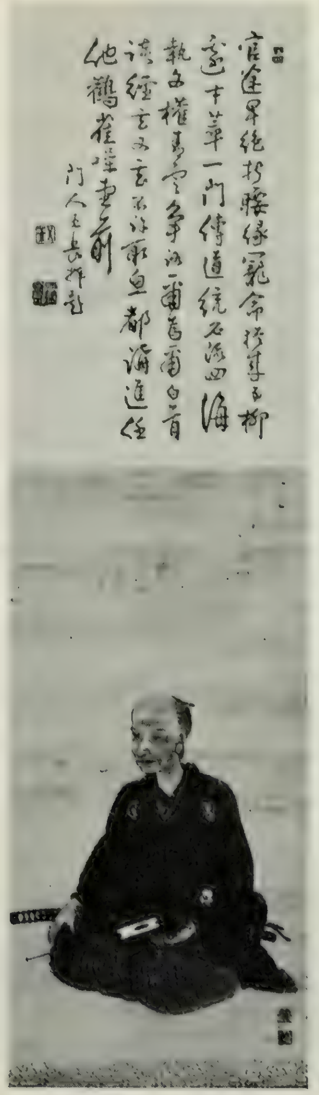
帆足萬里筆蹟（高田眞治氏藏）



同右



廣瀬淡窓肖像（廣瀬正雄氏藏）



廣瀬淡窓筆蹟（廣瀬正雄氏藏）



# 三浦梅園の學風と南豐の儒學

高田眞治

三浦梅園の名は、先哲叢談にも載せられず、其の續篇にも見えず、從つて久しく學界に認められなかつたが、西村博士が「學界の偉人」（明治四十年刊）を著はして、其の首に梅園の學術と德行とを顯彰するに及んで、始めて其の學界に於ける高き地位が認められるに至つた。次いで大正元年に梅園全集上下二冊が刊行されるに及んで、梅園の學術思想の全貌が、世に現はれるに至つた。是れより先き、梅園の學統を承くる帆足萬里は、肄業餘稿（卷之一）に於て、我國漢學界を總觀して、大儒と稱すべきものを擧げて、次の如く謂つて居る。

本邦儒者、如二惺窩羅山一、眞有レ功二烈斯文一、事屬二草創一、姑置レ之、益軒藤樹白石徂徠仁齋東涯、所レ長各異、皆可レ稱二大儒一。如二吾豐洞仙先生一、亦可レ參二此流一。其他雖レ有二該博之學、卓異之行一、抑亦可二以爲下次耳。

洞仙とは、梅園の號である。萬里が斯くの如く梅園を推して我國第一流の大儒と爲すのは、梅園の名に熟せない者から見れば、或は其の師承とする所に諛するの言ではないかと思はれるかも知れないが、余を以て見るに決して然らず。梅園は實に我國の生んだ哲人として第一流に位すべき一人であり、而して漢學界に於ける哲人としては、第一に擧げらるべき碩儒であると信ずるのである。

普通に梅園は獨立學派の人として擧げられる。梅園の師の綾部絅齋や藤田敬所は、室鳩巢や伊藤東涯の門に學んで居るが、梅園は朱子學派の人でも古學派の人でもなく、梅園獨自の學風を成して居る。而して其の學風が脇愚山を經て、帆足萬里に傳はつて居る。豐後に同じ學風を傳ふる梅園・萬里といふ二大儒を生じて居ることは、我國儒學界に於ける一大異彩であると謂はねばならぬ。此の意味に於て標記の題目に於て聊か論述せんと欲するのである。唯だ南豐の儒學と謂へば、廣瀨淡窓の感宜園の學も包含されねばならぬのであるが、是れは梅園の學統とは、關係が無いから、此處では之を省略する。淡窓の學的交渉は、地理的の關係上、寧ろ筑前の龜井南冥・昭陽父子の方に近いのである。尤も南冥は梅園の人物を敬崇して之に欽慕の詩を贈つて居り、梅園も之に應答して居るのであつて、斯樣の點から言へば梅園と淡窓も、全然無關係とは言はれないのである。梅園・萬里・淡窓の三先生を今日大分縣では縣の三偉人として推尊して居る。而して斯くの如く南豐の儒學をして重からしめる

ものは、梅園が獨り特立崛起したのに始まるのである。

三浦晉字は安貞、梅園と號し、豐後富永村の人である。富永村は國東半島の中央に聳ゆる兩子山の南麓に在る一小村で、往時杵築藩に屬した。梅園は享保八年に生れ、寛政元年六十七歳を以て歿した。重野成齋博士の傳ふる所に依るに、松平定信は梅園の名を聞いて之を拔擢せんとの意が有つたが、梅園の死に遭うて果さなかつたといふことである。（學界の偉人一五〇頁）梅園の學は、獨創にして該博、高明にして進取、其の德行の醇正と共に、長く學界の寶器と爲すべきものである。

梅園の思想を窺ふべきものは、言ふ迄も無く梅園三語三十餘萬言に依らねばならぬ。三語の中玄語は、其の宇宙書であり、贅語は宇宙と人生との關係の上より說いたものであり、敢語は其の倫理書と稱すべきものである。分量の上から言へば、贅語が最も大で、玄語が之に次ぎ、敢語は贅語の十分の一にも當らないものである。

梅園は幼時より聰慧で且つ推理的頭腦を有ち、懷疑を以て物を觀るの風があつたが、三十歳の時、始めて天地に條理の有ることを發見して條理學を唱へ、三十一歳の時、玄語第一回の草を起した。三語の成立に就いて、玄語例旨に梅園自らが記錄して居ることに依ると、玄語は寶曆三年梅園三十一歳の時に起稿してより、明和二年梅園四十三歳の時に至るまで、年を閱すること十三、其の間稿を換へ

ること十五回であつたが、竟に大に憒憒（梅園全集には櫝憒と爲つて居るが、憒憒の誤植であらう。憒々は擾亂して眞僞を辨ぜざる貌）たるを覺え、盡く舊稿を棄てて、新に第二回の草を換へて、稍安んずるが如きを覺えた。然るに之を體すること一年にして、再び之を思ひ、天地に於て大に合せざるを覺り、明和七年梅園四十八歳の冬、又舊稿を棄て去り、第三回の稿を起し、六年を經て、安永四年梅園五十三歳の端午の日に當り、漸く最後の稿を成すを得た。第三回の稿を起して以來も、五回稿を換へたのである。玄語は四冊七本より成り、例旨を併せて凡て八本であり、十餘萬言、插圖一百六十有餘である。第一回の起草以來、年を歷ること二十三、稿を換へること亦二十三、舊稿全部を棄つること三回であつた。玄語例旨の末に、梅園は次の如く敍して居る。

物大に事衆く、犬馬の齒、既に半百を過ぎ、鬢髮皤皤たり。之に加ふるに心胸の病を以てす。知らず、天之に年を假し、將に其の業を卒へしめんとするか。將た其の志を奪はんとするか。是に於て感無き能はず。書して以て佗日を竢つ。安永四年端午識す。（原漢文）

とある。以て如何に畢生の心根を竭したかを窺ふことが出來る。其の草稿の寫眞圖が梅園全集に出て居るが、縱横に塗抹され、原稿の背面にまで記されて居るのであり、其の苦心の狀を想見するに餘り有るものである。

贅語は、寶暦六年梅園三十四歳の時（慈悲無盡講興作旨趣並約束を作つた年である）に草を起し、安永四年玄語最終の稿成るの年に、一先づ脱稿して居る。即ち贅語の末に次の如く敍してある。

今歳安永乙未（四年）、玄語二十三換稿業を卒ゆ。顧ふに贅語は、寶暦癸未（十三年）の草にして（贅語は寶暦六年に始めて草を起したのであるが、それより八年の後、寶暦十三年に至るまで、十回稿を換へ、一先づ七冊の本に纏めたのである。此の事は玄語例旨の末に識してある。）穩ならざる者多し。因りて繕寫す。蓋し換稿すること、寶暦丙子（六年）の起草より、丁丑（同七年）に四たび、戊寅（同八年）に二たび、己卯（同九年）に一たび、庚辰（同十年）に一たび、癸未（同十三年）に一たび、是の歳（安永四年）に一たび、通じて十有一たび。十有四萬餘言。事物洪曠にして、意に於て歉然たり。猶ほ殘喘を世に引かば、將に以て改革する所有らんとす。冬十有二月既望、梅園の三島閣に識す。（原漢文）

とあり、寶暦六年の起草以來、安永四年に至るまで、二十年の間、換稿すること十一回であつたのである。然るに梅園は猶ほ之を以て滿足しなかつたことは、上文の示す通りであるが、果して、更に改訂を加へたことは、黄鶴撰する所の行狀に「贅語は、寶暦丙子（六年）より寛政改元（梅園の歿年）に至るまで、年を歷ること三十四、稿を換ゆること十五」とあるに依つて知ることが出來る。即ち梅園が病革るの時に、尚ほ長子黄鶴を枕頭に呼んで、舊稿を改竄したといふのは、實に此の贅語であること

が知られるのである。

敢語は寶暦十年三十八歳の時に、草を起し、同十三年四十一歳の時に成つた。起草以來年を閲すること四、稿を換ゆること亦四回であつた。

斯くの如くにして三語は實に梅園が一生の心血を注ぎ、苦心慘憺の末に成つたもので、其の思索の深邃と、精力の絶倫とは、誠に人をして肅然として襟を正し敬虔の念に堪へざらしめるものが有る。西村天囚博士が評して「玄贅二語を通じて三十萬言に殆し。三十萬言の大著を三十八回に書き改めたりとすれば、總て一千百數十萬言の大著たり。況んや梅園の著述は、三語の外、漢文國文並に多きをや。眞に是れ學界の一大偉人なり。」(學界の偉人)と曰ふのは、眞に知言と謂はねばならぬ。

敢語は刊行され、贅語も其の一部が上木されて今に其の刊本の存するものが有るが、玄語は遂に梅園の生前には刊行されるに至らなかつた。梅園が其の知己を以て許した京都の高葛陂に寄する書に次の如くあるに依つて見れば、葛陂は梅園に玄語の上木を勸めたが、梅園は謙退して、上木の資も無く、且つたとひ上木しても售れないであらうから、唯だ之を篋底に藏するのみであると謂つて居る。

且つ書尾の語(葛陂の書を指す)、玄語の上木に及ぶも、天地は大なり、造化の賾(幽奥雜亂の意)未だ輕しく窺ひ易からず。日暮れて途遠し。書の成る、未だ知るべからず。況んや其書贅を加へ、且

に三十萬言ならんとす。饒ひ成るも、資の工に償ふ無く、饒ひ資の工に償ふ有るも、必らず世に售れじ。第だ之を轍簏に藏して、將に蟫に之れ供せんとす。瑣々たる小言、實に遼東の豕のみ。引いて之を左右に獻ず。多ま其の自ら知らざるを見はすのみ。敢語一本、亦覆醤に充つ。安永丙申。（安永五年、梅園五十四歳、原漢文）

玄語は極めて難解であるので、此に謂ふが如く、上木しても到底售れなかつたであらう。然るに端無く此の玄語贅語の出版に關して美談が有るのである。其れは富永村並びに近村の人達が醵金して玄語と贅語の出版費に當てようとしたことである。其の申合せの趣意、並びに之に應じて銀米を醵出した村人達の氏名や、玄語・贅語の刻料の見積り等は、梅園全集下卷に載せられてある。其れに依ると醵出銀米は十ヶ年賦で利息を付して返濟されることに爲つて居るが、醵出者の中には返銀に及ばずとしてあるのも有る。之に就いて何より感激を覺えることは、此の申合せの趣旨書の第一條に見える次の語である。

一、梅園玄語之儀は、洞仙老人年來之精魂を盡され候著述に御座候へ共、古稀に被及候迄、其業を繼、後世に傳候程之門弟子も少く、甚以殘念之至候。銘銘不才之儀は不及是非儀に御座候間、上木にても致置、千歳之識者を相待程之儀致置度、同志三四輩兼て申談候得共、高金之儀

候故、不及力默止直候。然所右內存有之候段漏聞て助力可致候と被申候同志之衆段々御座候に付、此度申合存立申候。

此の申合せは、天明八年十一月の日附になつて居る。梅園の六十六歲の時である。梅園は其の翌年の三月に歿して居るから、定めて此等の人達の好意を感謝して往つたことであらう。それと同時に此の事を企てた父老達が、玄語贅語を刻して「千載の識者」を待たうと志したのは、眞に見上げたことであると謂はねばならぬ。

梅園は病革るや、家人及び門生を召し、一々之に訣辭して畢つて後、命じて其の手足を正しからしめ、其の首を正しく南に嚮はしめ、其の故衣を脫して新衣を加へしめ、然る後長子黃鶴を枕頭に召して、其の著書に就いて語り、改むべきものを改め、夜半に至つて遂に復た言はず、翌日東方の明けんとする頃、溘焉として逝いた。時に寬政元年三月十四日である。如何にも名哲の死に相應はしい臨終であり、曾子の易簀を思はしめ、また朱子や王陽明の死の時を聯想せしめるものが有る。

梅園の著述は、三十餘種有る。其の主なるものを擧ぐれば、所謂梅園三語として著名な玄語、贅語、敢語の外、梅園叢書、梅園拾葉、梅園拾英、價原、詩轍、愉婉錄、養生訓、五月雨抄、通語、寓意、梅園讀法、子歲漫錄、垂綸子、元淵論、死生譚、造物餘譚、死生餘譚、丙午封事、名字私議、東

遊草、歸山錄、塾制、獨嘯集、梅園文集、梅園詩集等が有る。其の論ずる所は、哲學、經義、倫理、道德、宗教、教育、政治、經濟、天文、曆數、地理、歷史、文學、音韻、醫學、博物、生理、衞生等に及び、浩として淵海の如くである。是等は梅園全集上下二册（五號活字二段組、併せて二千餘頁）の中に盡く收載されてある。梅園三語は、言ふ迄も無く梅園が畢生の心血を灑いだ大著であるが、玄語贅語其に十萬餘語を費やし、三語は併せて三十餘萬言に及ぶ洪瀚なものである。其の他論及する所は、前述の如く該博であるが、其れは決して單に雜駁に涉るといふ風ではなく、各方面に於て透徹卓偉な見解を持して居るのであつて、此の點から言つて、梅園は眞に名哲であると謂はねばならぬ。然かのみならず、德行に秀れ、豐後聖人として、今日に至るまで其の遺德が鄕黨に及んで居り、聖德の士としては、單に豐後一國にのみ尊ばるべき者ではなく、日本・東洋の聖人と見做すべきものであり、要するに東洋の碩儒として第一流に位すべき人であると思ふのである。斯くの如く學術及び德行の兩方面に優れた偉材を有することは、日本の誇りであるのみならず、其の眞價を檢討して、之を世界に紹介することが必要であると思ふ。

梅園三語の中、玄語は懷疑を以て始まつて居るが、敢語は、倫理道德を中心として論じたものであり、敢語とは敢て語るといふ意味で、確信を以て敢然として主張し、君臣の道、忠孝の道を本として

論じて、梅園の思想の最も日本的なるものを現はして居る。

斯樣に玄語は宇宙の原理に就き、贅語は天と人との關係に就き、更に敢語は倫理道德、忠孝の道を本として論ずるのであつて、形式としてはカントの三大著述に比すべきものであり、其の內容から謂へば、日本的東洋的なるものを中心とした世界的の大著述であると謂つて良いのである。

梅園の宇宙觀は、易の思想に本づくものであると思はれるが、要するに一元氣說である。一つの大いなる氣が、或は陽となり、或は陰となつて無限に變化し、天地萬物はそれに依つて生々發展をするのであると說き、更にその中に一種の條理、筋道があると說く。梅園は之を條理學と稱して居る。普通朱子學に於ては理と氣を說き、陰陽は現象であつて陰陽の現象の起る所以の法則が理であるとして、理氣二元を說く。之に對して張橫渠は一元氣を說く。我國に於ては伊藤仁齋父子、東條一堂等の學者が、同じく一元氣論を說く。然るに梅園はこの一元氣の中に條理が行はれて居ることを認めて、之を條理學として說いたのであつて、梅園獨特の思想である。其の言ふ所に依るに、宇宙に條理の有ることを知れば、宇宙は一匹の文錦の如くに見える。一匹の錦の反物に譬へて申せば、錦の反物には、經(たていと)と緯(よこいと)とが織り爲され、朱綠の絲を雜へ、文彩が燦爛として居り、雲は飛び霞は涌き、鸞鳳華卉が鬱乎として眼に映ずるのであるが、其の由つて來る所は、必ず一經一緯に本づき、之を織り成す巧

婦の意匠の神用に依つて然るものである。一經一緯の合する所、一緯として經と分たざるは無く、一經として緯と合せざるは無くて、龍起り鳳舞ふ燦爛たる文彩を成すのであるが、之を分つて見れば、經は自ら經と比び、緯は自ら緯と比んで居るのである。斯かる一經一緯の妙合に依つて、天地の文が燦然として現はれて居るのであり、之を條理と稱するのである。條理の意義は、草木の理に取つたのであり、條とは首尾貫徹であり、理とは左右析反であると謂つて居る。而して梅園は條理の學を確く信じ、「聖人復起、豈得レ易レ之哉。」と謂つて居る。

宇宙の生成に關して、或は一元氣を以て說き、或は理氣二元を以て說くのは、東洋哲學に於ける千古未決の大問題の存在する處である。易の繫辭傳に見ゆる一陰一陽之謂レ道といふこととの解釋に於て、此の二つの態度が岐れるのである。一陰一陽其の儘を以て道と爲すか、或は陰陽は道に非ず、陰陽する所以が道であると爲すかに依つて、一元氣論とも爲り、理氣論ともなる。易の太極を氣と爲すか理と爲すかの問題も、同様に此處に在るのである。支那に於ては程朱が理氣二元を說き、或は之に基く太極一元を說いて居るが、之に對して程子と同時の張横渠は、太虛一元氣論を唱へて居るのである。

梅園は宇宙の間に滿つるものを一元氣と稱する。元とは大の謂である。玄語に、

坱々焉、洋々焉、靡ニ往匪一レ氣也、靡ニ往匪一レ物也。物可レ見、而氣則漠然。漠然難レ見、故其粲然亦不レ易レ知已。

とある。坱々とは、氣の絪縕充塞する貌である。坱々洋々として廣博無限の大氣が、宇宙の間に絪縕充塞して居り、此の氣に依つて物が生ずる。梅園は天地を大物と稱して居る。物は形が有つて眼に見えるが、氣は漠然として形が無く、眼に見えないのである。故に此の氣の作用に依つて萬物が粲然として條理を爲して顯はれて居るけれども、人は之を窺ひ知ることが出來ないのである。是れが宇宙の實相である。彼の或は以て空と爲し（佛氏の說を指す）、或は以て無と爲す（老氏の說を指す）のは、未だ條理を知らぬからであるとも謂つて居る。

玄語は難解な漢文で書かれてあるが、梅園は更に之を平易な和文で書いて次の樣にも謂つて居る。即ち

名づけやすからざるもの有り。暫らくかつて一元氣といふ。一元氣宇宙に充滿して秋毫の末をものこさず。よくわかち（分）よくあはせ（合）、生々化々して端倪をみず。天外をつゝみ、地内にやすんず。

と元熙論の中に述べてある。又梅園拾葉に載する答ニ多賀墨卿一の文の中にも、之を成るべく分り易い

樣に說明してある。此の一元氣の作用する上から陰陽を說くのである、梅園は陰陽のことを一一とも稱して居る。玄語に一一陰陽也、之謂二條理一。といふ語が有る。斯くの如く造語の上でも全く獨特の言葉が非常に多いので、一寸一讀した位では、其の意味が分らないのである。梅園の思想が獨特であると同時に、其の表現も頗る獨創的なのである。

支那に於て一元氣論を唱へて居る有力な人は、前に揭げた張横渠であつて、朱子の思想と相對立する程の大きな體系を爲して居るのである。梅園の揭げた坱々といふ言葉も、張横渠が一元氣の絪縕充塞を說明する際には坱然と謂つて居り、また老佛が宇宙を空と爲し無と爲すのは其の眞相を得て居るものではないと謂つて、之を排して居るのも、梅園の言と同樣なのであつて、兩者の見解の相近いものを認めるのであるが、然しながら梅園が張横渠の說を祖述したものであるとは思はれぬ。殊に梅園の謂ふ條理學は、全く梅園獨特の思想であると謂はねばならぬ。

梅園はまた反觀合一の道といふやうな言葉を使つて居る。物の本質に立ち反つて經緯の合一の上から精察すべきことを謂つたものと思はれる。反觀といふ言葉は、前に擧げた張横渠と同時代の邵康節の謂つた言葉の中にもあるのであるから、梅園の宇宙論はこれ等の人の思想と似た所がある譯であるが、勿論梅園の方が時代が後になり、梅園の方が餘程詳しく論じて居る。且つ天文學の知識も加はつ

て居つて、梅園の方が遙かに精細な思想體系を備へて居るのである。

要するに全體として見れば一元氣論で、大いなる氣が宇宙の間に充ち滿ちて居て、それが變化作用して居るといふのであるが、その詳しい說明は、天文上の天體の觀測とか、自然現象の解剖とかいふ方面からも、實驗に依つて證明してあるのであるから、眞に廣博精密を極めて居ると謂はねばならぬ。故に梅園の宇宙論や自然哲學は、中々簡單に窺ひ得ないものがあり、簡單に說明出來ないものが有るのであつて、是等は哲學上の問題であると共に、自然現象をよく觀察しよく研究してかゝらなければ分らない問題であるから、中々容易なものではないのである。

梅園の倫理思想に就いては、梅園三語の中の敢語に述べてある。特に梅園が教を受けた綾部絅齋は、倫理道德を非常に重んじた學者であつて、其の著の家庭指南にも、「聖人之教、以レ明二倫理一爲レ本。學問之道、以レ知レ之爲レ先。」ともあり、人倫を明かにすることを以て本と爲して居る。此の家庭指南には、室鳩巢伊藤東涯の跋が有り、更に中井竹山の跋にも、崇二正術一之深、務二實踐一之篤。とあつて、其の學術の醇正なることを稱して居るが、是れは梅園の思想にも影響して居ると思はれる。梅園の著の愉婉錄に、「それ人と生れ來ては、人倫より重きはなし。何くに往くとして人倫の際ならざらん。」と謂ひ、人倫の重んずべきことを明らかにしてあるのは、絅齋の言と符節を合するが如くである。而

して人倫に於て最も大切なものは君臣父子の道である。梅園の著述の養生訓に、「人の道とは、只子としては孝に、臣としては忠なることにして、太史公の言にも、命泰山よりも重く身鴻毛よりも輕しとありて、君に仕ふるにも親に仕ふるにも、命は只一つあるものなれば、尤も大切なるものなり。常に衞生の道を知り、身を壯健に保たずんば、父母には唯其病を憂へしめ、君の爲には、まさかの働きなりまじければ、百年の君恩も何を以てか報じ奉らん。」とある。此の養生訓は、杵築の或る素封家が代々世嗣が夭死して家が潰れさうであつた爲めに、其の家の人に賴まれて、只一人殘つた幼い人の爲めに養生の法を說いたのであるが、其の中に斯くの如く身體を大切にするのは、君父に仕ふる道を盡す爲めであると謂ひ、親に病氣の心配をかけたり、君の爲めにまさかの時に一命を棄てて奉公の道を盡すことが出來ない樣では、人間の道たる忠孝の道を果すことが出來ないのであると覺してあるのは、如何に梅園が人倫として忠孝を第一に重んじて居るかといふことが窺はれる。是等の事に依つても、梅園が眞に日本倫理に徹して居つたといふことを知ることが出來るのである。

梅園が如何に尊皇の念に厚かつたかといふことは、梅園が二十八歲の時に、伊勢參宮をされた時に、京都にも滯在して名勝を巡覽したが、其の時の紀行を書いた東遊草の中に、斯樣に申してある。

仙洞この南に居まして、藐姑射の山ぞ常磐なる、鴨川の水此の堀にわづかに流るるのみ。南門ム

かく鎖して、清涼殿の棟ほのかにみえたり。城高きにあらず、堀ふかきにあらねども、千年の星霜をへて、北極巍々として移らず、四輔三臺のめぐりめぐつて、衆星のむかふごとく、今尚むかしに異ず。豈異國羯皷の生臭き、朝には犬羊と稱し、夕部に君主と稱すると日を同して語るべけんや。

とあるのは、支那の易世革命、君臣其の位を易ゆるといふ樣な風とは違つて、永久に渝らない我が國體の精華の存する處を謂つたのである。また贅語の中にも次の如く謂つて居る。

如今雖レ垂二拱九重一、環共不レ改、莫レ所レ用二湯武孟軻氏之議一。建二諸天地一、質二諸鬼神一而弗レ謬之議也。（善惡峡篇）

當時德川幕府の時代であつて、天子は九重の中に垂拱して居られるけれども、幕府を始め諸侯が朝廷を環つて皇室を仰ぎ奉ることは少くも變らず、支那に於けるが如く、湯武の革命や、又は之を肯定する孟子の議論の如きを容るるの餘地は無く、之を天地に建て、之を鬼神に質しても謬らざる萬古一定の君臣の義が定まつて居るのが、我が國體の精華であることを明言したのである。又

至尊穆穆、垂二拱九重一。視二之文王一而無レ愧、比二之武王一而如レ優。

とも謂つて居り、我が皇室の尊嚴なることは、支那の聖王である文王に對しても愧づるなく、武王に

比べても優る所があると謂つて居るのである。而して

今吾邦擅ニ美於萬國一者、君臣之分也。

と謂ひ、我が國が萬國に秀れて居るのは、斯くの如く君臣の分が儼として存して居るからであると明言し、また

堯舜之揖讓、猶不レ可レ繼。湯武之擧、豈可レ法焉哉。

と謂つて、堯舜の禪讓も則るべきでなく、況んや湯武の革命に於てをやと謂つて居る。是れは最も我が國體の精華に目覺めて居る言葉であつて特筆すべきものであると謂はねばならぬ。また敢語の君臣篇の初めに在る自序の文に見ゆる言葉に、

惜哉、眩ニ堯舜之名一、不レ察ニ其擧一、回護迂曲、君臣之大分、千古蓁塞。俯仰之間、私心惻。所レ關孰大レ焉。欲獻流涕、竊抱ニ杞國之憂一。傳レ道者之幸也。非ニ道之幸一也。

とあるのは、眞に道に徹した痛切の言であつて、斯くの如く明快激切に我が國體の尊嚴を論究されたものは、他に多く見ないのである。

又玄語の例旨には、「吾寒鄕一農、幸遇ニ日月之休明一、竊仰ニ聖澤之洪蕩一。德與ニ天地一並行、物各得ニ其所一。……伏惟、吾則王者之民。竊有レ窺ニ天地一、亦相與樂卒レ歲。」とあつて、德天地と並び行はれる

聖澤の下に、王者の民として　天皇の恩光を仰ぎつゝ、其の生を樂しみ、悠々として歳を卒ふることの出來る西海の一平民であることを此の上無く喜びとするといふ意味のことを謂つて居るのは、最も注意すべき言葉である。斯樣な意味に於て、眞に日本人としての自覺に徹して居ると謂ふことが出來るのである。

梅園の經濟思想に就いては、其の著の「價原」の中に論じてある。是れは藩士の上田養伯といふ者の質問に答へて書いたものであるが、その中に梅園の經濟論、貨幣論が出て居る。その冒頭に

禹謨に德惟善レ政、政在レ養レ民。水火木金土穀惟修、正德利用厚生惟和。といへり。水火木金土穀これを六府と云ひ、正德利用厚生これを三事といふ。後世の治平術萬法ありと雖も、此の六府三事に出でず。

とあり、また正德利用厚生の三者の關係を論じて、

利用を初とし、厚生を本とし、正德を主とす。

と謂つてあるのは、道德と政治と經濟との關係を論じて、最も切要なるものが有ると思ふ。また其の貨幣論の中、惡貨の流通に關して、「惡貨盛に行はるれば、精金皆隱る。」といふ語は、彼のグレシアムの法則に優るものとして有名である。

斯くの如く梅園は、宇宙の原理や天人の關係に就いて深く思を致したのであるが、實際の學問としては、身を修めること卽ち倫理道德を中心として學問するといふ實學を最も重んじたのである。學問は修養の爲めの學問であり、營利榮達の爲めの學問ではない。梅園拾葉の中に「戲示二學徒一」といふ有名な文章が有る。

學文は飯と心得べし。腹にあくが爲なり、かけ物などの樣に人に見せんずる爲にあらず。

學文は置所に依りて善惡わかる。臍の下よし、鼻の先惡し。

足の皮はあつきがよし、面の皮はうすきがよし。（其他略す）

梅園は常に十數名の塾生を敎へて居り、「塾制」を作つて之を監督して居る位であるが、また別に「學禁」といふものを書いて、諸生を誡めて居る。學禁に曰く、

勿下以二待レ人者一而自處上。勿下以二自律者一而責上レ人。勿下以二我好尙一加中諸人上。勿下以二小怜悧一侮中他之敦樸上。知極二其高明一。行勉二之於踐履一。

皆誠に玩味すべき金言であるが、亦以て梅園の學問の傾向を窺ふに足るものが有る。

斯くの如く梅園の學は、頗る廣汎に渡つて、而も其の精粹を道破して居り、嘗ては自ら天球儀を作つて天文を硏究して日月星辰の運行を觀測し、又其の家は代々醫を業として居つたので、醫學にも造

旨が深く、人體の構造や解剖に關する說もあり、支那に於ける醫書の古典に就いても、其の誤謬を指摘して居る位である。更に後に（五十六歲の時）長崎に遊んだ時には和蘭語を學んで居る。これは深く修める迄には至らず、單にアルファベットを覺え、姓名を記する位の所であつたやうであつて、西洋では日本のことをヤアハンと言ふといふやうなことを書いてあるが、長崎に於て天象圖・望遠鏡・寒暖計・天球儀・地球儀・羅針盤等を目擊し、其他西洋の學術風俗等の事情に就いて、大いに見聞を廣め、新知識の吸收に心を用ひて居るのである。其の邊防に關する意見も有る。歸山錄に曰く、

我國東北は、蝦夷の地也。蝦夷の北邊、已に西洋に得らる。若蠶食して蝦夷を有せば、我國常に北顧の患有らん。……若し我蝦夷の地を有せば、金穴開くべし。財貨據るべし。北門是に由て固かるべし。……若し西洋に蠶食せられば、國家豈北顧の憂なからんや。

斯くの如く梅園の學術は、極めて廣く且つ深く、而も實用的であつて、哲人として極めて偉大であるのみならず、實際の經世の道にも通じて居つた大儒であるのである。梅園が日本人として獨自の日本精神を忘れずに而も新知識を收め、獨創の見解を立てたことは、眞に梅園の偉大を思はしめるものであつて、眞に日本人として誇るべき碩學であり、實に世界の哲人であると謂つて、決して過言ではないのである。

三浦梅園の學は、脇愚山を經て、帆足萬里に傳はつた。故に次に愚山と萬里とに關して、略述することとする。

脇愚山は、名は長之、字は子善、通稱は儀一郎、其の愚山と號したのは、禿山の下に生れ、粗材たるに取つたのであるが、又別に蘭菊を愛して、蘭室又は蘭園とも號する。豐後速見郡小浦の人である。日出を南に去ること一里餘の處である。愚山は沈厚の君子人で、醇儒の風が有つた。年二十二の時、孖山の下に三浦梅園を訪うて教を請ひ、數日滯留した。其の後も再度訪うて條理の學に就いて質した。梅園も愚山を敬重し、愚山は深く梅園を崇奉した。愚山の學風を見るべき一助として、其の塾則五條を掲げて置く。

一、學問の本は、身をおさむるに在り。心つゝしみてわすれず、身禮義をおこたらざるべき事。

一、學問の道は、知ると行ふとに在り。必ずよく知りよく行ふべき事。

一、經書を第一とし、其の次は史、その次は諸子百家雜書たるべき事。

一、文章は我言を立て意を達するの用なり。詩は我情を咏じ興を寄する具なり。餘力を以てつとめはげむべき事。

如何にも篤實な君子の學を講じて居たことが知られる。此の外愚山は西洋學を論じて、其の怪誕な處

は學ぶべきでないが、「實測の術は、實に有用の學なり。志ある人は問ふべきにこそ。」（蕃海漁談）と謂つて居るのは、新時代の學問に對する活眼を有するもので、此の風は亦梅園より始まり、而して萬里に傳はつて居ると謂ふことが出來る。要するに愚山は、梅園より萬里に至る學說の中繼者として銘記さるべきものである。萬里が愚山を哭する五言排律の篇が有るから左に錄して置く。

奉レ哭二蘭室先生一。

霜露零二徂物一。陰陽逐二逝川一。元期二文敎盛一。俄見二訃音傳一。紫氣中原滅。青雲鴻業遷。衰榮隨二葬地一。至道寓二殘編一。重霧明旌濕。悲風丹旐懸。負レ笻歌已驗。餘レ閣奠徒蠲。設レ飾追二三代一。愼レ終隔二九泉一。丘園懷二昔日一。玉帛及二當年一。故重二賓師禮一。方推二輔弼賢一。濟時倶倚賴。命世失二騰騫一。遺愛結二黎庶一。餘芳宣二蕙荃一。雄篇紙欲レ貴。淑德石須レ鐫。弟子何知レ學。儒紳叩着レ鞭。稚齡忝二善誘一。陋質謝二沈研一。講二習門闌一久。栖二遑羈紲牽一。憂レ生轉憔瘁。臥レ病遂纏綿。烱戒猶書レ帶。懿訓尙佩レ弦。離居廢二執紼一。趨侍罷二歸田一。（先生疾、欲レ請レ歸レ鄉、會疾甚不レ果、巳卒葬二鶴崎河上一。）想像彿靈善。凄凉蒿里偏。寒沙臨二古渡一。喬木翳二新阡一。下レ馬空陵在。刺レ人荒草捐。不レ聞二嘆逝者一。流水自涓涓。

帆足萬里、字は鵬卿、通稱は里吉、萬里とは其の名であつて、雅號ではない。曰く、孔孟名字の外所謂雅號を用ひず、我曹號無くして可なりと。其の矜持の高いことを窺ふべきである。其の讀書の室

を愚亭と曰ふので、門人或は呼ぶに愚亭先生を以てする者も有るが、萬里自らが愚亭を以て號したことは無い。但し萬里といふ名が、既に號の如き感を與へる。豐後日出の人である。日出は日出藩の城下で、梅園の屬藩であつた杵築の西南に當り、直ぐ近くである。

萬里は幼にして穎異、强記人に過ぎ、一度見聞する所終生忘れずといふ風であつた。十四歳の時始めて同郡小浦の脇愚山に學んだ。小浦は日出を距ること僅かに里餘なので、毎日書を抱いて通學して怠らなかつた。此の時愚山は二十八歳であり、是れより二年前に三浦梅園は歿して居る。後十年にして萬里は肄業餘稿を著はしたが、其の末尾に記して曰く、「予年十四、見二蘭室先生一、受レ業。先生授以二作文法一。魯鈍之質、雖二於レ文無一レ成、至レ今讀書不レ苦二太難一レ解者、先生之德也。」とあるに依つて、讀書作文の法を問うたことが分る。而して肄業餘稿の後に、愚山が題した跋文の中に、

日出帆足鵬卿嘗從レ予遊、學識日優、既而暌離有レ年、特通二書問一耳。近寄二示其肄業餘稿者一、披而閱レ之、夫學識之優、蓋足レ徵也。若下論二古經一議中國史上、並先獲二我心一。其它往々有下出二意表一者上、不二嘗起一レ予、賞嗟無レ已。

とあるに由つて見れば、萬里が出藍の才の穎出は、既に此の書を通じて見られるのである。

萬里は西洋の新知識を收めるに志し、早く蘭書を學ばんとしたが、幕府の禁を以て果さず、四十餘

歳にして始めて蘭書を獲、獨學數年にして能く其の義に通じ、窮理通十數萬言を著はした。初め梅園は長崎に遊んで蘭語を少しく學んだが、未だ蘭書を讀むことの出來ないことを頗る遺憾とした。愚山に至つて梅園の此の志を受けて西洋學を修めて其の有用の方面を應用すべきことを認めて居り、是れが萬里に傳はつて遂に蘭書を讀破して之を活用するに至つたのである。萬里は又數學を研究し、當時の士人や子弟にも之を奬勵し、財政致用の術に資した。萬里は更に醫學を修め、漢蘭の二法に通じ、門人にも之が兼修を奬めたのである。斯かる學問の傾向は、卽ち梅園の學風より傳はるものである。

萬里が梅園を推尊することは、至れるものが有る。梅園を推して我國第一流の儒者と爲して居ることは、前に述べた通りであるが、更に梅園の肖像畫に題した詩に、

峨眉之山。高峰軼レ雲。降二生先生一。英儁超群。洞二覽天地一。殫二極鬼神一。條理之說。數十萬言。
闡二發幽賾一。以覺二斯民一。屢辭二聘命一。抗志守玄。遺像肅然。想二見其人一。

戊辰二月　　帆足萬里拜讚

是れは片山東籬畫く所の肖像に題したものであるが、如何にも良く梅園の學風識見人格を表はし、且つ推尊の意の至れるものを窺ふことが出來る。また十市石谷畫の梅園肖像畫に題した萬里の贊が有るが、其れには高峰軼雲は高峻軼雲と爲り、遺像肅然は遺像凛然と爲り、萬里拜讚は萬里敬題と爲つて

居る。石谷畫贊の方が後出であらう。高峰は高峻に改めたものか。遺像肅然と曰ひ遺像凛然と謂ふのは、各〻其の畫に應じて語を換へたものかと思はれる。（寫眞參照）

萬里の窮理通は、梅園の玄語に當るものである。萬里は夙に窮理の學を好み、刻苦研鑽して、初め窮理通數萬言を著はしたが、後に其の誤謬の多きを覺り、盡く其の稿を毀棄した。後に蘭書を讀んで得る所が有り、再び稿を起し、西人の說を取捨し、自己の見を出して窮理通の大著を成したのである。內容は原厯・大界・小界・地球・引力・大氣・發氣・諸生より成り、八卷に分れて居る。同書中に引用した蘭書目として、繆仙武羅骨(ミユセンブロク)窮理說・缺兒的兒(グルテル)地球窮理說・某甲窮理講義・臘蘭垤(ランテ)天文志・私宿兒曼(スミルマン)地理志・佛郞察(フランス)人繞地球一周紀行・魯斯(ロス)人東西洋紀行・諳厄利亞(アンケリエ)人使支那記・甫村仙(フリンセン)地理志・葉腁(エヘイ)分析術錄・味爾垤奴(ウイルテノ)本草說・利設蘭士(リセランド)人身窮理說・公斯辟爾夫(コンスペルフ)病因考が擧げられて居る。萬里は中年以後に藤林普山の「譯鍵」を得て獨學に依つて是等の蘭書を讀破して之を批判し、然る後此の大著を成したのであつて、其の刻苦と精力の絕大なことは、梅園が三語の著作に終生の精力を費やしたと同樣であり、古人力學精進の狀は、眞に欽仰に堪へないものが有るのである。萬里が蘭學に志したのは、緖方洪菴や佐久間象山に先だつこと十餘年前であり、西洋硏究の先鞭を稱せられる所以である。且つ萬里の見識は、能く西洋人の利貪の心多きを見拔き、西洋人は根氣は强いが、寧ろ魯鈍に

して不器用なることを指摘して居るが如きは、其の氣宇の高邁、嘆服するに堪へたるものである。思ふに梅園の玄語は、哲學的思辨に於て優れ、萬里の窮理通は、科學的研究に於て勝つて居るであらう。元より今日の如き科學の進步した時代から見れば、其の科學的成果の不充分であることは認められねばならないことは言ふ迄も無からう。

然しながら萬里の本領は、決して獨り此處に在るのではなかつた。其の本色は、實に經術文章に在つたのである。其の著入學新論は、萬里の學術を窺ふべきものである。是は原教・原學・原名の三篇より成り、堂々たる雅整の達意の漢文を以て書いてある。原教には、儒釋二教を論じ、儒を以て君子を教へ、釋を以て小人を教ふべしと爲し、原學は學問の道を說き、詩書禮樂の得失より、漢宋伊物の學を論じ、原名は小學を說いたものである。古賀精里は之を稱して「思孟以來此書無し」と曰つたといふから、其の推服の至れることを知ることが出來る。

入學新論と共に萬里の經術を窺ふべきものは、東潛夫論である。是れは和文で書いたものであつて、其の書名は後漢の王符の潛夫論に擬したことは言ふ迄も無い。此書は王室覇府諸侯の三者を論じ、經世有用の書である。王室篇は特に其の皇室に對する忠誠の意を見るべきであつて、猶ほ梅園の敢語に於ける皇和の意の如きものである。蓋し萬里は竊かに王室復興の深謀を藏したるものの如く、

其の中興の策は、尋常儒士の見を脱して、眞に超遠雄邁なるものが有り、王佐の才を以て稱せられる所以である。萬里は更に朝鮮呂宋を經略すべきことを論じて居る。萬里は嘗て其の門人野本白巖に口授するに海防策を以てし、水戸烈公に上るの書を作らしめた。白巖は嘉永三年江戸に至つて、海防策を烈公に上り、更に面陳して獻策せんとしたが、偶ま烈公の幽閉に遇うて果さなかつた。此の時白巖が萬里の人と爲りを稱して、自㆔文籍傳㆓吾東方㆒、千五百年、未㆔嘗有㆓是人㆒也。と謂つて居るのは、強ち其の好む所に阿するの言ではない。

萬里の學は、經世日用を主とし、學術の深邃と文章の整錬とを以て一家の學を鼓吹し、天下を睥睨するの概が有つたのである。其の外詩に於ても特殊の滋味を藏し、詩文共に獨造の境地に在つた。特に文章に於ては、獨得の識見と力量とを有して居るので、日本の漢文を論ずる者は、萬里の文を逸することは出來ないのである。

萬里の文章は、達意を尙び、洗錬を極めて、曲さに繩墨に當つて居る。但し文の爲めに文を作るのではなくて、經術を明らかにする爲めの文であるから、自ら尋常文士の文を以て見ることは出來ない。嘗て柳川侯の臣笠間子恭の邦文先侯遺事を取つて門人と共に漢譯して并樓纂聞を著はすや、柳川侯之を佐藤一齋に示した。一齋之を見て嘆稱して、「文にして葩ならず、簡にして泄ならず、是れ史家

の正法を得たり。」と評したといふ。龜井昭陽の蒙史を著はすや、稿本を萬里に寫示して、其の校定を求めた。萬里指摘批正して昭陽に還して曰く、「蒙史は理義深奧、商周の文を讀むが如し。天下此の文を作る者は、我が龜井君有るのみ。天下此の文を批する者は、唯だ予有るのみ。」と。昭陽之を得て嘆じて曰く、「我を知る者は、帆足萬里有るのみ。」と。昭陽は深く萬里の偉才と文章の力量に服して、常に門人に戲れて、天狗を倩うて帆足先生を筑前に連れて來たいものであると謂つて居たといふことである。（西崦先生餘稿題龜井元鳳像）

要するに梅園と曰ひ萬里と謂ひ、鬱然たる二大家が南豐の天地に崛起して居ることは、誠に偉觀であると謂はねばならぬ。加之更に此の上に廣瀨淡窓の如き名家を加へて居ることは、南豐の文運をして愈々特異のものたらしめ、日本儒學史上に燦たる光輝を添へるものであると謂はねばならぬ。

淡窓と梅園とは、直接に學統の關係は無いが、淡窓の師承に當る龜井南冥は、深く梅園の人物學識に傾倒して、遙かに詩を寄せ、梅園が之に和して居る。

咫尺眞人夢寐逢。覺來仍舊隔千峯。何當能罷人間事。却住人間從赤松。　南　冥

垂白天涯無日逢。孤雲望斷飛孤峯。清時吾自飮黃犢。隔地人傳學赤松。　梅　園

二名家の神交を想ふことが出來る。南冥の子昭陽は、淡窓の師である。昭陽と萬里との關係は、前に

述べた通りであるが、更に萬里と淡窓とは、通家の誼が有り、淡窓が遠思樓詩鈔を刻するや、萬里に請うて校定し、又其の序を卷首に置いて居る。萬里が復二廣子基一書に、

　締蒙レ示二佳集一、命以二潤色一。僕狂簡頗有二指摘一、深以二唐突一爲レ慮。高人雅量、不二惟不一レ以爲レ忤、亟有レ所レ採。佳集刻成、又賜二一本一、感怍不レ已。

とあるのは、是れである。また同書に、子基詩如レ見二晉代名士一、風度玄遠、槩不レ過二數言一、使二人意消一。宜其矜二式後進一、無二傲僻之志一也。と謂つて、淡窓の詩を推賞して居るのである。萬里は素より詩人ではなく、其の詩は詩人の詩を以て目すべきではないが、自ら醇厚雅健の眞趣が有る。淡窓が萬里に其の詩の批正を請うたのは、名家にして始めて能くすることであると謂はねばならぬ。

帆足萬里の著述は、大正十五年刊行の帆足萬里全集の上下二册に收載されてゐる。

廣瀨淡窓、諱は簡、字は廉卿、後に建、字は子基と改めた。號は淡窓・苓陽・青溪・遠思樓主人等が有る。光格天皇天明二年に豐後日田に生れ、孝明天皇安政三年七十五歳にして同地に歿した。淡窓は幼にして穎悟、兼ねて文才に豐かであつた。十五歳にして筑前に遊び龜井の門に入つた。當時南冥は罪を得て黜けられ門弟を取ることが出來なかつたので、其の長子昭陽に謁して束脩を行ひ、翌年入塾した。爾來三年間文は昭陽に詩は南冥に呈して添削を請ひ、才華煥發學業大いに進んだが、病を得て

郷里に歸つた。淡窓は後年當時を回想して「教を受くる日淺しと雖も、其の恩遇は、終身隨從する者よりも勝れり。」（懷舊樓筆記卷八）と述べてゐるのを見れば、如何に龜井父子の提撕に負ふ所が大であつたかを知ることが出來る。淡窓が後來教育者としても大を成したのは、南冥の影響に依る所が多かつたと思はれる。

淡窓は歸國して病痾を養ひ、病瘦えて後門生を集めて教授し、文化四年二十六歳にして家塾桂林莊を開き、始めて入門簿を作つた。爾來四方より遊學の徒益〻增加し、十年の後桂林莊も狹隘を感ずるに至つたので、新たに塾舍を築き、咸宜園と名づけた。桂林莊の盛觀を偲ぶべき左の有名なる二首が有る。

桂林莊雜詠示諸生（四首錄二）

幾人負笈自西東。兩筑雙肥前後豐。花影滿簾春晝永。書聲斷續響房櫳。

休道他鄉多苦辛。同袍有友自相親。柴扉曉出霜如雪。君汲川流我拾薪。（遠思樓詩鈔卷上）

柴扉曉出の句は、初め曉鬪と作つてあつたが、帆足萬里が「此例有りや」と指摘したので、今の如くに改めたといふことである。今の咸宜園址に建ててある詩碑には曉鬪と爲つてゐる。

淡窓は多病であつたので、生涯四方に出遊せず、殆んど家居して教授したが、當時の名士の咸宜園

に來遊する者は甚だ多かつた。其の中賴山陽は文政元年西遊の際、淡窓を訪ひ、隈（日田と連接せる町）に滯在して來往すること數十日であつた。淡窓は孜々として育英に從事すること五十年、及門の士は前後四千餘人に及び、その中には高野長英・大村益次郎等が有り、文學では中島子玉が最も才子の稱が有つたが、早く死し、淡窓の後は、弟旭莊が繼いだ。

淡窓は生前自ら墓誌銘を作り、「何所ニ稱述一、一箇散儒、欲レ知ニ我志一、視ニ我遺書一。」と稱してゐるが、著述が甚だ多く、且つ多方面に涉つてゐる。其の主なるものは、經學方面では、讀論語巻一・讀孟子巻一・讀左傳巻一・老子摘解巻一が有り、思想方面では、析玄巻一・義府巻一・約言巻一・約言補巻一・約言或問巻一・性善論巻一が有り、其他詩文集・日記・語錄・筆記等二十餘種に及んで居り、是等は大正十四年刊行の淡窓全集上中下三冊に收められてある。

淡窓の學術は、龜井南冥・昭陽父子に負ふ所が多いことは、言ふ迄も無い。龜井父子は熱烈なる徂徠學を奉じたものであるが、然し淡窓は必ずしも徂徠學には從はなかつた。例へば、徂徠は荀子を重んじてゐるが、淡窓は性善論を著はして孟子を推尊してゐるが如きである。然しながら淡窓の學術の特色である老莊學の研究は、徂徠の諸子研究の影響に依るものであることは疑ひ無いであらう。淡窓の老莊學に對する見解は、

顧古今異レ情、水土殊レ宜、儒說不レ可レ行ニ於此一亦多矣。至ニ玄門之言一、無ニ常形一、無ニ定勢一。苟得ニ其要領一、則無ニ施不一レ可也。易傳曰、乾以レ易知、坤以レ簡能。易莫レ易ニ於無爲一、簡莫レ簡ニ於不言一。孰謂ニ孔老之旨不一レ同レ歸耶。（折言第三十則）

とある如く、儒老二教の調和・融合を謀るに在るので、此處に日本的老莊學の特色が存するものと思はれる。

然し淡窓を指して老莊學派と爲すのは、當らぬであらう。淡窓は元より徂徠學派でもなく、朱子學派でもなく、又單なる老莊學派でもなければ、折衷學派でもない。淡窓獨自の學風を形成してゐるのである。卽ち經學老莊學を兼修し、詩人として高名であり、教育家として非常の大成功を收めて居る處に、淡窓獨自の人格なり學風なりが窺はれるのである。唯だ此の中に於て淡窓が終始一貫した根本思想が有り、其れが敬天の二字であることは、特記せねばならぬ。また淡窓が咸宜園に於ける五十餘年の長きに涉る教育の眞髓も、亦此の敬天思想に基いてゐると稱して宜しからうと思ふ。淡窓の敬天は、約言に詳說されてある。曰く、

六經之旨、可ニ一言而盡一、敬天是也。（約言二則）

敬天之旨、以レ樂ニ天命一爲レ主。（約言五則）

人知レ敬レ天、則善不レ勉而成、惡不レ禁而去。（約言十三則）

敬レ天者必學。學卽敬天也。（約言三十五則）

と。天を敬して學を勉め、德を修め業を習ふことを勤むる處に、咸宜園の教育の特色が生れたのである。

淡窓は特に我が國體の宇內に冠絕せる所以を論じて、

皇和之爲レ邦也、政化之美、民俗之厚、擧ニ萬方ニ而莫ニ與比一。（中略）嗚呼我皇統之萬古而不レ易、天置レ之也。夏后商周之代興、天革レ之也。二者豈人力所ニ能爲ニ乎。故談ニ革命於我邦一、昧ニ六經之旨一者也。（約言三十五則）

と述べてゐる。是れは前に掲げた梅園の皇和篇に謂ふ所と符節を合するが如くであつて、漢學者にして往々國體觀を謬る者の有つた時に、斯かる明快なる論の有るのは、眞に偉なりと爲すべきである。梅園の弟子愚山は勤王家であり、其の弟子萬里は自ら王事に盡す所有らんとし、淡窓にも又斯かる論の有るのは、我が豐の奎運をして精彩有らしめるものと謂はねばならぬ。

淡窓は嘗て豐後の學を論じて、

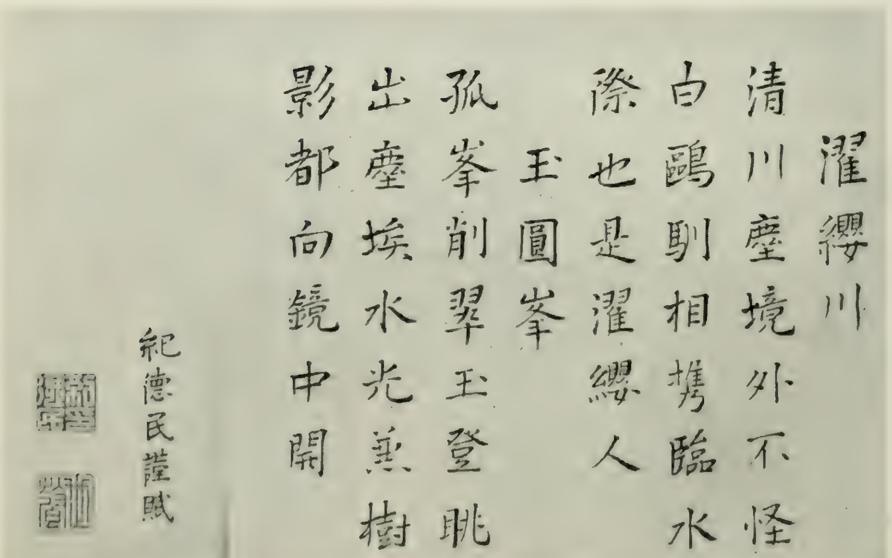
我豐後ニテ先輩ノ高名ナルハ、杵築ノ三浦安貞ナリ。安貞ハ條理學ト云フ事ヲ自ラ始メタリ。宋

儒窮理ノ説ニ似テ、少シク異ナリ。生涯仕ヘズ。弟子ヲ教授スルコトヲ事トセリ。從游ノ者、築ノ龜井ト相比セリ。海西ニテ四方ヨリ生徒ノ多ク聚レルコトアルハ、三浦龜井ノ二先生ヨリ始レリ。三浦ノ門人ニ、協義一郎（愚山）ト云フ儒者アリ。予ガ童幼ノ時、書信往復セシコトアリ。卽チ日出ノ帆足愚亭（萬里）ガ師ナリ。帆足モ窮理ヲ好ミ、又生徒ヲ教授スルコト、三浦ノ學派ヨリ傳フル處アリト覺ユ。（儒林評）

と述べてあるが、日本の邊陬に過ぎない南豐に、三浦龜井の學統より出でて、各〻特色有る學風を成し、今日三浦梅園・帆足萬里・廣瀨淡窓と三先生の稱を唱へられるのは、日本儒學史上に於ける一偉觀であると謂はねばならぬ。



細井平洲肖像




細井平洲筆蹟（高瀨代次郎氏藏）




細井平洲自畫贊




細井平洲自畫贊（小島俊造氏藏）

# 細井平洲の學德

高瀬代次郎

## 一　平洲の事蹟

細井平洲は德川氏の極盛期に於て、江戸に生活すること五十年、折衷學を以て、德行を以て、經濟を以て、諸侯の師範となり、天下の想望する所となつた一大教育家である。

平洲は諱は德民、字は世馨、甚三郎と稱す。尾張の豪農細井甚十郎の次男で、母は竹内氏である。享保十三年戊申六月二十八日（陽曆八月三日）に知多郡平島村に生れた。卽ち現在の上野村大字荒尾であり、熱田神宮前から電車に乘れば、二十分で到着し得る山水の眺めに富んだ名所である。こゝには平洲に關する遺蹟遺墨も少からず、從つて遊覽客が多い。平洲に如來山人の別號のあるのは誕生地の如來山を愛したからである。平洲の生れたのは物徂徠が歿した當年であるから、學界の大勢は推察

し得る。

平洲は十六歳にして京都に遊學したが良師に乏しく、翌年名古屋に歸つて、折衷學の大家中西淡淵に師事し、その勸めに依りて、十八歳の時に長崎に遊學して支那語に精通し、二十歳にして歸鄕した。二十四歳にして江戶に出たのは此の時淡淵が江戶で敎授して居たからであるが、不幸にして翌年に淡淵が歿したので、弟子の大部分は平洲に入門した。蓋し平洲の家塾嚶鳴館の起りである。これより後の十年間は平洲の惡戰苦鬪時代であり、所謂三家五姓の同居も當時の佳話を傳へたものである。その往來切磋したのは木村蓬萊・宇佐美灊水・瀧鶴臺・澁井太室・秋山玉山等であり、ことに玉山の如きは平洲が支那語に通ぜるを目して、聲音笑貌皆華也と評して居た程である。

平洲の出世の緖となつたのは黃蘗の唐僧が江戶に來り、西條藩主松平賴淳卽ち後の紀州藩主德川治貞に招かれて、立派に通詞をしたのが機緣となつて、次第に信用せられ、西條邸より扶持にあづかるに至つたことである。次で明和元年三十七歳にして、上杉治憲（鷹山）の師範となり、櫻田邸に出入するに至つた。かくて明和八年と安永五年とに米澤に下向したのは藩學興讓館の設立と政治顧問の爲とである。安永九年五十三歳にして、尾張藩主德川宗睦に仕へて儒官となる。天明三年名古屋の明倫堂が落成して總裁を命ぜられた。これより先き、命により尾濃の領地を巡りて講話した。着帳による

傍聽者の數、前後十六萬餘に達し、人心之が爲に風化す。功により黄金・時服を賜ふ。同六年に歳祿四百石となる。寛政四年に明倫堂督學を辭したが侍講は前通りである。同八年六十九歳、十月米澤に招待せられ、上下を擧りての未曾有の優遇歡待に驚喜感激し、十一月江戸に還つた。

平洲は享和元年三月九日に、江戸の人吉藩邸で講釋をし、快く歸宅した。それが最後の講釋となりて翌日發病した。西條藩・紀州藩・米澤藩・尾張藩・人吉藩・延岡藩・郡山藩等より絶えず鄭重な見舞をうけたが、六月二十九日（陽暦八月八日）に牛込合羽坂の自邸で逝去した。享年七十四。淺草芝崎町一丁目四番地卽ち淺草公園に近い天岳院に葬る。大正八年に特旨を以て從四位を贈られ、墓所は同十三年に史蹟に指定せられた。近年に至つて平洲の興學興政の文勳を敬慕して、遺蹟を訪ふ者が次第に多く、從つて墓前の供華も常に生き生きとして居る有樣で、洵に有隣の感を禁じ得ない。

## 二　平洲の著書

平洲は經世濟民を以て、教育事業を以て、德行を以て、面目としたるが故に、自著は少くして、多くは門人の編纂したものである。

嚶鳴館詩集　六卷　三册

これは平洲の京都及長崎遊學より江戸生活の初期までの詩集で、明和元年に嚶鳴館にて出版し、非常の好評を博したものである。

詩經古傳　十卷　四册

寶曆九年に嚶鳴館にて板行したものである。序文によりて、平洲の詩經研究はその師中西淡淵の奬勵に出たことを知り得る。

詩經夷考　詩經小訓　詩經大訓　詩經毛鄭異同考

右の四部は著作の目錄あれど所在は未詳。

小語　一册

此の書は主として平洲の交友の善行を記し、初は善交と題したのを後に小語と改めたものである。神宮文庫本・井上博士本等あり、大正十一年に民友社より發行せる成簣堂叢書本は平洲自筆の稿本全部を寫眞版に附したる善本である。

松島紀行　一册　をしまのとまや　二册

二書共に明和八年に松島に遊べる紀行文にして、前者は漢文、後者は和文の板本である。

嚶鳴館遺稿　十卷　十册

本書は平洲の歿後に上杉鷹山と尾張藩主德川齊朝との盛意によりて、文化四年に板行したもので、嚶鳴館詩集以後の詩文を集めたるのみならず、墓誌銘・行狀等をも附錄としたるが故に、事蹟を研究するには缺くべからざる良書である。

嚶鳴館遺草　六卷　六册

本書は天保六年に平洲の國字の遺書を板行したもので、諸侯及門人の需めに應じて答へたものが、十の七八を占めて居る。大學頭林述齋の序に曰く「其の言的實深切にして通曉し易く、人能く服行せば、其の日用に資する、啻に布帛菽粟のみにあらず。而して其間往々亦親しく聞く所あり。」と、吉田松陰・西鄕南洲の愛讀したのも本書であり、日本倫理彙編第九册及平洲全集に收めてある。

論語諸註遺義　一册

論語中五十餘則を擧げたものであることは、平洲より上杉鷹山に宛てた書簡に依りて明白であるが、その所在は未詳である。これは折衷學者としての平洲を硏究するに於て甚だ遺憾な點である。

つら〳〵文　二卷　二册

樺島石梁がその師平洲の喪に居りて、上木して社友に頒つと共に、書肆の懇請によりて公にしたものである。嚶鳴館遺草にも入れてある。

平洲先生感懐詩　一册

平洲の門人神野世猷が嚶鳴館遺稿中の感懐八首に、中井竹山の批評を略したるを惜み、之を加へて文政十一年六月に上梓した小本であり、今は極めて稀書である。

平洲訓話　一册　平洲先生講釋聞書　一册

訓話は平洲が尾州侯の爲に訓話したるを書留めたもので、講釋聞書は城下町人の爲にせる講釋の傍聽筆記であり、二書共に修身講話の模樣を知るに於て、有力の資料である。

群書治要　五十卷（三卷原缺）　四十七册

唐魏徴等の著書で、平洲等が尾張明公の命を奉じて校刻したもので、尾張板群書治要として世に知らる。此の書支那に入るに及んで、阮元は千餘年來亡佚の書を得たるを喜び、之を四庫未收書目に著錄し、楊靈石は之を連筠簃叢書中に收めて刊行し、弘布するに至つた。

## 三　平洲の折衷學說

平洲の學問德行はその師中西淡淵より受けた所が多い。淡淵先生行狀に曰く、

弟子問曰、某經孰據、曰從二子所一レ信、闕二子之所一レ疑、其於二微言一也、吾未レ知二其孰合孰離一、不レ如

各得㆓其所㆒得以施㆓之人㆒、施㆑人而有㆑益、雖㆑不㆑中而不㆑遠矣、何必執㆓一義㆒、又問㆓某某之學如何㆒、曰其學名家、豈虛然哉、二三子後自知（中略）、弟子有㆑過、則肅然不㆑言、以爲㆑常、故人人承㆓顏色㆒唯謹。

淡淵は右の如く度量寛弘、衆說を包容し折衷するを旨とすると共に、弟子の實踐躬行に對しては嚴肅であり「淡淵は秉て禮法正敷人にて其門人假にも肩衣をぬぎたる事なし」と傳へられた程である。以て淡淵を羽翼してその學脈を繼承した平洲の進路をトすべきである。

平洲の志學時代よりして江戶に出でて家塾を開いた寶曆時代までは徂徠學が流行を極めて居たので、その先輩交友に餘熊耳・秋山玉山・宇佐美灊水・瀧鶴臺・木村蓬萊等があり、徂徠學の影響をうけたことは勿論であるが、次第に其の雰圍氣を離脫して、澁井太室・南宮大湫等と同じく、折衷學を以て立脚點とするに至つた。之を既成學派より見れば無所屬であり獨立である。

平洲は少くとも重大なる二點に於て、徂徠學に服しなかつた。第一は徂徠は道は聖人の造作したものであると主張したのであるが、平洲はその著道說に於て、道者、天地自然之道也、而非㆔人之所㆓造作㆒也と斷じ、天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教、其言確明、又何爭哉と言ひ、道を以て先王の造る所とするが如きは不㆓獨立言之失㆒、蓋其見㆑道亦淺淺哉と斥けた。されば上杉鷹山の學問大意を賞

揚しながらも、制作の文字に對しては左の注意を促した。

　其聖人の御制作被ㇾ成候、大道を聖人の道と申候。乍ㇾ憚其聖人の御執行ひ被ㇾ成候道を聖人の大道と申候と、被ㇾ遊候而は如何可ㇾ有二御坐一哉。制作と申事は徂來が道は聖人の造る所にて、天地自然の道にあらずと申候所より出候様に相聞え申候。聖人の制作は禮樂に御坐候。道は聖人の作りたるものには無ㇾ之候と申すが愚見に御座候。孟子の仁義禮知心に根さすと申事、正道に御座候。人心をすて申候而別に道は無二御坐一事、不ㇾ及二申上一候以上。

これで徂徠の造作說に反對して自然說を倡へたことが知られる。第二は道を說く者は禮を守らねばならぬ。而して禮の要は謙讓にあるのに、徂徠は規度短急、一世を豪視して顧る所なく、之が爲に反つて惡弊を增長したといふにあり。平洲の讀二徂徠先生著書一の一節に、

　不三喩ㇾ之以二德言一、爭抗粗勵、以爲二之辭一、以救二其弊一、弊亦隨ㇾ之、遂至ㇾ使三少年輩一侮慢以爲ㇾ賢、放論以爲ㇾ辨、妄非二先哲一、輕二視古人一、終身讀ㇾ書、而莫ㇾ知二其所ㇾ學爲二何物一矣、嗚呼雖ㇾ曰ㇾ非二其罪一、吾不ㇾ信也。

これが徂徠學に心服せざる第二點であり、日本敎育史資料第五册の米澤學校相談書の中にも、同じ意

味を述べて居る。かくて新注古注に就ては、

學風之事都講にもかき口說き申候。敦厚の風を專要に御心得可ㇾ被ㇾ成候。近世の書物を面白く覺候而は、甚だ惡く御坐候。四書・五經・新古の注解、細々翫味有ㇾ之度候。古注とさへいへば皆々善き樣に心得申候は淺々敷事に御坐候。新注は先は十に七八は宜く御坐候。古注は十に五六は宜く御坐候。但其所には用捨も有ㇾ之候。一概に新注を廢棄無ㇾ之樣にと存候。學者がいへば不學者も口眞似をして、善いも惡いも知らず、惡い〳〵と申事に相成候而、甚輕薄に相成候。此所御愼可ㇾ被ㇾ成候。

これは平洲の講經姑据二古註一といふのを誤解して、行き過ぎた感があつたので、之を戒しめたものであらうと思はれる。然らば何を以て新注・古注の優劣を批判し取捨する標準としたかといふと、それは經書の本文の大意と體驗とを以てし、總じて實踐躬行に益なき說は取らなかつた。嘗て湯島聖堂の祭酒林大學頭述齋が平洲を訪問して坐談中に、島津齊宣公の侍讀赤崎海門が訪ね來つて、御前講釋の心得の爲に一席の說經を平洲に乞うた。平洲乃ち、

論語やある。いづくなりと出し候へと、書を取て一章を講じ終る。祭酒感心の餘、只今被ㇾ講候は古訓にて御坐候哉、と御尋ありければ、さん候、太宰彌右衞門が手入候ものに候得共、本文は

孔子の言詞にて候と申されし。祭酒無ㇾ限あやまちなりしと、其後も仰せられし。

本文は孔子の言詞にて候の一語、意味何ぞ深長なる。朱王伊物の論爭に沒頭せる當時の學者に對して、實に頂門の鐵槌である。斯くて平洲は學脈に拘泥して德行を顧ざる弊害を指摘して、爲政家に警告した。

必竟宗論をつのり候僧は、悟道徹底の師には有之間敷候。學脈のみを申つのり、德行の沙汰に及ばざる儒者も、難ㇾ信人と被ㇾ存候。人君の學政を御世話やかれ候主意は、能く教へて人民を善に向はせ申事が、專要に御坐候。程朱學を尊び候人は、德高き程朱學師に學ばせ、仁齋・徂徠を好き候人は、おとなしき仁齋・徂徠學者に教へさせ、兎にも角にも人をよくとりかひ候而、善心になり候様に、可ㇾ被ㇾ成儀にて御坐候。何流にても、我執つよく人を得教化不ㇾ仕候はゞ、無益の學問と可ㇾ被㆓思召㆒候。誰とても昨日孔孟より、直に授り受候弟子にても無ㇾ之候得ば、古賢先輩とても、是非得失の無ㇾ之候而は不ㇾ叶儀と可ㇾ被㆓思召㆒候。

平洲は右の如く折衷學を基礎として、大所高所より教化の目的を達成せんとして居たから、人物を登用するにも門戸を問はなかつた。されば尾張明倫堂の教授には朱子學者も、仁齋學者も、徂徠學者も、君山學者も、皆採用した。江戸の藩邸にも闇齋學派の服部栗齋や異學者の塚田大峰まで推薦して

出入せしめた。從つて其の後に出た寛政の異學禁の如きも問題として居なかつたやうである。

## 四　平洲の政治思想

平洲は特に經濟儒と稱せられた程で、當時の政治に精通して居り、諸藩要路の士の訪問をうけたが、人拂ひをして密談し、來簡の多くは燒棄したのみならず、歿後には遺族が數百通の書狀を悉く發信者に返してしまつたから、其の詳細は知り難い。多年師事した上杉鷹山は平洲の墓碑銘を撰して、

先生之學、尤長二政事一、諸侯受レ業者、必問以レ政、然其所二爲謀一、終身拑レ口不レ言、往復之書不レ存二其稿一、故無レ知二其詳一。

といひ、三百諸侯の模範となつた鷹山の政治は、平洲の啓沃に竢つ所が多かつたので、鷹山自から闔境之氓、無レ不レ受二其賜一と明記した。さて其の鷹山の卒去後に、「座右にあつた手筐笥の中に大なる引出し二つあり、皆平洲が應酬の經國の事にてありし由」とある。平洲が政治學に於て最も尊重したのは、管子二十四卷七十六篇であり、其の中でも特に牧民の篇を推奬して管子牧民國字解一卷を著した。これは嚶鳴館遺草の第四冊となつて居る。その序文に、

現に存するもの七十六篇、みな經濟の道を微細に論じたれば、人君の讀み玉ふべき書也（中略）。

牧民等の篇は誠に其本意と見えて、神妙に說盡したれば、人君心を留て讀み玉はゞ、治國の政においてて功を得玉ふべきこと也。

といへり。さて本文に入りて、

凡有レ地牧レ民者、務在二四時一、守在二倉廩一。

凡人君萬民の主となり玉ふ身分の本意と云は、其領し玉ふ土地より生ずる所の、あらゆる財貨をとりまとめて、それを以て上天子につかへ、下領内の臣民を教へ導き養ひそだてゝ、人々今日をゆたかにくらし、活べき程の命を活て、無難に一生を終るやうに、世話をやき玉ふが、君となり玉ひし本意也（以下二十三行略）。

平洲は其の遠祖紀長谷雄が醍醐帝に仕へて居たのみならず、自身にも京都遊學時代に有栖川宮職仁親王様より歌道を授けられて居たから、善く我が國體の本義に通じて居た。從つて牧民篇を說くにも、右の如く上天子につかへ、下領内の臣民を教へ導きというたのである。此の牧民の本意を實現したのは、上杉鷹山を始め家老の竹腰當綱（君瑞）等である。平洲の送二米澤侯就一レ國序は君德論であるが、送二米澤大夫源君瑞一序は純然たる政治論である。その中に、

夫國建二大夫一而士屬レ焉、士有二分職一、而農工商賈隷レ焉、使三士盡二其能一、則衆庶隨レ化、先愼二其

所レ化者、政之急也、凡一國之治、官亦多方、修ニ之學政一、道ニ之孝弟一、制ニ之禮度一、使レ知ニ之極一、廣理ニ土田一、謹節ニ財用一、亦唯使ニ士盡ニ其能一而足矣、使ニ士盡ニ其能一者、獨大夫之力能レ之、故當今之世、獨大夫而後可レ謂ニ能爲レ事レ君矣。

その廣理ニ土田一、謹節ニ財用一との如き、全く管子の思想であり、當綱の遺稿中にも、管子尊重の跡の歴々たるものがある。其の徂徠の功利說に留意したのも、之が爲である。以て平洲の政治思想乃至米澤藩政の由來する所を知るべきである。

平洲が尾張侯に獻じた野芹の名篇は、儉約の政を詳論したもので、嚶鳴館遺草第一冊の全部を占めて居るが、それも管子に本づいた點が少くないやうである。近頃に至つて明公御代細井平洲諫呈之秘書と題する有力なる一篇が松濤居隨筆中より發見された。松濤居隨筆は金城温古錄の著者奥村德義の作で、今は原本の所在を明にせざるが、細野要齋の自筆本が愛知第一師範學校の鄉土文獻室に寶藏せらる。玆に前校長中村豐吉氏・現校長島田民治氏及び平洲の誕生地の教育家吉峯新八郎氏の厚意によりて、全文を左に發表する。

富國大目錄七ケ條

一、富國の御政は先

權現樣　源敬樣に、大孝行を可ㇾ被ㇾ爲㆓思召立㆒候事。

一、右孝行を被ㇾ爲㆓思召立㆒候はゞ、先
公義に大忠節を可ㇾ被ㇾ爲㆓思召立㆒候。

一、大忠節を被ㇾ爲㆓思召立㆒候はゞ、先　國君の大耻小耻を明白に可ㇾ被ㇾ爲ㇾ辨事。

一、國君の大耻小耻を御辨被ㇾ遊候はゞ、先五ヶ年、大堪忍を可ㇾ被ㇾ遊事。

一、五ヶ年大堪忍を御決定被ㇾ遊候はゞ、先　公義に明白に大願心を御達可ㇾ被ㇾ遊候事。

一、公儀へ大願心を御達被ㇾ遊候はゞ、御家風表向大省減を可ㇾ被ㇾ爲ㇾ定事。

一、御家風表向を大省減を被ㇾ定候はゞ、先御家門樣方より初、大小名一統に、五ヶ年御往來御贈答、必止と大斷を可ㇾ被ㇾ爲ㇾ立事。

右七ヶ條御決定被ㇾ遊候はゞ、五ヶ年の內に御國用滿足、御長久御安堵可ㇾ被ㇾ遊候。左樣も無㆓御座㆒而、因順の御評議にて、御內輪向之御儉約此上に被㆓仰出㆒候はゞ、御無益は勿論、五ヶ年の後は人心離背仕候而、側前之大害生し可ㇾ申候。大目錄奉儀、御許容候はゞ、小目錄は明白相調、差上可ㇾ申候。此節の體勢累卵よりも危く御座候。災害を招き申事、急速に可ㇾ有㆓御座㆒候。かく迄直言を奉獻候上には、最早乍ㇾ憚とは相認不ㇾ申候。已上。

（以下朱書）是秘書なり、不レ許ニ他見一。此書　明公御代にすら不レ行ハレ、況んや後世をや。徳、案に御三家は日本諸家模範の御家なれば、あまり格外の事は被レ遊難き所あるべし。俸祿半減などは別して命ぜられ難きまや。平洲の謀如何あらん。この書これらにさしつかへしにや不レ行ハレと、或人かたりし。

平洲の建言七ケ條に對して、朱書の批評は當つて居ない。明公卽ち德川宗睦の時代で行はれぬことが、後世に行はれる筈がないといふのであるが、明公が寛政十一年に薨去して、順公卽ち齊朝の時代となり「文化二年十二月儉約令を出して、翌三年より七年に至る五年の間、嚴に質素儉約を守りて、武備の嗜に事缺かざらしむる所ありたり」。此の事實を何と見るのか。天若し明公に假すに數年の壽を以てせば、平洲の建言は必ず明公の英斷によりて實行されて居たに相違ない。然るに不幸にして明公薨ず。是れ平洲が其の諭を撰し終りて、我事畢矣と慟哭した所以である。なほ奧村德義の按文に俸祿半減云々の如きは全然的外れの說で、平洲の建言と無關係である。要するに管子を推奬した平洲の政治思想は倫理思想と同じで、高遠の理想には乏しいやうではあるが、其の坐して言ふ所は起つて行ひ得る、極めて實際的のものである。これ當時の爲政家より大に尊重せられた所以である。

## 五　平洲の德行

平洲の行狀を傳へた小語・山窓問話・平洲訓話・乃至諸種の隨筆尺牘などを覽ると、數々の德行に對して崇敬の念を禁じ得ないものがある。其の兩親に至孝であつた實例、兄に對して友愛の情の溢れて居た實話、恩師中西淡淵の遺族を助け、學友小河仲栗・南宮大湫等の遺兒を引取りて養育し、立派な學者としたことは、夙に知られて居ることとである。序なれば彼の五姓・三家同居の記事に就いて一言して置きたい。平洲の小河仲栗先生傳には、仲栗が先づ其の次男の爵と共に平洲と同居したことを記した後に、左の如く敍してある。

初仲栗之去レ郷、桑氏娠而生二男鼎一、至レ此五歲、與二其姉一隨レ母而來、仲栗亦使三德民取二石村氏一、時子靜往喪母、及妻、與子去レ郷來二于尾一、而主二德民之家一、遂扶二先考一東、於レ是五姓同居、仲栗子靜事二先考一猶レ子、易レ衣而出、幷レ日而食、養レ老撫レ幼、相得而樂、人賀二先考一曰、三賢子、二孝婦、三順孫、翁何享福至レ此也、久レ之、子靜寢レ疾、相與恨レ不レ能二備養一、子靜以爲二大足一矣、至レ死、毫無二悔恨之色一、及二子靜之歿一、喪レ之猶二兄弟一也。

平洲の此の文に依れば九人の同居と見るべきである。若し、飛鳥子靜が妻と一子とを同伴して居る

とすれば、六姓三家となり、三孝婦・四順孫とならねばならぬが、五姓・二孝婦・三順孫とある以上は、子靜一人であり、妻子はなかつたに相違ない。卽ち喪母及妻與子との讀方に注意して句讀を改むべきである。平洲の高弟樺島石梁の撰文にかゝる細井先生行狀にも、

昔在二崎陽一結爲二兄弟一者、小河仲栗・飛鳥子靜、後先皆來二東都一、與二先生一同レ居、子靜無二妻子一、仲栗則有、並二先生夫妻一、爲二五姓三家一、同爨多年、一無二間言一、子靜死、喪祭如二家人一。

石梁の如きは仲栗傳を讀んで居たのみならず、平洲の直話をきいて、耳に熟して居たに相違ないのに子靜無二妻子一と斷言して居り、何等疑ふの餘地がない。平洲の遺稿中には子靜が妻子と共に平洲等と同居した記事は何處にも見當らぬ。白金に現存する子靜の墓碑にも何等記してない。然るに東條琴臺の著先哲叢談後編卷八に至りて之あり。

平洲在二尾府一時、其友小河仲栗携二妻兒一、來主二於平洲家一、平洲移二於江戸一、又從レ焉、無レ幾飛鳥子靜又携二妻兒一、寓二于其家一、於レ是乎五姓同レ居、三家同レ爨、四二年於斯一、于時其父正長、老養二於平洲家一、仲栗・子靜事レ之猶レ子、易レ衣而出、並レ日而食、養レ老撫レ幼、二人與二平洲一交若二兄弟一、其婦三人亦若二嫂妹一、相得而樂、一家和煦、毫無二悔恨之色一、隣里之人、始不レ知二異姓同居一、賀二正長一曰、三賢子、三孝婦、三順孫、翁之享福、何至二於此一乎、皆羨レ之。

知らず琴臺は子靜の妻子を何處より拉し來つて、平洲と同居せしめたのか。何故に五姓を六姓と改めなかつたのか。又順孫の數を增さなかつたのか。理解に苦まざるを得ない。近時不用意に琴臺の文を引用せる著作が多いから、一言し置く次第である。

平洲は友誼に厚かつたのみでなく、弟子に對するに親心を以てした。塾生の客死した者には自ら喪主となりて葬儀を行ひ、墓碑を建て、春秋の祭をしてやつた。かくて芝の三緣山の瑞華院や淺草の天岳院には點々として塾生の墓を見るに至つた。門人にして寬政三奇士の一人たる高山彥九郎に對しては、借金の世話までしてやつた。義人と知つたら職を賭しても助けた。道を守りてこそ奉公の甲斐もあれと確信して居たからである。平洲は實に道の守護者であり、權化であつた。されば劍士某は平洲の講釋をきいて殺意をひるがへした。養子を犬め〳〵と呼んで酷薄を極めて居た某は、平洲の講釋に感じて懺悔し、若旦那と稱するに至つた。大不孝者の袋屋某も孝子となりて賞せられた。川普請で平洲の土砂を運ぶを見ては、日頃のなまけ者も起つて働くに至つた。要するに平洲の數限りなき德行と感化力の偉大さとは、之を藤樹・仁齋に比して毫も遜色がなかつた。

## 六　諸家の平洲觀

賴春水の師友志に、平洲と其の門人樺島石梁字は世儀等とを比較した一節がある。

世儀簡率、不㆘與㆓徳民莊重養㆑望同㆖、栗山先生嘗謂㆑余曰、曩會㆓信古堂㆒、皆一時名士、徳民未㆓必脩㆓邊幅㆒、而音吐威儀、視㆓諸吾輩㆒、鷄群鶴也、如㆓箕浦迂叔之朴野㆒、是書生眞面目、徳民終未㆑免㆑俗、寒泉先生亦曰、徳民廟堂之器非㆓吾輩㆒也、其意與㆓栗山㆒同。

寛政の前の三博士の如きは平洲とは反りの合はぬ所があつたから、未㆑免㆑俗など言つたらしいが、林述齋・古賀精里の如きは心より平洲に敬服して居た。熊本の木下韡村は曰く、

道信㆓于諸侯之間㆒、膏澤下㆓于民㆒、若㆓平洲紀徳民㆒、近世儒者之所㆓希覯㆒也、平洲歿、米澤元徳公爲㆑之心喪三年、公之民老㆓其老㆒、幼㆓其幼㆒、曰、我君如㆑此、我君之師之教如㆑此、公之民年饑而餒、年寒而煖、曰、是我君之恵、是我君之師之澤、蓋至㆑今而不㆑衰矣、嗚呼是何道而然耶。

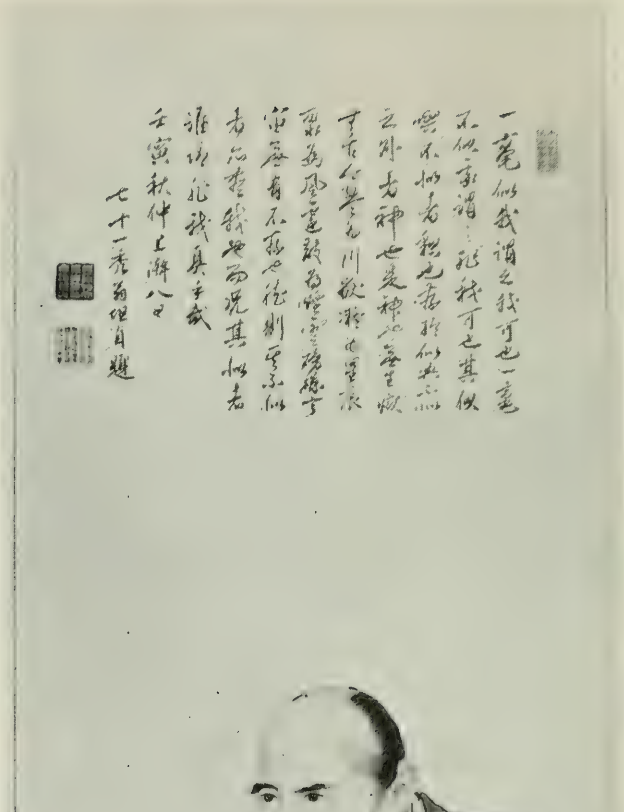
これは米澤藩のみでなく、尾張藩に於ても然りで、天明寛政以來、尾濃南信の地方に孝悌力田の美風の勃興したのは、平洲の賜である。

紀徳民尾州に仕へ、民に講書して教えられし。聽人感に堪へず、佛菩薩の如く思ひて、賽錢を抛しものあるに至りしとぞ。

これ水戸の小宮山楓軒の偶記である。

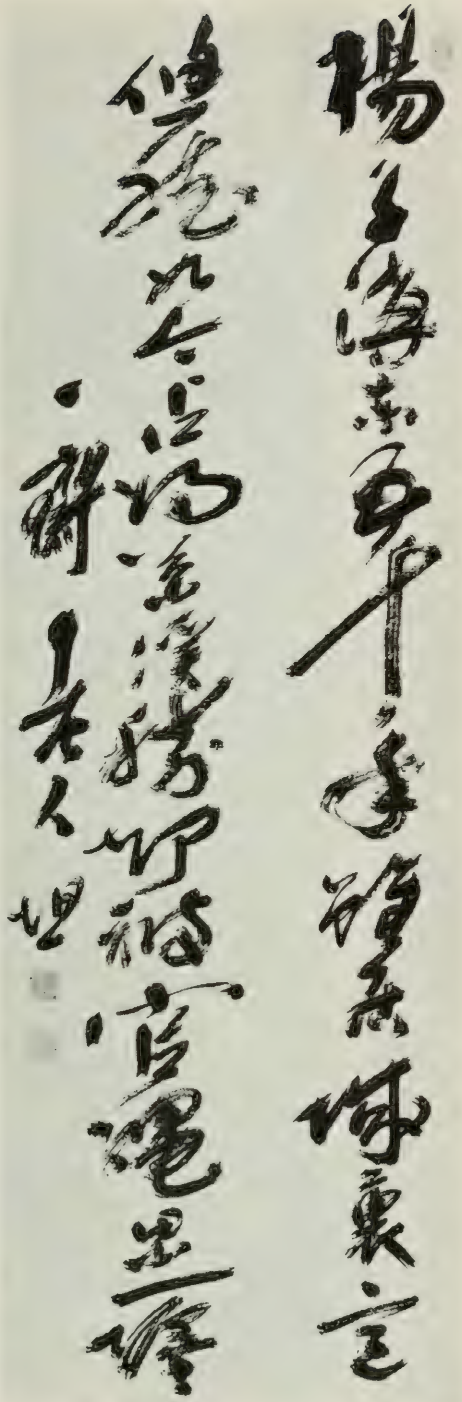
紀平洲は大家と思はる。尾州の人に遇て其事を問ひしに、幾と聖人の様に申したり云々。其他の諸侯にも重く用ゐられたり云々。

これ九州の廣瀬淡窓の所說である。平洲は關東でも關西でも、此の如き名聲を博して居た。以て我が近世儒學史上に於ける、平洲の位置を知るに足る。

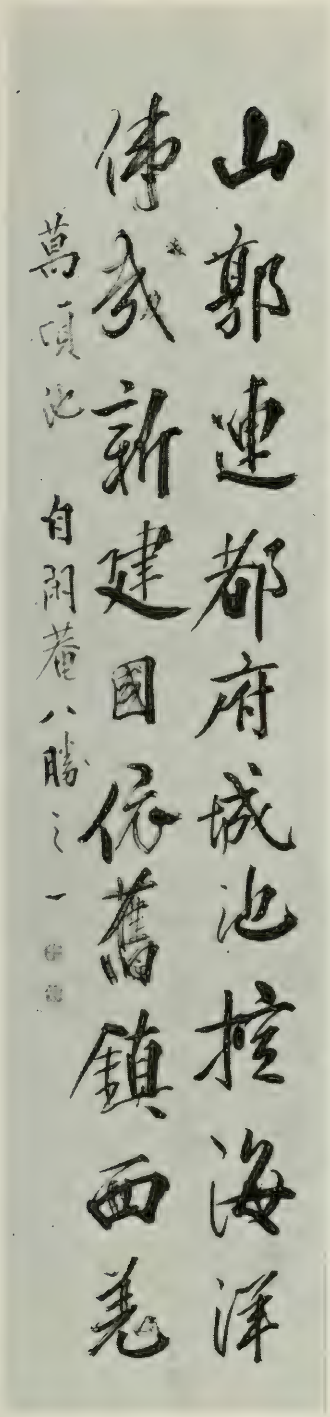



佐藤一齋肖像（河田烈氏藏）

佐藤一齋筆蹟（高野辰之氏藏）



龜井南冥筆蹟（高野辰之氏藏）



# 佐藤一齋の貌神

林竹次郎

公嘗來㆓余樓上㆒、携㆓一行厨㆒見㆑示、曰、此物吾子記㆑之否、余不㆑記、公乃曰、此物係㆘伯氏騎㆓行玉川㆒時所㆑佩者㆖、餘訖、活㆔畜香魚於㆓此厨㆒、幷見㆑貺、時吾子七八歳、來翫㆓弄香魚㆒、余叱㆑之、吾子時㆓余之亡㆒、竊來拈㆓香魚㆒、盡殺㆑之、余怒拳㆓打吾子㆒、吾子泣號、幼時黠甚如㆑此、今則道學先生也、一咲、余聽㆓此言㆒愕然、殆是邯鄲夢中說話也。（言志晩錄別存。快烈公遺事）

「幼時黠甚、今則道學先生也。」これで一齋の八十八年を總括し盡したかと思はれる。そして林家述齋と一齋との交渉をも彷彿することが出來る樣に思ふ。

當㆓天明之季㆒、時風漸渝、法網亦疏、而下谷秖爲㆓無賴惡少之淵藪㆒、君初不㆑能㆑無㆓少染㆒、以㆓其家世爲㆓瘍科㆒、兼㆘整骨技㆖、因旁學㆓拳法㆒、其師曰㆓松宮柳冏翁㆒、余亦適往學、與㆑君始相㆓知於濱場中㆒、年齒相若、昵如㆓兄弟㆒、君有㆓膂力㆒、技亦拔群、雖㆓髡㆑顱依㆑樣、而髮五分、以示㆓勇猛狀㆒、

時或醉後夜行、途次往往顚二踣人一以爲レ快、余亦頗負レ氣相頡頏。（全集卷廿。侍醫法印杉本樗園君墓碑銘）

此の豪放無頼なる二青年が飜然改過し、發憤努力、遂に共に大名を天下に馳せたのである。

先生諱坦、字大道、佐藤氏、號二一齋一、又號二愛日樓一、通稱捨藏、考諱信由、岩村老臣、妣蒔田氏、先生辭レ仕以レ儒爲レ業、與二述齋林司成一、切劘孜勵、終爲二林門都講一、諸侯伯已下執レ贄受レ業者、殆三千人、海內望レ之如二山斗一、天保辛丑十一月、幕府擢爲二昌平黌敎官一、……己未九月廿四日、病歿二於昌平黌官舍一、齡八十有八、葬二麻布深廣寺一。……（一齋墓壙誌。愛日樓全集附錄）

述齋は岩村藩の公子、一齋の主になる人であつた。然るに林家を嗣ぐに及び、師弟の關係となつた。一齋と林家とは離して考へられぬのである。

公之在二巖邑藩一也、齡十七加冠、侯特命二先父一爲二帽親一、使三余進二盥盤及柳板一、余時十二、儀訖、公謂レ余曰、帽親之子猶二兄弟一、終身不二相離違一也、余拜二命之辱一、不レ圖後入二林氏一、遂爲二師弟一、致レ有二今日一、殆亦所謂夙因者歟。（言志晩錄別存）

述齋は善く一齋を撫護し、死に臨んでは後事を托したのである。明和五年六月二十三日に生れ、天保十二年七月十四日、七十四歲で逝去した。

公當二寛政初載一、特命出嗣二林氏一、固辭不レ得レ命、乃幡然就レ仕、至レ此首建言、新創二國學一、令二

旗下諸士及其子弟就レ學、因請納ニ昌平阪私學一、幷ニ所レ藏聖像四配、及祭器諸品、藏書數十百種一、以充ニ官用一、官嘉納、於レ是命改ニ造大成殿及學堂諸寮一、令ニ公主管一、公乃創ニ制學中規則一、試業科擧、森有ニ法度一、於レ今爲レ盛、皆公之功也。（別存）

一齋、教育に從事すること約七十年。儒官たること十九年。實に長しといふべきである。學問、道德、人格の模範として、又時務經世の指導者として、天下の仰いで泰山北斗としたのも、洵に尤ものことである。そして、天下の志士仁人、その感化影響を蒙らないものは無かつた。官學に屬するものは無論、私學に横議する者も、猶且その誘激を得ざるはなかつた。その著書の感化に至りては、今日にても尚、躍々活動してをる。

明治維新の成功については、人多く國學者を擧げるが、實は、林家の教學、聖堂の教育がその根柢を成してをることを忘れてをる。寛政十二年に聖堂講義所を開放して、庶民の志あるものをして聽講せしめたが、一齋の講日には聽者滿員、庭上に立ちて聞く者も亦多かつたといふ。この時代から、約七十年、一齋歿後十年にして明治元年となる。講義所の變遷もあり、學問の仕方の相違もあつたであらうが、兎も角昌平黌は漢學の中心となり、道德、學問、教育、政治の中心となつてゐたのである。又、私學、心學、寺小屋、及僧侶の中にも、聖堂に響きを合せて、指導の實を發揮したものが多かつ

たのである。此等が、明治維新大成の根本的基礎を作つたものであることを、明確に記憶に存しておかねばならぬ。又、庶民によびかけた最初の人としての述齋、述齋と同體になつて働いてゐた一齋、此の二人の名は忘れてはならぬのである。

*

余が十五六歳の時、先人の遺篋中より見出して耽讀したものは、言志後錄であつた。

此學吾人一生負擔、當二斃而後一已、道固無レ窮、堯舜之上善無レ盡、孔子自二志學一至二七十一、毎二十年一自二覺其有一レ所レ進、孜孜自彊、不レ知二老之將一レ至、・・・凡學二孔子一者、宜下以二孔子之志一爲上レ志。

（言志後錄第一條）

とあるに深く感奮した。又『初學課業次第』はわかつた樣な氣がしたが、『欄外書』の幾冊かは丸で分らなかつた。又、小机一脚を發見して之を使用したことがある。裏面に「愛日」と大字に刻してあり、母は一齋先生のだといつた。今思へば、「愛日」の語をいつたのであらう。机は、今所在を失ふ。その頃又、一齋點の四書を先師遺品に得て之を喜び、その訓點の不思議なるを喜び、その刻板文字の嚴格なるを愛し、これを手本として習字した。次に私の感じたのは、物を粗末にせぬのと、親を大切にする心持とであつた。

人、自二嬰孩一至二老耄一、恆受二德於陰闇之中一、而不二自知一、是何物也、被褥枕席是也、有二一先輩一、甚敬二被褥一、必手展二收之一、不レ委二之臧獲一、其用レ心、亦云厚矣。（言志後錄）

此の心がけを見て、坊さんの樣だと思つた。卽知恩報恩の志である。

聖賢故舊不レ遺、是美德也、卽人情也、余家小園、無二他雜卉一、唯有二石榴紫薇木犀三樹一耳、然此樹、植在二四十年外一、朝昏相對、與二主人一偕老矣、夏秋間、花頗可レ觀、足二以娛二心目一、是老友也、余性於二草木一、嗜好較澹、然此三樹、眷愛特厚、凡交之舊者、畢竟不レ能レ忘、是人情也、故舊不レ遺、情與レ此一般。（後錄）

余左右聘用几硯諸具、率皆爲二五十年前所一レ得、物舊則不レ忍二屛棄一、因念晏子一狐裘三十年、亦恐不三必在二儉嗇一。（後錄）

故舊不遺は夫子自道である。「古りたる」をよしとすること、何も「ただ人は」には限らぬのである。「物」にも生命を認めた一齋は、決して物を粗末にしなかつたであらう。余は此等について深く感じて、食器、枕席、草履の類までも之を大切に扱ふことが出來た。「愼二寢食一孝也」（後錄）には、特に深く感じた。

邦俗喪祭、都用二浮屠一、冠婚、依二遵勢笠兩家一、在二吾輩一則自當レ用二儒禮一、而漢土古禮、今不レ可

レ行、須下斟二酌時宜一別創中一家儀注上、喪祭、余嘗著二哀敬編一、冠禮亦有二小著一、務要三簡切明白、使二人易一レ行耳。‥‥（後錄）

邦俗途遇レ柩時、貴人則輿夫擡レ輿走行、徒行者則左右顧而唾、太無レ謂也、宜三旁避佇立少俯一、是哀レ喪而變レ貌也、又途遇二縲絏者一、則宜三亦旁辟勿二正視一、是惡レ罪而恤レ人也、瞽者則宜三我辟レ路勿レ令二傔僕喝一、是仁者之用レ心也、然在二貴人一、具二儀衞騶從一、則行路自有二常法一、不三必得二如レ是、但宜レ令三從者體二知此意一、至レ如下遇二柩若罪人一、擡レ輿疾走上、則令レ緩レ之可也。（後錄）

これは哀敬の實現である。余は今日でも途に喪にあへば必ず禮意を表する。必しも紅毛人の眞似ではない。以上は、一齋の影響が、余の胸中に於いて尚生動することあるを記したのである。一齋の性格の一部を見ることが出來る。

*

一齋は立志を緊要とし、「憤一字、是進學機關、舜何人也、予何人也、方是憤。」（言志錄）といひ、「學莫レ要二於立志一。」（言志錄）「立志之功以レ知レ恥爲レ要。」（言志錄）といひ、「有志之士、如二利刄一、百邪辟易。」（後錄）といふ。青年の學に志すものの感激せざるを得ぬ所であつた。これが、氣節を振ひ、心術を尙び、道に進む力ともなつたのである。「有レ志者、要當下以二古今第一等人物一自期上焉。」（晩錄）とい

つたのは、人に誨へてゐるのではない、一齋自身の立志であり、教訓であつたのである。

余齡十九、一旦有レ所二悔悟一、因語レ君曰、拳法佗事、且匹夫之技耳、爲二男兒一者、盍レ爲二天下第一等事一、而乃用二此小勇一爲、奚若、君曰然、吾亦思レ之、遂相與盟約、折レ節讀レ書、云云。

（杉本樗園君墓碑銘。全集第二十）

立志には反省が大切である。反省は、「當レ恃二在レ己者一」で、自己內心の心靈を磨き出すことである。「心之邪正、氣之强弱、筆畫不レ能レ掩レ之、……一日內、自書二數字一、以反觀、亦省心之一助。」（晩錄）であつた。

端坐內省、做二心工夫一、宜三先自認二其主宰一也、省者我歟、所レ省者我歟、心固我、軀亦我、爲二此言一者果誰歟、是之謂二自省一、自省之極、乃見三靈光之爲二眞我一。（耋錄）

反省は、社會教育、學校教育に從事するものの、重要な心掛けである。內心覺性の自覺である。不息向上の躬行實踐である。教方の發見である。これによつて始めて、その事業が完成に近づくのである。思想を指導するものは、常に自ら指導し自ら改善し自ら向上する實例を示さねばならぬ。一齋は正に此の如く教育者として尊い存在であつた。その社會思想に影響することが甚大であつたことは、高きに立ち、順風に呼ぶの概があつたからばかりでなく、その實踐躬行の力にもよつたものである。

「能教育子弟、非一家之私事、是事君之公事也、非事君之公事、是事天之職分也。」（言志錄）教育は天職である。これが教育の本義である。俸祿恩給などを考量計算すべきではなかつた。「誘掖而導之、教之常也、警戒而喩之、教之時也、躬行以率之、教之本也、不言而化之、教之神也、抑而揚之、激而進之、教之權而變也、教亦多術矣。」（言志後錄）此等の術を自由自在に使ひこなすものが幾人をらうか。「師嚴道尊、爲師者宜自體察、如何是師嚴、如何是道尊。」（後錄）體察なき教授自省なき教授は一場の冗話である。聖堂の講義の主とする對衆は、學に志ある諸藩の士であつたが、庶民にも聽講を許されたのである。そこで女子教育に就いても考察せざるを得なかつたのである。「婦德、一箇貞字、婦道、一箇順字。」「婦女以服飾美麗爲習、殆不可。」（晩錄）これはその根本に觸れてをるものである。

人之生、父氣猶種子、母胎猶田地、余年來閱人、夫性厚重而婦順良、或慧敏、則生子多有材幹、夫雖有才幹、而婦暗弱、或姦黠、則生子多不才、或不良、十中八九如是。（晩錄）

方今諸藩、置講堂及演武場、以課子弟、但至閨閫、則未聞有教法、吾意欲於閨內區爲女學所、使衆女官學女事、宜延女師謹飭者使之講解女誡女訓國雅諸書、幷女禮筆札鬪香茶儀、各有師以課之、旁復許箏曲絃歌不淫靡者、則閫內必肅然。（晩錄）

女子教育を重んじ、その方法までも考慮したこと、此の外にも見えてをる。しかし、「女希楚碑陰記」には、「余嘗病ニ女子之識レ字、易レ生ニ矜慢一、故未レ課ニ讀書一。」（愛日樓文）とあるを見れば、多少の手心に就いても考察を怠らなかつたと思はれる。

*

教育は天職である、體察と自己修養とを勉め、躬を以て範を示すべきである。否、自他共に修養しあふのである。從つて教育者の思想學問の根柢には、主義あり、主張あり、哲學と宗教（信念）とがなければならぬ。一齋は、朱子學派中の林家教團の大立者であつた。卽ち林家教團の發展と養護とに全力を注いだのである。世に在ること久しく、世故に長け、體驗に富み、政治經濟、海防軍務、外交交渉、悉く相談を受け、テキパキと處理し去つて、耋を過ぎても、頽唐の氣はなかつた。門には、法親王、諸藩主、權臣、諸賢良が集つた。一齋は異學禁以前已に王學に親しんでをり、述齋もさうであつた。一齋は林家の門に居り、述齋は林家を繼いでをる以上、朱學を表にたてる責任がある。そこで、朱學といはず宋學といひ、漢唐以前に溯るの復古であるといつた。そして、朱子と陸子とを併せ取り、從つて王學をも捨てず、二水混合の行き方をした。今から考へれば、あの勢力で、所謂「間氣非常之資」を以てして一新學說の樹立も出來、天下を風靡したであらう、從つて世に大功あること今の

比ではなからうとも考へるが、社會情勢もあり、環境もあり、特に迹齋歿後は一齋の責任一層重大となり、また先輩を大切にする一齋の心持からは、其の事は、とても出來ないことであつたのである。聊か殘念を感ずる。一齋は闇齋を憎み、心學道話を惡んだが、それは、郷愿德賊の考からである。迹齋の一齋への遺囑の中に、「吾子率二先吾子弟一、勿レ使三之蹈二襲雜學一。」（晩錄別存）とあつた。

國初時、風氣淳厖、人心重厚、苟以レ儒自命者、皆尊二信程朱一、志在二躬行一、至二享保間一、漢唐之學行二於世一、才子輩出、各以二詞藝一相競、近時則又一變、外托二洛閩之名一、內媒二進取之私一者有レ之、創二爲新奇之說一、强辯取レ異者有レ之、不三特宋學之乏二其人一、而主二漢唐一者、亦難レ得矣、嗚呼不下重爲二世道一慨上焉乎。（佐久間熊水墓銘、愛日樓文）

朱陸同宗二伊洛一、而見解稍異、二子竝稱二賢儒一、非レ如三蜀朔之與レ洛爲二各黨一、朱子嘗曰、南渡以來、理二會著實工夫一者、惟某與二子靜一二人、陸子亦謂、建安無二朱元晦一、青田無二陸子靜一、蓋其互相許如レ此、當時門人亦有二兩家相通者一、不レ爲下各持二師說一相爭上、至二明儒一、如二白沙篁墩餘姚增城一、竝兼二取兩家一、我邦惺窩藤公、蓋亦如レ此。（晩錄）

快烈林公、尸二祝惺窩藤公一曰、我邦宋學之首唱、家祖文敏之師也、不レ可レ不二尊奉一焉、……公曰、宋儒於レ經、各有二發明一、不二相讓一也、但經註立二之於學館一、以爲二令甲一、則不レ得レ不レ一、以二

科試之故一也、彼士爲二學士講官一者、皆遵二奉令甲一、而尙存二私撰一、不二必禁一、今吾承二乏司成一、培二養人材一、當下廣以二宋學一統二率之一、不レ問二持論精微之小異一、又不上阻二人各有二私撰一。……（別存）濂洛復古之學、實爲二孔孟之宗一、承レ之者、紫陽金谿及張呂、雖レ有二異同一、而其實皆純全道學、決非二俗儒之流一、於レ元則靜修魯齋、明則崇仁河東餘姚增城、是其選也、亦雖二各有一レ異、皆一代之賢儒、其遡二洄濂洛一則一也、上下千載、落落唯有二此數君子一而已、吾取而尙二友之一、於レ心樂焉。（後錄）

これで、朱王を混和したことは明かであり、陽朱陰王と毀るのは、實は褊狹に失した考なのである。「古人得力之處、後人不レ能二透會一、執レ一以爲二宗旨一、余則欲二透會爲レ一、不レ立二名目一。」（晩錄）「標二榜門戶一、則私欲。」「勿レ裝二門面一、勿レ陳二家信一、勿レ揭二招牌一。」（後錄）といひ、仁正侯を送る序には、「唯予意見之或少異、乃時有下雜以二靑田餘姚之說一者上、吾不二自掩一也、議者相詆毀曰、彼異學也、彼陽儒陰釋也、彼其以求二異於人一也。」（全集卷五）とあるのを見れば、大に明確である。しかし、「四錄」の方では、相當に穩便にぼかしてある。

而して、朱も陸も王も、乃至周程張子も、當時の社會情勢から、釋教殊に天台の中道實相、禪の空思想の影響を受けてをつたのであるから、之を奉ずる人たちの中にも、此等の思想は混在瀰漫してをつたのである。「大人之心。以二天地萬物一爲二一體一。」（言志錄）の如きは一例である。

程子言二萬物一體一、試思、天地間飛潛動植、有レ知無レ知、皆自二陰陽陶冶中一出來、我其一也、讀レ易窮レ理、深造而自二得之一、眞知二萬物之爲一一體一、程子前絶無二此發明一。（晩錄）

優波毱沙士の「天地同根萬物一體」の思想に影響されてをるものである。佛では之を「萬法一如」といふ（法は物なり）。これ卽ち汎神論的哲學である。

仰觀レ山、厚重不レ遷、俯見レ水、汪洋無レ極、仰觀レ山、春秋變化、俯見レ水、晝夜流注、仰觀レ山、吐レ雲呑レ煙、俯見レ水、揚レ波起レ瀾、仰觀レ山、巍隆二其頂一、俯見レ水、遠疏二其源一、山水無レ心、以レ人爲レ心、一俯一仰、莫レ非レ教也。（後錄）

草木國土悉皆成佛の思想と通ずるものである。汎神觀は元來、東洋の特色であり、これを解するによつて、東洋の學問文化は理解し得るのである。汎神なるが故に自己も亦一個の神的存在である。「本然眞己」の說が生ずるのである。「有二本然之眞己一、有二軀殼之假己一、須レ要二自認得一。」（言志錄）「去二假己一而成二眞己一。逐二客我一而存二主我一、是謂レ不レ獲二其身一。」（後錄）「不獲其身」（易艮卦）とは忘我なり、亡我なり、卽無我なり、小我を亡して大我に會するのである。我卽大我と悟れば、自己の恃むべく尊ぶべきを知り、他に見せびらかすにあらずして、自分自身を磨き上げることであることを知り、それと同時に宇宙と同存在、宇宙の一分であるといふことを知るのである。而して心の靈光の說、以て生

ずるのである。

此心、靈昭不昧、衆理具、萬事出、果何從而得レ之、吾生之前、此心放二在何處一、吾沒之後。此心歸二宿何處一、果有二生沒一歟、無歟、着想到レ此、凜凜自惕、吾心卽天也。（言志錄）

「自彊不息は天の道、君子のする所。」「自彊不息の時、心地光光明明。」「心の靈光、太陽と明を並ぶ。能く其の靈光を達すれば、則ち習氣消滅して、之が嬰累を爲す能はず。」心をして常に明に光あらしむべきこと論なし。其の心とは如何なる物であるか。

人當四自認三我軀有二主宰一、主宰爲二何物一、物在二何處一、主二於中一而守二於一一、能流行、能變化、以二宇宙一爲レ體、以二鬼神一爲レ迹、靈靈明明、至微而顯、呼二做道心一。（後錄）

所謂道心を指して單に心ともいひ、そこから光が輝き出すのである。道心が卽ち眞我である。眞我は天地と同死生、永久不滅である。

夢中之我、我也、醒後之我、我也、知下其爲二夢我一爲中醒我上者、心之靈也、靈卽眞我也、眞我自知。無レ間二於醒睡一、常靈常覺、亙二乎萬古一、而不レ死者矣。（晩錄）

已に此の心を悟つたなら、更に自彊不息、努力修養を加へて、益靈ならしめなければならぬ。「學者當三先自認二己有一レ心、而後存養得レ力、又當三自認二己無一レ心、而後存養見レ效。」（晩錄）此の存養の工夫

は、身に反して誠なる一條である。

天下之物、莫レ不レ有レ理、此理、卽人心之靈、學者當下先窮中在レ我之萬物上、孟子曰、萬物皆備ニ於我一矣、反レ身而誠、樂莫レ大レ焉、卽是。（晩錄）

學、一也、而等有レ三、初學レ文、次學レ行、終學レ心、然初之欲レ學レ文、既在ニ吾心一、則終學レ心、乃是學之熟也、有レ三而無レ三。（素錄）

內觀自省、身內の諸聖を見得するのである。その次第は、初中後にして初中後にあらず、所謂華果同時、因果俱成である。漸頓俱に修するのである。

＊

內觀熟し來れば、復び天地一體の工夫を凝す。「蒼々たるものは天、隤然たるものは地。吾が軀、皮毛骨骸は地、吾が心の、靈明知覺は天」（晩錄）である。

擧レ目萬物、皆有ニ來處一、軀殼出ニ於父母一、亦來處也、至ニ於心一、則來處何在、余曰、軀殼是地氣之精英、由ニ父母一而聚レ之、心則天也、軀殼成而天寓焉、天寓而知覺生、天離而知覺泯、心之來處、乃太虛是已。（言志錄）

天をば、蒼天であり、太虛であり、理であり、造物主であるとすることは、通說以外には出てゐな

い。又天を知るといふのは、運、數、宿命を信ずることであるのも、諸家と同樣である。この宿命說が「心の靈光」の汎神的信念とどう關係するか、甚だ明でない。しかし、心の靈光が天より身軀に入るとして、自明のことと考へたらしい。

凡天　間事、古往今來、陰陽晝夜、日月代明、四時錯行、其數皆前定、至二於人富貴貧賤、死生壽殀、利害榮辱、聚散離合一、莫レ非二一定之數一、殊未二之前知一耳、譬猶二傀儡之戲一、機關已具。而觀者不レ知也。・・・・（言志錄）

すべて數の前定によつて論ずる。それについては種々の論證もあるが、迷信的であり煩瑣に渉るから今略する。心の靈光論と天定說とどう結合一致するのか、私には不明であるが、一齋は無論兩方とも確く信じて、それが日常の言行に現れて來てゐたのである。一身を敎育事業に犧牲にし、又生死に安んじてゐたことなど、尊敬せずにはをられぬことである。「盡二性分之本然一、務二職分之當然一、如レ此而已矣。」（言志錄）「天何故生二出我身一、使二我果供二何用一、我既天物、必有二天役一、・・・・則知二我身之不レ可二苟生一。」（言志錄）と信じ實行したのである。天定を信じ、一切の永久性を認め、安心立命してゐる。

前レ乎レ我者、千古萬古、後レ乎レ我者、千世萬世、假令我保レ壽百年、亦一呼吸間耳、今幸生爲レ人、庶幾成レ爲レ人而終、斯已矣、本願在レ此。（晩錄）

生死事大無常迅速、一生空過して悔を萬世に遺すなかれである。此の信念あつたればこそ、七十年の敎育事業が出來たのである。一齋は本願に生死した。「愍㆓衆生㆒故、願生㆓此間㆒。」である。一切の佛は皆本願を以て人界に生れ來る。「聖人安㆑死、賢人分㆑死、常人畏㆑死。」（言志錄）一齋は如何。

　生物皆畏㆑死、人其靈也、當㆘從㆓畏㆑死之中㆒揀㆗出不㆑畏㆑死之理㆖。吾思、我身天物也、死生之權在㆑天、當㆓順受㆒㆑之、我之生也、自然而生、生時未㆓嘗知㆒㆑喜矣、則我之死也、應㆔亦自然而死、死時未㆓嘗知㆒㆑悲也、天生㆑之而天死㆑之、一聽㆓乎天㆒而已、吾何畏焉、吾性卽天也、軀殼則藏㆑天之室也、精氣之爲㆑物也、天寓㆓於此室㆒、遊魂之爲㆑變也、天離㆓於此室㆒、死之後卽生之前、生之前卽死之後、而吾性之所㆓以爲㆒㆑性者、恆在㆓於死生之外㆒、吾何畏焉、夫晝夜一理、幽明一理、原㆑始反㆑終、知㆓死生之說㆒、何其易簡而明白也、吾人當㆘以㆓此理㆒自省㆖焉。（言志錄）

此の外、死生觀に關する說も澤山あるが、結局するところ、天定說を根柢としてゐると見られるものである。俗語の因緣といふ語を天定の語に換へたかと思はれるものである。陽明、又は所謂武士道、又は禪淨二家から影響されたものと見るべきである。（佛家でいふ因緣には、天定の意味はない。原因結果の法則によつて一切の物が變化進展する。一切の物が自身因緣を作り、かつその法則に支配される。）

*

已に生死を超悟したものであるから、安心してその身命を捨去り得ることと卽斷してはならぬ。生き得る限り生き延びて、出來る限り國家民人宇宙の爲に盡さねばならぬ。そこで養生の必要が起る。養生長命は私事ではない。「一息尚存、勿レ慫ニ人道一、乃是事レ天之道、天助レ人之理。」（耋錄）「養生一念、出ニ於孝弟一、固爲ニ事レ天之道一、常人養生、或是自私、宜レ知レ所レ擇。」（耋錄）天に事へるのは、親に孝なる所以で、養生は孝の心より出るのである。「人道在レ敬、敬固爲ニ終身之孝一、以ニ我軀一爲ニ親之遺一也、一息尚存、可レ忘ニ自敬一乎。」（耋錄）養生の重んずべき理由は、以上に盡きてをる。老いるを待つまでもなし、常に身軀を養ひ、心を壯健にし、益、事に精勵すべきである。身健なれば心も亦健である（羅馬の諺には、健康の身體には健全な精神が宿るとある）。宇宙を助け國家を守る所以である。

去ニ人欲一、學人皆口レ之、而工夫太難、余嘗謂當ニ先去ニ大欲一、人之大欲、莫レ如ニ飮食男女一、故專戒ニ此二者一、余中年以後、此欲漸薄、今則澹然、精神與ニ壯者一無ニ太異一、可レ謂レ幸矣。（晩錄）

余今年辛亥耋齡、衰老之極、肚裏夙痾亦同衰、因思、於レ今宜レ慮ニ外感一、乃日服レ藥預防、又益節ニ飮食一、愼ニ起居一、庶乎以延ニ一日一、卽亦守レ身之孝爾歟。（耋錄）

しかし、飮食冷暖、安逸なるだけが養生ではない。「老人宜下臨ニ流水一、仰ニ遠山一、以爲中恢豁觀上、眞是養生。倘或怯ニ風寒一、常擁レ被在レ室、則似レ養非レ養。」（耋錄）である。思を勞せず、これが養心、體軀

を勞す、これが養身。いづれも節度あるべきである。そこで讀書修養が又養生の一重要部面となる。「任之重者身也、途之遠者年也、任二重任一而輸二遠途一、老學尤宜レ厲二老力一。」（耋錄）老いて益壯で老力を勵して學に從ふのである。「誠意、是終身工夫、一息尙存、有二一息之意一。」（耋錄）誠は天之道である。誠意は宇宙の大事業である。而してその自勵する所以は、「老人、衆之所二觀望而矜式一也、其言動當二益端一、志氣當二益壯一。」（後錄）である。此等は實に一齋の實際であつた。此に依つて、壽は八十八に躋り、死に瀕接して尙、講を廢せざることが出來たのである。天地と一たる思想が顯れてをる。

人當下自禮二拜吾心一、自問中安否上、以二吾心卽天之心、吾身卽親之身一也、是謂レ事レ天、是謂二終身之孝一。（晚錄）

吾軀、父母全而生レ之、當二全而歸一レ之、臨歿時、莫レ有二他念一、唯謝二君父大恩一而瞑、是之謂二全終一。（耋錄）

*

香魚を拈り殺した黠兒、吉原堤で人に喧嘩を吹掛けた惡少。翻然悔悟、努力精學、遂に最高學府昌平校の敎授となり、一代の指導者として、道學先生として、又敎育者として、不滅の跡を遺したる一齋老人の思想學問、不息の修養は、右の如くであつた。それが文學にもあらはれ、政治にもあらはは

れ、强き信念でもあつたのである。政治上には、人主たるものの心得を論じ、老臣重職の心得を說き、諸藩の政治にも參與し、又元より幕政にも、關係したことであつた。その封建論等の政治說の影響が、一方には勤王ともなり、一方には佐幕ともなつたのである。我が姬路藩の如きは、江戶詰は大體佐幕であつたが、その首領といはれた奧山鐵四郞事後の小笠原東陽、諸葛卯之助の如きは、聖堂出身、一齋の講義を聞いたものであつた。

學とは天下を經綸することである。道とは秩序を行ふことである。大學の綱領條目、明に之を示してをる。それには、人主の心、支配者の明德を明にするを第一とする。然らずんば經綸は出來ぬのである。人君には補佐を必要とする。補佐も人主も、力を戮せて、修齊治平を行ふのである。一齋は封建をよしとしたのであるが、日本と支那とが社會事情を殊にしてをることを明に認めてゐた。そして、國政に關し外交に關しても、意見を有つてゐたのであるが、環境上職責上、自由な發表は出來なかつたと見える。（如何なる學問も宗教もその社會事情、政治的實際とかけ離れてをるものではない。）

＊

以上、余は、言志錄、言志後錄、言志晚錄、言志耋錄、愛日樓文詩、及全集その他に於いて、見且感じた一部を記錄したのである。髣髴たらしめ得たであらうか。

一毫似レ我、謂二之我一可也、一毫不レ似レ我、謂二之非一レ我可也、然其似與レ不レ似者、貌也、存二於似與レ不レ似之外一者神也、是神也、無二生滅一、無二古今一、盤爲二川嶽一、凝爲二星辰一、聚爲二風霆一、散爲二烟雲一、磅二礴宇宙一、無レ有二乎不一レ存也、然則其不レ似者、亦盡我也、而況其似者、誰謂レ非二我眞一哉。

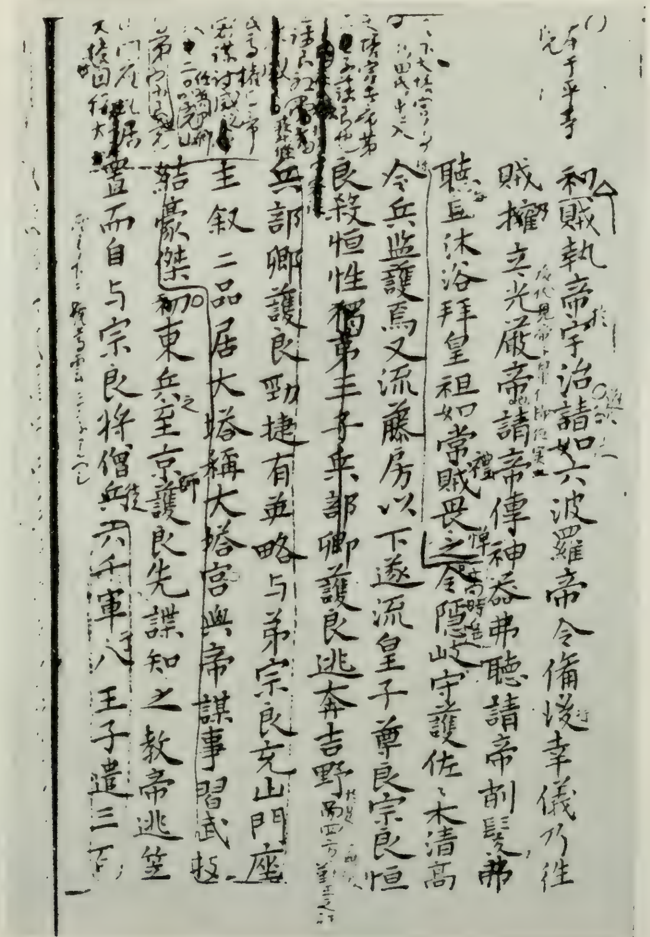
（自題小照。愛日樓詩文）

右は「自題二小照一、渡邊伯登工レ寫レ眞、余五十時、伯登爲貌二余眞一、人皆謂宛然肖也、因題二其顚一。」とある自贊である。記して以て跋とする。（終）

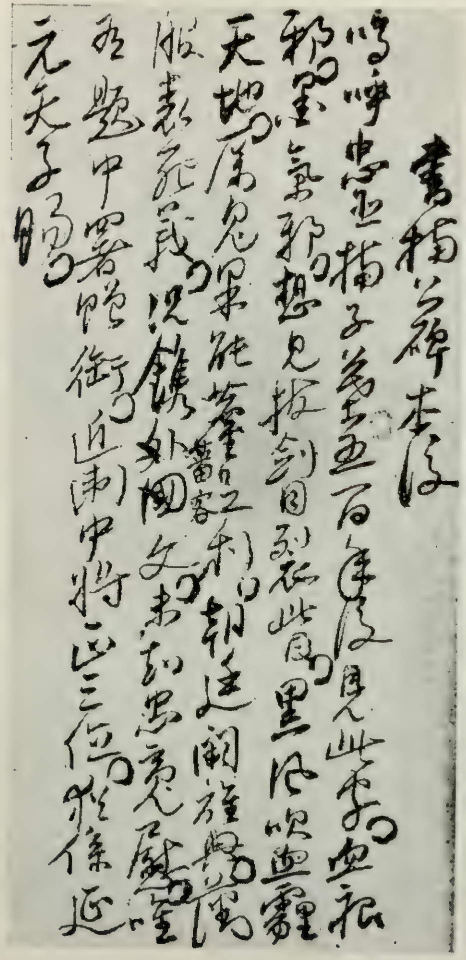



賴山陽肖像

日本外史草稿



頼　山陽筆蹟（東京帝國大學史料編纂所藏）



# 頼山陽の史筆

鹽谷温

## 一 略傳

頼山陽、名は襄(のぼる)、字は子成、幼名は久太郎(ひさたらう)、後に久太郎(きうたらう)と改め、山陽外史または三十六峰外史と稱する。安藝の人、安永九年大阪に生れ、父は惟完(たゞひろ)、春水と號し、母は飯岡(いひをか)氏、名は靜(しづ)、梅颸と號し、山陽はその長子であつた。父春水は有名なる朱子學者であり、儒を以て安藝藩主淺野侯に仕へたので、山陽も亦隨つて廣島に移つたが、父は多く江戸詰であつた爲め、その幼時は主として母に養育せられた。母の梅颸は頗る賢婦人にして文學に長じ、特にその日記は有名である。

山陽は幼にして聰慧、十二三歳の頃には既に立派な詩文を作り、好んで稗史野乘を繙き、十四歳の時、柴野栗山の言に感じて、朱子の通鑑綱目を讀み、十八歳、叔父杏坪に伴はれて江戸に遊學するに

及び、姨父(ははかたのをぢ)なる尾藤二洲の塾に寓し、傍ら幕府の官學なる昌平坂學問所や、廣島藩邸內の學問所に通つて、心を國史の研鑽に潛め、傍ら父の友人なる服部栗齋に從つて經學を修めた。栗山と二洲とは倶に幕府の儒官にして、古賀精里と相並んで寛政三博士と稱せられた有名な人々であつた。栗齋も亦、山崎派の朱子學者であるものの、大いに文章を重んじ、「經學の研究は文章より悟入せねばならぬ」との祕訣を山陽に授けた。山陽はその翌年再び叔父杏坪に從つて歸藩するや、當時既に歷史編纂の志を抱き、二十一歳の時、思ふ所存があつて京都に出奔、間もなく叔父杏坪に連れ戻され、狂疾の廉を以て家に監禁せられ、半歳許りにして、仁室（御慈悲牢の義）に移され、筆硯を用ひることも許されたので、山陽はこの仁室の中に在つて、一切世間との交通を絕ち、專ら一心不亂に、年來の宿志なる「日本外史」編纂に從事することが出來た。

「日本外史」は源平二氏から德川氏に至るまで、武家七百年の歷史であつて、その編述の大旨は、勿論、國體觀念の明徵に在つた。卽ち、　天皇の大權が武門に歸したるを歎き、之を　天皇御親政の正しき姿なる、日本國體の本義に復さんと欲し、勤王の精神を文字章句の間に閃かして居るのであり、就中、南朝の正統論、楠氏勤王の事蹟に、最も力を盡してゐるのは、畏くも　明治大帝の軍人に賜はりたる　勅諭の中に、

古の徴兵はいつとなく壯兵の姿に變り遂に武士となり兵馬の權は一向に其武士ともの棟梁たる者に歸し世の亂と共に政治の大權も亦其手に落ち凡七百年の間武家の政治とはなりぬ世の樣の移り換りて斯なれるは人の力もて挽回すへきにあらすとはいひなから且は我國體に戻り且は我祖宗の御制に背き奉り淺間しき次第なりき

とて、再び中世以降の如き失態のなからん事を望み給ひし　聖旨にも副ひ奉つてゐるのであつた。されば山陽が二十一歲の時に藩を脫走し、連れ戻されて後の屛居數年は、藝藩の爲、賴家の爲には、不幸な出來事であつたが、「日本外史」が此の間に於て一通り脫稿したと云ふ點からしては、實に天が外史編纂の大任を山陽に降したのであり、國家の爲には、此の事が却て大幸であつた。されば先年、廣島なる山陽先生遺德顯彰會は、この多年幽居の仁室をば、賴家から讓り受け、史蹟として大切に保管し、別に山陽記念館をさへ建設したのは、誠に結構な計畫であつた。

廣島の淺野家は大藩にして藏書も少からず、「日本外史」の首に引用書として擧げられてある約二百六十種の書物は、現に廣島市の淺野圖書館に傳はつてゐるのを見ると、山陽は特に恩典を以て、此等の書物を閱覽する便宜を與へられてゐたのであらう。されば仁室こそは實に好個の書齋であり、斯くてこの屛居數年の間、卽ち二十二三歲から二十七八歲の頃までに、「日本外史」が一通り脫稿したので

あつた。三十歳の時、父の春水と親交ある菅茶山に迎へられて、備後國神邊(かんなべ)の廉塾(れんじゆく)に都講となつたものの、養魚の池は固より蛟龍の棲むべき處に非ず、二年にして再び京都に去つた。そして此の行は豫め藩廳の許可を得なかつた爲め、第二回の脱藩と認められ、この後數年間は廣島に歸省することが出來なかつた。斯くて、山陽は京都に在り、帷を下して專ら教授に任じ、他藩の諸侯に仕へずに、草莽の臣を以てその一生を終つたのである。

山陽の名聲が四方に高まる中にも、「日本外史」の文章には修正に修正を加へ、力を用ゐること實に二十年、深く篋底に祕して人に示さなかつたものの、軈て時運が到來し、文政十四年五月、遂に松平樂翁公から之を求めらるるに至り、時に山陽は四十八歳であつた。尋で山陽はその翌年から更に「日本政記」の稿を起し、略〻脱稿するに及んだが、天保三年病に罹り、姉川戰爭以後は、門人に口授して筆せしめた程であり乍ら、それにも拘らず、病中に猪飼敬所と、南北朝正閏に關する國體明徵問題に就いて劇論し、一夜憂憤眠ること能はず、九月十二日、一文を草したのが殆ど絶筆となり、二十三日に瞑目するまで、「日本政記」の校正を輟めなかつた。時に、享年五十三。

山陽の人物は、その畫像自贊に最も明らかである。その第一首に曰く、

跼㆓偃仰一室㆒、而心關㆓百代之失得㆒。弗㆑恤㆓己鹽韲㆒、而憂㆓人家國㆒。文章滿㆑腹、不㆑濟㆓乎饑㆒。也

レ尺直レ尋、則所レ不レ爲。噫是何物迂拙男兒乎。雖レ然、烏知レ無下念二此迂拙者一之時上哉。

と。卽ち自ら任ずることの大にして、他日必ず世に吾が言の用ひらるゝ時あるべきを洩したのである。そして、その自筆の贊を門人の神田實父に贈る跋語中に、「藏レ之二十年、出視、一咲可也」とあつたのは、その遠からずして、時勢に一變化有るべきを洞察したのであつた。この句中の二十年後とは、嘉永・安政年間に當り、明治維新は恰も、その畫像自贊の後ち三十五年に當るのであつた。畫像自贊の第二首に曰く、

此膝不レ屈二於諸侯一、聊答二故君之德一。此眼竭二之群籍一、不レ虛二先人之囑一。此脚侍二母輿一、二躋二芳山一、五踔二大湖一、十上二下灣一、而未三曾踵二朱頓之門一。此口不レ能レ舐二殘杯冷炙一、而此手欲レ援二黔黎之寒餓一也。

と。亦以て山陽の人と爲りの大體を窺はれるのである。

而して、昭和六年に山陽先生百年祭の擧行せらるゝや、畏くも事　天聽に達し、祭粢料を下され、加之、從三位に御追陞を賜はつたことは、學者としては前例の無い恩典であつた。然も此の事たるや、一に、山陽が父の志を繼いで、遂に「日本外史」と「日本政記」との兩書を著し、その最も力强い文章を以て、大いに國體觀念を明徵にし、大いに勤王論を鼓吹して、盛んに日本精神の宣揚に努め

た功に依るのである。

## 二　「外史」「政記」とその史眼

山陽の著す所には、日本外史二十二卷・日本政記十六卷・通議三卷・春秋遼豕錄三卷・先友錄二卷・書後題跋五卷・日本樂府一卷・山陽詩鈔八卷・遺稿文十卷・同詩七卷・同拾遺一卷・文錄二卷等有るが、就中、その一生の精力は、實に「日本外史」と「日本政記」との二書に盡きたりといふも、決して過言ではない。扨てこの「外史」・「政記」の二書を通じて、山陽の史筆に敬服するのは、

一　史眼の高いこと
二　勸王の精神を鼓吹せしこと
三　文章の力强いこと

の三ケ條である。

山陽は所謂才と學と識とを兼具したる良史であつた。學問もあり才氣もあり、而して識見に於て特に卓絕してゐたのである。「日本外史」は武門の歷史、司馬遷の史記世家の體に倣ひ、源平二氏から德川氏に至る、武家七百年間の諸家の始末を載せ、紀傳と編年との兩體を兼ねて、盛衰治亂の跡を略敍

し、忠姦正邪の別を明らかにして、隱約の中に春秋の筆法を學び、以て尊王賤覇の精神を貫徹せんとしたのである。その編述の要旨は、「上二樂翁公一書」の中に明らかに述べてある。本文の主意は、「自分は日本外史を著して、知己を千載の後に求める所あつたのであるが、圖らずもいま閣下より之を求められ、此書が不朽の名譽を得ることは、誠に幸のことである」と云ふのであるが、特に其の文中から史眼に關する部分を鈔錄すると、次の如くである。

私倣二遷史世家一、而加二詳備一、斷レ自二源平氏一、至二於當代一、間以下中興諸將、及割據群雄關二係治亂一者上、家別紀レ之、或錯而合レ之、要下覽二其成敗興衰之狀、與二臣屬謀戰忠邪之跡一、取中其事大體最明確者上。

さすがに、露骨に尊王賤覇の大主眼は述べてないが、併し乍ら賢明なる樂翁公のことなれば、必ずや讀み行くまゝに、そこに氣附かれなかつたことはあるまい。而して必ずや幕府に對する好き教訓として謹聽せられたことであらう。

樂翁公は山陽の「日本外史」にとつては、實に大恩人であつた。文政十年五月、公の家臣なる不破右門は、山陽の京寓を訪れ、公の命を傳へて、「日本外史」一部を求める所があつた。山陽は大いに喜び、直ちに繕寫せしめ、同月二十一日には、前述の「上二樂翁公一書」なる一文を草し、自筆にて認め、

之を外史の巻頭に挿み、二十八日には、製本の箱も出來上つたので、獻上の手續を了つた。樂翁公は、その翌々月なる閏六月十一日から、外史の閲讀を始められ、御會釋として、集古十種二函と、白銀二十枚とを賜はり、翌十一年一月には、外史を讀了つて、左の感想を卷頭に記されたのであつた。

おほかた、ことをしるすに、もらさじとすればわづらはしく、はぶけばまた要をうしなふ。そのほどをうるもの、またまれなるべし。評論などするも、わがさえにもとめず、をのづからの正理に至れば、穩當にして、その中道をうるがゆへに、朕兆のめにみえざることまでも、のがす事なし。これをまたくそなへしものは、この外史とやいはむと、ひそかにおもへば、ひそかにしるしつ。後のひとの論はいかゞあらむ。

此の序によれば、樂翁公が一讀直ちに、山陽著述の深意を領會して、之を嘉尚せられたことが、言外に溢れてゐるのである。樂翁公は、寛政の三博士を登庸し、異學の禁を布かれた方であり、山陽の父なる春水は、既に公の知遇を荷つてゐたのであるから、山陽が公から外史を求められたことは、決して偶然のことではなかつた。併し乍ら、千里の名馬も、伯樂の一顧を得なければ顯れず、「日本外史」も名公の鑑賞を得て、始めてその聲價が認められ、翅なくして飛び、脛せずして走り、忽ちの間に家絃戸誦の大流行を見るに至つた。されば、賴家の家例として、毎年元旦、先づ天恩を拜し、菅・楠二

公を拜したる後、藩公と樂翁公とを拜される由であるが、誠に床しいことである。因みに樂翁公は姓は源、名は定信、松平越中守と稱し、左近衞少將に任ぜられ、田安中納言宗武の次子。越中守松平定邦公の養嗣子となり、奥州白河に於て、祿十一萬石を食み、天明年間、德川家齊將軍の時、老中に擢任せられ、異常の大治績を擧げ、寛政五年に辭職、文化九年に致仕、晩年は樂翁と號し、文筆に親しんで一生を送られた。

扨て、山陽の「日本外史」編纂に就ては、先年、三越樓上に開かれた山陽先生遺墨展覽會に出品せられた、山陽の屛居の當初、叔父春風に贈つた書中に、外史に對する最初の草案を載せ、名を「日本世史」または「覇史」といひ、十六世家または十三世家に纒めようとしたのであつた。然るに、現今の「日本外史」は、その目次が次の通りである。

源氏前記　平氏
源氏正記　源氏上下
源氏後記　北條氏
新田氏前記　楠木氏
新田氏後記　新田氏

足利氏正記　足利氏上中下
足利氏後記　後北條氏　武田氏・上杉氏　毛利氏
徳川氏前記　織田氏上下　豐臣氏上中下
徳川氏正記　徳川氏一二三四五

卽ち「日本外史」に於ては、源氏―新田氏―足利氏―徳川氏を經とし、平氏・北條氏・楠木氏・後北條氏・武田氏・上杉氏・毛利氏・織田氏・豐臣氏を緯として、其間に配し、以て二十二巻に取纏めたのであつた。最初の「日本世史」の義例(プラン)では、新田・足利兩氏を合傳する積りであつたらしい。然るに、「日本外史」に於ては、實際には征夷大將軍にも非ず、また天下を取つたのでもない新田氏に、武門の正統を與へてゐるのは、必ずしも新田氏の後裔たる徳川家に對する遠慮のみではなかつたやうである。また楠木氏を七將中から取立てて、北畠・菊池・名和・兒島・土居・得能氏を、之に隷屬せしめたのも亦、山陽の勤王論からの主張に因るものである。之は恰も、司馬遷の「史記」に於て、項羽を本紀に、孔子を世家に列したのと同じく、特例に屬するのである。是を以て、「外史」の體裁を不統一なりと難ずるは當らず、こゝが寧ろ山陽の大見識であると觀るべきである。

又、「日本政記」は、元來が父春水の草案に據れるものである。春水は嘗て水戸藩の「大日本史」を

手寫して、淺野侯に獻上した程で、その修史の精神も窺はれるのである。然るに既に五年もかゝつて編纂したものを、故有つて途中で筆を擱き、且つその原稿を焚き棄てるの已むなきに至つた。山陽は幼少の頃から、頗る之を遺憾なりとなし、後年に斷行した脫藩の決意も、畢竟する所之に基因してゐると謂つても差支へない。故に山陽は晩年に至り、父の志を繼ぎ、之を大成したのが、卽ち「日本政記」であり、其の書は、神武天皇の創業から、後陽成天皇の朝に於ける、豐臣秀吉の薨去に終つてゐる。その跋文に、

近又倣二荀悅漢紀意一、修二國朝政記一、自二開闢一至二輓近一、紀二其大事一、作レ論八十餘首。

とある通り、「外史」の敍事を主とせるに對し、「政記」は、中に挿める史論を主としてあり、要は、朝政の得失を論じて、後帝の殷鑑となすに在つたのである。故に中には、隨分思ひ切つて論斷せる所などは、或は不敬に失する懼無きやと思はれる程であるけれども、否、寧ろ之こそは山陽が君國を思ふ赤誠の餘瀝である。畏くも　明治天皇は是等の議論をも參考遊ばされて、遂に王政復古の大業を完成し給うたと洩れ承る。卽ち明治維新は、初めは建武中興を範とせられたのを、後に至り、更に溯つて神武創業に則り給ふに至つたといふことは、取りも直さず、「外史」から出でて、「政記」に成つたと謂つても差支へ無いのであらう。是こそは山陽が歷史家として、別に一隻眼を有した所以である。

「日本政記」の論文中には、有名なるものも固より少くないが、就中、最も注意すべきは、南北朝正閏論である。之は山陽が亡くなる十日前に、病を犯して起草したものであり、その死に至るまで、如何に大義名分に心を盡してゐたかを知るべきものである。曰く、

或謂㆓頼襄㆒曰、子論㆓正統㆒似也。抑〻子非㆓亦北朝之臣子㆒乎。何不㆑諱焉。曰、何居、子所謂北朝者、安在。曰、今之朝廷是矣。襄曰、於戯、今朝廷者、神武以還大一統之朝廷也。何以曰㆑北。曰㆑北者、延元元中間、天子南遷、而賊臣私立㆑君、故不㆑得㆑已、而曰㆑北也。當㆓是時㆒、南則正、北則僞。事㆑南者榮。事㆑北者辱。故不㆑得㆑不㆑別㆓其稱㆒也已。而天悔㆓其禍㆒、祖宗誘㆓其衷㆒、講㆓和議㆒成、南北混一矣。夫以㆓後龜山之瑣尾流離㆒、其授㆓神器㆒也、不㆔肯從㆓降式㆒、必用㆓父子禮㆒。足利義滿之兇戚、而不㆑能㆑奪也。於㆑是、後小松始傳㆑器受㆑禪。尊㆓後龜山㆒、爲㆓太上天皇㆒、事懿禮善、足㆔以盪㆓滌前此分派之陋㆒。蓋天與㆓祖宗㆒、實佑㆑之。非㆔足利氏所㆓能爲㆒也。雖㆔其後內有㆓紛紜㆒、而天命大定、以至㆓于今㆒。賊臣之蟠㆓據輦轂㆒、濁㆓亂朝廷㆒百餘年者、畢伏㆓誅竄㆒、朝廷復㆓其清明㆒、大㆓其一統㆒、如㆓日月再中㆑天、而山河皆明㆒也。而何苦、猶汚㆓其口吻㆒、曰㆑北曰㆑北耶。夫曰㆑北、則見㆘其爲㆓足利氏之門生㆒、而以㆓小朝廷㆒自處㆖也。此非㆓臣子之當㆑諱者㆒哉。今夫執㆓童孺㆒問㆑之、曰㆓汝義貞正成徒㆒也、則欣然喜。曰㆓汝尊成屬㆒也、則艴然怒。今自稱㆓北朝㆒、則勢必以㆓足利㆒爲㆓

定策國老一、而以二新田楠一爲レ賊。甘背二天下人心一、萃二萬衆唾罵一、何哉。夫天與二祖宗一、既已授レ之、升二於天一。而不レ欲レ就。以二冢中枯骨一介レ意、而猶陥二厠溷糞穢之中一、終古不レ肯二洗滌一。是所謂自賊二其君一者也。余則不レ取。故余修二外史一、專用二南朝年號一。今作二政紀一、於二延元元中間一、不レ得レ已分二注某年一、至二後小松以後一、大書直接二列聖之後一、以明二大一統一。如レ曰二是祖宗之統也、非二足利氏所レ得レ立也。敬レ君乃臣子之心已。此義不レ明、則萬世之後、天地再變、復有下姦雄如二足利氏一者上、擁二立其所一私便一、則今之自稱二北朝臣子一者、將三胥率從二之。是亦生二一北朝一也。吾惧焉。不レ可二以不レ辯。

と。文中の「或ヒト」とは、猪飼敬所を指すのである。この一文こそは、實に痛切激越、所謂鬼神をも泣かしめるの言である。而して、此文には、次の跋文が附けられてある。曰く、

右南北朝論、蓋在二政紀兩統合一之條一、已有二一論一。近有レ客、發二此說一。吾欲レ極二論之一。而有二肺疾一、不レ可二劇談一。遂欲三更作二一論一。九月十二日夜、咳不レ能レ寐。就二枕頭一腹稿、明日錄レ稿如レ此。病因二綿綴一、精神止レ此、不レ能二精思一也。

と。誠に文字通り、心血をこの論文に傾注せるを知るべきである。抑々南北朝問題は、苟も皇室に關し奉る事である以上は、臣子たるものの敢て正閏を議すべきものに非ずとなし、今日の歴史教科書

には南北朝の名稱を用ひてゐない。誠に然るべき說である。然れども南朝正統論は、北畠親房卿が前に之を唱へ、水戸義公が之に和し、實に大義名分の關する所である。蓋し、山陽の眞意は、後醍醐天皇に謀叛せる足利尊氏の奸惡を筆誅して、楠木・新田諸公の忠義を顯彰せんとするのであるから、決して　皇室に對し奉りて不敬なりといふべき筋合のものでなく、大義名分論から出發して、南北正閏論に發展せしめるに至つたのである。要は　皇統の正閏に非ずして、寧ろ將家の正閏、卽ち忠姦を論ずるに在つたのである。

## 三　勤王論の鼓吹

抑々山陽の「日本外史」を編纂した大旨は、勤王の精神に基づくのであつた。されば王權の武門に歸したるを慨き、王室の式微を歎じ、王權恢復の微意を、隨所に文字章句の間に閃してある。故に之を讀んで行けば、不知不識の間に、その勤王論に引きつけられて、感憤興起するに至るのである。山陽は「日本外史」の開卷第一、先づ平氏の論贊に椽筆を揮つて、

外史氏曰、吾讀ニ舊志一、見丁鳥羽帝、數下ニ制符一、禁丙諸州武士屬乙源平二氏甲、曰、大權之歸ニ將門一也、其在ニ此時一歟。

と喝破し、劈頭に於て、敢て大權の武家に移りしことを痛論し慨歎した後に、

蓋我朝初建㆑國也、政體簡易、文武一途、擧㆓海内㆒皆兵、而天子爲㆓之元帥㆒、大臣大連爲㆓之褊裨㆒、未㆔嘗別置㆓將帥㆒也。……是以大權在㆑上、……及㆘藤原氏以㆓外戚㆒、世執㆗政權㆖、卿相之位、非㆓其族㆒不㆑擬。……而將帥之任、毎委㆓源平二家㆒。於㆑是乎、始有㆓武門之稱㆒焉。……抑々戎事民命所㆑繋、而兵食之權、不㆑可㆓一日去㆒㆑國。先王之必躬㆓親之㆒、其旨深矣。……至㆓於保元平治之際㆒、乃乘㆑釁而起、潰裂四出、不㆓復可㆒㆑收。橫流之極、終致㆘失㆓其千歲不拔之權㆒、而授㆗之嚮所㆓奴僕視㆒者㆖。可㆑勝㆑慨哉。

と。言々句々に慷慨の激情を寓し、その所謂千載不變の大權は、今や果して誰の手に握られしかと、朝家の大權の衰微し行くを痛歎したる後、その末尾に於て、

吾作㆓外史㆒、首敍㆓源平二氏㆒、未㆓嘗不㆒㆑歎㆔王家之自失㆓其權㆒。而國勢之推移、有㆘非㆓人力所㆓能維持㆒者㆖。因㆓世變㆒、以見㆓得失㆒、後之憂㆑世者、將㆑有㆓以留㆒㆑心焉。

と結んでゐる。この一段は勿論一篇の餘波ではあるが、然も最も肝要な所であり、「外史」編纂の本意を窺ふに充分なるものがある。當時は何分にも、上に德川氏が天下の政權を把握して居るので、正面から之を直說しては、大いに支障を來すので、餘波として論を立て、最後に於て、「後ノ世ヲ憂フル

者、將ニ以テ心ヲ留ムルコト有ラントス」と結び、微言もて、政權の恢復を唱へてゐるのである。

「日本外史」の本文は、既にその「目次」中に於て述べたやうに、源平二氏から敍し來り、建武中興の論に至つては、反覆意を致し、降つて戰國に及び、群雄割據の樣を敍し、織田・豐臣の勃興、德川氏の創業から、江戸開幕、大阪落城に至つて、大體の終を告げ、更に餘勢が當代將軍德川家齊に及ぶや、

源氏足利氏以來、在ニ軍職一、兼ニ太政官一者、獨公而已。蓋武門平ニ治天下一、至レ是極ニ其盛一云。

と擱筆してゐる。但し、家齊將軍が太政大臣に任ぜられたのは、文政十二年のことであるから、この結尾の文は、その以後に附加へられたことは明らかである。而してこの一句には、實に千鈞の重みがあり、表面は極めて芽出度く取扱つてあるが、その裏面には深意が藏せられてゐる。凡そ物は極まれば則ち變ずるは天の道理であり、既に「其盛ヲ極ム」といへば、之に從ふものは「衰」でなくてはならぬ。江戸幕府の勢力も、今やその頂點に達すれば、之よりは下り坂となる。されば王權を恢復するのは、此秋である。この意味が暗中に飛躍して、勤王志士の元氣を鼓舞激勵するに充分であつた。文政九年十月に、山陽が菅茶山に贈つた手紙の中にも、「盛極ッテ衰ヲ萌ス」の字面が用ひられてあり、神田實父に與へた畫像の跋語にも、「之ヲ藏スルコト二十年、出ダシ視、一咲シテ可ナリ」とあるのに

參照すると、一層その意味の深重なるを覺える。而して時勢は急轉直下して、尊王討幕の論が起り、明治維新なる王政復古の大業は、山陽の歿後正に三十五年にして成功したのである。

蓋し、山陽は敢て政變を煽動したのではなかつたが、その唱道する所の勤王論の歸結は、到底こゝに到らざれば止まなかつたのである。さもなければ、脫藩の罪までも犯し、父母に迷惑をかけてまでも、「日本外史」を著した至誠の純忠が、全く無意義に了つてしまふではないか。山陽の本旨が此處に在つたことは、知る人ぞ知るであらう。

## 四 文章の力

日本の漢學は、江戸幕府時代に及び、藤原惺窩や林羅山が出てから、朱子學が大いに重んぜられ、幕府が率先して昌平坂學問所を設け、諸藩にも學校が開かれ、漢學が益々武家の間に行はれるやうになつた結果として、大義名分や尊王賤覇の論が、直接に王政復古、將たまた明治維新の原動力となつたのである。就中、水戸義公の「大日本史」と、山陽の「日本外史」・「日本政記」とは、實にその二大たのである。就中、水戸義公の「大日本史」と、山陽の「日本外史」・「日本政記」とは、實にその二大大關であつた。而して義公は「大日本史」によつて、南北朝の正閏を明らかにし、且つ湊川に、「嗚呼忠臣楠子之墓」なる碑を建てて、楠公の忠節を表彰し、日本精神の礎を据ゑられたのであつたが、「日

本外史」をして、特に其名を不朽ならしめたのは、何といつても山陽の文章の力である。
勿論、學者として尊王論を唱へた人は、水戸藩を始として天下に多く、就中、山崎學派には淺見絅齋の如きが有り、その編纂に成る「靖獻遺言」は頗る有名であり、山鹿素行も「中朝事實」を著して、國體の尊嚴を闡明するに努めた。其他、竹內式部・山縣大貳・高山彥九郞・蒲生君平の如きも、實際運動に於ては、流芳千載に及んでゐるが、惜しい哉、何れも山陽程の筆力が無かつた。故に人を動かすに足りない。縱令、「日本外史」は「源平盛衰記」・「太平記」の漢文譯であり、又その論文は、「神皇正統記」・「讀史餘論」の剽竊であつたとするも、全然さうばかりとも信ぜられない。偶〻意見の一致する所は、之を取つても何の支障も有るまい。然も之が山陽の筆力で、全く自分のものと同化せられてゐる處に、活氣がある。實のところ、「源平盛衰記」や「太平記」は、之を讀んでも面白いといふに過ぎず、また「神皇正統記」や「讀史餘論」では、人を感奮させるだけの筆力が足りない。人を動かすものは、單に道德上の議論ばかりでも駄目。鬼神を壯烈に泣かしめるものは、眞情から發する文章の力であらねばならない。國體の明徵、尊王の精神、歷史としての價値に於ては、「日本外史」は固より「大日本史」に及ばないが、その世道人心に及した感化に至つては、到底同日の論ではない。これこそは全く山陽の文章の力に賴るのである。斯くてこそ、維新の鴻業を翼贊し奉つた志士は、實に山

陽の鬼神を泣かしむる史筆に感奮興起したのである。文章報國とは眞にこの事である。

山陽先生百年祭賦賀

筆陣堂堂劍氣横　是非褒貶評群英　賴翁一管回天力　翼賛維新鴻業成

# 江戸儒學の諸問題

# 神道と儒學

飯島忠夫

## 一 緒言

豐臣秀吉が天正十九年(二二五一)葡萄牙の印度總督に與へた返書の中にある次の敍述は、半島に飛躍して大陸に進出せんとした當時の日本人の思想の標準が如何なるものであつたかを窺ふに足るべきものである。

夫吾朝者神國也。神者心也。森羅萬象、不レ出二一心一。非レ心其靈不レ生。非レ神其道不レ成。增劫時此神不レ增。減劫時此神不レ減。陰陽不レ測之謂レ神。故以レ神爲二萬物根源一矣。此神在二竺土一、喚レ之謂二佛法一。在二震旦一、以レ之爲二儒道一。在二日域一、謂二諸神道一。知二神道一則知二佛法一、又知二儒道一。凡人處レ世也、以レ仁爲レ本。非二仁義一、則君不レ君、臣不レ臣。施二仁義一、則君臣父子夫婦之大綱、

其道成立矣。若是欲レ知二神佛深理一、隨二懇求一而可三解二說之一也。如二爾國士一、以二教理一號二專門一、不而不レ知二仁義之道一、此故不レ敬二神佛一、不レ隔二君臣一、只以二邪法一、欲レ破二正法一也。從レ今以往、不レ辨二邪正一、莫レ爲二胡說亂說一。

これは耶蘇教の侵入を防遏する意義を含んで居るものである。耶蘇教排斥は、この頃から德川時代を通じての重要事となつて居た。又、慶長四年(二二五九)に後陽成天皇の勅命によつて始めて印刷に付せられた日本書紀に跋した淸原國賢の文には、

神道者爲二萬法之根柢一、儒教者爲二枝葉一、佛教者爲二花實一。彼二教者皆是神道之末葉也。惟以二枝葉一、顯二其本源一。然則異曲同工者歟。

と言つて居る。

此の二つの文に見えた思想は、鎌倉時代に眞言宗の兩部神道から轉回した伊勢神道に萌芽し、應仁の亂以後に起つた唯一神道に成熟したものであつて、戰國時代を風靡して居たところのものである。そして、伊勢神道は天壤無窮の神勅と三種神器の道德的意義とを特に强調するものである。德川家康が太平を開くに當つて大に學校を興して、漢學を廣め、儒教を隆にしようとした時に、儒教は此の如き背景の前に置かれて居たのである。それ故に、家康に用ひられた藤原惺窩も、林羅山も皆、神道と

儒教との關係には大に注意したのである。

唯一神道に於て指すところの儒教は、鎌倉時代から我國に入つて、後醍醐天皇の朝に盛となり、その後、禪僧の間に、又縉紳の學者の間に、常に研究されて來た宋儒の學である。惺窩も羅山も皆この宋儒の學を宣傳するに努めた人であつたが、從前の學者の儒佛併用とその態度を異にして、専ら佛教排斥に傾いた。從つて神儒一致を說くことに力を用ひたのである。

## 二 藤原惺窩

藤原惺窩の「千代もと草」にある次の文は、此の時代の儒者が神道と佛教とに對して如何なる觀察をして居たかを知るべき、頗る重要なるものである。

日本の神道も、我心をたゞしくして、萬民をあはれみ、慈悲をほどこすを極意とし、堯舜の道もこれを極意とするなり。もろこしにては儒道といひ、日本にては神道といふ。名はかはり、心は一つなり。神武天皇より三十代欽明天皇の御時に、天竺の佛法、日本へわたりて、ふしぎ神變なる事を、說き聞かするによりて、人これに心をよせて、神道おとろへたり。

釋迦佛は天竺の人なり。天竺國の人は、心すなほならずして、國治まらず、（中略）かくの如く、

佛のいろ〳〵に說き給ふは、其人々の氣に應じて、心をすなほにして、國を治め、萬民をやすからしめんが爲なり。佛の心もちもありがたし。しかるに今の世の出家たち、身のすぎはひの中だちに佛法を說くによりて、みな人心まよふなり。釋迦如來のぢきの弟子、阿難迦葉をはじめて、欲に心をけがされまじきために、一物をも身にたくはへずして、每日乞食に出て、其日其日の食ばかりを求めたまふ。今時の出家たち、財寶を積みたくはへ、堂寺に金銀をちりばめ、あやにしきを身にまとひて、いのり祈禱をなして、後世をたすけんといひて、人の心をまよはする事、佛の本意にもあらず、まして神道のこころにもかなはず、世のさまたげとなるものは出家の道なり。

惺窩の佛教排斥は、その當時の佛教の弊害を排斥したのであつて、佛教の本意までをも排斥したのではなかつた。しかし、宋儒の學は元來佛教哲學と同種類のものを儒教經典の解釋に適用して、更に儒教的見地から佛教の出世間的思想を攻擊したものであるから、德川初世の宋儒の學の興隆に伴つて、佛教の排斥せられたのは止むを得ざる結果であつた。

## 三　林羅山

林羅山は惺窩の弟子となつた人であるが、惺窩が初め禪僧であつたのから還俗したとは異なつて、

十三歳の時、京都の禪刹なる建仁寺に學び、その穎才を認められて、出家を勸められたけれども、之に應ぜず、恰も關ヶ原役の年に當つた、その十八歳の時には、既に弟子を集めて宋儒の學を講じ、その後に至つて惺窩に從つたのである。

羅山は家康に用ひられて、德川幕府三百年文教の基を開いた。その旗幟とする所は宋儒の學である。しかし、朱熹が言ふ所の理氣二元の說に滿足せず、それを修正するに王陽明の理氣一本の說を以てした。又、唯一神道をも學んで、それを轉回し、神道もまた儒教であると論じた。そして佛教を排斥した。これは唯一神道が、神道を根本とし、儒教を枝葉とし、佛教を花實としたのと大に趣を異にしたものである。それは儒教を本位として神道を包容したものである。

羅山は神道を分つて、理當心地神道と卜祝隨役神道との二とした。そして理當心地神道を解釋して、次の如く言つて居る。

理當心地神道、此の神道卽王道也。心の外に別の神なく別の理なし。心清明なるは神の光也。行迹正しきは神の姿也。政行はるるは神の德也。國治まるは神の力也。是は天照大神より相傳まします。（神道傳授）

これは宋儒の學說から來たもので、人心の中に神を認識しようとするのである。羅山が神といふのは

理と精妙なる氣との合一したものを指す。羅山の言に、

神は形なしと雖も靈あり。氣のなす故なり。一氣の萌さざる時も、萌して後も、此理本より有りて、音もなく、匂もなし、始もなく、終もなし。氣を生じ、神を生ずるいはれは、卽ち是れ理なり。眞實にしてあらゆる事の根源なり。異端には此理を知らず。（神道傳授）

といふのがある。これは朱熹の理氣二元說によつて說明したのである。異端といふのは佛敎を指して居るのである。そして又、「神道は卽ち理也」とも言つて居る。理當心地とは「理が心地に當る」卽ち心のはたらきを理に合せしめるといふことであらう。これが羅山の神道說の根本となるものである。卜祝隨役とは神職の行事を指すのであつて、羅山はそれを神道の末節として居るのである。

羅山は天照大神より傳はる神道卽ち王道を以て、三種の神器に象徵せられて居るものとし、それを中庸に謂ふ所の知仁勇の三德に當てて居る。三種を三德に當てるのは、應仁文明の頃の一條兼良に始まり、それと類似した思想は伊勢神道まで溯り得る。

玉と劒と鏡とを三種の神器と申候。天照大神より授け玉ふ代々帝王の御寶物也。此の三の內證は、鏡は知也。玉は仁。劒は勇。知仁勇の德を一心に保つ義也。心に在りては知仁勇也。あらはし器と成る時は、玉と劒と鏡となり。是を以て國家を治め守るなり。又、鏡は日に像り、玉は月

に像り、劒は星に像る。此三光ありて、天地明なるが如し。三種神器備りて、王道治まる。王道神道、理一也。（神道傳授）

羅山が王道と神道とを同一であると見た所の王道なるものは、日本天皇の道を指したのであつて、直接に儒教で謂ふ所の王道を指したものではない。それ故にまた本朝神社考には、

我國天照大神以降、神以傳ㇾ神、皇以傳ㇾ皇。皇道神道豈二哉。謂二之理當心地一。

とも言つて居る。羅山の謂ふ所の神道は、神代の道であつて、王道は皇道と同じく、神武天皇以來の道を指して居るのである。されど又、

王道一變、至二於神道一、神道一變、至二於道一。道吾所謂儒道也。（羅山文集六十六）

本朝神道是王道、王道是儒道、固無二差等一。所謂唯一宗源、理當心地、最當ㇾ盡ㇾ意。（羅山文集附錄卷三）

とも言つて居るから、日本天皇の道は卽ち儒教の王道と同一のものといふことに歸着するのである。そして又、「神道と人道とは豈に二ならんや」と言つてゐる。

羅山の見る所では、我國の神道は、そのまま皇道であり、人道であり、それは儒道に合して居るから、儒道を興隆することは、直ちに神道の興隆となり、同時に皇道の興隆となるといふのである。要

するに、神道の內容を宋儒の學としようとする儒教本位の說であることは疑を容れる餘地もないが、唯一神道が勢力を占めて居る時代に於て、特に新に儒教を興隆しようとすれば、神道との抱合は、決して閑却すべきでないといふことに深く注意したのは、羅山の卓識の存する所である。

羅山の佛教排斥は頗る辛辣なるものである。その佛教興隆者たる聖德太子を論ずる言葉には次の如きものがある。

太子無二獻王好古之心一、而有二蕭衍講經之質一。若令二太子好レ神如レ好レ佛、則豈費二多少之財一、立二若干之寺一哉。奉レ儒如レ奉レ釋、則何謂二篤信二三寶一哉。只佛爲二根本一、神儒爲二枝葉一、蓋太子之意也。吁以二寺院一爲二學校一、而佛事爲二祭祀一、教レ之以二孝弟一、勸レ之以二忠誠一、神道人道豈二哉。惜乎太子不レ如レ此也。（本朝神社考）

この意見は、德川幕府時代を通じて、常に儒者の思想を指導したもので、國學者の排佛もまた之によつて動かされて居た。それは遂に明治維新の神佛分離にまで發展した。神佛分離は、本地垂迹の破產である。これは、實に自然の成行であつて、儒教の興隆に伴ふ佛教の衰頽は日本國民思想史の上に著大なる時期を作つて居るものである。

儒教興隆、佛教排斥の氣運に乘じて、神道家の間からも、また神道から佛教を全く引離して、儒教のみと結合させようとする學者が起つた。それは度會延佳といふ外宮の神職で、その著書には陽復記等がある。その中に本朝神社考を引用して居る所を見れば、羅山の影響を受けたものと推察される。陽復記は慶安三年(二三一〇)の著で、此の書の中には、

日本の神聖の跡、唐の聖人の書に符を合せたる事はいかゞと思ふべけれど、天地自然の道の、かの國、この國ちがひなき、是ぞ神道なるべき。

といふのがある。又、易と神道との一致を說きては、

我國の神道に、易道は同じと見るこそ、忠厚の道ならめ。易道に神道同じといふのはいかゞと思ひ侍る。

神國に生れたる人は、神代のむかしを思ひ、國法の古へをしたふこそ、儒道にも本意ならめ。

といひ、三種の神器のことを述べては、

此三種の神寶は知仁勇の三德を表したると、ふるき傳へあるにぞ、孔子の道は我國の神道にひと

しき道と思はるゝ。

と言ひ、又、

たとひ儒道の見解なりとも、神道にそむかずば何ぞいまんや。倭姫の禁令にも屏ニ佛法息一とは侍れども、儒をさけよとの事はなし。

と言つて居る。ここに倭姫の禁令とあるのは伊勢神道の經典たる神道五部書の中の倭姫命世紀の中にある語を指したのである。

又、言ふには、

神道といふは、人々日用の間にありて、一事として神道あらずと云ふ事なし。君、神道を以て下にのぞみたまふ時は仁君なり。臣、神道を以て君につかへ奉るときは忠臣也。父、神道を以て子を養ふ時は慈父なり。子、神道を以て父母につかふる時は孝子なり。夫婦、兄弟、朋友の間も、神道を以てまじはる事ぞかし。其外、飲食するにも神道あり。手を擧ぐるにも、足を擧ぐるにも、神道あらずと云ふ事なし。神書を讀みて、神名など覺え、拍手祝詞などよむ計り神道ならば、農圃醫卜の術よりは、猶せばき道なるべし。かたじけなくも、天御中主尊、天照大神の天の御量柱を中國に立て給ひてよりこのかた、時代により用捨こそあらめ、今に絶えせぬ神道なれば、天

地と無窮なるべきものなり。されば、神の御誓にも、寶祚のつたはらん事、天壌と窮無けんとの御言たがはずして、今上皇帝まで傳はりたまふ事、異國にも、曾てそのためしなし、ありがたき事にあらずや。これにて神道の最上の道なる事はしるべし。

と言つて居る。これは羅山が神道を以て人道のこととしたのと一致する見解であつて、後に出た國學者の荷田春滿が、

世の中に神の道とて道あらば、人の外なる人や學ばん。

と歌つたのとも相呼應するものである。しかし、羅山の儒を主とし神を從とする傾向があるのに對して延佳は神を主とし儒を從とするのである。如何に、徳川初期の時代に於て、儒教の道徳說が有力なる地位を占めて、出世間の生活をなし、人間以外の世界を說く佛教の如きものがその勢力を失ひつゝあつたかを、推測することが出來るのである。

## 五 山崎闇齋

山崎闇齋は、惺窩・羅山の學統を離れて、別に戰國時代の天文年間土佐で起つて宋儒の學を唱へた南村梅軒の南學の系統を受けた學者である。闇齋は青年の時に京都に居て禪宗の僧となつて居たが、

後に土佐に赴き梅軒の學を修め、終に還俗して儒者となつた。それからまた神道の書を讀んで、神道と宋學とが一致して居ることを悟り、晩年終に自ら神道家となつて、垂加と號した。その頃幕府で權勢のあつた會津藩主保科正之の知遇を受けたが、その間に吉川惟足といふ神道家と會見したこともあり、又屢々伊勢に參詣したこともある。吉川は唯一神道から脫化して一層宋學的に神道を說いた人である。伊勢では又、度會延佳に接した樣である。

闇齋の神道の知識は主として神道五部書から來て居る。明曆元年(二三一五)三十八歲で始めて京都で儒敎の講座を開いた年に、伊勢太神宮儀式序といふ文を書いて居るが、その中に、

嗚呼、神垂以㆓祈禱㆒爲㆑先、冥加以㆓正直㆒爲㆑本。君臣上下無㆓黑心㆒、以㆓丹心㆒奉㆓大神㆒、則胡佛無㆑所㆑立、而觀㆓常世之神風㆒。

と述べて居る。神儒一致、佛敎排斥の思想は既に此の時に確立して居たのである。「神垂以㆓祈禱㆒爲㆑先、冥加以㆓正直㆒爲㆑本、云々」の語は神道五部書中の倭姬命世紀、寶基本紀、御鎭座傳記に出て居るもので、そこに垂加といふ名の起源がある。闇齋はその翌々年、又始めて伊勢に參詣した。保科正之に知られ、吉川惟足に會つたのは、皆その後のことである。

闇齋は京都と江戸との間を往來して、多くの弟子を敎へた。闇齋が日本書紀の神代卷を說く方法

は、神道五部書の說に、宋學の太極陰陽五行說を結合したものであつたが、それは頗る奇僻に流れたものであつた。そして、神代卷は人事を以て天理を說き、天理によつて人事を說いたものとし、それを天人唯一と稱した。これは神代卷を以て、哲學を神話の形に表現したものとするのである。

闇齋は湯武革命論といふ文を書いて、殷の湯王が夏の桀王を放逐し、周の武王が殷の紂王を討伐して、それぞれ新しい王朝を開いたのを、易經の革卦の彖傳に、孔子の言葉として、「湯武革レ命、順二乎天一而應二乎人一」と記してあるのに疑問を挾み、湯は桀の臣であり、武は紂の臣であるのに、此の放伐を行つたのは決して正當とすることが出來ないものと論じた。これは神道から觀た儒教の批判であつて、この思想は後に菅家遺誡の中に挿入せられたところの、

凡神國一世無窮之玄妙者、不レ可二敢而窺知一。雖レ學二漢土三代周孔之聖經一、革命之國風、深可レ加二思慮一也。

といふ文を喚起したものと思はれる。

闇齋の儒學の弟子なる淺見絅齋は、その師の神道說には贊成しなかつたが、我國の國體については、師說を繼承して、なほそれを高調し、

天照大神より御血脈今に絕えずつがせられ候へば、實に人間の種にては無レ之候。我が國の萬國

にすぐれて自讃するに勝へたるは只このことに候。

と言つて居る。絅齋は、我が國の皇統連綿たるを、支那の革命の風に遙に勝れたものとして、讃嘆すると共に、その當時に於ける皇室の式微に對して悲憤の涙を灑いだ。德川幕府の威權が往々皇室を壓する勢を示すのに憤慨して、京都に居た絅齋は終身江戸の地を踏むを屑しとしなかつたのである。

闇齋の晚年の弟子に土佐の谷秦山がある。儒學と共に又深く神道を研究したが、次の如き言を爲して居る。

吾も人も日本の人にて、道に志あるからは、日本の神道を主にすべし。其上にて器量氣根もあらば、西土の聖賢の書を得て、羽翼にするならば、上もないよき學なるべし。

闇齋の學統に屬する人々からは、多く勤皇論者、國體論者を出した。德川光圀が大日本史の編纂にも此の學統の學者が多く參加したのである。

## 六　中江藤樹

羅山と同時代の中江藤樹は、初め宋儒の學を修めたが、後に王陽明の學を唱へるやうになつた。我國に於ける最初の陽明學者である。藤樹は近江に隱棲して居たが、その德を慕つて諸方から從學する

ものがあり、近江聖人の名は高く天下に響いた。

藤樹は王陽明の大學にある誠意の語に下した解釋が直截簡明であるのに贊成した。そしてそれを神道で重んずる所の正直の德と結合した。その著、神道大義には次の如く言つて居る。

正直の德は、知、明かにして、鏡の美惡を照すが如し。(中略)人々の心に天神一體の神明ありて、善惡共に隱れなし。鏡に向ふが如し。是故に、神道には、內外明暗を以て心を二つにせず、正直を以て本體とするなり。

天照皇大神の御孫瓊瓊杵尊は天下知召すべき御德備りおはしましゝかば、天神の初めの國常立尊より傳はり給ふ心法を三の象によせて象りたまへり。是れ我が國、文字書典の淵源にして、天下國家を齊へ給ふ政敎なり。

我が朝の神皇の象と、唐土聖人の言と符節を合せたるが如し。故に、神道に深き者は、儒道を借らでも心法明かに、政敎備はれり。況んや異端をや。易簡明白至れり盡せり。

これは羅山が、宋學的見地から、神儒の一致を說いたと同じく、陽明學的見地からそれを說いたのである。

藤樹は大に孝經を重んじた。孝經の所說を推演すれば、それは生存する父母に孝行することから始

まつて、父母祖先の靈魂に孝することに中し、萬物を造つた皇天上帝に孝行することに終るものとなるのである。この孝の心は、人心に固有するものであつて、それは、もと天帝から授けられたものである。天帝の心には本來に孝が具はつて居る。天帝に孝行することは、卽ち天帝の心に順ふことである。天帝の心を以て自分の心とすることである。孝は愛と敬とであり、それはまた仁と義とに通ずる。そこで、藤樹はまた次の如く言つて居る。

愛敬の德は天地同根萬物一體なり。人欲淸く盡きて、天理流行す。空々如たり。其大外なく、其小内なし。天地萬物皆心中にあり。我にあらずといふことなし。(神道大義)

藤樹は天地開闢以前の姿を太虛とし、これを太一尊神とし、皇天上帝とし、そこで、

元來孝は太虛を以て全體として、萬劫を經ても終りなく、又始めなし。孝のなきときなく、孝の名なきものなし。(翁問答)

と言ひ、太一神經を著作し、自ら此の神を祭つた。

藤樹は又、太一尊神を以て、天照大神と同一なるものと考へた。そして言ふには、

他神姑置ㇾ之。若二太廟一則天地開闢之祖。凡生二於此間一者、安有二遠一焉而不ㇾ祭之理一哉。

と。その太一を祭つた翌年なる寛永十八年(二三〇一)内宮に參詣した時の詩には、

光華孝德續無レ窮。正與ニ犧皇一業亦同。默禱聖人神道敎。照ニ臨六合一太神宮。

といふのがある。これは儒敎の天を以て天照大神と結合したものである。

## 七　熊澤蕃山

藤樹が陽明學を唱へてから三年、寛永二十年(二三〇三)に、京都からその隱棲を尋ねて弟子となつた熊澤蕃山は、まだ二十四歳の青年であつたが、留まること三年にして、備前岡山の池田光政に聘せられて國政に參與した。蕃山の學は必ずしも陽明に拘泥せず、その政治的才能は實に非凡であつた。後に出た荻生徂徠は蕃山を評して、百年來の儒者の巨擘と曰ひ、人才は熊澤蕃山、學問は伊藤仁齋、その他の學者は皆凡庸であると言つた。

蕃山の神道說はその著三輪物語、大學或問等に於て知ることが出來る。三輪物語は、公家の公達、社家、禰宜、居士、客、老翁を配して、神儒佛の物語をさせる脚色であるが、その中の公達には蕃山自身の意見を述べさせて居る樣である。その中に神道と儒敎と同一であるといふ說がある。

處士云、公達のたまふ神道はまさしく中國の聖人の學也。儒理を借用ひて我國の神道明したまふといふ人侍り。

公達云、理二つあらず、中夏の聖人の道も、天地の神道也。我國の神皇の道も天地の神道也。易にも天地の神道とあり。論語にも宮室を卑くして孝を鬼神にいたすとあり。聖代の天下の重事は、神を祭祀するを第一とす。四書五經に見えたり。天地の神道よりなすわざなれば、人の五體のありやうも同じ事也。五倫のそなはりも同じ。五常の性も同じ。もろこしの書も渡らぬ以前より、我が國の人の心に天より受け得てあり。孟子の四端說をみれば、誠に人々の心にある事なりと、符節を合せてしらるるなり。我が心に本よりあればこそ此の如くしらるれ、なきものを外よりつけます事ならば、いかにして割符の合ふべきぞ。

又、大學或問には次の如く言つて居る。

日本の神書とすべき書は見えず、唯三種神器のみ此國の神書なり。上古は文字もなく、書もなし。心の知仁勇を三種の象によりて示したまへり。玉の溫潤にして光明なるを仁德にかたどり、鏡の靈明にして能く美惡を分つを知の靈明にかたどり、劍の剛にしてよく斷制するを以て勇の神武にかたどりたまへり。（中略）知仁勇は天下の達德なり。此三種の象を註解して經傳とせば、是に過ぎたる神書あらじ。三種の註解は中庸にしくはなし。中夏の聖人、日本の神人、其德一なり、其道不二なり。故に其象其書符節を合せたるが如し。

三種の象は孔門傳授の心法なり。是を本として神道を興起せんに、殘すことあるべからず。神道は儒道をかる事を憚れり。故に理せばくして、孤獨の小術の如く成りて、儒佛に對すべき道學なし。賢君出世したまはでは、神道の再興かたかるべし。

三種の神器の註解は中庸の書にしくはなし。上古の神人出でたまふとも、此書を置いて別に註したまふべからず。ただ、貸すこと能はず、借ること能はざるものあり。日本の水土によるの神道は、もろこしへも、戎國（印度）へも貸すこと能はず、借ること能はず。唐土の水土によるの聖敎も、又日本に借ること能はず、貸すこと能はず。戎國の人心によるの佛教も又しかり。文字、器物、理學は借るべし、貸すべし。

蕃山は三種神器を以て我國の神書として、その註釋に中庸を用ひるがよいとするのであり、又、眞理の運用に地理的民族的の特色を存すべきものとして居るのである。そして又、佛敎をば排斥したが、猶、佛法の再興を論じて、

佛法の無道の繁昌亡び、眞の道心の僧のみありて、佛法もまた再興せんか。

と言つて居る。

## 八　山鹿素行

山鹿素行は林羅山の門から出て、その師とは反對に、宋儒の學を非難し、且つ陽明學にも從はず、別に一派の古學を創唱した學者である。闇齋、蕃山と同時代で、しかも江戸に於てその門戸を開いた。素行は儒學の他、神道、軍學、佛教、老莊すべてその蘊奥を究めた。宋儒が理と氣とを二元的に取扱ふことに滿足せず、又、陽明が理氣を一元に融合しながら、理に重きを置いたのに滿足せず、別に、氣に重きを置く理氣一元論を立てた。此の如き哲學は明末の吳延翰などが立てたものであるが、素行にその影響があつたことは明瞭でない。恐らくは神道に於ける鬼神論の研究などから來たものであらう。理氣を二元的に見ないことは既に羅山から始まつて居る。

素行は周公孔子の哲學が、この哲學と一致するものと考へた。そして孟子以下宋儒陽明に至るまでの儒學を排斥した。それは佛教と共に、すべての形而上學的の臭味を有するものを全然排斥したのである。そして此の如き見地から、儒教を用ひて武士道を說いた。素行の學說は聖教要錄と題して、寛文五年(二三二五)に出版されたが、異學を立てたといふ咎で、その書は直ちに禁絶せられ、自分は播州赤穂に流され、謫居の中で中朝事實を著した。

素行は日本書紀の應神天皇以前卽ち漢籍渡來以前の記事を以て、それを純粹なる日本的のものと見做し、それらの中から儒教と同一な思想を檢出して、日本固有の道が周公孔子の儒教と一致して居ると考定した。しかも尙、君臣の倫が萬古不變なるところを取つて、それを支那に於ける王朝の更迭に比較して、忠の實行は日本を以て遙に支那に勝るものとした。そこでこの實行の優秀なる點を取つて、日本が眞の中華文明の國であるとして、中朝事實を著したのである。この中朝は中國と同義である。そして、支那人が自ら誇つて中國と言つて居るのに從はなかつた。しかし、素行の中朝事實は、日本書紀の應神天皇以前の記事を以て、上古の眞實のものとし、日本書紀の編者が漢字又は支那思想を以て潤色したことに注意しなかつたところに缺陷があるのである。また孟子の學說を孔子のそれと分離したのも疑ふべき餘地がある。

素行は、中朝事實に於て日本の國體を論じて、

本朝開闢之義、悉因二神聖之靈一。是乃實天授レ之人與レ之也。故皇統有二億兆之系一、終與二天壤一無レ窮矣。

と言ひ、又

中朝者神國也。以二天神地祇一爲二皇祖一。天地乃宗廟之神也。後世別二社稷宗廟一爲レ二矣。

と言つて居る。これは天照大神を以て、天神であると同時に皇祖であるとしたのであつて、それは、支那で上帝と王朝の始祖とを別物とするのと違ふから、皇統もまた支那と違つて天壤無窮に繼承したまふと斷定したのである。そして三種神器については、一條兼良、林羅山の說に從つて居る。素行は實に神道を基礎として儒教を包容したものである。

素行もまた佛教を排斥したけれども、羅山の如く辛辣ではなかつた。素行は聖德太子の草せられた憲法十七條について、その一條だけは佛教であるが、他の十六條は儒教と異ならないから、太子の儒教興隆に於ける功績は偉大であると讃嘆してゐる。

## 九　荻生徂徠

山鹿素行は我國の儒教の古學派の最初の人であるが、その學說は禁絕せられた爲に廣く傳はらなかつた。それに稍後れて、伊藤仁齋の古學が起つた。これは儒教哲學の解釋に於て、素行と類似の立場から、宋儒や陽明の形而上的哲學を排斥し、專ら實踐道德を鼓吹するものであつたが、神道の論には觸れなかつた。儒學を單に儒學として研究するのは仁齋から始まる。その世間に認められたのは五代將軍綱吉の時に當つて居る。此頃から儒學は神道に對して獨立して來た。仁齋の後に出でて更に一種

の古學を建設した荻生徂徠は、全く哲學を離れて道を說き、「孔子の道は、古代の聖王が天下を安んずるが爲に造つたところの道であつて、天地自然の道ではない。それは禮と樂とである。そして禮樂はみな天を敬し鬼神を敬するに本づけてある」と論じて居る。これは從來の儒者と全く異なつた見解であつて、道を以て政治的のものとしたのである。

徂徠が享保四年(二三七九)に著した舊事本紀解序には、神道を論じて次の如く言つて居る。

蓋我東方、世世奉神道云。恭稽古昔、六經所載、虞夏商周、聖人所爲道、豈翅我已哉。(中略)是故、道也者先王所爲道也。祀先王、配諸天。後王廼奉天道以行之。爵祿刑賞、降于鬼神、所以一其本也。故仲尼又曰、明于郊社之禮、禘嘗之義、治國其如示諸掌乎。夫六經雖博、何稱非天。禮必有祭、事皆有祭。惴々栗々、唯恐獲罪于鬼神也。聖人以神道設敎、豈不較然著明乎哉。迨乎禮樂廢、而性理興焉。曰、天無心也。曰、鬼神氣也、祭則致我誠耳。是其意謂先王我欺也。而我覘其心、夫好知而不好學、以至於賊夫道。人之自聖、一至于斯乎。不佞茂卿、生也晚、未聞我東方之道焉。雖然、竊觀諸其爲邦也、天祖祖天、政祭祭政、神物之與官物也無別。神乎人乎、民至于今疑之、而民至于今信之。是以王百世而未易。所謂藏身之固者、非邪。後世有聖人興于中國、則必取諸斯已。

杞宋不㆑徵、孔氏之徒、獨傳㆓周禮㆒。而儒者廼謂先王之道是而已矣。亦不㆓深思㆒也。虞夏與㆑周、我何知㆑之。雖㆑然、非㆓聖人㆒其孰與㆓于斯㆒乎。（徂徠集、舊事本記解序）

これは、我が神道を以て我が上古の聖天子の作爲したまへる道とし、その中に支那の上古にあつた神道と符合する所があると見て、それを孔子の傳へた周代の禮よりも一層堅固なるものとし、天神と皇祖とが融合して居る所に天壤無窮の皇統の基礎が築かれてあるものと論じ、宋儒の哲學をば、支那古代の神道と甚しく異なつて居るものとして、それを排斥したのである。これは素行と類似した考へである。徂徠は「神道」といふ語を易經の中から見出して、我國の神道と稱するものも、その類であるとした。これは、徂徠の弟子太宰春臺が辨道書を著して、日本の神道も支那の聖人の道に外ならないと言つたことの淵源を爲すものである。

## 一〇　新井白石

ここに一言せねばならぬのは、闇齋、蕃山、素行の後で、徂徠より前に出た新井白石である。白石は神道家の經典とする所の舊事本紀を取つて、その中の神代の記事から歴史的事實を探らうとした。これは、神代の記事から哲學を探らうとする山崎闇齋などの態度とは寧ろ正反對のものである。羅山

は「神道とは豈に二ならんや」と言つたが、白石は直ちに神を以て人としたのである。そして古史通を著した。高天原は天ではなく、常陸國多珂郡であるといふことを言つた。そして又、次の如きことをも言つて居る。

我國上古の事、猶誣ふべからざるものは、世の人の言嗣ぎ語嗣ぎし處の語言の間にある也。(中略)上古の語言のありしままに猶今も傳はれるは、歌詞と地名との二つ也。(中略)ここをもて今によりて古を考ふるにおのづから其徵とするに足れるものある有り。世の人其心を用ゆる所、精しからず。いまだかつて、我王迹の肇れる地を知る事を得ず、みだりに異朝の書を徵として、我國は夏の少康の後也、我祖は呉太伯の後也など申すは異端の徒の伊奘那天、毘盧遮那を以て天祖と誣申す說に相同じ。惟皇上天、斯人に衷を降し給ふ。いづれの方にか神聖を生じ給はざるべき。いかんぞ、必ず其言ふ所の華にして聖を生じ、其いふ所の梵にして佛を生ずるのみなるべき。或は又其事を神にしてこれを祕するは天統を尊ぶ義也といふべけれど、其民を愚にして自ら尊大にするは、秦の二世にして滅びし所也。天の昭昭たるは横目の民、望て視ずといふものなし。其天たるの所以に至ては、聖も又知り易からず。これ其事を神にして之を祕するが爲にあらず。我國の皇統の天地と共に悠久におはします故も、又神にして祕する事により給ふべきにあらず。

上古の傳說にある神祕的の部分を除去しようとするのは、儒者本來の傾向である。白石はそれを徹底せしめた。聖人は、支那印度のみならず、我國にも出で得る所以を論じて、皇祖を以て聖人となし、且つ皇統の天壤無窮なる理由は皇祖を神とする所に存しないとしたのは特色ある議論である。

## 二　徂徠の前後の神道と儒學

徂徠以前の儒者が見た所の神道は、神道五部書を根本經典とした伊勢神道、唯一神道であつた。然るに、神道五部書は元文元年（二三九六）に吉見幸和の五部書說辨が著されて、後世の僞作であることが明瞭となつたので、その權威を失つてしまつた。徂徠以前の儒者が神道と結合したものは宋儒の學であつた。然るに、宋儒の學は素行以來の古學によつて、その基礎を動搖せられた。徂徠の見た所の神道は支那上古の神道と同一のものであつた。徂徠以後の神道は國學者によつて新に開かれた復古神道である。復古神道と唯一神道との關係は儒敎の古學と宋學との如きものである。徂徠以後の儒學は古學であり、折衷學であり、考證學であつて、宋儒の學は寛政異學の禁によつて、その勢力を恢復したかの如くには見えたけれども、もはや思想的には微力のものとなつた。思想的には寧ろ陽明學が勢を得て來た。神道と儒學とは各獨自の途を取つて發達した。國學者は儒者を排擊したけれども、儒者は國學

者の言ふ所を以て一國限りの私言として居た。しかし、神道は國體の上に立つものである。神道と結合することを考へないものは、儒教でも、其他如何なる思想でも、皆我國に於ては、浮萍のやうなものである。たとひ、一時は繁茂しても、流失の厄を免れ得ない。その間に、一生面を開いたのは、實に後期の水戸學である。

## 一三　本居宣長と頼山陽

後期の水戸學を論ずる前に、先づ注意すべきものは、徂徠以後の國學者と漢學者との意見である。それらの代表者として、本居宣長と頼山陽とを擧げよう。

本居宣長は、その著なる直毘靈に於て、神道を論じて次の如く言つて居る。宣長は、神道に於ては、特に各人の心の修養を說くべきものでなく、又各人皆神となることなどを望むべきものではないとして居る。これは徂徠の說に似て居る所があるのである。

おのが身々に受行ふべき神の道の教などいひて、くさ〳〵ものすなるも、みなかの道道のをしへごとをうらやみて、近き世にかまへ出でたるわたくしごとなり。あなかしこ、天皇の天の下しろしめす道を、下が下として、己がわたくしの物とせむことよ。人はみな產巢日神の御靈により

て、生れつるまに〳〵、身にあるべきかぎりの行は、おのづから知りてよく爲す物にしあれば、いにしへの大御代には、しもがしもまで、ただ天皇の大御心を心として、ひたぶるに大命をかしこみゐやまひまつろひて、おほみうつくしみの御蔭にかくろひて、おのもおのも祖神を齋祭つゝ、ほど〳〵にあるべきかぎりのわざをして、穩しく樂しく世をわたらふほかなかりしかば、今はた其の道といひて、別に教を受けて、行ふべきわざはありなむや。

これは天皇の御教に從ひつゝ、各人の良心のまゝに行ふ外に、何の道もないといふのである。玉鉾百首に、この事を歌つて、次の如く言つて居る。

かもかくも時の御のりに背かぬぞ神のまことの道にはありける。

時々の御法も神の時々のみことにしあればいかでたがはむ。

そして、儒教佛教については、又、玉鉾百首に、

釋迦孔子(さかくじ)も神にしあれば、その道も廣けき神の道の枝道。

と言つて居り、又、玉勝間には、

大かたよろづの事、おのづから、これにもかれにも、かよひて似たることは、かならずまじる物にて、此道も、儒のおもむきとかよへるところもまじり、佛の道とも似たることはまじれれば、

おのづから、かの老子とも、かたはし似たるところ通へるところは、などかまじらであらむ。

と言つて居る。

賴山陽は、又日本政記に於て、道を論じて、次の如く言つて居る。

道一而已矣。道之在二天下一也猶二日月一也。日月者、天下之日月也。非三一國所二私有一也。道亦然。（中略）今天下之仁義也、儒者指而私レ之曰、是漢之道也。有下稱二國學一者上、斥而外レ之、曰是非二我之道一也。皆非也。道豈有二彼此一。（中略）夫道一也。則學亦一也。寧有三所レ謂國云者二乎哉。陋哉。

（應神天皇の條）

これは、儒教を以て普遍的眞理を說いたものとして居るので、特に日本の道とか、神道とか、乃至其他の哲學宗教などが儒教の外に存在することをば全然認めないものである。

それから神道を評しては、

世之稱二神道一者、悠繆荒誕、而無レ益二於民一。皆崇神之罪人也。吾嘗稱、王業衰而神道興、何則是祖宗之事也。當二王政盛時一、誰敢騰二之口舌一、以樹二私說一哉。騰二之口舌一、以樹二私說一者、始二於卜部兼俱之敎二足利義尙一。噫彼爲二何等時一邪。宜乎出下此無二忌憚一者上也。（崇神天皇の條）

と言つて居る。この文の中に見える卜部兼俱とは唯一神道を唱出した人のことである。又、國學を論

じては、

余嘗謂、王迹熄而神道興。當二其盛時一、誰敢畀二祖宗之事一、嘵々樹二門戸一哉。如二近時本居氏一、尤甚者也。余嘗謂二其徒弟一曰、子之師幸不レ出二八九百年前一耳。若然、必不レ免下議二王憲一之誅上。又謂レ之曰、子等小二視我邦一。故介介然、抑レ漢揚レ和爲レ務。如レ余以爲、我邦至大、取二四外所レ貢文籍一、以爲二我用一。何敢以レ漢爲レ對。其人爽然。然渠其混二是非一、宗二自然一、實竊二取靑牛紫氣之旨一。壞二人心一非レ小。豈可レ謂二之大和魂一哉。（山陽先生書後、讀本居氏家言）

と言つて居る。山陽の思想に於ては、皇政の盛なる時代には、特に神道とか國學とか稱する學派の發生すべき筈がない。皇政の盛なる時代は卽ち儒教の精神の盛なる時代でなくてはならぬといふのである。山陽は儒教一筋で押通さうとするのである。

山陽は神代のことについては、

鴻荒之事、和漢同然、置而不レ論、可矣。雖レ然、祖宗之所二源始一、亦臣子之不レ可レ不レ知者。非レ如二漢人之語二軒羲一也。

と言ひ、そこで天照大神に論及して、

蓋大日孁貴之德、雖レ不レ可二窺測一、徵二之神器一、如レ有レ可二得而言一焉。夫鏡者明也、劍者武也、而

玉僞者仁也、信也。仁信明武、繼レ天君レ民之道盡矣。故以遺ニ子孫一曰、視レ此猶レ視レ我、國祚之隆、當下與ニ天壤一無上レ窮。因ニ其言之驗ニ於後一、可四以知ニ其德之基ニ於前一已。吾聞下大廟之充ニ神庫一者、耕織之具爲上レ首。因レ此觀レ之、其猶ニ后稷一歟。及レ至ニ玄孫一(神武天皇)、發ニ跡西土一、整レ旅東征、與ニ文武之業一無レ異。而垂ニ統千葉一、一姓不レ替。足ニ以眇ニ視彼八百載一。其德果不レ可レ測也。(崇神天皇の條)

と言つて、天照大神の御德の廣大にして測るべからず、從つて大神の御子孫の天壤無窮に皇位を保ちたまふ所以を說いて居る。しかし、大神を以て周の始祖で、舜の大臣なる后稷に比較し、神武天皇を以て周の文王武王に比較した所は、なほ疑問の餘地あるものとせねばならぬ。それでは日本の國體が充分には明かにせられないのではなからうか。

宣長と山陽とは、全然反對して居るやうでもあるが、その間にまた自ら一致すべき點もあるのである。宣長は良心の存在を否定しては居ない。そして孔子の道を以て神の道の枝道であるとした。山陽は儒教を以て良心を本として居るものとし、儒教渡來以前にも我國に儒教精神は存在したとするものである。兩者は良心を認めることに於て一致して居る。

## 一三　後期の水戸學

後期の水戸學の主張は、德川齊昭の弘道館記に於て、最も簡明に提示されて居る。

弘道者何。人能弘レ道也。道者何。天地之大經、而生民不レ可二須臾離一者也。弘道之館、何爲而設也。恭惟上古神聖、立レ極垂レ統、天地位焉、萬物育焉。其所下以照二臨六合一、統中御宇内上者、未三嘗不下由二斯道一也。寶祚以レ之無レ窮、國體以レ之尊嚴、蒼生以レ之安寧、蠻夷戎狄以レ之率服。

これは、宣長とも山陽とも一致するところの思想である。又、その文の次に、

而聖子神孫、尙不二肯自足一、樂下取二於人一以爲上レ善。乃若二西土唐虞三代之治教一、資以贊二皇猷一。於レ是、斯道愈大愈明、而無二復尙一焉。

これは、山陽と一致するものであるが、宣長とも必ずしも一致し難いものではない。

弘道館記の終の方には、

奉二神州之道一、資二西土之敎一。

敬レ神崇レ儒、無レ有二偏黨一。

などの文がある。これは山陽よりもむしろ宣長に近いところがある。藤田東湖が書いた弘道館記述義

には、この條に於て、

敬神、上文所謂奉二神州之道一者、崇儒、所謂資二西土之教一者。世之奉二神道一者、談二說鴻荒一、張二皇幽眇一、或有二索レ隱行レ怪之弊一。是偏二於神一也。其學二儒教一者、大二異邦一小二神州一、動有下顚二倒本末一之失上。是黨二於儒一也。皆學者所レ宜レ戒。蓋其無レ有二偏黨一者、乃敬神崇儒之至。

抑旣曰二敬神一、又曰二崇儒一。然別神之與レ儒、固無レ有二尊卑一。敬二唐虞三代之君一、必如レ事二我神祇一、而後爲レ無二偏黨一乎。曰、是徒泥二於其文一、而不レ本二於其意一也。神州自神州、西土自西土。彼指レ我爲レ外、我亦斥レ彼爲レ下。西土之教、尤嚴二內外之分一。我資而用レ之、亦不レ可レ不レ正二上下之別一。單就二西土之教一而論レ之、猶且然。況尊二國體一愼二名分一者、固皇朝所二尤重一耶。

我公恆有レ言曰、讀二西土之書一者、宜下以四其所三以尊二堯舜一、尊二我神皇一、以四其所三以事二上帝、事中我天祖上。及レ建二斯館一、孔廟之制、議論紛紜。或謂宜レ設二塑像一。或謂宜レ配二十哲及諸儒一。公斷然唯祀二先聖一、而不レ及二配享之議一。又不レ用二後世所レ奉之尊號一。嘗齋戒盛服、親書二牌子一曰、孔子神位。愼之至也。所謂無レ有二偏黨一者、意其在レ斯歟。

これは、神を主として儒を從とするの說である。弘道館では建御雷神と孔子とを祀つた。これは幕府及び諸藩の學校で、單に孔子を祀つたのと大に異なつて居り、正に一新生面を開いたものである。

弘道館は天保九年(二四九八)に創立せられたが、後期の水戸學を開いたのは藤田東湖の父なる幽谷であつた。幽谷は荻生徂徠の學統をも承けて居る人である。その弟子會澤正志齋が著した及門遺範に、幽谷の國體論を記して、次の如く言つて居る。

先生尤重二君臣之義一。恆語レ人曰、天祖垂レ統、天孫繼承、奉二三器一以照二臨宇內一。皇統綿々、與二天壤一無レ窮。實如二天祖所一レ命。是神州之所三以冠二四海萬國一。天祖天孫、固與レ天一矣。世々相襲、號二天津日高一、騰極謂二之日嗣一。神天合一、與下殷周配レ天尚不レ免二於與レ天爲一レ二者上不レ同矣。先生論二國體一、其大旨如レ此。蓋奉二義公之遺意一云。而近時稱二皇國學一者、荒唐不經之談、則亦所レ不レ取也。

この神天合一の思想は徳川光圀の遺意を奉じたのであらうと言つてある。けれども、また一方では徂徠の舊事本紀解序に記した天祖祖天の考と相通ずる所がある。光圀時代の水戸學は前期のものであるが、光圀の子綱條が光圀の禮儀類典に附した序文には、

在昔神祖聖宗之建レ邦也、惟敬以事レ天。

とあつて、祖宗と天とは別物となつて居るのである。祖宗と天とを合一したのは、卽ち後期の水戸學の最大特色であつて、これは儒教に無いものである。

儒教で言ふ所の天と、我國の天神とは同一の觀念であるか否かは、尙闡明を要することである。羅山がその形跡を洩し、白石がそれを明言した如く、神を人であるとすれば、その異なることは明かである。しかし、後期の水戸學に於ては更に別の意見を立てて居る。東湖の弘道館記述義に、

天祖上同二體於天日一、下留二靈於寶鏡一。然則赫々太陽、巍々勢廟、實天祖精靈之所レ在、歷代天皇、尊レ之奉レ之、而敬レ天事レ祖之義兼存焉。固非下彼異邦之主、求二皇天上帝於蒼々漠々之中一者之比上也。

と論じて居るのは、天照大神は太陽と皇祖との合一であつて、儒教で言ふところの蒼々たる天に宿る上帝とは異なつて居ると解して居るのである。これも亦儒教ではなく、普通の儒者の言はないことである。後期の水戸學は儒教を崇んでは居るが、それを神道に從屬させて居たことは明瞭である。

後期の水戸學は大に古學の系統を承けて居る。會澤正志齋の下學邇言を見れば、伊藤仁齋については、

伊藤氏唱二古學一、以二天地一爲二活物一。其言以レ仁爲レ旨、發二明擴充培植火然泉達之義一。(中略)夫日域生氣所レ發、太陽所レ出、故如二二氏論一レ學、亦得二聖人貴レ陽之意一、以應二東方發生之義一。

と推稱して居る。ここに二氏とあるのは、貝原益軒のことを併稱したのである。益軒もまた、大疑錄

を著して、宋儒の理氣分離說に疑を挾んだ人である。また、神道については徂徠と類似した見解を取り、

易曰、聖人以二神道一設レ教、而天下服矣。唐虞三代敬レ神畏レ天、與二天朝之古一、不レ期而一轍。蓋禮者原二天道一、因二人情一而制レ之。天地正氣之所レ萃、人心秉彝之不レ可二磨滅一。其名物度數、雖レ有二其異者一、而深意所レ寓、未三嘗不二相同一。豈不レ偉哉。

と言つて居る。これらも亦、朱子學者などの言はぬ所である。

後期の水戸學は、實に幕末掉尾の大思想である。德川幕府三百年に起つた各種の思想はみなここに折衷せられて居る。林羅山の皇道は儒教本位たるを免れなかつたが、後期の水戸學の神皇の道卽ち皇道はもはや儒教をその從屬としてしまつたのである。そして、皇道が儒教を從屬とする時代は、常に海外の勢力が皇國を壓せんとする形勢の著しいのに對して、國家的意識が緊張する時代であつて、前には、闇齋、蕃山、素行の時代に、淸朝の勃興があり、後には東湖、正志齋の時代に歐米列强の東洋進出があつた。

## 一四　學習院の學風

水戸に弘道館が開かれた頃、京都では學習院が建てられた。これは皇室直轄の學校である。仁孝天皇の叡慮から出たもので、天保十三年(二五〇二)に創立の議が定まり、弘化四年(二五〇七)に開校せられた。その時掲げられた學則は次の如くである。

履二聖人之至道一、崇二皇國之懿風一。不レ讀二聖經一、何以修レ身。不レ通二國典一、何以養レ正。明辨レ之、篤行レ之。

聖人の至道とは儒教を指したものである。しかし、それに併せて皇國の懿風を掲出せられたのは、幕府の學校とその趣を異にしたもので、水戸學の主張と共鳴するものである。ただ、儒教を先にし、國典を後にしてあるのは、何となく齒痒いやうな處がある。その頃、京都に座田維貞といふ學者があつて、學習院の事にも關係して居たが、その著した國基といふ書は、孔子が春秋を著して尊王の義を明かにしたことを引いて、我國の皇統の無窮なのは孔子の理想に叶つて居ると論じ、從つて禪讓放伐は正道でないことを明かにし、そして、周の武王に從はなかつた伯夷叔齊を讃嘆して居る。又、水土の說といふことを言つて、孔子が湯武を非難しなかつたのは支那の國土の事情によつたもので、この民族的色彩を除けば、孔子の道の本體は能く萬國に通ずべきものとした。これは儒教を日本的に見直して大にそれを用ひんとするものである。この書は縉紳の間に大に推稱せられて、國基題詠集といふも

のも出來て居る。菅家遺誡の中にある、

凡神國一世無窮之玄妙者、不レ可ニ敢而窺知一。雖レ學ニ漢土三代周孔之聖經一、革命之國風、深可レ加ニ思慮一也。

凡國學所レ要、雖レ欲下論涉ニ古今一究中天人上、其自レ非ニ和魂漢才一、不レ能レ闚ニ其閫奧一矣。

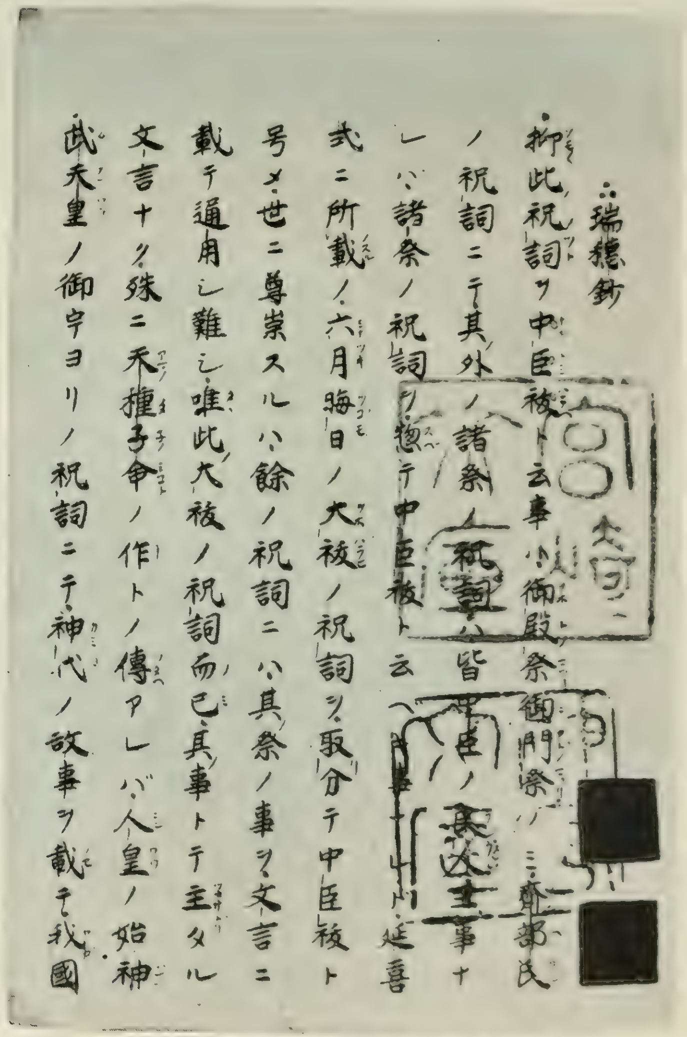
の二條を表彰して、嘉永五年(二五一二)に北野の祠前にその碑を建てたのも、また維貞の事業であつた。

## 一五　餘論

羅山が喝破した、「神道人道豈に二ならんや」といふことは、徳川幕府三百年を通じての支配的思想である。これには國學者も漢學者もみな遁れることは出來ない。神社の祭祀もまた倫理的意義のものとなつて、足利時代のやうな宗教的のものではなくなつた。この思想は、實に明治維新以後に傳承されて現今でもなほ神社の祭祀は宗教の外に置かれて居る。そして人道の强調はまた佛教衰頽の原因ともなつて居るのである。

神道が人道であることは、明治天皇の教育勅語に於て明示したまへる所のものである。「皇祖皇宗の遺訓」は皇道であり、神道である。そして、「古今に通じて謬らず、中外に施して悖らず」と仰せ

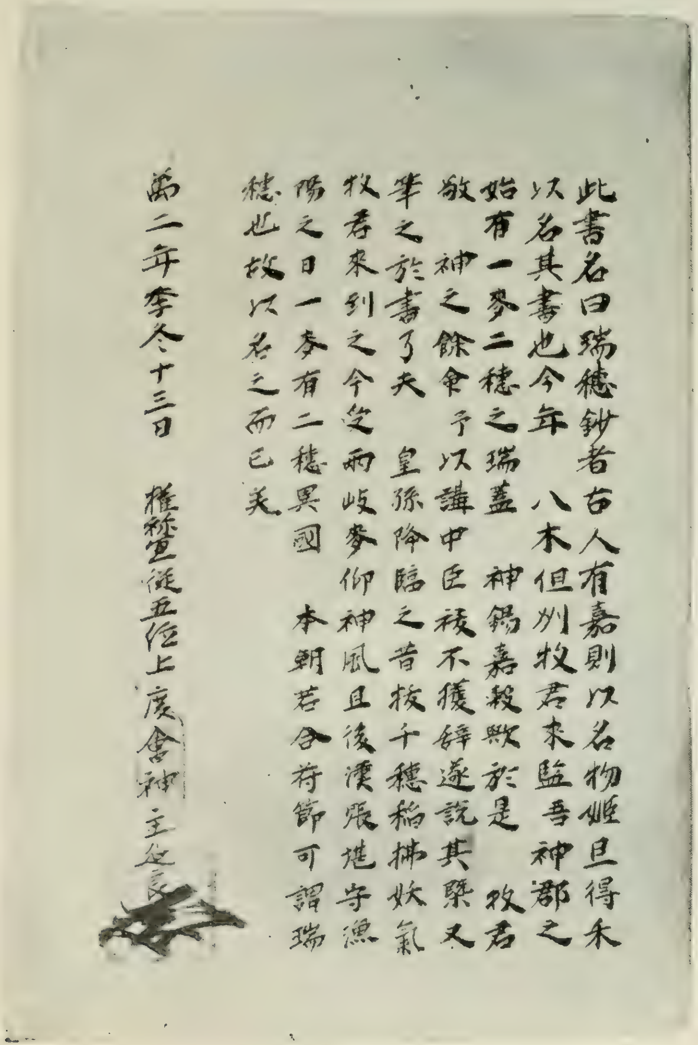
られたところに、上古の神道もまたこの人道に外ならざる意義があり、儒教、佛教、基督教、其他の外國の學問宗教をも包容して、世界教學の中心たるべき基礎が定められて居るのである。



∴瑞穗鈔

抑此祝詞ヲ中臣祓ト云事ハ御殿祭御門祭ハ齋部氏ノ祝詞ニテ其外ノ諸祭ノ祝詞ハ皆中臣ノ主事ナレハ諸祭ノ祝詞ヲ惣テ中臣祓ト云[illegible]延喜式ニ所載ノ六月晦日ノ大祓ノ祝詞ヲ取分テ中臣祓ト号ス世ニ尊崇スルハ餘ノ祝詞ニハ其祭ノ事ヲ文言ニ載テ通用シ難シ唯此大祓ノ祝詞而已其事トテ主タル文言ナク殊ニ天種子命ノ作トノ傳アレハ人皇ノ始神武天皇ノ御宇ヨリノ祝詞ニテ神代ノ故事ヲ載テ我國

度會延佳自筆瑞穗鈔（神宮皇學館藏）



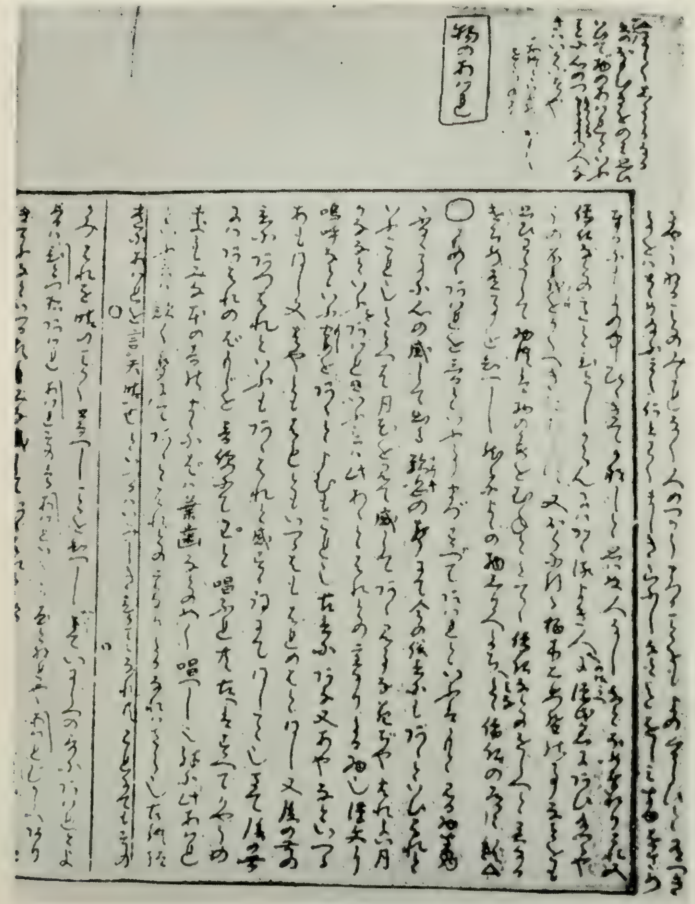
此書名曰瑞穗鈔者古人有嘉則以名物姬旦得禾以名其書也今年　八木但州牧君來監吾神都之始有一莖二穗之瑞蓋　神錫嘉穀歟於是　牧君敬　神之餘命予以講中臣祓不獲辭遂說其槩又筆之於書了夫　皇孫降臨之昔拔千穗稻拂妖氣牧君來到之今[illegible]兩岐麥仰神風且後漢張堪守漁陽之日一麥有二穗異國　本朝若合符節可謂瑞穗也故以名之而已矣

[illegible]二年季冬十三日　權禰宜從五位上度會神主延佳

同右



瀧澤馬琴肖像（鈴鹿三七氏蔵）



本居宣長源氏物語玉の小櫛稿本（清造氏蔵）

# 儒學と國文學との關係

久松潜一

## 一　國文學に支那文化を攝取する態度

國文學と支那文化との關係は極めて深いものがある。國文學はその發生以來漢字その他に於て漢文學をとりいれつつ、これを固有の精神の中に攝取して來たのである。日本の文學評論に於て中心をなして居る歌論は支那の詩學の影響をうけることが多く、歌論のはじめの書と見られる、寶龜三年の歌經樣式に於ける歌の分類や歌病論は詩學の分類や修辭論から得た所が多い。空海の文鏡秘府論が日本の文學論に於て重きを占めるのもさういふ點から來て居る。古今和歌集の假名序に於ても詩學の六義が六體として用ひられて居る。風雅頌賦比興が「そへうた」「かぞへうた」「なずらへうた」「たとへうた」「たゞことうた」「いはひうた」として和歌の分類に用ひられたのである。その間に日本化して

用ひて居ることは風を譬喩の一體である「そへうた」とした如きにも見られるが、なほその密接な關係は否定されないのである。日本文學精神としての幽玄の語が本來は漢語であり、唐の駱賓王の螢火賦に「委性命於幽玄、任物理於推遷」とあるをはじめとして諸書に見られるのであり、それが中古時代に於て日本文學の中にとり入れ、古今集眞名序や忠岑十躰に用ひられて以來、次第に尊重され、中世に至つてはその時代の重要な文學精神となるとともに、優艶もしくは「美しく柔和」といふ如き內容を加へられて來た過程も日本の文學と漢文學との關係を示す興味深い例である。さうして全體として日本文學の中に漢文的表現が重要な一分野を占めて居ることは言ふまでもないのである。その密接な交渉を認めるとともにその攝取の態度に於て和魂漢才といふ態度を認められるのである。卽ち日本的なるものを中心として漢才をとり入れてゆくのである。この和魂漢才の古典については菅家遺誡が擧げられるが、この書の眞僞に就いては諸説があるから暫く措くとしても、平安時代の文獻にも和魂と漢才、もしくは大和魂(註)と「からさえ」とを對比して大和魂に中心を置く考は、屢〻見られるのである。源氏物語の少女の巻にも「猶さえをもととしてこそやまとたましひの世にもちゐらるゝかたもつようはべらめ」とあつて、大和魂が「さえ」卽ち漢才を材料としてとり入れてこそ世に活用されることも强いであらうと言つて居る。更に今昔物語にも

才は微妙じかりければども、露和魂なかりける者にて、此の心幼き事をいひて死しぬる也。

とあり、後拾遺集にある大江匡衡と赤染衞門とがその家の乳母の乳の少いことに託して贈答した

儚くも思ひけるかなちもなくて博士の家の乳母せむとは　大江　匡衡

さもあらばあれやまと心しかしこくばほぞぢにつけて有らすばかりぞ　赤染　衞門

によつても結局、大和心を根柢として漢才をとり入れると考へて居る思想が見られるのである。

これは中世、近世に至つても常に、一貫した漢文化、もしくは外來文化を受容する態度であるのであつて、近世の國學に於ても本居宣長は初山踏の中に「漢意儒意を淸く濯ぎ去つて、やまと魂をかたくする事を要とすべし」と言つて居るが、しかし一方に大和魂をかためてから漢籍をもよむべきであるとし、「漢籍を見るも學問のために益おほし」とあるのは和魂漢才の精神の現れと見られるのである。この事は秘本玉しくげの中にも「本朝とても中古以來はおほく漢様の政にて、風俗人心もなへて漢様に成ぬる世中なれば、今は末末の事には、かの國の道をも、まじへ行はではかなはぬやうなることもある也。されば國君たる人は申すに及ばず、その政を執行ふ人々も、隨分に漢學をもして其道の宜しき所をば事によりて取用ひもすべく、又かの國の代々の治め方の實によろしからざることをも考へしり、其根本の所に至ては、大に違ひ有といふことをよく辨へ悟りて、ゆめゆめかの道にかたより

惑ふべからず。かへすかへすも此根本の所ぞ大切なる」とあるのは同様の精神である。大和魂をかためること、卽ち天照大御神の道を中心としながら、一方に漢籍をも重んずべきことを說いたのが、宣長を中心とする近世國學の態度であつたのである。

さうして儒學が日本文化の上に大きな勢力を得て來た近世に於ても、根本にはこの立場があつたと思はれるのであるが、國文學と儒學との關係に於てもこの事が言はれるのである。

近世に於ては儒敎的立場が、文學觀の根柢にあつたのみならず、文學創作の上にも、儒敎的立場が著しく作用してゐた。所謂勸善懲惡思想による文學批評や文學創作はその立場の最も顯著な現れである。卽ち近世に於て伊勢物語や源氏物語に對する古典物語の批評に於ても安藤爲章の如き勸善懲惡的立場の批評となつて居るのである。が歌論に於ても田安宗武の如きには勸善懲惡思想が見られるのである。更に近世の小說戲曲に於ても、勸善懲惡思想が批評の基準であつたのみならず、創作の基準ともなつてゐたのである。

次に主として、近世に於ける儒學と國文學との關係を見るに當つて、第一に儒學と國學との關係を考へ、第二に文學に於ける勸善懲惡思想を中心として考察したい。さうして第三に勸善懲惡思想と國學もしくは國文學の重要な精神としての「もののあはれ」の文學觀との關係を見たいのである。

國學に於て支那思想をどういふやうに考へてゐたかといふと、眞淵が國意考の中に或人が、自分は歌のやうな小さい事を心とはせず、世の中を治める唐國の道を學びたいと言つたのを、眞淵は笑つたゐたのを、後に、その理由をきかれたので、眞淵は唐國の儒は「天地の心をしひていと小さく人の作れるわざにこそあれ」と答へて居るのであるが、しひて小さく人の作つたといふのは理にとらはれる態度をさしたのである。さうして日本の國をといて

此御國はもとより人のなほき國にて、少しの教をもよく守り侍るに、はた天地のまにまに行ことと故に、教へずして宜しき也。さるをから國の道來りて人の心わるくなりたれば、から國にになるほどの教といふといへど、さる教は朝に聞て夕はわすれ行もの也。

とも言つて居るのである。

たゞ宣長に於ては理といふ點から更に進んで種々の方面から說明して居るのである。直毘靈に於て彼が支那の道と日本の道とを比較して、支那の道は所謂理にのみ走つたものであるとする所に、眞淵と通ずるのであるが、更にかういふ道を事々しくいふのは道が行はれてゐないためであるとし、また

さういふ道もその成立の根本を極めると
　たゞ人の國をうばはむがためと、人に奪はるまじきかまへとの二つにはすぎずなもある。
とするのである。更に宣長は善きあしき萬の事を佛道では因果といひ、漢の道では天命といふのをと
りあげて居ることをいひ、天命を論じて、
　抑天命といふことは、彼國にて古に君を弑し國を奪ひし聖人の己が罪をのがれむためにかまへ出
　たる託言なり。
とも言つてゐるのである。その他宣長は眞淵の理論を敷衍して種々の方面からといて居るのである
が、根本に於ては同様である。さうしてかくの如き理や道や天命といふ如きことを立てずして自然で
ある所に日本の特質があり、また道があるとするのである。
　この「おのづから」といふ立場はあらゆる方面にも言はれて居るのであつて、言語に於ても支那音
や漢語に對して、日本の言語の優秀性をといて居るのであつて、契沖もすでに「まことに本朝の音は
詳雅なり」（精撰本、萬葉代匠記）と言つて居るのである。支那音は詳雅でないとし、その理由として「褒
世に至つては中區を去つて邊地を都としければにや」云々と言つて居るが、宣長にしてもこの點を强
調して居るのであつて、上田秋成と宣長との日本の音に對する論爭である「呵刈葭」に於ても宣長は

日本の音の自然であることを極力とくのである。

さてかむをかんと唱へ、右三郎をさん共、さむ共、さぶとも唱へなれたるは、いかにも自然の音便にしておのづから、然唱へなれたるもの也。凡て音を訛り言を訛るも皆自然の事にて然訛るべき理有ておのづから訛る也。

とも言つて居るのである。

・かういふやうにして國學に於ける支那思想や漢字漢文に對する批判はすべて自然でない、おのづからでないといふ點に向けられ、そこに日本的思想との相違をとくのである。

さうして眞淵や宣長は理を以て儒教の思想となし、これを退けるとともに、天地の自然を重んずるのであるが、この自然を尊重する所に、眞淵等の立場が、自然主義的な色彩を帶びてくるとともに、また老莊的な思想に近づいて居る點のあることは疑はれないのである。眞淵が國意考に「又人を鳥獸にことなりといふは人の方にて我ぼめにいひて、外をあなどるものにてまた唐人のくせなり」として居るのもその立場である。この國學の自然を尊ぶ思想が老莊の思想に近いといふ事は當時に於ても言はれて居る所であつて、宣長も直毘靈の中に

神の道はからくにの老莊が意にひとしきかと或人の疑ひ問へるに云々

と言つて居るのである。さうして宣長も

かの老莊がともは儒者のさかしらをうるさみて、自然(おのづから)なるを尊めばおのづから似たることなり。

と言つて居るのである。また古事記の序文の中に、老莊から來た文句のあることをも認めて居るのである。「得レ一光宅、通レ三亭育。」を老子に「天得レ一以淸、地得レ一以寧、王侯得レ一以爲二天下貞一。」(古事記傳引用の文による。老子の原文を省略してある)から來て居ると見て居るのである。然し宣長は老莊の自然といふのは聖人の意のおのづからなるのをさすのであるに對して、日本のおのづからは神のみこゝろより出たるおのづからであつて、そこに相違があるとするのである。老莊は獨善的なおのづからであつて、消極的であり、隱遁的であるに對して、日本のおのづからは、神に隨ふといふ所から、國家的であり、それだけ積極的であるとするのである、この點は萬葉集の憶良の惑情を反せしめる歌に、老莊の立場を批評して「あめならばながまに〳〵つちならば大君います」といつたのと同樣に個人的と國家的との相違とも見られるのである。

さうして、全體として國學と儒學との關係を見ると、文學に於て勸善懲惡思想を通して儒教の影響が著しいのに對して、國學に於ける儒教觀を見ると、儒教に於ける批判が著しい感が多少あるのであつて、こゝに國學に於て排他性が著しいと言はれる所以がある。然し宣長の老莊思想に對する日本の

古道との比較論の如きは、老莊の本質をも認めて居ると見られるのである。

殊に宣長が日本書紀が漢文でかゝれたが故にこれを古事記に比して輕く見る半面に於て日本的立場をよく把握し大和魂をかためた上で漢籍をもよむべきであり、また漢意儒意を排斥した眞意をのべて

おのれ何につけてもひたすら此事をいふは、ゆゑなくみだりにこれをにくみてにはあらず、大きに故ありていふ也。

とし、古の道が忘れられたのは漢意に心がまどはされたためであり、この事は千有餘年世の中の人の心の底にしみついた痼疾であつて、容易にのぞきがたいために、此漢意を清く除いて大和魂をかたくするために、はげしくこの點をとくのであるとしたのは、當時の現實の社會の必要からやむを得ず排斥するのであるとする宣長の立場をよく示すものである。從つてこの漢意さへのぞけば漢籍をよむのも差支へないとするのである。そこに彼の大きな態度をも示して居る。また彼が佛教を排斥しながら家庭的に佛教を信仰して居ることをといた所に

すべて下たる者はよくてもあしくてもその時々の上の掟のまゝに從ひ行ふぞ、即ち古の道の意には有りける。吾はかくのごとく思ひとれる故に、吾家すべて先祖の祀、供佛、施僧のわざ等もたゞ親の世より爲來りたるまゝにて世俗とかはる事なくして、たゞこれをおろそかならざらんとする

のみ也。

學者はたゞ道を尋ねて明らめしるをこそつとめとすべけれ、私に道を行ふべきものにはあらず、されば随分に古の道を考へ明らめて、そのむねを人にもをしへさとし、物にも書遺しおきて、たとひ五百年千年の後にもあれ、時至りて上にこれを用ひ行ひ給ひて、天下にしきほどこし給はん世をまつべし、これ宣長が志也。

と言つて居るのは學問と生活との間に限界を置いた點を示して居るのであるが、宣長の儒佛等の排斥の必ずしも單なる排斥ではなかつたことを知られるのである。

更に篤胤に至つては、儒佛等の排斥は甚しくなるのであるが、篤胤は一面に於ては儒佛その他を究めながら一面にはこれを非難する所から極めて具體的なる問題をとらへてといて居る。さうして篤胤も儒佛等のよき點をとり入れようとする意識を有したのである。たとへば篤胤の鬼神新論は彼が文化二年三月に書いたとあつて、三十歳の時の著であるが、鬼神といふ問題をとりあげて支那に於ける鬼神論をといて居るのであり、日本の神と異なつて、支那の神が所謂怪力亂神であり、國家的性質が尠い事をいひ、また

赤縣の古書ともに、上帝后帝皇天など云ひ、また唯に天とばかりも云ひて、甚く可畏き物にいへ

るは天津神の天上に坐まして世中の事を主宰り給ふことを彼國人も且々推察れるおもむきなり。

として、支那の天の崇拜をば、日本の天神の思想から來たとするのは從ひがたい點もあらうが、とにかく篤胤は早くから相當にひろく支那の典籍を讀んでゐたことは事實であつて、それをば彼の國學の上に役立てて居るのである。彼が漢籍を扱ふ態度については

> 抑赤縣洲の事赤縣籍の上の事は儒者こそあれ我徒の煩はしく云はずともありぬべき事なれど、此事を熟く辨へものせる漢學者の無事を傍より見るに得堪ねば差出たる事なれど、いかで論ひ試ばやと思ひなりて、今は孔子の言と行とのすべて鬼神の上に及べるを論語と中庸とに摘出て、大概は赤縣の事實に合せて徵とし古傳説に照して其事有なる事を曉し、また因にすべて神祇の事に渉る事ともを古意を以て論はむとするなり。漢學の人々願はくは孔子の毋レ意毋レ必毋レ固毋レ我てふ情にならひ公平なる心を持て熟く見別ち給ひねかし。

と言つて居るのは彼の立場をよく示して居るのである。かくの如くして近世國學に於ける儒教觀も日本の本來の精神をかためるために非難に過ぎた點もあるけれども、根本に於ては大和魂をかためるためであつて、大和魂をかためた上では漢籍をもとり入れようとしたのである。

## 三　勸善懲惡思想に於ける國文學と儒學との交渉

次に儒教道德を日本文學にとり入れるに當つて、これを通俗化したとも見るべき勸善懲惡思想を中心として少しく考察したい。先づはじめに勸善懲惡思想の根據となつて居る思想を見るに儒教から來て居ることはいふまでもないが、直接には儒教道德を當時民衆生活の上に卑近な形で表した心學等から得た點も多いと思ふ。心學はいはゞ儒教道德を極めて卑近な言葉によつてとくとともに國民的にもして居るのであつて、元文四年になつた石田梅巖の都鄙問答等から始まつて多く殘されて居るが、天保十年の柴田鳩翁の鳩翁道話の如きは最も代表的なものであると思はれる。この心學を見ると、勸善懲惡的な思想は明らかに見られるのであつて、たとへば安永九年になつた山東指月の勸善小話を見ても

　人にあだし物をそこなふ時は、そのわざはひかならずいたる。たゞ積善は餘慶あり、積惡の餘殃あるを知り、ひといざなへども惡を同じうせず、人そしれども善をわすれず。

といふやうに見える。

而して多くの實例として示される說話はこの立場にたつものが多いのである。この見解は直ちに小

說戲曲に於ける勸善懲惡主義となるものと思ふ。

これを寫實的傾向の多い作家に就いて見るに三馬の如きにもこれを見る事が出來る。浮世風呂や浮世床は寫實的傾向の作品として最も代表的のものであると思ふが、浮世風呂の最初に大意としてある見解を見ると、教訓的な立場にたつて居るのである。彼は「つら〳〵かんがみるに錢湯ほど捷徑の教諭なるはなし。」と述べてゐるのであるが、その根據として錢湯に於ける裸形は人間の自然のまゝの姿を示して居る。そこには僞も見えもあり得ない。すべての形式から離れて主人も丁稚の區別もない。生れたまゝの姿が現れるのである。そこにはすべての私がないのであるが、しかも三馬によれば錢湯にも五常があるとする。留桶を我儘に用ひず、私なき中に禮儀が行はれるのである。そこに自然のまゝの中に眞の私なき教が見出されるとするのである。彼が風呂や床屋を材料にとつてうつしたのは、自然のまゝの人間の姿を見るといふ寫實的立場から見て最も至當である。而もその間に教を見ようとする所に教訓的立場が見られるのである。

而してこの自然のまゝの中に教を見ようとするのは、鳩翁が「仁と申す事は畢竟トント無理のないと申す事でござります」といふ立場と同樣である。而して勸善懲惡的な立場から錢湯に於て五常にそむく行爲をすれば、直ちにあらはれるのであり、喧嘩口論喜怒哀樂の高聲御無用の言葉を守らなけれ

ば、仕舞湯に入損ひ入浴をことわられるのである。かくて三馬によれば三史五經は丸薬の如きであるに對して、稗官野史は水あめの如きであつて、素より漫戯の書であつても、心を用ひて讀む時には「懲惡邪正の行狀はおのづからに曉得する」事が出來るのである。かくの如く三馬の如きにも教訓的態度を中心として居るのであるが、人情本に於ても寫實的に人情を寫す事を主眼として居り、その間には道德的に見て淫蕩な描寫も存するに拘らず教訓を標榜するのであつて、春水が教訓亭といつたのもそれを示すものであり、また全體の構想の上から言つて善惡が最後には歸着する所を得るのも、この勸善懲惡主義的見解を形式だけでもとつて居つた事は明らかであると思ふ。

既に寫實的である滑稽本や人情本の如きがこの勸善懲惡主義をとるとすれば、理想的傾向をとる讀本等が、この立場を殊に力強く表して居る事は勿論である。その代表者として馬琴を擧げる事が出來ると思ふ。里見八犬傳の毎輯毎に加へられた序は、この勸善懲惡思想の主張に外ならないのである。馬琴は小說をば學問より劣つたものとして居るのであるが、而もなほ小說は人生に對する多少の意義があるとして居るのは、勸善懲惡的道德觀をこれに見出して居つたのによるのである。たとへば第三輯の序にかくある。

余自レ少愆事ニ戲墨一、然狗才追ニ馬尾一老ニ於閭巷一、唯於ニ其勸懲一毎編不レ讓ニ古人一、敢欲レ使ニ婦幼到ニ

奬善之域一。

そこにはこの立場に就いての彼の强い主張を見られると思ふ。第七輯の序にも

稗史雖レ無レ益ニ於事一而寓以ニ勸懲一則令レ讀ニ之於婦幼ニ可レ無レ害矣。

而して回外剩筆の中に頭陀をして

翁の物の本を作り給ふに、必勸善懲惡を旨としてよく蒙味をさますがことし。こも亦善功方便のみ。

と言はしめて居る。彼が勸善懲惡主義を以て作品の中心として居る事は、是等によつても明らかであるが、然らばこの立場に於ける善と惡との對立、またそれと賞との關係といふ點に就いて馬琴はいかに考へて居つたであらうか。

馬琴は善惡の對立を明らかに認めて居つたと思はれる。近世說美少年錄の序の中に

善美あるときは醜惡なきことを得ざるの義。

といつて居るのも、この對立を認めて居るといへる。

馬琴の作品はこの善と惡とを對立的に見て最後に因果應報によつて善が榮えるといふ觀念を具體化したものであると考へる。而して彼の善惡の觀念はもとより當時の一般道德から來た善と惡とに外な

らないのであつて、彼獨自の見解は見られないのである。たとへば彼の善惡の觀念の具體的に現れて居る作品の上に考へて見るに、八犬傳に於ける八犬士は彼の考へる善の觀念を分解して表したものと思はれるのであつて、仁義禮智信忠孝悌は卽ち善の內容であり、惡は是等の道德律と相反する觀念である。而して是等の總ての德目を具へたものが善であるが、必ずしも是等を全部具へずしても一の方面にすぐれて居れば、善人であつたと思ふ。卽ちどの一點にしても全きならば、田夫野人もまた善であるのである。而して是等は多く男性によつて表されて居るが、女性に於ては貞操節義といふ點が善の主要なる德目であつたのであつて、馬琴の描く女性の善なるものは貞婦であり、惡なるものは淫婦であるといふ點に、多少の例外を除いては判然區別されて居るのを感ずるのである。

かくて彼の勸善懲惡主義は斯くの如く意識された善そのものを高揚するといふ所に中心があり、この點が彼の藝術觀の根本ともなるものと思ふが、この善と美もしくは眞との關係を見る所に馬琴の立場が一層明らかになると思ふ。馬琴に於ては善と美は大體に於て一致する觀念であつたと思ふ。近世說美少年錄の序に

その美たるや眉目の美あり。又稟性の美なるあり。惡にも亦相貌の醜惡あり、心術の醜惡あり、かゝれば容貌は美麗といふともその性毒惡なるものは惡少年といはまくのみ。又容止は醜しとも

その性の美たらんものは美少年とこれをいはん。まいて性と容止と共に善美なるものは是眞の美少年ならずや。

とある。この文に於て美と惡とを對立的に擧げて居る點からも、美と善とに對する明確なる區別はなかつたと思ふ。殊に形狀の美と稟性の美との中で稟性の美を重んじ、この稟性の美が美と醜とを區別すべき根本的要素であると考へた所に美が內面的になつて居る事を感ずるのであり、その點から善と一致するに至るのである。もとより馬琴も美に形狀の美と稟性の美との區別を設けて兩者ともに美なるものが、眞の美であると考へた所に美と善との區別は見えるのであつて、美には形式と內容本質とがあり、その中の內容であり本質的のものが、善であると考へられるのである。

卽ち之を文學の上から見ればもとより形式的美をも重んずるが、文學の中心となるものは內容的美卽ち善であつたと考へたと思はれる。かくて馬琴によれば文學と道德とは本質に於ては、相反するものではないと考へられたと思はれるが、彼が形式的美を認めて居る所に、文學と道德との區別も存すると考へたのである。この點は眞と美もしくは善との關係に於て見られるのである。

馬琴はもとより文學に於て現實的實を必要としなかつたと思ふ。むしろ現實的實と美とは必ずしも一致しない觀念であつたと思ふ。

信言不レ美（中略）美言不レ信

といふのは老子の言に據つたものであるが、なほ馬琴の信と美との一致しないことを見られる。かくして文學に於ては實を美化し、現實を理想化することをとくのであるが、この理想化の方法としては、彼は善惡の因果によつて、現實や或は歴史的事實に、新たなる解釋を加へるのである。現實の事實を見ても、歴史的事實を見ても、善惡の因果應報が行はれない點が多いのである。

これをば善惡の因果應報によつて理想化するのである。俠客傳の序の中にも、自己の解釋により舊記之闕を補ふといつて居るが、闕を補ふのは、善惡の因果律に適合しない舊記の事實を因果律によつて改める事をさして居るのである。かくの如くして馬琴は美と現實的實とは兩立し難い點があるとして、小說戯曲は美の上にたつ以上必ずしも現實的實ではあり得ないと考へて居る。極端なる理想主義者としての馬琴がかくの如き見解をとつたのは寧ろ至當であると思ふ。三馬等が現實的實と美とを一致させようとして矛盾と破綻とを來したのに對して徹底して居るとも考へられる。

然しながら馬琴は小說戯曲に於て美を重んじては居るが、彼の見解として眞を美より重んじて居つたのではないかと思ふ。彼によれば美は眞よりも婦幼の慰めとなり、從つて婦幼に勸善懲惡の思想を示すためには有效であるが、高い意味に於ては價値のないものである。彼が虛文を貴ばずして經籍史

傳、舊記を好むといつたのは、小說戲曲に於ける美を、史傳等の實よりも低く評價して居る點から出發して居ると思ふ。かくの如くして馬琴は眞善美の關係に於て眞を重んじて居るが、文學は美であると考へて居り、そこに文學に於て高い意義を見出す事をしなかつたと思はれる。が更に考へるに馬琴が一面に於て小說戲曲が舊記の闕を補ふといつて居る點から見て、虛の中に眞實を見出さうとして居つたと思はれる。現實には多く現れない眞實が美の本質であり、卽ち善であると考へたのではないかと思ふ。眞があるが儘の眞實ならば、善はあるべき眞實である。このあるべき眞實卽ち善をば、なぐさみ本位や善惡の因果應報といふ美の形式によつてあらはす所に美があると考へたのではないかと思ふ。彼が玉石童子訓の序の中に稗史小說をば

或は是を無用の技とし、或ひは是を有用の物とす。無用の中に有用あり。有用の中に無用なきにあらず。

といつたのも是を示して居る。かくて彼が眞よりも輕くみたのは美の形式であつて、美の本質である善は眞よりも更に重んじたのであり、これによつて舊記や現實を補ふことが出來ると考へたと思はれる。

彼が稗史小說をば貴ばずといひながら、生涯を是に沒頭して盲目になつても筆をたゝなかつたの

は、生活の資といふ點はあつたにしても、なほそこには舊記、實錄に求めて得られざる善の世界を創造しようとする意識があつたと見ることも必ずしも不當ではないと思ふ。

もとより馬琴の勸善懲惡思想にも、極めて多くの遊戲的分子があり、また藝術の手段であつた點も多いと思ふ。卽ち彼の實際の作品に於ける不純なる描寫と、極端なる善惡の因果應報の如きは、これを示すものであるが、尠くとも馬琴に於ては是等は所謂形狀の美であり美の形式であつて、美の本質である所の勸善懲惡思想が、ともかく馬琴の藝術觀の根柢となり得たと思ふのである。しかし一般に近世後期の小說戲曲論に於ける勸善懲惡主義は、只單なる手段であつた點が多いと思ふ。殊に洒落本や人情本の如きに於て、敎訓を標榜し勸善懲惡主義をとるに至つては淫蕩なる描寫をなす事と、時代を支配する道德思想とを結びつける手段であつた外何物でもなかつたと思ふ。京傳の通言總籬に廓へ遊ぶ事を記しながらはしがきに論語の損友三を示したものと述べて居る如き、また人情本が敎訓を標榜する如きはこれである。

かくの如き手段としての勸善懲惡思想は、淨瑠璃や脚本にも見られる所である。然らば何故に手段としても勸善懲惡主義をとらねばならなかつたかといふに、これにはもとより種々の理由が存し得ると思ふ。外的な理由としては幕府が禁令を下して風俗をみだす如き書物を取締るに至つた事である。

之に對してその難を免れるために勸善懲惡主義を標榜する事によつて、戀愛や官能生活の描寫にも、教訓を附會しようとしたのである。更にまた一面には讀者の好尙を豫想した點もあると思ふ。人間の本性には道德性の存在することを否定し難いと思ふ。善を同情し惡をにくむのは人間の至情である。この善なるものが虐遇に陷り惡が榮えることは人間の心理に不滿を與へるのである。卽ち善なるものはあらゆる苦痛と困難との後に目的を達し、惡が亡されることによつて人間の感情は滿足されると思ふ。それを求める事は純粹な藝術鑑賞の作用ではないとするも、現實的感情として存し得る。卽ち勸善懲惡主義は一般の讀者の興味と滿足とをそゝる點に於て必要なる手段であつたのである。然し同時に近世に於て儒教道德が國民生活の上に大きな勢力を有し、文學もこの國民生活の必然的な現れとして、儒教道德の通俗化である勸善懲惡思想を作品の基調とするに至つたことが大きな理由をなしてゐたことを認めざるを得ないのである。それは讀者に對する態度としてのみならず作者の態度としても存したのであつて、馬琴の如きも勸善懲惡思想を主張したのは多少方便的な點もあつたかも知れないけれどもなほ道德的精神の上に立脚して一層强調するに至つたのである。儒教が國文學の上に與へた影響をそこに見られるのである。

勸善懲惡思想をばかくの如く考へることにより、儒敎思想が日本の文學の上に如何に影響したかといふ點が明らかにされるのであるが、こゝで再び國學に問題をうつして、本居宣長の「ものゝあはれ」の思想と勸善懲惡思想とを比較することによつて、日本に於ける儒學と國文學との關係を更に少しく見たいのである。

## 四　勸善懲惡思想と「もののあはれ」との關係

宣長の「もののあはれ」論は宣長の國學に於て「神ながらの道」の見解とともに最も注目される點であるのみならず、日本の文學論の上から見ても、注目されるのであつて、近世の文學論を代表するものは本居宣長のもののあはれ論と勸善懲惡思想にもとづく文學觀とであるとも言へるのである。尠くともこの二が最も對立的に考へられて居り、一方は文學主義であり、一方は道德主義であると言はれて居る。明治になつてから坪内逍遙氏が文學の自律性をといて小說神髓を書いた時も、勸善懲惡思想にもとづく、道德主義を退けて「もののあはれ」の文學主義をとりあげたのである。「もののあはれ」と勸善懲惡思想とを文學主義と道德主義との對立としてとりあげることは一應正しいであらうが、更に觀察を深めて見ると單純に言つてしまへないものがある。尠くとも「もののあはれ」は純粹

文學の自律性をといたものであり、道徳性との絶縁を意味するものではないであらう。これに就いて私見では「もののあはれ」は勸善懲惡思想に於ける道德主義とは一致しないものがあるけれども、なほ道德性と相いれないものではないと考へるのである。

宣長の考へる「もののあはれ」論は「ものの」に就いて多く說く所がなく、主として「あはれ」の構造をといて居るのである。さうしてこの「あはれ」は感動であるが、平安時代以前に於ては極めて廣い意味の感動をさしてゐたのであるが、奈良時代の後期に至つて美意識が目覺めて來るに從つて「あはれ」も次第に限定されて來たのである。さうして「もののあはれ」は平安時代に於ける「あはれ」の限定された感動を表して居ると言はれると思ふ。この感動こそ人間精神の自然の流れであり、人間の心に隨ふ態度である。「もののあはれ」に於てはそれが種々の限定はあるにせよ、人間精神に隨つてそれに逆らはない態度であると思ふ。從つて宣長も、「もののあはれ」を解することは、人情を解する意味にもとつて居るのであり、人間の弱さをも認めて居るが、人間の眞實を中心として居るのである。

さうして人間性の眞實に生きるのが「もののあはれ」であると見る時、人間性の眞實は藝術的であるとともに倫理的道德的である筈であつて、道德的なるものと離れたものであつてはならないのであ

る。さうして日本文學に現れた人間觀を見ても、個人としての人であるよりも、日本人としての人間であり、「み民われら」の自覺としての人間觀が貫いて居ると思はれる。「もののあはれ」に於ける人間觀もかういふ日本人としての自覺を離れたものではない筈である。前にといた如く紫式部が少女の巻に「やまとだましひ」といふ語をとりあげて居るのを見ても「やまとだましひ」を根柢として「もののあはれ」を考へてゐたことは言はれると思ふのである。「もののあはれ」の中に日本人としての道德性を認めることは決して不當でないであらう。またかくの如き意味を有するからこそ宣長の學問體系に於て「もののあはれ」と「神ながらの道」とが少しの矛盾もなく存在し得るのであると思ふ。

かくの如くして宣長の「もののあはれ」の物語觀に於て藝術的とともに道德的なるものを認め得るとすれば、それが勸善懲惡思想の小說觀とはどういふ關係にたつであらうかといふに、それは必ずしも文學主義を以て文學の道德主義に反對したものではなかつたと思ふのである。勸善懲惡思想は先づ儒學者によつてとなへられ、それが近世の小說家としての馬琴その他によつて小說觀の基調となつたのである。さうして馬琴の小說を見ると勸善懲惡思想が作品の本質としてのみならず、構想論その他にも現れて居るのである。この勸善懲惡思想が道德的傾向を强く有することは言ふまでもなく、餘りに道德的傾向を文學に於て强調し過ぎてゐる點があるにしても、なほ文學的傾向を認めないのではな

かつた。馬琴の近世說美少年錄に於ける美論を見ても善美一致論をといて居るが、善なるものに美を見出して居るのであつて、美そのものを否定したのではないのである。この點では眞淵、宣長等の國學者が、「神ながらの道」もしくは古道と文學との統一を求めたのと同樣である。たゞ眞淵、宣長等の文學觀の根柢に、日本人としての眞實性、いはゞ「まこと」が貫いて居り、それが「ますらをぶり」ともなり「もののあはれ」ともなつて居るに對して、馬琴等の勸善懲惡思想が、儒教道德を根柢として居る所に相違がある。さうして儒教道德といつても馬琴等の小說觀に於ては國民道德化されて居る點が多いことはいふまでもないが、なほ宣長の「もののあはれ」に於ては人間の眞實性としての情の方面が主となつて居るに對して、馬琴等の勸善懲惡思想は理の方面がまさつてゐると言はれるであらう。

以上、儒學と國文學との關係のもとに、國學と儒學その他の問題を考察して來たのであり、それによつて儒學が國文學の中にとり入れられて來た點を吟味したのであるが、それ等を通じて、儒學が日本文化にとり入れらるるに當つて日本化し、日本的なるものの中に攝取せられてゐることが知られるのである。かういふ點は全面的に日本と支那との文化の交渉を考へる場合にも言はれると考へられるのであつて、そこに儒學が國文學の糧となつた點が多いことを認めるとともに、常に和魂漢才の立場

に於てなされたと見られるのである。

註　大和魂の意義に就いては精細に考ふべき點がある。ことに平安時代の大和魂や大和心に就いては後代のそれと異なると見る說もあり、源氏物語のこの文の解釋も異說がある。委しい考察は他の機會にゆづつておくが、自分は平安時代の大和魂もしくは大和心も近世等に於ける大和魂と根本に於ては一致して居るのであり、たゞ「もののあはれ」を重んずる優雅な時代性と關聯してやさしい點が比較的著しく現れて居たに過ぎないと思ふ。むしろ强さとやさしさとをともにつゝんで、それを行的に實踐するのが大和魂であつたのであり、それを現實的に力あるものとするに漢才も必要であるとしたのであると思ふ。



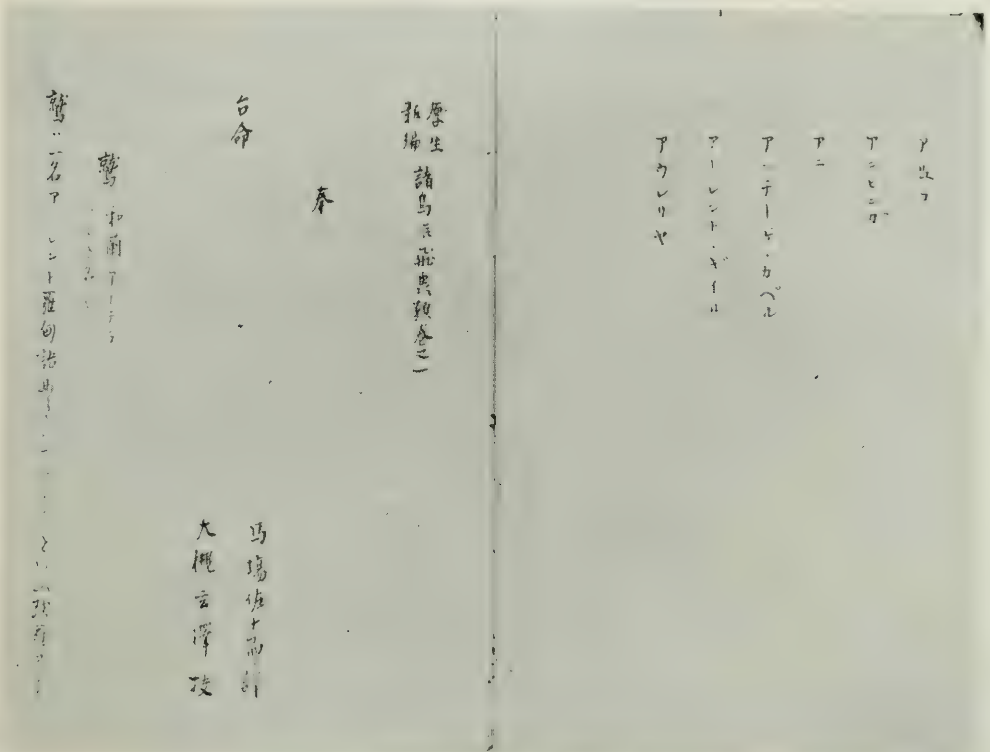

大槻磐水肖像（大槻茂雄氏藏）



杉田玄白肖像（大槻茂雄氏藏）



野呂元丈肖像（野呂正寛氏蔵）



大槻磐水校厚生新編

# 蘭學と儒學との交渉及び幕府の對蘭學政策

板澤武雄

## 一　蘭學の意義及び内容

大槻玄澤がその著蘭學階梯の例言に、「蘭學トハ卽チ和蘭ノ學問ト云フコトニテ阿蘭陀ノ學問ヲスルコトナリ。」と要領よく解說した如く、蘭學とは和蘭人又は和蘭語を通じて攝取した西洋學術の總稱である。なほ江戸時代に西洋の學術又はその研究を稱するのに南蠻學（略して蠻學、または蕃學に作る）、西洋學（略して洋學）、泰西學（略して西學）等の名稱も行はれたが、それ等の發達史的の特別な意義については既に論じたことがあるから、(一)ここには省略して、蘭學といふ名稱で江戸時代の西洋學術の研究を呼ぶこととする。

蘭學の內容は（一）醫學、本草學、（二）天文學、暦學、（三）兵學の三部門を主流として研究された西洋科學であつた。ここにいふ三つの部門といふのは、日本における研究の目的及び人に卽して試みに分けて見たにすぎない。蘭學は、はじめから目的的な學問として發達した學問、換言すれば必要が誘導した學問であつたから、今日の正規の學問の發達のやうに、基礎學又は基礎研究が先づ興つて、それから應用方面に及ぶといふのとは必ずしも一致しない。むしろその反對に學問の應用方面が先づ講ぜられ、基礎學又は基礎研究がそれに附隨し、もしくはそれに刺戟せられて發達した觀がある。必要に促された學問であつたから、實用本位の學問であつたことはいふまでもない。右に述べた三部門について見ても、（一）と（二）とは國民の日常生活の安寧幸福を念願する上に必須の學術であり、（三）は國家の獨立發展を企圖する上に不可缺の學術である。それ以外の學問は必要がないと云ふわけではないがそれだけの餘裕もなく又幕府の基督敎禁制の然らしめた理由等のために、哲學、宗敎、法學、文學等の文科系統の學問は、重要視せられず、僅かに歴史、地理の知識が蘭學者の常識としてもたれてゐた位のものである。尤も蘭學者も學問の體系を知らなかつたわけではなく、宇田川榕菴の「植學啓原」（天保四年）の首には、學原の章を設けて學問の分類をなし、天地の間に森羅する萬物を動物、植物、山物となし、それを研究する學問を動學（動物學）、植學（植物學）、山物之學（鑛物學）

とすといひ、更に萬物の學を分けて、斐斯多里、即ち辨物之學（歴史學）、費西加、即ち窮理之學（物理學）、舎密、即ち離合之學（化學）となしてゐるのである。

## 二　蘭學と儒學との交渉

蘭學は右の如き意味内容をもつた學問であるが、然らば江戸時代の學問の基調をなした儒學と如何なる交渉をもつたであらうか。蘭學と儒學とは一見縁遠い學問であつたやうに思はれるが、實は相互に影響し合うて相當深い交渉をもつたものである。

先づ蘭學と儒學との異なつてゐる點を擧げて見よう。第一、蘭學は民間の篤志家の自發的努力によりて開かれ、それが普及して、遂に幕府の採用するところとなつた。それに反して儒學は家康以來歴代の將軍及び諸大名に採用せられ、それ等の保護奬勵を受けて發達普及した。第二に蘭學は前述した如き内容をもつものであつたから、儒學とは對蹠的なものと一般から考へられてゐた。佐久間象山は「東洋道徳西洋藝。匡廓相依完ニ圏模一。大地周圍一萬里。還須レ缺ニ得半隅一無。（二）」と詩を賦し、又君子の五樂の第五として、「東洋道徳、西洋藝術、精粗不レ遺表裏兼該、因以澤ニ民物一報ニ國恩一、五樂也。（三）」と謂ひ、橋本左内が「器械藝術取ニ於彼一、仁義忠孝存ニ於我一。（四）」と喝破したが、彼等の所謂東洋の道徳、

仁義忠孝の道は儒教の眼目とする所、西洋の藝術又は器械藝術とは西洋の科學卽ち蘭學の本領を指したものであつて、儒學と蘭學とを判然と區別したのである。豐後日出の學者帆足萬里が東潛夫論において、「人倫ノ道ハ孔子ヲ大成トシ、他教ノ及ブ所ニアラネバ、此ヲ取ルコト、尤宜シキ理ナリ、天文、地理、醫藥、器械ナドノ學ハ西洋勝リタレバ近來ハ專ラ西洋ヲ學ブ、是學者ノ能知ル所ナリ。[五]」と指摘したやうに、判然と東西の學問の特質優劣を辨じて、その採るべきものはこれを採るといふ態度に出でたのである。畏くも明治天皇が「よきをとりあしきをすてゝ外國におとらぬ國となすよしもかな」と御示し遊ばされたが、これが國史を通じて一貫して見られるわが國民の外國文化攝取の態度であつて、これがわが國文化進展の一大原動力となつてゐるのである。江戸時代の學者も認識してゐた如く、科學においては西洋が東洋に比して遙かに進歩してゐたのである。この理由が種々考へられるのであるが、根本的な理由は、自然に對する東洋人と西洋人との觀念態度の相違から來てゐるやうに思はれる。卽ち東洋思想においては天人渾一の思想があつて、自然を冒瀆することを忌み、自然を畏敬し、自然と親和し、自然と一體にならうとするに反し、西洋人は人間の生活のために自然を如何にして征服しようか、如何にして利用しようかと考究する。これ東洋において天人渾一の哲學、宗教、美術を發達せしめ、西洋において自然界征服の科學を發達せしめた所以である。從つて東洋の學問の

傾向は直觀を重んじ演繹を主とし全體觀に立つ。西洋の學問の傾向は分析し、實驗し、歸納して、客觀的態度を重んずる。一般の儒者に西洋科學が理解し難かつたのは、右の根本觀念の相違からであつた。京都の學者豬飼敬所（弘化二年歿、年八十五）が次の如く云つてゐる。

今ノ蘭學ヲ爲ス者云、漢土ノ說ハ臆說多シ、西洋ノ說ハ實驗スル者ニテ虛妄ナシト、是然ラズ、解體新書ナドニ、人ノ作用ヲ論ズルモ、生時ニ驗スルニアラズ、死後ノ推量ナリ。西洋人ノ天ヲ論ズルヤ、首メニ遊心ノ說アリ、遊心トハ人身天ヘハ上ラレズ、心ヲ天ヘ置キ、天上ニ上リタル心ニテ是ヲ測ルヲ云フナリ、余云、是臆說ナリ、譬ヘバ唐天竺ヘ行カズシテ、心ヲ唐天竺ニ遊バシテ見レバ、彼土地如ㇾ此々々ト云フガ如シ、實驗ニアラズ、西人ノ說、臆度笑フベキ者、往々有ㇾ之、天ヨリ地ヘ物ノ落下ルハ、地心ニ吸フ者アリト云フガ如キ、是ナリ。（六）

澁川春海の天文瓊統卷一に、「古地形方而未ㇾ知ㇾ圓、慶長年中、蠻人從ㇾ來二于茲一以後、正知三人在二地表裏一、全體圓上、始聞者皆驚矣。」とあつて、地球說、引力說の如き、今日の常識も江戸時代の人々には臆說とも考へられたのである。しかし世界大勢の推移は刻々に鎖國日本の現狀維持を困難ならしめ、西洋科學攝取の急務であることを痛感せしめた。佐久間象山の梁川星巖に贈つた書に、（七）

方今の世は和漢の學識のみにては何分不行屆、是非とも五大洲を總括致し候大經濟に無ㇾ之候て

は難ㇾ叶候。全世界の形勢コロンビュスが窮理の力を以て新世界を見出し、コペルキュスが地動の說を發明し、ネウトンが重力引力の實理を究知し、三大發明以來萬般の學術皆其根柢を得、聊かも虛誕の筋なく、悉皆著實に相成、是に由て歐羅巴彌利堅諸州次第に面目を改め、蒸汽船、マグネチセ、テレガラフ等創製し候に至り候て、實に造化の工を奪ひ候義にて、可ㇾ愕可ㇾ怖模樣に相成申候。爰にては是非とも司馬法に申す所の兩之の手段に仕候の外無ㇾ之存候。此兩之の術は古來兵法の第一義にて、敵國に對し候ても、中國に莅で四夷を撫し候にも此術無ㇾ之候ては、決して其志を得候事能はざる義と奉ㇾ存候。周官の法夷隸、蠻隸、貊隸等、各其國の兵器を執て王宮を守り候も、流石は周公の聖智にて、卽ちかの兩之の術と存じ候事に御座候。又皇朝のむかし、世々の列聖、皇國漢土に隣り候故を以て禮樂政刑戎兵暦算等より女工の末事に迄も、皆彼の長ずる所を收めさせられ候も、固より善與ㇾ人同舍ㇾ己從ㇾ人の御德符を堯舜に合はせおはしまし候故の御事には候へども、亦よく此兩之の術に恊はせられ候御儀にて、是迄千百年間漢土を始めとして外蕃の侮を受けさせられず候も、皆此所に根歸候御事と奉ㇾ存候。

と西洋の學術を攝取するの急務であることを力說した。次に、蘭學と儒學との交涉についての具體的な考察にうつる。先づ考へられることは、江戸時代文化の基調は儒學であり、國民教養の基本が儒學

であつた以上、蘭學もまた儒學の基礎の上に立てられ、儒學的教養のうちに發芽し育成を遂げたものであつたことが理解される。杉田玄白の回想錄である蘭學事始に、蘭學の發達の速かであつた理由は、「實は漢學にて人の智見開けし後に出たる事ゆへかく速かなりしか知るべからず。(八)」と謂つたのは蓋し當つてゐる。蘭學者岡研介は、洋を學ぶには先づ漢に通ぜざるべからずとて、先づ豐後の日田に赴いて廣瀨淡窻の門に入り、更に福岡の龜井昭陽の門に轉じて儒學を修めた後、文政七年二月長崎に至りてシーボルトに從學したといふ。(九)以て先哲の用意の周到であつたことを見るべきであるが、また以て當時儒學がすべての學問の基礎であつたことを證するに足る。帆足萬里は、四十餘歲にして初めて蘭書を得、藤林普山の譯鍵によりて獨學數年、能くその義に通じ、西洋の新知識を得て、窮理通十數萬言を著述し、「余窮理通ヲ著セシニ盡ク西書ヲ譯述セシカトモ西人ノ誤リニ至テハ改正スルモノ五六十條、是皆西洋名家ノ說ヲ破リシナリ。(一〇)」と豪語した。これも深い儒教の教養による見識があつて、はじめて成し遂げられたのである。

江戶時代の儒學の諸學派のうちにおいて蘭學と最も早く學問的交渉をもつたものは、古學派であつたと思ふ。これは朱子學が中世的な佛教から離脫獨立して、德川政權に結びつき、支配階級支持の役割をもつたに對し、朱子學以外の學派には多かれ少なかれ反朱子學的な批判的傾向を有し、夙くから

庶民階級と關係づけられてをつたから、民間に發生した西洋科學の研究である蘭學が、反朱子學的傾向に結びつき、もしくは接近したことは不思議ではない。殊に中世克服的な復古的な遡源的學風をもつ古學派が蘭學の如き新興の學問を育てる苗圃たるに適したのである。新村博士が青木昆陽傳補訂中に「古學は元來經義の根本研究に據つて興つたものであるから、その感化がよくゆけば、凡て事物を觀察するに、後世の因襲やら學說やら理窟やらに捉はれずに根源に遡つて考證して見ようとする研究法を誘致するであらう。その代り偏すると、考證に流れるの餘り、因循して活用を失ふといふ學者も出來よう。古義學を紹述した東涯は能くこの遡源的研究を典故制度等の上に、又言語文獻の上に應用し又經濟實用の側を忘れずに、その多方面な學才を以てよく後進を啓發して種々の專門學者や特技者を門下から輩出させた偉大なる學問教育者であつた。昆陽が蘭學を學ぶに至つたのも、慈雲が梵學を究むるに至つたのも、直に淵源に遡つて事想實理を探りたいといふ學風から起つたとも考へられる。」と申されたことは、卓見である。青木昆陽は堀川學派の伊藤東涯に師事した。また野呂元丈も堀川學派の並河天民の門に出でた。此の如く古學派特に堀川學派が蘭學發芽の苗圃となつたことは注目に値する。昆陽、元丈に先だつて蘭學の發端を開いたものが新井白石である。白石の釆覽異言や西洋紀聞は決して單なる好事者流の記述ではなく、學者の頭の中に組織立てられた海外知識であり、新しい知

見によりて更新された世界觀に立つた著述である。而して白石は朱子學派ではなく、所謂不偏學派の木下順庵の門に出でた人である。朱子學以外の學派には、新しい學問を理解する自由さと寛容さが多分にあつたためではなからうか。それから支配階級から保護奬勵を受けてない私塾の方が、その學風に包容性があつたと共に、內から燃燒する學問的熱意が多く藏せられてゐたのではなからうか。この私塾の學風と蘭學とがはじめから終りまで最も密接な關係に立つた。封建制度の支持と、或る意味からいへば封建制度の儀飾となつた朱子學派には、儒學的な財末觀に拘泥して、實生活に卽した經濟とか自然科學とかを兎角卑しむ傾向があつたのである。しかしながら封建制度下に發展しつゝあつた國民生活の新段階と、國際情勢の新段階とが、朱子學の學問統制下に滿足し、窒息する筈がない。新しい學問は新しい時代の要求によりて必然的に發展し來つたのである。

佐久間象山は天保四年江戶に遊學し、林家の門に入り、學頭佐藤一齋に就いて學んだ。一齋は王陽明の學を主張したが、象山は朱子學を奉じて王學を採らなかつた。後年象山が「題二一齋先生遺墨一」の一篇にこのことを告白してゐる。

余少時師二事一齋先生一、灑二掃門墻一兩歲、頗承二愛育一、嘗聞二作文之訣一、余於二言下一釋然、自レ是如下平地得上路、了無二凝滯一、雖レ未レ足三以追二蹤於古作者一、而陳レ意記レ事、受用有レ餘、實先生之賜

也、但先生主二張王學一、不レ好二窮理一、余則專承二當程朱之規一、以レ窮二天地萬物之理一、爲二斯學起手一、漢人所レ未二窮知一、則以二歐羅巴之說一補レ之、是則所二以不下能下與二先生一不上レ異者也、因レ觀二先生之書一、偶然及レ之。

卽ち象山は天地萬物の理を窮むる朱子學を奉じたのであるが、漢人の未だ窮知せざる所は蘭學によりてこれを補ふといふのである。象山は朱子學と蘭學とは相容れないものではないと考へた。川路聖謨に贈つた書に(一三)左の如く述べてゐる。

如レ仰四書集註或問は朱子之定論にて文集語類とても殘らず人に依て敎を變ぜられ候說のみと申には無レ之、中庸等の說に到りては朱子自ら前說の非を語られ候て其誤見せられ候所以迄をも手記して後に傳へられ候事に御座候へば是と一概に定論なしと論じ候は如何可レ有二御座一や、惟篁墩陽明輩定論を爭ひ候所は格致の事にて、朱子之意は程子之說に從はれ、凡天下のものに卽て其理を窮めて智識の量を盡すと申を、夫にては外馳之弊有レ之候間、吾心は卽ち理にて天下之萬物盡く我に備はり候へば、吾心の理をだに窮め候へば夫にて事濟と申事に成候、是其異同之所に有レ之候、西洋の窮理の科などもやはり程朱之意に符合し候へば、實に程朱二先生之格致之說は、之を東海西海北海に於て皆準ずるの至說と存候義に御座候、程朱之意に從ひ候へば西洋の學術迄

も皆吾學中之一端にて本より外のものにては無二御座一、若陸王などに傾き候料見より見候時は判然と其道を異にし候ものに相成申候、西洋の窮理果して非に有レ之候はゞ、夫と道を異にし候事尤の事に候へども、其窮理本より是にして是と其歸を同うせず候ては濟ぬ事と奉レ存候、集註或問にも有レ之候五行より人をも生じ人之五性も五行の道理と申事などは、西說明かに相成り五行之事精しく分り候て見候へば、程朱も漢儒の窠窟を免れずして此謬見を成され候へども、程朱の學に隨ひ西人說迄をも廣く用ひ斯理を講明し候時、程朱之誤迄も辨じ候に到り申候。

沖行く舟を吾目を塞ぎ候て停め候と思ひ候樣なる學流にては何分參らぬ事と奉レ存候。

「宜下會二東西言一以作中一家書上」といふ象山の抱負の、右の如き見解の具體的な所產は、嘉永五年十月になつた礮卦(一四)である。礮卦は易の理論を以て大砲の理論をなす西洋の物理學を解明したものである。卽ち易の六十四卦のうちの睽の卦において大砲の理論を發見した。卽ち、☲☱ 兌下離上睽を觀るに、離が上にあり、兌が下にあり、上の離は火で下の兌は澤（金）である。この相睽く二物の理を應用したのが大砲であるといふのである。「礮、本卦、睽、乖異、上離之火炎上、下兌之金下降、性情相反。」「釋二卦義一也、火之性輕疾而炎上、金之性重遲而下降、二物之性、違異而不二相濟救一、固爲二睽義一、火則厭レ之、金則飛レ之、宜レ上而下、宜レ下而上、亦爲二睽義一、凡礮之事、莫レ不下以二睽爲一用上」一金火

之性、雖₂相睽違₁、有ᴸ時相資、爲₂礟之大用₁、君子觀₂礟之象₁而知₂相資之理於相睽之中₁、以爲₂天下之大用₁也。」と說く。

松平定信はその自敍傳「宇下人言」において、寛政四年露使クラスマンが根室に渡來した時、幕府の執政としてこれに善處したが、「われ蠻國の事など委しく探り置たるによてこたびの御用など大に益を得し也。」と記し、また「寛政四五の頃より紅毛の書を集む。蠻國は理に精し。天文地理又は兵器あるは內外科の治療殊に益も少なからず。されどもあるは好奇の媒となり又は悪しき事などいひ出す。さらば禁ずべしとすれど、禁ずれば猶止むべからず。況や又益も有り。さらば其書籍など心無きものゝ手には多く渡り侍らぬやうにはすべき也。上庫に置侍るもしかるべし。されど讀む者もなければ只蟲の巢となるべし。わが方へかひ置けば世にも散らず、御用有るときも忽ち辨ずべしとて長崎奉行へ談じて、舶來蠻書買ひ侍ることゝは成りにけり。」(一五)と記してゐるが、蘭學の有用なるを知りつゝ民間に蘭學の流行することは當時の爲政者として喜ばない傾向があつたのである。しかし幕末になると國防上の見地から、蘭學の必要なることが、一般に認められ、幕府においてもこれを採用し、諸藩の藩學においても儒學と蘭學とを併置するものが漸く多くなり、蘭學者の社會的地位も漸く向上した。儒者も世界大勢の推移に無關心でをられる筈がない。蘭學者を通じ、また支那よりの書籍や情報を通

じて世界情勢を熱心に研究した。嘉永六年米魯の使船來航するや國論大いに沸騰し海防の論議盛んに行はるゝに際し、儒者といふ儒者は殆んど皆一應の見識を示す方策を草したやうである。日本海防史料叢書のうちから嘉永前後の論策を拾つて見ると、平山子龍の海防問答、藤森弘庵の海防備論、鍋井昭陽の防海微言、安積艮齋の禦戎策、鹽谷宕陰の籌海私議、防春或問、羽倉簡堂の海防私策、大槻磐溪の獻芹微衷、古賀侗庵の海防臆測、安井息軒の靖海私議、昌谷精溪の禦戎策等がある。そのうちには藤森弘庵のやうに蘭學者を非難したものもある。(一六)

世に蘭學者といふ者あり。外邦を我しり顏に申なし、器械の巧調練の嚴敷とても戰とも敵しかたく杯とて、人心を違亂し、通商をすゝめ、己が術を賣とす。我國の民としてよくかの器械をしりたらば、何方迄も國の爲と思ひ、工夫を廻らし、彼の器械は此方を以て防くべし、彼是の兵は此手段を以て敗るべしと申聞せ、外國の恐るゝに足らざる事をしらせ、我人膽を盛にし、我國の武威を張んとこそ心懸べきに、かゝるあさましき心は禽獸にも劣ると申べし。(一七)

鹽谷宕陰は防春或問において蘭學に對しても比較的公正なる見解を示してゐる。

近來ニ至テハ西洋學モ開テ、萬國船印衣服ノ制マデモ分リタルコト故、萬國ヲ一切仇視スルニ非ズ。(中略)

瓜哇ノ屬島ニ「オンリユスサヘイランド」ト云フ島アリテ、軍艦ヲ造テ賣出ス由ナレバ、蘭人モ魯西亞モ其所ヘ行テ求ルナラン。其船ニ我邦人儒者蘭學者砲術家天文方算家畫圖師船頭船匠共ヲ數十百人付テ遣ハサレ、往返共ニ船中大砲ノ所廻シ、帆ノカケハヅシ、楫ノトリヤウ抔、急速ニ晝夜稽古シタキ者ナリ。長崎ヨリ瓜哇マデ千六七百里ナレバ、九月發帆シテ十二月ニハ歸リニナルベキナレバ可ナリ、來春ノ間ニ逢ベシ。

また古賀侗庵の如く、筆端を儒者の攻撃に及ぼしたものもある。(一八)

吾孔聖之道、固亦有二振レ威奮レ武之教一、乃學レ焉者、或泥二空理一而闇二物情一、或專二攻藝文一、而不レ閑二於武一、以致二聖教所レ被之國茶然不一レ競、實末學之過也。

ペルリ渡來につき、阿部伊勢守をはじめとして閣老參政は先づ誰をしてこの重大な外國談判の任に當らしめんかと見廻したが、幕吏の多くは概ね皆俗吏の勤仕年限にて昇進した輩のみにて、適當の人物を得ることが出來ず、元長崎奉行を勤めた人や、朝鮮琉球使臣の御用筋を勤むる御儒者林大學頭を以て其の任に充て、別に幕吏中にて壯年有爲の人才を舉げ、非常の拔擢を以てこれを奉行御目付等の重職に任じたが、この拔擢せられた人物は、學問吟味に及第出身の輩であつて程朱宗門の正統論學者連中であつた。(一九) そしてその配下に通譯の任に當つたものは蘭學者である通事仲間であつた。かく觀來

れば、幕末外交の難局の擔當者は儒學者と蘭學者であつたと云つても過言ではない。

次に儒學が和蘭の學界に如何に反映したかを一顧して見よう。鎖國時代の日本に渡來した歐羅巴人（いづれも蘭館員）の著作に見える儒教の紹介は頗る貧困さを示してゐる。これは短期間の滯在に理解し難いことと、彼等外國人に接した日本人が概ね儒者畑の人でなかつたこと、それ等の外國人の知識欲が儒學以外の日本の事物の方に傾いたこと等がその主なる理由であらう。ケンプェルの日本志の卷末鎖國論のうちに左の如く述べてゐる。（二〇）

> 世の人或は學問の研究と心術の敎練とに付いて非るものあらん「日本人には恐らくは哲學の研究なからむ」と。然も左にあらず。日本人は彼の哲學を疏斥せず。日本人元より大小學術を惡みて是を修する者をば國より追放する徒の類にはあらずといへども、唯に是を玩娛の具とし、蟄居の隱士閒暇にして他の營少なき者、これを以て鬱懷を解くに宜しとす。然りといへども此是多くは窮理の上のことなり。德行科の如きは大に尊ばれて上天に根據せりとす。但し悠久なる考究は之を寺觀に退けて、たゞ一つの道德の敎を以て滿足するなり。此敎たるや日本人の言ふ所によれば是れ上帝の下し玉へる哲學にして大聖孔子の傳へたるものなり。人々の嘗て信ぜる所にては、此敎は孔子より一世紀の後に、希臘のソクラテスが上天より享け得て、死する人を初めて敎へ諭せ

るものなりと云。

シーボルトの日本交通貿易史の、(二二)日本人が彼自身の國及び其附近國保護國に關する地學的研究の歴史的梗概のうちに、儒學に關聯して次の如く述べてゐる。

美術及び學問は皆人の知る如く、佛教にともなひて日本に入りたるが、それには孔夫子の學問が之を克く採納するの準備をなしたるなり。然るにその後盛り行きし僧徒制度は孔子の道が精神的勢威を獨占することを妨げて、學問は哲學の保護の下に庇はれて、佛教の學派内に廣がり、大貴人の殿廷に於て學問に關する趣味と嗜好とを喚起したり。支那の大哲學者たる孔子の弟子に取りて、孔子の遺書を正しく見解するため廻國によりて我知識を擴張するため、我學派の流布のため、國土學は支那的に世界を限局的に解してなりとはいへ、頗る必須のことゝなりたり。かゝる道程によりて日本に於て人は其心を支那の國土學に潛め、之によりて得たる智識を日本國の記載及び輪廓に向けたり。(中略)

既に述べたる「本朝國郡建置沿革圖說」の如きもかゝる堅牢なる基礎の上に立てるなり。此書は日本國の國郡が如何にして成立し、如何に時代と共に變化したるかを記述し、また隣の大陸との交通を特に顧慮したる日本の地理學的年代史なり。こは頗る有用の書物にして佐藤一齋の著述に

して千八百二十三年江戸の出版なり。

シーボルトに師事してライデン大學の日本學講座の最初の擔任教授となつたホフマンはその日本文典に大學論語より文例を求めてゐる。(二二)このホフマンが右の文典に先だつて一八六四年にライデンの書肆ブリルから立派な活字を以て日本の句讀、返點、送假名を附した大學を出版した。(二三)これには當時留學中の津田眞一郎と西周助がこれが校正を手傳ひ且つ序文を寄せてゐる。

## 三　江戸幕府の對蘭學政策

蘭學は所謂鎖國時代において發達したものである。鎖國政策は江戸幕府が基督教の禁制を徹底せしめんがために已むなく行うた政策である。基督教の禁制を徹底せしむる取締方法の一つは西洋學術の攝取に對する嚴重なる監視であり、書籍の輸入取締もその一つであつた。但し寛永の幕府の禁書政策を以て洋書の禁を主としたものと考へたり、八代將軍の享保の弛禁令を以て、洋書の禁を弛めたと思ふのは、共に誤解であつて、寛永の禁書令も享保の弛禁令も共に支那刊行耶蘇會士の譯述書についてであつて、洋書そのものについては、基督教に關係のものの輸入を禁じたことは云ふまでもないが、洋書を總括的に禁じたことも、從つて弛禁したこともないのである。(二四)然しながら一般國民の間に海外

の事情や西洋の新知識を流布することは幕府の立場として欲しなかつたのである。幕府の上層當局者と長崎の官憲とだけがかゝる知識をもつて居れば充分だと考へたのである。事實此等幕府筋のもつてゐた西洋の知識は決して侮ることの出來ないものがあつた。一例として私がその一部を發表した阿蘭陀風說書といふのは、長崎入津のオランダ船が齎して幕府に呈上した海外情報で、私の蒐集したものだけでも、正保元年より安政三年まで二百十三年に亙つて凡そ二百五十通に上つてゐる。その內容も中々豐富であるが、民は由らしむべし知らしむべからずといふ時代であつたから、折角の海外情報も長崎奉行、關係の阿蘭陀通詞及び幕府の高官以外には閱讀せらるゝことがなかつたやうである。彼の有名な新井白石の釆覽異言が明治十四年六月に、西洋紀聞が明治十五年五月に至つて、はじめて上梓せられたのも、幕府治下においては已むを得ない事情があつたのである。この二書はシドチ事件卽ち基督教關係のものであつたから當然といつてよいが、明和二年に後藤梨春がオランダの地理風俗等を雜錄した「紅毛談」さへ横文字を載せてあつたために絕板を命ぜられた位である。杉田玄白が解體新書を公にするに當つても、もしや絕板を命ぜられはしないだらうかと、びくびくもので、先づ桂川家を通じて御奧より將軍に內獻し、又玄白の弟子で京都在住の吉村辰碩の推擧を以て時の關白九條家及び近衞准后・同前公及び廣橋家へも一部づつ、又時の老中方へも同じく一部づつ進呈し、そして、何

の支障も起らぬのを見きはめてから世に公にしたといふ。この解體新書の譯述事業を契機として、所謂蘭學なるものは民間に發達普及した。幕府の好むと好まざるとにかゝはらず時運の進行が然らしめたのである。やがて外交上國防上から西洋學の必要が幕府當路の大官にも痛感せらるゝに至つた。松平定信が自敍傳「宇下人言」に、

寛政四五の頃より紅毛の書を集む。蠻國は理に精し。天文地理又は兵器あるは內外科の治療殊に益も少なからず、されどもあるは好奇の媒となり又は悪しき事などいひ出す。さらば禁ずべしとすれど、禁ずれば猶止むべからず。況や又益も有り。さらば其書籍など心無きものゝ手には多く渡り侍らぬやうにはすべき也。上庫に置侍るもしかるべし。されど讀む者もなければ只蟲の巢となるべし。わが方へかひ置けば世にも散らず、御用有るときも忽ち辨ずべしと長崎奉行へ談じて、舶來蠻書買ひ侍ることゝは成りにけり。

と云つてゐることは、當時幕府筋の蘭學に對する見解を代表すると見てもよからう。

幕府も當時淺草藏前片町西裏にあつた天文臺（厤局）に於いて、享和三年以降天文・測地に加ふるに洋書飜譯の事業をはじめ、天文の方では La Lande の厤書の飜譯が文化六年に成り、測地の方は寛政十一二年頃より始まつた蝦夷地測量、文化年間の伊能忠敬の沿海實測、文化三四年に始まつた世

界地圖編纂事業等となつた。更に文化八年五月には天文方高橋景保の建議によりて新に天文臺に蠻書和解御用といふ一局を設けて、外國文書の飜譯に備ふることとなり、この局の平日事無き時の仕事としてショメル百科辭書の飜譯を企てられた。「厚生新編」の譯述事業がこれである。曾て私は史學雜誌に(二六)「厚生新編譯述考」の一篇を寄稿して「厚生新編とは靜岡縣立葵文庫に所藏する六十八冊の未刊の稿本の名である。江戸幕府の暦局の事業としてオランダ語の原書から譯した百科辭書の譯稿で、その量から云つても、その質から云つても、恐らくは維新以前に行はれた西洋書飜譯事業中第一に置かるべきものであつて、從つて蘭學發達史上この譯稿のもつ意義と價値とは重大なるものがある。」となし、(一)原著者及び原書、(二)蘭譯本とその日本への舶載狀況、(三)厚生新編譯述の底本、(四)厚生新編の譯述事業、(五)厚生新編の內容、(六)譯述の方法と實例、(七)譯校者と事業の繼續年數、(八)厚生新編譯述事業の影響について論述した。その後葵文庫長であつた故貞松修藏氏が東照宮三百年祭記念會の補助を得て複本を作製し、更に熱心なる同氏は晩年の全勢力を傾け盡して厚生新編刊行會を組織し、昭和十二年八月遂にこの未刊の稿本を八八六頁の大冊美本として公刊するに成功した。刊本厚生新編が最も因緣深き德川靜岳公爵の題字を以て飾られ、且つ葵文庫及び本書の複本公刊に終始大いなる力添へをなされたと聞く故澁澤榮一子爵の靈に捧げられたことは、洵に意義深きことで、德川

幕府の文化事業を不朽に傳へる上に示された故貞松氏の用意の周到さに敬意を表する次第である。ところが昨年春帝都の某書肆が新に厚生新編の殘りの稿本を某所から掘出して來たのである。これは明かに葵文庫本の欠本と續稿とであつて、一見私を驚喜せしめたのであるが、最近に至り、この貴重なる稿本全部が故貞松氏記念文庫の一部として葵文庫に收藏せらるゝに至つたことを聞いて、洵に納まるべきところに納まつたといふ歡喜に堪へない、貞松氏の靈もどんなに喜んで居られることだらう。私は因縁の深いこの記念論文集に於いて簡單ながら厚生新編譯述考の補考を試みることを欣幸なる義務と思ふ。

厚生新編の原著者は Noel Chomel (1632—1712) といふフランスの牧師で、彼の百科辭書は一七〇九年リヨンではじめて二冊ものとして出版され、一七一八年に增訂版を出し、一七三二年には巴里で出版され、一七六三年には三冊ものとなつた。以上は一七四三年の蘭譯 (Jan Lodewyk Schuer) の第一版の序言に據つて述べたのであつて、私は佛語の原書のいづれの版も見てゐない。蘭譯第一版(一七四三年)は先に松浦伯爵家本のみを見てゐたが、その後、信州松代の眞田伯爵家に於いても同一版を見ることが出來たが、眞田伯爵本には「ショメル居家必讀書」といふ譯語が附けられてゐる。なほ眞田伯爵家には七冊本(第四冊缺)卽ち一七六八年より一七七七年にかけて Jacques Alexand-

re de Chalmot が增補してライデンの Le Mair とレウワルデンの De Chalmot とで出版したもの、及び一七八六年より一七九三年にかけてカムペンの J. A. de Chalmot とアムステルダムの J. Yntema の共同出版の九册本のあることを追加報告しておく。

次に厚生新編の譯稿について私は「AよりSまで（但しWの部より Wijn だけを第十六、第十七の二册に收む。故に全般的の譯述はA—Sと見てよい）全七十册の內、三十一、三十二の二册が散逸したのか、今葵文庫には存してゐない。」と述べておいたが、今度葵文庫で入手された稿本のうちに、右の三十一、三十二と思はれるものの外、七十一よりなほ十六册を加ふることとなつた。

第三十一の內と推定せらるゝは次のD部の二册である。

厚生新編雜集

雷「ドンドル」　大槻茂質玄澤<br>宇田川璞玄眞　譯校

同上　譯校者右に同じ。

縱「デンネボーム」等

第三十二と思はるゝは次の二册である。

厚生新編雜集

諸薬蒸餾法「デスチルラチイ」

厚生新編雜集

諸薬蒸餾法之二

以上譯校者右に同じ。

次に第七十一以下明かなるものを左に掲ぐ。

第七十一。S。鮭の三・四二冊。

鮭の四の表紙に、「天保九戌年六月九日庄助ヲ以、肥後殿ヘ上ル二冊ノ内」と記す。

湊重胤長安譯。小關好義三英校。

第七十二。P。パツペガーイ・ドイケル。

「天保九戌歳六月九日黒澤庄助ヲ以テ肥後守殿ヘ上ル二冊ノ内」とあり。

小關三英譯。湊長安校。

第七十三。L。獅。

「戌年九月九日甚之丞ヲ以テ肥後殿ヘ上ル二冊ノ内」とあり。

宇田川榕菴譯。湊長安校。

第七十七。L。鉛。

「天保九戌年十二月三日御上二冊之内一」とあり。

宇田川榕菴譯。小關三英校。

第七十八。M。蟻の二。

「天保九十二月三日御上二冊之内」とあり。

大槻茂楨玄東譯。小關三英校。

第七十九。S。羊の二。

「亥四月六日黒澤正助ヲ以テ河内守殿ヘ上ル二冊之内」とあり。

杉田信成卿譯。小關三英校。

第百一。M。呼吸困難「ムーイエレイキ・アーデムハーリング」

「天保十二丑年閏正月十五日玄蕃頭殿江正助ヲ以上ル二冊ノ内」とあり。

大槻玄東譯。宇田川榕菴校。

第百二。P。疫癘「ペスト」。

「丑三月廿一日彈正殿江上ル二冊之内」とあり。

箕作虔儒阮甫譯。宇田川榕菴校。

第百三。M。芥子。

「天保十二丑年三月卅一日彈正少弼殿へ甚之丞ヲ以上ル」とあり。

大槻玄棟譯。杉田成卿校。

第百十三。S。耽飲。
「寅五月七日但馬守殿に向山源太夫ヲ以テ上ル二冊之內」とあり。
杉田成卿譯。宇田川榕菴校。
第百十五。S。石。
杉田信成卿譯。竹內正幹玄同校。
第百十六。S。結石病。
「六月八日岡主膳正殿に向山源太夫以テ上ル二冊之內」とあり。
第百十七。V。黐膠「ホーゲルレーム」。
宇田川榕菴譯。杉田成卿校。
第百十八。V。蝙蝠「フレーデルモイセン」。
宇田川榕菴譯。杉田成卿校。
第百三十四。V。凍寒の二。
「弘化二巳年八月八日竹村長十郎ヲ以主膳正殿に上ル三冊之內」とあり。
第百三十五。T。烟草の二。
「弘化二巳八月八日竹村長十郎ヲ以主膳正殿に上ル」
杉田豫立卿譯。宇田川榕菴校。

右の外、「厚生新編補譯」巻一、二、大槻玄澤・宇田川玄眞譯校の「蒲桁洒ウェキン」一册卽ちWの部あり。なほ宇田川榕菴譯箕作阮甫校「子宮レイフムードル」はLの部の一册であり、杉田成卿譯・宇田川榕菴校「內科手術（羅ヲペラチヲ・アド・カタラクタヱ）」はOの部の一册であり、小杉三英譯・箕作阮甫校の梨（シュクレ・ヘルト）はSの一册であることがわかる。右の外になほ七册あるがこれは刊本に收められてゐるものと重複する稿本である。

以上の新發見の稿本によりて知り得た點を要約すれば、

一、Aより少くともWまで百三十五册以上に分けて、分擔して譯したことがわかり、前に私が葵文庫に存する七十册の稿本について考へた規模の約二倍の量に達したものであることがわかる。

二、この譯述の事業が文政八年からいつまで續いたかについて、前に推定の一方法として譯校者として關係した人々のうち、歿年の最も新しいと思はれた宇田川榕菴の弘化三年をとつて、この年まで續いたとすると三十六年になると云つたが、新發見の稿本の百三十四・百三十五は弘化二年八月八日に上司の劉覽に供してゐるから、私の先の推定はほゞ當り、この譯述事業は少くとも三十五年續いたことが明かにされた。

三、先に私は、六十八册の稿本から察すれば天保年間までは事業が順調に行つてゐたことがわかる

が、その後ははじめ程の能率をあげなかつたらしいと述べたが、新發見の稿本によつて幕末の多事多難の際にこの事業は却つて能率を高めて進捗したことがわかる。この點江戸幕府の文化事業に對する熱意を知る好史料であるばかりでなく、この譯述事業が如何に幕府にとつて重大なそして期待された事業であつたかがわかる。

四、譯校者として前の六十八冊の稿本から知り得た人は、馬場貞由（佐十郎）・大槻茂質（玄澤）・宇田川璞（玄眞）・大槻茂楨（玄幹）・宇田川榕（榕菴）・小關好義（三英）・湊重胤（長安）の七氏であつたが、新發見の稿本によりて箕作虔儒（阮甫）・杉田信（成卿）・大槻茂棟（玄東）・竹内正幹（玄同）・杉田豫（立卿）の五氏を加ふることを得た。

五、天文方は若年寄支配であるが、新發見稿本によりて知り得る關係若年寄は、林肥後守忠英・增山河内守（彈正少弼）正寧・松平玄蕃頭忠惠・大岡主膳正忠固の四人である。

六、先に私が「葵文庫にある稿本はこの事業の直屬してゐた若年寄に上つた清書本である」と考へたに對し、故貞松修藏氏は刊本厚生新編解說に於いて本書の稿本は少くとも原稿卽第一稿本、校合して寫字生に渡して下書せしめたる第二稿本と、淨書したる第三稿本と三部現存すべきであるとし、葵文庫の譯稿を以て第二稿にして飜譯局に備付の控であるとせられた。この點私は先の自說を棄てて貞

松氏の説の方がよささうに思ふ。新發見の稿本中私が第三十一の內と比定した雷の部の一册に「御文庫本天文臺欠本一二之順不明可糺事」と記してあるが、これを紅葉山御文庫本も天文臺の控本も缺けてゐるので一二の順が不明であるといふ意味にとれば、貞松氏の所謂第三稿の淸書本が御文庫にあり、葵文庫にある稿本も新發見の稿本も共に天文臺備付の第二稿と見るべきであらう。而して第一稿の原稿は恐らく各擔當者の手許にあつたであらう。大槻家には現在「譯稿初編大意」の一篇があるばかりであると聞くが、もとはきつと譯稿が相當の册數あつたであらうと思はれる。私が東京文行堂より入手した厚生新編と題する寫本四册（乾・兌・離・震）の震の卷末に「文化十四年丁丑」「于時文政三辰十月上弦日、長東祐益維水再記之。」とある。この長東なる人については寡聞にして知るところがないが、文行堂の話にては、この寫本は上州邊から出たもので大槻家の門人であつたらしいといふ。大槻家の門人帳について調べても見當らないが、乾の卷の中程に「森喜市様ヨリ大槻玄澤方〻ノ御書狀一通慥ニ受取申候、玄澤病用ニ被出候間歸宅之上可聞。」といふ覺書らしいことが書きつけてあつて、大槻家の內弟子か使用人らしく思はれる。恐らく大槻家にあつた厚生新編の譯稿を抄錄したものであらう。雜部噴吐水の一卷は逸稿の一部として參考に値すると思ふ。

なほ厚生新編の逸稿として今日まで私の目にとまつたものは二つある。その一つは昭和十年十二月

一日早稻田大學に開催された宇田川榕菴記念展覽會に岡村千曳氏の出品せられた「厚生新編諸鳥并飛蟲類卷之一」の一册は葵文庫の第一册と同じもののやうに見受けた。その二は東洋文庫所藏本の「厚生新編硝子部」で、棠芳軒藏とあり、上下兩卷合本、片面十一行の黑罫半紙五十枚、紺表紙の寫本である。上卷は勃乙斯(ボイス)術藝全書の譯說とあり、卽ち Egbert Buys の恐らく Nieuw en Volkomen Woordenboek van Konsten en Wetenschappen か Natuurkundig Schoolboek などから瓦剌斯(ガラス)のことを譯說したものであらう。その一節に、

瓦剌斯　和蘭羅甸呼テ微去爾模(ウキテュルム)ト名ク、案、邦俗從來ビイドロトイフハ恐ラクハ此語ヲ轉化スルモノナランカ、或云、波爾杜爲爾(ホルトガル)國ノ稱呼「ウヰトロ」ノ轉ト、本是耶蘇ノ會士傳フル所トイヘルハ必ス然ンカ、再考ヲ俟ツ、

とある。下卷は縮墨爾譯說、郭禮爾枯(ケレルク)著物產書譯說である。前者は Chomel であり、後者は佛人とあるがその原書の何なるか未だ詳にしない。而して下卷に馬場貞由の左の如き按文がある。

貞由按ニ右小序ニイヘル如ク、以下諸說皆大略ヲ記シ、尤是硝版造法ノミナリ、シカレトモ前卷勃乙斯書中及ヒ次卷縮墨爾譯說中ニ遺漏スルヿヲ載スルモノアリ、故ニ三書精粗各相交ル、宜ク參考ス可シ、殊ニ圖式ノ如キハ此書中附スル所大ニ細密ナルヲ以テ其要ヲ領會スルモノアリ。

以上私は厚生新編譯述考の補考に思はず多くの言を費したが、この譯述事業は當時第一流の學者を集めてやつた政府事業であつただけに、當時にありてはこれ以上の譯文を期待することが出來なかつたと思はれる程の出來ばえで、我が蘭學の最高水準を示してゐるものである。この譯述事業に關係した有爲なる蘭學者はこの事業のおかげによつて皆鬱然たる大家となり、各自その練磨したる語學の力を使驅して幾多の著書を公刊して世人を裨益するところ頗る多かつた。且つ陪臣といへども人材はこの事業があつたために幕府の學者として登用せられ、これによりて蘭學者の地位が高められ、蘭學の發達普及を促した。

やがて蘭學の發達と外交の急迫したる事情とがこの飜譯局の獨立となり、安政二年正月洋學所を九段下に設け、安政三年二月には洋學所を改めて蕃書調所と稱し、文久二年五月蕃書調所を一橋門外へ移して洋書調所と改稱し、翌文久三年九月更にこれを開成所と稱して西洋學術の教授を行はしめた。この開成所は明治の初めに大學南校となり、今日の東京帝國大學の文學部・理學部の淵源をなし、又萬延元年十月下谷和泉橋通にあつた種痘所を幕府の直轄となし、翌文久元年十月これを西洋醫學所と改稱し、文久三年二月醫學所と改稱した。この醫學所は明治の初めに大學東校となり、今日の東京帝國大學の醫學部の濫觴である。幕府の醫官には多紀家を總帥とする漢方醫者に阻まれて蘭方醫者が採

用されなかつたが、安政五年七月將軍家定の病篤きに及び伊東玄朴・戸塚靜海・竹内玄同等の蘭方醫者が擧げられて侍醫となり、尋いで醫官に令して蘭方醫術を兼修せしむることとなつた。

また幕府は嘉永六年のペルリの渡來によりて刺戟せられ、西洋式海軍の創立の議を決し、オランダに海軍傳習生の教育を委囑し、安政二年十月長崎西役所を海軍傳習所に充てゝオランダの海軍中尉ペルス・ライケン Pels Rycken 以下士官・下士・火夫・火焚等二十二人を教官として、航海術・運用術・造船學・砲術・船具學・測量學・算術・機關學・砲術調練の傳習を開始し、永井玄蕃頭を監察に任じた。かくして安政四年三月には第一期の卒業將校以下百五人を出したが、その内には勝麟太郎・榎本釜次郎・五代友厚・川村純義・佐野常民・中牟田倉之助等後大いに世に顯はれた人材がゐた。安政四年には海軍中尉ハイセン・ファン・カッテンダイケ Huysen van Kattendyke 等が來て先任教官と交替し、一層整然たる傳習を行うた。この海軍傳習所に於いて又醫學理學を教授した。この方の教官はポンペ・ファン・メールデルフォールト Pompe van Meerdervoort であつた。

又文久二年幕府は開陽丸の建造をオランダに注文し、これと同時に海軍に關する諸技術を習得せしむるために、内田恒次郎・榎本釜次郎・澤太郎左衞門・赤松大三郎・田口俊平等にオランダ留學を命じた。なほ一行には蕃書調所から津田眞一郎・西周助、長崎醫學傳習所から林研海・伊東玄伯、その

他技術の實地研究のため水夫小頭古川庄八・一等水夫山下岩吉・鑄物師中島兼吉・測量器械師大野彌三郎・大工上田寅吉・鍛冶職大川喜三郎等も隨行した。

此の如く幕末に至りて幕府も諸藩も蘭學の必要を感じ、これが發達普及に意を用ひたが、幕府や諸藩自身の補强工作には間に合はなかつたが、世界的知見を擴め明治時代の學問技藝の基礎を据ゑたのである。

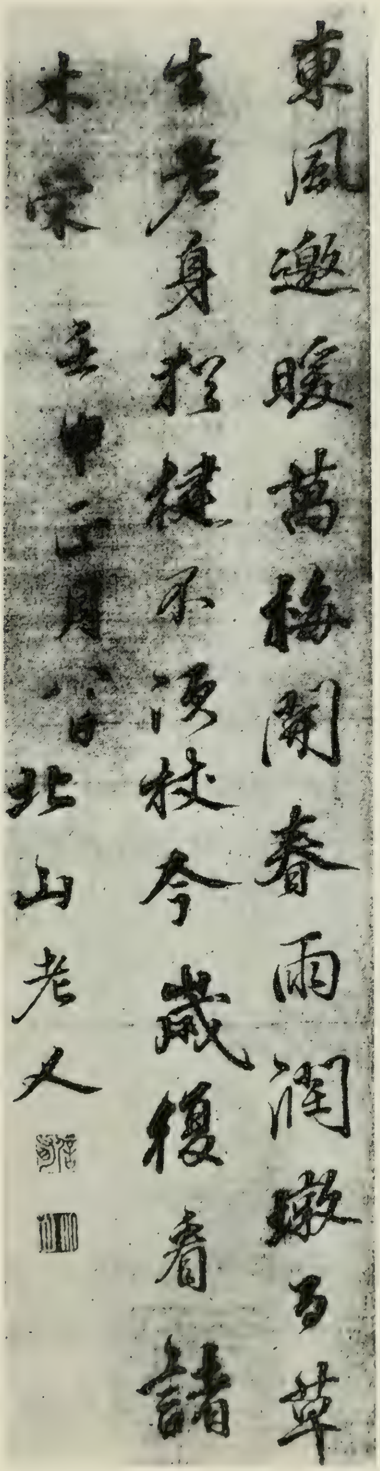
**註**

一　拙稿「蘭學の意義と蘭學創始に關する二三の問題」（歷史地理第五十九卷一、二、五、六號）。岩波日本歷史講座拙稿「蘭學の發達」の序說。
二　象山全集卷二。飯島正一氏所藏筆蹟。
三　象山全集卷一。五頁。省諐錄。
四　橋本左內全集卷頭、重野安繹撰景岳橋本君碑。
五　帆足萬里全集上卷。四一頁。
六　日本儒林叢書、史傳書簡部。二四頁。
七　象山全集卷五。八頁。
八　蘭學事始（明治二年刊）下卷。十二丁。
九　吳秀三博士「シーボルト先生生涯及功業」六七一頁。

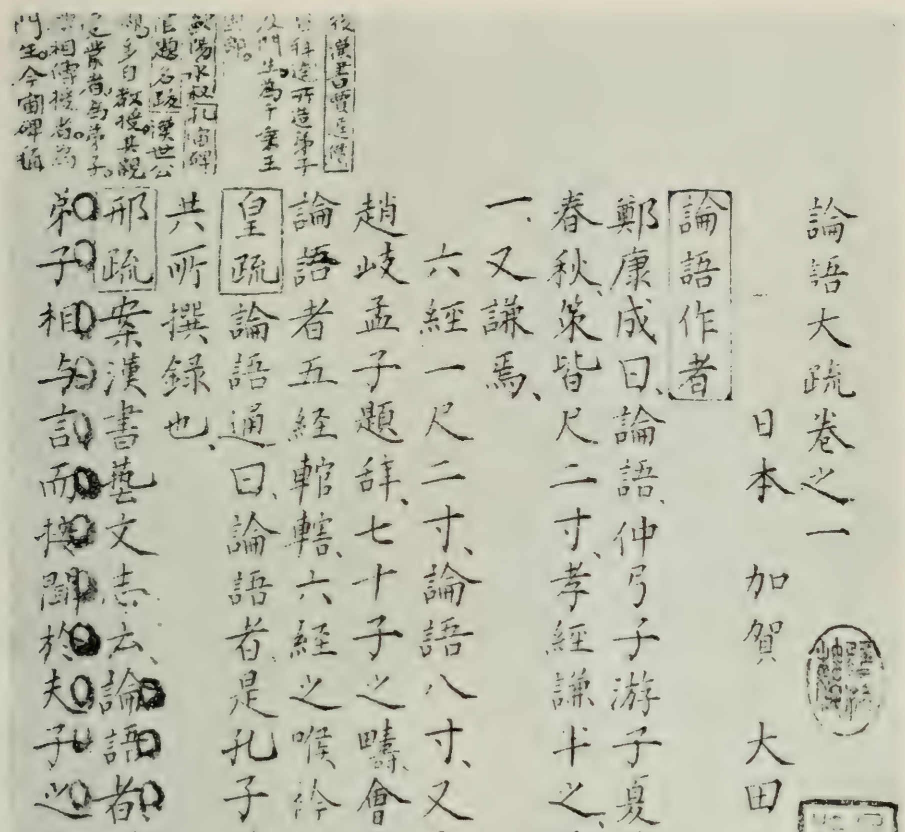
一〇　帆足萬里全集上卷。四六八頁。醫學啓蒙發題。
一一　新村出博士「續南蠻廣記」一八—一九頁。
一二　象山全集卷一。四七頁。
一三　象山全集卷三。四〇八—九頁。
一四　象山全集卷一。
一五　宇下人言。一四〇頁。
一六　日本海防史料叢書第一卷。一二一頁。
一七　日本海防史料叢書第六卷。七九—八〇頁。
一八　日本海防史料叢書第五卷。二五七頁。
一九　福地櫻痴「幕府衰亡論」（國文館版）三〇—三一頁。
二〇　異國叢書。吳秀三博士譯「ケンプェル江戸參府紀行」下卷。五五四—五五頁。
二一　異國叢書。吳秀三博士譯「シーボルト日本交通貿易史」一一一—三頁。
二二　Dr. J. J. Hoffmann: Japansche Spraakleer. Leiden 1867.
二三　De Groote Studie (Ta Hio of Daigaku). Leiden 1864.
二四　前掲歴史地理の拙稿四、「江戸幕府の禁書の内容及び所謂洋書の禁について」參看。
二五　「阿蘭陀風說書の研究」（日本古文化研究所發行）。
二六　史學雜誌第四十三編第八號「厚生新編譯述考」。



井上金峨自畫賛（菊地長四郎氏藏）



山本北山筆蹟（島田俊彦氏藏）



後漢書賈逵傳、皆拜逵所選弟子及門生為千乘王國郎。

歐陽永叔孔宙碑[illegible]跋 漢世公卿多自教授、其親受業者、為弟子、轉相傳授者、為門生。今宙碑陰[illegible]

論語大疏卷之一

日本 加賀 大田元貞公幹

論語作者

鄭康成曰、論語、仲弓子游子夏等所撰定、[illegible]讀[illegible]書[illegible]策

春秋、策皆尺二寸、孝經謙半之、論語八寸策者、三分居

一、又謙焉、

六經一尺二寸、論語八寸、又見王充論衡、

趙岐孟子題辭、七十子之疇、會集夫子所言、以為論語、

論語者五經之錧鎋、六經之喉衿也、孟子之書則而象之、

皇疏 論語通曰、論語者、是孔子沒後七十弟子之門徒、

共所撰録也、

邢疏 案漢書藝文志云、論語者孔子應答弟子時人及

弟子相與言而接聞於夫子之語也、當時弟子各有所記

論語大疏稿本（島田俊彦氏藏）

# 折衷學概括

佐藤文四郎

## 一　序說

我邦の儒學は德川時代に至つて庶民の學となつたことに特別の意義がある。元來博士家が世〻朝臣として君恩の下に家學を繼述し、漢唐の註疏の研究、卽ち訓詁學に沒頭してゐたのであつたが、朝權の式微と共に儒學も衰微した。そこへ道義を强調する宋學が渡來し、これが建武中興の革新的意氣精神に投合した。併し室町幕府の衰微と共に、それも僅かに禪林に托せられて命脈を保つに過ぎなかつた。德川の天下漸く太平の光を仰ぐに至つて、幕府の奬勵の下に儒學が始めて佛徒の手を離れ一般社會に行き亙るに至つたのである。

高泉溟の時學鍼炳に「大抵東方の學術三變せり。初は王室に在り。中頃禪林に在り。今は庶民に在

り。」とは之を謂ふのである。

徳川時代の儒學を廣瀬淡窓が簡明に述べて次の如く言つてゐる。

二百年來の儒風大略三變せり。惺窩羅山より始めて佛と獨立せる儒を開く。又程朱學を開く。藤樹闇齋了介益軒錦里等性理躬行の學專ら佛を斥け聖人の道を明かにす。これ一變。伊物復古說古義復興、訓詁に精し。詩文を主とし躬行を務めず。これ再變。伊物盛にして程朱衰へ、儒者浮華放蕩、世人之を厭ひて再び宋學に歸するものありしも、其弊も有故、兩者を取捨する處ありて折衷學と稱す。當時高名の儒者十に七八は折衷學なり。利に走ること多し。これ三變。

徳川時代の儒者の訓詁考證といふ方面は、頗る出色のものがあるが、この方面の研究は其性質上精密になればなる程、支那風になるので、要するに、支那儒學が日本人を通してその領域を廣め、且つ新しい發展を遂げたと評してよいのである。折衷學者は勿論、訓詁考證も大にやつたが、自己の見識に照して、諸說を辨別取捨して、一種獨特の自家の見解を立てたもので、この點は、日本的な儒學と言へるのである。

支那には折衷派などと呼ばれる學派はない。概して之を言へば、訓詁の漢學、義理の宋學、考據の淸學と三變したので、これは五千年の支那歷史の必然性が作つたものである。勿論支那に於ても學派

の對立は頗ろ深刻のものがある。春秋三傳、今文古文學の對立の如きは執拗で頑强で、而も永久に相峙して妥協しない。後漢の鄭玄などは今古文を雜糅して其の可なるものを采つたので、其態度は折衷的ではあるが、折衷派とは言はれてゐない。

この意味に於て德川時代の折衷學は日本儒學に於て特異の存在である。卽ち彼等は、「百家を取捨し、古今を貫穿し、六藝に參して、孔子に折衷す」る見解を持してゐたので、單に漢學と宋學との折衷でも、伊物二學の折衷でも無かつたのである。要するに程朱伊物の上に卓立して、直ちに孔子に私淑し、以て我國の道に資する所あらんとしたのだ。折衷派の翹楚、片山兼山が、其名著山子垂統の自序に次の如く述べてゐる。

庶くば、世の古先聖王の道に志ある者、斯の編に觀るや三隅を反して余の學を紹述し、洙泗の道をして再び我が大和を昭明して、而して夫の舊華胡清の國に覃久し、彼をして先王の詩書禮樂は、此に在らずして、異國に在るを謂ひ、而して來りて法を取らしめんか。豈美ならずや。豈盛ならずや。乃ち余夕に死すとも可なり。

寔に我日本精神に卽したる見識ではあるまいか。

折衷派の源流を尋ねると木下順庵の高足榊原篁洲と三州の人中西淡淵とに胚胎する。篁洲は古學・

陽明學・朱子學等の諸派幷立の際に其何れにも偏せず漢魏の傳註と宋明の疏釋とを幷用し、訓詁は馬鄭に、義理は程朱にといふ旗幟を立てた。淡淵は經を究むるに大義を主提して字句に拘泥せず、漢宋新古の異同にすら拘らず、聖學は德を成すに在りといふ學の目標を樹立した。それを祖述したのが細井平洲である。

次に片山兼山と井上金峨とが殆んど時を同じくして出た。ここに至つて折衷學は確立したのである。先哲叢談に、折衷派は「漢宋諸家の書を博究し、其の長を執り、必ずしも門戸の見を作さず。衆說を折衷して極めて穩當を致す。」と述べてゐるが、其內容は、實に多義多端で、之を簡單に要約することは頗る至難である。故に假りに、之を四つの學流に分別して、其人と其風とを述べようと思ふ。たゞ、折衷派の總てを通じて、その底を流るゝ精神、卽ち、孔孟の道を吾邦に昭明して、舊華胡淸の國に覃及し、法を我に取らしめようといふ念願が存してゐることは看過せざるやう注意したいのである。

## 二　中西淡淵と其學流

中西淡淵は尾州の老臣竹腰氏の臣、名は維寧、字文邦、修して元淡淵といふはもと三州の秋元氏に

出づるが故である。幼より頗る好學、白晝も戶を閉ぢて讀書し、夜も燈檠に對し每に雞鳴に至つたといふ。初め芋生に在つて徒に敎へたが寬延三年江戶に出て芝三島町に叢桂舍を起した。木下蘭江がこの人を評して、亮節威望以て天下の鄙を敦くするに足ると言つたと先哲叢談に見えてゐる。其風度を察することが出來る。其涵濡の化は自ら門生に及び人材を出すこと多い。南宮大湫の溫藉風猷、伊藤冠峰の信誼直諒、紀平洲の篤學謹行、小川天門の捷敏廉節、飛鳥圭洲の雅量淹通、鷲津東柯の博綜練達の如き得易からざるものと評されてゐる。寶曆二年七月四十四歲を以て歿したが、死に臨み著書を盡く燒かせた。未定の書を殘して後世を誤るを憚れたのである。文集十三卷が殘つてゐるのみである。

細井平洲（名德民、字世馨、尾州人）は淡淵の高足である。この人の遠祖が寬平昌泰の際に顯れた紀長谷雄であるといふので紀を姓としてゐる。淡淵に奬められて長崎に遊び華語を學んだこともある。二十四にして名古屋に帷を下し、間も無く江戶に出て、淡淵の叢桂舍の近くに居を卜した。淡淵の歿後は叢桂舍の諸子皆平洲の門に入つた。平洲の德望は頗る高く當時王侯貴紳請うて賓師とするもの少くなかつた。名君として有名であつた米澤侯上杉鷹山は最も平洲を尊信した。平洲が米澤に下つたのは四十四歲の時で、侯の禮待優渥で言よく納れられ舊弊を一掃し一年許で歸江した。安永年間に

興讓館の造營成つた時再び至り復留まること年有餘であつた。鷹山侯が平洲と共に封内を巡行し、使役の煩劇民間の苦愁を覆檢し、豐施下に遍く亙つたのはこの時で、衆民大に悦び、平洲が途に過ぎるを見ては感嘆して涙を垂れ、合掌拜跪、生如來公と呼んだといふ。其人と爲りを覗ふに足る。五十三歳にして尾州侯に謁し知遇を得、大いに封内の學風を振作した。享和元年七十四を以て歿した。

平洲の門には篤行の士が多い。實學を尙び、躬行を重んじた學風の然らしめた所である。佐伯子則の如きは年齡三十二で歿した人物であるが家道の貧窮に在つてよく孝養に力めたことは有名である。又渡邊子觀は江戸遊學中鄕信父の病を報ずるや書を捧げて號泣し卽日出羽の横手へ發足した。時恰も窮冬極寒、積雪深さ數尺、之を踏んで家に着くや衣帶を解かずして供養に服すること年餘、喪服終るや再び平洲の門に歸つたが此人も若くして逝いた。子觀の謹恪は頗る有名で、嘗て謬つて師の履を穿ち、忽ち之を知るや履に對して再拜未だ慊らず跪きて履を執つて額に加ふること之を久しうしたといふ。

淡淵の門に南宮大湫（名岳、字喬卿、尾州の人）が居る。亦實學の人で日本橋に塾を開き晴雪樓の名は一時に高かつた。平洲との交情の密なること頗る名高く明和中大湫が始めて江戸に出た時の如きは、平洲は疾と稱して來客を謝し講業を休むこと十餘日、朝暮一室に談娯し、緒を引き繭を抽き、

縷々として盡きざるが如くであつたといふ。大湫は仕ふることなく安永七年五十一歳で歿した。大湫の門に石作駒石が出た。

伊藤冠峯も亦淡淵門である。伊勢の巨商に生れ、標格頗る高い人であつた。淡淵東行の後、詩文を操練する者この人に從つたといふ。冠峯と大湫との交情も亦頗る密で、大湫の妻子を江戸に送つた美談は有名である。この人も仕へなかつた。江村北海が嘗て「冠峯にして身都下に在りて藝苑に馳騁せんか、其詩名方今の赤羽（服南郭）蘐洲（徂徠）の下にあらず。」と惜んだといふ。其學を察するに足るのである。

淡淵の學は流派を立てない。經を講ずるにも漢宋に拘らず新古を分たず、人の求むるに從つて或は漢唐の傳疏を用ひ、或は宋明の註解を用ひた。淡淵は仁齋徂徠が漢宋を指摘し其間を取舍して先儒を謗議するを目して己の量を知らざるものと爲した。「聖人の道は學問の深淺に在るのでは無く、全く德を成し、才を育し其器用を盡すに在る。」と言つてゐる。細井平洲もこの學風を享けて且つ之を强調した。平洲の學も空理空論は最も排斥した所で、實踐躬行を以て民衆を指導したのである。平洲の米澤校相談書を讀むに、實學を第一としてゐる。學問は忠孝の實行に在ると言ひ、流儀を立てゝはなら

ぬとし、「學術に流儀の角立候人は心に邪氣募り候始にて、其果は御國政の害にも相成基に御座候、されば興讓館は何流何流と申流儀の立ぬ樣に御勸被成度事に候。」と言つてゐる。徂徠派に對しては、「古賢の事業を一概に廢棄致し候は近來の病患に御座候。」と評してゐる。平洲の嚶鳴館遺草にも「聖人の教は乳をふくみて眠り、飯をくくめられて戯るる孩兒には、元服して上下着こなしたるもののわざをさせず、上下着こなして元服したればとて、頭はげて額にしわのよりたるものの思慮分別をせめず、少壯老の三の時に從ひて、其みとなるべきことをなさしむるやうに敎ふることなり。」と說いてゐる。平洲が尾府の督學として學制の改革を斷行した情況は先哲叢談に詳述されてゐる。彼の學風は平易で實用を主としたものであるから、當時の學者からは「寡聞にして固陋なり。」とか、或は「僥倖にして世に得らる。」とか評されたのであるが、彼の意は德を成し用を作すに在り、經義の穿鑿には存しなかつたのである。この點は淡淵平洲一派の特色で、頗る篤行を重んじ、忠孝を以て至上道德とした。この派に篤行者の多いのは前にも述べたが、平洲の友愛は頗る有名で、小河仲栗、飛鳥子靜を己の家に寓せしめ、六姓居を同じくし、三家爨を同じくすること四年、平洲の父正長に對しては仲栗子靜も亦之に事ふること子の如くであつた。或人が「三賢子、三孝婦、三順孫、翁の幸福、何ぞ此に至るや。」と言つて正長に賀したといふ。人間としての學は是の如くにして初めて敎養に功ありと言ふ

べきであらう。

## 三　片山兼山と其學流

片山兼山、名は世璠、字叔瑟、通稱東造、享保十五年上野國平井村の一農家に生れた。十七歳にして江戶に遊び、鵜殿士寧（名孟一、通稱左膳、本莊先生）に學んだ。士寧は初め性理學を修め後徂徠の復古學を說び、服部南郭に從つて、當時古文辭の一大家と稱された人物である。頗る才氣に富み嘗て正月の紅葉山の寢廟登拜に將軍に從ひ、馳道の警衞中に五言排律一首を賦し十四韻成るに從つて之を吟じ人をして其敏捷を感歎せしめたといふ。其詩今先哲叢談後篇に載せてゐるが、名吟である。士寧は才を恃みて自ら高く處し他を遇することも刻薄であつたので聲價は高くは無いが才藻は豐かであつたやうである。兼山はこの人によく遇され其塾に居て閾を踰えざること三年孜孜として困苦した。勿論この當時の兼山は蘐園の風に從つて修辭を精硏したのでそれが後來の大成の基となつたのである。士寧に奬められて南郭の門に入つた兼山は、肥後の秋山玉山を知り、其歸國に伴はれて熊本に到り、藩學時習館の生員となつた。然し數年にして之を辭し京阪に遊び再び江戶に還り、士寧に寓して蘐園の學を究めると同時に、經義を講じた。時に考證の精確に於ては遙かに士寧の上に在ると評され

た。兼山は頗る貧困であつたので士寧は之を憐んで出雲侯の侍讀宇佐美灊水に推して養子とさせた。宇佐美氏は徂徠の門人で、頗る固い其信奉者である。兼山も出雲侯の儒員に補せられたが、そこでの研鑽は漸く徂徠學に對する疑義を深め、之に從ふことが出來なくなつた。一方灊水も、兼山が徂徠學を排斥するのを見て快くはない。終に兼山は宇佐美家と義絶して自己の信ずる道に邁進することとなつた。時に旗本の遠山修理といふ者故あつて兼山を知り、之を其邸内に寓せしめて學を講ずるを許した。兼山年四十三であつた。これより兼山に從ふもの漸く多きを加へ、ここより所謂折衷學なるものが起つたのである。當時、井上金峨、豐島豐洲、山本北山等もこの折衷學に應じ、終に學界の一大勢力となり、他の學派を壓倒するに至つた。兼山は自ら其學を呼んで山子學と稱した。

兼山の折衷學が頗る勢力を得たのは氣運が幸したのでもあるが、彼の學力の深さが然らしめたのである。兼山は甚だしく徂徠派を排撃した。辯駁誹詆忌憚する處がない。故に蘐園派も亦兼山を目すること仇敵の如く、姦儒と罵つたのであるが、彼は居然として、道義を主張し世の具眼の士を待つたのである。其態度が當時の豪傑の士を門下に蒐めた所以でもある。兼山が灊水と別れてから天明三年三月五十三を以て病歿するまで活動した歳月は僅か十二年に過ぎない。其名聲は海内を振蘯し、村山・安中・鳥羽・犬山の四侯は辭を卑くして之を聘し、弟子の禮を執り、又幣を厚くして之を招致しよう

としたが兼山は辭して仕へなかつた。當時尾藩で魏徵の群書治要校刻の擧があり、兼山も其江戸の邸に參謁して校定の任に與ることになつたのであつたが功を竣へずして歿したのは遺憾であつた。

兼山の門に萩原大麓（名萬世、字休卿、通稱英助、上野國綠野郡人）がある。よく兼山の學を傳へ兩國藥研堀に卜居して徒に敎へた。二本松侯丹羽長祥、濱松侯井上正定が其門に入つた。文化八年に歿したが遺命して兼山先生の墓側に葬らしめた。大麓の長子は樂亭（字善韶）次は綠野（字公寵）で、樂亭は明淸考證學を研究した。樂亭の長男（或綠野の子ともいふ）が西疇で、明治以後に塾を開いてゐた人で、經學文章兩つながら長じ、學習院に聘せられたこともあつた。

小田穀山（滕煥章）も兼山に學んだ。松下葵岡（字子福、通稱淸太郎、文事に葛山氏を稱す）も亦兼山門で、大麓と共に山子學に頗る功の有つた人物である。

兼山の學統はもと蘐園に出てゐるので頗る其影響が多い。然し古文辭學の研究を修辭に主とした態度は兼山の喜ぶ所ではなかつた。兼山は古書を以て古書を徵するといふ態度である。兼山の學風を最も端的に述べられてゐるのが、山子垂統の自序である。

「孔子歿して道稍〻裂れ、七十子死して諸子爭ふ、勢の已むを得ず、其人存せざるが故なり。然れ

ども先王の澤未が遽かに斬えざるは洙泗の道は方策に在ればなり。」これが第一の主張である。次に漢代の註經家は多く其義を失つてゐると述べてゐる。次に程朱學を批評して、宋學は漢儒の失を知つて立つたのであるが、其義を道佛に執るのは、後學を謬るものであると非難してゐる。「それより以來、先王孔子の方策は修多羅と擇ばず。元明の諸儒は有髮の僧のみ。悲しまざるべけんや。」と悲しんでゐる。又我伊藤仁齋物徂徠を評して、二子も宋人の非を知悉しながら未だ孔子の眞義を知らぬ。宋人と五十歩百歩であると斷じてゐる。かくて古書を以て古書を徵し、必ずしも先儒の傳註に據らず、諸家を嚴正に考證して、其謬を訂正し、以て中正の說を樹て直ちに孔子の眞意を把握しようといふのが兼山の素願である。「余自ら揣らず。然れども蒲柳の資、加ふるに多病を以てす。今年不惑を過ぎしに衰は指使と同じく、亦能く爲すこと無きのみ、然れども竊かに恐る、淹忽日なくして斯文の地に墜つるを。乃ち越公遠、長伯盈を平生論ぜし所を錄せしむ。以て世の學者に貽すも亦萬分の一のみ。若し天、斯文を我に寵するの故に、幸に年を假し、余をして徐ろに業を卒へしめば、則ち五經諸古文に於て、彬彬たらん。是れ未だ知るべからず。」一讀愴然たるものがある。兼山はこの序を結ぶに、前述の序說に述べたやうに、孔子の道を我國に昭明して、支那をして道を却つて我に求めるやうにしようとの抱負を述べてゐる。

山子垂統の上木されにのは安永四年、上中下三卷に收むる所は、經義二十五條、多くは考證に屬することであるが間〻自己の見識を挿んでゐる。山子垂統後編は其數年後、滕煥章、葛長壽の筆記で出されたが、これには經義二十三條を載してゐる。前編の序に滕煥章が、「皆孟荀以後未だ發せざるの言なり。前に古人無しと謂ふべし。余竊かに諸を彼の河圖を出し洛書を出せし瑞に比す云々」と禮讃してゐるが、其論は世に容れられなかつたらしく、後編の跋に葛長壽が「前編世に布きて而して擯斥するもの十に九。」と言つて歎じてゐる。

古書を以て古書を徵することが兼山の學風である。垂統の開卷第一條は「學之爲言效也」であるが、これは尚書大傳に出で朱子論語註に采る所、彼は之を證するに、易・書・詩・春秋・禮記・論語・中庸より荀子・韓非子・大傳・新語・家語・法言等更に左傳・國語・史記等も博引旁證してゐる。

兼山の學風として特に目立つてゐることは蘐園の攻撃であつて、「凡そ論語徵十冊其謬及び牽強附會の說を削らば僅か二冊ほどならでは取り用ふるに足るべき說はなし。」と言ひ、又、「物氏の學は雜貨肆を觀るごとくにて、經學文章兵法百技の事まで手を出したる故、にぎやかなることにてはあれど、多岐亡羊にて何れもその要をば得られぬと見えて、胡椒丸吞の論のみ多きなり。」とも言ふ。兼山が朱子を始皇に、仁齋を陳涉吳廣に、物氏を項籍に比して論評した面白い議論が、垂統前編中近思

錄の條に在る。

兼山は秦漢以前の古書を精究極研、經書はもとより諸子類にも通じ、皆一家言を爲した。垂統に依つて其蘊蓄を覗ひ知ることが出來る。

兼山は嘗て古文互證二十四卷を草した。これは魏晉以上の諸書に就いて訓詁の異同を彼此相照合し、類を以て編次し、韻字を以て檢索の便にしたものである。兼山の歿後三十年文化年間に至つて、阮元の經籍纂詁百卷、補遺百卷始めて舶來し、其體裁、自ら符合する所あつて、人兼山の着眼と努力とに驚いたのである。兼山の塾に有名なものに家塾の四書と稱したものがある。學庸孝經と戴記中より拔く所の學記である。

兼山は又易・書・詩・三禮・論・孟・孝經・文選・千字文等に所謂山子點を施して刊行した。

この兼山及び金峨等に依つて主唱せられた折衷學は、金峨門の豐洲・篁墩・北山・鵬齋等に依つて愈〻世に著れ、それが篁墩を中心として、洪園・漁村・篁邨と考證學派に展開して行つた。然し其研究の方法は兼山の垂統に負ふ所が多いのである。而して兼山の研究方法は實は徂徠學に據つて啓發せられてゐるのを思ふ時、徂徠の巨跡は改めて注意されねばならぬことを、特に感ずるのである。

## 四　井上金峨と其學流

井上金峨、字純卿、考槃翁、柳塘閑人等の名がある。自ら信濃の人と稱してゐる。笠間侯の侍醫の家に生れたが祿を辭して儒となつた。金峨は幼時西條（伊豫）の文學宮川濟之（熊峯）に就いて學んだ。熊峯は紀州の陰山東門に學び、東門は仁齋の門人である。故に金峨は終身堀河の學風を公然と排撃しなかつたと言はれてゐる。金峨は又井上蘭臺に學んだ。蘭臺は林整宇の門であるが物氏の學に左袒した人物である。金峨はこの人を「父執蘭臺先生」と呼んでゐる。金峨江戸に在る四十餘年間、常に家道貧しく、嘗て駒籠に在つた折などは吉祥寺の僧侶に賣講した。有名な「鬻講」で、金員を定めて經史を講說し、日毎に賃錢を資つた。天明四年夏東叡山法親王の駕に從つて日光山に登つた。留まること數日、疽が背に發し起つことも出來ない。漸く江戸に歸つたが醫官劉藍溪（多紀姓、桂山の父）の家に寓したまゝ、五十三歲を以て歿した。

金峨は壽を長くしなかつたが其門下を誘導すること頗る熱心で多くの逸材を出してゐる。

龜田鵬齋（名長興、字穉龍）も其一人である。鵬齋は性頗る豪邁で當時の儒流に卓然としてゐた。

壯年駿河臺に帷を下したが寬政異學の禁に逢ひ、同門の山本北山等と共に當局の迫害を受け門人の仕

官を禁ぜられたので弟子盡く去り衣食に窮したこともあつた。志は實學に存し、天明の饑饉の際は藏書を賣つて貧民を賑した。後金杉に農耕と筆耕とを事とし文政九年三月七十三を以て歿した。この人の學は歷代先儒の說を淘汰取捨し一家の見を立てたものであつた。

吉田篁墩（名漢官、字學生、又佐佐木坦藏ともいふ）も金峨門である。水府侯の醫官であつたが儒となつた。所謂考證學の先達で、宋版・元版・明版等古鈔本を愛すること斯人に始まる。又書畫古器名物を玩び、後大阪の木村巽齋に賣つて子孫の爲に美田を購つた。著書は頗る多い。

石川滄浪（名淸、字淵、奧州の人）は金峨の死後その養子井上南臺を助けて折衷學の中心となつた人物で、金峨の門人半ば此人に從つたといふ。天明中三十九で歿した。滄浪遺稿がある。

山本北山（名信有、字天禧、孝經樓主人、奚疑翁ともいふ）も亦金峨に學んだ。この人幼より慧敏、十五歲にして孝經の學に通じたといふ。殆んど獨學で成功した人物で、常に「古人事を創むる者豈師承あらんや」と稱してゐた。漢學も宋學も、堀河も蘐園も修めた。元來家貲に富み奇籍珍書を求めて讀破した。年二十二孝經集說を著した。北山の經學は、孝經を中心とし、文學は韓柳を標準とし、淸新の詩を主とした。當時蘐園の風盛で、詩文などは李王を宗としたものであつたが、北山は「作文志彀、作詩志彀」を著し、大いに之を排擊した。爲に江門の學風は一變したとまで言はれてゐる

る。時に彼は二十八九、四方の士風を望んで門を叩き學を受くる者一時に數百人に及んだ。北山は、鶴鳴、豊洲、大峯、鵬齋と共に所謂寛政の五鬼と稱せられ、御用朱子學に斷乎として叩頭しなかつた。文化九年六十一歳で歿したが、其門から錚々たる人物が輩出してゐる。

山中天水も其一人である。北山は天水の才を愛し、我門の安藤東野（徂徠門の逸材）と推賞した。天水が北山に學んだ頃、同門に、東方祖山、小川泰山等が居た。天水は三十三で寛政二年病歿したが、二十五歳にして日本橋本町に青霞亭を築いて徒を教へたので、養ふ所より後年の名士中井敬義、松浦篤所、大窪詩佛等が出た。天水が終の前夜七律一首を賦し門人をして紙を持たしめ仰いで書いたといふ詩が先哲叢談に載せられてゐる。名作である。天水は平生精を著述に専らにし成さんとして稾を起し脱稿しなかつたものが多い。天水と親しかつた者は錦城と泰山である。小川泰山も亦有名な神童である。大雪中に顚蹶しても師の許に至つたといふ美談を殘してゐる。錦城は泰山に長ずること五歳、天水は錦城に長ずること五年、晝夜几案を駢べて勉學した。嘗て三子各〻志を言つたことがあつた。天水は「天下の詩文、徒に浮僞剽竊、陳腐模擬を事としてゐる。予は反正の業を修め、其弊を一洗しよう。」と言ふ。錦城は「今や海内の學者、徒に漢魏の訓詁と宋元の性理に、拘泥してゐる。余は漢宋を折衷し衆說を撰擇し、力めて門戸の見を破つて經解を著述しよう。」と曰ふ。泰山は「我邦の學者諸

子の讀み難きに苦しむ。故に書は人の讀み難きを選んで、伏を發し幽を闡き古賢の道を昭明しよう。」と言つたといふ。泰山は天明五年、年十七で夭折した。錦城のみが獨り存すること五十年、經義を以て世に著聞した。泰山は常に坐傍に、老・莊・管・晏・墨・列・呂・商・國策等の諸書を置き、巡覽して之を讀み、解せずんば止まなかつた。驚歎すべき天才兒である。泰山經子遺說に錦城は序を作つて、「古人夙慧にして神童を以て稱せらるる者王勃李賀の輩の如き、詩賦の才に過ぎず。經を詁し子を解し、考證精博なること豈誠甫の如き其人あらんや。彼土既に希なり。況や我土に於てをや。是亦古今の奇才なり。若し此人にして今日に存在せしめば、一代の儒宗は此子を推すべし。」と言つてゐるのも過稱ではない。

梁川星巖（名孟緯、字公圖、天谷、百峯、老龍庵と稱す）も北山門である。大窪天民の於玉池江湖舍の同人、後自ら玉池吟社を主宰した。京の鴨沂小隱に居を移し跡を煙霞に託し吟詠獨り樂んだ。安政間幕議尊王攘夷論者を捕へんとした時慷慨して時事を譏る詩二十五首を作り、其歿後妻紅蘭女史が捕へられたのは有名な話である。

片山兼山の遺腹子として有名な朝川善庵も北山に學んだ。兼山原氏を娶り三男一女あり多病中年に歿した。原氏は幼を携へて朝川默翁に適つた。默翁は四子を愛すること實子の如く、就中最も季子

を寵し自ら句讀を授け北山に從學せしめた。この子も亦神童の稱があつた。默翁歿するに臨み、遺腹子たるを明かにして片山姓に復して先業を繼がんことを勸めたが、善庵は終生朝川姓を冒した。

大田錦城（名元貞、字公幹、通稱才佐、加賀大聖寺の人）も北山門である。もと醫であつたが彼は初め京都に出て皆川淇園に從ひ、後江戶に下つて北山に就いた。刻苦精勵、頗る學に篤かつた。多紀桂山特に錦城の才を愛して其子弟を從學せしめた。吉田侯の儒官となり、更に父母の國、加賀侯に三百石を以て聘せられ上士の班に列した。

北山の門人は頗る多いが更に列擧するの煩を避ける。

金峨の學は一家に偏せず、訓詁は漢唐の註疏に取舍し、羣言を折衷し、義理を宋明の諸家に磅礴して穩當を撰擇し、以て先聖の遺旨を闡發して前修の及ばなかつた所を匡すといふのを趣旨にしてゐるやうである。寶暦以來の學界は、諸家門戶相擠し、朋黨相結び、漢宋と伊物とに論なく、唯自己と同じくするものを稱揚して、異るものを排擯し、師弟の間も阿黨を以て善とし、經義文章はもとより、甚しきに至つては服飾器用に至るまで蹈襲模倣して、必ず其師に效ふといふ風であつた。金峨はこの弊を矯揉しようとして著したものが、師辨、解客難の二篇であつた。この二篇は刊行されたのであるが傳本極めて鮮い。中々文も巧であり論もしつかりしてゐる。時に金峨二十三歲であつた。彼の折衷

學的な態度はこの二文中に明かにされてゐる。金峨のこの傾向は、自ら言ふ如く「自得」であつたかも知れぬが、其師井上蘭臺に基く所あることは見落してはならない。蘭臺が村正舒に與へた書中に、「熙幼にして孤貧、師保の訓なし。然りと雖も詩を誦して雅頌を知り、書を讀みて堯舜を知る。困學二十年一日の如く益〻仲尼の道を信ず。何の暇ありて宋儒藤物二家に及ばんや。宋儒は聖人を知らず與に言ふに足らず。藤維楨自ら古學といふも宋儒の弊を免れず。物茂卿二辨（注、辨道、辨名）を作爲し又論語徵、學庸解を著す。亦唯二義（注、仁齋論孟古義）及び定本（注、大學）發揮（注、中庸）と奚ぞ擇ばん。緣飾する所ありて仁齋を駁する者も亦、果して是か非か。熙の未だ知らざる所なり。」と言つてゐる。金峨が「父執」を以て蘭臺を稱してゐるのは其學風にも享くる所あるからであらう。

金峨に緣するこの一派の學風は概して同じ傾向である。大田錦城は寧ろ考證派と稱すべき人物であるが、この派の傾向に富むことは例の漫筆に見て知るであらう。「我家法は漢傳唐疏、宋元註解、明清著作いづれも愛憎の取舍を爲さず。務めて公平心を以て諸說を折衷し、猶ほ心に慊せざる所あれば、精思考覈し、至當を期して止む。門戶爭軋の意は神明に誓ひて挾まず。是れ論語の比黨の聖訓を恪守するなり。」と述べてゐる。いかにも錦城らしい言であるが、學風の由る所を察するに足る。錦城の仁の研究は、當時としては頗る特異な方法を用ひた。卽ち先秦以來の古書を涉獵して苟も仁字に

及ぶ諸說は悉く之を蒐め、然る後二十項の細目に分類し、歸納的に仁の眞義を把握しようと試みたものである。現在に於て之を見れば議論の餘地大いに在るも、考證學的には興味ある研究である。

## 五　宇野兄弟と其學流

折衷學派のうち宇野兄弟の學流は、特殊な存在である。兄は士新、弟は士朗、平安の人である。士新は明霞軒と號す。父は角倉與市に屬し運漕を業としてゐた。始めて章句を向井滄洲に受けたが、學としての師承は無いと言つてよい。弟士朗と共に刻勵して書を讀んだ。足戶閾を踰えざること十有餘年、時人語を作つて「都下見ざるもの三、宇野三平が市に至るを見ず、香川太冲が病を治するを見ず、谷左中が文を作るを見ず。」と言つたと傳へられてゐる。士新は終生娶らなかつた。高邁な志氣もあり、强學も人に越え、漢魏以來の諸家の說を統べて一家を立てようとした其志が酬いられず年齡四十八で歿したことは惜しい。先哲叢談には「其學必ずしも仁齋徂徠に讓らず。」と稱してゐる。弟との友愛篤きことは頗る有名であつて、その愛弟が高才を抱きながら年齡僅か三十一で歿した時、其遺稿に序して、「余士朗と同じく學ぶこと十餘年、而も自ら成す所を顧るに、曾ち未だ士朗の如きこと能はず。士朗誠に才ある哉。且つ余病を以ての故に、思慮を省し、精神を一にして觚を操らざる久

し。則ち其の余に先だちて翩翩たるは、固に宜にして、而も宜しく先だつべからざる者にして先だつは獨り何ぞや。」と嘆じてゐるのは誠に痛ましい。原念齋が「嗟乎、天少しく年を假さば其樹立當に量るべからざらんとす。」と惜しんでゐる士朗である。

二字先生の門で有名なのは武田梅龍（字峻卿）である。もと東涯に學び、其歿後明霞に就いた。經濟を主とする學を喜び、頗る管子を重んじ、校して梓行した。又管子の心術内業等の諸篇を表章して「心學古源」と言つた。明霞遺稿中に「篠士明」と稱するのはこの人で、其先が三州篠田村に居つたので篠田氏を冒したのである。

片山北海も二字門である。新潟の人でこの號を用ひた。明霞の歿後は大阪に移つて門戸を張つた。有名な混沌詩社の總帥である。人と爲り閑靖寡欲、世と競はず、表飾を心に措かず。然し内滿ちて外に著れ、名海内に高く所謂三北海と稱せられた一人である。

龍草廬も明霞門であるが、同門の武田梅龍、芥川丹丘、片山北海、赤松滄洲、僧大典等より頗る卑しめられ、「草廬之と交るに遜言己を恭しくし一言を發する能はず唯謹むのみ。」と先哲叢談後編に書かれてゐる。明霞も其人と爲りを好まず破門したので、草廬も大に之を憤り終身明霞の門に在つたことを口にしなかつたといふ。東條琴臺なども草廬を評して、卑しとし、長野豐山の松蔭快談にも「明

の七子を學んで極めて拙、極めて劣にして妄りに詩名を竊むもの」と言つてゐる。當時は詩社が多く服部蘇門の長嘯社、北村北海の賜杖堂、片山北海の混沌社等は有名であるが、草廬の幽蘭社も亦混沌社と共に最も世に著れてゐた。しかし當時の志ある者よりは「遊亂社」と指笑されてゐたと言ふから草廬の人物の感化は大したものでなかつたやうに思はれる。この人は折衷學者といふわけで無く、明復門に學んだ一人といふに過ぎぬ。

宇野門で其他に赤松滄洲が有名である。特に其二子蘭室・魯齋は名家である。魯齋の如きは二十三にして歿したが、妄りに人に許さぬ備前の湯淺子祥が、魯齋を重んじ、滄洲父子兄弟を三蘇に比してゐる。

宇野兄弟の學風は、漢魏以來の諸說を統べて一家の見を立てようとした處に特色があるので、士新の名著と言はれる論語考の如きは、博く群書を涉獵して、彼此考覈し、以て徂徠の說の謬誤を正した者である。徂徠を目して「是の如きは孔子の罪人、先王の罪人、天下の罪人。」と言つてゐる。甚だ徂徠を討つが如くであるけれども、事實は二人共深く徂徠に服してゐた。徂徠の歿した時、士新は祭文哭詩を作つて之を褒揚した。人が之を過稱であると評するや、士新は「物子を稱する未だ敢て實に過

ぎず。物子の自負する所は經術なり。其の文固より未だ濟南（李滄溟）に及ばず。余も亦之に過ぎたりと謂はず。然れども經術文章相兼ぬるは彼も亦未だ及ばざる所あり。則ち不佞の稱、何の過か之あらん。」と答へたといふ。士新は又門人丹丘に與へた書中にも「夫れ物氏は實に東方開闢の一人、其れ華夏に在りても亦其比を難んず。」と賞めてゐる。士朗は嘗て江戸に下つて蘐園に學んだ。春臺が其著斥非に「兵助（士朗の小字）嘗て東都に遊び、我徂徠先生に從つて古文辭を學ぶ。既に平安に歸りて之に畔き其兄と徂徠を非る。」と言つてゐるが、士朗の方もよく徂徠を知り、僧玄海に與へた書に、「文豈言ひ易からんや、古今を綜該し天地を包羅し、然る後得たりと爲す。今其人を求むるに海内の大にして一物先生有るのみ。」と言つてゐる。

宇野兄弟の學風も要するに蘐園から誘發された考證學的色彩の強い折衷學である。二宇先生の門下には其經學を更に發展せしめた人物といふものは無いやうである。

屢〻言つたが徂徠の足跡は、折衷學派を通観しても、其偉大を痛感するのである。

**附　錄**　各派學流系統表。

┌石　川　金　谷

(一)

- 中西淡淵
  - 南宮大湫
    - 南宮藍川
    - 石作駒石
    - 首藤水晶
  - 細井平洲
    - 秦鼎
    - 佐伯子則
    - 渡邊子觀
    - 樺島石梁
    - 神保忠貞
    - 泉豐洲
    - 金谷靜臺
    - 小河鼎
  - 伊藤冠峯
  - 小川天門
  - 飛鳥圭洲

(二)

- 鵜殿士寧┈┈片山兼山
  - 村杉子敏
  - 萩原大麓
    - 萩原樂亭
    - 萩原綠野
  - 久保筑水
  - 長萬年
  - 小田穀山(滕煥章)
  - 松下葵岡
  - 小野君山
  - 幡鎌鄰齋
  - 小林龍山
  - 菅葛陵

(三)

- 井上蘭臺
  - 澁井太室
  - 關松窓
  - 井上四明
    - 村上芝塢
  - 井上金峨
    - 井上南臺
    - 山本北山
      - 原念齋
        - 原得齋
      - 梁川星巖
      - 朝川善庵
      - 大田錦城
      - 山本綠陰
        - 寺門靜軒
      - 蒲生君平
      - 雨森牛南
      - 横田伯愼
      - 長川華山
      - 草加蓮溪
      - 東方祖山
      - 山田圖南
      - 山中天水
      - 小川泰山
    - 多紀桂山
    - 菅原東海
    - 下田芳澤
    - 吉田篁墩
    - 石川滄浪
    - 篠本竹堂
    - 梅澤西郊
    - 原狂齋
    - 衣笠鳩陵
    - 尾崎稱齋
    - 菊池南陽
    - 岡四溟
    - 吉田蕉岐
    - 龜田鵬齋
      - 芳野金陵
      - 日尾荊山
      - 龜田綾瀬
  - 八田華陽

（四）

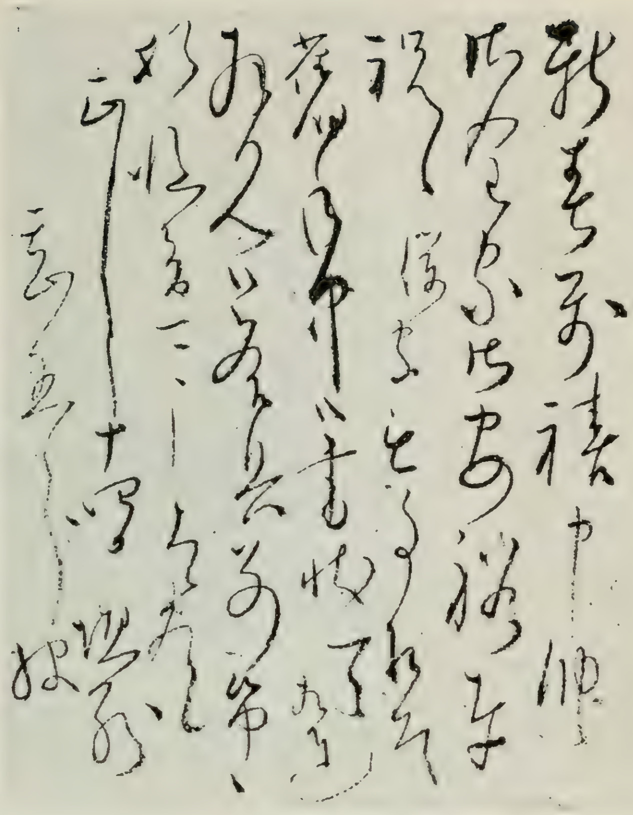
- 宇野士新
- 宇野士朗
  - 武田梅龍
    - 村瀬栲亭
      - 岡本元亭
      - 田能村竹田
  - 土岐霞亭
  - 坂本天山
  - 片山北海
    - 尾藤二洲
    - 岡賓王
    - 松室松峡
    - 魯谷之唯
    - 木村巽齋
    - 鎌田環齋
  - 田中大觀
  - 赤松滄洲
    - 大川蘭室
    - 大川魯齋
  - 芥川丹丘
  - 僧大典
  - 前島當元
  - 龍草廬
    - 僧湅滴
    - 小幡太室
    - 大江玄圃
      - 大江維緋
      - 大江藍水
    - 川合春川
    - 荒睪山
    - 岡崎廬門
    - 室春窓
    - 李蘂園
    - 左海門
    - 龍玉淵
    - 龍鏡湖
    - 南川金溪



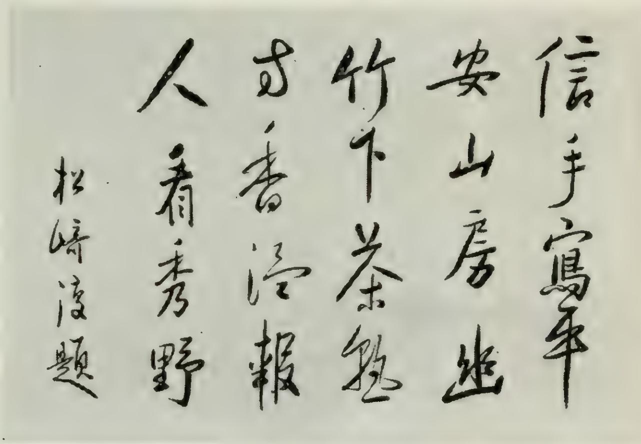
松崎慊堂肖像



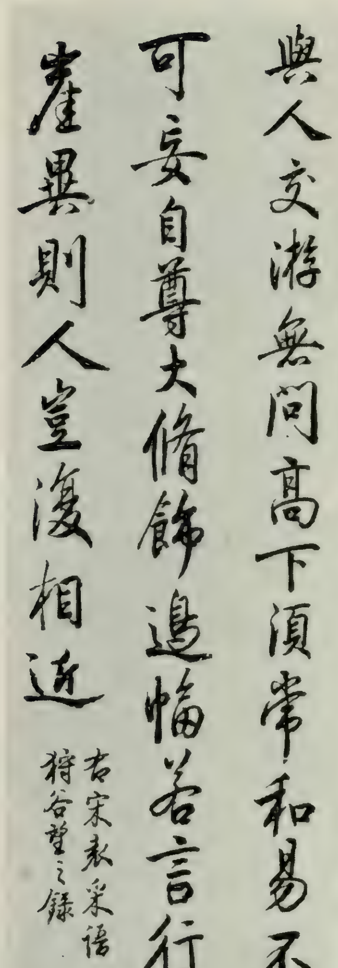
狩谷棭齋肖像



吉田篁墩書狀（濱野知三郎氏藏）



松崎慊堂筆蹟（高野辰之氏藏）




狩谷棭齋筆蹟（高野辰之氏藏）

# 考證學概說

中山久四郎

德川時代に興りたる儒教漢學は、大體程朱學を主として、陽明學派、古義學派、復古學派、古註學派、折衷學派の諸派に分れ、而して考證學風は、深淺精粗の別あらんも、諸派に通じて行はれしものである。而して此學風は、近世支那より受けたる諸影響中、學術關係の一事として注意すべきものである。

一概に支那の學術といふも、時代によつて各〻特色がある。儒學創始の先秦時代の後、兩漢の訓詁記誦に精しき、六朝の清談詞章を競へる、唐の詩の前後に優れたる、宋の性理學風の新なる、各〻その特色を發揮したものである。而して明末清初以後の近世支那に至りては、編纂と考據の博且つ精にして、特に考據學の又は考證學の盛なるを以て其特色としてゐる。

大田錦城の九經談卷一に、

經學古今之間、有二三大變一、（中略）有二漢學一焉、有二宋學一焉、有二清學一焉。

といひ、而して漢學は訓詁に、宋學は義理に、清學は考證にありと注意したのは、要領を得たものであつて、安積艮齋が、艮齋間話（下巻）に、

聖人ノ政ニテモ數百年ノ久シキニ至レバ流弊生ジ人情厭フハ勢ノシカラシムル所ナリ。因テ其時ニ隨ヒ變革ナキコト能ハズ。（中略）學問モ是ニ似タルコトアリ。世ニ隨テ變易スルハ自然ノ勢ナリ。（中略）（此間漢唐宋學風の變遷を論ず）明末ニ至ルマデ此學（○陽明學）盛ニメ其流弊ノ甚キハ朱子ノ學ニ過タリ。然シ陸稼書、呂晩村ノ徒陽明ヲ掊撃シ明ノ天下ヲ滅ス者陽明ノ學ト云フハ餘リ甚キ激論ニテ陽明自得ノ妙ハ後學ノ輕議スベキ所ニアラズ。是又宋學ノ一變ナリ。清ニ至リ顧炎武、毛奇齡、朱彝尊、閻若璩、胡渭、江永、萬斯同ノ徒起リ攷證ノ學ヲ唱ヘテ學風又一變ス。是モ自然ノ勢アルニ似タリ。朱子ハ千古ノ大儒ナレドモ其學ヲ奉ズル宋季以來ノ諸儒（中略）朱子註解ノ書ニハ精詳トイヘドモ漢唐諸儒ノ注疏老莊申韓ノ諸子班馬已來ノ歷史ナドハ深ク涉獵セザルト見ヘテ其著セル所ノ書ヲ讀ムニ手近キ出典攷據ヲ知ラズ强テコレガ說ヲ爲シ往々一笑ヲ發スルコトアレバ豪傑ノ士ハ其下ニ屈スルヲ甘ンゼズ更ニ一赤幟ヲ立ントスルモ一概ニ無理ト謂ヒガタシ。故ニ顧炎武、閻若璩、毛奇齡、朱彝尊ノ徒朱學ノ力及バサル所ヲ精究シ考證ヲ主トスルモ自然ノ勢ニ非ズヤ。

といへるは、說き得てやゝ詳なるものである。又那波魯堂が學問源流の中に、

清朝の學、博く經史を讀み、駁雜に墜ちず、理窟に泥まず、各其事に就て、諸書衆議を考へ合せ、是非の正當を明にし、程朱の眞を得るを旨とし、往々に元明諸儒の說に勝れる處あり。陳廷敬、顧炎武、萬斯大、徐乾學、朱彝尊の諸人其選たり。清人の著書甚あること多し。昔此書なき時は、なきにしても濟たるも、今にしては不ㇾ讀ばあるべからず。

といへるは、清儒の學風を說き、清儒を稱贊して簡明なるもので、特に清儒贊美の言は、大田錦城の

然與ㇾ得㆓明人之書百卷㆒、不ㇾ如㆓清人之一卷㆒也。（九經談卷一）

に於ても之を見ることが出來る。清朝學風の說明及び清儒稱贊のことは、略〻上記によつて之を知られる。

次に近世日本德川時代の學風を大觀するに、慶長元和以後の第一期七十年許は、儒林多士なりと雖も、程朱或は陸王の說を信奉するを常とし、又當時の學風は經學詩文未だ分れて二途とならず、未だ詩文に專なるものあらず、書籍も少く、未だ專門考證的の學は興らなかつた。

此間に於ける近世支那學術の影響は、朱舜水の來歸投化を以て特に大とす。舜水は明朝の遺士にして、清人にあらずといへども、其我國に歸化したるは、我萬治二年（清の世祖順治十三年）にして、

しかも其來歸は清朝の興りて明に代りしが爲である。卽ち清朝の興起なかりせば、此事あらざりしものである。而して舜水の我近世儒學に裨益せし事の主なるものは、㈠水戸義公の師となり、水戸學風の開發に與りて功多きこと、㈡安積澹泊を其門下に出して、水戸修史の文運を促進せしめたること、㈢楠公碑陰の文を作り、大義名分を明にして、人心の向ふ所を知らしめたること、㈣安東省庵は衆に先んじて之に師事し、㈤木下順庵は屢〻就いて道を問ひ、㈥鵞峯の二子、林梅洞（春信）同鳳岡（信篤）の兄弟も就いて教を請ひ、㈦山鹿素行は素行の號を舜水より得、㈧加賀の松雲公前田綱紀の需に應じて、或は櫻井驛訣別圖に贊し、（碑陰の文は卽ち是なり）或は松雲公のために綱紀の名を選定し、㈨「舜水文集」「舜水朱氏談綺」の著述を遺し、㈩湯島聖堂建築の模範を遺せしが如きことなどにして、其名教學術に及ぼしたる感化影響の正且つ大なるは、詳述を要せずして自ら明なることである。

舜水設計の聖堂建築の模範は上記の「舜水朱氏談綺」巻之中、本末二冊に詳記され、寛政八年十月將軍家齊の時湯島聖堂大成殿改造の議あり、幕府林衡（述齋）に命じて新廟の規模を制定せしめらるゝや、遂に朱舜水が嘗て德川光圀の爲に製作したる聖廟の模型（木造）尙水戸にありしを送致せしめて、其構造を研究し、新廟の體裁大體之によることとした。かくて同十一年新廟建築成り、爾後大正十二年に至るまで存在し、一百二十五年間輪奐の美を存續して、文教の中心なりしが如き狀ありしに、同年九月一日の大震火災の爲に燒失したるは大に遺憾

とする所である。

舜水と同時代に投歸したる明末の人は陳元贇である。元贇の拳法傳來及び詩學上の功などにつきては、記すべきことあれども、本章は經學方面の儒學特に考證學の傳來影響につきて論究せんとするものなれば、之に言及しない。

朱陳二氏の外、明末清初の支那人の歸化少からず。從つて其感化影響も亦多けれども、宗敎、醫藥、美術、言語等の別方面に屬することであるから、是れ亦本篇に記さない。

然りと雖も、滿人の淸朝が漢人主權の明朝を滅したる結果は、我國をして又新たに漢人種の支那文化を吸收するの一大機會を得せしめ、淸朝の粟を食むことを悅ばざる明の遺臣等は陸續として我國に來舶投歸し、朱舜水等は諸般の學術、技藝を我國に傳播し、德川氏時代の初め、新しき泰平の世に入りたる我國民は、新しき國家の進運經營に要すべき種々の資料を明末淸初の隣邦より供せられたやうな狀態にありし當時の事情は、玆に特筆附言すべきことにして、近世支那學術の傳來影響も斯の如き時世に動き初めたのである。

然り而して德川時代に於ける淸儒的考證學風の流行は、其中葉以後の事であるが、其初世以來の學風を略述して、以て考證學風の行はるゝに至りし事情を明にしたい。

徳川時代の初期に於ける儒學は、概ね宋學の信奉、或はその服從に甘んじたが、慶長元和以後七八十年を經て、徳川第四世家綱の頃に及び、伊物二子（仁齋、徂徠）前後して世に出でて、思想獨立、研究考證の先驅をなし、獨創的研究始めて興り、徂徠の如きは後に「度量考」「葬禮考」「葬禮略考」「樂律考」「滿文考」など考究的著述を出し、又貝原益軒の如き篤實謹愼なる學者も、懐疑思索の念を起し、其晩年には、「大疑錄」を著して、宋儒に盲從せず。我國儒學界の生氣漸く見るべきものがあつた。以上を第一期とする。「それ疑は人間にあり、天に疑なきものを……」とは、謠曲羽衣の言にして、人間個人間の猜疑の如きは、固より忌まはしき者なれども、研究上の疑問質疑は必要のことにして、唐の劉知幾の史通にも疑古の一篇あり、宋の王柏には書疑と詩疑の如き著述あり。疑問質疑は知識向上の一歩である。益軒に「大疑錄」の著ある、決して偶然でない。而して疑へば則ち考へ、考へて而して證據を求め、やがて考證學風となるのである。

此後約七十年（貞享、元祿、寶永、正德、享保、元文、寛保、延享、寛延年代、即ち綱吉、家宣、家繼、吉宗、家重時代）を第二期とする。此間の初には、好文崇儒の將軍綱吉ありて、學術を奬勵し、儒學界には、伊物二大家の外、木門（木下順庵門下）の師弟、崎門（山崎闇齋門下）の諸子、水戸藩の君臣、林家の官學、各〻一方に據りて、衆を領し、人を聚め、多士濟々、研究討論、辯難攻撃、人

文活動の高潮的盛況をあらはし、之に加ふるに、富永（仲基）の獨創、三輪（執齋）の王學、秋山（玉山）の修辭亦各〻一世の珍たるあり。桂山彩巖の如き、林門より出でしものなるが、考證に長ぜしを以て有名である。又木門諸子中、新井白石は、特に比較歴史學に長じ、批判考證的論著の少からざること、世間周知の事である。

之を要するに、第二期文華燦爛の美觀は、時勢發展の盛運とともに相照耀するの狀であつた。

次に寶曆、明和より安永、天明を經て、寬政、文化、文政に至るまでを第三期とする。約八十年の間なり。（家重、家齊の時代）。第三期の初に至りては、前期の老儒碩學、漸く世を去り、又新たに覇を稱する大家あらず。諸學派の末流は、辯難の極、互に軋轢して、各〻黨を樹てて、門戶の爭を爲すに至つた。又詩文の流行は全國に洽く、詩鈔、文集の刊行は歲に盛なり。儒學特に經學に於て新たに一家をなさんとするものは、他の新學風を興さざるべからず。是に於てか、公平の態度を標榜して、門戶の固陋に陷らざるを旨とする折衷學派と稱する一派は、諸派軋轢の反動として新たに興り、やがて考證學風の流行することとなつたのである。

但し折衷學、または考證學の萌芽ともいふべきものは、既に此第三期以前に發生した。山崎闇齋の如き此學風に屬するものとして知られざれども、其著述に「經名考」「本朝改元考」「四書序考」など

の書名あるを見れば、少くとも考究的學風もありしことが窺はれ、伊藤東涯の博洽精緻にして考證的學風にも親しかつたことは、「釋親考」「助字考」「周易義例卦變考」「沿革圖考」「周易傳義考異」などの著述書名によつて之を知るべく、又新井白石の博識にして、考證的史論に富めることは上述の如し。更にまた物徂徠の諸學諸說を兼採して其長を擇び、且つ上記の如き考究的著述もあることを見れば、折衷學または考證學風中の人たるが如し。且つ徂徠門中、太宰春臺に「律呂通考」、宇佐美灊水に「文變考」「辨道考」「辨名考」「絕句解考證」「絕句解拾遺考證」の諸考、山井崑崙に「七經孟子考文」の著述あり、又物觀に「衡考」の著述及び「七經孟子考文補遺」あり、物金谷には「近思錄考」「漢儒傳經考」「樂律考證」などの著述あるを見れば、徂徠一門も、少くとも考究または考證的研究を輕視したのではなかつたのである。

然れども、伊物二子の師弟及び白石等の本領は、むしろ折衷考證の外にありて、折衷及び考證學派の儒者が、やゝもすれば或は博覽の爲に自己を沒却して、自己の思索の體系を確立せざるが如きことがないから、折衷考證學派は、是等の諸子に起れりとはいひ難い。されども、白石と同じく木門の一人たる榊原篁洲は、當時既に學派を區別することを好まず、後の所謂折衷學風の人であつたことは、東條琴臺も、

篁洲在㆓當時㆒、既不㆑好㆓區㆓別學流㆒、（中略）訓詁則據㆓馬鄭之舊說㆒、義理則依㆓程朱之心性㆒、近時所謂折衷學者、胚㆓胎於此㆒。（先哲叢談後編第二卷）

といつて居る。なほまた宇野明霞も「論語考」、「姓氏解」などを著述し、特に「姓氏解」は古今を研究し、和漢を考覈して頗る詳細なる考證的著述である。而してこの篁洲及び明霞の二儒ともに第二期の學者なれば、折衷學または考證學の萌芽ともいふべきものは、すでに第三期以前に發生せりといふこと、上記の事實と併せて之を首肯することが出來る。然れども、是等の諸儒中宇野明霞を除くの外は、折衷學派又は考證學風の儒者として認められないのを常とする。

然るに、第三期に及んでは、片山兼山、井上金峩の如き折衷考證の學風を以て其本領となすものが世に出た。

第三期の初世寶曆時代の學派軋轢の弊、及び金峩の折衷學を唱ふるに至りし事情は、先哲叢談後編卷之七の井上金峩（原書には單稱して井金峩とす）の條によつて之を窺ひ知ることが出來る。而して金峩の學、一家を偏主せず、博く漢唐宋明の諸書を渉獵し、取捨折衷して、穩當なるものを選擇するの風は、頗る當時の學界を動かし、上記先哲叢談後編卷之七には、

關東之學、爲之一變、近時所謂折衷家者、若豐島豐洲、古昔陽、山本北山、大田錦城等諸家、皆

以經義著稱、其實皆興起於金峩之風焉云。

とあり、劉惠（字は仲明、號は藍溪、多紀氏、江戸の人）の金峩井先生墓碑銘並序の中には、

大抵、取二捨訓詁於漢註唐疏一、折二衷大義於朱王伊物之間一、而其所二持論一、闡二發孔周之道一、匡二前修之不レ逮者一、云々。

といひ、續諸家人物志（靑柳東里著、東修琴臺閲）の卷上の井金峩の條にも、

始は井蘭臺の門に入て學ぶ。後に一家の言を成し、折衷學と稱せらる。其學漢宋諸儒の經說を取舍して、善なる者に從ひ、一家の言に專守せず。折衷學といふ。（中略）江戸の文學これが爲に一變す。蘐園の學漸に衰ふこと、此人の斥非するに依てなり。

とあり。而して其著述に「經義折衷」「周易彙攷」「論語集說」などあり、かつ其養子南臺に「經義折衷考」「經義緒言考」などの著述あるは、自ら金峩父子の學風の折衷考證的たりしことを示すものである。

さて此金峩の門下には名家を出すこと頗る多い。今特に折衷考證的研究を以て名あるものを表すると次のやうである。

井上金峩

- （子養）井上南臺
- （入門）石川滄浪
- （同）吉田篁墩（篁墩の事は後に之を特筆すべし）
- （同）梅澤西郊
- （準門人）山本北山（北山門下の錦城等の折衷考證學風につきては後に說かん）

井南臺の事は、既に之を一言した。石川滄浪は金峩の歿後、南臺と力を合せて、折衷の學を講じ、益〻師說を繼述し、金峩の門人半は此人に從ひしといふ。（續諸家人物志卷上）又梅澤西郊に「韓非子考」「荀子註考」などあるは、明に師風を繼ぐものといへよう。

井上金峩と大體同時代の片山兼山の論語一貫の出版廣告文にいふ、

先生は近古最一の考證家にして、淸朝諸大家の影響あり。元祿、享保の學の誤謬を一洗して、一家の學を爲す。

亦以て當時の考證學風傾向の一例と見ることが出來る。

また井上金峩と同時代にしてや丶先輩たる那波魯堂の如き、もと宋學派に屬するものなれども、その著「學問源流」には、淸朝考證學者の長所に敬意を表して居る。是れ亦當時の傾向を示すものとい

ふべきである。

さて金峩門人中、考證學の首唱を以て尤も名高きものは、吉田篁墩である。

篁墩の學風は其著述に「經籍考」「活版經籍考」「足利學校書目附考」「論語集解考異」等の考證研究の書あるを見ても之を窺ひ知ることを得、文政九年東條琴臺が篁墩の著書「近聞偶筆」に跋文を作りて、

篁墩先生、家世業レ醫、至二篁墩一、始爲レ儒、左二袒漢魏傳注一、首二唱考據學於安永天明之間一、平生好二合古鈔數本一、比二對校二勘四子六經一、其所二著述一總若干種、特論語集解攷異、經籍考二書、考證明徵、持論詳密、盖我邦人所二未曾有一、而皆爲二有識者所一レ稱、近世之人、爭二捜珍編奇冊一、知レ崇二奉唐宋古鈔影本一者、實篁墩爲二之嚆矢一云。

といひ、又同じく文政九年に、塘它山も「近聞偶筆」に跋文を作りて、

篁墩先生、首二唱考据之學一、以率二後進一、旁以二鑒識博通一稱、距レ今數十年、其人既騎二箕尾一、而今稱二好事者流一者、盖由下先生早啓二歩徑一而進上焉。

といへるを見て、益々明に篁墩の學風と其影響とを知ることが出來る。この外、大田錦城の「梧窓漫筆」後篇下にも、

昔時亡友吉田篁墩の校合を好みたる故、云々。

の記事あり。またその「論語集解攷異」を見れば、毎葉「倣傚乾隆聚珍版式本」とあるによりて益々其清朝風模倣の態度を知ることが出來る。而して篁墩の斯の如き學風は、彼が平生清朝儒者の名著を観感せるによりて起りしこと、篁墩の著述中に散見し、其例證を擧ぐれば、近聞偶筆（巻四）に、左記の如き言あり。

清代諸儒、著述如レ林、各々名レ家、就中卓爾傑作、吾得ニ三書一焉、考据該備、援證探討、不レ遺ニ餘力一、盧文弨之校汲冢周書是也、述而不レ作、信而好レ古、純乎漢唐之舊學、余蕭客之古經解鉤沈是也、渉レ遠履レ險、見聞詭異、議論精到、文章贍新、椿園之西域聞見錄是也。

篁墩が如何に盧文弨の如き考證の精備なる學風を崇好せしか、又其門下に純然たる學者に非ざる一書賈のあつたことは、近聞偶筆の朝川善庵の序文に、

書林老泉、奉ニ教於篁墩一、深信ニ其學一、篁墩沒後數年、獲ニ盧文弨參校宋本經典釋文及考證合三十冊一、捐レ貲翻刻、以惠ニ同好一、繼ニ其志一也。

とあるによりて之を知ることが出來る。老泉とは卽ち寶暦時代江戸神田佐久間町に營業したる書肆慶元堂主人松澤老泉（通稱は庄次郎）にして、書賈を以て學問を好み、篁墩の學風を信奉し、清の顧修

の彙刻書目の遺を補ひて、「彙刻書目外集」を著述し、且つ「經籍答問」及び「老泉漫錄」等を著はしたほどの、篤志の人である。斯の如き書賈の世に出でたのも、畢竟篁墩等崇好の清儒的學風流行の一影響と見るべく、又篁墩等斯學首唱の熱心に感化せられて然りしものとも見るべきである。

是より先き新井白石の頃にも、左記の如き唐本通の書賈があつたが、此松澤老泉の如く專門家的好學の風まで有したる書賈の如きは稀有といふべきである。

一統志の板は、たゞ一板に候やらん、又二三板も候やらん。これらの事も、當時は唐本屋清兵衞早世し候故に、とくと知り候者も、存じ候ものも無之候へば未分明候。（白石先生手簡）

元來德川時代の初期には書籍甚だ少く、唐本も稀有であつたが、世運の發展、文教の進歩とともに、書籍の刊行漸く增加し、唐本の舶載し來るものも亦次第に多く、篁墩青年時代の寬延の頃には、寬延四年（○寶曆と改元す）刊の「唐本類書考」の題言に、

殊ニ近年明清ノ書崎港ニ航致スル部數、眞ニ洹沙ヲ計フルヨリ難シ。

といへるが如き狀況となり、又篁墩壯年時代の明和の頃には、明和七年序の南川維遷の「閑散餘錄」上卷の中に、

近年は唐本多く渡り、和板も年々多く出づ。

とあるがごとく、唐本の舶來益ゝ多き狀況となり、篁墩の晩年に近き寛政元年に歿したる那波魯堂の「學問源流」によれば、當時「華舶の載來る」書籍は、「一書を五部も十部も送ること」となり、而してそれ等の「清人の著書益あること多し。昔此書なき時は、なきにしては濟たるも、今にしては不レ讀ばあるべからず。」の世運となり、尚又篁墩自身の言によるも、

唐陸博士明德經典釋文三十卷、清納蘭成德通志堂刻本、前年海舶多齎販、價亦低、銀參拾錢、可レ得二一部一、人易二於藏弆一、近三年來、本漸少、壹部至二價陌二十錢一、此書通志堂本外無二別本一、間有二訛誤一、不レ可二校補一、今見二中古以來、搢紳博士多引二此書一、今猶當レ有二舊本之或存一也、好學之士、庶更訪求焉。（近聞偶筆卷一）

星鳳樓帖、從前罕二別本一、明和安永之間、唐舶多齎致法帖、絳帖及此帖更多。（近聞偶筆卷二）

といふが如き實況ありたれば、篁墩等も上記の如き學風の變遷及び文運の推移の間に於ける感化影響を受け、且つ上記の如く長崎の唐舶益ゝ多く輸入したる近世支那の考證校勘學的研究の名著を益ゝ多く閱讀したるによつて、次第に考證學風崇好の儒者となつたのであらう。蓋し當時の儒者、道學性理を信ずるものは、朱子につき、直截簡捷を喜ぶものは、陽明にゆき、精緻核實を好むものは、考證に歸したる次第にして、篁墩の如きは、特に考證明徵、持論詳審を以て優れたるものとなつたのである。

今左に「續諸家人物志」上卷の「吉篁墩」の條を抄錄して、此一節を終ることにする。

金峩ノ門ニ入テ博洽ヲ以テ聞ユ。中年ヨリ專ラ古注疏ヲ奉ジ、始テ考據ノ學ヲ唱フ。近世清人考證ノ說ヲ奉ズルコト此ニヒラク。又平生ニ古鈔本ヲ集テ、四子六經ヲ校勘スルコトヲ好ミ、宋元ノ影鈔本ヲ處々ヨリ捜索シテ世ニ顯シタリ。方今ニ至テモ人々皆宋版元版ナド、稱シ、古鈔ヲ尊ブコト、此ヨリ盛ニナリタリ。蓋以前宋元ノ影鈔本ナキニアラザレドモ、世人未ダ珍重スルコトヲ知ラズ。其學清人ノ惠棟盧文昭(マヽ)ナト(マヽ)、如ク校勘精密ナルヲ主トシテ、辨駁スルヲ好マズ。サレドモ後世ニ裨益スルコト少カラズト謂フベシ。

簡單なる略傳なれども、琴臺校閱の人物志なれば、篁墩の學風及び清儒との關係を說き得て要領を得たるものといふべきである。(但し、刊本には上記の如く清の盧文弨の弨の字を昭とせしが如き誤あり)

次に篁墩の師たる井上金峩と同時代、又は稍後れて、皆川淇園、巖垣龍溪、山本北山、龜田鵬齋、及び村瀨栲亭の諸儒あり。其學風、大抵金峩に類似して、又多少清朝學者の風があつた。又篁墩の學風を崇慕せるものとしては、文化時代に學名を揚げたる東條琴臺、塘它山等を稱すべく、其他其頃の校勘、考證、鑒識の學を好む者は、皆篁墩等の遺風を慕へる者といひて不可ないやうである。

特に山本北山は「井金峩ガ折衷ノ說ニ服シテ其誨督ヲ受ク」と稱せられ、(續諸家人物志卷五)「古文尙

書考」「三禮古器考」「文事考」「詩事考」「北辰考」「學術淵源考」「學派考」「衣冠考」「錢帛考」「養老考」「文事證據」などの考證的著述を出したるものなるが、其門下には、僅かに十七歳を以て歿したれども、考證精博なる「經子遺說」などを著はしたる夙慧なる神童小川泰山や、大田錦城等を出し、錦城は特に清儒風の折衷考證に傾いた。

續諸家人物志上卷にいふ、

大田錦城……ハ北山ニ學テ經義ヲ以テ著稱セラル。……其學、漢宋諸儒ノ經解ヲ取舍シ、加ルニ清人考證ヲ以テ專ラ經ヲ講ジ、一時ヲ風靡ス。所謂ル折衷學ナルモノナリ。

と。又藤田一正の「錦城先生大田才佐墓表」の文中に曰く、

先生博學、百氏之書、無レ所レ不レ讀、而尤ニ長於經術一、詩書易春秋、沈潛反覆、參互錯綜、攷證之妙、多發ニ先賢所ニ未發一、（中略）其漢唐宋明、及近時清人、與ニ我國諸儒之說一、會萃演繹、必歸ニ諸至當ニ而止。

皆以て錦城の學風を記して要を得たるものといふべきである。而して其著述に、「周易比例考」「毛詩六義考」「同續考」「論語名義考」「三論異同考」「荀子考」「海寇事略考」「左傳考補」「藝苑折衷」「論語作者考」などの如く、書名によつても、其考證折衷學風を窺ひ知るべきものあれども、その

「九經談」の如きは、錦城著述中の尤なるものであらう。錦城は、この「九經談」一巻に於て、明人の書百巻を得るよりは、清人の書一巻に如かずとまでいひ、且つその「梧窓漫筆」後篇巻下には、

近世清人に三才子あり。紀昀曉嵐趙翼雲崧袁枚子才なり。紀昀は四庫全書を校合して、大博識家となり、趙翼は陔餘叢考、二十二史劄記を作りて史學家となり、袁枚は詩文家となりたり。三人共に時輩に卓出せる見解ある故、經學をなさゞるなり。劄記の書を讀めば、趙翼の存亡興廢の理に明なること下手經學者の及ぶべきに非ず。史神とも云べき人なり。

といひ、なほ又漫筆三篇巻上には、趙翼の「陔餘叢考」の考證明覈なることを賛美して、「坐右必貯」とすべき「一部の好書」なりといひ、大に清儒に敬服する者なるが、その名著と稱せらるゝ「九經談」の如き、其要點は清朝諸儒の説を取る所多く、當時唐本の舶來少からずとはいへ、最新の良著に接する機會と便宜を有せざるもの多き時に在りて、錦城幸に尋常人より早く之を見て、假りて以て自己の説の如くしたるが如き狀ありといひて不可ないやうである。譬へば現今西洋語學の才ある者、或は歐米大家の新説をかり、自ら號して創見とし、以て世人に誇るものなきにもあらざるの類に似たりともいふことが出來よう。實に錦城の學は、清の顧炎武の「日知錄」、朱彜尊の「經義考」、毛奇齡の「西河合集」、趙翼の「二十二史劄記」及び「甌北全集」等清儒名著の説に據る所頗る多きものである。

錦城の斯の如き態度につきては、古人も既に之を非難し、或は冷笑痛罵を加ふるものさへあつた。「妙々奇談」といふ俗書ながらも、文政年代の奇警なる一書（下巻）第六回、現心地獄相の章に、錦城の學風を評論し、且つ一幅の挿畫を載せ、「經義考」「日知録」「亭林全集」「甌北全集」「廿二史剳記」「丹鉛總録」（明、楊慎撰）等の諸名著をいれたる本箱の上に、錦城らしきものがうち跨りて、偏足を投げ出し、右の手を額の上にかざして、世上の有様を望見せるが如き様子を掲げたのは、即ち錦城の清儒依頼の風を穿ちしものである。又同書は錦城の學風を露骨に説明していふ、

踏破梯子（ふみはしご）は皆古人也。日本、仁齋、徂徠、太宰、南郭。唐山には、漢後の諸人、近く清人には、顧炎武、毛奇齡、閻若璩、朱彝尊等也、先生、右の人々の發明せしことを、踏臺にし、自らこの樓上に登り給ふ。云々。（第七回、蛆蠅作奇詩の章）

と。我邦經學を以て自ら尊大にするもの、前には太宰春臺あり、後には大田錦城あり。然れども、斯の如く冷評痛罵されては、錦城も顏色なかるべしである。

錦城毎喜罵二先儒一。不レ似二君子之口語一。今亦爲三吾兒所二罵詈一。所謂出二于爾一還二于爾一者歟。

とは、「恕軒漫筆」に信夫恕軒が錦城を痛罵したる一節の欄外に記したる小山春山の評語である。評し得て妙なりといふべきである。

然りといへども、錦城は「寛政中より卓爾として經義のみを以て世に鳴ること四十年、堅確として敢てこれに抗する者なき、實に近世に稀なる所なり。」と稱せられ、（續諸家人物志卷上）又文政七年頃刊の「諼草小言」には、

大田錦城考證の學、其精細なるを感ずべし。

といはれ、尚又清の光緒癸未（光緒九年即ち明治十六年）清の楊守敬の先哲叢談續編序には、

三百年來、（中略）其學術亦凡三變、其始林道春振二洛閩之緒一、其繼物茂卿拾二王李之唾一、其後大田元貞狩谷望之循二漢唐之規一。

といはれ、和漢の人に稱せらるゝを見れば、兎に角非凡の儒者たりしことは爭はれない。兎角の批評を免れざるは、蓋し上記藤田一正の錦城先生大田才佐墓表の中に、「名之所レ在、謗亦隨焉。」といふが如き類と看てもよからう。

錦城の學風は、儒者以外の方面にも傳はり、寛政文化時代の醫官法眼多紀柳沜（名は元胤）は、少にして學を錦城に受け、つひに清の朱彝尊の「經義考」に倣うて「醫書考」八十卷を著はした。これ實に柳沜の父、桂山も鵬齋等と同じく井上金峩に學びて、考證に長ぜし家學を傳へたるにも因ることならんも、柳沜に及ぼしたる錦城學風の感化影響も、亦與りて力ありし者であらう。（事實文編第三所載松崎慊堂の醫官法眼柳沜多紀君墓碣銘、並に龜田鵬齋の拄

山多紀先生墓碑銘等參照）

次に上記清の楊守敬の序にも稱せられたる狩谷望之（棭齋と號す）の學界に出でたるは、錦城より後るゝこと約十年である。其清朝名儒風の考證學に忠實なりしことは、錦城に似て、其研究の眞實熱心なる態度は之に優つてゐる。因りて人或は棭齋を以て考證家の祖となすものがある。例へば、喜多村香城の如し。香城は江戸幕府時代の末に名高き栗本鋤雲の兄である。香城の「五月雨草紙」にいふ、

文化年中、狩谷棭齋、松崎慊堂といふ學者出でゝ始めて清朝考證の學を唱へ、元明人の無根空茫の學を一變したり。

と。棭齋と慊堂とを以て、考證學の始唱者となすは、やゝ當らずといへども、熱心なる清朝風の考證學者たりしことは、何人も異論なき所である。棭齋と親善なりし同志の學者松崎慊堂の棭齋狩谷先生墓碣銘并序の中に、

翁少時志㆓於律令學㆒、謂不㆑涉㆓唐代諸籍㆒、不㆑能㆑窮㆓其根據㆒、乃採㆓六典唐律太平御覽等諸書㆒、精㆓研之㆒、遂上溯㆓漢代㆒、又進而修㆓六經㆒、恍然有㆑所㆓發明㆒、其終身崇㆓奉漢學㆒、蓋基㆓於茲㆒、（中略）偉哉狩氏竟何人、力能堪扶大雅輪、（中略）儒林嘗厭㆑鑿㆓空論㆒、實事求是歩㆓棘榛㆒、銅器金石貯㆓漢

秦㆒、足㆘資㆓經史㆒匡㆗量權㆖。（下略）

といひ、又朝川善庵が棭齋と併稱せられたる北靜廬の梅園日記序を作り、其中に棭齋を稱して、

其學專奉㆓漢唐注疏㆒、不㆑屑㆓宋明理氣㆒、性最嗜㆑古、古刻本、古寫本、古器古物、乃至㆓碑版法書之類㆒、可㆑備㆓採錄㆒者、與㆘夫珍書異典、金匱之秘、名山之藏、博物君子未㆑經㆑見者㆖、廣搜而多聚㆑之、精擇而詳言㆑之、其攷尺度、注和名鈔、考證精覈、發明極多。

といふが如き、共に棭齋の考證學風特に清朝名儒の如き學風を說きて要を得たるものである。特に彼は清朝に於ける說文學の發達に感じて、「轉注考」を著はし、彼國の書籍校勘學の進步に促されては、經籍訪古志著述の端緒を開き、清儒考證の精密なるを學びては、「本朝度量權衡考」「日本靈異記考證」「扶桑略記校譌」などの考證校勘的著書あり。共に清朝學風の長所をあらはしたる良著である。棭齋は又清儒と同じく漢代の學を重んじ、兩漢の事物を好み、漢鏡、漢錢、王莽の威斗、中平の雙魚洗、三耳壺を珍藏し、因りて六漢老人と號し、或人が是れ五漢なり、他の一漢は何れにあるやと問ひしに、棭齋は笑ひていふ、

身嗜㆓漢學㆒、乃亦非㆓漢時物㆒哉。（松崎慊堂撰棭齋狩谷先生墓碣銘幷序）

と。以て益〻棭齋の學風を窺ひ知ることが出來る。又彼が其室に署して、「實事求是書屋」といひ、

又淺草北清島町天龍寺境內にありしといふ墓石に「常關院實事求是居士」と刻せりといふも、其學風の清朝の儒者に似たりしことを示すものである。尙また棭齋の創めたる說文學の講筵が現代に至るまで連綿繼續したるも、其流風遺澤とも稱すべきである。

更に又棭齋學風の現代に近き最近世にまで波及せし一例を擧ぐれば、重野成齋先生の成齋文二集所載の櫬齋別集序に、左記の如く記されてゐる。

本邦攷據之學、寬政已降寖盛、而以㆓棭齋狩谷氏㆒爲㆓稱首㆒、木村君櫬齋（正辭）受㆓之岡本況齋翁㆒。況齋翁受㆓之棭齋氏㆒、資承既正、闡發益密。

尙棭齋を主として見たる學友學統等の事はまた後に記する。

次に松崎慊堂も亦棭齋と同時代の考證學者にして、海野豫（石窗と號す、掛川の人）の「掛川故教授慊堂松崎先生墓表」によれば、

敦攷漢學、（中略）訓詁鑽究、則原㆓諸說文㆒、參㆓諸漢注唐疏㆒、餘力以逮㆓三史文選㆒。

といふが如き學風にして、又鹽谷青山先生の慊堂遺文序によれば、

及㆓先生出㆒、訓詁據㆓漢唐㆒、義理原㆓宋明㆒、參以㆓六書小學㆒、兼綜該覽、實事求是、傳㆑信闕㆑疑、要歸㆓於大中至正㆒。

と。其學風淸朝の學者に類似すといふべきである。而して慊堂と棭齋との關係につきは、左記の文要領を得て簡明なるものである。

松崎慊堂行述　　鹽谷世弘

（上略）前後交遊甚廣、其最親善且久者、朝紳則冠山源公、市井則市野俊卿、狩谷棭齋、而至ニ於講學一、自言得ニ之棭齋一爲レ多。

次に此中にいふ所の市野俊卿も亦棭齋と親善にして、其學風に推服したるものなることなどは、上記の慊堂撰の棭齋狩谷先生墓碣銘幷序の文中、及び同じく慊堂撰の迷庵市野先生墓碣銘の文によりて之を知ることが出來、迷庵は全く棭齋の說によりて從來の宋學より漢學に轉從したるものである。

棭齋と慊堂とにつぎて、淸儒風の考證學的研究を好みたる儒者には、猪飼敬所、朝川善庵、東條一堂がある。此三儒は考證學流行の文化文政時代の儒林の殿をなし、且つ之に續く所の天保以後の第四期に於ける考證學風の先輩となりしものである。

次に棭齋と慊堂とに關する「五月雨草紙」の記事は、既に其一部を抄錄引用したるが、前文につゞけて

夫より醫家にも、多紀茝庭、小島學古等出で、醫家攷古の學を創めたり。

といへるは、前記大田錦城の學風が多紀柳沜に傳はりし事と併せて、儒醫兩界に於ける考證攷古學風の關係を徵する資料となすことが出來る。

專門家儒者以外の方面に傳はりたる考證學風の他の一例として擧ぐべきは、文政時代の屋代弘賢の事である。弘賢は文政七年と八年の春の初に、考證的小研究を版刻し、知人に配布し、好評を博した。七年のは、伏羲氏帝吳金に關し、乾隆の西淸古鑑、淸の朱楓の古金待問錄等を參考して、之を考證したるもの、八年のは、封牛に關し、淸の嘉慶六年上木の影宋鈔繪圖爾雅を參考して、之を考證したものである。其事の大要は、松浦靜山公の「甲子夜話」（卷四十七と卷六十）に記された。而して同書の記事によれば、其頃は「好事家春初には何か一事の考證を版刻して、人に施す」の風ありしといふ。世態の上にあらはれたる考證學流行の一證となすに足りる。

又弘賢は能書事蹟（東都森尹祥先生校、越後穗積保輯、寫本）に跋文を作り、其中にいふ、

淸王鳴盛古經解鉤沈序曰、學若貴二乎有一レ本、而功莫レ大二乎存古一、又曰、俗學之病、在于無レ本而不一レ好レ古、余亦嘗歎今世若レ是矣、至レ讀二此序一、宿志暗合、感慨無レ極焉、云々。

と。以て弘賢が王鳴盛等の淸朝名儒の言に推服せし事の一例證となすべく、從つて又淸朝學風の專儒以外にも傳播せしことの一例とすることが出來る。尙ほ國學者方面に及ぼしたる近世支那の考證學風

の事につきては、又別に之を概說しよう。

なほ又文政七年の序ある大田錦城の「梧窓漫筆拾遺」の中にいふ、

近世清人考證の學、此方へうつりて、凡百の學者、考證をよろこぶ。義理の精妙も、考證の功にて判然明白なることもありて、學問は考證を要することなり。されども今は考證の學、北野屋鞠塢、山東京傳に下り及べり。

と。以て清人考證學の傳來、功要及び諸方面に於ける影響流行を徵すべきものである。佐原氏（北野屋）鞠塢には、「萬葉集草木考」「春秋七草考」「都鳥考」等あり。山東京傳には「浮世繪原始考」「近世奇跡考」「雜劇考」等何々考と名づくる著述數種あり。錦城は是によりて右の如く言つたのである。

次に又一言すべきは、文化年中式亭三馬が大阪の書肆藤屋定七の爲に作りたる書林開店披露文に、近世文運の發達を敍し、當時の學風及び出版界等の狀況を記したる中に「ヲヤ〳〵どうせう考證精密」などといへるは、明に當時の考證學風の流行をさしたるもので、一種の戲文ながらも、其着眼誤らざりしものである。（博文館發行東洋文藝全書第十二編岸上操編古今名家戲文集一五二ページ以下參照）

賴山陽は、尊皇忠君の大精神を懷抱し、日本的純儒として、別に一大本領を有し、所謂考證學者にはあらざれども、清儒諸儒の考證的著述に對する注意も決して淺からず、顧炎武の「日知錄」及び趙

翼の「二十二史剳記」等を稱贊せることとは、「山陽先生書後」上巻によつて知ることを得、從つて山陽も亦考證學の長所は之を認識するに吝ならざりし者である。

尙又宇野明霞、猪飼敬所、岡田南涯等が古註學派に屬し、而かも考證學者の態度を備へ、敬所の特に博洽を以て稱せられしが如き、細井平洲も大體同學派に屬し、而かも又「詩經毛鄭異同考」を著はして、考證學者の一面を有せしが如き、江戸時代諸儒の考證學風的論著を列擧すれば、其數決して少しとしない。

此外其頃の考證學風、または淸儒風著述に關する二三の事を附言せんか。享和の初め、尾崎雅嘉が淸の四庫提要に倣ひて、古今著述の書目を編輯し、その大旨を記載して、「群書一覽」六卷を著はし、遺漏はあれども、我國著書を略知するに便ならしめたるが如き、又享和のはじめ、江戸の筆匠善藏なるもの、六書の學に渉り、說文學を研究し、疑ふ所あれば、「說文繫傳」「同長箋」「六書故」等の諸書につきて研究折衷し、又その旁ら金石韻府、鐘鼎款識等の諸書に就きて、古文奇字などをも正し、その學問大に進みしといふが如き、(近世名家書畫談一ノ下筆匠篆癖軼事)また細合斗南(享和三年歿)が「初ハ物氏ノ學ヲ奉ゼシガ、後ニ一家ノ言ヲナシ、專ラ淸人ノ考證ノ說ヲ唱フ」(續諸家人物志卷上)るに至りしが如き、文政六年歿の太田南畝に、「流鏑馬類考」「浮世畫類考」等の著述あり、又文化の初に歿したる水谷雄琴に、

「周易正字考」「歷代占例考」「中華龜卜考」「日本龜卜考」等の考證ありしが如き、更に又出版界の一事を加ふれば、「欽定四庫全書簡明目錄」が、鷹見爽鳩閱、佐藤一齋序を以て、享和二年に、經部六冊刊行せられたりしが如き、いづれも皆享和、文化、文政時代の考證學の流行と清儒風研究及び著述編輯の流行せしことを語るものとして、茲に附言すべきことである。

之を要するに、寶暦、明和より、安永、天明を經て、寛政、享和、文化、文政時代に至るまでの約八十年間は、考證學、または清儒的學風の行はれたりし時代にして、斯の如き學風は、主として吉田篁墩之を唱道し、大田錦城、狩谷棭齋等之を傳播擴充したるものである。

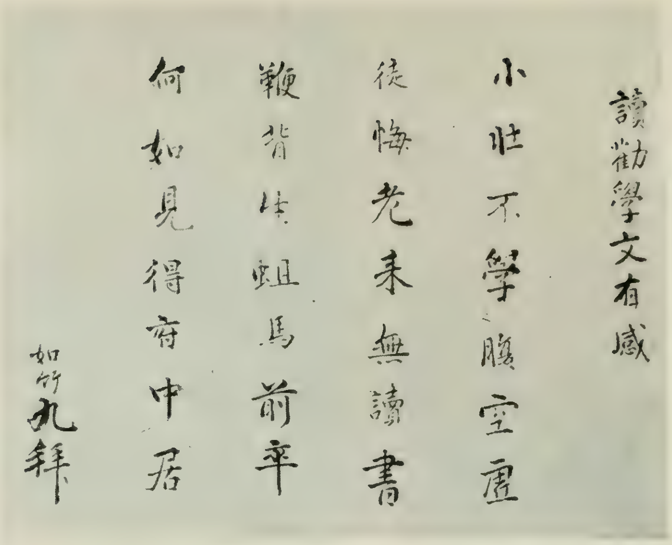
然り而して茲に注意すべきは、我國と支那との同一學風流行年代の相異である。概して支那に於て流行せる學術文章の風は、一百年或は百數十年、乃至は二百年を過ぎて、本邦に行はるゝを常としたやうである。恰も交通往來の便利なる現代に於ても、西洋に於ける新說が我國に傳播するには、相應の年月を要し、又內地に於ても、首府東京の流行が地方に達するまでには、若干の年月を要するが如き狀である。

さきに物徂徠が其學術の一基礎とせる古文辭の學なるものも、其學の首唱者たる明の李于鱗、王元美より約一百五十年を經て、本邦に傳はり、徂徠等によりて唱道せられたるものである。

或問二伊藤東涯一曰、物徂徠學風何如、東涯曰、蓋明末也。（近世叢語卷五）

考證學も亦略〻斯の如し。清初、顧炎武、毛奇齡の徒、考據證明、實事求是の學を力めたるより、百餘年を經て、我邦の儒者に注意唱道せられ、一百數十年を經て、頗る廣く本邦の學界に傳播し流行したる狀がある。現今交通の便大に開け、西洋諸外國語に通ずるもの甚だ多き時代に於ても、西洋の新說又は新思想の本邦に流行するまでには、若干の年數を要することを考ふれば、德川氏時代に斯の如き年代の相異あるは、決して怪しむに足りないと思ふ。

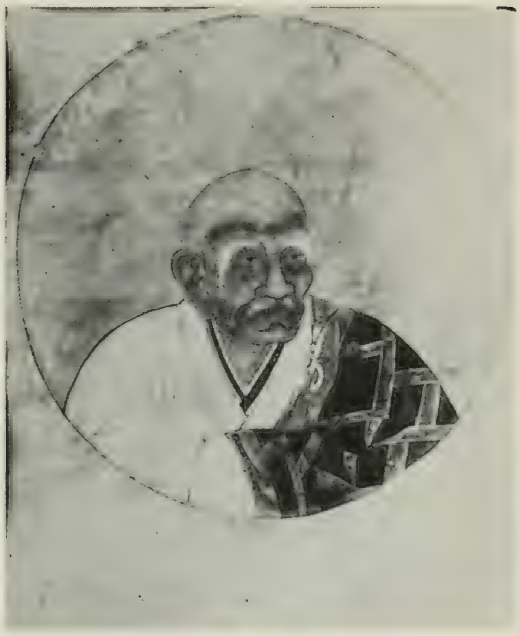
更に一言すべきことがある。考證學風は、上記の如く頗る盛に行はれたるも、清朝諸儒の如く紛冗煩瑣、支離繁雜の弊に陷らずして、常に道義を尊び敎化を重んずる日本儒道の精神を保持しつゝ考證學風の美點のみを利用せしことである。卽ち長所は之を採りて、短所は取らず、飽くまで日本儒道の本領を存續せしことである。



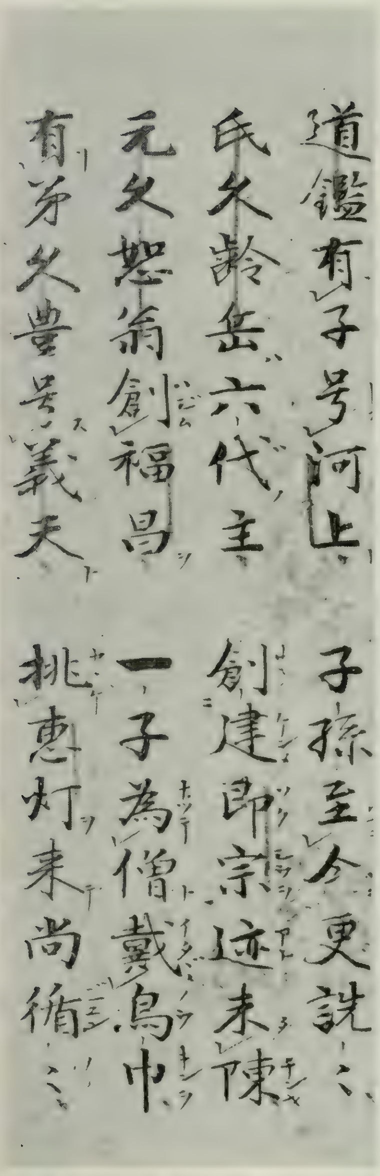

如竹筆蹟（高野辰之氏藏）



島津齊彬贊（高野辰之氏藏）



桂庵肖像




文之筆蹟（高野辰之氏藏）

# 薩摩の儒學

山田　琢

## 一　序言

薩摩は西陲僻遠の地であり、上古以來其の學術文化に見る可きもののなかつたのは已むを得ないが、幸にも海路の便に惠まれ、伊勢の阿濃津・筑前の博多と共に薩摩の坊の津は文明輸入の要津であり、海外交通の便は近世を通じて薩摩に多大の恩澤を與へた。文治二年藩祖忠久が源頼朝の庶長子を以て日向島津莊の地頭となり、ついで薩摩大隅日向三州の守護職に補せられてからは、二十九代七百餘年の間島津氏は一度も封を移されなかつた。（本論は題して薩摩の儒學と曰ふも、其の範圍は當然薩隅日三州に及ぶ。）受封以後二三百年は草創の時期ではあるが、文物既に開けて見る可きものがあり、禪宗の盛行によつて儒學も隨つて傳へられたらしく、桂菴が聘せられて入薩するに當つて之と能く相唱和する者も尠くなかつた。然し薩摩に於ける儒

學勃興の黎明は、桂菴の入薩を以て始まると謂はねばならない。

## 二　桂菴の入薩

桂菴は字を玄樹と云ひ、島陰又は海東野釋と號した。室町時代の中葉應永三十四年を以て周防山口に生れ、永享七年九歳にして京都南禪寺の惟肖に學び、年十六剃髮して僧となつた。（文之の與恭畏闍梨書によれば、此の頃建仁寺に惟正、東福寺に景召といふ僧があり、並に岐陽の門人で四書を講じ、桂菴は又此の二老に從つて學んだとあるが、二老の事蹟は詳かでない。）惟肖に師事する傍ら景徐・桂悟・蘭坡等と切磋し、業成つて歸り、長州赤馬關の永福寺を領した。宋學を崇信し、倪士毅の四書輯釋及び四書大全等を讀んでゐたと云ふ。此の時後土御門天皇には、使を明國に遣はさんとして正使天與清啓の副使を五山僧中より選ばるゝに際して、惟肖が其の選拔の任に當つたが、桂菴が選に中り、かくて應仁元年渡明し、憲宗に北京に謁見し、聘禮終つて杭蘇の間に遊び、諸儒に交つて程朱の學を受け、曹端の四書詳說を始め、註釋類を涉獵すること七年、尤も書經に通じ、又詩賦に長じ、明人往々其の詩を競ひ傳へて唐人の風ありと評したと云ふことである。文明五年歸朝した頃は、京都は南禪寺等悉く應仁の亂により灰燼に歸し、講學の遑もない狀態であつたので一時石州に寓した。文明八年には豐筑肥の諸州を游歷し、菊池氏が學術を崇び、重朝は孔子堂を建てて講學の盛なることを聞いては菊池氏に客となり、釋奠に際

して詩を賦せし事などもあり、次いで薩摩の聘に應じて文明十年市來に來つて龍雲寺に寓した。十一代大守忠昌は桂菴の爲に桂樹院（鹿兒島海濱一名島陰寺）を創めて之に居らしめた。桂菴は其の厚遇に感じて復移錫の意なく、忠昌の爲に書經蔡傳を講じ、公族重臣以下緇流靡然として其の門に聚つた。かくて大いに宋儒新註の學を弘め、十三年には國老伊地知左衞門尉重貞と謀つて大學章句を梓行した。是が伊地知本大學又は文明版大學と稱するもので、本邦に於ける朱子新註版行の嚆矢と謂はれてゐる。此の歲日向の飫肥に至り安國寺を董した。當時忠昌の族人島津忠廉は飫肥城に移封せられてゐたが、此の地は福島港を控へて渡明往來の船が多く來泊したので、桂菴は其の文書をも掌つた。爾後日薩の間を往來して弟子益々多く、曩に刊行した大學は盛に三州に行はれ、十餘年の後には版木は磨滅して用をなさなくなつたので、延德四年（此の歲明應と改元す）改版再行した。これを延德版大學といふ。文明版大學は天保年間伊地知季安が探索したが得られず、纔に延德版大學一本を得たが、季安は桂菴の功績を顯彰せんと欲し、其の著漢學紀源と共に時の昌平黌儒官佐藤一齋に示した處、一齋は始めて古人に此の盛舉のあつたことを知り、本邦刻二新註一之嚆矢也といひ、之を林大學頭述齋に示すと、述齋も亦之を奇とし、一本を影寫して學館に收めたといふ。（其の原本は又佚し、舊藏の別本は轉じて西村碩園の手に入り、其の歿後は懷德堂に藏せられてゐる。大正十三年に碩園は一百部を影印して頒つたので、其の面目は之に據つて見ることが出來る。）さて桂菴は明應七年幕命により遙かに建仁寺の席を董し、文龜二年には新たに方丈を伊敷村（鹿兒島西方一里許）に營み、

東歸菴と稱してこゝに退隱した。永正五年二月、知遇を受けた忠昌歿し、越えて六月桂菴も亦病み、東歸菴に寂した。年八十二、薩に在ること實に三十年に及び、足一たびも封境の外に出でなかつた。かくて薩摩文教の基を定め統を開いた功績は永く滅す可からざるものである。遺著に島陰漁唱三卷、島陰雜著一卷、家法倭點一卷あり、外に默雲天隱叟の跋のあるといふ島陰文集、渡明の際の詩を集めた南游集があるといふが傳はらない。天保中伊地知季安が佐藤一齋に囑して墓側に立てた碑銘には、吾道一貫、無レ隱二乎爾一、身披二禪衣一、心服二闕里一、洛派東漸、寔自レ師始、心月千古、桂影遠被、とある。

　及門の弟子は入薩後の主なるものを擧ぐれば、忠昌を始めとして島津國久、同忠廉、その子忠朝、新納忠親、重臣に伊地知重貞、鳥取政秀、野邊克盛等あり、他國から來游した者には佐々木永春（近江）、長尾某（越後）、僧侶にては三州の禪徒は概ねその門に就いたのであらうが、其の主なるものを擧ぐれば、龍源寺鄂渚（玄棣）、桂樹院（玄章）、日州安國寺月渚（永乘）、隅州安國寺雲夢（集澤）、谷山皇德寺舜田（耕翁）、又上野の人釣雪があり、京都の巢松以安、肥後の雪溪、肥前の自擇、筑前の大年、美濃の玄勤等がある。以上の中薩摩儒學の系統上から見ると、儒學を島津日新齋忠良に傳へて政教を振つた舜田と、新註の學を一翁に傳へ文之・如竹に及ぼした月渚との二人に注目す可きであらう。

## 三　島津日新齋と舜田

島津貴久（第十五代）の父日新齋は、名を忠良といひ、剃髮して大學湯之盤銘に詞を取り日新齋と號した。母は新納氏、儒學に志ざして常に論語を愛讀してゐたといふ。忠良は七歳にして僧賴増（伊作の海藏寺）に從つて儒佛の書を受け、當時兵戰の中に在つて研修の志衰へず、僧俊安（田布施の常珠寺）に從つて參禪し、又桂菴の弟子舜田及び其の弟子舜有に就いて學び、邸中に看經所を設けて朝夕の勤行は僧侶に讓らなかつた。而して座右には常に孔子聖蹟圖を揭げ、大學を愛誦し、其の表紙は三度毀損し、革を以て之に代へたといふ。嘗て曰く、大學は聖學の大經、六韜は兵家の要書、熟讀せざる可からずと。傍ら和歌をも嗜み、訓誡を諷誦の中に寓し、實に文武兼備の名主であつた。孫義久に授けた訓誡に、「過を改め、怒を忍び、聖人の言を恐れ、理法に心底を任せられ候はば、天道も神慮も佛法も、他所不レ可レ有事。」と言つてゐる。其の神儒佛三教を融化して踐履躬行の薩藩士風を振起した功績は沒することは出來ない。また「いろは歌」四十七首を作つて子弟を訓飭したが、歌意は平正にて俚耳に入り易く、上下以て經典となし、長く士風教化の標的となつた。後世德田邕興（合傳流の兵法を唱へた人）が、「日新主より家久主に及ぶまでは、學問と云はば日新主伊呂波御詠歌『我行にせすは甲斐なし』との實行を勵むことにて、四書の中

をも委しくは字義に通ぜざるなり、甚粗略なることにて、今時の樣に詩文華語の譯釋までも博識なることもあらざれども、君長臣士の人物節操實に叶ひたること多し。」（孫子事活鈔）と言つてゐるが、「古の道を聞てもとなへても、我おこなひにせすは甲斐なし」の歌に始まる「いろは歌」は實に家久（第十八代）時代までのみならず、藩制時代を通じて士道涵養の金科玉條となつたことは掩ふ可からざることである。（後年齊彬の學令十條の中にも、假令數萬卷を記誦し、詩文章達者に候とも、實行なくては其詮も無之、日新公いろは御詠歌の意味にも相違云々とある。）永祿十一年に齡七十七を以て歿したが、大學と兵書を好んだ日新齋の學風は薩摩學の一斷面を物語るものである。

## 四　桂菴の紹述者、文之和尚

桂菴の學問を承述し且つ又後代に寄與する所の多かつたのは文之である。文之は桂菴直傳の月渚、再傳の一翁を經て、三傳の弟子に當る。月渚は名を永乘（一名玄得）といひ、薩州牛山の人である。幼年にして僧となり、肥後の清源寺に栖碧に從ひ、僧一枝に從學し、後薩摩に歸り桂菴に從游し、桂門の巨擘と稱せられた。時に島津忠朝は日向福島に在つて支那貿易の事を掌つてゐたが、月渚をして其の文書を掌らしめ、次いで福島龍源寺に主となり、後安國寺（肥後）に轉じた。大永三年には大内義興の託を以て明に使し、事あつて急遽歸國したが、從學する者益〻多く、學を講ずるには常に師說に根據し、皆朱

詮に依つた。幕命によつて建仁寺に遙補されたが、安國寺を董すること二十年、天文十年に歿した。

一翁は又二州と號し、薩摩の犬迫の人である。永正四年卽ち桂菴の歿前一年を以て生れた。桂菴嗣法の弟子鄂渚の弟である。幼にして剃髮し、安國寺に月渚に師事し、最も宋學に精しかつた。嘗て京都の眞如寺に在り、建仁寺の席に陞つたが、後歸國して安國寺に主となり、晩年龍源寺に退き、文祿元年を以て寂した。年八十六。

當時薩摩には郭國安・錢一官・高元泰等歸化の明人多く、殊に黃友賢は福建省江夏郡の人で尤も易筮に通じてゐた。薩摩の川內に來り三州に漂泊してゐたが、一翁と知るに及んでは、一翁より少きこと三十一歲なれども意氣相投じて、經義を討論して相親しみ、遂に莫逆の交をなしたといふ。京都の易又は詩を學ぶ者は多く其の敎を受け、嘗て秀吉が擧用せんとしたが、旣に質を薩摩に委すとて遂に肯んじなかつた。薩藩にて食祿三百石、士班に列し江夏氏と稱した。其の易學は一翁を通じて其の弟子文之にも及んだものであらう。

文之は名を玄昌、字を文之といひ、南浦と號した。また雲興軒・時習齋・懶雲・狂雲等の別號がある。父は河內の人で、亂を避けて日向福島に寄寓し、里人の女を娶つて弘治元年に文之を生んだ。桂菴歿後四十七年である。六歲の時父は文之を延命寺（日向日井）の僧天澤に託したが、天澤は其の才を奇とし

て龍源寺に遣り一翁に師事せしめた。天澤は桂門雲夢に從學し、又足利學校に學び、更に越前の一栢に益を請うた人であり、歸國後は卜筮を以て業と爲したといふ。文之はかくて雲夢・天澤と月渚・一翁の兩學系より桂菴の學問にふれたわけである。一翁が文之を教ふるには章句訓詁の學を以てし、朝には大學論語の文を習ひ、暮には廣韻・玉篇の字を檢せしめた。又黄友賢は一翁と相親しく、文之は兩人の經談を傍聽するを得、或は親しく友賢の誘掖を受け、孔孟濂洛の道を以て訓導されたといふ。十五歳の時には、上洛して東福寺龍吟菴に凞春に師事した。凞春は足利學校に學び、九華に就いて古註を修めた人である。文之は凞春に從ふこと十餘年にて歸國し、一翁の薦によつて龍源寺に主となつた。時に天正九年、一翁は年七十五、文之は年二十七である。文之はかくして多數の師に就いて學んだが、尤も一翁より桂菴新註の學を受けたものであらう。自らも「予亦久隨ニ侍於一翁師一、頗解ニ其義一矣。」（與恭畏闍梨書）と言つてゐる。時に島津義久（第十六代）は文之が儒學を以て名のあるを聞き、隅州の正興寺・安國寺を董せしめ、且つ召して顧問に備へた。晩年には家久（第十八代）の創立した大龍寺の開山となつて、元和六年に齡六十六を以て示寂した。

　文之は桂菴の學を祖述し、其の和點を更に改めて門徒に授け、義久（第十六代）義弘（第十七代）兄弟（日新齋の孫）及び家久（第十八代）の三代に歴仕し、天正・文祿・慶長の戰亂の世を通じて顧問に備はり、又外交文書を掌り、

而して桂菴以後再び薩摩の文教を振起した功績は大きい。著す所に南浦文集、日州平治記、決勝記、襟帯集、聖蹟圖和鈔等がある。和點を施したものには四書集註（四書全部に及んだか否かは不明）周易傳義及び素書がある。

さて文之が四書に加點したことをめぐつて、激しい論議が惹起された。それは一は京都法輪院の僧恭畏と文之との論爭であり、二は文之歿後再傳の弟子愛甲喜春によつて惹き起された文之點對惺窩點の爭ひである。一の論爭といふのは、恭畏が渡明の志を果たさず日隅薩の間に淹留してゐた頃、正興寺に文之を訪れて其の和點を疑ひ、故習に異なるとて大いに之を誹毀したのに始まる。恭畏は固より明經家點の傳授を受けた僧である。當時は薩摩にこそ桂菴以來新註の和點が公然と行はれてゐたが、京都では明經家點が天下に許された古註點法として其の權威を主張してゐた時代であるから、薩摩の新註和點との間に論爭の起るのは當然であり、又はしなくも西陲の地薩摩に其の論爭を展開したのは興味あることである。漢學紀源によれば、慶長十四年恭畏は文之を訪ひ、自己の清家點を以て正しいとなして文之の和訓を誹毀し、十五年遂に破收義を著して和訓の字義に乖くを指摘した。文之は砭愚論を著して反駁し、又書牘を寄せて辨駁した。恭畏問答といふのが是である。其の論爭の中心は次の五點に在つた樣である。卽ち恭畏は「五十以學易」の五十を文之が終卒（をへる）と訓じ、「雖蔬食菜羹瓜祭」の瓜を必と讀み、「沽酒市脯」の沽市を何れも買と讀み、「不レ間二於其父母昆弟之言一」の間

を異と讀み、「以二其子一妻レ之」の子を女子と訓ずるのを非難したのである。兩人は互に自說を固守して下らず、文之は「嗚呼、恭畏拘二於舊聞一、一無二新得一、則何足三以爲二人師一矣。」（與恭畏闍梨書）と言ひ、更に集註和點の岐陽以來桂菴に傳はり而して今自分の身に在ることを述べて其の傳統を誇つてゐる。要するに古註と新註との間の軋轢である。尙此の事に關しては斯文（第十三篇）誌上に大江文城氏の詳しい論述がある。第二の論爭に就いては後述する。

義久・義弘・家久の時代は、島津氏が漸く一統して威勢を張つた時代であり、海外貿易も盛行し、薩摩の坊の津、山川の津、日向の福島等は、明・南蠻（阿媽港）・安南・呂宋等と交通が繁く、文之が其等の國王船主に送つた文書は南浦文集に多く見られる。先には桂菴・月渚等が島津氏の外交文書を掌つてゐたことと思ひ合はすと、此等の儒僧が重く用ひられた所以は、其の外交文書の掌理が一半の理由であつたことを知るのである。事實島津氏は海外交易により巨大の利を占めてゐたのである。交易と共に儒書の舶載も亦尠くなかつたであらうと想像され、集中には明の商船が史記評林を載せ來つたことが見える。家久の時代には琉球征伐があつて、新附庸琉球を通じて大陸文明との交涉も頻繁になつた。又文祿朝鮮の役に於て家久が持ち歸つた書籍四十八部の書目が漢學紀源に記されてゐる。經史及び性理書類を擧げると、書經十一卷、詩傳九卷、禮記淺見錄二十一卷、五禮儀八卷、左傳三十卷二十七卷、春秋五卷、春秋大

全十五卷、中庸一卷、二程全書十五卷、近思錄十四卷、朱子節要八卷七卷、性理大全二十五卷、通鑑十三卷、宋鑑三十六卷、資治通鑑綱目三十二卷等がある。此等は文之も見たことであらう。文之が周易傳義を獲て和點を施したのは、此の中には無いが同じく朝鮮から得たものである。

## 五　如竹・喜春と文之點對惺窩點の論爭

如竹は薩の屋久島の人で、父は舵工であつた。元龜元年に生れ、文之より十五年少い。少時僧となり、後上洛して本能寺に法華の教義を學んだが心に樂しまず、嘗て親族を鄉に省し、再び京に上らんとして薩の城下を過ぎ、文之が四書新註を弟子に授けてゐると聞き、大いに悅んで從學した。以上は室鳩巢（鳩巢の父は如竹と相識の間柄であつた。）の如竹翁傳に據つたのであるが、後年如竹の弟子愛甲喜春が師如竹の談話を記した「聞書」によると、京都に在つて藤原惺窩が四書新註を講じてゐるのを聞いて、此の學はもと薩摩に出でたものであると言つて歸薩して文之に學んだといふ。（此の說には後記する樣に薩摩學派の誇張がある樣に思はれる）文之に從游してからは終に儒となり、慶長中江戸に上つて仕を求め、伊勢の藤堂高虎に聘せられ、寛永七年高虎歿して歸國し、寛永九年琉球に游んだ。其の頃琉球には文之の友天叟、文之と一翁門下同學の景叔・春蕉などがあつて、桂菴の學風は既に琉球に入つてゐたが、如竹は國王に師事され世子の侍讀となり、時に琉球

に在つた明人梁澤民と屢〻經義を討論して其の尊信を得た。當時琉球に於ては經書は多く音讀して居つたのであるが、漸次文之點四書が行はれる樣になつた。在琉三年にして次いで大阪に寓して教授したことがあつたが、久しからずして歸り、寛永十七年島津光久（第十九代）に侍講となり、明暦元年に齡八十六を以て歿した。

如竹は人となり質直で文少く、詩賦を好まず、四書に精しかつた。江戸にて藤堂氏に仕へてゐた頃、寛永元年には桂菴の家法倭點を上梓し、同二年には南浦文集及び文之點の四書集註を刻し、同四年には更に文之點周易傳義を梓行した。又砭愚論・恭畏問答等に跋を作つて梓行したといふ。此の刊書の功は沒することは出來ない。門人には東郷重經・愛甲喜春・竹内助市・本田親貞等が著れてゐたが、其の學統を繼いだのは愛甲喜春であつた。

喜春は名を季足といひ、日向志布志（後に大隅國）の人である。如竹より三十五年少く、慶長十年に生れた。常徳寺の僧泰岳に就いて讀書し、又醫を津曲桃菴に學び、後寛永十七年如竹に屋久島に從游し、前後學を受くること六年、四書・小學・近思錄・古文孝經・太極圖說・韻鏡等に精通した。また江夏二閑（友賢の子）に易を學んだ。平居に醫を業とし、光久の侍讀となり、元祿十年に歿した。年九十三。受業のものには島津久茂・同久竹・久元、及び子季經、孫季堅・季寛等がある。

さて前にも述べたやうに、惺窩の新註加點を非議して桂菴に本づくものであるとの說をなして論爭を惹起したのは、實に如竹・喜春に始まる。貞享三年喜春八十二歲の時、其の師如竹の談話を記した「聞書」（日本敎育史資料所載）がそれである。時に如竹の死後三十一年、惺窩の死後六十七年に當る。其の言を略記すると、惺窩は新註の和點なきを愁へ、入明して新註の奧義を傳へんとして、房津（薩摩坊津）に下つて渡明せんとしたが、風波に妨げられて山川の津に泊し、正龍寺に寄宿したが、寺僧が論語を讀んでゐるので、取つて見ると文之の和訓であつた。惺窩は驚いて、自分の求めんとしてゐたものは此であるとて、其の書を得て京都に歸り新註を講じたといふのである。聞書以後、寶暦年間に成つた西藩野史（卷十六）（得能通昌著）、明治年間に成つた麑島外史（卷一）（伊加倉俊貞著）も、其の說を沿襲してゐる。天保中に成つた伊地知季安の漢學紀源は最も詳密を極め、惺窩の詩歌等を引用して、惺窩點が文之點を襲つたものであることを證據だてんとしてゐる。

此の惺窩の文之點剽竊說は明治以後の學界に贊否の論爭を繰り返してゐるが、聞書以下の諸說を詳密に點檢すれば、誰しも其の所說の虛構たるを疑ふであらう。殊に最近は惺窩の南航日記が發見されて、其の入薩事情も明かとなつた。要するに文之點と惺窩點とは何の關係もなく、文之點は薩摩が地理的に僻在する爲に全國に普及するに至らなかつたものであらう。

## 六　如竹門下と鳩巣門下

如竹門下には喜春の外に東郷重經・諏訪兼利・竹内助市・本田親貞等がある。重經の門人に山口治易があり、治易門下に伊集院俊矩があつた。諏訪兼利・竹内助市の兩人は綱久に仕へ、時人は綱久の明君たることを賞すると共に兩人の輔佐を賞した。山口治易は性理の說に精しく、常に朱子語類を讀み、德行を以て聞え、伊集院俊矩は繼豐（第二十二代）の時、世子宗信の傅となり、亦德行を以て聞え、常に君子は己を修め人を治むるの道を學ぶ、徒に章句訓詁を講ずるに非ずと言つてゐた。かくの如く德行を重んずる風は如竹の感化であらうと思はれ、こゝに桂菴以後文之に至る學僧の詩賦唱和の遺風は全然一變してしまつた。德田邕興が、「文之和尚の後、東郷久右衛門、山口忠五左衛門、近頃の伊集院仁左衛門に至るまで、何書にても講釋の終には、日新主の「古の道を聞ても」と云ふ御詠歌を三遍づつ唱ふ事を、貴久主の貴命にて、薩州講釋の例法なり。」（島津家舊制軍法卷鈔）と言つてゐる樣に專ら躬行を力めたものである。其の後は桂菴の學統を繼ぐ者は出でず、代つて室鳩巣一派の學が盛行した。是より先、光久の時、菊池東勻（羅山門人）・深見玄岱を聘用したことがあつたが、久しからずして去り、鳩巣門下の兒玉圖南・郡山原輿・志賀登龍等によつて其の學が傳へられ、又山田月洲・郡山蘭畹は鳩巣門

下の河口靜齋・伊東潛齋に學んだ。月洲の門下に山本秋水・赤崎海門が出た。島津重豪（第二十五代）が安永二年藩學造士館を創立するに際し、秋水は督學として學制を定め、海門は教授となり、大いに文教を興した。山本秋水は名を正誼といひ、字は子和、通稱は傳藏といつた。初め志賀登龍に學び、後月洲に師事し、又江戸にて餘熊耳（徂徠門下）に文章を學んだ。最も左氏春秋に深く、左傳傳藏の稱があつた。島津國史三十二卷は、藩主重豪の命により心血を注いで著した所である。藩學を督すること前後三十六年、文化五年に齡七十五で歿した。赤崎海門は名を楨幹といひ、字は彥禮といひ、月洲に師事し、又肥後の藪孤山に從ひ、學問大いに進み、造士館の助教から教授に昇り、藩主齊宣（第二十六代）に從つて隔年江戸に赴き、諸藩の學者と詩文の應酬をして大いに才名を馳せ、時の昌平黌儒官柴野栗山の認むる所となり、幕命を以て賴春水と共に昌平黌に經を講じた。齡六十四にて享和二年に江戸に歿した。鳩巢の學が傳はつてから、秋水・海門に至り、藩の學風は茲に再變するに至つた。卽ち如竹以後の實踐を主とする學風は廢れて、再び詩文盛行の觀を呈した。かくて鳩巢の博通不偏を旨とする學風が藩を風靡したが、造士館創立に際しては程朱學を以て藩學と定めたことは、學規第一條に、「講書は四書五經小學近思錄等を用ひ、註解は程朱の說を主とし、妄に異說を雜へ論ず可からず。」とあるのによつても明かであり、海門・秋水が藩校に教授するにも程朱學の範圍を出でなかつた。（四書と詩とは朱子を用ひ、易は程子朱子を用ひ、春秋は胡氏を用ひ、書は蔡

氏を用ひ、禮は陳氏を用ひ、又小學近思錄等を以て講習に資す。本府學宮講堂記、山本正誼）此の二人は桂菴・文之以後薩藩儒學史上に燦然たる光彩を放つ者である。

## 七　島津重豪・齊彬と文敎

程朱學以外の異學と稱す可きものには、服部南郭に從學した吉田蘭皐・市來蘭水があり、古學を傳へ、蘭水の門下に川上嘉善・高橋武衞門・愛甲新右衞門・平田藤九郎・市來四郎太等が出た。又冢田大峰に學んだ新納空翠、皆川淇園に學んだ橋口隆說・椎原國充・井上祐之がある。尚又昌平黌に學んだ向井滄浪や、學系不明の兒玉南豐・久保之昌がある。かくて薩藩の學界は異常な活氣と華かさを示して居るが、又實に當時は江戸に於ても各藩に於ても學問隆昌の時であつた。江戸に於ては詞章盛行し、蘐園學派の如きは殆ど放縱の行動を敢てして喜ぶ傾向があつたが、薩摩に於てもかゝる傾向が認められた。龜井南冥が薩に遊んだ時、「吉村臨古・黑葛原文炳相尋いで來り訪ふ。二子深く拘儒の敎に束ねらるゝを惡み、喜んで蘐老門下の風を聞く。」と言つてゐるのがそれである。一體薩摩は海外に向つては大いに門戸を解放して文化吸收に努めたのに拘はらず、國內的には鎖藩の狀態であつたが、學問思想上に於てはやはり時代の潮流の影響を敏感に受けてゐる。さて前述の如く安永二年造士館を創立するに當り、古學派の川上嘉善は敎授としての採用を自他共に期待してゐた處、兒玉祝人（圖南の子、當

（時の家老翁公の御側役）の斡旋で山本秋水が拔擢されるに及んで、古學の徒は事毎に程朱派を誹謗し、果ては時の政法まで誹議するに至つた。終に國老島津近江（久起）を始め高橋・愛甲・平田・市來の諸子は謹愼を命ぜられ、生涯職に就けなかつた。之を古註崩れといふ。重豪（第二十五代）は天資英邁、進取の氣象に富み、諸般の革新事業を行ひ、或は琉球を通じて支那大陸との活潑な交易により藩の財政を豊かにし、又澎湃たる泰西文明東漸の大勢を洞察し、長崎を通じて新文明の輸入に腐心した。自身蘭書にも通じ又唐音をも能くし、成形圖說・南山俗語考・質問本草等の著が成されるに至つたのも實に重豪の時である。而して聖堂創立は事業の大なるものであるが、重豪は文教を興して根柢から革新の實を擧げんとしたものの如く、終には言語風俗に至るまで改革を試み、總て都風に倣ひ、野を變じて都となさんとし、（賴山陽の前後見聞によつても知られる。山陽の入薩は第二十七代齊興の文政元年にかゝる。）華美を競つた結果後に財政に窮した。急激なる變革は亦其の反動を呼び起し、齊宣（第二十六代）の時の國老秩父太郎一派の再改革は、是亦急激に失した爲に重豪の怒に觸れて切腹を命ぜられた。之を秩父崩れとも近思錄崩れ（秩父一派は常に近思錄を講習してゐた。）ともいふ。（古註崩れ・近思錄崩れは純然たる學爭では なく、政爭の色彩が濃厚に加はつてゐる）やがて齊彬（第二十八代）に至つて大いに藩學の教育を興し、諸般の改新に從事すると共に文教を振ひ、幾多の人材を輩出せしめた。齊彬の興學は和漢洋に通じ、就中洋學奬勵は最も盛んであつたが、世子の時既に山崎嘉點四書・五經及び古文孝經を刻し、また襲封後は、（宋岳珂本）春秋經傳集解を刻して儒學に對する熱意を示してゐる。

かくて最も意を教學に用ひ、度々教令を出して向ふ所を示し、倫理實用に務めて文章訓詁の末に泥まず、心術を正し修己治人の器量を養ふ可きことを說いた。而して從來薩藩の子弟は他方に游學するを悅ばず、自ら鎖藩の狀態を成してゐた陋習を矯め、游學の門戶を開き、折衷學・水戶學の兼修も許したことは、薩藩學風に新時期を劃したものであつた。かくて陽明學を唱へた伊東潛龍（一齋門下の荒川秀山に交る。）の門下には西鄕隆盛・大久保利通・海江田信義等があり、西鄕・海江田は更に藤田東湖に敎を受け、又有馬新七（秩父門下の面高源之丞に學ぶ。）・平田助七郎は山崎闇齋の流を受けた若狹の山口菅山に從學する等、活潑な動きを見せた。齊彬が安政四年十月自書して藩中に頒つた學令があるが、十ヶ條數千言に及び、其の旨は正大切實で實に堂々たる大文字である。試みに數節を抄錄すると、第三條に曰く、「學問の標的は修身齊家治國平天下之道理を研究し、本末先後を識別致し、然て當時之政務奉行候ても、能其任に堪へ候樣に心得專要之事に候。」（下略）第四條に曰く、「第一、三綱五常の本領を守り、義理を明にし、名分を正し、各祖宗を敬崇ひ、生國のために道を開き候儀、天理自然の本色に候處、當時儒者と唱候中には、我皇朝をも夷狄同樣に心得違ひ、古典は勿論、律令格式は六國史以下に至り候ても不辨別の者も有之候半歟、然れば孔子の道にも不協、第一天照皇大神の御神慮も可畏儀にて、右等の處一同深く致分別、學風令振起、追々國用に相立候樣宜く工夫候儀專要に候。」と。齊彬は藩政を視ること纔に八年にして

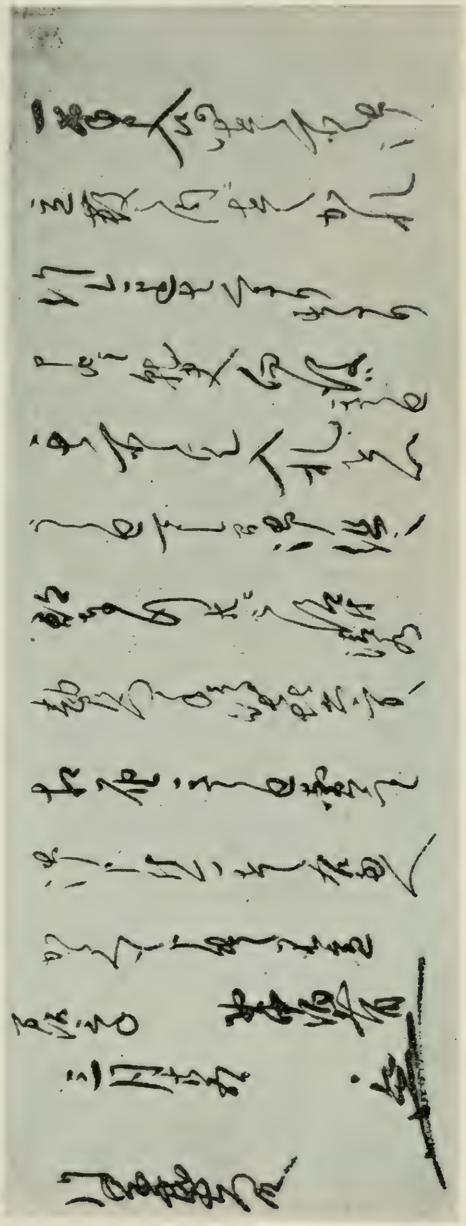
安政五年に歿したが、忠義（第二十九代）遺志を繼ぎ、竟に明治維新に及んだ。

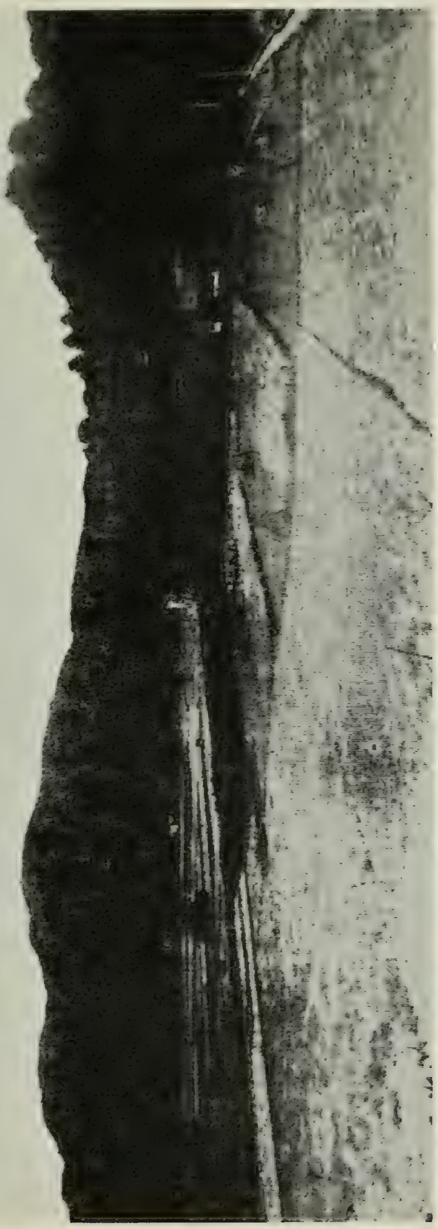
## 八 結 語

以上述べて來つた跡を顧みると、夙に宋儒新註の學を移入してから、或は實に就き或は華に走り、其の間に學派の黨爭を繰り返し、薩藩學風の變遷も亦多端であつた。然し其の根柢を流れる一貫した道は、實用の學といふ觀念であり、日新齋の所謂「我が行にせずは甲斐なし」の實踐であつた。薩藩が雄藩にも似ず鴻儒碩學に乏しかつたのも、是に起因する樣に思はれる。而して其が亦薩藩學風の特色でもあつた。

（後 記）

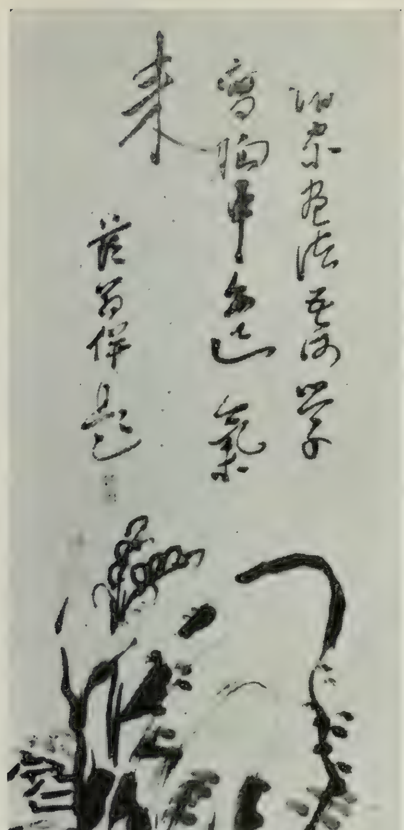
此の稿を執筆中召集令に接し、修正の遑もなく筆を絶たねばならなかつた。出稿は差し控へ度いと思つたのであるが、恩師諸友の厚意によつて拙い論を此の記念册に載するを得たことを感謝する。


野中兼山書状（本山彦一氏蔵）


弘岡城址



皆川淇園畫（高野辰之氏藏）



森田節齋自畫贊（內田周平氏藏）

# 南學の特質

小林信明

南學と言ふ語は、先哲叢談後編の記載によれば、「時中唱ニ程朱學於土州一、當時稱レ之南學一、從遊甚衆。」とあるから、天文年中、南村梅軒によつて土佐の地に傳へられた朱子學が、釋天室を經て谷時中に至る頃ほひ、一般世人から呼ばれた名稱の樣である。何が故に南學と呼ばれたかと言ふに、或は南村氏の學の謂であるとし、或は海南朱子學の略稱であるとするものもあるが、大高坂芝山の南學傳の序文には、「興國以還、有ニ三般學一、謂、京師學・關西學（備藩在ニ關西一）・海南學（土佐州在ニ海南一）者也。」とあつて京師學・關西學に並んで土佐の學問を海南學と言つてをり、又其の下文には、同一學を指して南學と呼んでゐるから、南學とは恐らく京師・關西の諸學に對する海南學の略稱で、其の實體は程朱學である。且芝山の南學傳では、純粹土佐人を內集に入れ、四方の英髦で海南の產でないものを主として外集に收めてゐるが、其の範圍は、南村梅軒から降つて小倉三省・野中兼山、並に二子の門下、及び

- 南村梅軒△
  - 吉良宣經
  - 吉良宣義
  - 釋如淵・釋忍性
    - 長曾我部元親
    - 長曾我部信親
    - 吉良親實
    - 北江山親興
  - 釋天室
    - 谷時中・小倉政平
      - 小倉三省・野中兼山
        - 谷一齋×
          - 大高坂芝山
          - 松田定則
        - 長澤灌軒×
        - 町定靜×
        - 黒岩慈庵× — 桂井素庵
        - 曾我晩亭
        - 尾崎直重
      - 山崎闇齋△
        - 淺見絅齋○
          - 三宅觀瀾○ — 中村嘉種
          - 若林强齋○
            - 西依成齋○
              - 宮地爲齋
              - 岡鳳溟
              - 富永惟安
              - 箕浦立齋（遜齋）
                - 小牧天山
                - 中山高陽
                - 戸部愿山
                - 岩井玉洲
                - 箕浦立齋
                - 山本日下
                  - 谷干城
                  - 鹿持雅澄
                  - 武市瑞山
              - 古賀精里
                - 篠崎小竹○ — 遠近鶴鳴
                - 中村西里 — 安光南里
                  - 遠近桓齋
                  - 樋口彬齋
                  - 安岡十洲
                  - 木戸鶴洲
                  - 藤本廸齋
                    - 桑原介馬
                    - 仁尾惟哉
                    - 山崎松軒
            - 小野鶴山○
              - 戸部愿山
              - 箕浦秦泉（秦川）
                - 箕浦北江
                  - 坂本龍馬
                  - 田中光顯
                - 富永安則
                - 馬詰親音
                - 野見嶺南
                - 細川頼直○
            - 山口春水○ — 山口風簷○ — 山口菅山○
              - 森正名
              - 山內豐澱
              - 竹村東野
                - 土方久元
                - 中岡愼太郎
                - 安岡正義
                - 安岡正定
                - 森新太郎
                - 宮地正寬
              - 平井正實
              - 小南良和
              - 奧宮曉峯
          - 宮田定則
          - 馬場一梯
          - 美代厚本
        - 三宅尙齋○
          - 山內豐常
          - 山內規重 — 山內豐敷
          - 宮地靜軒
      - 岡新士

二

- ○佐藤一齋
  - ○若山勿堂
    - 佐々木高行
    - 土方久元
    - 板垣退助
    - 谷干城
    - 森正名
    - 奥宮曉峰
    - 西村尙軒
  - 山内豐凞
  - 山内容堂
  - 森正名
  - 竹村東野
  - 清岡成章
  - 奥宮慥齋
  - 奥宮曉峰
  - 南部靜齋
  - 西村尙軒

- ○佐藤直方
  - 稻葉迂齋—箕浦秦泉（秦川）
  - 尾池敬績
  - 七條正明
- 谷秦山
  - 谷垣守
    - 谷眞潮
    - 谷好井—谷景井—谷干城
  - 野中婉女
  - 宮地靜軒
  - 奥宮正明
  - 入江正雄
  - 山内規重
  - 美代厚本
- 安藝恒實
- 黑岩慈庵
- 深井秋水
- ○玉木葦齋
  - 富永惟安
  - 植木悝齋
  - 戸部愿山

- ○安積艮齋
  - 竹村東野—中岡愼太郎
  - 岡本寧浦—吉村重卿
  - 間崎滄浪—北添正結
  - 清岡正道—澤村延世
  - 岩崎秋溟—島本北洲
  - 秋岡毅軒
  - 近藤昶
- ○坂井虎山
- ○江木鰐水—上村露洲—岩村通俊
  - 林有造
- ○佐藤一齋
- ○後藤松陰—酒井南嶺—小野梓
- ○岩垣月洲
- 坂本龍馬
- 石川英吉
- 高松小埜—宮川能格
- 豐永方鏡

〔注意〕

一、表中には、元來土州人でなく、且土州外に於て土佐學を繼承した人は記さない。

二、△印は、土州人ではないが、土佐の地に於て直接土佐學に關係のある人。

三、×印は、南學を受けて他國に四散した人。

四、○印は、土州以外の他國人で、土佐學の師承を示すに必要な人。

山崎闇齋までに止まり、谷秦山には至つてゐない。梅軒に始まる海南の程朱學は、兼山の歿後に四散

してゐるが、つまり芝山の所謂南學は、其の四散後に新たに勃興した土佐學には想到してゐない樣に見える。故に、後來稀には秦山以後の土佐學をも兼ねて南學と呼ぶ人もあるが、一般には兼山直後に於ける四散以前の學を指して南學と言ふのが通例である。

扠、海南土佐の儒學には、天文年間に程朱の學を傳へた南村梅軒を始祖とする南學の系統に屬するものと、後來傳播した他の諸學派の系統に屬するものとがある。之を表によつて略示すれば、大體前頁の樣になる。此の中、一齋門下の奥宮慥齋・南部靜齋が明瞭に陸・王の學を唱へた以外は、何れも朱子學の系統に屬するものである。

海南の儒學は、南村梅軒に始まつて明治維新に至るまで凡そ三百年の間、政教一致を以てよく實績を擧げ、末は勤王の洪業に終つてゐるが、此の間に二つの大きな變遷に會つてゐる。それは三省・兼山の直後に於て南學が四散し、殆んど學術が土州本土に絶滅した際に、一旦他國に去つた山崎闇齋の學問が、闇齋並に其の直門の手を經て逆に移入され、從來の程朱學に崎門派の神道と皇國思想とを將來し、秦山以下、所謂新南學の姿に復興したことと、今一つは、天明の際の藩政改革後、藩校に史・文並に和洋の學を課し、時勢に應じた有用の材を養はうとした時、儒學に於ては大學に古本を用ひ、更に傳習錄をも加へて闇に陽明學を認める等、學問が自由討究に向つたこととである。併し乍ら、元

來闇齋は南學の出であつて、言はゞ崎門の學術は南學の一分化であり、又詳細に見て行くと、南學は朱子以來の先知後行の說をとるけれども、其の實は實踐を第一として經綸に重きを置く實學であり、殊に野中兼山は彼の熊澤蕃山と比諭せられる程で、結果に於ては可なり陽明學に近い姿を持つてゐたものなのであるから、土佐の程朱學は、決して崎門學や陽明學の影響によつて南學以來の本質を變へたと言ふ譯のものではない。むしろ却つて此等の學が、或は分化し或は結合する樣な性質が、本來の南學其のものの中にあり、土佐の學問精神は、南學の中に殆んど出來上つてゐたと言つて差支へないと考へられる。故に此處に改めて南學の特質を考察し、之によつて海南の儒學の面目を幾分でも明かにして見度いと思ふ。

海南の地はもと空海得道の靈域であり、又夢窓國師の創菴の所在でもあり、旁々久しく佛學修行の道場であつたが、戰國の末に南村梅軒が四書・孝經・七書の學を傳へて入國し、弘岡城主吉良宣經、並に其の從弟で國老の地位に在つた吉良宣義の信任を得て道義の說を明かにしてから、此處に漸く聖學興隆の機運に際會した。其の後吉良氏は長曾我部氏の亡す所となり、弘岡の文化は一時灰燼に歸したが、當時梅軒の學を傳へたものに、吸江菴（長岡郡五台山）の忍性、宗安寺（土佐郡十六村）の如淵、雪蹊寺（吾川郡長濱村）の天室があり、よく南村氏の學を後世に殘すことが出來た。卽ち元親の

土佐を平定するや、岡豊城内に講席を設け、忍性・如淵の二叟を招いて之を師とし、同門の子弟は勿論、家中の士まで其の教を受けしめ、こゝに文武並修、禮儀確立の功を致し、竟に國俗を樹立するに至つた。如淵は吉良宣義の甥で、元親の姪男吉良親實の異父兄に當り、從つて又孝經・四書を講じてよく親實の信從する所となつたが、幾くもなくして親實は元親から結黨の疑を受けて纔死し、如淵も亦之に坐して自刃したので、忍性も漸く元親に疏ぜられる樣になつた。ところが程なく豐公の四國討伐のことがあり、土佐は山内氏の所領と變つた。偶〻二叟の學友天室は、慶長・元和に亙つてよく書生を誘導し、經義を磨いて大いに儒風を振興したので、相從つて學に志すもの百餘人、經業の大意に通ずるものも亦極めて多かつたと言はれる。中にも谷時中は、天室の講席に侍して四書・詩・易・古文・唐詩の學を受け、四書を精究して程朱の訓に適從し、經綸の方を探索して南學の基礎を確立したと言はれる人で、其の學は小倉三省・野中兼山・山崎闇齋等に繼承され、南學は此の三者に俟つて十二分に其の特色を發揮したと言ふことが出來る。梅軒の學說は、秋月山人の手になる吉良物語の總評には、「一箇ノ工夫、修養ノ三事、歷世ノ二要、三十六策問ト言フコヲ以テ人ニ教タル事物語ノ元ノ本ニ載タレモ、目ノ名ノミ殘テ何事ナルコヲ知ラズ。」とあり、一々の詳細は解らないが、只其の修養の三事とは、吉良物語に、「存心・謹言・德行ノ三事ハ修爲ノ基タリ。」とあり、又南學傳に、「教ニ學

者一必以二存心・謹言・篤行一、曰、三事爲二修爲之基一。」とあるより見れば、存心・謹言・篤行を指すものと考へられる。存心・謹言・篤行の三事は何れも行爲を中心とする實踐のことであるから、之を以て見れば、梅軒の學說とする所は程朱の道を遵奉するものではあるが、恐らく性理の學說に沒頭して、原理の探求に心を費したのではなく、四書・孝經に本づいて倫理の實績を擧げようとしたものに相違ない。故に吉良物語の梅軒が宣經に對へる學の說には、記誦を務めて義理の源に昏い小人儒や、文字言句に拘はつて當世の事務を知らぬ腐儒や、頑曲偏頗の心をもつて徒に古道を稱し、今の政を非るを能とする曲儒の學を斥けて、仁義を講じて身に行ひ、綱常彝倫の大から起居飲食の小に至るまで、言行一致、一事も忽にしないのを以て眞の儒者としてゐる。卽ち梅軒に於ける學問は、性理道義の學とは言ふものの、經業を以て當世の道を開かうとする實學以外の何ものでもない。從つて又よく武經を兼學して、時に七書を講ずることもあり、到底迂遠にして事情に昏い學者先生の流ではない。但其の學の根底は、未だ禪學の心法を脫することが出來なかつた樣で、既に前述した秋月山人の總評に見える「一箇ノ工夫」なる字面を以てしても、充分佛家の臭を感ずるのであるが、更に吉良物語には、「予固陋ニシテ步ヲ眞儒ノ道ニ跂ルヿアタハズ、叨リニ自オモヘラク、五常三綱ノ道ハ眞ニ天地古今人間世界ヲ持立ベシ。諸子百家是ヲ改メ替ルヿアタハシ。但シ叨ニ此心境ヲ曉ルヿハ、禪法ニシクハナ

シ。」と記されてゐる。元來梅軒が僧俗の何れに屬するかは分明でなく、南學傳の注には、「按、非二髡レ髪者一、當レ有二俗稱一、然今不レ可レ考。」とあり、大內實錄の列傳には、有名衆及び家中覺書に見える御伽衆の梅軒を以て南學の始祖南村氏と結んでゐる等は、何れも彼を有髮の人とするものであるが、併し吉良物語では、宣經の子宣直の語に「梅軒法師」と言ひ、又「彼法師」と記されてゐて、僧體の人とするものの樣に考へられる。が其れは何れにもせよ、戰國の頃は禪學の隆盛期であるから、自然梅軒が禪の工夫に俟つ所が有つたとしても、左程怪しむには足りない。時に、彼が存心の工夫に程朱の居敬を說かず、却て禪學に流れたのを惜む向もあるが、同時に此の禪の妙諦こそ、或は彼の學問を窮理の弊に流れぬ實學たらしめるに役立つたと見る可きかも知れない。

　梅軒去つて後の如淵・忍性・天室三叟の學術は、之を知悉するに由ないが、元親の經綸から見ると、此等の人々の學が亦實學に在つたことは想像に難くない。元親が岡豐城內に黌舍を設け、月に六日、諸士を會して書を讀み武を講ぜしめたのは、禮儀を興し風俗を厚くし、仁義禮智の說を以て人士が武に偏るのを防いだのであつて、長曾我部百箇條を見ると、他の諸〻の經綸と並んで第六條に、「一、君臣僧俗、貴賤上下、仁義禮智信、聊不レ可レ猥、專可レ存之事。」とある。要するに、節義を養ひ士風を昂揚する爲の讀書講學に外ならない。又南學傳に蓮池傳をまうけ、特に吉良親實を載せたの

は、芝山が當時の學術の實學であつたことを認めたからに相違ない。只三叟は何れも一山の住持で、素より禪林に在る身であるから、聖經を講じて佛書を說かなかつたと言つても、自ら禪學の影響下に立つたことは明瞭で、南學傳に述べられた如淵の記載には、「善釋二孝經・論・孟一、以激二昂士風一、好二靜坐一爲二內省工夫一、訓二學生一曰、靜觀二本心虛明、夜氣湛淸一、而植二應事接物之柢一。」とある。斯くの如く禪學の域を脫しないので、大高坂芝山は三叟の爲の傳を別に立てることをしなかつたが、併し乍ら、其の學說の精神に於ては、「古老云、言行者立レ身之基、三思而言、九慮而行、乃欲二其忠信篤敬一矣、梅軒所レ謂脩爲之三事也。」と如淵は言つてゐて、少しも南村氏以來の學統を出ないものである。要之、南學初期の學風は、未だ禪家の心術を脫し得ない所はあつたが、其の道とする所は、倫常を辨じて義理を明かにし、迂遠を去つて時務に適應しようとするにあつて、誠に政敎一致の實學に外ならない。

天室の學を受けて南學の基礎を確立した谷時中は、もと親鸞派の僧で、瀨戸村眞常寺の住職であつた。若くして天室の講席に侍し、傾聽するところが有つたが、直に師說を信ずることが出來ず、泛く老莊百家の間に出入して己の道とする所を求めた。然るに其の結果は終に聖學に歸し、晩年は專ら四書を精硏して程朱の訓に從ひ、異端を闢いて斯道を宣揚した。時中が好學の餘り、田產を投じて書物

を求め、京師・浪華・長崎の商賈を經て奇書を儲へ、語孟集註・學庸章句・朱子文集等を讀破して佛學の人倫を廢棄することを覺り、慙愧して蓄髮還俗し、儒と醫とを以て教授したことは極めて有名な話である。先哲叢談の後編には此の間の消息を傳へて、「初年沈ニ淫老佛一、汎ニ濫衆家一、慨然切ニ於求上道、深慕ニ許魯齋・薛敬軒等爲ニ存養踐履之實行一、篤學績密、厚重拘束、一身動靜周旋、平常尤謹、故其於ニ師弟之間一也、教育頗嚴矣。」と述べてゐる。此處に於て梅軒以來の儒佛幷行の風潮は漸く一新し、禪家の心法は遂に居敬の道にと移り、純乎たる程朱の學に向つた樣である。世に時中を稱して南學の中祖とするのも、故有りと言ふべきである。彼は又佛家に長じ乍ら財利運用に一見識を有し、之を以て利用厚生の道を立てんとする所があり、後年眞常寺の前面に廣大な開拓事業を起し、潮田三百石を作つたと言はれる。此は彼の學問が單なる讀書講義の流でなかつたことを示すもので、其の手腕と識見とは、彼が程朱學に入つた動機が虚理空談を去つて人倫を作興するに在つたのと併せ考へて、まことに彼の政教一致の實學の片貌であることが解る。

時中は梅軒以來の學を傳へ、竟に異端をひらいて專ら程朱を宗とし、而も實學を以て南學の基礎を確立したのであるが、此の時中の學の精華を發揮し、顯然たる功績を後代まで殘したものは、時中門下の三傑、小倉三省・野中兼山・山崎闇齋である。此の中、三省と兼山とは、其の性格に於てこそ頗

る異なる所があるが、等しく山内家の權臣で、其の學問なり事業なりに於ては、甚だしく相似たものがある。故に先哲叢談の後編には、「學術指趣、頗相匹似。」と記され、吉良物語の總評には、「寛政・正保ノ間ニ經學國ニ行ハレテ、國ノ大老野中良繼・小倉三省、豪傑俊秀ノ質アリテ相共ニ此道ヲ任トシ、人ヲ敎ユルコ居敬窮理ヲ以テ學ニ入ノ門トシ、謹言愼獨ヲ以テ己ヲ修ルノ要トス。書ヲ讀法ハ先ツ小學ヲ講ジテ四書ヲ習ヒ、近思錄ヲ見テ後ニ五經ニ及ブ。間ニ三史綱目ヲ兼テ讀シメ、葬祭ノ事ハ全ク家禮ノ法ニ從フ。」と述べられてゐる。けれども人物の高潔な點では到底兼山は三省の比でなかつた。三省は平生實踐體察を以て性命の源を自得し、能く後進を導いて誇耀することなく、實に海南理學の巨擘と言ふ可きものがある。彼は其の溫柔寛量の人と爲りを以て仁惠を施し、先王の遺制に從つて墨・劓・剕の刑を定め、死を救ふこと幾百なるを知らずと言はれ、又一面には、父政康が水利を興し田野を拓かうとした遺志を繼いで、韮山を鑿つて水を導き、鏡野を墾して旱溢の憂を去る等、其の功績は枚擧に遑のない有樣である。が其の建功の本づく所は、生平の修學の信念から出るものであつて、學は知る可くして又行ふ可く、無用の小藝を事として大道の存することを忘れる樣では、學問を糟粕と化する恐があるとする所にある。此は芝山の南學傳に掲げられた左の一文を以てして、充分に知ることが出來る。「嘗曰、某患下所レ謂競ニ一韻之奇一、爭ニ一字之巧一、連レ篇累

レ牘、不レ出二月露之形一、積レ案盈レ箱、盡是風雲之狀上、詎容下忽二君子之大道一、勤中彫蟲之小藝上乎、伊川謂、今之治レ經者、亦衆矣、然而買レ櫝還レ珠之蔽、人々皆是、經所二以載一レ道也、誦二其言辭一、解二其訓詁一、而不レ及レ道、乃無用之糟粕耳、志レ學者、不レ可レ不レ辨二此義一也。」と。卽ち三省の道とし學とする所は、梅軒の所謂眞儒に在つて腐儒曲儒の徒にはなく、まことに經業の大道に通ずる實學であることが解る。且彼が平生の修學上最も意を用ひたのは、亦梅軒の所謂修爲で、芝山存一書中の南學遺訓に三省の言として引かれた文や、南學傳中の弟子敎戒の一事に示される所も、亦之に外ならない。曰く、「三省先生曰、學者當二以レ知レ止爲一レ要也、惟精以知レ所レ止、惟一以得レ所レ止、萬事各〻有二所レ當レ止之處一、其大者、爲二人子一止二於孝一、爲二人臣一止二於忠一之類也、其小者、手容レ恭足容レ重、亦手足當レ止之處也、若能知レ止、則不下爲二外物一所上レ移、不下爲二異端一所上レ眩、雖レ大不レ加レ焉、雖二窮居一不レ損レ焉。」と。又曰く、「敎二弟子一曰、學其可レ知也、可レ行也、涵養須レ用二主一窮理一、以二讀書一爲レ要、讀書在二平氣而商量一、莫二迂闊一、莫二奇異一、看來看去、歸二著至當之義一而已。」と。而して斯くの如き三省の學問は、其の課程としては、小學・四書・近思錄・五經・通書・三傳・三史・通鑑綱目・大學衍義・十七史等から、廣く程・朱・張・邵の書を見たと言ふのであるから、時中に定められた程朱の學は、三省に至つて全く完備することを得たと言ふことが出來る。殊に三省は、前述の吉良物語の總評にもあ

る通り、小學と近思錄とを重視し、小學を以て四書の學の基とし、近思錄を以て六經究明の本としてゐる。故に南學傳中弟子を教へる語にも、「小學・近思錄、使三四子六經之階梯一、見二得此二書一、切レ己隆レ德、鴻業之址、頗坯璞焉。」とあり、竟に永く南學の大本を定めるに至つた。後世芝山が南學傳の序に、南學の本邦學術上の功績を數へた際に、「正保之前、南學未二咸熈一、列國儒生、唯知レ讀二四書一、而不レ知下先讀二小學一立中之礎上、唯知レ有二六經一、而不レ知レ有三近思錄爲二之楷梯一、徒願二釋詁詞藻可一レ勉、而不レ覺二戒懼愼獨爲一レ要、有三師長之說二授文義一、而無三弟子之講二受是正一、今而學就二本實一、乃恐我二子之功居レ多。」と述べ、三省・兼山が朱子の小學・近思錄をとつて修學上の楷梯とした功績を稱へてゐるが、まことに其の實狀を傳へるものと言ふ可きであらう。

兼山になると、彼の學は前の諸文にも見る通り、略〻三省と近いものであるが、彼は更に購入した書物の翻刻に心を用ひ、所謂野中本を開版して斯學普及の上に非常に大きな足跡を殘してゐる。卽ち彼は年々長崎に人を遣し、新たに舶來した經史の書の日用佩服す可きものを求め、之を版にして後學を利したのであるが、中にも禮儀が敎訓正俗上に重要なことを思ひ、當時まだ上梓されてゐなかつた所の儀禮經傳通解に就いて、異本を繕寫し舛訛を校訂したのは有名な話で、其の結果、國風を一變して禮俗を後にまで存し得たと言はれてゐる。今日南學遺訓等を見ると、兼山の所說として、禮川一源

に關する性理の論等が擧つてゐるから、彼は朱子學の所論に本づいて相當性理の說を考究し、原理の探究にまで意を用ひたものと推察されるが、併し乍ら、彼も亦決して虛理空論を以て能事としたものではない。元來彼は幼にして禪學を修め、次いで父の後を受けて執政となるや、愈〻修學の必要を痛感する樣になつた。偶〻彼は中庸章句を手に入れることを得て、一度之を繙くや、急には其の義を盡すことは出來なかつたが、其の敎とする所が佛家の虛談の比でないのを知つて大いに喜び、因つて時中の門に就いて聖學を究め、程朱の學を信奉する樣になつたと言はれてゐるから、禪學を出て儒學に入つたのは、いづれ其の當世の實學なる點に歸したものに相違ない。故に彼は一度國老の位に列するや、倉廩を充たして不虞羈旅の備を立て、賦斂を薄くして民生を豐かにし、山野不毛の地を拓いて種藝の田とすること十數萬頃に及び、又水利を通じて港灣を治め、永く不滅の經綸を施き、後世土佐の熊澤蕃山と目される程のものがある。此によつて之を見れば、兼山はまことに厚生の實學の雄で、其の昔、南村氏によつて始めて土州に齎された程朱の學は、時中を俟つてよく異學を辨じ、三省・兼山の二子に於て竟に朱學としての一段の完備を得たのであつて、しかも其の間に終始一貫した爲學の精神は、まことに修己治人の實學に外ならなかつたのである。蓋し三省・兼山二子の如きは、南學の模型、海南理學の宗と言つても過言ではない。但惜むらくは、三省の寬厚にして兼山に先んじて世に卽

き、兼山の嚴毅果處、峻法無貸の治は遂に人の怨をかひ、獨り其の終りを全うすることが出來なかつたのみでなく、谷一齋・長澤潛軒・町定靜・黑岩慈庵より、果は大高坂芝山に至るまで、土州人にして二子門下正統の學者は盡く國を去り、所謂南學四散の時代を現出し、經業をして久しく本土に失墜せしめたことは、此の上もなく遺憾なことである。

土州本土に於ける南學は、事實上、野中兼山を以て中絶してゐる。が此處に特に記述しなければならぬ人がある。それは山崎闇齋である。闇齋は少時京師の間に人となり、早く僧徒となつて天台の學を修め、後轉じて禪門に入り、來つて吸江庵に居るに及んで兼山の誘導を受け、終に還俗して時中の弟子となり、儒を以て深く任ずる樣になつたのであるが、故有つて海南の地を去り、且晩年は神道を鼓吹したので、其の學は崎門派として別に一派を形成する樣になつた。併し乍ら、南學は闇齋をまつて廣く世に現はれ、且又一旦中絶した本土の南學は、闇齋又は其の門下を通して、新南學の貌に於て復興したのであるから、南學史上闇齋は重要な位地に立つものである。一體崎門の學風と言ふものは、剛毅威重にして師道甚だ嚴なりと言はれてゐるが、此は勿論闇齋自身の人柄にもよる事ながら、實は時中以來の南學の氣風で、既に時中に於て侃々剛毅、權要にも屈從しない所があり、兼山も亦容止儼然、進退規矩ありと言はれた人である。要するに南學の人士は、多く其の豪邁不羈の人となりを居敬

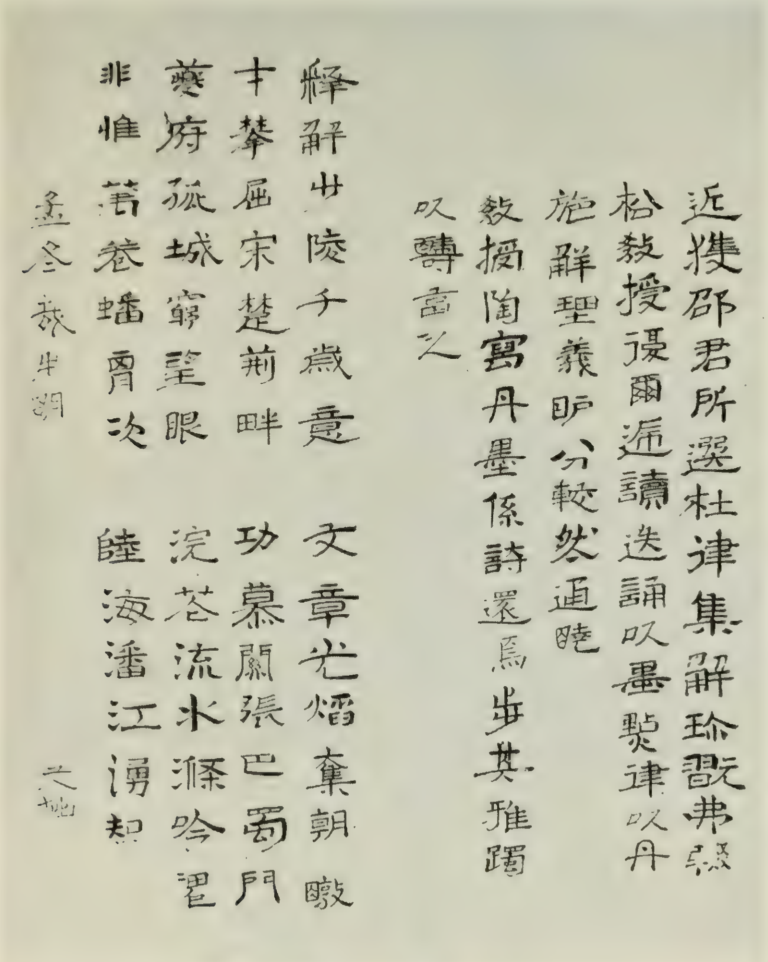
の方によつてよく制し、終に嚴厲の風を形成した人々で、闇齋の學風は其の師友に負ふ所大なるものがある。故に南學傳にも之を稱して、「蓋所〻沿、時中之遺風也。」と言つてゐる。且彼が佛門に在つた頃、彼は深夜佛典を讀み、俄にして机を打ち聲を擧げ、釋迦の虛誕を大笑したと傳へられて居り、其の平生の心境は常に實學に在つた樣で、禪門を去つて儒學に歸したのも、一に其の倫常道德の實に感じた所に在ると言はれる。從つて、闇齋は、知行並進の教を立て、知は博くす可くして雜駁なる可からず、行は篤くして知と並び、以て上達す可しと說いたが、其の所謂知なるものさへが專ら實踐に關するもので、朱子の樣に宇宙人性の根本原理を考察したのではない。其の原理に關しては、彼は之を凡て朱子の說に執り、朱學と共に殉じて悔いずとして一歩も此から出ない。勉むる所は只倫常の上に在る、誠に海南實學の風を其のまゝに傳へて强調したものと言ふ可きである。但彼は早く土佐の地を去つて隨所に道を講じたので、三省・兼山の樣に一所について厚生を謀ることはしてゐないが、彼の先哲叢談に傳へられる所の、「孔孟若し來り攻めば、吾が黨身に堅を被り手に鋭を執り、之と一戰して孔孟を擒にし、以て國恩に報ぜん。是れ卽ち孔孟の道なり。」と言つたといはれる等は、彼が時處に應じて聖教の眞髓を發揮す可きことを說いたもので、假に闇齋をして三省・兼山の位地に就かしめたならば、其の致す所も亦前二子と軌を一にしたであらう。斯くの如く考へて來ると、彼が京都か

ら江戸に下り、覇府の盛なこと到底皇居衰微の比でないのを見て漸く尊皇の道に向ひ、やがて吉川惟足に就いて吉田神道を學ぶに及んで一轉して神道の鼓吹に力めたの等は、何れも南學以來の實學的精神に發するもので、崎門の學術と言ふものは、實に南學の精神から生れたといつて差支へない。此の闇齋の學統が南學四散後の土州に入り、よく新南學を復興して維新の洪業にまで進展したことは、決して偶然のことではない。

要するに、梅軒に始まつて時中に成り、三省・兼山に備はつて闇齋に展開した南學の特質は、徒らに純理に馳せる高遠な學説を述べたものではなく、醇乎たる程朱の學によつて、よく實學を高暢した所に在る。

由來、儒教は實學である。然るに漢唐の學は一に經義訓詁の説に拘はり、程朱の學は元明の世に當つて空理頓悟の術と化してゐるのは何故か。恐らくは、儒教其のものの本性によるものではなくて、遇ふ所の勢に在ると言はねばならぬ。之を本邦儒學の上に見るに、奈良平安の昔から鎌倉末期に至るまでは、專ら漢唐の風に從ひ、徳川期に入つて漸く斯學が國民教化の上に重大な位地を持ち來つたとは言へ、時に眼を圈外に馳せ、或は文辭記誦の徒に近いものも無くはなかつた。のみならず、獨り之を朱子學の範圍に就いてのみ考へて見ても、其の樣相は一樣ではなく、或は章句の末に止まつて說く

所が鮮明を缺き、或は名分を論じて竊に異學を雜へたものもあり、純乎たる程朱の說を信奉して、よく實學の域に民生を憂へ、大いに皇風を興し得たものは、唯〻南學のみと言つても過言ではない。然らば南學は如何にして實學たり得たか。思ふに南學の精神は、既に南村梅軒の眞儒の說に成るものであるが、又一つには、其の學の後繼者が、何れも治國のことに任ずる國主大名でなければ、國老士分の列にあるもので、夫々經綸の志に厚く、偶〻僧門から出て師承を繼ぐものがあつても、それは時中の如く又闇齋の如く、皆佛家の說が聖學の倫常道德の實に在るのに如かぬのを痛感して、自ら僧籍を脫して俗に還り、專ら民生を計る可く期する有樣で、言はゞ海南に興つた程朱の學、即ち南學は、徒らに學術を以て學術とし、其の中に沒して足れりとする學者先生の手になつたものでもなく、又意氣と志力とを缺く緇流の手によつて說かれたものでも無かつたからである。世人或は時務を忘る。此の中に在つてよく儒教を本來の面目に於て把捉し、之を以て死物たらしめなかつたのは、まことに嘆ずるに餘りある所で、眞に日本儒教の面目を發揮したものと言ふ可きである。



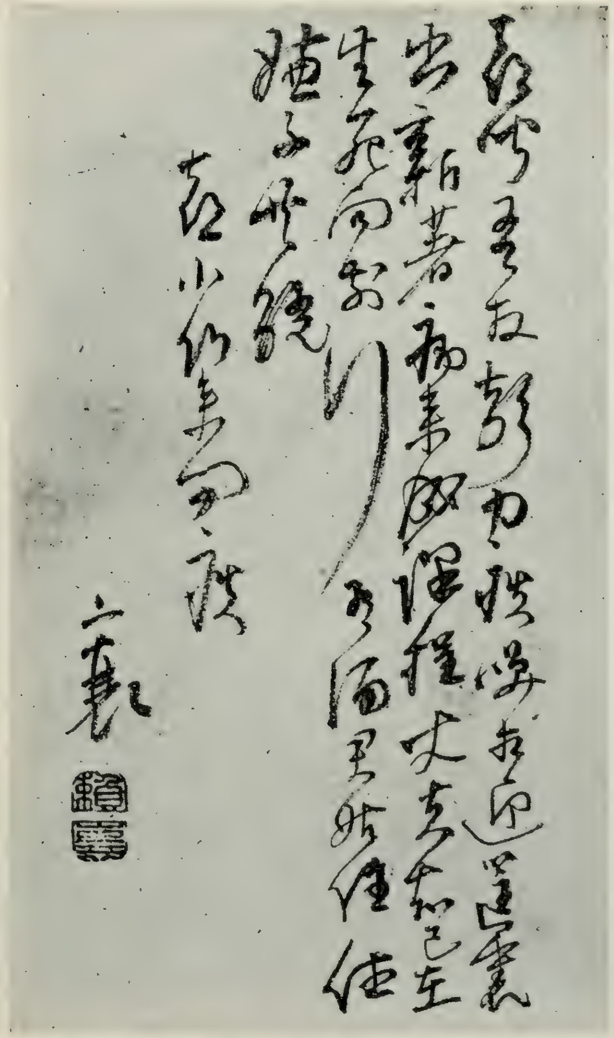
石川丈山筆蹟（高野辰之氏藏）



伊藤東涯肖像（伊藤孝彥氏藏）




若林強齋自畫贊（内田周平氏藏）



頼山陽筆蹟（東京帝國大學史料編纂所藏）

# 京儒の學

中山久四郎

## 一 緒言

伊藤東涯の「紹述先生文集」巻一の「贈鹽田子貫東遊序」の中に京都を贊美していふ、

洛陽四海之中、王氣之所鍾、有山川之明媚、有古賢之靈蹤、云々。

と。又同文集同巻の「贈村上秀才歸肥州序」にも、次の如く言つて居る、

夫洛陽天下之中、文物之會、而四方學者莫不蜂屯蠅營而至。

と。尚又同文集巻二の「送高橋生東歸序」の中にも、亦京都と江戸とを對比していふ、

求レ名者、於レ朝、求レ利者、於レ市、江戸者今之大朝市也、故干レ祿者往焉、販鬻者往焉、……京師則不然、有奇山焉、有名水焉、有仁賢之古迹焉、神廟佛宇之僻者、亦必占一丘之勝一嵒之邃、

奇卉嘉樹、以韻相尙、云々。

と。京都は實に歴史の都なり。人文の都なり。藝苑の都なり。而して古來儒者も亦多く此地に生れ、多く此地に學を講じ人に敎へ、儒者的德風、敎化及び藝術の頗る盛に行はれた處である。

## 二　「京儒」といふ稱呼

本論に入るに先だちて、「京儒」といふ稱呼について一言したい。實は編輯部長高田博士より、「京儒」の學について寄稿ありたしと懇書があり、不敏を顧みず、之に應諾した。そこで先づ「京儒」といふ稱呼の出處を確めようとして、諸書を見た處、「春水遺稿別錄師友志」の若槻幾齋の條に、

大府賜金褒異、蓋風勵京儒也。

とあり。又「猪飼敬所先生書柬集」(「日本藝林叢書」第四册之を收む)の「谷氏ニ答フ」の部に「京師諸儒」批評の一條あり、其中に、

大田錦城モ云、京儒只猪飼一人、餘ハ小兒ナリト。老拙コレヲ語ルハ、自負ニ似タレド、實ニ然リ。云々。

とある。尙又瀧澤馬琴の「著作堂雜記抄」の中にも、

○京都儒者　伊藤壽賀藏　松下監次郎

に關する一條がある。是等の用語によつて、「京儒」といふ稱呼が安心して用ひられるわけである。

## 三　京儒概說

江戶時代も、今と同じく京都と江戶と大阪が、海內の三都であつた。當時、江戶は覇政の都、大阪は商業の都であるに對して、京都は文雅の皇都であり、藝苑の京師であつた。江戶は覇政を以て聲氣甚だ盛であつたが、何といつても、武藏野に於ける新開の都會であつた。之に對して京都は古來の皇都として、久しく學問、藝術の中心であつた。宮殿、社寺の鉅麗、人物習俗の都雅、山川風氣の美秀、到底江戶も大阪も之に及ばず。眞に申すも畏こし日本第一であつた。柴野栗山の在京中、嘗て皆川淇園とともに月夜昌明門を過ぎし時、咏じた

上苑清風散二桂香一。昌明門外月如レ霜。何人今夜清涼殿。一曲霓裳勸二御觴一。

の一首は、天來の絕唱として名高いものである。而して「栗山文集」卷六の「書月下聞笛詩後」の一篇の中に、當時の「聞笛」の絕唱——淇園が之を嘆賞して「天來」と評したる絕唱——を追懷欽思して、「東都不可有此事也。」と記してある。「東都」が如何に覇政の全盛を以て雄視するも、「月下聞笛」

の如き難有い事は、有り得ない。京都の難有さは、到底江戸などの及びもつかない所であるといふ意味のやうである。江戸幕府直參の儒官柴野栗山でも、斯の如く京都の難有さを謳歌して居る。京都が學問人文の首都としての存在は、實に久しいものであつたので、江戸時代に至つても、少くとも、其初期に於ては、學者は多く京都に生れたものである。今記憶に浮ぶものを列ね記しても、江村專齋、朝山意林庵、松永尺五、人見卜幽軒、山崎闇齋、伊藤仁齋、同東涯、中村惕齋、……三輪執齋、若林强齋、宇野明霞兄弟、……皆川淇園、岩垣龍溪、同松苗、同月洲、村瀨栲亭、貫名海屋、摩島松南、池內陶所等は皆京都の人であつたのみならず、大體京都の儒者として知られて居るものであつた。林羅山、熊澤蕃山、木下順庵、雨森芳洲、三宅觀瀾、服部南郭等の諸名儒も、江戸幕府、及び其他の諸藩に仕へて、京儒として知名ではないけれども、もとは京都の人であつた。

次に他藩他國の諸名儒でも、帷を京師に下して、京儒として名高いものが少くない。淺見絅齋、賴山陽、猪飼敬所の如きは、特に傑出した他國又は他藩出身の京儒である。

賴山陽は言ふまでもなく、藝藩廣島の人である。けれども久しく京都に寓居し、その東山は山陽の熟友であり、一般に「賴子成今下帷京師」といはれ（例へば「五山堂詩話」卷八）、「猪飼敬所先生書柬集」「谷氏ニ答フ」の中にも山陽の事に言及して、「廿年餘同ク京師ニ住シ、云々。」と記してあり、所謂

京儒の一人と算へても不可なきものである。敬所の如きも、近江の人なれども、久しく京都に住し、又京儒と呼ばるゝ一人である。
(三) 山陽と敬所より早く世に出た石川丈山は三河人、三宅寄齋は和泉人であるが、二人共に京儒として名高いものである。

斯の如く、他藩他國生れの儒者でも、京儒であつたのとは異なつて、京都生れの儒者でも、所謂京儒でない場合もある。林羅山は、幕府の職官、熊澤蕃山は備前侯に、木下順庵は加賀と幕府に、雨森芳洲は對馬に、三宅觀瀾は水戸に、石川麟洲は小倉に仕へて、それ〴〵其奉職の處の儒員として名高い。共に京都の生れではあるが、京都の儒者とはよばれて居ない。

かやうにのべて來ると、京儒とは、其出生地の如何にかゝはらず、久しく京都に住し、京都を以て述作、講學の本據として居る者であるといふべきである。

京都在住といふことが、京儒に共通の點で、其學派、學風は必ずしも決して一致する者ではない。程朱學者もあれば、陽明學者もあれば、古學者もあれば、史學本領の人もあれば、詩文専門の人もあり、専門に研究するものもあれば、廣博に宣講するものもあり、其學風態度は決して一様でない。

## 四　京儒の光榮

京都の儒者として特に光榮を感ぜしめられることは、畏くも輦轂の下に教授し、道を公卿縉紳の間に唱へ、或は更に其名叡聞に達し、進講の恩命を拜し奉ることさへあることである。此光榮名譽は、京儒ならでは、之を拜し奉ることの出來ないものである。

例へば、松永昌三の尺五と號したのは、京都に於ける「講習堂」（學問講義の處）の賜地が禁省に近きに由りて、「去レ天尺五、可レ謂二榮路之階、吉祥之宅一也。」（講習堂經營始めて成りし時、石川丈山の燕賀の詩の小序の中の一節）の光榮ありしに由り、江村專齋は、鳩杖の賜を拜して、家に額して賜杖堂といひ、三宅寄齋には、

以久教授　輦轂下、唱道於縉紳之間、學博行修、領袖乎後進、聲高于一時、竟達　叡聞、後陽成上皇、後水尾天皇、皆有內旨、辟講經於便殿、屢備顧問、寵遇優渥、得以布衣、升與公卿、列于禁闈、又有器財名香之賜、人皆榮之。（先哲叢談後編卷一）

の光榮あり。伊藤仁齋は、近衞、九條、西園寺、伏原、華山院、徳大寺、富小路、柳原、醍醐、其他の諸公卿に講經し、同東涯につきては、

東涯墓碣銘、內大臣藤原常雅撰、權中納言藤原俊將篆額、右中將藤原英朝書、世以榮之。（先哲叢

の榮譽あり、太宰春臺の如きは、服部南郭に書を與へ、朱舜水の遺文が門人水戸義公の名を以て編輯せられたる、東涯の文集に華山公（內大臣華山院常雅公）の序を得たる、共に一匹夫にして斯の如き尊寵を受けたのは、榮譽である。特に華山公は　皇朝の大臣なり。云々。と言つて居る。

斯の如き光榮は、京儒のすべてが拜し得らるゝものではない、京儒中特に學博く行修まれる大儒名家のみ斯の如き恩命を拜受し得る者であるが、京儒以外にあつては、原則として望み得られないものである。

高く一世に標榜し、豪放不羈を以て知られて居る賴山陽の如きも、日野大納言資愛公の眷顧には感激の念を厚くして居て、

　贈日野亞相以楪花（諸子擯斥余不容。而公眷顧不衰。故云。）

想見官梅横且斜。銀灯影裡鬪瓊葩。東風自不遺疎遠。一樹孤寒亦發花。

の咏あり、又「園栽芍藥初開、是日野亞相公所贈感而有作。」「日野相公招飲」「爲南洞相公題燕間四適圖」「八朔侍南洞相公宴」「日野亞相公辱臨、恭賦奉謝、時老母來在京寓。」（文政十二年五月八日）の咏もあり。共に京儒として、他處の儒者としては受けられない光榮に感激せるものである。特に其母梅颸夫人上京の

時に日野亞相公の來臨を辱くしたことに就いては、「恭賦奉謝」の意を深くし、老母に對する孝行の一ともしたやうである。

皆川淇園文集にも權中納言藤原資愛公と、左京大夫藤原資善公の序があり、西依成齋は二條藤公に敬奉され、共に學界の榮譽として傳へられて居る。淇園、成齋の二人、共に京儒である。

## 五　伊藤家儒業の連綿相續

濟々たる京儒の中にありても、京の堀河の伊藤仁齋、東涯の父子二世と其後裔の如きは、學風の着實、子孫の繁榮は、共に容易に他の追隨を許さざるものである。堀川の清流は、滾々として今も昔も同樣である。其西厓に、巍然たる二條離宮の、遙かに北手に當りて、堀河の東岸、電車通を隔てて、高塀越しに一土藏の見ゆる一構こそは、實に、仁齋の堀河塾の遺蹟である。而して伊藤家は今もなほ存續し、且つ榮えて居る。是も仁齋の遺德であり、又累代積善の餘慶であると思ふ。

仁齋、東涯の學行は、今更に贅言を要せざる所。仁齋は明治四十年十月二十二日、贈正四位の恩典を、東涯は大正四年十一月十日、贈從四位の光榮を拜し奉つて居る。

伊藤家の京儒として重んぜられて居たことは、東涯在世の時、享保二十一年二月十日、京都所司

代、土岐丹後守より、左の特許を得て、破格の待遇であつたことによつてもわかる。

年久敷住居仕、學問出精に付、帶刀住居、並門人帶刀請合、御免被仰付。

其後天保十三年十月十六日、仁齋の曾孫弘濟（壽賀藏）の時、伊藤氏古義堂の地子は勿論、諸賦課を免じ、且つ年々白銀十五枚を賜ひて、累代教育盡力の功勞を表彰された。當時の辭令書は次の如し。

儒者　伊藤壽賀藏

其方儀、代々浪人にて儒業相立、當時迄連綿致し候段、寄特の儀に付、向後居屋敷無役地に被成下、町並懸り物差許、年々銀拾五枚被下候間、此上共永續致し、教授可仕候。

名譽市民として特典が二度もあつたこと、流石に京儒の代表ともいふべき伊藤家の榮譽である。而して二度の中の後の方の事は前にものべた瀧澤馬琴の「著作堂雜記抄」にも、

○京都儒者　伊藤壽賀藏　松下監次郎

の事として記して、更に左記の說明を加へて居る。

伊藤氏は、仁齋此方相續、松下は見林より相續、共に百五六十年の舊家也。數世浪人にて儒業相續の事、實に世に稀成事也。此儀小津桂窓より申來る。

## 六　崎門一派の尊皇勤皇論

京儒の特色として大に敬意を表すべきことは、尊皇の說、勤王の論を唱道して、以て天下を動かしたる者の多いことである。山崎闇齋は京都に生れ、京儒として天下に著はれ、淺見絅齋は近江の人なるも、又京儒として世に知られ、若林强齋は京都の人にして且つ京儒として名高い。此等の三先生、皆身は京都に居り、而して京都に歿し、未だ嘗て幕府及び諸侯に仕へず。闇齋は再四江戸に至りしも、長く留まり居らず。絅齋、强齋の二人は未だ曾て一歩も關東の地を踏まなかつた。以て其志操氣節の存するを見るべきである。

絅齋も、亦望楠樓と號し、楠公謠曲の作を以て名高く、松本奎堂の「奎堂遺稿」卷下にも、

題淺見絅齋所作楠公謠曲刻本後

闡ㇾ幽先哲作二謠辭一。當日事情人始知。手捧二行宮曾賜詔一。併二將熱血一付二幼兒一。

と咏ぜられてゐる程であるとともに、强齋の京都に起した望楠軒は特に世に著はれ、楠公忠義の大節を仰望する念極めて深く且つ厚きことは、左記によつて之を知ることが出來る。

○先生堺町ノ書齋ヲ望楠ト名附ケシ事ノオコリ、或時參上、御物語申上ケル節、楠木正成ノ言ニ

「假リニモ君ヲ望ミ奉ルノ心發ラバ、天照大神ノ御名ヲ唱フベシ」ト申サレタル由、賀茂ノ藏書、楠氏ノ書ニ有之旨……其後先生御物語ニ、書齋ヲ望楠ト號シタリ。我カ國士民ノ目當ハ、彼ノ楠氏ノ一語ノ外是ナキ事也。平生拙者身ノ守リニモト思フニツキ、楠氏ヲ仰ギ望ムノ合點ニテ、書齋ヲ望楠ト號ケシ也。（強齋先生雜話筆記卷四）

強齋の學風は、なほ「雜話筆記」卷八所載の左記の言によりて、之を知ることが得られる。

○孰レモ學問ノ致シ様、肝要ノ心得有リ。小學、四書、六經、近思錄ハ、誠ニ道學ノ規矩準繩タレバ、尤モ講習研究スベキコトナリ。其ノ外ハ周、程、張、邵、朱子ノ書是ナリ。史傳ノ書ハ、通鑑綱目備ハレリ。只此等ノ書ニ骨ヲ折ツテ、其ノ餘ノ雜書ハ、見テモ、見イデモノコトナリ。第一ニ學ブベキコトハ、吾ガ國ノ書ナリ。吾ガ國ノ書ニテハ、神代卷、中臣祓ハ、上古神聖道要ノ書ナリ。……サテ六國史ト云フベシ。……是ニ續イテハ、准后親房ノ正統記ナリ。是等ヲ熟玩スベシ。……近年、保建大紀コレアリ。正統記以來ノ書ニテ、極メテ心アル珍重ナル編集ナリ。

○神皇正統記ハ、准后親房ノ著述ニテ、親房ハ天下第一ノ忠臣。舍人親王以來ノ學者ナリ。此ノ書ノ著述ハ、深キ旨アリ。ツマル處、神皇正統ノ四字ヲ明セルヨリ外ナシ。

○一己之君臣、則父子也、一統之父子、則君臣也、此謂君臣父子一體矣。

强齋は、又左の如くのべて居る。日・支、和・漢國體の相異を約說せるものとして意味深いものである。

○先生曰、唐ノ君臣ハ人ノ立テタ君臣ナリ。我國ノ君臣ハ天地自然生ニ立ツタ君臣ナリ。（强齋先生雜話筆記卷四）

絅齋は文事を主として、兼て武事を好み、其の帶ぶる所の劍鐔に三宅觀瀾の篆する所の「赤心報國」の四字を鐫みしといふことは、顯著のことであるとともに、「强齋先生雜話筆記」卷四に、左記の事がある。山崎門京儒の志操の存する所いよ〳〵明かである。

○絅齋先生、大薙刀ヲ一振御所持ニテ、是ハ關羽ガ偃月刀ナリトテ秘藏アリシ事、先生＝强齋先生＝書齋ヲ望楠ト號ケラレタル事一意也。

强齋も亦尙武の志厚くして、左記の咏がある。歌は「强齋先生遺艸」乾册の卷二にのせてある。

戰陣無勇非孝也

やぶらじと思ふも親の、かたみなれば、又塵よりも輕き時あり　按、かたみゆゑぞされど塵より輕き時ありとすべきか

絅齋强齋二先生のことを多くのべて、闇齋先生に關する言の甚だ少いのは、決して之を輕視した爲

めではない。本書には別に特に闇齋先生に關する論文あるを以て、贅言しないのである。京儒としての賴山陽先生の事を詳說しないのも、全く別に山陽論の一篇が特筆されてある爲めである。決して闇齋、山陽二先生を輕視した爲めではない。特に山陽先生に就いては、史學會創立五十年記念論文集に拙稿一編を寄せてある。若し淸覽の榮を賜はらば、幸甚の至りである。

兎に角、京儒としての闇齋、絅齋、强齋三先生の學は、天下の人心を感動せしめ、而して皇政興復の大原動力となりしことは、京儒の一大特色として特に注意すべきものである。わけても、强齋の望楠軒は、其門下の西依成齋に傳はりて、成齋はもと肥後の人なるも、京師に居ること頗る長く、望楠軒再造の功績あるのみならず、二條公の如きは、成齋を敬奉し、京都に於ける興學の志ありしも、公の薨ずるに遇ひて、その事竟に果さなかつたのは成齋の爲めにも遺憾であつた。而して成齋は在京の日長きのみならず、身は京都に歿し、墓は東山の淸閑寺山中にあり、京儒といつて、不可なきものである。松村操編の「近世先哲叢談續編」卷上の成齋の條にも、「成齋敎授京都」と書いてある。

强齋の望楠的大精神は、更に又竹內式部、唐崎常陸之介、及び土佐、秋田方面に傳はりて、尊王の論は、進んで勤王の業となり、尊皇の意思は進んで實行的活動となるやうになつたことを考へると、京儒としての崎門一派の學風の感化影響の大きかつたことに深く敬意を表するものである。

## 七　淇園、栗山の二先哲

皆川淇園も京都に生れた京儒として著名である。大田錦城の「春草堂集」中の「丙午文稿」（天明六年丙午）の「與皆川淇園書」にも、

十一月望、遊江戸加賀大田元貞謹西向再拜、寓書平安淇園皆川先生。

とあり、其墓は京極阿彌陀寺にあれば、純然たる京儒である。而して其學は意を字書に潛めて、以て孝悌忠信、仁義道德の諸名義を審釋して、「名疇」六節、及び「易、詩書、儀禮戴記、春秋、論語、孟子繹解」等の名著あり。門人が私諡して「弘道先生」といふは偶然ではない。

次に柴野栗山はもと讃岐の人、初めは阿波侯に仕へ、後に幕府の儒官となつたけれども、京都に住し、儒雅風流を以て聞え、前にものべた通り、「月下聞笛」の天來絶唱さへあり、又畝傍御陵を拜し奉りて、大に其史感を動かし、「邦彥乃浪然而泣、瞿然而懼。」の至誠より發したる御陵參拜感慨無量の詩あり。身は關東の江戸に仕ふるとともに、特に深く京都方面の歷史に深厚誠實の志操ありしことは、今更に贅言を要せざる所である。なほ栗山の御陵參拜の至誠については、「栗山文集」巻二の下の「二葉草序」一篇を參考せられんことを切望する。更に又「栗山文集」の「宸翰御製記」及び「賢

聖障子名臣考證」等によりて、栗山の志操を窺ひ知るべきである。

## 八　遵古堂の學風

京儒、巖垣彦明（龍溪と號す）、同松苗（東園と號す）、同六藏（月洲と號す）の三世相續の尊皇憂國の學風は、大に特筆すべきである。龍溪は遵古堂を興し、京紳以下、子弟の從學するもの千を以て數へ、曾て神武天皇御東征より、建武中興迄の名臣二十八人を選び、圖贊を作り、天覽に供し奉り、天明の年、光格天皇御即位に際し、御元服を行はせらるゝの御時、廣幡卿の爲めに、「幼主冠禮古儀」を考定したる外、「論語集解標記」「十八史略補正」等の著述あり。次に松苗は龍溪に養はれて家をつぎ、大學音博士となり、龍溪創設の遵古堂の教授に任ず。公卿庶士に至る迄、從學者滿堂の勢であつた。松苗は又義父の修史の意ありて果さなかつた後をうけて、「國史略」を著述した。その規模は彼の「十八史略」を參考したるも、君臣の大義名分を明かにして、世教を益すること甚だ大にして、江戶時代の修史としては、「大日本史」「日本外史」「皇朝史略」の三史と共に、國體明徵の爲めに、非常に有益なる名著である。次に月洲も岡田氏より出で、巖垣家をつぎ、遵古堂の學風を振興して、幕末の尊皇勤王の爲めに貢獻するところ頗る大きかつた。

父、子、孫の三世、正大なる家學を奉じたること、稀に見る所にして、龍溪先生は大正六年十一月、贈正五位、松苗先生は同年同月、贈從四位、月洲先生も同年同月、贈從五位の恩典を拜し奉つたことは、特に稀有の榮譽である。

さて龍溪、松苗二代相續の儒業として顯著なる者は、「十八史略」の解釋で、「日本從五位下巖垣彥明校記標記、大學音博士松苗再校增補」と標榜せるものである。「十八史略」の解釋は、必ずしも名著でもないやうであるが、此注釋は特別である。全く國史本位、日本本位の「十八史略」解釋である。天保九年の松苗の序文は、我國の神道正直の旨、歷世尚義の俗を力說して、徒に外國の陋風を尊ぶの弊を排斥し、其末段に於ては、

我邦臣民、惟知尊戴

天皇如天如日而已、求之漢土、獨有帝堯一人、而其子不肖、不能承統、遂使後世放伐相踵、以爲

國風之陋、堯德不及我

天照遠矣、然則中世以後、徵用漢籍何也、特考禮樂刑政之異同、治亂得失事蹟耳、如　君臣大義、何資於彼焉、譬如饱膏粱者不廢藥石不時之用也、此之不察而遽治儒學、其不背　國俗而戾孔氏者幾希矣、學者須先辨春秋大義、以明湯武之爲逆賊、而後涉諸史、庶乎其無弊也。

と言つた。以て其尊皇愛國の至誠を知るべきである。

さて又松苗先生增補の標注を見ると、日本精神的の說が、到る處に著はれて居る。煩を顧りみず、其數條を紹介して見たい。

(イ) 夏の桀王の條（卷一）

㊓松苗曰、漢語所稱逆賊、國言謂之朝敵、此是君子國之口氣、非畏强臣、而憚稱賊也、湯伐夏、我所謂朝敵者、史官宜書子履弑其君桀、……我邦爲朝敵者、其家必亡、不唯朝敵其家必亡、如專權違勅、失禮　大朝者、亦必得奇禍、云々。

(ロ) 殷の紂王の條（卷一）

㊓松苗曰、周發弑其君紂也、蘇東坡有武王非聖人之論、如孔子、其國臣子、於禮不得言其罪而已、如孟軻曰誅一夫紂、賊黨私言也、云々。

(ハ) 周の西伯「受命之君」と尊ばれたる條（卷一）

㊓松苗曰、受命之說、臣子稱贊之私詞、不足尊信也。

(ニ) 伯夷・叔齊義士の條（卷一）

㊓松苗曰、當時義士二人耳、其他皆不義之人。

（ホ）　漢太祖高皇帝の條（卷二）

㊗松苗曰、海西歷代革命人主、皆有大罪、無罪者、漢高明祖兩人耳。

同じ「十八史略」にしても、日本本位の巖垣氏の「十八史略」が、明治三年に至るまで五版を重ねて居ることは、いさゝか快心の事である。

尙此章に一言すべきことがある。巖垣氏第三世の月洲先生の學統を受け傳へた者に、杉浦重剛先生あり。先生の學德正大、識高く行修まれる近代の偉人たること、今更に贅言するの要なし。京儒學統の一人に、杉浦先生の世に出でしことは、京儒の最近代的事實として注意すべきことである。

## 九　栲亭、敬所其他の京儒

村瀨栲亭（名は之熙）も、京都生れの京儒である。博學洽聞、詩文を以て稱せられ、又書畫を善くし、儒雅的學者として著はれ、一時秋田侯の聘に應じ、藩政にも參與して、藩の上下に敬服せられた。實に多方面の京儒であつた。晚年には京都に歸老し、文政元年、七十三歲を以て歿した。その著述に、「藝苑日涉」「栲亭文集」等あり。前者は特に其博雅を以て世人に稱せられた。「民間歲節」の著は、京都の風俗の漢土と相似たものを詳記し、引證該博を以て名著たるを失はないものである。

栲亭は、世の儒者往々本邦官名稱謂を支那風に紛亂せるを慨み、任意に漢名を襲用せることの不可を論じ、日本的儒者の本領を表はして居る。

この外、猪飼敬所はもと近江の人なれども、巖垣龍溪の門下として、引證精確の經史兼學の京儒として名高く、晩年賴山陽と相識り、山陽も其卓識に服して居た。幕末の弘化二年、八十五歳を以て歿した。森田節齋も大和の人なれど、京都に入り、山陽に從學し、京都に卜居せしこと久しく、仁和寺法親王の顧臨を賜はり、明治元年、五十八歳を以て歿した。

その他、貫名海屋、摩島松南、池內陶所等、幕末の京儒として記すべきもの少くないが、豫定の紙數にも限りあることなれば、すべて之を省略す。なほ幾多の京儒を記しもらしたことを、悉しからず諒恕せられんことを乞ふ次第である。

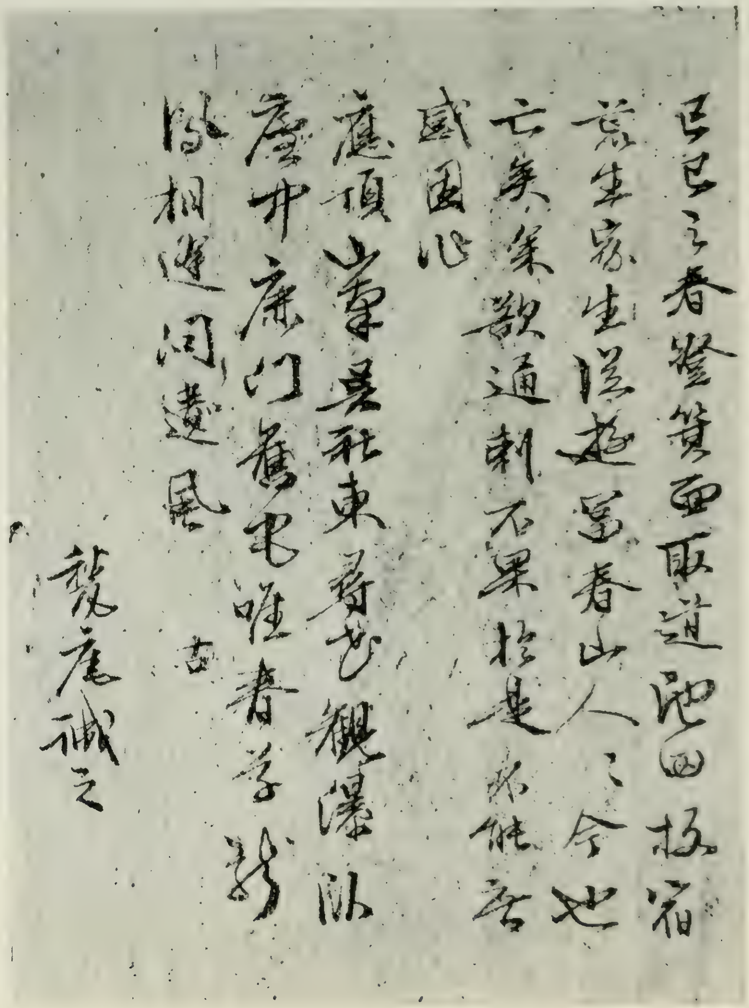
## 一〇　正名稱謂の尊重

最後に、或は重複の嫌あらんが、「猪飼敬所書柬集＝村山氏ニ答フ＝」の中に、實錄の文に官名を書するに漢名を用ふるは不可なりとの趣旨をのべた條は、京儒の日本儒者的本領をうかゞひ見るべきものなれば、之を抄錄して本篇の結びとする。

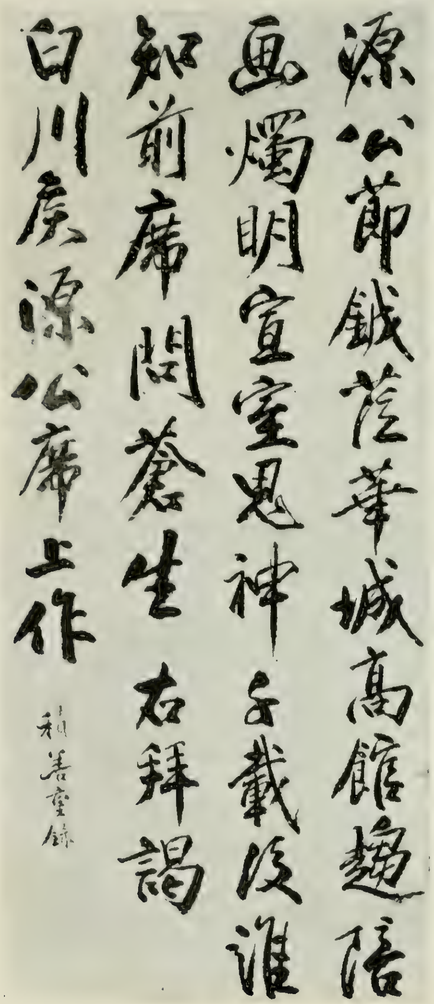
國史略ニ漢官ヲ假借セザルコト、先師＝巖垣龍溪＝ノ遺旨ニテ、拙子モ壯年ヨリ其說有レ之候。近來江戸佐藤一齋等モ、皆家老、取次ナドト書シテ不レ借二漢名一候。古ヨリ我邦國史律令、皆漢文ニテ作リシ事ハ漢語ニ譯スレドモ官名ハ譯セズ。中古ヨリ唐名ヲ用ルハ是ハ風流ニテ、明人ノ兵部尚書ヲ大司馬ト云、布政使ヲ方伯ト云ノ類ニテ、風流ノ文ニハ用レド、實錄ニハ不レ用候。（中略）元淸ノ人、達魯哈赤、固山、貝勒ナド、當時胡語ヲ用テ、漢語ニ譯セザル者ハ、皆其マヽ直用シテ是ヲ譯セズ。我邦ノ官名モ亦然リ。（中略）文雅ヲ主トシテ漢土ニ似スルヲ主トスルハ、徂徠ナドノ浮華ニテ、今時ハ有識ノ人コレヲ厭フ。（下略）

正名といひ、大義名分といひ、共に儒教の大に尊重する所、特に日本的儒者の重視する所である。京儒が多く尊皇勤王の念に富むとともに、正名稱謂に着眼して居ることは、大に敬意を表すべきことである。簡略ながら之を一言して此一篇の結びとする。

（紀元二千五百九十九年、昭和十四年二月七日記す）

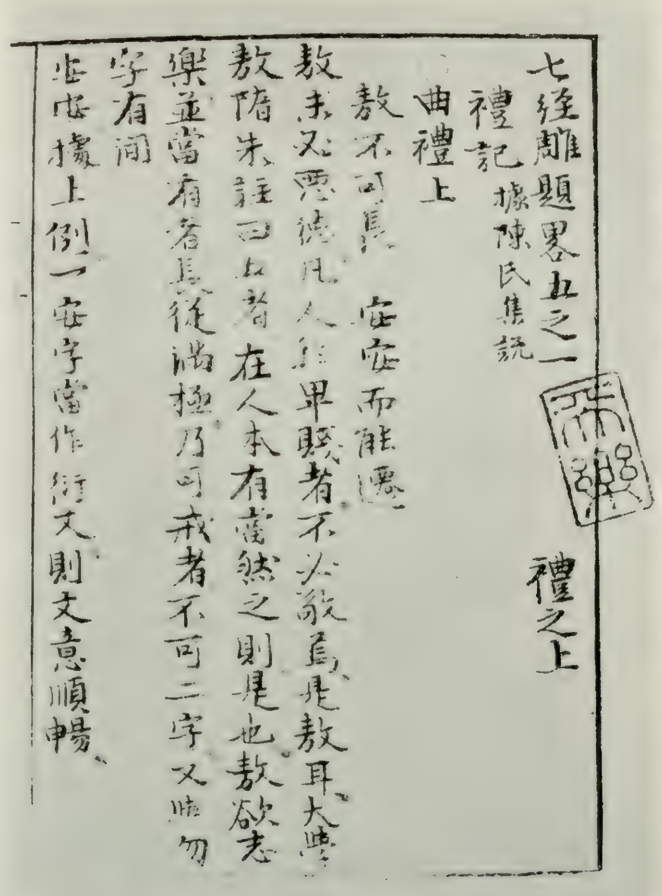


中井甃庵筆蹟（高野辰之氏藏）



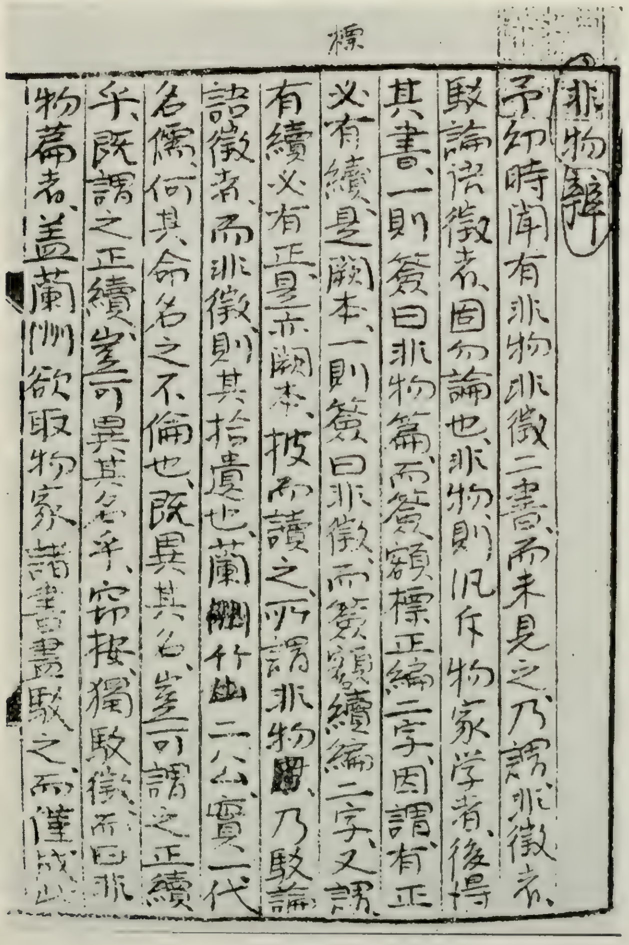
中井竹山筆蹟（高野辰之氏藏）

中井履軒稿本七經雕題略



七経雕題畧五之一　禮之上
禮記　據陳氏集說
曲禮上
敖不可長　安安而能遷
敖未必悪徳凡人往果賤者不必敬爲是敖耳大學
敖惰朱註曰此者在人本有當然之則是也敖欲志
樂並當有者且從謝極乃可戒者不可二字又連勿
字看間
安安據上例一安字當作衍文則文意順暢

藤澤東畡稿本辨非物



標
非物辨
予幼時聞有非物非徴二書而未見之乃謂非徴亦
駁論徂徠者因而論也非物則凡作物家学者後得
其書一則簽曰非物篇而簽額標正編二字因謂有正
必有續是闕本一則簽曰非徴而簽額續編二字又謂
有續必有正豈亦闕本披而讀之所謂非物圖乃駁論
諸徴者而非徴則其拾遺也蘭洲竹山二公實一代
名儒何其命名之不倫也既異其名豈可謂之正續
乎既謂之正續豈可異其名乎竊按獨駁徴而曰非
物者蓋蘭洲欲取物家諸書盡駁之而僅成此

# 大阪の儒學

藤澤章次郎

我が大阪の地は、最も古くから漢學と交渉をもつて居る、或は我國では最古といつても誣言であるまい。卽ち應神天皇の朝に王仁が論語と千字文とを獻じたといふが、天皇は大和に在したから、この書物は固より大和の朝に收まつたことは言ふ迄もないが、其次には仁德天皇が浪華に都し給うて九十年の久しい御治世には、實際にこの漢學の精粹である仁政を行はれたのである。我が皇道を扶翼するに足る所の聖人の道は、かくして我が大阪に最初の痕跡を留め、しかも今日まで　聖皇の餘澤と共に存して居るのである。

其後政治の中心が此地を離れると共に、政治の學問である漢學も、しばらく此地と別れ、更に世の亂れによつて終に凡て僧家の手に託するまでに推移し去つたのであつた。この間に宋の理學が移入せられ、またこれに反對する學者も興り、こゝに我國の儒學隆興の氣運を醞釀して德川氏の郁々たる文

化を成したのであるが、我が、大阪はまた經濟都市として特色ある學者を生じたのであつた。たゞこの三百年の學問を語ることは、所謂僕を更ふるも難かしいのである、まして限りある紙面に於てをやである、されば顯を略し微を闡にして、しかもたゞ其人を紹介する程度のものに過ぎないのは、汗顏の至である。

大隅の屋久島、安房村から出て、文之和尙の學を傳へ、四書集註文之點を印行して有名である如竹散人が、寛文十四五年の頃帷を大阪に下した、これ浪華の儒林傳中の第一人であらう、しかしその在阪の時が短く、その大阪に於ての事跡も明かでない。之に次いで一井鳳梧を擧げることが出來る、鳳梧には左の碑文が殘つてある、碑は既に失はれ、訪碑錄にも載せられてないから、逸文を存する意味で、之を以て記述に代へる。たゞし、もと寫稿であつて二三疑はしい點には、私案を附して置く。

大省元一井鳳梧君碑

先生雲州松江之產也、氏一色後改㆓一井㆒、諱光宣、字桐助、號㆓桐梧主㆒、號㆓鳳梧攸齋㆒、（主下恐脫文字）其先土州人、而歷㆓仕于雲州㆒也、（歷字可疑）父久德、母奧堂氏、元和元年乙夘七月廿日生焉、六歲以㆑有㆓特立出群之資㆒、出㆓于京都㆒、所㆑育㆓鴻儒某氏㆒、（當作育於鴻儒某氏或所育字當移下）稍長、受㆓業於羅（脫山字乎）先生之門㆒、砥㆑節礪㆑操茲有㆑年矣、（當作有年于茲）爾乃仕㆓三侯㆒客㆓二侯㆒、自不㆑願㆑仕、（自字可疑）遂辭去、潛㆓隱于攝和之兩地㆒、考㆓槃乎衡

門一、其虛レ己備レ禮者、影附響和、故收レ明勤レ晦、用祛二其因一、（祛恐誤）而門人日衆矣、所レ謂桃李不レ言下爲レ蹊之謂歟、（之謂當作者字）且恭至二于京師一、承下賛二壽老一之圖畫上、所レ謂雖レ過二老期一、殆遠勝二絳縣之甲子一故歟、（此節欠脱）其爲レ人也、飲食器物不レ要二美奇一、有則隨レ有、無則任レ無、而晏然自若、（恐字誤）雖レ偏二於群籍一、未二嘗有一レ作二一編一、僉以告二先生一、既歿而德音猶存者、亦賴二之於有一レ見レ述也、（亦欠脱）先生曰、吁、我竊比二論語述而之篇端一（首章之義歟）者也、豈騐二其滓一述二其滓一哉、（滓字一有誤）自二志學一至レ今、見二諸史（恐子誤）百家之書一久矣哉、然惟懷二犇牙謹嚴奇葩之文一、事レ養レ氣爾、與二其擧一二於述一、孰二若無一レ毀二於其後一、常適レ所レ安、介二眉毛一背鮐文、（ここ二字似衍）於呼先生之志於レ是乎足矣、屬纊前數日、親炙之二三子（親上當補所字）記レ所レ聞、以題二鳳梧論說一。而請二他日行梓一、（二字似倒）先生一領狀矣、（狀字似衍）粤辛亥秋七月二十五日、壽百十六歲、卒二于攝阪之東江伏見兩替街舍一、遠近之門人一千二百、時會レ葬心喪者三十人、相與舁レ柩葬二于東成郡圓妙敎寺一、而建レ碑勒二其傍一曰、

嗚呼美矣、一片梧桐、鳳凰休レ羽、瑞呈二五公一、聿自隱レ跡、游二攝陽中一、不レ要二外物一、常情自通、養二精神一去、盡二琢磨功一、百十六歲、實身全レ終。

門人敬齋中野无妄謹題鳳國子東隆春謹書

享保十六年歲次辛亥十一月廿五日

五井持軒　名を守任、通稱を加助といひ、大阪の人であつて、京都で學問をした。當時京都には伊藤仁齋、東涯、中村惕齋、三輪執齋、貝原益軒、恥軒等の諸家が門戸を立てて居つたが、持軒は此等の學者と文學の友であつた。京に在ること十餘年、大阪に歸つて諸生に教授した、其頃の大阪はまだ文學が盛でなかつたが、持軒が大に學を勸めたるによつて、好學の風が大に起つたのであつた。

持軒は上述の如く京都では各派の學者を友としては居つたが、彼は宋學を奉じ、しかも書を講ずること極めて平穩で、別に異義を立て、また細密な議論などは爲なかつたのである、梁田蛻巖が書いた傳に「先生常に謂へり、人よく四子に通ずるを得ば、以て宇宙第一の理を識るべし、乃ち行うて之を躬づからせば則ち天下の能事畢ると、故を以て書を說くに常に學庸論孟を循環して、未だ嘗て他に及ばず。」（原漢文）と記して居る。遂に四書屋加助といふ綽名を世間から得たといふのである。

持軒は享保六年に歿し、後五年卽ち享保十一年に懷德堂が創立せられた。この懷德堂は江戸の學問所に對し大阪の準官學であつたが、自ら大阪の學問の特長を存して居る。

## 一　懷德堂及びその諸儒

懷德堂は大阪の學問所として有名なるものであり、その詳細は西村碩園博士の堂考に具はつてある

から、今は其大略を述べる。

持軒と殆んど同時に三宅石菴があつた、名を正名、字を實父といひ、石菴、萬年等の號がある。京都に生れ、江戸にいで、又大阪に移り、帷を尼ヶ崎町に下した。正徳三年に門人等が講舍を安土町にたて多松堂と名づけて居つたが、後高麗橋筋に居て火にあうて平野に避けて居つた、其間に前の門人三星屋武右衛門（中村良齋）道明寺屋吉左衛門（富永芳春）舟橋屋四郎右衛門（長崎克之）備前屋吉兵衛（吉田可久）鴻池屋又四郎（山中宗古）等が同志と謀りて講舍を尼崎町一丁目（今橋三丁目）に建てて懐徳堂といひ、石菴を平野から迎へた。時に八代將軍吉宗が學を好み儒を崇び、大阪にも學問所を設けようといふ意があつて、石菴の門人中井甃菴の奔走の結果、遂に享保十一年六月七日に許可を得て、前の懐徳堂の東隣に學舍をたて、十月五日に開校したのである。

懐徳堂の講師は、石菴學主、即ち教授となり、右塾に居り、並河誠所、井上赤水、五井蘭洲助講となり、甃菴學問所預となり、これ等の人は左塾に居り、而して武右衛門、吉左衛門等五名代は學校の財政を掌どり、年行司と稱して居つた。以下歴代の學主を擧げる。

中井甃菴　通稱忠藏、名は誠之、字は叔貫、家は醫を業として播州龍野の人、石菴に學び、苦學勵行以て學を成したのである。

五井蘭洲　持軒の子、藤九郎と稱し、名は純禎、字は子祥といひ、蘭洲又洲菴と號した、懷德堂の助敎であつたが、一たび江戶に去り、後また大阪に歸つて此堂の敎授を以て身を終つた。當時復古の學のまさに盛んな時であつたが、蘭洲は瑣語、非伊、非物、質疑等の書を著はして之を駁した、また萬葉集詁、勢語通、源語詁等の國學の著書もある。

三宅春樓　石菴の子、名は正誼、字は子和、通稱才二郎といふ。

中井竹山　甃菴の子、名を積善、字を子慶といひ、竹山と號し、老後は渫翁、雪翁など號して居つた。幼より蘭洲に從うて勉學し、其死後は弟履軒と共に硏鑽し、天明二年に學主となり、大に興學に盡し、九年に隱退して居るが、寬政四年に火災のため學舍が燒亡した時、竹山の盡力によつて再建を見た、かくて文化元年まで實際に於て此堂を支持して居つた、其學識も他に擢でて居つて、草茅危言を著はして松平定信に上り、また非論語徵、社倉私議、逸史等の著がある。

中井蕉園　竹山の第四子であつて、名は曾弘、字は伯毅、仙坡、介菴の別號があり、遠藏と稱した。詩賦に長じて文妖の稱があつた、享和三年に三十七歲で死んだ。竹山大に之を惜み、遂に翌文化元年に其身も幽に歸した。

中井抑樓　竹山の第七子、蕉園の弟である、名は曾縮、字は子友、別に碩果の號がある。竹山の後

をうけたから、自ら守成を以て居り、謹嚴にして家學を守つて、天保十一年に歿した。

中井桐園　名は及泉、字は公混、履軒の孫、柚園の子である、抑樓の後をついで十八歳で學校預人となつた。之を助けて教授となつて居つたのが並河寒泉である。

寒泉は尙誠の子であつて、名を鳳來又朋來といひ、字は亨先、小一郎と稱し、後に復一と改め、樺翁、華翁などの別號がある。一時抑樓の養子となつて學校預人となつたが、故あつて本姓に復し、桐園が之に代つたのである。

かくて學問所は明治二年十二月に廢止せられたが、創立以來百四十六年、幕府の允許を得てより百四十四年。寒泉のこゝを去るとき詩歌一を門扉に貼つて去つた。曰く

堂構于レ今百卌年。皐比狗續尙綿々。豈圖王化崇レ文世。席ニ捲講帷一村舍遷。

百あまり四十四年のふみのやとけふをかきりと見かへりて出つ。

感慨想ふべしである。其後も此堂を惜む人が少くない、明治の末年に故西村碩園博士等の首唱により、大正四年に再興の氣運を促がし、翌五年に豐後町に講堂を作り、今日に至つて大阪の文教に裨補をして居るのである。

懷德堂の學風　懷德堂は上記の如く幕府官許の學問所であるから、其教導は當然朱子學によるべき

だが、實際は必しも然うではなかつた、また教授其人に於ても、石菴の如きは初め淺見絅齋に學び、後陸王の學に入つたために破門せられたともいはれて居り、毎月十五日には同志と象山集要を講じて居り、また香川太冲が彼を嘲つて鵺學問といつたといふのであるから、朱說に專でなかつたのである。堂の玄關の壁書第一條に「一、學問は忠孝を盡し職業を勤むる等之上に有之事にて候講釋も唯右の趣を說すゝむる義第一に候へば書物不持人も聽聞くるしかるまじく候事。但不叶用事出來候はゞ講釋半にも退出可有之候。」と極めて自由にして、また學問を理窟めかさないで、實行を主としたことは、町人の學問として然るべきことである。又「武家方は可爲上座事、但講釋始り候後出席候はゞ其差別有之まじく候。」とあつたのを、竹山は「書生の交は貴賤貧富を論ぜす可爲同輩事、但し大人小子の辨は可有之候座席等は新舊長幼學術の淺深を以て面々可被致推讓候。」と改めて、階級を去つたのは道理であると共に大阪町人の土地柄を想はせる。また無緣の人も聽講を許して半は公開たらしめ、更に從來四書五經其他道義の書のみを講ずべき規定も、竹山によつて詩賦醫書をも講じ得ることに改められた、これも他の蘐園派、混沌社などに刺激せられたものであらうが、また竹山の英斷であつた。

中井履軒　竹山の弟であつて、名は積德、字は處叔、兄と共に蘭洲に學んだが、性格は全く異なつて居り、懷德堂の講師に名を列ねては居つたが、意見は大に相違して、懷德堂には住まず、諸所の借

宅に轉々し、其學舍を水哉館といひ、隱棲を以て身を終つた。

水哉館の揭示に「虛名御聞及、初て來訪被下候方は必紹介御求可被成候無緣にて對面の義堅御斷申候又寄宿の義決して不致候」とあるを見ても其人が想像できる。竹山は詩文に長じたが、履軒は經書の硏究に專であつて、宋儒の說に拘らずして群言を折衷し、殊に理氣體用復初居敬等は皆孔孟の本旨でないとして「四性五經性理の三大全は儒者の三大厄だ」といひ、著書百餘の中にも七經逢原、七經雕題略等は卓見に富み、所論犀利である。

竹山・履軒の二老についで、懷德堂の出した異彩といふべき、富永謙齋、山片蟠桃の二子がある。

富永謙齋については、さきに內藤湖南博士の「大阪の町人學者富永仲基」（大阪文化史）により、近くは內弟石濱士精の「浪華儒林傳」（關大學報一三〇載）によつて其人となりが明かにせられた。懷德堂創立同志の一人道明寺屋吉左衞門の第三子であつて、通稱三郎兵衞、名は德基、後に仲基、字は仲子又は子仲といひ、南關、藍關と號し、後に謙齋と號した。十歲の頃から懷德堂に學んだが、十五六の頃、「說蔽」を著はし、儒敎諸子の批評をして、石菴に破門せられたといふことである。當時池田に田中桐江が隱栖して居つたが、仲基之を訪うて詩文を學んだ。士精は「家を出て黃檗山の大藏經の校合に雇はれたらしい、そうして其間に佛典に精通したと見られる」というて居る。父死して後に家塾を開

いて學問を以て身を立てたものらしい、そして其歿年は三十二であらうと士精は推定して居る。其遺著は說蔽（今逸す）出定後語（佛教の批評的研究）翁の文（神儒佛三教の外に誠の道あるを說く）等がある。遺文は今吉田猛雄氏によつて蒐輯せられて居る。

右の著書の內容を述べる餘白がないが、要するにその識見が獨自の研究方法によつて獨創の見を發し、多くの學者が先儒若くは師說に拘々たる中に卓然たるもののあつたことは、次の蟠桃と共に大阪の誇りであらう。

山片蟠桃　名芳秀、字は子蘭、播州印南郡神爪村の人、本姓は長谷川氏である。大阪內北濱魚棚筋の兩替商升屋平右衞門に仕へ、主家の復興につとめ、遂に別家して升屋小右衞門といひ、主家の氏を稱したのである。竹山・履軒に學び、儒家以外の諸書にも通じ、享和二年の頃、「夢の代」の著述を始めたが中絕すること十年餘、文政三年に稿を了した、全篇十二卷あつて、天文、地理、神代、歷代、制度、經濟、經綸、雜書、異端、無鬼、雜論の說篇に分ち、各獨見を述べ、地動說を主張し、金銀米穀の用を論じ、佛を排し、鬼を毀り、其論痛快適切なるものである。此人については龜田次郎氏が前年其傳を明かにせられた。

この人々の如き自由なる意見を吐き、また實際的に事物を研究すること、卽ち大阪の學問の他と異

なつた點である。

## 二　堀河派

伊藤仁齋が京都堀河に復古の學を唱ふるに及び、從遊の士少くなかつたが、中江岷山は其首なるものであつた、從學四十年、同門の士はみな去つて仕官し、或は帷を下して教授をして居る中に、獨り留つて古學を研鑽して居つたことは篤好の人といふべきである。

名を一貫、字を平八（蓋し通稱か）といひ、岷山と號し、晩年に薙髪して快安と稱した。伊賀の人であるが、寶永年間に大阪に來り、天滿町に塾を開き、名高を求めず、淸貧に安んじ、專ら師說を發明するを任とし、淺見絅齋、三宅尙齋と敵視し、論鋒常に銳利を極めて居る。其著書は理氣辨論二卷、四書辨論十二卷ある、其識見と理路とよく師說を發明して、人を服せしめる所がある。

## 三　蘐園派

物徂徠が復古の學を江戶に唱へ、理氣の心學に對して治國安民の實學を說き、また古文辭を崇んで詩文を奬め、大に當世を風靡し、天下の英才皆其門に集るの概があつた。其學を我が大阪に傳へたの

が菅甘谷子である。

甘谷は岸和田藩士の家に生れ、同藩堀氏の養子となり、二百五十石の俸をついだのである。名は晨曜、字は子旭、通稱小膳又小善、號は南嶠、後に甘谷といつた、初め藩儒三宅氏に學び、その侯に從つて江戸に居る時に、往いて物子に謁し、物子は一見して其奇才を稱したのであつた。かくて深く物子の學を修め、故あつて致仕するに及んで、養家の姓菅原から出て居るからとて、菅を姓とし、初め京都に客居し、後に大阪に移り、海近き處に漁釣を樂み貧窮に甘んじて居つたが、門人漸く盛となつて、市の中部に出た、猶ほ其亭に滄英と命じて隱操を託して居つた。浪華の住、二十年、從學の士も頗る多くあつたが、終には其煩を厭ひ、慶弔の外は門を出でず、寶曆十四年三月念四日、享年七十四にて歿した。甘谷先生遺稿三卷が世に存してあるだけで、他に遺著がないから其學識は知ることが出來ぬが、その力を詩に用ひたことは、田鳴門が「先生嘗て吾終身に一詩の佳なるを得ば足ると謂はれた。」と記して居るのを以て知り得るが、其稿を留めることの少ないのは惜むべきである。たゞ其門人が詩文を以て鳴り、後年混沌社の中堅となつて居たのを以て、其一斑を知ることができる。

門人中に兄樂郊 名臧字臧宗宮部氏、後西山にまた兄氏に改む、浪華に教授す 葛蠹菴 名張字子琴貞元と稱す、橋本氏、葛城氏から出たとて葛む氏とす 岡元鳳 字公翼、魯菴と號し、濟齋、白洲の別號がある、尙達又元達と稱し、醫家である、毛詩品物圖考、離騷名物考等の著あり 岡德瑜 字は士瑾、大進と稱す 田鳴門 名は章、字子明、田中七郎右衞門と稱し、其家鳴門橋に近いから鳴門と號した、博學洽識、千里駒と稱せられた 細合離 字麗王、一名方明、通稱八郞右衞門、斗南、學半齋、太乙眞人、大盆居士、白雲

散人等の號あり、善書を以て名あり 筱應道、釋義端 俗姓脇坂、字明進、松雲道人と號し、住吉に住し、詩文に長じ、大に古文辭を鼓吹し、善謔隨譯、文章獨吳、澄浦詩集等の著あり など著名である。

更に菅子の門に吉元中といふ人がある、字を子庸、號を崑崙といひ、吉田求馬と稱した。其師の學風を確守し詩文を善くしたが、後に讃岐に流寓し、藤川氏の養子となり、改めて東園と號し、醫を業とした「甘谷に門人は多いが、善く其學風を傳へるものは、義端、元中のみだ。」といはれた人である。これが實に我が祖東畡子の學の出づる所である。されば學派からいへばこゝに東畡子を述べるべきだが、年代の關係から、先づ傍系ともいふべき次の二家を述べる。

片山北海　名は猷、字は孝秩、北海は其號であつて、通稱を忠藏といひ、越後の農家の子であつたが、幼時から俊敏であつてよく書を誦した、遂に志を決して十八歳のころ京師に來り、宇野士新に從つて學んだ、士新も之を視ること篤く、門にあること六年、師死して、依る所を失ひ大に窮迫に陷つたが、大阪の富商に嘗て宇氏の門にあつて、北海の學殖を知つた者があつて、之を其別墅に請ひ迎へて之に學んだ、後に阿波橋の北詰、又淀屋橋の北街に居つて、その居を孤松館と名づけ、名漸く顯はれ、一代の門人三千人といはるゝまでになつた。

北海の學は全く師說を守つたといはれて居るが、其師士新は初め句讀を向井滄洲に受け、後には弟士朗と共に發憤自修し、師受する所なしといはれて居るが、其古文辭を好み、李王を崇奉し、又物門

の學僧大潮に從つて益を請うた事を以てし、また論語考に於て大に物子を難じて居るが一面大に物子に心醉して居つた所を以て考ふるに、自ら折衷といふも、物門と臭味甚だしく遠くはないのである。從つて北海の學も亦其大概を知ることが出來る、其遺著は、たゞ詩文に關するもの卽ち、北海文集十二卷、尺牘三卷、詩集七卷、混沌社詩稿三卷等、門人の輯錄したものが有るばかりである。而して其老親に孝であるによつて名を顯はし、己の老後も嘗て親に輕暖を奉ずることが出來なかつた故を以て自ら布被に甘んじて居つた如き、人となり素朴敦厚であつて、栗山をして「謹嚴確實にして特卓の操あり」と稱せしめたる事等を見て、其人が徒らに義理と章句の間に爭はないで、德行を實際に踐んだ所の、所謂大阪の學風の人であつたことが窺はれるのである。

其詩文に於ては有名なる混沌社の盟主であつた。卽ち當時の文人が北海を中心として集つた詩社が混沌社である、初め鳥山崧岳（名は宗成、字は世章、垂葭館遺稿あり）田鳴門、合斗南、河恕齋（河野子龍字伯潜）岡元鳳、左魯菴（名は鳳、字は子岳、京師の人）葛蠡菴、岡南山（名は豹、字君章、阿波の人、半閒園詩文集あり）平赤水（名壽王、字九齡、和泉の人、南山不崩集あり）等と結んだ詩社であつたが、更に筱三島、木巽齋、賴春水、福石室、小山養快、萱野錢塘、隱岐茱軒、森田士德、十時梅崖、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里等相尋いで來り參じて、一時の盛を極め、またかゝる雅會の嚆矢ともいふべきものであつた。この社の中堅が、甘谷の門人であつたことは、以て當時の文權の所在を想像することができる。

## 四　筱崎氏の梅花社

菅甘谷の門に筱崎三島がある、其梅花社は、父子三世八十餘年、大阪の文運に貢獻した。

三島の先は伊豫に住し、父は長兵衛忠中といひ、大阪に來り廢居を以て產を成し、江戸堀の犬齋橋畔に隱居して身を終つた。四人の子があつた、二男は卽ち三島である。

三島は名は應道、字は安道、郁洲の別號がある、父に襲いで長兵衛と號した。幼より穎悟で書を善くし、甘谷の門人兄樂郊について句讀をうけほゞ諸書に通じた十八歲の時に父が隱居したため家業を嗣いだ。家は益〻富むが、己れは醉生夢死の徒たるを恥ぢ、また書を繙いた、樂郊も遂に勸めて其師甘谷に從はせた、時既に門下の俊秀に伍して遜色がなかつたといふことである。後遂に意を決して業を廢し家を賣り、白子町に私塾梅花社（庭に綠萼梅あるによる）を開いた、時に安永五年、年既に四十であつた。しかも自ら人の師となるに足らざるを恐れて更に博く學修し、天文卜筮音切の類まで研修につとめ、諄々として子弟を敎へ、門人大に集まり、阿波の老臣稻田氏に招かれ年々徳島に赴いて書を講ずるにいたり、遂に犬齋橋の父の舊宅を買ひ戻し「これにて先人に申譯ができる」と喜んだといふことである。

文化十年に七十七歲にて歿した。

藪孤山嘗て彼を稱して「安道は豪爽であつて書を善くし、又騎馬を善くし武人に遜らぬ」といふたが、三島は自ら「己れ晩學にして思辨に遑がないから、たゞ師説を守つて失はぬことを願ふ」といつて居るのを見ても、學術上の所見は少かつたらしい。著すところ碧紗籠集七卷、草稾三卷ある。子がなかつたから、辻田氏の子を養ひ、更に加藤氏の子を養うた、これ卽ち小竹である。

小竹は父を加藤周貞といひ、豐後の人で大阪に來り醫を業として居つて、後妻の腹に五男三女あつた、小竹は其仲子であつて、幼名は金吾、長じて碩といひ、後に弼と改め字を承弼とした。通稱は長左衞門、號は南豐、畏堂、些齋、丁橋、彝江、退菴、棠隱、紅柑居主人など甚だ多いが、小竹散人を以て名高い。幼にして讀書を好み、九歲で三島の門に入つた、三島その異材である所を見て養子とした。初めは家學を修めたが、十九歲に江戸に遊學し、尾藤二洲の門に居ること暫くであつて、母の病篤きにより急に大阪に歸つた。しかし一度家門を出て、他の學園を窺うた彼は多少家學に慊焉たるものがあつたのであらう、一日三島が「汝は才學既に具はれるも、唯だ識に乏しい」といつた時に、小竹は「學ぶ所此の如きものなれば、識何によつて長ぜん、願くは洛閩の書を讀み以て進境を求めん、得る所あるに庶幾からんか。」と答へた、三島之を許し、朱子文集、語類を與へて之を讀ました、こゝに小竹は愈〻宋學に轉ずることになつた。小竹は再び東游をしたいと志したが、父の許を得がたいだ

らうと、無斷で家を出で、昌平校の古賀精里に投じた、三島之を責めないで、書を精里に送つて小竹を託した。こゝに小竹も感激して學を勵んだ、精里も其才を愛して教授したから、學も大に進んだ、精里一日小竹に向ひ「親老いてゐる、わざ〳〵游學するの要もなからう」といつたから、小竹も惕然として悟り、昌平在學半年にもならずして西歸し、父に代つて子弟を教授した。

小竹年三十の頃、古賀侗菴に書を送つて「小生は白石・徂徠の浮躁輕進して末路の振はざるに鑑み、斷じて仕官の念をたち、政を家になすの志を明かにせん。」の意を述べてゐるのを見て、其終世市井を出ぬ志を持つて居たことが分る。また嘗て「吾邦君臣の道甚だ嚴であるから、一たび質を委すれば終身束縛をうけ、旅進旅退して、言其意を盡すこと難く、我に損あつて彼に益ない、賓師となつて、進退意に任せ、直言讜議して顧みる所なきには及ばぬ。」といつて居る、以て其志を知られる。

かくて三島の交道の廣さと、小竹の才名とによつて梅花社の名四方に弘まり、東脩を行ふもの關以西の國に遍く、遠きは奥州からも來たといふ程であり、後の碩學大家の其門から出たものも多い、奥野小山（純字溫夫）安藤秋里（秉字維義）橋本香坡（通字大路）と養子竹陰とを筱門の四天王といひ、安井息軒も其門に留まること三年であつたといふ。其交友の如きも當時の名人は彼と往來せぬはなく、履屐つねに門に滿ちて居つた。詩文も才氣の溢れた所があつて、世爭うて之を誦し、書は流麗雅健で人競うて之を求め、

書を著す人は必ず其序跋を求め、詩文を作つたならば必ず其批正を得て世に誇るといふ風であつた。嘗て曰ふ「經學は何も注解の異同得失を辨ずるばかりが能ではない、習うて熟しさへすれば自然と我が用をなすのだ、子夏子貢が詩を言うて孔子に稱せられたのも是れなんだ。」と、また曰ふ「宋以後は學者にいろいろ發明する所もあるが、要するに朱子の完善にしくものはない、支離拘泥は學者の過ちだ。」と、畢竟市井の學者としての通有の考方である。嘉永四年五月に七十一歳で歿したが、其前年に自ら肖像に題して「貞不㆑絕㆑俗郭林宗、和而不㆑流柳下惠、不㆑爲㆓鄉愿㆒不㆑爲㆑甚、欲㆘以㆓平常㆒了㆗百歲㆖。」といつた、これ其面目を見ることができる。之によつて門人が貞和先生と謚した、後大正十三年贈從五位の恩典に浴したのである。

竹陰は名を槩、字を公槩、通稱を長平といひ、武江、訥堂の別號がある、加藤氏で江戸の人、母が大洲藩士の女であつた、初め古賀侗菴に學び其紹介を以て小竹の門に入つた。小竹は「同じく加藤の姓であり、同じく大洲の藩に出で、同じく古賀氏の門下であるのは三奇だ。」と遂に養子として、通女に配した、安政四年に通女歿し、翌五年竹蔭も歿した。竹蔭も詩や書に名はあつたが、梅花社は遂に衰へたのであつた。

## 五　泊園書院

先きに甘谷菅子の高足、吉元中郎ち藤川東園が讃岐に居つた時、其門に中山城山がある。城山の門に王父東畡子が出たのである。王父名は甫、字は元發、昌藏と稱し、東畡又泊園と號した、寛政六年讃岐香川郡安原村に生れ、幼より中山城山に從つて蘐園の學を受け、學成つて長崎に遊び唐音を學ぶこと三年にして歸り、文政七年に大阪に至り、一年の後、淡路町五丁目に帷を下し泊園社と名づけた。甘谷歿後、蘐園の學も漸く衰へようとして居つた際であつたが、こゝに始めて復古の學が此地に興つた。後瓦町二丁目に移つた頃から、從學の徒、一時の盛を極めた。豐岡侯の大阪城代であつた頃、聘せられて論語を講じ、尼崎侯の賓師となり、高松藩は擢でて士分に列して、大阪に住するを許され、元治元年藩公に從ひ京師にゆき、將軍家茂に二條城で謁見したが、其年十二月に易簀した。大正天皇登極の儀に際し、贈從四位を賜うたのである。

王父の事は余自ら之を述べるのも妙ならず、石濱士精の儒林傳中から摘錄することとする、以下記する所はそれである、猶詳なるは原文を見られたい。

先生の撰著は南岳先生の編輯せられた東畡先生の文集八册及び詩存一册に總括されて居る。經子等

に關する諸説は別行してはないが、亦南岳先生の紹述編纂された諸書中に之を見ることが出來る。

先生の學術は徂徠學に一貫して居る。其點に於ては師中山城山が晩年に及んで三敎一歸論を草したり黄庭經を註して道術を弘めんとしたのとは異なり、粹然たる徂徠派の儒者であつた。だから徂徠學の原理である道を以て先王の制作と爲すの説に於ては信じて移らず、たゞ爭を生ずるを恐れて平生は妄に之を口にせられなかつた。これは當時の官學が朱子學で異端を禁じてゐたからであらう。徒らに道の何たるを論爭するは却つて護國安民の仁道を害すると思はれたに違ひない。そこで中には先生の名聲の諸方に及ぶを誤解して、先生が學説を轉じて時風に隨つたと評するものもあつたから、先生は慨然一詩を賦して志を述べられた、詩に云ふ「闕里文章衆説遷。吾曹所ㇾ守有二師傳一。如今豈爲二非譽一動。一片丹心七十年。」篤實なる先生は一生徂徠を讃嘆し師傳に於ては屢々意を致されたのであつた。

然し先生が徂徠學より出て泊園學を立てられたる特異の學説は儒學と國體との關係論であり、孟子の勸王を疑つた所に存する。我國の漢土に對する關係は人道の闢けたのは彼が我より先だから、道德文物は我が之を彼に資したのは事實であるが、それは漢土ばかりでなく印度西洋にも資して居る。獨り　皇統一系天地と偕に窮り無いのは我邦靈氣の結成する所で、外國に資して出來たものではなく、

諸外國も斉することの出來ないものがあるからである。さうしてこの皇統一系これは孔子の志に符合するもので、漢土には孔子の志が行はれないから、一治一亂興亡相易り、常に胡族をして中原に横行せしむるに至つたのである。孔子が周室に願つた所のものが我國には儼乎として存在するのであるから、孔子の書を讀むものは本邦の尊さを知らなければならず、我國の尊さを知る者は孔子の道を研究せねばならないと云ふのである。儒學と國體との關係を明確に把握して論じたる先生の「原聖志」の一篇こそは今尚ほ學者の再讀を要するものであると信ずる。

次に孟子が梁の惠王、齊の宣王に勸むるに王たるを以てしたのを疑つて、孔子の道に背馳するものとせられた。蓋し孔子の君とする所は魯衞齊楚の諸侯でなくて周王の一であつて、獨り自ら其君を二にせざるのみならず、四海をして其君を一にせしめんと欲した。故にその春秋を著はすや、春王を揭げて其大義を表明した。先生は此春秋の大義に據つて孟子の言說を嚴重に批判して、その孔子の道に背くを斷ぜられてゐる。孟子は古へより我國體に合しないと認められてゐたが、聖志の行はれない彼國の學者には到底發し得ない議論である。先子は孔子によつて之を難じ、孟子自身亦矛盾せるを摘發し、「思問錄」の精到なる論說を試みられたのである。此等泊園の尊王學說は護園派中では極めて特異なものであるが、此等が畏くも九重の奥に達して嘉尙せられ、御贈位の恩典を賜はるに至つたので

あらうと拜察する。

先生は醇乎たる學者であつて、然も古學中興を一に念とせられた。故に詩文に於ても一に重を學術に任じ、浮華の風は更に無い。先生が當時京阪地方の文人を評して、大抵儇薄粗率にして、稗說を誦し俚語を綴り、以て媚び以て售り、以て壟斷を私して周秦の古書に於ては擲つて以て之を棄てゝゐると憤慨せらるゝを見ても、經生の面目を伺ふことが出來る。蓋し古文辭の學を承けてはゐられるが、よくその文藝偏重の蔽害に陷らず、卓然自立誠に欽すべきものがある。

かく先生は徂徠學より出でて泊園學を立てられたが、嫡嗣南岳先生亦克く家學を紹述し愈〻斯道を昌明せられ、相續いで長く浪華文教を維持せられたるは、維新前後世局變轉の時に當り誠に大阪の幸福であつたと云はねばなるまい。

士精の記述は此の如くである。なほ家君が明治維新に際し高松藩論を飜して王に勤めしめたる。家兄士亭が明治四十四年に代議士として南北朝正閏を當局と論議したるが如き。また其門下に高嶋秋帆（長崎人、贈從四位）中谷雲漢（尼崎藩士）春日載陽（大阪醫家）堀田放哉（出石藩士）雨森精翁（松江藩士）稻垣秋莊（大阪儒家）華岡青洋（大阪醫家）横田行藏（土佐藩士）坂本葵園（大阪儒家）岡本監輔（阿波人）靑木靑城（村松藩儒）森梅溪（膳所藩士）坂田莠（高鍋藩士）關楓陰（篠山藩儒）吉村斐山（廣嶋藩儒）岩崎順道（廣瀨藩儒）高松舫洲（大阪素封）岸田吟香（精錡水店主）山田松軒、松堂（醫家）西尾爲忠（京師人）須山萬（維新志士贈正五位）市村水香（高槻人善詩）陸奥宗光（明治外相）村

田精一（膳所藩志士）の如き諸方面の人材を出したるは、また其學風を知ることが出來よう。

## 六　王學の大鹽後素

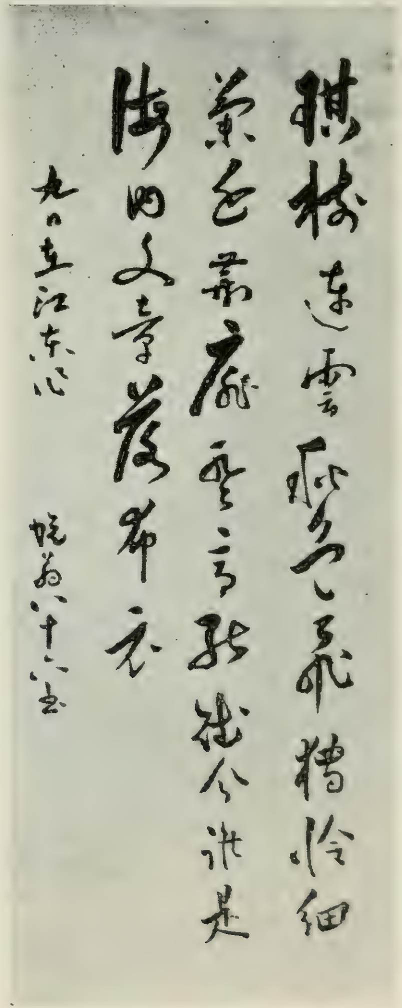
名は後素、字は士起、中齋と號し、通稱は平八郎、其書室を洗心洞といつた。天滿の東組與力の家に生れ、町奉行高井實德の知遇をうけて居つたが、實德が職を辭した時、中齋も亦退いて文武の講習に專念した、時に年三十八。後天保七年の凶饉にあたり、奉行跡部良弼の爲す所に憤激し、翌八年二月、天に代りて民を拯ふを名として兵を擧げたが、事成らずして焚死した、年四十五である。

中齋は幼時中井抑樓に句讀をうけたらしいが、「刻苦獨學、世儒の訓詁詩章に沒頭するを厭ひ、寧陵呻吟語を讀んで、覺る所あり、其王氏に淵源することを知つたが、我國にあつては藤樹、蕃山、執齋の逝いて後、關西には此學久しく絶え、師受する人がない、獨り古本大學、傳習錄について研究して得る所があつた。」とその佐藤一齋に寄せた書牘にいつて居る。また「誠意を以て的となし、致良知を以て工となすを志した」といつて居る。しかし其洗心洞學名には「弟子問二於余一曰、先生學謂之陽明學一乎、曰否、謂二之程子學朱子學一乎、曰否、曰謂二之毛鄭賈孔訓詁註疏學一乎、曰否、仁齋父子之古學乎、抑徂徠主詩書禮樂之學乎、曰否、然則先生所二適從一將何學耶、曰我學只在レ求レ仁而已

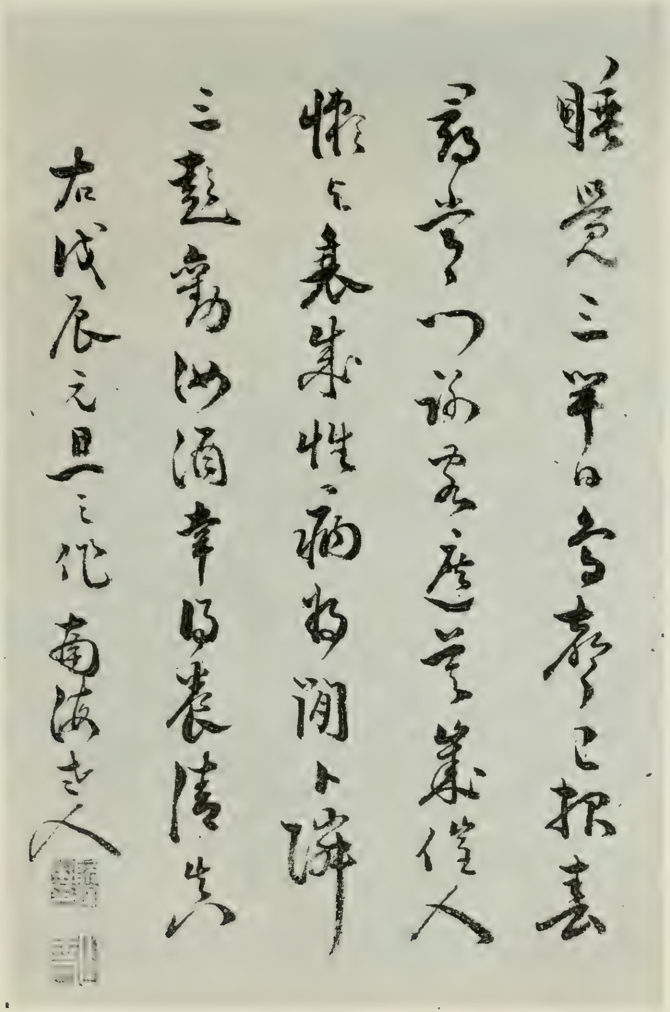
矣、故學無ㇾ名、强名ㇾ之曰ニ孔孟學一焉、曰其說如何、曰我學治ニ大學中庸論語一也、大學中庸論語便是孔氏之書也、治ニ孟子一也、孟子便是孟氏之書也、而六經皆亦孔子刪定之書也、故强名ㇾ之曰ニ孔孟學一也。」といひ、また「然而孔孟數千百歲以前、旣逆知ニ數千百歲後一。諸儒各爭ニ意見一、立ㇾ宗分ㇾ派、以爲ニ同室之鬪一矣、故孔子以ニ孝經一授ニ於曾子一而謂ニ之至德要道一、孟子亦曰、堯舜之道、孝弟而已矣、以ㇾ是考ㇾ之則四書六經所ㇾ說雖ニ多端一、仁之功用雖ニ遠大一、其德之至、其道之要、只在ㇾ孝而已矣、故我學以ニ孝之一字一貫ニ四書六經之理義一、力固不ㇾ及、識固不ㇾ足、然求ニ諸心一、而眞窮ニ心中之理一、將ニ以ㇾ死從ニ事斯文一矣、故直曰ニ孔學一。」と。實際は王學であるが孔孟學と標榜したのは、異學の禁に憚つたのか、抑故らに異を立てたのか、其著に古本大學刮目、儒門空虛集語、增補孝經彙註、洗心洞劄記等がある。大抵古人の說を揭げて之に自說を附して居る。劄記には太虛、致ニ良知一、變ニ化氣質一、一ニ死生一、去ニ虛僞一の五綱領に分けて、述べて居る。常に門人等を諭して云ふに「世は海である、身は船である、心は柁である。身船が終日海に浮沈してゐる、もし心柁がなくば、利雨名風、慾瀾情波に覆溺せられないものは幾んど希である、是故に性實を失ふまいとすれば、宜しく堅く心柁を執り、以てかの無涯無底の世海を渡るべきである。たとへ風雨波瀾に逢ふも覆溺の害を免れるだらう。」と、「心柁とは何ぞ。」と問へば答へて曰く「心柁は良知なり。」（原漢文）と。この說も王氏から出て居ること

明かであるが、かれ心柁を誤りて亂賊に陥りしは何故であらうか。天理を說き、良知を說く學者は、天理良知を判するに規矩を以てせずして、自己の心に自ら判ずるからであらう、心柁に方向を與へる磁石がないからではないか、殊に此人の如きは、自ら信ずることが强すぎたのであると思はれる。

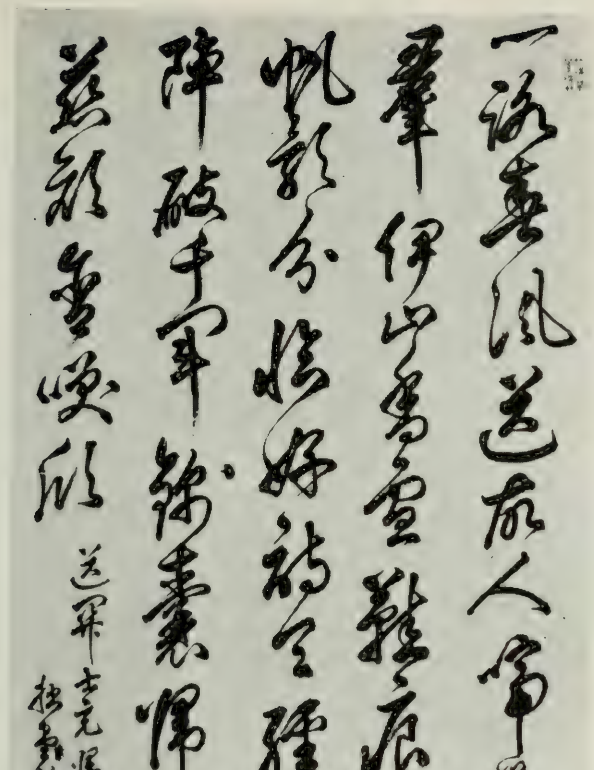
上述の外、小竹の女婿後藤松陰、廣瀨旭莊、木村巽齋及び東畡の親友春田横塘、森田節齋を始めとし、記述すべき人も多いのであるが、限りある紙上に、それも不能であるから、こゝにこの筆を擱かうと思ふ。要するに大阪の儒家は多くは實踐躬行に重きを置き、地方の風化を計つたものであつて、たゞ章句に拘々としては居なかつたといふことが其特長である。



梁田蛻巖筆蹟（梁田邦治氏藏）



祇園南海筆蹟（高野辰之氏藏）



齋藤拙堂筆蹟（兒島氏藏）

# 徳川時代の漢文學（其一）

——徳川時代漢學者の文章

佐久節

徳川時代に於ける漢文の狀況を略敍するのが、余に課せられた問題である。この問題に答へるには、所謂「和習」といふことを先づ初めに說明して置くのが便宜と思ふから、和習の話から始めることにする。

改めて言ふまでもなく、我邦の人が漢詩や漢文を作るのは、外國たる支那の言語文字を用ひて詩文を作るのであるから、いかに支那學の造詣の深い學者でも、支那本國の詩文人のやうにうまくは往かない。譬へば田舍者が東京語を話す場合に、ともするとお國訛が出るやうな譯で、外國人たる誤謬破綻を免れ得ないのである。この種の誤謬破綻を「和習」といふ。荻生徂徠は、やかましく「和習を脫却せよ」と主張し、文罫、文戒等の書を著し、伊藤仁齋の文を引いて其の和習を指摘してゐるが、滑稽なことには夫子自身の作つた詩文にも頗る和習が多かつた。今ここに山本北山が徂徠派の詩文人の

作に見える和習を指摘した例を抄錄して和習といふものの一斑を示さうと思ふ。北山の作詩志轂に、

春臺集（太宰春臺の詩文集）ノ中ニ、題ニ畫鷹圖一。題ニ畫蘭圖一。コレ華人ノ吳道子畫五聖圖。米元章畫山水圖ナドト云フ題アルヲ看テ杜撰シタルナリ。畫蘭トカ鷹圖トカスベシ。畫某圖トハ決シテナキコト也。白氏文集ニ畫ニ木蘭花圖一寄ニ元郎中一ト云フ題アリ。是ハ白樂天ガ自ラ木蘭花ヲ畫イテ元郎中ニ寄セタルナリ。其詩ニ唯有ニ詩人應ニ解愛一、丹青寫出與レ君看ト云フニテ知ルベシ。索應元ガ鵞池集ニ自題ニ畫老子圖一トアル、同ジコトナリ。太宰氏ガ如ク故モナク畫ノ字ヲ施スニ非ズ。

古河藤侯邸奉ニ陪主君一看レ花。主君トハ大夫ヲ稱スル辭ニシテ諸侯ニ用フベキ稱辭ニ非ズ。陪ニ古河侯一看レ花トシテ別ニ地方ヲ書セザレバ、邸ト云ハズトモ邸ニテ花ヲ看タルコト明ケシ。此翁嘗テ斥非ヲ著シ、「稱呼者禮之大節也。敬慢係焉。故君子愼レ之」ト大言シナガラ、自ラスル所ハ其言ニ酬イズ。

南溟集（入江南溟の詩文集）ノ題ニ、卒然賦レ之以賀。賦レ之ハ賦レ此ニ作ルベシ。華人ノ題引ニ賦レ此。賦レ之。賦レ焉ト用ヒ分ケテアリ。其差別ハ儼然トシテ分明ナルコトナリ。

牀頭挂ニ老子圖畫一。コレ牀頭トハ、トコノコトト見エタリ。本邦ニテトコニ挂幅（カケモノ）アリ。牀ノ字ユカトモトコトモ訓ズルユヱ、杜撰ニ牀頭ト用ヒタルナリ。知ラズ夏邦ノ牀ト云フモノハ圖畫ヲ挂

クベキ物ニ非ズ。牀ノ字流俗挂幅ノトコニ用フルトモ、奈ンゾ文辭中ニ用フベケンヤ。倭習是ヨリ甚シキハナシ。又圖畫ノ字モ杜撰ナリ。詩中ニ如ニ圖畫一、圖畫中ナドトアルヨリ妄用シタルナリ。歐陽集ニ題ニ畫圖一ト云フハアレドモ、古人イマダ何々ノ圖畫ト云ヒタル例ナシ。大幅ノ山水又ハ數多キ畫册ノ類ヲ畫圖トハ猶イフベシ。其レモ像眞ニハ施スベカラズ。其謬侪輩ガ畫蘭圖ト好對ナリ。

などとあり、又作詩志彀附錄に、

徂徠集題引ニ余五十也。五城左容翁惠レ詩、侑以ニ三物一。仙臺地蘽。故當レ有ニ此風流人一矣。此題ノ意ハ徠翁五十ノ賀ヲ容翁ガ詩ト三物トヲ贈ツテ賀シタルコトト見ユ。モト是レ元美（明の王世貞、字は元美、弇州と號す）ガ于鱗損ニ餉諸物一、侑以ニ新詩一ト云フ題ヨリ襲リテ却ツテ謬ル。華人ノ題例ヲ推スニ幾物ト物ノ字ノ上ニ數目ノ字ヲ下ス時ハ、必ズ其物ノ名目ヲ擧グルコトナリ。一二ヲ擧ゲテ之ヲ證セン。杜子美集ノ題引ニ領ニ酒醬二物見レ遺。又徐文長集ノ題引ニ許口北遺以ニ綾帛錦三物一トアルニテ見ルベシ。若シ物數多ケレバ某某等物ト書クコトナリ。列朝詩集、于愼行ガ詩題ニ端午賜ニ黄金艾葉銀書靈符等物一、歲以爲レ常トアリ。元美ガ題ハ諸物ト謂ツテ幾物ト數目ノ字ナキユヱ、上ニ其物ノ名目ナクテモ可ナリ。徠翁率爾ニ元美ガ題ヲ模擬スレドモ所謂其一ヲ知ツテ其二ヲ知ラザルナ

リ。又侑トハ酒宴ニ幣（ヒキデ）ヲ出シテ酒ヲ勸ムルコトナリ。元美ガ意ハ詩ヲ以テ物ヲ侑ムルナリ。徠翁ノ意ハ物ヲ以テ詩ヲ侑ムルナリ。詩ハ物ヲ勸ムベシ。物ハ奈ンゾ詩ヲ勸ムベキ。亦謬ナラズヤ。五十也ノ也ノ字謬用ナリ。矣ノ字ヲ居（オ）カネバナラヌ所ナリ。風流人矣ノ矣ノ字モ亦謬用ナリ。焉ノ字ニ換フベシ。

期下與二諸名勝一同遊中天桂精舍上。是レ倒錯ナリ。期與ノ與ハ我ニ對シテ居ケル字ナリ。我ト人ト同遊ヲ期シタルコトナレバ、期ノ字同遊ノ上ニ居カネバナラヌナリ。試ニ與ノ字ヘ余ノ字ヲ添ヘテ看バ分ルベシ。期下余與二諸名勝一同遊上云云トシテ看ヨ。語ヲ成サズ。又余期下與二諸名勝一同遊上云云トシテモ語ヲ成サズ。殊ニ王昌齡ガ詩題ニ與二蘇盧二員外一期三同遊二方丈寺一而蘇不レ至トアルニテ、徠翁ノ倒錯論ヲ待タズ明カナリ。若シ與ノ字ヲ省ケバ期ノ字ヲ上ヘ居イテモ亦語ヲ成ス。明ノ高啓ガ缶鳴集ニ休沐日期三衍公遊二北山一不レ果、獨臥二齋中一ト云フ題アリ。諸名勝ハ諸名公ノ誤ナルベシト思ハル。何トナレバ名勝トハ名高キ好風景ノ地ヲイフ。北齊書韓晉明傳ニ飲二美酒一對二名勝一、安能作二刀筆吏一披二反故紙一云云。中郎集ノ題ニ將三遍遊二諸名勝一。又乾隆帝ノ樂善堂集ニ秋日同三二十四叔父五弟一遊二玉泉諸名勝一トアリ。其餘ノ書ニ名勝ノ字ヲ用ヒタルヲ觀ルニ、未ダ徠翁ノ如ク名賢ノ稱ニシタルヲ見ズ。六朝ノ間名理ノ勝（スグ）レタルヲ名勝ト云フコトアレドモ、名

理ヲ講ズルコト今ナケレバ名勝ノ字今ニ用フベカラズ、余故ニ字ノ訛リトス。

鎮西竹君、損軒先生高弟也。予自ニ少小一欽三先生之名籍ニ甚寰中一矣。是歳君訪ニ予草堂一。是歳ハ今茲ニ作ルベシ。是歳トハ今年ト云フコトニ非ズ。是事ノ有リシ歳ト云フコトナリ。上ニ是歳ノ事ナク鎮西竹君云云ト書キ出シ、次ニ是歳ノ字ヲ突出スルコト華人ニ決シテ無キコトナリ。東坡ガ後赤壁賦ニ是歳十月之望ト書キ出セシハ、前賦ノ壬戌之秋七月既望ニ對セル是歳ナリ。徠翁是歳ノ用法ヲ辨知セズ。故ニ是日ノ用法モ亦辨知セズ。

是日集ニ西臺侯邸一。上ニ一字ノ句モナク是日ノ字ヲ突出ス。若シ華人ニ看シメバ上ニ闕文アラント疑フベシ。偶華人ノ題ニ是日ト突出ニ似タルアレドモ、是レ必ズ旅途紀行ノ詩ニ非レバ前詩ニ因リテ云フ。中郎集ニ是日新晴ト云フアリ。前詩ノ花朝和ニ坡公韻一ニ對シテ是日ト云ヘバ、卽チ花朝日ノ事ナリ。其詩ヲ讀ンデ自ラ知ルベシ。殊ニ二詩トモニ同韻ニシテ一字ヲ異ヘズ。是日ノ花朝ノ日タルコト明ケシ。又長洲ノ吳文定ガ匏庵集ニ雪中李世賢招ニ觀東坡淸虛堂詩眞蹟一ト云フ題アリ。次ニ是日往觀。果刻本。蓋世賢招飮恐ニ客不ㇾ至、故紿爾。乃復次ㇾ韻ト云フ。次ニ是日世賢持ニ啓南雪嶺圖一索ㇾ題。復次ㇾ韻ト云フ題アリテ、三詩同韻ナリ。是日卽チ前ノ雪中招觀ノ日ナリ。徂徠ノ如ク徒ニ突出スルコト華人ニ於テ決シテナシ。

南郭集ノ題ニ薩人日高翁七十初度、或見レ屬以ニ和歌題一。題已不レ可レ入レ詩。惟翁壯ニ遊諸州一、又知ニ古禮一善ニ和歌一。時秉ニ藩職于東都一。因賦ニ海鶴篇一爲レ壽。コレ文理屬セズ。或ノ字最モ穩妥ナラズ。大意和歌題ニテ詩ツクレト屬セラレタルヲ、和歌題ニテ詩ハ作ラレヌト云フコトナレドモ、不文ユヱ日本人ニハワカレドモ華人ニハワカラヌナリ。先ヅ入レ詩ト云フコトヲ會セザルナリ。入レ詩トハ詩ノ句中ヘ作リコムコトナルニ、題已不レ可レ入レ詩トハ何ノ言ゾ。題ガ何故ニ詩ニ入ルベキ。已ノ字モ甚ダ穩ナラズ。惟ノ字ハ啓表尊上ニ用フル字ニテ平交詩題ニ用フベキ字ニ非ズ。藩職、藩臣ナドハ諸侯ノ天子ニ事フル稱辭ナリ。然ルニ倭習脫セザルユヱ、藩職ヲ藩ノ職ト覺エラレシハ殊ニ文盲ナリ。

奉レ酬ニ泉侯見レ寄作一。遊ニ蓮光寺一奉レ和下卓上人答ニ徳夫一作上。樂山公子席上奉レ和ニ見レ贈之作一。酬下箕山君秋夜登樓見ニ寄懷一之作上。奉レ和ニ猗蘭侯席上見レ贈作一。コレ南郭ガ文章未熟ノ破綻ナリ。華人ノ題例ヲ推スニ、立春作。九日作。罷レ相作。代レ內作。荊州作。還ニ湖中一作ナドハ、我ガ作ノ時ハ之ノ字ヲ入レズ。又他人ノ作ナレバ、和ニ江進之寒山寺之作一。和ニ散木登高之作一。答下右史憶ニ故園一之作上。答ニ殿卿潞河旅次見レ憶之作一ナドト之ノ字ヲ入ルルガ一定ノ法ナリ。南郭ハ之ノ字ヲ或ハ入レ或ハ省イテ一定セズ。是レ己ガ臆ヨリ妄意ニ筆ヲ下シテ華人ノ文法ヲ明ニセザル故ナリ。

若シ他ノ詩題ニ作ノ字アレバ之ノ字ヲ入レヌコトナリ。和ニ某新年作。和途次某地作。和某遊ニ某地作ノ類ナリ。南郭ガ之ヲ知ラザルハ徠翁ヨリシテ然リ。徂徠集ニ奉和豫侯憶諸子作。コレ之ヲ入ルベキ處也。徠翁己文章ニ暗キコト此ノ如クニシテ護園隨筆ヲ著シテ、附錄ニ伊藤仁齋、釋玄光ガ文章ノ謬誤ヲ論辯ス。所謂五十歩ニシテ百歩ヲ笑フナリ。

傳通院同ニ諸君遊。コレ倒錯ナリ。是ニテハ傳通院ガ諸君ト同遊セシヤウナリ。同ニ諸君遊傳通院トスベシ。若シ遊ノ字ヲ省イテ傳通院同ニ諸君トスレバ、傳通院ニテ諸君ト同ジク詩ヲ賦シタルコトニナツテ語ヲ成ス。李惟寅ガ白雪齋集ニ碧雲寺、同ニ陳仁甫太史、康裕卿、朱汝脩二山人トアルヲ観ルベシ。

九日同登ニ少林院上方。同ジク登ルトハ誰人ト同ジク登リシニヤ、華人ノ題例ニ未ダ嘗テ同ジウセシ人名ヲ擧ゲザルコトナシ。近ク南郭ガ宗祖タル于鱗ガ詩題ニ九日同ニ殿卿登ニ南山トアルヲ始メ、諸名家ノ集ミナ此例ナリ。南郭ヒトリ兎角ニ同ジウセシ人名ヲ擧ゲザルコト多シ。同遊ニ少林院。春日同弔ニ梅兒冢ナド、誰ト遊ビ誰ト弔セシヤ、文理コレヨリ屬セザルハナシ。是モ例ノ倭習ニテ同ジクト云ヘバ人ト同ジクセシハ知レタル事ナリト、杜撰ニカタヅケラレシコトト見ユ。

早春歸德命ㇾ駕。余時遊二江東一不ㇾ在。壁上見ㇾ留二一詩一。和以寄謝ノ詩ニ、慙愧君來逢二磬歡一。蕭條四壁草堂寒。留題但是陽春調。轉恨含ㇾ杯相和難。題引ノ謬ハ含イテ論ゼズ。詩中ニ愧ト恨トノ用處ヲ謬ル。他行ノアトヘ來ラレシユヱ歡ヲ罄サザルハ憾ムベシ愧ヅベキ謂ハレナシ。又蕭條四壁ノ句ヲ見ルニ草堂ノ寒ヲ愧ヅルヤウナレドモ、已在宅セバ貧寒ユヱ罄歡サレヌコトヲ愧ヅルモ尤モナレド、家ニ在ラズシテ逢二罄歡一タルナレバ、貧寒ユヱ罄歡サレヌトハ云ハレヌナリ。又陽春調ノ和シ難キハ愧ヅベシ恨ムベカラズ。若シ轉ノ字ヲ自ノ字ニ換フレバ稍猶可ナリ。含ㇾ杯ノ含ハ銜ニ作ルベシ。含銜同ジクフクムト訓ズレドモ、銜ハクハヘルト譯スベシ、含ハクハヘルト譯スベカラズ、故ニ用處各異ナリ。華人銜ㇾ杯、啣ㇾ盃ト用フレドモ、未ダ含ㇾ杯ト用ヒタル例ナシ。杯ハ銜スベシ含スベカラザレバナリ。サレバコソ含ㇾ情、含ㇾ笑ト云フコトアリ。銜ㇾ情、銜ㇾ笑ト云フ例ナシ。

とある。以上煩を厭はず引用した所によつて、ほぼ和習といふものの一斑を明にし得たと思ふ。因つてこれから本題に入り、德川時代の漢文の狀況を述べることにする。

齋藤拙堂の拙堂文話に、「本邦文章日隆。元祿勝二元和一、享保勝二元祿一、天明寬政勝二享保一。此後更進、東海出二韓昌黎、歐陽廬陵一未ㇾ可ㇾ知也。」とある。この言は德川時代に於ける漢文の趨勢を遺憾

なく說明し盡してゐる。余のこれから述ぶる所も要するに此言を敷衍するに過ぎないのである。南川金溪の閑散餘祿に、「吾國慶長元和ノ頃ハ兵戈ノ餘ニテ學問ノ道大ニ衰フ。京師ノ中ニ四書ノ素讀ヲ教フル人モナカリシトナリ。ソノ頃惺窩先生一人學ヲ講ジ後生ヲ教フ。門人ニ豪傑多ク出ヅ。コレヨリ學問大ニ開ケテ今ノ盛ナルニ至ル。先生ノ功誠ニ偉ナラズヤ。其時代ハ兵亂ノ中ニテ甚ダ書ニ乏シ。先生カネテヨリ十八史略ヲ見ント欲スレドモ、コノ書ヲ持テル人ナシ。後ニ角倉與市ガ許ニテ借出シ繕寫セラレシトナン。又圖書編ヲ林道春ノ買求メラレシ由ヲ聞及バレ、再三書ヲ以テ貸シ與ヘヨト請ハレタレドモ、其事ナシト僞ツテ終ニ貸サザリシトナリ。此二事ヲ見テ書籍ノ不自由ナリシコト想ヒヤラレタリ。」とある。德川時代初期の學問の狀態がこれでよくわかる。藤原惺窩、林羅山等慶長元和の際に崛起し、幾多の不自由困難を凌いで學問の基礎を築いたのであるが、所謂篳路藍縷以て山林を啓くで、識見の高邁、記覽の浩博は洵に畏敬すべきものであつたが、その自ら作る所の漢文に至つては、和習滿々たるもので、吾妻鏡一流の和文ともつかず漢文ともつかない鵺的文章の域を脫すること一等と謂ふ程度であつて、一言を以て之を蔽へば佶倔聱牙、冗漫蕪雜であつた。慶長元和頃の文章はかくの如きものであつたのである。尋で木下順庵、伊藤仁齋、貝原益軒に至つて一段の進步が見られた。拙堂文話に、「貝原益軒、伊藤仁齋、並元祿以上人、當時文章之道未レ開。然其集中往往有レ

可レ觀者一。不レ可レ不レ謂二豪傑之士一。」と云つてゐる。更に降つて慶長元和を距ること百年、室鳩巢、荻生徂徠が出て始めて漢文らしい漢文が書けるやうになつた。されば拙堂も、「室鳩巢、物徂徠出、扶桑之文始雅矣。」と云つてゐる。鳩巢、徂徠は並に元祿の人である。拙堂の所謂「元祿勝二元和一」ものである。

徂徠は清濁幷せ呑む雅量と當時比肩する者なき文才とを抱いて、明の李王（李攀龍、字は于鱗、滄溟と號す。王世貞、字は元美）の唱へた古文辭に惑溺し、害毒を流したのは所謂功罪相掩はざるものである。古文辭とは畢竟模擬剽竊である。試にその方を述べんに、先づ秦漢以前の古書を讀んで奇險な語句を平生記錄して置いて、自分が文章を作る時には其等の語句を綴り合せて、一篇の文章を作るのである。かの李攀龍は白雪樓を構へ、文を作る時は獨り此樓に登り他人の登るを許さず、稿を脫しないうちは樓を降らなかつたといふ。これは心を擾されるのを怖れるからではなくて、抄寫（ヌキガキ）などをとりちらした不體裁を人に見られるのを憚かつたからである。かくの如く古文辭とは古書の險詖なる語句をつきはぎして一篇の文章を作るのであるから、敍事記事の文或は傳記銘贊の類は篇を成すことが容易であるが、議論文になると困難を感ずる。因つて徂徠は「文章は修辭を主とし議論に渉るべからず。修辭の中より意を達するを文の要とす。」といふ說を立てた。（那波魯堂の學問源流、江村北海の授業編、山本北山の作文率、作文志彀等參照。）徂徠の敍事に長じて議論に短なるはその爲で

ある。

徂徠が古文辭を唱へ始めたのはいつ頃のことか明瞭でないが、蘐園雜話に、「徠翁ノ方ニ人來リテ庫一ツニ盈書籍ヲウル者ノ候。購タマヒナンヤト問。價百六十金ナリト云。徠翁予求ムベシトテ購ハレタリ。家器武具ヲバノコシ、大カタハタタミヲモアグルホドニシテ、金ノ不足ヲ排物ニシテヤラレタリ。其中ニ種種ノ書物アリタル由詳ニ子廸宇佐美灊水の字。ヨリキク。子廸ハ物子ノ方ニ十七八ノ比居タル由。尤其購ハレタルハ徠翁卅九カ四十歳ノ由、子廸物ガタリナリ。ソレ故徠翁殊ニ書ニ富ミ、其中ニ李王ガ集モアリテ古文辭ヲ脩スルコト、ソレヨリナリト聞タリ。」とある。この話は宇佐美灊水の古文矩序にも書いてあるから蓋し事實であらう。さうすると元祿寶永の頃であるが、寶永四年に安藤東野が太宰春臺に寄せた書簡にも、近頃徂徠の門に在りて古文辭を脩する由を述べてあるから、先づ元祿から寶永頃と見て間違ないやうである。徂徠の峽中紀行の猿橋の條の如きは模寫精細を極め愛誦措く能はざる名文であるが、古文辭などといふ邪道に陷つて害毒を天下に流し、伊藤東涯の所謂鬼面人を嚇するやうな文章を書いたのは惜むべきの至であつた。徂徠は寶永六年、四十四歳の時江戸日本橋の茅場町に居を移し、因つて蘐園と號した。蘐園派の文章としては服部南郭、山縣周南は學殖も淺からず言に根柢があるが、平野金華以下は、學問がないので、李王集中の語を剽竊したに過ぎない。ひと

り安藤東野は、その作る所の蘐園隨筆序を觀ても實に堂堂たる文章であるが、惜いかな短命であつたから、その大成を見ることが出來なかつた。大典和尚は、「蘐園ノ徒中文章ヲ善クスル者ハヒトリ東壁（東野の字）ノミ。」といひ、拙堂は、「藤東野在二徠門一、才識迥出二於等輩一、非下終身守二李王一者上矣。惜乎不幸短折、不レ見二其變一也。」と云つて惜んでゐる。太宰春臺も徂徠の高弟であるが、晩年には古文辭の正道にあらざることを悟り、文論を著して、「今吾黨の學者纔に筆を弄することを知れば卽ち古文辭を言ふ。其文を觀るに乃ち古人の成語を抄し之を聯綴するのみ、文理屬せず意義通ぜず。」と評し、之を罵つて糞雜衣と呼んだ。「糞雜衣とは浮屠氏が塵塚から拾ひあげた種々の布帛を洗濯裁割綴緝して作つた衣のことで、錦あり繡あり繢あり綺あり羅あり綾あり繻あり縉あり縞あり絹あり布ありといふ有樣で、その斑爛は眼もあやであるが、能く〳〵見れば精麤駁雜、卽ち文理がないから、何が何やら譯のわかつた物ではない。」と云つてゐる。かくて別に一機軸を出したが惜むらくは才氣に乏しい。鳩巢は徂徠とちがつて唐宋の正統を傳へたもので、支那の方でいへば歸震川の立場に立つたものであるが、未だ篇法も整はず字句にも瑕疵を存し、大雅の文とは稱し難かつた。

徂徠が古文辭の旗幟を飜して天下に呼號してから、燎原の勢を以て津津浦浦にひろがり、六七十年の間天下を風靡したが、それもいつしか下火になり、更に一轉機が動いて來た。卽ち安永、天明の際

に至り山本北山、中井竹山、中井履軒等が眞向から古文辭を攻撃し始めた。山本北山は家産が裕であつたので、常に奇書を購求しては博覽を矜つた。安永八年、作文志彀、作詩志彀の二書を著して古文辭を排撃し、文は韓柳を主とし詩は宋詩の清新を範とすべきことを主張した。併し北山、竹山は所謂破壞者であつて建設者ではなかつた。古文辭の弊を除くには成功したが、文章の新體制を樹立するには、後の寛政の三博士の力に待たねばならなかつた。

寛政の三博士とは柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里を謂ふ。この三人が出て始めて雅馴な文章が書けるやうになつたのである。柴野栗山は天明八年、五十三の時幕府に召されて昌平黌教官となり、幕命を受けて林述齋、岡田寒泉等と學制を改革し、異學の禁を斷行し、時の學者をして皆程朱の說を奉ぜしめた。尾藤二洲は寛政三年、四十七の時、召されて昌平黌教官となり、文教の振興を圖り學制の統一に努めた。古賀精里も同じく寛政三年、四十二の時、召されて昌平黌教官となつた。いづれも當時文教に大功績があつたから之を寛政の三博士と謂つたのである。賴山陽は三博士の文章を評して「柴公ハ奇ニシテ俊、劉公（古賀精里の先祖は漢の靈帝の後裔であるから劉氏といふ。）ハ正ニシテ博、尾公ハ則チ雅潔簡遠、文各其人ノ如シ」と云つてゐる。まづ三人の中では栗山を第一、二洲を第二、精里を第三とすべきであらう。栗山の文は疵は多いが議論人の意表に出で、筆力縱横、一瀉千里の妙がある。精里の文は疵は少いが命意多くは

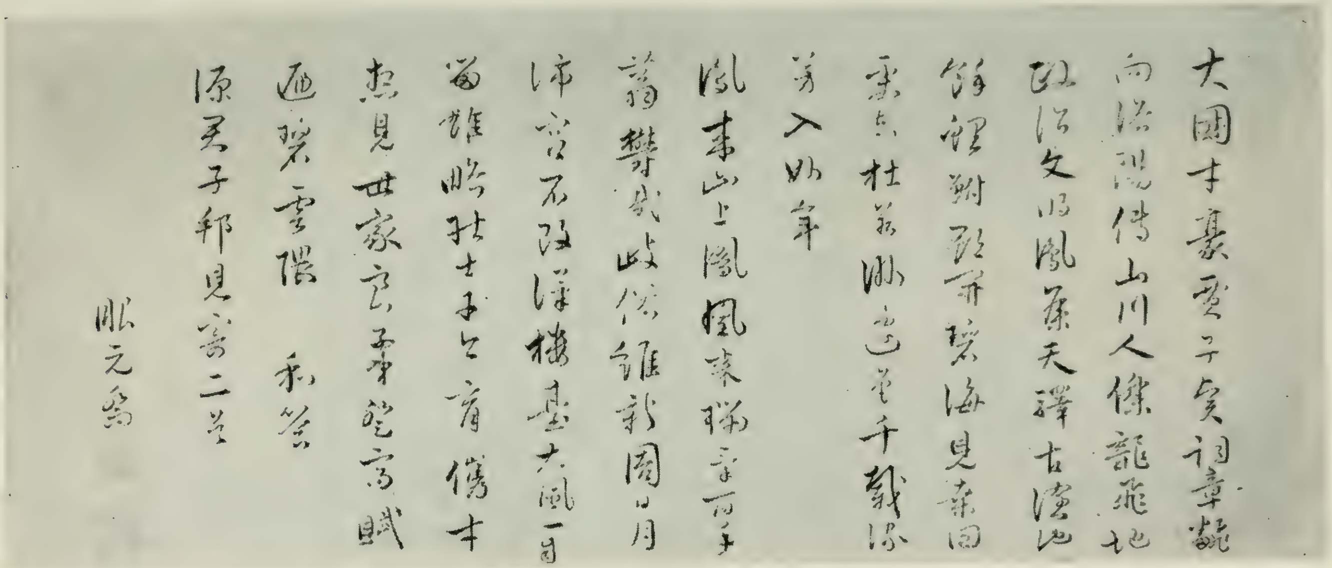
經義より出で、千篇一律の嫌がある。これが所謂天明、寛政勝二享保一ものである。

三博士より稍後れ文化、文政頃には江戸の佐藤一齋、京都の賴山陽を東西の兩大關、安積艮齋を東の關脇、齋藤拙堂を西の關脇と見るべきであらう。一齋の文章は精錬整齊を以て勝り、一字一句も苟もせぬ風がある。それだけ又堅苦しくぎごちない感がないでもない。そこへ行くと山陽の文は徹頭徹尾才子の筆である。その文章に對する態度は、どこまでも單に支那の模倣を以て足れりとせず、日本人の漢文たらしめようといふ意氣がある。卽ち漢文を日本化しようと心懸けた。故に山陽の文章にはワザと一種の和習と見るべき字句を用ひたものもある。ここが山陽の文に於て貴ぶべき處で、單なる模倣は奴隷的態度であるが、さうした態度に甘んじなかつた所が貴いのである。長川東洲の日本外史文法論に、「外史書スル所ノ官名人名、概ネ皆天下公行通用ノ文字ニ依ル。所謂本色ヲ留ムルコトナリ。樂翁公ニ上ル書ニ自ラ論ジテ云ク、名實按レ跡可レ知トハコノ謂ナリ。此一着亦子成（山陽の字）ノ卓識ニシテ既ニ以テ此間千古文人ノ陋習ヲ打破スルニ足レリ。」といひ、「外史語言ヲ寫ス處極メテ吾邦ノ本色ヲ存セント要ス。故ニ俚言俗語ソノママヲ直用ス。平氏記中ノ公而可レ憎（俗語のツラノ憎イ奴ダといふ意。）源氏記中ノ長袖者（公卿を罵る語）九郎之貳舞（九郎判官義經の二の舞。）野猪而（ニシテ）介（スル）者（猪武者の意。）足利記中ノ今日在レ人、明日在レ我（けふは人の身あすは我が身）ノ類是ナリ。」といつてゐるのは此間の消息を語るものである。されば山陽自身も、「邦俗語ノ如キ却ツテ直

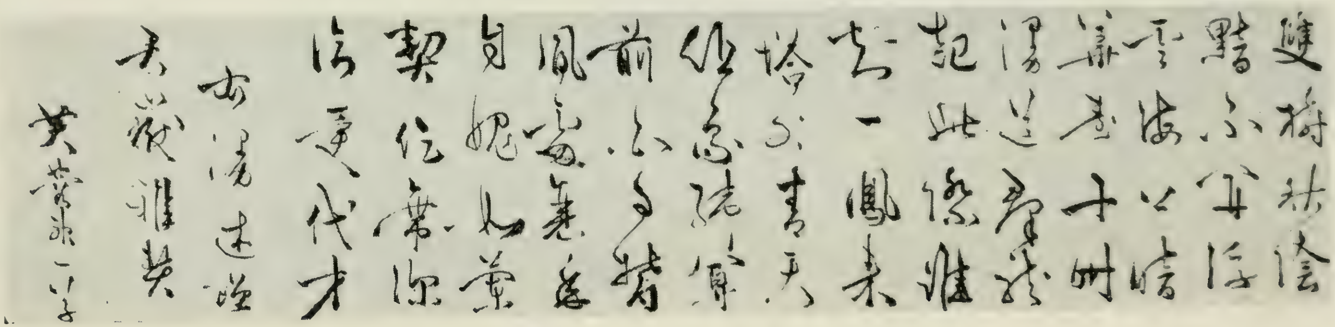
チニ用ヒテ本色ヲ見ルニ足ルモノアリ。凡ソ此レ權度精巧ナルモノニ非ザレバ與ニ語ルベカラズ。」と云つてゐる。山陽は敍事に長じ一齋は議論に長じ、各旗鼓相當ることは甲越二將の對峙して相下らざるに比すべく、山陽の才氣縱橫、神出鬼沒は、あつぱれ文壇の謙信で、一齋の正正堂堂、一絲亂れざるは信玄の陣法に酷似してゐる。一齋、山陽以後、漢文を作ることは益〻進步した。之に次ぐ者は松崎慊堂であらう、慊堂は經學に邃く說文に通じてゐたから、措辭冗漫に失せず、字句精錬にして古色饒きは一齋、山陽と雖も或は一籌を輸するであらう。その門下から出た安井息軒、鹽谷宕陰は其師に優るとも劣らぬ名手であつて、息軒は經學に邃く諸子に通じ文章に於ても傑出してゐた。宕陰は少年の頃山陽の門下にゐたこともあるので、その感化に由るのであらうが、最も史學文章に秀でてゐた。信夫恕軒の恕軒漫筆に、「余日本八大家文讀本を編纂せんと欲す。その人は則ち柴野栗山、佐藤一齋、賴山陽、齋藤拙堂、安積艮齋、安井息軒、鹽谷宕陰、篠崎小竹、以上八人之を正篇となす。尾藤二洲、中井履軒、柴野碧海、坂井虎山、長野豐山、齋藤竹堂、藤森弘菴、林鶴梁、以上八人之を續篇となす。」とあるが、穩當の見と謂つて宜しい。續いて川田甕江、中村敬宇、重野成齋、三島中洲などが出て漢文を書くことは益〻達者になつた。甕江の文は歐陽修の風があり堂堂として氣品が高い。敬宇は洋學にも通じてゐたので、其文にも洋學を採り入れた痕迹がある。その人物が篤實の君子であつたの

で、その文章も渾厚和平で曾南豐、唐荊川の風がある。成齋の文は悠揚迫らず典雅跌宕の趣を具へ、一齋、山陽を凌駕してゐるが、難をいへば措辭を重んじて構想に略なる憾がある。中洲はこれと反對に結構に巧であつて字句に疎である、先づ王安石といふ所であらう。

以上徳川時代の漢文の趨勢を、成るべく主觀に囚はれず、獨斷に流れないやうに、務めて古人の説を參考して略敍したつもりである。もつと作例などを擧げて評論すべきであるが、遺憾ながら作品にまで論及することは出來なかつた。

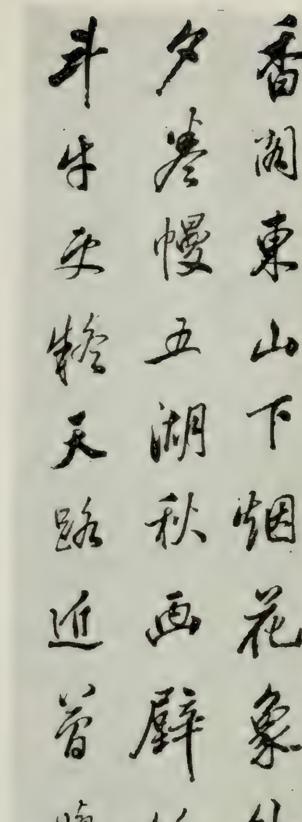


服部南郭筆蹟（高野辰之氏藏）

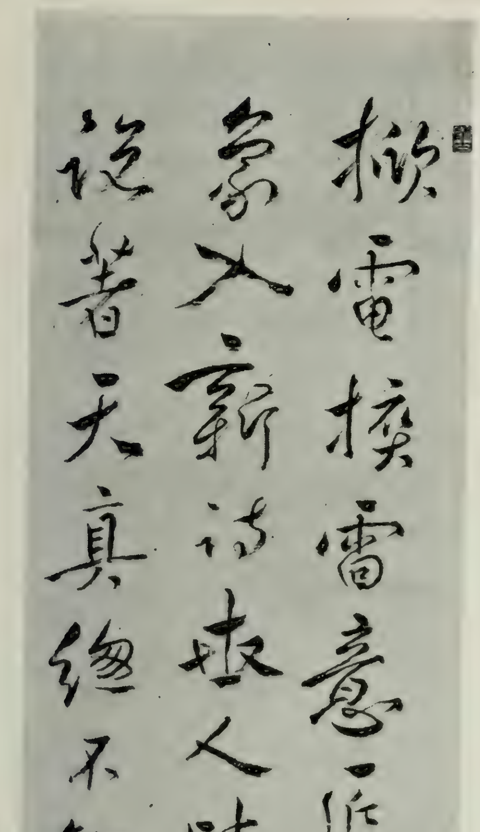


萬庵筆蹟（高野辰之氏藏）

市河寬齋筆蹟（高野辰之氏藏）



山梨稻川筆蹟（高野辰之氏藏）



# 徳川時代の漢文學（其二）

## ——詩の變遷

前川三郎

林道春が程朱學を以て徳川家康に仕へて其の顧問に備はるや、學校を興したり散逸して居た古書の蒐集出版に盡したりした結果、道學は蔚然として興起し、戰國殺伐の餘習は忽ち一變して、上は卿大夫から、下は士庶人に至るまで、道を知り禮を談ずるに至つた。然し文學の方面を眺めて見ると、全くの荒蕪狀態で、江戶開府後八十年許も經過した頃に至つて漸く文學らしい文學が世に現はれるに至つたのである。今文章の方面は別項に讓つて、余は詩の方面に就いて變遷の梗概を記すことにする。

徳川時代の詩は大體之を四期に區分して見ることが出來る。其の第一期は慶長から貞享まで約八十年で、之を草創時代とする。第二期は木下順庵、荻生徂徠が相次いで世に出でて唐詩を鼓吹した時代で、年代から云へば元祿から天明まで約百年で、之を唐詩時代とする。第三期は寬政より文政まで約四十年で、釋六如、市河寬齋の徒の盛に宋詩を提唱して、明詩の流弊を矯正せんとした時で、之を宋

詩時代とする。第四期は天保から慶應に至る約四十年で、梁川星巖が玉池吟社を建てて、再び唐詩を唱へて實は清詩を鼓吹した時代で、之を清詩時代とする。かくの如く區分はしたけれども、其の間には全く別の徑路を取れる詩人も無論少くは無かつたのであるから、其の時代の人は、皆其の時代の詩風に化せられて居たとは無論斷言出來ないのである。左に此の各時代に出た詩人と作品とに就いて其の詩風の梗概を檢討して見よう。

## 第一期　草創時代

**藤原惺窩**　惺窩の學問傳記は別章に詳かであるが、其の詩は卑俚淺薄で未だ詩人の冠冕とするには足らない。一體初期の諸學者は皆專ら經學を攻めたもので、意を詞章に留めなかつた。故に往々作る所は有つたけれど、多くは語錄の如く、和歌の如くで、濂洛の風雅に非ざれば、五山蔬筍の餘香といふ狀態であつた。惺窩は間出の質を以て不傳の學を紹ぎ、斯道を旣墜に揭げ、來學を無窮に啓いて、其の功は誠に偉大であつたが、當時は文運始めて兆したばかりで、未だ融合の域に達して居ないので、其の詩は前述の評を免れないのである。其の後詩道日に昌に月に熾になり、元祿以後に至つて始めて其の盛を極めたが、是は氣運の然らしむるもので、獨り人力のみに由るものでは無い。且始めて

作る者は力を爲し難く、繼いで起る者は功を爲し易い。三牲八珍の美に飽きたりとて、汙尊抔飲の始を忘れるべきでないから、茲に其の一首を錄して、詩運の由つて興る源を示すこととする。

大原訪二豐臣長嘯一賦示

君是護レ花花護レ君、有花レ君此地久留レ君。入レ門先問花無レ恙。莫レ道先レ花更後レ君。

**林羅山**　羅山の文章事功は別項の如くである。其の詩文を作るや、筆を揮ふこと飛ぶが如くで、千言萬語立ちどころに成つた。明暦乙未朝鮮の使者兪秋潭が江戸辭去の前一夕、扶桑壯遊百五十韻の詩を寄せて賡和を求めた。羅山は重病で病牀に在つたが、夜間口づから之に次韻し、男春徳をして之を筆錄せしめ、曉に至つて脫稿したので、一字を改めずに使を走らせて之を秋潭に贈らせた。小田原驛で追及して之を渡すと秋潭は大に驚いたと云ふ話もある。然し氣運に拘せられて、未だ當時の陋習を脫する能はず、往々後輩の譏刺を招いたが、若し之が元祿享保の文運丕闡の時に際したならば、其の造詣は測知し難き者が有つたであらう。

十六日登二日光山一

老晩强扶爲二此遊一。仰瞻木末峙二宮樓一。雲間黑髮笑二何事一。山不二白頭一人白頭。

奉レ同三三品羽林君追二和昌黎春雪詩一

二月歳辛卯。凍翎雁未レ歸。蓂開十一葉。雪花白繞闈。始使ニ越犬吠一。漸似遼鶴飛。東皇行在所。皚皚拂ニ青旂一。豈唯履無レ聲。屋後埋ニ垣衣一。玉兔滴ニ陰氣一。金母生ニ水妃一。絲絲亂ニ碧空一。墮レ自ニ織女機一。春風吹ニ華顚一。悔レ不レ覺ニ昨非一。紛霏疑ニ晩梅一。豈意若レ是幾。高歌雷可レ發。布鼓我吟微。

**石川丈山**　初期に於いて詩豪と稱すべきものは石川丈山と僧元政に過ぎる者は無い。丈山其の名は凹、初名は重之。字は丈山、六六山人と號し、三河の人。其の出處は餘にも有名である。武有り文有り、隱操も亦卓然として居て、寛文十二年九十の高齢を以て歿した。洵に偉人と謂ふべきである。其の詩仙堂は京都の名勝として今も猶保護せられて居る。丈山は惺窩に學び最も詩に長じて居た。專ら唐詩を首倡し、開元大暦を以て宗としたのは卓識であるが、氣運未だ熟せず、其の作は其の言に副ふ能はざる恨が有つて、韓人權侙の稱して「日東李杜」と謂つたのは溢美を免れないが、眼四海を空しうする物徂徠が之を稱して「東方の詩傑」と爲したるを見ると、凡流に非ざることは明白である。

題ニ石不動壁一

晩山幽靄裏。一徑入ニ林丘一。僧去鎖ニ松戸一。寥寥筧水流。

重陽雨

籬邊濕レ帽山間雨。秋色使ニ人思ニ孟嘉一。貧似ニ淵明一詩未レ似。羞將ニ白髮一對ニ黄花一。

### 幽居卽事

山氣殊ニ人世一。常含太古情。四時雲樹色。一曲澗泉聲。雨濕鶯衣重。風暄蝶袖輕。爲レ詩雖レ至レ老。未レ使ニ鬼神驚一。

**僧元政**　名は日政。字は元政。妙子と號し、石井氏。近江の人。幼にして穎悟、典籍を好み山水を樂み、祝髮して日蓮宗に歸し、戒律堅固、瑞光寺を京都の南深草の里に創して之に住した。性至孝で、故郷の老母を迎へて菴側に養ひ、其の孝敬を盡した。寛文八年寂す。年四十六。其の詩は韻格は高くないが風神清幽、意義平實で、丈山に優ること一等である。

### 對レ燈

病來耿不レ寐。對レ燈背ニ佳月一。影暗呼添レ膏。灼灼花新結。一從ニ我脫レ塵。喜與ニ故人一別。爾以ニ何因緣一。交久未ニ曾絶一。我少遊ニ宦路一。匹馬侵レ曉發。裳衣每顚倒。挑レ爾免ニ唐突一。乃至ニ童子戲一。相會蘭盆節。紗籠列ニ橫竿一。貪レ多誇自悅。稍長好ニ讀書一。爵祿總不レ屑。晝奔夜偸レ閒。獨照恆兀兀。壯年自爲レ僧。掩レ室探ニ理窟一。我雖ニ貧且窮一。未レ至レ聚ニ螢雪一。蕭然長作レ爾。不レ覺ニ癯人レ骨。我矢續ニ微焰一。終身忘ニ休歇一。變作ニ慧光明一。永劫亦不レ滅。

### 竹葉庵十首

屋前竹葉垂。屋後竹葉隔。屋上竹葉覆。中有㆓愛㆑竹客㆒。
一葉一天地。一庵一葉閒。凡夫及㆓賢聖㆒。總在此中閒。
我觀㆓竹之心㆒。草木之空者。我觀㆓竹之形㆒。幽人之友也。
其性淸且和。非㆑木亦非㆑草。箇中足㆓歲寒㆒。猶餘一束藁。
身輕如㆓飛葉㆒。竹葉似㆓扁舟㆒。汎㆓彼太虛裡㆒。隨㆑風自在浮。
自㆑有㆓世界㆒來。卽已有㆓此竹㆒。自㆑有㆓此竹㆒來。此葉終不㆑禿。
一枕短椽下。淸風葉葉涼。恐人添㆓曲節㆒。莫㆑遇㆓蔡中郎㆒。
吾廬無㆓夏日㆒。竹葉翠長寒。瓶水時移㆑影。絕勝月下看。
山庵不㆑見㆑塵。竹葉無㆓今古㆒。何須引㆓羊車㆒。長當幽人戶。
節中卽是空。葉上卽是色。色空本一如。我向㆓者裏㆒匿。

**村上冬嶺**　名は友佺、字は漫甫、那波活所の門人。醫を業とし、寶永二年卒す。年八十二。性好學、最も詩を善くし、新詩を獲ると之を扇子に題して諸人と評推し、少しく穩かならぬ文字が有ると、濕紙を以て之を拭ひ去つて、更に好字を塡した。又先達を推奬し、後進を掄揚し、時に佳句有れば擊節嘆稱、吟誦數回に及んだので、一時藝苑は之に賴つて氣を吐いたと云はれて居る。今冬嶺の詩

を讀むに、精深工整、前輩に超出し、元和以後の七言律は此に到つて始めて其の體を得たと言へるのである。

梅花

名園桃李競二嬋娟一。獨自清寒倚二竹邊一。東閣題レ詩人動レ興。西湖載レ酒鶴迎レ船。點レ苔欲レ效霏霏雪。傍レ柳偏含淡淡煙。何處金笳明月下。曉風咽斷更悽然。

秋夜宴二伏見某樓一

秋入二水鄉一鳴二荻葦一。壯遊不レ用賦二悲哉一。豐城劍氣衝レ星起。北海樽酒乘レ月開。萬頃鷗沙呑二楚澤一。千帆賈舶泝二蓬萊一。此翁矍鑠人爭說。物色行看到二釣臺一。

小集席上作

青樽歲晚思難レ禁。共見頭顱霜色深。忼慨堪レ收燈下淚。低垂姑任世閒心。愁邊一笑比二雙璧一。老後分陰重二寸金一。薄宦身閒亦天幸。淸時莫レ作獨醒吟。

## 第二期 唐詩時代

**木下順庵** 名は貞幹、字は直夫、順庵又錦里と號し、平安の人。幼にして神童の稱有り、松永昌三

の門に入りて學業大に進み、天和二年幕府の儒員と爲り、元祿十一年卒した。年七十八。初期に於いて石川丈山等二三の碩士が唐詩を首唱したが、氣運未だ到らず、舊習未だ袪かなかつた。順庵の出づるに及んで、專ら唐を以て宗としたので、白石、鳩巢、南海、南山、芳洲等の才人皆其の門に萃り、彼唱此和、鏗金鏘玉、殆ど開元天寶と隆を比するに至つた。徂徠が「錦里先生者出。而扶桑之詩皆唐矣。」と云つたのは溢美の言では無い。

春　月

團團春夜月。纔上忽還低。稍泛蕙蘭夜。暫輝桃李蹊。雁聲香霧外。花影畫欄西。莫レ恨更籌短。秋光奈ニ慘悽一。

秋日瞻ニ拜丁祭一。

禮生敍立儼ニ威儀一。笙鼓堂中奠獻時。簠簋豆籩三代典。溫良恭儉百王師。泗源德澤恩無レ極。闕里流風文在レ玆。皜皜秋陽何可レ尙。扶桑永照萬年枝。

**新井白石**　名は君美、字は在中、號は白石。江戸の人。三歲字を寫し、六歲書を誦し、既に長じて器資宏偉、洽聞多識、順庵に從ひて學び、順庵の薦を以て甲府の德川家宣に仕へ、家宣の將軍と爲るに及んで從ひて幕府に仕へ、眷遇最も盛んであつた。享保十年卒し年六十九。其の詩は格調太だ高

く、才藻富贍、優に唐賢の壘を摩した。惜むべきは近體に偏して稍古氣に乏しかつたことである。

九月四日答二北藩室直清一和二中秋韻一

玉露凋二梧葉一。秋風墜二井欄一。劍鳴龍氣冷。書斷雁聲寒。北塞浮雲隔。西窗落月殘。黄花催二節序一。爭耐異鄕看。

登樓王粲賦。久客獨憑レ欄。夙志青雲隔。高歌白石寒。薜衣禁二夜冷一。蘭佩惜二秋殘一。相憶人如レ玉。長留二月色一看。

春日追二悼恭靖先生一八首 折三

五雲縹緲望二蓬萊一。仙鶴孤飛天上回。白足神僧知二異相一。烏臺御史惜二奇才一。衡門久向二東山一臥。樽酒還從二北海一開。珍重安車馳二魯邸一。春秋直筆待二君裁一。

文采風流自一家。才名自レ小動二京華一。朱門客對金罍酒。白社僧烹石鼎茶。鷲嶺月明尋二桂子一。龍門浪暖問二桃花一。舊游題處皆陳迹。誰拂二紅塵一護二碧紗一。

江城忽見柳條新。追二憶當時一一慘神。季札未レ歸先葬レ子。曾參不レ娶復終レ身。落花還似門中市。芳草猶餘坐裏春。可レ恨孤墳荒野外。杜鵑聲哭異鄕人。

**室鳩巢**　名は直淸、字は師禮、鳩巢又滄浪と號し、備中の人。順庵の門人。初加賀侯に仕へ、後幕

府の儒員と爲り、將軍吉宗の統を繼ぐや、擢んでられて侍講と爲り、享保十九年卒した。年七十七。鳩巢の詩、古風は沖澹、時に見道の言が有り、近體は高華雄整、嘉靖隆慶に追步し、長律は最も雅にして頗る才力を見して居るが、但聲律多く乖いて瑕瑜掩はざる恨がある。

歸　田

自三始從二官役一。無三日忘二丘山一。矧伊桑楡景。値二我將老年一。魚躍不レ襄レ陵。獸挺宵在レ淵。達レ性少レ所レ宜。歸耕南野田。隣並八九家。屛レ跡白雲閒。晨出隨二衆後一。暮還居二人前一。團團遠村樹。荒荒近市煙。牛羊日夕下。返景在二山顚一。醉臥東軒下。愉悅在二自然一。

空　堂

楊子談レ經處。空堂秋氣淸。窗明知二葉落一。庭靜見二苔生一。終日少二塵事一。四時唯鳥聲。幽期常稱レ意。不レ負古人情。

立春日早朝公所路中作

蓮府潭潭晝漏長。玉階仗下散鵷行。天開二霞彩一河山麗。春入二梅花一雨露香。白髮羞レ看新曆日。靑衫好換舊衣裳。方知寬政行二時令一。從レ此陽和沛二四疆一。

**祇園南海**　名は瑜、字は伯玉、號は南海。紀伊の人。木下順庵に師事して天資英雋、文藻卓絕、尤

も詩を善くし、寶暦元年卒した。年は七十五。南海は才氣横溢、一世を不可とする風が有つた故に、其の詩は豪放奇麗で、塵俗齷齪の態無く、縱横太だ過ぎて、間〻繩墨に乖くものが有るけれども、而も飄逸喜ぶ可しである。其の源は青蓮より出でて、而して鍛錬の未だ至らざる者である。垂裕堂の詩後に題して「漢魏氏變風也。杜甫氏變雅也。李白大雅韓奕常武惟肖。初唐正雅、時有二頌聲一。余故曰騭レ俗莫レ如二太白一、變レ野莫レ如二初唐一。」と曰つて居る。之に由つて其の詩風を見ることが出來る。

### 金龍臺

忽傾三百杯。直上金龍臺。不レ窮二千里目一。何消萬古哀。下視天下士。賢愚渾塵埃。名利良微物。鐘鼎非二我才一。匹夫抱レ璧良其罪。禍福徇レ人因二自媒一。朝取二封侯一夕爲二魚肉一。躡珠之客爲レ誰來。牢耶石耶何纍纍。土山漸臺作二死灰一。況復我生非二松喬一。白日西飛難二再回一。百年開レ口一大笑。身後鴻名何在哉。當レ歌意氣乍奔逸。傍人莫レ怪玉山頽。唯願手弄雲間月。萬古千秋照二金罍一。

### 望二士峯一

不死之山迥出レ群。影涵二滄海一雪紛紛。芙蓉倒照中天月。芝草長生萬古芸。瑤闕夜寒銀漢宿。香爐曉霽紫煙分。何當三絶頂御レ風去。披二讀玉書金簡文一。

天東一柱鎭二神州一。悦望瑤臺白玉樓。雷雨乍過雲半腹。海風不レ散雪千秋。壯觀始傳宋濂唱。仙跡

空留徐福舟。君釣二巨鰲一持寄レ我。載來三島與二十洲一。

**雨森芳洲**　名は東、字は伯陽、號は芳洲。平安の人。木下順庵に學び、其の薦を以て對馬に筮仕した。寶曆五年卒し、年八十八。其の詩は彫琢を事とせず、頗る自然に近く、驟に之を讀めば甚だ佳ならざるに似たるも、細嚼すれば餘味が有る。嘗て詩を論じて、「凡詩出二天才一者、藹然有二自然之意一。讀レ之使二人心爽神怡一。若夫安排摹擬而後得者。雖レ曰二巧妙一。終令二人厭倦思一レ睡。故予案上所レ置詩集。以二陶淵明一爲レ首。李杜爲二第二一。韓白第三。東坡爲二二之下三之上一。優游詠二吟於其間一。不レ知二老之至一。」と云へるに由りて其の意を窺ふことが出來る。

寄二祇南海一

吾黨祇夫子。激昂元不羈。窮レ年唯有レ酒。開レ口便成レ詩。聲擧龍門竝。襟懷鮑叔知。轗軻今尙爾。李廣未レ爲レ奇。

簡二友人一

君自二西京一幾日到。淸標曾向二夢中一看。關河馳レ馬孤雲度。風雨隨レ身一劍寒。混レ俗多年雙眼白。論レ交此處寸心丹。滿杯綠酒須二相勸一。知己相逢從レ古難。

**伊藤東涯**　名は長胤、字は原藏。號は東涯。仁齋の長子。經術湛深、行誼方正、粹然たる古の君子

で、克く家學を繼述し、元文元年卒した。年は六十七。東涯は經學文章に於いてのみならず、詩も亦和平典雅。一時の鉅匠である。世人動もすれば之を譏つて、冗雜にして法格無しと云ふものもあるが、之は其の集を善讀せぬ爲に生ずる謬見である。

感述一首

天道惟陰陽。地道乃柔剛。人道何乎在。仁義提二厥綱一。配レ之以二禮智一。民紀賴以張。遵レ行無二賢愚一。四達乃康莊。所二以名曰一レ道。終古孰得レ亡。惟昔三代隆。政敎日月明。上行下斯效。時雍四國匡。周道已陵遲。功利說猖狂。吁嗟彼暴棄。怠放罔二自强一。亞聖學斯切。指示此心良。惻隱及二羞惡一。辭讓是非彰。凡民莫レ不レ有。賢者能勿レ喪。此乃道之端。何曾待二商量一。充レ之道斯有。藹然覃二八荒一。譬如二寸苗穉一。參レ天竟蒼蒼。聖徂宗盟渙。斯文屬二亡羊一。遺經雖二徒存一。墜緖轉茫茫。秦火漢黃老。金狄隨跳梁。虛談習自レ晉。詞賦盛二于唐一。天啓玆宋室。五緯聚煌々。碩儒時勃興。六籍爰表章。奈何矯過レ直。主レ靜其說長。乃曰性卽理。方寸萬象藏。其初具面靜。蠱明具五常。利欲汨二厥天一。明鏡翳二之光一。用レ工自レ是異。唯要祛二其障一。先子夙耽レ學。抱レ擾敎二家鄉一。壯歲窮二理奧一。精微析二毫芒一。恍然疑二其非一。將レ升二鄒魯堂一。幸賴二天之蠱一。發揮說亦詳。嗟予嘗趨レ庭。膚學愧二面牆一。徒爾述二遺訓一。庶幾傳二書香一。

春日雨中

家無㆓聽事堪㆘旋㆑馬。門有㆓清泉可㆘濯㆑纓。好樹當㆑窗常輸㆑綠。異禽馴㆑砌不㆑知㆑名。一場春夢涵㆓花影㆒。六尺藤牀濕㆓雨聲㆒。不㆑信長安城裏住。過㆑牆蜂蝶自㆓柴荊㆒。

**桂山彩巖**　名は義樹、字は君華、號は彩巖。江戸の人。林鳳岡に學び、幕府に仕へて祕書監と爲り、寛延二年卒した。年は七十二。其の詩は、整麗は白石に近く、高華は南郭に過ぎ、跌宕は蛻巖に似、圓秀は林退省に勝つて居たが、重厚にして名に近づかぬ爲に、名を成さずして終つたのは惜しむべきである。

八島懷古

海門風浪怒難㆑平。此地曾屯十萬兵。金鏑頻飛魚鼈窟。樓船空保鳳凰城。偏憐朱紱結㆑纓死。無㆓復青衣行㆑酒生㆒。不㆑識英魂何處所。月明波上夜吹㆑笙。

宮車一去帝王洲。大海風雲寄㆓冕旒㆒。井底有㆑緣還㆓玉璽㆒。水濱誰復問㆓膠舟㆒。舞姬紈扇隨㆑潮下。飛將彫弓學㆑月流。那識寒煙衰草外。幾人曾倚望鄕樓。

**梁田蛻巖**　名は邦美、字は景鸞、號は蛻巖。江戸の人。人見鶴山に學び、尤も詩に工であつた。新井白石は妄に人に容さなかつたが、獨其の才を異として之と交つた。人と爲り細行を謹まない爲、官

游を遂げなかつたが、後明石侯に仕へて優待せられ、寶暦七年卒した。年は八十六。其の詩に對する意見は屢改まり、格調も變じ、嘗て自ら言つた、「初學レ宋、歐蘇而旁放爲二簡齋一、中年學レ唐、祖二禰李杜一、緣飾以二錢劉諸家一、又退學レ明、甘爲二王李銀鹿一、亡レ幾爲二袁中郎一、爲二徐文長一、而遂以二初盛唐一爲二表準一、弇州濟南爲二門戸一。」と。是は實錄である。其の集中に在つては七古と五排が最も巧妙を極めて居るが、惜しい哉古風は韻法頗る疎で、近體は聲調の失粘も少くない。

### 寶劍篇

嵩陽道士本豪雄。呪二制神龍一盤二匣中一。一朝化爲三尺劍。夜光衝レ穹氣如レ虹。蒼硎磨レ刃花文粲。朱袂拭レ脊鵜膏融。天造超然人寰表。驚二殺吳冶一泣二越工一。深山猛虎魄忽沈。冥梁古魅吻自瘖。吾將三佩レ之託二壯志一。珧室銀檑炤二寶鐔一。五陵年少爭問レ直。不レ論千金與二百金一。平生未二敢容易試一。願使三一揮轟二古今一。君不レ見將軍黃鉞鎮二戎衣一。不レ有二王愾一觀者稀。又不レ見材官蹶張六鈞弩。昔爲二鼷鼠一發二强機一。由來用レ武威如レ許。茲物亦須レ養二玄威一。佞頭姦腰不レ足レ斬。還恐血腥汚二靈輝一。

### 寄二題宜明居士寂照庵一

看レ月欲レ登天柱峯。滿山雲霧幾千重。歸來夜半涼風起。月在柴門南畔松。

**荻生徂徠**　名は雙松。字は茂卿。別に蘐園と號した。初程朱の說を奉じ、後一家の見を立てて性理の說を痛擊した。又明の李王の說に倣ひて古文辭の說を唱へたのは享保元年五十一歲の時の事である。元和以來文運始めて開けて儒士輩出し、絃誦稍盛なりしも、詩文に至つては尙五山禪僧の陋習に循ひ、萎靡振はざりしが、徂徠英邁の資、桀驁の才を以て、刻勵揣摩して別に手眼を出し、大聲疾呼して以て後進を誘掖したので、海內風靡して、文體爲に一變した。其の功は偉大である。其の詩は粗率の弊は有れど、一種通邑痛快の處があつて、當時の諸子は殆ど及ぶことが出來ない。唯家を成すに急であつた爲に、前賢を輕視して好んで異說を立て、之に附和する徒、又從つて之を鼓して浮誇放蕩の蔽を長じたので、歿後未だ久しからずして攻者四集、殆ど完膚無きに終つたのは洵に惜しむべきことである。

贈二墨君徽一歌

古墨子悲二染絲一。今墨子何所レ悲。」家有氷蠶五色繭。繰成苦欲レ補二袞冕一。」越人斷髮竟何往。爲レ之棄置恆怏怏。」肆レ力遂讀書五車。摩レ頂放レ踵豈有レ佗。」九流往往莫レ所レ擇。雅愛嗟爾過二阿翟一。」近築二五言長城一出。吾學公輸雲梯術。」九攻九退無二間然一。斂レ手逡巡稱二爾賢一。」吁嗟哉今墨子眞墨子。古今人相去其間不レ以レ咫。吁嗟哉古今墨子何所レ悲。吾悲今人徒貴レ耳。」

### 夜泊

解レ纜大江千里秋。漸看檣上夕陽收。青山向レ暝留二漁火一。白浪漫レ天渺二客舟一。擬下受二長風一望中北斗上。俯憐明月在二中流一。不レ知今夜宿二何地一。且傍二清光多處一浮。

**安藤東野** 名は煥圖、字は東壁。東野と號し下野の人。儒を以て柳澤侯に仕へたが、二十九歳で官を辭した。東野は徂徠に師事して才氣煥發、加ふるに刻苦淬勵を以てしたので、其の鴻文鉅藻は既に藝苑の魁となつたが、惜しいかな劬勞の爲に喀血の疾に罹り三十七歳を以て歿した。徂徠が下館侯に與へた書に「以二渠之才之學一、而假レ之以レ年、豈不佞之所二能及一哉、天貧レ之、要レ之、又奪二之年一、加以レ無レ後、何甚毒也、不佞亦免二喪予之嘆一乎。」と云つたのを見て、其の後繼者として囑望したことの如何に深かつたかが分るのである。

### 牛門同觀二萬庵禪師與レ人詩一次韻却寄

高枕何人得レ似レ君。岧嶢鷲嶺此離羣。危樓秋俯千帆雨。大海朝分四壁雲。路阻雙林殊未レ入。詩成十喩但空聞。遙憐紅樹吳江色。岸幘誰看白日曛。

化城高據二海天一開。無レ那風塵不二一陪一。馮レ閣賈帆過レ磴去。卷レ簾驚浪吐レ山來。潮音近繞安禪室。花雨爭零說法臺。秋色偏知薜衣好。看吾雁塔署名回。

夢滿匡廬百尺樓。側身西望白雲愁。衣珠曉掛林間月。海霧朝迷天際舟。人道虎溪辭二酒客一。誰知彭澤愛二緇流一。秋聲獵獵菰蒲動。或恐山陰有二子猷一。

**服部南郭**　名は元喬、字は子遷。南郭又芙蕖館と號し、平安の人。十六歳、柳澤侯に仕へ、三十四歳にて致仕し、帷を下して教授した。其の學は之を徂徠に得て、才氣俊拔遂に詩文を以て一世の山斗と稱せられた。人と爲り風流温藉で、藝苑の士、皆之を仰慕した。年既に老いて、同社の宿老、凋謝して殆ど盡きたる後に、巋然として獨り存して居たので、名望は益重く、寶暦九年六月、七十七歳を以て歿した。其の詩に就きては錦天山房詩話に「南郭天才秀潤。加レ旃風流洒落。照二映於一時一。是以赤羽之聲。薰二灼於四方一。海內翕然推爲二詩宗一。無二復異議一。以二片山兼山之學之識一。尙至下採二其詩一而附二古詩十九首等後一。以敎中兒輩上。可三以見二當時尊崇之至一矣。近日詩風大變。專以二清新空靈一爲レ宗。唾二棄此種詩一。斥爲二僞體一。每擧二黃金白雪一以爲二笑具一矣。今遺集具在。其得失可二得而議一焉。蓋其五古樂府過二於摸擬一、七古換韻無レ法。近體拘二束於聲調一。不レ得二大馳騁一。應酬牽率、排比支綴、體裁雖レ合、意興索然。乏二變化一故也。虛心論レ之、當時之稱許、固爲二太過一、今時之矯レ枉、亦未レ爲レ得レ中、如舍レ短取レ長、則縱使不レ得二冠古之絕才一。亦不レ失三卓然爲二一名家一也。」と云へるもの允當な批評である。南郭が李王の詩風宣傳の手段として唐詩選を刊行したのは享保九年で、徂徠の李王を首倡したの

は享保元年である。爾來水村山郭唐詩選を讀まざる者無く、以て今日に至つたのであるから、其の遺風の遠き寧ろ驚嘆に値すといふべきである。

鎌倉懷古七首 折二

高臺昔日散二黃金一。入幕賓僚滑水潯。朽骨人傳豺虎亂。舊丘僧守歲時心。羣山草木隨二榮瘁一。大海波濤變二古今一。漁父樵童歌未レ畢。泫然不二啻雍門琴一。

百年挾レ主據二鎌臺一。大盜幷存仁義才。後苑宴酣天狗舞。前庭鬪罷旅獒來。一朝膏肉沾二青草一。九世城池委二赤灰一。寶戒寺邊松柏裏。風含二鐘磬一至レ今哀。

**僧萬庵** 名は原資、品川の某寺に住し、後退いて芙蓉軒に居る。其の詩は李王を摸して尤も能く逼肖し、南郭と名を齊しうし、徂徠以下の推稱措かざる所のものであるが、晩年は專ら宋詩を好んで頗る放翁の風格を得た樣である。

十月梅花篇擬二唐盧僎一

君不レ見南中繇レ古多二梅樹一。十月花開如レ翦レ素。驚見芳菲氣候殊。不レ知雨雪年華莫。巴山之曲更紛披。峽發南枝又北枝。撲レ面邊風飄二馥郁一。傷レ心寒月照二葳蕤一。凋零時亦隨二巴水一。巴水東流千萬里。遠客遙思洛水湄。初冬雪落飛二花蘤一。香街繡陌舞初輕。綺邸紅樓凍不レ成。翡翠簾前看作レ月。

驊騮蹄下蹴飛レ瓊。此時對レ雪誰遙憶。邊地看レ花獨感惻。雪裏笙歌聲過レ雲。花傍牢落淚懸レ臆。
三栽稽留巴水隈。何年何月故鄕回。洛陽城裏看二飛雪一。翻說梅花十月開。

懷古八首　折一

楠公雄略鼓二風雷一。可レ惜中興綱紀頹。臺嶺偏裨勞二百戰一。攝川旌節不二重回一。鬼神未レ測韓彭策。
天地空生管葛才。海上孤碑爭墮レ淚。年年春雨洗二靑苔一。

**僧大典**　名は顯常。近江の人、業を宇士新兄弟に受け、研鑽怠らず。此に於いて名聲大に振ひ、海內推して巨匠と爲した。其の詩は才贍に思精にして、風神淸遠、音響遒亮、絕えて浮華險陂の弊が無い。然れども其の文に比すると少しく遜色有るを免れない。

始登二愛宕山一

幾歲京華望二白雲一。登臨此日向二晴曛一。秋風淅瀝蒼林合。石路縈廻丹壑分。下界人家連二縹緲一。上方仙閣倚二氛氳一。一從二靈境能披對一。始解孤情不レ可レ羣。

**秋山玉山**　名は儀。字は子羽、玉山と號し、熊本の人。林鳳岡に從ひて業を受け、業成りて本藩時習館の提學と爲る。藩老以下皆待つに師禮を以てした。玉山の學は極めて該博を尙び、門戶を建つるを欲せず、古文辭に工にして、其の詩を作るや一字も苟もせず。若し穩かならざる者あれば、沈思累

年、稿定つて後に之を發表した。故に其の詩は經營揮灑、頗る變化の妙を極め、歌行は最も琳琅誦すべく、一氣孤行して、獨り生面を開いて居る。蘐園門外の異彩と稱すべきである。

蓮光精舍觀二少年騎馬圖一引同二密上人一賦

高僧手披駿馬圖。高僧口吟駿馬詩。駿馬軒然坐隅立。觀者寒生愕且疑。身長八尺矯二於龍一。屹若二秋色生二孤峯一。錦衣少年玉爲レ面。如レ月雕弓撚二銀箭一。自矜騎戰功絶倫。鳴珂欲レ朝未央殿。渭橋東南蹈二殘雪一。流水芳艸堪二嚼囓一。數聲驕嘶楊柳陰。一汗淋漓桃花血。目中千里雲霍霓。蹄間三尋電滅沒。忽疑西極馱レ經臻。猶憶北庭著レ鞭折。不二唯良工畫逼レ眞。又是高僧詩入レ神。今日詩畫爭二神駿一。知爾支遁是後身。世上黃金撑二北斗一。嘆息無二復市レ骨人一。君不レ見傅巖下磻溪前。夢卜寥寥草如レ烟。我願明王御二此馬一。春風日日問二遺賢一。

**江村北海**　名は綬、字は君錫、北海と號し、播磨の人。弱冠に比ぶまで學を知らなかつたが、梁田蛻巖は其の作る所の俚謠を見て其の才を愛し、勸めて學ばしめた。北海大に感悟して日夜研鑽、手卷を釋かず、終に能く成立し、文學を以て宮津侯に仕へ、侯の郡山に轉封後致仕して對梢館を平安に築き、翰墨を以て自ら娛み、諸侯の聘問は一切謝絕した。其の歌詩は往々孱弱の弊無きに非ざれども、聲名遠邇に傳播して、慕悅するもの甚だ多く、才俊の士の其の門より出づるもの亦少く無かつた。

殊に其の著の日本詩史は其の類を絶する者である。天明八年二月七十六を以て卒した。

自華蓋山至天龍寺途中訪田雨龍

對門松山碧。知是處士家。流水繞牆細。脩竹拂簷斜。側見植菊塢。參差已著花。主人出揖客。上堂禮逾加。盤飣庭前栗。鼎煮園後茶。淳樸存古道。轉覺城市賒。況亦好翰墨。新詩爛如霞。吾亦倦遊者。耕讀固所嘉。願言求薄田。從君植桑麻。此計或難就。低回徒咨嗟。

客中聞雁

客舍蕭條早掩扉。寥天更聽雁南歸。月明遙共砧聲落。風起偏兼木葉飛。紫塞十年誰寄信。金閨獨夜淚沾衣。總緣鄉國煙波闊。爲汝回頭舊釣磯。

## 第三期　宋詩時代

**片山北海**　名は猷、字は孝先、號は北海、新潟の人。家世〻農を業として居た。十八京師に出でて宇士新に學び、後大阪に卜居した。人と爲り閑靖寡欲で、人と競はず、澹雅自ら樂しんだが、岸和田侯の聘に應じて韓客接待の役に從事して居た。岡元鳳、葛子琴、頼千秋、尾藤志尹、田子明、篠安道と混沌社を結びて清新の詩教を鼓吹し、推されて其の盟主となり、寛政二年六十八歳を以て歿した。

同賦ニ早春登ニ江樓一

孤客年年不レ得レ歸。度レ江梅柳又春輝。美人南國愁中草。高士西山貧後薇。書劍天涯惟涕涙。鶯花城外自芳菲。暮鴻送盡烟波遠。獨倚ニ樓頭一歌ニ式微一。

**葛蠹庵** 名は張、字は子琴、蠹庵と號し、浪華の人で、醫を業とした。最も詩を善くし、片山北海の混沌社に入りて、名聲大に振ひ、宋詩鼓吹の先聲を爲したのは此の人である。寛政中卒するや友人は私に檜園詩老と謚した。

與ニ同人一登ニ金剛山一途宿ニ北山元章家一分レ韻得ニ行字一

蓑衣蒻笠治レ裝輕。昨日同人計レ雨行。擬下向ニ千盤一弔中古蹟上。奚圖一屋逢ニ新晴一。既漂庭麥宜レ炊レ飯。未レ熟園梅試レ和レ羹。枕簟不レ同ニ曾宿夜一。巖風嶂月夢中清。

歸路値レ雨

片雲昏黑雨空濛。滿面催レ詩句未レ工。錦郡送來衣上霧。金臺吹落笠邊風。蛙聲帶レ鼓報ニ村近一。螢火兼レ燐照ニ路通一。半夜方纔歸ニ一屋一。主人先檢奚囊中。

**釋六如** 名は慈周、字は六如。近江の人、苗村氏。十一歳にして叡山に上つて祝髮し、善光院に住したが、故有つて籍を削られた。安永三年東叡法王の召を以て東叡山に來住し、法王の退老するや院

家を授けられ寵遇甚だ渥かつたが、師は性淸恬で、淸班に居ると雖も猶草莽に在るが如くであつた。最も詩を好み初は劉文翼（宮瀬龍門）に學んだが、後其の非を悟り、乃ち體格を更めて專ら陸放翁を宗とするに至つたので、海內の詩風之が爲に一變するに至つた。其の詩は古艶で蔬筍の氣が無く、頗る廣平の梅花を賦するに似たる者がある。詩僧中の傑出した者といふべきであらう。其の著葛原詩話は殊に有名である。菊池五山は詩話でないと非難したが、兎に角一讀すべき者である。

### 寶劍篇

我有二玉具劍一。鏤レ文曰二湛盧一。磨以二華陰土一。装以二崑山珠一。秋水碧二芙蓉一。淸風吹二髮鬢一。赤電時一拂。妖魅滅レ跡逃。願持獻二上國一。爲レ君斬二巨鼇一。左右短後衣。相レ之倅二鉛刀一。君王不二回眷一。積毀銷二黃金一。埋沒野田草。蛟龍徒悲吟。會有二張公察二斗牛一。珍重莫レ作二繞指柔一。

### 感遇

衲衣深媿混二簪纓一。恩遇仍容疎嬾情。馬待二王良一年已老。鶴逢二支遁一翅還成。松筠數畝生前計。
風月一囊身後名。悵望靑山歸未レ得。蕭條天地又秋聲。

**市河寬齋**　名は世寧、字は子靜、西野と號し、寬齋は別號である。上野の人。少にして昌平黌に遊學して學員長と爲つたが、柴栗山の學政改革に逢つて黜けられた。寬政三年富山藩校教授と爲りて在

職二十餘年、老を以て致仕して文政三年七月七十二歳を以て卒した。李王の僞唐詩を排擊して、宋詩を鼓吹し葛蠹庵、僧六如の志を大成したるは寛齋であるが、其の詩は力弱く幅窄く、時に纎佻に渉り、殊に其の當時の盛名に稱はず、其の遺集を讀む者は誰も失望せぬ者は無い。併し江湖詩社を結んで天明より文政に至る四十年間詩壇の權を握り、詩佛五山を陶鑄して海內の詩風を一變したる功は實に偉大である。

幽居

半生樂事在二園池一。秋後逍遙興獨知。水冷寒塘魚聚レ藻。日斜深樹鳥爭レ枝。爐香養就淸涼味。壺酒釣來幽淡詩。閑散自欣深得所。蒼顏四十未二全衰一。

東坡赤壁圖

孤舟月上水雲長。崖樹秋寒古戰場。一自二風流屬二坡老一。功名不三復畫二周郞一。

**菅茶山**　名は晉帥、字は禮卿、茶山と號し、備後の人。那波魯堂に從ひて朱子學を修め、京攝の名家と交つた。既にして家に歸るや家事を弟に委ね、黃葉夕陽村舍を築きて敎授し、來り學ぶ者頗る多かつた。阿部侯其の詩名の高きを聞き俸三十口を給して儒官に準じたが、文政十年八月八十歲を以て卒した。其の詩に就いては錦天山房詩話に「自三六如師唱二宋詩一、茶山繼起、詩風一變、其詩亦在二伯

仲之間一、賴子成贈詩云、唯許周公難二弟兄一、遠神獨覺幾籌贏、蓋六如專宗二劍南一、上溯二樊川一、茶山則間出二入韓蘇一、故縱橫勝レ此、而穩秀不レ及焉、其精錬蒼老、蓋道二人所一レ難レ狀、固屬二獨步一、然如下瞽僧叫二賣按摩一行等類上、涉二乎卑俚一者亦復不レ尠、如夫芟レ蕪擷レ英、可レ謂二一代鉅匠一矣。」といつて居るものが善く當つて居る。

龍盤

龍盤虎踞帝王都。誰見當時職貢圖。祭祀千年周雅樂。朝廷一半漢名儒。世情頻逐二浮雲一變。吾道長懸二片月一孤。懷古終宵愁不レ寐。城鐘數杵起二棲烏一。

開元琴歌西山先生宅同二諸子一分二賦席上器玩一余得レ此

雷珏之琴希代寶。見今珍藏在二何邊一。大和古剎富二古器一。不レ許世人容易看。千請萬懇誰開レ庫。源生奇士得二奇緣一。黝鬖半剝梅花斷。冰色偏昏流水絃。書曰於二九龍縣一造。開元十二乙丑年。此琴當代稱レ難レ得。何論五季二宋間。不レ意殊域萬里外。永鎖二凰象一在二荒山一。後千餘歲遇二知己一。如下將二峩洋一布中人寰上。余今對レ此心多感。長句不レ覺醉語顚。維昔李唐全盛日。歲修二鄰好一通二使船一。滄波浩蕩如二衽席一。生徒留學動百千。吉備研究盧鄭學。朝衡唱酬李杜篇。此時典籍多越レ海。豈止服玩與二豆籩一。一朝胡塵塞二道路一。彼此消息雲濤懸。鴉兒北歸郡國裂。白雁南渡衣冠殫。我亦王綱

一解紲。五雲迷亂兵燹煙。壇浦魚腹葬劍璽。芳野花草埋錫鑾。禍水有源言之醜。涓滴積成百尋淵。爾來豪右耽爭鬪。人枕銀冑席金鞍。文物灰滅無餘燼。鐘簴羊存屬等閑。娼妓淫歌將校帳。俳優戲舞王侯筵。最恨軍府創新式。衣斷雙袖頭免冠。雅變風變同一轍。時往事往誰追還。幸今昇平人好古。朝野往往出才賢。若敎淸廟陳瑚璉。重見薰風被山川。撫罷悵乎襲緑服。松聲斷續冬夜闌。

**賴山陽**　名は襄、字は子成、山陽は其の號。傳記は別項に詳である。茶山の後に接して起り、能く李王の餘弊を一掃し盡した功は實に偉大である。錦天山房詩話に、「享元之際、服南郭專唱李王體。主高華、率多浮響。而乏實際。末流之弊、卑痺猥凡、至明和天明而極矣。六如茶山務矯其弊。而力有未逮。山陽繼其後。才高學博。刻意韓蘇。魄力雄濶。最邃史學。故運用古事。鎔鑄剪裁。別開生面。七古排奡縱橫。沈欝頓挫。具有昌黎眉山之格律。近體亦精鍊雅健。聲調鏗鏘。寓綺麗於雄渾。實不忝近世之哲匠矣。」と云つて居るのは適評である。

詠史十二首　其二

復讐九世亦徒爲。業就磨崖未勒碑。袞職豈無周仲甫。箴言獨忠晉驪姬。蠶叢半壁開天日。劍璽三朝離國時。不憾陳生謬順逆。紫繩夙有彥威知。

倪文正公眞跡引

賴襄之家徒四壁。僅置破硯與二蠧籍一。却藏條幅長九尺。有明倪文正公跡。一詩八句句五字。墨色如レ漆入二絹理一。絹尾煌煌兩巨章。曰倪元璐太史氏。其詩贈二石齋一。書レ之示二仲謀一。石齋姓是黄。仲謀定名流。一幅聚二三賢一。每レ展正レ襟拜不レ休。憶昔大璫據レ國善類空。屠レ楊戮レ袁還礫レ熊。人亡邦瘁固其所。纔能枝梧有二數公一。思廟用レ公恨已晚。國勢一去難レ可レ返。親疾瀕レ死非レ不レ藥。陳レ力就レ列空蹇蹇。四面黄雲壓レ城來。烽火燭レ天天下垂。五堵一卒盡烏散。御衣血詔萬古悲。起整二衣冠一拜二北闕一。几上大書絶命詞。南都可レ爲死吾分。聊志二我痛一勿レ斂レ尸。其書想與二此幅一似。筆畫老勁無二媚姿一。渡レ海東來有レ意否。海若呵護辟二蛟螭一。襄也一見倒二囊橐一。奪來萬目徒眙瞪。錢謙益。張瑞圖。非レ不二善爲一レ詩。非レ不二工爲一レ書。納二媚閹豎一籍二逆案一。責二降仇讎一曳二長裾一。吾怪世人珍二手迹一。金鞮犀軸視二琳瑜一。吁嗟哉何二如我家四十字。字字忠魂毅魄之所一レ寄。

**廣瀨淡窗**　名は建、字は子基。號は淡窗。豐後日田の人。隱居して教授し、造鑄する所頗る多く、其の名一時に高かつた。其の詩は平淡の中に自ら精彩有つて、見るべきものが有つたけれども、其の弟の旭莊に比すると、一籌を輸する樣である。其の詩に對する意見は次に引く所の論詩の五古に依つて伺ふことが出來る。安政三年十一月七十五歳を以て歿した。子無く、門人矢野靑村を養ひて家を嗣

がしめた。

論レ詩贈二小關長卿中島子玉一

歌詩寫二情性一。實隨二民俗一移。風雅非二一體一。古今固多岐。作家達二時變一。沿革互有レ之。苟存二敎厚旨一。風敎可二維持一。昔當二室町氏一。禮樂屬二禪緇一。江都開二昭運一。數公建二堂基一。氣初除二蔬筍一。古漸滌二侏離一。猶是螺蛤味。難レ比宗廟犧。正享多二大家一。森森列二鼓旗一。優游兩漢域。出入三唐籬。格調務二摹倣一。性靈却蔽虧。里賸自謂レ美。本非二傾國姿一。天明又一變。趙宋奉爲レ師。風塵拂二陳語一。花草抽二新思一。雖レ裁二敖辟志一。轉習淫哇辭。楚齊交失矣。誰識烏雄雌。寄レ言關及レ島。更張良在レ茲。雞口與二牛後一。趨舍君自知。我亦丈夫也。李杜彼爲レ誰。誰明二六義要一。以起二一時衰一。

淡窗五首

明窗兼二淨几一。抱レ膝思悠哉。莫レ話人間事。青山入レ座來。

蕭瑟復蕭瑟。焚レ香細雨中。水沈烟一縷。不三肯出二簾櫳一。

幽花開二古柏一。寂歷映二軒楹一。山鳥來何處。聲聲自報レ名。

猗猗觿角竹。吐レ月又含レ烟。不レ妨長齋日。時參二玉版禪一。

已過松間逕。還尋竹裡門。來人不レ著レ屐。恐レ破綠苔痕。

**廣瀨旭莊**　名は謙、字は吉甫、旭莊又梅墩と號し、淡窗の季弟である。終身仕へず文久三年八月五十七歳を以て歿した。旭莊の詩は才氣横溢、變幻百出、長篇大作は五花八陣の奇を極め、而して片語單詞も亦雋永味ふ可きものがある。齋藤拙堂は之を評して「其構レ思若二泉湧一、若二潮瀉一、及下其發二口吻一、上中筆端上、若二馬之注一レ坡、若二雲翻一レ空、而風卷一レ葉、雖レ多不レ濫、雖レ長不レ冗。」といつて居る。兪曲園が東國詩人の冠冕と評したのも決して偶然でない。

除夜祭レ詩

我年十四初學レ詩。爾來二十六年役二神思一。寢而不レ眠食忘レ味。未レ至二强仕一鬢成レ絲。樂天長短三千首。我詩之數遠軼レ之。短篇二十字。長篇一千八百字有奇。世人多好趨二絕句一。誰觀二如レ是聱牙巨什一爲。千載子雲難二必得一。到底我詩唯我知。忽有二一我來箴一レ我。自二君耽一レ詩浩氣飢。書易禮樂久抛棄。烟花雪月日追隨。多少精神耗二無益一。何不三早悔二少壯時一。聞レ此慙恨容無レ地。欲下投二火中一棄中水涯上。又有二一我來諭一レ我。詩是舊交無二相遺一。君無三一事勝二庸衆一。君之爲レ君獨在レ玆。桃李無レ花同二樗櫟一。虎豹作レ鞟毋二乃癡一。外趨二道學一內行背。不レ如詩名千古垂。儒林文苑名雖レ異。要レ之學在レ不二自欺一。聞レ此我心還一變。欲レ棄欲レ存幾狐疑。又有三一我勸二中立一。或存或棄分二醇疵一。兩我所レ言有二偏頗一。一我所レ勸似レ無レ私。乃艾二蕪雜一棄二廿卷一。輯存二數卷一恰得レ宜。作レ詩

祭詩詔詩曰。久矣哉君之惑我敎我贏。既交之君吾不拒。未交之君吾將辭。明年丙午吾不惑。君欲惑我術難施。次年丁未吾未怠。遠君應如旨酒與妖姬。今日以往君無至。君至將捕付於丙丁兒。

丙午元日

除夕已作祭詩詩。詩來入夢述答辭。梅墩子梅墩子。與我絕交一何癡。讀否南華齊物論。天籟之說知不知。明鏡常應未曾倦。卮言日出無已時。達人所觀卽如是。何用抵死殫神思。無心作詩詩自至。譬如雲破明月現暑去淸風吹。有心作詩爲詩縛。譬如聚螢照闇室搖扇求微颸。梅墩子梅墩子。汝言千載子雲難得期。口雖云爾心則否。好名一念毫不衰。與其與我成契闊。不如與名相忘無所縻。興來一日百召我。我輒相應不遲遲。無興一年不召我。我永屛跡竄天涯。胡爲棄我舊來好。比以旨酒與妖姬。今後以我爲紅友。不至使君醉如泥。以我爲翠袖。不至蠱君爲畫眉。密于酒色淡于水。近之遠之莫不宜。我絕子乎子絕我。他日噬臍何可追。遽然危坐吾忘我。今之責余者爲誰。四顧尋索終不見。呼童出戶走跡之。童復命曰天方旦。應天門外萬人馳。公兮侯兮具鹵簿。峩冠衙雲肅威儀。夫子之門無人跡。又無紅刺貼門楣。賀客總向朱門往。君言有客吾誰欺。噫嘻嗚

呼我知矣。急掃二書室一具二酒卮一。呼曰今朝一年第一日。一家安穩百事熙。請先至者爲二上客一。詩忽告曰某在レ斯。

**山梨稻川**　名は治憲、字は玄度、號は稻川。駿河の人。才藻富麗、氣韻高邁、尤も五七言古詩に長じ、往々唐賢に迫るものがある。曲園は東國詩人中に在つて、首として一指を屈すべき者として居るが、本邦に在りては餘り名を知られなかつたのである。蓋し隱逸自ら喜びて名の售れんことを求めなかつたからである。業を陰山豐洲に受け、學成つて鄉里に歸りて教授し、晚年江戸に出でしが文政九年五十六歲を以て歿した。著す所に說文緯三十卷が有る。

題二竹邑子仙桃石一

嶽頂一拳石。實稟陰陽靈。烈火焚不レ變。古雪封二其形一。神物豈無レ待。天慳幾千齡。之子有二仙骨一。飛レ策攀二空冥一。披レ雲探二玉洞一。似レ摘白楡星。質比金母桃。才是東方生。歸來遊二人間一。懷袖彩雲馨。

山居十二首　折二

雲生自二翠微一。風起停二幽樾一。澗雨濯二林衣一。岩泉梳二石髮一。已忘抱甕機。閑拄看山笏。棊罷山翁歸。却愁樵徑滑。

盤礴解衣裳。横眠臥幽石。俯憐潭水淸。仰視山雲白。輕吹韻孤松。疎花點草席。皓鸞不可乘。聊爲採芝客。

**大窪詩佛**　名は行、字は天民、號は詩佛、其の家を江山詩屋と號し、神田お玉ヶ池に卜居し、老杜を祭つて詩聖堂と號した。初め市河寛齋の江湖詩社に入つて、淸新の詩風を鼓吹し、後又山本北山の孝經樓にも寓して、終に詩人と爲つた。常陸の人であるが、後には江戸に寓し、晩年には秋田の佐竹侯に筮仕した。書を善くし、畫を能くし、興に乘じて揮灑したものが頗る多い。其の詩は平易淸淡で、老杜に私淑すると言ひながら其の様子は無く、寛齋の首唱した宋の楊誠齋、范石湖、陸放翁を學んで、尤も楊誠齋に近い様である。兎に角李王の弊習を一洗して宋詩の時代を現出するには大に與つて力があると云へる。天保八年二月七十一歲で歿した。

題賴子成山紫水明處

山紫水明處。便是先生晩酌時。先生對山日酌酒。其意不在酒又不在詩。平生厭見俗人面。何如與山相對把酒巵。以山充舊識。以水充舊知。雖在鳳闕下。心與山水期。酒酣神王歌且唱。一曲平家古澹辭。山自無言水自和。淸於鳴玉切於絲。王侯螻蟻定何物。胸中萬卷定何爲。人生得意在知足。山肴野蔌風味滋。況有細君調羹巧。甘苦鹹酸與口宜。獻酬不

レ用別人侍。山與ニ家人一共掃レ眉。却覺少陵老子亦多事。呼ニ取鄰翁一本隔レ籬。

題ニ桐齋先生萬竹書堂一

曾聞秋城絕無レ竹。怪底萬竿繞ニ君廬一。觴ニ我其間一三伏日。清風謖謖生ニ坐隅一。又聞秋城寒威緊。洪河凍合及ニ太湖一。太湖周回三百里。洪河廣狹十里餘。氷合ニ水面一厚幾尺。來往直通馬又車。雨雪一冬積幾尺。埋ニ沒人家一家欲レ無。松檜強項終無レ恙。竹君顚頡凍以癯。先生養レ之有ニ何術一。使ニ凌氷雪一倍扶疎。不レ須更求ニ槖駝訣一。不レ須又閱ニ種樹書一。心誠求レ之儒者道。先生之術得ニ之儒一。儒之養レ民如ニ赤子一。延及ニ草木一宜ニ蕃蕪一。勿レ揠ニ其苗一勿ニ助長一。能得ニ其養一枝幹舒。養レ竹若用ニ養レ人術一。雪虐風饕胡爲乎。可レ憐世間養レ人者。芒芒助レ苗徒勤劬。何故置ニ人煦育裏一。逍遙自得我忘レ吾。先生今爲ニ學館長一。總ニ領諸儒一養ニ生徒一。才與ニ不才一得ニ其養一。因レ是襟懷同レ竹虛。猗猗綠竹濟濟士。養レ人養レ竹知一途。我願先生健ニ於竹一。長爲ニ國家一爲ニ楷模一。先生六十鬢猶綠。娟娟如レ竹竹不レ如。我來偶問平安信。對レ竹擧レ觴醉歡娛。胸中塵埃一洗盡。更覺爽氣逼ニ人膚一。

**菊池五山**　名は桐孫、字は無絃、娯庵と號し、又五山堂と號した。之は家貧にして篋中には唯白香山、李義山、王半山、曾茶山、元遺山の詩集を藏するのみであるから五山と號したのだと自ら云つて居る。五山は代々學者の家に生れ、殊に其の高祖耕齋は最も詩に長じて居た事は友野霞舟の熙朝詩薈

に特筆せられて居る。五山は寛齋の江湖詩社に學んだ俊才で、詩佛、如亭と伯仲の間に在つたが、詩才は詩佛に比して一籌を輸する樣であるが、香匳體の綺情を歌ふ點は遙に群を拔いて居て詠物は其の最も得意とする所であつた。二十一二の頃深川竹枝三十首を作つて忽ち詩名を博し、更に五山堂詩話を刻して大に成功した。晚年には、祖父の跡を續ぎて高松侯に仕へて地位の鞏固を增し、寛齋の後を承けて詩壇の主盟と仰がれ、嘉永二年六月八十一歲で歿した。

### 深川竹枝三十首 折五

結レ隊紅妝入二畫樓一。大娘押レ尾小當レ頭。對レ筵竝坐嬌無レ語。偏爲二生人一要レ學レ羞。
芳蹊宛轉傍レ池通。士女遊嬉約略同。芍藥叢邊相見笑。海棠花下笑相逢。
細草新裙相映宜。妙音宮畔踏レ青時。蘆芽一寸巧堪レ管。玉指摘來從レ口吹。
月落江頭半夜潮。船家艤レ艇候二歸橈一。女奴扶二得醉人一上。先點二毬燈一照二棧橋一。
淺畫二蛾眉一綰二髻烏一。紅妝紈綺趁二歡娛一。相逢總說青春好。不レ道羅敷自有レ夫。

### 春雁

霜雪經レ寒又及レ春。羈身慣得且逡巡。自知浪迹同二游子一。肯道心情類二逐臣一。湖上落梅香已褪。隴阴宿麥綠全勻。回レ頭爲謝雲霄侶。早晚相逢若霅濱。

## 第四期　清詩時代

**梁川星巖**　名は孟緯、字は公圖、號は星巖。美濃の人。十八鄕を出で、山本北山の奚疑塾に學ぶ。交る所は大窪詩佛、菊池五山、朝川善庵等皆一時の俊才であつた。後四方を歷游すること二十年、天保五年再び江戶に來り、詩佛の江山詩社に參し、神田お玉ヶ池の傍に卜居して玉池吟社を結び後進を指導した。岡本黃石、小野湖山、遠山雲如、江馬天江、鱸松塘等の如き維新後の詩壇の重鎭となれる人々は皆其の門下より出たのであるから、星巖は江戶時代詩壇の殿軍として氣を吐いたものと云ふべきである。其の詩は詩佛五山の宋詩を提唱したるに對し、歷代を博涉して、唐宋元は云ふまでもなく、明の高靑邱、李崆峒、清の吳梅村、王漁洋諸家の精華をも採擷して、清新の詩風を鼓吹し、他日三李堂一派の詩風の源を開いたのである。諸體兼ねて工なれども、殊に律絕に妙を得て居た。弘化三年江戶を去つて京都の鴨川の涯に卜居し鴨沂小隱と號し安政五年七十歲を以て歿した。

題二氷華吟館壁一十首　折五

芙蓉鏡水醮二明霞一。屋裏靑山座上花。隱逸夫妻王覇宅。神仙眷屬葛洪家。吟詩聲苦疑二秋蟋一。戲墨行疎似二暮鴉一。沖澹寡レ營聊復爾。人間無二此好生涯一。

豈止煙霞兄弟稱。游魚浴鳥亦同朋。半塘蘆葦秋聞レ雨。近水樓臺夜見レ燈。心無二多累一方歸レ道。頭有二殘毛一未二是僧一。借得一枝棲且穩。從他世路日凌兢。

玉溪錦瑟憶二華年一。廻レ首前塵眞惘然。幻相全歸無色界。殘魂仍戀有情天。清詞麗句張三影。淡黛低鬟鮑四絃。陶寫也知憑二妙手一。豪來連棹兩艞船。

茹レ毛飮レ血誰其始。玄古餘風傳至レ今。登レ俎吳淞千縷玉。落レ罾華六一刀金。調レ羹常在細君手。斫レ膾何勞名匠心。菰正堪レ嘗蒓未レ老。十分香味壓二華林一。

嗜好平生只縹囊。古書雖レ在古人亡。宣城霞綺弄二殘豔一。楚澤蘅蘘吹二賸香一。才子談レ兵唐小杜。列仙玩レ世漢東方。九原可レ作吾將レ與。空對二遺文一挹二異芳一。

**大沼枕山**　名は厚、字は子壽、號は枕山。尾張の人。菊池五山の門に入りて上客に列せられ、詩名大に著れ、下谷吟社を設けて後進を導き、星巖の江戸を去つて後は自ら詩壇の覇權を握つて維新後に及んだ。明治二十四年十月七十四歳で歿した。其の詩は曲園は白香山に近いと評して居るが、寧ろ陸放翁に近いといふべきである。其の詩論は次の詩を見れば知ることが出來る

送二彥之一

吾徒詩社不レ乏レ人。高材逸足皆絕倫。少年意氣賈二餘勇一。筆陣何嘗掃二千軍一。惜哉未レ能レ脫レ俗

好一。正門大路得者少。銅椀龍吟人人同。認レ僞爲レ眞拙爲レ巧。詩道似レ盛日以衰。正始之音有レ誰知。豈無二一三非常士。支レ顚扶レ倒在二此時一。鈴氏之子今才雋。騷壇卓識天所レ命。古人贈別必以レ言。我有二數言一子且聽。詩無二定法一意所レ屬。不レ要二疎宕一要二精熟一。不レ古不レ今成二一家一。枯淡爲レ骨菁華肉。俯仰天地皆新句。森羅萬象供二才具一。行雲流水無二粘筆一。生意活潑得二眞趣一。我告二吾子一盍止レ玆。子歸努力有二餘師一。

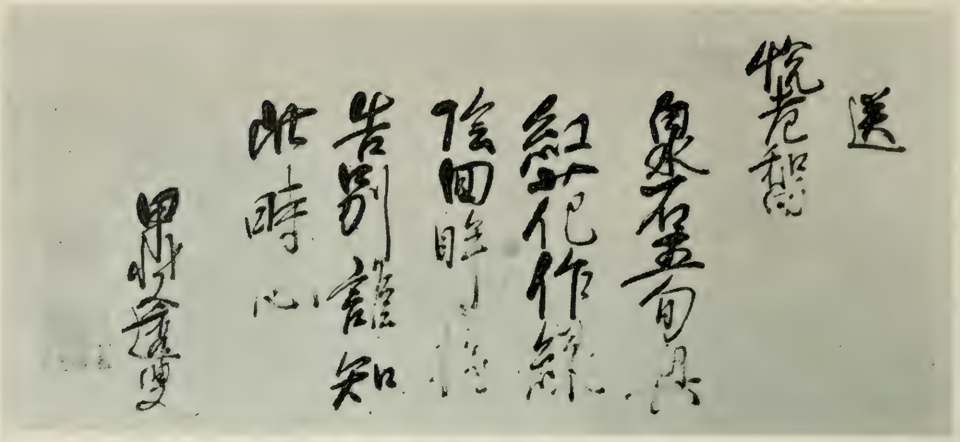
梅花次張船山韻八首 折四

瑩二於玉雪一膩二於霞一。開在二層厓一引レ望賒。樹已苔封蒼漠漠。枝仍竹亞秀斜斜。春寒飛燕肌無レ粟。天老逋仙鬢有レ華。恍訝優曇時一現。斯花不二是世中花一。

火食拋來太瘦生。誰爲レ友者聖之淸。殘冬已弄新姿態。今代猶含古性情。楚國大夫難レ著レ語。韓家公子早知レ名。花神自恃心如レ鐵。敢向二高樓一怕二笛聲一。

何代何人始證レ緣。槎牙一樹閱二千年一。書窗影臥認二窮士一。酒店韻高疑二謫仙一。氣滿二乾坤一應二自傲一。心存二鼎鼐一有レ誰憐。渠儂似レ惜長生訣。除二卻龜堂一妙不レ傳。

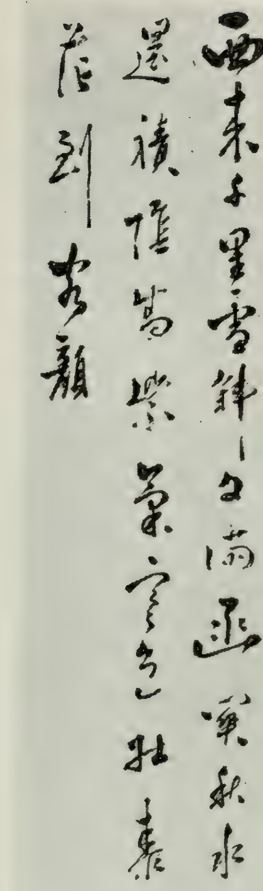
瓊林分種一枝枝。天到二梅邊一也有レ私。晴郭香浮飛鵲認。寒溪影醮浴鷗知。自レ非二此物孤高志一。何要吾曹冷淡詩。所レ惜周蓮與二陶菊一。只能同レ調不レ同レ時。



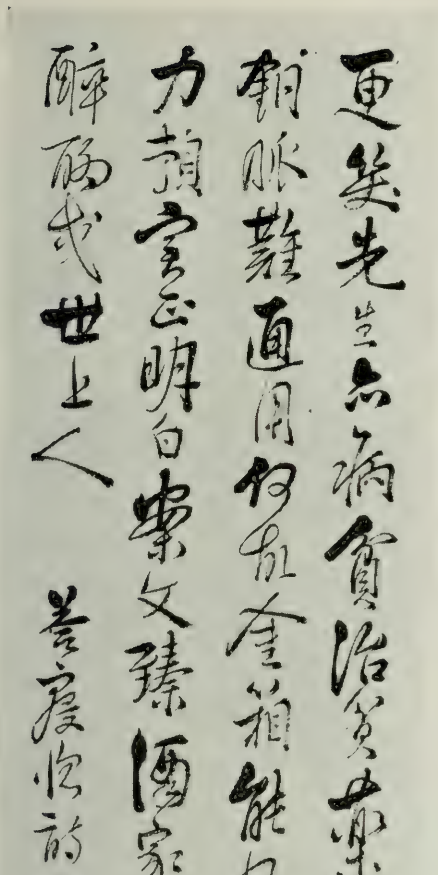
柳澤吉保筆蹟（黄檗山眞光院藏）




柳澤吉保肖像（黄檗山眞光院藏）



岡白駒筆蹟（高野辰之氏藏）



銅脈筆蹟（高野辰之氏藏）

# 徳川時代の漢文學（其三）

## ――支那語學・支那俗文學

齋藤護一

徳川時代の支那語支那俗文學方面に關しては、中山久四郎・青木正兒・長澤規矩也・石崎又造氏等の研究發表があり、余の小論はこれ等諸氏の貴重な御研究を、そのまゝ利用させて頂いてまとめたに過ぎないことを、先づ豫め斷つて置く。殊に石崎氏の「蘐園を中心とする支那語學」「冠山以後に於ける支那語學の流行に就いて」（書誌學通卷七―二〇所載）は、資料が豐富に取扱つてあり、これ等の資料に厄介になつた所が多かつた。なほ小論中の「五、支那語學關係書籍の刊行」の部は、長澤氏の「家藏江戸時代編纂支那語關係書籍解題」（支那語學報二）に據る所が多く、所載の書籍類は多く同氏の御所藏に係り、その御所説をそのまゝ用ひさせて頂いてゐる所多きを明記して置く、なほ本篇は通論であるから、普及の少いと見られる寫本や珍奇な資料はあまり採用せず、關係事項のみを中心として、徳川時代全般に亙る支那語學界支那俗文學界の趨勢を明かにする様に心懸けて記述した。從つてその關係人物關係資料に關しては、特殊なもの以外はあまり考證をしてゐない。

## 一　總論

德川時代に於ける、支那語支那俗文學硏究の源流は、長崎の唐通事と、明末の歸化人と、黄檗の禪僧とに、これを求めねばならぬ。寛永年間、幕府は海外との交通を、一切禁じたが、僅かに長崎の一港を通じて海外との貿易を許可した。從つて長崎には、唐人の來住が可成り繁く、これと對應する爲めの、通事即ち通譯官が置かれたのである。かくして、鎖國時代海外よりの文化は、纔かに長崎を通じてのみ、公然流入したが、この新文化にあこがれて、長崎に遊學した學者達は、長崎在住の唐人や、唐通事から、支那語・支那新文學の知識を得たであらうと察せられる。又明末の爭亂を逃れて、我國に流寓歸化した、支那人もかなりあつたが、これ等によつて受けた、支那語も相當あつたであらう。なほ江戸時代の支那語普及に、最も大きい力を持つてゐたものは、黄檗宗の傳來盛行である。當時の川柳に「山門を出づれば日本の茶つみ歌」「唐音を茶摘みもよほど聞き覺え」の句があるが、これは宇治の黄檗山に於ける、支那語流行を詠じたものである。元祿前後より、支那より黄檗僧の來朝する者が多く、我が國の黄檗僧侶達は、支那語に接する機會が、自然と多かつた。殊にこの宗派は、その渡來以後、後水尾院の歸崇をはじめとし、代々將軍が尊崇し、諸大名にも歸依する者が多く、各地に

は、黄檗の寺院が建立され、これには支那の歸依僧が多く出入したのである。從つて、黄檗僧侶の支那語は、相當廣範圍に行はれ、大きい普及力を持つてゐたと考へられる。

然しながら、元祿末頃までは、支那語は未だ一般に流布するに至らず、長崎の譯官と、黄檗僧徒との外には、これに通じた人は、あまり無かつたと言つてよい。換言すれば、當時の支那語は、商業用語貿用語として、一部の特殊な人によつて、用ひられてゐたのみで、學界の人が、これを採り上げることは未だ無かつたのである。支那語學が漢學研究の一部となり、漢學者が支那語學習に關心を持つに至つたのは徂徠一派の蘐園學派を以て嚆矢とする。江村北海（正德三年生れ天明八年歿）の「授業編卷二」には次の如く見える。

抑唐音ノ吾邦ニ行ナハル丶事、元和ヨリ以前ハ姑ク置、正保ノコロ朱之瑜陳元贇ナド歸化ノ後、其人ニシタシカリシ人ハ、ヤ丶唐音ニ通ジタル人アリケレドモ、イマダ汎ク世間ヘ流布セズ、余幼穉ノ比マデハ唐音ハ長崎ノ譯官黄檗ノ僧徒ナラデハ知ラヌ事ノ樣ニ人々オボヱテ、京都ナドニ是ヲ主張スル人マレナリシガ、岡島援之長崎ヨリ京大坂ヘノボリ來リ、江戸ヘモ赴キテ其業次第ニヒロマリ、唐話纂要雅俗語言ナドイフ類ヒノ書ドモ、多ク梓ニチリバメ世ニ行ハル。

こ丶に北海は岡島冠山が支那語を流布せしめたと言つてゐるが、觀點をかへて、徂徠一派の學者が

冠山を利用して支那語學習に力を注いだからこそ、これが流布し普及するに至つたとも考へられるのである。何となれば冠山の編した唐話纂要その他の支那語學習書は、江戸に於て蘐園一派の爲めに行つた、支那語講義の講本がもととなつてゐると見られ、而もこれ等冠山の編した諸書が、支那語普及に、大きい力を持つに至つたからである。ともあれ、江戸時代の支那語は、寶永正德の頃唐通事出身の冠山が、江戸及び京阪を來往した前後を一期として、此處に新展開を示し、廣く學界にも用ひられるに至つたことは、北海の授業編に於ける言の如く間違のない事實である。先づ江戸に於ける蘐園一派の唐話熱を初めとし、やがて漢學者の支那語研究熱は全國的に擴まり、支那語語彙集・支那語學習書の如きものが次第に多く刊行される樣になつた。續いては韻鏡などの音韻の學を支那語學の力を基礎として行ふものも出で、或は語類・明律・樂譜等の研究にも一歩を進める基礎をなしたのである。これと同時に、その頃より支那俗語を以て綴られた通俗小說類の訓讀飜譯が盛んに行はれはじめ、これの飜譯飜案の書が多く刊行された。かくして支那通俗文學の飜譯は當時の我が讀書界に爛漫と咲き出で、我が國の小說界にも多くの影響を與へるに至つたのである。

抑〻享保頃以前に於て、我が國で讀まれた支那小說といへば、文語體によつて作られた雜記體の物語類に過ぎず、俗語を以て綴られた通俗小說類は全く讀まれてゐなかつた。然るに正德享保の頃、長

崎より來た唐通事出身の冠山が、支那語を普及せしめてよりは、文語體の小説類のみに止まらず、通俗語を以てものされた、支那短篇長篇の小説類に關心が向けられ、後には元明の雜劇傳奇類にも目を注ぐ者さへ現れたのである。一體通俗小説や戯曲の類は、支那語の知識無しではこれを讀破することが出來ない。從つて支那語の盛行普及した享保以後に至つてはじめて、これが我が國人に親しみ得る樣になつたのである。

享保以後、支那通俗小説類は多く飜譯刊行され、廣く一般に讀まれたが、我が國に紹介された多くの支那通俗小説類中、最も流行し親しまれ、飜案改作模擬作等を續出して、國文學界に多くの影響を與へたものは、水滸傳であり、その他三言・二拍・今古奇觀等に於ける短篇小説類も、我が小説界に幾多の影響を殘してゐる。これ等支那通俗小説類の流行は、單に支那語學が普及したことにのみ原因してゐるものではなく、當時の社會狀勢がこれ等支那小説を受け入れるに、適した狀態にあつたからでもあらう。例へば、最も流行した水滸傳の內容を考へて見ても、これが當時の武士階級の廢頽と、町人階級の勃興とに、何等か通ずるものがあつたのではないかと思はれるし、又三言・二拍・今古奇觀等に於ける短篇小説類は、江戸中期の爛熟した人々の氣性に、適合する何物かがあると思はれるのである。かくして、支那通俗小説類は享保以後、或は飜譯となり、或は飜案となつて、讀書界に氾濫

したのであるが、支那小說類の盛行は寬政前後を以て最極點と見ることが出來る。寬政頃如何に多くの支那小說類が當時の讀書界に流布してゐたかは、その頃出版された平安秋水園主人輯の「畫引小說字彙」一卷（寬政三年刊）を見れば一目諒然である。卽ちこの書に載せられた「援引書目」を見れば支那に於ける著名なる明淸小說類が殆んど網羅され蒐されてゐる。以て支那小說類の普及が如何に多かつたかを察することが出來る。

寬政以後に於ても、支那小說の訓點飜譯物が一般に廣く讀まれることには變りなかつたが、これ以後に於ては支那小說の飜譯物が、新たに刊行されることは次第に少くなつた。文化文政の頃、江戶にて作られた京傳・馬琴等の讀本には、支那小說の影響が益〻多く見られ、又、當時の淨瑠璃・洒落本・川柳等には、支那語の要素が色〻と利用されてゐる。又その作中には、支那小說戲曲から得た、斷片的材料が、種〻な形を以て入つてゐる。然しながら、支那文學が當時の江戶俗文學に影響した形式は、寬政以前に於て、初期讀本に支那小說が影響した樣な、單純なるもの、卽ち支那小說そのまゝの飜案ではなくなつた樣である。支那小說戲曲が、種〻な形に解體されて、日本文學の中に浸入してゐるといふのが、當時の影響狀態である。この頃では、支那の小說戲曲が、漸く我が國人によつて、咀嚼され解體されて、國文學に次第に同化して行つた時代といつてよい。支那小說やその他の支那俗文學を、

單に珍奇であるが故に、尊び愛讀するといふことよりも、これを咀嚼し解體して、日本文學の內容形式に、織り込んで行かうとする傾向が多く見られるのが、江戸末期俗文學界の實狀である。

さて以上略述した江戸時代に於ける支那語支那俗文學界の變遷と、併せて支那俗文學が國文學界に與へた影響とにつき、これを次の三期に分つことが可能である。

一　江戸初期より元祿初めまで

支那語の普及しない時代。支那小說では、文語體の說話類が纔かに流布してゐたにすぎない。支那語の普及しないこの頃では、假名草紙に、支那雜記體說話の影響のみが見られる。元祿初め頃よりは支那語流行の徵があり、演義小說類の飜譯が多く出る樣になつた。

二　元祿享保より寬政頃まで

冠山の江戸京阪往來以後で、支那語盛行の時代。先づ江戸に於て、蘐園一派の支那語熱がはじまり、やがて、これは全國的に擴まり、京阪地方その他にも、支那語學習者が多く輩出した。なほ支那通俗小說類の訓點本・飜譯本が續出し、汎く支那小說類は、讀書界に普及するに至つた。この頃、京阪に發生した初期讀本には、支那小說殊に通俗短篇小說の影響が、多く見られる。寬政前後は支那俗文學が最も盛行した時代で、その飜譯物が氾濫した。

### 三　寛政末以後文化文政頃

支那語流行の餘勢時代。支那通俗小説類の飜譯刊行は、次第に少くなつた。然しながら、江戸の後期讀本には、支那俗文學の影響が、益々多く見られ、淨瑠璃・洒落本・川柳等の中にも、支那俗文學の要素が、種々な形を以て多く入つてゐる。當時の文學には、支那語を茶化し或は日本語化して、滑稽味を出さうとしてゐるものもあり、支那小説戲曲の趣向や題材を、自家藥籠中のものとして應用して作をなしてゐるものも多い。要之、支那俗文學が解體して、日本の文學言語に侵入し、同化して行つた時代である。

### 二　徳川初期の支那語學・支那俗文學

長崎に於ける唐通事の權輿は馮六である。慶長九年馮六といふ唐人が日本語を習ひ覺えたので通事を仰せつけられたが、これが通事の權輿である。其後馬田昌入といふ者が加へられ、馮六死後の跡役としては、林長右衛門が之に補せられてゐる。寛永四年には中山太郎兵衛、同七年には潁川官兵衛が加へられ、寛永末年にはこの四人が大通事となつてゐる。この頃その下には稽古通事が二三十人も居たやうである。かくして長崎に於て、鎖國時代の海外貿易が行はれてゐたのであるが、この唐通事達

が大陸新文化導入の最先端となり、支那文學も唐通事達から開けたものが多かつた。

さて江戸初期にあつては、室町末期に朝鮮を通じて移入された支那の書籍類が、未だ一般に流布し、讀まれてゐた樣である。江戸初期中期の日本文學に、多くの影響を與へてゐる、明の瞿佑の「剪燈新話」も、朝鮮本を以て、最初我が國に傳へられてゐる。卽ち、慶長頃木活字を以て飜刻されて、流布した、「剪燈新話」の原本は、「剪燈新話句解」といふ朝鮮本であり、李昌祺の「剪燈餘話」も、同じく朝鮮本を以て入つてゐる。また、慶長二年には剪燈新話の、朝鮮の飜案物・金時習の「金鰲新話」さへ、飜刻されてゐる。林羅山がその弱年の頃、耽讀したといふ剪燈新話も、同じく朝鮮の「剪燈新話句解」であつたのである。慶長四年に出た、「棠陰比事物語」といふ、桂萬榮の棠陰比事を譯した書があるが、これも朝鮮を通じて、移入された書によつてゐるらしい。さて、剪燈新話及び餘話の說話は、瓢水子松雲（淺井了意）によつて、飜案されて假名草子となり、江戸初期中期の人々に親しまれたことは、從來諸家によつて詳論されてゐる通りである。卽ち寛文六年板行の「伽婢子」の說話の大部分は剪燈新話の說話を飜案して作つたものであり、この續編ともいふべき元祿五年の「狗張子」には剪燈餘話を飜案して作つてゐる作が多い。伽婢子は當時の讀書界の意に投じ、爲めにこの模倣作が踵を接して生れてゐる程である。續伽婢子十卷（寛文年間）御前伽婢子（元祿十四年）拾遺御伽婢子（寶永元

年）等がその模倣作である。この他棠陰比事を譯した「棠陰比事物語」も當時の讀書界に流行したらしく、やがて西鶴の本朝櫻陰比事五卷（元祿二年刊）といふ模倣作となり、續いて鎌倉比事（寶永五年刊）本朝藤陰比事（寶永六年刊）等の模倣作が踵を接し、大岡政談へと物語的展開をなすに至つたのである。かく江戸初期にあつては、浮世草紙の上に翦燈新話・餘話及び棠陰比事の影響が多く見られるのであるが、これ等はいづれも文語を以て記された雜記體の說話類であつて、支那俗語を以て記された所謂通俗小說類ではない。從つて長崎から新たに輸入され、唐通事によつて傳へられた支那小說類は他に求めねばならぬ。

さて長崎から新たに輸入され飜譯されて、流行を來した小說類では先づ軍談物ともいふべき講史小說類を擧げなければならぬ。先づ寛文元年、長崎の人前田增武によつて譯された「明清鬪記」を初めとして、これより以後元祿より享保の中頃にかけて講史類の飜譯刊行が續出してゐる。卽ち元祿年間では、三國志を譯した「通俗三國志」五十卷（湖南文山、元祿三年刊）、兩漢演義を譯した「通俗漢楚軍談」十五卷（夢梅軒章峯、稱好軒徽菴、元祿八年刊）、隋唐演義を譯したと見られる「通俗太宗軍談」二十卷（夢梅軒章峯、元祿九年刊）、東周列國志を譯した「通俗呉越軍談」十八卷（清池以立、元祿十六年刊）があり、寶永年間では、戰國策を譯した「通俗戰國策」（毛利貞齋、寶永元年刊）、東周列國志を譯した「通俗周武王軍談」二

十四卷（清池以立、寶永二年刊）、皇明英烈傳を譯した「通俗元明軍談」二十卷（岡島冠山、寶永二年刊）、梁武帝演義を譯した「通俗南北朝軍談」十五卷、「通俗北魏南梁軍談」二十六卷（長崎一鶚、寶永二年刊）、隋唐演義を譯したと見られる「通俗唐玄宗軍談」二十卷（村田通信、寶永二年刊）等があり、降つては開闢演義を譯した「通俗十二朝軍談」十四卷（李下散人、正德二年刊）、兩漢演義を譯した「通俗兩漢紀事」二十卷（稱好軒徽菴、享保二年刊）、岳武穆演義を譯した「通俗兩國志」二十六卷（入江若水、享保六年刊）等がある。かくの如く、支那歷史小說類の飜譯刊行が多出すると同時に、この頃には又、支那の飜譯小說に倣つて我國の軍談物を作ることが行はれてゐる。卽ち、馬場信武・信意の父子は、支那演義小說の飜譯をなすと共に、これに倣つた我朝の軍記物を上梓してゐる。

かくして、支那の歷史小說類が、飜譯され書き下されて、當時の讀書界に賑はつてゐる折しも、岡島冠山が長崎から出で、江戶及び京阪に來往した享保以後に至つて、支那語が一般に普及され、こゝに俗語を以て綴られた、支那通俗小說類にも、糾然として關心が向けられ、この訓點本・飜譯本が、讀書界に登場して來たのである。

## 三　享保前後の支那語學界

岡島冠山（名璞、初名明敏、玉成、援之と字し、通稱長右衞門、彌太夫、冠山と號す。）は長崎の人で、夙に支那語に通じ、唐通事の經驗もある。青年の頃萩侯毛利氏に仕へたが、やがて辭して長崎に歸つた。後、京都に上り、足利侯戸田氏に聘せられ、寶永四年江戸に至り、幾何もなくして下阪し、寶永七年再び江戸に至つて、翌正德元年に、林鳳岡の弟子の員に加へられ、この年、荻生徂徠の許に譯士となり、譯社を開いて、徂徠一派の學者達に支那語を教授して、支那語流行の原動力をなしたのである。

徂徠及び徂徠一派の支那語は、冠山の力によつて開かれたことは明かであるが、必ずしも、冠山の東下を俟つて、はじめて開かれたものではない。冠山の江戸に來る以前から、徂徠及びその門弟は、黃檗の僧侶やその他から支那語を受け、その下地を得てゐたのである。殊に、徂徠の仕へた柳澤吉保は、黃檗山と特別な關係を有し、吉保は前から黃檗の僧侶と接して、支那語の知識を得てゐたし、從つてこれに出入した徂徠及びその門下と、黃檗僧との交渉は、冠山の東下以前からあつたのである。冠山の江戸に來た寶永七年以前、江戸に於て吉保等が、如何に支那語熱を持つてゐたかは、次の記錄によつても解る。

德川御實記によれば、將軍綱吉はその在職中、吉保の邸に臨むこと數十回、その度每に講書の席を

開き、大學・中庸及び論語等を自ら講じ、又吉保にも講ぜしめてゐるが、而も儒臣等をして、唐音を以て大學を講ぜしめ、問答せしめてゐる。常憲院殿御實記（德川御實記の中）の元祿十六年二月の條に、

十三日松平美濃守吉保がもとに臨御あり、御講書・猿樂等例のごとし。家臣詩經を講じ、あるは唐音にて大學を講じ、あるは唐音にて問答す。

とあり、尙ほ此の日、將軍綱吉の前で、吉保の儒臣鞍岡元昌が、大學の小序を唐音で進講し、徂徠が通辯の役を勤め、それが終つて、唐音問答數返に及んでゐる。又寶永二年二月五日の條には、綱吉が吉保の邸に臨御の際、志村楨幹・荻生徂徠等十三人が、「中」字を唐音にて議論してゐる。同五年三月二十四日には、悅峯（黃檗支那僧）が登城して、唐音を以て問答し、日本僧が通辯した。此の時、通辯の大意の分るものは、吉保一人であつたと。

柳澤吉保の支那語熱は、黃檗宗に歸依したことに起因するもので、元祿頃、高泉・千保・悅山・悅峯等の支那僧が、頻々として來り、これと接することが、そも〳〵その原因であつた。從つてこれに仕へるに至つた徂徠も（元祿九年八月仕へる）、自然と支那語に關心を持つたのである。然し一方、徂徠は柳澤公に仕へる以前から、支那語に關心を持つてゐたと見られる。何となれば、徂徠の柳澤公に仕へる以前の作、譯文筌蹄（元祿五年頃、門人等をして筆記せしめて作る。時に徂徠二十七歲。正德

元年刻成る。）には既に、唐音卽ち支那語に關する意見が、多く見られるからである。從つて、譯文筌蹄や訓譯示蒙に述べられてゐる、徂徠の漢文直讀論は、冠山に接する以前から抱いてゐた意見であつた樣である。（徂徠の漢文直讀論は、冠山によつて植ゑつけられたといふのが、通說であるが、必ずしも然らず。）

徂徠が冠山の東下以前に支那語の指導を受けてゐたのは、中野撝謙と石原鼎菴とであつた。卽ち寶永の初め、その頃徂徠の處に寄寓してゐた安藤東野をして、撝謙の門に入らせ、支那語を學ばせてゐる。東野は鼎菴に就ても、支那語を學んでゐたから、從つて徂徠は、撝謙と鼎菴から、直接間接に支那語の教授を受けたことになる。かくして、徂徠は夙に、支那語に關心を持つてゐたが、柳澤公に仕へてよりは、一層支那語熱が隆まつた。この折に東下したのが、唐通事出身の冠山であり、これを早速利用した結果が、徂徠一派の支那語學となつたのである。

徂徠を中心とする人々が、「譯社」といふ支那語講習會を開き、正德元年十月より、每月四五回集まり、長年の間、冠山について支那語教授を受けたことは、有名なことであり、從つてその門下には、支那語に通じた學者が多く輩出した。安藤東野・太宰春臺・荻生北溪・三浦竹溪・篠崎東海・山田翠柳・木下蘭皐等は、その門下中最も錚々たるものであり、田中省吾・山縣周南・大内熊耳・朝比奈文

淵・高野蘭亭・服部南郭等も、支那語を操つたやうである（これ等の人は必ずしも譯社の講習にて教授されたとは限らないが）。かくして徂徠門下から、この語學の力を以て、朝鮮使臣と接し、學問上の意見を鬪はした者さへ現れてゐる。卽ち、長州藩の山縣周南は下關にて正德元年の第八回朝鮮通信使に接してゐるし、朝日奈玄洲・木下蘭皐は尾張にて享保四年の第九回通信史に接し、徂徠學の紹介をなしてゐる。その他安藤東野・太宰春臺等も江戶にて朝鮮使臣に刺を通じてゐる。徂徠はその著「譯文筌蹄」「訓譯示蒙」の中にて、漢文直讀論をとなへ、漢文は支那語にて直讀し、訓點にて讀むべからずとの論をなし、春臺も亦、徂徠の意見に讃し、「倭讀要領」三卷を著して、倭讀の弊を極論してゐる。かゝる徂徠一派の支那語熱は、徂徠學の流行と共に、全國的風潮をなすに至り、漢學者の支那語學習は一種の新風潮とさへなつた。或は唐音直讀主義を以て藩校の學規まで規定した學者さへ出てゐる。卽ち秋山玉山は䕶園で支那語を學び、學成り歸鄕の後は、本藩熊本の細川重賢公の文學となり、藩主の命を奉じて、寶曆四年時習館を創設し、翌年その學規を制定したのであるが、その學規によれば、子弟敎育を全く華音を以て行ふとしてゐる。かく䕶園にて學を受けた學者が全國的に散じ、徂徠の學を奉ずる者が各地に擴まると共に、漢學者の支那語熱は相當廣範圍に行はれるに至つたのである。

徂徠は上述の如く、冠山から長年月に亙り支那語を受けたが、彼がその間に唐話を以て師友としたものは、冠山に限らず他にもあつた。慧通・大潮（魯子）・香國・彩上人（鳳泉）等の黄檗僧徒がこれであり、又對島の儒官雨森芳洲とも關係がある。（石崎氏は徂徠と芳洲とは、華語の關係なしと斷じられてゐるが（書誌學二ノ一）、芳洲はその子を徂徠に託した事實があり、徂徠文集にも、芳洲との關係が見られるので、支那語に就て何等か關係ありと言はれよう。）雨森芳洲は長崎に遊學し、上野玄貞について支那語を受けた人である。上野玄貞は明末の歸化人、澄一・將眉山について支那語を受けてゐた。長崎にて上野玄貞から支那語を受けたと見られる者は、芳洲に限らず岡島冠山があり、通事の蘆草拙があり、大潮・天產・慧通等の檗僧も同じく受けたらしい。よつて上野玄貞より受けたこれ等人々の支那語は江戸にて徂徠一派に傳へられたことになる。

これより先き、歸化人朱舜水より受けた水戸學者の支那語があつたが、こゝに江戸に於て徂徠一派の學者が冠山から支那語を受け、黄檗僧その他の學者と支那語を以て師友關係を結ぶ頃より、支那語學習の風は學者間に擴まり、支那語學習は漢學研究の一翼とさへなつたのである。かゝる流行の趣く所は、支那語語彙集・支那語學習書の編纂刊行となり、或は音韻研究や明律・樂譜の研究を產む基礎となつた。又これと同時に、支那俗文學小說戲曲類の訓點、飜譯、飜案へと向ひ、支那小說戲曲は國

文學にも大きい影響を與へるに至つたのである。

## 四　享保以後の支那が俗文學

### イ　通俗小說類

元祿頃、支那演義小說の飜譯物が、讀書界に流行してゐる折しも、正德享保頃より支那語が普及し、此處に支那俗語を以て書かれた小說類の飜譯が現れるに至つた。

支那通俗小說の中で、第一番に出現し、而も後世に至るまで我が國人に多く親しまれたものは水滸傳である。李卓吾評と稱する「忠義水滸傳」百回本の、第一回より第十回までに、岡島冠山が訓點をつけて、享保十三年京都で覆刻したものが、この種の最初である。やがて寶曆七年より寬政二年の間に、同じく京都からその飜譯物、「通俗忠義水滸傳」四十七卷（岡島冠山譯）、「同拾遺」（盡道人譯）が刊行されたが、これが我國に於ける水滸傳流行のもとをなした。文化文政頃の讀書界を風靡した、曲亭馬琴や高井蘭山の水滸傳は、いづれも冠山の譯本によつて出來たものである。寬政前後より文化文政に至り、水滸傳の流行はその極に達し、先づ綾足の「本朝水滸傳」（安永二年刊）といふ模擬作をはじめとして、佐々木天元の「日本水滸傳」（安永六年序）、椿園の「女水滸傳」（天明三年刊）、振鷺亭の「いろは醉

故傳」（寛政三年刊）、京傳の「忠臣水滸傳」（前編寛政十一年、後編享和元年）等の同類の作が簇出し、水滸傳の名は遍く知れ渡つた。これ等の模擬作はいづれも、水滸傳の趣向を眞似て作をなしたもので、或は時代を奈良朝の弓削道鏡の時に取り（本朝水滸傳）近くは元祿の忠臣藏に取つて（忠義水滸傳）原作を模してゐる。その他水滸傳の趣向の一部分を眞似て作をなした讀本・洒落本・黄表紙などは、江戸中期以後枚擧に遑がない。椿園の唐錦（安永九年刊）の第一卷「回鐵法師舊友を救ふ話」は、水滸傳中の魯智深が林冲の危難を救ふ一段（第八回の一部）を飜案して成つたものであり、天步の「棧道物語」（寛政十年）は棗商人にばけて金銀財寶を奪ふ一段（第十六回の一部）を襲用飜案して成つた作である。馬琴の作中にも水滸傳中の趣向を模した作が多く、「高尾船字文」（寛政七年刊）には水滸傳の反映が多く見られ、「八犬傳」の中にも水滸傳の趣向が多く用ひられてゐる。また京傳の「通氣粹語傳」（寛政元年版）や「梁山一步談」（寛政四年刊）、「天剛垂楊柳」（寛政四年刊）も水滸傳によつた作である。その他俳諧・繪本の類や相撲取の名にまで、水滸傳中の豪傑の名が出るなど、寛政以後の水滸傳流行は眞に目まぐるしいものがある。從つて水滸傳中の難解な語句のみを拔き出して解釋を附し、水滸傳讀者に便した書も多く現れてゐる。

水滸傳についで、我が小說界に濃い影響を與へてゐるものは、三言（警世通言・醒世恒言・喩世明

言）・二拍（初刻・二刻拍案驚奇）・今古奇觀等に於ける短篇小說である。江戸初期多くの影響を殘した短篇說話は、翦燈新話中の諸篇であつたが、これに續くものが、三言二拍等に於ける通俗短篇小說類であつたのである。

先づこれを最初に紹介したのは、岡白駒（字千里、又太仲、號龍洲）である。白駒は播磨の人で、長崎に遊んだこともあるが、當時上洛した岡島冠山と關係があり、その小說訓點には冠山よりの刺戟指導が與つて大きい力があるであらうと石崎氏は論ぜられてゐる（書誌學二ノ六）。白駒の紹介した書は「小說精言」四卷（寬保三年刊）及び「小說奇言」五卷（寶曆三年刊）である。この二書は警世通言・醒世恒言・喩世明言・拍案驚奇・西湖佳話等に於ける短篇小說中から、適宜數篇を選擇して、訓點を附して刊行したものである。次いで白駒の門人・澤田一齋（名重淵、通稱莊左衞門、字文拱、號一齋、京師の書坊風月堂の主人、奚疑主人）が、同じく三言二拍中より數篇を選擇附訓點して、刊行したものが「小說粹言」五卷（寶曆八年刊）である。一齋の粹言は、白駒の精言・奇言をついだもので、支那に於ける三言（警世通言・醒世恒言・喩世明言）に模した、我が國に於ける小說三言といふことが出來る。

三言・二拍・今古奇觀等の通俗短篇小說類は、附訓點本として讀まれたのみならず、後には假名交りに選譯刊行せられて一般に普及した。石川雅望（六樹園）の「通俗醒世恒言」四卷（寬政中刊）は、

醒世恒言中の四篇を譯出したものであり、淡齋主人の「通俗今古奇觀」三巻（文政十一年刊）は今古奇觀中の三篇を選擇飜譯したものである。今古奇觀中の「賣油郎獨占花魁」一篇のみを取つて譯出した、西田維則（贅世子）の「通俗赤繩奇緣」四巻（寶暦十一年刊）があり、西湖佳話中の諸篇を譯出した、十時梅厓の「通俗西湖佳話」四巻（文化元年刊）もあり、なほ寫本として傳はつてゐる飜譯物も多い。これ等飜譯通俗短篇小說中、最も江戸文學に大きい影響を與へてゐるものは、「賣油郎獨占花魁」の一篇であらう。江戸中期の遊里文學華かなりし頃の風潮に乘じ、この一篇は最も當時の人心に投じたと見え、やがて飜案物となり我が文學界に幾多の波紋を與へてゐる。文化十三年「芝叟遺話」として刊行されてゐる芝屋芝叟の有名な「賣油郎」（文化十三年刊）一篇は、我が國の郭文學として有名であるが、「賣油郎獨占花魁」の飜案になつた作であり、寛政十二年興行された近松徳叟の「俠顏廓（だてくらべ）日記」といふ歌舞伎も亦、これを脚色して作つたものである（享和三年には「油商人廓話」として再上演されてゐる）。十返舍一九の合巻物で、「通俗賣油郎」（文政七年）といふ作が、日本小說年表に所載されてゐるが、これもこの飜案作と思はれる。その他講談で名高い、紺屋高尾や名物幾代餅も、この燒直しであるとさへいはれてゐる。「賣油郎」一篇が江戸時代の文學に如何に影響多かつたかを、察することが出來る。

これよりさき、大阪の都賀庭鐘は、近路行者の名の下に、「古今奇談英草紙」（寛延二年刊）を作つてゐるが、この中の諸篇の大部分が、三言・二拍に於ける小説の飜案になつてゐることは、近來指摘されてゐる通りである。これは未だ岡白駒の訓點本にもよらず、原作によつて直ちに飜案したものであらうと言はれてゐる。この飜案作は、硬直な漢文口調で、原文の直譯に近い様な部分さへ多いが、よく支那小說臭味を脱化して、日本人の生活様式に適する様に改められて居り、而も支那小説の幻想的雰圍氣をよく傳へてゐるので、忽ち讀書界の寵兒となり、甚しい流行をなすに至つた様である。よつて庭鐘は、これに續いて「繁野話」（明和三年刊）「莠句冊」（天明六年刊）「垣根草」（寛政五年刊）等の續編を出してゐる。これ等續篇に於ては、三言・二拍のみに限らず、西湖佳話や唐代小說、その他の支那小說から種を求めてゐるが、次第に文章も和らげ、その筋に於ても特殊な趣向を凝らして、巧みな飜案となつてゐる。三言・二拍等の短篇小說は、かゝる飜案作によつても一般に普及し、その影響する所が多かつた。庭鐘の諸作は、當時よく流行したので、同類の作が續いて出てゐる程である。即ち椿園主人の「今古奇談翁草」（安永七年刊）、伊丹椿園の「今古小說唐錦」（天明元年刊）、椿園主人の「今古奇談深山草」（天明二年刊）等がこれである。

上田秋成の「雨月物語」（安永五年刊）中の諸篇が、支那短篇小說の影響を受けてゐることは一般に言

はれてゐる所である。秋成の作に於ては、支那小説から直接に影響を受けたといふよりも、支那小説の飜譯或は飜案から、間接的に影響されてゐると見られる。從つて秋成の作では、支那小說臭味から殆んど脱して居り、純日本的な思想感情が織り込まれてゐる。秋成は作のヒントを當時行はれてゐた支那短篇小說の飜譯や飜案に得たといふにすぎず、これを彼の頭によつて洗錬し、育て直したものがその作品である。

なほ支那短篇小說の飜案として知られてゐるものに、桂月甫粲（森羅子）の「月下清談」（寛政十年刊）がある。これは今古奇觀中の「錢秀才錯占鳳凰儔」一篇から飜案したもので、よく原作を換骨奪胎して、流暢な和文體を以て巧みな飜案をなしてゐる。

德川時代の文學界に、最も影響多かつた、水滸傳と三言・二拍・今古奇觀に於ける短篇小說の、流傳展開は大體以上の如くであるが、短篇小說類は、京阪を中心として出版された初期讀本に多くの影響を與へて居り、水滸傳はむしろ、寛政以後の、江戸に於ける京傳・馬琴華かなりし、後期讀本の方に多くの影響を與へてゐる。從つて三言・二拍の影響は、剪燈新話の影響につゞくものであり、水滸傳の影響はこれよりやゝ降り、文運が江戸に移つてから、江戸に於ける作者の方に多くの影響を與へてゐるのである。

さて三言・二拍・今古奇觀の短篇小說や水滸傳の外に、飜譯されて德川時代に讀まれた支那通俗小說類は、他にも多かつた。寶曆八年から天保二年の間に、四人の手によつて西遊記が飜譯されて、（初編六卷（一―二六）近江口木山人譯　寶曆八年刊、後編六卷（二七―三九）東都石麻呂譯　天明四年刊、三編七卷（四〇―四七）東都石麻呂譯　天明六年刊、四編六卷（四八―五三）尾形貞齋譯　寬政十一年刊、五編六卷（五四―六五）岳亭山人譯　天保二年刊）これ亦汎く讀書界を風靡し、孫吾空、猪八戒の名は童子も知らぬ者がないまでに普及した。その他隋煬帝艶史を抄譯した、西田維則（贅世子）の「通俗隋煬帝外史」十卷（寶曆十年刊）があり、また、金雲翹傳を譯した譯者未詳の「繡像通俗金翹傳」五卷（寶曆十三年刊）があり、京傳の讀本にも影響を與へてゐる。なほ龍圖公案より、宋の判官包待制の斷獄の話六篇を譯出した紀瀧淵の「通俗孝肅傳」五卷（明和七年刊）あり、女仙外史を譯した、滄浪居主人の「通俗大明女仙傳」十二卷（寬政一年刊）があり、平妖傳を譯した、本城維芳の「通俗平妖傳」十卷（享和二年）等がある。これ等はいづれも支那小說の飜譯ではあるが、原作に忠實な書き下し譯ではなくて、殆んど抄譯といつてい丶位に原文の處々が省略されてゐる。然しこれが爲めに却て、支那小說が一般讀書界に普及する原因となつてゐるのである。

一體支那小說はその筋を運ぶ際に、文辭的要素に力が注がれて居り、文中に詞詩韻文や流麗な形容

文を入れて、文章の妙味を發揮するやうに努力されてゐる。故にこれを日本文にそのまゝ書き下しては、冗長たるを免れず、原文に於て有效な詞詩の如きも、これを譯しては却て筋の運び上邪魔になる場合が多い。よつて我が國に於ける飜譯文では、冗長と思はれる形容部を思ひ切つて削去し、筋の運びを巧みにしてゐるのが常である。江戸時代の支那小說飜譯は、その原形を忠實に紹介しようとするよりも、支那小說の面白さを、如何にして讀者に味はしめようとするかに、その主力が注がれてゐる樣である。從つてその飜譯の文章は、ともすれば原文から離れ、或は原文を部分的に省略してゐる場合が多い。支那小說を譯して日本人に親しみ得る樣な文章を再建する、その飜譯態度は、やがて小說の主人公を日本人とし、その舞臺を日本に移した、日本小說へと飜案されるのは自然の勢である。江戸時代、支那小說の訓點飜譯につゞいて、その飜案作が出たのは、かうした經過を經てゐるのである。

**ロ　戲曲類**

支那明清の小說が、訓點飜譯飜案によつて流行し、江戸文學に多くの影響を殘したに比し、支那戲曲類の訓點飜譯はあまり行はれなかつた。その原因は、原文に俗語方言が多くて、讀むことが困難であつたからでもあらうが、寧ろその主要なる理由は、支那戲曲の趣向に變化が乏しく、我が國人の興味を惹くに至らなかつたからではないかと思はれる。支那の戲曲は詞曲の艷麗豐饒なのがその特色で

あり、音曲を通じて味はひ、或は詞曲をそのまゝ讀めば、眞に流麗で價値が高いものであるが、その筋には變化がとぼしく、爲めに內容の變化充實を好んだ江戶時代の人心には、あまり關心が買はれなかつたと見られる。

江戶中期以後は、歌舞伎劇の全盛時代で、我國に於て獨特に發展した歌舞伎は、支那劇の要素を採り入れるには、あまりに馳け離れてゐた。然しながら、支那劇と日本劇界とは、全然無關係とはいはれない。歌舞伎と支那劇とは無關係ではあるが、能狂言と元の雜劇とは、その形態・用語・演出法の上に類似點が認められ、何等かの關係ありと見るのも無根なことではない（反對論も多いが）。夙に荻生徂徠もその著「南留別志」に於て「能は元の雜劇を擬して作れるなり、元僧の來り敎へたるなるべし。」といひ、太宰春臺も「獨語」に「今の猿樂も、もと中華の雜劇を學びたりと覺ゆ。」といつて居り、更に新井白石は「俳優考」で、兩者の類似點を擧げてその關係を說明した。然し兩者に關係ありとするも、これは古く室町時代にあつた筈で、江戶時代に於ては更に交涉があつたとは認められず、從つて此處に兩者の關係のことを論ずる必要はない。たゞ歌舞伎と支那戲曲との關係の一種として、支那戲曲を歌舞伎風に譯したものを擧げる必要がある。

寛政二年出版された、銅脈先生（畠中賴母）の「唐土奇談」（昭和四年內藤湖南博士解說附きで京都更生閣より

再刻出版）は三巻四齣より成り、支那戯曲を淨瑠璃體に譯したものである。そのもとは清の李笠翁の「千字文西湖柳」といふ戯曲であると言つてゐるが、笠翁にこの題名の戯曲があつたか否かさへ不詳で、その原本は充分解らない。なほ嵐翠子の「蝴蝶夢」（古典劇大系に青木博士が紹介）は清初の傳奇「蝴蝶夢」九齣を淨瑠璃體に譯したもので、青木博士はこれを安永・明和頃の譯であらうと言はれてゐる。かく江戸末期、歌舞伎流行に乘じて、支那明清劇を淨瑠璃風に譯したものも見當るが、これも氣紛れな文人の作たる域を出でず、我が劇界に何等影響を及ぼしたとも考へられぬ。支那の戯曲と我が徳川時代の劇界とは、殆んど關係無しといふことが出來よう。

支那戯曲はかくの如く、徳川時代に及ぼした影響は殆んど無かつたが、支那語學普及の折からこれが全然讀まれなかつたといふ譯ではない。澤田一齋の「俗語解」には、「西廂記注」「元曲百種」「繡襦記」を引用してあるし、延元三年刊の留守友信の「俗語釋義」にも、西廂記の注を引用してあるし、天明四年刊の「小說字彙」にも西廂記、琵琶記等の名が見え、又少し降つては、馬琴もあやしい乍ら金聖嘆本西廂記、毛聲山本琵琶記を讀んだといつてゐるし、山東京傳も「紅雪樓九種曲」を云爲し、又その作「曙草紙」中には、李笠翁の「風箏誤」の片影さへ見える。明和八年八文字屋刊の「新刻役者綱目」巻一には李笠翁十種曲中の一たる、「辰中樓」の第五・六齣を引いて訓點を施し、其の譯文

さへ載せてゐる。なほ李笠翁の戲曲は六樹園飯盛の小説に多く影響をしてゐることは、從來指摘されてゐる通りで、卽ちその著「飛驒匠物語」(文化五年刊)には「辰中樓」と「巧團圓」、「近江縣物語」(文化五年刊)にも「巧團圓」の影響が見られる。かく江戶中期以後、支那小説が流行してゐる際に、元曲及び明淸曲は一部の人によつて讀まれたであらうことは想像に難くない。「西廂記解」といふ立派な西廂記語彙集が殘つてゐることによつてもこれは明かである。讀まれてはゐたものの、その內容に變化がとぼしき爲め、一般の人々から興味を以て迎へられるといふ魅力にとぼしく、從つて飜譯刊行もされずに終つたのである。たゞ江戶末期、遠山荷塘は長崎に遊學し、戲曲小説をも多く讀み、特に北曲西廂記に附訓點してゐるのが注目される。

## 五　支那語學關係書籍の刊行

正德・享保頃を一期とし、支那語が一般に流布し、支那通俗小説類の飜譯飜案が盛行するに至つたが、これと同時に、支那語學に關する書籍も多く刊行されてゐる。卽ち、唐話の學習用書、小説語彙・俗語の語彙集、或は唐音傍注の漢籍類の刊行がこれである。

唐話の學習用書の著者として、第一に擧ぐべき人物は、同じく岡島冠山である。冠山の關係した支

那語學に關する書は、非常に多いが、今その中で主なる刊行物を擧ぐれば、「唐話纂要」五卷（享保三年刊、但し第六卷を重刊の時に附してゐる）「唐話便用」六卷（享保十年刊）「唐音雅俗語類」五卷（享保十一年刊）「經學字海便覽」七卷（享保十年版）「唐譯便覽」五卷（享保十一年版）等である。唐話纂要は支那語入門書で、二字話三字話の簡單な語句から長い語句の練習に及び、重刊の時に附した第六卷には「孫八救人得福」及び「德容行善有報」といふ小說話をも採用して、各〻譯文を附してゐる。この書は未刊の「唐話類纂」（長澤氏藏）と共に、支那語入門の嚆矢として最も知られてゐる。「唐話便用」も同じく、日用の言語を採り、四聲音並びに譯を施したものであり、「唐音雅俗語類」も同類の書であるが、たゞこの卷四と五には、律令に關する語彙も多く採用されて居る。「唐譯便覽」も同類の書であり、「經學字海便覽」は朱子語類の四書・五經の文の俗語を摘出して、解釋を附してゐる。冠山の支那語學に關する著書は、江戸時代に於ける最も光輝ある存在で、これ等の諸書が、江戸享保以後の支那語學に寄與する所は、蓋し大きいものがあつたであらう。

支那語學習書の類としては、なほこれよりさき、元祿七年刊の不著選人名「語錄字義」があるが、これは語類等に見える語句を邦譯したものである。その他不著選人名の「唐音和解」二卷（正德六年遊遙軒の刊行序あり）「兩國譯通」一卷（刊行年不明）「唐音世語」（寶曆四年、禿山子の刊行序）石川金谷（名貞、字太

一、通稱賴金）の「焉社常談」二卷（明和七年刊）等がある。いづれも支那語及びその語彙を類輯して、その發音及び譯を附したもので、支那語學習に便し得る書である。然しこれ等の諸書はあまり流布したとは見られず、徳川時代の支那語學に大きい影響力を持つた書とは考へられぬ。支那語學習熱は冠山前後が最高頂であつて、その後は支那語學の力を以て支那の新文學小說戲曲を讀む方にのみ主力を向け、支那語を語學として學習する風は次第に衰微して來たと見られる。從つて支那語の學習書としては、冠山の書が最も流布し、後出の他の諸書は、後限られた人々に行はれたのみで、あまり普及せずに終つたと見られるのである。

次に小說語彙集として第一に擧ぐべきは、秋水園主人（未詳人）輯の「畫引小說字彙」一卷（寛政三年刊）である。この書は支那小說讀者の爲めに、小說戲曲等から熟語虛字助字を輯めたもので、一種の辭書の類である。この書は割合に廣く通行してゐる。その他江戶時代に最も流行した水滸傳の語彙のみを集めて解釋し、水滸傳讀者の爲めに便した書が多い。先づ土佐の人、陶山南濤（名冕、字延美又尙善）の「忠義水滸傳解」（寶曆七年刊）があり、水滸傳の第一回より第十六回までの語句をぬき出しその發音と說明とを加へて居る。ついで大阪の人鳥山石丈（名輔昌、字爾熾、通稱左太夫）撰の、「忠義水滸傳抄譯」（天明四年 門人龍世華序）があるが、これは南濤の忠義水滸傳解をついだ書で、水滸傳第十

七回より第三十七回までの語句を取つて說明を加へてゐる。この他水滸傳語譯の書としては、寫本として、岡白駒のものや、同じく陶山南濤撰の續集や、穗積以貫（通稱以助、播磨の人）編のもの、その他が傳はつてゐる。水滸傳が如何に流行してゐたかを察することが出來る。

江戸時代に出た支那語の辭書類としては、前述「畫引小說字彙」の外に、京都の人岡崎鵠亭（名元軌、字伯則、通稱彥太）撰の「中夏俗語藪」五卷（天明三年に成り享和二年補刻）と、越後の人金內雲（名謙、字受卿、通稱格三）の「楳杜字彙」（安政七年刊）を擧げることが出來る。これ等は一種の熟語集で、前者は支那俗語をイロハ分にし、更に態藝・氣形・支體などに分け、短い語より、長い語「綿紙條棲入鼻中要他打噴嚏ハナヘコヨリ入レテクサミスル」の如きものにまで及んで居り、後者は熟語を頭字の畫數にて類聚し、その出典と解とを附したものであるが、經史より出たものと同時に通俗小說類より得た語を多く入れてゐる。なほこれよりさきに出た熟語集「學語編」（明和九年刊）にも俗語の單語が多く採用されてゐる。これ等は完全な支那語辭典とはいはれないが、江戸中期以後の支那語流行の產んだ產物として見落し得ないものである。

さて漢文と支那語とが一物の異稱たるに過ぎぬからには、支那語流行の折から、漢文直讀の論、卽ち漢文は支那語にて讀み、訓讀すべからずとの論が出るのは、自然の勢である。先づ徂徠・南郭がこ

れを主張したことは前述したが、同じく平賀中南（名晉民、總右衞門と稱す、別號は果亭）は「學問捷徑」三卷（安永八年刊）に於て、原雙桂（名瑜、字公瑤、別號尙菴）は「過庭紀談」卷一に於て、それぞれ作詩作文をなす際の必要上から（學問捷徑）、或は漢字音研究の必要上から（過庭紀談）、漢文直讀の要を說き、江村北海もその著「授業編」三卷（天明元年自序）に於てこれ等唐音論者の說を總合してゐる。而も徂徠等はこれを主張したのみならず、實際に漢文直讀を實行したことは、その友人入江若水に與へた書中に「吾黨則異レ是、其法亦以二漢語一會二漢語一、未下嘗將二和語一來推中漢語上。」（徂徠集二十六）と言つてゐることによつても想像することが出來る。かく漢文直讀を實行する際に、最も便利なものは、唐音傍注の漢籍であり、かゝる必要に應じて生れた唐音傍注の書も刊行されてゐる。岡島冠山の「唐音三體詩譯讀」三卷（享保十一年刊）「唐音學庸」（享保十二年刊）等がこれである。前者は三體詩中の七言絕句に支那音四聲を附し、注釋したものであり、後者は大學中庸の本文に支那音を附したものである。なほ南京音・浙江音を左右に旁注した朝岡春睡撰の「四書唐音辨」二卷（享保七年刊）もあり、その他石川金石の作つた「唐音孝經」（明和三年刊）あり、後れては「唐詩選唐音」（安永二年、劉道音）といふ、唐詩選中の五七言絕句に支那語發音を附したものがある。（なほ岡島冠山には「華音唐詩選」「唐音論語」、石川金谷には「唐音論孟」「唐音唐詩選」等の同類の書があると記錄に見える。）これ等の書は漢文

直讀の爲めに大いに役立つものであらうが、あまり一般には普及せずに終つた様である。徂徠・南郭等の主張した漢文直讀論も一時の流行に終り、世間の大勢は數千年來の習慣におされて、遂に支那語學と漢文學とを結びつけることは、學界一般に普及するに至らなかつた。

## 六　日本文學の支那語譯

支那語流行と共に、支那俗文學の飜譯紹介が多く行はれてゐる享保頃、その風潮の中に生れた日本文學の支那語譯も亦見逃すことが出來ぬ。先づこの中で第一に擧ぐべきは、同じく冠山の「太平記演義」五巻（享保四年序）である。この書は太平記を支那の白話小説風に譯したもので、「天子立レ后入ニ弘徽殿一事」より「高氏叛ニ平家一事」に至る三十四段で、支那回章小説體にその形をとゝのへてゐる。この書はその詞藻語彙の豐饒にして行文の大膽なる爲めに、日本人の支那語譯として最も注目を惹くものであるが、當時どの位普及したかは疑はしい。冠山にはこの他に楠氏の物語を譯したと見られる「南木」、太閤記を譯したと見られる「太閤」と稱する同類の著があつたと記錄に殘つてゐるが、勿論その存否さへ解らない。これに續き日本文學の支那語譯として最も著名なのは、明和八年刊の亭亭逸人譯「四鳴蟬」である。明の徐文長（名渭、字靑藤）の「四聲猿」に模したもので、我が謠曲や淨瑠

璃を支那語譯して作つてゐる。卽ち第一「惜花記」は謠曲「熊野」を、第二「扇芝記」は「賴政」を、第三の「移松記」は近松門左衞門の淨瑠璃「山崎與次兵衞壽の門松」下卷「與次兵衞吾妻道行の段」を「失心吟行」なる題下に、第四の「曦鎧記」は竹田出雲の「大塔宮曦鎧身代り踊」の場を、それぞれ譯したものである。然しその譯は冠山の譯文に比して、和臭味のある逐語譯たるを出て居ない。この他長崎の譯官樊世輔等が冠山の「太平記演義」の體に倣つて作つた「唐譯本朝記事」一卷（寛政六年序）があり、近松の國姓爺合戰の一段を譯したものや、その他の淨瑠璃を支那小說體に譯した樣なものもあるが、いづれも普及はして居ない。これ等は兩國文學交涉の上からはあまり意味なく終つたにしても、支那語支那俗文學流行の產んだ一現象として、見逃すことの出來ぬ存在であらう。

## 七　結　語

德川時代に於ける支那語は、黃檗僧の盛行によつて傳へられたものが本であり、又明末の爭亂を逃れた朱舜水等の歸化人によつて傳へられた水戶學派の支那語も注目すべきであつたが、やがて交通の發達にともなひ、長崎から直接に大陸文化が流入するに至るや、この大陸文化に目を見張つた進取的學者は、支那語學習に先づ力を注ぐに至つたのである。漢學者の中で支那語學習に力を用ひ、最も進

歩的態度を取つた者は、徂徠一派の學者であつた。然し當時の支那語學習は、蘐園一派に止まらず、他の學派にも見られる所である。例へば京都の堀河學派にも支那語學習者はあつた。卽ち享保十年蘐園で講義を受けた篠崎東海・山田麟嶼・天野信胤等は踵を接して東涯の門を叩いてゐるが、これ等の人々は支那語に多少素養があつた。同じく東涯門下の松室松峽・芥川丹丘も支那語の學習を受けてゐる。かく當時の漢學者間には、支那語學習の風が一種の新傾向となり、全國的に擴まつたのであるが、この風潮は蘐園學派の勢力のあつた享保前後が最頂であつて、その後は次第に衰へて來たと見られる。併し一方、支那の俗文學を飜譯し飜案して、我が文學界に新氣運を齎したのは、享保より以後寬政前後までが最頂であつた。支那小說の飜譯飜案者は、漢學專門の人といふよりも、京阪市井の俗學者や、書肆の主人等であつた。卽ち三言に訓點を施した岡白駒は、金絲烟を賣つたり醫を業とした微賤な學者であり、多くの支那小說を譯した澤田一齋は、京都の書肆風月堂の主人であつた。あまり有名でもない京阪市井の學者によつて移入された支那の俗文學が、我が國文學史上に不朽の足跡を遺してゐる譯である。

さて德川時代に我が國で行はれた支那語は、如何なる地方の言語であつたかを考へるに、當時長崎に來航した支那商人は多く江浙の人であり、又福建の商人であつた關係上、南方系の支那語が普通一

般に行はれてゐた様である。當時の記錄に殘された支那語發音の振假名を見れば、殆んど南方系の發音であることが解る。朝岡春睡撰の「四書唐音辨」の如く、南京音と浙江音とを區分して旁注してゐるものさへある。江戸にて太宰春臺に就き内外典籍を涉獵し、又支那語を學び、享保十一年京都に歸り、支那音學を基礎として磨光韻鏡學を大成した僧文雄は、その著「韻鏡指要錄」（安永二年刊）に於て次の如く述べてゐる。

　我邦長崎に傳ふる所官話あり、俗話あり、俗話の中に杭州・漳州等の不同あり。

と。官話とは所謂中原音で北方系の音をいひ、杭州音とは浙江音、漳州音とは福建音である。德川時代長崎より傳へられた支那語音の種類をこの記錄によつて知ることが出來る。

　新文化移入の具としての支那語學は、正德・享保前後が最も活潑に活動した時代である。これより以後寛政頃までの間に、支那大陸の新文化や新文學は支那語學を通じて大體吸收され咀嚼され盡された。寛政前後に至つては、既に漸く知識人の關心は、大陸文化よりも西歐文化の方に向ひ初めてゐた。この頃では既に、文化移入の最先端に立つ外國語は支那語ではなく、蘭語蘭學によつて取つて替られつゝあつた樣である。杉田玄白が活躍した寛政前後より、我が進取的學者間に行はれたものは、支那語研究ではなくて、蘭語蘭學の研究であつた。文化・文政の頃、支那大陸より受けた新文化や新

文學が大衆に汎く行き遍つた頃には、文化移入の最先端を行く外國語は支那語でなくて蘭語であり、蘭語研究が漸く軌道に乘つて、活潑な活動を始めようとする時代であつた。徳川時代を通じて、支那語が文化的に最も大きい役割を演じたのは、享保前後であり、寛政以後文化・文政頃に至つては、支那語は既に文化の第一線から退き、蘭語蘭學によつて取つて替られたと思はれるのである。

# 江戸時代儒者の書

高野辰之

## 一 序説

江戸時代の儒者を近代儒學の開祖藤原惺窩以下、幕末迄の儒者に限るであらう。凡そ書は人の好惡によつて其の法とする書帖を異にするので學派によつて其の書風を論ずることは許されない。又書は其の人の年齒によつてひどく異なり、尺牘殊に俗簡と書幅の書とは通常大いに異なる。俗簡は所謂御家流により、書幅卽ち改まつた餘處行の書は、兎角法帖風に近いのが普通である。けれども漢字は概ね共通で、如何に御家流で書いても、其の人の書風が出て來て、そこは爭へないものである。又人によつては、楷書と草書とは法帖を異にすることがあつて、其の一體を見て他を律しようとしては誤を生ずることがあるのである。

上述の理由によつて、人の書を鑑別することの難事たるは知らるべく、書の眞僞を分つことの容易ならざることも知られるであらう。要は自己の目睹したるもの、又は所藏の物のみが正しと思ひ、他一切を疑ふは陋で、偏で、醜で、歪で、ともすれば人を誤る。いや世を誤る。彼の鑑定家または古文書類を取扱ふ者の如きは、動もすれば一隅を見て、他の三隅を知らうとしない傾向がある。事に審査に從ふ者の如きは、宜しく愼重なるべく、濫取を戒め、また苛察に陷らざるを心掛くべきである。

私は此の題目下に筆を執ることの難きを思ひ、例證を示すことの最も機宜に合ふを思ふ。けれども屢〻寓目したものでなければ斷言するを憚り、從つて所說が明快を缺くことにならうが、それは寬假されることを祈る。

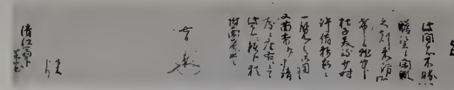
## 二 五山僧と古儒者

五山僧が文權を司つてゐた頃の書は實用體の文字が横行した。それは疾書に適する書で、講說を書き留めるに利便なる體、所謂鈔物の聞書に見る體である。これに反して法語は宜しく謹嚴であるべく、疾書は其の要むる所ではない。寧ろ遲筆の方が威重を加へる。こゝに於て自然其の法とした所の帖風の書體が出て來るのである。五山時代は固より鎌倉室町時代である。然れば、禪にも深く通じた

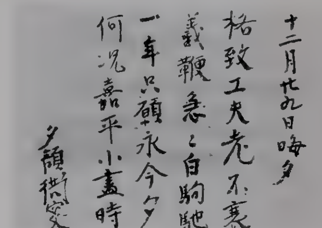
碩學の書家、蘇東坡・黄山谷の書風が行はるべきで、東坡の風は五山僧の細楷に之を見る。黄山谷の風は字態に奇趣があるので喜んで之を模した人がある。他は趙松雪（子昂）風である。張即之の風はあつてもごく少い。王羲之・王獻之の風は古來喜ばれ且つ模倣され、それが和らげられて世尊寺様御家流となつたのであるが、五山僧時代は俗簡に之を見、法語の書風には却つてこれが甚だ少い。蓋し晋唐時代の法度を去つて奔放革新の氣の充ちたのが宋代の書風である。宋元から渡來した僧の書風がこれで、書法には重きを措かないといつた態度のものが多い。邦人は其の敎法を受けて其の書風までも模ね、こゝに一種唐様（からやう）の書體が生じた。唐にあらず、宋にあらず、和にあらずといつたもので、江戸初期の儒家は此の唐様を奉じた。藤原惺窩の書がこれである。其の著書の稿本を見ると、疾書記錄の體である。謹嚴な尺牘などを見ても、歛美を求めない五山僧の書其の儘である。あの人の經歴から考へてもかうあるべきで、舜首座時代の書風が改まらなかつたものである。門人林羅山の書風もこれである。羅山は始め建仁寺に學んで慈稽を師とした。慈稽は力めて黄山谷の書風に模し、相當の能筆であつた。羅山は僧となるを厭ひ、朱說を奉じて之を說き、次いで幕政に參與して朝儀・典禮・律令等の制定に加はり、翰を揮ふこと飛ぶが如く、頃刻にして千言を成すと稱せられただけに、書道に親しむ時を得なかつたのでもあらう。尺牘俗簡には達筆なものも見るが、雅味を缺いて、俗くまでも實

用文字風である。法帖を手にしたことはないらしい。子の鵞峰の書風もこれなら、孫の鳳岡もこれである。林家は書の家でない。書道に於ては拙劣だと評せられても辯護し得ない。代々書道の趣味を解しなかつたのである。

古儒といへば、惺窩及び其の門人たち、寛永から寛文あたり迄の儒者である。羅山の外には石川丈山・堀杏菴・松永尺五・三宅亡羊・那波活所が先づ代表者であるが、杏菴・尺五・活所の三人は五山風の雅味を缺く書風である。たゞ杏菴だけは唐詩を書いた條幅に定家様を加味した趣致のあるものを見た。醫者であり、儒者であり、小歌にも筆を執つて諸藝に通じた人であれば、當時流行の定家様も餘處行の書には試みて見たらしい。書を以て知られてゐるのは丈山である。武士を蟬脱して叡麓の一乘寺村に棲遲し、專ら唐土の詩人を見ぬ世の友として、賀茂川も渡らずに生を了へたといふ。斯人は隷書を以て知られた。後光明天皇に徵されて差上げたのも此の體であつた。誰の書を學んだのか傳へてゐない。無論彼土からの法帖に相違ない。多くは雙鉤塡墨で、形は整つてゐても生氣を缺いてゐる。稀にそれでないものが、行書には少しある。尺牘は全く自在で、よく注意しないと、見誤る位である。三宅亡羊は活花もやつた人で、茶人好のする筆蹟を遺した。所謂儒家の書でない。「亡羊は儒者かしら」といつた人があるが、私は儒者だと思ふ。手近な先哲叢談など見ても儒者以外には編入せ

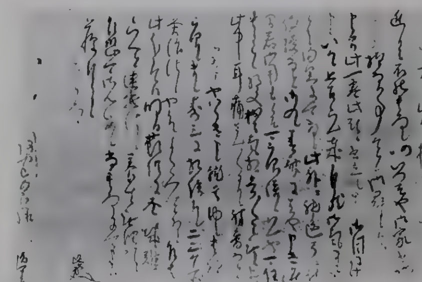


藤原惺窩手簡

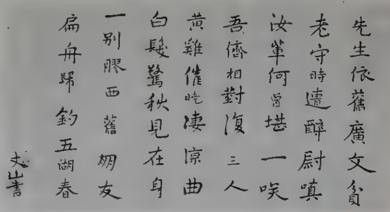


林羅山眞蹟

十二月廿九日晦夕
格致工夫老不衰
義鞭急々白駒馳
一年只願永今夕
何況嘉平小盡時
夕顔巷叟

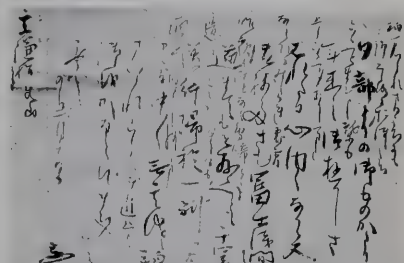


林羅山手簡

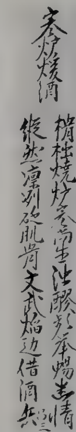


石川丈山眞蹟

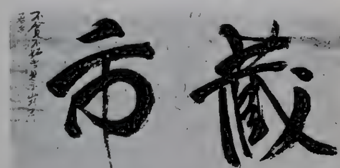
先生依舊廣文貧
老守時遭醉尉嗔
汝輩何曽堪一咲
吾儕相對復三人
黄雞催曉凄涼曲
白髮驚秋見在身
一別眼西舊朋友
扁舟歸釣五湖春
丈山書



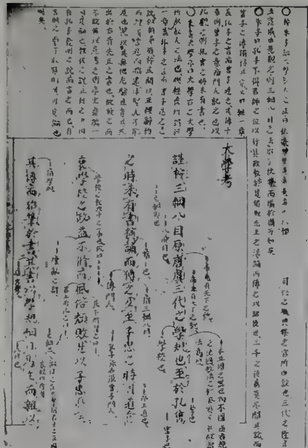
石川丈山手簡



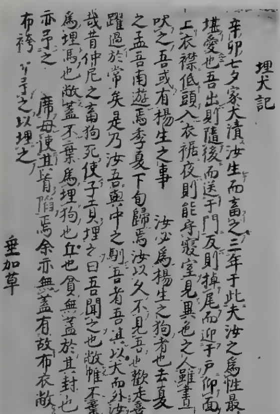
松永尺五眞蹟



三宅亡羊眞蹟



中江藤樹眞蹟



山崎闇斎眞蹟

（高野辰之氏藏）

られさうも無い。これも自己流だが、やはり僧家の筆に近く、どちらかといへば唐様である。紫野の大德寺に寓して、學ぶこと此に年ありといふのであるから、かうあるのが蓋し當然であらうと思ふ。

古儒のことを一に寛永儒者ともいふが、此の人たちは學習に急で、書道に遊ぶ程の時を剩し得なかつたと見るが穩かであらう。王陽明の信奉者中江藤樹も古儒の一人だが、著書の稿本など見ると決して書の人では無かつた。私は此の人の大字を見たことは尠い。門人の熊澤蕃山は手紙などは如何にも達筆で、自由極まる草體で讀下すのに惱まされる。大字は岡山にある學堂の扁額がそれだといふが、詩文額が三四掛つてゐるので、どれがそれだか分らないと聞かされてゐる。著書は三四遺存するが、詩文は傳はらない。和歌がやつと十三首か遺つてゐるだけである。これは政權に倚る林家の排他主義の犧牲になつたものと認める。林家がさうかうした所で、朱子學の覇道擁護說たるは掩ひ得るものでないのである。

古儒といへば山崎闇齋を忘れてはならぬ。一時剃髮したのだが、書體は五山風とは別である。唐様ではあるが、誰の書風とも識別し得ない。やはり自己流であらう。闇齋門の人達も講學に急で、文墨に耽る暇が無かつたのか、淺見絅齋・佐藤直方・三宅尙齋等の筆蹟は到底書としては見られない。それでも闇齋はまだ〳〵見られる方で、私は此の人の埋犬記一篇を藏してゐるが、犬好きの男だけに、

文も書も見られる。但し出自なんどはありさうには思へない。

## 三　元禄儒者

貞享・元祿から下は正德・享保までを元祿時代とする見方が行はれる。ちと汎稱に失するが儒家と書道の關係を說くには、別に支障が無ささうなので、暫く此の稱を用ひる。

此の時代は近代儒學の第一次煥發期である。而して朱子學は何といつても佛教味の加はつてゐる學說である。どうしても僧侶又は僧侶生活に親しみのある者が夙く領得する道理である。見よ惺窩・羅山・亡羊・闇齋等皆これである。又其の說を尊信しては其の書風をも模すに至るのは自然の人情である。けれども朱熹の書を眞似たといふは、仙臺藩で終つた內藤希顏だけであらう。希顏は始め朱子學、晚年に至つて王陽明學に轉ずるのであるが、轉じても朱熹の書風は終生改めなかつた。王陽明學者としては勿論藤樹より時代は少々後れてゐるが、元祿年中に歿した人で、比較的に古い人である。

元祿儒者に影響を與へた書は何といつても明の文徵明である。この人の書に傾倒したものは第一に北島雪山である。肥後の人で、江戸で地位を得たが、棄てて故國肥後侯に仕へ、陽明學を奉じたが爲に忌まれ、去つて長崎に行き、ます〳〵書名を馳せて元祿十年に六十二歲で歿した。晚年には張瑞圖

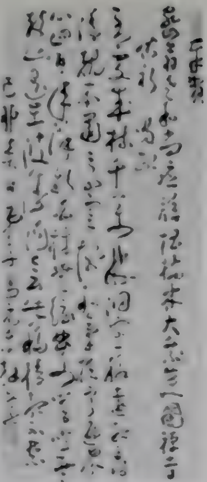
の書風を加味して佚宕勁剛、邦人にしては前に斯人なく、後にまた無しと評せられた近代の書聖である。

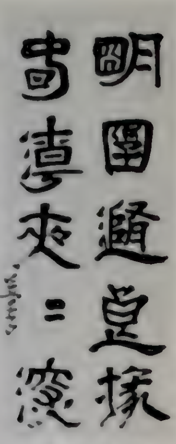
細井廣澤は此の人の門人である。雪山が江戸にある時、廣澤の歸去來辭の行書を見て、其の書才あるを知り、長崎に於て明の兪立德より授つた撥鐙法を廣澤に傳へた。立德は杭州の人、思宗の崇禎癸未（寛永二〇）に始めて長崎に遊び、それから度々來航して雪山の客舍に客たること三度、文徵明から其の子の文水に、文水から其の子の茂園に、茂園から門人の松舍に傳へ、松舍から立德に傳へた書法を雪山に傳へたのである。文徵明は明國第一の書家で、彼の停雲館帖の著者である。最も邦人の嗜好に合つた書風で、御家流の豐滿圓猷の文字にのみ慣れた者に取つては、字樣の奇勝、雄健な點が、たまらなく引附けられたのである。雪山は貯書の豐裕を以て知られた儒者であり、門人の廣澤も亦立派な儒者であるのに、師弟共に書名に掩はれて、學問の蘊蓄が認められなかつたのである。廣澤はもと文武に通じ、漢學方面は朱子學を修めて、始めは柳澤家に仕へ、後水戸家に仕へて、どちらも立派に務を果した人である。和歌・兵法・軍術・擊劍・柔術・槍術・天文測量を修め、書道にしても入木道の持明院流までも修めた博識家。それで寡欲果敢、義を重んじた人で、山陵修治に功績があつた忘るべからざる人である。此の人の俗簡を見ると、常人の文字と異なつてゐない。此處に斯人の心掛を

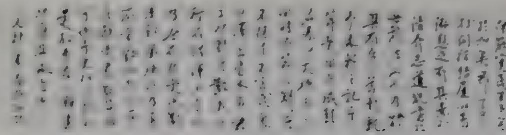
見るべきで、唐様で人を驚かさうなどとは思つてゐなかつたのである。

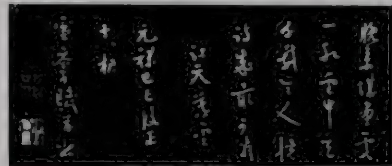
廣澤の門人は多かつた。關思恭・平林淳信・松下烏石・三井親和・河原保壽・飯田百川等があつて、後の明和時代にかけて文徵明の書風を弘めた。さうして此等の内には儒家として扱つてもよい人があつて、此の書體が一時天下を風靡したのである。

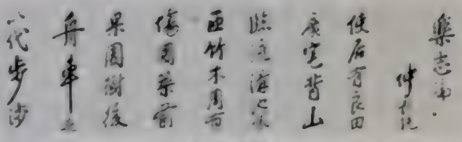
當時長崎が唯一の開港場で、支那文明や南蠻文明の輸入口であつた。淸商賈の來往が繁く、新古の法帖も舶載したが、近く明淸の書風は其の商估の書の上にも見ることを得たので、是に導かれて支那の時樣に赴くものが多かつた。此の頃、單帖は諸家のものが多く渡つたであらうが、歷代集帖としては宋の淳化法帖、明の文徵明の停雲館帖、董其昌の戲鴻堂法帖が主なものであつたらしく、價は廉くもなく、書を學べばとてやす〳〵と行はれたものではなかつたのである。而して此の當時長崎で二妙と稱せられたのは林道榮に高天漪であつた。道榮の家は代々長崎の譯家であつたが、道榮に至つて、文徵明及び董其昌の眞蹟から發明する所があつて書名を博した。雪山と共に六書（大篆・小篆・八分・隸書・行書・草書）の學を修めた先覺者であつて、細井廣澤や高天漪や池永道雲たちは其の後を追つたものである。此の道榮は朱子學にも精通して、萬治年中江戸に出たが、衆儒に忌まれて國に歸つて通事を勤め、寶永五年に六十九歲で歿した。道榮は甥の中野撝謙を養つて學問も書道も十分に敎

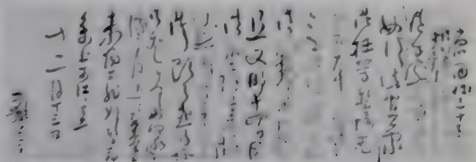


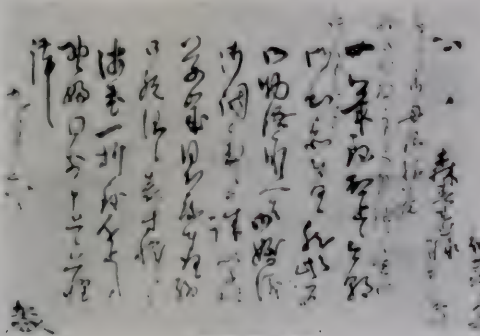


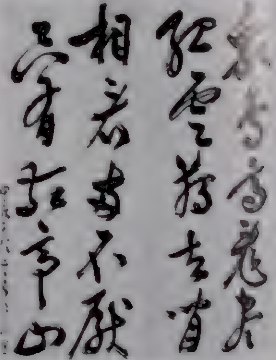












育した。撝謙の書の出自はわからないが、行草共に秀でてゐた。固より明風の書であるが、當代儒者の中にはたやすく其の比儔を見出せない。太宰春臺は最初此の人の門人で、後徂徠に從學するのである。春臺の手簡の文字を見ると溫雅で、撝謙の書と酷似してゐる。中字にも此の書體を見る。たゞ大字條幅の類に至つては張瑞圖の書風に成るものがあり、之を眞蹟だと認めてゐる人もあると聞くが、私は之を信じない。春臺の手簡はまゝ遺存するが、それは御家流でなく、一種の唐樣である。手簡と餘處行の書とは如何に違ふといつても、漢字は共通するものである。私は此の點から推して、瑞圖風の書に成るものは信じかねる。手簡に張瑞圖風のものを見たことがない。總じて春臺の書は稀覯で、研究の餘地はまだ／＼あることと思ふ。

長崎二妙の他の一人は高天漪である。幕府に仕へた儒者だが、幼時から戴曼公（明の遺士、黄檗僧獨立の前名）に永年の間學んだ。獨立は王履吉の書法を傳へた人で、其の千字文帖など見れば相當に法度を具へた書風である。天漪は其の破體を傳へたのである。太宰春臺はから評してゐる、「道榮は草書で知られてゐるが、筆法に變化が無くて天漪に及ばない。但道榮は諸體に通じてゐるのに、天漪は草書だけだ。此の點では道榮に及ばない。」と。成程天漪の書は概ね草體であるが、獨立の碑を見ると、天漪の楷書も見られる。しかしながら晉唐以來の書法から見ては、到底異樣なるを免れず、眞に

春臺のいふが如くである。それでも彼の徂徠をして天巧の書だけは一二幅得たいといはせたものである。此の書風は子の高頤齋が繼ぎ、澤田東江が一時之を奉じたが、其の後行はれなくなつた。餘り變化に富んで、字を弄ぶものと思はれたのである。

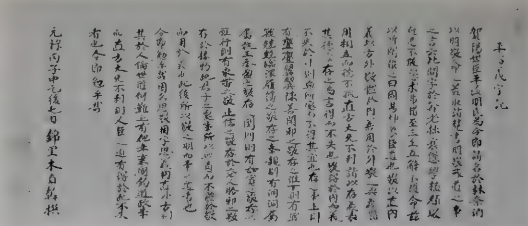
徂徠は古文辭學の首唱者、近代の書家、並稱して徂徠・山陽といふ。書の雅致からいへば、共に群を拔いてゐるが、二人共に楷書は其の短所であつた。殊に徂徠がさうで、此の人の楷に近い細字なんかはひどく見劣りがする。但し天巧の書に目を着けただけあつて、草書は當代無比の妙趣に富むと稱すべきである。明以前にかけて法を採つたとも思はれないが、明以來の諸家の風を陶冶して一風を立て、之を見る者をして熟視顧望去り難からしめる所の書を作つた。諸刻本の序または法帖にも秀絕の字を觀る。彼の天狗賦の如きは文の佶偭なるに似ず、文字は超俗快暢群を拔く。大字は得意とする所で無かつたのであらう、所傳の正しき物に傑作として許されるものは無い。特に運筆の卓越は尺牘に於て著しきを見る。水戸の彰考館に藏する安積澹泊に與へた漢文尺牘なども其の一に加ふべきであらう。其の筆路の自由と變化とに於ては日用俗簡の上に見るべく、山陽と共に仰視すべきである。

徂徠門下には能書が多く、詩文を以て立つ者が多い。統率者が既に書に趣味を有つ高手であつた爲であらう。書風よりいへば總じて文徵明風である。安東東壁はさうでも無いが、書名の高い大內熊

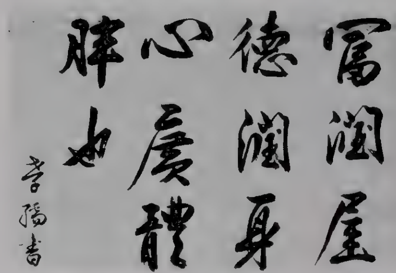
耳・山縣周南・平野金華等皆徴明を學んだものである。書は楷よりも行、行よりも草に嫻雅快適を覺えるので、とかく草書又はこれに近い行體を書幅に於ては迎へる。僧雲室は儒釋併せ學んだ人であるが、其の筆記にいふ、或時徂徠門の宇佐美灊水を訪ねて一文を囑して日を經て出來たが、灊水は文を草體で書いた。讀んで貰ふと、灊水は中途で讀めなくなつてしまつた。自分で書いたのであるが、草體が訓めなくなつてしまつたのである。可笑しい話だと記してゐるが、何かの誤りではあるまいか。灊水は決して草書が拙劣でない。蘐園でも一通りは書けた人で、其の字に雅味もある。服部南郭は字形も整つて、甚だ健筆であるが、面白味を缺くのが口惜しい。

　飜つて徂徠門以外に就いていふであらう。先づ朱子學派の松永尺五門の木下順菴は書には關心を有しなかつたらしい。書も文も決して巧でない。但し其の門から新井白石・室鳩巣・祇園南海・榊原篁洲を出し、更に安東省庵を出したのがえらい。確に大教育者である。白石の書に努めたことは自傳「折り焚く柴の記」に委しくある通りである。書蹟も雄健妍美であるが出自は知られない。多分諸家を渾成して作出した一體であらう。大字は嘗て見た事がない。以て其の經綸に心を寄せ、文墨を以て立つが如き小成に安んずる人でなかつた事が知られよう。鳩巣は眞儒、其の楷書の克明勁健は驚くべきであり、時に行體の書巻を見、草體の俗簡にはまゝ出逢ふが、儒家の口吻を漏らさず、平俗簡明であ

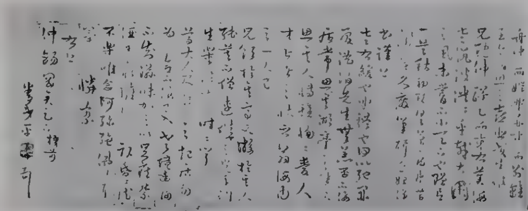
るが、謹嚴を失はずして、斯人を見るが如き心地がする。南海も超俗な書であるが、詩の巧なるには及ばず、其の山水畫よりは容易に入手寓目が出來る。篁洲は順庵をして、伯陽の華音、君美の典詁、師禮の經義、希翊の技藝は我が門の手足であると言はしめた。伯陽は雨森芳洲、君美は白石、師禮は鳩巢、希翊は卽ち篁洲である。篁洲の技藝とは先哲叢談によれば、鎗劍・射御・書計・醫占・茶香・圍棊・猿樂の類で、該博旁通であつたといへば亦珍しく多能の人といふべきである。篆刻のことは舉げて無いが、著作に正續印章備考があつて、其の技に長じてゐた。それだけに其の書は一般篆刻師の書風と同じく、嚴正ではあるが、暢達を缺いてゐて、筆法筆勢が所謂書家のそれの如くでない。けれども私は此の人の行書だけを見ていふのであるから、正鵠を失してゐるかも知れない。斯人が常にいふやう、技藝には四等の差別がある。一に下手。二に巧者。三に曰く上手、四に曰く名人であると。先哲叢談には、之を贊して、上下三千年、縱横一萬里、存する所是を出でず、學者の道に於ける亦然りといつてゐるが、眞に名言で、今以て藝苑には此の區分階級が用ひられてゐる。蓋しどの藝にもあてはまるのである。先づ以て千古動かすべからざる鐵則であらう。同門の士にはまだ雨森芳洲・向井滄洲・板倉復軒等多士儕々である。けれども何れも其の書は謹嚴を主として雅味を缺き、出自の誰であるかも判らない、所謂儒家の書蹟たるに過ぎないのである。



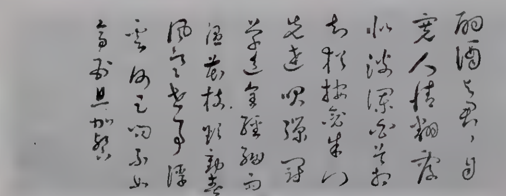
木下順庵眞跡



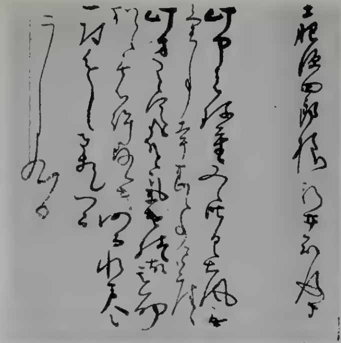
山縣周南眞跡



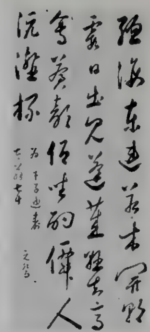
平野金華眞跡



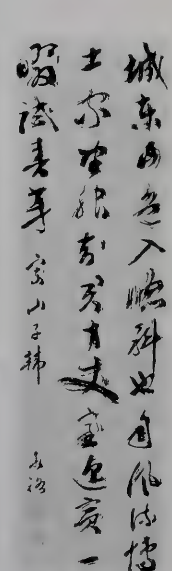
宇佐美灊水眞跡



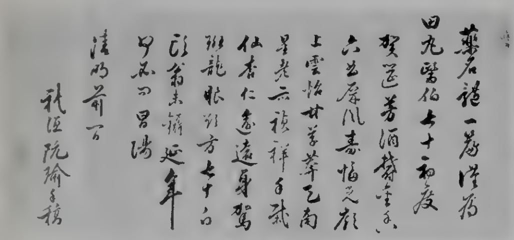
新井白石眞跡



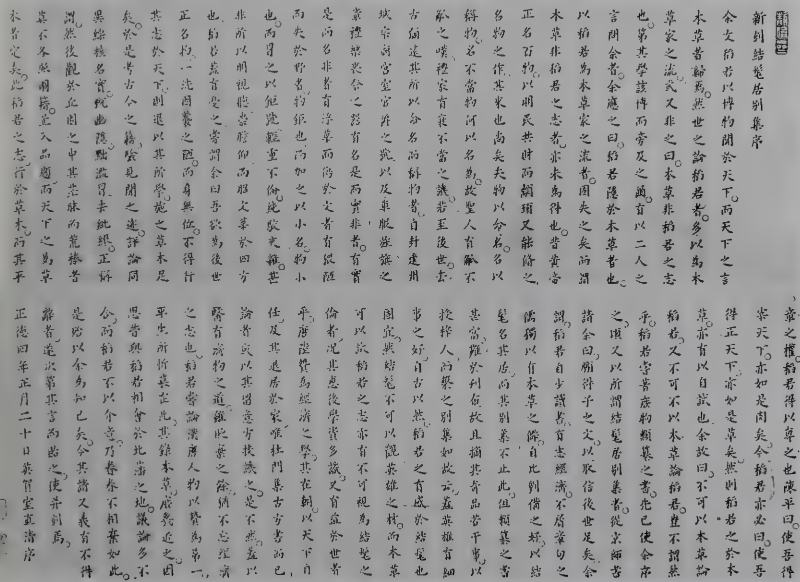
服部南郭眞跡



大内熊耳眞跡



祇園南海眞跡



室鳩巣眞跡

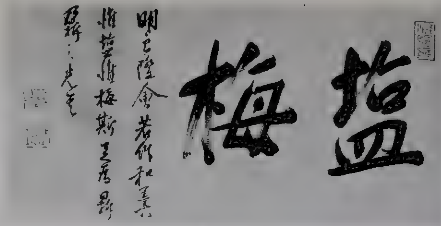
（高野辰之氏藏）

嶄然頭角を抽んでてゐるものは柳河藩士安東省庵である。たつた二百石の祿の全半を割いて明の遺士朱舜水に贈り、舜水が水戸に聘せられて後、如何に厚聘重遣の目的の下に招いても東上しなかつた高士である。其の行書は所謂儒家の書であるが、書道には精到な見を有してゐたと思ふ。私は斯人が懷素の秋興八首を臨した長卷を見て、之を手放し難く、所藏者に請うて藏弆の中に加へてゐるが、同好の士で見て驚かないものは無い。屢〻長崎に出て、不知不識の間に誘掖を書法の上にも獲得したのであらうか。

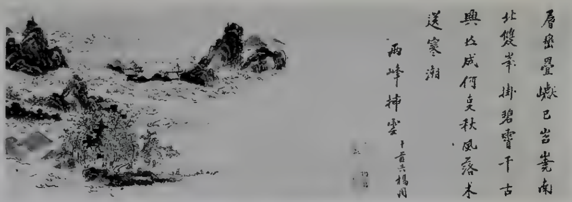
此の他當代儒者で書に長じた者を物色すれば、他に那波活所の子木庵、活所門人の伊藤坦庵、闇齋門系の佐久間洞巖、特に古學派伊藤仁齋の長子、伊藤東涯、末子同蘭嵎であらう。木庵・坦庵の書は共に勁健で、恐らく出自も同じからうと思ふが、誰人の書を法としたか不明である。東涯が坦庵を哭する語の中に「翰墨法度嚴、詞采光燄長、隻字初落〻紙、人間爭珍藏」の句があるが、書蹟の傳はるものが尠い。越前侯に仕へて、幕府の儒官を望むと讒せられて、福井城の一室に幽閉されること三年の久しきに及んでも、讀書三昧に日を送つて、恨みがましいことを言はなかつた人だけに、其の筆録類を見ても謹嚴自恰は行き互つてゐるのである。洞巖はもと繪畫に長じてゐたが、學に志して山崎門の遊佐木齋に就いた人である。元來書才があつて、篆書や行草の書にも長じてゐた。人木道の持明院

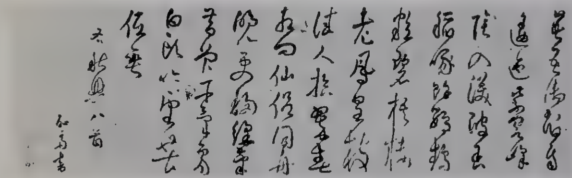
流を學び、參するに古帖を以てしてあの妙を致したのであつた。新井白石との間に交はした新佐手簡に白石の書七十六通があるが、二者の間に一面の識もなくて書信だけで數十年相交つたのであつて、白石は江戸、洞巖は仙臺に仕へてゐたのであつた。古人の虚襟契素は奇事といふ以上に、尊敬すべきものであらう。

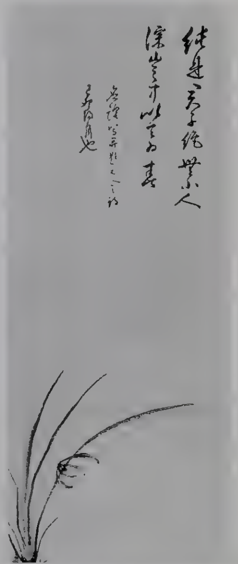
伊藤東涯は經義に深く、行は方正で、父仁齋を嗣いで紹述の偉功を樹てた人、徂徠と東西時を同じうして出で、徂徠は散々に東涯の惡口をいふが、東涯は全くこれと異なつた。唯一度菅麟嶼が徂徠門を辭して東涯門に入るを送つた序を見て、徂徠の文は鬼面をかぶつて子どもを恐喝するやうなものだと言つただけであつた。まさに古君子人であつたのである。書は如何にも工で、人々が爭つて之を求めたのである。先哲叢談には、經語を錄するには必ず楷書を用ひたので、詩賦諸語に行草で書いてあると、人が疑つて親筆でないとするとあるが、必ずしもさうでない。傑出文字は其の行書であつて、經語にも行書を用ひたものがある。先年孔子二千五百年祭を斯文會で行つた時、上野の美術協會で儒家筆蹟の展觀を行つた。此の時京都堀河の伊藤家から仁齋先生以下の眞蹟の出品があると、仁齋書として誇稱して出された書幅が忽ち影を潛めたが、東涯は必ずしもさうでなかつた。それが皆行書であつた。要は其の書の歛美と謹厚と併せ見られる所のあるものを採るべく、時流に卓絕した巧手であつ

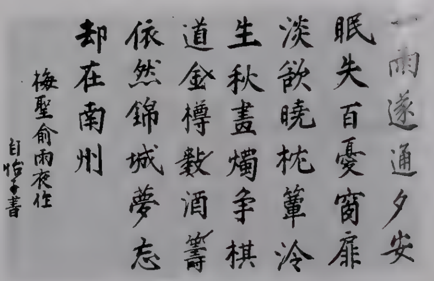


朱　舜水眞蹟

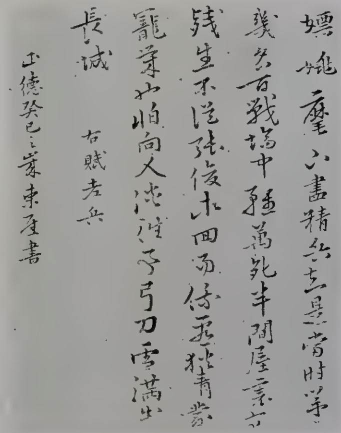

佐久間洞巖眞蹟

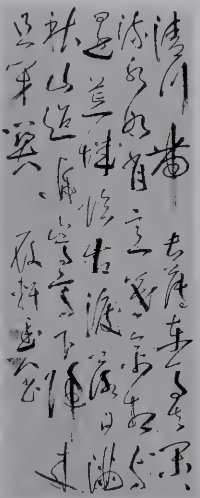

安東省庵眞蹟


伊藤蘭嵎眞蹟



伊藤坦庵眞蹟


伊藤東涯眞蹟


中井履軒眞蹟

（高野辰之氏藏）

たのである。出自は定め難い。諸法帖を渾融して一家の風を作つたものと見るべきであらうが、趙松雪の風韻は遺存する。伊藤家は仁齋を除けば皆さうである。又自筆の手簡を見るに、決して巧を弄せず、謹嚴平俗其の人を見るが如くである。此の點でも徂徠とは正反對である。書は其の人を現すことは爭はれない事實である。人は又言ふ、東涯の書といふものには實弟蘭嵎の代筆になるものが多いと。兩兄弟の書は近似してはゐるが、自ら少差がある。共に謹厚で、法度を紊るまいとしてゐることは同一であつて、巧拙に於ては兄が勝り、雅味に於て弟が稍〻まさる。

玆になほ一人の漏らすべからざる書の愛好者がある。それは大阪の懷德書院の最初の敎授三宅石庵で、彼の三宅觀瀾の實兄である。頗る顏眞卿の法を得たと稱せられて、楷書には顏法に成るものがある。草書が優つてゐるが、それには顏法もあれば、懷素の筆意をも見るのである。但此の人は決して款印を施さないので隨分見誤ることがある。石庵の時に助敎であつた五井蘭洲も亦書に巧であつた。後れて書院長となつた中井竹山・履軒兄弟も知名の儒者であるが、書は履軒の方がすぐれてゐる。草書に秀でたやうにいふが、行書に心をこめた作を見る。出自といふよりは自家の書といひたい風である。

元祿儒者の最晩年、及び其の門人等の盛期ともいふべきは寶暦から明和・安永の頃で、文徵明から遡つて、晉唐の書風を模した時代である。

## 四　寶暦儒者

林家は代々書に拙であつたとはいへ、多數門下生の中には秀でたものが無かつたのではない。稍〻古い所では人見竹洞がうまく、鳳岡門下の桂山彩巖の書は注目されたものである。彩巖は御書物奉行で交友もよかつた。書風は歐陽詢あたりを模ねたのでもあらうか。楷行に勁健で謹嚴な書を遺してゐる。人にそれ程認められずに來たやうであるが、詩に長じてゐたので書が一層引立つ。同門の秋山玉山は近代屈指の詩人で、書も亦優秀である。所謂儒家の書でなく、詩文家の書として卓異、容易に近寄れない感じがする。渾融玉成した書であると評したい。二王以下諸法帖を師としたものらしい。又當代書の鑑別家として第一人者である。次いでは井上蘭臺が草書に勝れてゐた。出自は知られないが、書道には深い關心を有つた人であつた。

蘭臺門の高橋道齋が澤田東江と共に上野の多胡の碑の紹介に力を致したのは寛延寶暦年中のことである。此の人が故郷の下仁田へ歸る時、當時著名の儒家達は其の行を送る序や詩を送つた。それが今

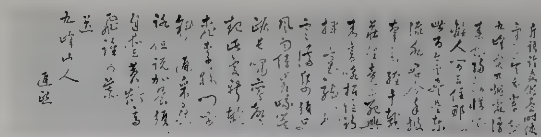
大部分遺存する。同門の澁井太室・關松窓、交友の井上金峨、瀧鶴臺・中根東里等の外に南臺・東江を合せて十幾人かの筆蹟を見ることが出來る。就中語るべきは鶴臺と東里で、東江のことは特に說明しなければならぬ。鶴臺は周防の人で、山縣周南門の儒醫、翰墨に長じて其の書は王羲之を學んだものとして稱せられた。義之としては剛勁に過ぐる嫌ひはあるが、字體の上には努めたものであつた。師の周南は文徵明、門人の鶴臺は王羲之、書は人によつて好みを異にする一例にも擧ぐべきである。新井白石の門人梁田蛻巖も王羲之の書風を景仰して書名を馳せ、詩書雙絕を以て稱せられた。且つ氣慨のあつた傑儒であつたのである。中根東里は始め徂徠に學び、次いで鳩巢に就いたが、晚年陽明學に轉じた人である。もと僧侶で、妻も無かつたが、弟の遺子を鞠育し、初步の文字學習用として「新瓦」を著はし、始めて範語法を工夫した人、恐らく吾が邦に限らず、世界に於ける範語法の率先者であらう。躬行を力めた純儒ともいふべき人であつて、其の書も甚だ謹嚴で、法帖を學んだことは疑が無いが、出自は知られない。俗簡は力めて平俗些の衒氣を見ない。東江は高頤齋に學んで、隷草に長じてゐたが、四十歲頃になつてから其の書の古法に背くのを知つて、改めて王羲之・王獻之の書を唱導した。惜しいことに字形の近似に止まつて風韻はてんで及ばなかつた。人物の高下と時代の前後とに因るもので、如何ともすることが出來なかつたのである。私がかう述べた所で、決して東江を輕視

する爲ではない。經史を講究しても時流の門には入らずして鳳岡の門に入り、程朱の學を攻めても山縣大貳と共に古註を講習した人である。また膂力があつて、金峨が火災に遭つた時、赴き救うて米二俵を挾んで運んだといふ逸話もある。幸か不幸か容止が美しく、婦女の愛を受け、柳橋に近く住み、北里にも出入して吉原大全を著はしたが爲に、猥交遊冶の徒と認められたが、書道に關する著書も多く、六書の研究も深ければ、金石文の訪索にも努めた人である。

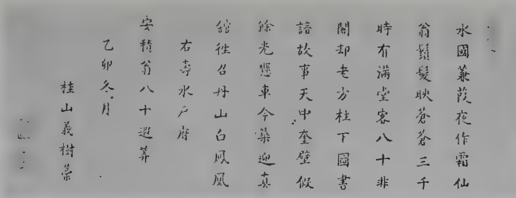
なほ回護の辭を加へようと思ふ一人がある。それは龍草廬である。伏見の產、京都の筆商に養はれ、餘暇を以て經史を研究し、殊に詩と歌とに志し、二十五歲にして儒となつた。溫雅風流で、師道の嚴勵を缺いたので、動もすれば非難せられた。徂徠派を慕つて其の詩文派に入るべき人であるが、唐明詩人の跡を模して詩に一機軸を出し、書は李北海・趙子昂を模倣して婉麗を以て知られた。三十七歲にして彥根侯に聘せられ、第宅を城中に賜はり、其の講筵に侍する者は六百人もあつた。羨まれ且つ嫉まれもした筈である。十八年を經て致仕して京都に歸り專ら著述を事として詩書の需には應じなかつた。致仕の時詠じていふ。

急流勇退去江城　京國卜居篇再成　一扇一巾家四壁　依然往日臥龍生。

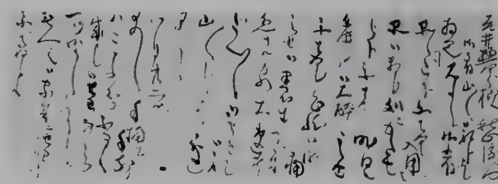
と。文を作り字を書くに謝儀の額を定めて後筆を執つたので嘲られたが、私は恬淡を粧うて內心謝儀



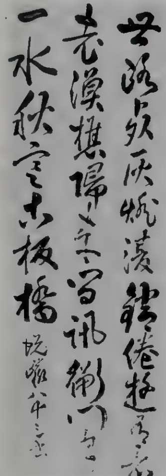
井上蘭臺眞蹟


水國蒹葭夜作霜仙
翁鬚髮映蒼蒼三千
時有滿堂客八十非
關却老方柱下圖書
諳故事天中奎壁似
餘光懸車今築迎嘉
館徂名丹山白鳳凰
右壽水戸府
安積翁八十迎筭
乙卯冬月
桂山義樹

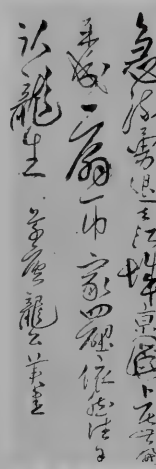
桂山彩巖眞蹟



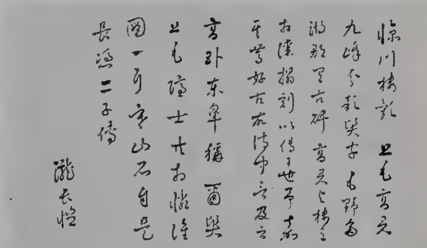
秋山玉山手簡



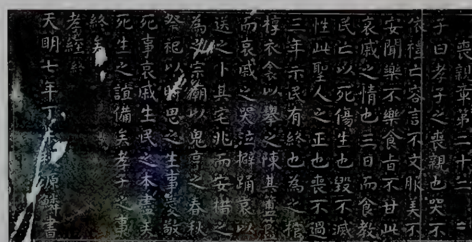
梁田蛻巖眞蹟



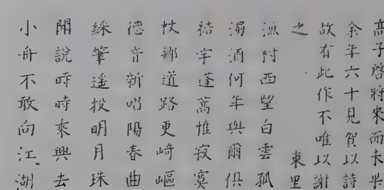
龍草廬眞蹟



瀧鶴臺眞蹟


喪親章第二十二
子曰孝子之喪親也哭不
偯禮亡容言不文服美不
安聞樂不樂食旨不甘此
哀戚之情也三日而食教
民亡以死傷生也毀不滅
性此聖人之正也喪不過
三年示民有終也為之棺
椁衣衾以擧之陳其簠簋
而哀戚之哭泣擗踊哀以
送之卜其宅兆而安措之
為之宗廟以鬼享之春秋
祭祀以時思之生事愛敬
死事哀戚生民之本盡矣
死生之誼備矣孝子之事
終矣
孝經終
天明七年丁未　源鱗書

東江源鱗書蹟


高子啓將來而未半
余年六十見賀以詩
故有此作不唯以謝
之　東里
漁村西望白雲孤
濁酒何年與爾倶
結宇蓬蒿惟寂寞
杖藜道路更崎嶇
德音新唱陽春曲
綵筆遙投明月珠
閒說時時來與去
小舟不敢向江湖

中根東里眞蹟

（高野辰之氏藏）

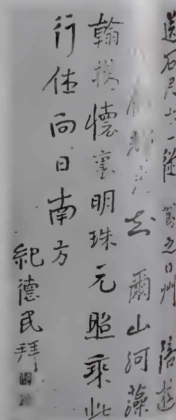
の多きを望み、其の支拂の遲きに惱む者に比して、其の請求の大びらであつたのを壯とする。書は「寫出風前春柳枝」などと六如にはくさされたが、決して媚嫵に失してはゐない。

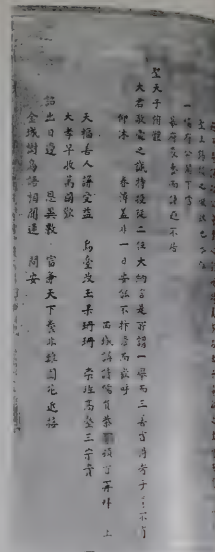
## 五　寛政儒家

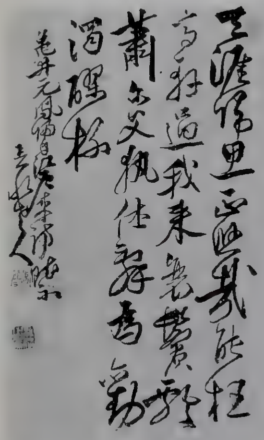
江戸文化の爛熟期なる安永・天明の田沼時代を過ぎ、松平定信が執政となつて治蹟を擧げたのが寛政時代である。朱子學が官學と定められ柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里が用ひられた時代であつた。此の三博士は書道にも通じて筆蹟が秀でてゐた。栗山は東坡を慕つて行草の書に東坡の書風を追ひ、精里楷書はごく少いが、顏達謹嚴な書を遺してゐる。二洲は筆蹟は少いが味のある自家の書をかき、精里は最初は趙松雪（子昂）から米芾に入り、又董其昌を學んで、筆蹟も麗はしく、書道の通達者であつた。三博士の中では書が一ばん傑出してゐると稱せられる。此の人達と合せていふべきは賴春水・賴杏坪等賴家の書である。もと趙陶齋を學んだもので、陶齋は文徵明と子昂との流を渾融し、晩に米芾の風を加味した安永天明時代の書家であつた。春水は殊に書翰に長じ、詩文も巧で、且つ交際上手であつた。子の山陽は此の父の御蔭に因つたことは尠くない。杏坪は春水に及ばないが、雅健喜ぶべき書を遺した。

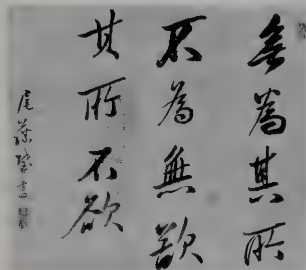
寛政は古文辭學派の凋落時代で、此の派では筑前の龜井南冥父子ぐらゐを考へればよい。南冥の書は北島雪山から出たものと認めるが、必ずしも時流を追はない勁強な書であつた。當時儒者としては朱子學派の人達ばかりが迎へられ、反官學者として塚田大峰・山本北山・龜田鵬齋、京阪では皆川淇園・村瀨栲亭・巖垣龍溪等が先づ指を屈せられたが、大峰・北山が書の人でなく、鵬齋一人が、拔群の能書であつた。鵬齋は始め三井親和に學び、後楷書は柳公權、草書は張旭・懷素あたりをも模してあの書を作成してゐる。詩文には固より長じてゐたので一層世に喜ばれた。殊に草書が名高く、蚯蚓書とて喧傳されたものであつた。京阪の三人も書に通達してゐた。淇園だけは諸家に互つてゐるが、栲亭は東坡、龍溪は子昂風であつた。京都に殊に子昂風が行はれたが、これは京都氣風に合つたことと、江戸時代以前よりの禪僧から傳はり、公家や醫者にも子昂の書風を奉ずる者が絶えなかつたことによるのである。

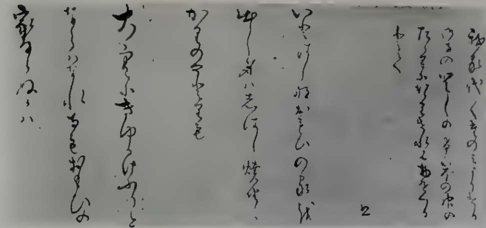
寛政は一體書道の行きわたつた時代で、東の細井平洲にしても西の菅茶山にしても、書の人では無かつたが、雅味に富む字を書いた。江戸の大田南畝は張瑞圖風を喜んだ達筆で、自由自在で巧なものであつた。假名もうまく書きこなした。少し古いが西依成齋は闇齋派の學者で、苟も利に就かなかつた人であるが、書の古勁を以て稱せられた。恐ろしく長壽で、寛政九年に九十六歳で歿した。書は一

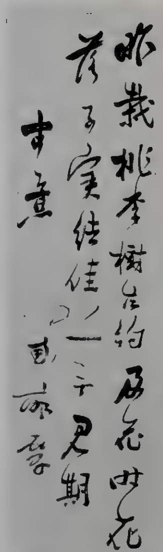

細井平洲眞蹟

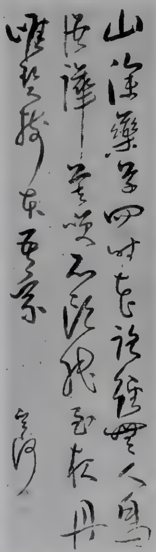

栗山眞蹟

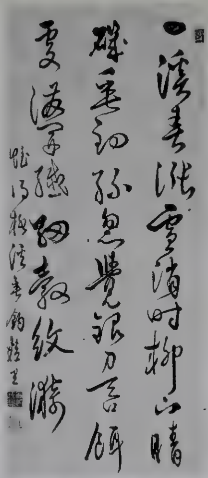

頼春水眞蹟

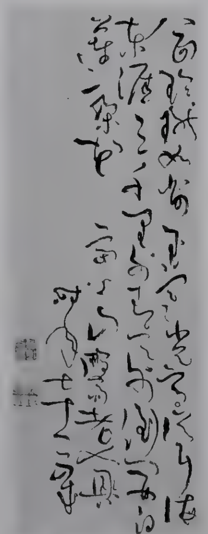

尾藤二洲眞蹟


岡田寒泉和歌眞蹟


大田南畝眞蹟


菅茶山眞蹟


古賀精里眞蹟


龜田鵬齋眞蹟

(高野辰之氏藏)

家の風だが、法帖出とは思はれさうも無い。私は此の人の草書ばかりを見た。日本詩史の著者の江村北海、その實弟清田儋叟の二人は天明年中に歿して、寛政儒者といふには一寸古いが、やはり書は巧であつても、出自などはありさうも無い。それでも時の流行で、法帖に就いたことは疑が無い。先づは子昂出でもあらうか。

序を以ていふが、書道ばかりは高年に及んで、枯淡清高の作を遺し得る。彼の繪畫・彫刻・音樂等は視力及び體力の關係で、五六十歲以上では傑作を望み難いが、書道はこれに反する。儒家でも知名の士で、書名の高かつたものは概ね長壽を保つた。とはいへ、此の成齋だけの年に達したものは無く、後に說く佐藤一齋の八十八歲、伊藤坦菴・梁田蛻巖・中井履軒・貫名海屋等の八十六歲、伊藤蘭嵎の八十五歲、佐久間洞巖の八十四歲、三井親和の八十三歲、安東省庵・松下烏石・大内熊耳・菅茶山・後出の市川米庵・立原翠軒等の八十歲、凡そかういつた高齡者が書名を博した。龍草廬にしても七十九歲、廣澤の七十八歲、南郭・鳩巢の七十七歲といふが如く、老年迄筆を執つたものに書名の高い者が多いのである。菱湖・東涯の六十七歲、徂徠が六十三歲、北島雪山の六十二歲などは早死の方であつた。以て書道ばかりは長命者の方が熟成したことが知られるであらう。

## 六　化・政以降の儒家

文化・文政以降幕末時代にかけて、詩書はますます行きわたつて、詩人は各地に輩出した。文化の今四家は市川寛齋・柏如亭・大窪詩佛・菊池五山であつたが、天保には三十六家を擧げ、文久には二十六家といふが如く、諸國に詩文の人が多く、此等の人は謹嚴な法帖風を脱出して、風雅味の多からんことを努めた。而して書で群を抜いてゐたものは、賴山陽・梁川星巖・貫名海屋・篠崎小竹・齋藤拙堂・廣瀨旭莊・鷲津毅堂等であつた。

山陽は立派な史論家・詩文家・書家である。特に書の一面からのみいへば、少時は父春水の風を學び、而して後は專ら董其昌に模し、晩年は米芾法帖に就いて、いつも山陽一流の雅致に富む文字を作成した。殊に父春水が達筆にして細書に長じた風を繼承して行草體もてものする尺牘の巧妙自在なることは諸家に優り、維新志士をはじめとして、書を解すると解せざるとを問はず、相率ゐて其の書を模倣せしめたことは近世の第一人者であつた。之を前時に求めて徂徠以外には並稱すべき人を見出さない。星巖は詩人たると共に志士の領袖、書は卷菱湖風より出でて自家の書を作り出したる人、貫名は空海の書より發明してあの一流を大成したと傳へるが、諸家の法帖を玩味して渾融玉成したことは

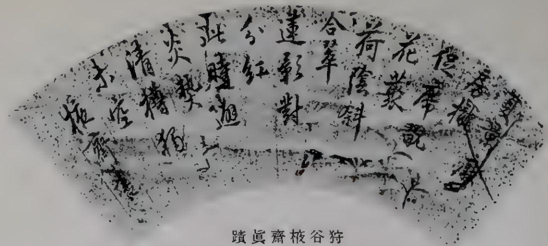
字表に出てゐる。小竹に至つては元明清の書を玩味して晉唐に遡つた。媚嫵の風がないでもないが、行草の巧なるは山陽と併稱された。手簡の巧なことも山陽と比肩し得べく、元來同好同游の間柄であつた。拙堂以下は出來不出來はあつたが、或は詩により、文によつて、書名をも高からしめた人たちであつた。

專ら儒家として考ふべきは精里の子穀堂・侗庵・猪飼敬所・佐藤一齋・松崎慊堂・安積艮齋・安井息軒・鹽谷宕陰等であらう。穀堂・侗庵が父の餘風を受け、敬所は決して書の人でなかつたことも辯を俟たないであらう。一齋は少時三井親和の流を學び、中年それより脫してあの特色ある一風の書となつたのである。筆翰の巧妙を以ては許しがたいが、健勁達筆を以て稱すべきである。慊堂・艮齋は稍〻書に慣れたといふべき程度、息軒・宕陰に至つては、稚拙惡筆を以て知られた。唯其の學力と筆蹟の稀少なるとを以て珍重せられる。而して當代は書道の最も行はれた時代であれば、右に舉げた著名儒者の他に、書の俊秀儒家は所在に之を見たことであらう。書道復興の途に就いた今日であれば、次第次第にその人達が見出されるであらう。

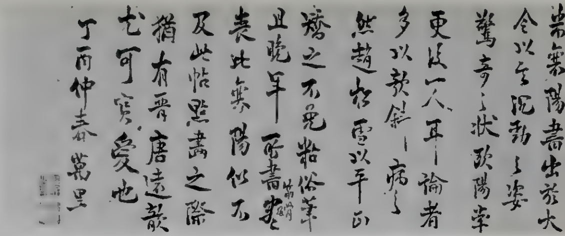
當代の書及び文字の源流に就いても研究せられたのであつた。雪山以來の六書の研究は固より、說文も研究せられて、松崎慊堂・狩谷棭齋・山梨稻川を說文三家と稱へた。棭齋・稻川の二人は特に書

にも長じてゐた。樜齋は専ら屋代弘賢に就いたが、歐陽通もやれば虞世南にも模する、詣るところ碑刻法帖よりして晉唐の書を極めたのであり、天性書才に富んでゐたのである。書論も確かで、本居門の竹村茂雄に與へた長文の手簡が之を證する。唐代以下の書を品隲して人をして頷かしめるものである。稻川はまた說文緯の著者、書の研究にあつては當代無比であり、書も亦勁健儁秀、容易に人を近寄らしめなかつた。書家の卷菱湖は當代無比の聲韻訓詁通であつたが、稻川にだけは一疇を輸したのであつたが、技は稻川を凌いで士庶の間に弘く行はれた。一體文化・文政・天保は書道の通達者が轡を並べて馳せた時代で、廣澤門の飯田百川が初めて董其昌を奉じ、南畫の大雅堂も其昌に模し、書僧の寂嚴も之を加味したことは前代に屬するのであるが、當代では中井敬義が董堂と稱して董其昌風の書の弘通に努めた。秦星池は孫過庭の書から入り、來舶清人の書を參酌して、古帖の模倣によつて楷行の書に名を得た。市川米庵は米芾の書を奉じて肥厚の書に名を博し、諸侯士太夫の間に喜ばれた。けれども私をして言はしむれば、米庵は米芾の書の肉を學んで骨に達しなかつたものであつて、其の骨髓を得たものは豐後の帆足萬里であつた。又小島成齋は虞世南を學んで、書名が高かつたことも漏してはならぬことであらう。

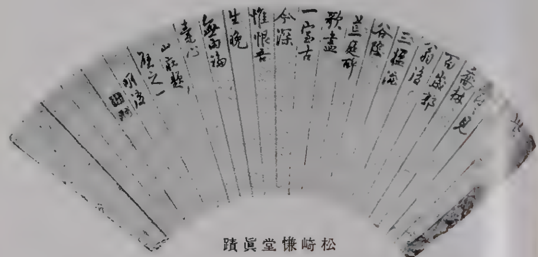
以上說く所は水戸儒者に觸れてゐない記述であるが、水戸は支那法帖の飜刻を始めとして、書道關



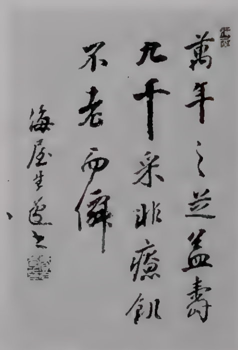
狩谷棭齋眞蹟



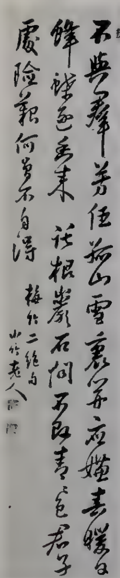
帆足萬里眞蹟



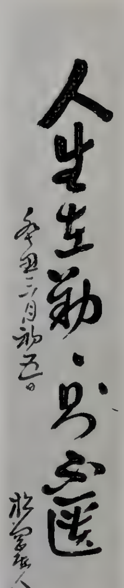
松崎慊堂眞蹟



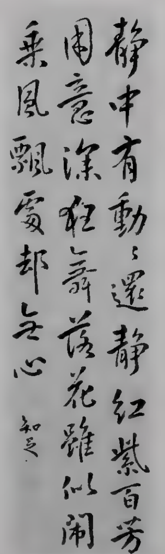
貫名海屋眞蹟



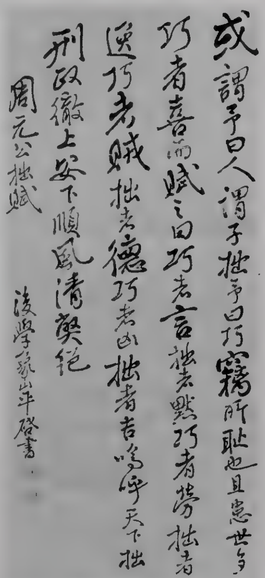
篠崎小竹眞蹟



豐田天功眞蹟



小島成齋眞蹟



佐久間象山眞蹟

（高野辰之氏藏）

係の書を板行した。承裕閣帖、草露貫珠等がそれである。これが書道界を利したことは忘るべからざる功績である。水戸儒家として、專ら近代より拾ふべきを思ふが、まづ立原翠軒あたりより始むべきであらう。立原は藤田貞正と共に承裕閣法帖を編纂した人である。自然諸法帖に潛心したことが多い。書も巧であつたが、其の出自は定め難く、門人の藤田幽谷も達筆で、其の人物の如くに書も亦正路をたどつた。子の東湖の書は子昂に模し、幽谷門人の會澤正志は東湖よりも書は優つてゐると見る人がある。蓋し會澤は諸法帖を味つて自家の書を作り出したのである。豐田天功は晩年王義之を學んでゐる。書は全く人の好惡に任すべきもので、其の書を見て其の人を卜することは砂上偶語に陥すべき處だけは十分にある。たゞ彼の大鹽中齋の書だけは其の人を現して雋異勁健と評すべきであつた。

幕末紛擾期に東奔西走を辭さなかつた志士の中には儒家の人も少くは無かつた。此の中詩書に長じたものは先づ佐久間象山であつた。佐藤一齋の門人で、陽明學派の人、識見高邁、夙に開國論を唱へて、一命を京都に殞したのは人の知るところ、顏眞卿の書、殊に爭座位帖を奉じて筆蹟の高雅を以て喜ばれるのは周知のことである。門人の吉田松陰は書の人でなく、書道に關心を有つ歲月を剩さなかつた人で、志士として終始した立派の人である。他に安政の大獄に坐したものでは藤森天山、これは菱湖風に近き能筆、關東儒者では恐らく第一であらうといふ。次いでは坂下門の變に連累者となつた

大橋訥庵、これは全く菱湖の書を學んだ人、養子陶庵も亦能筆の人であつた。此の他儒家の人として は天忠組の松本奎堂、これは書も巧であつた。志士として著名な梅田雲濱・橋本景岳、櫻田志士の人 達は國事を憂へて、文墨に思を馳する時日を有たぬのであつた。却つて名も無き人に得難い書家があ つたことであらう。

明治に入つては十年代に儒者と目すべき山田方谷・東條琴臺・古賀茶溪・大槻磐溪・林鶴梁等が歿 した。此の中、書に關心を有ち、相當の通達者としては方谷・磐溪・鶴梁の三人を擧ぐべく、なほ中 村正直・島田篁村・川田剛等が儒家として明治中期迄生き存らへ、書道に達したことは事新しく說述 するまでもあるまい。

## 七　結　語

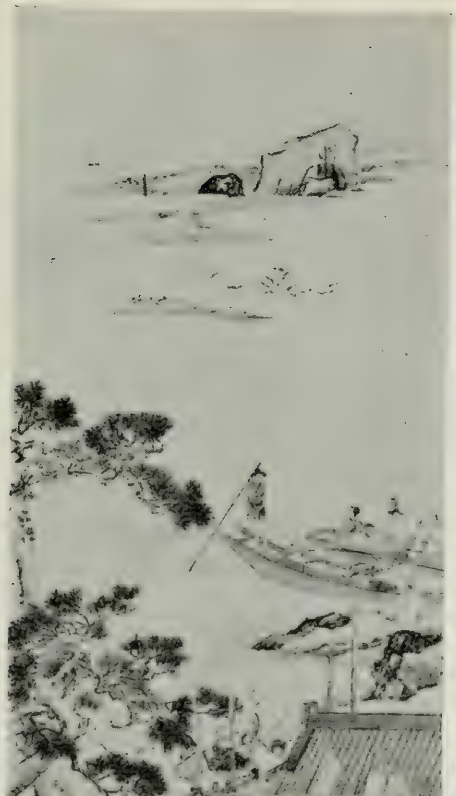
王羲之・王獻之の書の我が國に傳はつて、之を奉じたことは奈良朝以來のことで、古く且つ久しい ものであつたが、鎌倉期の禪宗傳來以後は蘇東坡・黄山谷・趙子昂・張卽之を法とした。これが五山 時代である。江戸時代に入つては明人の書、殊に文徵明・張瑞圖・王履吉・祝允明・董其昌、遡つて は米芾、改めてまた王羲之等晉唐の書、是等を法として模倣したのであつた。それに來舶清商の書も

參考とせられた。總じて儒家の書は彼土の書を仰いで、我が國の入木道の如きはさう顧みなかつた。邦人の書のすぐれたものは之を模倣したが、假名はさう巧みでなかつた。

明治維新當時は菱湖と海屋との書風が天下を風靡してゐた。それが清國公使館員楊守敬が漢魏の碑碣文字の長を說くに及んで、我が國は之に傾聽して、書家の書は爲に一變した。時は當分歐米崇拜に馳せて、書道は輕んぜられた。儒家と稱せられたものは故人となつた。此の事はすべて新しくして、世人の知るが如くであれば、私はこゝに筆を擱く。近來書道の興隆を見るに至つた。明治中年以後のことは改めて稿を立てるであらう。凡そ書道を說くには緇流の書、醫家の書、國學家の書にも觸接して說明すべきである。それは他日又稿を改めて說くであらう。（完）



狩野探幽筆遺倖謝相圖



渡邊崋山筆于公高門圖

# 江戸時代の儒學と繪畫

## ――特に探幽と崋山とに就て

瀧　精　一

江戸時代以前に於ては佛教が藝術と深い關係を有してゐた。鎌倉以前は言ふに及ばず、足利時代に於ては佛像彫刻も將た佛畫も漸く衰退の氣味であつたが、それは禪宗が興隆した爲めであつて、禪宗は寧ろ舊宗派に屬する古典的藝術には興味を持たなかつたものであるが、その宗旨の繪畫や諸工藝の上に及ぼした感化は甚大にして、その宗旨に特有の靜寂枯淡の風趣を發揮せしむるに於て徹底したものがあつた。大和畫に對立して起つた漢畫は殊に禪宗趣味であつて、狩野の畫も亦その範疇から免れることは出來なかつた。然るに江戸時代に入つて形勢は全く一變し、佛教は形の上に於ては普ねく其勢力を有してはゐても、實際に於ては我國の文教を背負つて立つ程のものではなくなつた。德川氏の佛教に代へるに儒學を以てして我教學を更新せんとした計畫は、文藝美術の上に影響する所大なるものがあり、繪畫の如きも足利時代に於けるとは異つた新面目を發揮するに至つたことは明白である。

言ふ迄もなく儒學の振興は一般漢文學の發展を來したのであつて、その藝術に對するや儒學そのもののの感化よりも、廣い意味の漢文學の感化に於て寧ろ見るべきもの多きを感ぜしむるのである。例へば文人畫の流行の如きは恰かも足利時代禪畫の流行に代つて生じたかの如きもので、正さしく是れ徳川時代の文化政策に順應する性質のものたるに相違なく、勿論漢文學の流行と相俟つてはゐるが、併しながらその悉くが必しも儒學的感化のものと考へることは出來ない。儒學的のものも勿論ありはするが、その數に於て決して多いとは云へぬ。眞に儒學的なりと認むべき繪畫の著しきものは文人畫よりも、先づ以て徳川幕府に仕へる繪師の畫の中に求むべきである。幕府に仕へる繪師の中でも、住吉派の畫家の如きは主として日本的な畫題を畫くを職としたるが故に、是は寧ろ除外すべきである。然るに狩野派に至つては幕府繪師としての地位も住吉派などよりは一段と上に位したのであつて、優遇をも受けたが又幕府の政策に準據してその技藝を揮ふべき關係に在り、儒學感化の如きも此畫派に於て殊に顯著でなければならぬ。併しながら之を狩野派以外に求むるとすれば、假令それは思つた程ではないにしても、文人畫派中に見出されねばならぬ。依て今私は狩野派と文人畫派の兩方から各一人の代表を選んで考察を試みようと思ふが、代表となるべき者は狩野派の探幽と文人畫派の崋山の外なからうと思ふ。依て以下二人の畫に就て聊か卑見を述べることにする。

＊

探幽狩野守信は慶長七年京都に生れて、早く父を失ひしを以て二弟と共に伯父光信の門人興意の教を受けて書道を修め、幼にして既に抜群の譽を博したが、時恰かも徳川氏が文教復興の事業に力を用ひた時であつて、畫家として第一にその選に當つて江戸に招聘せられたのが此人である。卽ち彼は元和三年十六歳にして幕府の繪師となつて、鍛冶橋門外に屋敷を賜はつた。爾來彼は盛に筆を揮つたが、斯道の鍛錬は歳と共に進み、寛永の末年薙髮して法眼に敍せられ、號を探幽齋又は探幽と云ひ、遂に江戸時代の一名家たるの地位を獲得するに至つた。探幽は學問や文藝に於て賞揚すべきものはないが、林道春が夙に其畫を推賞した事は、羅山文集に記する所や又彼の畫いた畫に道春の書した贊などを以ても考へられるが、探幽も亦道春を先輩として崇め、其教を請うたことは想像するに難くない。探幽の一周忌に碑文を書いた林鵞峰も自から言ふが如く、幼時より探幽と相識つて江戸に來てからも常に往來してゐたのである。是等の事實から考へても探幽が夙に儒學思想を以て涵養せられた事は想像するに難くない。

そも儒學の畫に要求する所は何であるかとならば、要するに勸戒である。松平樂翁が花月草紙に說く所も正さしくその趣意であつて、而かも彼は云へり、「今の世畫をこのむもおほかた畫を知らず、

されば尊ぶべきことをばいはで、たふとからぬことをあげつらねてたふとぶなり、畫のことなにかにもかきけんごとく、ことば文章の及ばざるをたすくるものなり、（中略）しかるにかれはよく糸がくものなり、筆をくだせば、何となう雲の勢をなしつ、あるは遠山のほの〴〵みゆるも、海原のうちかすみたるも、心に造化をこめて、筆にあらはすに妙なることなりといふは、たゞに一技にしたるなり、いはゞこまよくまはす、まりよくけるといふにひとし、たゞにそのとふときことしらざる故に、たふとからぬことをあげていふは、かへりて其道をけがすなり」と。是が藝術論として絶對のものか如何かは別として、儒學の勸戒主義よりすれば斯く論ずるのは當然である。さて探幽の畫はどうかと云ふに、彼は人物、山水、禽獸、花木之くとして可ならざるなく、何物を畫いても悉く特長を發揮してゐる。その畫は頗る技巧に長じ、足利時代の狩野畫の拮据とは打つて變つた垢拔けのした、奔放自在の趣があり、謂ふ所の「心に造化をこめて筆にあらはすに妙なり」と云ふにも適當するのである。卽ち此一面からのみ之を見ると、探幽は天才には相違なきも、眞面目な教學的題材を取扱ひ得るかどうかの疑も起らないではない。殊に中年後の大名其他の索に應じて揮毫したものには、山水動植類の畫を多しとなし、人物を畫いても月並のもののみで、意義深きものは至つて尠く、装飾畫と見るべきものが過半である。是に因つて見ると探幽は所詮玩賞を主とする装飾畫を事とし、故事を寫し理想畫を

ものする畫家ではなかつたかのやうにも思はれる。實際世の鑑識家の中には斯く思ふ者が決して尠くない。然れども是れ果して探幽を正解する者であらうか。

探幽の取扱つた畫題の範圍は廣汎にして、人物に於ては道釋の類を畫くことも昔日の狩野家と異る所はないが、併しながら又傳神畫をも盛に畫いた。太上天皇の尊影を奉寫して、宮內卿法印に敍せられ、筆峰大居士の印を賜はつたのは最大の名譽にして、更に彼は生涯を通じて古今名家の傳神に筆を染めたのであつて、就中孔子像を畫いた例が甚だ多く、その遺存するもの亦相當の數に及んでゐる。そも〳〵國畫の聖像にして今日見る所の最も古き例は鎌倉時代のものであつて、その圖樣は唐朝畫の樣式である。足利以來の聖像は多くは古樣とは異る元明樣にして、探幽の畫も亦それである。然れども探幽の畫く聖像は謹嚴にして、而かも生氣に滿ち、その點光起、如慶等當時の大和繪一派の畫に比べて優れてゐる。又禁裏御造營に際して紫宸殿の賢聖障子を畫くことをも命ぜられ、その畫の副本とも認むべきものが今世に傳はつてゐる。畫像以外には說話畫、歷史畫の類に筆を染めたるものいと多く、東照宮緣起、宇治拾遺物語、大江山の畫卷などは和畫風のものであるが、別に又儒學關係のものが尠くない。勸學圖の類にして世に知られたものも幾つかあるが、その最も顯著なるは帝鑑圖說の畫である。探幽の帝鑑圖說畫の大作は名古屋城上洛殿內の張付畫である。

此張付畫は同殿上段の間及び一の間に畫かれ、上段の床の間は「遣倖謝相」にして、漢文帝鄧通を愛し、鄧通之に乘じて禮を失するを見て丞相申屠嘉帝を諫め、帝冠をぬぎ徒跣して頓首して謝する圖である。張臺飾は「不用利口」にして、文帝虎圈に登り、嗇夫の口辨を賞し拜して上林令となさんとせしに、張釋之之を諫めて、周勃、張相如は長者にして而かも口を出さず、今嗇夫の口辨を以て之を用ふれば天下皆な爭つて口辨を事とせんと云ひ、帝之を嘉納するの圖である。一の間界の襖は「露臺惜費」にして、文帝露臺を作らんと欲し、その値百金なるを問き、百金は中人十家之産なりとして之を中止するの圖である。此圖に接する廣縁界の襖は「不用利口」に因む周勃、張相如を畫きしものかと思はる。一の間上段界の襖は「明辨詐書」にして、漢昭帝十四歳にして大將軍霍光を譏する者を看破し、霍光の入つて冠を免ぐを制して冠せしむるの圖である。二の間界の襖は「褒奬守令」にして、漢宣帝守令を重んじて厚く之を遇し、遂に良吏盛に出で中興と稱せらるゝの圖である。西廣縁界の襖は「蒲輪徵賢」にして、漢武帝儒術を尙び、蘭陵王臧及び趙綰の薦に依つて其師申公を迎ふるに安車蒲輪を以てするの圖である。

以上の諸圖は何れも帝鑑圖說の挿圖に據り考案して畫いたものである。帝鑑圖說は明の萬曆元年神宗の命に依つて大學士張居正の撰する所にして、唐虞より漢唐末に至るまでの君人治蹟中治亂興亡得

失の勸戒となるべきもの百餘件を選んで敍述し、一々添ゆるに圖畫を以てしたものである。此書の本邦に始めて渡來したのは何時であるか明白でないが、慶長頃には既に傳はつたものと覺ぼしく、その一たび我漢畫家の眼に觸るゝや尊重措かざりしものと思はる。狩野永納の說に依れば、山樂は此書を見て始めて之を摸寫したと云ふ。されば探幽以前京狩野の畫家の間には既に其圖を畫いたものもあつた。然るに探幽は殊に之を畫くに興味を有したる如く、此上洛殿の張付畫以外にも其畫を見るのである。けれども、探幽の畫いた帝鑑圖としては此上洛殿の張付畫に若くものはないので、此畫は如何にも大作であつて、獨り探幽の帝鑑畫として第一に推すべきのみではなく、多くの畫家の遺種の作物中無二のものと稱して可なるものである。

探幽の此畫は圖樣こそ圖說の挿圖に基いて考案したとは云へ、之を是の如き大張付畫に書きしものなれば、變改の箇所も固より多くして、單なる摸倣圖とは云ひがたく、布置經營の苦心容易ならざるものがあつて、創意の妙も明かに認め得らるゝ。作法は嚴肅を極め人物の描寫には最も苦心の痕を見るが、樓閣及び山石樹木等の描寫皆な非凡にして、人物と背景との調和が甚だ宜しきを得てゐる。その筆法は殊に探幽の個性を表出し、鈎勒に交ゆるに沒骨の手法を以てする、剛柔二面の變化も趣深く、色調は美なりと雖もあまりに濃厚ならずして溫雅を極め、その穩なる配色の間に巧に金砂子を撒

きたるもゆかしく、總じて漢畫の畫法を以てして、更に幾分之を日本化した所があり、而かも壁畫として必要な裝飾化をも兼ねたるもので、這般の歴史畫として正さしく成功したものと云はなければならぬ。

探幽が此畫を畫きし年代は記錄を缺いてゐる。けれども大凡の推定はなし得るのであつて、即ち此畫は言ふ迄もなく上洛殿建設の時に畫いたものとなすべきで、而かも此上洛殿は德川將軍家光及び前將軍秀忠の寛永三年二條城に行幸を仰ぎ奉る爲めの上洛に際し、名古屋立寄りの爲めの旅館として二條城の宮殿と同時に造營せしものの如く、是れ建築の結構二條城の宮殿と殆ど同樣なる事からも考へ得らるゝのであつて、さすれば此畫が二條城の壁畫に於ける如く探幽二十五歳頃の畫となる譯である。二十五歳の畫にしてはあまり出來過ぎて居るかのやうにも考へられないではないが、併し前にも述べた如く探幽は二十歳以下にして既に人を凌ぐの大作を出したと云はれ、又二條城の畫が壯觀を極めた事は鵞峰の書いた碑文にも記載する如くであるが故に、彼がその年齡にして此大作をなすも敢て怪むべきではなからう。

探幽が一代に畫いた歴史畫も其數多きが中にも推賞すべき大作の名畫は、上洛殿の帝鑑圖と日光山の東照宮緣記の畫卷とである。東照宮緣起は内容の然らしむる所として、すべて和畫の畫法を以て之

を畫き、賦色濃厚にして絢爛の美を盡し、かの帝鑑圖の漢畫的なるのとは趣を異にするのである。然れども兩者は何れも歴史畫としての要領を得、且つ探幽その人の特長を遺憾なく發揮したものである。東照宮緣起は或は三十五歲の時の製作とも云ふが、平泉澄博士の研究に依れば、三十八九歲の畫と云ふことになる。若しそれが正しいとすれば帝鑑圖よりは十餘年の後であるが、彼と云ひ是と云ひ、何れも探幽の畫道に於て最も精勵努力した時の作であつて、歴史畫其他の故事を寫す畫の念の入つたものは大方此年代に畫かれてゐる。殊更儒學的な畫が此年代に多く畫かれたことも推察されるのであつて、かの帝鑑圖は這種の畫の最大記念物であつて、是に依つて探幽の靈腕を見ることが出來るばかりではない、當年の文教殊に儒學と藝術との關係をも窺知し得るに於て一層尊重されなければならぬ。

*

崋山渡邊登は世々田原の藩士にして、父に代つて要職に就き、夙に經世濟民の術を志し、學問としては經學を主として西洋の書物にも通じ、詩文を善くしたるも自身は決して風流文士を以て任じなかつた。彼は畫に於て名聲を博したが、探幽などとは全く立場を異にし、探幽の如き眞の畫師ではなかつたのである。その畫を學ぶに至つた動機は何であるかと云ふに、家貧にして加ふるに父は永年病に

惱み弟妹七人の養育も自身の雙肩にかゝるの狀態であつたので、同藩の高橋文平が勸めて云ふに、是の如くにして儒者たらんと欲するも覺束なし、畫家となるに若かずと、華山此言に從つて始め文晁の高弟金子金陵に學び、後文晁の指導を受くるに至つたのである。さう云ふ譯で華山はもと〳〵眞の畫家となる考は毫もなく、寧ろ糊口の爲めの內職として畫を學んだに過ぎないのである。その三十一歲の頃に書いた「心の掟」と云ふものの中にも「學問をして遠く慮り、畫をかき急を救ふ事」とある。畫才の漸く世に認められて、盛に畫を畫くに至つても固より之を以て遊戲の具とするを屑しとしないで、一箇の主張を以て筆を執つたのであつて、その主張は要するに儒學的のものである。

華山の遺稿にして、未完成の爲めに生前發表されずに終つた「一掃百態」の一書がある。是は後に上梓されて今は知る人も多いが、その序文こそ華山の畫に對する主張をよく言ひ現はしたものと云へる。卽ちその緒言に

抑繪圖者、形ニ容事物之眞一、可ニ以垂レ世、可ニ以勸レ善懲レ惡、而豈不レ關レ于ニ典章制度之興廢一者哉、近若ニ岩佐菱川古川石川椙村宮川數子一、雖ニ畫則俗一、有下因レ之觀ニ當時質素簡朴之風一、以足上レ戒ニ奢者一、在下獨善ニ山水遊戲三味一者上、未レ可ニ共言一也、今時畫手不レ能ヨ自出ニ機軸一、而徒擯爲ニ鄙俗之技一咨亦過矣。

とあつて、此書は上建久より近世に至るまでの風俗の變化器用の異同を寫すを目的としたと云ひ、未だ完璧をなさず、更に編を累ねて多くの畫圖を收むるの計畫にして、僅かに端緒を得たに過ぎない、が華山が如何に儒教主義の上から風俗畫を重視して、之に力を用ひんとしたかが是に依つて窺ひ知られる。げに此書以外にも澤山の風俗畫の作例は崋山に於て往々見る所であつて、何れも興趣の深いものである。

由來我國には風俗畫が多い。古くは平安鎌倉兩時代に現はれた繪卷物其他に風俗畫の見るべきものがある。近世に至つて風俗畫は益々流行し、浮世繪の一派が開けて以來殊に氣焔を揚げてゐる。是に於て江戸時代の風俗畫とし云へば、すべて是れ浮世繪家の手に成るものの如く考へる者もないではない。然れどもその見解は誤であつて、實際は浮世繪家以外にも風俗畫を畫く畫人は甚だ多かつた。狩野や土佐の畫家は勿論の事、其他の畫派でも風俗畫を可なり多く畫いてゐる。然るに同じく風俗畫を畫くにしても、浮世繪派と他の諸畫派とはその方針に於て一樣ならざるものがある。浮世繪はその需要者が主として中流以下の人であるが、一般畫派の風俗畫は平民の爲めに畫くのではなく、多くは中流以上の人の爲めに畫くのである。而して又浮世繪の畫題は主もに演劇と遊里とに關係あるものを選ぶのであつて、その範圍は一般畫派の風俗畫に比して狹いと云はなければならぬ。華山が岩佐菱川等

の畫は俗なりと雖も、奢者を戒むるに足るものありと云つて賞賛したのは、浮世繪も亦世相畫にして興廢を觀るに益ありとの寛大な見地よりするのであるが、本來浮世繪にして君子人の鑑賞に入るべきものは尠く、崋山自身の畫く風俗畫がその趣旨に於て浮世繪と同じからざるは固より明白である。崋山の畫にも肩の凝らない洒落れ氣のあるものも幾多ないことはない。雅友との遊行を畫いた目黒詣の如きもその一例である。門人平井顯齋が珍重措かざりしと云ふ愛妓圖の如きも亦然りである。併しそれ等にも浮世繪とは異る意味がある。愛妓圖は固より戯畫にして、而かも自書の題語が振つてゐて、その終りに「時天下禁レ奢、我妓徹ニ玉梳金釵一、素面輕羅、如ニ雨後菡萏一。」と記したるは、皮肉な諷刺畫たるを意味する。何れにしても浮世繪派以外の風俗畫中にその人を求むるとなると、我等は先づ第一に崋山を推すことに躊躇しない。

又崋山は和漢の古賢聖や當時の儒者其他の肖像をも畫き、その名迹を今日に傳へてゐるものが尠くない。それ等には洋畫の法を交へたるものもあつて、頗る傳神の妙を得てゐる。次に故事歷史に關する畫をも盛に畫いてゐるので、蒙古襲來圖、參覲交代圖、天保饑饉圖、于公高門圖、蘇武圖、孔老問答圖等の如きは甚だ有名である。就中于公高門圖は一代の傑作と稱すべきものである。門の築造に與る工夫の狀勢など微細を盡して畫き、圖樣は頗る複雜であるが善くまとまつて、遠近の別を明かにし、

又總じて畫致の裕かにして含蓄の深さ、他の追從を許さない卓絶の趣がある。卽ち此一圖を以てして、崋山が歷史畫家としても優に大家の地を占むることは明かである。

然るに崋山は山水も花鳥も上手である。人物に於ても肖像、風俗、歷史ばかりを畫いたのではない。時には他の文人畫家の如く風流三昧的の自然描寫をも決してやらなかつたのではない。唯崋山はさう云ふ種類のものを畫くことを以て畫家の本領と思つてゐなかつたのみである。ところで尙ほ考ふべきは、崋山の畫が內容題材、又は技巧の輕重疎密如何に拘らず、一種の颯爽たる英氣に滿ちてゐる一事である。是は第一にその畫の用筆法と大なる關繫を持つものと見るべきである。崋山は元來書に於ても優越してゐる。その畫には明かに書畫一致の妙がある。書に於ける流暢闊達の筆法が直ちに畫に應用されるのであつて、從つて畫が表現的となつて、頗る生動の風趣を有するに至るのであるが、要するにその氣分は全く積極的のものであつて、決して消極的ではない。而して此一事亦儒學思想とも結び付く上に意義あるものの如く思はれる。

江戶時代の文人畫が禪畫とは趣を異にして、靜寂枯淡を喜ぶものではないが、逃避的又は逸樂的傾向を多分に有してゐるものの多いことも疑がない。その心持が畫に現はれると、柔滑洒落となるのであつて、積極的な闊達の氣風とはならないのである。文人畫が南畫だと云ふのも結局はその爲めであ

る。けれども文人畫卽南畫の思想は文人畫を樣式化して考へることから來るのであつて、支那でもその考は明初以來の流行で、遂に日本にも傳はつたのではあるが、純眞なる文人畫は必しも純南畫たるを要しない筈のものである。我等は江戸時代の明淸風の文人畫に對しても多大の興味を感ずるのではあるが、それのあまりに南畫的で且つ消極的となることを喜ぶものではない。然るに崋山は實に我文人畫の中に在つて積極的な闊達の氣分を有する者の代表である。崋山以外にも類例はないことはない。蕪村の如き正さしく其一人である。蕪村はその俳句に於ける如く畫に於ても人事の描寫を怠らない。時には崋山の風俗畫に似たものを畫いてゐるのを見るのである。又漢文學上の故事を畫いたものも往々見る。けれども蕪村の人物畫は崋山に及ばず、儒學的題材の畫に至つては殊に然りである。崋山に在つては、畫の著想並に布置法は勿論の事、筆法に格段の特色があつて、本來肖像、風俗、歷史等の畫を畫くに適し、儒學的畫題に於て縱橫に之をかきこなし得るのである。而して又その畫の精神に於て、おのづから儒學的たるにふさはしいものがある。この精神に至つては固より之を探幽に於て望むことの出來ないものである。結局眞の儒學的な畫の名家としては、誰よりも以上に崋山を推すのが至當ではあるまいか。

# 江戸時代の孔子廟建築

飯田須賀斯

徳川家康の好學の結果、江戸時代には儒教が盛んになり、江戸其他の各地に學校が建てられ孔子廟が設けられた。儒教が宗教なりや否やは別問題として少くとも孔子廟が一種の宗教建築たる事には論が無いと思ふ。一般に宗教が一地方より他の地方に移入する場合其宗教建築は三種類の形式を取り得る。卽ち第一はたゞ本尊を安置する程度の建築で、舊來の樣式に依るもの、第二には其宗教獨特の儀式に適合する建築を舊來の手法を以て作るもの、此場合平面計畫上に最も影響を受け、細部及び裝飾等に屢〻原地の風調を見出し得る。第三には原地の建築樣式に一致するものである。實際問題としては右三者の中間的の者も存し得るのである。

我國の孔子廟は旣に古く奈良朝時代に輸入され、平安京の大學寮孔子廟は唐式であり、此に對する研究が江戸末期に行はれた。然し江戸時代の孔子廟は、右の唐式のものとは別に、宋以後出版された

書籍の感化最も大で又明末の歸化人を通じて明清時代の支那建築の影響も一部に大いに現はれた。

江戸時代の孔子廟の遺物は大部分第二種類に屬する。當時參考に供せられた文獻には儀禮旁通圖・禮書・三禮圖・闕里誌。朱子家禮・三才圖繪等がある。儀禮旁通圖の系統のものとしては足利學校の孔子廟・岡山藩學校・會津日新館等があり、朱子家禮の系統では岡山閑谷黌の孔子廟・名古屋明倫堂の孔子廟等があり、仙臺養賢堂は明堂圖の發展形である、其他左表に示す如くで、各孔子廟は種々の要素を取り入れて居る事を知るのである。

| 孔子廟／參考ノ人物・書籍 | (1)江戸 | | | (2)名古屋 | | (3)岡山 | | (4)足利 | (5)水戸 | | (6)多久 | (7)佐賀 | | (8)山口 | | (9)會津 | 仙臺 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 寛永 | 寛文元祿 | 寛政 | 寛永 | 文政 | 岡山 | 閑谷 | | 朱舜水計劃 | 弘道館 | | 大寶村 | 藩 | 享保 | 嘉永 | | 講堂 | 孔廟 |
| 朱舜水（明遺臣） | | | ○ | | | | | | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | | |
| 陳元贇（歸化人） | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 武富咸亮（歸化人子孫） | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ? | | | | | |
| 儀禮旁通圖 | | | | | | ○ | | ○ | | | | | | | | ○ | | |
| 禮書 | | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 三禮圖 | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | |
| 三才圖繪 | | | | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | |

| 闕里誌 | 朱子家禮圖 |
| --- | --- |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | ○ |
| ○ | ○ |
| | ○ |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | ○ |

以上は第二種類に屬するものと云へよう。外に第二第三の中間に屬するものがある。多久聖廟は第二に屬して第三に近く、朱舜水作の孔廟模型は第三に屬して第二に近い。卽ち多久聖廟は支那明清の孔子廟平面を基本として此を一宇に纏め、支那式細部を幾分使用し、朱舜水の模型は平面立面殆んど支那明代の建築と云へるが、手法に於て日本式が隨所に現はれて居る。寛政の江戸孔子廟は此に依つて出來たものである。明治に入り、長崎大浦に純支那建築の孔子廟が出來たが江戸時代には第一種類の純然たるものは無かつた。

從來、江戸時代孔子廟の建築的研究は多少行はれたが、其系統に關しては未だ解決を見なかつた。又或る場合には誤り考へられた。故關野貞博士は多久孔子廟の解決を不可能とされた。城戸久氏は江戸時代學校建設の中に數箇の孔子廟の研究を發表されたが何れも解決されず朱子家禮に依る代表的建築たる閑谷孔子廟に對して「何等支那式手法の混入を見ず……何等建築史上樣式的に特筆さる可きでない」と云はれ、田邊泰氏は儀禮旁通圖を最も忠實に寫した足利學校孔子廟を「單なる想像で支那振りを創造したものであらう」と發表されて居る。要するに江戸時代の孔子廟の系統に就いては未だ解

決されて居なかつた。此處に伊東忠太先生の指導の下に左に(1)江戸、(2)名古屋、(3)岡山、(4)足利、(5)水戸、(6)多久、(7)佐賀、(8)山口、(9)會津、(10)仙臺の順序で各地の孔子廟に就いて述べることとする。

## 一　江戸孔子廟

江戸の孔子廟に關しては既に昌平志、聖堂略志等があるが、以下建築的考察を試みる事とする。

其初め林羅山が上野忍岡に地を賜はり私塾を作つたのを基とし、此が發達して終に公的のものとなつた。上野で孔子廟を改築する事一回、第二回改築の時に當り湯島に遷し、此處で火災に遭ふ事三回、改築される事五回、更に大正に入つて大震火災に燒け昭和十年に改築された事は人の記憶に新な所で、通計すると實に八回の造營が行はれ、樣式的に見ても三度の變遷がある。此が前述の宗教建築の三つの形式を第一第二第三と順次に踏んで居るので最も興味深く感ずるのである。

第一回の孔子廟は林信勝碑陰錄（明曆三年記）に依ると左表の如く尾張藩始祖徳川義直が建立した事を知る。

| | 西紀 | |
|---|---|---|
| 慶長十九年 | 1614 | 先是請設學校於京洛爲教育人才以許之而欲撰其地然大坂亂發因不遂焉 |
| 寛永七年 | 1630 | 冬於上野忍岡賜別墅五千三百五十三坪及金二百兩所以設庠序也 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 〃 | 九年 | 1632 | 冬尾陽義直卿建一堂於忍岡之別墅安置聖像及四配之像且書先聖殿之三大字製額以授之道春又納祭器若干 |
| 〃 | 十年 | 1633 | 二月十日於先聖殿始有釋菜<br>四月十七日御參詣于東叡山還御寄台駕於聖殿拜聖像給時有命道春講尭典之首段 |

昌平志に「按寛永壬申制不置兩廊層階、而神門西向、且止一座、規畫經營極短窄、且闕載籍無由捜索」又「其廟制多出於公（徳川義直）之規畫云」とあり寛政の頃既に文獻不充分で詳しくは知り得なかつた。徳川義直の側に歸化人陳元贇が居た事は名古屋の項に記する如くで、恐らくは彼も此際義直の計畫の相談に與つて居ると思ふ。樣式上右を江戸孔子廟の第一型と命名する。

第二回の孔子廟は林春勝碑陰錄（延寶八年記）に「萬治三年冬十二月賜金五百兩、以修造孔廟堂」、又昌平志に「於寛文轉方位、規制始備、且有考證」とあり其廟制は左の如くである。（第二圖參照）

| | |
|---|---|
| 正殿（即先聖殿） | 五間（深廣俱三丈）南向、而南止一階<br>北用板壁餘三面俱活櫺窓格神座層高疊階七級常供卓三張香案一具 |
| 兩廡 | 各二間（深廣俱一丈二尺）與正殿合共爲一構若張翼然 |
| 兩廊 | 東西各四間北向入深各一丈五尺夾杏壇門而立 |
| 廟門 | 二座爲杏壇爲入德杏壇距於入德可凡六歩（甬道甃石） |

寛文四年二月丁祭に京都の伶人を招請して釋菜の儀場に列し、箏笙笛笳を合奏せしめた時、春齋は

「禮樂始めて備はり周室の古へに復す」と歡喜した事が聖堂略志にある。此に依つて考へるに、春齋の目標は周の學にあつたと思ふ。

其建築は「兩廡與正殿合共爲一構、若張翼然」と云ふが此は果して何を基本として作つたのであらうか、當時參考に供し得べき書籍中、學又は廟の圖を載するものは禮書・闕里志・三才圖繪・朱子家禮等があり、周に關係を有し、而も兩翼を張る形のものには禮書の「周四代學」の圖がある。（第一圖參照）此を昌平志所載の寛文元年の先聖殿圖（第二圖參照）なるものと比較すると平面は勿論屋根の調子まで類似するを見るので、此圖が當時參考とされたと思ふ。樣式上右を江戸孔廟の第二型と命名する。第二型は以後四度の改築に蹈襲された。

第三回の孔子廟　元祿三年五代將軍綱吉に依つて湯島に遷し建てられた。其移轉改築の理由に關して大成殿上梁文及聖堂事實記には「上野の孔子廟が一つには尾張大納言創建なる爲に、二つには周圍に佛寺があつて神聖を缺く爲に移轉する」と云つて居る、此を引けば

大成殿上梁文

元祿萬年之三祀庚午七月九日、新降台命曰、武州忍岡先聖殿者先大君大猷公治世之日、故尾陽亞相源敬所勸建也、儒臣林忠恕脩釋菜、汝籲乎經筵侍講勤勞有年、頃歳春飛台駕躬拜靈廟尊信聖德、

顧視境致則蘭者接隣梵唄傳響、塞非安聖神而開來學之地也

聖堂事實記

元祿三年庚午七月九日、大内記被爲召登城仕候處阿部豐後守戸田山城守土屋相模守牧野備後守列座被仰渡候は忍岡の聖堂上野境内に有之其上最初尾張故大納言殿（義直卿）建立候得は思召に不相應候に付此度從公義新規に聖堂御建立可被遊の旨昌平坂の地（神田臺又は本郷と申所向後昌平坂と唱可申之旨十一月十六日被仰出）御吟味にて只今の所に有之候

然し右二つの理由の外に孔子廟を改築せしめる他の動機が存すると思ふ、其は佐賀藩多久邑主、多久茂文が彼の領内に孔子廟を造營したい希望を有した事である。丹邱邑志に「雄山府君（多久茂文）篤く儒學を信じ聖廟學校を建んと深く思惟し（中略）藩廷に告玉へば藩も私に免許し玉はず東武へ告玉へば憲廟是を感じ先づ大成殿を建てられ」とあり、佐賀藩側の文獻にも右樣の事が書いてある。（第二一・二二圖參照）

次に新廟建立の地を湯島に撰んだ理由は(一)其地が城北の郊にある事、(二)南に流水神田渠がある事、の爲と思ふ。(一)に關しては禮記に大學は郊にありと云ふのが問題となるのではあるまいか、當時の湯島は、信篤の上梁文に「外は則ち縹眇として四隣の是に並ぶものなし」と云ふ狀態であつた。(二)に關しては、孔子廟又は其關係のものの前に流水のある例が多いのである。卽ち、上野忍岡孔廟の南に不

忍池より流出する不忍川があり、長崎の孔子廟を改築するにあたり一瀨川の北岸に其地を撰び、又支那では白鹿洞書院も其の南に川があり東流して居り、有名な洙水は曲阜孔林の南を流れ、同じく曲阜の孔子廟の前には帶の如き壁水があり、尼山先聖廟圖にも前に流のある事が闕里誌に見られる。又三才圖繪所載の陽宅外形吉凶圖中に「門前有玉帶水高官必定容易起出人代々讀書聲榮顯富貴耀門閭」とある。何れにしても孔子廟と門前の水とが深い關係がある事を知るので神田渠の存在が土地撰擢理由となつたと思ふ。聖堂事實記には同地を昌平坂と命名した事があり、昌平志には「賜名昌平以擬魯國誕聖之郷」と云ふから、神田渠も或は洙水泗水に比せられたのではあるまいか。

元祿三年十二月廿二日上棟、四年二月七日遷座、而して、同十一日に釋奠が行はれた。此時將軍綱吉が參拜して、大成殿東南に棚閣を作り此處で觀禮した。正殿棟梁牌文に依れば此際の建築家は依田成直である。其廟制は昌平志に從へば左の如くである。（第三圖參照）

| | |
|---|---|
| 正殿 | 五間五尺、南向（入深三丈七尺五寸高四丈三尺三寸）南止一階（螭頭琢石凡七級而首甃石階光潤布滿雲黑石）殿內中於北壁而構室（高五尺八寸深六尺五寸內階七級）此爲神座南面（東南檻・開・皆開戶牖作圭頭狀而設） |
| 兩廡 | 各三間（深一丈九尺五寸）亦俱南向（北壁各架一層棚高二尺五寸）與正殿合共爲一構若張翼然枋標斗栱皆鐫雲紋而硃油漆之裝以釘鉸（格子上施活撐鉤以鐵索懸扉兩扇各懸兩扇用銅環而開闔扉面作井闌、雲紋裝以釘鉸）東西各設活階以便升降、而穿西廡而壁橫通短廊達於神廚 |
| 東西廊 | 各六間北向（深九尺八寸柱楹牆壁俱硃油漆之彩繪雲格漆以青綠碧瓦釘釘鉸亦用銅）夾杏壇門而立 |

| | |
|---|---|
| 杏壇門 | 六柱 門高一丈三尺寧□□字俗□居門首門角鰲揷獸頭刻作獅子蹲踞之狀門扇□井□□雲紋塗以朱漆□瓦釘□及承霤亦用赤銅 |
| 入德門 | 六柱 制同杏壇但不□□字樣頂刻□象形 並非有事則恒嚴扃之門右穿側門便於出入 |
| 仰高門 | 六柱 門高一丈三尺不繪不漆 |
| 東西兩舍 | 向立雙峙 東舍十三間深二丈三尺以爲丁祭更衣之所西舍六間以爲廟幹看守之所 |

而して「右元祿辛未昌平廟制一倣忍岡舊廟以大其規劃」と云ひ第二型に屬する。朱塗で青綠色の欄が付き、美麗なものであつたと思ふ。事實記に「元祿十六年十一月廿九日夜水戸殿屋敷より出火にて聖堂類燒仕候御成御殿幷饗應所學寮諸番所不殘類燒仕候聖像厨子を始め四配之厨子等其節の聖堂附火消松平飛驒守人數守護仕り」とある。

第四回の孔子廟　事實記に「寶永元年甲申（元祿十七年三月晦日改元）二月六日大内記に老中方被仰渡候は此度聖堂類燒に付御再興被仰付其外御供所諸門廻廊寶藏幷釋菜座敷學問所學寮役人長屋等如先規御建可被遊候御成御殿之義は去年大地震御城内外御普請所多有之に付追て可被及御沙汰之……同年五月廿五日御鍬始七月四日御釿始九月廿七日御柱立十一年十一月十一日御上棟段々御普請出來同月廿五日假堂より御遷座」とある。正殿棟梁牌文に依ると建築家は甲良宗員大谷正矩である。元祿のまゝに建てる樣に命令されたが大成殿の高さ三尺を減じた。釋菜の時に大成殿前中庭の左右に幄舍を作り之を東棚西と稱し觀禮の

所とした。此が以後續いて行はれ、寛政の大改築の際に東廡西廡を東廊西廊とし觀禮の所としたのも此に源を發するものと思ふ。此時の入德門は幸に火災をまぬかれて現存する。其構造樣式は當時の一般廟建築と大差ないが裝具の點で、麒麟、雲等を使用して居り、特に扉上の蓮座は、日本では一般に各扉上一個づつ二個作るが普通であるのに、此場合一木を以て作り一種の雲形に彫刻して居るのは全く支那明代の其と一致する。此を以て推察すると孔子廟の構造は日本式で部分的に支那風を入れたものであらう。扉の樞を金屬にした事、窓に華頭を愛用し、此を圭頭と稱して居るのも其一例である。（窓或は出入口を華頭に作る事は岡山足利等でも行はれ、三才圖繪所載の廟關係の建築圖に屢〻見る所である。）明和九年二月晦に入德門・仰高門・東西兩舍・學舍を殘して燬けた。

第五回の孔子廟　修造命令を安永元年六月に下し、工を起し、二年九月に竣工し三年五月に神位を遷した。昌平志に「略倣原規始備制度、不唯撲略又多裁減破爲狹（廊廡廚庖皆減深濶）剗崇斯卑（廟殿減崇五尺）桂楹榱桷不擇淑慝且止索斲不加丹緑」とあり、略式となつた。而も天明六年正月二十二日仰高門と西舍を殘して燬けた。

第六回の孔子廟　天明七年正月起工九月に落成した。此度は廟殿廊廡諸門は安永の制に依つたが更に省略した。昌平志に「蓋時議專務省費不復」と云ふ。此の時まで第二型が繼承された。次回で樣式

も改まり規模も空前の大さとなつた。

第七回の孔子廟　將軍家齊の代となり、松平定信が之を補佐した。定信は尤も意を教育に用ひ、其結果孔子廟の大々的改築となつたものと思ふ。寛政八年將軍は大成殿を拜した。事實志に「十月十五日大駕將獵北郊途經昌平巡覽廟學（中略）尋二十二日命下將以近歳大加興造」とある。此處に大成殿の再建の事が初まる。

昌平志に「寛文中投化明人朱之諭、嘗爲水戸源義公製孔廟木樣、離合活套細悉制度、及藏在其府、丙辰（寛政八年）令搬致焉、因倣其制大加鼎建」とあり早くも水戸の孔子廟模型を取りよせ再建準備に取りかかつた事を知る。（第四・六圖參照）寛政十年三月二十七日に起工、六月二十二日に上棟し、十一年九月に落成し同年十一月十一日に神位を奉遷した。其建築家は平内政休政林なる事梁棟牌文に依つて知る。建築の方針は基本を前述の模型に取り此を幾分變更したのであるが昌平志に記する所を引くと次の如くである。「十年戊午重命有司鼎建廟殿、明年己未告竣、其經畫一依明制、雜以時宜（杏壇門取制於戟門乃改爲儀門之類）其原未備（移仰高門而東向以避正面之類）革前宜改（殿廡不合爲一構之類）」其結果出來たものは左の如くである。（第七圖參照）

| | |
|---|---|
| 正殿（即大成殿） | 十一間（深四丈七尺九寸）南面（東西及北俱用板壁）自基礎（即伏蓮華）至殿極（即古老錢）四丈八尺四寸爲楹三十二（前有大楹）梁棁榱桷承以斗栱雲葉頂格帯鋪雲紋、併兩廊諸門（即杏壇入徳仰高諸門）俱髹漆之裝、以稜金釘鋑浮漚鋪首之屬（銅質烏金線以鎔金）碉瓦用銅裏、而殿頭峙鳶瓜（[illegible]） |

| | |
|---|---|
| | 鋭如鋒及銅質塗金赫燦眩目卽拒鵲也）四隅置鬼龍子（銅造猫形蛇脰、而有牙）各二、殿扉疊扇、用銅樞而啓闔焉……殿內及階布鋪方石南階三級疊成礪石（北階亦同但疊五級）而構室於殿內北壁是物神座（正位南向配座東西向各二位錦帳發簾屏遮之）潤直兩楹（入深稱是） |
| 兩廊 | 各十五間（入深一丈六尺五寸）東西向立面各八楹（合成柱楹各二十一）左右及後皆用板壁設以櫺子各横通短廊（一丈五尺餘）北接正殿（殿側穿戸與短廊通廊各穿戸北出但西廊近北穿開門戸西出亦通長廊達於神廚）南屬杏壇（各穿小戸通於門內）東西相擁中爲廟庭布以板石限以甬道（潤直階徑） |
| 杏壇門 | 十一間（入深一丈六尺五寸）南向門面六楹（合爲柱楹十五）中爲正門更與左右皆設扉扇是爲中及左右門而兩端各作房舍（皆開円窓施櫺子）以通於廊其制作同於正殿（銅裹銅瓦而裝置鳶爪鬼龍子及用稜金釘鉸之屬）而取實法於戟門榜以杏壇存舊制 |
| 入德門 | 六柱（門面一丈三尺三寸深一丈三尺）南向、制仍舊構（卽寶永制但原置在今杏壇門之地改移今處）特加髹漆以與諸門稱（舊制塗以朱漆今改髹漆之） |
| 仰高門 | 六柱（門面一丈三尺）東向（制同諸門但不用稜金銅瓦而銅頭換印官章側開耳門以便出入） |

卽ち水戸の孔廟模型の中心部分を在來の孔子廟の中心部分に取り入れた。然し其大さは左表の如く

| | 間口（尺） | 奥行（尺） | 水戸模型に對する面積の比率 |
|---|---|---|---|
| 大成殿 | 六六、〇（水戸八〇、〇） | 四七、九（水戸四九、五） | 八、〇割 |
| 兩廊（兩廡） | 九〇、〇（水戸一八〇、〇） | 一六、六（水戸二四、〇） | 四、六割 |
| 杏壇門（戟門） | 六六、〇（水戸八〇、〇） | 一六、五（水戸一八、〇） | 七、五六割 |

大成殿は水戸模型に比して八割となり兩廊の如きは半分以下となつた。最も變更されたのは第一に兩廊で此に次ぐものは第二に杏壇門である。第三に色彩も變へた。兩廊は朱舜水の計劃に從へば此處に多數の賢儒の神位を置く筈であるが、寛政に儀式は大體延喜式に從ふことにしたので此處に部屋を作る必要はなくなり、前記の如く寶永以來東棚西棚を作つて觀禮の所

として居た習慣を其まゝ引きついで兩廊を觀禮其他に用ひた。尙ほ舜水の計劃を直寫して大成殿の北側で兩廡を作るとすれば土地が狹隘で實現が不可能な事も重要な變更理由と思ふ。第二に杏壇門は大體戟門の通りであるが、戟門左右の塾は完全な部屋になつて居るのに、此も改めて北側を開放したのは塾の本義を忘れたのであらう。第三に舜水の計劃では鳳凰其他の丹青の裝飾文樣を施したが此は一切黑漆にぬつた。藤安辰が大成殿上梁私記に「丹青の彩なくて內も外も殘る隈なくうるしてひた黑にぬられたるかへりてかう〳〵し」とある。美麗を去る爲であらうか。

此建築も殘念な事には大正十二年に燒けたが伊東先生監督の下に昭和十年復舊し、特異の姿を再び見られる事になつた。

## 二　名古屋藩の孔子廟

徳川家康が足利學校九世の庠主三要を伏見に伴ひ子弟の教育に當らせた時に尾張初代の藩主徳川義直も亦其教を受けた。義直の好學は右に基くものと思はれる。後義直は名古屋城內に聖堂を作つたが、林羅山は寬永六年に京師よりの歸途此を拜して居る。八角堂であつたと傳へ、此が「名古屋城上庭の圖」中にある八角堂なる可きも其建築の內部平面等は不明である。然し近世日本の最初の孔子廟

として歴史的に重要性を有する。

義直の儒臣に堀正意、陳元贇等がある。正意は杏庵と號し林羅山と共に藤原惺窩門下の四天王の一と稱され、元和八年義直に仕へ、常に駕に從つて西東數回、寵遇最も渥かつたとは堀正意傳に記する所である。堀杏庵著中山日錄に依ると足利訪問の際義直は同校所藏の孔子畫像に對して延喜式を根據にして自說を述べ、彼は同校に於ける釋奠等に關して質問して居る事實に依り彼等が孔子廟に關心の深い事が知られる。

陳元贇は明國虎林（杭州）の人で崇禎中進士に及第し、後亂を避けて投化し、召に應じて尾張に到つた。而してその百技に長じた人である事は陳元贇傳の記する所である。義直が孔子廟を建築するに當り與つて力あつたのは右兩人であると思ふ。

義直が學問所を興して以來幾變遷があつた。此を天保年間の人深田正韶撰する尾張志に依つて左に示す事とする。

| | 所在地 | 年代 | 西紀 | 備考 | 當事者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 學問所（一） | 大津丁の下の西側の地 | ？ | | 儒者深田を京よりめし月俸十人分を給はり上記の地を學問所となさしめ給へり | 深田正室 |
| | | 慶安三年 | 1650 | 正室うせて後、靈峯といへる僧にあつけ給ひしに慶安三年 | 僧靈峯 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 源敬公かくれさせ給し後、其儒も退身し學問所も廢たり | |
| 學問所（二） | 巾下御門外龍の口西 | 延享五年 | 1748 | 二月浪人布施と云ふ儒者の願ひにより上記の所三百歩の地丼料足を給はり、はつかなる學問所を營み門弟等を教授なさしめ給へり、其後維安故ありて御國を退去せしかども猶學門所はそのまゝ立置給ひしを | 浪人布施佐右門維安 |
| 明倫堂（一） | | 寛延二年 | 1749 | 十一月十四日源戴公明倫堂と名つけ御眞筆に扁額を書きてかけさせ給へり、其比より下記の者二名明倫堂をあつかり御書物奉行松平太郎右衛門秀雲深田左市正純など補助して定日を究め堂中にて講學をなし來れり | 須賀吉平治安長<br>同順次郎安貞 |
| 明倫堂（二） | 長者町片端の東角 | 天明二年 | 1782 | 上記所在の御國奉行役所燒失の跡にあらたに學館御經營あり | 總裁<br>細井甚三郎德民 |
| | | 三　年 | 1783 | 四月成就す、總裁主事教授典籍書記主財講者給事等の諸官を置給ひ明倫堂と稱すべき旨命し給へり | |
| | | | | 巾下の明倫堂は舊名に復し學問所と呼來りしを後に高須君にまゐらせられしかば彼地にて日新堂といゝつるはこの學館也 | |
| 聖　堂 | 長　者　町 | | | 其後今の學館の東長者町の方に聖堂を御創建ありて源敬公御眞蹟の先聖殿の扁額を掲けさせ給ひ源明公御眞筆をもて書寫し給へる論語卷軸を唐櫃に納めて神主と崇め安置し給へり | |
| | | 天明六年 | 1786 | 聖堂御造作半途にして二月十三日まづ假釋菜を行ひ給ひ御 | |

| | | |
|---|---|---|
| | | 名代として竹腰山城守勝起衣冠束帯にて參堂せらる<br>八月十六日同祭には御名代山澄淡海守豊充大紋烏帽子にて勤められしより |
| 七年 | 1787 | 造營成就ののち年々二仲の祭奠に御名代かならず大紋を着し束帯を裝せざる例となりぬ |
| 文政六年 | 1823 | 又源敬公より御傳來の聖像二軀（銅木）御側にありしを八月堂中へ遷し給ひ |
| 七年 | 1824 | 二月聖堂の側東北の方に祠を造りて木像ばかりを安置し銅像は御文庫に收め置給へり |

聖堂は天明七年落成したが其の形式は閑谷孔廟と共に朱子家禮祠堂三間之圖に由來する事が考へられる。第一五圖・第一七圖を比較して見ると次の如くである。

| | | 第一五圖　朱子家禮祠堂三間之圖 | 第一七圖　名古屋明倫堂孔廟平面圖 |
|---|---|---|---|
| 門及垣 | | 四圍に垣を繞らし南に一間一戸の外門を作る | 四圍に垣を繞らし南に一間一戸の廟門を作る、東に西面北面に各一ケの小門あり |
| 堂 | 龕 | 祠堂の内北一架に四龕を作る、神主南面す | 堂の内北半を神座とす |
| | 階 | 兩階皆三級で東を阼階と云ひ西を西階といふ | 階は一つ |
| | | | 堂の四周に入側あり、東西南三面に切椽を附する事は相違點である |

| | | |
|---|---|---|
| 神厨神庫 | 遺書衣物祭器庫及神厨を堂の東に爲る | 神厨東にあり、文庫は垣の外北側に作るのは朱舜水計劃の尊經閣の位置に從ふものであらう |

右の如く孔子廟の配置は朱子家禮に從ふ事を知る。然し閑谷黌の如く純粹のものでなく日本化して居る。尙ほ此建築物は明治六年岐阜縣羽島郡福壽村大字平方に移され、光明山永照寺本堂として明治七年に幾分の變更をして建てられ現存して居る。

## 三　岡山藩學校及閑谷孔子廟

池田光政は幼少の頃から學問を好み、中江藤樹の德を慕つて江戸に出る途次何時も大津驛に之を迎へ講義を聞き、談論夜を徹して倦まなかつたと傳へらる。後に其門下の蕃山を召して國政を委ね、同じく藤樹の門下生で蕃山の弟泉仲愛を學校の總監とした。一藩の子弟に聖學を修め武技を演習せしめる目的で初め假教場を作り、次いで假學館を設け、此が狹小となるに及んで更に完備した學校を作り、別に閑谷には講堂を建て孔子廟を營んだ。先づ學校の年代を日本教育史資料に從つて左に表示する。

| | 所在地 | 年代 | 西紀 | 備考 | 當事者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 花畠教場 | 上道郡花畑 | 寛永十八年 | 1641 | 備前國舊領主松平宮內少輔忠雄の建營せし別邸を以て、假の教場とす | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 假學館 | 岡山城内 | 寛文六年 | 1666 | 十月七日、岡山城内松平五郎八政種の舊邸を修繕し假に學館を設置せしむ<br>十一月廿八日、講繹竣功家士の子弟を入學せしめ、花畑の教場を廢し生徒を此館に徙す | 泉八右衛門<br>津田重二郎 |
| 學校 | 岡山西中山下 | 八年 | 1668 | 十二月二十四日、近來學事頗隆盛に赴き就學生徒日を逐て增加し假學館狹小文武の授業行はれ難きを以て祈禱寺開乘院の舊地に學校を經營すべき旨命ず | 泉八右衛門<br>津田重二郎 |
| | | 九年 | 1669 | 正月十八日、造營掛の諸役員を定め建築に着手せしめ閏十月廿日に至つて全落成す<br>七月廿五日開校式を修し以後間もなく授業す、開校式は中室龕中に中江藤樹所筆の至聖文宣王の書軸を掛け、巳の刻蕃山了介詣香案前上香俯伏衆皆再拜し畢つて同聲に孝經を誦す、了介神前の熨斗を徹して、中室の中央に置て戸を閉づ、於是老臣以下諸頭に至るまで手自之を拜受して退く、諸士生には泉八右衛門津田重二郎之を授く、衆皆拜受して復座、儒士三宅可三孝教を講ず、畢つて衆皆退出す | 寛文十二年津田の職を解く専ら閑谷の事務に従事する |
| | | 十年 | 1670 | 三月廿三日松舍の前に射圃を設け本日落成す | |
| | | 寶永二年 | 1705 | 四月、橘舍梧舍の間に下役人番所を建設す | |

| 五年 | 1798 | 二月十七日、校内に廐を建つ |
|---|---|---|
| 正德二年 | 1712 | 十二月食堂の東北隅に一室を置き之を輔仁軒と稱し學校吏員憩息の處とす（下略） |

寛政九年七月二十五日の開校式に中江藤樹所筆の至聖文宣王の書軸をかけ、播州明石に居る蕃山了介を召して式を擧げさせたのは、兩人が池田光政との關係の深い事を示すものと思ふ。其建築に關して津田永忠行狀に「故君嘗欲興學校、又改葬先塋也久、叔子（永忠）逢迎君意而裨成之、乃與泉仲愛共承命、裁制古法以新造學校」とあるが、古法とは何であるか、新造の學校は如何なるものか、第一一圖儀禮旁通圖寢廟辨名圖、第一三圖三才圖繪所載諸侯泮宮圖及び第一二圖岡山藩學校平面圖の比較をして見ると、左の如き連絡ある事が知られる。すなはち諸侯泮宮圖及び寢廟辨名圖を參考とした事が知られるが、更に外に學舍食堂と講堂との關係は內裏の紫宸と其他の建築との關係を模したものと思ふ。

| 建築各部 ＼ 各圖 | 第一一圖 儀禮旁通圖寢廟辨名圖 | 第一三圖 三才圖繪所載諸侯泮宮圖 | 第一二圖 岡山藩學校平面圖 |
|---|---|---|---|
| 頖池 | | 建築物の南面に頖池あり、半圓形で東西南の三方に橋を架する | 建築物の南面に頖池あり、半圓形で南に橋がかゝり東西に橋の痕跡を認められる |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 門 | | 東塾西塾あり | | 東塾西塾あり |
| 堂 | 塗 | 東西の堂塗あり | | 東西の堂塗あり |
| | 階 | 東階、西階あり、他に側階北階を備ふ | | 東階西階あり |
| | 部屋割 | 堂、室、房、廂あり | | 堂一ケだけ |
| 寢 | | 堂の北に寢あり、三部となる | | 堂の北に寢あり、三部となる |

閑谷黌の年表を左に表示すると

| | 所在地 | 年代 | 西紀 | 備考 | 當事者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 閑谷黌 | 和氣郡木谷村 | 寛文六年 | 1666 | 十月十八日光政木谷村の地を相し同所に學校建設の意匠あり、家臣藤岡内助をして繩張せしむ | 藤岡内助 |
| | | 八年 | 1668 | 先づ手習所を玆に置く | |
| | | 十年 | 1670 | 五月十四日家臣津田重二郎に命じて木谷村の內信原に於て學校を建設せしむ<br>同年假學校を設く | 津田重二郎 |
| | | 十二年 | 1672 | 飲室學房成 | |
| | | 延寶元年 | 1673 | 講堂成 | |
| | | 二年 | 1674 | 聖堂成 | |

| | | |
|---|---|---|
| 五年 | 1677 | 講堂茅屋根を改めて伊部瓦葺とす |
| 貞享元年 | 1684 | 新聖堂成、但從來の聖堂を廢し更に善美を盡して新製し大成殿と號す |
| 三年 | 1686 | 東祠堂成、此光政を祭る所、聖堂の東に在るを以て是稱あり、後之を芳烈祠と稱す |
| 元祿十年 | 1697 | 石門成 |
| 十四年 | 1701 | 新講堂成、幷石土手を製す、此從來の講堂庇なるを以て改造す |

孔子廟は初、延寶二年に出來たが、光政死後の貞享元年更に新聖堂を作つた。津田永忠の計劃になるものである。津田永忠行狀記を再び引けば「故君嘗欲營學舍于鄉里、附以學田使學者講道修德以永垂于不朽、叔子(永忠)承其命而剪草萊夷嶇號之閑谷、殿宇堂舍棟柱椽甍致堅極備、經營百方深慮、惓惓無不竭其心力矣、……叔子嘗建聖堂奉聖牌以修菜、立東堂以納故君之衣冠弓矢書及什器、又託洛下中村惕齊以鑄聖像、躬召鑄師某以鑄故君之尊影竊藏之於學庫、而欲以告主君以安置于兩堂而未果、市浦惟直蒙閑職之日乃審達之公、公聽而賜許、允得奉兩尊以安置各殿、又賜大成芳烈之篆額、乃遂成叔子之志矣」とあり、永忠の熱心さが分る。建築以外に孔子像を鑄造した。此は多久聖廟に安置するも

のと殆んど同形で共に惕齊の監督になる。初聖牌を奉じ永忠の死後初めて聖堂に安置したのであるから此は最初からの計劃ではなく恐らく多久の聖像鑄造に倣つたものであらう。貞享元年に成る新聖堂は現存して居る、此は朱子家禮祠堂三間之圖に從つて作つたものであらう。（第一五圖・第一六圖參照）

| | 第一五圖　朱子家禮祠堂三間之圖（家禮の說明文を其まゝ書く） | 第一六圖　閑谷黌孔子廟平面圖 |
|---|---|---|
| 出入口 | 祠堂三間外爲中門 | |
| 兩階 | 中門外爲兩階皆三級、東曰阼階西曰西階 | 東階西階あり、各三級 |
| 堂塗 | | あり |
| 家衆叙立位 | 階家隋地廣狹、以屋覆之令可容家衆叙立 | 屋を以て覆す |
| 祭器庫及神厨 | 又爲遺書衣物祭器庫及神厨於其東 | 文庫及厨は西にあり（芳烈祠が東隣にある爲に西にせると傳ふ） |
| 垣 | 繚以周垣 | 周垣あり |
| 外門 | 別爲外門常加扃閉 | 外門あり |
| 龕 | 祠堂之内以近北一架爲四龕、每龕内置一卓、高祖居西、曾祖次之、祖次之、父次之、神主皆藏於櫝中置於卓上南面 | 柱間北一間の所に龕を置く、初は神主を置いたが後孔像に代へる |
| 香卓 | 龕外各垂小簾、簾外設香卓於堂中置香爐香合於其上兩門之間又設香卓亦如之 | 堂中に香爐あり |
| 繫牲石 | | 西北隅にあり |

卽ち津田永忠が如何に朱子家禮に忠實に範つて孔子廟を作つたか明である。尙ほ參道の途中、道の左右に石柱一對があり、此は華表を模したものと思ふ。又校門の前に一直線の泮水があり、此は闕里誌所載の曲阜孔廟の壁水に倣つたものであらう。校門は塾門である。

要するに岡山藩學校も閑谷黌も津田永忠が支那の孔廟、祠堂、寢廟等を研究して忠實に模したものである。尙ほ足利學校は岡山の計劃が動機となつて幕府が作つたのではあるまいか。かく考へる理由は第一に多久聖廟と湯島聖堂との關係である。第二の理由は岡山では既に花畑教場を寬永十八年に作り、此が狹小となつたので寬文六年に假學館を作つた。其の名の假とは次に來る本格の學校を豫想して居る事であらう。第三の理由は兩者共に同じく寢廟辨名圖に從つて居る事、第四の理由は足利學校の落成の年の十二月二十四に學校經營の命令が出て居る。然も早くも翌正月十八日、卽ち二十五日目に工事に着手し、十月に落成して居る。二十五日間に此丈の案を立てる事は不可能である。想像を逞しくすれば、岡山藩で學校及孔子廟の設立を考へ、或は幕府に許可を出願し、或は種々な方法で幕府の意を探り、幕府は足利學校がかね〲復興の希望を願ひ出て居るのであるから、足利學校孔子廟の計劃は岡山藩の案を取り、諸侯ならざる爲に泮水を去り、廟の部分を完全に作つたのではなからうか、尙足利學校の四周の堀川が寬文八年に出來たのならば周四代學の壁水に模したとも考へられる。

尙、城戸久氏は建築雜誌第四十九輯第五九八號の昭和十年大會論文集に「江戸時代の學校建築に就て」と題し閑谷學校聖堂に關して「規模も講堂に比して至つて小さく構造手法も簡素で僅かに床を四半瓦敷となした外、何等支那式手法の混入を見ず、……これは旣に孔子を祀る爲でなく建築の主旨が敎育上の中心を形造る意志に依つた……聖堂建築は何等建築史上樣式的に特筆されるべきでない」と云はれて居る。此は平面計劃に氣付かれなかつた爲であらうか。

## 四　足利學校孔子廟

足利學校は其歷史が古いので有名であるが、建築的に見ると孔子廟の平面計劃が良く支那寢廟の制を具備して居る點で注目すべきである。卽ち支那建築が文獻を媒介として日本に再現したもので、建築史上最も貴重な實例の一である。

其創立に關しては諸說がある。故八代國治博士は足利義兼創建說を取り他說の不當なることを說明して居る。而して同氏の說に依ると「義兼は京都の文化を移して其第內（今の鑁阿寺境內）に文庫を設立し一族子弟敎育の所としたのが漸次に發達して終に學校となるに至つたものであらう。……而して應仁元年長尾景人が火災を避ける爲か或は其他の事情により今の地に移したものであらう」と云

ふ。

學校の樣子を知り得べき文獻を年代順に十七箇左に並べて見ると左の如くである。

| | 出典 | | 皇紀 | 西紀 | 將軍 |
|---|---|---|---|---|---|
| (1) | 桂庵和尚家倭點引く所の岐陽和尚講筵之說 | 大唐一府一州其外及郡縣、皆有學校、日本纔足利處學校學徒負笈之地也 | | | 三代義滿の頃 |
| (2) | 松平家所藏文書 | 本朝州學存者僅有數焉、卒亦以僧爲之主、野學爲最…今故以「五經疏本」若干卷、安置學舍 | 永享十一年 | 1439 | 六代義敎 |
| (3) | 孔子見欹器圖の陰書 | 上杉安房守憲實永享十一年閏正月、寄進足利學校 | 永享十一年 | 1439 | 六代義敎 |
| (4) | 松平家所藏文書學規三條 | 一、三注四書六經列莊老文選外於學校不可講之段爲舊規之上今更不及禁之…文安三年丙寅六月晦日　釋長棟 | 文安三年 | 1446 | 八代義政 |
| (5) | 鎌倉大草紙 | 此足利の學校は…應仁元年長尾景人が沙汰として政所より今の所に移し建立しける | 應仁元年 | 1467 | 八代義政 |
| (6) | 東路裏 | 足利の學校に立ちより侍れば孔子子路顏回此像をかけて諸國の學徒頭をかたぶけ日ぐらし居たる體かしこくかつはあはれに見え侍り… | 永正六年 | 1509 | 十一―十二代義稙 |
| (7) | 「傳孔子木像」の胎內文 | 爲母妙□爲道高爲□道淸 | | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 于時侍講筵學徒八百餘人……中華人權大僧都……執權長尾但<br>馬守憲長世……上謀三寶……天文三年正月甲申之日初刻之明<br>四年秋八月上丁忌畢矣於櫻下小路上……紫陽之一不佾以四百<br>字之孔方爲硯水 | 天文三年 | 1535 | 十二代<br>義晴 |
| (8) | 學校所藏文書 | 此書付爲後昆如此候、就此庠院之儀書院建立……<br>慶長七年十一月廿一日學校隱居 | 慶長七年 | 1602 | 家康初代<br>將軍にな<br>る前年 |
| (9) | 寒松稿 | 野州學校客殿本尊藥師如來安座<br>……偶考前住東井手澤之交割帳、初有講堂、次有客殿以藥師<br>如來爲本尊……享祿年中學校値回祿之難……慶長十一年丙午<br>秋八月、修葺講堂之次纔分數間傍構客殿……彫造藥師如來一<br>軀以安置境上、興七十餘年之已墜以復其舊焉 | 慶長十一年 | 1606 | 二代秀忠 |
| (10) | 十一世庠主睦子書簡 | 謹答尾州之大儒正意法眼之旅舘下<br>……自中興開山快元先生至第六世文伯先生、而從祀先聖之儀<br>雖有之、文伯在庠之內屋宇有回祿、而淸規之書籍爲灰、唯以<br>口說傳而已、又不識實否矣……<br>又於當庠春秋二丁者、第七世九華先生之代、自小田原亂入于<br>當庄再三……釋奠之儀式廢亡矣　寬永丙子孟夏 | 寬永十三年 | 1636 | 三代家光 |
| (11) | 羅山詩集 | ……往于學寮、寮主睦子出迓、……出聖像令見之、揚諸壁間<br>曰、左子路右顏子、且有告云往歲尾州亞相（德川義直）日光<br>往旋時、來此覽之、諭教曰閔子騫乎非子路也、余嘗談此事、 | 承應二年 | 1653 | 三代家光 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | (12) | (13) | (14) |
| | 鵞峯文集<br>足利學校再興告文 | 大日本國野州足利郡學校重建聖廟上梁銘 | 貝原益軒の東路之記 |
| 延喜式大學寮有孔子幷十哲、太宰府學寮只有孔子閟而已其餘不有焉……又安孔子木像于客殿皆拜而歸 | 竊聞本朝之古大學寮春秋二仲釋奠傚唐朝制度、其制度禮式甚備、而五畿七道毎國各有學校……大學寮廢而諸國學校皆泯滅獨下野國一學幸存、……八百餘年堂舍就荒遺蹤僅在……辱降鈞命再興聖跡、從五位能登守土井利長監其事、率由舊章築成新殿、堂々兩房兩楹之制有據……此學素安聖像、今副四配神位…… | 本朝學黌之設往昔尤盛、今僅所存之者足利而已矣、欽惟大檀越征夷大將軍右相君、辱降鈞旨賜銀若干、令施修風之手、於玆乎令郡主土井氏能州刺史命家臣督其事、殿堂門廡不日而成、可謂治世之懿美……<br>寛文第八龍集戊申孟夏吉祥辰　住持比丘元致謹誌焉<br>（裏面に）　大和國長谷住人大工<br>澤村佐兵衛藤原久宗 | 足利の町の東の方に學校あり、門二重あり、二の門の間に梅の列樹をうゑたり、奥の門の内に孔子の御廟あり、其の前の庭に海棠櫻柳梅京櫻などあり、御廟は南にむかへり、面六間入四間なり、つねの如く板敷なり、白木つくりなり、前に東階西階あり、堂上木にて作れる古き聖像を安置せり座像なり |
| | 寛文八年 | 寛文八年 | 寶永七年 |
| | 1668 | 1668 | 1710 |
| | 四代家綱 | 四代家綱 | 六代家宣 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 高サ二尺五寸許聖像の前左右に顔曾思孟の四配の神主あり朱ぬりなり | | | |
| (15) | 山吹日記 | 明の孔廟の圖によりて作れりとかや、西階東階兩楹のもうけあり、まつ聖像を拜み奉る、座像にて犢のさましたるものをかうむり、右の御手に羽扇を取りたまへり | 天明六年 | 1786 | 十一代 家齊 |
| (16) | 學校由來記 | 足利學校境内長尾家政所の由申傳なり、去によつて四方高土手溝沼あり | 寛政六年 | 1794 | |
| (17) | 足利學校見聞記 | 廟面南……善次曰、寛文七年嚴有大君命建此、廟倣明代製、天保二年之災唯此獨免……有兩階、自祚階登聖像在中央……善次曰、往時握羽扇、近以其俗去之 | 天保十四年 | 1843 | 十二代 家慶 |

右に依つて順次に考へて見るに、足利學校は(1)義滿の時代から「學徒負笈」之地とされ、(5)應仁元年に今の地に移轉された。又現在孔子廟に安置してある孔子像と稱する者に、(7)に見る如き胎内文がある。其形も、其文も佛教的要素を持ち果して此が孔子像なりや疑問を存し得る。然し後には此が明瞭に孔子像として取り扱はれて居る。林羅山は(11)で「孔子木像を客殿に拜す」と云ひ、孔子廟が

| | 佛教的 | 儒教的 | 足利に關係ある |
|---|---|---|---|
| 文 | 爲母妙□上獻三寶 | 侍請筵學徒八月上丁 | 長尾但馬守憲長世…於櫻下小路上 |
| 形 | 維摩の形 | 儒教的ならず | |

出來た時、此を四配と共に殿內中室に安置した。

(12)の鵞峯文集足利學校再興文に依ると、寛文八年孔子廟は舊章に率由して作られた。此處に云ふ「舊章」の具體的なものは後に記する理由に依り、南宋末の人、朱子の弟子なる楊復の著はす儀禮旁通圖中の寢廟辨名圖であると思ふ。此建築の特色たる兩階兩楹は其後の訪問者の注目を引いた。(14)(15)(17参照)然し其と同時に此廟の規範が「明の孔廟の圖に依つて作られた」と考へられるに至つたのは不當である。何となれば樣式上より見て明朝の孔子廟型でない事明かである。足利學校遺蹟圖書館目錄には「明朝孔廟圖(箱入)右南部遠江守直政寄」と云ふものがあり、其圖は今見當らないが、孔子廟落成の年寛文八年に寄附者直政は十九歳で遠江守となつて居ない。若し明朝に出版された廟の圖と云ふならば楊復の寢廟圖乃至は其系統のものとしてうなづける。

(16)に引く學校由來記は學校周圍の土手と沼溝は其地が長尾の政所であつた爲だと說明して居る。然し學校の制の上から云つても「周四代學」の如く堀川の存在が考へられる。(第一圖参照)堀川は四面にほゞ長方形に繞つて居るが東西南三面が四間幅、北一面が二間幅である。此堀川が寛文八年のものなりや其以前の遺物なりや研究者の示教あらん事を望む次第である。

扨て第一四圖足利學校孔子廟平面圖と、第一一圖儀禮旁通圖所載寢廟辨名圖を比較表示しよう。

| | (一)寢廟辨名圖 | (二)足利學校孔子廟 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 門 | 塾あり | 塾なし | (二)の門は朱子家禮祠堂三間圖の門と同一なり |
| 堂塗 | あり | あり | |
| 階 | 阼階、西階、側階(二)、北階(一) | 東階(=阼階)、西階、側階(二)、北階(二) | |
| 楹 | 東楹、西楹 | 東楹、西楹 | |
| 室と房 | 北側中央に室を作り、左右に兩房あり | 北側中央に室(聖室)を作り、左右に兩房あり(篁室箆室と稱す) | |
| 兩序 | あり | あり | |
| 兩夾室 | あり | あり | |
| 南面の向拜 | なし | あり | 朱子家禮に依ると廟の前に霧避(捲篷)を取り付くる事がある、舜水朱氏談綺にても同樣也 |
| 北面一間の廂 | なし | あり | 聖像を廂の下に置くのを避けたのであらう |

右の如く寢廟辨名圖と足利學校孔子廟平面圖とは根本に於て全く一致し、相違點の門及塀は朱子家禮に一致する所より、結局足利學校孔子廟の平面計劃は南宋末の楊復の著はす寢廟辨名圖に密接せる關係を有し、恐らく此を基本とし、朱子家禮を參酌して一部變更したものであると考へられる。尙ほ岡山藩學校の平面計劃も亦辨名圖に基き、其落成は寬文九年である事は其條に記する如くである。

田邊泰氏は雜誌「建築知識第二卷第五號」に「足利學校及聖堂建築考」なる文を載せ、其結論に「思ふに支那建築の知識に暗い當時の工匠が單なる想像で支那振りを創造したものであらう」と云はれたのは平面計劃に氣付かれなかつた爲であらうか。

## 五　水戸孔子廟模型及弘道館孔子廟

水戸光圀は學校を起す希望を有し、明の遺臣朱舜水をして學宮圖說を作らしめ此に從つて舜水監督の下に模型を製作させた。當時は儒教建築の營造が盛んで、十四年前に上野先聖殿の改築が行はれ、五年前には足利學校に孔子廟が創建され、四年前には岡山藩學校が落成し、一年後には同じく岡山の閑谷孔子廟が創設された。

支那では建築する時に先づ其模型を作る事が屢〻行はれる。自分は現に北京の明清兩朝の孔子廟模型を北京歷史博物館で觀て居る。然し此等は構造の大略を示すもので、到底水戸の模型の精密なるの比ではない。舜水朱氏談綺序に「西山公禮致而賓師之(朱舜水)敬齒德而講道義、嘗有志于興學校、先生商確古今、著學宮圖說、公使梓人依圖而造木樣、大居三十分之一、先生親指授、湊離機巧絲髮縝密、觀者服其精妙」とある。舜水は長崎の大工を使用し、大根を切つて立體的の說明をし指導したと水戸彰

考館に云ひ傳へて居る。其精密なる事は、此を擴大すれば直に實際建築となる程である。後に此が日本の孔子廟建築に與へた感化は大で、寛政十一年に出來た江戸湯島大成殿は殆んど其の模寫であり、會津日新館、萩明倫堂、水戸弘道館の孔子廟等も或は平面或は建築の部分的に影響を受けたものであり、以て其日本儒教建築史上重要な位置にある事が知られる。

其計劃は第四圖の平面圖に見る如くで、中央に大成殿をおき、西側に明倫堂を中心とする學校建築の一團があり、東側に射場があり東北に啓聖宮がある。此を左に表示する。

| | 第四圖　朱舜水計劃孔子廟總圖 | 屋根の形 | 前面間數 | 側面間數 | 間口(尺) | 奥行(尺) | 高さ(尺) | 柱太さ(尺) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 外圍 | 方形で一邊の長さ百七十間、北半即ち北邊及東西の半以北は塀を作り殘りの南半は柵を作る(頖水參照) | | | | 一〇二〇、〇 | 一〇二〇、〇 | | |
| 旗竿 | 孔廟を南北に貫く中軸線を引けば、其南端左右に外柵に接して内側に建つ | | | | | | 七八、〇 | 周 七、五 |
| 櫺星門 | 旗竿の北に三ケ同形のもの東西一直線に建ち、塀が此を連絡し、塀は左右に伸び其西端は北に折れる | | 三 | | 一二、〇 | | | |
| 頖水 | 櫺星門の北にあり、凹字形の堀川で其北端は中軸線の中點で止る。頖水は諸侯學の象徴である。白虎通に「諸侯(學)曰頖宮、半者象瑞也、獨南面禮儀之方 | | | | | | | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 有水耳其餘雍之言垣宮名之別尊卑也、明不得化四方」天子の辟雍が環形なるの半を取つたものである | | | | | | | |
| | 頖水の橋 | 頖水の南面に三ヶ東西各一ヶ所に計五橋がかゝる。三才圖繪所載の頖水にも五橋が掛る | | | | 巾 一二、〇 | 長サ 七八、〇 | | |
| | 大門 | 中軸線上、頖水の凹形の中心にある。頖水との位置に關しては恐らくは三才圖繪の諸侯泮宮圖の影響があると思ふ。門の左右に塾があり、丸窓を付ける。「中門は、常には不通、孔子の牲を引き入るゝ時ばかり通る也、總しては東角西角門ばかり通る事なり」 | 單層 入母屋 | 五 | 三戸 | 八〇、〇 | 三〇、〇 | 四二、六 | 一、九二 一、六八 |
| 大成殿一廓 | 戟門 | 中軸線上にあり、而も中軸の中點にあたる。左右に塾がある、外面に向つて丸窓を開く | 單層 入母屋 | 五 | 三戸 | 八〇、〇 | 一八、〇 | 三四、五 | 一、八 一、五 |
| | 兩廡 | 大成殿前東西に相對し戟門と共に中庭を圍む、此處に賢儒の神位を安置する | 單層 切妻 | 二十 | 三 | 一八〇、〇 | 二四、〇 | 三四、〇 | 一、三二 一、〇〇 |
| | 大成殿 | 孔子を祭る殿、北に神室を作り東西に兩序がある、大成殿兩廡、戟門、及小廊の關係は三才圖繪所載の明代孔子廟及北京現存の清代孔子廟と同形である | 單層 入母屋 | 五 | 一十 | 八〇、〇 | 四九、五 | 五六、四 | 一九、二 |
| | 小廊 | 東西兩廡を大成殿及戟門に連絡する | | | | | | | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 饌房六字 | 實籩所、酒醴所、蒸膳所三字は東廡の東にあり、鼎俎所、烹飪所、潔牲所の三字は西廡の西にある。此中五字の大さは同様であるが潔牲所丈特に大きい。此下に（　）内に大さを記する | 單層入母屋 | (二十)八 | (四)四 | 四八、〇（七二、〇） | 二四、〇（二四、〇） | 三一、五（三一、五） | 〇、九（〇、九） |
| 啓聖宮 | 啓聖門 | 戟門と同形、啓聖宮前にある | 單層入母屋 | 五 | 戸三 | 七五、〇 | 一八、〇 | 二一、六 | |
| | 啓聖宮 | 大成殿の東北にあり、孔子の父を祭る、曲阜では大成殿の西側にある | 單層入母屋東西廂あり | 五 | 六 | 七五、〇 | 四二、八 | 五一、四五 | 一、八 |
| 明倫堂を中心 | 金鼓亭 | 明倫堂の一園は大成殿の西側にある、金鼓亭は其最南端の東側にあり掌號と相對する | 單層切妻 | 二 | 二 | 一二、〇 | 九、〇 | 二一、四五 | 〇、九 |
| | 掌號 | 金鼓亭と相對し西にあり | 單層切妻 | 二 | 二 | 一二、〇 | 九、〇 | 一二、九 | 〇、九 |
| | 進賢樓 | 金鼓亭掌號の北にあり | 重層入母屋 | 五 | 二 | 七一、四 | 二八、八 | 五四、三 | 二、二八　一、九 |
| | 儀門 | 賢進樓の北にあり、戟門と同形 | 單層入母屋 | 五 | 戸三 | 七一、〇 | 一八、〇 | 二〇、七 | 一、八　二、五 |
| | 東西學舍 | 儀門の北にあり、東西相對す、「學生の寮にして第一依仁齋と云、其次を據德齋と云、右二つは學問成就身修たる人の寮なり、游藝齋は諸藝を習ふ人の居所なり、初學の者をば志道齋に居くなり」 | 單層入母屋 | 十二 | 三 | 一二〇、〇 | 一八、〇 | 三一、二 | 一、二 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| とする學校建築 | 中軍廳 | 東學舍の北にあり、「明倫堂にて事を行ふ時重き官人の支度する所なり」 | 單層切妻 | 四 | 三 | 三六、〇 | 一八、〇 | 三〇、六 | 一、三五 |
| | 旗鼓廳 | 西學舍の北にあり | 單層切妻 | 四 | 三 | 三六、〇 | 一八、〇 | 三〇、六 | 一、三五 |
| | 明倫堂 | | 單層入母屋 | 五 | 五 | 七一、四 | 三五、七九 | 四七、七 | 一、六二 |
| | 鐘樓 | 明倫堂の東、中軍廳の北にあり、天井無し | 重層入母屋 | 二 | 二 | 一八、四 | 一八、四 | 三〇、六 | 〇、七五 |
| | 鼓樓 | 明倫堂の西旗鼓樓の北にあり、天井あり | 重層入母屋 | 二 | 二 | 一八、四 | 一八、四 | 六〇、六 | 〇、七五 |
| | 尊經閣 | 大成殿の北にあり | 重層入母屋 | 五 | 三 | 八〇、〇 | 五二、八 | 六四、九五 | 一、六二　一、三五 |
| 射場の建築 | 擧旗掌號 | 頖水の東、的の西北にあり | 單層切妻 | 二 | 二 | 一二、〇 | 九、〇 | 一二、九 | 〇、九 |
| | 報鼓 | 擧旗掌號の北、頖水の東にあり | 單層切妻 | 二 | 二 | 一二、〇 | 九、〇 | 二一、〇 | 〇、九 |
| | 監箭 | 射圃の西南にあり | 單層入母屋 | 六 | 二 | 三六、〇 | 一二、〇 | 二三、九 | 〇、九 |
| | 射圃 | | 單層入母屋 | 五 | 五 | 七一、四 | 三六、〇 | 四四、四 | 一、六二 |
| | 燕寢 | 射圃の背後にあり | 單層入母屋 | 六 | 二 | 三七、〇 | 一二、〇 | 二三、七 | 〇、九 |

右の中類水を凹形にした事と射場を作つた事が問題となる。類水を禮書所載の如く半環形の凹或は三才圖繪所載の如く凹にしない事は舜水或は義公の考へで天子に屬する璧水の環形の半に從ふ事をさへも憚つたものと思ふ。又射場を作る例は近代の支那孔廟中遺例あるを知らないが、三才圖繪に引く「大學は禮射を行ふの所」と云ふのに關係を有するのでは無からうか。次に建築の細部手法或は構造法中に支那風の存する所を擧げて見る。模型作製の工人が日本人である故に日本式が混入して居るは勿論で構造の上ではむしろ日本式に近いと云へる。

| | |
|---|---|
| 柱礎 | 伏蓮華の上に球形を載せた形がある。明代の實例には此型で、下部を雲にしたものもある。三才圖繪所載の石礎圖は下部が蓮瓣で全く等しい。恐らくは三才圖繪を參考にして作つたと思ふ。 |
| 圓窓 | 大門、戟門、啓聖門等の左右に房があり、塾と稱し、周代の制を摸して作つたものであるが、其房の前面に向ふ壁、卽ち外觀上門の左右に丸窓がある。丸窓は元來古いものであるが長江下流地方に比較的多く用ひられ、寺觀にも其例が多く、舜水の目擊したものも多からう可く、其の影響になると思ふ（長崎の支那寺福齊寺も同形である。） |
| 開口 | 門及廊の開口に一種の花頭形を用ひて居るが、其頂及左右に繪樣を有するのは最もよく支那式を傳へて居る、而も長江下流地方に明代に行はれた形である。 |
| 勾欄 | 重層建築中、尊經閣の勾欄は支那式に出來て居る、其組子は卍字の連續する形で、支那の寺觀で屢々見るものである。 |

**屋根**

**懸魚**

談綺に「桁隱し懸魚は陰陽に欠く可し」とある、即ち兩儀の巴形に表現された形で屢〻魚形と共に併せ用ひられ、火災除の爲である（懸魚は餘の音便の借字との說もあり）。

**大棟飾**

大棟を上下二段に分ち下段には古老錢の形を上段には斜の平行線を左右に向けて並列し、中央部分にて日輪の雲に浮いて居る形を付ける。此の形式は南宋時代の五山建築にも行はれ、其場合に佛日增輝等の語が左右に書してある、此系統に屬する棟飾たる事は疑ひ無い。

**鬼犾頭（正吻）**

吾人が湯島の聖堂を見る時に特に目に付くのは大棟兩端に載る裝飾物で「あれは一體何物であるか」と屢〻質問を受ける物である。此は水戶孔子廟模型に倣つて作つたもので一種の鯱である。舜水朱氏談綺に「兩妻に鬼犾頭を居ゆ、其形は龍に似たり、胸は蛇腹鱗ほり付髮毛そうにたち毛筋ほり付背同尾のさき魚の如く手前へ一つ後へ一つ出す小角あり鐵或は瓦にても造る、但し耳は無し（角にて物を聞くと云ふ）頭に鳥威の角二本鐵にて長さ九尺上の方曲らせ枝二股宛付け鳥のとまり得ざる樣に劍の刀の如くに致すなり、右箱棟の上兩妻へ犾頭を望かせ居置なり。」此場合の特色は三つ舉げる事が出來る、（一）龍頭魚尾、（二）角を有す、（三）外方を向く、事である、鯱の古形は鴟尾で六朝唐に行はれ、更に古く漢代に發芽を見たが、五代宋の頃に魚形に變つた、當時の文獻を見ると墨客揮犀に「漢以宮殿多災、術者言、天上有魚尾星、宜爲其象、冠于室以禳之今自有唐以來寺觀殿宇尚有爲飛魚尾指上者」此に依つて魚尾を有し、其が上を指す理由が分る。第二に角を有する事は、其の意味に就ては根本的には不明である、實例としては既に渤海東京城の遺蹟より發掘されて居り、又明淸時代に其實例が多い、然し下り棟の先端に付く旁吻に場合により多く角を有する例が多い。第三に外方を向く事であるが、一般には內を向くのが發達上から考へても原則と云へるが、必ずしも其の例が無いわけでは無い。實例としては北京城の正陽門、鐘樓鼓樓等あり、又三才圖繪所載の建築圖中、闕、館、五畝宅圖、郵驛、學、關、行馬等には外向きの鯱が付いて居る、此場合に何れも角を有する。特に三才圖繪所載のものは最も此模型の鬼犾頭に類するので恐らくは三才圖繪が參考圖に供せられたものと思ふ。

| | | |
|---|---|---|
| 飾 | 鬼龍子（旁吻） | 下り棟先端に附する旁吻である。舜水朱氏談綺に「八箇所の下棟に鬼龍子を居ゆ、其形は猫に似たり、胸は蛇腹毛筋ほり付け口は開くと不レ開と牙有り前の足は立ちて後の足は折る、瓦にて燒物に造るなり」とあり、其の形は猫に似て居るが、騶虞を象つたものと思ふ、騶虞を屋根飾にする事は山西省にある明代の舜の廟に實例がある。騶虞は義獸で、白虎黑文生物を食せず至信の德がありとせられ、又詩にも文王の化を示す爲に其名を章名に用ひられたものである、故に孔子廟の裝飾物としては好個の品である。三才圖繪所載の騶虞の圖と此模型の鬼龍子を比較すると實によく似て居るので、此の製作にも三才圖繪が用ひられたと思ふ。 |
| 構造法 | 天井 | 天井の形は化粧屋根裏及び半筒形の所謂黃檗天井が多く用ひられ、何れも支那式のものである。南方特に長江下流地方に於ては兩者屢〻用ひられて居る、特に化粧せずに屋根裏を其まゝ用ひる例も多い。黃檗天井なるものは日本には黃檗宗の傳來と共に初めて輸入されたので其名を存するが、元來此は建築物の前面の捲篷から發達したと考へられ、從つて其用ひられる場所も建築物の入口の所にあるのであるが、此模型では四方或は左右兩側に作つてあるのは、舜水が建築家でない爲に用法を誤つたものと思ふ。 |
| | 軸部 | 軸部に於ては江戸時代に行はれた和樣唐樣の混合物が用ひられた。 |
| 附屬物 | 捲篷 | 祭典の際に大成殿、崇聖宮等の前に取り付ける覆ひである。舜水朱氏談綺に「捲篷、此は常には取置祭の時に臨て取付るなり」とある。黃檗天井の原型となつたものと考へられ、木を以て構造體を組み立て「とまの仕樣はなよ竹にて網代に組緣皮あて桐油にてしつくり致し兩面共に塗り緣かはこはぜ取付垂木に懸合するなり（但し上は黑く下は內の方朱色に桐油塗なり）」。 |

要するに朱舜水の計劃は明代孔子廟を規本とし、古書を研究して獨自の考へを入れ、其部分的解決には、彼の支那建築に對する記憶と、參考文獻中の繪畫に依つた。三才圖繪は其重要なる部分をなした。と云ふ事になる。

**弘道館孔子廟**　齊昭の代に弘道館が出來、鹿島神社及孔子廟が作られた。天保十年、學校の敷地を始めて決定し、同十一年二月二十日藤田彪等に弘道館掛を命じ、天保十二年七月に到り略〻落成した。其計劃は齊昭自身より出で、日本人としての强い自覺を反映して居る。

初齊昭は自分の考を藩內要路の人に示し意見を求めた。或は「何とも申上げ兼ねる」と云ひ、或は「學校は虛飾なり、且つ財政上の見地よりするも尙早なり」とし或は「學校を作る事は大贊成なり、然し孔子廟を設る必要なし」と云ひ、或は「朱舜水の模型通りに造る可し」と等の意見もあつたが、此は幕府の財力を以てするも不可能な事であつたので、大成殿のみを模型通りに作ることさへ中止した。最後に藤田彪が意見を述べ、齊昭が親批した。「孔子が日本に來れば、家は日本作りに致す可し」と評して居るのは面白い。左に此等に關係を有する文獻を擧げて參考とする。

水戶調役奉答書　天保五年十二月

一學校とさへ申候得ば孔子を本尊に仕候義古今之通論に御座候處孔子の道を尊崇仕候も神皇之御勳績に候へば神皇ヲ主と御祭孔子扁鵲ヲ客の如ク仕神儒一致文武合併に御建立被遊度との御義本朝元より神武之國に御座候へバ乍恐御卓見にて御尤之御義に奉存候處我々共不學無識にては何レ共奉申上兼候間其節に至り委く御吟味の上御極被遊候方と奉存候學校之御圖每夜御自身御考究被遊御出來に罷成候はゞ拜見可被仰付旨身に餘り難有仕合に奉存候

十二月九日

臣　山口賴母

白石々衞門

| | | |
|---|---|---|
| 藤田貞正の上陳書 | 天保五年 | 此度如尊命、文學武藝及衰微候義、引立も不仕其儘打捨置候樣爲思召、學校にて御引立可被遊との御事、一圓難有仕合奉存候併學校の義諸國にても追々新建に罷成候由候へども、多くは虛飾にて實用少き方に及承申候……諸國にて新建之事も有之間此方にても新建可仕とて唯大造に構へ壯觀に誇候のみにて實用無之ては又學校之詮も無之候……當時大小之御家中一統及困窮經營にも指支候族も不少、中々以文武之段にも無之相聞候……<br>十二月九日　　藤田主書<br>御側衆中 |
| 同人別書 | 〃 | ……諸國にて學校新建之沙汰承及羨敷存候て此方にても學校建可申とて會津を初め諸國之例に倣ひ、眞似を仕候事、於御國ハ今更殘念に奉存候、御國之義は義公樣御時代、舜水先生大成殿之雛形嚴然と仕候て、今に御寶庫に有之義、すでに享和中幕府より御好にて被入高覽、其雛形を以、本堂計、聖堂之地に新に御造營に罷成、大樹公御參詣も被遊候處、畢竟源義殿御世話有之雛形ヲ以御制度も備候段御機嫌に思召候との御書付被仰出候程義候へばたとへ御入用は莫大之義可有御座候へ共會て先君之御內存も被爲……尤大成殿諸舍諸寮に至るまで御全備被遊候には小ぶりに縮め申候、迚も前後廣狹幾町程土地無之ては不相成事候、……數等省略も仕候ハヽ雛形之通本堂ハ不及申諸舍諸寮に至るまで御造營御全備に罷成候へば、天下の學校よりは御本式に罷成況や諸侯國々之學校とちがひ、却て四方よりも水戸御文國たる事空しからず感服仕羨入候樣可罷成候……<br>十二月九日<br>御側衆中　　藤田主書 |
| 烈公の青山量介へ與へる書 | 天保五年十二月十 | 一、江戸を初國々に聖堂學校等處々に有之處、學校とさへ申候へば孔子を本尊に致候處唐にては尤の義に候へ共、本朝にては周孔の道を御取用ひ被遊候は神皇の御功に在之候へば此末萬々 |

八日

一此方國許へ學校めきたる物も取立に相成樣に候はゞ神を中へ祭り孔子隔融すくなひこたの神又は人丸等客の如くに祭候て學校へ初て入門致候者は先づ神を拜候後孔子等をも拜し候樣にこ如何有之哉…又中へ神を祭候ならば神は何神可然哉神武帝應神帝天智帝抔にも可有之哉三神一社に祭込候も如何是等の義も相談致候

十二月十八日　　　　青山量介へ

二白我等の了簡は人とは少く相違候て人は此國にて學校建候ならば義公にて御出來の聖堂雛形にて出來候樣抔申も可有之候へども右の如く出來候には莫大の入用にて公邊にてさへ被遊兼本堂計出來候位故迚も出來不申は勿論なり、只々我等の了簡は空飾に無之神儒一致文武合併の學校此方より手初致度と内々存居候也

青山延于奉答書

天保五年十二月廿四日

御封書、奉拜見候、學校之義に付、御議論之趣、一々奉敬服候、扠學校異朝之如く大聖殿を始其外學寮迄準備候樣に作立候は本式之學校に御座候得共是は廣大なる事にて幕府之御力にてさへ本殿計御造營御座候事に有之候へば、まして諸侯などにては無用の費ばかりにて永久之法に相成不申候、聖廟無之候へば文宣王を祭候にも及不申候、左候へば異朝學校之制に一向拘り不申學問所を城下へ構候て全く士人講學之場所と定め釋奠釋菜等行ひ不申、講堂を建、小寮二三區を設平生習學之所と仕、春初講之節、吉備公菅丞相之懸物を床へ懸候て造酒を備候位にて相濟酒藥講論之節は大己貴少彥那二神懸物を懸又和歌披講有之節人丸、貫之等之懸物懸候樣に仕候はゞ夫にて事濟可申と奉存候、惟學校を建候を諸侯之名聞と仕頻に唐風に仕名ありて實なき事天下之通弊に御坐候處、右之流弊を御革被遊候尊慮に御卓見誠に御坐候…

十二月念四日　　　　青山延于頓首死罪

一學校中祭神神武帝應神帝天智帝三神然被爲思召候趣至極御尤奉存候、いつれも本朝之太祖太宗にて文武起候本原御座候乍去唐にても天子格別之御事にて文廟武廟へも祭不申候、是け異代

| | |
|---|---|
| | にても天子は恐多事にて遠慮仕候、左候へば武館にては鹿島香取兩社文館にては吉備公菅公なとか外は存當りも無之奉存候、日本紀に藤原鎌足、學周孔之道於南淵先生と相見候へ共、南淵先生と申人ハ向相分不申候、又古記の處にては聖徳太子是は釋氏にて尊崇仕候間用兼申候右之義恒藏へも相談仕候、別紙入高覽候 |
| 藤田彪の意見 | 一、鹿島神社御建立之事<br>一、孔廟御建立の事<br>但大成殿雛形にて土貢無之樣には御座候共ハ體唐人の普請は殊の外細工念入隨て御入用を相過し可申奉存候、鹿嶋神社よりの御入用相過候樣にては相當不致候間悉くさつと御出來可然奉存候<br>一、釋典等之義前廣に御治定可然奉存候 |
| 烈公の親批 | 一孔廟の義は大成殿孔子の居所計にて可然候處、左候ては入用計にも無之、體を得申間敷、萬一孔子此方へ來り候はゝやはり家は日本作りに可致候へば可然こしらへ候て宜敷と存候 |
| 弘道館記 | ………抑夫祀建御雷神者何、以其亮天功於艸昧、留威靈於茲土、欲原其始、報其本、使民知斯道之所由來也、其營孔子廟者何、以唐虞三代之道折衷於此、欲欽其德、資其教、使人知斯道之所以益大且明不偶然也、嗚呼我國中之士民、夙夜匪懈、出入斯館、奉神州之道、資西土之教、忠孝無二、文武不岐、學問事業、不殊其效、敬神崇儒、無有偏黨、集衆思、宣群力、以報國家無窮之恩、則豈徒祖宗之志弗墜、神皇在天之靈、亦將降鑒焉、建斯館以統其治教者誰、權中納言從三位源朝臣齊昭也、天保九年歲次戊戌春三月。 |

孔子廟は鹿島神社の側に設けられた。鹿島神社は原地の社殿の方位に從つて西北を向き、孔子廟は

も、此を作る齊昭の態度が特筆さる可きものである。（第五圖參照）

建築手法は日本式で上記屋上の飾りが、朱舜水の模型に從ふ程度である。此孔子廟は建築其自身より

を作る。大成殿は間口三間奥行三間、單層入母屋本瓦葺で、屋上に鬼犾頭及び鬼龍子を載せてある。

西向きで一般に南向きなるを無視して居る。廟の周圍に土手を繞らし、西に中門を設け、中に大成殿

## 六　多久孔子廟

佐賀藩多久の邑主多久茂矩は嗣子が無い爲に藩主鍋島光茂の妾腹の茂文を養子とした。此が後多久聖廟を建立した人である。是より先茂矩は醫師河浪道忠を召聘したが、道忠は外醫を業とし、內儒を崇び孔子廟學校の建設に與つて力あつた。卽ち道忠の崇儒が茂文の好學を來した事と思ふ。

茂文は貞享三年十八歲で家督を襲ぎ、元祿元年二十歲の年、實父鍋島光茂が逝職となつて長崎に勤在するに當り之に供奉した。元祿初年に孔子像及び四配を鑄造したと傳へ、或は之は唐製と云ふが恐らく長崎に在つて支那人より入手したものであらう。元祿五年學校を興し河浪道忠を敎授とし、同八年に孔子廟建築に着工し、同十三年には京都の儒者中村惕齋監督の下に孔子像を鑄造し、十四年假りに孔子廟を校側に營んで爰に之を安置した。寶永五年には十四年の歲月を費した孔子廟が落成した。

茂文が孔子廟を造營する理由は其文廟記によく表はれて居る。「維時元祿十有四年季秋朔初七辛卯日、前於京師奉模之尊像遠途幸無他障滯速降臨鄙邑、千喜萬祥不堪歡欣之至、堂宇經營土木未落成、構假室于塾側暫奉安尊體、（中略）古人曰視廟社則思敬、此言極有深意、（中略）先儒發明之曰、敬一心之主宰萬物之根本而爲萬世聖學之基本也、此敬也視廟社則發不視不發、由是觀之先設聖廟而使人知所敬（中略）若夫聖廟嚴然于玆、視者訝相謂曰是曷神也、曰是孔子之神也、曰孔子者曷守之神也、曰守孝悌忠信之人神也、人々知孝悌忠信之神、而每視思敬則不識不知孝悌忠信之心油然生焉、（中略）則聖廟有補于治敎莫切於焉、（中略）僕今日所以奉安尊像之旨趣也、（中略）伏惟中國曲阜之眞廟達都國、春秋二丁以大牢之禮祭聖廟者一千五百六十餘處、閭里小社不可勝計、中華文道之盛良有以也、而忠臣義士列名於載籍不可枚擧矣、是無他聖廟充于里巷而師儒之敎誘備也、我神州古者大學寮釋奠格式暨諸國之祠典考之國史其盛與中華齊、文人才子又不耻彼也、其後暨文敎日衰、諸國聖廟掃地無一宇矣、據何知聖學道乎、（中略）彼所以不知仁義之道者又此濫觴乎學之政不備、（中略）多久伊豆稽首百拜敬白。」卽ち人を善導するには孔子廟の建設が最重要事と信じて居たのである。多久茂文・河浪道忠及び孔子像に關して武富英亮の鶴山書院遷座記に「（上略）方今多久茂文藤公者大夫之賢者、而其儒臣河浪生者士之仁者也歟、余事之友之也漸矣、藤公本出邦君之連枝、而嗣國老之緒、自少好讀聖賢之書棄詞章之學、而重綱常之道及

壯無怠、安聖堂於宅奧、（中略）側架書庫雖堆和漢之群書、盡除老佛之書無雜、（中略）然河浪生者何其人歟、藤公之世臣、幼而學壯而遊武之吉田官醫之塾、雖以醫食祿無售名功之志、直而溫不流于俗、不淫于佛專好程朱之學、（中略）藤公好善無怠、於鶴山書院之境上亦營一堂宇安孔聖之尊像欲建萬世之基業、辭洛之鴻儒仲欽、使擇名銅工者在視於鎔製聖像之事、欽也深極聖學之蘊、以制度文爲之學爲一家、當時與洛之藤藏老儒爲雁行、仲欽甚喜藤公之志願、與藤藏相謀考古今之蹟、賴傳來之模範、招鑄工之妙手、朝監莫臨以制成自然之勝像、於其冠冕章服扆倚之紋象者使狩野某圖描以彫刻、欽也克可謂任其事、（中略）元祿辛巳之秋九月既望日肥陽大寶之命士武富英亮謹書記」と述べ、又孔子廟計畫に關して英亮の父武富咸亮は寶永五年仲秋仲丁奉祝肥州小城郡多久邑東原庠舍之釋菜に「（前略）多久茂文公新欲築文廟、而軒山斥地碎巖塞谿、惟見義勇爲而不惜財物、菲飮食惡衣食致美於鳳檐龍楣、經始乎壬（恐らくは乙の誤ならん）酉勾芒落成戊子之壽星、尊像之巍々龕櫝之煌々其類希也、（中略）茂文公不措僕之拙、承當商量堂殿之準規階墻之彫刻也、僕感服其厚志、而不獲辭圖畫以議其司（中略）後學武富咸亮頓首百拜」と咸亮自身が計畫をなした事を書いて居る。武富咸亮は果して何者であるか、(7)の項に記する如く明人の子孫で支那人と交渉が多かつた人で當時の支那事情に比較的通曉したと考へられる。

建築の形式は、其平面計劃は明清時代の孔子廟建築と極めて良く一致し、裝折に於てもかなり彼の風

調を傳へて居るが構造法に到つては殆んど我唐様建築を出でない。故關野貞博士は當建築を見て「何とも爲體の知れない建築である」と文部省の國寶建造物調査報告に書かれたのは建築系統の如何を解決出來ず正直に述べられたものと思ふ。

當建築の最も特色ある平面を、明清時代の支那側實例として北京孔子廟を引いて比較して見る事とする。（第二〇、二一圖參照）

北京の孔子廟は中庭を圍んで北に大成殿を東西に東廡西廡を南に大成門を置き、廻廊を以て此等を連絡して居る。特に大成殿前に月臺を作り南及東西三面に階段を出して居る。神厨神庫（祭器庫）は此一廓外前面の東西に配する。

多久聖廟の平面は右形式の中庭に屋蓋を架したものと考へる時は理解し易い。卽ち北部突出部は大成殿で、其の前に月臺を作り、其南及東西三面に階段を出して居る。又東西には兩廡を、又此等に接して神厨神庫祭器庫を作つてある。第二一圖に示す如く南面突出の唐破風の部分は長崎伊勢町孔子廟の杏壇門及び江戸湯島聖堂の杏壇門と同形式で大成門式は杏壇門と見られ、其左右より延び、堂を繞つて北に折れて神厨神庫に止まる廊は廻廊と見る事が出來る。北京の實例では神厨神庫が離して作らるのが南昌府學の平面は祭器庫が東西兩廡と並列する事も當廟と一致する。たゞ神厨が東で神庫が西

である支那側の實例は見ない。もつとも日本の實例で見ると閑谷の孔子廟も江戸の上野及び湯島の孔子廟も神厨が西側にあるのは特殊の理由があるのであるまいか。尚ほ裝折に於て鉤欄等が三才圖繪所載の「學」圖の其れと全く一致する所より當建築に於ても亦文獻の感化ありと考へられる。卽ち武富咸亮は支那人より知識を得ると同時に、朱舜水が其模型作製に當つて書籍を參考にしたであらう如く、書物所載の圖を手本にしたと考へられる。裝飾文樣に龍麟鳳粟等の吉祥或は廟制關係の文樣が用ひられて居るが此に就いては略する。

最後に多久聖廟の建築が佐賀藩及び將軍に影響を與へた事は前にも一言して置いたが以下述べる事とする。多久安成は一族の長老で、儒學を以て邑主茂文に信任せられ學校創立に與つて力があつたが、其實子深田順正は丹邱邑志に次の如く書いて居る。「雄山（茂文の法號）府君篤く儒學を信じ聖廟學校を建んと深く思惟し玉へとも應仁以來天下大亂儒學を信ずる者無く唯佛のみ盛なりしゆへ容易に爲し難く思ひ藩廷に告玉へば藩も私に免許し玉はず東武へ告玉へば憲廟是を感し先づ大成殿を建られて後免許あり仍て藩も亦郭內鬼丸へ聖堂學校を建立せられて邑家も卽ち造營せらると云傳ふ然れば本朝聖堂學校の中興は我雄山府君也其志大哉。」孔子廟落成の時順正は既に十五歲であつたから、實父及び其他孔子廟關係者から建立前後の事情を比較的正確に聞き得て此を右の如く書いたものと思ふ。當時既に

名古屋・足利・岡山・長崎等に於て孔子廟が出來て居り、必ずしも多久の孔子廟が本朝聖堂學校の中興の先驅とは云ひ得ないが、少くとも綱吉が上野孔子廟を湯島に移轉し、擴大する一動機となつた事は考へられる。又多久で孔子像を改鑄した事は岡山に影響を與へ同地でも孔子像を鑄造する事になつた。

## 七　佐賀藩大寶村孔子廟

元祿八年佐賀の人武富市郎右衛門咸亮は佐賀大寶村に聖堂を建て側に塾を作つて經傳を講習した。坦南武富先生墓碣に「武富氏之先出於明人、世居於肥前佐嘉、七世祖咸亮就中村惕齋受程朱學、（中略）元祿年中咸亮請藩、建聖廟於大寶村教授其側、佐嘉文運之開蓋始於此」とあり、日本教育史資料所載武富市郎右衛門咸亮傳に「玄梁院樣（鍋島綱茂）文學を好ませられ賢を敬ひ道を尊ばせ玉ふ幸の時なれはとて内相原田橋右衛門とのへよりて聖廟建立の宿志を公の御聞に達しける（于時元祿三年）往古は京師及ひ國毎に庠序學校文廟をこそかに禮節も備りけれども足利已來兵革熾にして廢りけれはとて幕府に告させ玉ひけるに元祿四年江戸昌平坂と云へる地に聖廟を建させ玉ひ大成殿と名付玉ひし同五年玄梁院樣至聖先師孔夫子の像を御手つから圖寫し玉ひ御寄附なさせられ並に蓮池侯には顏子の像を畫し玉ひ公子村田

隱州君には曾子の像を畫し玉ひて寄附せられける斯て大賓村別莊の地をひらき聖堂を造構し三年の星霜を經て落成しぬれは三像を安置し奉り春秋二仲の釋奠を營みける同九年聖堂境內の租稅を免除し玉ひ玄梁院樣御朱印を賜はり先生を士班に擢られ長子英亮も亦賢能を以て槍隊に補せらる廟の傍に宇を結び講堂を鳶魚齋と名つけ家塾を建て依仁亭と名つく鄉大夫士庶の人に就て經傳を講習し五倫の道を發明せしむ大清新安の邵學朱といへる人より先聖殿の三字大書の額を贈る是を尊號の額となし又朝鮮國上護軍李武錫といへる人より大賓聖林の額を贈り來る是を南門の額とす廉齋の自書萬古長春の額を堂に懸置ぬ玄梁院樣ゐは〳〵入らせられ先生の講釋琵琶あるひは箏を彈せしめ聞し召されける。」

其の廟の形は恐らく多久廟と同樣の平面になると思ふが目下何等此を確む可き資料はない。武富は長崎で支那人と商賈し、其の聖廟落成の時に支那人から額を贈られて居る次第で、支那の事情は比較的よく通じて居たと思ふ。當廟落成の年に多久聖廟の工事が着手された。（佐賀藩鬼丸の聖廟は資料不足の爲に略す。）

## 八　山口藩明倫堂孔子廟

山口明倫堂は享保三年に城門の內に建てられたが狹隘となつたので嘉永二年に場所を廓外に移し擴

大した。

長門國明倫館記に「（前略）維享保三年戊戌泰栢侯立十一年（中略）是年秋遂命有司興學宮（中略）北爲先聖廟、講堂居中、左爲經籍之庫右爲厨、厨之西爲齋宮（中略）越明年巳亥正月告成、於是二月上丁始祭先聖四配於學。」此の計劃は湯島聖堂に範を取つた如く思はれる。嘉永二年の建築に關しては重建明倫館記に「（前略）昔泰桓公之創明倫館也（中略）相地於城門之內以經營焉（中略）爾迄今百三十年（中略）昔之所經營、今也狹隘殆不能容、非宏其規模而增其式廓、則不得適時勢之宜矣、及今侯立而丕承遺緒宵肝匪懈思以紹明前烈、乃命宰臣曰（中略）先公創建規模旣備矣、今又廓而宏之豈非繼述之道也、卽汝其與有司議之、於是執政與有司胥、乃就府下中央之地而則擇寬敞之區、重營其宮、肇工於弘化丙午迄今春告成、聖廟居中殿堂巍然、門塾修正泮水環之、結構之莊輪奐之美於舊有加焉、講堂在其西庖厨學舍相次而西、東則爲演武之場（中略）嘉永二年歲次己酉春三日　館祭酒山縣禎文祥謹撰」とある。右の內容中第一に明倫館が舊は城廓內にあつたのを外に移し擴大した事、第二に門塾を修正して之を繞つて泮水を作つた事が重要である。曾て會津日新館を改築する時禮書「諸侯學」と朱舜水の計劃とに依つて行はれたが、明倫堂の改修も亦朱舜水の案に出た事は第四・八兩圖に見る如く凹字形の泮水と其が塾門を繞る事に依つて知られ、尙講堂以下總體の配置も亦其方針を舜水案に取つたと思はれる。次に

城門内から市中に移した理由は場所の狹隘である事が第一に擧げらる可きと思ふが、禮書所載「諸侯學」に頖宮在郊の語も移轉を理由付ける者であつたらうと思ふ。

尙ほ在來のまゝ作られた大成殿及び厨房との關係は江戶元祿の孔廟と同形同組織である。

## 九 會津藩日新館

保科正之は寛永二十年會津に封ぜられて以來山崎闇齋・吉川惟足等を聘し、老職西鄉賴母の邸内に學校を組織した。後元祿の頃山崎闇齋の贈つた孔子の像を安置して聖廟を作り、更に下つて天明年代元老田中三郞兵衞が學校を新築しようと盡力し、工事を擔任し、郭内に地をトし、八年一大學校を落成した。之を日新館と稱した。教育史資料引く所の水戶藩所藏の日新館圖に依つて見ると中央部分に聖廟があり、兩階を備へ屋根に鬼犾頭及び鬼龍子を着けて居る。其の内部平面は會津藩教育考所載の平面圖に依ると聖廟内に東西兩楹あり、奥に室及び東西兩房がある。兩階の前には堂途があり、聖廟の前に半環形の泮水があり、其の前面に塾門がある。塾門は左右に圓形の窓を備へて居る。聖廟、堂途、塾門は足利學校の孔子廟及び岡山の藩學校と共に儀禮旁通圖に由來する事が考へられ、泮水の形は第九圖の禮書所載「諸侯學圖」より由來して居る事が明である。（第一〇圖參照）又塾門に丸窓を用ひる

建築的手法は孔子廟の屋根飾りと共に朱舜水の計劃に倣つた事も明である。岡山藩學校に於て泮水の形を三才圖繪の「諸侯類宮圖」から取つたのに對し面白い對をなすものである。

建築の形態及び大さに關しては小川渉著會津藩教育考引く所の新編會津風土記の抄錄を左に表示する。（第九・一〇圖參照）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 南門 | 泮宮正南の門なり<br>此門を入て戟門まで道巾二間長七間敷石なり | 單層 | 入母屋 | 東西二間一尺<br>南北一間四尺餘 |
| 戟門 | 左右に室あり、左室に大鼓を掛置き時を報ぜしむ、又左右に廊ありて東西の塾に通ず、此門より石橋の前迄道巾二間長三間敷石なり | 單層 | 入母屋 | 東西七間半<br>南北三間 |
| 東塾 | 戟門を入て右に在り、東より北に折回し大學の前に至る、二階造にして內方に庇あり、戟門の東を三禮塾と稱し、其北を毛詩塾と稱す、二階の上は習書寮なり、北端を居寮となす、居寮の生徒には旣廩を與ふ | 重層 | 入母屋 | 梁間二間半<br>棟間二十八間半 |
| 西塾 | 戟門を入つて左に在り、西より北に繞り、又東に折れ泮宮の西の渡殿に接す、二階造にして內の方に庇を設く、戟門の西を尙書塾と稱し其北を二經塾と稱す、此二階も習書寮なり、二經塾の北に通路を開き、其北を醫學寮とす、東に折回する所は禮式及算術・天文等を學ぶ所とす、此にて又散樂をも習ふ、東端に神厨あり、二階の上は卜部垂加の神道及和學を教ふる所なり、又醫學寮の北に數寄屋を設けて茶寮と名く、茶の湯を教ふる所なり | 重層 | 入母屋 | 梁間二間半<br>棟間五十二間半 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 泮水　渠 | 大學の前より泮宮の南を廻り西塾醫學寮の前に至る、左右の涯は本部篠山村より產する材木岩を並べ積めり | | | 廣三間<br>長一町二間 |
| 泮水　石橋 | 三ケ所あり、一は戟門の北にて泮宮正南の橋なり、一は東塾の西にあり、一ほ西塾の東にあり、共に泮水に架す | | | 巾三間<br>長三間 |
| 堂途 | 泮宮正南の橋より左右に分れ堂途ありて、東西兩階の下に至る、敷石なり | | | 長二十間<br>巾一間半 |
| 泮宮 | 南面にして屋根は皆銅なり、前に東西兩階あり、後に側階あり、皆五級なり、室堂戸牖の制皆唐土三代の典故に傚ふ、南面の中央に額を懸く、大成殿と題す、水戸中納言治保卿の筆なり<br>室の奥に孔聖の像を安じ顏子の像を配祀す<br>室の左右に東西房あり、鄕飮酒、鄕射等の禮皆此所にて行ふ | 單層 | 入母屋 | 高五丈八尺<br>東西九間二尺一寸<br>南北八間二尺四寸 |

## 一〇　仙臺藩

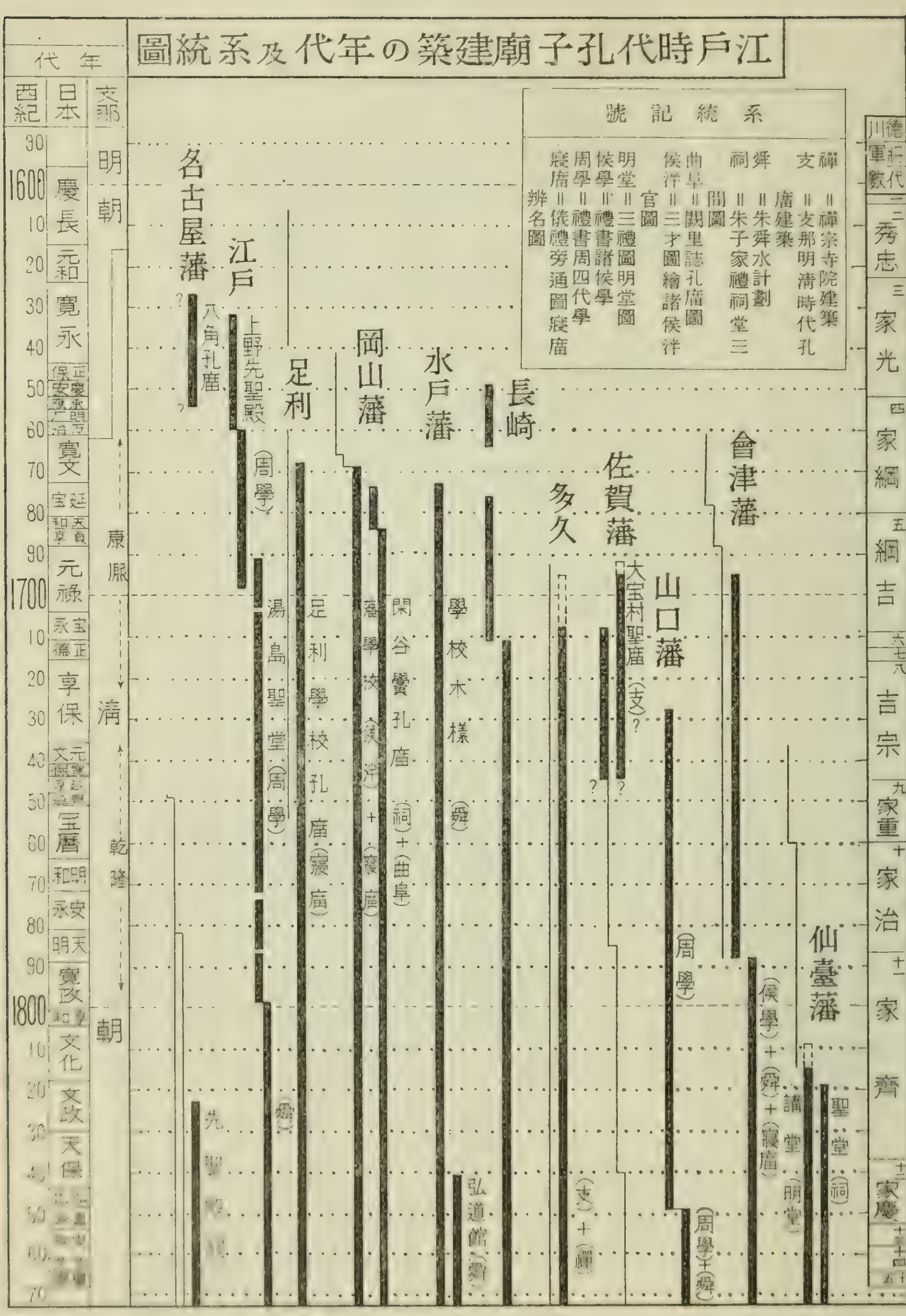
四世藩主綱村は天和二年に山崎闇齋の弟子遊佐次郎左衞門、林春齋の弟子佐藤文右衞門等を舉げて儒臣としたが、儒佛を混用して他方には月岬を師として禪法を學んだ。元祿十年に鐵牛を請ひ、大年寺を興し、闔藩鐵牛を詣拜し儒臣も此を免れる事が出來なかつた。其爲に遊佐等が儒教を興さうと欲したが學事は不振であつた。五世吉村は儒學を尊崇し、元文元年に學問所を創立し、此が次第に擴充

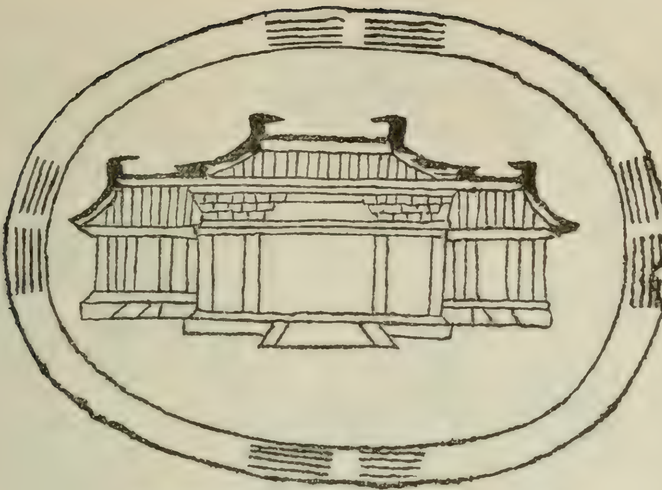
した。

然し尚ほ陝隘を感じた。十世周宗は、文化六年大槻清準に學制を講畫させ、八年に學田一萬二千石を置いた。講堂は十三年正月に經始し明年十二月に落成した。又文政二年に聖堂が出來た。聖堂は大體朱子家禮祠堂三間之圖に基くものの如くであり、講堂は明堂圖の發展である。大槻の書いた講堂制度に「結構之度、則本之洛書、參之明堂、參伍錯綜、衍而五之、稽之河圖、質之易象、縱横逆順、引而長之、亦無往而不相値也。」と云つて居る。建築的には明堂が基本となつて居る事が明で更に各種の要素が加つた。講堂制度の述べる所の要點を表示して見ると次の如くである。（第一八・一九圖參照）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大學 | 中央 | 一室 | | 居中央象太極也、是以學室必一焉、中央者土 | 生數自乘而生室數一一而一者學數 |
| 校 | 四正 | 四室 | 校者夏也 | 居四正其數法四象、又爲四德之象也、是以校室必四焉 | 二二如四者校數 |
| 霤 | 四隅 | | | | （三三如九者穏數也） |
| 庠 | 四圍内側 | 十六室 | 庠者周也 | 方各三室、象一時各有三時、四隅之室法四季之必有土旺也 | 四四十六者庠數也 |
| 序 | 四圍外側 | 四室 | 序者殷也 | 序居庠之外、而週庠十六室之外、法天有節序、以時統月也、又爲地有四方之象也、是以序必四焉 | |
| 計 二十五室 | | | 三代校庠制之兼存 | | 五五二十五者室之總數也總數之必止二十五者天數是故結構之度皆因五行之生數得之也 |

江戸時代孔子廟建築の年代及系統圖

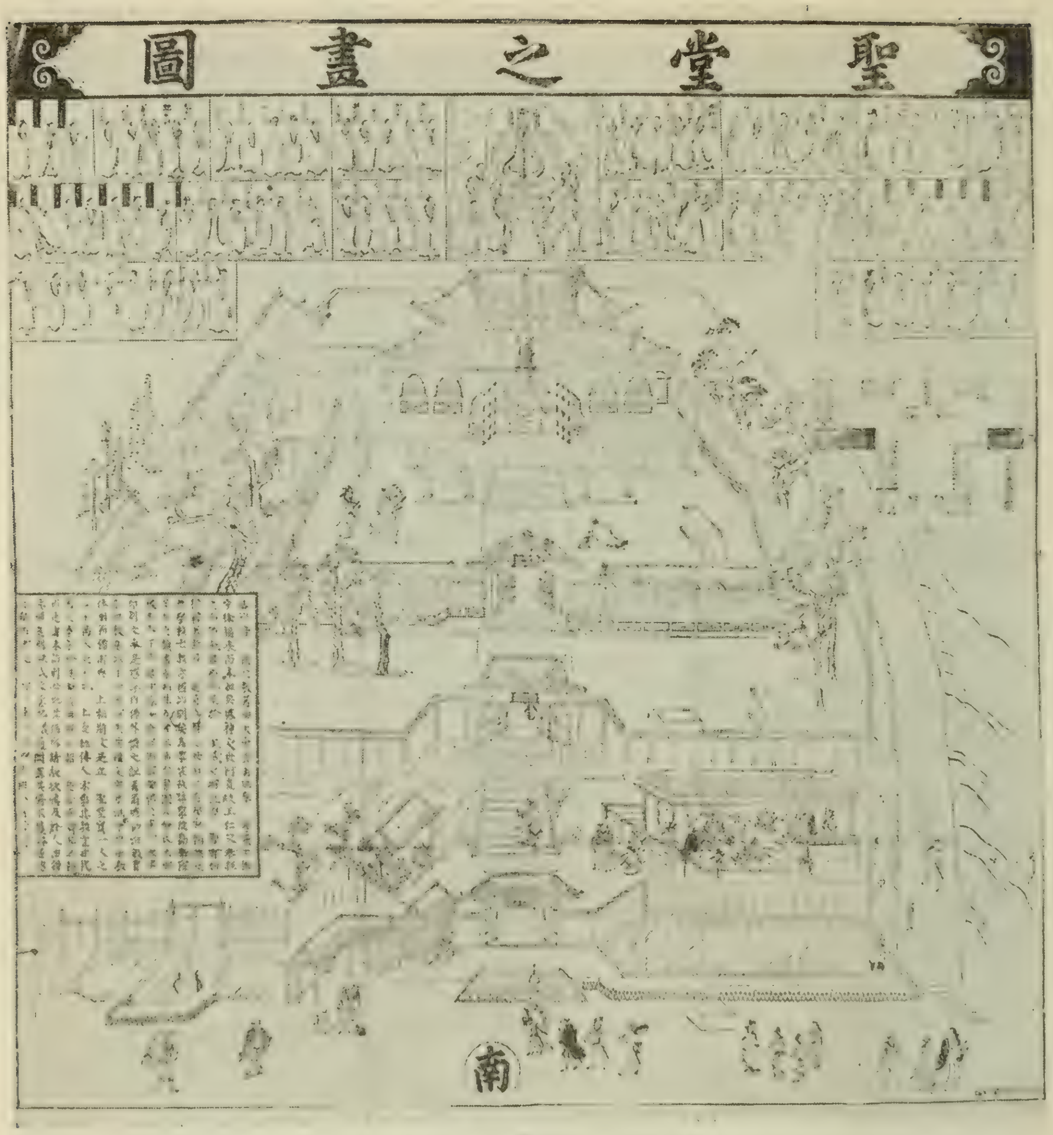




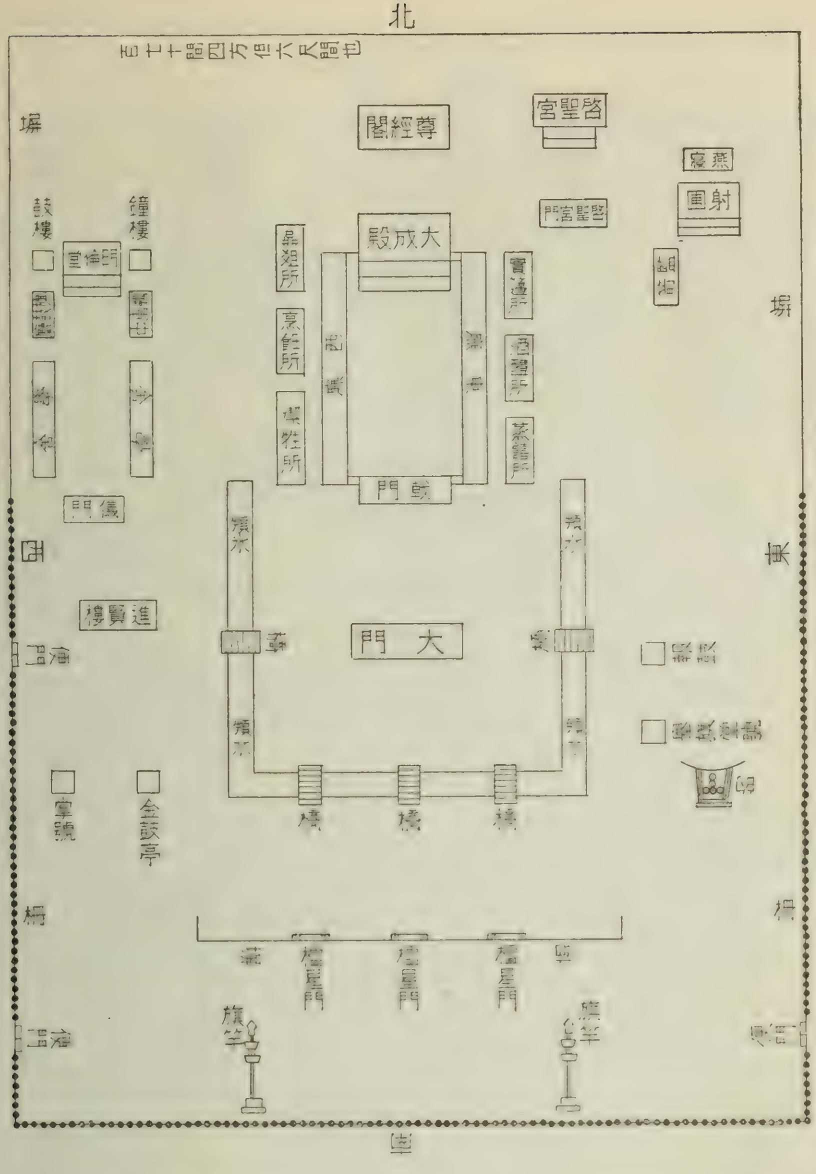
第一圖 禮書所載周四代學



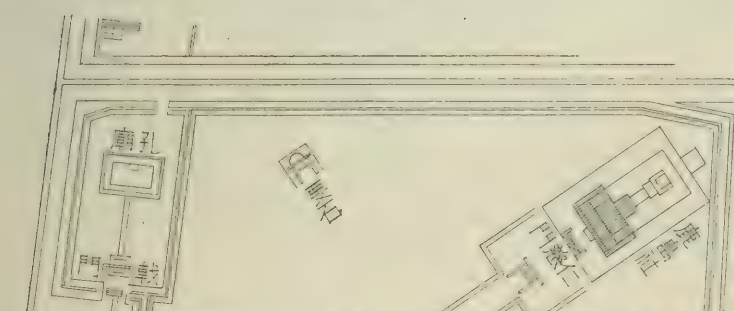

第二圖 昌平志所載寛文元年江戸孔子廟



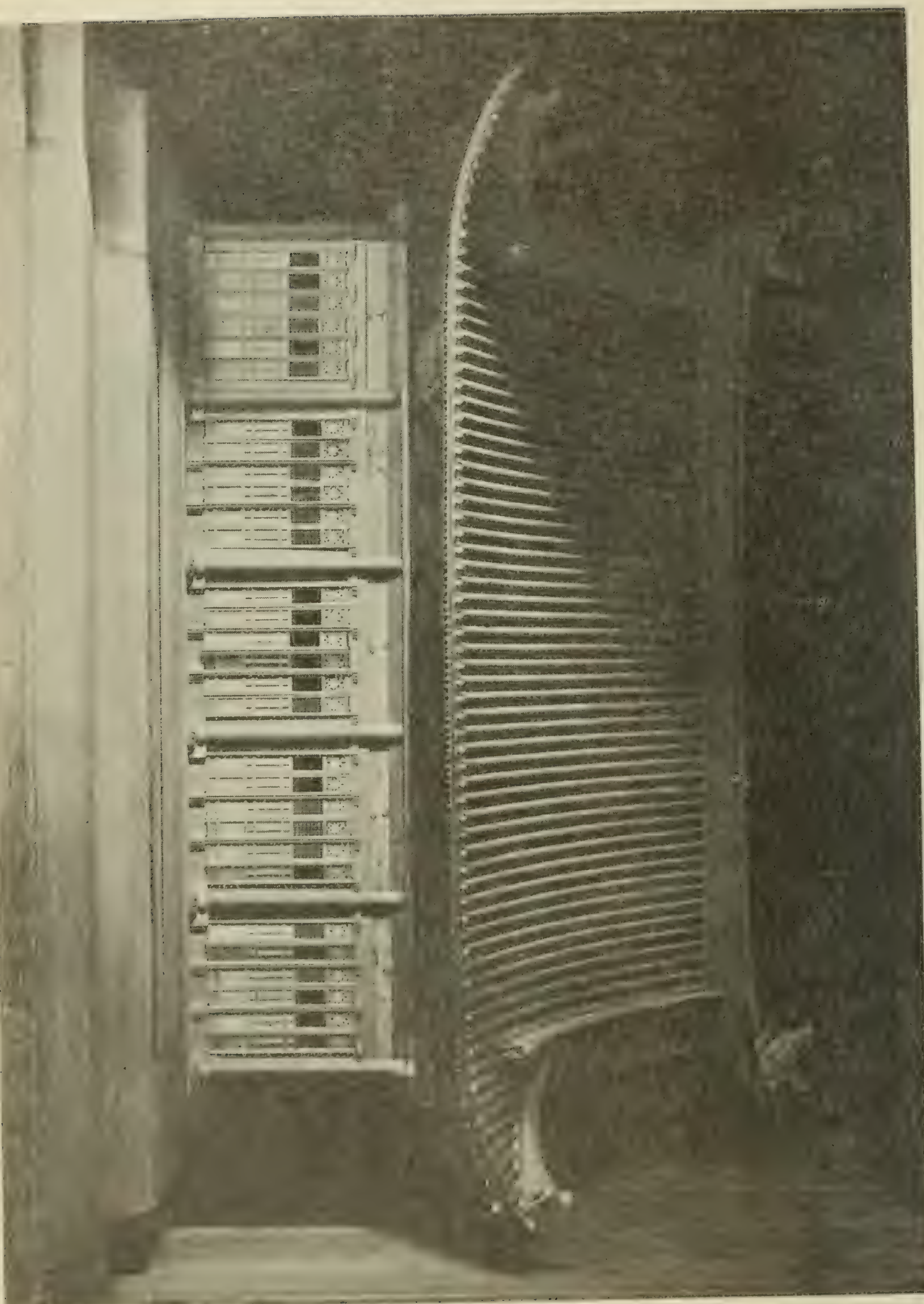

第三圖 元祿四年江戸孔子廟圖



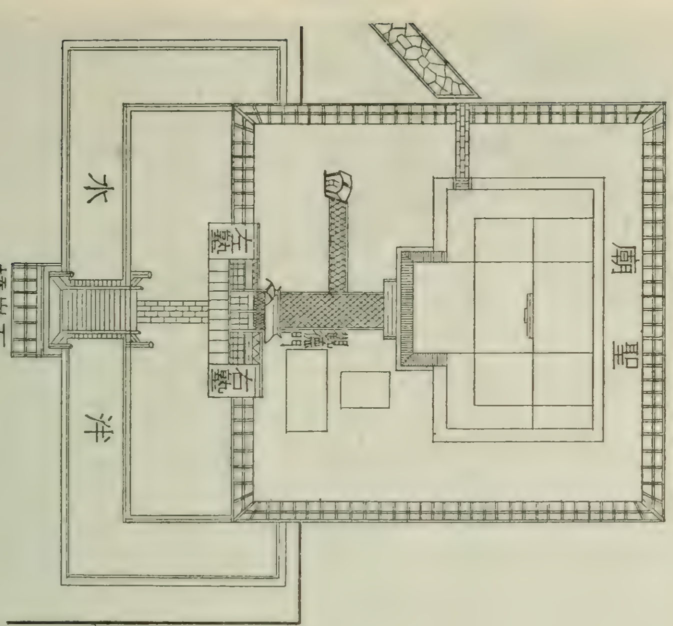

第四圖　朱舜水計劃孔子廟總圖



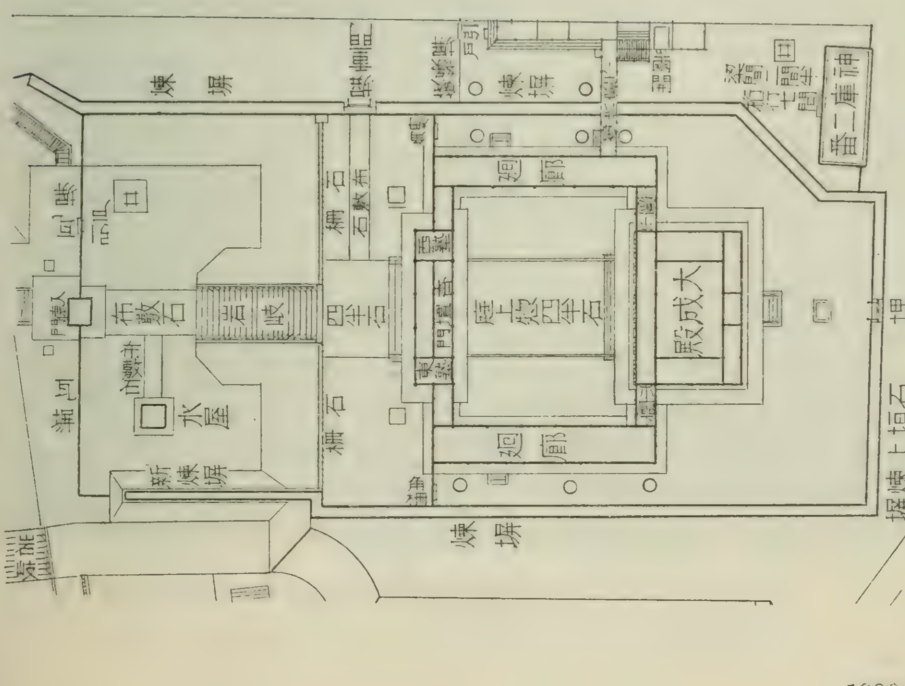

第五圖　水戸弘道館孔子廟平面圖



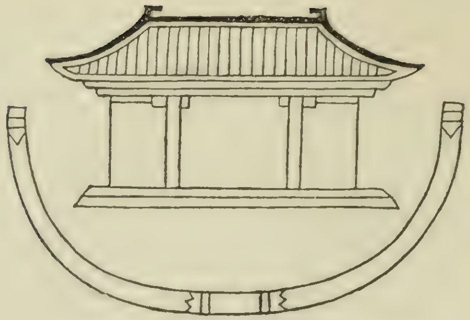
第六圖　朱舜水計劃孔子廟模型（大成殿）



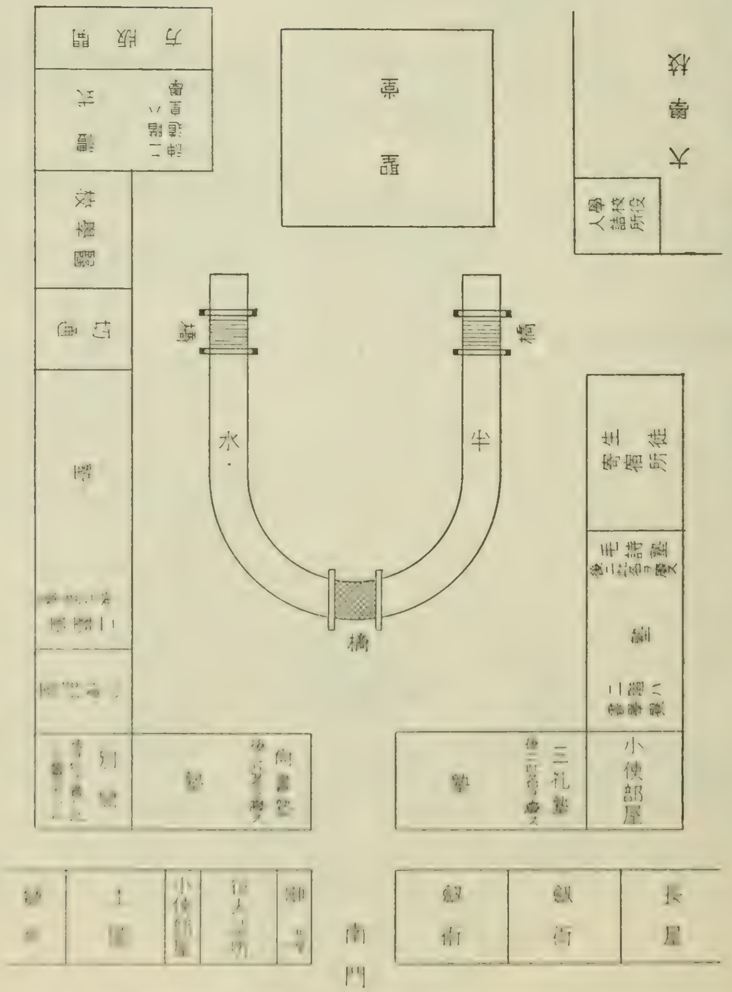

第八圖　山口萩明倫館孔子廟平面圖



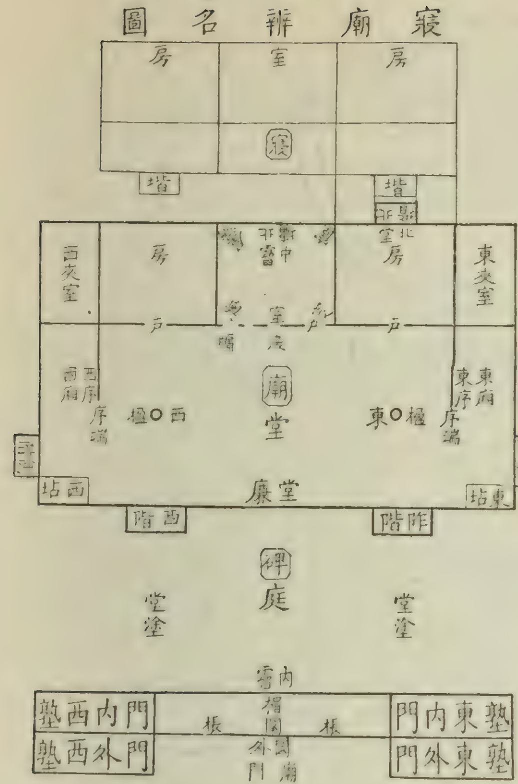

第七圖　寛政中昌平黌聖堂平面圖



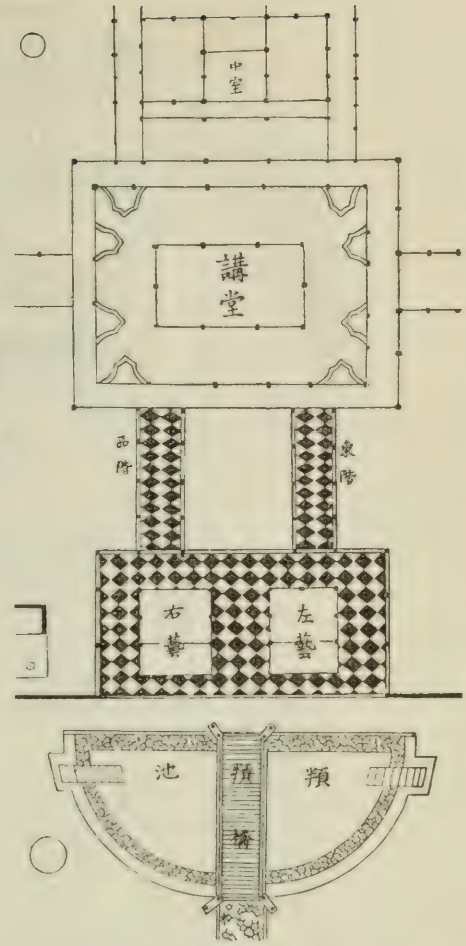
第九圖 禮書所載諸侯學圖



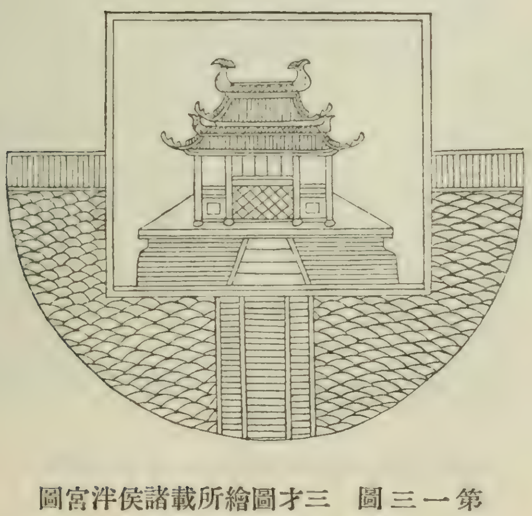

第一〇圖 會津日新館孔子廟平面圖



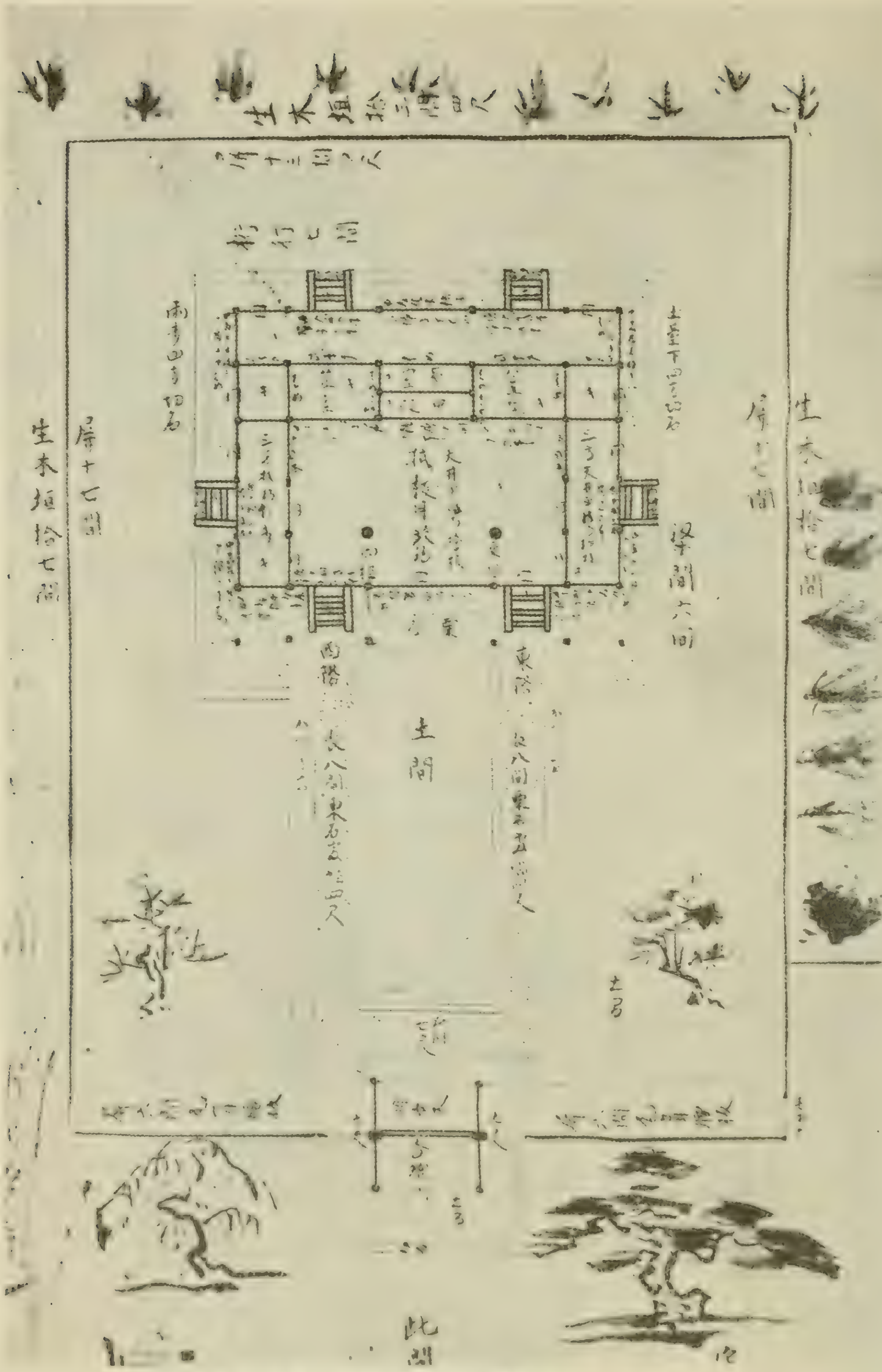

第一一圖　儀禮旁通圖寢廟辨名圖




第一二圖　岡山藩學校平面圖

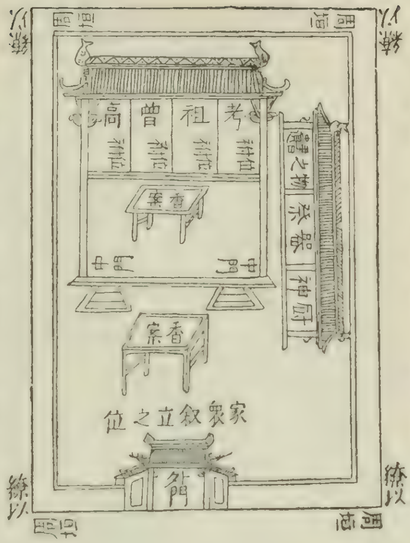


第一三圖　三才圖繪所載諸侯泮宮圖

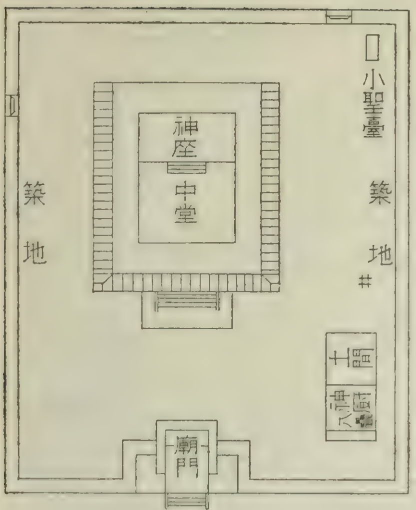



第一四圖　足利學校孔子廟平面圖（傳寛文八年）

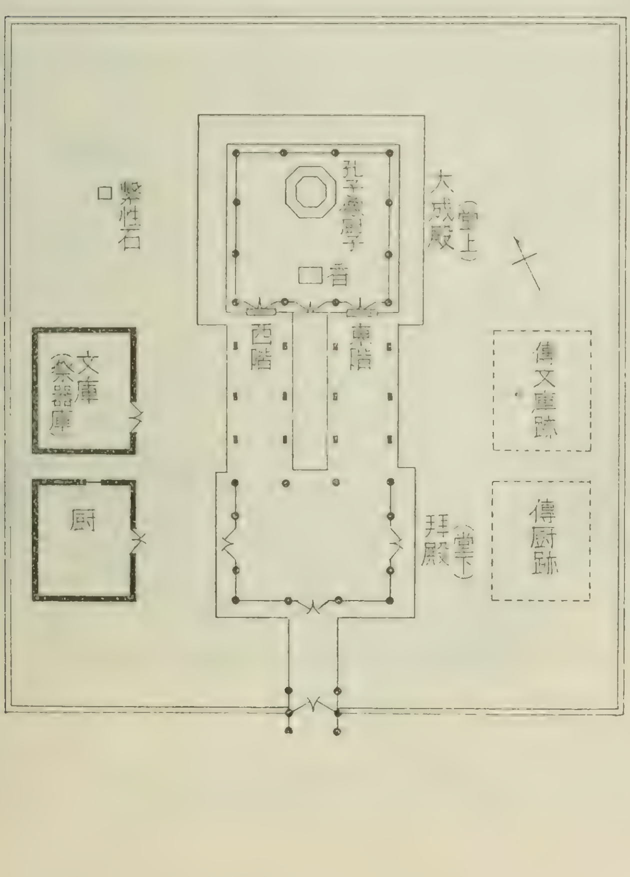
第一五圖　朱子家禮祠堂三間之圖

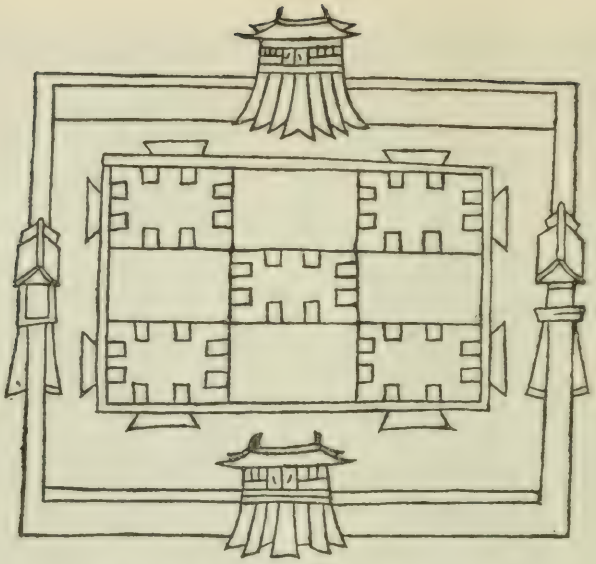



第一七圖　名古屋明倫堂孔子廟

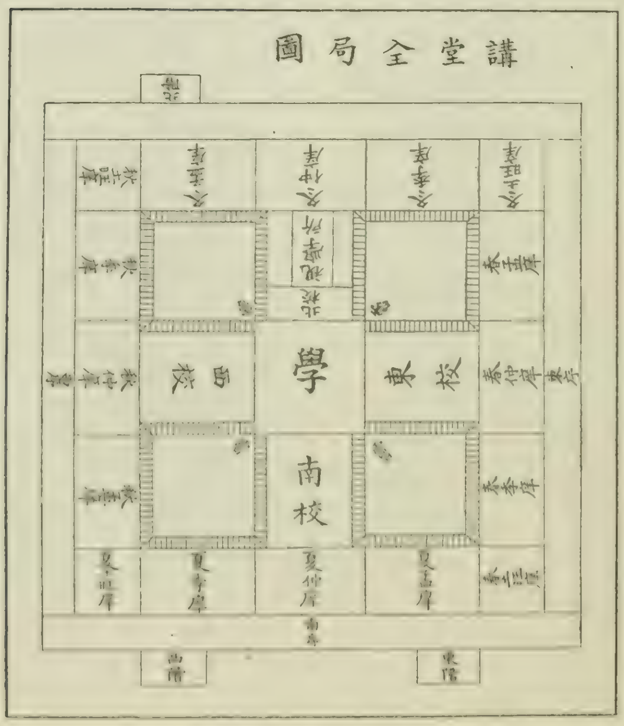



第一六圖　閑谷黌孔子廟平面圖（昭和九年一月調）

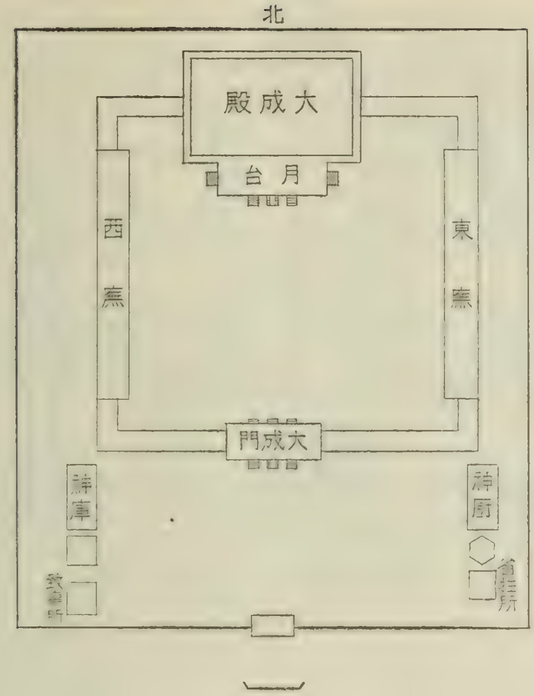




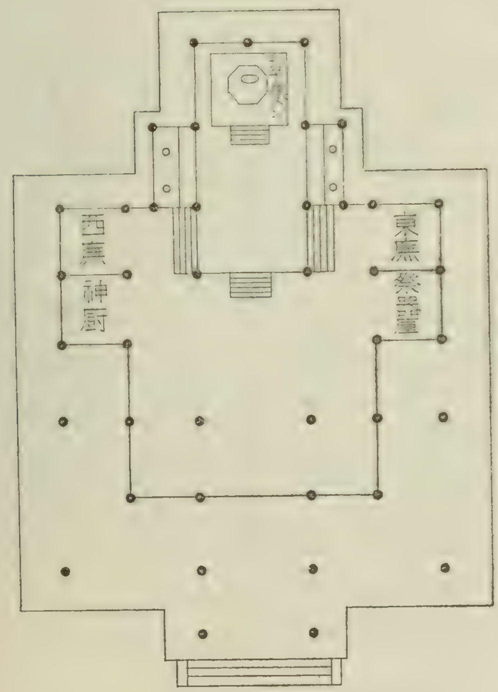
第一八圖 三禮圖所載明堂圖




第一九圖 仙臺養賢堂平面圖




第二〇圖　北京孔子廟平面圖（昭和十年九月調）




第二一圖　多久孔子廟平面圖



第三圖　多久孔子廟



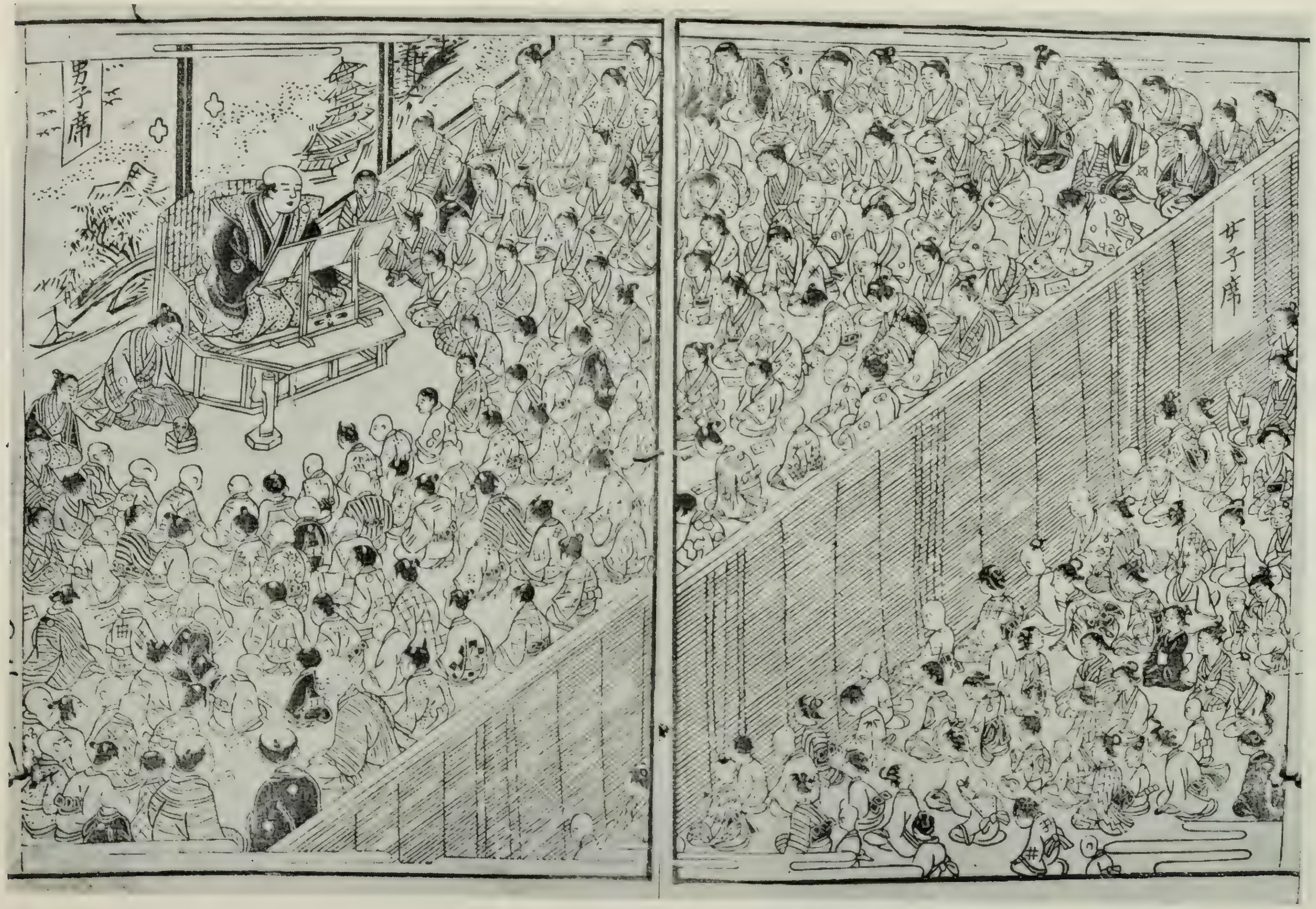
石田梅巖肖像（山田惣兵衞氏藏）



手島堵庵肖像（明倫舍藏）



中澤道二肖像（明倫舍藏）




前訓聴聞中の圖（安永二年板『前訓』より）

# 石門心學に就いて

熊坂圭三

わが國民性は、外國文化を攝取して、固有の思想に醇化せしめる驚くべき同化力を持つてゐる。儒學に就いてもこれを立證することが出來る。德川時代に入つて、儒學は日本學の一部分として、或は缺くべからざる要素として特殊な發達をなした。卽ち支那に於けるあらゆる研究が取入れられ、國體といふ觀點から檢討が加へられ、一面に於ては修養實行に關する方法も、國情に適するやうに具體化せられたものが甚だ多い。而して單なる理論の學問にあらずして、儒教の實學としての方面に顯著な效果を擧げたものは、儒教を庶民教育に活用した石門心學である。

石門心學は石田梅巖によつて唱道せられた實學である。日本固有の惟神の道を基本とし、佛教の悟入をも修養法として取入れ、而して教學としての體系、修養法はこれを朱子學に取り、空論を避けて實行を重んじ、教化の對象を庶民階級に求め、且從來最も閑却せられた婦女子にまでも及ぼした事は

その特色である。石門心學の特色は、梅巖の獨創である敎化運動であつて、學說そのものでは無い。卽ち敎へられざる民を敎化しようとする梅巖の仁心に本づくものである。併し梅巖の出た事は決して偶然な事ではない。時代がかういふ人物を要求して居た、時の勢に乘つた人とも考へられる。

德川時代の儒學は百花爛漫の盛觀である。梅巖の先驅者或は時を同じうした學者は、正學である朱子學派は勿論、陽明學派、水戶學派、古學派、獨立學派、折衷學派等、何れの方面にも多士濟々である。而して朱子學は動もすれば學んで思はざる弊に陷り、陽明學は思ひて學ばざる傾があつた。併し山鹿素行の如き日本精神を確認した大人物の覺醒の聲が揚げられ、一方には梅巖の如き徹底した敎化を獨力で民間に滲透せしめる運動が始められた。この心學運動の起つた原因を考察すると、その原因の第一は、儒學の修養敎化が士人以上の階級に偏し、その說く所が抽象的であり、實際生活と沒交涉であり、高踏的であつた事、從つて多數の民衆は緣遠いものになつて敎へに饑ゑて居た事が原因である。勿論、貝原益軒の十訓や、室鳩巢の六諭衍義大意等はあつたが、儒學の興隆に伴ひ、學者間には假名文の俗書と輕視せられ、民衆からはその生活に卽しない親しみの無いものと考へられて居たのである。その原因の第二は、民衆生活の向上に伴ふ自覺である。德川時代も、元祿から享保へかけて、文化の爛熟、生活の向上は、武士の階級には氣節の失はれる傾があり、その反面經濟生活は、民衆殊

に商人が豐かで、力と富とは均衡が取れぬやうになつた。卽ち實際の力は寧ろ轉倒したとも言ひ得る。衣食足りて禮節を知らうとする自覺が生じて來た。またその必要を痛感する先覺者が民衆の間から奮起したのは極めて自然な事である。有產無識の町人及び百姓の自覺が、封建制度の確立、階級組織の固定と、時代の推移に伴ふ實際生活の變化に因つて、現れて來たのが主なる原因であると言ひ得る。

慶長以來多くの官版が作られ、儒學の普及に役立つたが、一般向の者、卽ち庶民教育に著眼した書物は、六諭衍義の徂徠の訓點本（享保六年）及び室鳩巢の和譯六諭衍義大意（享保七年版）が特筆すべきものである。又一般の教化に關係ある書には、五代綱吉以來孝子節婦を表彰した孝義錄（林大學頭執筆、天和から寛政まで七千四百六十九人）があり、八代吉宗の仁風一覽等がある。

また諸國大小名の庶民教化に種々の手段を盡した事を知り得るものに伊呂波、琴歌等がある。島津忠良の「神佛他にましまさず人よりも心にはぢよ天地よく知る。」「聞くことも又見ることも心から皆まよひなり皆さとりなり。」の如き、保科正之、酒井忠擧のいましめの琴歌、又池田光政の琴歌に「仁といふも性の名、義理といふも性の名、仁義禮智信あつて性に入らせたまへや。」「佛といふも我心、ぢごくといふもわが心、外をねがふはおろかなり、心をさとり給へや。」といふが如きは、一種の

心學の先驅としての口吻を見ることが出來る。
學者の通俗書は惺窩の假名性理、羅山の儒門思問錄・童觀抄、藤樹の翁問答、仁齋の童子問、蕃山の集義和書、外書、徂徠の答問書、春臺の聖學問答、鳩巢の五倫五常名義、益軒の十訓等相當に多數ある。併し讀者の範圍は到底心學の書に及ぶべくもない。これらに宋儒語類の答問の例に效つた書の多いことは注目に値する。
朱子學を正學とした此の時代は、特殊な保護を受けて居た儒學に對し、方外の徒とせられた僧侶及び神道家の中に、實際の教化に志し、成績を擧げた者も多い。五山禪僧の通俗教訓書の如きものも廣く讀まれたものである。神道の方面も兩部神道があり、僧侶の神官を兼ねて居たものもあり、從つて諸種の教會が出來た。民間教育は江戸方面では手習師匠・筆學指南所、京阪方面では寺小屋が民衆初步教化の基礎的な仕事をして居たといふことが出來るであらう。
また梅巖の先驅をなす者に西川如見（二三〇八、慶安元—二三八四、享保九）がある。町人袋・百姓嚢・大和女訓等の著がある。その著眼は庶民教育にあつた。其の他澤庵禪師、盤珪禪師の如き禪僧も、民衆の教化に獨自の見識を持ち、その方法を考へてゐた。鈴木正三の如きもまた然りである。また堵庵が「やしなひ草前篇」に引用した夜舟記の紫笛道人なども、佛教の方面からではあるが、心學者と同樣

な教へ方をなして居た者である。「道は天地に先だちし眞實正直の仁心なり。この眞實正直は唯無心にしてあるとあらゆる物、この眞實を備へずといふことなし。云々。道は一もつてこれを貫くといふ、唯一の神道といひ、唯有一乘法とあるも皆一つの眞實にとゞまり侍る。」と說いてゐる。天正の末年に生れ、元文の頃まで生きて居り、百六十歲と傳へられる澤水和尚が、「昔より儒道相續して人道を教へ、佛道ありて解脫を導き、神道ありて諸道をつくさしむ。云々。」と說いたのも心學と一脈相通ずる三教合一の思想である。吉川惟足（二二七二、慶長十七—二三五四、元祿七）が神道に儒佛を合せようとし、「道は人々固有の道ぞ、天に在ては神といひ、人に在りては心といふ、神人一體ぞ、故に神を心となせるを人といふ。云々。」と說いたのも、その流を汲んだ朱子學の山崎闇齋（二二七八、元和四—二三四二、天和二）が垂加神道を創唱したのも、何れもこの時代の思想傾向と著眼とが、石門心學と關係が無いとは言ひ得ない。

なほ徳川時代の初から學說として或は教化力として、學界の一方に不動の力を持つて居た陽明學者について一瞥しよう。陽明學は心學と稱せられ、梅巖の石門心學と同一の名稱で呼ばれてゐるからである。中江藤樹、熊澤蕃山には心學文集があり、蕃山には心學論があり、また蕃山の著と稱せられたものに心學五倫書がある。併しその著集義和書卷一には、朱子學を述べて、「又心學とて內よりつと

むると云ふも面白く候。……されど近來心學を受用するといふ人を見侍るに云々。」と批難したのに答へて、「拙者をも世間にては心學と申すと承り候。初學の時心得そこなひて自ら招きたることにて候へども、心學の名目しかるべからず存じ候。云々。」と述べて居るのは、幕府の朱子學尊崇と、陽明學に對する警戒壓迫もあつた（寛政二年（二四五〇）の異學の禁を思ひ合せて）にしても、何れの學者も必ずしも學派に拘泥せず、實學として儒教を生かす考のあつた事は考へられる。かういふ時代の趨勢の下に起つたのが石門心學である。要するに元祿・享保の文化の爛熟期に當り、殊に八代吉宗の享保の學術奬勵普及の波に乘つて、儒教の民衆化、庶民教育に貢獻したのは實に石門心學である。

石田梅巖（二三四五、貞享二―二四〇四、延享元年）名は興長、通稱は勘平、梅巖はその號である。丹波國南桑田郡東懸村に生れた。父は淨心といふ農である。梅巖十歳の頃、その拾つて來た栗の實の落ちて居た處が他の山との地境で、實は隣の山のものであるとて、晝飯半ばにもとの處へ返させたといふやうな逸話のある教育を施した父である。

二十三歳、京都上京の商人黑柳某の家に奉公した。先づ神道に志し、苦學力行した。三十五六歳の頃、考へてゐた性といふものに疑を懷くやうになり、四十歳の頃了雲老師（小栗正順、一に海容軒と號す）に教へを受けた。禪僧である。石田先生事蹟には了雲から、「汝の見たる所はありべかゝりの

しれたる事なり。（中略）汝我性は天地萬物の親と見たる所の目が殘りあり、性は目なしにてこそあれ。云々。」と喝破せられ、再び工夫すること一年餘、つひに自性見識の見を離れたと記してゐる。禪宗の頓悟である。四十三歳奉公を辭し、四十五歳（元文二年）講筵を開いた。表の柱に、「何月何日開講、席錢入不申候。無縁にても御望の方々は、無遠慮御通り御聞可被成候。」と書いて出した。初は聽講者二三人、それでも見臺とさし向ひで講釋すると言つたほどの熱心さであつた。說いた書は四書・孝經・小學・易經・詩經・太極圖說・近思錄・性理字義・老子・莊子・和論語・徒然草等と傳へて居るが、引用せられたのは石門心學を通じて朱熹集注の四書、殊に孟子・論語である。梅巖は一生終に娶らず、修養と教化に殉教者の熱心を以て精進した。その著都鄙問答四卷（元文四年刊）は梅巖と故鄕丹波の人との問答の體にして、學問の根據、修養法を記述したものである。他の心學書に比して極めて學問的で、石門心學の經書と稱すべきものである。またこの書の內容を檢討することによつて石門心學の思想體系を知ることが出來る。卷の三性理問答の段は就中最も學者らしき梅巖の面影を認め得る。「佛家も最初は儒學より入る僧多し。儒書が妨になりて佛意を得ること成難きことを聞かず。儒者も其如くに佛法を以て心の磨種にして心を得て何ぞ儒家の妨となるべきや。云々。」又「儒を學びし道を以て御神託を拜するに少しも疑はしきこともなし。且佛老莊の教もいはゞ心をみがく磨種なれば

捨つべきにも非ず。云々。」又、「神儒佛ともに悟る心は一なり。何れの法にて得るとも皆我心を得るなり。云々。」とも述べて居る。要するに梅巖の思想は國民性に本づいて、修養法として儒の所說を取り、見性悟入の工夫として佛を採る等、すべてを包含して、學問を日本人の爲の學問とし、單に系統を立てるといふやうな事をせず、修養の方面に全力を盡して效果を擧げた所に特色がある。卷の四には痛烈に當時の所謂學者を罵倒し、これを文字藝者と呼び、「書物を讀て書の心を知らざれば學問とはいはず。聖人の書は自ら心を含め玉ふ。其心を知るを學問と云ふ。云々。」と喝破してゐる。延享元年九月二十四日歿す。年六十。大正十一年正五位を贈られた。

著書にはなほ齊家論二卷、門人の筆寫した石田先生語錄二十四卷、石田先生遺稿等がある。なほ柴田氏の石門心學提要に收めた莫妄想の如きは、さながら禪家の問答である。

梅巖の後をついで石門二世と稱せられるのは手島堵庵（二三七八、享保三―二四四六、天明六）である。十八歲の時梅巖の門に入る。梅巖時に年五十一、梅巖が敎を說き始めてから七年目である。元文二年十一月九日頓悟したと傳へる。翌三年には二十一歲で都鄙問答の校合に與つた逸足で、師梅巖は吾が門の孟子と稱したといふ。寶曆五年二月から每朝中庸を講じた。明和元年には年四十八歲で三條御幸町に講席を定め、翌年朝倉街に移り、五樂舍と名づけ、又明倫舍をも建てた。修養機關としての組織も

出來、京都內は勿論、伏見、大津、大阪、堺、龜山等にも出講した。石門心學は一に手島學とも稱せられる。その著、爲學玉箒六卷は、文語の問答體で、內容も學問的で、都鄙問答程ではないが、原文の引用が、ふり假名付でかなり多い。單なる通俗書と見るべきではない。梅巖の敎も堵庵によつて敎法として確實なものとなつた。手島學と稱せられるのもまた故ありと言ひ得る。堵庵の父蓋岳（名は守義）にも所謂心學類似の著書がある。子弟訓・商人夜話草・塵とり等は蓋岳の著で、堵庵の出版したものである。其の他堵庵には、經書の解釋から通俗敎訓書に至るまで多方面の著書がある。儒敎の學者としての特色を持ち、且庶民敎育の實際方面に活動したのは堵庵の偉大なる所以である。元來堵庵は京都富小路四條街の商人で近江屋源右衞門と稱し、資產の豐かな人であり、隱居してから活動したものである。隨つてその活動の範圍はその師梅巖に比して著しく擴大し、また敎化力も强く、或は聖人として尊敬した者さへあつた位で、石門第二世として尊崇の中心となつた。

堵庵の子に和庵（名は建）があり、養子で堵庵の母の家上河家を繼いだ淇水（名は正揚）（二四〇八、寬延元―二四七七、文化十四）がある。淇水また柿園とも號する。聖賢證語國字解等の學問的な著書があり、石田先生事蹟・手島和庵先生事蹟等もその手に成り、心學承傳之圖と稱して寬政四年に京都時習舍から出したものはその撰である。これは伏羲以來周公・孔子・顏子・曾子・子思を經、孟子から周子、

程子・楊龜山・羅豫章・李延平・朱子を經て梅巖に至る學統の傳承を紀し、且學說を證し得る語の引用をなしたものである。洪水は石門第三世と稱した。その子子明、孫精その後を繼承した。

堵庵に學んだ者に布施松翁がある。その著松翁道話は五篇十五卷の長編で、口語で極めて趣味深いものである。洪水の序を冠してゐる。梅巖の教を受けた女流に慈恩尼蒹葭がある。近江の人で、十六歳の時出家し、後梅巖の門に入り、梅巖の歿後江戸に下つた。心學を關東に傳へたのはこの慈恩尼がはじめで、その後には中澤道二がある。再び京都に歸つてから自己の經歷を述べ、心學を說いた書に道德問答五卷がある。また蒹葭反古集ともいふ。

中澤道二（二三八五、享保十一―二四六三、享和三）名は義道、通稱龜屋久兵衞、道二はその號である。京都の織職である。はじめ禪僧の說法を聽き、後堵庵の門に入る。五十五歳、剃髮、名を道二と改め、堵庵の命を受けて江戸に下り、心學の普及に努力した。諸處に講席を設けて多數の聽講者を集めて居たが、寛政三年には神田相生町に參前舍を建て、こゝに關東心學の本據を作つた。道二はその講說の巧妙であつたこと、その足跡が近畿から關東東北に及んで極めて廣かつたこと、またその講說したのが諸侯旗本にまで及んだことなど、堵庵に次いで石門心學の一偉材である。道二夜話（十五卷）は松翁道話と共に文學的作品としても推稱すべき著作である。江戸に在ること二十二年、本所猿江町

の妙壽寺はその墓所である。石門の學統は梅巖・堵庵から道二がその第三世と稱すべきである。樂翁執政の時、地一區及び俸百苞を幕府から賜はらうとしたのを、道二は辭退したといふ話も傳へられてゐる。

次に京阪で活躍した脇阪義堂は、その講釋の巧妙な事、その著述の多趣多樣なること、心學者中出色な人物であるが、その傳は明でない。その著作から最も注目すべき人は柴田鳩翁（二四四三、天明三—二四九九、天保十）である。名は享、字は陽方、鳩翁は剃髮してからの號である。父は醫者である。天明の火災以後、家が衰へたので、十一歳呉服商に奉公したが、志を立てて儒者にならうとして江戸に出、二十五歳の時京都に歸つた。それから三十九歳の時薩埵德軒に心學を學び、四十一歳の時頓悟してから、石門心學を以て敎化に從事する決心をなし、業績を擧げた。その講話は絶妙で、何人をも動かし、あらゆる階級に及んだ。四十五歳で失明してからは、その講釋は言語の上に益々精妙を極めた。鳩翁道話三編九卷は、男武修が講筵に侍して筆記したもので、所謂道話としては最も面白い著作である。自由に比喩を設けて、或は滑稽に或は嚴肅に、活殺自在、然も決して鄙俗に堕することがなく、必ず經書を引用して締めくゝりをつけて居る點、心學の著作として最も出色のものであろ

心學者及び其の著作はまことに汗牛充棟である。以上はその主なるものであるが、其の他は一々枚

擧に遑がない。殊に石門心學が社會的に有力になつてからは、其の一派の人の著作の外に、心學類似のものが極めて多く世に出た。實用卑近を旨とした爲に、例へば脇坂弘道の編したやしなひ草の如きは、片々たる小册子を蒐集抄錄し、或は一枚摺の繪入の引札までも輯錄し、心學宣傳の方法至れり盡せりである。今日の所謂ポスター・標語等、實に多趣多様である。若しその流弊を言へば、卑俗に流れ、儒教の學問的方面が閑却せられて、梅巖・堵庵の本旨から離れる傾を生じたことである。輕妙で俚耳に入ることを重要視した結果、輕口ばなし、落し咄に類するものも生じた。里俗敎談と冠してゐるものの、伊藤學朴の錢湯新話は怪談の剪燈新話のもぢりであり、出駒子の夜話莊治が莊子に擬したものであるなど、其の說く所は眞面目であつても惡洒落である。甚だしいものは心學敎訓の名を冠して戯作者の遊里の事を說明したものさへある。

併しあらゆる方法で儒教中心の實踐道德を說いた事は心學の特色で、道歌が非常に多數利用せられて居るのは面白い。大學の一節を說くのに「利をば利とせずして義をば利とすとは義なれば榮え禍もなし」といふ歌を以てして居るなどはその一例である。

心學者の活動の狀況を一瞥しよう。梅巖・堵庵は近畿に限られてゐたが、松翁・道二からは全國的に擴められた。京都には明倫舍・修正舍・五樂舍があり、江戸には道二の開いた參前舍、大島義行の

益釋舍等があり、大阪には明誠舍・敎厚舍等があつた。主として堵庵の企畫に成つたものであるが、敎化の方法、講舍、講師の組織等非常に完備したものとなつた。寬政元年に舍號のあるものが三十、末年には百三十八と稱せられた。また堵庵の記したものには、諸國會輔定席三十五とあり、洪水の文化年間の記には、石門心學助敎六十七とある。堵庵が安永九年八月に心學の要旨を示した社中の規約は、その組織の完備して居た事を想像し得る。天明二年には社中順講心得定書を出し、四年には都鄙社中取締申合を出してゐる。本部の主任には都講があり、講釋、座談は會輔或は講話係と稱する者があり、同人は朋友とも呼んだ。巡廻講師には證明書を出し、嚴重に取締つてゐた。「會輔きはめの通いづかたにても四書・小學・近思錄・都鄙問答・齊家論、右の書を先表として御よみ可被成候。（中略）手前にて內吟味致し候ものの外は、御相談なく御讀御無用に、御話も右の書物の趣によりて御物語然るべく候。御不吟味成御話は御無用、たとひ志は宜敷候ても心得あしく候へば思はず妄語に成ものにて候。」「田舍へ道話に御出の御方は（中略）琢磨札（一種の證明書）御失念なく御持參被成べく候。此札御互の證據になり候。」「分て申遣しおくべき事は此方社中は何にてもかり物禮物等受申事申合かたく不致候事。」と規定してゐるのを見ても如何に嚴重な統制を取つて居たかを知り得る。殊に金錢に對して極めて淡泊であつた事は、心學そのものの性質から當然といへば當然であるが、これが心學舍

有して居る所以である。大阪の明誠舍が大正十一年に刊行した明誠舍起源並に沿革に、その讀初式の第一に教育勅語を擧げて居るのを見ると、その流風餘韻二百年を經てなほ生命を持つて居るといふことが出來る。

心學の教化を施した社會層の範圍を見ると、武士の階級に對しては梅巖の武士訓があり、江戸の參前舍の大島義行が徂徠の太平策を論じた太平樂などは一種の政治論である。併しその所信により祿を受けて仕官する事はしなかつた。心學の教化の中心は何と言つても庶民の階級の中、特に商人であ
る。梅巖・堵庵何れも商人の出身であり、享保の繁榮政策の結果、商人の生活向上と自覺を來たし、こゝに著眼した心學者は、恆產ある者に恆心を與へようとして努力した。勤儉奬勵の消極策から立身の秘訣を說き、進んでは知足安分の信念を養ふことを目的とした。梅巖に商人訓・齊家論等がある。梅巖の旨を承けた堵庵は、道德と經濟との調和を論じた。梅巖・堵庵・道二の如きは、何れも唯道學者の教訓談をなすのみならず、社會政策についても見識を立てて居た事は注意すべき點である。また從來やゝもすれば除外せられた女子教育には、梅巖の女教訓、堵庵の前訓・女冥加解・司馬溫公婦人六德和解の如きものがある。兒童教育には、堵庵の父宗義の子弟訓の如きものがあり、堵庵の前訓は

男子七歳から十五歳まで、女子七歳から十二歳までを特にその目標として、その教訓を口教と稱して候體で述べたものである。その揭示には、發起中と署して規約を記して居る。「御羽織に及不申候。」「聽衆の席は男女の席にはすだれを懸け置き申候間、御遠慮なく御出なさるべく候。」などと記して居る。曾孫手島精惟一の出版したものには、男女席を同じうせざる講席の模樣が巧に描かれてゐる。前訓上卷の卷尾に、「近頃或人の狂歌に、無二膏や萬能膏の奇特より親孝行は何につけても」と記して居るが、この狂歌は今日もなほ落語家の口頭に上るものである。この外奉公人、徒弟等に對しても、人格の價値を說き、各分に安んじてその本心に目覺め、信念を持つやうに說いて居る。要するに德川幕府の社會組織の中にあつて、あらゆる階級の者の總親和を儒敎の敎へる所によつて完成しようとしたのである。

石門心學の思想內容は、わが國固有の國民道德に本づいて儒老佛の何れの敎をも取入れて居る。併し單に學問として系統を立てたものではない。道は一つといふ信念に本づいて、種々な敎養を調和し、これを人格修養上に活用しようとしたのである。儒敎に就てはその解釋は朱子に據つて居る。併しその內容は批判的に檢討する必要はあるが、大體に於て程子の所謂實學として見るべきで、强ひて學說の系統を論ずべき性質のものではない。老莊の宇宙觀や、道の徧在說をも取入れ、易の繫辭傳・

太極圖說、何れも說明の中に引用せられてゐる。道は人類に先だつといふ様な考も、論理的な考察を抜きにして採られてゐる。二宮尊德の如き實際家の所說とも照し合せて考ふべきである。併し單なる折衷說と言ふべきではない。學說として見るよりも信念として、寧ろ宗教的に見るべきである。中心は結局わが國固有の惟神の道である。

實踐的に說明する場合には、端的に孟子の浩然の氣や盡心やに本づいて修養の工夫を說く。鳩翁の所謂無理のない心などもやはり性善說、放心を求める孟子の所說から來て居る。然らば朱子と對立的な陽明學とは關係は無いであらうか。鎌田柳泓の如き、布施松翁の弟子として心學承傳之圖にも擧げられてゐるが、老荘を說き、陽明學の系統にも入るべきものである。陽明の話をさへ引用してゐる。かやうなわけで心學は陽明學とも關係があると言ひ得る。

こゝで問題になるのは心學といふ文字である。心學といふ語は韓愈の納涼聯句中に見えた字面であるが、陸象山から王陽明に至つて體系づけられた陽明學が、特に心學といふ名で呼ばれる。卽ち陽明學の別名である。陸象山が心卽理と言ひ、王陽明も傳習錄にこの語を用ひ、また「無二心外之理一、無二心外之物一」とも言ひ、結局「聖人之學心學也」と象山文集序に述べて居る。この名が陽明學の學說を代表してゐるのである。孟子に「萬物皆備二於我一」と說いてゐるのと一聯の思想系統である。修養の

方法としては主意主義で、禪宗の坐禪・靜坐・悟入が、朱子と同樣に採られてゐる。これも梅巖が禪と關係を持ち、またその末流に石門心學と禪宗とを兼ねて居る僧侶があるのは自然である。傳習錄等の答問の形式もその著書の中に眞似られてゐる。

前に引用した集義和書卷一の語によれば、蕃山は旣に心學といふ名を適當だとして居なかつた。これは後に寬政異學の禁が出て、陽明學が極端に排斥せられるやうになつた德川氏の所謂正學が朱子學であり、それが爲に特に異を立てることを憚つたとのみ解ずべきではない。やはり日本的な考から、程朱學、陽明學の利害得失を考察した結果と見るべきである。かういふ因緣のある心學といふ語を石門で何故に用ひたか。石門の學が陽明學であるから、或はその關係から心學と稱したといふ見解は、蕃山が、心學の名目しかるべからずと言つて居るのと併せ考へても妥當な見方ではない。殊に陽明學に對する批難壓迫が現れて居る時に、陽明學に本づいて自ら心學と稱する樣な事はあり得ない。要するに心學と言ふ名は、內容的にはとにかく、陽明學と關係無しに稱呼したと見るべきである。

さて心學といふ名は誰から用ひ始めたか。始祖梅巖は用ひて居ない。性學とか本心の學とかいふ名を用ひてゐる。手島堵庵に至つて往々心學といふ語を用ひてゐる。爲學玉箒の中に「早く心學をして本心を知らるべし。」と說いてゐるやうに、本心を知る學であるが故に心學と呼んだので、陽明學の

心學と關係なしに考ふべきである。陽明學は松平樂翁によつて大彈壓を加へられたが、西山拙齋が、樂翁に獻策した柴野栗山に寄せた書に、「有下陽儒陰佛妄唱二心學一者上、有下稱二神道一而薄二湯武一者上。」と述べて居る。陽明學の別稱心學が指摘せられてゐる事は、心學といふ語はその內容と共に危險視せられたからである。參前舍の記錄によれば「或る時中澤道二が白河樂翁に會し、斯道の說明をなせしに、公曰く、それは取りも直さず心學といふものにあらずやと、これより心學の名を用ふるに至れり。」と傳へて居るが、この事實の有無はとにかくとして、心學は陽明學にあらざることが認められるやうになつてから、この誤解を生じ易い名稱も、特殊な實學に冠せられるやうになつたことを示すものである。

洪水の聖賢證語國字解（寬政四年、二四五二刊）の序に、石田・手島二子の釋氏老莊（王陽明を言はず）に本づくといふ批難を辯解し、程朱による事を明かにしてゐるのは、暗に陽明學にあらざることを辯解して居ると、言ふべきである。

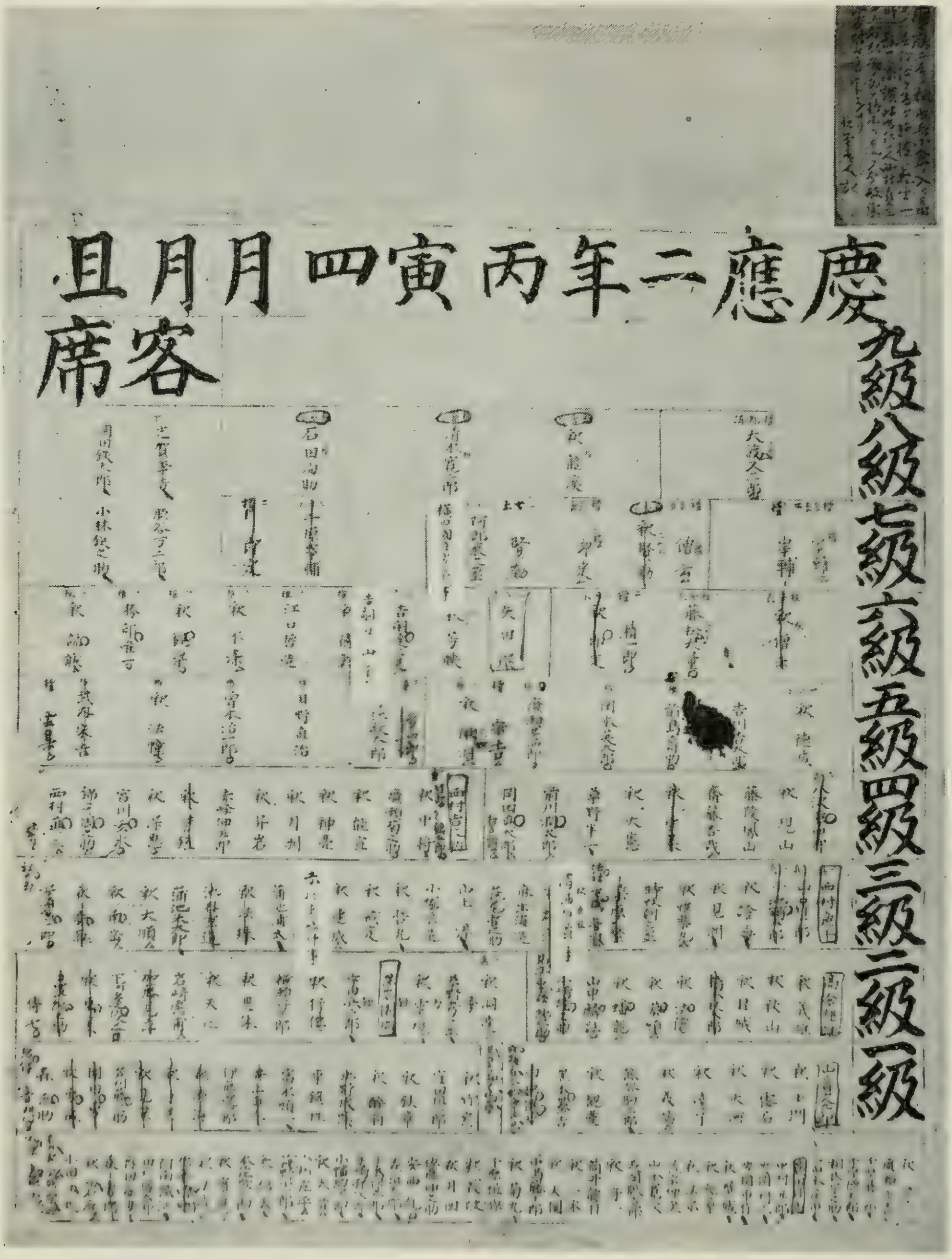
なほ文化二年（二四六五）に五十三歲で歿した橘南谿の北窗瑣談に「近き年、心學といふ事行はれて、其講釋には聽衆甚多く、三百人五百人に及べり。最初を石田勘平といふ。此人の時はいまだ甚しからず。其弟子を堵庵といふ。俗稱を手島嘉右衞門といふ。此堵庵の時より大に行はれ、門人も甚だ多

く、諸所に出て講說す。予も二席講釋を聞けり。甚だ殊勝の事にて世に益ある講說也。堵庵の弟子を道二といふて、此人また其師に勝りて行はる。三都ともに其學館を開きて常に心法を學ぶ。其學館を某舍某舍と名く。京にも四五箇處あり。其學舍に於て婦人小兒などにも耳に入り易く說き聞かせて、孝悌忠信の事より家業、商賣、家產、儉約、農業、耕作の事に至るまで手近く敎ゆる故に、是にて中惡しき家內もこの講釋を聞きしより家族むつまじくなり、わんぱくなりし小兒も父母を尊敬する事を知りて手習ひ精出すやうになり、酒興に耽りし手代も俄かに篤實謹厚の行になりし事、余常に甚だ多く見及べり。大に世教を助け、人間に益ある學なり。」と記してゐるのは、最も要領を得た心學の說明で、心學と稱しつゝも世間から怪しまれなかつた事が想像せられる。併しこの頃から石門心學或は手島學などの名稱で區別せられる事が寧ろ著しくなつた。

梅巖の提唱以來僅に七十年、寬政の末には心學舍の數は約二百、その分布も全國的になり、爾來今日に及んで居るのは、德川時代の庶民敎育機關、儒敎の社會化運動としての石門心學の偉大なる效果を物語るものである。儒敎の日本化、實學としての日本學を創始した梅巖の功は千古不滅である。

先生大阪にて講釋し給ひし時、或神道者いひ出しけるは、この日本の人を、唐の魂になせる講釋こそ心得ね。かほどの神敵を退けずばあるべからず。會ひて此事を正さんとて、推參すべきよし

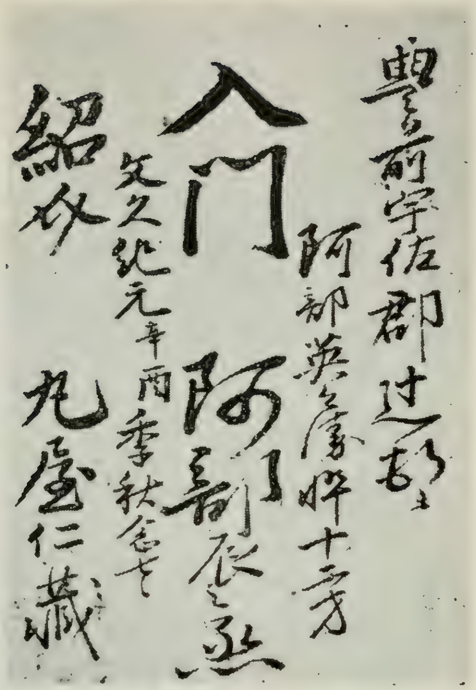
度々いひこしけるを、先生事多きにかこつけ、いひのべ、事なき様にとはからひ給へども、頻にいひこしけるは、我に逢ふ事ならずば、此地にての講釋速にやめらるべしとしひて妨ぐるゆゑ、先生止む事を得ずして、しからばのぞみにまかせ面談すべしと答へやり給へば、彼神道者、門人五六人伴ひ、先生の方へ來りしに、先生曰く、先づ其許、神道信心の事大慶におもへり。傳へきくに我を神敵と申さるゝよし、是大に其意を得難し。いよ〳〵さやうにおもはれなば、我毫釐も二心なく、儒佛を補佐として、我國の神道正直に人を敎へ導き、神忠を盡すところ、僞なき旨、いかやうの誓をも立つべし。我が二心無きのみにあらず、今此席にあり合す三四人の門人同じく誓を立てさすべし。此外の門人も加へよとならば請ふ所にまかすべし。其許も邪思無き旨誓を立て、門人衆にも同じく誓を立てさせらるべし。誓の證に何事にてもそこもとの望に任すべし。神忠を盡すと盡さざるとは、此ちかひにて互に心をあらはし、其上にてゆる〳〵談ずべしと有りければ、彼の神道者いひけるは、誓の事いかにも理におもへり。去りながら恐れある事なり。かく二心無き旨聞し上は、誓には及ばぬよしにて辭退し止みけり。（石田先生事蹟）


慶應二年丙寅四月月旦

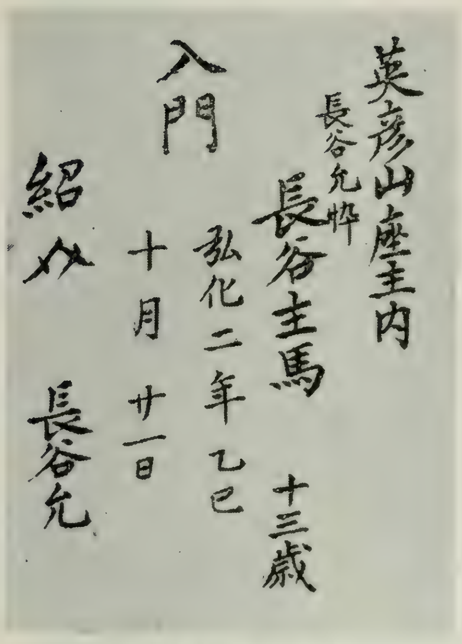
九級八級七級六級五級四級三級二級一級

客席

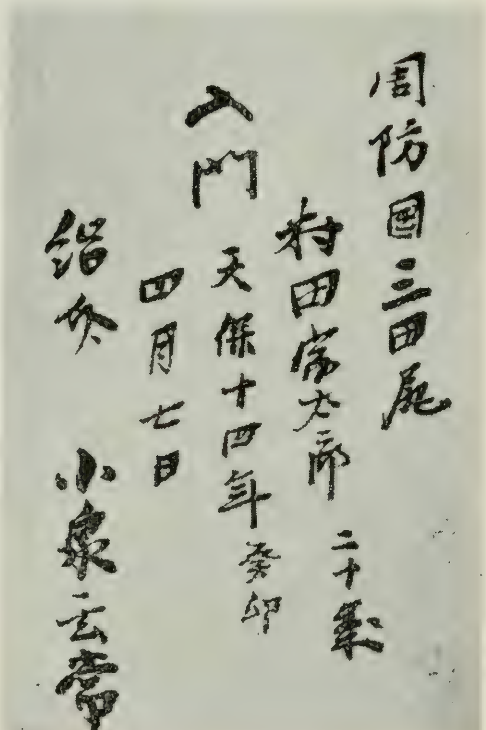
七級阿部辰之丞（横田國臣）　三級普寂（清浦奎吾）


豊前宇佐郡辻郷士
阿部英之進悴十六才
入門　阿部辰之烝
文久紀元辛酉季秋念七
紹介　九屋仁蔵

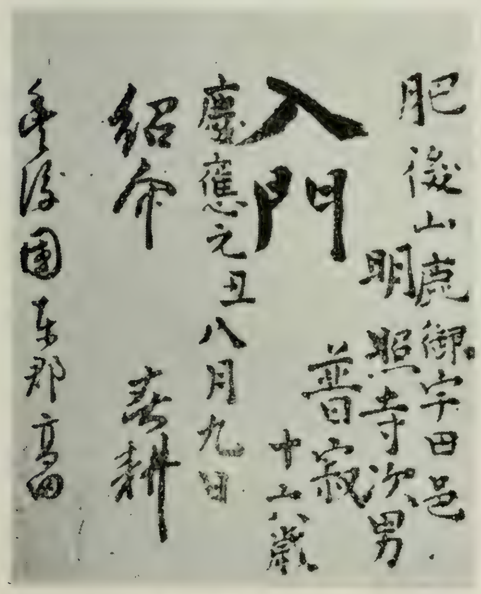
（横田國臣）阿部辰之烝


英彦山座主内
長谷允悴
長谷主馬　十三歳
入門　弘化二年乙巳
十月廿一日
紹介　長谷允

（長三洲）長谷主馬


周防国三田尻
村田宗太郎　二十歳
入門　天保十四年癸卯
四月七日
紹介　小泉玄常

（大村益次郎）村田宗太郎


肥後山鹿御宇田邑
明照寺次男
普寂　十八歳
入門　慶應乙丑八月九日
紹介

（清浦奎吾）普寂

# 漢學を主としての私塾

高成田忠風

## 一

馬上、天下を得ても、馬上、天下を治むべからず、徳川家康が學を好み教育を奬勵したのは、元來、社稷安定策に出た者とされてゐるが、家康は其の子秀忠に、「人君學を好み道を行へば、天下必ず服す。」と諭したほど學問を重んじた人である。徳川三百年教育の基礎は、實に好學なる家康によつて築かれた。

慶長六年九月、家康が學校を伏見に設けて圓光寺と稱し、學術を僧侶に奬勵したのは、徳川氏建學の最初である。而して此の事は教育權の猶ほ寺院僧侶の手にあることを示す者であるが、後には教育權の中心が次第に僧侶から漢學者に移つた。蓋し當時の漢學者は、地方にあつては必ず教育者であつ

たからである。かくして私學といへば、主として漢學塾を指すやうになつた。

徳川時代の私學には、鄕校・寺子屋・私塾の別がある。いづれも善良なる士民の養成と、地方文化の向上とを計つた者であるが、鄕校（鄕學とも稱す）は藩主或は領主の保護と監督とを受けたので（隨つて鄕校の生徒には士族が多かつた）大いに公立の性質を帶び、明治の學制改革の際には、その多くは公立小學校にされてしまつた。

寺子屋と私塾とは、嚴密な區別は附け難いが、寺子屋は手習所とも稱し、主として庶民に日用の學業を授け、家庭的に人物を養成しようとしたので、學術の振興に最も留意した徳川吉宗は、此の寺子屋をば手習所たる地位より、人倫道徳や公民的訓練の修養場に陞せようとし、中井竹山の如きも、「草茅危言」に於て、手習師匠を優遇し、寺子屋をして國民教育を負擔せしめ、寧ろ公營にすべしと論じてゐる。されば寺子屋を鄕校に昇格して、漸次國民學校の色彩を帶ばしめ、藩校に代用した者が十二藩、藩校の補助機關とした者が十四藩もあるといふやうになつた。

私塾には、漢學塾の外に、國學・兵學・蘭學等の塾もあつたが、最も盛んなのは漢學塾で、其の大なる者は藩校をも凌ぎ、其の教育は人格修養を主とし、社會有用の人材を養成したので、國家有爲の人物を輩出せしめたことは、寧ろ官學に勝る者があつた。實に漢學塾こそは、江戸時代の誇るべき重

要なる教育事象といふべき者である。かくて寺子屋・私塾は德川末期に至るほど隆盛を極め、明治初年にかけて、其の數、寺子屋が一五、九七四、私塾が一、四九二の多きを算する程になつた。

## 二

漢學塾には、幕府或は諸藩に勤仕せる儒者が公務の餘暇に開いた者と、處士たる儒者の設けた者とがある。江戸に於ては、林家の弘文館が早く官學昌平黌となり、佐藤一齋（百之寮）・荻生徂徠（蘐園塾）・芳野金陵（逢源堂）・鹽谷宕陰（晩香塾）・安井息軒（三計塾）の諸儒が夫々塾を開いたが、いづれも勤仕の餘暇教授なので、到底關西諸塾の隆盛には及ぶべくもなかつた。

關西の私塾は、中江藤樹の藤樹書院を鼻祖とする。藤樹の大洲を辭して歸鄕するや、大洲の子弟相率ゐて來學し、又遠近篤學の士も亦風を望んで藤樹の下に集つた。そこで藤樹は、一宇を創建して會所と名づけた。時に寛永十六年四月、藤樹年三十二。更に慶安元年、同志諸生が相謀つて講堂を築造した。これ藤樹書院である。此の書院が漸く出來て、その八月に藤樹は歿した。後、寛政九年、光格天皇が特に勅して德本堂の號を賜つた。門下よりは、熊澤蕃山・淵岡山等相次いで出で、或は政治に或は學術に、善く師業を恢弘した。尙ほ諸國に散在せる同志に對しては、藤樹は通信教授の法によつ

て懇切丁寧に修養の道を説示した。

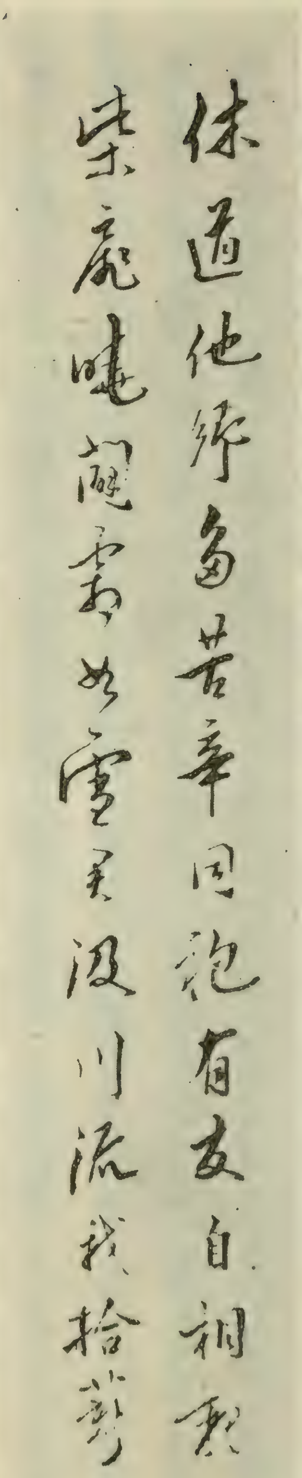
藤樹書院と同年に京師に設けられた私塾は、松永尺五の講習堂である。頗る隆盛を極め、一時塾生の聚ること雲の如しと稱せられた。幕初の一大私學で、門下に木下順庵・宇都宮遯庵があり、順庵の門よりは新井白石・室鳩巢・雨森芳洲等の俊英が出で、遯庵は標注事業によつて教育の普及を圖るなど、講習堂の我が國文化に資する所は頗る多かつた。

尙ほ京師にありては、伊藤家の古義堂を最大なる者とし、大阪に入りては、中井家の懷德堂を主とし、之に對して藤澤家の泊園書院が盛んであつた。中國では菅茶山の廉塾が隆昌を極め、吉田松陰の松下村塾は頗る特色ある者として有名である。而して其の最も整備した私塾の典型とも稱すべきは、實に九州豐後の日田に在つた廣瀨淡窓の咸宜園である。尙ほ同じく豐後には三浦梅園の梅園塾・帆足萬里の西崦學舍があつて、一時盛況を呈した。

## 三

咸宜園は、豐後日田の儒者廣瀨淡窓の創めた塾である。淡窓二十四歲の時、豆田町長福寺の學寮を借りて開講したのが塾の濫觴で、其の三ケ月後には自家の土藏を塾舍に充てて成章舍と稱し、文化四

年、豆田の裏町に新に書塾を築いて桂林園と號した。



此の詩は文化十一年淡窓年三十三、桂林莊時代の作である。爾後來り學ぶ者が益〻多かつたので、竟に堀田村に塾舍を移し、名づけて咸宜園といつた。時に文化十四年、淡窓年三十六。更に居宅考槃樓・講堂及び塾舍を增築し、又其の東方に遠思樓を築いたので、公道を夾んで、東に和甫堂・講堂・東塾・東樓・遠思樓・心遠處、西に西塾・西樓・南塾・南樓・食堂・炊飯處・浴室等の設備を見るに至つた。爾來明治二十五年まで維持繼續し、旭莊・青村・林外・唐川郎定・村上姑南・廣瀨貞文・諫山菽村と相承けて育英に從つたので、四方好學の士爭うて來り學び、其の數は、甲斐・下野を除く六十四國、四千六百九十七人（入門名刺の現存する者四千六百十七名）の多きを見るに至つた。その中より主なる人を拔いてみる。

大隈言道　高野長英　中島子玉　平野五岳　大村益次郎　長三洲　谷口藍田

辛島秋帆　清浦奎吾　横田國臣　朝吹英二　龜谷省軒　武谷祐之　松田道之
秋月橘門

四

古義堂は堀川學校・堀川塾とも稱し、寬文二年、伊藤仁齋が年三十六の時、堀川の私邸を開いて學を講じたのに始まる。爾後仁齋身を以て育英に從ふこと實に四十年、天下其の風を望み、刺を通じて益を請ふ者、飛驒・佐渡・壹岐を除いて全國に及び、前後三千人の多きに達し、門下よりは、中江岷山・並河天民等の逸材の外に、本草學者・醫學者・地理學者等を出した。爾來子孫相承繼すること五世、以て明治の初年に及んだ。

懷德堂は元祿十三年、三宅石菴が大阪船場尼崎町に教授所を開きしに端を發し、享保九年石菴の高弟中井甃菴が社友五名と相謀り、官に請うて懷德堂を建てて大阪學問所と爲さうとし、十一年官許を得、地を賜りて學舍を設けしに始まる。實は德川吉宗興學の內意によつて成りし者である。爾來明治二年廢學に至るまで、大阪の文教を支持すること百四十年、石菴・甃菴に始まりて、竹山・履軒に盛んに、中井碩果・並河寒泉と相承けて、其の學派の分布は天下に遍く、勢力の盛なるは、昌平黌に次

ぐ程であつた。大正二年六月、更に財團法人懷徳堂記念會を起し、其の遺業を承繼して今日に及んでゐる。

泊園書院は藤澤東畡の私塾である。東畡は讃岐の人、帷を浪華に下して物氏の古學を提唱した。其の子南岳之を承繼して、心を育英に致し、及門の弟子幾千人、名を朝野に成せる者數百人。次男章次郎が家塾を承けて今日に至つてゐる。懷徳堂の後期の衰頽を受けて、大阪の學術を維持し更に之を振興したのは、實に泊園書院である。其の學は尊皇の大義を主とし、南岳の如きは幕末に際して、大いに勤皇の爲に鞅掌し、遂に能く藩論を飜して皇室に勤めしめた。往年北朝正統論の起つた時、敢然南朝正統を唱道して天下の輿論を喚起したのも、泊園の學徒であつた。

五

松下村塾は萩町の松本新道に在つた。天保十三年頃、玉木文之進が地方の子弟を集めて教授し、偏して松下村塾といつた。嘉永元年頃よりは久保五郎左衛門が之を承繼した。吉田松陰が罪を得て幽閉さるゝに及び、安政三年より門人を教授したが、五年七月には公然家學教授の許があつて、一層其の薫陶に努力した。松陰の教育は、儒學に立脚して蘭學を修め、時事を攻究したので、其の着眼は歐洲

の學風に及ぶ者があつた。松陰時代が村塾の極盛期で、門下よりは久阪義助・高杉晋作・中谷政亮・前原一誠・入江九一・寺島忠三郎・有吉熊次郎・吉田稔丸・松浦龜太郎・杉山松介・木戸孝允・伊藤博文・山縣有朋・山田顯義・品川彌二郎・野村靖・松本鼎等、其の外勤皇の俊傑が輩出した。

翌六年に松陰が江戸に送られた後は、楫取素彦が暫く之を繼いだが、松陰の歿後は、馬島誠一郎が教授し、明治元年より九年まで、再び玉木文之進が之を承け、後、松陰の實兄杉民治が之を繼いで、二十五年頃に及んだ。

## 六

漢學塾の目的は、修身・齊家・治國・平天下の教育を施して、國家有用の人材を養成するに在つた。此等はいづれも塾規に明記されてある。今最も整齊された一例として「藤樹規」を擧げる。

大學之道。在ㇾ明二明德一。在ㇾ親ㇾ民。在ㇾ止二於至善一。

朱子曰、堯舜使下契爲二司徒一、敬敷中五教上。五教者、父子有ㇾ親、君臣有ㇾ義、夫婦有ㇾ別、長幼有ㇾ序、朋友有ㇾ信是也。學者學ㇾ此而已。愚按三綱領之宗旨、壹是皆以二五教一爲二定本一、而其所二以學一之術、存養以二持敬一爲ㇾ主、進修以二致知力行一而日新。其別如ㇾ左。

畏二天命一、尊二德性一。

右持敬之要、修德之本也。

博學レ之、審問レ之、愼思レ之、明辨レ之、篤行レ之。

右進德之序、學問思辨四者、所二以致一レ知也。若二夫篤行之事一、則自二修身一以至二于處事接物一、亦各有レ要。其別如レ左。

言忠信、行篤敬、懲レ忿窒レ慾、遷レ善改レ過。

右修身之要。

正二其義一、不レ謀二其利一。明二其道一、不レ計二其功一。

右處事之要。

己所レ不レ欲、勿レ施二於人一。行有レ不レ得、反求二諸己一。

右接物之要。

原竊惟、今之人爲レ學者、惟記誦詞章而已。是以吾道之所レ寄、不レ越二乎言語文字之間一。愚嘗憂レ之也深。故推二本聖人立敎之宗旨一、而參以二白鹿洞規一、條列如レ右、而揭二之楣間一。庶幾與二一二同志一、固守力行レ之也。

寛永己卯四月二十一日

而して我が國體の然らしむる所、學問の第一義を忠孝の上においた事は、言ふまでもなかつた。

「松下村塾記」の一節に

抑人之所ニ最重一者、君臣之義也。國之所ニ最大一者、華夷之辨也。・・・生ニ神州之地一、蒙ニ皇朝之恩一、内失ニ君臣之義一、外遺ニ華夷之辨一、學之所ニ以爲ㇾ學、人之所ニ以爲ㇾ人、其安在哉。

とあり、松陰の「士規七則」にも、

凡生爲ㇾ人、宜ㇾ知ㇸ人所ニ以異ニ於禽獸一。蓋人有ニ五倫一、而君臣父子爲ニ最大一。故人之所ニ以爲ㇾ人、忠孝爲ㇾ本。

とあるやうに、我が國固有の道德である忠孝を以て教育指針の第一に置いたのである。されば咸宜園の「塾規」の冒頭には、「忠孝之大旨は毎日の講釋に盡せり、故に不ㇾ贅」とあり、懷德堂の「定」にも、「學問は忠孝を盡し職業を勤むる等之上に有ㇾ之事にて候」とあるなど、いづれも國體觀念に卽する教育を施したものであつた。

七

私塾教育の特色は、個性の啓發にあつたので、其の訓練も隨つて自治制を取つた。松下村塾の如きは、「規則五條」は作り設けたが、松陰の訓育方針は自律的行動を主とし、躬親しく諸生の間に伍し至誠と熱愛とを以て、其の身を範となして教化に努めたので、此の規則は遂に塾生には示さずに終つたといふ。

咸宜園には、淡窓の定めた「規約」があつて頗る詳細を極め、都講・副監・舍長（東西二人）・主簿・新來監・外來監・經營監・典醫・威儀監・藏書監・洒掃監・履監・書記（先生の訓言の筆記係）・侍史（諸用達）の職員を設け、いづれも塾生中より任命して、自治生活を規律正しく實行せしめた而して咸宜園訓育の綱要といふべき者は、敬天の思想である。淡窓の「約言」に、「六經之旨、可一言而盡、敬天是也。」といひ、「約言或問」には「敬天の方他に非ず。唯天道有知の四字を信ずるのみなり。已に之を信ずれば、敬せざるを得ず、畏れざるを得ず。已に敬し、已に畏るれば、善を行ひ、惡を禁ぜざるを得ず。一善を行へば堯舜に近づくこと一歩也。一惡を禁ずれば桀紂に遠ざかること一歩也。如此にして終身の功を積みなば、孟子の所謂人皆以て堯舜たるべきの說、其れ近からんか。」といつてゐる。而して其の品性陶冶の方法は詩によつた。先づ情操教育より道に進ましめようとして詩を奬勵した。その「詩話」に、「詩を作る人は溫潤なり。詩を好まざる人は刻薄なり。詩を作る者

は通達なり。詩を作らざる者は野鄙なり。詩を作る者は文雅なり。詩を作らざる者は偏僻なり。其の故何ぞや。詩は情より出づる者なり、詩を好まざるは、其の人の天性に情少きが故なり…如レ此の人は方正端嚴の君子なりと雖も、其の行事必ず人情を盡さゞる所あるべし。孔子曰く、溫柔敦厚は詩の敎なりと。溫柔敦厚の四字、唯一の情を形容するのみ。是れ予が弟子をして詩を學ばしむる所以なり。」と述べ、詩によつて人品の高下を論じ、以て道に進む歸向を示し、尙ほ門人の詩集「宜園百家詩」を逐次板行し、且つ詩歌の朗吟を奬勵して、大いに品性の陶冶に意を用ひた。

之に反して懷德堂は、其の「定約」に、「學問所講談無二懈怠一相勤可レ申候、講じ可レ申書は、四書五經其外道義之書講談致し、他之雜書講じ候儀、一切無用に候事」とあるやうに經學一點張りである。尤も三宅春樓が學主たり、中井竹山が預人であつた時には、「四書五經道義の書而已講談いたし、他の雜書講候事一切無用と申儀に候へ共、餘力に詩賦文章、或は醫師をも心懸候人へ內證に講じ聞せ、或は會讀にいたし、或は詩會文會等致候事は格別之義と存候。萬年（三宅石菴）も內證にて醫書詩集等講じ聞せ候事も有之候。但し表向の講談に致間敷事は、定約の通可レ爲二勿論一候」と附記を改めたのは、情操敎育の必要を認めたからであらう。

塾生の勤務と取締の細密を極めたのは咸宜園で、其の「規約」は、職任（職員の任務）・飮食・出

入・用財・告諭五則・職任告諭と分ちて懇切嚴正に示し、「塾規」も二十七項ありて、早起洒掃より就寢前の火の始末に至るまでの一擧一動の取締を細大漏さずに規定してある。而して違背者に對する罰には、譴責・洒掃・給仕・侍史・減黜・禁足・減食・退塾・破門等の種類があつたが、然し實際は寛嚴宜しきを得てゐた。元來淡窓は「約言」にも、「治は教の具、教は治の本、合して之を言へば道なり。」といつてゐるやうに、眞に人を率ゐる道は、治と教と相待たねばならぬ、然るに今の世儒は教はあるが治はない、多數の少年を教導するのに、單に經義を授けるのみでは、往々遊惰に赴くの患がある。故に先づ治めて、而して後に教へるといふのが、淡窓の持論である。「申開書」に、「凡そ禁令の峻急なると、呵責の繁多なるとは、奴婢にても難ㇾ堪もの也。況んや門人に於てをや。兎角忠ありでも恕なくては、人は歸服せぬ者なり。三思すべき事なり。」とあれば、規約の實施に、其の寛嚴宜しきを得たるは察知するに足るべく、又

人知れず規約を犯す者どもに報いの來ずといふ事はなし（淡窓）

と警告して、専ら自肅を求める方針で、塾生を訓育したのであつた。

懷徳堂はその「揭示」に、修徳の綱要を揭げ、更に二限・五勿を附してある。二限は食限と門限で、五勿は「勿ニ爭闘一」「勿ニ酗酒一」「勿ニ賭博一」「勿ㇾ登ニ戲場一」「勿ㇾ蹈ニ倡街一」であるが、最後の二

項は特に戒めてある。

泊園書院の禁律は、「淫遊」「俚歌」「擧杯」「棊論」の四項をあげ、梅園の塾則も頗る整齊してゐるが、禁規は、「竊盜」「婬慾」「博」「欺詐」「口論幷毆撃」「讀書懈怠」「亂二位次一」「敷二蒲團一」「飲酒幷煙」「飲食不レ法」「履屐亂著」「調度不次」「愼火」等であつた。

# 八

私塾の教授法は、學級制によらず、一面よりは總合教授であり、一面よりは個人教授であつた。是れは人物養成の要訣であり、個性啓發成育の最良法である。私塾から國家有爲の人材の輩出した所以も、亦實に此に在つたのである。伊藤仁齋は「夫れ聖人の教を授くるや、人によりて教を立て、以て人を驅らず、造作する所なく、添飾する所なし。」故に「師たるの道は、努めて人材を長育するにあり。」といひ、尙ほ研德進道五則を擧げ示してゐる。

吉田松陰は、「人材を聚め國勢を振ふは今日の急務たり、而して人材を聚むるは其の品に隨ひて之を敍用するに如くはなし。故に余二策あり、一に曰く學校を奮ふ。二に曰く作場を起す。」「嗚呼、今日の急務は人材を聚むるに在り。人材已に聚まれば之を學校作場に置き、然して後その實材實能を科

し、宜しきに從つて之を敍用す。諫官有り、治臣有り、軍防備り、民政擧る。一器一藝、其の妙を得、かくの如くして國勢の振はざるもの未だこれ有らざるなり。」と言つてゐる。學校は理論的討究の處、作場は所謂實習場である。實に松下村塾の教育法は實際的で、活事實を捉へ來つて學問の材料とする、學問卽事業、事業卽學問といふ立場から教育したのである。「地を離れて人なく、人を離れて事なし。人事を究めんと欲せば先づ地理を見よ。」「郊外出遊、力を養ひ氣を振ひ、又地理を知り民俗に通ず。亦學問の一益なり。」といふ教へ方であつた。

淡窓もその「申聞書」に、「凡そ諸生の人品一樣ならず、才子あり不才子あり、富生あり貧生あり、長者あり幼者あり、勤者あり惰者あり、塾生あり外來生あり、其の人によりては其の望み不レ同、夫故規約課程を定むるに、彼に便なれば此に不便あり、右に喜ぶ者あれば左に怨む者あり、云々。」といひ、

銳きも鈍きも共に捨てがたし錐と鎚とに使ひわけなば

と示して、個性啓發の必要を述べて之を實行した。尤も淡窓は十九階級を設けて、塾生の學力によつて、毎月朔日にその席次を定めた。之が有名な月旦評である。明治五年新學制が布かれる時に、小學校學則を起草したのは、淡窓門下の長三洲だとされてゐるが、それは淡窓の階級制に據つたものとい

はれてゐる。

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 下等生 | | | | | 上等生 | | | | |
| | | | | | | 上の下 | | 上の上 | | |
| 咸宜園の月旦十九級制 | 無級 | 一級 下上 | 二級 下上 | 三級 下上 | 四級 下上 | 五級 下上 | 六級 下上 | 七級 下上 | 八級 下上 | 九級 下上 |
| 明治五年頒布 | | 第一年 | | 第二年 | | 第三年 | | 第四年 | | |
| 下等小學 | | 第八級 | 第七級 | 第六級 | 第五級 | 第四級 | 第三級 | 第二級 | 第一級 | |
| 學制小學教則 上等小學 | | 第八級 | 第七級 | 第六級 | 第五級 | 第四級 | 第三級 | 第二級 | 第一級 | |

古義堂は同志會品題式に於て、

一　言語有ㇾ法、學識正確者、列ニ之上科一。

一　言語謹愼、行稍忠實者、列ニ之中科一。

一　才氣雖ㇾ秀、言語浮躁者、列ニ之下科一。

の三品の等科を定め立て、諸友の姓名を分ち列ね、毎月の初會に其の品題を改め、泊園書院も、其業之高卑、不ㇾ可ㇾ不ㇾ區別一といひ、

一等生　業崇行修、志立識定者。

二等生　能通ニ一經一、藝事稍成者。

三等生　稍通二諸子一、摛藻可レ觀者。
四等生　能讀下行無二副墨一之書上者。
五等生　略通二諸史一、稍修二文辭一者。
六等生　句讀課了、稍解二文義一者。
七等生　句讀課未レ了者。

の七等級を作つて敎授した。

松下村塾にては、その塾記に、「余曰、古人有二月旦之評一、今且爲二子弟一設二立三等一、分爲二六科一、各標二其所居一、月期二升降一、以驗二其勤惰一。曰進德、曰專心、是爲二上等一、曰修業、曰勵精、是爲二中等一、曰怠惰、曰放縱、是爲二下等一。」とありて、三等六科を定めたれど、之は規定だけにとゞめて、實施されなかつたやうである。

以上述べて來た階級は、學德を進める上の方便に用ひたので、學級制ではないから、塾生としての待遇は平等を主とした。咸宜園には三奪法があつて、「其の父の付くる所の年齡を奪うて之を少者の下に置き、入門の先後を以て長幼となす。」「其の師の與ふる所の才學を奪うて不肖なる者と伍を同じくし、課程の多少を以て優劣となす。」「其の君の授くる所の階級を奪うて之を卑賤の中に混じ、月旦

の高下を以て尊卑となす。」と定め、入塾當初は總てを白紙の狀態においた。懷德堂の「定」にも、最初は「武家方は可㆑爲㆓上座㆒事」とあれど、後には、「書生の交は貴賤貧富を論ぜず可㆑爲㆓同輩㆒事。但し大人小人の辨は可㆑有㆑之候。座席等は新舊長幼學術の淺深を以て可㆑被㆑致㆓推讓㆒候㆓」と改めた。階級制度の嚴然たる時代に、いづれも學德本位にして、道を尊べる態度は欽すべきである。

## 九

漢學塾の教程は、經書を主として史子詩文を併せ用ひ、素讀・講義・輪讀・輪講・會讀等の法にて教授された。

古義堂では、論語・孟子・中庸は、月の三八の定日に之を反復講義し、塾生の材に應じて更に易經・大學・近思錄等にも及んだ。而して研究法としては、同志會（講書して人格修養に努め、師弟相互に忠告善導し合つた）・私試制義會（文章研究會、毎月一次出題）・譯文會（和文漢譯・漢文和譯によつて文章に熟し文法を練る）等があつて、實地の練習に努力させた。

懷德堂内事記には、「日講之書は四書・書經・詩經・春秋胡傳・小學・近思錄」「毎月望同志會合、老先生（石菴）象山集要之講」とあつて、官の援助ある懷德堂は、表面は朱子學であつたが、石菴と甃

菴とは共に王學を修めたので、內實は王學をも講じたやうである。

泊園書院では、「四書・五經・文選七等生業、徂徠集・三史略之類六等生業、通語・左傳・史記・世說之類五等生業、職官志・通鑑及諸子之類四等生業、三禮・明律・文獻通考之類三等生業、究㆓古今㆒詳㆓經說㆒一等二等生業、凡五等以上不㆑許㆑受㆑讀」の教科により、實地指導は「講經月十二次。輪講三等月各六次、從㆑材課㆑之。會讀三等、自㆑午至㆑酉、亦從㆑材課㆑之、各限㆓一時㆒。詩文會月各三次、七等課將㆑畢者學㆑詩、六等課將㆑畢者學㆑文。有㆑暇則從㆓事書數㆒。凡進㆑等者試以㆓未見書㆒。」の方法によつて行はれた。

咸宜園に於ける教課は、學則に詳細である。學則は課業・試業・消權の三科に分けてある。課業とは素讀・輪讀・輪講・會讀・習字・數學等、毎日若くは定日に講習する業を謂ひ、試業とは詩會・文會等、毎月定日に考査する業を謂ひ、消權とは蒙求諳記・孝經講義等、毎月書目を定めて解說せしめる業を謂ふ。是等には何れも得點があつて、それを査定して優劣を判定する。是れが卽ち月旦評である。月旦評は級を分ちて九とし、毎級又分ちて上下とし、毎級相當の點と消權の書目とを附す。新入生は學力富贍の者でも、最初は總て無級に加名する。課業は四級以下、試業は五級以上の業である。但し四級以下でも學力ある者は試業をなし得るが、月末に課業試業共に昇級點を得ても、昇級は課業點による。消權の權は假昇級で、消權は本進級である。消權は毎級之を設け、毎月一回、日を定め

て、等級相當の書目を解說せしめる。左に一斑を示す。

一級下　大學素讀、中庸素讀。
三級上　孝經講義、國史略講義。
六級下　文章軌範講義、左傳前半講義。
九級上　文五十篇、詩五篇。

さて課業の素讀は、每日四書五經をば五級六級が擔當して下級生に授け、輪讀は書目を定めて每日輪番に之を讀ましめ、誤讀があると早く糺讀する者が代つて朗讀し、列座三周して席を收む。輪講の方法は輪讀に同じ。會讀は奪席會とも稱し、先生の三日間講ぜし書に就いて、先づ乙生が甲生に書中難義の句意を問ふ。甲生明に講了すれば、丙生難義二十字を問ふ。甲生の講義が明了であると、丁生復た二十字を問ふ。復た明了なれば、甲生が戊生に向つて短句を問ふ。戊生之を說了すれば甲生に代つて席に上る。かくて丙生の問を說明し能はざれば丙生が戊生に代つて席に上る。之を奪席といふ。順次問を發して、論說多岐となり、會者一周するも猶ほ完全な說のない時は、會頭が之を判斷し、三周して席を閉ぢる。

長鋏歸來故國春。時々務拂簡編塵。君看白首無名者。曾是談經奪席人。（淡窓）

さて課業の書跡は毎月九回、一紙に五字を大書す。復文は毎月六回、假名文を唐宋文體に復せしむ。數學は和算・洋算を隔日に敎授し、毎月三回各問題を設けて之を試驗する。試業の文章課題は毎月二回、時間を限りて漢文を作らしめ、詩は課題限韻にて、毎月二回時間を限りて思構せしむ。書會は毎月二回、時間を限りて唐本に就いて二百字を細書させる。書の時間は線香二本、詩文は三本を限りとした。白文句讀は毎月二回、書會で書寫した者に句讀を附せしむ。唐本は小說・太平廣記・夜譚・隨錄・齋志・異妄錄等である。復文は二回、片假名文を漢文に復せしむ。凡そ課業試業の席には書籍を携ふるを許さず、詩會の席にも韻礎の外は同樣であつた。

## 一〇

塾生日常の生活は、各塾殆ど大同小異のやうであるから、咸宜園を主として述べる。先づ一日の生活時間割表を左に示す。

午前　五時　晨起　洒掃

六時　輪讀

七時　洒掃　喫食

八時　聽講　會讀
九時　素讀　質問
十時　聽講　會讀
十一時　輪讀　復文　五字書會
十二時　喫飯　散歩
午後　一時　輪講　質問
自二時至五時　試業
六時　喫飯　散歩
自七時至九時　夜學
十時　就寢

室割は一人宛て疊一枚で、此に机や寢具もおく窮屈さ、燈火は一人一燈を許さず、必ず二人以上組合つて共にする。一日の飯米は四合五勺と定め、朔望の兩日は一人宛て錢十文の菜代を取立てて常日よりは少々念入の御馳走といつた狀態、酺日は每月二十七日の外は、五節句並に特別の休日だけとし、酺日でも飮酒は師家・都講に屆けること、且つ飮酒後は外出せぬ等、中々嚴重であつた。許可なき外は、夜の外出は一切禁じ、外出も月五度に限り、門限は點燈時とす。外出の途次の小歌・淨瑠璃・吟

詩の類は之を禁じ、鉢巻をなし、肌をぬぎ、手拭を肩に掛けて歩くことは、外出時は勿論、兩塾往來の時でも堅く禁じてある。金錢の貸借も百錢以上は屆出でさせ、衣服を典する時も内分の處置は嚴禁した。男女の關係は特に嚴格で、「他席に於て妓女類の者居候はゞ苟且にも同席不レ可レ致」、「塾生、婢僕の室及廚に入ることを禁ず。」と規し、其の後一般の取締は多少緩和された點もあるが、男女關係だけは、更に「凡そ晝夜を不レ分、婦女の居る處に我等に無屆出入するは、見當り次第一度たりとも追塾、婦女無ニ我命一男子の居る處に來る時は直に可ニ追出一、引留て晤言或調謔する者は追塾、總て婦女に有レ用者は先我等に可レ斷。我等留守には苟且にも不レ可ニ晤言一。」「我等より許可なきに、我家に不レ限他の婦女にても、市中同行する者は追塾」の條項が追加されるほど嚴正であつた。塾生が千里の道を遠しとせず、笈を負うて全國より來り集り、斯かる嚴重で且つ窮屈な塾生活を敢てしたのは、天下國家の事を以て己が任となし、粗衣疎食に甘んじて、專ら氣風を振興するを旨とし、修德達材に努力するを男兒の本懷となしたからである。實に漢學塾生は、「士志ニ於道一、而恥ニ惡衣惡食一者、未レ足ニ與議一也。」の訓言を實行し得たものであつた。

## 二

私塾は塾主個人の自營で、定收入がなかつたから、其の經營は頗る困難であつた。日本教育史資料の寺子屋取調報告は、江戸に於ける私學の狀態をみるべき資料であるが、それには、「束脩ハ都テ來者ノ意ニテ身柄ニヨリ白扇一對、又ハ菓子折或ハ錢二百文、其外金壹朱又ハ金貳朱」、「謝儀ハ右同斷ニテ五節句錢二百文或ハ金壹朱金貳朱、家ニヨリ盆暮金百匹又ハ物品」とある。之は全國一般の標準と見てよからう。咸宜園では、束脩は金百匹、入塾後の附屆は、中元歳暮に金百匹の外は、暑寒の候肴料として各金若干を呈するに過ぎなかつた。殆ど公營の形であつた懷德堂でさへ、教授講師は個人的内弟子をとつて辛うじて生活し、數千の弟子を擁した仁齋が、羽織を典して越年したなどは、いづれも經營の苦しさを語るものである。菅茶山の廉塾は塾生が多いので、後には藩で費用を給して郷學とした。松下村塾も慶應三年には、終に其の維持を藩府に懇願するの已むなきに至つた。而して公然と受教の費用を徴收したのは、實に慶應義塾を以て嚆矢とする。入社の際は金參兩、毎月金貳分、盆と暮とに金千匹づつ納めさせ、之は謝儀でないから、水引熨斗を用ひてはならぬと定めた。私學の受業料定期徴收に就いては、當時頗る物議があつたが、義塾は敢然として實行し通して、以て天下の風潮を導き成した。

## 二

終りに漢學塾ならぬ塾で頗る特色ある者を擧げると、其の一は農民教育塾で、其の二は蘭學塾である。

會輔堂は肥前松浦の嚴木村にあつた農民教育塾の代表的の者で、秀島鼓溪が嘉永二年に開き、安政年間に亙りて地方民の薫化に努めた塾である。塾生は寄宿自炊して勤勞しつゝ學問に勵んだ。課程は手習・算術より四書・小學まで位の講義をなした。その教育の精神は儒教を主とし、歳首には孔夫子を禮拜し、春秋には釋菜を行つた程で、其の規定の如きも、全く儒教主義である。

一、孝悌忠信の志なきは義絶たるべし。

一、塾中目付長者を尊敬し指揮に隨ひ教を可レ受事。

一、汚二穢席上一、損二壞諸物一、并に薪菜を荒し中間敷事。

一、朝夕洒掃、昏定晨省怠間敷事。并に就席遊戲無用たるべし。

一、出づれば必ず告げ、反れば必ず面し、互に敬禮を可レ勤事。并に他所へ出で禮貌を怠り、遊興に志し、酒食を企て、或は夜行等一切無用たるべし。

塾の組織は、塾主の外に目付（輔佐役）と数名の助教があつて、日課を定めて塾生を指導し、禁規罰則を設けて十分に訓練の效をあげた。

蘭學塾は西洋文化の輸入を目的とした者ではあるが、根本思想は東洋的であつた。京都の新宮涼庭の順正書院は、天保十年の創立に係り、本邦最初の蘭學塾で、泰西の學制に倣つて形而下の學術を授けたが、東洋倫理を根本思想として、祠を建てて孔夫子及び醫祖を祀つた。されば間部京尹は順正書院と匾額を書し、林祭酒も名教樂地の四大字を書して贈つたほどで、廣く智識を世界に求める方針は採つたが、邦基を振起するのが目的であつた。

江戸の蘭學塾は、坪井塾・杉田塾と後に英學に轉向せる慶應義塾とである。中にも杉田塾主成卿は、人物峻嚴、學術精深、讀書力の勝れて居たのは蘭學者の第一人と稱せられ、その門下よりは、加藤弘之・神田孝平・細川潤次郎等の逸材を出してゐる。

大阪の緒方塾は蘭學塾の代表的の者で、其の内容は當時の蘭學教育の一般を知るに足る。長與專齋の自敍傳「松香私志」に、「此塾は適塾と稱へ、四方より來學する者常に百人を超え、四時の輪講絶ゆること無く、當時全國第一の蘭學塾なりき。輪講は學生を八級に分ち、每級月に六回の定日あり。籤を探りて當るの席次を定め、其首席者先づ數行の原書を講じ、次席より間をかけ、順次末席に至る。

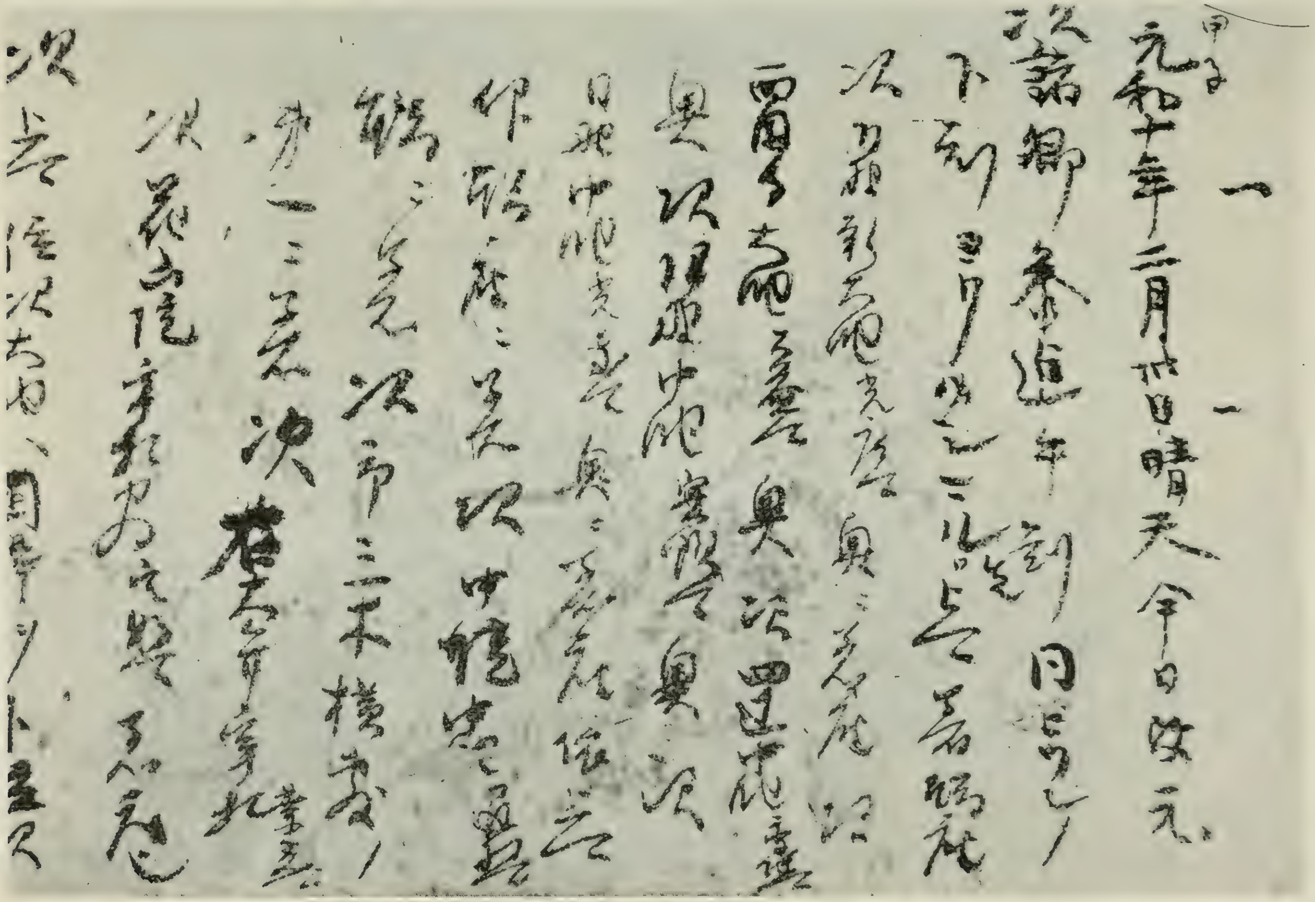
一間毎に會頭勝敗を分ち、勝者には白點、敗者には黒點を附す。首席講義の役を卒りて其日の會を了す。さて一ヶ月間の點數を調べ、白點の最も多き者を其級の上席として毎月席順を改め、三ヶ月續きて上席を占めたる者は進んで上級に移る」とあるやうに、學問研究の方法は全く漢學塾と同樣であつたやうである。其の生活も、疊一枚を一人席として、そこに机・夜具・諸道具を置く窮屈さ、而して自修自學で席次を爭ひ、上席を勝ち得た者が、明窓のある善き室に移つたといふことである。かくて明治の文化に大いに貢獻した、大村益次郎・福澤諭吉・長與專齋・佐野常民・大鳥圭介・本野盛亨等は、いづれも其の門下から出てゐる。

## 一三

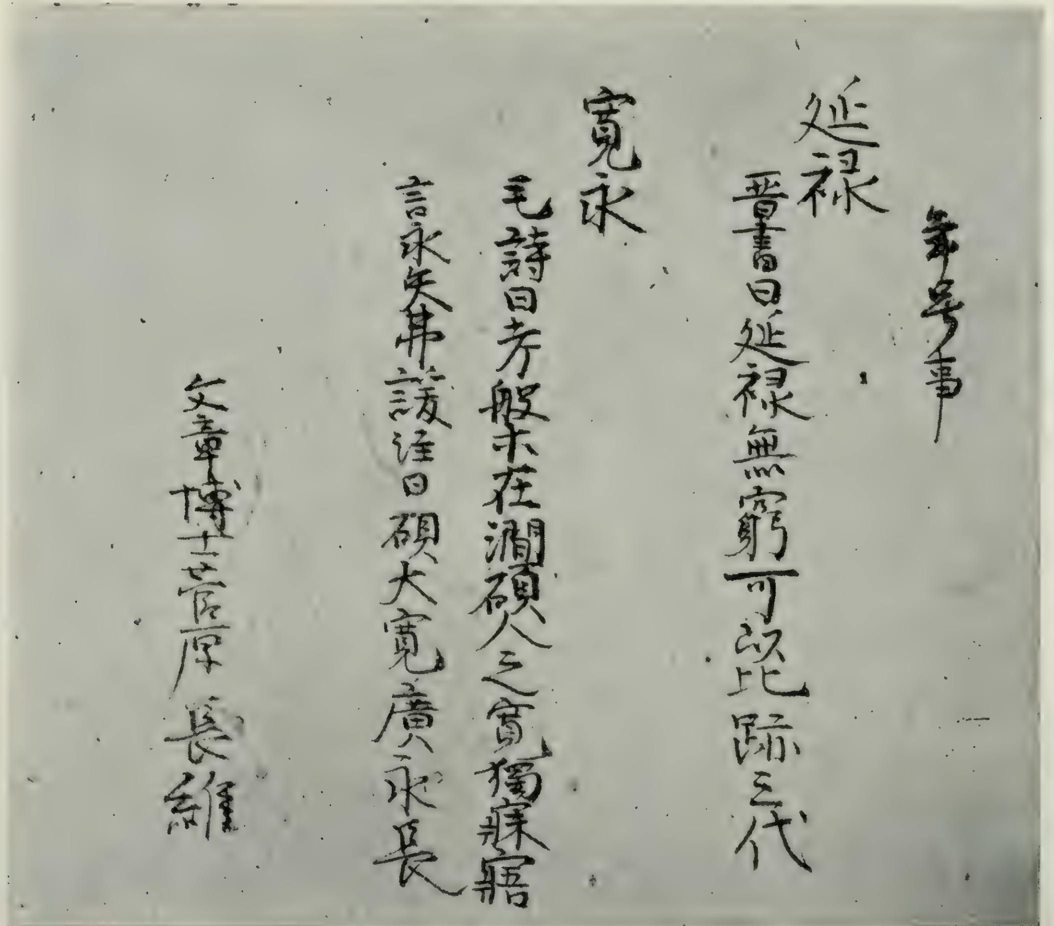
元來東洋の學問は、政治と道德との一致にあるので、大學の所謂、誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下、卽ち修己治人を目標としたのである。故に政治が道德的に行はれて不正が少く、道德が政治の道軌を示して活力の潑々たる者があつた。隨つて我が國の從來の敎育も亦國家有用の人材養成を主眼として來た。而して其の實績は私塾に於てより多く擧げられたやうである。然るに明治以後の敎育は、泰西の形而下學術の追及收得に急であつたので、道義の學は單なる机上の講演に止まつて、

實行とは交渉が少くなり、且つ實用の學までも政治を離れたので活力がなく、隨つて政治は形式的な法律に據ることになつて、政治と道德とは分離するやうになつた。而して一技一能のある器としての人間は作られたが、眞に一世を指導するに足る國家有用の人材は終に見られぬといふ狀態を呈するに至つた。かくて劃一主義教育の齎した者は、風氣の涸濁と政治の沈滯とである。

近年、教育の眞使命が更めて提唱され、學制の改革が詮議されつゝあるが、憂國の人士は、早くも夫々特種の私學を興して、或は國士の養成に力を致し、或は農士の教育に意を用ひるやうになつて來たのは、邦家の爲に慶頌すべき事象と言はねばならぬ。此の一小篇を草し了つた時に、適々昭和塾開始の報に接した。無量の感慨の中に筆を擱く。



元和度年號勘文（東洋文庫藏）



年号事

延禄
晋書曰延禄無窮可比跡三代

寛永
毛詩曰考般在澗碩人之寛独寐寤
言永矢弗諼注曰碩大寛廣永長

文章博士菅原長維

廣橋兼賢公改元定記草（東洋文庫藏）

# 江戸時代に於ける年號の出典と經書

森本角藏

## 一　改元の意義

第三十六代孝德天皇の御代、庶政一新の第一着手として、大化の年號を置かれてからこのかた、御代始、祥瑞記念、災禍厭勝、辛酉の年、甲子の年等の理由により、今日まで二百三十度（元曆及び吉野朝時代に於ける京都の分を除く）の改元が行はれてゐる。この改元は、天皇の大權の發動にして、藤原氏の專權時代に在りても、武家が政治を代行した幕府時代に在りても、常に朝廷に於て行はれ、そのたびごとに詔書を渙發して、治國安民の大道を宣布された。これあるによりて、幕府は朝廷の正朔を奉じ、臣子の分を誤らなかつたといひ得る。これあるによりて朝廷は常に國家統治の大權を把持して、攝關や將軍を駕馭してゐられたといひ得るのである。而してこの年號のことば出典の內容は、爲政者の理想抱負、祥瑞の記念、

泰平の欣求讃美、或は君臣の鑑戒等いろいろであるが、明治以後、一世一元の制度になつてからは、專らその時代に於ける政治の理想、指導精神を示されるものとなつた。さればこの年號が、その時代相と靈犀一點相通ずるものあることは當然である。故にこの年號の出典、改元の詔書等を研究することは、我が國の歴史家經世家にとつて意義深いこととといはねばならぬ。

## 二　江戸時代の改元

江戸時代といへば、德川家康が征夷大將軍に任ぜられた慶長八年より、慶應三年に至る二百六十五年で、慶長改元は前代に屬するも、その繼續年數二十年の過半は江戸時代に屬するを以てこれを江戸時代の年號として算すれば、その數三十六となる。卽ち慶長・元和・寛永・正保・慶安・承應・明曆・萬治・寛文・延寶・天和・貞享・元祿・寶永・正德・享保・元文・寛保・延享・寛延・寶曆・明和・安永・天明・寛政・享和・文化・文政・天保・弘化・嘉永・安政・萬延・文久・元治・慶應がそれである。而してこのうち元和・正保・明曆・元祿・正德・元文・寛延・明和・天明・文政・嘉永等は御代始の改元によるものであるが、御代始にあたつて改元の行はれなかつた時も二三あるやうである。天和・寛保・享和・文久は辛酉の年にあたり、寛永・貞享・延享・文化・元治は、甲子の年にあ

たつてゐる。元和七年も辛酉の年にあたつてゐるが、この年は改元が行はれなかつた。室町時代の末、永祿四年が辛酉、同七年が甲子であつても、改元が行はれなかつた例に依られたのかも知れない。その他の年號は、災禍厭勝即ち天災地妖等を拂ひ除き、心氣一轉のために行はれた改元である。これ等の改元には、まづ朝廷より然るべき家柄の人たちに、年號勘文の奏進を命ぜられ、命ぜられた人々は各々年號候補のことばを次のやうな傳統的の形式により、奉書に記して奏進したのである。

勘申

年號事

天悠

禮記曰高明配天悠久無疆

元文

文選曰武創元基文集大命皆體天作制順時立政至于帝皐遂重熙而累盛

明治

周易曰聖人南面而聽天下嚮明而治

荀子曰上宣明則下治辨矣

寶文

文選曰秘寶盈玉府文駟列于華廐

萬祿

毛詩曰君子萬年福祿宜之

右依　宣旨勘申如件

享保二十一年四月二十六日　正四位下行少納言侍從大內記文章博士菅原朝臣在秀

これは元文度改元勘文の一で、この時には菅原總長・菅原爲成の二人も、各〻の勘文に五つづつの年號を勘申してゐるが、時によつて奏進者の數にも、勘文にあげられた年號のことばの數にも多少がある。かくてこれ等の勘文に對して、適當なる公卿にその僉議を命ぜられ、公卿僉議の結果を奏上し、御裁可を仰いで改元が宣布されたのである。勘文奏進の家柄は、室町時代の初ごろまではいろいろであつたが、その以後に於ては、菅原一門卽ち高辻・唐橋・五條・東坊城・淸岡・桑原の諸家のみとなつた。

この改元定のことは天皇の大權であり、朝廷の行事で、幕府の容喙すべきものではないのであるが、林鵞峯の改元物語によれば、朝廷の公卿僉議に於て採用された年號候補いくつかを、更に江戸幕府に下され、將軍の前で、大老老中大學頭等が協議してこれに意見を附し、所司代を經て天皇に奏上し、

御裁可を仰いだこともあつたやうに見える。改元物語に寛永が正保となつた時のことを記して「大猷公御前ニテ裁斷アリテ仰ニ曰ク『年號ハ天下共ニ用フルコトナレバ武家ノ定ムベキコト勿論ナリ。公家武家ノ政ハ正シキニ若クハナシ正シクシテ保タバ大吉ナリ』ト議定シ玉フ。其時酒井讃岐守・堀田加賀守・松平伊豆守信綱・阿部對馬守・阿部豐後守伺候シ、先考（羅山）舊例ヲ考ヘ調進ス。公家ノ勘文ヲ御前ニテ讀進ス。我モ其コトニ預リ侍ス。（中略）其四年ニ當リケル四月二十日大猷公薨ジ玉フ。同八月十八日今ノ大君征夷大將軍ニ任ジ玉フ。是ニ由テ明年ノ秋改元アリテ承應ト號ス。（後略）」と記し、なほその書の終りに「蓋改元ハ天下ノ大事ナリ。シカルニ正保ヨリ明暦マデハ毎度先考ノアツカルトコロナリ。萬治ヨリ此度（延寳）マデ三度予ガ預ルトコロナリ。此僉議ノ時執政ノ外予父子ナラデハ一人モアツカルモノナシ。微小ノ身トイヘドモ是又稽古ノ力ニアラズヤ。事ノ次ニ子孫ニ示スタメニ言長ケレド記シ付ルモノナリ。」とある。これによればいくらか幕府が改元のことに關與し、家綱の、征夷大將軍繼承のために、承應改元が行はれたやうにも解せられるが、この時の改元詔書なども見えないので、何ともいへない。他の將軍任官の時をしらべて見るに、家光が將軍職をついだのは元和九年七月二十七日で、その翌年二月三十日に寛永改元が行はれてゐるが、これは甲子の年であり、改元詔書を見ても家光が將軍職をついだためといふやうなことは述べられてゐない。享保改元は正德

六年六月二十二日で、吉宗が家繼のあとをうけた五月二日の直後ではあるが、將軍職に任ぜられたのは八月十三日でその後である。これは將軍の代始のためといふのではなく、むしろ將軍の薨去等天變地妖のための改元であらうが、享保度の改元の詔書を見ることが出來ないからわからない。たゞ幕府の學問を掌つてゐた林大學頭がこのやうなことを憚ることなく書きのこしてゐるのを見て、當時の儒者たちの大義名分に對する見識も思ひやられる。しかし德川實記の成書例を見れば「天朝の御卽位・立坊・立后・大嘗會・改元などみな江府にてその事仰出さるる日に其事をのす。改元にはそれにより し奏表の類を書す例といへども、是等みな　天朝の事にして府にあつからざることなれば、錄せず。」とある。德川實記は文化六年から嘉永二年にわたり、大學頭林衡（述齋）の總裁の下に、成島司直等が編述したものであるが、これによれば改元物語にあるやうなことはむしろ一時の變態と見るべきであらう。それにしても、江戸時代の御代始の改元の詔書を拜讀すると、隨分畏れ多いと思ふふしがある。江戸時代の御代始の改元の詔書で、今日に殘存してわれわれの眼にすることを得るのは、後水尾天皇の元和、後光明天皇の正保、後西院天皇の明暦、東山天皇の元祿、中御門天皇の正德、櫻町天皇の元文、桃園天皇の寛延、光格天皇の天明、仁孝天皇の文政、孝明天皇の嘉永等であるが、元和改元の詔書を除いては、必ず次のやうな意味のおことばが含まれてゐる。「恭以眇身居大寶之尊位唯賴賢

良之輔弼將繼列聖之宏規。」（正保改元の詔書）「朕謬以眇末恭得洪基高義唐虞之古風偏賴之輔弼。」（明曆改元の詔書）「朕謬承洪基以薄德臨黎庶叨奉神器顧眇身畏皇天尙賴股肱匡救之力以致政敎雍熙之化垂拱仰成述而不作紀元愼始建而不悖。」（元文改元の詔書）平安朝・鎌倉時代の御代始の詔書の中にも、「雖無德華之惟馨只任鹽梅之克調。」（寛治改元の詔書）「朕雖慙幼齡之庸昧偏委輔翼之賢明。」（正治改元の詔書）といふやうなのがたまにはあるが、全部にあるわけではない。況や元文度の改元の詔書のやうなのは他に見ないところである。かやうな御言葉が御代始の改元の詔書に記されてあるとともに、一面天變地妖などによつて行はれた改元の詔書には、一切の禍一切の咎は、上一人の責任にありといふ意味のおことばが必ず述べられてゐる。例へば安政改元の詔書には「元氣鬱塞祝融爲祟宮闕蕩然殃逮閭閻洋夷出沒腥羶薰騰邊海不靖勤勞士夫加之六月以來坤德違常近畿地動及京于今不息詳念咎徵在予一人。（後略）」萬延改元の詔書には「去年武藏國有火災大藩鎭爲灰燼*固政令之不節將敎化不行況復蠻夷要和事情雖穩海濱爲市舊制難復奈何天意恐失民望加之地屬流行黎庶損傷災害如茲咎在朕躬。（後略）」慶應改元の詔書には「感禎祥而建元聖人常制依咎徵以改號王者恆規朕庸昧承運膺萬國之貢珍瑞應未呈値外夷之窺邊加以去秋七月防長凶徒率犯禁闕銃炮餘火忽灰輦下海內殆將扇動庶民不得安居朕之不德民其何辜。」と記されてある。以上のやうな改元に關する事實に徵して、朝廷と幕府との關係を窺ひ得るとともに、當時

の儒者學者と稱するものの、時勢に對する動向を推知することが出來る。

## 三　年號の出典

日本の年號の數は大化から昭和まで二百三十、それに僞年號とも見るべき元曆と吉野朝時代に於ける京都方の年號十六とを加ふれば二百四十七であるが、改元ごとに奏進された採用未採用の年號候補の數は莫大なものである。記錄に存する年號候補の總てをかぞへあげて見れば、延數二千七百、ことばの種類七百五十にあまり、出典の種類殆ど千に達する。これ等の出典の原據となる典籍を年號勘文によつてしらべると百以上にのぼる。これを書名の五十音順にならべて見れば次のやうである。

晏子春秋　易林　鹽鐵論　孝經　賈子新書　顏氏家訓　漢書　韓非子　漢武內傳　翰苑　魏志
魏文典論　儀禮　金樓子　會要（唐）　會稽記　管子　桓子新論　群書治要　藝文類聚　孔子家語
後漢書　後魏書　後魏孝文帝登高（祟）文　五行大義　國語　吳志　後周書　五代史　崔寔政論
蔡邕議（蔡仲郎集）　莊子　曹植求自試表（文選・魏陳思王曹植集）　左傳　三元布經　三國志　周易　周易
義廣會　修文殿御覽　周禮　爾雅　史記　拾遺記　荀子　春秋　春秋繁露　尙書　晉書　新序（劉
向）晉中興書　瑞應圖　隋書　齊書　山海經　宋史　宋書　太公六韜　太宗實錄　大戴禮　太平

御覽　唐鑑　唐書（舊）唐書（新）張衡靈憲　長短經　忠經　貞觀政要　通典（杜佑）帝王政記　帝王秘錄　帝王略論　典言　典言符命　天地祥瑞記　東觀漢記　董巴議　南史　抱朴子　白虎通　博物志　傅休奕文　符瑞圖　文中子　北史　北齊書　毛詩　孟子　文選　揚子法言　揚雄文　禮記　老子　呂氏春秋　梁書　列子　論語　論衡　維城典訓　韋孟諷諫詩（文選）淮南子　緯書類（易緯　尙書考靈耀　詩緯　春秋緯　春秋命歷序　春秋內事　春秋元命包　春秋演孔圖　河圖挺佐輔　龍魚河圖　孝經援神契）

以上百數種にのぼるが、なかには勘文にひかれただけで、一度も採用されたことのないものもあるから、それ等を除いて採用されたことのあるもののみあげると、

經の類に於ては尙書・周易・毛詩・禮記・左傳・孝經・周禮・孟子・爾雅・春秋繁露・大戴禮・論語の十三種（採用された數の多少の順による　以下同樣）

子類に於ては藝文類聚・莊子・維城典訓・群書治要・荀子・老子・賈子新書・孔子家語・修文殿御覽・抱朴子・鹽鐵論・韓非子・顏氏家訓・魏文典論・金樓子・管子・五行大義・崔寔政論・太公六韜・長短經・帝王略論・典言符命・博物志・白虎通・文中子の二十五種*

史類に於ては後漢書・漢書・晉書・唐書（舊）・史記・宋書・貞觀政要・魏書・國語・隋書・通典（杜佑）・梁書・三國志・北齊書・會要（唐）・會稽記・五代史・新唐書・宋史・太宗實錄・帝王世紀・

南史・北史の二十三種

集類に於ては文選・蔡邕議・董巴議・曹植求自試文（文選）・傅休奕文・揚雄文・韋孟諷諫詩（文選）の七種

緯書類に於ては易緯・詩緯・春秋緯・河圖挺佐輔・尙書考靈耀・春秋命歷序・春秋内事・龍魚河圖の八種

である。

以上經子史集緯書類のうち、全體を通じて多く採用されてゐるのは史類で、經の類これにつぎ、子類・集類・緯書類の順であるが、一部の典籍としては、尙書・周易・後漢書・文選等が著しいものである。

江戸時代に於ける三十六度の年號勘文に見えてゐる年號のことばをあげると、延數六百六十四にのぼり、ことばの種類としては二百三十七、出典の種類としては三百ばかりである。年號のことばの種類と、出典の種類との數の差のあることは、前章にあげた勘文の例にもある通り、一つの年號のことばに對して二つ以上の出典をあげてあることもあれば、一つの出典が別の年號の出典ともなることがあるからである。この江戸時代の年號勘文にあげられてゐる書名を五十音順にならべると、次の通り

である。

鹽鐵論　*御注孝經　*賈子新書　*漢書　魏志（三國志）　會要（唐）　*群書治要　*藝文類聚　孔子家語　*後漢書　五行大義　*國語　吳志（三國志）　後周書　*莊子　*左傳　*三國志　*周易　修文殿御覽　*史記　爾雅　*尙書　周禮　*荀子　*晉書　*隋書　*宋史　*宋書　唐鑑　*唐書　大戴禮　忠經　通典（杜佑）　*貞觀政要　博物志　文中子　孟子　*毛詩　*文選　*禮記　老子　呂氏春秋　*梁書　易緯　孝經緯

の四十五ばかりで、＊印の二十四種が、採用された三十五の年號の典據をなせる書名で、元和だけは「唐憲宗年號」とあつて、書物から引用されてない。上の四十五の典籍のうち經類に屬するものは、孝經・左傳・周易・尙書・忠經・毛詩・孟子・禮記の八種。そのうち、直接採用年號に引用されてゐるのは孝經・左傳・周易・尙書・毛詩・禮記の六種で、十五の年號にわたり、出典としての引文は二十二である。三十六の年號に對して引用されてゐる二十四種（元和は唐の憲宗の年號）の典籍との關係は次の表の如くである。

## 江戸時代に於ける年號の出典一覧

| 書名＼年號 | 慶長 | 元和 | 寛永 | 正保 | 慶安 | 承應 | 明暦 | 萬治 | 寛文 | 延寶 | 天和 | 貞享 | 元祿 | 寶永 | 正德 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 易經 | | | | | ○ | | | | | | | ○ | | | |
| 孝經 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 左傳 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 詩經 | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | ○ |
| 書經 | | | | ○ | | | | | | | ○ | | | | ○○ |
| 禮記 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 賈子新書 | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 群書治要 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 藝文類聚 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 莊子 | | | | | | | | | | | ○ | | | | |
| 荀子 | | | | | | | | | ○ | | | | | | |
| 漢書 | | | | | | | ○ | | | | ○ | | | | |
| 後漢書 | | | | | | | | | | | ○○ | | | | |
| 國語 | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 三國志 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 史記 | | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| 晉書 | | | | | | ○ | | | | | | | | | ○ |
| 隋書 | | | | | | | | | | ○ | | | | | |
| 宋史 | | | | | | | | | | | | | ○ | | |
| 宋書 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 唐書 | | | | | | | | ○ | | | | | | ○ | |
| 貞觀政要 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 梁書 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 文選 | | | | | | | | | | | | | ○ | | |
| | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 出典數 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 5 | 1 | 2 | 1 | 6 |

| | 元治 | 文久 | 萬延 | 安政 | 嘉永 | 弘化 | 天保 | 文政 | 文化 | 享和 | 寛政 | 天明 | 安永 | 明和 | 寶暦 | 寛延 | 延享 | 寛保 | 元文 | 享保 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | ○ | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○○ | | ○ | | | | | | |
| | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | |
| | | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | |
| | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | |
| | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | ○○ | | | | | | |
| | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | ○ | | | ○ | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 2 | 2 | 3 | 2 | 1 | 2 | 4 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |

| 出典数 | 慶應 |
|---|---|
| 4 | |
| 1 | |
| 2 | |
| 3 | |
| 11(9) | |
| 1 | |
| 1 | |
| 2 | |
| 1 | |
| 1 | |
| 1 | |
| 3 | |
| 6(5) | |
| 2 | |
| 1 | |
| 2 | |
| 3 | |
| 1 | |
| 1 | |
| 1 | |
| 3 | |
| 2(1) | |
| 1 | |
| 6 | ○ |
| 1 | |
| 61(57) | 1 |

## 四　經書を典據とせる江戸時代の年號

### （一）尚書に關するもの　備考　年號の上の數字は大化を初としたるその年號順位、下の數字は紀元年數。

一九五　正保（二三〇四—二三〇七）尚書正義曰先正保衡*佐我烈祖格于皇天。といふのが勘文の文である。尚書君奭篇「在太甲時則有若保衡（正義）曰說命云昔先正保衡作我先王佑我烈祖于皇天」といふによつたものであらう。菅原知長（恒長の舊名、東坊城氏）の勘文が採用されたものであるが、この文は後深草天皇の一三三 正嘉度（一九一七）改元に大江信房によつて勘申され、一九一 文祿度（二二五二）一九四 寛永度（二二八四）にも奏進されたことがある。

二〇二 天和（二三四一—二三四二）尚書曰奉答天命和恆四方民居師。洛誥の文で菅原在庸（唐橋氏）の奏進にかかる。この年號は後醍醐天皇の一五五 元弘度（一九九一）一五七 延元度（一九九六）に奏進されたことがある。在庸はこの時の勘文に、前漢書「嘉祥天和伊樂厥福。」（樂志）後漢書「天人協和萬國咸寧。」（桓帝紀）莊子「與人

和者謂之人樂與天和者謂之天樂。」（天道篇）の文をも併せてあげてゐる。

二〇六 正德（二三七一―二三七五）尙書正義曰正德自正其德居上位者正己以治爲民興利除害使不匱乏。尙書正義曰利用厚生惟和〔注〕正德以率下利用以阜財厚生以養民三者和可謂善政也。何れも大禹謨の一節で、菅原總長（高辻氏）の奏進にかかる。前者は堀河天皇の 七四 承德度（一七五七）の改元に奏進されてより五回目、後者は四條天皇の 一二四 文曆度（一八九四）に奏進されてより四回目である。この年號に對しては、毛詩・晉書・國語・賈子新書等からも出典があげられてゐる。

二一三 明和（二四二四―二四三一）尙書曰九族旣睦平章百姓百姓昭明協和萬邦。堯典の文で、菅原□□の勘文とあつて名前がはつきりしない。今の昭和の出典と同じである。これは正親町天皇の 一八九 元龜度（二二三〇）の改元以來、奏進を重ねること五回目である。なほ明和については、史記曰信其道德謀明輔和。史記曰百姓昭明合和萬國。といふ出典で勘進されたこともある。

二一五 天明（二四四一―二四四八）尙書曰顧諟天之明命。周書曰寧王遺我大寶龜紹天明卽命曰……。大甲上と大誥との文で、何れも菅原爲俊（舊名爲璞五條氏）の奏進にかかる。この年號はいろいろの典據からたびたび勘申された年號で、尙書曰克享天心受天明命（咸有一德）は古く平安朝の 八七 保延度（一七九五）の改元に藤原敦光が奏進してから 二一九 寛保度（二四〇一）の改元まで七回奏進されたが、今次の勘文にはあげられてゐ

ない。「通天然之明建大聖之基（本）。」（後漢書賈逵傳）「上則崇稽古之弘道下則闡長世之善經庶事既安天秩孔明。」（文選景福殿賦）もひかれたことがある。孝經や左傳からもひかれてゐるが、それはそれぞれの條下にゆづる。

二一六　寛政（二四四九—二四六〇）尙書注曰天下被寛裕之政則我民無遠用來。*菅原胤長（舊名世長高辻氏）の勘文で、洛誥の注とある。これも吉野朝時代の京都方の康應度（二〇四九）の改元に奏進されたことがある。なほこれには左傳からもひかれてゐる。

二一九　文政（二四七八—二四八九）尙書孔安國傳云舜察天文齊七政。舜典の注で、菅原長親（五條氏、淸岡氏を繼ぐ）の勘申するところ。平惟繼が一五七延元度（一九九六）の改元に奏進して以來、四回目に採用されたのである。なほこの年號の出典としては漢書や群書治要からもひかれてゐる。

二二〇　天保（二四九〇—二五〇三）尙書曰欽崇天道永保天命。書經仲虺之誥の末節。菅原爲顯（桑原氏）の奏進。二一四安永度に菅原世長（高辻氏）が奏進してから二回目で採用された。天保は古くからたびたび、年號候補にのぼつたことばで、出典の種類も多い。詩から三種、禮記から一種、孟子からも一種ひかれてゐる。毛詩曰、天保下報上也。君能下下以成其政臣能歸美以報其上焉。（小雅天保篇序）は菅原輔正の五〇正暦度（一六五〇）勘申以來三回。毛詩曰天保定爾亦孔之固……天保定爾俾爾戩穀罄無不宜受天百祿。（小雅天

保篇）は、七三 永長度（一七五六）に藤原敦基が勘申したのを初として四回、毛詩曰假樂君子顯顯令德宜民宜人受祿于天保右命之自天申之。（大雅假樂篇）は、菅原長時が二〇六 正德度（二三七一）に勘申して以來四回。孟子曰樂天者保天下畏天者保其國。（梁惠王章句）は、菅原輔正が五〇 正曆度（一六五〇）に勘申して以來七回をかさねてゐるが、これ等はいづれも天保度の勘文にはあげられなかつた。禮記の出典についてはその條下にゆづる。

二三一 弘化（二五〇四―二五〇七）尙書曰貳公弘化寅亮天地。周官の一節で、菅原爲定（五條氏）の奏進するところである。藤原資衡の一六六 應永度（二〇五四）菅原福長の二一六 寛政度（二四四九）の勘文にもあげられてゐる。

以上書經は九の年號にわたり、十一の文が採擇されてゐる。

### （二）周易に關するもの

一九六 慶安（二三〇八―二三一一）周易曰終有慶安貞之吉應地無疆。周易彖上傳の文で、菅原爲適（五條氏）によつて奏進されたものである。この年號は鎌倉時代の末一四九 文保度（一九七七）の改元の時に菅原在輔によつて勘申されたのが始で、七同目に採用された。

二〇三 貞享（二三四四―二三四七）周易曰永貞吉王用享于帝吉。周易益卦の文で、菅原恒長（舊名知長東坊城氏）の勘文が採用されたのである。これは同人によりて二〇一 延寶度（二三三三）に奏進されてゐる。

二一八　文化（二四六四—二四七七）周易曰觀乎天文以察時變觀乎人文以化成天下。周易彖上傳の文で、菅原爲德（五條氏）の勘文から採擇されたものである。爲德はこれと併せて後漢書荀悅傳の文「宣文敎以章其化立武備以秉其威」といふのを奏進してゐる。なほ文化の年號については文選の補亡詩のうち「文化內輯武功外悠」を引いて、菅原爲學が足利末期 一八三 永正度（二一六四）の改元の時に勘申してより、 二一七 享和度の改元までに九回ばかりくりかへして奏進されてゐるが採用されなかつた。

二二六　元治（二五二四—二五二五）周易曰乾元用九天下治也。周易文言傳の句で、菅原爲榮（五條氏）の勘文が採擇されたものである。爲榮は同じ勘文の中に「三國志曰天地以四時成功元首以輔弼興治」といふ文を併せ奏進してゐる。

易に關するものは以上の四である。

### （三）毛詩に關するもの

一九二　慶長（二二五六—二二七四）毛詩注疏曰文王功德深厚故福慶延長。菅原爲經（五條氏）の奏進にかかり、大雅文王篇の疏である。この年號は大分昔からたびたび候補にのぼつた。 一四二 正安度（一九五九）改元の時に菅原在嗣によつて勘申されてより二十數回をかさねて採擇された。

一九四　寬永（二二八四—二三〇三）毛詩朱子注曰寬廣永長。衞風考槃篇の第一節の注で、菅原長維（東坊城氏）の

勘申。吉野朝時代京都方の永和（二〇三五）改元の時に、藤原忠光が勘文にのせてから十五六回目に採用を見たものである。「毛詩朱子注」とあるは注意すべきである。

二〇六　正德（二三七一——二三七五）毛詩正義云德正卽德音政教……天下應和。菅原總長（高辻氏）の勘文が採用されたもので、大雅皇矣篇に屬する。この年號も吉野朝時代京都方の至德（二〇四四）改元の時に菅原淳嗣が奏進したのが始である。

詩に關するものは以上の三である。

### （四）左傳に關するもの

二一五　天明（二四四一——二四四八）左傳曰、昭公二十五年晉游吉曰夫禮天地之經而民實則之則天之明因地之性爲父子兄弟姑姉甥舅昏媾姻亞以象天明。菅原爲俊（舊名爲璞）の奏進にかかる。天明の出典は孝經や尙書文選などからもひかれてゐる。

二一六　寛政（二四四九——二四六〇）左傳曰施之以寛寛以濟猛猛以濟寛政是以和。菅原胤長（舊名世長高辻氏）の奏進で、昭公二十年の文である。これは一三一寛喜度（一八八九）改元に菅原資高が勘申したことがある。寛政の出典として尙書からもひかれてゐることは既に述べた。

### （五）孝經に關するもの

二一五　天明(二四四一―二四四八)　孝經曰、明王事父孝故事天明事母孝故事地察長幼順故上下治天地明察神明彰。感應章の文であるが、この時の奏進者は菅原□□とあつてはつきりしない。この出典は[八七]保延度(一七九五)の改元の時に藤原敦光が奏進して以來十回以上もくりかへし勘申されたものである。

### （六）禮記に關するもの

二二〇　天保(二四九〇―二五〇三)　禮記曰嘉樂君子憲憲令德宜民宜人受祿于天保佑命之自天申之故大德必受天命。中庸の第十七章の文で詩(假樂篇)を引用した部分であるが二三文字は異つてゐる。この時の奏進者ははつきりしないが、菅原輔正が[五〇]正暦度(一六五〇)に勘申してより三回目である。

江戸時代に於ける採用年號の出典として直接引用されてゐる經書は大體以上の如く尚書・周易・毛詩・左傳・孝經・禮記の六種であるが、昔にさかのぼつて廣く各典籍の年號勘文に對する引用の多少を見るに、平安朝時代に於ては全體の上からいへば、史類・經類・子類・集類・緯書類の順で、一部の書物についていへば漢書が首位を占めてゐる。鎌倉時代に於ても全體としては平安朝時代と同じ順であるが、一部の書物としては漢書は減じて周易が最多を示し、室町時代に於ては經類が史類を凌駕し、それぞれの書物に於ては尚書・周易・文選の順となり、江戸時代に於ては全體としても室町時代と略〻同樣であり、それぞれの書物としても尚書が最も多く採用され、後漢書・文選・周易がこれに

追隨してゐる。これを經書のみについて見れば、平安朝時代に於ける多少の順は尙書・毛詩・周易・禮記にして、鎌倉時代に於ては周易・尙書・毛詩・周禮。室町時代に於ては尙書と易と匹敵し毛詩・禮記これにつぎ、江戸時代に於ては尙書・周易・毛詩・左傳の順である。

これを要するに經書は年號の出典として時代とともに增加の傾向を示し、第三章にも述べた如く、江戸時代に於て年號勘文に表はれたる經書は、尙書・周易・毛詩・左傳・孝經・禮記・忠經・孟子にして勘申された年號のことばの延數は二百四十六、そのことばの種類百十一、出典の種類百十七である。うち直接採用された出典の數は二十二にして、年號の數としては十五で、尙書がその過半を占めてゐる。三十六の年號のうち十五の年號に、二十二の典據をもつてつながつてゐるのであるから、江戸時代の年號と經書との關係は密なりといはなければならぬ。室町時代から江戸時代にかけて經書の出典が多く採用されるやうになつたといふことは、暗暗裡に我が國に於ける經學の興隆が影響したものであらう。

## 五　將來の年號の出典

年號の出典となるべき書物は昔から、傳統的に定められ、元秘抄などに載せてあるのを見ると、七

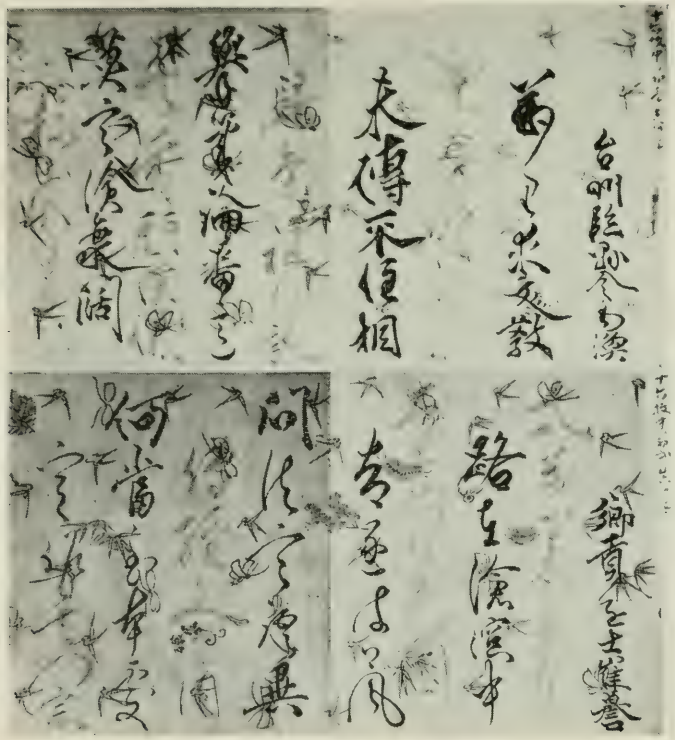
十三種ばかりであるが、實際について勘定すれば前にも述べた通り百種にもあまり、いづれも支那の古典である。支那の古典もとより差支へないことであるが、無限に伸びゆく我が國の將來の理想であり、鑑戒であり、欣求である年號のことばを選ぶには、今迄の傳統に拘はることなく、我が國の御歴代の詔書又は我が國の古典のうちからも選ばるべきではあるまいか。

東洋諸國の特色の一と見るべき所謂年號も今ではこれを用ふる國は、我が國と新興滿洲國とだけである。

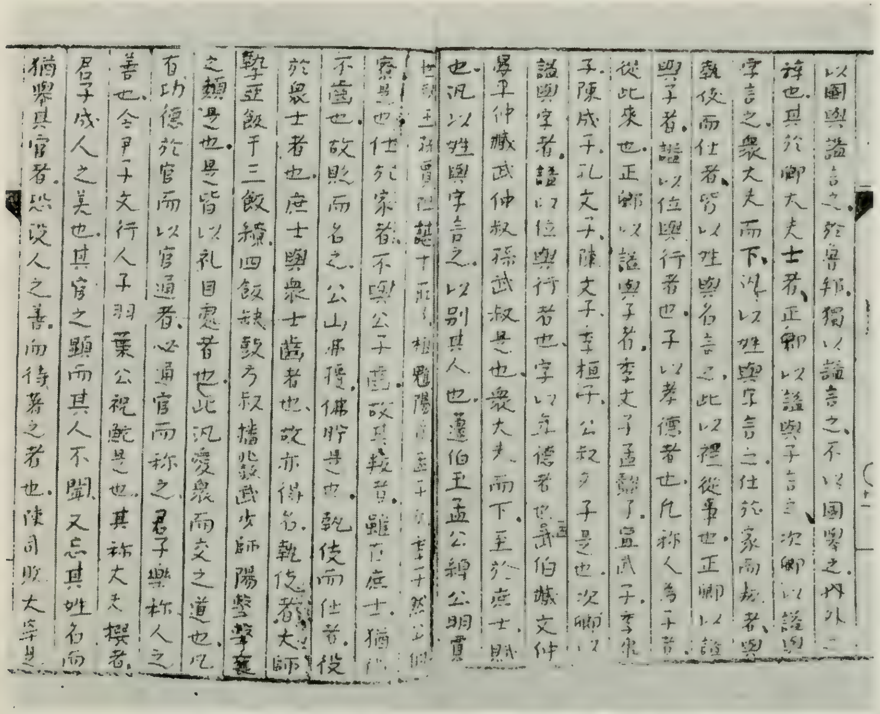
わが昭和の年號の出典は「百姓昭明協和萬邦」(書經堯典)にして八紘一宇の大理想を示されたものである。而してその大理想は日日夜夜顯現の一路を邁進して、堯舜發祥の地域をも光被してゐる。年號を用ふる國に祝福あれ、榮光あれ。



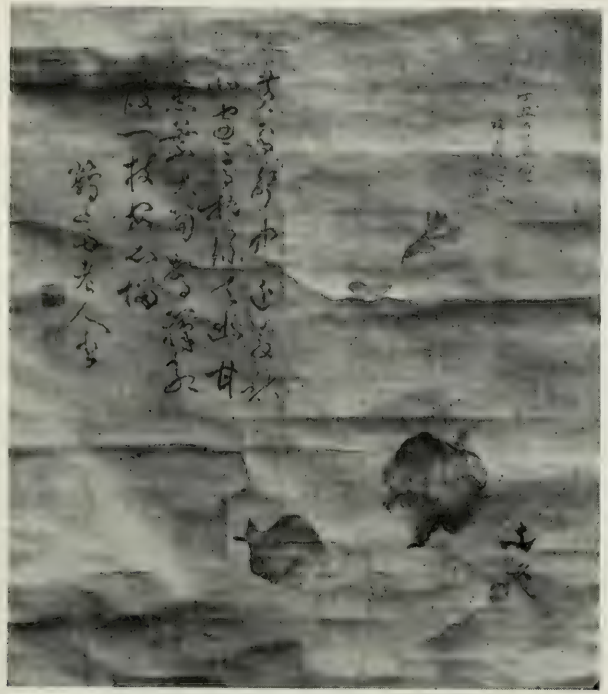
宗淵肖像（津市西來寺藏）



宗淵筆蹟（津市西來寺藏）



齋必簡著論語二字解（濱野知三郎氏藏）



齋必簡筆蹟（岡井慎吾氏藏）

# 漢字の訓解と校勘の學

岡井愼吾

漢字に訓を附けるは支那の言葉と我が國語とを引き合はせる事である。訓を附けるのが漢字傳來の當初より行はれたか否やは分らぬ。聖德太子の頃にはもはや訓によりて漢文を誦讀したらしい事は拙著日本漢字學史に述べて置いた。兩國語を引き合はせる際に内容の全く同じいものを得難いは容易に想像せられる。而も吾が國に於ては、漢字の含む内容が豐富多岐で有つたに比して國語のは單純であつた爲と考へるべきだらう。之は不甲斐ない話だが當時の文化の程度より見て已むを得ぬ。今日は漢字と國語との内容が略〻同樣になつて居ても、其は漢字に促されて國語の内容が充實した結果と見るべきだ。けだし「日」といふ漢字の意義を康熙字典には

1　太陽之精（說文）

2　君象也（博雅）

3　歳月に對する日（書經に協二時月一正レ日）

4　往日也（左傳）

5　與二暦數一者（同上）

の五種と立てて居る。之に對して大言海には「ヒ」といふ國語を日光に關する者（其の解四、今Aとす）時日に關する者（其の解6、今Bとす）に二分して

A1　太陽　1

A2　一日のこと　3

A3　日光、日の熱　後漢書―玄甲耀レ日

A4　日神の裔にまします至尊　2

B1　晝　孟子―以レ夜繼レ日

B2　一晝夜　洪範―一曰月、三曰日

B3　定めたる日限　晉書―交レ兵尅レ日

B4　日數　史記―曠レ日持久

B5　時、頃　孟子―壯者以二暇日一修二其孝悌忠信一

B6　日毎に　史記—日往朝ニ相如ー十種として居るは國語の內容が却て豐富なるかに見ゆるけれど、其の用例が皆漢籍に存する上に、其等の漢籍が漢字傳來よりも餘り晩からぬより推して、國語が之に啓發せられたを否む譯にはゆかぬ。さて此く迄に影響を受けても字典の4・5は竟に國語には喰ひ込み得なかつた樣である。此くも內容全く同じいを得られぬ以上、相近いもので滿足せねばならぬ。此うなると甲もあれば乙丙もありて一時は婿八人の態でもあつたらう。故に今日傳はつて居る訓は其の婿擇びに合格して猶且つ長い年月の淘汰に勝ち殘つた幸運者と稱へるべきである。

漢字に訓を附したのの古いものとしては古事記（一三七二）の訓注—立多知　生宇牟　分久麻理（配りの古言）漏久久（脫ルの古言）禍麻賀　凝烟州須　波浪那藝佐、書紀（一三八〇）の訓注—妍哉阿那而惠夜　麓簸耶磨（端山）雄誥烏多稽眉（雄叫ビ）嘖讓擧盧比（叱ルの古言）撫劍都盧岐能多伽彌屠利辭魔屢（手上取括ル）伐本截末謨登岐利須衞於玆婆羅比　蹢跙布瀰那羅須　や楊氏漢語抄（養老中一三七七 八三）の白雨無良佐女　田舍兒偉奈迦比斗　遊行女兒宇迦禮女（倭名抄より引く）などを擧ぐべきだが、頤を解くほどのものは少ない。然るに倭名抄に先だつ新撰字鏡（昌泰中一五五八 六〇）には流石に漢土文化將來の最高潮時の後らしい貴いものを存する。其の一二を擧げよう。

傾城擧城也　彌也古乃加支利

傾城には詩經の哲婦傾レ城や李延年の一顧傾ニ人城一が直に聯想せられるが、傾には司馬相如傳に一坐盡傾とある注に傾ニ慕其丰采一也と云つた解より轉じたのか、孫子荊の傾レ城遠追送の注には傾猶レ盡也ともある。此の盡城を「都のかぎり」は適切では無いか。

憧々往來也　比呂女久（攷異に從ふ）波太

憧々往來は易の咸卦の文だから之を引いて釋したのだが、ヒロメクハタは釋文に見える王肅の注の往來不レ絕貌によつたのだ。ヒロメクは廣めくで、旗が風を孕んで十分に廣がつて翻翩たるは往來不絕を狀するにも十分だ。

故故爾太介爾

は遊仙窟に無情明月　故々　臨レ窓の本づく所だらう。故々は杜少陵の月三首にも　時々開ニ暗室一、故々滿ニ青天一、爽合風襟靜、高當涙臉懸と用ひられて、仇氏の詳注には故々猶レ云ニ屢々一と云ひ、また中四(句)有ニ一喜一恨意一、時開ニ暗室一則喜レ之而爽ニ合風襟一、故屬ニ青天一則恨レ之而空當ニ涙臉一、一月而分作ニ兩般一、景隨レ情轉故也を引いて居る。恨意はネタゲニの訓を得て倍〻見はれるで無からうか。又

不分爾太

ともある。大言海に「ネタシ（妬）の語根、源（寄生）我こそかゝる目も見んと思ひしがねたのわざやと思ひ居給へり（例下略）」と見ゆる者。これも少陵に用ひられて送㆓路六侍御入朝㆒に不分（音問、一作忿）桃花紅似㆑錦、生憎柳絮白㆓於（一作加）綿㆒。さて詳注に不分不㆑能㆓分辯㆒也とあるが、この解は生憎とは對し難い故に大典の詩語解には不忿言㆑不㆑勝㆑忿也と改めて杜詩などを例とし、且つ葛原詩話には

大典師曰不分は杜詩に生憎と對す、分明に不㆑勝㆑忿の義なり。不㆑能㆓分辯㆒の解は謬と謂ふべし、況や分辯の分は平聲なり。

ともある。不分の事は東涯の秉燭談にも見えて

不分をネタヒカナと訓じ來る、其の所謂を知らず云々。李夫人曰不分桃花惱㆓人病眼㆒。

則ちネタシの訓は漢籍讀としても傳はつたと見える。涯翁さへも知らぬと有るを私共がさがし立ちて述べんも片腹痛しや。

明治以降古い點本が追々に學者の机上に上ることとなつて、又一方面が拓かれた。其の天長（一四八八）點成實論に、唐（イタヅラニ）勞㆓其功㆒とあるは玄應音義の大般涅槃經卷十唐捐の注に案唐徒也、徒空也に據りたるべく、莊子徐無鬼求㆓其唐子㆒也の注の唐失也、管子地員黄唐無㆑宜也の注の虛脆也と關係有りと思はるゝが、外典には殆ど見えぬから管子纂詁にも、

衡謂唐無㆓虚義㆒。爾雅曰自㆑半以前虚㆑之謂㆓之堂㆒然則堂有㆓虚義㆒。堂唐同音、故尹（管子の注は尹知章の撰と傳へらる）轉㆑唐爲㆑堂訓㆓虚脆㆒耳。

と取り遺(おと)して居る。又於㆓爾所(ソコラクノ)年月㆒と有るが金剛般若波羅蜜經の爾所恒河沙數に照しても若干の古語ソコラクを附したは妙。

願經四分律に沙門釋子中能(ノ)出(アヘテ)家學㆑道とか能與㆑我論者とか有る。之を神代紀の不敢來(エコジ)と照らす時、エがヨクたることは言を待たねば、普通にヨクと讀むのをアヘテとするのことわりあるを覺えるで無いか。

法華文句に洄(ツキクツガヘル)洑と有る。字典に洄 泝—也水流貌 洑 洄流也一曰伏流也 と見ゆるのみでクツガヘルの義は無い。然るに華嚴經音義に洄澓謂㆓河海中深淵之處水旋轉㆒也と有りて、澓と洑と同字だからクツガヘルの訓は貴い。又儻(タマサカニ)と訓ずる。大典の文語解に

　儻タマタマ　モシクハの義轉じてタマ〳〵となる。千百歳之間—有焉、—得㆓一至㆓其處㆒

と有るが、大言海にはタマ〳〵に古今兩義ありとして、古義タマニ今義偶然ニと立てた。大典は多分今義を以て釋したらうが、古義を取れば文句の此の訓と暗合する。

大唐三藏玄奘法師表啓に奬(タスケコシラフ)喩と有る。華嚴經義私記、吾が新撰字鏡、類聚名義抄にも誘をコシラ

フと讀んで居り、喩もサトス（覺の自動詞に對する他動詞の形）よりも此處はコシラフが適解。

內藤湖南先生は岩崎本日本書紀の聖德太子の憲法第一條に 或不㆑順㆓君父㆒、乍違㆓于君父㆒ の乍を「又」「マタ」「アルキハ」（河村秀根の集解にも襲用）と訓ぜるを取上げて、玄應の一切經音義に蒼頡篇兩辭也とある上は上句の或の字に對して乍をもアルキハと用ひたのだと云はれたが、先生の入室の弟子臺灣大學の神田教授は遊仙窟に

　或似㆓銅雀之新開㆒、乍如㆓靈光之旦敞㆒。

と有るを見出でて「遊仙窟の如き漢籍に實際に見出された事は私共の研究に取つて極めて大切な事で無ければならぬ」と云はれたは同感だ。私は先頃河田景楨の助辭鵠を繙いて

　江淹別賦ニ或春苔兮始生、乍秋風兮暫起ト云モ春ジヤト思フテ居ル內タチマチニハカニ秋トナル定ラヌ意ヲ含メリ（チラトと譯するの不可をいふ處）。北山移文ニ或飛㆑柯以折㆑輪、乍低㆑枝而掃㆑途トアルモ此ニ同ジ

に出會つた。タチマチニに引摺られては居るが、此の例も貴からう（移文には乍迴㆑跡以心染、或先貞而後黷と今一回有る）。

神田教授は遊仙窟の傍訓（慶安本を用ひて）に剩(スナハチ)と有るを慧琳の一切經音義の止觀下の言剩如㆑此

者意云ニ豈能便如下此によりて「剩は便の意味に使用せられたので、便はいふ迄もなくスナハチで有る」とも述べられた。私は此の高論を讀んで剩字は卽字と同じく韻鏡第四十二轉に有るから音通で無からうかと請教した事が有る。古典刊行會から出した醍醐寺本遊仙窟では教授の出された三例の中の一(心思眼剩傳)を眼卽傳と作つて居るが、此の異文が漢土に存したか本朝で起つたかで自ら結論も異なる。漢土に存したならば音通の說も無下に棄つべきで無く、本朝で起つたならば剩をスナハチと讀む故に筆も之に隨つたとすべきである。

此等の例は今後更に／＼見出されるだらう。だが其は緡なき錢の如くにバラ／＼になつて居る。然るに徳川氏右文の化によりて勃興した漢學では之を系統的に研究することとなり、助字と同訓異字との二途に分れた。助字については漢字學史に一章を立てて十五種を紹介し、其の他に物徂徠に訓譯示蒙、伊藤東涯に助字考、用字格を述べて置いた。同訓異字にも徂徠の譯文筌蹄、東涯の操觚字訣を出したが、今更に之を詳にしよう。此の兩書はいはゆる雙璧だが、字訣は明治に入りて後に出版されたのだから、百五十年間は譯文筌蹄の獨舞臺だつたが、其は又筌蹄が他の追隨を許さぬ名著たりしをも證する。

助字考の東涯の序によると採下李氏操觚字要、盧氏助語辭、湯氏一見能文及韻會、正字通等書解ニ助

辭之義一者上、彙而錄レ之間附二管見一と有る。操觚字要など其の名よりして同訓異字を收めたらしくも思ふが、正字通の引證書目にも謝氏の小學考にも其の名が見えぬ。

筌蹄は初編六卷、後編三卷（九卷より成つたらしいが上木はこれだけ）。徂徠が二十五六歲の時に口授し、門人僧聖默、吉有鄰が筆記したのを兩人で整理したのが正編、服部南郭の家に傳はつた寫本には刊本より百餘條多かつたのによつて南郭門の齊大禮（名必簡、號靜齋）が補ふ所あり、更に其の友人竹里（印には安澄彥字清甫）が增したのが後編と云はれ、初編は寶永六年徂徠三十九歲の時の整理、後編は天明八年の序が有るから其の歿後六十年に成つて居る。二十五六歲は徂徠が赦に遭つて江戶に還つた直後であるに洪武正韻、五車韻瑞、正字通などを引用して、上總の十三年間大學諺解一冊によりて獨修したといふに打合はぬ。初めて口授したは二十五六歲でも、三十九歲の整理までには增補もせられたと思ふ。其の證らしき事は和字の條に

皇宋、皇元、皇明の例に任せて吾國家を皇和といふべきことなるに古より此の稱を聞かず、近年茂卿が文に始めて書きたるなり。

と有る。蓋し皇和と用ひたのは徂徠の麗奴戲馬歌の

皇和今値二仁明君一　百年昇平息二戰氛一　交レ鄰柔レ遠賴二有道一　不レ厭航海梯山勤　遐方小人作二長

官一　聊以二賤技一娛二玉顏一

だらうが、此の戯馬は普通の歴史年表に「朝鮮馬術を演ず」として正徳元年に系けてある物であらう。但し此は整理者の記す所かも知れぬとしても、奇字の條に

近年伊藤が用字格とやらん云物に

と有るは全く徂徠の口吻らしい。其の用字格が亦正徳元年の出版で徂徠四十六歳の時だから、寶永六年の整理のまゝで上木したのではないと見るべきだ。

筌蹄には随分「俗語に」と云つて唐音を振廻してある。徂徠が岡島冠山を迎へて譯社を開いたは冠山が林家の弟子員に補せられた正徳元年前後と信ぜられるけれども、將軍綱吉が元祿十六年の二月に柳澤邸に臨んだ時、柳澤の儒者鞍岡某が唐音にて大學の小序を講じ徂徠其の通辯を勤めたといふから、徂徠自身が唐音を學んだは元祿九年（時に徂徠三十一歳）柳澤侯に仕へてから程遠からぬ頃かとも思はれる。この事も亦筌蹄が二十五六歳の頃の初稿のまゝでない證左とならう。

南郭が寶暦三年に物した物夫子著述書目記に

譯文筌蹄　六卷

右夫子初年授二門人一而令二筆受一者。雖二既刊行一焉、晩歳頗有二毀廢之志一故棄而不ㇾ用。後編未ㇾ刊

者亦擧以火ㇾ之不ㇾ藏ニ于家一、今世姦猾之徒私刊ニ後編一（愼吾曰今の後編は寛政九年刊）或吏ニ題目一行ㇾ之者往々有ㇾ之、皆所ㇾ不ㇾ用者。

と有るが、棄而不用は書中往々四書朱註を用ひて居るのが晩年の定論に異なる爲の事で、決して其の内容をも棄てるの意では無からう。特に姦猾之徒私刊後編は前述の如く後編の底本が南郭の家に有つたといふから皮肉だ。必箇の傳によると寛保三年に南郭の門に入り寛延二年江戸を去つたのだから、寶暦三年より七八年前の頃には擧以火之の災に遇はなかつたものと見える。

筌蹄は當時破天荒の作で、蘐園雜話には山井崑崙は仁齋門に在つたが、此の書を見て千里東上して徂徠に歸したと迄傳へて居る。漢字學史に「譯文とは吾が事物思想を漢文に譯すことで、其の際最も困惑するは同義異字の選擇に有るから動詞形容詞の其等を說明し、又口授で有つた爲だらう其の文字に關する諸種の用方や之に關連した熟語について有益な敍述が有るのが特に貴い」と述べて置いたやうに其の博覽强記に任せて取材の豐かなのは毎に聽衆を驚かしたことだらう。

操觚字訣の名は操觚字要に本づかれたかも知らぬが、譯文と云ひ操觚といふのに兩家の異なつた學風が映じて居るまいか。譯文と云へば漢文を本としての考が强く、操觚にはさるけはひは無からう。而も卷を開けば字訣には漢文の例を數多く出して、筌蹄に比すると其の說明も眞面目で親切である。

見音現について論語と孟子との集註を並べての説明など、痒い處に手が屆いて居る。尤も筌蹄は東涯の死後其の子東所（名善韶、通稱忠藏）が整理し、更に補遺五卷を加へたもので寶暦十三年（東涯元文元年の逝去より卅四年目）の序が有る。

東所は字例に於て其の扱つた文字を

助字　而、於、乎、哉の類を——といふ、文章のテニヲハなり

語辭　嗚呼、如何、稍、亦の類を——といふ、文章のコトバ字なり

虚字　命ズル、見ル、行クの類、ハタラキになる字を虚字といふ

實字　天、地、日、月、命、令の類を——といふ、其の形あるものなり

の四種に分つた。前二者の例は今日の考で云へば（楊樹達氏の高等國文法の分類による）

而連詞

於介詞

乎　哉語末助詞　亦語首助詞

嗚呼歎詞

如何不完全外動詞

の六品詞に分れるものだから、四種の別は隨分明確を缺くのに、書中には助辭としては而、之（連詞）、於、者（指示代名詞）の四字を收めて乎、哉は語辭に廻し、而も又虛字に雜字を加へて

虛字編には虛字の人事にあづかる類

雜字編には虛字の人事に限らず廣く用ふる文字、或は上編に漏れたる文字、又は實字の輕きもの

とせられたから、一字每に兩編を通檢せねばならぬこととなつて居る。又今日の考では虛字と云へば動詞、形容詞を聯想するのに、虛字に誠信實固允孚（動詞となるは誠、實、孚の三のみ）、雜字に間際、中內裏の有るは人泣かせだらう。實字は天文、時運、地理、人品、宮室、器財、飲膳、服色、人事、身體、動植の十一門に分たれて、名物六帖に比すると飮饌、服章の二で名目が小異し動植を二分してすべて十二門たるが異なるものの堀川の家法を知られる。

東所の補遺には「其の解の如きは他日の考索をまつ」とて之を缺くは惜しきものの、纂めてある例は貴い。前四卷は虛字雜字と併せて出してある所は前書の不便を覺つたかに見えるが而もアよりオ（最後）の五十音順が二回有る。第五卷は文章の呼應七十七條を出せるも筌蹄後編の首に文理三昧を收めたと近い。

筌蹄と字訣との述ぶる所殊途一歸なるべきは勿論だが、文字に對する態度に於ては各〻得る所得ぬ所が有る。今形、音、義につきて各〻一條を出す。

| 筌蹄 | 字訣 |
| --- | --- |
| 閑ハヒマト譯ス、又ムダト譯ス、忙字ノ反對ナリ云々。—人ハヒマ人ナリ、ムダモノ也、無用ノ人ナリ。—議論ハヒマナマヽノ無駄詮議ナリ、無用ノ論ナリ。—官—職ハヒマナ役ナリ云々。又主ナキアキ地ヲモ—地ト云フ。下略。 | 閒ハ安也。閑ト音同ジ、義ハ別也、近世ハ多ク義ヲ同ジク心得テ用ル也。忙ト反對ス。—暇、—冗、—居、—田、—民、—語、—雲ナドイフ通、ヒマナコト、無用ナコト、サビシキ意也。 |

説文に閒閑兩字ありて閒には隙也从㆑門从㆑月、徐鍇曰夫門夜閉、閉而見㆓月光㆒是有㆓間隙㆒也、閑には闌也从㆓門中有㆒㆑木と解したれば字訣の方精しと云はねばならぬ。

| 筌蹄 | 字訣 |
| --- | --- |
| 動ウゴクト云ヘル訓更ニ移易スベカラズ、靜ノ反ナリ。義極メテ廣シ。—止ハ人物日月風氣マデモ通用シテ—ト—キヤムトノ反對也云々。正韻ニウゴクハ上聲、ウゴカスハ去聲ト云ヘレドモ正字通ニ其誤ヲ辨ゼリ。 | 動ハ靜ノ對、ウゴクト讀ム通ジツトセヌコトナリ。大小輕重廣ク用ユ。ウゴクハ上聲、ウゴカスハ去聲ナリ |

自然使然ニ拘ハラズ上去兩音ナリ。

先づ正字通の言を引かう。

毛居正曰祕書省校書式諸書動字雖レ無レ音、楊雄傳淸靜字本上聲、師古合韻音去聲（愼吾いふ傳の爰淸爰靜游二神之廷一の注に師古曰靜合韻、音才性反と有るもの、才性反は卽ち去聲）、動靜之動亦可レ讀二去聲一（又いふ廷には平去二聲あるが、靜が平聲にはなられぬから、其の去聲に協へたと見るのだ。又合韻とは本音以外の時に云ふものゝ）。據二毛說一、動本有二上、去二聲一。今物自動、人動レ物並讀二去聲一。舊注（又いふ字彙を指す）沿二正韻、韻書一物自動則上聲、物不レ動而我動レ之則去聲、非也。

今並讀去聲でも經籍に異なつた用法が有れば之を認めるは漢土韻書の一貫した態度だから、正字通の言は通るまい。後に出た康熙字典に兩音を認めたも其の證、故に字訣の態度が妥當である。

遷ノ字ヲ下ヨリ高キヘウツルト云說アレドモ左―、―謫モアリ、拘ラヌコトナリ。役替ヲスルコトニ九―ト云フハヨキ役ヘヒタモノウツルコトニ云ヘルハ故事ニヨレリ、字義ニ非ズ。

遷ハ登也、去レ下之レ高也、或ハ上或ハ下、位ノカヘテウツルナリ。官ニ―ト云ハヨキ官ニ轉ズルナリ。又下官ニ降ルハ左―ト云。孟母ノ三―又―都ナドアッテ宜キ方ヘウツル也。

說文に遷登也从レ辵䙴聲。䙴升レ高也从レ舁囟聲、䙴古文䙴とあれば下ヨリ高キヘウツルといふもの無下に棄てらるまい。論語の不レ遷レ怒の皇侃の疏に遷猶レ移也と有るも、遷を登と解するを意識した結果で無からうか（字訣には猶移や徙との關係も述べて有る）。

此の三の場合に於て私は毎に軍配を字訣に揚げて居るが、之は偶然の結果で、私が字訣の方人たるでも無く又字訣が毎に優つて居るでも無からう。つまり讀んで痛快なは筌蹄で、水も漏らさぬ緻密は字訣にありとは定評だ。

こゝに注意せざるべからざるは堀川學では東涯東所二代に亙りて同一の點に停まつたに對して徂徠は更に一大飛躍をなした事である。徂徠は譯文筌蹄の題言に於て

學者先務唯要下其就二華人言語一識中其本來面目上、而其本來面目華人所レ不レ識也、豈非下身在二廬山中一故上乎。我今以二和語一求レ之然後知下其所二以異一者上。

と揚言して上下位置體段之不レ同、彼此語脈文勢精折之則自殊、彼之所レ有（勿論言語の上で）此不二必有一、此亦不レ無二彼之所一レ無などを其の結果として居る。故に和訓廻環之讀は徂徠の極力排斥するところだが、しかし和語が無かつたら廬山中に在つて其の眞面目を識らずに一生を了することになつたかも知れないので無からうか。其の徂徠は論語徵の首に於て又

余學ニ古文辭ー十年稍々知レ有ニ古言ー、古言明而後古義定、先王之道可ニ得而言ー已。

と云つて居る。抑々李王の古文辭は宋元及び明初の詩文が空靈疏通に墮したのを文之斑爛如レ見ニ秦漢間之人ー、詩之高華偉麗如レ見ニ開元天寶間之人ーに復さうとした迄で、其の目的は文辭の復古に止まつて居る。之を古言を明らめて先王之道を言ふに資するなどは夢想だもせぬ所だ。其を何故徂徠が此くも大用するを得たか。華人言語と和語との間の研究法を古文辭と宋元明初の文字との比較に應用した結果であつて、廬山中に在つた李王が一生識らぬ者を見届けた根柢は實に譯文筌蹄に有ると云ひ得る。蓋し論語徴は享保三年に成つたといふ。其は清の康熙五十七年だから惠棟29全祖望13盧文弨當歳で有り、戴震は5紀曉嵐は6錢大昕は10段玉裁は17王引之は27年の後に生れた位だから清朝學術の精華たりし考證學はまだ黎明期にも入つて居らぬ。然るに徂徠が古言を明らめ古義を定むるのを得たる餘、先王の制度にまで進んで立派な考證を成し遂げたは論語徴の釣而不レ綱弋不レ射レ宿の條などに見えて劉寶楠の正義にも無條件に之を受入れて居る。此かる考證の基礎をなすものは古い正しい本文で無くてならぬ。山井君彝の七經孟子考文が享保七八年の頃に着手せられたと云はれ、根本伯修が君彝と倶に足利學校に赴きて其の所藏の宋本によりて中庸篇に校勘したのが島田青石先生に藏せられて、其には享保庚子五年の後記が有ると古文舊書考に見えるのによれば、兩君の足利にての仕事は徴の成つ

た後である。徂徠が校勘の重んずべきを切に感じた結果が此の風氣を起したるべきは容易に察せられると思ふ。

徂徠によりて建立せられた斯の研究が、清朝考證學に啓發せられた狩谷望之連の人々によりて光紹せられたは餘りに顯著な事で今更呶々するを要すまいが、方外の人だけに內典に之を取入れた宗淵の名はさう普通になつて居らぬ。渠が望之や足代弘訓と相切磋した事は其の名著法華經考異にも見ゆる所で、校訂撰述の書は二十五種に上り、その內十四種は已に刊せられて居るから其の業績の大なる驚くべしである。

考異の開卷の蓮華の注に淵案康熙字典引二唐韻古書一云々唯後漢書李諧述身賦曰云々如二花字之比一得レ非下造二于魏晉以下一之新字上乎云々と有るが、字典には唐韻古音とあつて古書とは無い。字典は顧炎武の唐韻正の文を引いたから唐韻古音とこそ云はるれ、古書など當時は知られて居らぬ。又後漢書は顧氏は後魏書に作つて居るので字典の訛、後漢書に見えるならば魏晉以下之新字では論理が通ぜぬ。手近な處だから怪しむ人もやと注意して置くので、決して他意は無い。

其の精詳なること、每に

名曰　淵案今人日字作二長形一、曰字作二方形一。如二唐以上一日曰二字俱爲二方形一。韓勅碑、孔和碑、

楊震碑、王羲之黃庭經、顏家廟碑、天祿本晉書、建暦本史記、並日字作二方形一。是故古書遇二二字一或相疑。尙書洛誥「命曰記功」、毛詩采薇「豈不曰戒」並釋文云曰音越、一音人實反。大須本老子經「知和日常、知常日明」傍注云曰一本訓ヒヾニ、師說音越。補注云越州新本一曰山東日字誤爲曰字、蓋此類也――山家本妙法蓮華經裏書

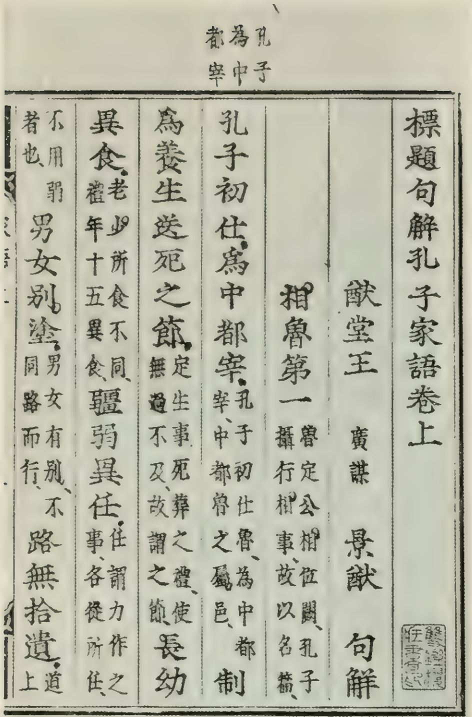
南无　淵案南無之無爲二モ音一、有無之無爲二ム音一。釋籤一引レ論云南謨、袖中策釋二南無一標云二南謨名義一、應音云二南謨或那摸一。慈音云二納慕、納莫一。慧苑音云三正云二南忙一。慈惠大師九品往生義云那牟、那慕、曩謨。張本、建本及箋難並云無音謨。補注云無莫胡切。又案廣韻云無武夫切、有無也、以屬二虞韻一。又云无莫胡切、南无出二釋典一、以屬二模韻一。心空音、明鏡集、承應音並舉二兩音例一云ム音者無量等也、モ音則南无。又魚山聲明、吳音相承者佛頂彌陀悔過、大導師佛名會、八句念佛等、其漢音相承者懺法引聲念佛、諸合殺唱禮並皆讀二ナモ一。又案東寺音金胎禮懺南無讀二ナウボ一。珍海發菩提心集云南無阿ト云ホドニ毛阿ノ二文字。但轉讀明鏡集云一稱、喜稱、釋迦等之南無者讀二ナモ一、南無觀世讀二ナム一、然明鏡集外未レ見レ有二此說一也。有下人以三俗間唱二ナム一疑中ナモ音上、故煩辨レ之耳――妙經考異

の類、妙經は寫刻が多く對校も八卷本で五十八種、七卷本で十六種に上るのに、師は猶且つ和漢の外

典より碑版までも用ひられた其の資料の富と根氣の盛とは驚嘆するの外は無く、篆隷萬象名義も天暦年間の觀靜の孔雀經音義も伊呂波字類抄も又龍龕手鑑も字貫も已に其の援引せらるゝ所たるは狩谷翁も必ずや可畏とせられたらう。

校勘は學者の時を消し博に誇る閒事に見える。けれども異文の中に一是を定めて研究考證の基礎を立てるは、漢字の有つ内容にふさはしい國語を引き合はせるが漢字採用の初の急務だつたと相等しい。これ漢字の訓解を述べた筆を校勘考證にまで進めた所以。

この宗淵の傳は僅に佛教大辭彙に有る。俗姓久松、名は眞阿。京都北野神社の社家光乘坊に天明六年に生れ、幼にして大原魚山に入りて薙染し、伊勢西來寺の三十一世となり、安政六年に寂す、壽七十四。山家本法華經裏書、法華考異等の外に三國音韻考百卷の著など多い。


孔子為中都宰

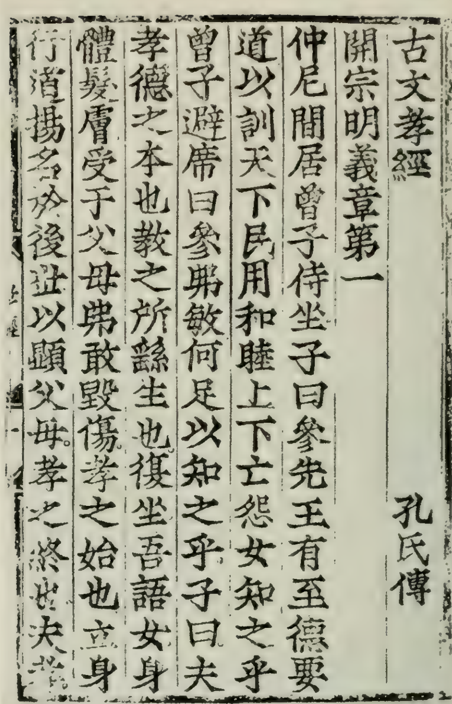
標題句解孔子家語卷上

猷堂王　廣謀　景猷　句解

相魯第一　魯定公相位闕孔子攝行相事故以名篇

孔子初仕，爲中都宰。孔子初仕魯爲中都宰中都魯之屬邑　制爲養生送死之節，定生事死葬之禮無過不及故謂之節　使長幼異食，老少所食不同　彊弱異任，任謂力作之事各從所任不用弱者也　男女別塗，男女有別不同路而行　路無拾遺，道上

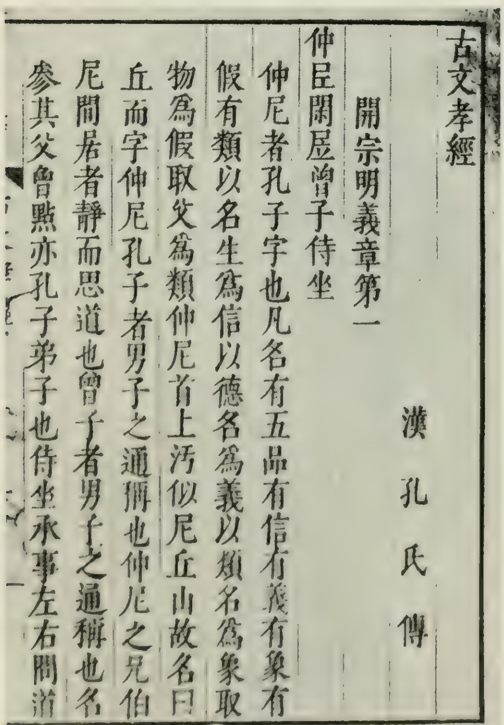
（伏見版）孔子家語


古文孝經　孔氏傳

開宗明義章第一

仲尼閒居曾子侍坐子曰參先王有至德要道以訓天下民用和睦上下亡怨女知之乎曾子避席曰參弗敏何足以知之乎子曰夫孝德之本也教之所繇生也復坐吾語女身體髮膚受于父母弗敢毀傷孝之始也立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也夫孝

（勅版）古文孝經

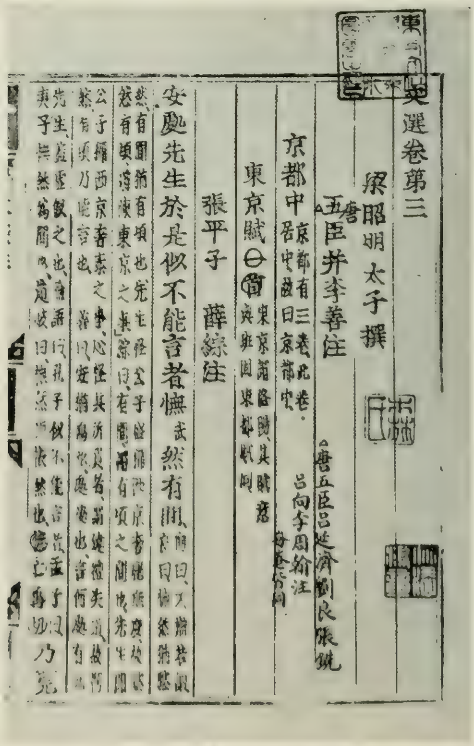

古文孝經

開宗明義章第一　漢孔氏傳

仲尼閒居曾子侍坐

仲尼者孔子字也凡名有五品有信有義有象有假有類以名生爲信以德名爲義以類名爲象取物爲假取父爲類仲尼首上汙似尼丘山故名曰丘而字仲尼孔子者男子之通稱也仲尼之兄伯尼閒居者靜而思道也曾子者男子之通稱也名參其父曾點亦孔子弟子也侍坐承事左右問道

（佚存叢書本）古文孝經


文選卷第三

梁昭明太子撰

唐五臣并李善注

唐五臣呂延濟劉良張銑呂向李周翰注

京都中

東京賦

張平子　薛綜注

安處先生於是似不能言者憮然有閒

（直江版）文選

木部 冒也冒地而生從中下象根形今依石經省作木凡字從木皆放此

凡壹伯玖拾貳字 陸字重文

柹 柹 上芳吠反見詩注下音仕從木從𠂔聲𠂔音姊 樝 側加反又作柤見禮記 枏 人占反 梅 從每每字下作母從母者訛母音無諸從母者放此 楷 口解反 桃 桃 上說文下石經凡字

五經文字（松崎慊堂審定本）

枏

木部 冒也冒地而生從中下象根形今依石經省作木凡字從木皆放此

凡壹伯玖拾貳字 陸字重文

柹 柹 上芳吠反見詩注下音仕從木從𠂔聲𠂔音姊 樝 側加反又作柤見禮記 枏 人占反 梅 從每每字下作母從母者訛母音無諸從母者放此 楷 口解反 桃 桃 上說文下石經凡字

五經文字上 三

五經文字（官版）

白氏文集卷第一

諷諭一 古調詩五言 凡六十五首

賀雨詩

皇帝嗣寶曆元和三年冬自冬及春暮不
雨旱爗爗上心念下民懼歲成災凶遂下
罪己詔殷勤告萬邦帝曰予一人繼天承
祖宗憂勤不遑寧夙夜心忡忡元年誅劉
闢一舉靖巴邛二年戮李錡不戰安江東
顧惟眇眇德遽有巍巍功或者天降沴無

白氏文集（官版）

白氏文集卷第六十五

律詩 凡八十二首

讀老子

言者不知知者默此語吾聞於老君若道
老君是知者緣何自著五千文

讀莊子

莊生齊物同歸一我道同中有不同遂性
逍遙雖一致鸞凰終校勝蛇虫

讀禪經

白氏文集（元和活字版）

# 江戸時代の漢書刊行

濱野知三郎

## 一

大和の法隆寺に神護景雲四年に開版された孝謙天皇勅版の無垢淨光陀羅尼が現存して居る。これが古經題跋卷上に「或曰、此經爲㆓我朝刊版之權輿㆒焉。」と見えてゐる通り我が國最古の印刷物で、是に由つて奈良朝時代既に印刷術の行はれてゐたことが窺はれるが、上代の印刷物は多くは佛典に關するもので、漢籍刊刻の行はるゝに至つたのは中世期以後の事に屬する。要するに文學の研究は貴族及び僧侶階級の人々に限られ、廣く一般民衆の間に普及するに至らず、隨つて書籍印行の要求に迫まられなかつた爲に、印刷術も亦其の進歩を見なかつたのである。

書籍を印刷するには整版と活版とがあり、活版に木製と銅製とがある。活版はまた一字板、植字

版、排印本、排字本、聚珍版ともいふ。室町時代刻版の盛んに行はるゝに及び、元國より彫刻工の來住した者も亦多く、これが爲に我が國の印刷術に長足の進歩を促した。刻師の中でよく其の名を知られて居る者に兪良甫と陳孟榮とがある。

活版印刷の術は朝鮮から傳はつたもので、小瀬甫庵の遺老物語に「一、一字板これは高麗入ありし故なり。」と見えて居る。文祿の役に當り彼の士より銅活字を多數に齎し歸り、これに倣うて木活字を製造するに至り、活版印刷術の發達を促し、慶長勅版の盛業を見るに至つたのである。

慶長勅版に就いては夙く既に近藤守重（成齋）撰の慶長勅版考があり、近くは鈴鹿三七氏の勅板集影、川瀬一馬氏の古活字版之研究等が公刊されて居る。近世期に於て漢籍刊行が空前の隆盛を見るに至りたるは慶長勅版に胚胎することを知らねばならぬ。

## 二

後陽成天皇は深く文學を好ませたまひ、また屢次勅版印行の命を下したまうた。慶長勅版考に「天朝の盛事は幕府の事業と併せ言ふべきに非ずと雖も、慶長の際文運の隆なる君臣同一均しく是千歳文明の胚胎なり。其の事の相類せるを以て聊勅本の一事を此に附贅す。」と述べて、「錦繡段、勸學文、

日本書紀、四書、孝經、職原抄、長恨歌琵琶行、陰虛本病、皇宋事實類苑」を擧げて居るが、此の外に五妃曲と題する書が刊行されたと傳へられて居る。また守重は文祿二年刊の古文孝經を擧げてゐないが、文祿二年閏九月廿一日より禁中に於て印刷に從事し、十二月八日に孝經印本を拜領したことが、其の事に與つた西洞院時慶の記錄に見えて居る。しかし其の書は現存してゐない。錦繡段と勸學文とは共に慶長二年の開版で、何れも大型の木製活字を用ゐ、前者は總紙數六十四葉、其の跋に、

錦繡段者、東阜天隱之所ㇾ編、而未ㇾ有二刊行一、玆悉取二載籍文字一、鏤二一字於一梓一、棊二布諸一版一、印二一紙一、纔改二棊布一、則渠祿亦莫ㇾ不二適用一、此規模頃出二朝鮮一、傳達二天聽一、乃依二彼樣一使二工摹寫一焉、叡思辱在下擬二周詩六義一、教以化ㇾ之、家藏人誦、傳中之不朽上云。

慶長第二歳在丁酉夷則下澣　臣僧南禪靈三誌焉

とあり、後者は總紙數五葉、其の卷末に左の刊記がある。

命ㇾ工毎二一梓一鏤二一字一、棊二布之一版一印ㇾ之、此法出二朝鮮一、甚無ㇾ不ㇾ便、因玆摸二寫此書一

慶長二年八月下澣

右により活字の印刷法が朝鮮より傳來したことは明瞭である。慶長四年は勅版印行の最盛期と稱すべきで、日本書紀神代卷（二卷二册九十一葉）、古文孝經（一卷一册九葉）、大學（一册九葉）、中庸（一册十八葉）、論

語（一册三十七葉）、孟子（二册百四十葉）、職原抄（二卷二册九十九葉）、等の諸書を刊行せられたのである。

慶長八年五妃曲が刊行された記錄が存して居るが實物の存在は未だ明瞭にならない。五妃曲とは白氏文集中の上陽人、李夫人、陵園妾、長恨歌、王昭君の五篇を選出したものである。文集は白樂天の生時既に我が國に傳來し、平安朝以來最も愛誦せられ、我が文學に影響を及ぼしたことは決して鮮少ではない。元和四年那波道圓の活字を以て之を刊行したるもの、萬治元年立野春節の訓點を施して刊行したるもの及び文政六年刊の官版等があり、抄本の類も亦多く、殊に長恨歌と琵琶行の二篇は慶長以來幾回か刊行された。

元和七年後水尾天皇は銅活字を用ゐて皇朝類苑七十八卷目一卷十五册を開版せしめたまうた。同書は跋に「元和七年重光作噩六月晦日、前南禪臣僧瑞保謹書。」とありて、瑞保は此の書開版の御趣旨を詳述して居る。慶長勅版考には、

此銅字活版匡郭縱六寸六分、横五寸八分、十三行二十字、四周雙邊、是　天朝銅版の始なり。此本目錄標題に麻沙新彫皇朝類苑とあり。是麻沙板宋本を以て翻刻せられし故、其原題を存せられし也。目錄の後に紹興二十三年癸酉歲中元日麻沙書坊印行と三行に楷書す。凡銅版はもと不朽を期するがためなり。しかるにこの　宋朝類苑の銅字ならびに　關東群書治要（元和二年版）、大藏一

覧の銅字（慶長二十年版）、異朝圖書集成の銅版（雍正四年卽ち我が享保十一年版）、の如きも忽に皆廢棄に至る。其不便の爲めか、慨嘆すべし。

と活字版の廢棄を嘆じ、田宮仲宣は其の著愚雜俎に左の如く活字使用の不便を述べて居る。

活字の愁ひは丁數多きものは部數及ばざるうちに文字磨滅し、凡そ千丁ばかりの物は五十部と摺る事かたし。これ同字一部の內丁ごとに摺ゆゑに、二十部とは掛りがたし。たゞ好事家のもてあそびのみ。

しかしながら活字版の印刷は絶えたといふのではない。活字版で印刷したものは今なほ多く殘存して居り、其の活字の種類もなか〳〵尠なくない。卽ち拙修齋叢書の如きは全部活字で印刷したものであり、また聚星堂活版といふものもある。殊に吉田篁墩が木活字で印行した論語集解考異と墨子とは稀覯の珍籍であり、また太田全齋が篁墩より讓り受けた活字を用ゐて印刷した韓非子翼毳の如きは今猶ほ學界の珍とする所である。

因に此の勅版の銅活字は後世までも存在してゐたことが、山岡俊明の類聚名物考、橋本經亮の橘窓自語等に委しく見えてゐる。

## 三

徳川家康は修文崇儒、古典舊記の蒐集に力を盡すと共に、また開版の事業に努め、大に文教を奬勵した。其の開版事業は前後兩期に分れ、前者は慶長四年より同十一年に至る八年間、伏見に於て開雕した所謂伏見版、後者は駿府に隱棲後の刊行にかゝるもので世に之を駿河版と稱する。近藤正齋は右文故事卷之五に慶長御版本として「孔子家語、三略、六韜、貞觀政要、東鑑、周易、七書、大藏一覽、群書治要」の十種を擧げて居る。卽ち孔子家語より七書までは伏見に於ける刊行で、後の二書は駿河に於ける刊行である。孔子家語の開版を擔當したるは足利學校第九世の庠主三要元佶で其の跋文に詳かに之を述べてゐる。

世際ニ季運一、而學校敎將レ廢也、維時内府家康公、于レ文于レ武得ニ其名一、故興レ廢繼レ絕、爲ニ後學一刻ニ梓文字數十萬一、而賜、予退爲レ謝ニ公之恩惠一、初開ニ家語一、此書是聖人奧義、治世要文、寔非ニ小補一也、刊字列盤中則明本家語以ニ數本一考正焉、或板行有ニ訛謬一、或文字有ニ顚倒一、以レ亡加レ之、以ニ余刪レ之、雖レ如レ此、有ニ帝虎鷴鶴誤者一必矣、只願待ニ博雅君子一改制焉也、謹跋。

慶長第四龍集己亥仲夏吉辰

前學校三要野衲於㆓城南伏見里㆒書焉

慈眼刊之

開版するに當つては愛讀の書より著手するは自然の勢で、孔子家語を治世の活文字として先づ之を開版したるは、其の意蓋し深遠なりと謂ふべきである。承兌叟が貞觀政要の跋に「唐太宗文皇帝者創業守成、一代英武之賢君也、千歲之下、仰㆓其德㆒慕㆓其風㆒者、今之內大臣家康公是也。」と述べたるは首肯すべき言である。板坂卜齋の慶長年中記には「家康公書籍を好せられ、南禪寺三長老東福寺哲長老外記局郎水無瀨中納言妙壽院學校兌長老など常に御咄被㆑成候。根本詩作連歌は御嫌ひにて、論語中庸史記漢書六韜三略貞觀政要和本延喜式東鑑なり。」と見えてゐる。家康が平素愛讀してゐた書は是に由つてほぼ推知することが出來る。

左に伏見版と稱する諸書を刊行の順序に列記せん。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 孔子家語附素王事紀 | 四冊 | 慶長四年刊 | 三要元佶跋 |
| 三　略 | 一冊 | 慶長四年刊 | 三要元佶跋 |
| 六　韜 | 二冊 | 慶長四年刊 | 三要元佶跋 |
| 貞觀政要 | 八冊 | 慶長五年刊 | 西笑承兌跋 |

三略　一冊　慶長五年刊　三要元佶跋
六韜　二冊　慶長五年刊　三要元佶跋
六韜　二冊　慶長九年刊　三要元佶跋
周易　三冊　慶長十年刊　西笑承兌跋
七書　四冊　慶長十一年刊　三要元佶跋

駿河版とは林道春、金地院崇傳に董督せしめて開版した大藏一覽及び群書治要の稱である。右文故事卷之五に「大藏一覽六冊、守重云、此活版匡郭縱七寸餘、横五寸三分、八行十七字、開版の年月序跋なし。蓋し慶長二十年三月二十一日の開板に係る。道春奉之しなり。」「群書治要五十卷第四第十三第二十三闕四十七冊、守重云、版式前の大藏一覽に同じ。又開版の年月序跋なし。謹按に、群書治要開版は元和二年正月十九日仰出され、崇傳、道春管理し、諸職人は京より呼下し、校合人は二月七日五山僧呼寄せ、廿三日駿府三の丸御舞臺の芝居にて取かゝり、廿五日不足の鑄字は明人林五官に補造せしめ、三月十日異本を直江山城守へ搜訪せられ、(中略)五月下旬に至て御他界の後に版全く成る。僅に三閱月餘、五官が補鑄する銅字も一萬三千餘と云ふ、其成功の敏捷なること驚くべし。從事の諸人勉强したりと云べし。」とあるので其の大要が窺はれる。本光國師の日記によれば、群書治要の爲

に使用した活字は從來からあつた銅活字八萬九千八百十四個と大藏一覽印刷の時に新鑄した一萬三百六十八個とであつたといふ。そもく群書治要は唐の太宗が祕書監魏徵に命じて、群書中より政治の要領を抄錄纂輯せしめたもので、慶長二十年七月制定の公家法度第一條に「寛平遺誡雖レ不レ究ニ經史一、可レ誦ニ習群書治要一。」と見えて居る通り爲政者必讀の良書として開版されたものである。

## 四

伏見版に先だつ三年、卽ち文祿五年（慶長元年）、小瀨道喜が（原題徐狀元補註）蒙求三冊を活字版で刊行したるは頗る注目すべきである。道喜は甫庵と號し、太閤記の著者として知られて居る人で、此の外なほ數書を刊行した。蒙求の跋に曰く、

桑域洛陽西洞院通勘解由小路南町住居甫庵道喜、新刊ニ一字板一、繡ニ此書一、以應ニ童蒙之求一也、呼鳴未レ辨ニ芊耶羊耶魚耶魯耶一、㵎愧林慙、冀博覽人運ニ郢斤一多幸。

惟時文祿第五丙申小春吉辰道喜記

次に特記すべきは直江版文選である。米澤上杉侯股肱の臣直江山城守兼續は兵馬倥偬の際、なほ能く心を文事に留め、慶長十二年要法寺に於て六臣註文選を刊行した。經籍訪古志に「此本慶長丁未

歳、直江兼續用ㇾ銅雕₂活字₁印行、世因稱₂直江板₁。」と見えてゐるもので、林羅山は五臣註文選跋と題して左の如く記して居る。

此本近歳米澤黄門景勝陪臣直江山城守某、開₂板于要法寺₁、余請₂秋元但馬守泰朝₁、而後泰朝告₂景勝₁、而得ㇾ之寄ㇾ余。

直江版文選が要法寺で開版されたことは上に述べた通りであるが、他にも要法寺版と稱するものがあり、殊に論語集解は刊記に「慈眼刊正雲刊　洛汭要法寺内開板」とありて著名のものである。

以上の諸書は何れも活字を用ゐて印刷したもので、活字版は一時大に行はれたが、其の使用が次第に衰へて整版を用ゐるに至つたことは既に述べた通りである。

將軍綱吉は襲職以來文武忠孝を奬勵し、又自ら執政等の爲に經書を講じた。其の出版の書は常憲院本と稱して世の尊重する所である。常憲院殿御實紀附錄に、

廿一史のうち、いまだ國刊に及ばざるものは、松平美濃守吉保が藩儒荻生惣右衞門、志村三左衞門などに命じ、訓點を加へ、刊行せしめられける。また四書直解官刊成功せしをり、伊勢日光の御宮、東叡、三緣の兩山、山王權現祠、鎌倉八幡宮に進薦あり、これは元祿元年の事なり。

と見え、松澤老泉の經籍答問には、常憲院殿御代の刻板として左の如く擧げて居る。

御版四書 大字大形本　同 巾箱本　五經 和訓附　詩經集註 半紙本　書經集註 同上

此の時代の出版狀況を知るべきものに、幸島宗憲の著した倭版書籍考がある。此の書は元祿十五年の出版で、慶長より元祿年間までの出版物を一書毎に解題したもので、合計七百五十七部を舉げて居る。之を類別すれば左の通りである。是に由つて印刷術が如何に長足の進歩をなしたかが窺はれると思ふ。

| | | |
|---|---|---|
| 一、神書四十部 | 二、儒書百四十六部 | 三、武書十二部 |
| 四、史傳雜記二十九部 | 五、佛書二十部 | 六、雜記六十七部 |
| 七、醫書九十八部 | 八、諸子百家五十九部 | 九、詩文尺牘百四十六部 |
| 一〇、倭歌五十七部 | 一一、倭字諸書三十六部 | 一二、字書法帖四十七部 |

## 五

昌平坂學問所で刊行した書を官版と稱する。官版は宋元の槧本及び諸家精校の善本に據り、または通志堂經解本を覆刻したもので頗る信賴すべき典籍である。其の創刊は寛政十一年で、それより慶應三年まで六十九年の間に、百九十九部、九百八十九冊が出版された。これを經史子集に類別すれば、

經四十六部二百三十四册　史三十一部二百四十册

子七十部二百十七册　集五十二部二百九十八册

である。また此の百九十九部の中にて重刊されたものが十二部（經二、史三、子五、集二）ある。これを刊行年度順により左に表示する。

寛政十一年七部（經三、史一、子三）
寛政十二年一部（史一）
享和元年三部（經二、集一）
享和二年十四部（經五、史一、子四、集四）
享和三年四部（史一、集三）
文化元年四部（經一、子一、集二）
文化二年二部（經一、史一）
文化三年四部（經一、史二、集一）
文化七年七部（經二、史一、子三、集一）
文化八年三部（經三）
文化九年二部（經一、集一）
文化十年一部（經一）
文化十一年五部（經三、子一、集一）
文化十二年三部（經三）
文化十三年四部（經一、史一、子一、集一）
文化十四年二部（經二）
文政元年四部（史一、子一、集二）
文政二年四部（經一、史一、子一、集一）
文政三年九部（經二、子一、集六）
文政四年五部（史二、子一、集二）
文政五年三部（經一、史一、子一）
文政六年二部（集二）

文政七年八部　（史二、集六）
文政八年四部　（史一、集三）
文政九年三部　（經一、子一、集一）
文政十年三部　（子二、集一）
文政十二年五部（經一、史一、子三）
天保元年六部　（經一、子五）
天保二年七部　（經一、史一、子五）
天保三年八部　（子八）
天保四年九部　（史一、子七、集一）
天保五年五部　（經一、史一、子三）
天保七年五部　（經一、史三、集一）
天保九年三部　（經一、史一、集一）
天保十年五部　（史二、子一、集二）
天保十三年四部（經二、史一、子一）
天保十四年一部（史一）
弘化三年一部　（經重刊一）
嘉永二年一部　（子重刊一）
嘉永三年一部　（經重刊一）
嘉永四年五部　（經二、史重刊二、子重刊一）
嘉永五年一部　（子重刊一）
嘉永六年四部　（史重刊一、子重刊二、集一）
安政元年一部　（集重刊一）
安政四年二部　（子一、集一）
安政五年三部　（子一、集二）
安政六年四部　（子一、集二、集重刊一）
萬延元年二部　（子二）
文久元年一部　（子一）
文久二年二部　（子二）
文久三年二部　（子二）
慶應元年三部　（子一、集二）
慶應三年二部　（經二）
年代未詳七部　（經一、史一、子五）

以上は何れも整版で、外に刊年不記の木活字本が四部四十冊ある。

天保十五年糊山精一は官版書籍解題を著はした。官版本を研究するに頗る便利なものである。弘化四年春の新刊で著錄するところは百六十六部（經三十八、史三十一、子五十四、集四十三）であるから、其の後に刊行されたものが尚三十三部あるのである。

弘化三年の災に官版の板木が燒失したもの實に七十有餘部、其の後刪板の厄に罹かつたものもあり、海外に流出したものもあつたが、富田鐵之助は六十四部（經十三、史七、子二十三、集二十一）の板木を得て昌平叢書と名づけ明治四十二年これを印刷した。其の顛末は序文に委しいから左に抄錄する。

寛政中、林述齋之爲二祭酒一也、始開二印書局一、校二刊群籍一、自レ是之後、歷代諸儒、繼二紹其業一、延及二慶應年間一、積有二二百餘種一、所謂昌平黌官版者是也、及二黌廢一梓版多散佚、或有下漂二到海外一者上、長門人島田蕃根深惜レ之、投レ貲購置、數十車屋、殆不レ能レ容、後移二藏之吾六然堂一、蓋此書概係下坊間不レ易レ獲者上、因欲下一刷二行之一以濟中蕃根之志上久矣、一日友人山田士英來謀二刷印之事一、余喜而諾レ之、裝本既成、題曰二昌平叢書一、凡六十四種、六百六十七卷、若夫裨二補聖代之敎化一與レ否、非三余所二敢知一也。

# 六

官版の刊行に努力して居た林大學頭衡（述齋）の歿したのは天保十二年九月で、其の翌年六月には書籍出版に付布告があり、また諸藩に對して出版奬勵の命が下つた。

一、文學之儀は當時格別御世話被レ爲レ在追々官板も被二仰付一候處諸家藏板に至り候ては僅か數十部に不レ過哉に候　一體大身之輩は心掛次第大部之書一二部宛も藏板いたし普く後來にも相傳候樣有レ之度事に候此段十萬石以上の面々え急度可レ被二相達一候

此の命の下るや、松崎慊堂は誠に古今の大盛事なりと喜び、上梓すべき五經三史文選及び杜氏通典の善本を擇び、林祭酒皝（檉宇）に上疏した。此の疏は後に刊行された。安井息軒（衡）は之に跋して曰く、

天保壬寅、列侯刻書之命下、慊堂先師蹶然以起曰、此盛典也、上可三以光二國家之徳輝一、下可レ以長二髦士之學識一、乃具下録經史古本、亡二於彼一而存二於我一者十餘種上、次第而分二疏之一、進二檉宇林公及諸名公好レ古者一、慫恿以成二其美一、衡適訪焉、喜動二眉宇一曰、子輩行將三多事一、予既以二刻書之事一、請二林公一矣。（下略）

慊堂の面目は右の文中に躍出してゐるが、時事一變して其の志望は遂に實現するに至らなかつた。しかし幸に縮刻唐開成石經四十册を刊行するを得たるは慊堂晩暮の喜と謂ふべきであらう。此の偉業は實に左の諸侯の出資によつたものである。

掛川侯（周禮、儀禮、禮記）　肥後新田侯（孝經、論語、爾雅）

西條侯（周易、毛詩、尚書）　佐倉侯（公羊傳、穀梁傳、春秋、五經文字、九經字樣）

諸藩中には命を俟たずして、既に刻版を藏してゐたものも少なく無かつた。東條琴臺の諸藩藏版書目筆記によれば、尾府明倫堂、紀府學習館、水府彰考館を始めとし、計八十一藩、四百十八部の書目を擧げてゐる。此の諸藩藏版書目筆記には編纂の年月が明記してないが、凡例に「斯書は昨年の秋七月、諸藩藏版の擧あるべしとて經史子集の內、何か然るべきと可否を尋問ありし藩、前後四藩あり。（中略）重複のなきやうに致すが簡要にあるべくと心附き、諸藩に藏版ありしものを筆記して云々。」と見ゆれば、天保十四年の編纂であつたことは言ふまでもなく、また既に四百十八部の藏版があつたことが知られる。此の四百十八部の中には和書も含まれてゐるが、それは極めて少數である。また天保以後の諸藩出版書目は德川幕府時代書籍考に次の如く見えて居る。

欽定四經、四書匯纂（加賀藩）宋板春秋左氏傳、韻府一隅（仙臺藩）資治通鑑、經世文編抄、聽訟彙案（津藩）春

秋左氏傳完不（薩摩藩）歴代名臣奏議、陸宣公奏議、國史纂論（長州藩）小學集疏、續通鑑綱辨解完不（筑前藩）尚書正義（熊本藩）貞觀政要（紀州藩）東都事略、南宋書（忍藩）史記論文、貞觀政要（小田原藩）康熙字典（津山藩）嚴氏詩緝（姫路藩）漢魏公全集（大洲藩）史徵（龜山藩）四書輯疏（會津藩）明朝紀事本末（二本松藩）增續會玉編（秋田藩）甘雨亭叢書（安中藩）丹鶴叢書（新宮藩）校刻日本外史（川越藩）通鑑攬要（篠山藩）永嘉八百鋒（壬生藩）日本書紀（黒羽藩）五種遺規（山中藩）荀子箋釋、韓非子（平戸藩）通鑑紀事本末（淀藩）兵要錄（松本藩）鈐錄（郡山藩）大日本史（水戸藩）朱子書節要（新發田藩）本草通串、同圖翼（富山藩）隋書（高松藩）本草啓蒙（岸和田藩）朱子文語纂編（山形藩）紀効新書（大村藩）兵要錄（福山藩）小學合璧（廣瀬藩）通鑑輯覽完不（土佐藩）十三經注疏完不（越前藩）

以上ほゞ列侯出版の狀況が窺はれるが、此の中には彼の土のものを凌ぐに足るべき精刻のものも少なくない。其の一例として佐藤一齋の資治通鑑跋を抄錄する。

余因謂、漢土書籍、舶ニ致於我一者、宋元以來至レ今不レ絶、如ニ斯書一、亦逐レ年增益、不レ知ニ見在爲ニ幾百千部一、固莫レ待ニ於改槧一、然至ニ於校訂之精一、罔ニ或遺漏一、則此刻蓋有レ優ニ勝於西土通本一者上、幸再入ニ於西土一、則彼稱ニ其出藍一也必矣、屬者侯俾三余追書以道ニ其由一、乃不レ辭而跋ニ之如レ此。

嘉永二年己酉夏五月中澣　　幕府講官　佐藤坦撰

資治通鑑の校訂を擔當した土井聱牙は、半生の心血を灑ぎ視力爲に衰弱したとさへ傳へられてゐる位で、固より雄藩の盛業たるに相違ないが、一齋の跋文は一種の贊辭であるとも解せられるであらう。然らば眞に彼の土の學者を驚異せしめ、國光を海外に輝したものとは果して如何なる書であるか。

## 七

支那の典籍を輸入するに汲々としたゐた時に當り、我が國の刊行物が却つて彼の土の學者を驚歎せしめたものが多々ある。今其の一二を述べる。

群書治要には元和二年に刊行した駿河版、天明五年尾府明倫堂にて開版したるもの、弘化二年紀府學習館にて駿河版を再版したるもの等がある。明倫堂開版の天明本は支那に傳はり、阮元はこれを四庫全書未收書目に著錄して賞揚し、宣宗の道光二十七年楊尙文はこれを連筠簃叢書に收めた。此の群書治要が支那に渡つた事情は右文故事卷之五に「天明五年尾張大納言宗睦卿、此書校刊のことあり。（中略）寛政八年守重長崎祇役の時、此書西土に亡佚するの故を以て大納言殿より其臣人見恭をして此書五部を郵致せられ、西土に送り致さんことを令せらる、守重卽これを時尹中川忠英に言し謀て其一部を長崎聖堂に、一部を諏訪社に置き、三部を唐館に與ふ云々。」と見えて居る。

佚存叢書は林述齋の編で、支那の古典の夙に散逸して獨り我が國にのみ存在するものを纂輯した貴重の文獻で、寛政十一年編者の自序がある。其の內容は、

第一帙、古文孝經孔氏傳一卷、五行大義五卷、臣軌二卷、樂書要錄三卷、兩京新記一卷、李嶠雜詠二卷、

第二帙、文館詞林四卷、朱子感興詩注一卷、泰軒易傳六卷、左氏蒙求一卷、

第三帙、唐才子傳十卷、難經集注五卷、

第四帙、古本蒙求三卷、玉堂類稿二十卷、西垣類稿二卷、玉堂附錄一卷、

第五帙、周易新講義十卷、

第六帙、宋景文公集十卷、

である。此の書は彼の土に傳はり翻刻されてゐるが、此れに接した清の諸儒は歐陽修が「逸書百篇今尙存」といつた句の虛ならざるを今更の如く驚嘆したことであらう。

七經孟子考文は山井鼎（號は昆侖）の撰で、鼎は荻生徂徠の教により足利學校に古鈔本、宋槧諸經のあることを知り、其の友根本遜志（號は武夷）と共に足利に赴き、三年間滯留して、古板十三經中、易、書、詩、春秋左氏傳、禮記、論語、孝經、孟子を校勘し、享保十一年これを淨寫して藩主西

條侯に獻じた。鼎は疲勞の爲遂に病を獲、十三年正月歿し、其の六月侯はこれを幕府に獻上した。是に於て更に物觀（號は北溪、徂徠の弟）に命じて補遺を作らしめたが、十五年二月完成し、十六年六月刊行した。これが支那に傳はり、江浙藏書家の手に入り、乾隆の初、四庫全書館を開いて周ねく書籍を採訪せし時、杭州の飛鴻堂汪啓淑これを進獻して四庫全書に收めた。王鳴盛の尙書後案、翟灝の四書考異に共にこれを引用して居る。阮元は此の書を參考して十三經注疏校勘記を作り、また嘉慶二年（我が寛政九年）六月これを覆刻した。

梁皇侃の論語義疏も亦彼の土に於ては南宋の比より佚して傳はらなかつたが、寛延中、根本遜志は足利本により校訂して世に流布した。尋いで淸舶によりて傳致され、武英殿本、知不足齋本、古經解彙函等に收錄されるやうになつた。

## 八

藤原惺窩の詩文集に、慶安四年辛卯九月十二日、後光明天皇の勅序を賜はりたるは啻に惺窩一人の光榮のみでは無い。惺窩集には藤原爲經編、源光圀校の水戸版と林道春の編した坊刻本との二種がある。橘窓漫筆に「昔惺窩先生友人へ送られし書に、此頃文章軌範手に入候畢、他年の望を遂候。門人

中にも寫させ申悅入候。」と見えてゐるが、慶元の際に於ては文章軌範すら容易に手に入らなかつたのである。しかるに文教奬勵の結果は碩學鴻儒輩出するの盛況を呈し、著書には經子の注解に、史學の研究に、詩文の篇什に不朽の作多く、且つ其の著作物は印刷術の進歩に伴うて自由に刊行せらるゝに至つた。吾人は是等先哲の偉業を景仰すると共に、圖書の刊行に特に與つて努力した西洞院時慶、僧承兌、僧崇傳、直江兼續、林道春、僧慈眼、今關正運、僧丹智、僧常信、前田綱紀、松平定信、水野忠英等の功績をも決して忘れてはならない。

# 日本經解に就いて

内野台嶺

## 一

最初自分に與へられた題目は、「日本經解の解題」といふことであつた。ところが愈〻日本經解の解題を書くとなると、少くとも數百頁を要することになり、單に其の目錄を擧ぐるだけでも、優に百頁ぐらゐは費さねばならず、從つて所定の二十頁ではどうにもならないことを知つた。加之、「漢籍の刊行」に就いては、別に濱野氏が執筆されることになつて居り、自然重複する點も多からうと思はれるので、旁〻題目を改めて、「日本經解に就いて」とし、日本經解が出來るに至つた經緯、並びに日本經解、乃至はその目錄の内容を概說して、以て其の責を果さうと思ふのである。

一體「日本經解」といふ名前は、阮元の「皇清經解」や、王先謙の「續皇清經解」に根據したものであらうことは、想像に難くない。然らば此の「日本經解」なるものが、何時、誰の手に依つて創められ、如何なる經路を歷て今日に至つて居るか、先づ第一に其の事を究明して見る必要がある。ところが幸ひ其の事に關し、博士井上哲次郎先生が、重野成齋博士追懷談の中に於て、次のやうな話を試みて居られる。

二

自分は嘗て重野博士から、「大日本經解目錄」を借りて之を寫し取つたことがある。一體支那では、清朝に至つて阮元が「皇淸經解」を作り、王先謙が「續皇淸經解」を作つたのであるが、丁度これに對するやうな「大日本經解」が出來たならば、大變に學界を裨益するだらうと、吾々が兼て希望して居つた。ところが何かの話の際に、重野博士が、自分の所に「大日本經解目錄」が出來て居るといふことであつたから、それは拜見したいものであると云うて、拜借して寫し取つたのである。

此の「大日本經解目錄」は、實は寺田弘（望南と號す）の編纂に係り、重野博士の校閲を經たも

のである。が、其の後文學博士林泰輔氏の編纂された「日本經解總目錄」四册が出來て、寺田弘氏の「大日本經解目錄」よりずつと完備したものを有するやうになつたのである。併し、未ださういふものの無い時に寺田弘氏が、いづれ重野博士と相談の上であらう、兎に角「大日本經解目錄」を編纂したことは多とするに足ると思ふ。寺田氏は、自分も嘗て交際したことのある人であるが、重野博士とは同縣の好みもあり、兼て親交あつた人と思はれる。

尙茲に附け加へて置きたいことは、嘗て北京に我が國の公使として赴任されて居つた矢野龍溪氏が、日支間の和親を圖るために、「大日本經解」を出版したいといふ考で、自分と德富蘇峯氏とを招いて、親しく相談されたことがあつた。併し、そのことは到頭出來ないで終つたけれども、其の節寺田氏の「大日本經解目錄」と、林泰輔氏の「日本經解總目錄」のあることを矢野氏に告げて、矢野氏の計畫の必ずしも實行不可能でないことを話したやうなこともあつた。他日若し「大日本經解」の編纂を企つる特志家が出て來るやうなことがあるならば、林泰輔氏の著書は勿論、寺田氏の「大日本經解目錄」も、必ず參考しなければならぬであらう。（南國史叢第三輯所載）

## 三

井上先生の此の話によつて、日本經解なるものの大體の成立經緯は明かにされてゐると思ふ。そこで此のお話の中に出て來る寺田望南氏とは、抑〻如何なる人物であつたか、少しく其のことに觸れて見る必要がある。それに就いては嘗て同鄕の士であつた重野成齋博士が、「送三寺田望南爲レ僧赴二西京一序」を書いて居られ、其の中に

望南年甫十七八、面白晳、丰采如レ畫。好衣美袴、入侍二君側一。而嗜レ學有二大志一。時適値二世變一、藩（鹿兒島藩）子弟、皆奮二於功名一。（中略）亡レ幾、望南游二歐洲一、居五年而還。則藩人皆出二仕於朝一、多爲二大官一。攀附牽連、取二青紫一如レ拾レ遺。而望南獨沈二淪下僚一、歷二數省一而趦趄、俸貲單薄。望南世家子、不レ能レ守レ約。加以二賓友玩好一、揮財不レ顧。數百田券、終爲二一空一。而鄕里又遇二兵亂一、別墅荼竹、蕩然無レ遺。於レ是棄レ官爲レ僧、將レ赴二西京一。

とある。之によつて見ると、望南は家柄も宜しいし、且つ頗る美丈夫であつたらしい。重野博士も、「祿田數百石、家饒レ產。城西有二別墅一、荼竹繞レ屋。」と云つて居られる。歐洲へ五年も游學したとあるからは、相當の新智識であつたことも想像される。然るに生來の奔放不羈、敢て五斗米の爲に腰を屈することを屑しとしない彼の性格は、遂に彼をして安んじて此のやうな境地に落ち行かしめたのかも知れない。重野博士が更に其の事に說き及んで、

性素無㆓聲色貨利之欲㆒、其視㆘僥㆓倖一時㆒、取㆓富貴顯達㆒者㆖、糞土之弗㆑如。然則望南之無㆑意㆓於功名㆒、不㆑關㆓田祿有無㆒。

と評されたのも故あるかなである。

## 四

尙井上先生が自分に直接話された談によれば、彼は非常に大西鄕に愛せられ、彼自身も頗る大西鄕を慕つてゐたので、從つて西南戰爭後、彼は大西鄕の菩提を弔ふ爲、出家得道を志したのであると云ふことであつたが、重野博士は別に彼の意を推して、

嗚呼、大丈夫恥㆑不㆑能㆓自立㆒。今之富貴顯達者、率皆憑㆓藉勳藩之餘勢㆒、依㆓鄕人之汲引㆒、而不學無術、瞻㆓乎天下事故㆒。其所㆓以自立㆒者、何在哉。此望南之所㆓恥而不㆒㆑爲也。在昔僧西行、藤藤房、天野康景之徒、棄㆓其世業勳績㆒、而悊然遠去。皆嫉㆘世之不㆑能㆓自立㆒者㆖也。雖㆑非㆓中行㆒、足㆓以諷㆑世。

と論じて居られる。從つて重野・井上兩先生の御意見は、表面不一致の形となつてしまつたが、想ふに之は、夫れ〴〵望南氏の一面を語られたものであつて、彼が出家の動機には、恐らく此の兩方面の

意味が含まれて居つたものと想像される。

而して別に井上先生には、「送二寺田望南一」といふ百韻の詩がある。此の詩は、望南が僧と爲らんとして井上先生を訪ふや、先生之が爲に送別の宴を張り、席上大いに詩を論じ、時勢を論じ、宗教を論じて、以て望南を激勵されたものであるが、その中に、「薩摩之人田望南、訪レ我壬午第七月。」とあるのを見れば、此の事のあつたのは恰かも明治十五年に相當する。又其の詩中に「望南云、我將下爲レ僧、暫入二祇林一、避中塵熱上。請レ君勿レ怪レ有二此擧一、本意欲レ拯二世蕩汨一。」とあるを以て觀れば、彼の出家得道が、單に大西鄉の菩提を弔ふ爲ばかりでなかつたことは、井上先生も亦之を認めて居られたわけである。

其の後望南氏は、暫く本願寺派の僧侶となつて居られたが、やがて復還俗して、一時文部省に出仕されたこともあり、晩年は主として島津家の記錄等に關係して居られたが、十年程前、八十歳の高齡を以て歿せられた。而して其の藏書は、一括して現に大東文化學院の圖書室に購入されてある。

## 五

偖てその望南氏が最初に編纂された「大日本經解目錄」とは、凡そどのやうな程度のものであらう

か。自分は井上先生が重野博士から寫し取られたといふそれを、今回拜借して來て調べて見たのである。それによると、目錄全體が大凡次のやうに分類されてゐる。

周易・尙書・詩・禮・周禮・儀禮・春秋・孝經・諸經總類・四書總類・經・史・子・集

ところで此のやうな分類が、果して當を得たものであるか否かは頗る疑問である。例へば「禮」とあつても、（周禮・儀禮を別に立てて）其の中には禮記以外三禮に亙るものが混じてあつたり、「四書總類」とあつても、其の中には論語や孟子の單獨出版が雜へてあつたり、又單に「經」としてありながら、其の中には九經談や七經雕題の如き、總類に屬すべきものが加へてあつたり、「經解目錄」と稱しながら、尙且つ史類や子類や集類を一緒にしようとしてあつたり、吾人は一見、其の不整頓に遺憾の意を禁じ得ないものがある。のみならず、其の部數も極めて少く、且つ其の中には、單に近代名家著述目錄その他に掲載されてゐるものを、其の儘抜き書したに過ぎないと思はれるものさへある。併しながら、それ等に關する議論は姑く之を措くこととし、此の「大日本經解目錄」にあらはれた書物の部數は、大凡次の如き統計となる。

周易　三百三十八部　附二部　補三部

此のうち「補」とあるのは、井上先生が補遺せられたものである。而して其の卷數等については、或は卷數の

まゝ出てゐたり、或は册數となつて出てゐたり、乃至無卷數として出てゐたりするので、今之を統計することが出來ないのは殘念である。のみならず、周易についてだけでも、既に二十部からの重複が數へられ、甚だ遺憾千萬と云はねばならない。而して此等の點に就ては、以下總べて同樣であるから、一々說明することは之を省略する。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 尙書 | 百二十四部 | 附一部 | 補三部 |
| 詩 | 九十部 | 附四部 | |
| 禮 | 三十七部 | | |

但此の中には、冢注六記を六部として計算してある。此等も議論の種とならう。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 周禮 | 二十二部 | | |
| 儀禮 | 十五部 | | |
| 春秋 | 百八部 | 附五部 | |
| 孝經 | 百十六部 | 附五部 | 補二部 |
| 諸經總類 | 六十四部 | 附四部 | |
| 四書總類 | 二百十一部 | 附九部 | 補六部 |
| 經 | 三十六部 | | |
| 史 | 七十九部 | | |

子　七十六部

集　三部

以上の表によつて明かなる如く、本目錄中最も多く集められたものは周易であり、續いて四書總類・尙書・孝經・春秋・詩の順序となる。但し四書總類の後に、何の爲に經・史・子・集の目を添へたのか、吾人は寧ろ其の了解に苦しむのであるが、而も其の「集」類の部數が、僅かに三部擧げられたに過ぎないのを見ると、此の目錄が如何に未完成のものであるかが窺はれる。

のみならず、既に周易の條に於て指摘した如く、各類に亙つて重複が非常に多く、一々之を列擧するに堪へない有樣であるが、何故に斯の如き不體裁を來したのか、吾人は寧ろ其の不整頓に驚くばかりである。それ故に若し嚴密に此の種の重複を省いて行つたなら、上に揭げた總部數は、少くとも百近く之を減ぜねばならなくなるであらう。

だがそれはそれとして、今此の目錄に現はれた經解の著者に就き、大凡の統計を取つて見ると、大體次の如きものとなる。

周易　百十六家

尙書　六十八家

| | |
|---|---|
| 詩 | 六十家 |
| 禮 | 三十三家 |
| 儀禮 | 十三家 |
| 春秋 | 七十五家 |
| 孝經 | 八十一家 |
| 諸經總類 | 四十八家 |
| 四書總類 | 百十五家 |
| 經 | 二十一家 |
| 史 | 四十四家 |
| 子 | 五十六家 |
| 集 | 三家 |

此の外に無名氏といふのが多少あるが、それらは勿論著作家數より省いて置いた。而して此等著作家の統計數については、部數の統計數と違ひ、其の重複を成るべく省くことに努めたが、猶多少の調査漏れがあるかも保し難い。

## 六

以上は大體寺田望南氏及び其の著「大日本經解目錄」に就いての概略であるが、次には博士林泰輔先生及び其の著「日本經解總目錄」に就いて少しく語つて見たいと思ふ。

博士林泰輔先生は、本斯文會の研究部長として、長らく理事の職に居られた關係上、漢學者の間に於ては、先生を知らぬ者は殆んど無いと云つてよい位知名である。だが併し、話の順序として、其の經歷なり業績なりの一端を述べようならば、先生は千葉縣香取郡常磐村の人で、安政元年に誕生、少年時は專ら鄉里の並木栗水先生の門に在つて學を修められたのであつた。斯くして明治十六年九月、今の東京帝國大學（當時は單に東京大學と稱した）に古典講習科が設けられるや、先生は其の漢書課に入學され、明治二十年七月之を卒業されたのである。其の同學には既に物故された岡田正之先生・西村時彥先生などがあり、又現に御存命中の市村瓚次郎先生・瀧川龜太郎先生などがある。卒業後先生には、第一高等學校・山口高等學校に勤務せられ、明治二十九年東京帝國大學の助敎授に任命せられたのであるが、疾病の爲に翌三十年退職されてしまつた。其の後は文部省の國語調查委員會に出仕して、專ら漢字の研究整理等に盡力して居られたが、明治四十一年東京高等師範學校敎授に任命せら

れ、爾後大正十一年四月七日卒去せられるまで、同校に職を奉じて居られたのであつた。享年六十九歳。

其の間數々の業績を殘されたが、中でも「上代漢字の研究」に對しては、大正三年に學位が授けられ、「周公と其時代」に對しては、大正五年帝國學士院から恩賜賞を頂かれた。その他明治三十四年に上梓された「朝鮮近世史」、大正三年に上梓された「四書現存書目」、同五年に上梓された「論語年譜」、同十年に上梓された「龜甲獸骨文字」等は、何れも後世を裨益すること尠くない。

## 七

而して今こゝに紹介しようとする「日本經解總目錄」は、「論語源流」や「周秦諸子考」と同じく、未だ上梓されないものではあるが、其の何れもが堂々たる著作であつて、夫れ〴〵その方面の權威であることに就いては、誰も之を疑ふ者はあるまい。併し他の方面のことは今暫く之を措き、當面の問題たる「日本經解總目錄」のみに關して之を述べるならば、先生の遺稿ともいふべき「支那上代之研究」の序文の中に、同學の瀧川龜太郎博士が次の如くに說いて居られる。卽ち瀧川博士は、四項に亙つて博士の編纂著述に關する梗概を述べて居られるが、その第二項に、

第二は日本經解の蒐集なり。我が邦の經解は、端を藤原佐世の孝經集解に發し、歴代の儒官研鑽甚だ努む。德川氏の世に至り、仁齋・徂徠の二公出で、各自獨得の見解あり。門下雲の如く、崑崙の七經孟子考文、春臺の詩書古傳は、淸の阮芸臺の十三經校勘記・詩書古訓の先鞭たり。その後履軒・昭陽・錦城・漁村・息軒の諸氏、益々發明する所あり、その新解卓見、往往乾嘉諸儒の上に出づ。而してこれ等の著作は、間々寫本のみにて傳はり、未だ世に公にせられざるものあり。博士深く之を慨し、蒐集多年、その珍奇の書は、手自ら謄寫存錄し、命じて日本經解といへり。博士歿後、遺族之を東京高等師範學校に寄附せりといふ。

と縷述して居られる。

先生が蒐集せられた日本經解は、瀧川博士の言の如く、現在東京文理科大學の圖書館に藏してある。併しながら、先生が相當苦心して蒐集せられたに係らず、其の總目錄に記載されたものに比すると、其の實數は遙かに少く、自分の調べたところによれば、大凡次の如き部數に過ぎない

| | | |
|---|---|---|
| 周易 | 五十五部 | 百五十七冊 |
| 尙書 | 十五部 | 四十七冊 |
| 詩經 | 十八部 | 九十四冊 |

| | | |
|---|---|---|
| 禮 | 十七部 | 五十九冊 |
| 春秋 | 二十一部 | 百三十九冊 |
| 大學 | 八十四部 | 百十六冊 |
| 中庸 | 二十四部 | 四十七冊 |
| 學庸 | 四部 | 六冊 |
| 論語 | 八十四部 | 三百〇三冊 |
| 孟子 | 十四部 | 五十八冊 |
| 論孟 | 六部 | 三十五冊 |
| 四書 | 四十一部 | 百八十八冊 |
| 孝經 | 七十部 | 八十六冊 |
| 雜 | 百二十部 | 二百十冊 |
| 合計 | 五百七十三部 | 千五百四十五冊 |

此の中には若干明治以後のものも混じてゐる。而して別に經に屬しないものも若干あるが、それは勿論こゝには數へなかつた。

此のやうな次第で、先生の蒐集せられた日本經解類は、全部東京文理科大學の圖書館に納まつてはゐ

ろが、その經解目錄に示された全體の部數から云へば、僅かに其の四分の一弱を數へ得るに止まる。

## 八

然るに林博士の編せられた「日本經解總目錄」に至つては、頗る完備したものであつて、到底寺田望南氏の「大日本經解目錄」の如き比ではない。其の目錄は全部で四卷より成り、第一卷は易・書・詩、第二卷は禮（三禮を含む）・春秋（四傳を含む）、第三卷は論・孟・學・庸、第四卷は孝經・群經總義と云つたやうな分類になつてゐる。而して別に又朝鮮に於ける經解目錄一卷があり、之を第五卷として、其の分類は、全く前揭の體裁に從つてゐるのである。

そこで今、前に紹介した寺田望南氏の「大日本經解目錄」の例に倣つて、其の各類に於ける部數等を列擧して見れば大體次の如くになる。

| | |
|---|---|
| 周易 | 三百九十五部 |
| 尙書 | 百四十七部 |
| 詩經 | 百七十三部 |
| 禮 | 百四十四部 |

此の中、周禮に關するもの五十部、儀禮に關するもの二十一部、禮記（大戴禮を含む）に關するもの四十五部、通禮に關するもの二十八部ある。

春秋　二百二十四部

此の中、春秋に關するもの五十部、左氏傳に關するもの百六十二部、公羊傳に關するもの三部、穀梁傳に關するもの二部、胡氏傳に關するもの四部、三傳に通ずるもの二部、四傳に通ずるもの一部ある。

論語　三百六十三部

孟子　百六十九部

此の中、論孟合せ說けるもの三十七部ある。

大學　二百四十六部

中庸　百六十八部

此の中、學・庸合せ說けるもの五十五部、學・庸・論合せ說けるもの一部、學・論・孟合せ說けるもの一部ある。

孝經　百九十九部

群經總義　二百二十六部

此の中、四書類は百二十二部、五經類は二十四部ある。

合計　二千四百五十四部

但し卷數や冊數等に關しては、不詳のものが相當存するので、遺憾乍ら統計をとることが出來なかつた。

而して更に之を著作家別にして表示すれば、大體次の如くになる。

| | |
|---|---|
| 周易 | 二百十二家 |
| 尙書 | 百十一家 |
| 詩經 | 百三十一家 |
| 禮 | 九十一家 |
| 春秋 | 百六十四家 |
| 論語 | 二百六十一家 |
| 孟子 | 百二十六家 |
| 大學 | 百八十三家 |
| 中庸 | 百三十一家 |
| 孝經 | 百四十四家 |
| 群經總義 | 百七十五家 |

此の中には、若干明治以後の人もあるが、併しそれはほんの一部分に過ぎず、大部分は何れも皆德川時代の儒者である。而して此等の著作家の名前を通覽する時、吾人は如何にも意外の人物が意外に

多くの著作を爲してゐるのに驚かされる。例へば土肥貫雅（鹿鳴）の周易に關する著書十二種、齋藤高壽（芝山）の禮に關する著書十一種、奧田元繼（尙齋）の春秋に關する著書五種、馬淵會通（嵐山）の論語に關する著書八種、淺見安正（絅齋）の大學に關する著書五種、朝川鼎（善庵）の孝經に關する著書八種の如きはそれである。但し著書の多いことが、必ずしも内容の如何に關係しないことは勿論である。

ところで今參考までに、各類に於て五種以上の著書ある人物を列記して見ると、次の如くになる。

易周

| | |
|---|---|
| 土肥貫雅（鹿鳴） | 十二種 |
| 新井祐登（白蛾） | 十一種 |
| 眞勢達富（中洲） | 十種 |
| 林　恕（鵞峯） | 十種 |
| 水谷君龍（雄琴） | 十種 |
| 大田元貞（錦城） | 九種 |
| 松井暉辰（羅洲） | 七種 |
| 伊藤長胤（東涯） | 六種 |

皆川愿（淇園）　六種
中村蕃政（習齋）　六種
中村之欽（惕齋）　五種
小笠原謙（冠山）　五種

詩經

細井德民（平洲）　六種
大田元貞（錦城）　六種
林　恕（鵞峯）　五種
古賀煜（侗庵）　五種

禮

齋藤高壽（芝山）　十一種
平賀晋民（中南）　六種
清水嘉英（江東）　五種
川合孝衡（春川）　五種

春秋

岡本保孝（況齋）　五種

奥田元繼（尙齋）　五種

論語

馬淵會通（嵐山）　八種

大田元貞（錦城）　五種

豐島幹（豐洲）　五種

孟子

海保元備（漁村）　五種

大學

淺見安正（絅齋）　五種

孝經

朝川鼎（善庵）　八種

## 九

偖て最後に、朝鮮に於ける經解類は、大凡どの位あるか、今林博士の「日本經解總目錄」に據つて其の數を擧示するならば、

| | | |
|---|---|---|
| 周易 | 四十九部 | 三十一家 |
| 尙書 | 二十五部 | 十一家 |
| 詩經 | 十八部 | 十二家 |
| 禮 | 十部 | 九家 |
| 春秋 | 十二部 | 五家 |
| 論語 | 十六部 | 十家 |
| 孟子 | 十六部 | 八家 |
| 大學 | 二十三部 | 十二家 |
| 中庸 | 二十部 | 八家 |
| 孝經 | 二部 | |
| 群經總義 | 三十四部 | 十二家 |

といふことになる。而して以上の中、著者不明のものが相當多く、約五分の一は著者名が闕けてゐる。內地に於ける著書についても、多少不明のものがあるにはあつたが、殆んど問題にならぬ程度であるにかゝはらず、朝鮮に於て此の事特に多いのは、果して如何なる理由に基づくのであらうか。

# 一〇

之を要するに、以上記述したところに據り、林博士の「日本經解總目錄」は、之を寺田望南氏の「大日本經解目錄」に比する時、其の數量に於て、其の整備せる點に於て、非常に卓越せるものあるを認めるのであるが、併し難を云へば、博士の目錄でも、未だ不備の點が全く無いわけではない。例へば、目錄の中には、未だ實物を見ずして、他の著述目錄其の他に據り、單に之を揭載したに過ぎないと思はれるものが相當多い。從つて書名があつても、卷數等未詳の者は可成りの數に上つてゐる。重複せるものも、寺田望南氏の目錄に比すれば極めて稀ではあるが、亦絕無とは云ひ難い。のみならず、目錄に揭載されてゐない經解類も、まだ〳〵相當に存在してゐるやうであり、而も尙欲を云へば、その揭載されてゐるものの中には、果して日本經解として、之を存する價値があるかどうかさへ疑はれるものが無いとは云へないからである。

さりながら、林博士の此の目錄編成の功は、よし多少の難があつたとしても、決して沒し去らるべき性質のものではない。のみならず、博士の志は單に目錄編成に止まらず、之を基礎として、經解そのものの編纂に當らうとされたのであつた。不幸にして、志半ばで長逝された爲、經解そのものは僅

かに五百七十三部、千五百四十五册の蒐集を見るに過ぎなかつたけれども、若し今後博士の志を嗣ぎ、一層此の目錄を整頓し、經解そのものの蒐集に努力する者があるならば、物によつては、皇清經解のそれにも勝るべき立派な日本經解が編纂されるであらうことを、吾人は斷じて疑はぬ。否吾人は、是非とも其の出現を期せねばならぬことを附言して、此の小研究の結びとするものである。

昭和十四年八月二十五日印刷
昭和十四年八月三十日第一刷發行

近世日本の儒學
定價七圓五拾錢

編者 徳川公繼宗七十年祝賀記念會
代表者 福島甲子三

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩波茂雄

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者 菊地眞次郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所 岩波書店
電話九段(33)一八七・一八八番
一八九・一八〇〇番
振替口座東京二六二四〇番

大日本印刷　寺島製本

小店出版物中、萬一不完全な品（落丁・亂丁等）がありました節は、御手數乍ら遠慮なく御申出下さる事を御願ひ致します。たとひ御購求後でありましても早速お取替致します。